

比喩表現の理論と分類

著者	国立国語研究所
発行年月日	1977-02-15
シリーズ	国立国語研究所報告 ; 57
URL	http://doi.org/10.15084/00001254

比喩表現の理論と分類

国立国語研究所

中 村 明

秀英出版

刊行のことば

このほど、現代文章表現の文体論的研究の一環である「現代語の比喩表現の研究」がまとまったので、ここに報告書として公刊する。

この研究は、言語形式と比喩的転換の性格とを軸に比喩表現に新しい分類を施すことを直接の目的とし、比喩研究の一つの方向を示した試論である。本書には、分類の基礎となった担当者の比喩理論、および、形態面を中心とした分類結果を収めた。内容面の分析は、各種の表現技法を考察する過程で、今後も進められる予定である。

この研究は、話しことば研究室の「現代語の文法の研究——文体と文法との関係」を言語行動研究部第一研究室において継続したものであり、担当者は中村明（現 第一研究室長）である。なお、衛藤蓉子（現姓 石川）・林実知代が作業を助けた。

昭和51年4月

国立国語研究所長 林 大

A STYLISTIC STUDY OF THE FIGURATIVE

CONTENTS

Foreword : Basic themes

ESSAYS ON ASPECTS OF METAPHORICAL EXPRESSIONS

Part I Foundations

Chapter 1 Basic nature

Chapter 2 Types

Chapter 3 Stages

Part II Some problems

Chapter 4 Trends in figurative transformation

Chapter 5 Effects of metaphor in literature

Part III Thoughts and expressions

Chapter 6 Linguistic variations and metaphorical analogy

Chapter 7 The creation of metaphors and their conditioning factors

CLASSIFICATION OF METAPHORICAL EXPRESSIONS

1 General

1.1 Locating the problems

1.2 Definition

1.3 Research materials

1.4 Research methods

2 Methods

3 Results

3.1 *Index* system

3.2 *Combination* system

3.3 *Context* system

4 Tables

5 Index

Afterword : Summary and perspectives

Bibliography

SHUEI SHUPPAN Co.

40 Nandochô, Shinjuku-ku, Tokyo, JAPAN

目 次

刊行のことば	1
序章 比喩研究の課題	11
第1項 比喩の本質と限界	11
第2項 比喩性の度あい	11
第3項 比喩技法の再整理	12
第4項 比喩技法の変遷	13
第5項 各技法の言語形式	13
第6項 言語形式と対比事実との関係	14
第7項 比喩の言語的条件	14
第8項 比喩思考の集大成	14
第9項 個別的考察	16
第1部 比 喩 論	17
第1編 比喩に関する基礎的考察	19
第1章 比喩の基本的性格	19
第1節 導 入	19
第2節 比喩の目的	20
第3節 比喩の方法	21
第1段 抽象体の具象化	21
第2段 想像力の刺激	22
第3段 間 接 性	23
第4節 比喩の機構	24
第1段 表現対象と言語形式	25
第2段 比喩の対応上の性格	26

4 目 次

第3段 結びつきのあり方	27
第5節 比喩の条件	27
第1段 事実性否定の意識	28
第2段 修辭意識	30
第2章 比喩法の種類	32
第1節 修辭学上の各種の比喩法	32
第1段 直 喩	32
第2段 隠 喩	32
第3段 諷 喩	32
第4段 活 喩	33
第5段 提 喩	33
第6段 換 喩	33
第7段 引 喩	34
第8段 張 喩	34
第9段 声 喩	34
第10段 字 喩	35
第11段 詞 喩	35
第12段 類 喩	36
第2節 分類上の問題点	36
第1段 直喩と隠喩の境界	37
第2段 諷喩の判別	38
第3段 活喩の範囲	38
第4段 提喩と換喩の扱い	40
第5段 引喩の独立性	40
第6段 張喩の普遍性	41
第7段 声喩の比喩性	41
第8段 字喩の検討	41
第9段 詞喩の転換	42
第10段 類喩における本義の問題	42
第3節 言語化を規準とした分類	42

第1段 喩詞・被喩詞・喩意識詞	43
第2段 3種の基本型	43
第3章 喩性の段階	45
第1節 語義と喩との交渉	45
第1段 語源的喩	45
第2段 中心的意味の交替	46
第3段 両義の共存	47
第4段 臨時性の残存	48
第5段 準慣用的用法	48
第2節 喩的慣用表現	49
第1段 転義固定の慣用表現	49
第2段 慣用表現の逸脱用法	49
第3段 慣用表現の変形と応用	50
第2編 喩研究の諸問題	51
第4章 喩的転換の諸相——実用的文章	51
第1節 喩の働きと実用性	51
第1段 喩的転換	51
第2段 広告効果と喩の効能	51
第2節 カテゴリーの転換	52
第1段 物体から人間へ——文脈的転換	52
第2段 物体と人間——結合的転換	53
第3段 人体と物体・場所・人間	54
第4段 動物・場所の擬人化	54
第5段 準擬人化	55
第6段 抽象体の物体化	56
第7段 動植物化	57
第3節 下位分類の諸観点	57
第1段 体の転換	57

6 目 次

第2段	感覚の転換	58
第3段	界の転換	59
第4段	関係の移行	60
第4節	内容的分類の必要と困難	61
第5章	比喩効果の分析——芸術的文章	63
第1節	文学における比喩考察の観点	63
第1段	比喩表現量	63
第2段	比喩使用の分布	63
第3段	喩詞の分析	64
第4段	被喩詞の分析	64
第5段	喩詞から見た被喩詞の性格	64
第6段	被喩詞から見た喩詞の性格	64
第7段	各面の連関と分析例の性格	65
第2節	調査の意義と使用率	65
第1段	比喩に満ちた文章例	65
第2段	比喩依存度と使用率	66
第3段	文章心理学の使用率調査	67
第4段	検証調査の方法	67
第5段	使用率調査の結果	67
第6段	結果の解釈	69
第3節	作品の底を流れるイメージ	70
第1段	光のイメージ	71
第2段	水のイメージ	73
第3段	においのイメージ	74
第4段	幼のイメージ	75
第5段	小動物のイメージ	76
第6段	神秘のイメージ	78
第7段	怪奇のイメージ	79
第8段	抽象のイメージ	80
第4節	各イメージ群の関連	81

第1段	孤児の感情方法の展開	81
第2段	川端美学の到達点	83
第3編 比喩における思考と表現		85
第6章 言語形式と比喩的対比		85
第1節	言語形式から見た比喩関係	86
第1段	考察範囲の限定	86
第2段	2基本形の設定	87
第3段	異部分対比のバリエーション	88
第4段	同部分対比のバリエーション	97
第5段	検討結果のまとめ	102
第2節	比喩関係から見た言語形式	103
第1段	対比事実を規準とした整理	103
第2段	比喩関係の事実上の重複	103
第3段	言語形式の事実上の重複	104
第4段	修正整理	104
第5段	比喩関係実現への結合条件	105
第6段	構成要素別に見た結合と対比の関係	106
第7段	比喩関係と言語形式との各対応における対比構造	108
第7章 比喩の成立と言語的条件		111
第1節	指標の多義性	111
第2節	言語形式・対比構造・比喩関係	112
第1段	AノヨウナB	114
第2段	AのBノヨウナC	118
第3段	AノヨウナBのC	121
第4段	AのBノヨウナCのD	124
第5段	検討結果の整理	131
第3節	比喩的思考から比喩表現へ	136
第1段	名詞対応の制限解除	136

8 目 次

第2段 取りあげ方による変種	137
第3段 語順の制限解除	139
第4段 指標の制限解除	140
第5段 比喩形式の多様性	145
第2部 比喩表現の分類	147
1. 総 説	149
1.1 問題の所在	149
1.11 修辞学における比喩の扱い	149
1.111 修辞学書の構成	149
1.112 表現技術論中の比喩の位置	150
1.12 比喩の修辞学的分類への疑問	152
1.2 比喩の本質規定	154
1.21 比喩の定義	154
1.22 定義の解説	155
1.23 比喩効果の特性	156
1.3 調査資料	156
1.31 文学作品を資料とした理由	156
1.32 調査対象の選定	157
1.321 範囲の限定	157
1.322 作品の選定	157
1.323 調査作品	158
1.4 調査方法	159
1.41 用例採集上の困難	159
1.411 文学作品の問題	159
1.412 あいまい性と中間性	159
1.42 比喩の判定規準	160
1.421 個人の内省的判断と客観性	160
1.422 比喩観と用例採集の実際	161
1.43 用例採集の範囲	162

2. 分類方法	163
2.1 分類原理	163
2.2 比喩性把握の3類型	164
2.21 実例提示	164
2.22 比喩表現と比喩理解	165
2.23 比喩の単位	166
2.24 A型把握——比喩第1類	166
2.25 B型把握——比喩第2類	168
2.26 C型把握——比喩第3類	170
2.3 比喩表現の基本分類	174
2.31 指標比喩の定義と実例	175
2.32 結合比喩の定義と実例	176
2.33 文脈比喩の定義と実例	179
2.4 比喩表現の下位分類	181
2.41 指標比喩の分類	182
2.42 結合比喩の分類	186
2.43 文脈比喩の分類	196
3. 分類結果.....	200
3.1 指標比喩	200
3.2 結合比喩	305
3.3 文脈比喩	397
4. 表	442
4.1 調査資料一覧.....	443
4.2 比喩指標要素一覧	445
4.3 出現状況	453
4.31 指標要素個別	453
4.32 指標要素種別	485

4.33 指標要素類別	511
4.4 出現度・出現幅	540
4.41 比喩指標要素	540
4.411 個別上位	540
4.412 種別上位	540
4.413 類別順位	541
4.42 比喩指標基本形	541
4.421 個別上位	541
4.422 種別上位	542
4.423 類別上位	543
4.43 比喩指標実現形	543
5. 索引	547
5.1 総合索引解説	547
5.11 指標比喩	547
5.111 比喩指標要素	547
5.112 比喩指標基本形	548
5.113 比喩指標実現形	549
5.12 結合比喩	550
5.13 文脈比喩	551
5.2 比喩索引	553
終章 比喩研究の展望	618
第1項 論及領域	618
第2項 研究の方向	620
<付> 比喩関係文献リスト	621

序章 比喩研究の課題

比喩に関する研究は、これまでもいろいろな人で行われ、いろいろな方面からいろいろな形で取りあげられて、いろいろな論及がなされた。しかし、それらは多様な扱いではあっても、比喩表現の全貌を明らかにするために必要な観点が網羅されているわけではない。むしろ、限られた範囲での多様性であると言えよう。すなわち、その多くは、修辭法や文章表現法の分野における表現技術論と、文学研究の場での個別的考察なのである。本書では、比喩研究の歴史と現状、その到達段階を具体的につかむための参考として、巻末に「比喩関係文献リスト」を添えたので、そういった個々の先行業績を詳細に紹介することはしない。だが、ともかく、以下に掲げる諸点に関して十分に明らかになっていないことは確かである。つまり、どういことがすでにわかっているかを述べる代わりに、まだわかっていない部分を指摘し、課題として立てておこうというのである。

第1項 比喩の本質と限界

簡単に言えば、比喩とは何かということである。これは比喩研究の土台であり、比喩に関するあらゆる考察の出発点であるから、もちろん、これまでもいろいろと言及されてきたが、そのほとんどは、「たとえることである」といった単なる言いかえに終始するか、「AをBにたとえる」とは言っても、AとBとの関係のあり方をおして「たとえる」という事からの性格を厳密に規定するには至らない記述にとどまった。例えば、「トラのようなネコ」と「トラに似たネコ」と「このネコはトラに似ている」と「このネコはトラとの共通性が目だつ」などの一連の類意表現において、どこまでを比喩として切りとるか、という問題も、まだ十分に論議されたとは言えない。

第2項 比喩性の度あい

考察対象として比喩表現を切りだそうとする時、2種類の異質な困難が伴う。一つは、ある表現が比喩であるかどうかを決める際のむずかしさであり、もう一つは、比喩表現と見られる用例がどうい比喩性をどれほどそなえているかを判定する際のむずかしさである。前者は、結局、「比喩とは何か」にかかわるむずかしさだから、第1課題の考察の進展とともに解消するはずである。第2項として取りあげようとするのは後者のほうである。例えば、「お相撲さんみたいな男の人」という表現を比喩と考えるかどうかで迷うのは、その表現の文脈がはっきりしないからで、そこが明確に与えられれば、比喩であるか、例

示であるか、あるいは不たしかな断定であるかが、決まるはずである。つまり、事実としては、比喩であるか比喩でないかのどちらかなのである。ところが、一方、例えば、「湿っぽい話」とか「期待に高鳴る胸」とか、あるいは、「絶望感が深う」とかいった表現例を考えてみると、これらはいずれも何らかの比喩性を何ほどか残していることは確かであるが、どれも、「感情がとぐろを巻く」といった明確な比喩表現と同等に扱うことはためらわれるし、「不満が爆発する」のような比喩段階に達しているかどうかとも疑問である。すなわち、比喩判定の二重の困難というのは、あいまいなものと同間的なものという2種類の異質な処理に関する、と行うことができる。比喩的に換言すれば、前者は外見のまぎらわしい人物について男か女かを判定するむずかしさであり、後者は、連続するものを切るという意味で、青少年をおとなと子どもとに分けるむずかしさに相当する。そして、後者のほうは、前者とは違って、その表現の前後関係、あるいは、言語的環境、すなわち、広義の context が、いかに大きく、また詳細に与えられても、それによって、比喩か非比喩かという二者択一が可能になるとは思えない。したがって、例えば、「酒をのむ」「なみだをのむ」「息をのむ」「相手をのむ」「要求をのむ」「さわやかな五月の空をのむ」「黒雲が月をのむ」といった「のむ」の用例群において、どのような結合がどういう比喩性のどれほどの度あいと対応しているのかを、受け手の反応と関連させて、質的・量的におさえておくことは、比喩研究上の緊要な基礎的課題であると考えられる。

第3項 比喩技法の再整理

これまでの比喩研究は、個々の作家や作品を取りあげて、その文学上の表現技術の一つとして断片的に扱われたいくつかの分析例を別にすれば、そのほとんどが修辞学上の問題であるにとどまった。そして、表現技術を伝えることを目的とする修辞学の問題であるかぎりには、比喩法というのはいくつかの技法であり、それにはどんな種類があるかをいろいろな観点から指摘すれば、一応の用は足りるわけであるが、もう少し厳密に、比喩とは何かを、他の技法とどこがどう違うかという形でおさえ、その比喩に該当する表現は、コミュニケーションにおけるどのような特性を有し、また、それを形成する言語表現という見地から、どのような語彙的・文法的な言語上の特質が認められるかを探りあてる必要がある。このような観点からの分析・考察を進めることによって、比喩表現の言語的な性格が姿を現すはずであるが、その過程で、比喩としての共通の性格を保ちながら、言語的な手づきの上で異質な表現系統がいくつか見いだされると予想される。そして、それが、言語である比喩表現の、言語的な観点からの分類ということになるはずである。比喩技法にはどのような種類があるかという問題をそういった面から検討し、再整理することも、重要な課題である。

第4項 比喩技法の変遷

第3課題で析出された比喩技法の各種類について、その歴史の変遷を調べることも意義があろう。ただし、これにもいろいろな観点が考えられる。

まず、第1点は、例えば、「AはBのごとし」という比喩表現を取りあげ、その形式がいつごろどのように成立したか、その言いきりの述語としての用法と「BのごときA」といった連体的な用法との関係はどうか、例示を表す例と比喩を表す例との関係はどうか、「あたかも」や「まるで」などとの共存はどのように跡づけられるか、その「ごとし」はどのような状況でどう衰退したか、「AはBのようだ」の成立とその勢力の拡大などという交渉を持ったか、また、その「よう」が会話において次第に「みたい」に席を譲っていった過程はどのように記述されるか、あるいはまた、「Bのごとし」のような名詞表現と「Bするがごとし」のような動詞表現との関係はどうか、といった、主として文法的な観点からの比喩形式史である。

第2点は、「AのようなB」のAとBの語彙的な性格およびその関係を歴史的な流れとしてつかむことである。例えば、「リンゴのようなほお」のように人体部分に植物を持ちだして形容する例、「かみそりのような感覚」といった抽象体の具象化、あるいは、「はかなさそのもののようなカゲロウ」などのように抽象体をもってたとえる用法などが、それぞれいつごろどのような分野あるいは文献で成立し、どのように広まっていったか、といった、いわば日本語における比喩的思考の歴史をたずねることである。

第3点は、例えば、「流れる」という語を取りあげ、「水が流れる」「モモが流れる」「人が流れる」「弾丸が流れる」「煙が流れる」「空気が流れる」「担当が流れる」「雰囲気流れる」「うわさが流れる」「感情が流れる」「意識が流れる」といった用法がいつごろどのように成立し、どのような経路をたどってその結びつきを広げていったか、といったあたりを、その慣用化と比喩性の後退との関連においておさえることである。

第5項 各技法の言語形式

これは、第3課題によって得られた各種の比喩法における形式を言語的な性格としてとらえることである。具体的には、まず、比喩表現においてくりかえし現れる言語形式としては何と何があるかをできるだけ網羅的に指摘し、頻度その他の条件を加味して系統的に記述することになる。ただし、その場あい、ある形式を付加して比喩性を引きおこすものだけではなく、ある要素のどのような結合がどのような比喩性と呼応するか、また、全体として別の事実を慣用的に写しだす言語形式にはどんなものがあるか、といった観点を含めて考察する必要がある。

第6項 言語形式と対比事実との関係

これは、確かに比喩を表す言語形式において、その形式がさし示す実際の比喩的対比を、いろいろな条件との対応としてとらえることである。例えば、第1部第3編第7章で検討するように、「AのBのようなCのD」という言語形式が実際に比喩を実現しているとしても、その場あいの「よう」がかかっていく範囲、換言すれば、どこまでが「よう」の勢力圏に属するかといった、「よう」の支配領域の差に応じて、 $\langle(AのB) \in (CのD)\rangle$ 、 $\langle Aの(B \in C)のD\rangle$ 、 $\langle Aの\{B \in (CのD)\}\rangle$ 、 $\langle\{Aの(B \in C)\}のD\rangle$ のような違った対比関係が生じるし、また、「AのようなB」と言っても、 $\langle A \in B\rangle$ という比喩関係になるとは限らず、 $\langle(AのB) \in (CのB)\rangle$ という関係を写しだすこともあるので、各言語形式においてどのような条件によってどのような関係が実現するかを探ることは、比喩研究の基礎として重要である。

第7項 比喩の言語的条件

英語の like や as...as などともそうであるが、日本語で比喩を表すとされる「よう」とか「まるで」とかにしても、それが比喩だけを表すわけではない。しかし、例えば、「まるで…でも…のような…」などになれば、比喩専用の言語形式に大はばに近づくと予想される。このように、その多くは確率的な域を越えられないであろうが、比喩を表しうる形式が、どういう条件で比喩である可能性を増し、どういう条件があれば比喩となりにくいかを探ることは、ある表現が比喩であるかどうかを推定する際の言語的なよりどころをつかむ上でも、その意義が認められよう。

第8項 比喩思考の集大成

例えば、「ジャガイモのように大きな目」とか「パパイヤのような青い顔」とか「アリの行列のように美しいまゆげ」とかいった比喩表現（『日本語教育の実際研究』参照）をおそらく日本人は思いつかないだろう。また、「うどんのような顔」とか「ヒルのような唇」とか「目刺しのような老婆」とかいった比喩的思考も、室生犀星が『愛猫抄』に「なまじろく、うどんのやうな^な顔れたかほをしなが、しづかに、ふふ……と^か微笑った」と書き、川端康成が『雪国』に「唇はまことに美しい^{ひろ}蛭の輪のやうに伸び縮みがなめらか」と書き、志賀直哉が『暗夜行路』に「瘦せた婆さんで、引込んだ眼や、こけた頬や、それが謙作に目刺を想はせた」と書くまでは、思いも及ばぬ組みあわせであっただろう。このような比喩的思考を集大成することは、日本人の日本語における思考の広がり、あるいは、連想傾

向を知る上で、貴重な資料を提供することになると思われる。その分類整理のし方はいろいろ考えられるが、例えば、〈大きな目〉を表す比喩には何と何があるか、〈白い〉ことを強調する比喩としては何と何があり、そのうち慣用的に固定したものには「雪」と「紙」と「牛乳」と「粉」と「蠟」と、あと何と何があり、〈顔〉に使えるのはどれとどれで、〈髪〉に使にくいのはどれとどれで、「雪」は何と結びつきやすく、何と何と結びつくかどうかというニュアンスが伴うか、といった観点での整理も、その一案である。ただ、例えば、「蠟」とか「牛乳」が〈白い〉ことを表すことは事実でも、そこに単なる「白い」とは違った何らかのニュアンスが添うことになるので、ある程度粗っぽい分類となるのはやむをえない。どういう対象のどういう状態に対して用いられる、というレベルの整理であっても、基礎資料としては役だつてであろう。とはいえ、その精度の分類整理でさえ、利用価値の高い資料とするためには、この面の調査研究は相当の作業量を覚悟しなければならない。第1項から第7項までに掲げた課題を解決しようとする場あいは比較にならぬ大きな資料を処理する必要があるからである。例えば、語彙調査で、「後れ毛」「鳩胸」「モップ」のような誰でも知っている語でも、10万単位の規模の調査ですべて得られるとは限らないように、「リンゴのようなほお」「モミジのような手」「山のような大波」「雲をつかむような話」「竹を割ったような性格」「ヘビのように執念深い」といったごくありふれた比喩表現を生きた実例でほぼ尽くすには、いったいどの程度の大きさの資料を扱ったらいいのか、まるで見当がつかない。見とおしが立たないとはいっても、陳腐な比喩のカバー率9割を目ざすなら、例えば数十編の作品を相手どる程度ではとうてい目標を達成できないことははっきりしている。また、資料の範囲も、各分野の各種の文章を扱う必要がある。比喩表現の珍しい用例あるいは新鮮で効果的な用例を集めるには文学作品が適当であるが、慣用的に固定した例を捨てるにはむしろふさわしくないと予想されるし、さらには、書きことばには現れにくい比喩もあるはずである。したがって、この作業は、単に大規模な調査量をこなすだけではなく、話しことばをも含めた多方面の言語資料を操作する必要があり、しかも、理想的には、共時的な資料であるにとどまらない、通時的な観点をも織り込み、第4項の課題下の研究成果を盛り込んだ資料に仕立てることが望ましいわけで、本格的には雄大な計画の下に行われることにならう。そして、資料の豊かさのためには、多少その等質性を犠牲にしても、辞書類の活用や調査者の内省などを加えるほうが有効かもしれない。いずれにしろ、この調査が十分な大きさと精度を伴って実施されれば、新しい比喩表現の新しい実証とその性格上の位置づけに関する有力な資料となることは疑えないし、日本人が日本語で考えた歴史事実を比喩という切り口に跡づけることは、日本人を知る上でも興味深い事業だと言わねばならない。

第9項 個別的考察

文学研究において比喩表現を扱う際の諸観点、特に作家論を志向する比喩研究の課題については、第1部第2編第5章第1節で説明するので、ここでは指摘にとどめるが、以上のような比喩研究の成果の上に立って、作品なり、作家なり、ジャンルなりの特性を探る方向に踏み出すことは、それによって逆にそういった基礎研究の意義を高めることにもなるであろう。もっとも、文学の個別研究において比喩表現を考察する意義は、まず、取り上げる作家によって一様ではない。安本美典の調査によれば、平林たい子・前田河広一郎・堀辰雄は直喩使用が極端に頻繁であり、小林多喜二・小川未明・森田草平・田宮虎彦・有島武郎・梅崎春生・川端康成・泉鏡花・加能作次郎・牧野信一・葉山嘉樹がそれに次いで多く、逆に、織田作之助・武者小路実篤・滝井孝作・井伏鱒二・谷崎潤一郎・永井荷風・田山花袋・尾崎一雄は直喩使用がまれであり、正宗白鳥・武田泰淳がそれに次いで少ないという結果になっている。この直喩の出現頻度を一応の基準とすれば、平林・前田河・堀らは比喩面の考察意義が大きく、織田・武者小路・滝井らはそれが小さいことになる。だが、この調査は各作家一作品を対象としたもので、平林なら「施療室にて」、織田なら「夫婦善哉」だけの結果なのである。そして、筆者の小調査によると、その使用率は必ずしも作家の内部で安定しているわけではなく、その揺れ幅も一定しない。例えば、直喩使用率の極度に低いとされる武者小路でも、「友情」などは際だって低いとは言えず、「愛と死」とは大きな差があるし、谷崎も、「細雪」は確かに直喩がまれであるが、初期の「刺青」などはむしろ頻出する作品に数えられる。横光利一のような実験作の多い作家ではさらに揺れが大きく、「日輪」と「機械」とでは極端な違いが見られるし、川端のような比較的安定した頻度を保つ作品の多い作家でも、「東京の人」のようなきわめて頻度の高い作品が混じっている。このように、使用頻度だけに着目しても、同一作家の作品による揺れは、けっして無視できるほど小さいものではない。そこに用法の質的な検討を加味すれば、比喩表現面を取りだして分析・考察する意義は、まさに作品ごとに違うと言わなければならない。

第1部 比 喻 論

第1編 比喩に関する基礎的考察

第1章 比喩の基本的性格

第1節 導 入

「文学は言語である」とする立場がある（例えば、時枝誠記『国語学原論 続篇』に「文学は、本質的に言語そのものである」とある）。文学は思想や感情をことばによって表現することであり、その結果としての文学作品は、結局ことばによって表現された思想・感情である、とする伝統的な文学観に対して、文学にとってのことばは、そのような手段にとどまるものではなく、文学はことばそのものなのであり、したがって、文学作品は思想や感情のような観念ではないし、「ことばプラス何か」でさえなく、まさにことば自体の一つの姿なのだとして、その根本的な修正を迫る主張である。

また、「言語は本質的に比喩である」と言う人がいる。これは、おそらく、例えば、「リンゴを7個食べた」とただ口にしただけでは一向に空腹感が去らないように、ことばは、それがさす事物・事象そのものではなく、その象徴にすぎないこと、あるいは、「ごつごつした岩」の「ごつごつ」という語の意味が実現する基盤として、それがさし示す状態自体から受ける感じと、「ゴツゴツ」という音から受ける感じとの間の共通性が、日本語生活上で慣習的に固定化した事実があること、あるいはまた、「目」プラス「蓋」で「瞼」ができたり、「心臓」の意味が「機械の心臓部」として使われることによってずれたりするように、新しい語の成立や、適用範囲の拡大に伴う新しい意味の獲得において、ある関係の移行が認められることなどを踏まえた言であらう。

このように、「文学は言語である」と言う時と、「言語は本質的に比喩である」と言う時とは、その「である」という、いわば等号の性格はむしろ違うのであるが、この二つのいわば等式を、ともかく素朴に重ねあわせると、「文学は本質的に比喩である」という新しい等式が得られ、手つづきを別にして、そこに導かれた結果だけを見れば、それはそれとして正しい一面を言いあてている。「小説が人生の批評だとすれば、文芸評論はその批評の批評である」と言われるが、いずれにしろ、生の現実と対決した生の人間行動の歴史を批評する文学の必然的にとる形式が一種の比喩に近似しているからである。

比喩を成立させる基本機構は、確かに、関係の移行であり、比喩の本質を最も簡略に図式化すれば、 $A : B \Rightarrow C : D$ となり、そこに新しい共通性を発見することである、と言えよう。

ただ、ここで重要なことは、「文学は言語である」と「言語は比喩である」という両式

を重ねあわせる時に代入で消えた「言語」を媒介としなければ、「文学は比喩である」という第3の等式は成り立たない、ということである。それは、もちろん、ことばを離れて文学は存在しえないからでもあるが、また、比喩も、その名称をとるかぎり（雲の形から人の顔や動物の姿を連想する場合も、比喩と機構的に共通した面を持つが、言語を介さない以上、比喩とは呼ばない）、言語面の現象をさすからである。つまり、比喩は言語レベルにおける関係の移行だ、とすることができる。

本章では、比喩表現の理論的考察における序説として、比喩のすべてではないがその重要な面である言語上の問題を取りあげ、比喩の性格上の特色を考えてみよう。

第2節 比喩の目的

我われはどのような時に比喩表現を使うのだろうか。細かい点まで行けば、その時どきで、比喩を使う理由はいろいろあると思われるが、比喩表現をとる目的は大きく二つに分けて考えることができよう。

一つは、送り手の伝えようとする物ごとを、受け手が全く知らないために、そのまま言いあらわしたのではわかってもらえないと判断した場合あいである。

もう一つは、送り手の伝えようとする物ごとについて、受け手がいくらかわかっているので、そのまま言いあらわすこともできるが、送り手としてはそれを強調したい、という場合あいである。

例えば、湖を見たことのない子どもに、「バカデカの池」と言って、子どもにとって身ぢかな「池」から、その子の見しらぬ〈湖〉というものを類推させるのは、初めの場合あいの例であるが、逆に、大きな池をさして「湖のような大池」と言う場合あいは、後のほうの例になるだろう。また、髪をバリカンで刈った際に仕上げが悪くて横じまが残ったのを「トラがり」と言ったのは、本来は類似に基づく前者の用法であったと思われるが、同様の例でも、ちょっとした不体裁をなじって「トラみたいだ」と言ったとすれば、目的としてはむしろ後者に近い用法になるだろう。このように、2種の目的は、実際には混じりあっていることが多く、個々の用例をその目的に応じて分類しようとする、微妙な場合あいが少なくないが、ともかく、比喩表現に訴える際に、前に述べた2面の意図の認められることは確かである。

一般化して言えば、一つは、受容主体側に表現対象についての予備知識が乏しいために事前判断がほとんど成り立たない（樺島忠夫『表現論』参照）時に、表現主体が、受容主体の知っていると予想される範囲から、表現対象に類似した物ごとを選びだし、それに託して表現対象を類推に頼って伝えようとする場合あいである。もう一つは、受容主体に表現対象に関する概括的知識があっても、表現主体がそれをさらに深く印象づけるために、表現対象と共通した性格をそれよりも強度にそなえた他の物ごとを持ちだして、強調しようとす

る場あいである。

そして、その結果、前者は相手にはっきりわからせるための記述的な比喩になり、後者は相手に強くあるいは美しく感じさせるための強意的な比喩になる（スヴァルテングレン著 佐々木達訳『強意的直喩の研究』中の descriptive simile と intensifying simile を参照）。つまり、意図的には、前者は伝達を図り、後者は効果をねらうものである、と言うことができるであろう。

第3節 比喩の方法

比喩表現の方法上の特色のうち特に重要と思われる3点を指摘しておきたい。

第1段 抽象体の具象化

第1は、2種の目的のうちの前者、すなわち、伝達を主眼とするほうに対応する方法として、「シャボン玉のような夢」とか「欲情が暴走する」といった抽象体の具象化が目だつことである。イヌとか机とか水とか、人間の五感でとらえられる実体なら、感覚の個人差に応じて多少の揺れはあるとしても、そのイメージがある一定の広がりの中に収斂しやすいが、抽象体となると、存在の拠点を感覚に持たないために、そのあり方がきわめて不安定であって、それを他に伝達するプロセスで、それだけ大はばの変形や変質を起こしやすい。抽象的な表現対象が具象的な形式に託して、あるいは、そのような語と結合して、伝えられることが多いのは、一つには、表現対象自体の、こういった、それと指さしにくい存在形式の特性に関係する、と考えられる。

もう一つの理由としては、言語そのものの側の事情をあげることができる。あらためて論ずるまでもないが、ことばは、遊びではなく、人間の実生活の必要から発生した。生活上の必要という点では、まず、叫びや合図の発声であり、こういった感動詞相当のものを除けば、次には、何と言っても、物の名であったと思われる。そして、やがて抽象的なことばが使われるようになって、初めのうちは、時間や空間、それに、せいぜい関係を指示する少数の語にすぎなかったであろう。

また、日本語としての特殊事情もある。近代の黎明とともに、西洋の文化や文明が大量に移入され、それに伴って数おおくの抽象語が急激に成立したわけであるが、しかし、その多くは、洋語を翻訳する必要から生じた、漢語の転用、あるいは、漢語めかした造語であり、日本語本来の造語法の活用はあまり見られないようである。

その理由はともかく、日本語の思考方式に密着した抽象語彙が貧弱であるという事実は動かしがたい。日本語の言語作品に、特に、観念さえ生きた姿に造形することを求められる文学作品に、この抽象体を具象化した表現例が豊富である現象事実は、このような背景とともに解釈される必要があるだろう。

第2段 想像力の刺激

第2に、2種の目的のうちの後者、すなわち、効果を主眼とするほうに対応する方法として、想像力を刺激する働きをあげることができる。川端康成の『東京の人』に「顔には、さざ波のように、微笑がひろがつて」という例がある。今これを「さざ波のような微笑」という単純な形式に変えて考えてみることにしよう。この比喩表現は、純粹に知的な情報の伝達という観点からするなら、単なる「微笑」という飾らない表現と比べて、そこにほとんど何もをも加えていない、と言えるかもしれない。「大噴火のような微笑」も、「絶叫のような微笑」も、〈微笑〉であるかぎり、事実として思いうかべようがないからだ。そして、確かに、他のジャンルのほとんどの文章では、通常、その「微笑」だけで十分に間にあろう。しかし、文学の本質は知的な情報伝達というレベルで論じても意味がない。作品は傾いた姿勢に投げだされた動力であり（自然の山のようにただそれとしてあるわけではない）、そこで表現主体と受容主体とのダイナミックな文体的接触が行われて、その行為性が、ある方向に確かな効果をあげた時に、初めて作品が芸術の場になるのだ、と考えられる。その文学においてさえ、多くの場あいは、単に「微笑」とするだけで済むだろう。ただ、「微笑」と「さざ波のような微笑」という二つの表現が全く同じかとなると、問題は別である。「さざ波のような微笑」の「微笑」の部分は、その作品の筋を形づくる論理的な情報を担うエレメントだから、〈微笑〉という事がらを持ちこんだ点と、それを「ほほえみ」とせずに「微笑」という語を選択した、という二つの意味でしか、表現主体の個性は現れにくい。が、「さざ波のような」の部分には、作品の筋からの要求という外的条件が働かない。すなわち、「微笑」に類する表現は、その作品が論理的に展開する上で必要だが、「さざ波のような」部分は、作品の筋が流れるためだけなら、「さざ波」でなくでもいいし、その部分をすっかり削除してもさしつかえないわけで、「さざ波」であることの外的な必然性はないのだ。そこは、時間・空間の制約を離れた、現実に対する表現主体自身の判断であり、いわば、表現主体のそれまでの感性的経験の集積（筆者が使う比喩の傾向は、自分自身が鶴岡人であり早稲田に学んだなどの経験に、西日本の文化的背景を持つ妻の生活態度や息子たちの関心事などが影響して形成される）から、その時その場の条件に応じて、その断片あるいは断片群が、現象としては非体系的に（一文章中の「AのようなB」「CのようにDする」「EはFのようだ」において、 $B \cdot D \cdot E$ は論理的な関連をもって現れるが、AとCとFの間には何の関連も要求されない。もちろん、根底までさかのぼれば、その表現主体としての必然性があるはずではあるが、少なくとも当の作品における関係としては断片的であり、受容主体には非体系的に映ると思われる。）現れる場だと考えられる。したがって、この「さざ波のような微笑」という表現は、その比喩が成功しているかどうかは別にして、ともかく、単なる「微笑」という表現と感性的な差があることは疑えない。仮に、作者を捨象して、作品と読者という2項間で考えるとしても、読者

のイメージ形成の面に対する働きかけの点で、確かな違いを示すはずである。

「さざ波のような微笑」という表現に接して、読者が〈さざ波〉だけを思いうかべるのでは、作品の理解は成り立たないし、そうかといって、〈微笑〉の一般的な形象を得るにとどまるようなら、今度は鑑賞という面の行為に欠けるところがある、と言わねばならない。この比喩が生きるのは、まず、ある特定の表情の動きとしての〈微笑〉を思いうかべ、その奥にかすかに〈さざ波〉を描く、そのいわば濃淡二重の映像が結ばれる時であろう。比喩表現の効果は、作品の背後を流れるこの淡い映像の役わりを果たす形で発揮されることが多い。

また、「さざ波のような微笑」が単なる「微笑」に対して持つ違いは、このような受容主体側における反応としての結果にあるとともに、一方、それによって想像力を刺激されること自体から生ずるある種の快感にも求めることができる。比喩にこういった効果が伴うからこそ、時には、抽象体の具象化という比喩の方法上の第1の特色とは逆に、「螢の穂の銀色」を「秋色を飛んでゐる透明な儂さのやうであった」(『雪国』)ととらえるような、むしろ抽象によりかかった表現が、伝達を意図した比喩本来のメカニズムを無視してまで使われることになるのである。

第3段 間接性

第3に、伝達と効果とのどちらを主眼とする比喩にも共通する方法上の特色として、「間接性」という点をあげておこう。

例えば、〈死〉とか〈人間が尿や糞を排出するための場所〉とかのように、教養ある成人があらわに口にしながらない事物・事象は、古くからはほとんど間接表現で呼ばれてきた。前者の生物学的な現象の変化を、現代では最も直接に示す「死ぬ」という語でさえ、一説によれば、語源的には「し往ぬ」(「息去」^{いしゆ}、「過往」^{すういぬ})など。『日本国語大辞典』参照)という間接表現であったらしい。「なくなる」も「お隠れになる」も「こと切れる」も「絶えている」も「逝く」も、初めからその現象を直接にさし示す表現だったのではなく、それを暗示する働きをしたものと思われる。しかし、それらの表現がくりかえし使われるにつれて、本来の間接性が次第に薄れ、例えば「死ぬ」という語がほのめかすはずの〈死〉という現象事実とやがて直接に結びつくようになるために、ついには間接表現の役を果たさなくなる。そして、次つぎに「息を引きとる」とか「永い眠りにつく」とか「世界に旅だつ」、あるいは「天に召される」とか「帰らぬ人となる」、場あいによっては「アトムにもどる」といった新しい間接表現を要求していくことになる。

後者についての「便所」「廁」「手水場」「雪隠」「後架」「御不浄」「はばかり」「手あらい」「洗面所」「化粧室」「トイレ(ット)」「レストルーム」なども、事情はほぼ同様であろう。

これらは、「はっきりわからせる」という「伝達」を主眼とする比喩の目的から見れば、

24 第1章 比喩の基本的性格

むしろ逆を行くもので、一般には「美化」という目的に応ずるものである。

しかし、ここで比喩表現の方法上の特色の第3として取りあげようとする〈間接性〉というのは、このような部分的な問題ではない。比喩表現は本質的に間接性をそなえているのだという点を指摘しておきたいのである。

「餅肌」の例で考えてみよう。この語が運ぶことのできる論理的情報としては、要するに〈滑らかな肌〉なのであるが、表現主体は、その〈滑らかさ〉を直接にさし示す〈滑らかな〉という語を使わず、その〈滑らかさ〉を主たる属性の一つとして持つ「餅」を構成要素とした「餅-肌」という語にして、それを表そうとしたわけである。ここにまず表現面における間接性がある。

一方、受容面でも、〈餅〉の持つ他の属性、例えば、〈白い〉とか〈ねばりがある〉とか、あるいは〈丸い〉とか〈固い〉、場あいによっては〈特有の味〉や〈特有のにおい〉などを捨てて、〈滑らか〉とか〈きめが細かい〉といった点だけを取りあげて、受容主体が「肌」と結びつける、という間接性を原則的にそなえていることが認められる。

その表現が比喩としての新鮮さを保っている間は、受容過程で次つぎに捨てていった、そういった他の属性が、その時、たとえ漠然とでも、また、否定的にもせよ、一度は意識を通りぬけたことにより、〈滑らかな肌〉の形象の背後にうっすらと消え残るはずである。この場あいは、触覚的な点が比較的前面に、その奥に、おそらく視覚的な点が、そして、ずうっと奥に、ごくかすかに嗅覚的・味覚的な点がある、ということになる。ともかく、この「餅肌」という表現は、「餅」から来る〈餅〉のそういったイメージが、何らかの意味で必ずつきまとうという点で、「滑らかな肌」というストレートな表現とは感性的な差があると言えよう。

しかし、その表現がくりかえし使われて、「餅肌」と〈滑らかな肌〉との、そういった結びつきが慣用的に固定してくるにつれて、受容主体における、〈餅〉のいくつかの属性を取捨選択する際のエネルギーの快い消耗、という力は鈍り、捨てられた属性群が形成していた背景のかすかな陰影も次第に闇に溶けていくことになる。比喩が慣用表現化していくこの現象を「比喩性が薄らぐ」と呼ぶことにしたい。そして、間接性が完全に消滅した時に、その表現は対象と直接に結びつくという意味で、一つの転義となり、比喩と分かれる。

このように、比喩表現における間接性は、その条件からも、基本的な性質なのである。

第4節 比喩の機構

比喩表現の個々の例を見ていくと、そこにはほとんど無限とも思える種類の比喩的転換が認められる。しかし、それらが比喩表現として一括されるかぎり、そこには何らかの共通性があるはずである。そして、それが、結局、比喩の機構上の性格ということになるだ

ろう。共通の性格を探るためには、一般化する必要があるので、まず、できるだけ抽象的に考えることにしよう。

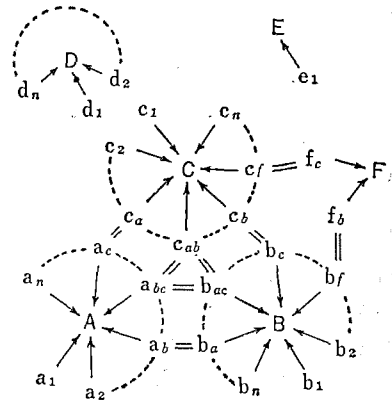
第1段 表現対象と言語形式

世界中に存在し、または想像することのできる、あらゆる事物・事象を、それらが仮に連続的な存在形式であっても、ともかく表現対象として個々に分離して考えられるものとし、それぞれを A, B, C……で表すことにする。一方、言語を記号として見た場合、その性質上、ことばの外部形式とそれが指示する意味内容との結びつきには、互いにゆとりがあって、ある言語表現形式とそれがさし示す事実とは、一般に、1対1の対応をなしていない(樺島前掲書参照)。語を単位に考えても、例えば、「ただす」は「正す」「糾す」「質す」という多少とも異なったいくつかの意味を表すし、表記もアクセントも同じである「捌ける」が「売りきれぬ」「世間なれする」というほとんど関連づけられない別の意味を表すように、ある語はある事実をさすとは限らない。しかも、これらは特殊な例ではなく、こういったいわゆる多義語は広く存在する。また、「大切」「大事」「肝要」「肝腎」「緊要」「重要」などが、情緒的な表現性を別にすれば、ほぼ同様な意味を表すように、ある事実はある語によって表されるとは限らない。こういったいわゆる類義語は、同義の類義語に絞っても、けっして少ないとは言えない。「好きな人の顔ばかり描く」という表現が、「ばかり」が意味上、「顔」だけと結びつくのか、「人の顔」と結びつくのか、「好きな人の顔」全体と結びつくのか、という違いに応じて、それぞれ、「好きな人を描く時には、胴や手足を描かずに、いつも顔だけを描く」という意味、「静物画や風景画には手をつけず、好きな人物画・肖像画だけに精をだす」という意味、「好きな人以外をモデルとして用いず、絵をかく時には、きまって好きな人の顔を画材にする」という意味と対応することにも示されるように、言語形式と指示対象との間の結びつきのゆとりは、ことばの単位をどんなに大きくとっても、どこまでもつきまとうのである。

これを一般化すれば、表現対象と言語形式とは、右のモデル=部分図に示されるような関係にあると考えられる。

この図で、アルファベットの大文字は表現対象を、小文字は言語形式を、それぞれ表し、また、矢じるしはその言語形式がその対象を表現・指示する働きを、等号は同一形式であることを、それぞれ示すことにする。

そうすると、大文字のアルファベットをと



り巻く、小文字のアルファベットを構成要素とする円弧は、その中心にある表現対象についての同義的類義言語形式群ということになり、また、等号のついた言語形式は多義表現で、その等号の多いものほど、あいまいな言語形式だということになる。逆に、その等号が一つもない言語形式は一義表現であり、その種の言語形式の集合であるために、他から孤立したD座のような場あいは、 $d_1 \sim d_n$ のどの言語形式もDだけを表現・指示するわけであるから、他の条件が同じなら、他座の場あいより伝達過程での誤解がそれだけ生じにくいはずである。これの最も単純な場あいがE座で、対象Eを表現するには e_1 をおいてほかになく、しかも、その e_1 は他の表現対象を指示する働きはなくて、常にEと結合するから、 e_1 は必ずEを表し、Eは必ず e_1 によって表される、という表現対象と言語形式とが1対1の対応を成して、最も誤解されにくい場あいである。これと対照的なのがF座で、対象Fを専門に表現する言語形式がないために、どう表しても、常に誤解の危険にさらされるわけである。

第2段 比喩の対応上の性格

表現対象と言語形式とのこのような一般的な関係に照らした場あい、比喩表現は、その機構上、どのような性格として説明できるのだろうか。まず、〈辞書〉という対象を「辞書」や「辞典」や「字びき」ということばで表現するように、 a_1 や a_2 でAをさしたり、 $d_1 \sim d_n$ でDをさしたりする場あいは、比喩ではない。また、〈中性子〉を「中性子」と言うように、純学問的な対象を厳密に定義された学術用語でさす場あいは、表現対象と言語形式とが1対1の対応を成す、Eと e_1 との関係に類するもので、もちろん、比喩とは言えない。さらに、〈絵画を制作する際に用いる材料や道具〉を意味する「画材」という語で〈絵画の題材〉をさす場あひも、その「画材」という言語形式は確かに〈絵画の題材〉という表現対象とも結合する慣用があるので、比喩的な転換は認められない。図で言えば、 b_c と c_b との関係に当たるこのような多義的表現は、その表現全体が移行する意味でのずれはないから、比喩表現と言うことはできないのである。

一方、〈木の葉〉を「小舟」と呼んだり、「吹雪」という語で〈サクラの花びらがいっせいに散りおちる〉現象をさしたりするように、例えば、 c_2 がAと結びつく場あひには、他の条件が整えば、ふつう、比喩表現と呼ばれる。

それでは、比喩になりうる場あひと比喩になりえない場あひとの違いは、どのように一般化できるだろうか。今、一般に、事がらNを慣用的にさし示す同義的類義言語形式群 $n_1 \sim n_n$ をnで代表させるとすれば、比喩表現に共通する機構上の性格として、そのnという言語形式と、そのnが基本的に、また慣用的に表す事がらNではない表現対象、すなわち、特定の非Nである、例えばMという事がらとの臨時的結びつき、という形をとる点をあげることができよう。いわば「たすぎがけ」の転換なのである。

ことばnの大きさは、事がらMの大きさや詳しさに応じて、語・句・文・文集合・文段・

文章となり、ある場あいには、文章群としての節や章の全体となり、さらに、寓話などの場あいは、一編の作品の総体ということにもなる。そして、現実にはともかく、定義的なレベルでは、作品群となり、作品の集合となることもありうるだろう。

いずれにしろ、*n*にそういった幅を持たせて考えるなら、ことば側からは、言語形式 *n* が表現対象 *M* に結びつくことであり、表現主体側では、*M* を *n* で表すことであり、受容主体側では、*n* から *M* を理解することである、としてまとめることができる。「餅肌」の例で言えば、「餅」ということば *n* が〈餅という物質、および、その属性の総合〉という事がら *N* ではなく、〈きめが細かく、すべすべしている〉という事がら *M* に、それを基本的・慣用的に表す、例えば「滑らかな」ということば *m* の代わりに、結びついたわけである。

第3段 結びつきのあり方

次に、ことば *n* と事がら *M* との結びつきのあり方について考えてみよう。広い意味で言えば、どれも「たとえ」なのであるが、もう少し分析的にとらえると、その中には、少なくとも3種の区別が見られる。

その一つは、「餅肌」の例のように、「餅」ということば *n* が、「滑らかな」ということば *m* に取って代わる場あいである。

しかし、類意的比喩表現でも、*n* が *m* を退けてそこに立つのではなく、*m* と共存することもある。「餅肌」の例と関連した例をあげれば、「餅よりも滑らかな肌」とか「餅のように滑らかな肌」とか言った場あいがそれである。この2例は他の点に差異があるので、一括することはできない。そこで、まず、前のほうの例のような、比較の規準となる、という型を2番目としてあげることにしよう。この場あい、比較の規準に立つものが実際の対象と同程度であれば記述的な比喩になり、程度に著しい差があれば強意的な比喩になると予想される。

したがって、もう一つは、後のほうの例のように、狭い意味での「たとえ」になる場あいである。しかし、狭い意味でのたとえと言っても、狭い意味での「類似」に基づくものだけでなく、対比や関連や連想などによる結びつきをも含めて考えるのがふつうであろう。ただ、狭い意味での類似に基づく、狭い意味でのたとえとなるのが、最も典型的な比喩であることはまちがいない。

第5節 比喩の条件

「海よりも深い愛情」とか「山のような大男」とかいった表現が比喩であることは、たいいていの人が認めるだろう。ところで、これらの表現はどういう点が比喩なのだろうか。比喩でない表現といたってどこが違うのだろうか。「より」とか「よう」といった言語形

式が比喩であることを表していると考える人もいるかもしれない。しかし、「あのビルディングはこの木より高い」とか「ゾウのような大きな動物が好きだ」とかいう表現は比喩とは見なしにくいから、「より」や「よう」がつけば必ず比喩だとは言えない。だが、前の2例が比喩で、後の2例が比喩でないことがわかることは事実なのだから、どこかが違うことも事実であろう。それが、前後の意味的な条件を切りはなした表面的な外形だけで解明できるとは思えない。もちろん、形式にとどまっても、例えば、単に「見るよう」の場合よりも、「まるで幽霊でも見るよう」のように、[まるで+{名詞・(動詞・形容詞)連用形・形容動詞語幹}+でも+動詞連体形+よう]という条件で現れた場あいのほうが比喩である確率をはるかに高いとか、「クジラのように大きい」のような[名詞+の+ように+形容詞]の場合あいは、連体的な用法より、言いきりの述語の位置に立つ用法のほうが比喩であることが多い、といった予想は立つが、比喩が成立する条件を言語的な性格の面に本格的に探るとなると、膨大な資料を駆使した綿密な研究の成果を待たねばならないだろう。しかし、どんな難事業であっても、ぜひとも取り組まなければならない重要な課題である。第2部に、今回の調査分について、比喩表現がどのような形式で現れるかに関する部分的報告をするが、この第1章では、その前段階として、コミュニケーションのプロセスに考えられるいくつかの条件を指摘しておくことにしたい。

第1段 事実性否定の意識

比喩行為が成りたつためには、まず、表現主体側に、その発言が文字どおりには事実でない、という意識のあることが必要である。例えば、「あの人は天使だ」と言う時、その発言の文字どおりの意味、すなわち、言語上の基本的な意味は、「送り手と受け手とが共通して認識している人物が実際に天使そのものである」ということだが、それを否定する意識がはっきりとないかぎり、その表現は比喩として成立しない。つまり、話し手自身が、「その人物がほんとうに天使である」と信じていればもちろん、そこまで行かなくても「その人物はもしかすると天使かもしれない」という気もちが話し手の心に多少でもあるなら、その表現は比喩であると言うことはできないのである。表現主体側に発言内容の事実性を否定する意識のあることが、比喩成立の第1の条件である、と考えられる。とすれば、ある表現が比喩であるかどうかを決めるものは、言語形式だけではなく、思考の形式が大きな役わりを占めていることになる。このことは、同一の言語形式をそなえた表現が、ある場あいには比喩になり、ある場あいには比喩にならない、という事実によっても示される。

今、最も単純な名詞対応の直喩「xのようなy」の形を例にとって考えてみよう。この形式におけるxとyの位置に来る名詞の性質や、両者の意味上の関係などによって、いろいろな場あいがありうる。そのうちの一つとして、「男のような女」とか「虫けらのような人間ども」とか「ミズスマシのような舟」とかいった組みあわせが考えられる。これらの場あいは、どれも、〈女〉が実際に〈男〉であったり、〈人間〉が事実として〈虫けら〉

であったり、〈舟〉がほんとうに〈ミズスマシ〉であったりすることは絶対に起こらない。一般化して言えば、ことばYの指示体Yが、事実として、ことばXの指示体Xであることはありえない、ということである。このように、対応する二つの名詞の意味領域が互いに排斥しあって、共通の部分を含み持たない場あいは、その表現が比喩であることが、ほとんど言語形式だけで決まる、と考えていい。

ところが、類似の形式でも、「ファッション・モデルのようなお嬢さん」のような場あいは、事情が少し違ってくる。〈ファッション・モデル〉であることと〈お嬢さん〉であることとは少しも矛盾しない。このように、対応する二つの名詞の間に意味の共通領域がある場あいは、その表現が比喩であるかどうかは、言語形式だけでは決まらない。〈ファッション・モデル〉であって、同時に〈お嬢さん〉であることは十分にありうることだからである。しかし、もちろん、この形式が比喩になりえないわけではない。その表現が比喩であるかどうかは、その時の表現主体の思考の方式と伝達のプロセスにかかっている。その表現の送り手が、「お嬢さん」なる女性とそれまでに面識がなく、ただ、スタイルの良さを見て、おそらくファッション・モデルでもやっている女性だろうと推測した結果、そういった表現をとったのだとすれば、それは比喩ではない。逆に、送り手がその女性と親しく交際しており、彼女が実際にはファッション・モデルでないことを知っているか、あるいは、少なくとも、そうでない信じているかである場あいに、そのスタイルの良さを相手に手とり早くわからせたり、その点を強調したりするために、ファッション・モデルを引きあいに出したのだとすれば、それは比喩表現である。

今、ここで、「知っているか」「信じているか」としたように、比喩表現の成立がことばや事柄によりも思考によりかかる面が大きいとすれば、事実よりも意識のほうが条件としては重要なのである。そして、極端に言えば、送り手や受け手の誤解や錯覚に基づく意識であっても、場あいによっては、比喩表現の成立条件の基盤になりうる。花もようのブラウスにパンタロンとパンタロン・シューズをはいた長髪の青年がいたとしよう。その時、その人物が男性であることを知っている者が、その表現対象の外見をとらえて、表現主体自身の常識に照らし、「女のような男」と言った場あいは、まず、比喩表現と考えてまちがいない。また、その人物が男性であるという事実を知らない者が、すっかり女性であるものと思いこんでいた場あいに、その人物の外またの歩き方や、話している口調などから、「男のような女」と言った時は、事実の誤解に発しているわけであるが、しかし、表現主体の意識を重視すれば、これもやはり表現としては比喩であると考えられるだろう。ただし、その時、受容主体のほうが、話題の人物が男性であることを知っていて、あるいは、女性のように見えるが実は男性であるにちがいないと思いこんでいて、しかも、相手である話し手もそのことを当然知っているものと考えている場あいは、「男のような女」とは奇妙なことを言うものだと思われ、首をかしげることになるわけで、比喩表現ではあっても比喩効果はない、と予想される。

また、逆に、送り手が事実を知っていて、受け手が知らないこともある。その場あいは、「女のような男」という表現になり、女だと思いこんでいた受け手がその表現に接すると、「水っぽい酒」を「酒っぽい水」と極言することを頭において、「男のような女」の域を通りこして「女のような男」という表現になったのだと解することもあるかもしれない。その場あいは、送り手側の意識では、表現の形容部分である「女のような」というところに比喩を図ったのに、受け手側では「男」の部分に比喩を感じたことになり、いわば、直喩表現の隠喩的效果と考えることができよう。

さらに、送り手のほうには比喩意識が全くない表現にぶつかって、受け手が比喩を感じることもある。前例の「男」の部分がその一例であるが、送り手がなにげなしに使った比喩起源の語や慣用句に、受け手がたまたま初めて接したために、例えば、「がまぐち」から〈ガマの口〉の鮮明な像が浮かんだり、「破竹の勢い」から、タケを割る際のバリバリッという音を連想したりするのは、その典型的な例であろうが、その程度を問わなければ、これに類する場あいは少なくない。このような時は、比喩表現ではないが比喩効果がある、と解釈すべきであろう。

さて、名詞対応の直喩における二つの名詞の意味領域の接触面がさらに広がり、「相撲とりのような男」の例のように、名詞xの意味領域が名詞yの意味領域の中にほぼ完全に含まれる関係になると、その表現が比喩であるかどうかという判定は、ますます言語形式以外によりかかるようになる。そして、単にそれが比喩表現であるかどうかの判定がむずかしくなるだけでなく、その表現が比喩であること自体が、実際に少なくなる、と予想される。したがって、この「相撲とりのような男」という表現は、一見同一形式に思われやすい「相撲とりのような妊婦」という表現と、その二つの点で、むしろ対照的なのである。

なお、この「相撲とり」と「男」との場あいのように、二つの名詞のうちの一方が、意義上、他方にすっぽりと覆われる関係にある場あいは、「xのようなy」という表現における対応する名詞「x」と「y」の意味領域の大小が、必ず、 $X < Y$ となり、 $X \geq Y$ とはけっしてならない。「男のような相撲とり」とか「相撲とりのような力士」(ただし、「関取」は「相撲とり」や「力士」と意味領域が違う)とかいった語連続は、それが比喩であるかどうかを問う前に、まず、表現として成立しないか、あるいは、全く無意味だからである。

第2段 修辞意識

次に、比喩を表すことのできる言語形式が実際に比喩表現であるための条件として、送り手側に表現効果を高めようとする意図があるかどうか、という点をあげることができよう。これは、比喩表現をとる目的から言っても、広い意味での修辞意識の自覚が多少とも伴わなければ、比喩法とは考えにくいからである。

また、受け手側の意識の面にも、次のような条件が考えられる。語のレベルで言うと、受容主体がある語に接した時に、その語がその場面・文脈において実現するはずの、その

場での意味をとらえるのと同時に、あるいはその直前に、その意味とは別の、その語の語源的な意味や、少なくともその時間・空間における基本的な用法からのずれを、多少とも意識することが必要であろう。だれかがある木を指さして「サルスベリ」と言ったとしよう。これはすでにほとんど換喩的ではなくなっており、通常は「キョウチクトウ」などと同様に、その植物をさす語であるにすぎないが、仮に、いくらかの換喩性が残存し、かすかながら比喩効果を奏することがあるとすれば、受け手が、「サルスベリ」と呼ばれたその木のつるつるした表面をさすりながら、「なるほど〈サル滑り〉だな」という意識が脳裏をかすめた上で、あるいはそれと同時に、送り手の表現対象である、例えば、「花が咲いた」という事がらの理解に達した時なのである。また、例えば、ある事件を解決するための糸口を探している際に「なにやらこの辺がにおうようだ」と言ったとしよう。この場合も通常は比喩表現になりにくいですが、もし受け手側で比喩効果をあげるとすれば、その「におう」が「怪しい」というストレートな表現でないことに気づき、さらに、本来は、「丹^カ秀^ホふ」で「華やかに照り映える」意味の視覚的な語であったなどという語源的な認識はともかくも、少なくとも、「くさい」とと同様に、「嗅覚を刺激する」という現代語における基本的な意味からは逸脱していることを意識する必要がある、ということである。

第2章 比喩法の種類

第1節 修辭学上の各種の比喩法

修辭学で説かれてきた比喩法には、直喩・隱喩・諷喩・活喩・提喩・換喩・引喩・張喩・声喩・字喩・詞喩・類喩といった種類がある。

まず、それぞれの喩法について、簡単に解説しておこう。

第1段 直 喩

直喩は英語の simile に相当する喩法で、喩義、つまりたとえる事物と、本義、つまりたとえられる事物とを、はっきりと区別して掲げる場あいである。そして、ふつうは、「借りてきたネコみたいにおとなしい」「在原の業平はその心あまりで言葉足らず、しぼめる花の色なくてほひのこれるが如し」(『古今和歌集』序)「荒波のうねりが幾十条となくけものようにおしよせて来ていた」(田宮虎彦『足摺岬』)のように、「あたかも・さながら・まるで」や「如し・みたい・よう」といった説明語がつくとされるが、「月に叢雲、花に風、盛運久しからず」のように、そういった説明語を伴わない場あいも、喩義と本義との並列によって比喩であることがすぐわかるものは、やはり直喩とされる(五十嵐力『新文章講話』参照)。いずれにしても、比喩であることが一見して明らかなので、「明喩」とも呼ばれる。

第2段 隱 喩

隱喩は英語の metaphor に相当する喩法で、直喩とは違い、本義は裏面に隠して、喩義だけを表面に掲げる場あいとされる。したがって、比喩であることを示す説明形式も当然現れない。例えば、「黄金の穂波」「遠国村々里々まで二人が名を流しける、是れぞ恋の新川舟をつくりて思を載せてうたかたの哀れなる世や」(井原西鶴『好色五人女』)「惜しい事に今の詩を作る人も、詩を読む人もみんな、西洋にかぶれて居るから、わざわざ呑気な扁舟を泛べて此桃源に溯るものはないやうだ」(夏目漱石『草枕』)などがその例である。これは本義が表面に出ないので、直喩を明喩と呼ぶのに対して、「暗喩」とも呼ばれる。

第3段 諷 喩

諷喩は「寓喩」とも呼ばれ、英語の allegory に相当する喩法で、伝えたい事がらをそっくり他の事がらに移しかえ、そこにほのめかされた本義をそれとなく感じさせようとするものである。努力もせずに思いがけぬ幸運が転がりこむことを「棚からぼた餅」と言ったり、「ものいへば唇寒し秋の風」という表現に、気候や感覚以外の内容をこめたりした

場あい、この例と言えよう。こういった形式はことわざ・格言・警句などによく見られるほか、『イソップ物語』や『青い鳥』、あるいは『南総里見八犬伝』などのように、作品全体がこの喩法によっている例もある。なお、英語の fable に当たる類を「寓言」と称したり、あるいは、喩の長さに着目して、短いほうを寓言と呼んだりして、諷喩と区別する立場（島村滝太郎『新美辞学』参照）もある。

第4段 活 喩

活喩は「擬人法」とも呼ばれ、英語の personification に相当する喩法で、人間以外のものを人格化し、人間になぞらえて表現するものである、とされる。「草木があえぐ」「蒲団まくら被かて寐ねたる姿や東山（服部嵐雪）」「彼の中に少しばかり残っている清らかな精神を眼ざめさせる」（阿部知二『冬の宿』）といった例がこれに当たる。

第5段 提 喩

提喩は英語の synecdoche に相当する喩法で、喩義と本義との間に、全体と部分、あるいは種と属といった、量的な関係が認められるものである。全体である「花」でその一部である〈ククラ〉（平安時代）や〈ウメ〉（奈良時代）を特にさす場あいもあり、逆に、部分である「パン」という語が「人はパンのみにて生きるにあらず」のように食物全体を代表する場あいもある（成句におけるこのような比喩的用法をわざと無視し、「人はパンのみにて生きるにあらず、たまには米の飯も食うべし」として受け手の意表をついて滑稽みを出そうとする話術もある）。また、「アハ、ハ、が連れてオホ、ハ、礼に来る」というよく引用される川柳も、家制度下でのしゅうとめ（河出版文章講座2『文章構成』所収の波多野完治「文章の要素と種類」では「新郎」と解しているが、当時の慣習に関する辻村敏樹の教示に従う）と嫁との立場を笑い方の差として端的にとらえ、「アハハハ」と「オホホホ」という笑い声でその人自身をさす、という意味で、この提喩に属する例として扱われる（上記の波多野論文のほか、佐藤孝『日本語文章表現学』でも同様）が、次の換喩から引きはなすのはむずかしい。

第6段 換 喩

換喩は英語の metonymy に相当する喩法で、喩義と本義との間に、原因と結果（芭蕉を読む）ナド、原料と製品、「丹青＝絵画」「身に寸鉄を帯びず」ナド、容器と内容物（鍋を食す）ナド、持ちぬしと品もの（角帯＝商人」「碧眼＝西洋人」ナド）、記号や標識とその実物・実体（旭日＝日本」「グリーン＝一等車」ナド）というように、主として主体と属性との関係が認められる場あいである。提喩と似ているが、提喩が量的な関係に基づくのに対し、換喩は種類に基づくという違いがあるとされる。例えば、「剣」で〈武力〉をさし、「だらりの帯」で〈舞妓まいこ〉をさしたり、かつて、〈大学生〉を「角帽」と言い、〈乞食〉を

「おこも」と言ったりした例がよくあげられる。また、「春雨や物語りゆく^{あつ}蓑とかさ」(与謝蕪村)や、俗語の「吉田通れば二階から招く、しかもかのこの振袖が」のおもしろさも、換喩の表現効果による面が大きい。

第7段 引 喩

引喩は英語の allusion に相当する喩法で、古人の言や成語・格言・ことわざ、あるいは人口に膾炙した詩歌や句など、他人のことばを引いて自分の文章を飾り、趣を添えようとする技巧である。その際に、引用であることを明確に示したものを「引用法」と呼び、それと断らずに自分の文章の中に組みこんだものを「隠引法」と呼んで、両者を区別する場あい(五十嵐前掲書)もある。「中村草田男の『長子』に“降る雪や明治は遠くなりにはけり”という句があるが、まさにその感が深い」とすれば前者の例になり、「まさに明治は遠くなりにはけりという感が深い」とすれば後者の例になる。また、いわゆる「本歌取り」はすべて引喩と言ってよく、古今和歌集の序文をもじった「歌よみは^へ下手こそよけれ^{あめつち}天地の動き出してたまるものかは」(宿屋飯盛)や、加賀の千代女の句を利用した「しまいに話をかえて君俳句をやりますかと来たから、こいつは大変だと思って、俳句はやりません、さようならと、そこそこに帰って来た。発句は芭蕉か髪結末の親方のやるもんだ。数学の先生が朝顔やに釣瓶とられてたまるものか」(夏目漱石『坊ちゃん』)なども隠引法の例である。なお、この隠引法をさらに、白楽天の『長恨歌』中の一部を借りた「羽をならべ枝をかはさむと契らせ給ひしに」(『源氏物語』)や、函谷関の故事を引いた「夜をこめてとりの空音ははかるとも世に逢坂の関はゆるさじ」(清少納言)のように、事がらだけを引くものと、前にあげた「明治は遠くなりにはけり」の後例のようにことばをも合わせて引くものとに分ける場あい(島村前掲書参照)もある。

第8段 張 喩

張喩は英語の hyperbole に相当する喩法で、「誇張法」とも言われるように、事実を極度に拡大または縮小して強調しようとする場あいである。李白の有名な「白髮三千丈、愁いによってかくの如く長し」にその典型を見る。「春風や牛の^{よだれ}涎の一里ほど」「落つる^{なみだ}泪は堀川の橋も水にや浸るらん」(近松門左衛門『心中天の網島』)などのほか、「家のあたり昼の明るさにも過ぎて光りたり」(『竹取物語』)や「焼酎に交ぜて刺り込む琉球朱の一滴一滴は、彼の命のしたたりであった」(谷崎潤一郎『刺青』)なども張喩の例として扱われる。

第9段 声 喩

声喩は英語の onomatopoeia に相当する喩法で、事物のようすを音声的印象に移して表すところから「擬態法」と呼ばれることもある(五十嵐前掲書、竹野長次『文章の作り方』など)。また、「ドカン・ヒューヒュー・ボキン・コケッコォー・ベチャクチャ」のような音響・

音声模写と、「てきばき・よちよち」のような動作模写や「ぐっすり・どぎまぎ」のような状態模写とに分け、語音と事象との間に音象徴があって成立する語、つまり広義の擬声語のうち、擬音語とも呼ばれる狭義の擬声語による前者の場合を「擬声法」あるいは「写声法」とし、擬容語とも呼ばれるいわゆる擬態語による後者の場合を「擬態法」あるいは「示姿法」（例えば、服部嘉香『文章の作り方』）とする立場もある。しかし、「ツバメがすいすい飛ぶ」時でも、空気を切る音がないとは言えないように、音響的事象と非音響的事象との峻別はむずかしく、また、「書く」動作から鉛筆が紙を摩擦する音が聞きとれても、「すらすら書く」と言う時には、滑らかな進捗が問題となっていて、音は意識に上らないように、音響的事象の非音響的側面が取りあげられることもあり、さらに、「ぼっかり・ざんぷり・どたばた」のように、音響を含めた状態をさす場合もあるので、声喩の下位分類は厳密には困難である。文学作品から実例をあげると、「春の海ひねもすのたり
のたりかな」（与謝蕪村）「下女は火打をはたはたと、打つ音に紛らかし、ちやうとうてば
そつとあけ、からから打てばそろそろあけ」（近松門左衛門『曾根崎心中』）「私が飲めない
と言うとネ、助けてやるってガブガブそれこそ牛飲したもんだから、しまいにはグデング
デンに酔ってしまつて」（二葉亭四迷『浮雲』）などは声喩の表現性が効いている箇所と言え
よう。

第10段 字 喩

字喩は「字装法」とも呼ばれる喩法で、文字の形状や構成部分の関係などを利用して、その語の意味にふくらみを持たせたり、趣を添えたりするものである。「ふたつもじ牛の角もじすぐなもじむらみもじとぞ君は覚ゆる」（『徒然草』）は「こ」「い」「し」「く」のそれぞれの字形を詠みこんだ例であり、「松という字を分析すればきみとぼくとつぐのさし向かい」は、「松」という漢字を偏と旁つぐとに分け、同音異義語を利用して、「木」を音よみした「ぼく」を「僕」に、「公」を訓よみした「きみ」を「君」に通わせたもの、「戀」を「いとしい」としとす言う心」とするのと同類である。また、「春晚落花余碧草 夜涼低月半枯桐 人随鴈遠辺城暮 雨映疎簾繡閣空」（蘇東坡）は、逆に並べかえても詩を成すところから、やはり字喩の例にあげられる。このように、文字に基づく喩法としてまとめられているが、機構の点ではいろいろな場合がある。

第11段 詞 喩

詞喩は、広義には、音声に基づく声喩や文字に基づく字喩に対し、詞ことばに基づく喩法で、掛けことば・地口・語呂のほか、枕詞・序詞を含めるが、狭義には、枕詞と序詞は「縁装法」として別に立て、それ以外をさす。また、「重義法」と呼ばれる場合もあるが、ふつうは、そのうちの「懸詞法」あるいは「秀句法」の類に限られる。ともかく、一つの語句に二重の意味を持たせる技巧であり、その中心が、同音異義語あるいは類音語を利用し

た「掛けことば」にあることは動かないところであろう。有名な例をあげておこう。「その手は桑名の焼 蛤」は「桑名」という地名に「食わな」の意を掛けたもの、「聞いて極楽見てござる」(前掲波多野論文から)は、「聞いて極楽見て地獄」と「村のはずれのお地藏さんはいつものにこに見てござる」との共通部分である「見て」をジョイントとして両者の間に乗りかえが生じたものである。また、「七重八重花は咲けども山吹のみの一つだに無きぞかなしき」は、「みの」で「実の」と「簞」の両意を兼ねたものであり、「世の中に蚊ほどうるさきものはなし ぶんぶといつて夜もねられず」(蜀山人)は、「蚊ほど」で「これほど」の意の「かほど」を、カの羽音の「ブンブ」で「文武」を、それぞれにおわせることによって、裏面に世の批判を込めた別意の歌を潜ませたものである。

第12段 類 喩

類喩は「類装法」とも呼ばれる喩法で、関連語を散りばめることにより、その文章の本旨の背後に何かの影を添わせる技法である。例えば、「川・流れ・滴る・浮く」などの語群を類用して〈水〉の伴奏をつける。近松好みと言われる「花づくし」・「貝づくし」などがその例である。「さとのともとささぬ君のかゝる世にあふ身はうきをきかで老ひせん」は、佐渡・能登・土佐・讃岐・美濃・加賀・近江・伯耆・隠岐・肥前という地名を詠みこんだもので、類喩の典型とされる。

第2節 分類上の問題点

以上のほかに、頓呼法・漸層法・婉曲法・対照法・漸減法、それに頭韻法までも比喩法に含める立場もある(辰宮栄「修辞学と文体論」)が、従来の修辞学で説かれてきた各喩法を概観すれば、だいたい以上になるものと思われる。どの喩法もそれなりの特徴を持っていることは、この程度の解説でも察しがつくだろう。しかし、このような類別が修辞学上でなされたものである点に注意する必要がある。「修辞学」とか「美辞学」とか呼ばれるものは、時に「修辞法」とも言われるように、表現技術としてのことばの有効な使い方を教えるものである。西洋の rhetoric が相手を説得するための弁論の方法を説き、東洋の修辞学が書きことばの技巧を説く作文法であったという違いはあっても、ともかくそれは技法論であり、分析を主眼としたものではなかった。つまり、こういう技法があるということを読んでも、ある表現がどの技法に属するかを説くものではないのである。したがって、この比喩法の種類にしても、それぞれの特徴を取りたてることができれば、それはそれとして一応の役めは果たしたとも言える。

しかし、分析的な立場から、実際の比喩表現例に接し、それがどの喩法に属するかを決定しようとする、分類の上でいろいろな困難にぶつかる。そのうちのいくつかの問題点を指摘しておこう。

第1段 直喩と隠喩の境界

第1点は直喩と隠喩との境界についてである。ある言語表現が比喩であるかどうかという判定においては、前に述べたように、表現主体や受容主体の思考形式を問題にしなければならぬ面が大きい。比喩表現の分類に際しては、思考形式よりも、そこに表現された言語形式を規準とすべきだと考える。そして、事実、直喩を煎じつめたのが隠喩だとも言われる(五十嵐前掲書参照)ように、両者の思考形式のほうには差が認めにくいのである。また、直喩の相似の関係を相即の関係に変えたのが隠喩だとも言われる(五十嵐前掲書参照)が、相似であるか相即であるかという点も、関係の転換という点も、結局は、言語形式の問題に帰着すると考えられる。その言語形式の点で直喩と隠喩とはどう違うかを見ると、直喩はたとえるものとたとえられるものとを分けて掲げるが、隠喩はそういった喩義と本義との別を隠す、という点と、直喩の場合には比喩であることを示す語句を添えることが多いが、隠喩の場合にはそのような説明をいっさい省く、という点で区別される、と通常説かれている。両者の典型的な例ではそのとおりなのであるが、喩義と本義とが並列されていると見るべきかどうかの判断で迷うこともあり、また、説明語句がなくても比喩であることが明らかである、という場合の「明らかさ」にも程度があるし、さらに、そこに添えられた語句を比喩の説明と見なすかどうかにも問題のある場合があるなど、直喩か隠喩かの判定は、必ずしも見かけほど容易ではないのである。相似の関係を相即の関係との別は、典型的には、「AはBのようだ」〈A is as… as (like) B.〉と「AはBだ」〈A is B.〉との違いに反映するものと思われるが、この種の単純な例でも、それぞれのバリエーションをどちらかにふり分けるのは、それほどやさしいわけではない。詳しくは、この第1部の最後、すなわち第3編第7章第3節で述べるが、大きな口をカバにたとえたとすると、すぐに頭に浮かぶものだけでも、例えば次のような表現がある。

まず、その人物の口とカバの口とが類似しているととらえるなら、「カバのような口」「カバみたいな口」「カバそっくりの口」「カバに似た口」といった表現になるだろう。

似ているどころか、両者は区別がつかない、というとらえ方で強調するとすれば、「カバ同様の口」「カバも同然の口」や「カバも変わらない口」のような表現になると思われる。

また、カバの口と比較するに足る大きさだととらえる場合においては、「カバに負けない口」「カバにもひけをとらない口」などになったり、もっと誇張して、「カバをもしのぐ口」「カバも驚く口」となったりすることも考えられる。

さらに、もう一步進めて、その人物の口を見ると、それをカバの口かと思ってしまう、というとらえ方による強調もありえよう。その場合においては、「カバかと思う口」「カバにも疑われる口」や「カバにも紛^{まぎ}らう口」のような形の表現になるだろう。

そこまでは行かなくとも、その口を見ると、カバの口をすぐに連想する、という程度の

強調なら、もっと例が多いかもしれない。その場あいは、「カバを思わせる口」「カバをしるばす口」「カバを髣髴させる口」「カバを想像させる口」などの形で現れるだろう。

そのほか、「まるでカバだ」とか「カバそのものだ」とか「もうりっばなカバだ」とかのように、強意の語を添えることもある。

これ以外にもまだいろいろな形式が可能だろう。これらのうちのどれとどれを「だ」〈A is B.〉の側に属すると考え、どれを「ようだ」〈A is as…as (like) B.〉のバリエーションと見るべきか、という点を規定することによって、いわゆる隠喩といわゆる直喩との境界線を設定するのが、言語形式を規準とした分類の一つの方向である。そして、筆者は、「まさに」とか「そのもの」とかいった強調の語でさえ、事実としては違うことを認めた上で、修辞意識が働いたために添えられたもの、つまり比喩意識の反映と考え、何らかの意味でたとえる意識の感じとれる語句をできるだけ広くとらえて、すべて「ようだ」の側に位置づける立場をとりたいと思う。

第2段 諷喩の判別

第2点は、諷喩を指摘する際の困難さの問題である。諷喩はその性質上、たとえられる事がらが表面に現れず、また、たとえるということを示すことばも現れないので、ある表現がその字句どおりの意味に受けとられることを意図したものなのか、その形式の奥に別の意味が込められているのか、つまり諷喩であるかどうかを判別するのは微妙である。たとえば、「あなたはほんとにかぜをひきませんね」という表現の背後に「ばかばかぜをひかない」という意味が潜んでいることもあり、ある一つの物語全編がそっくり他の思想を象徴している場あいもある。厳密に、正確に、完全に、それを指摘することは、絶対にできないだろう。しかし、我われに諷喩であることがわかる場あいには、必ず何らかの手がかりがあるにちがいない。いわゆる直喩の場あいは、「まるで」や「よう」などが目じるしとなり、いわゆる隠喩の場あいでも、要素間の結びつきにある種のずれがあるためにそれと知れるのである。そういう手がかりをいわゆる諷喩に求めるとすれば、その表現が前後の言語的環境としっかり合わないこと、つまり、文脈上の不自然さをあげることができよう。換言すれば、そういう文脈上の断絶や遊離性の感じられるかぎりにおいて、諷喩の認定が可能だということである。なお、この3種の手がかりについては、喩法の類別の規準として後でもう少し詳細に述べる。

第3段 活喩の範囲

第3点は、活喩の範囲および他の喩法との関係についての問題である。比喩というのは、広い意味で、何かを何かにととえることであるが、その「何か」を、便宜上、人間・(人間以外の)動物・植物・物体・抽象体の5種に分類し、「何」を「何」にととえるかという観点で、表形式に整理すると、次のようになる。

一部、例をあげれば、「乞食の行幸」は1-1、「おやじがほえたてる」は1-2、「ネコのさえずり」は2-2、「娘の咲きはじめ」は1-3、「群がる害虫を刈り取る」は2-3、「年輪を重ねた芝ふ」は3-3、「万巻のフィルム」は4-4、「難解な器具類」は4-5、「恋愛の初犯」は5-5に、それぞれ属すると考えられる。番号を付した枠のすべてにわたって、実際の作品中から用例が得られるかどうかはわからないが、少なくとも、理論的には、どの枠の考え方も起こりうるはずである。

さて、修辞学における活喩関係の用語の該当する範囲を、諸書の定義や用例から推測して、この表の番号で表してみよう。

まず、「活喩」という術語は、物体と抽象体を人間扱いにした4-1と5-1、および、動物扱いにした4-2と5-2の場合あいには、問題なく使われる。また、「生あるもの」の意味が限定され、精神的な面が強調される場合あいには、人間以外の動物を人間扱いにした2-1も含まれる。さらに、植物を「生きている」とする考え方の自然さの程度に応じて、植物を人間や動物として扱った3-1や3-2、および、物体・抽象体を植物扱いにした4-3や5-3を含む場合あいもある。

次に、「擬人法」という術語は、人間以外を人間として扱った2-1、3-1、4-1、5-1に相当し、ほかに該当する枠がないので、一応すっきりしているようであるが、それでも、「木が死ぬ」という例では、「死ぬ」という語が人間を含めた動物一般について用いられるとすると、3-1・2に位置づけられる例だということになり、それが擬人法であるかどうかは微妙である。そして、前述の理由で、活喩に属するかどうか不明確ではないのである。

また、「擬物法」という術語は、人間や動物を物体扱いにした1-4と2-4の場合あいはその典型だと考えられるが、植物が動物と物体との中間的な性質を持つものとして扱われる関係上、人間や動物を植物扱いにした1-3と2-3や、植物を物体扱いにした3-4などは、その境界線上にあるとすることもでき、一方、物体と抽象体との関係から、生物一般を抽象体として扱った1-5、2-5、3-5や、抽象体を物体化した5-4なども、擬物法とのかかわりはあいまいである。

このように、活喩と呼ばれるものは、そのなかみも、他との関係も、複雑である。また、仮に擬人法や擬物法という概念を導入したところで、すっきりと分かれるものではない。活喩も擬人法も擬物法も、所詮は表現技術を伝授する修辞法上の用語なので、分類の規準としては使いにくい。単に、それらが重複するとか、境界をはっきりしないとかいうだけ

た と え る	人 間	動 物	植 物	物 体	抽 象 体
人 間	1-1	1-2	1-3	1-4	1-5
動 物	2-1	2-2	2-3	2-4	2-5
植 物	3-1	3-2	3-3	3-4	3-5
物 体	4-1	4-2	4-3	4-4	4-5
抽 象 体	5-1	5-2	5-3	5-4	5-5

40 第2章 比喩法の種類

ではなく、そのどれにも属さない部分がたくさんあるのである。どれにも属さないことが明瞭なものだけでも、それぞれのカテゴリー内での他の事物・事象にたとえる1-1, 2-2, 3-3, 4-4, 5-5, 人間を人間以外の動物として扱う1-2, 物体を抽象体扱いにする4-5, という7箇所の枠が数えられる。そして、その部分をまとめてさす用語を求めても、個々の枠をさす用語を求めても、適切な名称は見あたらない。もちろん、その多くは隠喩と呼ぶことができよう。しかし、とり残されたその部分だけでなく、活喩や擬人法・擬物法の領域でも、その意味では同じことなのである。

結論的に言えば、活喩と呼ばれるものの大部分は、非情物を有情物として扱う点に着目して、隠喩の一部を独立させたものであり、隠喩と横に並ぶのではなく、隠喩の網羅的でない下位区分であると考えべきであろう。もっとも、それは、非情物を表す名詞が有情物用の属性や行為を示すことばと、直喩とは違って、断りを置かず、いわば無断で結びついたものである、というかぎりでのことであって、例えば、「好機はリスのように逃げ去った」のように説明語句を伴った例をも、もし活喩と呼ぶのなら、直喩と重複する場あいもあるし、また、非情物を表す名詞のほうも有情物用の述語に合わせて転ずることがあるなら、その度あいに応じて諷喩に近づく場あいもあると思われる。

第4段 提喩と換喩の扱い

第4点は、提喩と換喩に関する問題である。例えば、「オホホホ」が新婦をさし、「角帽」が大学生をさす、という点を中心に考えれば、いずれも諷喩的であるが、「オホホホが礼に来る」とか「角帽が通りかかる」という形で使われれば、隠喩的、狭くは活喩的な例と言えよう。このように、提喩も換喩も、ある観点における特色を確かに持ってはいるが、分類的な立場からは、他から独立して一つの喩法として立てるだけの積極的な意味があるかどうかは疑問である。

また、これらのはたして比喩に属するかどうかという点も微妙である。提喩や換喩が直喩や隠喩や諷喩と共通する比喩としての基盤をそなえているかという判断は、比喩の条件である結合・転換の根拠をどこまで広く考えるかにかかっている、と言える。「オホホホ」は新婦と、「角帽」は大学生と、それぞれ関係はあるが、似ているわけではない。したがって、「類似」という点に限れば比喩であるとは言いがたく、「関連」という点まで広げれば比喩である、ということになる。

第5段 引喩の独立性

第5点は引喩に関する問題である。これは、引用であることを明言すれば直喩的になり、いわゆる隠引法のうち、文中に組みこまれたものは隠喩的、独立して置かれたものは諷喩的、というように、その引き方によって性質が違う。そして、引用の手づき以外に言語表現形式上の特色がないので、直喩・隠喩・諷喩とは別に、それらと並ぶ比喩法の一つと

して立てる必然性は稀薄である。

第6段 張喩の普遍性

第6点は張喩に関する問題である。これは、たとえる事物・事象とたとえられる事物・事象との両方が言語化されているか、少なくとも文脈的に明らかになっていなければ、その表現が誇張であることがはっきりしないので、直喩的または隠喩的な形式をとることにになり、諷喩的にはなりにくい。また、誇張と言っても程度があって、誇張表現と非誇張表現とに二分できる性質のものではない。ある事がらを強調する時には、それだけですでに多少とも誇張を伴うものと思われ、厳密に言えば、強意的な比喩のほとんどがこの張喩に含まれることになる。したがって、これも一比喩法として独立させる根拠は弱いと言わなければならない。

第7段 声喩の比喩性

第7点は声喩に関する問題である。〈うれしそうな表情〉という事象を「にこにこ」ということばで表す場あいを例にとり、比喩の機構からチェックしてみよう。〈うれしそうな表情〉という事がらMを、それを慣用的にさし示す「にこにこ」ということばmで表したことになる。声喩には、慣用的でなく、そのために新たに造り出したことばm'を用いる場あいもあるが、いずれにしても、典型的な比喩の成立に必要なm→nという臨時の転換が見られない以上は、比喩であるとしても不完全なものであると考えられる。ただし、もし、〈うれしそうな表情〉というMを慣用的に適切にさしてきたことばmが「にこにこ」とは別に存在し、「ニコニコ」という言語音から生ずる音表象を事がらNと考えることができ、さらに、そのNとの結びつきの固定したことばnとして「にこにこ」を関係づける、という条件がすべて成りたつ（つまり、〈うれしそうな表情〉と「にこにこ」とがMとnとの関係にある）場あいには、それを比喩と考えることもできるだろう。しかし、少なくとも、固定した声喩は、直喩や隠喩や諷喩と同じ意味では、比喩でないと思べきだろう。とはいえ、「決心がぐらりと揺らぐ」といった表現が比喩でないと言っているわけではない。この場あいの声喩「ぐらり」が、やや慣用化した比喩句である「決心が揺らぐ」の比喩性を蘇生させる役わりを果たしていることは確かであるが、その比喩を成立させる決定的な条件ではなく、また、その「ぐらり」が比喩に参与するのは、「決心が」との関係においてなのであり、ある状態を「ぐらり」ということばで表現したこと、つまり声喩であること自体によるわけではないのである。

第8段 字喩の検討

第8点は字喩に関する問題である。これは、前の概説の際にあげた例で言えば、「ふたつもじ牛の角もじ……」の場あいは、いわば換喩の隠喩的用法とも見られるが、「松とい

42 第2章 比喩法の種類

う字」の例の場合はいは、文字をその構成部分（「木」と「公」と偶然の関連を持つ他語（「僕」と「君」）によって説明したものにすぎず、喩義の〈君と僕とのさし向かい〉と本義の〈松〉との間に意味的なつながりを見いだすのはむずかしい。「戀」の例の場合はいは、「いとしいとしよう心」と意味的連関がないでもないが、少なくとも〈恋〉そのものの本質を伝えようとする意図を背おっているとは考えにくい。とすれば、この字喩も、直喩・隠喩・諷喩と共通の基盤に立った一比喩法として、独立させる意味は少ないことになる。

第9段 詞喩の転換

第9点は詞喩に関する問題である。これもいろいろな場あいがある。「山吹」の古歌や「蚊ほどうるさき」の狂歌などの場あいはいは、その表面上の歌意が直線的に通って、その奥に別の裏面の歌意が隠されている（比喩レベルだけでなく字義レベルでの解釈をも許す両義表現。芝原宏治「帰納・演繹・発想2」参照）ので、一種の諷喩的な表現と言うことができよう。しかし、在原行平の「立ち別れいなばの山の嶺に生ふるまつときかば今かへりこむ」（『古今和歌集』）などの例になると、「立ち別れ往なば」と「因幡の山」、「嶺に生ふる松」と「待つとし聞かば」の2箇所て歌意は折れまがり、直線的には通らない。つまり、nとmとの外形上の偶然の一致が類似かをポイントとしてコースを換えるわけで、表現全体にふくらみを与える結果になる。このような場あいはいは、転換が典型的な比喩のような「たすぎがけ」にはならず、「いなば」とか「まつ」とかいったポイントが同時に二つの意味を担うので、完全な移行とも言いにくい。いわば半比喩とすべきだろう。いずれにしろ、いろいろな場あいを含めた詞喩を一つの比喩法として独立させる積極的な意味は、少なくとも機構上は認められない。

第10段 類喩における本義の問題

第10点は類喩に関する問題である。これは、「…づくし」にしろ、地名を詠みこんだ短歌にしろ、その意味は、屈折なしに通るわけであり、その背後にあるとされる〈花〉とか〈貝〉とか〈土地〉とかの共通観念を認めることができたとしても、表面の意味と喩義・本義の関係にある裏面の意味がまとまって得られるとは思えない。したがって、比喩成立の核である「たすぎがけ」の転換を経たことばnと事からMとの結びつきが見られないこの類喩は、直喩・隠喩・諷喩と並ぶ一喩法として独立させる根拠が弱いだけではなく、それらと同じ意味では、むしろ非比喩の技法と考えるべきであろう。

第3節 言語化を規準とした分類

以上、修辞学であげられる比喩法の種類に関する問題を10点指摘したが、表現技術とし

て取りたてられたこれらの喩法を実例分析の観点から見れば、まだまだ多くの問題点を含んでいるものと思われる。これ以上の検討を加えるまでもなく、観点が多元的なために十分に排他的でありえず、また、網羅的でもないこの12種の比喩法が、比喩表現の分類において十全な規準とはなりかねる事情は、すでに明らかなはずである。比喩表現の分類は、やはり、言語である比喩の表現形式を規準とするほかはないであろう。

第1段 喩詞・被喩詞・比喩意識詞

いかに広い意味でであろうと、比喩が本質的に、「たとえる」ことであるとするなら、たとえられる事がらがあり、それをたとえる事がらがあり、そして、たとえる行為があるにちがいない。とすれば、その「たとえられる事がらを表すことば」、それを「たとえるほうの事がらを表すことば」、そして、「表現主体のたとえるという行為の軌跡として、受容主体がその行為を推測する手がかりとなることば」という三者が、それぞれどこまで言語面に現れるかを判定し、その結果の組みあわせによって比喩表現を分類する、という観点がありうる（金岡孝「比喩について」参照）はずである。この三者のそれぞれを、言語化されるか言語化されないかで二分すれば、機械的に計算して8とおろあることになるが、三者のうち、例えば「大木の根のようなたくましい腕」や「カモシカを思わせるすらしとした足」を単に「たくましい腕」や「すらしとした足」としたのでは、たとえ送り手の表現過程に〈大木の根〉や〈カモシカ〉の連想が同様に働いていたとしても、結果として比喩表現が成立しないように、たとえる事がらが言語化されない比喩というものは考えられない。したがって、三者とは言っても、実は、〈腕〉や〈足〉といったたとえられる事がらを「腕」や「足」として言語化するかどうか、たとえるという意識を「ような」や「を思わせる」ということばにして表すかどうか、という二者の2種の判定の組みあわせで、理論的には、次の4とおろとなる。

	たとえる事がら	たとえられる事がら	たとえる意識	型
言	○	○	○	A
語	○	×	○	B
化	○	○	×	C
	○	×	×	D

しかし、一見、たとえられる事がらを言語化していないように見える「大木の根のようだ」や「カモシカを思わせる」といったB型に属すると考えられる例でも、受容主体がそれを比喩表現と解することができるかぎりには、たとえられる「腕」や「足」が、少なくとも文脈的に示されているはずである。そして、文脈も言語によって作られるものなので、この場合あいも言語化されたものと考えるなら、B型は結局、A型と事実上同じことになる。

第2段 3種の基本形

このような検討を重ねた結果、我われは最終的に、三つの基本形にたどりつくこととな

44 第2章 比喩法の種類

る。一つは、たとえられる事がら、たとえる事がら、たとえる意識、という三者をすべて言語化する場あいで、これを第1類としよう。次は、たとえられる事がらとたとえる事がらとを言語化し、たとえる意識を言語面に反映させない場あいで、これを第2類とする。もう一つは、たとえる事がらだけを言語化して投げだし、それが「何を」たとえているかも、それが「たとえ」であるということさえも明示しない場あいで、これが第3類となる。同一素材例で示すと、ドラマチックな死で閉じたある人の絢爛たる一生を、「花のような生涯」と言えば第1類になり、「花の生涯」とすれば第2類になり、単に「花」だけを提示してそのような生涯を髣髴させることができれば第3類となる、と考えられる。

これを、その言語表現が比喩であると判断する際によりどころの特徴から言えば、第1類は、表現主体の比喩意識の反映と見られる何らかの指標を伴うもの、第2類は、その表現を構成している成分間のどれかに結合上の異常性が生じているもの、第3類はその表現全体とそれを取り巻く言語的環境との間に文脈上の違和感が起こっているもの、ということになろう。

この研究で筆者がとろうとした基本的立場は、上述のように受容主体側にある。すなわち、「自分はなぜこの表現を比喩だと考えるのだろうか」というところを出発点とし、その際の、比喩であることのわかり方の違いを分類の規準としようというわけである。具体的な扱い、および、下位分類など、詳細については、第2部の2「分類方法」で解説する。

第3章 比喩性の段階

第1章でも述べたように、ある言語表現が比喩であるかどうかは、二者択一的に決まるとは限らない。そして、すべての表現が比喩と非比喩とにきれいに二分されるものではないということは、少なくとも二重の意味で言えるのである。その一つは、同じ言語形式の表現でも、ほかの条件によって、比喩的になったりならなかったりすることであり、もう一つは、比喩的であるとは言っても、その度あいはいろいろあるということである。すなわち、序章で指摘した「あいまい性」と「中間性」とに対応する。この第3章では、後者の点について、語句レベルで少しふれておきたい。

完全な比喩と断定するには抵抗のあるもののうち、語句の慣用性にかかわる部分を取りあげ、筆者の語感で判断して、比喩度が低いために実際の用例でも比喩性が薄いと思われるものから、比喩度がかなり高く、実際の用例でもそれだけ高い比喩性を獲得できそうなものへと、段階的に並べてみよう。ただし、個々の語例を比較した結果ではなく、あくまで各グループの平均的な段階を推測したものである。

第1節 語義と比喩との交渉

第1段 語源的比喩

比喩として成立したと推測される語形ではあるが、現代においては、ふつう、比喩・修辭の意識なしに使われたり受けとられたりしていると予想されるものがまず考えられる。

これは、いわゆる語源的な比喩に相当するもので、いわば比喩として生まれながら、だからその出生が忘れられている場あいとも言えよう。例えば、「火花」は spark を〈花〉に見たてることによって、「ぬか雨」は雨の細かさを〈簾か〉にたとえることによって、それぞれ成立した語と思われるが、現在は、それが実際に使われる際に、〈花〉とか〈簾〉とかのイメージを介さずに、じかに〈spark〉や〈細かい雨〉と結びつくのがふつうだろう。前者の場合あいは、「火花」以外に適当な語がないこと、後者の場合あいは、「こぬか雨」では全く同じことだし、「霧雨」としても事情はあまり変わらず、だからといって、「小雨」と言ったのでは、指示体に少しずれが生じるので、やはり、それに代わる適語が得がたい、ということが一因となって、その語の比喩性が低下し、やがて意識されなくなっていく進度を早めた、とも考えられる。その理由はともかく、比喩起源の意識がほとんど薄れてしまったことは事実だろう。また、「ねこじた」が実際の〈ネコの舌〉をさしたり、「さるまた」が〈サルの股のそのものをさしたり、「旅がらす」が鳥類の一種として扱われたり、「泣きむし」が虫類の一種として扱われたり、「口ぐるま」が車輛の一種として扱われたりした時期はなかったと思われる。「永眠」も最初から「永遠の眠り」すなわち

〈死〉を意味し、単なる〈長時間の睡眠〉の意で使われたことはなかっただろうし、「洗脳」も、実際に、「脳を洗う」わけにはいかないから、中国ではともかく、日本語として使われた当初は、かなり比喩性の濃い語であったと推測される。「サルスベリ」も、「木のぼりのうまいサルでさえ滑べるほどのつるつるした木はだ」という属性をとおして、初めからその〈木〉と結びついたものと思われる。「入道雲」や「ツリガネソウ」も見たてによって成立した呼称であろう。「日あし」や「ひぎ小僧」は人間扱い、「ひぎ栗毛」はウマの代役という、いずれもたとえる意識を経てできた語と考えられる。「茶色」「乳色」「レモン色」「ブドウ色」「うす墨色」「クリーム」「アイボリー」など色名の多くも、それぞれの連想が働いて成った語であろう。ここにあげた例は、いずれも、比喩として発生し、次第に比喩性を失って、今日では比喩性が消えかかっている語に数えられよう。

第2段 中心の意味の交替

次に、語の成立においては比喩が関与しないが、後に意味が変わって、現在ではもっぱら転義のほうで使われ、原義ではほとんど使われなくなったものがあげられる。

これは、本来的な比喩ではなく、初めはその語形の文字どおりの意味で使われたものが、用法の広がりに伴って新しい意味を獲得し、次第にその意味のほうが優勢になって、ついには元の意味での用法がほぼ完全にすたれた場あいである。例えば、「迷宮」は、初めは、中に入ると出口がわからなくなるように複雑に作った建てものをさしたのであるが、今日では、「迷宮入り」などの形で、事件などが解決の見とおしが立たない状態になることを意味し、建てものをさす用法は失われたと考えられる。「垂涎」も、本来は食べものを前にしてよだれを流す意であったと思われるが、今では一般に、何かをしきりに欲しがる意で、「垂涎的」などの形で用いるのがふつうで、実際によだれを流す場あいに使うと、むしろ奇異に感じられるほど、本来の用法は衰退した。有名な例では、「さかな」があり、本来の「酒菜」つまり「酒をのむ際につまみ」の意から「魚」の意味に限定され、「酒の肴」として使う場あい以外は、もっぱら魚類をさすようになった。いわゆる提喩の固定化と考えることができよう。「抜け駆け」も、初めは、「戦場でひそかに陣屋を抜けだし、仲間より先に駆けつけて敵を攻める」という意味で使われた、と言われるが、今日では、単に「仲間をだしぬいて何かをする」意で使われ、「抜ける」とか「駆ける」といった意味は残っていない。「駆け出し」も、もともとは「走り始める」意味を表したと言われるが、「山伏が修行を終えて山から出る」ことを「駆け出で」と言ったことを契機に、その意味の一部である「山から出たばかり」のところが強調されて、「物ごとをやり始めてから日が浅い」の意に転じ、「不なれなために未熟である」というニュアンスを添えて用いられるようになって、以前の意味は、どちらも忘れられたものと思われる。「とんちんかん」も、本来、鍛冶屋が槌を打つ際の「トンテンカン」という音を表したらしいが、その相づちが交互に打たれるため、同時に鳴らないので、「くい違う」意味で使われ、「頓珍漢」

などと漢字表記されることにも示されるように、音のほうは語源的な意味という域まで後退したと考えられる。「畳水練」も、実際に水に入って練習せずに「畳の上で水泳の型だけを習う」意味から、一般に「方法を知っているだけで、実地の訓練をつんでいない」意に転じ、「実際には役に立たない」というニュアンスで使われるようになって、「畳の上で泳ぎの練習をする」意味で用いられることは、むしろまれになったようである。「旗挙げ」も、「頼朝の旗挙げ」のように、「兵を挙げる」意味から、一般に「新しく事を起こす」意に転じ、「旗のもとに集まる」という意味あいは失われた。「白川夜船」も、「白川は夜船で通ったから知らない」という語源の意味は、すでに忘れられたと言えよう。また、「けりがつく」の「けり」も、和歌や俳句の末尾によく現れる助動詞「けり」を離れて、完全に「結末」の意に移行したと見られるし、「草葉の陰」も、「草の葉の下」の意から、そういう場所にある「墓の下」の意に転じ、さらに、今では、「あの世」の意味としてだけ用いられるようになった、と思われるので、同類の例と言えよう。

第3段 両義の共存

次に、比喩的な用法が一つの意味として通常の国語辞典に記載されるほどに固定し、また、原義のほうも依然として基本的意味として使われるものをあげることができる。

例えば、「渋い」は、「熟しきらないカキを食べた時の、舌がしびれて厚ぼったくなったような感じ」といった本来の感覚的な意味から、多分、「渋ガキを食ったような」という比喩表現を通して、「苦みきった」の意味で「渋い表情」のような用法が可能になり、さらに、「好み^が渋い」のような「じみ」の意味や、「しぶちん」のような「けち」の意味が出てきても、本来の意味が失われることなく、併行して使われている例と言えよう。「釘づけ」も、単に「相手を動けなくする」という転義で使われると同時に、「台風^に備えて雨戸を釘づけにする」といった本来の用法も生きている。「泥臭い」も「泥^ににおいがする」という本来の意味と「やぼったい」という転じた意味との両方で使われる。「狂言」も「能狂言」のように使われる一方、「狂言自殺」のように「偽り仕組む」意でも使われる。「煙たい」も本来の「煙^が目にしみる感じ」について使うほか、「上役^が煙たい」のように「気がね」の意味で使うのも、すでに慣用的である。「閃く」も、「一瞬光る」意のほか、「妙案^が閃く」のような「脳裡^にをかすめる」意の用法も固定したと言える。「くすぶる」も、「いぶる」意のほか、火や煙^にに関係なく、「いつまでも端役^でくすぶっている」のように「ぱっとしない」意でもよく使われる。「咀嚼^を」も、「意味をよく考え味わう」といった転義と「食べものを噛みくだく」という原義とが共存している。「能書き」も「薬の能書き」といった本来の用法のほか、「自己宣伝」の意味で使われる。「助け船」は「困っている時に力を貸してくれる人や物」の意が優勢となったものの、実際の船について言う場あいもまだある。「胸襟を開く」となると、「心の中をうち明ける」意がほとんどであるが、堅い文章では、実際に「襟をはだける」場あいにも使わないとは限らないだろう。「歩は

ば」の意を持つ「コンパス」や、「障害」の意を持つ「壁」なども類例に数えられよう。

第4段 臨時性の残存

次に、かなり一般的に使われるために辞書に記載された意味でも、まだ慣用が十分でないという判断から、通常の国語辞典で「比喩的に」とか「…のたとえ」といった断わり書きをつけている段階のものがある。

これは、換言すると、比喩的ではあるが、辞書でふれるほどに慣用的に固定しているものである。前段では原義・転義がともによく使われるものを扱ったが、この第4段は、第2段と対照的に、原義が基本的意味として依然中心を占めており、そこに転義的用法が現れて、それもかなり使われるようになったものの、まだ臨時の意味という色彩が濃厚で、その語の一義としての位置を獲得するには至らない段階と言える。『岩波国語辞典〈第二版〉』を規準にとってみると、例えば、「沈没」には「酔いつぶれるさまの比喩にも使う」とあり、「軍用金」には「比喩的に、事業などをするための資金」とあり、「伝染」には「比喩的に、物事が他にうつって似た状態になること」とあり、「金脈」には「比喩的に、資金を引き出すあてのあるところ、また人」とあり、「根無し草」には「比喩的に、浮動して定まらない物・事」とあり、「手品」には「比喩的に、人をたくみにだます手段」とあり、「大名行列」には「比喩的に、大勢人を従えて出向くこと」とあり、「小股搦こまたとらい」には「比喩的に、相手のすきにつけ入って自分の利益を図るしかた」とある。また、「巢立ち」には「子が大きくなって独立するたとえにも使う」とあり、「木仏・金仏・石仏きぶつ・かなぶつ・いしぼとけ」には「融通のきかない人、情に動かされない人のたとえ」とある。むろん、辞書によって記述は一定しないが、少なくともどれかの辞書に「比喩的」といった断わりがついていれば、その時点では、それは用法上の意味であって、その語にそなわった意義とはしにくい、という気もちが多少とも残っていたものと考えるべきであろう。

第5段 準慣用的用法

さらに、かなり慣用的に固定していると考えられても、通常の国語辞典に記載されていないものもある。

これも辞書によって違いのあることは予想されるが、しかし、どの辞書にも登録されていない用法は、前段の場合あいよりそれだけ臨時性・比喩性が強いと判断する一つの材料にはなるだろう。例えば、「足枷あししかせ」には「昔、罪人の足にはめて自由を束縛した道具」の意のほか、「転じて、足手まといになるもの」ともあるが、「手桎てかば」には「(囚人などの)手にはめて、自由に行動させなくするための道具」とあるだけで、転義の説明はない。この点は、『三省堂国語辞典〈第二版〉』でも事情は変わらないので、両者の慣用性の度あいを反映していると考えられることもできよう。そのほか、「出世街道」の「街道」や、「性格破産者」の「破産」、それに、「列のしっぽ」と使った時などの「しっぽ」も、このレベルの用

法に数えられるだろう。また、「新感覚を振りかざす」の「振りかざす」などは、もう少し比喩性が強いとも思われるが、「眠りに落ちる」などの「落ちる」や、「目を落とす」の「落とす」などは、この段階の上のほうに位置づけて考えることができるかもしれない。

第2節 比喩的慣用表現

第1段 転義固定の慣用表現

まず、慣用句やことわざなどが、慣用どおりの形式と意味で使われたものがある。

例えば、「足を出す」という慣用句を、「足をふみ出す」とか「足をはみ出す」とかいった変形をせずに、「足を出す」というそのままの形で、しかも「予定したよりも出費がかさむ」とか「隠していたことが露見する」とかいった慣用どおりの意味で使われた場あいである。また、「釘を刺す」の例で言えば、「釘をつき刺す」とかにならず、意味も「自分にとって都合の悪いことを相手がしないように念を押す」という慣用的に使われた場あいである。「老いては子に従え」とか「キジも鳴かすば打たれまい」とか「飛んで火に入る夏の虫」などでも、そのとおりの形式、慣用どおりの意味で使われた場あいは、この段階に属すると考えられる。が、例えば、「負うた子に浅瀬を教えられ」が「背なかにおぶった子どもに浅瀬を教えられた」などという形で使われたり、あるいは、「自分より年下の者や劣った者に逆に教わることもある」の意味でなく、実際に子どもに浅瀬を教えられたりした時に使われた場あいなどは、ともに、比喩性の度あいから言って、別の段階にあることになる。すなわち、前者は慣用形式を破ることにより、その表現の構成要素の基本的な意味が意識される度あいを増すという点で、比喩性の増加に傾き、後者は、比喩の成立に必要な、言語形式の基本的な意味とその場での臨時の意味との距離を縮めることによって、比喩性を奪う方向に働くからである。

第2段 慣用表現の逸脱用法

次に、慣用句やことわざが慣用どおりの形式で現れ、意味のほうがずれているものがある。

例えば、「辻褄が合う」という慣用句が、「物ごとの筋みちがきちんと道理にかなう」という意味からややずれて、料理が何とか食べるようにできあがる場あいに使われたもの(中野重治『歌のわかれ』)は、「話の辻褄が合う」などと使われた例より、句の構成要素の基本的な意味の和からの逸脱度という意味での比喩性が、多少とも高いと考えられる。つまり、慣用性を崩すことは、その表現の本来の意味を意識させる度あいを増すことにつながるのである。

第3段 慣用表現の変形と応用

また、慣用句やことわざを下じきにしていることは明らかで、意味も慣用からのずれが見られないが、形式の上で変形が認められるものもある。

これは、前段と逆に、意味のほうは慣用的で形式のほうが非慣用的な場あいである。例えば、「釘を刺す」が「釘を打つ」や「釘をぶちこむ」となったり、「私腹を肥やす」が「腹を肥やす」（広津和郎『神経病時代』）や「私腹を太らせる」となったり、「腹が黒い」が「腹がまっ黒い」や「腹が浅黒い」となったり、「溜飲が下がる」が「溜飲が下りる」や「溜飲が引っこむ」となったり、あるいは、「サルも木から落ちる」を土台にして「サルだって木から落っこちるサ」と言ったり、「知らぬが仏」を踏まえて、「知っていて、なかなかこう仏でいられるものではない」などという形で表す場あいなどが、その例である。また、困難な局面とか障害とかいう意味での「壁」を、「壁につき当たる」とか「壁にぶつかる」とかいう形ではなく、「壁に体あたりする」と変形したり、「壁にコツンとつき当たる」のように関連要素を付加した形で表したりする場あいも、この段階と言えよう。これらは、慣用表現の奥に忘れ去られた比喩性を刺激する技法であり、いわば死んだ比喩を生きかえらせる効果がある、と行うことができよう。「知らぬが仏のご利益」とか「日あしのコンパスが長くなる」といった例も同類である。この段階の例が文学作品によく見られるのは、おそらく偶然ではないであろう。新しい表現を案出したり、古い表現に新しい装いをこらしたりする一連の試みと方向を同じくするからであるとともに、例えば「青天白日とまでは行かなくとも、曇天の域ははるかに越えていた」などという思考パターンは、言語感覚の鋭い人にありがちな傾向と思われるからである。なお、例えば、「サルも木から落ちる」ということわざを、「じょうずな人でもたまには失敗することがある」という意味で使った場あいは、もちろん第1段の例と言えようが、人が木から落ちた場あい、あるいは、サルが芸をしそこねた場あいなどに使われると、表現形式の基本的な意味とその場での臨時の意味との距離が半減し、実際にサルが木から落ちた場あいに使われれば、その両者がほとんど接触することになるので、それぞれの短縮幅に応じて比喩性も縮小する。この種の用法のおもしろさは比喩以外の表現技法の修辭効果と考えられ、この第3段の比喩に相当するケースとは別のものである。

第2編 比喩研究の諸問題

第4章 比喩的転換の諸相——実用的文章

第1節 比喩の働きと実用性

第1段 比喩的転換

比喩がたとえることであるなら、それが指標の付加という形式を踏もうと、異質な結合として現れようと、あるいは、表現全体がそっくり、その姿とは別のあるものを暗示していようと、そういった手つづきの違いにかかわらず、必ず何かから何かへの移行が行われていると思われる。とすれば、文章の表面的な流れは、そこでいったん切れ、思想上の補いを受けて、ふたたび流れだすことになる。その切れめだけを取りだしてみると、そこには観念上の乗りかえが見られるはずである。その際の観念の移行を「比喩的転換」と呼ぶことにする。しかし、一口に比喩的転換とは言っても、それを見る角度によって、その種類は一様ではない。短い文章の中に比喩がよく使われる典型としては、広告のキャッチフレーズがある。そこで、キャッチフレーズを実例にとって、比喩的転換の種類に関するその辺の事情を考えてみよう。

第2段 広告効果と比喩の効能

広告効果の説明に、「アイドマ」と呼ばれることばが使われることがある。これは、人びとがある商品の宣伝に接してから、その商品を実際に買うまでに通過するいろいろな段階をまとめて言う時のことばである。その過程を順にたどってみると、人びとは、新聞や雑誌の広告欄、ちらし、看板などを見たり、テレビのCMを見聞きしたり、ラジオや街頭のスピーカーから流れてくる宣伝の音声を耳に入れたり、他人がある商品について話している場に、たまたま居あわせたりする。このように、媒体を見たり聞いたりして、そこに何かの広告表現のあることに気づく段階が、まずある。次に、それが非常に魅力的であったり、ユニークであったり、あるいは、同じ商品に関する宣伝がいろいろな形で伝わってきたり、同じ広告にくりかえし出あったりして、そのことに注意が向き、また、興味を感じるようになる。そうなれば、やがてその内容を理解したり、それを記憶することにもなる。そして、それからある時間を経過した後に、その種の商品が必要になったり、何かほかの特別の刺激を受けたりして、連想などによって前の記憶が呼びおこされる。その商品がその際の必要を満たすことがわかると、欲しいと感じる。そして、最後に、その価格や

購入場所などの条件がかなえば、それを買う決心をする。もちろん、各人、また、それぞれに、いろいろな場あいがあるが、基本的なケースはこのようなパターンになろう。「アイドマ」というのは、この一連の過程から、「注意」・「興味」・「欲求」・「記憶」・「(購買)行動」という5段階を抽出して、それぞれに相当する英語、すなわち、attention, interest, desire, memory, action のかしら文字を並べてできた“AIDMA”を1語のように発音したものである(memoryの代わりに conviction「確信」を入れて「アイドカ」とする場あいもある)。

例えば、「日本の生んだ世界のマーク」といったスローガンが、そのうちの「興味」と「欲求」とに深くかかわるとすれば、例えば、「早い者勝ち」といったキャッチフレーズのほうは、主として、「注意」という部分に関係すると思われる。このようなキャッチフレーズに比喩表現がよく使われる理由は、次のように考えられよう。比喩には、相手の知らない事がらを伝えるのに、それと類似の事がらを持ちだして、それからの類推によって相手にわからせる、という働きが基本的にある。次に、今説明しようとする事がらと共通点があり、それよりもさらに程度の高い、時には極端に程度の高い事がらを、その代わりに持ちだすことによって、それを強調する働きがある。また、通常思いも寄らないことばの結びつきで、相手を驚かし、その関連を追求する方向に相手が想像力を働かせるようにし向ける刺激剤としての効力をも持つ。さらに、その特徴を詳細に説明する代わりに、そういった特徴をそなえた他の事がらを持ちだすことにより、必ずしも正確とは言いがたいが、しかし簡潔で要を得た表現を可能にする働きがある。このような点は、どれも、キャッチフレーズに欠かせない要素なのである。

さて、キャッチフレーズにはどのような比喩表現が見られるであろうか。比喩的轉換の種類を実例によって説明しよう。

第2節 カテゴリーの轉換

比喩是对比という性格を基本的に持っているので、何を何にたとえるかを見ていくと、あるカテゴリーから他のあるカテゴリーへの移行(第2章第2節第3段参照)が認められる。事実の割り方、つまり、事物・事象の区切り方を、十分に細かくし、非常に小さな枠を設けるなら、どの比喩表現にも、このカテゴリー間の移行が認められることになるが、ここでは、少しまとめて、比較的大はばな移行を「カテゴリーの轉換」として取りあげることにする。

第1段 物体から人間へ——文脈的轉換

そういう観点から見ると、まず目につくのが物体から人間へという轉換である。例えば、「ご飯たきの名人」(炊飯器)、「お台所の名コック」(パター)、「あなたの話題のプロデュー

サー) (週刊誌), 「ヘヤームードのデザイナー」(ヘアクリーム), 「ボーナスで奥様の有能な助手たちを」(電気器具), 「六年間のお友だち」(ランドセル)などは、その典型的な例である。「おしゃれで心臓がツヨイ」(冷蔵庫)も、「心臓がツヨイ」のは人間には限らないが、「おしゃれ」のほうは一応人間の特権と考えられるので、両者を並べたこの例も、全体としては同類と言えよう。「いってらっしゃい、あとは私が」(炊飯器)は、単に物体名を人間を表す名詞に置換したものではないが、出勤する夫を送りだす妻の玄関でのことばを思わせ、炊飯器を「私」という人間として扱ったもので、これも類例に数えることができる。

第2段 物体と人間——結合的転換

以上は、それぞれの物体をそのまま人間に移しかえた、いわば文脈的転換の場合であって、その表現自体の内部に破綻は見られないが、一方、その物体が表現面に現れたり、その物体をさす名詞の部分だけが人間に置き換わって、それに対する限定・修飾の部分がそのまま残ったり、あるいは、その置換の唐突さをやわらげ、わかりやすくするために、説明を加えたりしたために、表現面に慣用上または論理上の異常性が生じている例も少なくない。例えば、「ケースに入った秘書」(テープレコーダー)には、人間である秘書がケースに納まるという、常識を破る異常さが見られるし、「もう一つのベター-half」(ミン)では、「もう一人の」とせずに「もう一つの」としたところに、一心同体の配偶者という人間をさす「ベター-half」という語との結びつきの異常さが現れている。また、「手のひらの名解説者」(トランジスタ・ラジオ)も、「手のひら」に納まったり乗ったりするのは物体だけではないが、ともかく、人間でないことは明らかなので、人間である「解説者」との結びつきは異例である。この3例は、いずれも、表現手段としては、〈テープレコーダー〉や〈ミン〉や〈ラジオ〉という物体を〈秘書〉や〈ベター-half〉や〈解説者〉という人間に転換しながら、表現面では、「秘書」や「ベター-half」や「解説者」を「ケース入り」とか「一つ」とか「手のひらの」と説明することによって、逆に人間を物体扱いにした結果になった例である。また、「ボーナスの旅行案内」(銀行)は、〈ボーナス〉が〈旅行〉という人間行動を起こす、という前提の上に成った表現であり、「背広の休日返上」は、〈背広〉という物体にもふつうは人間なみの〈休日〉があるということを前提とした表現であり、表面にもそのことが「ボーナスの旅行」や「背広の休日」といった異常な結びつきとして反映した例である。「千円札も御満悦」(デパート)は、〈紙幣〉という物体を人間のように喜怒哀楽を感じて表情に表す、精神活動を営むものとして扱った例である。「音の素顔をキャッチする」の例もある。これは「素顔をキャッチする」の部分の結びつきにも非慣用性が感じられるが、おそらく「音をキャッチする」を土台とした表現で、「音」を「音の素顔」としたために、結果として生じた非慣用性であろうし、また、カメラの場合などでは「素顔をキャッチする」という表現も必ずしも非慣用的だとは言いきれないので、比喩性の中心は「音の素顔」の部分の結びつきにあると考えられる。単なる

「顔」であれば人間以外の動物にも当てはまるが、トラが面をかぶったり、ゾウが化粧したりすることは異例なので、「素顔」となれば一応人間に限定されよう。したがって、もし〈音〉を現象として抽象体に属させず、〈音波〉という物理的存在としての物体の枠で考えることができるなら、これも類例ということになるだろう。また、「栄養クリームといっしょにお寝みてください」や「どこへいらっしゃるにも〇〇はいつもおそばにいます」（レンタカー）も、人間扱いの例であり、「南極におとします」（ウィスキー）も、「おともする」主体が表面に出ないが、レンタカーの前例と同様に、この枠に納められよう。そのほか、物体に人間用の動詞を組み合わせた「ほほえむ口紅」や「考えるプラグ」といった例、物体だけではないが、ともかく物体を含む主語に人間用の述語を添えた「美人と洗粉は親友なり」のような例もある。

以上と逆に、人間を物体なみに扱った例としては、「独身男性は電化する」などがあげられる。これにも結合的轉換が見られる。

第3段 人体と物体・場所・人間

次に、物体を、人間そのものではなく、人間の部分、すなわち人体に置き換えた例としては、「テレビセットは体に似ています」や「モートルは生産の手」があり、後例の場合、は、「モートルは手だ」という比喩を基幹に、表面的には「生産の手」という慣用的でない結びつきも組みあわさっている。

これと逆に、人体の部分を物体化した例としては、「お口の中から真珠が光る」や「髪は《一生もの》の帽子です」などがある。

この人体の部分を、物体というよりは場所に置き換えた轉換例として、「のどは大切な体の玄関口」があげられ、「頭の中を交通整理」も、表現過程としては同類と言える。

人体の一部分を精神的行為を営む人間そのものとして扱った例としては、「肝臓が泣いている」、「髪が喜ぶ」、「毛髪だけが知っている」、「肌が知っている」（化粧品）、「脚は雄弁家です」などがあり、「ご自分の顔にプレゼント」（化粧品）も類例と言えよう。

第4段 動物・場所の擬人化

そのほか、人間にたとえているものを列挙しよう。

「〇〇毛布はネコもごぞんじ」の例は、〈知る〉という知覚や認識そのものは、何がしかの精神を持ちあわせ、それなりの知的な行為をなすうる「ネコ」にも結びつかないでもないが、それが「知る」という形をとらずに「ごぞんじ」という敬語表現になっている以上は、ネコを人間に見たてたものと考えられ、動物の擬人化の例とすべきだろう。

「お台所が深呼吸」（換気扇）の例は、「深呼吸」が問題で、イヌなどが走った後に激しい息づかいを見せることを「深呼吸」と称したり、腹式呼吸をそう呼んだりすれば、「深呼吸」は動物に広く見られるとも言えるが、少なくともそれを「台所」に結びつける表現

過程で、〈人間〉が頭にあったことは容易に想像できる。「ハワイが待っている」の例も、「待っている」を人間に限定できるかどうかは微妙である。例えば、仲のいい2匹のイヌが散歩している途中で、1匹が電柱に尿を引っかけの間、もう1匹がそのそばで足をとめ、それからまた、並んで走って行くこともありそうだ。しかし、それを「待っている」ととらえるのは人間であり、事実としては、ただ仲がいいから離れずにわきにいるだけなのかもしれない。「待つ」行為には〈時間〉の観念が必要であり、未来を想定することができて初めて「待つ」ことが可能なのだとすれば、言語を持たない動物にとって、何らかの期待を胸に、じっと堪えることは至難の業だろう。とすれば、どちらの例も、場所を人間化したものと解しても無理はないと考えられる。

第5段 準擬人化

次に、人間と限定するわけにはいかないが、少なくとも人間にたとえたともとれる例、つまり、慎重に言えば、人間を含めた〈動物〉に置き換えたことになる例をあげよう。

「音楽をつれて歩く」（トランジスタ・ラジオ）は、音楽という芸術を子どもやイヌなみに扱った例である。

「五秒ごとに涼風が首をふる」（扇風機）は、表現過程では、「扇風機が首をふる」という、物体を人間や動物なみに扱った、やや慣用的な比喻を土台とし、その〈扇風機〉という物体の部分、扇風機が起こす〈涼風〉そのものに移しかえたことにより、結果としての表現面では、「涼風が首をふる」という、自然現象を人間や動物に転換した形で実現した例と言えよう。

「大きな“散歩”が走ってる」（自動車）の例は、表現過程では、〈自動車〉という物体を〈散歩〉という人間行動に置き換え、実現した表現面では、その行為である「散歩」に、多分、徒歩による散歩よりも車でのドライブのほうが行動半径の点でスケールが大きいことを誇示するために、「大きな」という修飾語を加えたことにより、やや抽象的とも言える行為そのものを物体扱いにした転換が見られることになった一方、その「散歩」が、下じぎとした〈自動車〉との縁で、「走る」という動詞を述語として持ったことにより、さらに、〈行為〉が人間や動物なみに遇された転換をも、結果として、あわせ示すことになった例である、と考えられる。

「あなたの魅力は眠っている」や「家計はゆったりふとります」の例は、「魅力」とか「家計」といった抽象的な概念を、「眠る」とか「ふとる」といった人間や動物の性格をそなえたものに転換した比喻である。「良質」は幸を迎える」（化粧品）も、「良質」という抽象体の主語が、主として人間用である「迎える」という動詞を述語としてとっている点で類例と言えるが、ただ、この場合あいはい、「幸を迎える」という対象語と動詞との結びつきにも、やや慣用的ながら、「幸」という抽象体の人間なみの待遇が重ねあわされているところが少し違う。

「春を追い抜く」(自転車)という例もある。これは、〈春〉という抽象体を動くものとして扱ったと思われるが、〈動くもの〉は人間や動物以外にも、乗りものや機械類などがあるので、活喩的ではあっても特殊なケースと考えられ、その点で前例とは分かれる。

第6段 抽象体の物体化

そのほか、抽象体の具象化というレベルでまとめると、その類に属する例はきわめて多い。以上の例を除くと、中でも目だつのは、抽象体を物体扱いにした例である。例えば、「〇〇が冬を脱ぎました」(デパート)、「春の暖かさに手を通す」(衣料品)、「お好きな温度を着てねむる」(電気毛布)、「パパの愛情を着る」(衣料品)などは、「冬」とか「暖かさ」とか「温度」とか「愛情」とかいった抽象的なものを、「脱ぐ」とか「手を通す」とか「着る」といった着脱関係の意味を担った動詞の対象語の位置に配することによって、いずれも、抽象体を衣料品扱いにした例である。「ロンドンの秋を直送」(デパート)、「味を持ちあるく」(化学調味料)、「切れ味をお買上げ下さい」(電気カミソリ)、「産業の好況をお手わたしする」(銀行)などは、「秋」「味」「切れ味」「好況」といった抽象的な名詞を、「直送する」「持ちあるく」「買い上げる」「手わたす」といった他動詞の対象語とすることによって、物品のように扱った例である。「“経済”も添えて差し上げる」(衣料品)、「時間さしあげます」(タイムスイッチ)も、助詞の「を」は表面に出していないが、「経済」や「時間」という抽象的概念を表す名詞が、「添える」や「さしあげる」という他動詞に対して対象格にあることは明らかであり、前例と同類であると言っている。また、「まごころにリボンをかける」(デパート)も、「まごころ」という抽象名詞がヲ格に立っていない点を除けば、「かける」という他動詞の取りつけ先(「AをBにかける」は3単語から成り立つ「とりつけのむすびつき」を表す連語。奥田靖雄「を格の名詞と動詞とのくみあわせ(一)」〈教育国語〉12参照)となっているという意味での一種の対象性は認められるので、やはり同類であろう。なお、「健康の配達」(牛乳)という例もあるが、これは、表現過程では、〈牛乳〉という物体を〈健康〉そのものに置き換えた抽象化がまずあり、その結果実現した表現の現象面では、「配達する」の意味上の対象になっているので、抽象体の物体化という、前例と同様な転換の見られる例である。さらに、「アイデアが一杯つままった」(冷蔵庫)の例も、〈アイデア〉という思考的観念が「つままる」という動詞の主語に立っている点で、抽象体を物体扱いにしたと考えられる例である。「この薄さが正確に秒を刻む」(時計)も、「薄さ」という抽象的観念を表す主語が、「秒を刻む」という述語をとっている点では、それを機械やその部品として扱った感じを伴うので、やはり類例にあげられようが、ただ、この場合はいは、「秒を刻む」という慣用表現が、すでに、〈秒〉という時間観念を、「刻む」ための素材、あるいは、「刻みこもう」としているあるイメージを表す名詞の位置に立たせる比喩的転換の過程を経て成立したものである点と、この表現の骨ぐみだけをとった時に、「薄さが…刻む」という対応が、「刻む」という意志動詞はその主体として人間を予想

させるので、その意味での異常性を含んでいるという点とで、前例とは多少の相違もある。

「若さに魅力をカクテルする」(化粧品)の例は、「カクテル」という語がふつうは〈アルコール飲料〉について使われるので、〈若さ〉や〈魅力〉という抽象体を、物体のうち、そういった液体として扱った例になるだろう。

第7段 動植物化

「美しさがみのる」(化粧品)の例は、「美しさ」という抽象体の主語と「みのる」という植物用の動詞との組みあわせに基づく比喻で、抽象体を植物なみに扱った例である。

「ボクの仔馬」(自転車)や「お店の働き蜂」(自動車)は、物体のうちの〈乗りもの〉を動物に置き換えた転換の例である。

第3節 下位分類の諸観点

第1段 ^{たい}体の転換

以上あげてきた例は、事物・事象を人間・動物・植物・物体・抽象体に大分類した際にカテゴリー間の移行が見られる、いわば大きな転換の場あいである。しかし、そのような大はげな移行を伴わなくても、例えば、「試験場をパトロールする」のように、〈教師〉を〈警官〉や〈ガードマン〉なみに扱ったり、「ネコがさえずる」のように、〈ネコ〉を〈小鳥〉扱いにしたりする場あいがある。これらは人間とか動物とかいった大きな枠で見れば、その内部の移行であるが、厳密に言えば、やはりカテゴリーの転換であることに変わりはない。しかし、そのレベルが異なるので、それらとは一応区別して、人間どうし、動物どうしといった転換を抽出することも可能だろう。この段では、そのうちの物体どうしの転換を取りあげてみよう。

物体どうしの転換というのは、ある物体を他の物体にたとえることである。とすると、どういう物体をどういう物体に置き換えるかということになるが、それを個々の物体ごとに検討する前に、固体・液体・気体という物質の存在形態の3体を規準に分類する観点もありえよう。

まず、固体を液体なみに扱った例としては、すでに慣用的となった「スッと流れるような感じ」(自動車)の例をあげることもできようが、「流れる」が本来は液体用の動詞であるとしても、気体についても慣用的に使われるし、また、この例では特に「スッと」という連用修飾を伴うので、典型的な例とは言えない。なお、帽子やモモのような固体でも「流れる」ことはあるが、その場あいは、それらの「流れる」場所のほうは川のようなものに限定され、やはり何らかの意味で液体とのつながりを保っている。そして、この例では、自動車を液体扱いにしたと考えるよりも、そのような「流される」帽子やモモなみに扱われていると考えるほうが自然かもしれない。もしそう解せるなら、この場あいは、道路が

川扱いされたことになり、むしろ典型的な液体化の例となろう。

固体を気体にたとえた例としては、「風を着るようです」(衣料品)があげられる。

また、液体を固体に置き換えたものは、「果実のように美しい」(ジュース)、「一滴一滴が宝石のように輝きます」(ウィスキー)、「絹のしなやかさ、ビロードのつや」(シャンプー)、「五分ごとにおしぼりで拭いているのと同じ」(化粧品)など、例が多い。ただし、最後の2例は問題がある。すなわち、前者はシャンプーには粉末や半ねり状のものもあるからだけではなく、絹やビロードと対比されているのはシャンプー自体であるよりもそのシャンプーで洗った後の毛髪だからであり、後者では、「化粧品」が化粧水をさすとしても、それをそのまま「おしぼり」に移行したというより、厳密に言えば、「化粧水をつけること」と「おしぼりで拭くこと」との類似を取りあげているわけで、そういった行為どうしの転換と解することもできるからである。指摘に重点を置くこの章の性格上、その辺の深入りはしない。

次に、液体を気体にたとえた例としては、「空」を、宇宙全体とか遠い真空空間とかでなく、単に地面の上方の空間として比較的近い部分の意にとれば、「さわやかな空気」の連想が強い「五月の空を飲むようです」(ジュース)をあげることができよう。

なお、キャッチフレーズからの実例とすると、宣伝商品に気体が少ないため、逆に気体を固体や液体にたとえた例はほとんど見あたらない。

以上、物体どうしの転換を3体に分けて例をあげてきたが、こういった体の転換も見られない、いわばもっと幅の小さい転換の場あいももちろんある。例えば、「まるで白い家具みたい」(冷蔵庫)や「ドリルのように」(貼り薬)は固体どうしの例であり、「熱帯の雨の如き爽快さ」(ラム酒)は液体どうしの例と言える。「茶の間の図書館」(週刊誌)は、「図書館」を場所ではなく建造物と考えれば、表現過程では、「週刊誌」を「図書館」に置き換えた固体どうしの転換ということになり、実現した表現面では、「茶の間の」との関係で、「図書館」を家具扱いにした、もう一つ別の固体どうしの転換がからんでいる例と解することができるだろう。

「人体の肥料」(栄養剤)や「胃の中の繻帯」(医薬品)も微妙な例である。前者は、表現過程で、〈人体：栄養剤≒植物：肥料〉という比例式を土台として、「栄養剤」を「肥料」に移行したものであり、栄養剤と肥料とが固体であるか液体であるかによって、固体から液体へとも、その逆の移行とも、あるいは、そのような体の転換がなかったとも解せるが、固体や液体から他の固体や液体へという転換の結果、表現面で、人体の植物扱いというカテゴリーの転換が実現した、と考えるのが妥当だろう。後者は、「医薬品」が固体と液体の両方を含むので、〈体〉のレベルでの転換は明確でない。

第2段 感覚の転換

今述べた〈体〉の転換は、カテゴリーの転換の一部の下位分類とも考えられるが、それ

らとは別に、カテゴリーの転換を、以上のような事物・事象の存在形式ではなく、他の規準で分類する観点もありうる。その一つの視角として、ある感覚系統から別の感覚系統への移行という面を取りあげ、それを「感覚の転換」と呼んで検討してみよう。

キャッチフレーズの実例をそういう角度から扱うと、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚のうち、用例の多いのは、宣伝の対象になる商品に飲食物が多いためか、味覚を他の感覚に移したものである。例えば、「ビールはのどできく音楽」、「そのハイボールは近代音楽の味」(ウイスキー)、「お口の中のワルツ」(ガム)、「食卓に流れるおいしいメロディー」(つけもの)などは、味覚を聴覚に置き換えたものであり、「ピロードの舌ざわり」(ウイスキー)、「そよかぜのおいしさ」(清涼飲料)、「涼風をのどで味わう」(ビール)などは、味覚を触覚に置き換えたものであり、「目に見える味」(しょうゆ)や「うまさがおどる」(ジュース)、「まるいにがみ」(ビール)などは、味覚を視覚に置き換えた例である。「青い空をスイスイとんでるみたいにおいしいんだ」(清涼飲料)は、味覚を視覚と触覚との融合した感覚に転換した例と考えることができよう。

次に目だつのは、香水などの化粧品や、かおりが生命であるコーヒーやウイスキーのような飲みものなどの宣伝に多い、嗅覚から他の感覚、特に聴覚への転換である。例えば、「ストレートは古典音楽のかおり」だとか、「香りは心の調べ」だとか、「夢誘う香りのハーモニー」などは、嗅覚を聴覚に転換した例であり、「殿方のハートに滲みるやるせない香り」などは、嗅覚を触覚に移行した例であろう。「この香りはみどりの風がバラ園からはこんでくる5月の詩」は、「みどりの風」、「風がはこぶ」、「詩をはこぶ」、「バラ園から詩を」などの比喩的な結合が随所に見られる濃厚な表現であるが、その中心は、結局、「香りは詩だ」という発想にあると思われるので、味覚を視覚と聴覚の入り交じった感覚としてとらえた転換が基底になっていると言えよう。

そのほか、「ミドリが肌にしみる」(化粧品)は、色彩を「しみる」ととらえた視覚から触覚への転換の例であり、「風にのってくる色彩のシンフォニー」(テレビ)は、後半の結合が視覚から聴覚への転換となって現れた例である。

また、「見える! 旋律」(テレビ)は、音楽の中心的な要素である〈旋律〉を「見える」という可視的存在に遇した、聴覚から視覚への転換例であり、やや慣用的な「シルクトーン」という表現は、ある音質を〈絹の肌ざわり〉との類似でとらえるという聴覚から触覚への転換を基礎として成立したものであろう。

なお、「チョッピリでも人生をオイシクする——一円から出し入れ自由」(銀行)の例は、〈人生〉を飲食物なみに扱ったものであり、この観点からすれば、いわば総合知覚を味覚に転じたものと考えられることもできよう。

第3段 界の転換

カテゴリーの転換を見るもう一つの視角として、あるものを何かにととえる際に、どう

いう世界にそのたとえを求めるか、という点を取りあげてみよう。もちろん、あらゆる事物・事象をいくつかの界に峻別することは思いも及ばないので、比較的はっきりしている場あいをいくつか指摘するにとどめる。

例が多いということで最初に目につくのは〈交通関係〉である。例えば、「預金のヘリコプター」(銀行)、「涼しさの特別便」(クーラー)、「爽快さ“こだま”級」(歯みがき)などは、乗りものに材を求めた例であり、「マッハを写す」(カメラ)も超音速機を連想させる意味で同類だし、「音の国際空港」(ラジオ)も類例と言えよう。また、「植える一方交通」(銀行)、「北風も通行止」(衣料品)、「オフィスにスピード制限はない」(複写機)などは交通規則に関するものであり、「暮しの中の“安全地帯”」(銀行)や「お話の交通整理をします」(電話交換機)も同種の例である。

〈音楽関係〉にたとえた例も多い。例えば、「味の名指揮者」(しょうゆ)、「きれのよいタッチがたたきだす酔い、〇〇はいきなピアノストさ」(ウイスキー)、「オシャレとタフのデュエット」(衣料品)、「秋への序曲」(デパート)、「生活のうたをかなでる」(ミシン)、「陽に咲き雨に歌う傘」などがそれである。

〈スポーツ界〉に材をとった例も多い。例えば、「安値の五種競技」や「安全なコースで確実なゴールへ」(銀行)などは陸上競技の関係であり、「滋養大関」や「お買物の名行司」(秤)や「砂っかぶりのマス席さながら」(テレビ)などは相撲関係、「満塁ホームのよような味」(ビール)や「酔いざめはクリーンヒットの爽快さ」(ウイスキー)や「電波の名キャッチャー」(ラジオ)や「まるでネット裏の特別席」(テレビ)などは野球関係、「カメラのボーナス選手」も、「ボーナスプレイヤー」という語の適用範囲はともかく、おそらく野球を意識した表現であろう。また、「KOパンチのそう快な味」(ウイスキー)はもちろんボクシング関係の例であり、「山でいえばヒマラヤ級」(テレビ)は、この観点からは、登山関係の例と考えることもできよう。

なお、「特ダネを着る感じ」(衣料品)の例は、物体を抽象体に置き換えたものであるが、この観点からすれば、マスコミ界に材をとった例ということになるだろう。

第4段 関係の移行

何かを何かにとえる時、単に、ある事物・事象が他の事物・事象に置き換えられるのではなく、あるものと他のあるものとの関係をそっくり、別のあるものと他の何かとの関係に移行したり、あるいは、少なくとも、前者の関係をを利用して後者の関係を導いたりする場あいもある。もちろん、根本的に考えるなら、比喩はすべて関係の移行に基づくとも言える。例えば、「考えが泉のようにわき出る」という比喩表現にしても、単に〈考え〉と〈泉〉とが対比され、その類似に基づいて転換が起こったように見えるが、実は、その奥で、「頭脳から考えが出てくる」という全体と、「地面から泉がわき出す」という全体との対比がなされているのであり、そのかぎりでは、いわば〈考え：頭脳＝泉：地面〉とい

った比例式があって、それが表現過程で単純化し、結果として、あたかも〈考え：泉〉であるかのような形で実現したのだ、と考えることもできるのである。ただし、ここで「関係の移行」と呼んで取りあげようとするのは、そういった比喩一般の性格に関する基本的な機構の指摘ではなく、言語表現面に明確に反映している場あいである。

例えば、「胃病に〇〇、泣く子に乳」（医薬品）というのがある。これを抽象化して表すと、 $\langle A : A' \equiv B : B' \rangle$ という形式になると考えられるが、この場あいは、右辺のBとB'との慣用的な結びつきを利用して、左辺のAとA'との関係をも慣用化しようとしたものと言えよう。具体的に言えば、〈泣く子〉に〈乳〉が有効であるという世間に広く認められた慣用的事実を踏まえて、〈胃病〉に対する〈〇〇〉（薬品名）の関係もそれと同じだという配列形式をとることによって、その新しい関係を正当化し、まるで、〈泣く子〉と〈乳〉との関係と同程度の必然的な結びつきであるかのような印象を与えて、極端に言えば、自明の事実と思いきませようと図ったものである。そして、「 $A = A', B = B'$ 」という対句的な形式がその効果を側面から助長していることも無視できない。

もう1例あげると、「からだのコリは〇〇で、心のコリは浪曲で」（貼り薬）というのがある。記号で表すと、 $\langle A_1/B : C \equiv A_2/B' : D \rangle$ ということになるだろう。具体的に言えば、〈からだのコリ〉に対する〇〇と、〈心のコリ〉に対する浪曲とを対比させ、それぞれのコリを解きはぐすのに、ともに同程度に有効であると主張したものである。この場あいの直接の比喩性は「心のコリ」という部分にあり、〈心〉という精神活動に関する抽象体を〈筋肉〉という人体部分なみの扱いをしたことによりかかっているように、その表現を成立させる契機として、「からだ」と「心」とがよく対比的に用いられる関係にあることが働いたと考えられるし、その表現が比較的素直に受けとられるのには、 A_2 の「コリ」が A_1 の「コリ」のすでに慣用化した「ずらし」であることが一役買っていると思われ、その両者が相まって、一見何の関係もない「〇〇」と「浪曲」とを、つまり、宣伝商品と提供番組とを、まるで対をなすかのように関連づけたものと見られる。また、前例と同様、この場あいも、「 $B \wedge A_1 \wedge C \text{デ}, B' \wedge A_2 \wedge D \text{デ}$ 」という対句的な形式に、表現を印象づける効果の一面が支えられていることは否定できない。

第4節 内容的分類の必要と困難

以上、いろいろな角度から比喩表現における転換のあり方を検討してきたが、いずれも思いつきの域をあまり出るものではない。その観点も、分類規準も、類立ても、該当する用例の種類にしても、どれ一つ網羅的ではない。そして、取りあげてきたそれぞれの角度の間も系統的であるとはいいがたい。

しかし、この章で扱った問題は重要だし、個々の言及にも、いつかは本格的に取り組まなければならないいくつかの点の指摘があったはずである。ここでのねらいは、そういっ

た指摘自体にあった、ということもできる。もちろん、そこには、指摘にとどまらざるをえない事情、つまり、比喩研究の現状、ひいては、その一方の基礎になる現代語彙の用法研究の到達段階が、例えば、「ほとぼしる」「漂う」「流れる」の主体に何と何が来たら語義に即した用法であり、どこからが比喩に移行する臨時の用法なのか、といった、この面の考察の準備的資料となる基礎的な成果を十分に提供できないために、その本格的なアプローチや客観的・学問的な分析に取りかかるのは時期尚早であるという、いわば外的な条件も働いていたことは疑えないが、比喩研究上のいわば内的な必然性もなかったわけではない。すなわち、比喩表現の分類を仮に形式的分類と内容的分類とに大きく二分するとすれば、この比喩的轉換の考察は後者にかかわるものであるが、比喩の研究は、まず、何が比喩であり、それは他の表現とどこがどう違うのか、といったあたりから出発すべきだという意味で、表現形式の言語的な性格を規準とした分類が、そこにどのような比喩が実現しているかという思考上の特性を規準とした内容的分類に先行する必要があったのである。とは言っても、内容的分類が形式的分類の下位区分をなすと考えているわけではない。両者はいわば縦軸と横軸のような関係になり、個々の比喩表現例はその座標として位置づけられるはずである。ただ、その内容的分類をできるだけ言語形式との対応をつけることによって客観性を増すために、まず、比喩表現はどのような形で現れ、そこにどういふ比喩性が実現しているか、という順に考察を進めるのが有効だと考えたまでのことである。

このように、作業手順としてはあるが、ともかく、本書では、表現形式の言語的な性格を規準とした分類が、実践としては、中心的位置を占めている。しかし、比喩表現の分類作業はそこで完結するのではなく、二分したもう一方の内容的な分類と総合させる必要があるので、言語形式に基づく分類を正當に位置づけるとともに、内容的分類の一つの視角である〈比喩的轉換〉の考察を予備的に試みることによって、問題の所在を指摘しようと考えたわけである。

第5章 比喩効果の分析——芸術的文章

第1節 文学における比喩考察の観点

比喩があらゆるジャンルの文章に見られる言語表現一般に関する技法であることは、あらためて言うまでもないが、第1章にも述べたように、特に文学とのかかわりは深い。そこで、この節では、文学研究において比喩表現を扱うにはどのような面の考察が必要であり、また、どのような観点や方法が考えられるか、といったあたりを論じた後、文学作品からの実例を分析した一つの試みを提示しておきたい。

ある作品がどのような比喩をどう使用することによってどのような表現効果をあげているかを調べる観点も当然ありうるが、それはあくまでその作品の言語的性格を決める一つの視角なのであって、その中に過不足なく位置づける必要があるという意味で、比喩表現だけを単独に取りあげる意義はそれだけ弱いことになる。他から独立した比喩表現の分析が、文学研究において、より多くの有効性を期待できるのは、それが作家論へと向かう時であろう。その作家論を志向した比喩表現の調査・研究には、少なくとも次のような面の考察が必要だと考えられる。

第1段 比喩表現量

第1点は、夏目漱石とか三島由紀夫とか、自分がこれから取りあげて扱おうとしている対象作家の作品に現れる比喩表現の全量を調べ、それを、例えば小説というジャンルにおける平均的数値といった、何かの標準に照らしあわせることによって、その作家を研究する際に比喩表現を取りあげることの意義を量的な面から明らかにすることである。むろん、用例の数は少なくとも、作品の文学性や、時にはその存立にも関与する重要な例が含まれている場あいがあって、使用頻度がそのまま調査意義の大きさを反映するわけではないが、逆に使用頻度が著しく大きければ、その作家が何らかの意味でその技法によりかかる面のあることを示すだろう。このように、必ずしも正確とは言いがたいが、質的検討に取りかかる前に、まずその大すじをつかんで以後の考察方向の見当をつける上で、この面の調査は、そこにとどまらないかぎり、基礎的な役わりを果たすものと言えよう。

第2段 比喩使用の分布

第2点は、当該作家、つまり谷崎潤一郎なら谷崎潤一郎の、比喩使用の割あいを作品ごとに調べ、その分布における偏向、例えば、全期を通じてかなりの使用率を示し、作品ごとの出入りが少ないとか、概して初期の作品で高い使用率を示し、『細雪』あたりからはきわめて少なくなるとか、『刺青』という作品だけが飛びぬけて多く、他の作品では平均

しているとかいった点を明らかにすることによって、この表現技法がその作家の方法とかわる面の考察に一つの手がかりをつかむことである。

第3段 喩詞の分析

第3点は、喩詞つまり「AのようなB」や「BはAのようだ」のAに当たる、たとえるほうのことばを中心にあげて分類し、それが感覚系統や範疇の上でどのような分布を示しているかを調べ、そこから、ある感覚系統、ある特定の範疇に偏向が見られれば、その作家のイメージの傾向を探ることである。例えば、触覚的喩詞が異常に多かったり、〈母〉や〈海〉に関する喩詞が頻出したりすることは、作品のイメージや作家の方法にとってけっして無関係ではないと考えられるからである。

第4段 被喩詞の分析

第4点は、逆に「AのようなB」や「BはAのようだ」のBに当たる、たとえられるほうのことばを中心にあげて分類し、どのような事物・事象の形容において、どのような比喩技法によりかかる傾向が見られるかを調べることである。これは、作家論においては、第3点の喩詞の性格の検討ほどの重要性はないが、それでも、ことに作品論においては、例えば、女性の〈唇〉の描写に限って極度の比喩表現が使われるとか、信仰に傾く心理分析の部分にだけ隠喩表現が現れるとかいった事実がおさえられるなら、その作品を解明する一つの突破口ともなると考えられるからである。

第5段 喩詞から見た被喩詞の性格

第5点は、喩詞を中心に、それがその場で臨時に表している事実との結びつきを調べ、ある喩詞がどういう事物・事象に対して用いられるかを探りだして、その表現効果上の意味づけを行うことである。例えば、「悪魔のような」という表現を、政治家について用いる作家と、幼児に対して用いる作家とは、その他の面でも質的な違いがあることを予想させるし、「目刺し」という喩詞を〈老婆〉について使い（志賀の前掲例）、「へビ」で〈刑事〉をさす作家と、「夢」という喩詞を〈舞踊〉について使い（川端康成『舞姫』）、「おとぎの国」という表現で〈新婚生活〉をさす作家とがあれば、やはりそのベースとなった何らかの差異の一つの反映と見ることができるだろう。

第6段 被喩詞から見た喩詞の性格

第6点は、逆に、たとえを受けるほうのことばを中心に、それと喩詞との結びつきを調べ、今度は、ある事物・事象に対してどういう喩詞が用いられるかを調べることによって、その事実をその作家の文学の方法の上に意味づけることである。例えば、〈女性〉を〈天女〉ととらえる作家と〈海綿〉ととらえる作家とは明らかに質的な違いがあるはずだし、

〈キツネ〉を〈神の御つかい〉ととらえる作家と、〈神〉を〈脳のひだに巣くう人工の虫〉ととらえる作家とがあるとするば、たとえることばにも、たとえられることばにも、対比の規準となる共通の支点は見あたらぬものの、それぞれの表現の奥に潜む、独自の世界観に裏うちされたその作家なりの方法の差異を、やはり、何ほどこか暗示する事実と見ることができらる。

第7段 各面の連関と分析例の性格

作家論へと向かう場あいの比喩研究の観点はまだほかにもありうるが、ここでの中心テーマではないので、このぐらゐの指摘でとめておこう。ただ、重要なことは、それらのうちのどの観点も、どれが有効かという選択肢として並んでいるのではなく、それぞれが、互いに他との連関において、文学研究の方法としての意味を持ちうるのだということである。ともかく、この比喩表現は、その作家の対象のとらえ方、ないしは、その思考方式を端的に示すものであり、特に、第5点と第6点としてあげた観点での調査の結果、たとえるものとたとえられるものとの間に、慣用的に固定したもの以外で、頻度の高い組み合わせが見いだされれば、その作家なり作品なりを解明する一つの有力な糸口となる期待もある。

この章で提示しようとしている分析例は、今掲げた観点のうち、第1点と第2点とに、その試みの意義づけ・方向づけとして、軽くふれた上で、第3点を心象研究ふうに扱ったものである。第4点をおいて第3点を中心に整理したのは、次のような理由による。BをAにたとえる場あい、Bのほうは、作品の筋を運ぶ論理的な要素なので、そのテーマや題材からの要請を受けて、どうしても現実の相を呈しやす傾向があるが、Aのほうは、それに対する一種の形容であるから、作品の展開や文脈によって必然的に規制されることがない。そして、前後の意味と無関係に現れうるということは、極言すれば、どういふ表現をとろうと自由だということであり、そこは、いわば作者の想像の世界がかいま見える窓であって、それだけに、表現主体の個性の出やすい場だと考えられる。そこで、喩詞を中心にまとめる作業が優先すべきだと判断したのである。

また、作家としては、次節に述べる理由で、比喩表現面の考察が大きな意義を持つと予想される川端康成を取りあげ、これも次節に述べる理由で、形式的にとらえやすい指標をそなえた比喩表現のうち、いわゆる直喩に類する部分に、考察対象の焦点を絞ることにする。

第2節 調査の意義と使用率

第1段 比喩に満ちた文章例

まず、次の文章を読んでみよう。

言問橋を染めた桃色の朝日の中には、昨晚の尿のあとがだんだら模様だ。しかし隅田公園は大地に描いた設計図のやうに、装飾が少なく、清潔なHだ。

川端康成の比喩表現と言う時に、『雪国』の軟体のヒロイン駒子の「美しい血の蛭の輪のやうに滑らかな唇」と並んで、すぐに頭に浮かんでくる『浅草紅団』の「ドイツ狼犬」中の一節である。この種の文章が比喩的表現に著しくよりにかかっていることは事実であろう。だが、そこに現れるあらゆる比喩的關係を一つ残らず抜きだして、用いられた比喩技法はこれとこれとこれですべてである、という形の指摘を精確に行おうとすると、わずかにこの程度の文章量においてさえ、まさに至難の業となる。隅田公園が「設計図のやう」であり、また、「Hだ」となっている点を指さすまでは容易であるが、朝日が橋を染めるのはどうなのか、「尿の跡」を「だんだら模様」ととらえるのはどうなのか、「大地に描いた設計図」の部分はどうか、公園に装飾が少ないとする点はどうなのか、「清潔な」と「H」との結びつきはどうか、といったあたりになると、問題なく処理できるところまで、比喩とその周辺に関する研究の段階が達していない、とするのが正直なところだろう。したがって、ここでは、まず、形式的にとらえやすい指標を手がかりにできる比喩表現、すなわち、いわゆる直喩の典型的な表現例を扱うことにする。しかし、ともかく、ここに掲げた文章の生命が多様な比喩的な表現に支えられていることは確かであろう。

第2段 比喩依存度と使用率

これだけの文章例からも、川端康成という作家が比喩的表現に満ちた文章をつづる傾向はうかがわれようが、もう一つ、別の面から、その文章と比喩とのかかわりの深さを示そう。それは使用率である。

一般に、ある技法が頻出する場あいはいは〈表現〉すなわち「意図的なあらわれ」であり、逆に、使用度が比較的少ない場あいはいは〈流露〉すなわち「自然なあらわれ」である、と予想することもできよう。つまり、修辭意識の度あいという問題があるはずである。そして、流露の場あいのほうが、表現の場あいと比べて、その作家の人生観・世界観がより素直に反映している、と見ることも可能だろう。とすれば、作家を性格的にとらえるには、そこを区別して扱うことが望ましいわけであるが、両者の峻別はむずかしい。それに、受容主体側から見れば、表現か流露かとは無関係に、ただそういう性格の言語形式として接触するだけである。そこで、その問題を捨象してしまうと、今度は、一般に、比喩使用の多い作家は、それだけその技法に比重をかけており、その作品もそれだけ比喩表現に負うところが大きい、という推論が立つと思われる。そして、この推論が正しければ、比喩表現例の多い作品や作家に対するこの方面からのアプローチは、それだけ大きな意義を担うわけである。そのような意味でも、ともかく、当の作家において、比喩表現の考究がどの程度の有縁性を持つかをつかむために、その使用率をひととおりにおさえておく必要はあろう。

第3段 文章心理学の使用率調査

安本美典が、口語体小説家100人について、各作家1編ずつの作品を選び、400字づめ原稿用紙30枚ほどの分量を調査した結果（『文章心理学の新領域』『文章心理学入門』など）によると、川端康成の『雪国』の直喩使用率は、調査対象になった計100編の作品中、梅崎春生の『桜島』と並んで、多いほうから9番目に位置している。ということは、もし、その調査量がそういった目的を達成するのに十分な大きさであり、また、直喩表現の出現が、同一作家内での作品による揺れの十分に小さなものだとするならば、川端康成は直喩表現を多用する作家のベストテンに入る、ということをおこの調査結果は示しているのである。

第4段 検証調査の方法

そこで、その点を検証もしくは確認するために、そのうちの6人の作家を新たに取りあげ、それぞれの作家から数作品を選びだして、全量調査を試みた結果を示そう。

この場合の使用率は次の形で算出したものである。方法を簡便にし、かつ、判定をできるだけ客観的に行うために、比喩表現の現代における代表的な形式で、また、事実、比喩表現の最も多くの部分を占める（第2部を参照）、指標「よう」を用いた名詞対応のいわゆる直喩だけを取りあげ、それに該当する表現例が400字づめ原稿用紙平均何枚につき1例の割合で現れるかを調べて計算し、それを枚数を示す数字で表すことにした。したがって、数字の小さい作品・作家ほど出現率が高いことになる。ただし、この場合はいわゆる高頻度に出現する代表的な形式であっても、直喩の一部分だけの調査である関係上、直喩のすべてではないにせよそのかなりの部分を覆う安本調査の結果よりも、使用率が当然低くなるが、作品や作家間の比較を不能にするほど大きな障害にはならないと思われる。もう少し正確に言えば、比喩表現一般を対象とする際には一つの参考資料の域を脱しえないだろうが、いわゆる直喩をよく使用する作家であるかどうか、また、直喩的な表現の多い作品であるかどうか、という点の見当づけには、この簡便な方法でも、かなり有力な資料を得ることができるだろう、ということである。

なお、この小調査に用いたテキストについて一言ふれておこう。今回扱った6作家のうち、川端康成の場合だけは新潮社版の個人全集を中心にして単行本で補い、他はいずれも筑摩書房版『現代日本文学全集』のそれぞれの作家の巻によった。

第5段 使用率調査の結果

調査結果は次のとおりである。

谷崎潤一郎	平均	8.9	蓼喰ふ虫	6.1
痴人の愛		6.0	春琴抄	10.6
朧		25.6	刺青	2.9

細雪		200.0	和解		∞
芥川龍之介	平均	4.5	焚火		11.0
羅生門		1.1	雨蛙		25.0
鼻		2.7	矢島柳堂		4.4
芋粥		3.1	邦子		∞
或日の大石内蔵助		∞	豊年虫		3.0
戯作三昧		5.7	兎		6.0
蜘蛛の糸		0.7	武者小路実篤	平均	18.4
地獄変		2.8	お目出たき人		15.7
枯野抄		10.0	幸福者		20.7
蜜柑		2.3	友情		11.2
秋		10.0	愛と死		81.0
杜子春		2.5	真理先生		17.6
藪の中		7.7	横光利一	平均	2.4
お富の貞操		4.0	上海		2.5
湖南の扇		6.3	機械		18.3
点鬼簿		12.0	時間		4.5
玄鶴山房		11.3	日輪		1.5
蜚気楼		4.7	川端康成	平均	8.3
河童		7.7	伊豆の踊子		7.7
歯車		4.9	化粧と口笛		5.1
志賀直哉	平均	13.3	雪国		6.0
暗夜行路		11.2	女性開眼		17.8
網走まで		∞	名人		23.4
大津順吉		∞	虹いくたび		11.7
正義派		7.0	千羽鶴		20.8
清兵衛と瓢箪		∞	山の音		25.0
城の崎にて		10.0	みづうみ		12.2
赤西彌太		34.0	東京の人		2.1

数値欄に∞とあるのは「無限大」（分母がゼロに近い）の意味で、該当する用例の見あたらなかったことを示す。

なお、以上は全量調査であるが、『細雪』の場あいだけは、長編であるにもかかわらず、求める例がほとんど得られないので、原稿用紙200枚分までで調査をうち切った。したがって、作品全編の実態を忠実に写しているとは必ずしも言えないが、ともかく、作品の初めのほうは、この作家の初期作品とは違って、少なくともこの形式の比喩表現をほとんど

使っていないことを示す。

また、作家別の平均数値は、作品ごとの数値の平均としてではなく、全調査範囲を原稿用紙に換算した枚数を、求める形式の直喩表現の出現回数で割って得たものである。したがって、蔽密に言えば、長い作品ほど影響力が強いわけであるが、およその傾向をつかむことはできるだろう。

第6段 結果の解釈

それでは、この調査結果からどんなことがわかるだろうか。もちろん、前述の調査法上の制約があって、決定的な情報価値を持つものではないから、断定は控えねばならないが、少なくとも、次のような傾向のあるらしいことを予想させる。

第1点は、谷崎潤一郎における『刺青』と『細雪』との場あい極端な例だとしても、直喩表現の多少は必ずしも作家によって一定していない、ということである。つまり、直喩を使用する割合が作品によってかなり差のある作家が珍しくないのである。

第2点は、作家活動の初期に書かれた作品に、概して直喩表現が豊富に見られることである。と言っても、中期や晩年の作に一般に少ないという意味ではない。作品とか執筆時期とかによる差異は作家によっていろいろだが、ともかくも、初期の作品にはその種の直喩表現が比較の数おおく現れる、という傾向がうかがわれるのである。

第3点は、川端康成の『東京の人』を例外とすれば、一般に、長編の作品のほうがこの種の直喩表現の出現率が平均的に低い、という傾向が見えることである。もし、これが事実だということが、もう少し精密な本格的調査によって裏づけられれば、短編のほうが、すみずみにまで神経がゆき届き、それだけ表現効果を意識した密度の高い文章になる可能性の強い傾向があることを、おそらく、常識的にあわせ考えることができるだろう。そして、もしそうなれば、この場あいの例外である『東京の人』は、この作家の他の作品に比べて、より多くの読者を意識した、いわゆる大衆性のより強い作品であるために、この作家としてはやや安易な比喩表現が現れた、という推論によって説明することも可能かもしれない。いずれにせよ、このような量的な現象の解釈には質的な検討を伴う必要がある。

第4点は、今回の小調査の対象となった6人の作家間における対比で言えば、横光利一と芥川龍之介はこの形式の直喩表現を著しく多用したと見られ、逆に、武者小路実篤は少ないほうの代表で、志賀直哉も少ないほうに入る、と推察されることである。

第5点は、横光利一の『日輪』と『機械』のように、使用率が作品によってははなはだしく違う場あいは、少くとも一方が、その作家の実験的な作品であったという一つの証左であり、こういった作家にあっては、この種の比喩表現の使用も極度に意図的であった、と推察されることである。

第6点は、この小調査における武者小路実篤のように、この形式の直喩表現が頻出する作品が1例も存在しない場あいは、その作家がそういった技法にほとんどよいかからない

形で文学を展開していることを示すと思われることである。

まだほかにもいくつかのヒントが含まれていると思われるが、直接の研究テーマではないので、このくらいにしておく。

そして、当の川端康成に関しては、この種の比喩表現例の乏しい作品がほとんどないこと、芥川龍之介や横光利一の場合あいほどではないにしても、出現率のかなり高い作品の多いことなど、比喩表現、少なくともこの種の直喩表現とのかかわりの深さを示すデータとなっている。したがって、この作家の比喩表現を取りあげる意味は、量的な面からも、十分に認められるわけである

第3節 作品の底を流れるイメージ

そこで、川端康成の諸作品から、前述のように、指標「よう」を用いた名詞対応の考えられる形式の直喩表現の具体例を集め、喩詞の性質による分類を施すことにする。

テキストは、新潮社版の個人全集を中心にし、改造社版の個人選集と単行本とで補った。調査対象として取りあげたのは、筑摩書房版の『現代日本文学年表』に記載された川端康成の作品のうち、調査時点で実作品に直接当たることのできなかつた次の10編を除く全作品である。

『旅の者』『寝顔』『これを見し時』『一草一花』『女の手』『再婚者の手記』『夜の声』『月下の門』『女であること』『涼み台』

そして、実際に調査した計37編の作品を、発表開始時期の早い順に列挙すると、次のようになる。

1923年 『葬式の名人』	1935年 『雪国』『童謡』
1924年 『篝火』	1936年 『花のワルツ』
1925年 『蛙往生』『十六歳の日記』『白い満月』	1937年 『牧歌』『高原』
1926年 『伊豆の踊子』	1940年 『夜のさいころ』
1928年 『死者の書』	1946年 『再会』『さざん花』
1929年 『死体紹介人』『温泉宿』『浅草紅団』	1948年 『少年』
1930年 『花ある写真』『水晶幻想』	1949年 『山の音』『千羽鶴』
1932年 『抒情歌』『それを見た人達』『浅草の九官鳥』『慰霊歌』	1950年 『舞姫』
1933年 『禽獣』『散りぬるを』	1952年 『日も月も』『名人』『明月』
	1953年 『再婚者』
	1954年 『みづうみ』
	1955年 『東京の人』『故郷』

さて、喩詞、つまり、たとえるほうのことばは、前述のように、その表現主体である作者という人間の想像の世界をのぞく一つの窓であるが、作品と読者との2項間においても、

イメージ形成の上で、やはり確かな役わりを演ずるものと考えられる。例えば、「うろたえた野鳥のはばたきのような息遣い」（安部公房『他人の顔』）という表現に接した受容主体が、〈野鳥のはばたき〉の視覚的・聴覚的な像しか結びえなかったならば、その小説の筋の展開を論理的にたどることができないわけで、作品理解は成り立たないが、一方、〈荒い息づかい〉の形象を得たとしても、その一般的な像にとどまるかぎりには、やはり、論理的な情報がそのすべてではない文芸作品としての小説の受容において、少なくとも鑑賞の面での欠如は大きい。つまり、作品の表現は、読者が、まず〈荒あらしい息づかい〉を思いうかべ、その奥に〈野鳥のはばたき〉をかすかに思いえがく時に、いわば濃淡二重の映像が形づくられることによって、生きてくるのだと考えられる。すなわち、そういった文章の背後を流れる淡い映像として喩詞が働いている、と認めるわけである。そして、その喩詞群が非体系的な全体として、作品底のイメージの流れをなし、さらに、その各作品の底流が、やはり表面的には非体系的に寄りあつまって、やがてその表現主体である人間の感性的なスタイルの一部を形成することになる。それが時に「作家の影」と呼ばれるものの正体である。

川端康成の諸作品から採集した用例を分析してみると、ここで仮に「光」「水」「におい」「幼」「小動物」「神秘」「怪奇」「抽象」と名づけた8類のイメージ群を抽出することができる。それぞれのグループに対する命名がすべて適切であるかどうかは知らないが、ともかく、そういった語に象徴される、近縁関係によってそのような類別が立つと考えられる、いくつかの喩詞グループを見いだすことは可能である。もちろん、その各類に属するイメージにはそれぞれ微差があり、その中が、また、例えば最初の「光」における〈光〉〈明かり〉〈火〉〈稲妻〉などのように、ある語で代表されるいくつかの小グループに分かれることになる。

第1段 光のイメージ

〈光〉

（白い花が）山に降りそそぐ秋の日光そのもののやうで、ああと彼は感情を染められたのだつた（『雪国』）

令嬢の姿が一すぢの光のやうにきらめいた（『千羽鶴』）

松坂がぼうつと怪しい光りのやうに立つてみた（『舞姫』）

天上の、また生命の閃光のやうな強さ（『再婚者』）

〈明かり〉

（^{あこ}顔が）霧の夜の乳色の街燈のやう（『花ある写真』）

（目つきが）遠いともし火のやうに冷たい（『雪国』）

温い明りのやうに駒子が入つて来た（『雪国』）

薄暗い床に浮ぶほの明りのやうな、伊賀の花入れの色（『日も月も』）

〈天体〉

鮎あゆが新月のやうな尾で（『白い満月』）

美しい踊子が慧星で修善寺から下田までの風物はその尾のやうに、秋の記憶に光り流れてゐる（『少年』に『湯ヶ島での思ひ出』から引用した部分）

〈稲妻〉

白塗りの柵に片側を縫はれた峠道が稲妻のやうに流れ（『伊豆の踊子』）

（百舌もずの声は）生活の朝をつんざく稲妻のやうに爽快（『禽獣』）

奇怪な言葉が、菊治には稲妻のやうだつた（『千羽鶴』）

〈缸〉

（死体を背負つた感覚の記憶が）燃える缸のやうに、獄舎の彼の思ひを飾つた（『それを見た人達』）

〈火〉

一ばかり出たさいころが、美しい花火のやうに浮んでゐた（『夜のさいころ』）

〈銀〉

海を失はれゆく銀色の矢のやうに走る小鳥（『水晶幻想』）

湖水を銀針のやうに泳ぐ魚（『水晶幻想』）

〈鉱物〉

細く光る針金のやうにはきはき響いてゐるみち子の声（『篝火』）

（山々は）少し冷たい鉱石のやうに鈍く光り（『雪国』）

遠くの電燈が白金のやうに白く光つた（『童謡』）

〈刃〉

微笑してゐる剣のやうな顔（『死体紹介人』）

山々の真黒な輪廓が鋭い刃物のやうに冷たい冬（『温泉宿』）

こぼれ易い刃物のやうな憂鬱（『浅草紅団』）

月はまるで青い氷のなかの刃のやうに澄み出て（『雪国』）

この“光”には、しかし、2種類の異質な光線がある。一つは〈稲妻〉系、もう一つは〈明かり〉系の光である。前者は、〈速さ〉と〈鋭さ〉とで、“驚異”の対象となり、後者は、〈ほのかさ〉と〈やわらかさ〉とで、“憧憬”の対象となる。『千羽鶴』の令嬢、稲村ゆき子は、その両方の属性を兼ねそなえた〈光〉そのものとして描かれる。すなわち、「若葉の影が令嬢のうしろの障子にうつつて、花やかな振袖の肩や袂に、やはらかい反射があるやうに思へる」「若葉の影のうつつた障子がゆき子の振袖の肩や袂そして髪までを明るくする印象」というリフレーン、「令嬢の明りがぼうつとさしてゐるやう」、それに「目のなかに小さく燈がうつり、上気した頬や唇にも光りがうつる」などは、遠い憧憬としてのほのかな明かりを思わせる側面であるが、「髪も光つており、「利口な目をかがやかせ」、「かがやく顔」をし、「かがやくばかり明るく見える」この稲村令嬢は、しかし、時

には「かがやく炎」であり、「一寸ぢの光のやうにきらめく」のである。そして、「闇の生きもの」である三谷菊治にはまぶしすぎる「日の光り」として、現実的には醜悪な背徳のテーマを洗う清潔な遠景をなすのである。この作品に限らず、光のイメージ、特に〈稲妻〉は重要である。「ふと」や「ひらめく」といった愛用語や「驚く」「はっとする」といった〈驚異〉を表す表現がばねとなって、作品展開が思いがけぬ方向に折れまがる点、1文1文をたたきつけたかに見えるほど頻発する改行、本来は作品を緊密に構成するはずの各部が、ほとんど有機的な連関を持たず、まるで無造作に投げだされてそこにあるだけのようない見無秩序な構造、そして、作品そのものさえ一瞬のひらめきのうちに成立したような断片の連鎖にすぎない点とも軌を一にする、という意味で、川端文学を象徴するキーワードであると言っている。（詳しくは、中村明「川端文学の方法」〈読書科学〉47～50 参照）

第2段 水のイメージ

〈川〉

楽しさは、水の流れのように、敬子の心を満たし（『東京の人』）
 女子高校生たちは、雪どけの流れのように、浮き立つて（『東京の人』）
 目の涼しい、小川の流れのような感じの青年（『東京の人』）

〈湖〉

ニジンスキイの輝かしい生は、その悲しみと悩みの果て、今は水にとざされた、冬の湖のやうなもの（『舞姫』）
 目が黒いみづうみのやうに思へて来た（『みづうみ』）

〈沼〉

夫婦といふものは、おたがひの悪行を果しなく吸ひこんでしまふ、不気味な沼のやうでもある（『山の音』）

〈波〉

顔には、さざ波のように、微笑がひろがつて（『東京の人』）
 嫉妬が波のように、打ちかえして（『東京の人』）

〈水〉

水のやうに透き通つた赤坊（『伊豆の踊子』）
 水づかりの紙屑のやうに疲れ（『慰霊歌』）
 水のやうな月光（『少年』）
 夫人のあたたかさが湯のやうによみがへつて（『千羽鶴』）

〈しづく〉

髪だけが、そこでは鮮かな滴のやうに、濃い黒であつた（『死体紹介』）
 黒髪の色の人間らしさが——全く高貴な悲しみの滴りのやうに、なんといふ鮮かな人間らしさだ（『温泉宿』）

〈雨〉

足音は雨のやうだ（『浅草紅団』）

〈雪〉

音のない雪のやうに海の底へ落ちる白い死骸の雨（『水晶幻想』）

〈涙〉

私はちやうど人間の涙の一粒のやうな象徴抒情詩として、この世に生れた女かと思はれます（『抒情歌』）

〈湿〉

なまめかしくぬれた花のやうな虚無（『舞姫』）

この“水”が、この作家の作品で、登場人物の象徴にまで深化されたケースを、筆者は思いつかない。作中人物の象徴化によって作品のライトモチーフを形成し、それが作品の裏テーマとして流れる場あいには、素材的な論理テーマほど明確な形ではないまでも、何らかの意味で、イメージ群の、ある方向への収斂が見られるはずである。もし、見おとしがないとすれば、この水のイメージは、川端文学において、執拗に張ってはこない。

しかし、例えば、「足音は雨のやうだ」の例の場あいの「雨」は、一次的には、その音響的側面がとらえられた聴覚的映像であるにちがいないとしても、「雨」という語が持ちこまれることによって、「パラパラ」という擬声語を使用したり、「天井裏で騒ぐネズミ」にたとえたりした場あいとは明らかに異質な表現効果をあげていると考えられる。すなわち、そこでクロスアップされた〈雨〉の音響的側面の背景として、そこでは取りあげられていない〈雨〉の他の側面が消極的ながら受容主体の意識をかすめるからである。とするならば、川端文学に類出するこの〈水〉のイメージは、少なくとも作品の湿的な雰囲気づくりに一つの役わりを演じていることになろう。

なお、そのうちの〈波〉は、水分であるとともに〈揺れ〉であり、そのほうでは、『山の音』の菊子の「肩を動かすともなく美しく動かす」、同じ作品の英子の「薄い肩のふるへ出す」、『千羽鶴』の太田夫人の「もにつかれたやうに肩をふるはせた」、『みづらみ』の湯女の「処女らしい背に肩の骨が爪を切るにつれてかすかに動く」などを始めとする、動くともなく動く微妙な揺れに注がれる作者の異常なまでの視線を感じさせるほどに執拗にくり返される類似表現例に出あうし、『千羽鶴』の菊治が太田夫人の抱擁にむせんだあの「女の波」も、同じ方向で考えられるかもしれない。

それはともかく、この〈水〉のイメージに、〈ぬれるもの〉としての、また、〈動くもの〉としての、水の二面性が重なりあっていることは確かだろう。

第3段 においのイメージ

文子は温い匂ひのやうに近づいた（『千羽鶴』）

余香のやうな姿（『名人』）

匂ひのやうな陶醉（『みづらみ』）

かぼそいささやきは、花のかをりのやうに耳にこもつた（『みづらみ』）

（島木君は）さびしい匂ひのような、魅力があつたよ（『東京の人』）

「におい」という語で、嗅覚的であるよりも、姿の印象、あるいは、全身で感じとる幻影とでも言うべき何かをさす用法は、この作家独自のものである。その意味で、においのイメージという取りあげ方が、他作家の場合より自然にできるとも言える。「匂ひに酔ふやうな夫人の触感」という表現にしても、触覚系統にはみ出す点、単なる強烈な体臭という枠から何かが余るし、菊治にとっては太田夫人そのものなのである。そして、夫人の娘である文子も、まさに「温かい匂ひのやうに近づ」くのだ。また、稲村の令嬢ゆき子も、菊治によってその「残り香」が慕われ、『山の音』の菊子も、あの「美しい肩を動か」す時に、「やはらかい匂ひ」を漂わせて、信吾の老いを揺さぶる。さらに、『みづらみ』の銀平も、町枝に「天上の匂ひ」を感じ、久子に「ほのかな匂ひ」をかぐ。それだけではない。「ほのぼのと清らかなものが匂つて来る」にしろ、「白い息も少女のやさしさで、匂ふやうだ」にしろ、ほとんど嗅覚的な刺激を伴わないイメージなのである。

第4段 幼のイメージ

〈親〉

あらいワイア・ヘアは夫人が幼い頃の父のひげのやうに彼女の肌を刺した

（『水晶幻想』）

母のやうにやさしい菓子（『日も月も』）

〈子ども〉

珍らしいものに眼を見張る子供のやうな快い驚き（『篝火』）

素直な子供のやうに、涙をぼろぼろこぼして（『東京の人』）

〈少年〉

少年のやうに清潔な（弓子の）足（『浅草紅団』）

唇は酸素の露に濡れて、少年のやうに美しい（『水晶幻想』）

〈少女〉

（^も舌は）甘つたれの小娘のやうに彼になつてゐた（『禽獣』）

〈人形〉

（化粧中の顔は）命のない人形のやうに見えた（『禽獣』）

ただ安心して、無垢の操り人形のやうに舞つて（『牧歌』）

〈面〉

美しい面のやうに目をつぶつたまま（『花のワルツ』）

〈玩具〉

おもちゃのやうな決闘（『白い満月』）

竹馬のやうに真直な前肢（『水晶幻想』）

〈模型〉

水晶の玉のなかに小さい模型のやうに過去と未来との姿が浮び上つた（『水晶幻想』）

〈飾りもの〉

桃色の貝細工のやうな足の翼（『浅草紅団』）

〈菓子〉

透き通つた餡のやうな臉（『死体紹介』）

（花束が）夢の国の菓子のやうだ（『花のワルツ』）

〈童話〉

（花束が）おとぎばなしの冠のやうだ（『花のワルツ』）

〈遊び〉

悲しみの姿とも見えぬことはないが、かくれんぼの鬼のように、無邪気な子供の、やわらかいしぐさだつた（『東京の人』）

『新文章読本』の中で、「自分の文章より人の文章を、男性の文章より女性の文章を、大人の文章より子供の文章を、つとめて多く読み、より多く愛して来たのであろう。新しいもの…生れ出ようとする若々しい可能…それにふれることが私のよるこびなのか。しかし私を驚かせる何か、新しい人々の文章の中に存在することは、否定できない。」と、自ら書いたこの作家は、〈はにかみ〉と〈真剣さ〉と〈純真〉とを生命とする女性を創造しつづけることによって、そういった〈幼い美しさ〉〈未成熟の美〉〈若わかしい可能〉に対する憧憬を追い求めた。このことは、作品『みづうみ』に明確な対比の形で述べられている。すなわち、「素直な娘が意地悪な女になつたと、宮子はからだの変わりやうにつれて思つた」とあり、また、「夢幻の少女をもとめるためにこの現実の女と飲んでゐる」とあるように、〈素直な娘〉と〈意地悪な女〉、あるいは、〈夢幻の少女〉と〈現実の女〉といった対比のうちに、自己の嗜好が語られているのである。このようなことを考えあわせると、この幼のイメージも、この作家にとって本質的なつながりを持つことは、容易に想像できる。

第5段 小動物のイメージ

〈ガマ〉

乳房から水落へかけてのあざは^{がま}蝦蟇のやうに具体的な記憶になつてゐる（『千羽鶴』）

〈カタツムリ〉

蝸牛類のやうに伸び縮みしさうな脂肪（『温泉宿』）

〈カイコ〉

透明な蚕のやうに泣き膨れた妻の臉（『死者の書』）

蚕のやうに駒子も透明な体（『雪国』）

〈ヒル〉

唇はまことに美しい蛭の輪のやうに伸び縮みがなめらか（『雪国』）

美しい血の蛭の輪のやうに滑らかな唇は、小さくつぼめた時も、そこに映る光をぬめぬめ動かしてゐるやう（『雪国』）

〈ナメクジ〉

真白な蛞蝓のやうに、しとしとと濡れた肌（『温泉宿』）

冷たい蛞蝓のやうにしとしとと彼の掌に貼りついた（指）（『温泉宿』）

〈ウジ〉

大地は死骸にわいたうじ虫のやうにこほろぎが蝕んで（『白い満月』）

〈チョウ〉

（カードは）鋭い蝶のやうに土間のうしろまで鮮かに飛び（『浅草紅団』）

〈ガ〉

（こわばつた表情は）炎に飛びこんだ蛾のようでもあつて（『東京の人』）

〈アブ〉

（コトバが）耳のまわりに、あぶのような羽音を立て（『東京の人』）

〈クモ〉

（女が）蠅取蜘蛛か七面鳥の牡のやうに踊つたり（『水晶幻想』）

作品『禽獣』を想起するまでもなく、この作家が一貫して描いてきたヒロインが、無知で、無反省で、潔癖で、純真で、無垢で、きまじめで、きままって真剣な表情をし、ひどいにはかみを見せることに気づけば、この動物のイメージ群が〈幼さ〉の延長線上に位置することも、抵抗なく受けとることができるだろう。事実、極端な〈幼さ〉から〈動物〉へはあと一步なのである。作品『千羽鶴』において、たえず反省の悪魔にとりつかれる意識過剰の男性菊治にとって、太田夫人が「女の最高の名品」でありえたのも、その無知・無反省が、道徳の影のささない世界で光り出たからである。だからこそ、「お見合ひでしたの？ちつとも気がつきませんでしたわ」「悪いわ。悪いわ。どうしておつしやつて下さらなかつたの？」と後悔して「泣いてゐる夫人のからだ」は、むしろ、「醜悪なやうに感ぜられる」だけなのである。そして、この作品が、現実的な意味では背徳の行為がより高い超俗の秩序に支えられる別次元でのかすかな期待を指さしたものは、そのような動物じみた純粋さのゆえであったことを思えば、この種のイメージ群がこの作家の本性に根ざすものであることをかぎとるには十分であろう。

なお、〈ヒル〉の例は、ライトモチーフに近い重みで使われている。「唇」にかぶせられたこの喩詞に作者が何を託したかはわからないが、表面上は視覚性の強いこの比喩を、触感に敷衍して解釈することが可能なら、まず、連想されるのはヒルの吸盤である。この作家が、その時、吸着性を意識したかどうかは別にして、少なくとも読者の立場から、川端一流のさりげない一行が、ここでもエロチシズムの底流を潜ませたものと解するのは自由であろうし、『千羽鶴』に「文子の抵抗はなかつた」というわずか10字の1文段落をばい

と投げ出しただけで切れてしまう一典型を見るように、空白を最大限に活用するその手法に照らしても、なにげなく読みすぎしやすい一行が意外に重要な情報を担っていることはいかにもありそうなことだ。いずれにしろ、時に「夜行動物が朝を恐れて、いらいら歩き廻るやうな落ちつきのなさ」で、「妖しい野性がたかぶつて来る」こともある『雪国』の駒子は、このヒルとカイコとの映像を背おいながら描かれていくのである。

第6段 神秘のイメージ

〈神〉

死人が神様のやうに美しい顔（『死体紹介人』）

〈天使〉

昭男は幸運の使いのようだ（『東京の人』）

〈天女〉

天女のやうな声（『みづうみ』）

〈妖精〉

不思議な美しさね、妖精のやうな（『舞姫』）

妖精のように光る弓子（『東京の人』）

〈ふしぎな虫〉

少女の細い体は不思議な虫のやうに美しかった（『浅草紅団』）

〈別世界〉

二人は果しなく遠くへ行くものの姿のやう（『雪国』）

現実とは彼岸の純粋な世界の行動のやうで（『再会』）

（鎌倉が）あの世のやう（『日も月も』）

夜の明りの薄い青葉の窓に、色白の裸の娘が立つてゐるのは、銀平に信じられぬ世界のやうだつた（『みづうみ』）

古く古谷綱武がその著『川端康成』（1942年 三笠書房）の中で「唯わけもなくわれわれの心に沁みる。そしてその作品の中にいつもわれわれがはっきりと覗くものは影像であって、⁽⁷⁾ 事実は影像のための影にすぎない」と述べたように、川端美学はリアリティの土壌には適さない。そして、実際、F. モーリヤックが『小説と作中人物』（川口篤訳 1957年 ダヴィッド社）の中で立てた「物語の中で人物が重要性を持たなければ、それだけ現実からありのままにとり入れられる機会が多い」という掟に従うなら、この作家は脇役などひとりも描いていないことになってしまうほどだ。新潮社版全集第15巻（1953年）の「あとがき」で、作者自身が、菊治とともに狂言まわしにすぎぬと規定した『千羽鶴』の栗本ちか子さえ、えたいの知れない不気味さを漂わせている。「ちか子の胸にべつとり醜いあざのやうな邪推だらう」の一文がすべてを語るように、志野の茶碗に添った影とも言うべき太田夫人や千羽鶴の令嬢稲村ゆき子という超現実の世界に棲息するヒロインを対比的に光らせる重責を

担った女なのであって、現実性のひとかけらをも持ちあわせていなくとも、何のふしぎもないとも言える。それはともかく、この〈神秘〉のイメージも、幼い者の発想ではあるが、次の〈怪奇〉のイメージと相まって、作品の現実性をなぎ落とす面に働いていることは確かだろう。

第7段 怪奇のイメージ

〈怪物〉

乱れ髪に水の中のやうな青い光がさして吸血鬼のやうな姿（『死体紹介人』）

（焼け跡の壁は）鬼気迫る夜陰の牙のやうで、祐三を吸ひつけさうで、斜に削ぎ落した頂の線には暗黒がのしかかつてゐた（『再会』）

〈魔もの〉

（鶉のいる）水の上は小さく黒い身軽な魔物の祭のやうで（『篝火』）

〈まぼろし〉

白い幻のようなもの（湯上りの女）（『東京の人』）

〈幽霊〉

扉が反つて幽霊のやう（『慰霊歌』）

僕らのなかの前の戦争が、亡霊のやうに僕を追つけてゐる（『山の音』）

〈地獄〉

（夕映えは）地獄の空のやうだつた（『童謡』）

地獄の化鳥のやうな目つき（『みづらみ』）

「べたりと厚い脂肪のやうに倒れかかつ」たり、「^{まつげ}睫と^{くちびる}唇が浮き上って、一つ一つの生きもののやう」だったりするのも、扱いの上では、ほとんど魔ものと変わらない。その辺まで加えるなら、こういった神秘性や怪奇性のイメージは枚挙にいとまがない。『千羽鶴』の太田夫人は、「人間ではない女」「人間以前の女」「人間の最後の女」としての妖気を深らせているし、その娘の文子も、神秘的な「早業」と「女の本能的秘術のやうな」な「あり得べからざるしなやかさ」をそなえている。そして、栗本ちか子も、「手をついて首を下げると、骨太の両肩が怒つて、毒を吐くやうな形」になり、『千羽鶴』の後編と銘うって書きつがれ、やはり未完に終わった『波千鳥』では、「水落から乳房にかかつたあざが悪魔の手の跡のやうに、菊治に浮んで来」、その「黒い手が見えさう」になるのである。『みづらみ』のつれこみの女も、「大きさがびつこの目」と言い、「かたはか、みにくい足」と言い、非現実的な魔性を発散させているという意味で、その延長線上と考えることができよう。このように、美と醜の違いはあっても、これらのイメージが、いずれも架空の世界に対する、幼い夢と妄想である点は変わらない。

第8段 抽象のイメージ

〈象徴〉

黄色い^{くちばし}嘴を凶徴のやうに大きく開いて（『浅草の九宮鳥』）
雄魂の象徴のやうに、全くみごとな赤ちやん（『名人』）

〈夢〉

やはらかい夢のやうで、いい志野は僕らも好きですね（『千羽鶴』）
（二人の踊りが）もろい夢のやうだね（『舞姫』）

〈うそ〉

窓で区切られた灰色の空から大きい^{ぼたん}牡丹雪がほうつとこちらへ浮び流れて来る。なんだか静かな嘘のやうだつた（『雪国』）

〈時間〉

その下に彼等の雨の日のやうな家があるとは思はれなかつた（『死者の書』）
（声は）流れてやまぬ時間か生命のやうなものだ（『みづらみ』）
手をのばせばとどきそうで、今と思ううちに、空へ吸われた。きのうのように消えてしまつた（『東京の人』）

〈生命〉

若い生命そのものやうな、弓子の美しさ（『東京の人』）

〈死〉

その向ふに連る国境の山々は夕日を受けて、もう秋に色づいてゐるので、一点の薄緑（蛾の翅の色）は反つて死のやうであつた（『雪国』）

〈運命〉

綿で円くふくらんで、色濃い絹の裏地がたつぷり出て、花やかな下着をのぞかせて開いた、その裾は日本の美女の肌のやうに、日本の女の艶めかしい運命のやうに——惜しげもなく土の上を曳きずつてゆくのがいたいたしく美しかつた（『再会』）

〈幸福〉

温い幸福のやうに、スープが咽を通つた（『東京の人』）

〈感情〉

背の円みが感情のやうに親しく見え（『死体紹介人』）

〈感覚〉

恐ろしい温かさと、柔かさとを、彼は過ぎ去つた狂気のやうに覚えてゐた（『それを見た人達』）
姿全体にふと本能的な羞恥が現はれた。菊治は思ひがけなかつた。令嬢の体温のやうに感じた（『千羽鶴』）

〈状態〉

向岸の急傾斜の山腹には萱^{かや}の穂が一面に咲き揃つて、眩しい銀色に揺れてゐた。眩し

い色と言つても、それは秋空を飛んでゐる透明な^{はかな}儂さのやうであつた(『雪国』)

第1章で述べたように、「AのようなB」とか「BはAのようだ」といった直喩は、Bを知らない受け手に、送り手が、それと類似した、受け手にも既知であることばAを発信し、受け手がそれを媒介として未知のBを類推する刺激を与えるところに、その原型があったと考えられるが、そのAの位置に、神秘・怪奇のイメージ、ましてやこのように抽象体を示すはずの語が立つことになると、もはやその伝達のほうの機能は捨てられたと言つていいだろう。ここまで来れば、背景の抽象化によって非現実的な場を設定する、いわば、一種の作品空間づくりなのである。

ただ、ここで重要なのは、この作家の作品が、非現実の空間に展開する抽象的な人工の世界を写しだしながら、しかし「わけもなくわれわれの心に沁みる」(古谷前掲書)という事実である。純粹に抽象的なものなら、人間の感覚を波だたせることはできないはずだ。それは、『雪国』の島村の、『千羽鶴』の菊治の、『山の音』の信吾の、『みづうみ』の銀平の、そして、最後に到達した『眠れる美女』の江口老人の、感覚の具象の上に立っているからである。

第4節 各イメージ群の関連

川端文学の作品の底を流れるこれらのイメージ群は、いったい、どこでふれあい、どうつながるのであろうか。こう問うことは、実は、川端康成という人間を問題とすることであって、そこに立ちをはだかっている難問は、とうてい言語学的文体論の手には負えない。そして、おそらくは、文学研究の手にも負えないだろう。そこは承知の上で、比喩表現の分析結果をもとにした一つの推論を試みることにする。それは、むしろ、文体論内での比喩研究の領域をはみ出すものではあるが、そのイメージ群の関連は、川端康成という人間の内部で、必ず存在するはずだし、少なくとも出発点を言語事実を支えられた推論は、この方面での比喩表現の分析作業が志向する一つの到達点を例示する意義は持ちうるからである。

作者である川端康成が人間として獲得した孤児の感情という性格が、その作品の高度な非現実性を決定的にした、という言い方は、いわば一行おきに文をつづってきたこの作家にふさわしい中略的表現だが、主述の論理的な隔たりが大きすぎよう。やはり、順に行こう。

第1段 孤児の感情方法の展開

かぞえ年の2歳で父を、3歳で母を失い、たった一人のきょうだいである姉とも別れて住んだ康成は、さらに、8歳で祖母とその姉をも失い、そして、最後の肉親となった祖父をも、ついに16歳で失って、天涯孤独の身となった。肉親を失った孤児は、当然、一度は悲しみのふちに沈むが、やがてその現実に対処する生き方を発見する。この作家の場あい、

それは、肉親の身がわりを他に求める形では現れず、親しみ自体を断念する感情の方法をつかむことであった。

その一つは、いかなる現実をもつき放して見ることである。行きあたるすべてが自己にとっては偶然の出あいにすぎないという徹底した「旅の傍観者」の態度は、自らが『文学的自叙伝』の中で「手も握らぬのは、女に止らないのではあるまいか。人生も私にとって、さうなのではあるまいか。現実もさうなのではあるまいか。或ひは、文学もさうなのではあるまいか」と疑った事実と正確に一致するのだが、残された唯一の肉親である祖父が日に日に弱っていくさまを冷静に写しとった『十六歳の日記』という作品に、すでに、そして、最も凝縮された形で、その正体を露呈した。この作品の「あとがき」に、「私の作中では傑れたものである」と書き、しかも「私の文才は決して早熟ではなかつた」と付言した事実は重要である。その後の100編近い作品が、この十六歳の少年の日記に、人生のスケッチにおいても、筆致の正確さや強さにおいても及ばなかったのは、この作家の本質が、孤独のうちに死に向かって確実な歩を踏みつづける祖父の老醜を見つめながら、「苦しい息も絶えさうな声と共に、しびんの底に」「チンチンと清らかな」「谷川の清水の音」を聞く、凝視の姿勢そのものにあるからであり、しかもこの作品には、のちの『雪国』や『千羽鶴』に漏れ出た甘えの生ずる余裕がなかったからであろう。

しかし、どれほど優れたものであろうと、現実をつき放して見るのは、一種の早熟である。そして、そのことを意識するたびに、その代償として失った〈幼さ〉に対する憧憬が生まれる。この幼の世界を追い求めるのは、悲しみに対処するもう一つの手段となる。

現実をつき放して見ることと並ぶ、もう一つの、もっと安易な方法は、その現実から視線をそらすことである。現実から目を離すことは、とりもなおさず、自らの世界に閉じこもることであり、この作家の場合には、感覚の世界への没入、それも純粹感覚の世界に生きるあこがれとして現れた。『千羽鶴』の菊治にとって、太田夫人が父の女であるという記憶を持つ時に、初めて〈罪〉の意識が生ずる。そのような「道徳の影」のささない、すなわち、「死んだ夫、菊治の父、菊治といふやうな区別のいらぬ世界」、つまりは、感覚のみの次元への憧憬を、この作家は執拗に追いつづけた。『抒情歌』にいう「月見草に生れ変るといふのではなくて、月見草と人間が一つのもの」となる次元も同じである。『孤児の感情』はもっと露骨である。すなわち、兄と妹が床を並べて平気で眠れるのは、妹という概念に安心しているからにすぎない、とし、「世の中の人間が悉く記憶力と名づけられた頭の働きを失つたとしたら」「人間は悉くみなし児となり」「そして、私は妹と結婚するだろう」とまで極言するのである。まさしく〈孤児の感情〉であり、また、それにすぎないとしても、ともかく、それがこの作家の文学の方法の一面を規定したことは疑えない。無知で無垢で無反省な〈子ども〉じみた女性を、時には、人間としての限度をも越えて、〈禽獣〉的に純真で無抵抗な女性を、無傷な絶対として描きだしたのも、純粹感覚の世界にあこがれながら、そこに没入し、陶醉することのできぬ、つまり、自らは純粹になりえ

ない、いらだたしさを振りはらったのであっただろう。『文学的自叙伝』で「いつも夢みて、いかなる夢にも溺れられず、夢みながら覚めている」と言いあてた自己の内面の葛藤に裏うちされることによって、『千羽鶴』や『みづうみ』や『眠れる美女』といった一連の作品群が、単なる官能的唯美主義の域を脱しえたとする推論も、あながち無謀とは言えない。

しかし、ともあれ、純粹感覚の世界へのあこがれが、「父と菊治のけじめがつかないかのやう」になり、「ひどくなつかしげで父に話しているつもりで菊治に話している」太田夫人に代表される〈動物〉じみた女性を引きだすことになる。菊治とその父浩造との区別のいらぬ次元、そこは要するに〈別世界〉である。

だが、別世界とは言っても、そこに浸りきれない者にとっては、その想像の世界に遊ぶ間の、つまり、夢みる時間だけ持続する、もろく、はかない、だからこそ、現実ではけっしてとらえられない美の世界に、仮に生きることである。ふたたび『文学的自叙伝』から作者自身の言を借りれば、「偽りの夢に遊んで死にゆく」、その一瞬ずつの真実である。喩詞から帰納された〈光〉と〈水〉と〈におい〉のイメージは、そういった、とらえきれない美の質のむなしさと無縁ではないであろう。別世界は、また、『孤児の感情』にいう「生と死を一つに感じ、生と死に通じて流れているものを感じ」うる次元であり、具象も抽象も一つの世界である。そして、その偶然の可能性に危うく支えられた世界は、一つひとつの描写がいかに確かであろうとも、くりかえし強調される時に、それが所詮は架空の人工的世界でしかないことがはっきりする。そこに、イメージーションにおける現実としての〈神秘性〉や〈怪奇性〉が、いわば必要悪として成立することになる。

このような移行は、実は、自ら捨てたはずの、また、失われたと信じて追い求めた、あの“少年”の発想なのである。そして、別世界へと飛翔した少年は、再度、決定的な飛躍をとげ、最後に〈抽象〉の世界に遊ぶこととなる。神秘性に逃れ、怪奇性に潜んでいる間は、「妖精」にしろ、「亡霊」にしろ、それでもともかく、ある像を結ぶが、「時間」とか「死」とか「感情」とか「はかなさ」とかに達すると、もはや映像喚起力さえ失われる。観念の形姿化を逆にたどった、この種の抽象体の喩詞は、いわば、映像を消したイメージなのである。その成否はともかく、川端文学を貫く高度な非現実性は、こういった極限での比喩表現と切りはなしては考えられないだろう。

第2段 川端美学の到達点

そして、徹底した幼さとか、禽獣とかいったまわり道をしながら、執拗に追いつづけた、完璧な無抵抗の美、三島由紀夫が鋭敏にかぎとった（『日本の文学』の『川端康成集』1964年中央公論社 解説参照）、いわば“屍姦”のテーマは、分身が異常な世界へと迷い出た『みづうみ』で、ようやく自覚的になり、『眠れる美女』という恐るべき作品の形で、論理的に帰結する。極限まで上りつめたこの作品になって、初めて、そこに至る過程で一度も顔を

のぞかせることのなかった、ある種の思想性を帯びるのである。それは、おそらく作者も意図しなかった、出口のない虚構の世界というテーマであり、意外にも実存主義をさえ連想させる一面を持つ。むろん、常に「覚めている」この作家は、本気で信じる気はなかっただろう。ひと一倍疑いぶかい自己を暗示にかけるための、文学の場での信仰の演技であり、信じることに對するあこがれを暴露したにすぎまい。しかし、その成立のプロセスは、どうであれ、完璧な“遊び”という徹底した無償性の上に構築しえた、その人工のアリ地獄が、結果として、この世界の正確な比喩となっている点で、川端康成の本質的な無思想性のゆえにたどりついたこの作品が、それ自体が一つの思想として日本文学の一方の峰に立つこととなったのは、なんとも皮肉な結末であった。

第3編 比喩における思考と表現

第6章 言語形式と比喩的対比

前章では、比喩表現の効果の分析から、その発展として文学の世界に踏みこんだが、その種の展開の基礎を固めるためにも、ここでもう一度、比喩表現の機能と言語的な性格について考えることにしたい。もう一度とは言っても、すでにふれた点の再検討をするつもりではない。比喩効果の質は、何を何に移行するかという転換の性格にからんでいる、と考えられる。したがって、前者の分析の妥当性は、後者の把握の正当性を前提とする。つまり、比喩表現が基本的に〈対比〉という性格を有するからには、まず、その対比を正確におさえるところから出発しなければならないのである。これまでは、話を簡略にするために、「AのようなB」あるいは「BはAのようだ」において、ことばBのさし示す対象を、喩詞Aのさし示す対象にとえる、という典型的な対応だけを取りあげ、細かい問題にはふれないできた。だが、後に詳しく扱うように、「A」と「B」との対比は必ずしも〈A〉と〈B〉との対比を示すわけではなく、また、〈A〉と〈B〉との対比は「A」と「B」との対比の形に対応するとは限らない。それでは、どのような言語形式がどのような対比を示し、どのような対比はどのような言語形式と対応するのだろうか。この編では、言語としての比喩表現における、その種の基本的な問題を取りあげて、検討してみることにしよう。

ただし、比喩効果を実現できる全形式を取りあげて、全面的な検討を加える用意はないので、前章と同様に、最も多用される比喩形式であり、代表的な指標「よう」を持つ比喩表現に対象を限り、しかも、名詞の対応の認められる場あいに絞って考察することにした。考察対象をこのように限定しても、必ずしも一小部分の検討にとどまるとは言えない。ここに比喩表現の現代における代表的な指標として取りあげた「よう」は、もちろん、助動詞「ようだ」の語幹で、「ように」「ようだ」「ような」などをまとめてさすものである。この助動詞は、「ありさま」つまり「状態」を表す漢語の「様」が形式化した体言に、断定の助動詞「だ」あるいは「です」がついたもので、比況と推定（不たしかな断定）の用法があるとされるが、まず、明確に後者に属する場あいは、この比喩表現には関係がない。次に、この「よう」の使用される言語的環境を見ると、その直前は、「花のよう」のようなノ格の名詞、これと語源的に対等な「そのよう」のようなコソア系¹の連体詞、および、「笑うよう」のような活用語の連体形であり、このうち、連体詞は比喩表現と見なしにくいので省くと、最初の名詞のノ格を受ける形式が、実際に比喩表現として現れる場あいのかなりの部分を占めると考えられるからである。

第1節 言語形式から見た比喩関係

どこから見ても美しい女の姿を〈花〉にたとえてほめたたえることばに、「立てばシャクヤク、座ればボタン、歩く姿はユリの花」という有名な比喩表現がある。この場あいの基本的な言語形式を指標「よう」を用いて示せば、次のようになると考えられる。

第1段 考察範囲の限定

1) 句のレベルでは、

シャクヤクのような(あの女の立っている)姿

ボタンのような(あの女の座っている)姿

ユリのような(あの女の歩いている)姿

2) 文のレベルでは、

(あの女の立っている)姿はシャクヤクのようにだ

(あの女の座っている)姿はボタンのようにだ

(あの女の歩いている)姿はユリのようにだ

3) これらに、その女のいろいろな姿とそれぞれの花との共通性を〈美しさ〉と規定し、

それを「美しい」という語で表すことにして、そこに持ちこめば、句のレベルでは、

シャクヤクのように美しい(あの女の立っている)姿

ボタンのように美しい(あの女の座っている)姿

ユリのように美しい(あの女の歩いている)姿

4) 同じく、文のレベルでは、

(あの女の立っている)姿はシャクヤクのように美しい

(あの女の座っている)姿はボタンのように美しい

(あの女の歩いている)姿はユリのように美しい

このように、その関係をかなり抽象して骨ぐみだけ示しても、なお、いろいろな形の表現が可能である。しかし、今は、句が文中で果たす機能や、文が文章中で占める役わりなどはすべて捨象し、もっぱら対比関係だけに着目して考察を進めることにする。したがって、形式を変えてもその対比の関係に変化を来さないかぎり、ここでの目的からは外れないわけである。そして、事実、この場あいは、前掲の「シャクヤク」「ボタン」「ユリ」の場所や、「姿」の位置に、ほかの名詞を代入しても、1)から4)までのどの形式をとるかによって対比関係の事実そのものをずらしたりゆがめたりすることは起こらない。そこで、以下の考察においては、そのうちの最も単純な1)の形式について検討することにする。

第2段 2基本型の設定

さて、今、仮に、ある事物・事象をアルファベットの大文字で表し、その部分や側面や属性などはその小文字で表すと、そのすべてが言語化された典型として、別種の対比関係を担う次の2基本型を設定できる。

1-0 AのaのようなBのb

2-0 AのabのようなBのab

すなわち、異なった2個の対象の別の箇所を対比する場あいと、取りあげる対象は違いますが実際に対比する箇所は同じである場あいとである。例をあげて説明しよう。

前者は、例えば、「動物の歯のような娘の皮膚」のようなもので、〈動物の歯〉一般と、そこで話題になっているある特定の〈娘の皮膚〉との対比、より直接には〈歯〉と〈皮膚〉という異なった部分の対比なので、aとbという別の小文字で表してある。

後者は、例えば、「力士の腹のような妊婦のおなか」のようなもので、〈力士の腹〉一般と、ある特定の〈妊婦のおなか〉との対比、より直接には、「腹」と「おなか」とを比較しているが、この両者は、ことばは違っても、ともに〈腹部〉をさし、結局、同一部分の対比と考えられるので、小文字部分が同じabで表されるわけである。

このように、二つの対象のうちの異なった部分の対比か、同じ部分の対比か、という点に注目して、大きく二分した上で、前掲の二つの基本型のそれぞれのパリエーションを考え、そこにおける実際の対比事実はどうなるか、あるいは、その変形に伴ってどう移行するかを検討してみよう。

なお、実際に対比されて、そのある面での類似性が認められた場あい、その両者を相似の記号「 \simeq 」で結ぶことにする。すなわち、1-0の「AのaのようなBのb」では〈a/A \simeq b/B〉の関係が、2-0の「AのabのようなBのab」では〈ab/A \simeq ab/B〉の関係が、それぞれ認められる、という表示とし、以下、これに準ずる。

また、比喩表現の言語形式そのものも簡単に表示するために、形式的な対比を示すことばを両辺に配してその間を結ぶ、この場あいは、指標基本形「よう」の実現形である、「ような」にその言語的な傾向環境「の」が付加された「のような」の部分で、「ほぼ等しい」意の記号「 \approx 」で代用させることにする。すなわち、1-0の「AのaのようなBのb」は「Aのa \approx Bのb」と、2-0の「AのabのようなBのab」は「Aのab \approx Bのab」と、それぞれ表示することにし、以下、これに準ずる。

以上の二つの約束により、前掲の2基本形は、次のように簡略に記述できる。

1-0 Aのa \approx Bのb \Rightarrow a/A \simeq b/B

2-0 Aのab \approx Bのab \Rightarrow ab/A \simeq ab/B

以下、この両基本形のそれぞれを出発点として、各パリエーションの言語形式が実現することのできる実際の対比関係を考察する。

第3段 異部分対比のバリエーション

それでは、まず、1-0のほうのグループから、そのバリエーションを調べてみよう。AとB、および、aとbという4項がすべて言語面に表現されたのが1-0であるから、次に、その基本的な4項のうち、どれか一つの項だけが欠けおちたグループをそのバリエーションとして考えることができる。ただし、ここで、「欠けおちた」というのは、その項が表現面に認められないという意味であって、初めからその項に当たる観念を独立して想定できない場あいと、単に言語化されていないだけで、文脈に依存してその存在を確かめうる場あいとがある。

初めに、その基本項三つが言語面に現れたグループのうち、たとえられるほうの部分・側面・属性を示すbにあたる要素の欠けた形式を、この1-0基本型の第1のバリエーションとして立てることにする。すなわち、「AのaのようなB」の形式である。例えば、「卵の黄みのような夕日」などがその例である。この場あい、卵のほうは、その全体ではなく、黄みの部分だけが問題にされていることがはっきりしているが、夕日のほうは、そのうちのどこが取りあげられているのかが明らかでない。明らかでないと言うよりも、おそらく、表現過程における観念の上でも、色彩とか形態とかが分離できないままに言語化されたものであろう。つまり、夕日そのもの、しいて言えば、その全体が、卵黄と類似したものと取りあげられたと考えられる。したがって、直接には、「黄み」と「夕日」とが対比されたと思われ、これを一般化すれば、この型ではaとBとが直接の対比関係に立つ、と言えよう。そして、例えば、案内嬢の美声をウグイスにたとえる場あいに、「ウグイスの声のような案内嬢の声」となって、けっして「ウグイスの声のような案内嬢」とはならないように、左辺の小文字部分を明示して右辺の小文字部分を略すことは考えにくいので、この形式からBの小文字部分を想定して小文字部分どうしの対比を読みとることはむずかしい。そこで、次のように記述できる。

$$1-1 \quad A \text{の} a \approx B \quad \Leftrightarrow \quad a/A \approx B \quad [= 2-1]$$

なお、等号「=」は、全く同一の形式ではないが結局は同じことになる意を表す。

また、この型では、右辺が部分を分離できない全体が直接の対比対象となる関係上、部分どうしの対比にならないので、意味の上からは、異部分対比を基礎とする1-0からも、同部分対比を基礎とする2-0からも、ともにはみ出すが、ここでは対比事実でなく言語形式を起点とする考察を行うので、ともかく1-0形式から出発した第1の変種言語形式であることを示すために「1-1」という型番号を付したわけである。したがって、「1-0グループ」と呼ぶものは、1-0形式からの派生形式の総称であり、必ずしも同種の対比構造を認めるとは限らない。以下、「1-」および「2-」の型番号は、すべてそのような性質を帯びることになる。

次に、このグループの第2のバリエーションとして、基本的な4項のうち、たとえられ

るほうの事物・事象を表すBに当たる要素の欠けた形式を立てることにしよう。すなわち、「Aのaのようなb」の形式である。例えば、「ヤツデの葉のような手のひら」などがその例と言えよう。この形式では、喩詞のほうは、ヤツデ全体でなく、その葉だけが問題となっていることが明らかであるが、それを受ける手のひらのほうはどうであらうか。これはもちろんヤツデの手のひらではない。そうかといって、手のひら一般についての性格を取りあげているわけでもない。そう形容されるにふさわしい、ある特定の手のひらである。すなわち、だれかの手のひらである。その「だれか」が言語面に示されていないが、そういう主体が存在することは確かだ。それが明示されないのは、語順という、句のレベルを越える構文上の、時には、文間文法を含む文章論上の、何らかの事情によるものと推定される。意味のほうは、そういった文脈に支えられて充足するが、ともかく、たとえられる事物・事象を表す名詞が、結果として、その通常の位置に現れないので、外見上では、その部分・側面・属性を示すはずの名詞だけが、先行する喩詞を受けとめている形となっている。しかし、いずれにせよ、この例では、例えば「大男」かだれかの、ある大きな手のひらを、ヤツデの葉と類似したものとしてとらえており、直接には、「葉」と「手のひら」を取りあげて比較している。一般的に言えば、この型では、aとbとが直接の対比関係に立つ、ということになる。すなわち、次のように記述できる。

1-2 Aのa≐b ⇔ a/A∩b/(B)

次に、このグループの第3のバリエーションとして、基本的な4項のうち、今度は、たとえるほうの事物・事象のどういう部分・側面・属性を取りあげるかを示すaに当たる要素の欠けた形式を考えることが、理論的には可能である。すなわち、「AのようなBのb」という形式である。しかし、この形式が対比構造の上でこのグループに属するためには、一つの条件が必要である。すなわち、言語面に現れないa要素が、表現に至る思考過程では観念的に存在し、それが言語化の手つづきの際に省略された場あいは、後で説明するように、このグループではなく、実質上は2-0のグループに属する対比関係を写しだしているのである。したがって、そのa項に当たる要素が省略されたのではなく、初めからA要素から分離できない場あひ、換言すれば、A項に当たる要素が、どの部分・側面・属性であるかを意識せずに、ただそれとして全体が取りあげられた場あひのみ、対比の形式と構造がともにこの1-0のグループに属する用例を想定できるのである。例えば、「練馬ダイコンのような花子の足」はこのような条件を満たすと思われる。この場あひ、〈練馬ダイコン〉のどこが問題となっているかは意識に上らない。つまり、そのうちのしっぽの部分を取りあげられているとか、逆に、しっぽを除いた他の部分だけを頭に描いているとかいった、分析的な扱いをしているとは認めがたい。そうではなくて、おそらく、その形態や色彩、あるいは質感も含めた〈練馬ダイコン〉が、ただ〈練馬ダイコン〉そのものとして、ある種の足を形容する際の引きあいに出されたものであろう。また、たとえられるほうは、花子という人間全体が練馬ダイコンに似ているとは考えられないから、そこで形

容されているのは脚部（厳密には膝より下で、足部を除いた部分）だけ、つまり、bに相当する「足」だけである。したがって、この形式が、名実ともに1-0のグループのパリエーションとして現れる場あいは、この例では「練馬ダイコン」と「足」、一般的にはAとbとが、直接の対比関係に立つ、ということになろう。すなわち、左辺の名詞が、その部分・側面・属性をそこから分離して析出しえない全体をさすこの場あいは、その内部構造を〈A∞b/B〉という対比関係でとらえることができる。

ただし、一見この型に属するような形式であっても、前掲の条件を満たさない場あひ、つまり、たとえるほうの事物・事象に対応するA要素の名詞が、そのまま対比関係の一方の項に立つのではなく、実際上の意味では、その対象のうちの、そこに言語的に表現されていない、ある部分なり、側面なり、属性なりが、直接には対比的に持ちだされたと考えられる場あひは、前述のように、別に扱う必要がある。例えば、「イワシのような老婆の目」という比喩表現があるとしよう。この場あひ、まず、イワシと老婆とが全体として類似しているのとらえられたとは考えにくい。たとえられるほうは老婆の眼球の外見、つまり、直接には「目」であろう。ここまででは問題がないが、しかし、かといって、それがイワシそのものと類似しているわけではあるまい。老婆のほうが目であれば、特に何も断わっていないかぎり、イワシのほうも目を取りあげられていると解するのが、この形式の表現では、自然だろう。そして、事実、イワシのひれとか尾とか、目以外の部分を想定するのは、きわめてむずかしい。やはり、イワシの目と老婆の目が似ているとされたとしか考えようがないのである。したがって、直接には「目」どうしの対比ということになる。とすれば、同一部分の対比であり、対比構造の上では2-0のほうのグループの一つのパリエーションと考えざるをえないわけである。

また、前掲の「練馬ダイコンのような花子の足」に対して、「ゾウのような花子の足」という例を考えてみても、両者は一見似た形式のように思えるが、実は、後例は前例とは型を異にしており、「イワシのような老婆の目」と同類であって、やはり対比構造上は1-0のグループには属さないのである。すなわち、その例では、まず、花子とゾウとが全体として似ているわけではないし、また、花子の脚部がゾウそのものと似ているとも考えにくい。花子の脚部がゾウのそれと類似しているのとらえられたものであろう。つまり、「足」どうしが直接の対比関係に立つものと考えられる。長い鼻とか、大きな耳とか、細い目とか、ゾウの特徴的な部分はいろいろあるが、この表現から、ゾウの部分として、「足」以外が対比されていると考えるのは、相当に無理がある。

これをもう少し一般化して言えば、次のようになろう。「AのようなBのb」に該当するようなある表現が、〈Aの何か〉と〈Bのb〉との類似を示そうとしている場あひ、すなわち、「A≒Bのb」という言語表現形式から〈()/A∞b/B〉という内部構造を抽出できる場あひは、Aの小文字部分にBの小文字部分と異なったものを想定するのは著しく困難なので、この形式は「A(のb)のようなBのb」の実現形と考えられる。前例で言えば、「イワシ

（の目）のような老婆の目」, 「ゾウ（の足）のような花子の足」となる。そして、この「A（のb）のようなBのb」は、その約束から、結局のところ、「A（のab）のようなBのab」という形式と全く同じことである。したがって、これは、対比構造の上で、2-0のグループのほうの一つのバリエーションである「A≡Bのab」に吸収される、と考えざるをえないのである。このような検討をとおして、1-0グループとしてのこの形式における対比構造は、次のように記述することができよう。

$$1-3 \quad A \equiv B \text{ の } b \Leftrightarrow A \circ b / B$$

さて、その次に、1-0グループの第4のバリエーションとして、前と同じくたとえる側のうち、今度は、事物・事象を表すほうのAに当たる項が表現面から消え、その部分・側面・属性を示すほうのaに当たる項だけが現れて、それだけで右辺の2項にかかっていくような形式を考えることにする。すなわち、「aのようなBのb」という型である。例えば、「太もものような相撲とりの腕」といった比喩表現があるなら、その一例と言えよう。そして、この場あいの対比関係を考えてみると、まず、相撲とり自体、すなわち、力士という人間全体が「太もも」に似ているというわけではない。仮に、全身これ太ももといった、体全体があたかも太ももを思わせる力士がいたとしても、少なくとも、この表現はそういう意味に解しにくい。また、腕の太さを形容するために引きあいに出された「太もも」は、それ自体で独立した存在というよりも、人体の部分としての太ももであり、太もも一般と考えるよりは、やはり、だれかの太ももととるべきだろう。しかし、修飾語を伴わない以上、それほど特別な太ももをさすとは思えないが、力士の腕を力士自身の太ももと対比したものと読みとるのも、たとえ、腕と太ももが同程度の太さである力士がいたとしても、この形式からは不自然であろう。やはり、通常は、一般人のごくふつうの太ももをさす、と考えるべきだと思われる。つまり、aの大文字部分に、bの大文字部分とも共通する主体を想定するのは無理だ、ということである。したがって、「(相撲とりの)太もものような相撲とりの腕」といった「(Bの)aのようなBのb」といった系列に属さないことは明らかである。そして、この型は、結局、次のように記述できよう。

$$1-4 \quad a \equiv B \text{ の } b \Leftrightarrow a / (A) \circ b / B$$

以上の四つの型は、異部分の対比である1-0のグループにおける、A, a, B, bの4項中、どれか1項を、少なくとも言語面で欠いたバリエーションである。

今度は、同じ1-0グループでも、基本の4項のうち、2項が言語面から欠けおちた形式のバリエーションを検討してみよう。もっとも、2項が抜けることになると、左辺のたとえる側からAとaの両項がともに消えたり、右辺のたとえられる側からBとbの両項がともに消えたり、というように、どちらか一方から2項ともなくなった形式は考えられない。すなわち、「のような」で結ばれる要素が、その前後、つまり、左右の各辺に、少なくとも1項ずつは言語化されていないと、この比喩形式は成り立たないからである。したがって、抜ける2項の組みあわせは、理論上、最大限4種類しか起こりえない。

まず、「のような」をはさむ両辺とも、事物・事象を示す項だけが現れ、その部分・側面・属性を示す項が、少なくとも言語面には現れない場あいを、1-0グループのバリエーションとして立ててみて、そこでの対比関係を検討してみよう。すなわち、「AのようなB」の形式である。例えば、「男のような女」などがその典型的な例である。この型の対比は、通常、そこに言語化された両者、すなわち、AとBの両項の間で行われる。つまり、この例で言えば、「男」や「女」のどの点の類似が問題となっているのか、といったあたりは、きわめて漠然としている。しかし、漠然としていることは事実だが、全く焦点が存在しないとは言えない。そして、その漠然さの度あいは、主としてA、つまり、たとえるほうの対象を示す名詞の立つ位置にどんな語が来るか、によって違うと考えられる。例えば、「サルのような子ども」という例では、もちろん、まだ、どういふ点を取りあげられているかははっきりしないが、例えば、顔が似ている、そのうちでも、鼻の下から上あごが突き出ている、あるいは、子どものわりにしわが多い、といった点や、小さい姿でちょこちょこ動く、つまり、動作が敏捷な点、特に木のぼりの達者なところなど、想像される共通点がある程度限定される。「男」の場合あいにも、そういいたいわけば焦点候補がないわけではないが、それらは、例えば、女の“柔”に対する“剛”，あるいは、女の“やさしさ”に対する“強さ”といった形で、仮に総括されるとしても、それが現れる点はまさに多岐にわたっており、それだけに、強烈に印象的な点がこれとこれというふうに、すぐに浮かんでこないで、「男」よりは「サル」のほうが多少とも特徴的であることは認められよう。そして、Aに相当する名詞が、その意味で、どのぐらい特徴的であるかによって、その小文字部分、すなわち、そこで言語化されていないaの意識される度あいが違ってくる、と考えられる。例えば、「天狗のような太郎」と言えば、多くの場合、鼻が意識されると予想されるので、「サル」の場合よりもかなり焦点が絞られ、それだけaの存在が影を増すと思われるし、さらに、「デメキンのような次郎」となれば、もうほとんど例外なく、目が意識されるだろう。そして、この場合あいは、〈天狗〉における「赤い顔」といった副次的特徴が思いうかばないという点で、「デメキン」の例は「天狗」の例より、a限定がさらに強く働いている、と言うことができる。したがって、この型においては、比喩を表す文法的な形式よりも、主としてAに当たる語の性質、あるいは、少なくとも、Bとの関連でとらえられたAの性質が、意味の限定に強く作用するものと考えられる。

しかし、ここで重要なことは、Aの位置に立つ語の性質によって、a限定、ひいては、その結果としてのBの小文字部分の限定がどれほど進んだところで、ともかく、その小文字部分が言語面に現れないこの「AのようなB」という形式は、両辺の小文字部分の明示された形式とはもちろん、いずれか一方のそれが言語化された形式とも、確かな違いがある、ということである。この、言語化されていない、という事実を無視すべきではない。なぜかと言うと、言語化されないということは、言語化しなくても済むということであり、言語化しなくて済むということは、その部分を特に問題としなくても対比は成りたつとい

うことだからである。前掲の例で言えば、「天狗のような太郎」が「天狗の鼻のような太郎の鼻」という意味であるとしても、また、「デメキンのような次郎」で、実際に、「目」どうしの対比されていることが疑いのない事実だとしても、天狗と太郎とが、そして、デメキンと次郎とが、その共通点が何であれ、ともかくも類似性に基づく一対として取りあげられていることも、同様に、疑いのない事実なのである。

ここでぜひ指摘しておきたい点がある。それは、ここにあげたどの例においても、目どうし、鼻どうしといった同一部分の対比であったことである。言うまでもなく、これは偶然ではない。両方伏せられた、少なくとも、たとえられる右辺のほうが伏せられた場あい、左右の小文字部分に別のものを想定するのはほとんど不可能に思われるからだ。例えば、赤ん坊のかわいらしい小さな手をモミジにたとえたり、逆に、大きな手のひらをヤツデにたとえたりする場あいを考えてみよう。そこにおける対比の焦点を明確にすれば、「モミジの葉のような赤ん坊の手」、「ヤツデの葉のような大男の手のひら」といった形になる。同じ対比は、右辺の大文字部分を省いた「モミジの葉のような手」や「ヤツデの葉のような手のひら」という形でも、その文脈に支えられて実現する。また、たとえる左辺のほうの小文字部分を明示しない「モミジのような赤ん坊の手」や「ヤツデのような大男の手のひら」という形でも、同じ対比が成立する。これは、ある種の植物名は、その植物全体をさすと同時に、その植物における主要な側面、人間にとって最も利用価値の高い部分、つまり、いちばん目だつところを特にさす場あいがあるためである。例えば、「サクラ」と言えば、その樹木全体をさすのはもちろんとして、そのうちの花の部分だけをさす用法もごく一般的であり、「リンゴ」と言えば、その樹木全体をさすことも当然あるが、特にその果実をさす場あいのほうがむしろふつうなほどである。同じような意味で、「モミジ」や「ヤツデ」という語が、その最も印象的な部分である〈葉〉だけを特にさす場あいも、すでに通例となっている。したがって、「モミジのような」や「ヤツデのような」という形式は「モミジの葉のような」や「ヤツデの葉のような」の代わりを務めることができる。ともかく、このような特殊な事情があずかって、「モミジのような赤ん坊の手」とか「ヤツデのような大男の手のひら」とかいった、一見「AのようなBのb」に相当する形式において、葉の箇所と手の箇所という異なった部分の対比。換言すれば、bと類似性を持ち、しかもそれとは異なったaを補うことが、可能となるのだと考えられる。そして、これが成りたてば、「モミジのような手」や「ヤツデのような手のひら」のように、右辺の大文字部分を省いた形式でも、文脈に助けられて、同様な対比関係を伝達することも十分に可能であり、むしろこの形が慣用的となっている。

この辺までは、ともかく成立するのだが、右辺の小文字部分を欠いた「モミジの葉のような赤ん坊」や「ヤツデの葉のような大男」といった形式になると、もはや同じ対比を表現することはできない。仮にこの表現が成立するとしても、それは、モミジやヤツデの葉と赤ん坊や大男そのものが類似しているという意味になり、赤ん坊の手や大男の手のひら

を特に取りあげた表現と解するわけにはいかない。つまり、この形式は1-1に準ずるのである。

そして、今ここで検討しているのは「AのようなB」であり、この例で言えば、「モミジのような赤ん坊」、「ヤツデのような大男」となる。これらの形式が葉と手や手のひらを焦点とする対比を写しだすのは、葉を明示した前掲の形式に劣らず、とうてい無理だろう。

このように、「AのようなB」という形式から、互いに異なる小文字部分、つまり、aとbとを想定して補うのは、ほとんど絶望的に困難であり、もしどうしても異部分の対比を伝えたいのなら、この形での省略表現にまで簡略化するのには明らかに行きすぎというほかはあるまい。

したがって、この「AのようなB」という形式が伝達しうる対比関係は、ほとんどすべて、同じ部分や側面における類似に基づくそれであり、対比関係そのものの性質からは、むしろ、2-0のグループに近いと言えよう。

もっとも、前掲の例の左辺を移行して、例えば、「造花のようなモミジ」とか「グラフのようなヤツデ」といった表現をでっちあげたとすると、一見、求める対比が得られそうであるが、しかし、それでも、「造花」や「グラフ」のどういう面を切りとったかは明確にならないので、異部分の対比であるとする根拠はすこぶる弱い。

このような検討を重ねた結果、この形式は、互いの小文字部分が想定できるかぎり、本来、2-0のグループで扱うべき性質のものだ、ということになる。その論拠を略述しよう。両辺の小文字部分を想定して補う際の限定の強さ、つまり、その部分が意識に上る度合いに、いろいろな段階はあるとしても、ともかく、同一部分の対比であることの明確な例は、はっきりと多数認められるのに対し、異部分の対比であることを積極的に感じさせる例は皆無に近い。

しかし、対比の焦点が明確でないため、小文字部分の想定が常に可能だとは言えず、直接の対比箇所がどこであれ、その大文字部分どうしが対比関係にあることは事実なので、結論として、この言語形式が内蔵する対比構造は、次のように記述されるべきであろう。ただし、実体は2-0グループにあるので、これはいわば空見だしである。

1-5 (A≐B ⇔ A∩B) [≐2-5]

なお、合同の記号「≐」は全く重なる意を表す。

それでは、次に、2項が欠けおちた形式のうち、たとえるほうでは、事物・事象だけを明示して、その部分・側面・属性を示す項を欠き、たとえられるほうでは、逆に、その小文字部分だけを示して、その主体を表すはずの項を欠いた形式について検討してみよう。すなわち、「Aのようなb」に該当する表現である。前にあげた、モミジやヤツデの例のうち、「モミジのような手」や「ヤツデのような手のひら」という形は、一応、この型に属するように思われる。しかし、右辺の「手」や「手のひら」のほうは、「赤ん坊の」や「大男の」の部分が文脈に依存して実現しうるから問題がないとしても、左辺がこの形で

成立するのは、前述のように、その語の特殊な事情に支えられているし、また、その場あいの「モミジ」や「ヤツデ」という語が、Aとaとを分離できる対象において明確にA項に相当すると考えうるかどうかは、依然としてあいまいである。したがって、1-0型の対比関係をそのまま保持した典型的なバリエーションと考えるにはあまりに不完全な例と言うほかはない。

そして、事実、ほかの例で考えてみると、ここに言語化されていないAの小文字部分として、Bの小文字部分として言語化されたbと異なるものを想定するのは、この形式からも相当にむづかしく、やはり、「A(のb)のような(Bの)b」と考えざるをえない。これは、結局「A(のab)のような(Bの)ab」と同じことであり、つまりは、2-0のグループに類する対比関係なのである。この型のごくふつうの例として、「キリンのような首」を考えても、「キリン(の首)のような(話題の人物の)首」という意味にしか解しようがないから、直接には「首」どうしの対比ということになる。1-3のところでも扱った「ゾウのような足」という例でも、事情は全く変わらないのである。

しかし、「甜食のような乳房」や「ほしブドウのような乳首」などのように、A項からその小文字部分を切りはなすことが困難な例もあり、その場あいは、そこに明示された項どうしの対比と考えられる。そして、実は、それこそ1-0グループにおけるこの形式の本姿であり、同部分の対比の〈b/Aco**b**/(B)〉の場あいは、〈(ab)/Aco**ab**/(B)〉という2-0グループとして区別するのが適切である。したがって、この形式における対比構造は次のように記述しておくことにする。

$$1-6 \quad A \equiv b \Rightarrow Aco**b**/(B)$$

さて、今度は、逆に、たとえるほうは、部分・側面・属性に当たる項だけを示して、その主体を欠き、たとえられるほうは、事物・事象だけを示して、その部分・側面・属性の項を欠いた形式を検討してみる。すなわち、「aのようなB」という形式である。例えば、「バラのかおりのようなお嬢さん」が単に「かおりのようなお嬢さん」とはなりにくいように、この形式は、aの独立性が強くてAを隠してもなおかつ特徴的である必要があるので、かなり特殊な場あいであり、あまり広く認められないが、例えば、「ふくらはぎのようなフランスパン」といった例があれば、これに該当する、と思われる。そして、この形式の表現が成立すれば、そこにおける対比は、明示された項どうし、すなわち、aとBとの間で行われると考えられる。この例で言えば、〈ふくらはぎ〉自体と〈フランスパン〉そのものが類似しているとしてとらえられたことになるだろう。ここで、〈ふくらはぎ〉のほうは特殊なふくらはぎではなく、「〈ふくらはぎ〉なるもの」といった一般的なそれをさすにもせよ、ともかく、だれかのものであり、例えば、「普通人の」といった主体を無理なく想定することができる。しかし、「フランスパン」のほうは、それが全体として取りあげられており、その意味で、bではなくBという大文字相当の項とすることができようが、その小文字部分に何かを想定することはきわめてむづかしい。したがって、この例

にしても、仮に「aのようなB」という形式で処理できたにしろ、異部分の対比であると主張するためには、はなはだ不完全である。こう考えてくると、これを異部分対比の1-0型の対比構造をそのまま保存していると主張する積極的な理由は認めがたい。だが、Bからその小文字部分を析出することができ、それがaと直接の対比関係をなす例は思いがけにくい。例えば、前掲の「太もものような相撲とりの腕」が、この形、すなわち、「太もものような相撲とり」として簡略化するとは思えないし、また、同部分の対比においても、「ツルの首のような彼女の首」が「ツルのような首」という略し方はできても、「首のような彼女」というこの形式で現れることは考えられない。したがって、2-0グループに属するとは言えないのである。そこで、次のように記述しておこう。

$$1-7 \quad a \approx B \Rightarrow a/(A) \circ B (= 2-7)$$

それでは、2項目の欠けおちた形式として考えられる最後の一つについて検討することにしよう。あと残っているのは、たとえるほうとたとえられるほうという両辺の事物・事象を示す項が表面に言語化されず、その部分・側面・属性を示す項だけが明示された形式である。すなわち、「aのようなb」である。この形式は、外見上、「AのようなB」という形式によく似ている。したがって、この形式であると判断するためには、両辺の項が明らかに小文字相当の要素であること、言いかえれば、どちらもその主体を想定できることが必要である。1-4型の例としてあげた「太もものような相撲とりの腕」のうち、「相撲とりの」の部分を省略して、文脈に依存することにすれば、この型の例になる。すなわち、「太もも」の主体としては、例えば、「普通人の」という形で無理なく補って考えることができるし、「腕」の主体としては、今省略した「相撲とりの」を文脈から読みとることもできる場あいが当然あろうし、そうでないまでも、「普通人」ではないある特定の人、つまり、そこでの話題の人物を容易に想定できるからである。ここで、言語的に欠けている両辺の事物・事象を示すはずの項に、同一人物の主体を補って考えるのは非常に不自然である。左辺の「太もも」は、修飾語を伴わない以上、当然、ふつうの体格・体型の人間のものをさすはずだし、右辺の「腕」は、同じく修飾語を伴わない以上、その文脈に託された話題の人物のものをさすはずだからである。これを、例えば、両方が普通人のものをさすと考えたり、太ももも腕も、ともに相撲とりとか話題の人物のそれをさすと考えたりするのは、この形式においては相当の無理があるということである。すなわち、「(A)のaのような(A)のb」という系列の対比ではなく、やはり、「(A)のaのような(B)のb」という構造の表現過程を経た形式であると考えられる。そして、この型における直接の対比関係は、そこに言語化されているa項とb項との間に認められる。したがって、次のように記述することができよう。

$$1-8 \quad a \approx b \Rightarrow a/(A) \circ b/(B)$$

基本4項中、言語面で2項を欠いた形式は、これで全部である。そして、3項以上を欠いたのでは、左右両辺のうち、少なくともどちらかの辺の両項を欠くことになって、比喩

形式が成立しないので、1-0の変種はもうこのほかにはありえない。

第4段 同部分対比のバリエーション

以上、1-0から出発した言語形式上のバリエーションとして派生的な8種の型を取りあげ、その形式が実現することのできる事実上の対比関係について検討したわけであるが、以下、同様の手順で、今度は2-0基本形、すなわち、「AのabのようなBのab」からの言語形式上のバリエーションの場あいを検討することにした。

まず、基本4項のうち1項だけを欠いた場あいを見ていこう。1-0の場あいと同じく、最初に、たとえられるほうの部分・側面・属性を示すはずの右辺の小文字部分、すなわち、この2-0グループではab項に当たるところが現れない形式を考察することにする。それは、つまり、「AのabのようなB」である。ところが、これはすでに検討した1-1と結局は同形式である。むしろ、これは偶然ではない。1-1とこの2-1で欠いた右端の項は、実は、1-0と2-0との唯一の違いを反映する場なので、そこが言語化されなければ、少なくとも表面上は区別がつかないのが、むしろ当然なのである。そこで、この形式を1-1とは別に立てて検討する必要があるかどうかという問題が起こる。その必要があるとすれば、この形式が、1-1では表現できなかった対比関係、つまり、2-0グループが特徴とするはずの同部分の対比という構造を明確にそなえ、そういう対比を実現しうることが示された時である。しかし、1-1のところでも検討した結果、この形式におけるBはその小文字部分を析出しにくい語で、それ全体が対比の一方をなすことが示された。すなわち、「卵の黄みのような夕日」を例にとると、「卵」の部分になす「黄み」と類似しているのは「夕日」そのものであって、「夕日のうちの何か」ではないのである。また、異部分の対比である場あいは、例えば、ゾウの鼻と電気洗濯機のじゃばら（ホース）の部分とが似ていることを表すのに、この形式に従って「ゾウの鼻のような洗濯機」とはならないし、同部分の対比の場あいでも、例えば、ある男の短い脚部をダックスフンドにたとえるのに、「ダックスフンドのようなおじさん」の形で簡略化することはできても、「ダックスフンドの足のようなおじさん」というこの形式をとることは考えられない。したがって、この形式は小文字部分の対比を直接に表現する構造を持たないと思われる。結局は1-1と同形であるこの型は、思考の起点における差を問題としないかぎり、それと全く同一の扱いでさしつかえない、ということになろう。そして、実体は、異部分対比以外にあるので、2-0グループにおけるこの形式のほうは、いわば空見だ式的である。形式的にすぎないが、一応その対比構造を示すなら、次のように記述できる。

2-1 (Aのab≒B ⇔ ab/A∞B) [=1-1]

次は、同じくたとえられるほうの、今度は逆に、事物・事象を示すはずのB項が現れない場あいである。すなわち、「Aのabのようなab」という形式である。例えば、「ネコのひげのようなひげ」とか「イヌの鼻のような鼻」といった例は、この形式と言えよう。こ

れらは、たとえられるほうの主体、つまり、ネコのひげのようにびーんと立ったひげの持ちぬし、イヌのようによく鼻のきくある人物が、文脈に依存して伝達される場あいに、また、「ネコのようなひげ」や「イヌのような鼻」という形までは簡略化されない場あいに、現れる形式である。このように、この形式において欠けている右辺の大文字部分には、左辺のそれとは異なった主体、すなわち、ネコやイヌでないある主体を想定する必要がある。一般化して言えば、「Aのabのような(Aの)ab」という表現過程は無意味な恒等式なので、どうしても「Aのabのような(Bの)ab」と考えざるをえない、ということである。そして、対比の関係を見ると、その表現を生成していくプロセスにおけるあるレベルで、Aと、そこに言語化されずに定着した観念上のBとの類似が意識されたにしても、直接の対比、つまり対比の焦点は、言語面に明示された小文字部分どうしの間にあると考えられよう。この例で言えば、ネコやイヌとある人物とが、共通点を有する組みあわせとして取りあげられたにしても、直接には、「ひげ」どうし、「鼻」どうしが対応していることになるだろう。したがって、この形式における対比構造は、次のように記述できる。

$$2-2 \quad A \text{ の } ab \approx ab \Leftrightarrow ab/A \circ ab/(B)$$

さて、その次は、たとえるほうの辺から1項を欠いた形式を取りあげよう。そのうちでも、部分・側面・属性を示すはずの小文字部分の欠けた形式を先に考えることにする。すなわち、「AのようなBのab」という形式である。例えば、「カバのような太郎の口」とか「イワシのような老婆の目」などが、この型に属する例と考えられる。この形式における対比関係を見てみると、1-3で検討した結果、1-3から切りはなして2-0グループに送った例からわかるように、ここに明示されていないAの小文字部分と、Bの小文字部分として示されたabとの間で、直接の対比が行われているものと推定される。この例で言えば、「太郎の口」と似ているのは〈カバ〉自体ではなく、その〈カバ〉のある部分であり、〈老婆の目〉と〈イワシ〉全体が類似しているとするよりも、〈イワシ〉の一部が取りあげられていると考えるほうが自然だ、ということである。そして、この形式が2-0グループに属することをひとまずおくとしても、Bの小文字部分と異なるものを、Aの小文字部分に想定して補うことは、このような言語的条件からは、著しく困難である。この例で言えば、「太郎の口」と対比される「カバ」の部分として「口」以外を想定したり、「老婆の目」と対比される「イワシ」の部分として、「目」以外を想定したりするのはむずかしいということである。換言すれば、異なった部分の対比を示すには、Aの小文字部分を明示する必要がある、ということにもなる。したがって、この形式は、「A (のab) のようなBのab」という思考過程を経て、その形に定着したものと思われる。

ところが、以上は、左辺のAから、右辺のabと同じ部分を析出できる場あいの話である。すなわち、前例では、Aに相当するものが「カバ」とか「イワシ」なので、それぞれの右辺のabに相当する「口」とか「目」とかを、やはりそなえているから、前述のように、小文字部分どうしの対比が成立するのである。

それでは、Aが、abに当たる部分を持たない対象を表す場あいには、どうなるであろうか。「花びんのような令嬢の肩」とか、「湯のみのような夫人の腰」といった例では、多少とも比喩性を残存しているとはいえ、ともかくも、「花びん」や「湯のみ」と呼ばれる対象が、「肩」とか「腰」とかに相当するとして、事実、そう名づけられることもある部分をそなえているから、前例に準じて考えてもそう不自然ではあるまい。しかし、例えば、「ゴムまりのような子どものおなか」のような例になると、「ゴムまり」には、「へそ」と呼ばれる部分はあるが、「おなか」に相当する部分は考えにくい。そして、この種の例も、「鉄板のようなプロレスラーの胸」とか「針金のような学生の手足」とか、この形式には多数見られるのである。これらの例における対比は、「ゴムまり」と「おなか」、「鉄板」と「胸」、「針金」と「手足」の間、つまり、左辺に明示された唯一の項であるAそのものと、右辺の小文字部分との間でなされていると考えられる。

ただし、これらの場あいは、ともかくも同部分の対比とは言えないから、2-0グループとしてのこの形式からは外して、1-3側の例とすべきだろう。

以上の検討の結果をまとめてみると、結局この形式における対比構造は、次のように記述される。

$$2-3 \quad A \ni B \text{ の } ab \Rightarrow (ab)/A \ni ab/B$$

なお、これは、1-3とやはりよく似ている。同部分の対比の場あい、その部分をbで表すかabで表すかは、記号化の際の約束にすぎないし、また、左辺のA全体と対比される右辺の小文字部分をabとするかbとするかも、発想の起点での差にすぎず、思考形式を別にすれば、言語表現面における実質的な違いはないように見える。表面上は確かにそうなのであるが、AからBの小文字部分と同じものを析出できるかどうかという違い、換言すれば、右辺との関係で引きだされるAの性質の差が、1-3と2-3という類似形式を弁別する意義的な特徴として働いている、という意味をも含めるなら、両者は異なる言語形式と見ることもできる。ここでは、そういう見地から、別形式の扱いにしたわけである。

基本4項のうち1項だけ欠けたものとして、もう一つ、前型と同じく、たとえるほうの今度は事物・事象の箇所の現れない形式の検討が残っている。すなわち、「abのようなBのab」という形式である。ところが、これは、1-4の「aのようなBのb」とは違って、両辺の小文字部分が同じなので、意味のある比喩が成りたない。なぜかと言うと、この形式における直接の対比は、ほとんどの場あい、その小文字部分どうしの間で行われるが、それがどちらも同じものをさすことになる、abがabに似ているという無意味な恒等式になってしまうからである。仮に、その対比が、何かの部分であるabと、他のある事物・事象Bとの間で、一度成立したとしても、その後前と同じ部分を示すabが続いたのであれば、その構造が「(ab=B)のab」となり、要するに「abのab」ということになってしまうので、たとえ、ab₁が「腹」でab₂が「おなか」という別語だと考えたところで、とも

に〈腹部〉という同一対象に行きつくかぎり、やはり、正常な表現とはなりにくい。

また、事実、異なった対象の同じ部分の対比を表す場あい、たとえるほうの大文字部分を省略した形での簡略化は起こりえないと考えられる。例えば、「ウサギの目のような人形の目」が「ウサギのような(人形の)目」とはなっても、「目のような人形の目」という形で実現することはありえないのである。左右の辺、すなわち、たとえる側とたとえられる側とを入れかえた2-2の形式なら比喩として成立するが、この形式では比喩が実現しない、という結論になろう。

2-4 $ab \ni B$ の $ab \Rightarrow$ 不能

さて、次は、基本の4項のうち2項が欠けた形である。しかし、前述のように、左右どちらかの辺から2項とも欠けては比喩形式が得られないので、この場あいもやはり以下で検討する4種の組みあわせが、考える最大限である。それでは、まず、両辺の部分・側面・属性を示す小文字相当の項をもとに欠いた形式から考えてみよう。すなわち、「AのようなB」である。この形は1-5と全く同じである。そもそも、1-0系と2-0系との起点における差は、異部分の対比か同部分の対比かという点にあったわけである。ところが、その肝心の箇所、すなわち小文字部分が、少なくとも表面に出ないとすると、もはやa項もb項もないので、そういった区別は問題とならなくなる。したがって、全くの同形式になるのは当然だと言える。

しかし、それぞれのともかく言語面に現れていない小文字部分が、仮に、思考過程における観念としては存在したのに、言語的環境その他の何らかの事情で、省略された形で表現に定着したのだと考えるなら、その省略を可能にする条件としては、同部分の対比のほうが異部分の対比の場あいより有利なので、そのケースも確率的に高い、と予想することも、あるいはできるかもしれない。

だが、ともかく、結果として、その小文字部分はすでに存在しないわけである。そして、そのAやBにしても、そのように、相手との関係でそれぞれの小文字部分を析出できる名詞であるとは限らない。したがって、1-5の箇所でも検討したように、そのAやBが、そこから小文字部分を切りはなして想定できるにしろ、できないにしろ、また、想定する際の限定の強さがどの程度であるにもせよ、少なくともどのレベルかでAとBとを類似点を有する二者として取りあげたことが疑いのない事実である以上は、この形式における対比関係をそこに言語的に明示されたAとBとの間に認めておくのが妥当であろう。

そして、AとBとの対比における焦点の絞りは一定しないものの、少なくとも異部分対比は認められないので、1-5型を空見だしとして扱い、同部分対比の2-0グループ内にあるこの型のほうを正式に立てることにする。

対比構造は次のように記述される。

2-5 $A \ni B \Rightarrow A \circ B$ [≡ 1-5]

次に、たとえるほうでは部分・側面・属性を示す項が欠け、たとえられるほうでは事物・

事象を示す項が欠けた形を考えてみよう。すなわち、「Aのようなab」という形式である。ここでの対比は、まず、右辺ではそこに明示されたabが取りあげられていることが確かなので、左辺のAが、そのまま全体として対比項に立つ場あいと、そこから、言語化されていない小文字部分を析出して想定できる場あいとに応じて、2種類になる。

例えば、「かなだらいのような口」と言えば、その場所に明示せずに文脈に依存して伝達されるある人物の口と〈かなだらい〉そのものが対比されているので、前者の例になるだろう。また、例えば、「カバのような口」の場あいは、そこで話題となっているある人物の口の部分と、カバそのものではなく、言語的な条件によってそこに省略されている小文字部分の「口」との対比だと考えられるので、これは後者の例になるだろう。しかし、「口」の用法の拡大、その慣習化に伴って、この両者の間は必ずしもすっきりと区別できるというわけにはいかない。例えば、「どんぶりのような口」や「ほら穴のような口」などでは、「どんぶりの口がかけた」と言ったり、「ほら穴の口の部分」と言ったりするので、両者の中間的な場あいになるだろうし、「噴火口のような口」なども微妙である。

このように問題を残す例は確かにあるが、それでも、それぞれの典型的な例における構造上の差異が見られることも確かな以上は、やはり二つの対比関係を認めておくべきであろう。

そして、その小文字部分を析出できる例においては、すでにふれた2-3と同様に、そこに明示されていないAの小文字部分とBの小文字部分とが対比関係に立つが、この型でもやはり同一の小文字部分を想定するほかない。

結局、Aが全体として対比項に立つ場あいは同部分対比とは言えないので、一応1-6型に納め、1-6型で検討した結果、そこから切りはなして2-0グループに送った例を含めて、同一部分を析出できる場あいのほうのみ、この型で立てるのが妥当であろう。そこで、次のように記述しておく。

$$2-6 \quad A \ni ab \Leftrightarrow (ab)/A \ni ab/(B)$$

次に、これと逆に、たとえるほうでは事物・事象を示す項を欠き、たとえられるほうでは部分・側面・属性を示すはずの項を欠いた形を考えてみよう。すなわち、「abのようなB」という形式である。ところが、これは、1-7とよく似た形式である。そして、ここでの対比関係を考えてみても、仮に右辺の小文字部分が眼目だとすれば、左辺の事物・事象を示す項が表面に出ないかぎり、2-4の無意味な恒等式に等しくなるので、やはりB自体と左辺に明示されたabとの対比になり、意味上1-7との区別は認められない。したがって、1-1と2-1、1-5と2-5の場あいと同様の意味で、この2-7は、その発想の起点を別にすれば、1-7と実質的な差異はないとすべきだろう。

そして、同部分対比となりえない以上は、ここを空見だしとして、1-7のほうで正式に立てるのが適切な処置だと思われる。

形式的ながら、一応次のように記述しておこう。

2-7 $(ab \doteq B \Rightarrow ab/(A) \circ B) [= 1-7]$

次は、たとえるほうとたとえられるほうの両方とも、事物・事象を示す項を欠き、部分・側面・属性を示す項だけが残った形式である。それは「abのようなab」という形になる。この形式は一見1-8に似ているが、こちらのほうは小文字部分が、すなわち対比部分が全く同じなので、意味のある比喩が成りたない。もちろん、対比部分が同じでも、その主体となる対象が違えば、例えば、前掲の「力士の腹のような妊婦のおなか」のような比喩は成りたつことがあるが、しかし、そういった比喩的思考過程が、両方の主体を省略したこの形式に、「腹のようなおなか」という表現として定着するはずはないのである。

2-8 $ab \doteq ab \Rightarrow$ 不能

基本4項中2項を欠いた形式は、これですべてである。そして、2-0グループにおいても、3項以上を欠けば比喩形式が成立しないので、結局、以上が検討を要する全言語形式ということになる。したがって、1-0と2-0という2種の基本型から出発して、各変形におけるそれぞれの対比関係を考察する作業は、これで終わりである。

第5段 検討結果のまとめ

そこで、1-0～1-8、および、2-0～2-8の計18種の型における言語形式と対比構造との関係をまとめて、その検討結果のみ、次に列挙しておこう。ただし、各箇所での記述と違い、どの構造と実質的に同じであるとか、どの型と完全に重なるとか、対比の焦点がどこにあるとか対比構造中に用いた観念をさす語がその形式中に言語化されているかどうかとか、いった、いわば説明的な情報はいっさい省き、もっぱらその形式が伝達しうる対比事実の骨子だけを簡潔に記すことによって、一覧して各形式相互の関連・異同をとらえるように配慮するとともに、1-0グループと2-0グループとを左右に配して、その比較の便を図ることにする。

$\boxed{1-0}$ A の $a \doteq B$ の $b \Rightarrow a/A \circ b/B$	$\boxed{2-0}$ A の $ab \doteq B$ の $ab \Rightarrow ab/A \circ ab/B$
$\boxed{1-1}$ A の $a \doteq B \Rightarrow a/A \circ B$	$\boxed{2-1}$ (A の $ab \doteq B \Rightarrow ab/A \circ B)$
$\boxed{1-2}$ A の $a \doteq b \Rightarrow a/A \circ b/B$	$\boxed{2-2}$ A の $ab \doteq ab \Rightarrow ab/A \circ ab/B$
$\boxed{1-3}$ A $\doteq B$ の $b \Rightarrow A \circ b/B$	$\boxed{2-3}$ A $\doteq B$ の $ab \Rightarrow ab/A \circ ab/B$
$\boxed{1-4}$ $a \doteq B$ の $b \Rightarrow a/A \circ b/B$	$\boxed{2-4}$ $ab \doteq B$ の $ab \Rightarrow$ 不能
$\boxed{1-5}$ (A $\doteq B \Rightarrow A \circ B)$	$\boxed{2-5}$ A $\doteq B \Rightarrow A \circ B$
$\boxed{1-6}$ A $\doteq b \Rightarrow A \circ b/B$	$\boxed{2-6}$ A $\doteq ab \Rightarrow ab/A \circ ab/B$
$\boxed{1-7}$ $a \doteq B \Rightarrow a/A \circ B$	$\boxed{2-7}$ ($ab \doteq B \Rightarrow ab/A \circ B)$
$\boxed{1-8}$ $a \doteq b \Rightarrow a/A \circ b/B$	$\boxed{2-8}$ $ab \doteq ab \Rightarrow$ 不能

第2節 比喩関係から見た言語形式

第1段 対比事実を規準とした整理

これまででは、比喩表現の言語形式のほうをおさえて、そこに示される対比の関係を考えてきたわけであるが、今度は、ある表現対象を他のある事がらにたとえる際に実現する対比事実のほうから、それを示す言語形式を探してみよう。

そこで、まず、前節の言語形式ごとのまとめを直接の対比関係に規準を変えてまとめ直そう。ただし、18種の型のうち、成立しない2-4と2-8とを除いた16型について整理して示す。

- A→B : (1-5型), 2-5型
 A→b : 1-3型, 1-6型
 a→B : 1-1型, 1-7型
 (ab→B) : (2-1型), (2-7型)
 a→b : 1-0型, 1-2型, 1-4型, 1-8型
 ab→ab : 2-0型, 2-2型, 2-3型, 2-6型

ここで、矢じるし「→」は、直接の対比関係にあるものについて、たとえるほうがたとえられるほうにかかっている、その方向を示す。したがって、右向きの矢じるしを左側は左側の対象で右側の対象をたとえている、という意味になる。なお、日本語の性質上、思考過程とは逆に、たとえることばのほうが先に言語面に現れるので、少なくともこの言語形式の比喩では、左向きの矢じるしは出てこない。

第2段 比喩関係の事実上の重複

さて、このまとめを眺めてみると、対比関係に6種類あり、言語形式には、不能の二つを除いてもなお16種の型があるように見える。しかし、これは機械的に整理したためであって、事実上は、もう少し単純な組み合わせにまとめられるはずである。そこで、前述の各言語形式ごとの検討結果を取りいれて、対比事実の観点から再整理してみよう。

最初に、対比の種類について考える。この面では、すでにふれたように、また、まとめの表で()に入れて示してあるように、 $\langle ab \rightarrow B \rangle$ は $\langle a \rightarrow B \rangle$ に吸収されるべきものであることに気づく。なぜかと言うと、この両者は、その思考の出発点こそ違え、たとえるほうの左辺は、要するに、Aの小文字部分が対比項として取りあげられたものであり、たとえるほうの対象とたとえられるほうの対象とから同一部分を析出してそこに焦点を絞るか、あるいは、異なった部分の対比を予想するか、という前提の違いに基づく命名の差にすぎないからである。したがって、実質的には同一の対比事実にたどりつくと思われる以上は、その対比関係そのものに重点を置く分類では、当然一つにまとめられるべき性質

のものと言えよう。

そして、一つにまとめる際にどちらを正式に立てるかが、次の問題であるが、右辺が小文字部分でなくB全体で対比項に立つので、少なくとも同一部分の対比にならないことは明らかだから、ともかくAの部分であることを示すにすぎないaとして記述し、 $\langle a \rightarrow B \rangle$ のほうを表に出しておくほうが無難だと考えられる。

これをまとめると、対比関係のほうは、実質、5種類ということになる。その5種類というのは、つまり、たとえるほうとたとえられるほうの全体どうしの対比、たとえるほうの全体とたとえられるほうの部分との対比、その逆である、たとえるほうの部分とたとえられるほうの全体との対比、それに、部分どうしの対比として、異なる部分の場合と同じ部分の場合の2種類、という内わけになる。

第3段 言語形式の事実上の重複

今度は、言語形式のほうの事実上の重複を調べてみよう。

まず、1-5型と2-5型とは、思考の起点における観念上の差があるだけで、言語形式上は全く同一であるから、一つにまとめて考えても全然問題はない。その際、この形式から同部分の対比ということが積極的に引きだせないまでも、ともかく異部分の対比がこの形に簡略化することはほとんど考えられないので、表で1-5型を()に入れておいたように、一応、「A (のab) のようなB (のab)」という2-5型のほうを正式に立てておく。

また、 $\langle ab \rightarrow B \rangle$ を、実質的に $\langle a \rightarrow B \rangle$ と同じだと判断して、 $\langle a \rightarrow B \rangle$ のほうに吸収させたことに伴って、言語形式においても、2-1型は1-1型に、また、2-7型は1-7型に、それぞれ吸収されることになる。すなわち、左辺のAの小文字部分として、aと記すかabと記すか、というのは、思考起点における前提の違いにすぎず、現れたものとしては結局同じことに収斂するし、どちらにまとめるかという点では、右辺でB全体が対比項に立つこれらの形式が、少なくとも同部分対比を写しださないことは確実なので、単にAの小文字部分であることを示すだけのaと記した1-0グループのほうを表に出し、「AのaのようなB」という1-1型、および、「aのようなB」という1-7型のほうを正式に立てておくのが適当だと思われる。

したがって、言語形式のほうは、実質、13種類ということになる。その13種類というのは、1-0グループの、2-5型に吸収された1-5型を除くすべてである8種類、2-0グループのほうでは、その2-5型と、右辺の小文字部分の明示された型のすべてとの計5種類、という内わけになる。

第4段 修正整理

以上のような手なおしの結果、前掲のまとめは、次のように簡潔に再整理することができる。

$A \rightarrow B$:	A	\equiv	B	[2-5]
$A \rightarrow b$:	A	\equiv	Bのb	[1-3]
	:	A	\equiv	b	[1-6]
$a \rightarrow B$:	Aのa	\equiv	B	[1-1]
	:	a	\equiv	B	[1-7]
$a \rightarrow b$:	Aのa	\equiv	Bのb	[1-0]
	:	Aのa	\equiv	b	[1-2]
	:	a	\equiv	Bのb	[1-4]
	:	a	\equiv	b	[1-8]
$ab \rightarrow ab$:	Aのab	\equiv	Bのab	[2-0]
	:	Aのab	\equiv	ab	[2-2]
	:	A	\equiv	Bのab	[2-3]
	:	A	\equiv	ab	[2-6]

第5段 比喩関係実現への結合条件

これを、比喩関係ごとに、それがどういう要素とどういう要素が「のような」を介して結びついたときに実現するか、という観点でまとめると、下図のようになる。

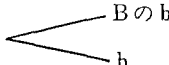
この整理の結果、例えば、次のようなことがわかる。

- 1) $\langle A \rightarrow B \rangle$ という対比関係は、「 $A \equiv B$ 」の形式においてのみ実現し、左右の辺のいずれか一方にでも小文字部分が言語化されていれば、別の対比関係に移行してしまう。
- 2) $\langle A \rightarrow b \rangle$ という対比関係は、左辺に小文字部分がなく、右辺の小文字部分が言語化されていれば、その大文字部分が明示される

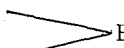
かどうかにかかわらず成立する。


$A \rightarrow B$: A ————— B

- 3) $\langle a \rightarrow B \rangle$ という対比関係は、逆に、右辺に小文字部分がなく、左辺の小文字部分が言語化されていれば、その大文字部分が明示されるかどうかにかかわらず成立する。

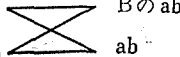
$A \rightarrow b$: A  Bのb
b

- 4) $\langle a \rightarrow b \rangle$ という対比関係は、左右両辺の異なった小文字部分がともに言語化されていれば、どちらの辺の大文字部分がどうであってても成立する。

$a \rightarrow B$: Aのa  B
a

$a \rightarrow b$: Aのa  Bのb
a b

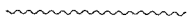
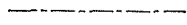

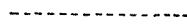
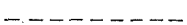
- 5) $\langle ab \rightarrow ab \rangle$ という対比関係は、左辺の大文字部分と右辺の小文字部分がともに言語化されていれば、その他の部分がどうであっても成立する。

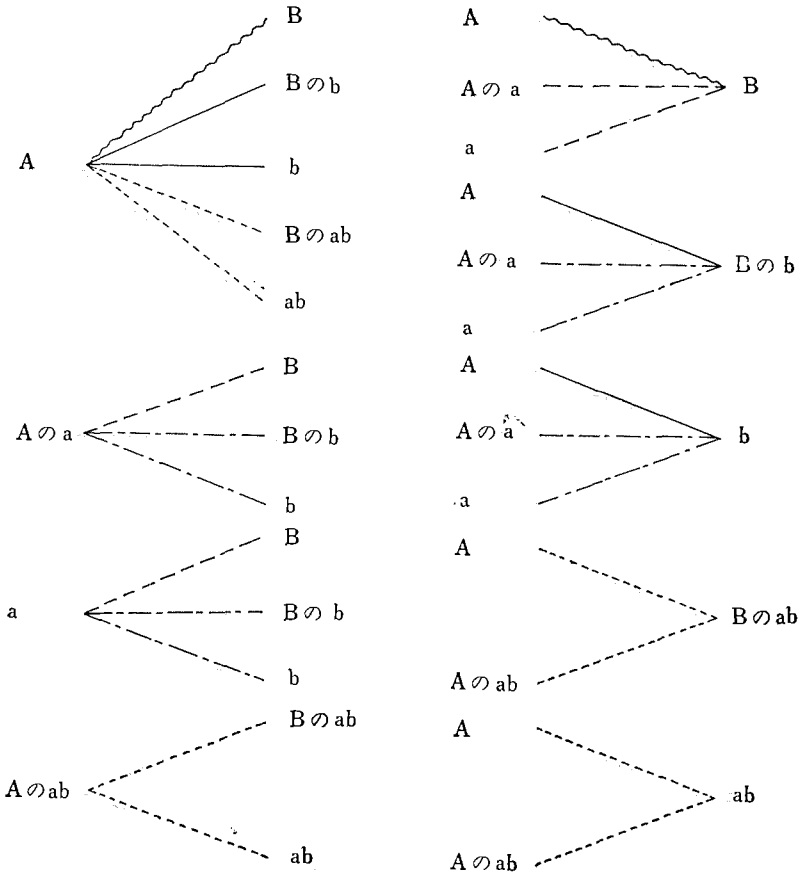
$ab \rightarrow ab$: A  Bのab
Aのab ab

第6段 構成要素別に見た結合と対比の関係

今度は角度を変えて、各要素を単位とし、それが「のような」を介してどういう要素と結びつくことによって、どういう対比関係を写しだすか、という観点から、要素ごとに整理すると、下図のようになる。

なお、それぞれの結びつきが表す対比関係は、次のような線の種類によってその差の区別を簡略化して示すことにする。

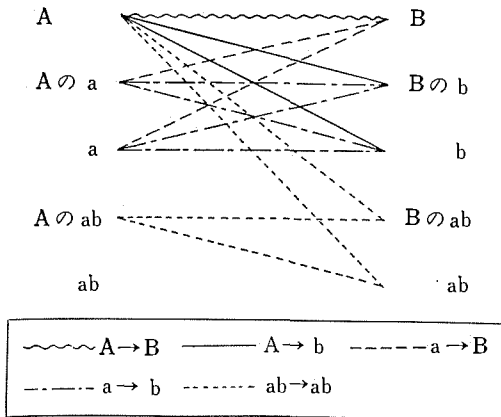
A → B : 波線		a → b : 鎖線	
A → b : 実線		ab → ab : 点線	
a → B : 破線			



このような整理をすると、その結果から、例えば次のようなことがわかる。

- 1) 左辺に大文字部分のAだけが言語化されている場あいは、右辺はどうであっても対比関係は成立する。ただし、右辺の5種類の現れ方に応じて、5種類の対比関係が得られるわけではない。右辺が大文字部分だけであれば〈A→B〉となり、小文字部分が現れば、大文字部分が現れるかどうかにかかわらず、その小文字がbである場あいは〈A→b〉、abである場あいは〈ab→ab〉となる。
- 2) 左辺で小文字部分のaが言語化されている場あいは、大文字部分のAが現れようが現れまいが、右辺の小文字部分のbが現れなければ〈a→B〉となり、現れれば、その大文字部分のBが現れるかどうかにかかわらず、〈a→b〉となる。
- 3) 左辺が「Aのab」として現れた場あいは、右辺の小文字部分のabが現れることを対比関係の成立するための必要条件とし、それが満たされれば、その大文字部分のBが言語化されるかどうかにかかわらず、〈ab→ab〉となる。
- 4) 左辺で大文字部分が言語化されずにabだけが現れた場あいは、右辺がどうであっても、比喩的な対比関係は成立しない。
- 5) 右辺に大文字部分のBだけが言語化されている場あいは、左辺の小文字部分のaが現れなければ〈A→B〉となり、現れれば、その大文字部分のAが現れるかどうかにかかわらず、〈a→B〉となる。
- 6) 右辺で小文字部分のbが言語化されている場あいは、大文字部分のBが現れようが現れまいが、左辺の小文字部分のaが現れなければ〈A→b〉、現れれば〈a→b〉となる。

- 7) 右辺の小文字部分のabが言語化されている場あいは、その大文字部分のBが現れようが現れまいが、左辺の大文字部分のAが現れることを対比関係の成立するための必要条件とし、それが満たされれば、その小文字部分であるabが言語化されるかどうかにかかわらず〈ab→ab〉となる。以上の関係を一覧できるようにまとめると、右図のようになる。



第7段 比喩関係と言語形式との各対応における対比構造

これまでのいろいろな角度からの整理をとおして、対比事実のほうから見た言語形式との関係がある程度明らかになったはずであるが、先の検討で得られた5類の比喩関係と13種の言語形式とから最終的に導かれる13種類の型をそれぞれの該当例とともに掲げ、それぞれにおける対比構造の違いを図で示しておくことにする。なお、この提示に際しては、前節で、事物・事象と呼んで扱ってきたものが、特にそのうちのどの面を取りあげるかという点が問題とならない扱いを受ける場あいを「全体」と表示し、同じく前節で、部分・側面・属性と呼んで扱ったものを「部分」で代表させることにする。また、対比構造は次の約束に従って図示する。

- 1) 例えば、「男のような女」という例のように、左辺のたとえるほうの語も右辺のたとえられるほうの語も、ともに限定を受けない名詞で対応している場あい、たとえるほうの「男」は〈男一般〉をさし、たとえられるほうの「女」は〈話題になっているある特定の女〉をさすことになるので、たとえるほうを左側に円で示し、たとえられるほうは右側に円の部分である扇形で表す。
- 2) 実際に言語面に明示されたものを実線で表示し、言語化されていないものは点線で表示する。
- 3) たとえるものとたとえられるものとの直接に対比されている部分、つまり、対比の焦点を、斜線の箇所として表示する。
- 4) 斜線部の形は、対比項に立つものが全体であるか部分であるかによって、次のように区別する。すなわち、その全体が対比される場あいは、左側では円、右側では扇形の、それぞれ全部とし、部分が対比項に立つ場あいは、右側を半径の短い扇形として、左側は、異部分対比の際には半円、同部分対比の際には右側と同じ扇形とする。
- 5) 斜線部のうち、たとえるほうとたとえられるほうの共通点を、左側の円と右側の扇形との重複部分である小さな扇形で表すこととし、特に黒く塗って明示する。

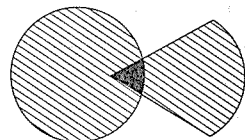
《第1類》全体→全体

『第1型』 $A \ni B$

〔例 1.1〕 男のような女

〔例 1.2〕 帯のような川

〔例 1.3〕 チョウのようなカード



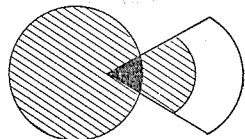
《第2類》全体→部分

『第2型』 $A \ni B \text{ の } b$

〔例 2.1〕 ドングリのような太郎の目

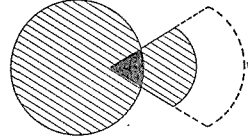
〔例 2.2〕 真珠のような花子の涙

〔例 2.3〕 やかんのようなおやじのはげ頭



『第3型』 $A \ni b$

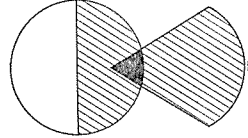
- 〔例 3.1〕 ドングリのような目
- 〔例 3.2〕 真珠のような涙
- 〔例 3.3〕 やかんのようなはげ頭



《第3類》部分→全体

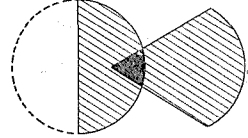
『第4型』 $A \text{の} a \ni B$

- 〔例 4.1〕 卵の黄みのような夕日
- 〔例 4.2〕 跳躍選手のふくらはぎのようなフランスパン
- 〔例 4.3〕 偉人の頭骸のようなヒマワリ



『第5型』 $a \ni B$

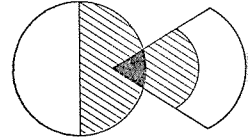
- 〔例 5.1〕 黄みのような夕日
- 〔例 5.2〕 ふくらはぎのようなフランスパン
- 〔例 5.3〕 頭骸のようなヒマワリ



《第4類》部分→異部分

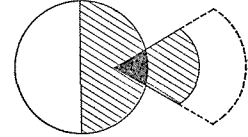
『第6型』 $A \text{の} a \ni B \text{の} b$

- 〔例 6.1〕 動物の歯のような娘の皮膚
- 〔例 6.2〕 ネズミのしっぽのようなサツマイモの根
- 〔例 6.3〕 小兵力士の太もものような横綱の腕



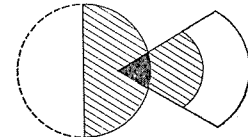
『第7型』 $A \text{の} a \ni b$

- 〔例 7.1〕 動物の歯のような皮膚
- 〔例 7.2〕 ネズミのしっぽのような根
- 〔例 7.3〕 小兵力士の太もものような腕



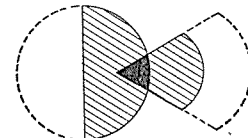
『第8型』 $a \ni B \text{の} b$

- 〔例 8.1〕 歯のような娘の皮膚
- 〔例 8.2〕 しっぽのようなサツマイモの根
- 〔例 8.3〕 太もものような横綱の腕



『第9型』 $a \ni b$

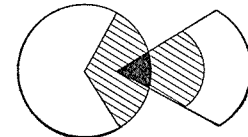
- 〔例 9.1〕 歯のような皮膚
- 〔例 9.2〕 しっぽのような根
- 〔例 9.3〕 太もものような腕



《第5類》部分→同部分

『第10型』 $A \text{の} ab \ni B \text{の} ab$

- 〔例 10.1〕 関取の腹のような妊婦のおなか
- 〔例 10.2〕 ゾウのけつのようなあんこ型力士のおしり
- 〔例 10.3〕 カモンカの足のような長身選手の脚部



『第11型』 Aのab ≐ ab

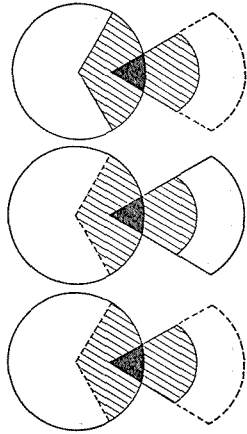
- 〔例 11.1〕 関取の腹のようなおなか
- 〔例 11.2〕 ゾウのけつのようなおしり
- 〔例 11.3〕 カモシカの足のような脚部

『第12型』 A ≐ Bのab

- 〔例 12.1〕 関取のような妊婦のおなか
- 〔例 12.2〕 ゾウのようなあんこ型力士のおしり
- 〔例 12.3〕 カモシカのような長身選手の脚部

『第13型』 A ≐ ab

- 〔例 13.1〕 関取のようなおなか
- 〔例 13.2〕 ゾウのようなおしり
- 〔例 13.3〕 カモシカのような脚部



第7章 比喩の成立と言語的条件

前章の第1節と第2節で、「のような」を介して対応する名詞の結合がどういふ比喩的対比を写しだすかを、言語形式側と対比事実側との二つの視点から分析し、検討した。この第7章では、言語形式と比喩的対比の関係を考察する上での問題点を指摘し、これまでの検討の位置づけを試みるとともに、第2部への方向を示す橋わたしとしたい。

第1節 指標の多義性

これまでに掲げてきた「名詞のような名詞」といふ言語形式は、直接の対比関係がどうであろうと、ともかく、そのいずれも、そこに比喩関係が問題なく成立しているものとして扱ったわけである。ところが、比喩表現の代表的な指標と言える「よう」でさえ、すでに第1章でも軽くふれたように、それがあつるからとつて、必ず比喩表現になるとは限らないのである。本章で指摘したい第1点はそれである。そして、「よう」があつるから比喩だとは限らないといふどころか、「よう」があつて比喩を表すのは、助動詞「ようだ」の用法の種類から見れば、むしろその一部分にしかすぎないのである。今、国立国語研究所の『現代語の助詞・助動詞——用法と実例——』に従つて、その用法の広がりを示すと、次のようになる。(pp. 275—278 参照)

- 1) ある事物が他の事物に似ているといふ意味を表わす。

〔例〕 二少年の体はつばめのように左右に飛びちがつて……

- 2) 内容を指示することを表わす。ある事物が他の事物に等しいといふ関係。

〔例〕 以上のような判断をすると、ベルリン封鎖解除を基にするソ連の態度の急変が極東にも影響を及ぼさないとはいえぬ。

- 3) 例示の意味を表わす。ある事物が他の事物に関する一例であるよつな関係。

〔例〕 電波探知機のようなのは使わないのですか？

- 4) 不確かな、または^(たゞ)円曲な断定の意味を表わす。

〔例〕 思いなしか純子さんの瞳は、きらきらと濡れているように私には思われた。

助動詞「ようだ」のこの4種類の用法のうち、比喩表現に関係のあるのは、最初のものだけである。しかも、「ある事物が他の事物に似ている」からとつて、そのすべてが比喩であるとは限らないのである。ある事物をほかのある事物に似ているとする判断がそのまま比喩になるのではなく、実際には別々の事物だといふ明確な認識のもとに、その両者の類似性をとらえ、一方にたとえるといふ修辭意識を持つ時に、初めてそれが比喩表現となる基盤が得られるのだ、と考えられる。したがつて、向こうから歩いてくる人がげを遠くで発見して、例えば、「課長のようなだ」とつぶやいたとしても、そこには、その人物が

ほんとうは課長ではないというはっきりした意識があるわけではないし、また、課長以外のだれか、あるいは何かを課長にたとえるという修辞意識はほとんど認められないので、たいていの場あい、比喩とはならない。これは、似ていることを契機として起こった「不たしかな断定」と言えようが、「似ている」という意味を表すと思われるものでも、例えば、「かけ算の意味はエックス (x) のような記号 (×) で表す」とか、「エルの小文字 (l) は大文字のアイ (I) のような、また、数字のいち (1) のような字だ」とかいった例は、たとえるという修辞意識が明瞭に感じとれないかぎり比喩表現とは言いにくい。このように考えると、助動詞「ようだ」の用法のほんの一部として比喩を表すにすぎないということがはっきりするし、その結果として、頻度の点でも、「よう」の用例のかなりの部分は比喩表現でない、という予想も立つ。しかし、そうは言っても、それは「よう」を単独に扱う場あいのことであって、「よう」と比喩との関係はけっして偶然的なものではないし、また、その関係が薄いと言うこともできない。それを単独に考察するかぎりでは、前掲4種の用法の出現する言語的環境は、なるほどどれも同じである。すなわち、1) から4) まで、すべて、ノ格の体言、コソアド系の連体詞、動詞・形容(動)詞とある種の助動詞の連体形、の後につくので、この点からの区別は不可能である。だが、「よう」だけを切りはなして考えたり、あるいは、その直前の語だけに注目したりするのではなく、それ以外の指標との組みあわせというあたりまで目を転ずれば、例えば、「まるで…でも…よう」といった、ほとんど比喩表現専用とも言うべき形式がいくつか抽出できる可能性は十分にあると考えられる。そのあたりの実態については、次の第2部で、現代文学の文章の場あいがある程度おさえられるはずである。

第2節 言語形式・対比構造・比喩関係

ここで指摘しておきたい第2点は、前章における考察がいわば実験室での基礎作業にすぎないことである。すなわち、比喩表現を成立させている「よう」が、そこで対比関係の変異に関与する条件の一つとして、その「よう」の支配が及ぶ広がり、つまり、「よう」の勢力範囲という問題があるなど、現実にはもっとはるかに複雑な相を呈するということである。まず、前章の最終的な整理から、言語形式と直接の対比関係とのかかわりを調べてみると、「よう」をはさむ2項、すなわち、「よう」の直前の語と直後の語とが直接の対比関係をもって対応しているのは、13の型のうち、第1型・第3型・第4型・第5型・第7型・第9型・第11型の7種の型だけである。したがって、残る第2型・第6型・第8型・第10型・第12型・第13型の6種の型においては、「名詞xのような名詞y」という言語形式から即座にxとyとの対比を抜きだすのは早計だ、ということになる。ということは、つまり、言語形式「xのようなy」が確かに比喩表現だとして、そこから直ちにxとyとの類似性に基づく対比を機械的にとらえるのは無謀だということになるわけである。その

前に、対比構造との関連で言語形式の型を考える手づぎを怠ることは許されない。

第6章で扱ったのは、「のような」をはさむ名詞の対応がともに「全体」と「部分」という規則的な形で現れた比較的単純な場あいであり、バリエーションにしても機械的な操作によって得られる典型的な型についてであった。この面の考察の出発点としては、このような単純なところからの着手は当然だし、また、基礎的な部分をおさえる役はそれなりに果たしただろう。しかし、現実にはもっと複雑な形で現れることをもう一度思いかえしておくのもむだではあるまい。その複雑さをもたらすものの一つは、この節の冒頭に例としてあげた「よう」の勢力範囲の問題である。

その基礎的な考察の際には、わかりやすくするために、「AのaのようなBのb」および「AのabのようなBのab」という基本形、あるいは、その変形の形で示したのであるが、それは典型的な比喩形式を、しかも解釈を加えて整理した結果を表示したものであり、現実のこの種の比喩表現は、それほど整然と現れるわけではない。例えば、「丸太のような男の腕」とならず「丸太のような腕の男」となったり、「ゾウのような女の足」とならず「ゾウのような足の女」となったりするように、全体と部分との出現順序がこれまで検討しなかった形で現れることも珍しくはないのである。それに、典型的な場あいを除いては、「全体」と「部分」というふうにすっきりと分かれるとは限らない。そもそも、部分と言ひ、全体と言っても、結局は相対的なものにすぎないのだ。〈指〉に対しては全体に当たる〈手〉も、〈腕〉に対しては部分であり、その〈腕〉も、〈体〉に対しては部分でしかないように、部分とか全体とかいったものは、一つの語や、それがさす対象にそなわったものではなく、あくまでも相対的な関係として存在するのである。したがって、実際問題として、現実の表現におけるある語が、全体が想定された上での部分を表しているのかどうかという見きわめはむずかしい。しかし、それが比喩形式と事実上の対比との関係にかかわるといふ見とおしで、全体と部分との区別が明確な場あいをまず考えることによって、基礎的な事実をとらえようとしたわけである。だが、一般的に言えば、この形式は、「よう」の前後にノ格の名詞を配したものであるから、ここでは、全体と部分といった解釈を加える以前の、そういう客観的で形式的な事実を起点として、その言語形式が、「よう」の勢力範囲の違いや、その他のどういう条件によって、どういう意味構造上の差を生じ、そのことが、ひいては、対比事実上のどういう差に行きつくのか、を考えてみたい。つまり、比喩に関連したある言語形式から引きだすことのできる構造と意味の広がりをおさえておこうというのである。

前掲の第1～13型は、全体とか部分とかいう点を無視すれば、次の4形式に大別できる。すなわち、「のような」をはさむ両辺が1項ずつの形式、左辺が2項で右辺が1項の形式、逆に、左辺が1項で右辺が2項の形式、それに、両辺とも2項という形式である。

ここでは、解釈を加えないのであるから、異なる名詞はそれぞれA, B, C, D, で表し、説明の際にそれ以外の名詞が必要となればEを用いることにする。また、同じ名詞は同じ

記号で表す。なお、ここで取りあげる形式においては、ノ格の名詞や、≡記号で記す「のよな」ののかけ先は、そこに提示された名詞に限ることとし、その先まで飛んでかかることはないものとして考えることにする。例えば、「小学生のゾウのような足の花子」という表現があって、そのうちの「小学生の」部分が「ゾウ」にではなく「花子」にかかる時、「小学生のゾウのような足」の部分を切りはなして、「AのB≡C」という言語形式に該当する例として扱うことはしない。また、「ザクロのような傷ぐちの手あて」は外見上は「A≡BのC」であるが、「手あて」の部分は比喩の成立に関与しないので、それは形式の偶然の一致であると判断し、「の手あて」の部分を省いた形で「A≡B」の該当例とする。すなわち、ここで扱う言語形式は、それだけで比喩表現が完結しており、かつ、比喩の成立にかかわる要素だけから成る名詞句をさすわけである。

第1段 AノヨウナB

最初に、両辺が1項ずつの形式について考えてみよう。この形式は、「A≡A」となるか「A≡B」となるかのどちらかである。

まず、前者から検討する。これは「のよな」をはさむ両辺の項が全く同じ名詞になっている形式である。こういう形の比喩表現はありうるであろうか。例えば、マツの枝ごしに山と水とが鮮やかに描かれている絵を見て、「絵はがきのよな絵」と言うことがある。それを少し説明的に「絵はがきの絵のよな絵」と言うこともあるだろう。そうすれば、そこに「絵のよな絵」という形式が出現することになる。また、あんこ型力士のうしろ姿を見て、「ゾウのよなしり」と言うこともありそうだ。これをもう少し詳しく「ゾウのしりのよなしり」と言うこともあるかもしれない。その場あいは、「しりのよなしり」という形式が確かに現れる。このような例は、どちらも現象的には「AのよなA」つまり「A≡A」のように見える。しかし、これらは、あくまで現象的にそのような形式が偶然現れたものにすぎない。どちらの例も、その「A≡A」に相当する部分だけで、比喩表現は完結していないからである。すなわち、前者の場合あいは、「絵」と「絵」とが類似性をもって対比されているわけではなく、「絵はがきの絵」と「(そこで話題になっている本ものの)絵」とが対比されているのであり、後者の場合あいは、「しり」と「しり」との対比ではなく、「ゾウのしり」と「(そこに見える力士などのある特定の)しり」との対比なのである。したがって、どちらも、「A≡A」という形式ではなく、「AのB≡B」の「B≡B」の部分だけを強引に切りはなして問題としたものにすぎない。

このような偶然に起こった他形式の切れ端ではなく、それだけで完結した比喩表現として「A≡A」の形式がありうるかどうかを検討してみよう。

その前に、「AのよなB」すなわち「A≡B」という言語形式から、2種類の対比関係を導きうる、という指摘をくり返しておきたい。一つは、もちろん、〈AのB〉であり、もう一つは〈(AのB)の(CのB)〉である。例えば、前者は「ダイコンのよな足」のよ

うな場あいであり、後者は「カモシカのような足」のような場あいである。後者においては、その〈足〉と対比されるのは〈カモシカ〉そのものではなく、〈カモシカの足〉であって、詳しく言えば、「カモシカの足のような（だれかの）足」となる。前者においては、「ダイコンの足のような足」とは言えないから、そこに言語化されたものどうしの過不足のない対比、つまり、「ダイコン」という語がさし示す〈ふつうのダイコン〉そのものと、「足」という語が文脈の助けを借りてさし示す〈話題の人物のある特定の足〉との対比が行われている。したがって、前者は〈ダイコンの足〉、後者は〈カモシカの足〉（だれかの足）ということになる。換言すれば、前者は、異なった対象の間の対比であり、後者は異なった対象の同一部分の間の対比なのである。このことを念頭において、「AのようなA」という形式の比喩の成立条件を考えてみよう。

まず、「のような」をはさむ両辺の「A」という語が、ともに全く同一の指示体〈A〉を持つ場あいは、この「A≒A」という形式の比喩表現は実現しないと思われる。その理由は次のように考えられる。この形式から導きうる対比関係は、前述のように、〈AのA〉と〈(AのA)の(BのA)〉との2種類である。第1の場あいは、2個の「A」が全く同じ対象〈A〉をさすかぎり、同じものどうしの対比ということになる。あるものをそのもの自体にたとえるのは無意味だから、こういった比喩表現はありえない。前掲の2例の場あいは、「絵はがきの絵のような絵」にしても「ゾウのしりのようなしり」にしても、その「絵」や「しり」という語がさす対象は、〈絵はがきの絵〉と〈現実の絵〉、〈ゾウのしり〉と〈力士のしり〉というように、別々のものなのである。

第2の場あいは〈AのA〉と〈BのA〉との対比である。異対象の同部分対比という条件なら、長い首をキリンにたとえるなど、いくらも例があるし、逆に同対象の異部分対比だとしても、上半身の極度に発達した筋骨隆々たる力士について「(自分の)ふくらはぎのような腕」と形容することも可能なので、右辺は〈BのA〉であれ〈AのB〉であれ、それと左辺の1個のAとの関係は問題がない。問題は左辺の〈AのA〉の意味づけである。これも現象的には現れる可能性がないとは言えない。例えば、「親の親」や「友だちの友だち」、「隣の隣」や「下の下」、あるいは「中心の中心」や「傑作の傑作」、さらに、「本の本」や「意味の意味」などのように、ある名詞のノ格がそれと同じ語に結合するケースは確かにある。しかし、それらは、その語の語彙的な意味は同じだとしても、それが何をさすかという文脈的な意味としての指示体は同じだとは言えない。「親の親」や「友だちの友だち」の場あいは、最初の「親」や「友だち」は話し手や話題の人物から見た〈親〉や〈友だち〉をさし、それを〈親₁〉〈友だち₁〉と呼ぶなら、2番目の「親」や「友だち」はその〈親₁〉なり〈友だち₁〉なりを視点にとった、〈親₁の親〉つまり〈親₂〉、および、〈友だち₁の友だち〉つまり〈友だち₂〉をさす。「隣の隣」や「下の下」の場あいもこれに準ずる。すなわち、最初の「隣」や「下」は、話し手の位置といったある規準点から見た〈隣〉や〈下〉であり、2番目の「隣」や「下」はその〈隣₁〉や〈下₁〉に視点を移した

場あいの〈隣〉や〈下〉,つまり〈隣₂〉や〈下₂〉をさす。「中心の中心」や「傑作の傑作」などは、単なる強調のためのくり返しに見えるかもしれないが、強調となるのはあくまで結果なのであり、表現過程においては以上と同方向の思考があると考えられる。すなわち、初めの「中心」や「傑作」が比較的緩い判定規準による限定を受けたある広がり〈中心₁〉や〈傑作₁〉をさすのに対し、2番目の「中心」や「傑作」は、その〈中心₁〉や〈傑作₁〉に指定された範囲のうちの、さらにきつい判定規準の適用によって限定された、より狭い部分、つまり、〈中心₂〉や〈傑作₂〉をさすからである。ただ、「親の親」や「隣の隣」などと違うのは、それらの場あいは、〈親₂〉や〈隣₂〉が〈親₁〉と〈隣₁〉を起点としてはいるが、それとは別の対象をさすのに対し、〈中心₂〉や〈傑作₂〉は〈中心₁〉や〈傑作₁〉の中に含まれ、そのうちの一部をさす点である。前者を線的な展開と呼ぶなら、後者はいわば面的な展開と言うことができよう。もう一組の「本の本」や「意味の意味」のほうはどうなるだろうか。先行要素の名詞は、「本」も「意味」も内容やテーマをさす。これを〈本₁〉や〈意味₁〉とする。後続要素のほうは、「本」は〈本₁〉を扱う書物をさし、「意味」は〈意味₁〉の一側面であり、そこでの問題点などをさすことになる。

このように、前の「A」と後の「A」とは、〈A₁〉と〈A₂〉という多少とも違った指示体を持つことが、いろいろな種類の結合において確かめられる。ところが、今検討しているのは、両辺の「A」が全く同一の事実〈A〉をさし示す場あいなので、いずれもその条件に当てはまらない。そして、それに該当しそうな「AのA」というAどうしの結合がほかに考えられないとすれば、やはり同一指示体を持つこの形式は起こりえないことになる。理論的にも、全く同じものをさす2個のAが「AのA」という形で現れることは考えられないし、仮に現れたとしても、その「AのA」全体の意味を理解するのはむずかしい。したがって、〈(AのA)〇(BのA)〉という対比のほうも考えようがないことになる。結局、2個のAが同じ事実を指示するかぎり「A≐A」という言語形式が意味のある比喩表現となることはありえないという結論になるわけである。

それでは、2個のAがそれぞれ別々のものをさす場あいにはどうであろうか。2個のAが異なる指示体を持つ、と言う時には、3種の違ったケースが考えられる。第1は、語源的なつながりはともかくも、現在では別語と考えられている二つ以上の同音語が使用された場あいである。例えば、「本もののタコのようなタコ」のような例はそれに入る。しかし、現代語というレベルで考えるなら、その2個のA、つまり、この例では「タコ」に相当する部分の、表記上の都合に基づくいわば偶然の一致にすぎない。すなわち、「蛸」と「胤」、あるいは例を替えれば「豚尻」ともなりえようが、ともかく、そういう漢字表記を避けて、かなで記したために、たまたま「A≐A」のような外見を呈することになったまでのことである。したがって、言語主体に別語意識がある以上は、「A≐A」ではなく、少なくとも「A₁≐A₂」と考えるべきであり、つまりは「A≐B」におけるAとBとが似かよった体裁をそなえている場あいに類するものとすべきだろう。そして、もし別語意

識がなく、Aという一語が持っている二つの別の意味だと考えるなら、次の第2の場あいになる。なお、いわゆる同音異義語の場あいは、まさに偶然の現象的一致にすぎないから、もっとはっきりと「A≡B」という形式に属する性質のものである。例えば、芭蕉・西鶴・近松らを輩出した江戸期を日本文芸史における輝かしい一時代と見る立場から、「キンセイ(金星)のようなキンセイ(近世)」と、もし表現したとしても、それを「A≡A」という形式の比喩と考えるべきではない、ということである。

第2のケースというのは、2個のAが、同音異義語の場あいのような偶然の外形的一致によるものではなく、また、語源的なつながりを有する同音語と言いきるほどには、それぞれの意味が関連をたどりにくい程度まで分化していない段階にあるため、ある語が持つ二つの別の意味を表していると考えられる場あいである。そして、その二つの意味が、当然とは言いかねるだけの意外性を持った共通点をそなえているために、一方が一方をたとえることができ、かつ、同語の結合から異なったものの対比が読みとれるに十分な文脈が与えられているような適切な例が得られるなら、それは「A≡A」の一つの実現と考えてさしつかえなからう。こういった条件はかなり厳しく、好例をあげるのはむずかしいが、例えば、自分から出向かなくても用があれば先方からやって来るので、動かずにじっとしている〈地位〉や〈任務〉を、ただ黙って立っているだけで用の足る〈郵便ポスト〉にたとえて、「ポストのようなポスト」と言ったとすれば、英語の post では別語扱いでも、日本語としては同語異義扱いをすることがあるので微妙な例となるし、酔っぱらいの暴れだすさまを「(まるで本ものの)トラのような(大)トラになる」と言った場あいなどは、一応これに属すると考えられよう。条件のむずかしさは、主として、その二つの意味が、比喩に使えるほどに、換言すれば、その間の類似性・共通点が当然のこととは感じられないまでにかき離れており、しかも、別語と判断するに足る断絶は認められない、という微妙な段階の点にあると思われるが、理論的には該当例を探しだすことが可能なはずである。

第3のケースは、第1の同音異語の場あいや、第2の同語の異義という場あいとは、趣を異にする。第1や第2の場あいは、同形の語についての、程度の差はあれ、別の意味を問題にしたわけである。ところが、この第3の場あいは、2個のAの意味がそれぞれ違う、とは言えない。むしろ、両辺の語の語彙的な意味は同じだと考えるべき場あいである。しかし、両者が全く同じものをさすとすると、〈AのA〉という対比になり、すでに検討したように、それは成立しない。そうではなくて、ここで取りあげようとしているのは、語彙的な意味は同じだが、それぞれがさし示す事実、つまり、文脈的な意味が違う場あいである。例えば、「彼」という代名詞は、現代語では「男性である第三者」を意味するが、その語が指示する対象は、それぞれの発話において違はずだし、実際、異なった人物をいくらでもさしうる。こういう性質を持つのはなにも代名詞に限ったことではない。「親」「父」「母」「子」「孫」「友人」「知人」「先生」「弟子」「上司」「部下」など、前述の「AのA」の形で線の展開の見られる、関係を示す語のほとんどがそうである。ただし、これ

らの語に「よう」のついた形式はもちろん比喩になるとは限らず、「親のような(目上の)人」「父のような(信頼のおける)存在」「友人のような(親密な間がらの)人」「先生のような恩人」などのように、その場あいの助動詞「ようだ」は、むしろ例示を表すほうが多いと思われるが、「親のような^{おとうさん}大家」とか「(まるで自分の)部下(でもあるか)のような扱い」とかのように、比喩表現として現れる場あいも確かに見られる。そして、これらは「A≐B」の例であるが、それが、「A≐A」という形式になることもないとは言えない。例えば、「(中学時代の担任教師は、顔だちといい、口調といい、まるで)先生(自身でもあったか)のような先生(でした)」という表現があるとして、それを比喩と認めるなら、先行の「先生」が眼前の例えば大学教授などをさし、後続の「先生」が結局は当時の中学教師という別人をさすので、この形式の該当例と見なすこともできそうである。

以上の検討の結果、「A≐A」という形式の比喩表現の現れる可能性に関しては、次のようにまとめることができる。「のような」の前後の「A」が同一対象を指示する場あいは成立しない。同音または同形の別語である場あいは成立することもあるが、それは実質的にはむしろ「A≐B」の類に近いと考えるべきである。そして、同語の持つ二つの別の意味を表す場あい、および、意味は同じでも違った対象をさし示す場あいに限り、「A≐A」というこの形式の比喩表現の現れるわずかの可能性が残されている。

さて、「≐」の両辺、つまり、「のような」の前後に1項ずつの名詞を配した言語形式のもう一つは、当然、それらが異なる語である「A≐B」である。これはきわめて一般的な形式であり、ここで取りあげている名詞対応の「よう」型比喩表現の大部分を占めると言っても過言ではないほど、ごくふつうに見られるものである。したがって、いくらでも該当する例をあげることができるが、すでにくりかえし指摘してきたように、この形式には〈A∞B〉と〈(AのB)∞(CのB)〉という2種類の対比関係が認められるのである。すなわち、一つは、「ダイコンのような足」に代表される、〈ダイコン∞足〉という、そこに言語化されたものどうしの過不足のない対比であり、もう一つは、「カモシカのような足」で代表される対比である。後者においては、〈カモシカの足〉ではなく、〈カモシカの足の話題の人物の足〉という関係になることが、言語形式と対比事実との関連の型の点で注目されるわけである。

第2段 AのBノヨウナC

それでは、次に、「≐」の左辺が2項で右辺が1項の場あい、つまり、「名詞の名詞のような名詞」という形式について考えてみよう。これは、その3項のうち同じ名詞を含むかどうか、また、含むとすれば、どの項が同じか、ということにより、結局「AのA≐A」「AのA≐B」「AのB≐A」「AのB≐B」「AのB≐C」という5種類の言語形式に分かれる。

最初は、「AのAのようなA」である。この言語形式「AのA≐A」は、最初の「Aの」のかかり方に応じて、理論的には、/(AのA):A/と/Aの(A:A)/との2種類の構

造を持ちうるが、後者はただ偶然に現象的にこの「AのA≡A」という形を呈したにすぎず、比喩の本質は/A:A/の部分だけで完結しているのであって、その前の「Aの」はそこに関与しないので、実質的に、すでに検討した「A≡A」に該当する。そこで、前者についてだけ考えることにする。

この構造/(AのA):A/は、前述のように、<(AのA)∞A>と<{(AのA)のA}∞(BのA)>との2種類の対比関係を示す可能性を持つ。

前者は〈A〉を〈AのA〉にたとえることであるが、前にふれたように、「AのA」という同語の結合は自由に作れるわけではなく、「A」にかなりの制限のあるむしろ特殊な場あいなので、それでさらに「A」をたとえるというケースはきわめて起こりにくいと思われる。しかし、絶対にありえないと判断するに足る根拠があるわけではない。そして、事実、「(うちの末っ子は私が還暦を迎えてから生まれたので、自分の子どもという感じがあまりしない。まるで)子どもの子どものような子どもだ」と言うこともあるかもしれない。

後者の対比関係を表す例は考えつかない。それは、おそらく、一つには、〈(AのA)のA〉という意味関係を「AのA」という形式が表すことができないからであろうし、また一つには、「カモシカのような足」の場あいのような、主体と部分・側面・属性との形式と考えるのは、同じ「A」という語どうしの結合では無理だからでもであろう。

2番目は、「AのAのようなB」である。これも、左辺が「AのA」だから、Aに立ちうる名詞にきつい制約があって、かなり現れにくいですが、しかし、右辺はそれとは別の名詞なので、「AのA≡A」に比べれば、それでもまだいくらか考えやすい。

現象としてのこの言語形式は、最初の「Aの」のかかり方によって、/(AのA):B/のほか、/Aの(A:B)/という構造になる場あいもあるが、後者は、比喩の成立は/A:B/の部分だけで完結しているため、実質的に「A≡B」と同じ型なので、ここでは問題としない。

/AのA):B/からは、例によって、<(AのA)∞B>と<{(AのA)のB}∞(CのB)>という2種類の対比関係が導かれる。「(その学問の全貌から見れば、まるで)入口の入口のような(ごく初歩的な)講座」などは前者の例であり、「夢の夢(のできごと)のような(現実の)できごと」などは後者の例と言えよう。

3番目は、「AのBのようなA」である。この「AのB≡A」という形式からも、/AのB):A/と/Aの(B:A)/という2種類の構造を導くことができるが、後者は実質的に「A≡B」の型に属するので、ここでは取りあげない。前者は、やはり、<(AのB)∞A>と<{(AのB)のA}∞(CのA)>という2種類の対比関係を引きだすことができるはずである。まず、前者の対比は、Aの何かとそのA自体との間でなされるむずかしさがある。しかし、数量的な比較ならこのようなあるものの全体とその部分とを秤にかけるのはナンセンスだが、ここで言う対比はそういう性質のものではないし、また、その二者が質的に等しいことを客観的に述べるわけでもなく、比喩表現なのだから、そういうとらえ

方ができさえすれば、その逆の〈Aの(AのB)〉ほど容易ではないまでも、こういう対比も可能ではあるだろう。例えば、「自分の妻のような自分」とか「(いつの間にか、まるで)私(自身)の奴隷のような私になってしまっていることに気づいた」といった例は、ここに属するものと考えられる。ただし、「スイカのお化けのようなスイカ」とか「人間の欠陥車のような人間」などの例は、左辺の「AのB」のところですでに比喩的な結びつきが実現しているので、このような場あいの「よう」は比喩の成立に一次的で重要な役わりを果たしているとは言えない。だから、一見この形式に見えても、その適切な例としてあげることはできない。

もう一方の〈{(AのB)のA}の(CのA)〉という対比関係は、〈AのB〉というもののAという部分と他のものの同部分との類似に基づく対比であるが、左辺で、Aが主体でBがその部分をさす関係を想定すると、左辺の構造は、Aの部分であるはずのBが、その直後に、同じAを今度は逆に規定することになるので、その意味づけがむずかしくなる。したがって、/(AのB)のA/という構造は、「トラの皮」の「トラ」や「気のせい」の「気」のような、同音または同形の語が、同語であれ異語であれ、ともかく二つの別の意味を表しうる場あいに、その区別を明らかにつけて誤解を防ぐためにちょっとした文脈を添える際に現れるのがせいぜいだろう。ところが、そうなると、その左辺の意味は、結局「トラ」とか「気」といった〈A〉だけなので、その形式全体がAとAとの対比になってしまう。したがって、これが成りたつには、さらに、「A≐A」の成立条件をも満たす必要が生じ、いよいよ困難をきわめる。そして、この〈{(AのB)のA}の(CのB)〉という対比を表現するだけなら、例えば、「(トラとは言っても、「トラ年」の「トラ」寅ではなく、まるで)「トラの皮」の「トラ」虎のようなトラ」という形で、大あばれの酔っぱらいを説明的にたとえる例を頭でひねり出すことも、まるっきりできないわけではなさそうだが、しかし、それを、今考えているこの言語形式に簡略化して、「トラの皮のようなトラ」という形で同じ対比関係を写しだすのは無理であろう。この形では〈(トラの皮)のトラ〉として、生きているようには見えない痩せこけたトラを想定するほかはないと思われるからである。

4番目は、「AのBのようなB」である。この「AのB≐B」という形式からも、/(AのB)：B/と/Aの(B：B)/という2種類の構造を導くことができるが、後者は、偶然この形式の現象を呈しただけで、実質的には/B：B/という比喩なのだから、要するに、「A≐A」の問題であり、ここでは扱う必要がない。前者は、やはり、〈(AのB)のB〉と〈{(AのB)のB}の(CのB)〉という2種類の対比関係を引きだすことができる。初めのほうの対比は、右辺のBがA以外のものの部分をさし、それが文脈によって省略可能な状況にあれば、いくらでも例をあげることができる。例えば、前掲の「カモンカの足のような足」は、後の「足」が「カモンカ」以外の何か、あるいは、だれか、の〈足〉、例えば、足長おじさんとか外国選手とかの特定の足をさすことが、文脈的に保証されるかぎり、

この例として成立する。そのほか、「ゾウのしりのようなしり」、「キリンの首のような首」、「天狗の鼻のような鼻」、「白鳥の歌のような歌」など、いずれも同様である。ただし、花びんの肩のような（滑らかな）肩」とか「起重機の腕のような腕」とかいった例は、「よう」を省いてもすでに比喩的な問題があるので、この形式における適例とは言えない。

もう一方の $\langle [(AのB)のB] \in (CのB) \rangle$ の対比は、すでに検討した $\langle [(AのB)のA] \in (CのA) \rangle$ の場あいと同様に、仮に左辺の意味づけが可能だとしても、このような関係が「 $AのB \equiv B$ 」という形にまで簡略化して、なおその関係をゆがめずに表現できるとは思えない。

さて、左辺が2項で右辺が1項の最後は、5番目の「 $AのB$ のような C 」である。この場あいは同形要素の重複がないので、成立上の困難はない。

この言語形式から導きうる2種類の構造のうち、 $\diagup Aの(B:C) \diagdown$ のほうは、これまでと同様の理由で、結局は「 $A \equiv B$ 」に属すべきものだということになるので、ここでは、 $\diagup (AのB) : C \diagdown$ のほうだけについて考察する。この構造からも、やはり、 $\langle (AのB) \in C \rangle$ と $\langle [(AのB)のC] \in (DのC) \rangle$ という2種類の対比関係を引き出すことができる。

まず、前者であるが、これは、「ゾウの鼻のようなホース」、「温室の花のような秀才」、「もろ刃の剣のような発言」、「ヤツデの葉のような手のひら」、「秋の空のような男ごころ」、「五月の青空のような気分」、「レモンのかおりのようなお嬢さん」など、次つぎに例が浮かんでくるほど、よく見られる形式である。

後者の対比関係は、 A と B とが全体と部分の関係にある場あいは「 $AのB \equiv B$ 」になりやすいが、そういう場あいも、「ネコの足のようなつめ」や「サル顔のようなしわ」などのように部分の部分として現れることもある。また、「おとぎ話の巨人のような体」「インドのゾウのような耳」「重量あげの選手のような首」のように、 B と C とが全体と部分の関係にあるだけで、 A は単に B を限定するにすぎない場合も、この型の形式をそなえている。ただし、「城下町の奥ざしきのような温泉」とか「角界のサラブレッドのような若手力士」とかいった例は、左辺にすでに比喩的な結合が見られるので、この形式とは一応線を引いておくべきであろう。

第3段 $A \diagup \equiv \text{ウナ} B \diagdown C$

さて、今度は逆に、左辺が1項で右辺が2項の場あいを考えてみよう。この場あいも、「 $A \equiv AのA$ 」「 $A \equiv BのB$ 」「 $A \equiv AのB$ 」「 $A \equiv BのA$ 」「 $A \equiv BのC$ 」という5種類の言語形式に分かれる。

なお、このように右辺に2項を持つ形式においては、左辺の項と「のような」の「 \equiv 」とが、右辺の第1項をとび越えて、直接には右辺第2項にかかることもあるので、「 $左 \equiv 右_1$ の $右_2$ 」を「 $右_1$ の $左 \equiv 右_2$ 」に変形することが可能な場あいもあるが、それによって得られる $\diagup 右_1$ の(左:右₂) \diagdown は結局 $\diagup 左:右 \diagdown$ と等しいし、そのことは、左辺のいかに

かかわらず、右辺に2項があれば、どの形式でも機械的に認められるので、以下の考察から除外する。

最初は、「AのようなAのA」である。この言語形式「A≡AのA」の持ちうる2構造のうち、やはり前述の理由で、/Aの(A:A)/は「A≡A」のほうに送りこみ、もっぱら/A:(AのA)/のほうだけを検討することにする。この構造からも、一応、〈Aの(AのA)〉と〈{Aの(AのA)}の{Bの(AのA)}〉という2種類の対比関係を機械的に引きだすことができる。「AのA≡A」の場合と同様に、この形式の比喩表現の現れるケースは非常に考えにくい。特に後者は、「カモンカのような足」のような省略表現の可能なのは「カモンカの足のような(だれかの)足」という同部分の対比の場合あいだとすれば、「A」と「AのA」とが全体と部分の関係にある必要があるわけで、ただでも厳しい「AのA」という結合形式の制約を考えあわせると、たとえ同語の別の意味を表すところまで許容したところで、このような対比がこのような形式で実現する可能性は絶望的に少ないと思われる。しかし、前者の対比関係なら少しは考えようがある。もちろん作例ではあるが、例えば、「(両親は晩婚で、しかも私は末っ子なので、ふつうの親子を規準に考えると、まるで)親の親のような親だ」と言えば、この形式に属することになるだろう。

2番目は、「AのようなBのB」である。この言語形式「A≡BのB」の持ちうる構造は、/A:(BのB)/と/(A:B)のB/との二つであるが、後者は、結局「A≡B」という比喩なので、ここでは扱わない。

前者では、例によって、〈Aの(BのB)〉と〈{Aの(BのB)}の{Cの(BのB)}〉という2種類の対比関係を引きだすことができる。

まず、初めのほうの対比であるが、これは右辺の「BのB」の成立に前述のような困難が伴うが、そこが克服できれば、用例を考えるのはそれほどむずかしくない。例えば、「金太郎のような(生まれたばかりの)長男の長男」とか「おもちゃ箱のような都心の都心」といった例があるなら、これに属すると考えてよからう。

もう一つのほうの対比は、「BのB」でなく「BのC」であれば、「鼻の頭」とか「足のつめ」とかのようになり、その全体が何かの部分となし、その部分どうしの対比という関係も想定できるが、「BのB」となると、前述のように、ごく限られた例しかないで、「親の親」とか「友だちの友だち」とかはもちろん、「中心の中心」にしても「本の本」にしても、左辺からその箇所をそっくり省略してなおかつ同じ対比関係を伝達するのは、とうてい無理だと思われる。例えば、仮に、「山鹿素行の弟子の弟子のような(夏目漱石の)弟子の弟子」という形式で伝える内容を、この言語形式の「山鹿素行のような弟子の弟子」で伝えようと試みたとすれば、その目的は達せられそうもない。意図した対比は〈(山鹿素行の弟子の弟子)の(夏目漱石の弟子の弟子)〉なのに、変形の結果は〈(山鹿素行か話題の人物かの)弟子の弟子〉としか解しようがないからである。

3番目は、「AのようなAのB」である。この言語形式「A≡AのB」の持ちうる2構

造は、 $\diagup A : (A \text{ の } B) \diagdown$ と $\diagup (A : A) \text{ の } B \diagdown$ との2種類であるが、後者は要するに $\diagup A : A \diagdown$ という比喩であるから、「 $A \equiv A$ 」に回して、ここでは取りあげない。

第1構造から導きうる対比関係は、 $\langle A \text{ の } (A \text{ の } B) \rangle$ と $\langle \{A \text{ の } (A \text{ の } B)\} \text{ の } \{C \text{ の } (A \text{ の } B)\} \rangle$ との2種類であるが、後者は、左辺の意味づけがむずかしく、 $\langle A \text{ の } B \rangle$ という同じ部分どうしの対比と考えるには、その主体であるAとの関係に無理があり、全体を理解できなくなる。前者の対比も、Aの何かをA自体にたとえるという奇妙さはあるにせよ、そういうとらえ方ができさえすれば、数量的比較でない比喩上の対比なのだから、成立する可能性は認められる。例えば、「先生のような先生の一番弟子」とか「私(自身)のような私の愛車」とか「(それ自体が一つの)町のような町の巨大ビル」とかいった例があれば、これに該当するであろう。

4番目は、「AのようなBのA」である。この言語形式「 $A \equiv B \text{ の } A$ 」からも $\diagup A : (B \text{ の } A) \diagdown$ と $\diagup (A : B) \text{ の } A \diagdown$ という2構造を引きだしうるが、後者は実質的に「 $A \equiv B$ 」に属する比喩なので、ここでは扱わない。

ところが、この形式の場合には、前者の構造もきわめて成りたちにくいのである。というのは、「Bの」を2番目のAに対する広義の限定・修飾辞だと考えると、それは結局 $\diagup A : A \diagdown$ というやっかいな基本構造が認められるからである。したがって、これが成りたつのは、2個のAがある語の持っている二つの別の意味をさすか、あるいは、異義とは言えないまでも、少なくとも異なる対象を指示することが、文脈によって明らかになっている場合いに限られるであろう。そして、それは、「トラのような留置場のトラ」とか「(まるで、おれの)おやじのようなあいつのおやじ」とかいった例になると思われる。

左辺1項で右辺2項のもう一つは、5番目の「AのようなBのC」である。この言語形式から導きうる2構造のうち $\diagup (A : B) \text{ の } C \diagdown$ は、例によって「 $A \equiv B$ 」のほうに送りこみ、ここでは $\diagup A : (B \text{ の } C) \diagdown$ だけについて考察する。この言語形式「 $A \equiv B \text{ の } C$ 」の場合には、重複する要素がないので、これまでのような無意味性や困難さは生じにくい。そこから引きだすことのできる対比関係は、 $\langle A \text{ の } (B \text{ の } C) \rangle$ と $\langle \{A \text{ の } (B \text{ の } C)\} \text{ の } \{D \text{ の } (B \text{ の } C)\} \rangle$ との2種類である。前者は、「だんごのような太郎の鼻」とか、「貝がらのような花子の耳」とか、「ごみ捨て場のような都会の川」とか、「銀座どおりのような大学の構内」とかいった例が当てはまる。後者は、「BのC」全体が何かの部分となし、Aと、そこに言語化されずに文脈に依存して伝えられるもう一方の主体であるDとの間で、その同じ部分どうしの対比がなされた場合いであるが、他の形式の場合とは違って、そこに重複要素がないので、比較的实现しやすい。例えば、「ネコのような足のつめ」とか「ワシのような鼻の形」とか「ゾウのような耳の大きさ」とかは、その例と言えよう。例えば、「ネコのような足のつめ」は $\langle \text{ネコ} \rangle$ と $\langle \text{足のつめ} \rangle$ とが類似しているわけではなく、 $\langle \text{ネコの足のつめ} \rangle$ と $\langle \text{だれかの足のつめ} \rangle$ とが似ているのだからである。

ところで、前に、右辺に2項を持つ形式では、右辺の第1項を移行して、「右₁の左₂右₂」

とするように、二つの基本構造のほかにはいわば変形構造という第3の構造を持ちうることを述べたが、この形式では、用例によって可能な場あいと著しく不自然な場あいとが起こることに注目したい。まず、例えば、第1対比の「リンゴのようなほおの娘」も、第2対比の「赤ん坊のようなほおの娘」も、「の娘」の前で比喩は完結していると考え、それは「 $A \equiv B$ 」に属するとして、ここでの考察対象から除外する。しかし、右辺の順序を逆にした、「リンゴのような娘のほお」と「赤ん坊のような娘のほお」のほうは、この形式の第1構造における第1対比と第2対比とに該当すると考えられる。これらはいずれも、「娘のリンゴのようなほお」「娘の赤ん坊のようなほお」という変形が、あいまいさの増加という問題を別にすれば、可能な場あいである。また、「ドングリのような太郎の目」という第1対比も、「フランス人形のような花子の目」という第2対比も、右辺の第1項である「太郎の」や「花子の」を左辺の第1項に立てる変形ができる点、同様である。しかし、「だんごのような鼻の頭」のように、「 B の C 」という右辺が全体としてある一対象をさし、しかもそれが全体として何かの部分となっている場あいは、「鼻のだんごのような頭」と変形すると著しく不自然になる。これは異対象間の第1対比の例であるが、同部分間の第2対比でも、「ピノキオのような鼻の頭」の例では、やはり同様、変形に無理がある、ということを見ると、この種の差異は、対比関係の違いによるものではなく、右辺の2項、すなわち、 B と C との密着度に強く影響されるものと推測される。つまり、「鼻の頭」とか「口の端」とか「目のすみ」とかでは、それが一体性の強い緊密な結合をなす、いわば一塊なので、分離や分割に対する抵抗が大きいため、と考えられる。角度を変えて言えば、変形が可能なのは、比喩の焦点が右辺では明確に第2項にあるからであり、その場あいは、右辺の第1項は左辺に移行することができるだけでなく、それを省略して単に「リンゴのようなほお」や「フランス人形のような目」という形で同じ対比関係を写しだすこともできるのである。なお、この「 $A \equiv B$ の C 」の $/A : (B$ の $C) /$ の第2対比は、「鼻のワンのような形」とか「耳のゾウのような大きさ」とかいった語順が異様な感じのすることからも察せられるように、この種の変形は強引になる傾向がうかがわれる。

第4段 A の B ノヨウナ C の D

それでは、最後に、両辺に2項ずつを配した形式を考えることにしよう。理論的には、「 A の $A \equiv A$ の A 」「 A の $A \equiv A$ の B 」「 A の $A \equiv B$ の A 」「 A の $B \equiv A$ の A 」「 A の $B \equiv B$ の B 」「 A の $A \equiv B$ の B 」「 A の $B \equiv A$ の B 」「 A の $B \equiv B$ の A 」「 A の $A \equiv B$ の C 」「 A の $B \equiv A$ の C 」「 A の $B \equiv C$ の A 」「 A の $B \equiv B$ の C 」「 A の $B \equiv C$ の B 」「 A の $B \equiv C$ の C 」「 A の $B \equiv C$ の D 」の15種類の言語形式が考えられる。簡単にふれよう。

第1は「 A の A のような A の A 」である。この言語形式からは、 $/ (A$ の $A) : (A$ の $A) /$ と $/ A$ の $(A : A)$ の $A /$ と $/ A$ の $\{A : (A$ の $A)\} /$ と $/ \{(A$ の $A) : A\}$ の $A /$ という4種類の構造が抽出できるが、以下においては、すべて、第1構造だけを取りあげることに

なる。第2構造は/A:A/と等しく、第3構造は/A:(AのA)/と等しく、第4構造は/(AのA):A/と等しいので、どれもすでに考察ずみの言語形式の場合いと実質的に重なるからである。そうなるのはこの形式の場合いに限らない。以下のすべてに共通するので、いちいち断わらない。

そこで、/(AのA):(AのA)/の構造であるが、これからストレートに導かれる対比関係<(AのA)∞(AのA)>は、「AのA」の成立に伴う困難を2箇所で切りぬけ、しかも、その形式どうしが「≒」でつながれるむずかしさをもり越えねばならないので、きわめて起こりにくく、例えば、「(私の)友だちの友だちのような(だれかの)友だちの友だち」といった例を想定できないわけでもないが、現実にはほとんど現れないであろう。そして、もう一つの<{(AのA)の(AのA)}∞{Bの(AのA)}>という対比関係のほうは、「AのA」が「AのA」の部分になす例を思いうかべるのは至難の業だし、仮にそれ以外の関係で「AのAのAのA」という連続が起こったとしても、「(私の)親の親の親の親のような(だれかの)親の親」という関係を、この形式の「親の親のような親の親」で表せるとは思えないので、実現の可能性はほとんどないものと予想される。

第2は「AのAのようなAのB」である。この形式の第1構造/(AのA):(AのB)/の第1対比<(AのA)∞(AのB)>は、「(私の)友だちの友だちのような(私の, あるいは, だれかの)友だちの弟」といったような形で現れる可能性がないとは言えない。しかし、第2対比の<{(AのA)の(AのB)}∞{Cの(AのB)}>のほうは、<AのA>と<AのB>とに全体と部分、あるいは、主体と属性という関係を認めるのが困難な上に、左辺の<AのB>を言語化せずに同じ関係を伝える無理もあるので、少なくとも現実の比喩表現として現れることは、まずないだろう。

第3は「AのAのようなBのA」である。この形式の第1構造/(AのA):(BのA)/の第1対比<(AのA)∞(BのA)>は、なるべく類似の例で言うと、例えば、「友だちの友だちのような弟の友だち」といった形で現れる可能性もある。しかし、この場合いも、第2対比<{(友だちの友だち)の(弟の友だち)}∞{(だれかの)弟の友だち}>という関係を、その同じ言語形式で表すことは考えられないし、また、「Bの」が3番目の「A」に対する限定辞だとすれば、骨ぐみは<(AのA)のA>となるが、そのAが「AのA」の部分になすことは、仮にそれぞれのAが「A」という語の持つ別々の意味だと考えたところで、現実にはほとんどありえないと思われるので、この対比関係はこの言語形式からは成立しないと判断すべきであろう。

第4は「AのBのようなAのA」である。この形式の第1構造/(AのB):(AのA)/の第1対比<(AのB)∞(AのA)>は、これも類似の例を使うなら、「友だちの弟のような友だちの友だち」といった形で現れる可能性がある。しかし、<{(友だちの弟)の(友だちの友だち)}∞{(だれかの)友だちの友だち}>という第2対比は、やはり、この形式では無理だろう。

第5は「AのBのようなBのB」である。この形式の第1構造／(AのB)：(BのB)／の第1対比〈(AのB)∩(BのB)〉は、これも類似例で言うと、「弟の友だちのような(私の)友だちの友だち」といった形で現れることがあるだろう。しかし、この場合も、左辺の「Aの」をBに対する限定辞と考えるなら、左辺の骨ぐみは〈Bの(BのB)〉となり、それが全体と部分の関係になるケースを想定できないので、〈AのB〉と〈C〉との間の〈BのB〉という同部分の対比を伝達する言語形式にはなりにくいと思われる。

第6は「AのAのようなBのB」である。この形式の第1構造／(AのA)：(BのB)／の第1対比〈(AのA)∩(BのB)〉は、同語の結合という困難が両辺にあり、しかもその両者が類似性によってつながれるむずかしさが加わるので、起こりにくいが、しかし、左辺と右辺とが別語でいいので、例えば、「親分の親分のような先生の先生」といった形で現れる可能性はあろう。第2対比の〈{(AのA)の(BのB)}∩{Cの(BのB)}〉のほうは、同語の結合どうしが全体と部分の関係をなし、しかも左辺でその部分を明示せずに理解させるのは著しく困難なので、やはりこの形式では無理だと思われる。例えば、「都会の都会のような(この町の)中心の中心」という例にしても、その左辺を〈(都会の都会)の(中心の中心)〉と考えねばならぬ必然性は認めがたいので、第1対比の例と考えるほうが自然だろう。

第7は「AのBのようなAのB」である。この形式の第1構造／(AのB)：(AのB)／の第1対比〈(AのB)∩(AのB)〉は、両辺ともこれまでのような結合上の困難はないが、全体として同じものどうしの対比になるので、やはりむずかしい。けれども、例えば、「トラの遠ばえのようなトラの遠ばえ(が留置場から聞こえる)」といった例が、十分な文脈があれば、成りたつ場合もあるだろう。しかし、第2対比〈{(AのB)の(AのB)}∩{Cの(AのB)}〉のほうは、「AのB」どうしが全体と部分の関係をなすケースは考えにくいし、また、「AのB」全体を α とすれば、これは〈(α の α)∩(β の α)〉となるが、「AのA \equiv A」の項で検討したように、この言語形式では実現が無理であろう。

第8は「AのBのようなBのA」である。この形式の第1構造／(AのB)：(BのA)／の第1対比は〈(AのB)∩(BのA)〉となる。これは〈AのB〉とその逆の〈BのA〉とが似ているわけであるから、通常表現では成りたたない。この対比が成立するための条件は、あるものの部分はその全体を代表するに足る重要箇所であったり、容器と内容物などが相互に交換可能であったり、あるいは、語順を変えても関係に変化を来さなかったりすることであろう。例えば、「友だちの弟」と「弟の友だち」とは、偶然一致する場合を除いて、一般に別々の人物をさすが、「電車の絵」と「絵の電車」とは、その焦点はともかく、それぞれが指示する対象が異なるとは言えない。「おもちゃのイヌ」と「イヌのおもちゃ」とも、後者のあいまいさを別にすれば、同様である。「お菓子の人形」と「人形のお菓子」との関係も同類である。ところが、これらは、語順を逆にした形式の意味が元の形式の意味と単に似ているという段階にとどまらず、両者がほとんど同一の指示体を

持つこととなるので、それを「＝」すなわち、一種のコブラに相当する「である」などでつなぐなら、当然のこととはいえ、「語順を変えても同意である」という情報を伝える文として、一応成立するが、「≐」すなわち「よう」でつなぐとなると、意味のある比喩表現にはなりえない。例えば、「自動車の絵のような絵の自動車」という表現は、ほとんど〈AのA〉に近く、ナンセンスであろう。したがって、このような場あいは、形式上は可能でも、比喩としては無意味だと考えられる。

語順を変えても成りたち、別々の指示体を持つ例として、「白鳥の湖」のような場あいがある。これなら、「白鳥の湖のような湖の白鳥」という形で、比喩としても成立しそである。「白鳥の湖」という作品から受ける印象と、ある湖水に浮かんで見える眼前の白鳥の感じとが類似している場あいの〈(白鳥の湖)の(湖の白鳥)〉という対比関係を想定するのもおもしろいし、また、「白鳥の湖」という作品の白鳥と、ある場面にいる現実の白鳥との共通点を強調した〈{(白鳥の湖)の白鳥}の{(その白鳥)}〉という対比関係をそこに読みとることもできよう。だが、いずれにし、それをこの型の例とすることには疑問がある。すなわち、「白鳥の湖」は、確かに「AのB」という形式になってはいるが、前掲のような比喩が成りたつのは、けっして、単なる「白鳥の泳いでいる湖」という意味ではなく、チャイコフスキー作曲のバレエ組曲という作品をさすからである。「吾輩は猫である」にし「ある人の生の中に」にし「洪水はわが魂に及び」にし「悲しみよ、こんにちは」にし「赤頭巾ちゃん気をつけて」にし「されどわれらが日々」にし、あるいは、『鴉ツア』と『九郎治ツアン』は喧嘩して私は用語について煩悶することにし、それが一つの作品をさすならば、どんなに長くても文中での機能は1個の名詞のみであるから、それは事実上「A≐BのC」に類するものと考えべきであろう。

一見この形式になりそうに見えても、このようにいろいろな問題のある場あいが多いのであるが、しかし、第1対比のほうなら、該当する例をひねり出せないわけではない。例えば、「弟の友だち」と「友だちの弟」とが別人をさし、そして、その二人が見まちがえるほどよく似ている場あいに、「(まるで)弟の友だちのような友だちの弟」と言うようなことがあるかもしれないし、逆に「友だちの弟のような弟の友だち」と言うこともないとは限らない。また、今話題にしている自分の恋人である彼女が、激しい情熱に燃えていたり、あるいは逆に結婚に対して恬淡としていたりする態度の点で、その話の場の近くに居あわせた恋愛中の女性の、その相手に当たる男性を髣髴させるほど、異常なまでの共通性が感じられる際に、「彼女の恋人のような恋人の彼女」と言ったり、あるいは逆に「恋人の彼女のような彼女の恋人」と言ったりする場あいも、同様である。

これらは、語順を変えても成立するが、それによって元の結合とは違った事実関係を写しだす名詞の組みあわせの場あいである。換言すれば、外形の変化に伴って、それだけで意味が変わるケースである。しかし、語順を変えること自体から意味の変化が生じない名詞の組みあわせであっても、その結合が置かれる場所によって文脈的に別の対象を指示す

ることができれば、無意味でない比喩表現の成立する可能性はある。例えば、東京に住んでいる人が旅さきで民宿に泊まったとする。そして、庭から隣の家を見て、自宅の隣家とあまりに似ているのに驚き、まるで東京のわが家にいるような錯覚に一時とらわれたとしよう。そうすると、その錯覚から覚めて民宿の部屋に駆けこみ、一緒に旅行に来ていた家族に向かって、「(まるで)家の隣のよな隣の家(だ)」と言うような場面があるかもしれない。「隣の家」と「家の隣」とが同じ対象をさすことが多いのは、「家」も「隣」も、ある家や、ある場所の隣をさすほかに、その前に何も修飾部を置かず、単に「家」とか「隣」と言う時に、特に「わが家」とか「自分の隣」とかをさす性質を持った、「母」や「兄」などと類似した側面を有する語である、という点にかかわるだろう。そのことは、例えば、「家」を「ビル」に替えて、「ビルの隣」と「隣のビル」とにすれば、そのような同義性が出にくいことからもうかがえる。そして、「家の隣」や「隣の家」という結合が別の対象をもさしうるのも、そういった二面性を持った「家」と「隣」との結合した全体がまた同じような二面性を持つことになるからであろう。ただし、「家」と「隣」とのそのような性格は同程度に強いわけではない。表現理解の過程を考えると、「家の隣」の場合、まず、最初の、修飾語をかぶせずに、いわば裸で出てきた「家」という語が、そういった出現状況あるいは言語的環境から、結果として「自分の家」つまり「わが家」をさし、そこを起点として、次に、「その隣」というふうに思考の視線が転じて、「わが家の隣」に当たる空間をさすことになる。そして、文脈的に、そこには言語化されていない〈家〉が想起され、結局、〈空き地〉というような土地をではなく、〈隣家〉という建てものをさす場合あいも起こるのだと考えられる。ところが、一方の「隣の家」の場合、最初が「隣」という語なので、〈自分の家〉という観念が表面に現れず、〈自分の隣〉か〈自分の家の隣〉かという点があいまいなままで、〈隣〉という漠然とした空間をさしながら、次の「家」という語にかかって行き、そこで直接に〈隣家〉をさすことになる。すなわち、「家の隣」では、自分の家と、文脈的ではあるが隣家と2軒の家のイメージが通りすぎるが、「隣の家」の場合の家のイメージは隣家だけであり、最初の「隣」が「わが家の隣」をさすというようなことは、「隣の家」という全体が経過した後で、意識的にたどれば行きあたる答えであるにすぎないのである。このような微妙な差異が働いて、前掲の例が示すのと同様の対比関係を、前後を逆にした「隣の家のよな家の隣」という形で表現しにくくしているとも考えられる。その形だと、左辺全体が右辺の「家」だけにかかりやすく、実質的に「AのB≒B」になる可能性が強くなるように思われる。

なお、前にあげた「自動車の絵」の例に似たものとして「山の絵」という場合あいがあるが、その結合を〈山を題材にした絵〉でなく〈山で制作した作品〉という意味で使えば、このタイプになるケースが考えられる。例えば、山を想像して描いた絵が、まるで写生のように細部まで精細に描かれているとすれば、「(まるで実際の)山(で)の絵のよな絵の山(のできばえ)」などといった形で、この形式に当てはまる比喩表現の現れることが

絶対ないとは言いきれないからである。

さて、次の第9は「AのAのようなBのC」である。この形式「AのA≒BのC」の第1構造／(AのA)：(BのC)／の第1対比は〈(AのA)∞(BのC)〉である。これは、左辺に前述の困難があるが、そこを通過すれば、右辺は自由なので、左右の辺が逆の場合いほどではないにしても、ある程度考えやすい。例えば、「娘の娘のような息子の嫁」とか「帽子の帽子のような過剰包装の包み紙」とかいった例があれば、これに該当するものと思われる。第2対比の〈{(AのA)の(BのC)}∞{Dの(BのC)}〉のほうは、もっとむずかしいが、「コピーのコピーのような仕あがりの不鮮明さ」という例において、「仕あがり」がコピー以外のものの仕あがりをさすことができるなら、それに当てはまる例と見なすこともできよう。

第10は「AのBのようなAのC」である。この「AのB≒AのC」という形式の第1構造／(AのB)：(AのC)／の第1対比は〈(AのB)∞(AのC)〉である。この場合の2個のAが同語の同じ意味で使われ、同じ指示体を持つ通常のケースであれば、これは同一対象の異なる部分の間での対比であり、ボディビルで鍛えあげて上半身だけが異常に発達した人の腕を当人の太ももにたとえるのもそうだし、対比それ自体はほとんど問題なく起こりうる。だが、対比される部分の共通の主体であるその同一人物が、両辺でともに言語化される「彼の太もものような彼の腕」などというケースは、その事実関係をことさらに明確に伝える意図をもって説明的に言われる特殊な場あいを除いて、自然な発話中に現実に見えることはまずないだろう。ただし、2個のAが同語中の別義のような異なる対象をさすことが文脈的に可能なら、その限りではない。例えば、「トラの遠ぼえのようなトラのわめき声（が留置場から漏れてくる）」といった形で実現することもできないわけではないだろう。とはいえ、第2対比のほうは、「AのC」が同じAを含む「AのB」の部分なし、しかも左辺でそこが省略されたものとは考えにくいので、ほとんど起こりえないものと推定される。

第11は「AのBのようなCのA」である。この形式「AのB≒CのA」の第1構造／(AのB)：(CのA)／の第1対比は〈(AのB)∞(CのA)〉である。この場合、両辺の各結合の内部が、厳密に全体と部分とで構成されていて、「Aの」と「Cの」とが単なる修飾的な限定辞にすぎないために、要するに左辺の〈B〉と右辺の〈A〉との対比になるなら、両辺に同一の〈A〉を持つことがかなりの障害になる。しかし、必ずしもそうではなくて、それぞれの結合が、〈A〉と〈B〉との関係および〈C〉と〈A〉との関係を表示し、その結合どうしが類似性をもって対比できる関係にあり、つまり、左辺の関係と右辺の関係とが似ていて、いわば〈A：B=C：A〉といった見立てができるなら、それに該当する比喩表現を想定することも可能である。例えば、「日本の東京のようなアジアの日本」とか、「女のアクセサリーのような彼の女」とかいった例は、それに類する関係にあると言えよう。しかし、第2対比〈{(AのB)の(CのA)}∞{Dの(CのA)}〉のほうは、

左辺の後半を省略しても同じ関係を表せるいわゆる同部分対比と考えるには、左辺全体の意味づけがむずかしい。

第12は「AのBのようなBのC」である。この「AのB \equiv BのC」という形式の第1構造／(AのB)：(BのC)／の第1対比は〈(AのB) \cap (BのC)〉であるが、これは直前に検討した「AのB \equiv CのA」の左右の辺を入れかえたものと、命名の差があるだけである。すなわち、両辺2項ずつの形式のうち、外側の項どうしが等しかったのを、内側どうしの等しいものに替えただけのことであって、どちらがどちらをたとえるかという比喩の方向はむしろ違いますが、何と何とが対比されているかという点には差がない。したがって、前に該当した例は、両辺での組みあわせの奇抜さや話題性の強さに極度の隔たりのないかぎり、左右の辺を交換してここでの該当例とすることのできる場あいが多い。例えば、「アジアの日本のような日本の東京」という表現は成立しやすい。が、「彼の女のような女のアクセサリ」という表現のほうは、女が男のアクセサリ—的存在であることが客観的な事実ではないから、それが話題になる「女のアクセサリ—のような彼の女」という前の型での表現はふつうなのであるが、そのような臨時の見たてを一般的な真理であるかのように当然の前提として、むしろその間のある種の関係が広く認められている「女のアクセサリ—」に対する喩詞とするのは、理論的にはともかく、現実にはきわめて現れにくいと考えられる。なお、第2対比の〈{(AのB)の(BのC)} \cap {Dの(BのC)}〉の例としては、「力士の腹のような(肥満児や妊婦などの)腹の出ぐあい」といった表現を考えだすことができようが、左辺におけるBの連続はわずらわしく、左辺で文脈に依存して省略された部分は「BのC」というよりも「C」だけだと解するほうが自然だ、という点では、該当例とするには不完全なものと言わざるをえない。

第13は「AのBのようなCのB」である。この形式「AのB \equiv CのB」の第1構造／(AのB)：(CのB)／の第1対比は〈(AのB) \cap (CのB)〉である。これは異なった対象の同部分対比の典型的な形である。例えば、「ゾウの耳のような太郎の耳」「天狗の鼻のような次郎の鼻」「滝の音のような雨の音」「イワシの目のような老婆の目」など、該当例を考えだすのは容易であるが、対比される共通部分を示す名詞を同語で反復するくどき避けるために、事実関係を特に明確に説明する場あいのほかは、「ゾウのような太郎の耳」のように左辺の第2項を省略した「A \equiv BのC」の形で現れるほうが、現実には通例である。一方、第2対比の〈{(AのB)の(CのB)} \cap {Dの(CのB)}〉のほうは、左辺の意味づけがむずかしい。

第14は「AのBのようなCのC」である。この形式「AのB \equiv CのC」の第1構造／(AのB)：(CのC)／の第1対比は〈(AのB) \cap (CのC)〉である。これは右辺の同語連続が成りたてば、いくらかでも用例を考えることができる。例えば、「野生の動物のような知人の知人」とか「未来都市の模型のような都心の都心」とかは、左辺が右辺の第1項だけにかかる場あいを除き、これに該当すると思われる。ただし、後例のほうでもし「ビル

の林」とか「ビルの谷間」とかを喩詞にすれば、それだけで比喩が成立するので、機構的に異質なものととして扱わねばならないだろう。もう一つの $\langle\{(AのB)の(CのC)\}\circ\{Dの(CのC)\}\rangle$ という第2対比を表すケースは、「CのC」という同語の連続の成立する条件から見て、その結合が「AのB」の部分をなし、しかも左辺でその「CのC」を省略しても同部分対比であることが明らかである場合あいを想定しにくいので、現実の比喩表現としてはほとんど現れないと予想される。

最後の第15は、「AのBのようなCのD」である。この形式「AのB \equiv CのD」の第1構造 $\langle(AのB) : (CのD)\rangle$ の第1対比は $\langle(AのB)\circ(CのD)\rangle$ である。これは重複する要素がないので、いろいろな用例がありうる。例えば、「家の大黒柱のようなチームの彼」、「悪魔のささやきのような男の勧誘」、「地球の月のような彼のとり巻き」、「ブタの筋肉のような彼の神経」、「さしみのつまのような展覧会の作品」、それに、前掲の「動物の歯のような娘の皮膚」のようなものはすべてこれに属する。第2対比の $\langle\{(AのB)の(CのD)\}\circ\{Eの(CのD)\}\rangle$ のほうは、関係が込みいっていて複雑なので、比較的現れにくいと思われるが、「CのD」が密接なつながりを持った一塊をなすなら、構造的にも対比の上でも矛盾はないので、現実に現れる可能性が強い。例えば、「人形のピノキオのような鼻の頭」とか「近所ののらネコのような目つきの鋭さ」、あるいは、「喜劇王のチャップリンのような帽子のかぶり方」なども、この第2対比の例にあげてもよさそうである。

以上、ノ格名詞の支配領域の差に基づく構造の差と、「よう」の勢力範囲の違いに基づく対比の違いを調べることによって、「よう」をはさんで対応する名詞をそなえた比喩表現において、ある言語形式から引きだすことのできる構造と、そこから導かれる対比との関連をひとわり検討した。その結果を、言語形式・対比構造・比喩関係として整理し、成立すると推測されるものには例を添えて、一覧できるようにまとめて掲げておこう。なお、前章の第1節・第2節で行った検討とこの第2章第2節における検討との関係について一言ふれておくと、前者は基本的な考察であり、後者は可能性を推測した一般的な考察であると言うことができる。

第5段 検討結果の整理

1.1 「A \equiv A」

$\langle A : A \rangle$

$\langle A \circ A \rangle$ マレ

(動物園の)トラのような(留置場の)

トラ

先生(眼前の大学教授)のような先生

(中学時代の教師)

$\langle(AのA)\circ(BのA)\rangle$ 不成立

1.2 「A \equiv B」

$\langle A : B \rangle$

$\langle A \circ B \rangle$

ダイコンのような足

$\langle(AのB)\circ(CのB)\rangle$

カモンカのような足

2.1 「AのA \equiv A」

$\langle(AのA) : A \rangle$

- $\langle (A \text{ の } A) \text{ の } A \rangle$ マレ
 子どもの子ども(孫)のような子どもども
 $\langle \{(A \text{ の } A) \text{ の } A\} \text{ の } (B \text{ の } A) \rangle$ 不成立
 $\nearrow A \text{ の } (A : A) \text{ の } A \Rightarrow \text{「} A \equiv A \text{」}$
- 2.2 「AのA≡B」
 $\nearrow (A \text{ の } A) : B / \text{少ナイ}$
 $\langle (A \text{ の } A) \text{ の } B \rangle$
 入口の入口のような講座
 $\langle \{(A \text{ の } A) \text{ の } B\} \text{ の } (C \text{ の } B) \rangle$
 夢の夢のようなできごと
 $\nearrow A \text{ の } (A : B) \text{ の } B \Rightarrow \text{「} A \equiv B \text{」}$
- 2.3 「AのB≡A」
 $\nearrow (A \text{ の } B) : A /$
 $\langle (A \text{ の } B) \text{ の } A \rangle$ 少ナイ
 自分の奴隷のような自分
 $\langle \{(A \text{ の } B) \text{ の } A\} \text{ の } (C \text{ の } A) \rangle$ 不成立
 $\nearrow A \text{ の } (B : A) \text{ の } A \Rightarrow \text{「} A \equiv B \text{」}$
- 2.4 「AのB≡B」
 $\nearrow (A \text{ の } B) : B /$
 $\langle (A \text{ の } B) \text{ の } B \rangle$
 カモシカの足ののような足
 $\langle \{(A \text{ の } B) \text{ の } B\} \text{ の } (C \text{ の } B) \rangle$ 不成立
 $\nearrow A \text{ の } (B : B) \text{ の } B \Rightarrow \text{「} A \equiv A \text{」}$
- 2.5 「AのB≡C」
 $\nearrow (A \text{ の } B) : C /$
 $\langle (A \text{ の } B) \text{ の } C \rangle$
 ヤツデの葉のような手のひら
 $\langle \{(A \text{ の } B) \text{ の } C\} \text{ の } (D \text{ の } C) \rangle$
 サルの顔のようなしわ
 $\nearrow A \text{ の } (B : C) \text{ の } C \Rightarrow \text{「} A \equiv B \text{」}$
- 3.1 「A≡AのA」
 $\nearrow A : (A \text{ の } A) /$
 $\langle A \text{ の } (A \text{ の } A) \rangle$ マレ
 親の親(祖父母)のような親
 $\langle \{(A \text{ の } (A \text{ の } A)) \text{ の } (B \text{ の } (A \text{ の } A)) \rangle$ 不成立
 $\nearrow (A : A) \text{ の } A \Rightarrow \text{「} A \equiv A \text{」}$

- $\nearrow A \text{ の } (A : A) \text{ の } A \Rightarrow \text{「} A \equiv A \text{」}$
- 3.2 「A≡BのB」
 $\nearrow A : (B \text{ の } B) /$
 $\langle A \text{ の } (B \text{ の } B) \rangle$ 少ナイ
 金太郎のような長男の長男
 $\langle \{A \text{ の } (B \text{ の } B)\} \text{ の } \{C \text{ の } (B \text{ の } B)\} \rangle$ 不成立
 $\nearrow (A : B) \text{ の } B \Rightarrow \text{「} A \equiv B \text{」}$
 $\nearrow B \text{ の } (A : B) \text{ の } B \Rightarrow \text{「} A \equiv B \text{」}$
- 3.3 「A≡AのB」
 $\nearrow A : (A \text{ の } B) /$
 $\langle A \text{ の } (A \text{ の } B) \rangle$ 少ナイ
 町(そのもの)のような町の巨大ビル
 $\langle \{A \text{ の } (A \text{ の } B)\} \text{ の } \{C \text{ の } (A \text{ の } B)\} \rangle$ 不成立
 $\nearrow (A : A) \text{ の } B \Rightarrow \text{「} A \equiv A \text{」}$
 $\nearrow A \text{ の } (A : B) \text{ の } B \Rightarrow \text{「} A \equiv B \text{」}$
- 3.4 「A≡BのA」
 $\nearrow A : (B \text{ の } A) /$
 $\langle A \text{ の } (B \text{ の } A) \rangle$ マレ
 トラのような留置場のトラ
 おやじのようなあいつのおやじ
 $\langle \{A \text{ の } (B \text{ の } A)\} \text{ の } \{C \text{ の } (B \text{ の } A)\} \rangle$ 不成立
 $\nearrow (A : B) \text{ の } A \Rightarrow \text{「} A \equiv B \text{」}$
 $\nearrow B \text{ の } (A : A) \text{ の } A \Rightarrow \text{「} A \equiv A \text{」}$
- 3.5 「A≡BのC」
 $\nearrow A : (B \text{ の } C) /$
 $\langle A \text{ の } (B \text{ の } C) \rangle$
 貝がらのような花子の耳
 $\langle \{A \text{ の } (B \text{ の } C)\} \text{ の } \{D \text{ の } (B \text{ の } C)\} \rangle$
 ネコの足のような足のつめ
 $\nearrow (A : B) \text{ の } C \Rightarrow \text{「} A \equiv B \text{」}$
 $\nearrow B \text{ の } (A : C) \text{ の } C \Rightarrow \text{「} A \equiv B \text{」}$
- 4.1 「AのA≡AのA」
 $\nearrow (A \text{ の } A) : (A \text{ の } A) /$
 $\langle (A \text{ の } A) \text{ の } (A \text{ の } A) \rangle$ コクマレ
 (私の)友だちの友だちのような

- (だれかの) 友だちの友だち
 $\langle \{(A \text{ の } A) \text{ の } (A \text{ の } A)\} \circ \{B \text{ の } (A \text{ の } A)\} \rangle$ 不成立
 $\diagup A \text{ の } (A : A) \text{ の } A \diagdown \Rightarrow \text{「} A \equiv A \text{」}$
 $\diagup A \text{ の } \{A : (A \text{ の } A)\} \diagdown \Rightarrow \text{「} A \equiv A \text{ の } A \text{」}$
 $\diagup \{(A \text{ の } A) : A\} \text{ の } A \diagdown \Rightarrow \text{「} A \text{ の } A \equiv A \text{」}$
 $\diagup A \text{ の } \{(A \text{ の } A) : A\} \diagdown \Rightarrow \text{「} A \text{ の } A \equiv A \text{」}$
 $\diagup A \text{ の } \{A \text{ の } (A : A)\} \diagdown \Rightarrow \text{「} A \equiv A \text{」}$
- 4.2 「AのA ≡ AのB」
 $\diagup (A \text{ の } A) : (A \text{ の } B) \diagdown$
 $\langle (A \text{ の } A) \circ (A \text{ の } B) \rangle$ マレ
 (私の) 友だちの友だちのような
 (だれかの) 友だちの弟
 $\langle \{(A \text{ の } A) \text{ の } (A \text{ の } B)\} \circ \{C \text{ の } (A \text{ の } B)\} \rangle$ 不成立
 $\diagup A \text{ の } (A : A) \text{ の } B \diagdown \Rightarrow \text{「} A \equiv A \text{」}$
 $\diagup A \text{ の } \{A : (A \text{ の } B)\} \diagdown \Rightarrow \text{「} A \equiv A \text{ の } B \text{」}$
 $\diagup \{(A \text{ の } A) : A\} \text{ の } B \diagdown \Rightarrow \text{「} A \text{ の } A \equiv A \text{」}$
 $\diagup A \text{ の } \{(A \text{ の } A) : B\} \diagdown \Rightarrow \text{「} A \text{ の } A \equiv B \text{」}$
 $\diagup A \text{ の } \{A \text{ の } (A : B)\} \diagdown \Rightarrow \text{「} A \equiv B \text{」}$
- 4.3 「AのA ≡ BのA」
 $\diagup (A \text{ の } A) : (B \text{ の } A) \diagdown$
 $\langle (A \text{ の } A) \circ (B \text{ の } A) \rangle$ マレ
 友だちの友だちのような弟の友だち
 $\langle \{(A \text{ の } A) \text{ の } (B \text{ の } A)\} \circ \{C \text{ の } (B \text{ の } A)\} \rangle$ 不成立
 $\diagup A \text{ の } (A : B) \text{ の } A \diagdown \Rightarrow \text{「} A \equiv B \text{」}$
 $\diagup A \text{ の } \{A : (B \text{ の } A)\} \diagdown \Rightarrow \text{「} A \equiv B \text{ の } A \text{」}$
 $\diagup \{(A \text{ の } A) : B\} \text{ の } A \diagdown \Rightarrow \text{「} A \text{ の } A \equiv B \text{」}$
 $\diagup B \text{ の } \{(A \text{ の } A) : A\} \diagdown \Rightarrow \text{「} A \text{ の } A \equiv A \text{」}$
 $\diagup B \text{ の } \{A \text{ の } (A : A)\} \diagdown \Rightarrow \text{「} A \equiv A \text{」}$
- 4.4 「AのB ≡ AのA」
 $\diagup (A \text{ の } B) : (A \text{ の } A) \diagdown$
 $\langle (A \text{ の } B) \circ (A \text{ の } A) \rangle$ マレ
 友だちの弟のような友だちの友だち
 $\langle \{(A \text{ の } B) \text{ の } (A \text{ の } A)\} \circ \{C \text{ の } (A \text{ の } A)\} \rangle$

- A)) 不成立
 $\diagup A \text{ の } (B : A) \text{ の } A \diagdown \Rightarrow \text{「} A \equiv B \text{」}$
 $\diagup A \text{ の } \{B : (A \text{ の } A)\} \diagdown \Rightarrow \text{「} A \equiv B \text{ の } B \text{」}$
 $\diagup \{(A \text{ の } B) : A\} \text{ の } A \diagdown \Rightarrow \text{「} A \text{ の } B \equiv A \text{」}$
 $\diagup A \text{ の } \{(A \text{ の } B) : A\} \diagdown \Rightarrow \text{「} A \text{ の } B \equiv A \text{」}$
 $\diagup A \text{ の } \{A \text{ の } (B : A)\} \diagdown \Rightarrow \text{「} A \equiv B \text{」}$
- 4.5 「AのB ≡ BのB」
 $\diagup (A \text{ の } B) : (B \text{ の } B) \diagdown$
 $\langle (A \text{ の } B) \circ (B \text{ の } B) \rangle$ マレ
 弟の友だちのような(私の) 友だちの友だち
 $\langle \{(A \text{ の } B) \text{ の } (B \text{ の } B)\} \circ \{C \text{ の } (B \text{ の } B)\} \rangle$ 不成立
 $\diagup A \text{ の } (B : B) \text{ の } B \diagdown \Rightarrow \text{「} A \equiv A \text{」}$
 $\diagup A \text{ の } \{B : (B \text{ の } B)\} \diagdown \Rightarrow \text{「} A \equiv A \text{ の } A \text{」}$
 $\diagup \{(A \text{ の } B) : B\} \text{ の } B \diagdown \Rightarrow \text{「} A \text{ の } B \equiv B \text{」}$
 $\diagup B \text{ の } \{(A \text{ の } B) : B\} \diagdown \Rightarrow \text{「} A \text{ の } B \equiv B \text{」}$
 $\diagup B \text{ の } \{A \text{ の } (B : B)\} \diagdown \Rightarrow \text{「} A \equiv A \text{」}$
- 4.6 「AのA ≡ BのB」
 $\diagup (A \text{ の } A) : (B \text{ の } B) \diagdown$
 $\langle (A \text{ の } A) : (B \text{ の } B) \rangle$ マレ
 親分の親分のような先生の先生
 $\langle \{(A \text{ の } A) \text{ の } (B \text{ の } B)\} \circ \{C \text{ の } (B \text{ の } B)\} \rangle$ 不成立
 $\diagup A \text{ の } (A : B) \text{ の } B \diagdown \Rightarrow \text{「} A \equiv B \text{」}$
 $\diagup A \text{ の } \{A : (B \text{ の } B)\} \diagdown \Rightarrow \text{「} A \equiv B \text{ の } B \text{」}$
 $\diagup \{(A \text{ の } A) : B\} \text{ の } B \diagdown \Rightarrow \text{「} A \text{ の } A \equiv B \text{」}$
 $\diagup B \text{ の } \{(A \text{ の } A) : B\} \diagdown \Rightarrow \text{「} A \text{ の } A \equiv B \text{」}$
 $\diagup B \text{ の } \{A \text{ の } (A : B)\} \diagdown \Rightarrow \text{「} A \equiv B \text{」}$
- 4.7 「AのB ≡ AのB」
 $\diagup (A \text{ の } B) : (A \text{ の } B) \diagdown$
 $\langle (A \text{ の } B) \circ (A \text{ の } B) \rangle$ マレ
 トラの遠ばえのような(留置場の) トラの遠ばえ
 $\langle \{(A \text{ の } B) \text{ の } (A \text{ の } B)\} \circ \{C \text{ の } (A \text{ の } B)\} \rangle$ 不成立
 $\diagup A \text{ の } (B : A) \text{ の } B \diagdown \Rightarrow \text{「} A \equiv B \text{」}$
 $\diagup A \text{ の } \{B : (A \text{ の } B)\} \diagdown \Rightarrow \text{「} A \equiv B \text{ の } A \text{」}$

$\diagup\{(AのB) : A\}のB \diagup \Leftrightarrow \text{「}AのB \equiv A\text{」}$
 $\diagup Aの\{(AのB) : B\} \diagup \Leftrightarrow \text{「}AのB \equiv B\text{」}$
 $\diagup Aの\{Aの(B : B)\} \diagup \Leftrightarrow \text{「}A \equiv A\text{」}$

4.8 「AのB \equiv BのA」

$\diagup(AのB) : (BのA) \diagup$
 $\langle(AのB) \in (BのA)\rangle$ マレ
 弟の友だちのような(私の)友だちの弟
 家の隣のような隣の家
 $\langle\{(AのB)の(BのA)\} \in \{Cの(BのA)\}\rangle$ 不成立

$\diagup Aの(B : B)のA \diagup \Leftrightarrow \text{「}A \equiv A\text{」}$
 $\diagup Aの\{B : (BのA)\} \diagup \Leftrightarrow \text{「}A \equiv AのB\text{」}$
 $\diagup\{(AのB) : B\}のA \diagup \Leftrightarrow \text{「}AのB \equiv B\text{」}$
 $\diagup Bの\{(AのB) : A\} \diagup \Leftrightarrow \text{「}AのB \equiv A\text{」}$
 $\diagup Bの\{Aの(B : A)\} \diagup \Leftrightarrow \text{「}A \equiv B\text{」}$

4.9 「AのA \equiv BのC」

$\diagup(AのA) : (BのC) \diagup$
 $\langle(AのA) \in (BのC)\rangle$ 少ナイ
 娘の娘のような息子の嫁
 $\langle\{(AのA)の(BのC)\} \in \{Dの(BのC)\}\rangle$ マレ
 コピーのコピーのような(何かの)仕あがりの不鮮明さ

$\diagup Aの(A : B)のC \diagup \Leftrightarrow \text{「}A \equiv B\text{」}$
 $\diagup Aの\{A : (BのC)\} \diagup \Leftrightarrow \text{「}A \equiv BのC\text{」}$
 $\diagup\{(AのA) : B\}のC \diagup \Leftrightarrow \text{「}AのA \equiv B\text{」}$
 $\diagup Bの\{(AのA) : C\} \diagup \Leftrightarrow \text{「}AのA \equiv B\text{」}$
 $\diagup Bの\{Aの(A : C)\} \diagup \Leftrightarrow \text{「}A \equiv B\text{」}$

4.10 「AのB \equiv AのC」

$\diagup(AのB) : (AのC) \diagup$
 $\langle(AのB) \in (AのC)\rangle$ マレ
 トラの遠ばえのような(留置場の)トラのわめき声
 $\langle\{(AのB)の(AのC)\} \in \{Dの(AのC)\}\rangle$ 不成立
 $\diagup Aの(B : A)のC \diagup \Leftrightarrow \text{「}A \equiv B\text{」}$

$\diagup Aの\{B : (AのC)\} \diagup \Leftrightarrow \text{「}A \equiv BのC\text{」}$
 $\diagup\{(AのB) : A\}のC \diagup \Leftrightarrow \text{「}AのB \equiv A\text{」}$
 $\diagup Aの\{(AのB) : C\} \diagup \Leftrightarrow \text{「}AのB \equiv C\text{」}$
 $\diagup Aの\{Aの(B : C)\} \diagup \Leftrightarrow \text{「}A \equiv B\text{」}$

4.11 「AのB \equiv CのA」

$\diagup(AのB) : (CのA) \diagup$
 $\langle(AのB) \in (CのA)\rangle$ 少ナイ
 日本の東京のようなアジアの日本
 $\langle\{(AのB)の(CのA)\} \in \{Dの(CのA)\}\rangle$ 不成立

$\diagup Aの(B : C)のA \diagup \Leftrightarrow \text{「}A \equiv B\text{」}$
 $\diagup Aの\{B : (CのA)\} \diagup \Leftrightarrow \text{「}A \equiv BのC\text{」}$
 $\diagup\{(AのB) : C\}のA \diagup \Leftrightarrow \text{「}AのB \equiv C\text{」}$
 $\diagup Cの\{(AのB) : A\} \diagup \Leftrightarrow \text{「}AのB \equiv A\text{」}$
 $\diagup Cの\{Aの(B : A)\} \diagup \Leftrightarrow \text{「}A \equiv B\text{」}$

4.12 「AのB \equiv BのC」

$\diagup(AのB) : (BのC) \diagup$
 $\langle(AのB) \in (BのC)\rangle$ 少ナイ
 アジアの日本のような日本の東京
 $\langle\{(AのB)の(BのC)\} \in \{Dの(BのC)\}\rangle$ 不成立

$\diagup Aの(B : B)のC \diagup \Leftrightarrow \text{「}A \equiv A\text{」}$
 $\diagup Aの\{B : (BのC)\} \diagup \Leftrightarrow \text{「}A \equiv AのB\text{」}$
 $\diagup\{(AのB) : B\}のC \diagup \Leftrightarrow \text{「}AのB \equiv B\text{」}$
 $\diagup Bの\{(AのB) : C\} \diagup \Leftrightarrow \text{「}AのB \equiv C\text{」}$
 $\diagup Bの\{Aの(B : C)\} \diagup \Leftrightarrow \text{「}A \equiv B\text{」}$

4.13 「AのB \equiv CのB」

$\diagup(AのB) : (CのB) \diagup$
 $\langle(AのB) \in (CのB)\rangle$ ヤヤ少ナイ
 滝の音のような雨の音
 $\langle\{(AのB)の(CのB)\} \in \{Dの(CのB)\}\rangle$ 不成立

$\diagup Aの(B : C)のB \diagup \Leftrightarrow \text{「}A \equiv B\text{」}$
 $\diagup Aの\{B : (CのB)\} \diagup \Leftrightarrow \text{「}A \equiv BのA\text{」}$
 $\diagup\{(AのB) : C\}のB \diagup \Leftrightarrow \text{「}AのB \equiv C\text{」}$
 $\diagup Cの\{(AのB) : B\} \diagup \Leftrightarrow \text{「}AのB \equiv B\text{」}$

\diagup Cの{Aの(B : B)} \diagdown \Rightarrow 「A \equiv A」
 4.14 「AのB \equiv CのC」
 \diagup (AのB) : (CのC) \diagdown
 \langle (AのB) \circ (CのC) \rangle ヤァ少ナイ
 未来都市の模型のような都心の
 都心
 \langle {(AのB)の(CのC)} \circ {Dの(Cの
 C)} \rangle 不成立
 \diagup Aの(B : C)のC \diagdown \Rightarrow 「A \equiv B」
 \diagup Aの{B : (CのC)} \diagdown \Rightarrow 「A \equiv BのB」
 \diagup {(AのB) : C}のC \diagdown \Rightarrow 「AのB \equiv C」
 \diagup Cの{(AのB) : C} \diagdown \Rightarrow 「AのB \equiv C」
 \diagup Cの{Aの(B : C)} \diagdown \Rightarrow 「A \equiv B」

4.15 「AのB \equiv CのD」
 \diagup (AのB) : (CのD) \diagdown
 \langle (AのB) \circ (CのD) \rangle
 ブタの筋肉のような彼の神経
 \langle {(AのB)の(CのD)} \circ {Eの
 (CのD)} \rangle ヤァ少ナイ
 人形のピノキオのような鼻の頭
 \diagup Aの(B : C)のD \diagdown \Rightarrow 「A \equiv B」
 \diagup Aの{B : (CのD)} \diagdown \Rightarrow 「A \equiv BのC」
 \diagup {(AのB) : C}のD \diagdown \Rightarrow 「AのB \equiv C」
 \diagup Cの{(AのB) : D} \diagdown \Rightarrow 「AのB \equiv C」
 \diagup Cの{Aの(B : D)} \diagdown \Rightarrow 「A \equiv B」

以上、比喩の現代語における代表的な指標である「よう」を取りあげ、その前後に名詞を配した形式について、比喩表現の成立する可能性とその言語的な条件を考えてきた。検討したのは、対応する名詞を両辺に2個ずつそなえた形までの部分であるが、実際には3個以上になることもあるし、名詞対応に限ったところで、もっと複雑な対応をなす場あいもあろう。とするなら、この範囲に絞ったものとしても、十全な考察とは言いがたく、やはり部分的な検討にとどまるだろう。しかも、それぞれの形式における比喩表現の成立やそれを規定する言語的な条件の推測は、すべてその際に筆者の頭に浮かんだ作例をもとに行ったものである。したがって、実際の用例の豊富な集積を存分に駆使して再検討することにより、この結果は追補・拡充され、一部は修正されることにもなると予想される。ただ、この面における研究がもっと正確で詳細な事実を明らかにするためには、単に実例を集めるだけでは十分でないということをお認めねばなるまい。ここで検討した形式の範囲内で言っても、いわゆる助詞の「の」がある事物・事象の、所属・対象・材料・手段・原因・場所・時間・性質・状態などのうちのどれを表すか、また、それには、まず、名詞の意味的な性質がどうからんでくるか、といった語彙=文法的な問題をのり越えねばならないし、その上で、その名詞のノ格がさし示す関係とのかかわりにおいて、その支配領域をおさえる、という構文論上の問題を解決し、さらに、それらとの関連において、指標「よう」の勢力範囲の伸縮に伴う対比関係の多様性を、言語形式の諸条件との対応においてつきとめる必要があるからである。このような問題を先に見すえて、それに十分な配慮を怠らなければ、ここで扱った一般的な考察による検討結果が、その基盤となることが期待できるし、少なくとも、そのためのたたき台の役を果たすことは可能であろう。

第3節 比喩的思考から比喩表現へ

さて、この考察に関して指摘しておきたいことがもう一つある。すなわち、その第3点というのは、ある比喩的な思考つまり“見たて”（芝原宏治「メタファと発想論理」参照）を言語化する際の驚くべき多様性についてである。換言すれば、ある事物・事象を他の事物・事象にたとえる時に、それをどう表すかという方法は実にさまざまということである。ある事がらを何かにととえることを思いついたとしよう。何を何にととえるかは決まったわけである。ところが、それをいざ比喩表現として言語化する段になると、数おおくの手段からの選択に迫られるのである。例をあげよう。花子の太い足を強調するためにゾウを引きあいに出すことにする。

第1段 名詞対応の制限解除

これまでは、指標「よう」を用いた名詞対応の形式を取りあげたが、最初に、その「名詞対応」というほうの制限を外して考えてみよう。そうすると、花子の足の太さをゾウの足に見たてた比喩的思考は、その関係を明確にした基本的な形式として、まず、次のように言語化される。

(1) 花子の足はゾウの足のように太い

ところが、これは前述の異対象の同部分対比であるから、花子の足が言語化されれば、ゾウのほうの足は必ずしも言語的に明示する必要はない。異部分対比の場合には、両方の直接対比部分をともに明示しないと、一般的にはその関係がはっきりしなくなるが、同部分対比の場合には、後者の「足」を省略しても何の障害にもならないので、経済の原則から、そこを言語化しないのがむしろ通例となっているのである。そこで、(1)で表された関係を少しもゆがめずに、次のように表現することができる。

(1') 花子の足はゾウのように太い

また、一方で、足の太さの形容にゾウが持ちこまれたのは、ゾウの足の太いことが広く認められた事実だからであり、「ゾウの足」と言えば、だれでもすぐに〈太い足〉を連想するにきまっているので、特に「太い」と断わらなくても、誤解される危険はほとんどない、と予想される。そこで、(1)は次のように表現しても、その意図をほぼまちがいがなく伝えることができる。

(2) 花子の足はゾウの足ようだ。

さらに、「ゾウの足」の「足」を省略する第1変形と、「太い」を省略する第2変形とは、互いに矛盾なく両立できる性質を持つはずだから、その両方を適用した次のような表現も、ほとんど同じ情報を運ぶことが可能だ、と考えられる。

(2') 花子の足はゾウようだ

第2段 取りあげ方による変種

ここまででは、初めから花子の足とゾウの足との対比をその形で取りあげたわけであるが、「ゾウの鼻は長い」という表現が担っている論理的情報とほぼ等しい内容を、観点を交えて、「ゾウは鼻が長い」という表現で伝達することがあるように、最初から足どうしを問題にするのとは違った取りあげ方で、まず、花子を話題にし、次に、そのうちの足に焦点を合わせる方法もありうる。そうすれば、(1)は次のように表すこともできる。

(3) 花子は足がゾウの足のよう太い

これについても前と同様の変形を施せば、それぞれ次のような表現になる。

(3') 花子は足がゾウのよう太い

(4) 花子は足がゾウの足のようだ

(4') 花子は足がゾウのようだ

そして、同一事実でもとらえ方を変えれば違った言語表現が生ずるので、この類の変種が発見されるごとに、ほかの言語的条件が許せば、新たにいく種類かの表現形式が追加されるはずである。事実、以上と異なる把握のし方はまだほかにもいろいろある。例えば、花子の足が太いことを初めに明言し、次にそれがゾウの足に似ていることを述べるのも、その一つである。その場あいは次のようになる。

(5) 花子の太い足はゾウの足のようだ

(5') 花子の太い足はゾウのようだ

ただし、この場あいは、その「太い」を省略してしまうと、それぞれ(2)と(2')とに重なるので、その変形結果を、ここに新しく掲げるわけにはいかない。

また、例えば、花子という人間や、その人体の部分である足をではなく、少なくとも形式的には、その足が太いという事から自体を話題として提示し、次に、それについて、ゾウの足と同様だということ述べることもある。その場あいは次のようになる。

(6) 花子の足の太さはゾウの足のようだ

(6') 花子の足の太さはゾウのようだ

この場あいも、「太さ」を省けば(2)や(2')になってしまうので、それらに当たるものは追加できない。

さらに、(1)系の形容(動)詞述語文を名詞述語文に変えて、いわば説の文を題の文にすることもできる。その場あいは次のようになる。

(7) 花子の足はゾウの足のよう太さだ

(7') 花子の足はゾウのよう太さだ

(3)系の表現形式にもこれと同じ操作を加えると、それぞれ次のようになる。

(8) 花子は足がゾウの足のよう太さだ

(8') 花子は足がゾウのよう太さだ

また、(3)系と(6)系とをミックスした次のような表現形式もありうる。

(9) 花子は足の太さがゾウの足のようだ

(9′) 花子は足の太さがゾウのようだ

そのほか、すぐに思いつくだけでも、次のような表現形式がある。

(10) 花子はゾウの足のような太さの足だ

(10′) 花子はゾウのような太さの足だ

(11) 花子はゾウの足のような足だ

(11′) 花子はゾウのような足だ

(12) 花子の足はゾウの足のような太さの足だ

(12′) 花子の足はゾウのような太さの足だ

(13) 花子の足はゾウの足のような足だ

(13′) 花子の足はゾウのような足だ

(14) 花子はゾウの足のような太い足だ

(14′) 花子はゾウのような太い足だ

(15) 花子の足はゾウの足のような太い足だ

(15′) 花子の足はゾウのような太い足だ

(16) 花子はゾウの足のように太い足だ

(16′) 花子はゾウのように太い足だ

(17) 花子の足はゾウの足のように太い足だ

(17′) 花子の足はゾウのように太い足だ

(18) 花子はゾウの足のように太い足をしている

(18′) 花子はゾウのように太い足をしている

(19) 花子の太い足はゾウの足のようだ

(19′) 花子の太い足はゾウのようだ

(20) 花子の足の太さはゾウの足のような太さだ

(20′) 花子の足の太さはゾウのような太さだ

(21) 花子は足の太さがゾウの足のような太さだ

(21′) 花子は足の太さがゾウのような太さだ

(22) 花子はゾウの足のような太さの足をしている

(22′) 花子はゾウのような太さの足をしている

(23) 花子はゾウの足のような太い足をしている

(23′) 花子はゾウのような太い足をしている

(10) (11) (14) (16)などは首尾を主述と考えると「花子は…足だ」となって脱論理的だが、現実には現れる。)

おそらくまだほかにもいろいろな表現が可能だろう。しかし、むろん無制限というわけ

ではない。というよりも、いくらでもありそうに見えるこの表現形式も、実は、数個の選択肢が数箇所にあるにすぎず、その組みあわせによって、その形式の数が飛躍的に増加しているのである。したがって、今ここに例としてあげてきた46種類の形式は、次のように、比較的単純な形で整理できるはずである。



ここで、「0」とあるのは、その選択箇所ではゼロが選ばれる、つまり、他の選択肢が選ばれずにそのままその地点を通過して次に進むことを意味する。

これまであげてきた46例は、いずれも、この12箇所にある2ないし3の選択肢のどれかを選びとることによって成立する形式である。そして、これらは、必須箇所の連鎖「花子／は／ゾウ／のよう」を中核とする、同義的類義表現形式群、あるいは、おそらく、その集合の一部である、と行うことができよう。

ただし、言うまでもなく、この12箇所における選択肢のあらゆる組みあわせがすべて可能なわけではない。例えば、「太い」の重複や「太い」と「太さ」の両立が許されるか、あるいは、「足」の反復出現がどこまでなら自然か、といった問題がまずあるし、ほかに、第8地点で「0」が選ばれれば、第9・第10・第11地点でいずれも「0」が選ばれるほかはなく、しかも、さらに第12地点で「だ」を選ばなければならない、という強い拘束力が働く事実もあるし、その第8地点で「な」が選ばれた場合いにも、第9地点の「太さ」と第11地点の「足」のうち、少なくともどちらか一方を選ぶ必要があり、さらに、第12地点にも、「0」を選んではいけないという制限が働いている事実も認められる。

このようないくつかの制約があることは確かであるが、しかしそれでもなお、花子の足がゾウの足に似ているという、ただそれだけの事がらを表す言語形式が相当の数に上ると予想することを何ら妨げるものではない。

第3段 語順の制限解除

しかも、以上は、〈花子〉という対象を「花子」という語で表し、〈ゾウ〉を「ゾウ」で、〈脚〉を「足」で、〈太い〉を「太い」で表す、というように、現実には1対多の対応をなすはずの対象と言語形式とを、仮に1対1に限定した場あい、つまり、用語を固定した上での形式の変化について、その場で考えつく範囲で検討した結果であるにすぎないのである。それだけではない。そもそもこれは、比喩の指標を用いた場あいだけを考えたのであり、その指標も、初めに断わったように、「よう」に限って考察を進めてきたのである。しかも、まとめによって察せられるように、「花子／は／ゾウ／のよう」という中核部のオーダーをも固定した際のバリエーションなのである。したがって、ここからもし語順に

こだわらないことにでもすると、他の点を依然として固定したままでさえも、例えば次のような例が、あたかもせきを切ったようにあふれ出し、その表現形式はまた飛躍的にその数を増すことになるのである。

- (1)' ゾウの足のように花子の足は太い
- (1')' ゾウのように花子の足は太い
- (3)' ゾウの足のように花子は足が太い
- (3')' ゾウのように花子は足が太い
- (8)' 足が花子はゾウの足のようだ
- (8')' 足が花子はゾウのようだ
- (9)' 足の太さが花子はゾウの足のようだ
- (9')' 足の太さが花子はゾウのようだ
- (16)' ゾウの足のように花子は太い足だ
- (16')' ゾウのように花子は太い足だ
- (17)' ゾウの足のように花子の足は太い足だ
- (17')' ゾウのように花子の足は太い足だ
- (18)' ゾウの足のように花子は太い足をしている
- (18')' ゾウのように花子は太い足をしている
- (18)'' ゾウの足のように太い足を花子はしている
- (18')'' ゾウのように太い足を花子はしている
- (22)' ゾウの足のような太さの足を花子はしている
- (22')' ゾウのような太さの足を花子はしている
- (23)' ゾウの足のような太い足を花子はしている
- (23')' ゾウのような太い足を花子はしている

以上は、すでにあげた形式をもとにして、それぞれ1箇所だけ順序を変えたものであるが、これ以外にも、次のような表現が、文脈によっては、可能であろう。

- (24) ゾウの足のように太い花子の足だ
- (24') ゾウのように太い花子の足だ
- (25) ゾウの足のような太さの花子の足だ
- (25') ゾウのような太さの花子の足だ
- (26) ゾウの足のように太い足の花子だ
- (26') ゾウのように太い足の花子だ

第4段 指標の制限解除

それでは、次に、今度は、比喩の指標「よう」を用いるという制限をとり払ってみよう。ただし、以上のような詳細な扱いをしたのでは膨大な量になるので、ここでは、その比喩

の指標の種類を中心にまとめ、その他の点でのバラエティにはふれないことにする。また、できるだけ単純な形で整理するために、「ゾウのように太い足」を基本型として立て、指標の置換のみによって新たに成立する形式に絞って列挙する。したがって、以下はその各種類の代表形であり、実際に実現する可能性のある形式の数はこれよりはるかに多いはずである。

〔類 似〕

- ① ゾウのように太い足
- ② ゾウみたいに太い足
- ③ ゾウのごとく太い足
- ④ ゾウ {と (も), に (も)} 似た太い足
- ⑤ ゾウ (0, と, に) そっくりの太い足
- ⑥ ゾウさながらの太い足

〔同 一〕

- ⑦ ゾウ (と, も) 同じ太い足
- ⑧ ゾウ (0, と, も) 同様の太い足
- ⑨ ゾウ (0, も) 同然の太い足
- ⑩ ゾウ {と (も), に (も), も} 等しい太い足
- ⑪ ゾウ (と, も) 違わない太い足
- ⑫ ゾウ (と, も) 異なる太い足
- ⑬ ゾウ (と, も) 変わらない太い足

〔比 較〕

- ⑭ ゾウに (も) 近い太い足
- ⑮ ゾウに (も) 負けない太い足
- ⑯ ゾウに (も) ひけをとらぬ太い足
- ⑰ ゾウに (も) 劣らない太い足
- ⑰' ゾウに優るとも劣らぬ太い足
- ⑱ ゾウに (も) 優る太い足
- ⑲ ゾウに (も) たとえられる太い足
- ⑳ ゾウと (も) 比べられる太い足
- ㉑ ゾウに (も) 匹敵する太い足
- ㉒ ゾウと甲乙つけがたい太い足
- ㉓ ゾウとどっこいどっこの太い足
- ㉔ ゾウを (も) しのぐ太い足
- ㉕ ゾウ以上に太い足
- ㉖ ゾウ顔まけの太い足

- ㉗ ズウ (の, も) 驚く太い足
- ㉘ ズウ {の, さえ (も), も} 及ばぬ太い足
- ㉙ ズウ {の, さえ (も), も} かなわぬ太い足
- ㉚ ズウの比でない太い足
- ㉛ ズウ (も) そっちのけの太い足
- ㉜ ズウより (も) 太い足
- ㉝ ズウほど (も) 太い足

[混 同]

- ㉞ ズウ (か) と (も) 思う太い足
- ㉞' ズウ {(か) と (も), に (も)} 思われる太い足
- ㉟ ズウ (か) と (も) 疑う太い足
- ㉟' ズウ {(か) と (も), に (も)} 疑われる太い足
- ㊱ ズウ {と (も), に (も)} 見える太い足
- ㊱' ズウ {と (も), に (も)} 見られる太い足
- ㊲ ズウに (も) 紛う太い足
- ㊳ ズウ {と (も), に (も)} 見ちがえ {る, そう (な, に)} 太い足
- ㊳' ズウ {と (も), に (も)} 見まちがえ {る, そう (な, に)} 太い足
- ㊳'' ズウ {と (も), に (も)} 見あやま {る, りそう (な, に)} 太い足

[連 想]

- ㊴ ズウを考えさせる太い足
- ㊴' ズウを考えさす太い足
- ㊵ ズウを思わせる太い足
- ㊵' ズウを思わす太い足
- ㊶ ズウをしのばせる太い足
- ㊶' ズウをしのばす太い足
- ㊷ ズウを思いださせる太い足
- ㊷' ズウを思いださす太い足
- ㊸ ズウを思いおこさせる太い足
- ㊸' ズウを想起させる太い足
- ㊹ ズウを髣髴させる太い足
- ㊹' ズウを想像させる太い足
- ㊺ ズウを連想させる太い足
- ㊺' ズウを見る思い (が, さえ, の, も) する太い足
- ㊻ ズウを見る感じ (が, さえ, の, も) する太い足
- ㊻' ズウを見る心地 (が, さえ, の, も) する太い足

㊦ ゾウの印象を与える太い足

以上は、太い足をゾウの足にたとえる際に現れる可能性のある比喩の指標を思いつくまに並べ、たとえる思考過程における考え方の違いによって類別して掲げたものである。このように、一口に「たとえる」とは言っても、そのたとえ方にはいくつかのタイプがある。第1類の〔類似〕型としてまとめた形式群では、花子の脚部が太いという点でゾウのそれと共通の性質を持っていることを把握し、その感じをそのまま、〈似ている〉という意味を表すことばの形式によって、すなわち、「みたい」とか「そっくり」とかいう語を用いて、いわば過不足なくストレートに言語化したものである。第2類の〔同一〕型は、その〈似ている〉という感じを強調し、両者がほとんど〈同じである〉という段階にまで表現をおし進めて、「同然」とか「等しい」とか「変わらない」とかいう語によって極言する場あいである。しかし、これはむろん極言の形式を借りた表現技術なのであって、もしほんとうに〈同じである〉と表現主体が思いこんだ上でそのような表現をとったのであれば、そこには修辞意識が伴わないわけであるから、それは比喩としては成立しない。次の第3類の〔比較〕型は、花子の太い足を単にゾウの足と似ているとしてとらえるというより、やはりそれを強調して、その太さはゾウの足に近いほどだとするか、あるいは、さらに極端に、それをも越えるほどだとする場あいである。これも極言にはちがいないが、〔同一〕型のほうがいわばイコール扱いなのに対し、これはその手前の段階からそこを越える段階までを含み、強調の度あいに幅があるという点に差異が認められる。例えば、「近い」はやや手前、「匹敵する」は同程度、「しのぐ」はそれ以上、といった段階に対応する指標の例と考えられよう。第4類の〔混同〕型は、ある対象に接して、それがほんとうはAなのに、Bとあまりに似ているので、すっかりBだと思いこんでしまう、という体裁を装った場あいである。つまり、この例で言えば、花子の足を見てゾウの足かと思った、という形式によって強調しているのである。むろん、この場あいも、ほんとうにそう信じこんでしまえば比喩にはならないので、実際にはゾウの足でないとかわかっていながらの修辞的仮構なのである。なお、この型における強調にも、「思う」、「疑う」、「紛う」にそれぞれ代表されるいくつかの段階が認められる。第5類の〔連想〕型は、ある対象に接した時に、すぐさま他の何かを思い浮かべる、という形式によって、その両者がいかに類似しているかを感じとらせようとする場あいで、その間接性のために、強調の度あいはやや弱くなる。

ここに掲げたものは、初めに断わったように、「ゾウのように太い足」という基本型から指標の差し替えによって得られる形式に絞ってあるわけである。そして、もし、その出発点の形態に縛られることなく、仮に、「太い足はゾウのようだ」という語順を起点とするなら、例えば、次のような類も可能になるとと思われる。

〔強意〕

㊦ 太い足はまるでゾウだ

- ㉔ 太い足は全くゾウだ
- ㉕ 太い足はどう見てもゾウだ
- ㉖ 太い足はどこから見てもゾウだ
- ㉗ 太い足はまさにゾウだ
- ㉘ 太い足はまさしくゾウだ
- ㉙ 太い足はもはやゾウだ
- ㉚ 太い足はもうゾウだ
- ㉛ 太い足はすでにゾウだ
- ㉜ 太い足はまるっきりゾウだ
- ㉝ 太い足はほんと(う)のゾウだ
- ㉞ 太い足はりっぱなゾウだ
- ㉟ 太い足はゾウそのものだ
- ㊱ 太い足はゾウとしか言いようがない

このような強意の語を添えるのは、事実としては違うことを認めた上で、修辞意識の働いた結果だ、と考えられる場あいが多いので、これらも比喩の指標の役を果たす可能性がある。例えば、実際の〈ゾウの足〉を「太い足はまるっきりゾウだ」とか「太い足はゾウそのものだ」とか言うケースは、むしろきわめて少ないと考えられるからである。そこで、この種の形式群を第6類として立てることができよう。

また、以上とは逆に、その強調にブレーキをかける形式によって、もう少し控えめな比喩を表す場あいもある。花子の太い足をゾウの足以上だと誇張したり、ゾウの足と区別がつかないほどだと断言したりするのではなく、「ある角度から見ればゾウの足にも見える」というように、こういう見方も可能だとして、一つの立場をうち出すにとどめる形式である。つまり、花子の足をゾウの足と見ることに、ある程度の制限や条件を加えるので、他の類に比べれば、おとなしい比喩だとも言えよう。すなわち、次のような場あいである。

〔限定〕

- ㊲ 太い足はいわばゾウだ
- ㊳ 太い足は言ってみるならゾウだ
- ㊴ 太い足はたとえて言うとゾウだ
- ㊵ 太い足は例をとればゾウだ
- ㊶ 太い足は一種のゾウだ
- ㊷ 太い足はある種のゾウだ
- ㊸ 太い足はゾウなみだ
- ㊹ 太い足はゾウクラスだ
- ㊺ 太い足はゾウ級だ
- ㊻ 太い足はゾウ的だ

これらは、副詞句や連体詞相当の修飾句、あるいは、接尾辞というように、その手段とする形式はいろいろであるが、いずれも、その足をゾウの足そのものとしてとらえることなく、それに相当するものとする考え方も可能だという形でおさえている点では共通する。そこで、一括して第7類としておこう。

第5段 比喩形式の多様性

花子の脚部の太さを強調して伝えるためにゾウの足を引きあいに出す際に現れる可能性のありそうな表現形式を想定して列挙してきたわけであるが、ここまででもすでに相当の数に上った。それでも、前に、指標「よう」だけについて試みたような種類のバリエーションにはいっさいふれなかったわけであるから、ここにあげた各指標のそれぞれについてそのようなバリエーションを考慮すれば、たちまちこの何倍かにふくれあがることになるはずである。しかも、これらのうちのかなりの部分、特に第4類や第5類では、さらに、「ぐらい」「ばかり」「ほど」「まで」などのいわゆる副助詞（時枝文法で言う限定を表す助詞）を伴うことが多いので、その組みあわせの分だけ、実際にはまたその数を増すものと見られる。例えば、「ゾウかと疑われるぐらいに太い足」とか「ゾウと見まちがえるばかりの太い足」、あるいは、「ゾウを思わせるほどの太い足」とか「ゾウを想起させるまでに太い足」といった形で現れることもけっして少なくないのである。そして、さらに、特に第7類は、例えば、「太い足はいわばゾウのようだ」とか「太い足はまさにゾウなみだ」といった形で、他の類と併用される場あいもあり、その他の類の間でも、「まるでゾウのように太い足」とか「太い足はもう全くだから見てもりっぱなゾウだ」とかのよう、ここで単独に掲げた比喩の指標がいくつか組みあわさって使われるケースも珍しくないと予想される。さらには、「あたかもゾウのごとき太い足」とか「太い足はさながらゾウのごとし」とかにおける「あたかも」や「さながら」のように、単独ではそれほど現れないために、そこに掲げなかったものも、他との組みあわせによって比喩の指標となりうるのである。また、花子の太い足をゾウの足にたとえる今回の例にこだわらなければ、「仮面のような顔」を「仮面じみた顔」ということもあるように、これまでになげなかった形式がまだまだ見いだされると思われる。

このような頭に浮かんでくる例だけではなく、十分な量の実例によって補うことができれば、おそらく驚くほどの多様な比喩表現形式が抽出されることになろう。しかし、それらは、これまでの検討からも推測できるように、ただでたためにその数を増していくわけではあるまい。ある一定数の指標、および、そのかなり規則的な組みあわせ、あるいは、ある条件下におけるその序列、といった形で整理することが、少なくともある程度は可能であろう。現実の言語作品を基礎資料としてその辺の実態をおさえるのが、次のさしあたっての課題である。ところが、比喩表現というのは、そのような外形上の指標をそなえたものばかりではない、というむずかしさが加わる。詳しくは第2部に説くが、その表現が

ともかくも我われに比喩表現として意識されたものだという事実が、実は、その先を考える上で、たいへん重要な役を果たすのである。というのは、その表現が我われに比喩だとわかるのは、我われがその表現に接した時に、そこに何らかの異常性や意外性を感じて、その契機としていると考えられるからである。すなわち、その表現はどこかがふつうでないのである。その「ふつうでなさ」をどうとらえるかが、その次の課題となろう。異常性を比喩に結びつけることができれば、その「ふつうでなさ」の種類に応じて、第2の比喩、第3の比喩を規定する論拠が得られると思われる。

したがって、比喩表現のこの面における考察を次のように方向づけることができよう。

まず、比喩であることを示す言語的な外形には何と何があるのかをできるだけ網羅的に探りだし、それらを、文法的性質やとらえ方および述べ方の違いなどに応じて、体系的に整理して掲げることにより、比喩表現のうち、指標の見いだされる種類の比喩表現の全貌を概観する。

次に、指標の見いだせない比喩表現について、それでは、我われはその表現になぜ意外性を感じるのかと問わねばならない。その場あい、表現の内部に、構成要素間の結合上の異常性が見いだされる比喩表現においては、その異常性の種類を明らかにする必要がある。

そして、外形的にも意味構造の上でも、表現内部に比喩性の生ずる地盤を持たない比喩表現については、我われがそれでもなお比喩と判断する根拠を、今度は、その表現の外部、つまり、文脈を含む広義の言語的環境との関係に探りあてることが期待される。

このように、ある言語表現から比喩性が汲みとれる時、その比喩性の拠って来る言語側の条件を明らかにし、それを体系的に記述することは、比喩研究に確かな基盤を築く上で、緊要な課題であると考えられる。

第2部 比喩表現の分類

1. 総 説

1.1 問題の所在

1.11 修辞学における比喩の扱い

1.111 修辞学書の構成

序章で指摘し、第1部でもふれたように、比喩法は修辞法の中で扱われてきた。説得のための話しことばの表現技術、すなわち弁論術として発達した西洋の rhetoric、書きことば中心の作文法とも言うべき東洋の修辞法という違いはあっても（『国語学辞典』岡部政裕執筆‘修辞法’）、比喩法というものが取りあげられている点は変わらない。そして、高田早苗・坪内雄蔵・島村滝太郎・佐々政一・五十嵐力らの日本における修辞学書の古典によれば、修辞学あるいは美辞学の骨ぐみは、だいたい次のような内容で構成されている。

各書によって、その比重はまちまちであるが、まず、全体が三つに大きく分かれる。その第1は、序論に当たる部分で、修辞学という学問の概略として、その性格、そこで取りあげられる問題、学問領域と位置づけ、その学問の成立と変遷などに関する論述となる。最後の修辞学史に相当する箇所は、西洋の修辞学史と東洋の修辞学史に分かれるのが通例であるが、和漢洋に三分して扱う場あいもある。また、それを文章に対する考え方の変遷という観点から論ずる際には、そのいわゆる文章意識史と切りはなせないものとして、国文の沿革、つまり、日本文学史をそこで合わせて記述することになる。

三大別した第2は本論に当たる部分で、修辞法そのものについて述べる中心箇所である。ここは、まず、総論に相当する文章基礎論と、各論に相当する表現技術論とに分かれる。基礎論のほうは、思想がはっきりしていること、広義語やあいまいな語や同形異語や類義語や代名詞や句読点などに気をつけて、文意を一義的に近づけること、古語や難語を避け、主格の省略や統一に留意して、文意を明確に伝えること、外来語や老廃語や俗語や方言などを排して文章の純粋を保つことなどが説かれる。つまり、簡潔で明晰で力づよい表現という、文章のあるべき姿を提示し、そのための一般的な注意を促す部分である。

そして、次の各論相当の部分で、そのような文章を可能にするいろいろな方策について取りあげるわけであるが、これも内容的に三つに分かれる。その第1は、文章修飾論とも称すべきもので、語句を中心とし、文や短い文章をも含め、いろいろな表現効果をねらう技法を説く部分であり、詞姿論とか詞藻論とか呼ばれる。第2は文章組織論とも呼ばれるもので、材料の収集から文章の構成要素や秩序・連接・統一などを経て、まとまった言語

作品に定着するまでの組み立てなどに説きおよぶいわゆる文章構成論である。そして、ここでは、段落論や構想論が中心となるが、伏線やクライマックスの設け方といった作品構成上の技巧も含まれる。もう一つは、狭義の文体論とも称すべきものである。これはまた二つに分かれ、文語文と口語文、韻文と散文、知解の文と情感の文、叙事文と抒情文、あるいは、通達文・説明文・議論文・勧誘文といった、多種多様な規準による文章の種類を示す部分と、簡潔体と蔓衍体、剛健体と優柔体、乾燥体と華麗体のように、文章から受ける感じや印象をもとにして、諸観点から対照的な組みあわせを指摘する一種の最狭義の文体論の部分とから成るのがふつうである。

そして、序論と本論に並ぶもう一つの、結論とも言うべき部分は、たいていの場あい、言語美論あるいは文章精神論となり、ビュッフォンの意図した原義（小林英夫『ことばの感覚』所収「ビュッフォンの文章講演」参照）ではなく世間に流布した意味での「文は人なり」を説くところで閉じられる。

1. 112 表現技術論中の比喩の位置

さて、比喩法が取りあげられるのは、もちろん、本論に相当する修辞論のうちの表現技術論の各論の部分である。そこで、その部分だけでもう少し詳細にその輪郭を示すことにしよう。日本の修辞学史上、古典的名著と言われる島村滝太郎『新美辞学』と五十嵐力『新文章講話』とを代表として取りあげてみる。

まず、前書では、「詞藻」を言語上の彩色としての「語彩」と思想上の彩色としての「想彩」とに分け、両者をそれぞれ、修辞の最低標準という意味での消極的なものと、より高度な技法としての積極的なものとに分けているが、比喩法はそのうちの積極的想彩の一つとして掲げられている。この積極的想彩は比喩法・化成法・布置法・表出法の四つに分かれ、それぞれ5～10の手段がその細目として立っている。具体的に示すと、比喩法として一括されているのは直喩法・隠喩法・提喩法・換喩法・諷喩法・引喩法・声喩法・字喩法・詞喩法・類喩法の10種、化成法として一括されているのは擬人法・頓呼法・現在法・誇張法・情化法の5種、布置法として一括されているのは対偶法・漸層法・反復法・倒装法・照応法・転折法・抑揚法の7種、表出法として一括されているのは警句法・問答法・設疑法・咏嘆法・反語法・曲言法・詳略法の7種である。

後書では、各技法における考え方の違いを四つの観点から見て、それぞれの表と裏として計8種の原理を立てる。第1点は表が結体の原理、裏が臙化の原理で、前者に属する詞姿としては直喩法・隠喩法・諷喩法・活喩法・結晶法・問答法・举例法・誇張法・現写法・対照法・抑揚法・換置法・括進法・列叙法・詳悉法の15種、後者に属する詞姿としては稀薄法・美化法・曲言法の3種を掲げている。第2点は表が増義の原理、裏が存余の原理で、前者に属する詞姿としては引用法・隠引法・縁装法・重義法の4種、後者に属する詞姿としては举隅法・側写法・省略法・断叙法・接叙法・接離法・反言法・皮肉法・設疑法・倒

装法の10種を掲げている。第3点は表が融会の原理、裏が奇警の原理で、前者に属する詞姿としては漸層法・飛移法・序次法・連鎖法の4種、後者に属する詞姿としては警句法・奇先法の2種を掲げている。最後の第4点は表が順感の原理、裏が変性の原理で、前者に属する詞姿としては反復法・反復的詞姿・対偶法・避板法・擬態法・喟嘆法・情化法の7種、後者に属するものとしては方便法・遮断法・変態法・超格法の4種を掲げている。

以上を概観すると、その序文に「此の一書を読めば十分といふ程に備はつたもの」を企画したとあるだけに、五十嵐力の分類のほうが数倍も詳しいが、単に詳しくなったという単純な対応にはなっていないことに容易に気づく。例えば、擬人法や誇張法や現在法は、鳥村説では譬喩法とは別に立てられているが五十嵐説では直喩や隠喩と同じ原理に基づく詞姿に数えられているし、鳥村説で同じ布置法の中に掲げられている漸層法と反復法と倒装法が、五十嵐説ではそれぞれ融会と順感と存余という違った原理に基づくものとして別々の箇所扱われているなど、分類の基礎になっている観点、つまり分類原理が違うために、修辭法の構成そのものがかなり異なるとらえ方となっている。したがって、そのような出入りを一つひとつおさえたところで意味がないので、比喩関係の部分の扱いに限って見てみよう。

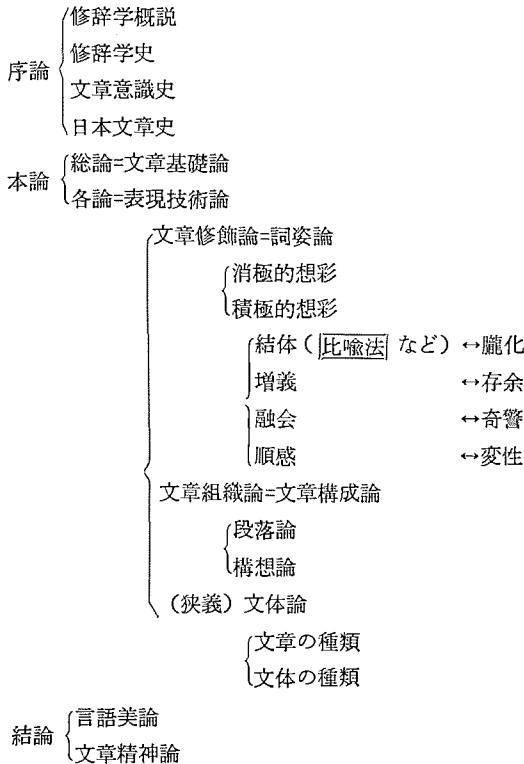
鳥村『新美辞学』の場合はいは、「比喩法」という類立てがあるから、比喩関係の詞姿と言えば、当然その部分を中心となるが、「比喩法」とは別に、その横に並んでいる「化成法」の一種としてあげた「擬人法」は、それが独立した一比喩法としての位置を主張するに足る特性をそなえているかどうかはともかく、通常「比喩法」の中で扱われ、しかもかなり重要な部分を占めていると思われるし、次の「頓呼法」にしても、無生物に呼びかけること自体が、すでに人間扱いに通じるので、擬人法ときれいに分かれるものではないし、ひいては、やはり比喩法とのつながりが濃いことにもなる。同じ「化成法」中の「誇張法」も、「極めて小なるものを芥子微といふ」のはまさに比喩であり、事実、「張喩」として比喩法の一種に立てる場あいもある。

一方、五十嵐『新文章講話』で比喩関係の詞姿となると、直喩・隠喩・諷喩・活喩の部分を含む「結体の原理に基ける詞姿」が最も縁が深いことは確かであるが、しかし、誇張法は前述のように比喩の領域内に位置づけられるとしても、問答法とか抑揚法とかは比喩と考えるのは無理なので、その結体の原理に基づく詞姿がすべて比喩の領域に属するわけではない。また、逆に、結体以外の原理に基づく詞姿の中でも、例えば、臚化の原理に基づくとされる美化法は隠喩と、存余の原理に基づくとされる挙隅法は提喩や換喩と、それぞれ関係を持っているし、また、増義の原理に基づくとされる詞姿のうち、引用法は隠引法とともに「引喩」とされ、同じく重義法も「詞喩」の一種とされて、いずれも比喩法の中で説かれる場あいもある。

このように、ごく大ざっぱに見ても、比喩法に関連する詞姿が、直喩・隠喩・諷喩を除いては、一括してとらえられておらず、その散在のし方も書によって一定しない事実は認

められよう。ということは、すなわち、比喩法と呼ばれるものの外延がきちっとおさえられていないということであり、それはつまり、比喩法を他の技法から弁別し、しかも比喩全般に共通する独自の性格が明確につきとめられていないことに通じるであろう。ただ、ここで直喩・隠喩・諷喩の三者だけは常に一括して扱われている点は偶然でなく、後に説く比喩の基本的な3類との対応上、注目すべき事実である。

なお、この項で紹介した修辞学における比喩法の位置を簡単にまとめて示しておこう。ただし、すべて全体の構成がわかる程度に名称のみ記すが、比喩との関連の深さに応じて細分化して掲げることにする。



1.12 比喩の修辞学的分類への疑問

修辞学における比喩法の位置づけは、諸書によってある程度の違いはあるが、その代表的なものは、ほぼ以上のように素描することができよう。そして、その比喩法としてまとめられている言語表現上の技法についても、前にもふれたように、諸書によっていろいろなものあげられてきた。つまり、比喩法に属する表現技術としては何と何があるかとい

う点も定説はないのである。しかし、これも、全く無秩序に入り乱れているわけではなく、だいたい次のようにまとめることができよう。比喩と言うと、ほとんどの修辞学書が共通して立てるのが、まず、直喩と隠喩と諷喩の三つである。このうち、直喩と隠喩とを比喩法の中心として最初に取りあげ、諷喩のほうは、場あいによって、かなり後に掲げ、比較的軽く扱うこともあるが、しかし、ともかくこの三者がほとんどの修辞学者によって比喩法の中に納められているという事実は、くり返して言うが、見のがすべきではない。そして、この直喩・隠喩・諷喩のほかにも、名称はいろいろだが、活喩や提喩・換喩に相当するもの、それに声喩をあげる書も多い。また、さらに、引喩・張喩・字喩・詞喩・類喩を加える場あいもある。

第1部第1編第2章第2節に説いたので、くり返して論ずることは控えるが、修辞学は文章分析のための学問体系ではなく、あくまで表現技術を説くことを目的とする。したがって、文章を魅力的にする修辞的效果をあげる方法にはどんなものがあるか、という方向で論ずることになり、そのために、この比喩法の種類という面でも、それを分類として考えると、分類原理あるいは分類規準に自己充足性を欠くことにもなる。すなわち、比喩法とそれ以外の詞姿との関係のあいまいさという比喩の境界の問題は別として、比喩法の内側で考えたとしても、問題点は少なくないのである。だいたい、そこに見られる種類の分類では、その観点が多元的なせいもあって、それぞれの喩法に属すると判定するための条件が十分に排他的でなく、また、網羅的でもないもので、典型的な例はともかく、現実の用例を扱う際には、いろいろな困難が伴う。どちらの喩法に属するかを判定しにくい例、明らかにどちらの喩法の条件をも満たす例、あるいは、逆に、比喩であると考えられるのに、そこに掲げられた喩法のどれにも属さない例も、実際には現れるのである。そして、さらに、この修辞学的に立てられた喩法の中には、形式と意味との対応における転換の機構が明らかに異質なものや、比喩法としての共通性格を認めうるかどうか疑わしいものも含まれている。具体的な問題点についてはあらためてふれないが、この第2部の直接の動機づけとして、分類上の問題のありかをごく簡単に確認しておこう。

第1点は、直喩と隠喩との境界の問題である。並列とは何か、比喩であることの説明語句としてどこまで認めるべきか、という2点の規定が不明確なため、その判定がむづかしく、そのことが両者の境界をあいまいにしている。

第2点は、諷喩の判別の問題で、文脈上の断絶という判断規準の設定がないだけ、該当例の指摘が著しく主観的になることである。

第3点は、いわゆる活喩の問題で、これは、隠喩からの独立性の問題と、活喩という類立てがむしろ無所属の用例を増やすほうに働く場あいがあるという問題とに分かれる。

第4点は、提喩や換喩における転換の広がりの問題で、そのすべてを比喩法としての共通基盤に立つと認めるべきかどうか、という点である。

第5点は、いわゆる声喩が、転換機構から見て、すべて比喩でありうるかどうかという、

いわば比喩性の質に関する問題である。

第6点は、引喩や張喩の問題である。前者は引用法、後者は誇張法として、ともに比喩法とは別に扱われることがあるように、比喩、少なくとも、直喩や隠喩、あるいは諷喩と比べて、その機構上かなりの差が認められる。特に張喩のほうは、そのまま直喩や隠喩の例としても通用する例を含むので、一比喩法としての独立性にも問題がある。

第7点は、字喩・詞喩・類喩における比喩性についての疑問で、字喩と類喩とは機構的に直喩や隠喩と同列に扱う必然性が乏しく、詞喩にしても典型的な比喩と比べ、著しく不完全な転換しか認められない。

以上のように、修辞学はそれなりの要求には応えたであろうが、比喩法の分類という観点からは、根本的な再考を要するほどに、いろいろな問題を抱えている。その問題の質も、細部の手なおしや組みかえでは解決できない種類のものである。したがって、部分的な修正を加えた再編を試みるよりも、別の原理による新しい分類を考えるほうが有効であろう。まず、比喩とは何かをきちっとおさえ、それは、どの点のどういう違いによって、何と何と何とに分かれるか、という分類原理を明確にしておく必要がある。そして、表現主体に、例えば「雪の肌」は実際には〈雪〉でないという、その言語形式が直接に、あるいは一次的にさし示す事からの事実性を否定する意識があり、受容主体が、そこに与えられた言語形式の基本的な意味・用法からの逸脱を意識することを条件とするかぎり、比喩の成立そのものは、主として思考形式に依存するが、その分類のほうは、できるだけ表現形式の言語的な性格を規準とするところから、少なくとも出発すべきであろう。

1.2 比喩の本質規定

1.21 比喩の定義

比喩表現の具体的な分類に入る前に、比喩とは何かを明らかにしておくことは、どうしても必要である。たとえ作業仮説としてでも、比喩に関する定義的記述を避けて進むことはできない。そこで、比喩の基本的な性格に関しては第1部第1章ですでに論じてあるが、それではいったい比喩とは何なのかという点について、ここであらためて私見を述べ、分類作業の出発点としたい。

用例の採集に際し、比喩表現を明確に規定しておく必要があるので、実際の作業に先立ち、第1章における検討・考察の結果から、比喩の方法・機構上の性格とその成立条件の基幹を引きだして、次のような定義を下しておこう。

比喩とは、表現主体が、表現対象を、それを過不足なく直接にさし示す言語形式を使わないで、その代わりに、言語的な意味では他の事物・事象に対応する言語形式を提示

し、その言語的環境との違和感や、それが現れることの文脈上の意外性などで、受容主体の想像力を刺激して、両者の共通点を推測させることによって、間接的に伝える表現技法である。

1.22 定義の解説

定義形式の文章はコンパクトな表現をとるために、どうしても抽象的になる傾向があって、この場あいもこれだけではわかりにくいと思われるので、少し解説を加えておこう。慣用的な比喩である「雪の肌」を例にとって説明することにする。

まず、「表現主体」というのは、ここではある言語表現の送り手、つまり、話し手および書き手のことである。この例で言えば、「雪の肌」という表現の使い手をさすことになる。

また、「受容主体」のほうは、逆に、その言語表現の受け手、つまり、聞き手および読み手のことで、「雪の肌」という表現に接した人をさす。

「表現対象」というのは、表現主体がその言語表現に託して伝達しようとする意味内容で、「雪の肌」の例で言えば〈白い肌〉、「雪の」の部分に限れば〈白い〉、という、事物や事象をさす。

「それを過不足なく直接にさし示す言語形式」というのは、その〈白い〉という事実をストレートにさす「白い」という語、という意味になる。

「言語的な意味」というのは、例えば、「京都。」という一語文が「京都行きの列車の乗車券を1枚ください」というような意味を表したり、「今日は暑いね」という発話が「冷たい飲みものが欲しい」という意味を表したり、あるいは、「炎」という語が〈情熱〉を表したりするような、その場面での特殊化された意味ではなく、その言語形式の字句どおりの意味をさす。したがって、「雪の肌」の「雪の」の場あいは、〈雪所有の〉とか〈雪製の〉とかいった意味に相当するので、「言語的な意味では他の事物・事象に対応する言語形式」という全体は、この例で具体的に言えば、結局、その〈雪所有の〉とか〈雪製の〉とかいう意味に本来は対応するはずの「雪の」という言語形式をさすわけである。

「言語的環境との違和感や、それが現れることの文脈上の意外性」というのは、例えば、船舶に関係のない場面で「沈没」ということばが出てきたり、「においが」の述語に「さす」とあったり、「感情を」の後に「現金ばらいにする」が続いたりする場あいをさす。この例で言えば、「雪の」が「肌」の修飾語の位置に立つことの意外性、あるいは、「雪の」と「肌」との間の違和感、というふうに説明できる。

「想像力を刺激して」というのは、受容主体がそのような違和感や意外性を解消するために、どちらかの意義のずれを想定して、そのギャップを埋めて、全体としてのまとまった意味を得ようと努めることをさす。すなわち、「雪の肌」という表現から統一の意味を引き出すために、「雪の」という形式の意味がどうずれることによって「肌」と結びつく

のかを探る、という受容過程に対応する。

「両者の共通点」というのは、「雪の」の基本的な意味、すなわち、〈雪所有の〉とか〈雪製の〉とかいったものと、その場での臨時の意味、すなわち〈白い〉とのつながりをさす。

1.23 比喩効果の特性

方法の面から比喩を規定すれば、だいたい以上のようになると思われるが、伝達効果の面における比喩表現の特性についても、ここでまとめておこう。

「雪の肌」という比喩表現は、「白い肌」というストレートな表現と、その言語形式が外界のどういう事実をさし示すかという意味での、いわば論理的情報は同じだと考えることもできる。しかし、比喩表現の場合には、受容主体が、〈雪〉にそなわっているいくつかの属性の中から〈白い〉を選びとる受容過程で、次つぎに捨てていった〈冷たい〉とか〈溶けやすい〉とか〈やわらかい〉とか〈雪独特の感触〉など、〈白い〉以外の属性が、それぞれを捨てる際に、否定的にもせよ、ともかくも何らかの形で受容主体の意識を通りぬけるはずなので、受容主体が各自のスタイルに応じて思いえがく〈白い肌〉の形象の背後に、うっすらと消え残る淡い映像を伴う点で、ストレートな「白い肌」という表現との間に、少なくとも感性的な差があるとは言えよう。視角を変えれば、比喩表現は、論理的情報の明確さを失う度合いに応じて、いわば感性的な情報が豊かになる、と考えることもできるであろう。

1.3 調査資料

1.31 文学作品を資料とした理由

今回の調査は、まず、比喩表現にはどんなものがあるかをできるだけ広くおさえ、そして、それらはどういう種類に分かれるかをできるだけ表現形式の言語的な性格に沿って考えることを目的とする。そこで、調査資料としては文学作品を選ぶことにした。その理由の一つは、作家は、過去においても、日本語の文章表現の改革、あるいは、少なくともその発達や変化に、大きな役わりを果たしたし、現在でも、優れた日本語の担い手としての、また、その表現をより豊かにする一動力源としての期待がある、という点にある。そして、事実、比喩表現において、文学以外の言語作品と比べ、高度でバラエティに富んだ用例の得られる可能性が高い。単に頻度だけで言えば、日常の談話などでもそれほど差のない場合があるだろうが、例えば、書きことばで「よう」として出る比喩表現のほとんどが「みたい」として現れるなど、それぞれに違った傾向が見られるので、一括してとらえるのは、少なくとも第一次の用例採集においては適当でないと考えられる。また、度数はと

もかくも、固定化した慣用的な比喩だけでなく、できるだけ多種多様な比喩表現例を得るためには、推敲の余裕のある書きことばのほうがふさわしいし、中でも、現実の用を足すための文章ではなく、表現効果をねらうはずの文学作品が、最も目的にかなうと予想されるのである。

1.32 調査対象の選定

1.321 範囲の限定

日本の文学作品を調査するにあたって、次のようにその対象作品を選びだした。

まず、この調査は現代語の比喩表現に関するものなので、今回は古典作品は調査対象から外すこととし、現代表記を採用している中央公論社版『日本の文学』をテキストに用いた。そして、同じ理由で、口語体の作品を対象とすることにし、文語体で書かれた作品は今回は除外した。ただし、作品の一部に文語体の引用や書簡などを含む場あいは、作品全体としては口語体だと判断し、選定候補作品に残した。

また、この調査は、文学作品を資料として用いするが、直接の目的は文学そのものの研究にあるのではなく、まず現代日本語の比喩表現の実態をとらえることにあるので、そのほとんどを占める散文作品に限り、韻文でつづられた作品は調査対象から外した。ただし、この場あいも、部分的に韻文の箇所が現れるだけであれば、一応、散文体の作品と判断した。

次に、現代文学の中心は小説なので、今回は小説を対象として、詩歌は省き、戯曲および戯曲仕立ての部分を持つ小説をも、資料の等質性を保つために除外した。

さらに、一般的な小説作品を得るために、小説家の小説を対象とし、例えば世間的に詩人や歌人として通っている人の作品は取りあげないことにした。

なお、作品の一部をサンプリングして直接の調査箇所を抽出するのではなく、各作品を全編取りあげて調査することになるので、「抄」的に収められているものは省くことにした。ただし、大長編の作品の場合、その全編が収められていなくても、収載された部分が、「編」としてまとまっていれば、選定候補として残すことにした。

以上をまとめると、結局、『日本の文学』所収の口語体・散文で書かれた小説のうち、日本の近代および現代の各小説家の代表的な作品を選ぶ、ということになる。

そして、具体的に言えば、このような操作の結果、坪内逍遙・尾崎紅葉・樋口一葉・徳富蘆花はその作品が文語体であるために除かれ、石川啄木・正岡子規・高浜虚子・北原白秋・高村光太郎・萩原朔太郎・柳田国男・斎藤茂吉・折口信夫・小林秀雄の作品はジャンルの点で初めから除外されることになった。

1.322 作品の選定

以上で残ったのは105名の小説家であるが、次に、その各作家の代表作を、次の規準で

各1編選びだし、調査対象の候補とした。

まず、『新潮日本文学小辞典』（新潮社 1968年）と『現代日本文学大事典』（明治書院 1967年）の両方に作品解説のある作品を選びだす。

ただし、それに該当する作品のない作家の場合はいは、一方に作品解説のある作品を選ぶことにする。

それにも該当する作品のない場合い、すなわち、どちらの書にも、その作品が解説として取りあげられていない作家の場合い、両書とも作家解説中で言及している作品を選ぶことにする。

また、優先順位が同一である作品が2編以上ある作家の場合い、および、以上のどのレベルでも該当作品の得られない場合い、前掲書の作家解説のほか、下記の諸書を参考にして、その代表作を推定する。

『現代日本文学辞典』（河出書房 1949年）

『近代日本文学辞典』（東京堂 1954年）

『世界文学辞典』（研究社 1954年）

『縮約日本文学大辞典』（新潮社 1955年）

『岩波小辞典日本文学〈近代〉』（岩波書店 1958年）

『日本文学鑑賞辞典〈近代編〉』（東京堂 1960年）

『新世紀大辞典』（学習研究社 1968年）

『文芸年鑑』（新潮社 1968年～）

そして、資料不足で決めがたい場合い、長編を優先させる。

1.323 調査作品

以上の操作を経て、二葉亭四迷から大江健三郎に至る105名の作家の代表作を各1編、すなわち、『浮雲』から『死者の奢り』までの計105編を調査対象の候補作品として選びだした。

ところが、実際に用例を採集してカード化する作業に取りかかってみると、予想以上に時間と労力とを要することがはっきりした。そして、限られた期間における個人研究としては、予想される作業量はその能力の限界を越えていると判断せざるをえなかった。そこで、サンプリングによって作品中の調査箇所を抽出するか、あるいは、対象とする作品の数を少なくするかして、作業量を減らさなければならなくなったわけであるが、今回は、全数調査という線は崩さずに、作品数を減らすことにした。そのほうがサンプリングの方法の違いによる偏りを避けることができるし、また、将来の補充もやりやすいと考えたからである。特に内容的な分類を試みる際には大幅な補充が必要になる。

そして、105編の候補作品のうち、今回は結局50編についての調査を行うことにした。将来の補充を期待した調査なので、105編から50編に絞る際には、それほど厳密な規準を

設けたわけではない。ただし、比較的新しい作品にやや比重をかけたほかは、各時期から平均的に選ぶ、女流作家は全体として少ないので、少し多めに選ぶ、短編・長編のバランスを考える、比喩使用率の点でいろいろな段階にある作家の作品が含まれるようにする、といった程度の注意は払ってある。

その結果、実際に調査した50編の作品を、その作者名および調査箇所・調査量とともに、「調査資料一覧」としてまとめて掲げておいたので、具体的には4.1を見られたい。

1.4 調査方法

1.41 用例採集上の困難

1.411 文学作品の問題

作家が決まって、その代表作が決まって、実際に調査する作品が決まったわけである。そして、いよいよその作品の中に現れる比喩表現の実例を集める作業に入ることになるが、前述のように、これはたいへんな労力と時間とを要する仕事である。そのたいへんさは、主として三つの面の困難から生ずるように思われる。

第1は、調査対象が文学作品だということに関連する。まず、文学作品、特に小説のほとんどは、全体がフィクションの世界であるため、もともと比喩的な機構をそなえている、ということがある。一編の作品全体が他の何かを訴えるための一つの仮構にすぎない、というレベルでの考察はひとまずおくとしても、その中のある表現が別の何かを写しだすための比喩であるかどうかという判断も、そのような作品のあり方がからんでますますむずかしくなる場あいが多いのである。また、比喩表現例を探す目的で読むわけであるが、作品の論理展開を無視しては判定できない性質のものであり、一方、作品の筋に引きずられて読んでいくと、部分的な比喩表現の存在を見のがしやすい、というジレンマに似たむずかしさもある。さらに、文学作品では、慣用的な型どおりの比喩表現は努めて避け、複雑で高度な比喩表現を創作する傾向があるので、比喩表現の指摘も、その指示体の把握も、それだけ困難になるわけである。

1.412 あいまい性と中間性

第2は、比喩表現であるかどうかの判定の問題であり、第3は、比喩性の度あいの問題である。前者では、あいまいな用例をどう判定するかという点のむずかしさがあり、後者では、中間的な用例をどう処理するかという点のむずかしさがあるが、すでに述べたのでくり返さない。

1.42 比喩の判定規準

1.421 個人の内省的判断と客観性

以上の諸点、特に第3の面の問題については、読者の反応の実態を知るための量的な調査も考えられるが、今回は、結局、筆者の個人的な意識を規準として判定する手段をとることにした。このような個人の内省的方法によると、確かに主観的になりやすく、また、主観的になることを結局は避けられないし、独断に陥らないという保証さえないのであるが、しかし、少なくとも、筆者も読者の一人であり、比喩表現の性格に関するある程度の見識をそなえた読者の一人でもあるとするなら、一般の解釈からはなほはだしくずれた結果にはならないはずである。例えば、〈寒い〉という感じを「寒い」という語で表したとする。「彼は寒そうだ」とか「彼女は寒いらしい」とかいうのがふつうで、「彼は寒い」とか「彼女は寒い」とかいった表現は、作者が万能の神の座から見おろす小説などの場あいを除いて、通常は現れない、ということからもわかるように、「悲しい」が個人的な感情を表すのと同じく（形容詞の主語制限については国広哲弥『構造的意味論』や西尾寅弥『形容詞の意味・用法の記述的研究』、国立国語研究所報告 44 など参照）、〈寒い〉も確かに個人的な感覚である。したがって、同一時刻に同一地点に居あわせた場あいでも、人によっては〈寒く〉感じないこともある。北の国からやって来たとか、スポーツの後だとか、厚着をしているとか、あるいは、何かに熱中しているとかいった場あいは、事実、寒さを感じないだろう。しかし、そういった個人的な事情は、あくまで特殊な場あいであって、気温とか湿度とかの客観的な条件が〈寒さ〉の感覚と強い相関のあることを否定するものではあるまい。そして、事実、気温が極度に低い場あいは、個人的な条件を押しつけて、大多数の人が〈寒く〉感じるはずである。つまり、個人的な感覚である〈寒さ〉も、気温その他の客観的な条件に規制される面が大きく、個人差と言っても、ふつうは、その微妙な部分を動かすにすぎない、と推測されるのである。少し飛躍するようであるが、文章の表現性という問題も、これと似た面があると思われる。例えば、「彼は冷たい足音を残して立ち去った。」と「彼は立ち去った、冷たい足音を残して。」という二つの表現があったとしよう。ほかの条件が同じだとすれば、大多数の読者は、後者の表現のほうに、余情や感傷性、あるいは、そこから導かれる甘さなどを、より強く感じるであろう。また、それと同時に、おそらくは、表現主体の気どりを意識するにちがいない。しかし、もちろん、読者によっては、必ずしもそうでない場あいもあろう。それは、読者側のスタイルがその受容過程で働くからである。例えば、ある読者にとっては、別離の場面での叙述は、いわゆる倒置法をとり、いわゆる副文止めで文を終止するのが通例だという認識があり、そうでない前者の表現のほうが、むしろ逸脱の表現効果を奏する、という場あいもあるかもしれない。しかし、いずれにしても、前者のほうが後者よりも余韻嫋嫋たる文体印象を作りだしているわけではない。そして、おそらく、同一の論理的情報を担うこの2種類の表現が、その点で逆方向の反応を引きお

こすことは、ほとんどないだろう。そこから、もう一度小さな飛躍をすることになるが、比喩表現に対する反応も、読者の違いによって、全くばらばらになるものではないと予想される。ある言語表現が、読者がだれであるかによって、比喩として受けとられたり、受けとられなかったり、あるいは、そこに感じとられる比喩性の度合いに差が生じたりすることは、事実起こるであろうが、しかし、全くでたために散らばるわけではないだろうし、それも、比喩表現の細部における揺れであって、その中核的な部分の判断は、読み手の違いによってそれほど大きくずれることはないであろう。

今回の調査において、比喩表現の用例採集に筆者自身の内省的方法をとったのは、そのようなやや楽観的な見とおしに立ってのことである。

一方、このような比喩研究を志す一読者の個人的な判断に基づく方法には、積極的な利点もないわけではない。それは、すべて筆者という一個人の意識を規準としたことから来る資料の等質性である。同一人の判断による用例採集で貫くことは、もちろん、その時どきの判定規準の厳しさに多少の差はつきまとうにしろ、少なくともその結果にははっきりした規則性が見られるはずだからである。

1.422 比喩観と用例採集の実際

ともかく、今回は、筆者個人の判断によって比喩表現例を採集することにした。個人的な判断というのは、ある表現に接した時に、筆者自身がそこに比喩性を感じるかどうかを規準にすることであるが、個人的とは言っても、不安定な単なる勘に頼って処理したわけではない。確かに、一次的には、筆者がその表現から比喩を意識することを契機とするが、その奥には、比喩表現というものに対する筆者の基本的な見解があって、それがその時どきの判断を方向づけているはずである。

その基本的な見解というのは、第1部第1章に述べた比喩の性格、および、第2部の総説の1.2に述べた比喩の定義にほかならない。ただし、そこを判定の基礎とはしたが、最初に用例を採集する段階では、積極的に比喩表現であると断定できるものだけではなく、多少とも比喩性を意識させるものは、できるだけ広く採集する方針をとった。したがって、典型的な比喩表現例のほかに、陳腐な慣用的比喩や、いわゆる *dead metaphor*、あるいは、いわば *dying metaphor* とも言えるものなど、きわめて比喩性の乏しい例も、それが比喩との何らかのつながりを意識させるかぎりは、できるだけ採集する方向で処置してある。そのため、第1部第1編第3章に掲げた諸段階に該当する用例を抱えこむことになり、正確に言えば、比喩およびその周辺の用例ということになるだろう。だれでも比喩と認める典型的な用例だけを扱うのも一法であるが、比喩にはどのようなものがあるかを探る第1次作業としては、このように広く求めるほうが、鮮明な像を得るには不便でも、全体像をつかむには適当であろう。

1.43 用例採集の範囲

筆者自身の比喩観をここで再説することは控えるが、それに基づく実際の用例採集と修辞学上の比喩法の種類との関係について簡単にふれておこう。第1部第1編第2章第1節で取りあげた12種類の比喩法のうち、それがどう整理されるかは別にして、ともかくどういう範囲を覆うことになるかについて述べておくことにする。まず、いわゆる直喩・隠喩の用例はすべて採集する。いわゆる諷喩は、前述の気がつきにくさがあるが、一読者としての筆者自身に意識されるかぎりは採集する。ただし、作品全体とかある章全体とかが単位となっている場あいは、他とレベルが著しく異なるので今回は割愛する。次に、いわゆる活喩は、隠喩などと重複するが、従来そう呼ばれてきた用例のほとんどは、ともかく何らかの形で採集される。次のいわゆる提喩と換喩も、意識されるかぎりは採集する。しかし、いわゆる声喩と張喩は、修辞学上の分類の問題点の箇所ですべて述べたように、そうであることによって機械的に比喩になるわけではない。したがって、修辞学で声喩や張喩とされるはずの用例のうち、筆者の考える比喩の条件を満たす使い方のされた一部の用例が採集されることになる。また、いわゆる引喩は、それがそのまま比喩であるとは考えられないので、採集しない。さらに、いわゆる字喩と類喩は現れず、詞喩も、現代小説にはほとんど現れないし、また、前述のように、これらが比喩であるとされる論拠は、直喩や隠喩が比喩であるという意味とはまるで違う、という判断に立ち、今回は採集しない。

修辞学上の比喩法とここで実際に採集した用例との関係は、大ざっぱにまとめれば、以上のようなはずである。

なお、ここで断っておくが、前にあげた三つの面の困難があるため、調査作品中の比喩表現例を漏らさずに採集できたとは思えない。したがって、正直に言うと、その作品に現れた比喩表現はこれだけであるという性質の資料ではなく、その作品におけるこういう表現に接した時に筆者が多少とも比喩性を意識した、という性質の資料であるととまるだろう。

2. 分類方法

2.1 分類原理

前掲50編の文学作品から比喩に関連のありそうな表現例を採集し、箇所ごとにカード化して、約2万の比喩用例カードを作成した。

次に、それにはどのような表現方法上の差があるかを探り、それに基づいて分類することになる。その際の規準であるが、修辞学上の分類については、その問題点を述べる箇所ですでにふれたように、表現主体の思考法を諸種の観点から探り、いろいろな修辞上の表現技巧を指摘する意味は認められるものの、受容主体の接する比喩表現のそれぞれをどれかに分類する際の規準とするには適切でない。

そこで、現実の比喩表現例の分類に堪えうる別の観点での規準が必要となってくる。そして、それは、できるだけ表現形式の言語的な性格と対応することが望ましい。筆者は、従来の分類が表現手段という送り手側に立った分類に終始したのに対し、受け手側からの分類を試みることにした。すなわち、読者という受容主体の立場から比喩表現の分類を行おうというわけである。

例えば、「冷たい」とか「硬い」とか「重い」とか「暗い」とかという文体印象が、その文章の言語的な性格とかなりの対応を認めうるように、比喩性の意識も、その表現の言語的な性格と対応のつく面があると予想される。とするなら、ある表現に接した時に、受容主体はなぜそこに比喩性を感じるのだろうか、という基本的な問いから出発する、読者の立場に徹した受け手側からの分類も可能なはずである。つまり、読者がある言語表現に出あってそれを比喩として受けとる時、言語表現側のどのような性格がその判断を促すのだろうか、という疑問がその出発点となる。もちろん、その判断には、すでに述べたように、いろいろな条件が働いて、時には、誤った判断を引きおこす場あいさえあるのであるが、明確な比喩、少なくとも典型的な比喩の場合はいは、ほとんどまちがいがなく大多数の読者に比喩を感じさせるはずであり、そのような判定のずれ幅が、その比喩表現の明確性・典型性という点に強く規定されるとすれば、明確性・典型性の大部分は言語表現側の問題なので、結局、比喩だとする判断のほうも、その中核部は、表現側の言語的なあり方に規制されるものと考えられる。したがって、読者がある言語表現をなぜ比喩だと考えるのか、あるいは、ある比喩表現に接した時に、なぜそれが比喩であることがわかるのか、という問いに対する答えは、その表現における言語的な性格の違いに対応する面が必ずあるはずなのである。そこで、その受容過程における、比喩であることのわかり方の違いを基本的な観点とし、それに対応する比喩表現例の言語的なあり方の差異に基づいて、あらゆる比喩表現例に第1次の分類を施そうというのである。

2.2 比喩性把握の3類型

2.21 実例提示

それでは、読者がある言語表現を比喩だと考える際の言語側のよりどころにはどのような種類があるであろうか。具体的に考えるために、まず、今回の調査に実際に現れた文学作品からの現実の表現例をあげてみよう（出典は4.1「調査資料一覧」参照）。

- A₁ そこで和蘭の使節も同じように、將軍へ献上する進物を前に置き、將軍に対して坐し、額を床につけ、一言を発することもなく、あたかも蟹のようにそのまま後へ引きさがった。〔夜〕
- A₂ 彼は妻に対して笑ってやらなければならないと思って努力した。が、頬の皮膚が糊でもついているように、こわばって、ひきつるような気がした。〔神〕
- A₃ こんな、わずかに数ミリの余分な隆起物のために、まるで皮膚病やみの野良犬みたいに追い立てられなければならない。〔他〕
- A₄ 耕はひたいに汗をおぼえた。息が苦しくなった。宙を歩いているような気がする。〔顔〕
- A₅ この忠言は信太郎にとって、扇風機よりもありがたかったが、生憎すこしも眠くはないので、そうこたえて、病室へかえった。〔海〕
- B₁ そしてこのわかりにくさがそのまま徳子自身にはいまの杉下と自分との関係での、ある自省となって跳ねかえってくるのであった。〔ハ〕
- B₂ しかしらせているという責任はやはり明子にかえってくるわけで、さっきのようなこちんと突き当る表情もたびたびであった。〔く〕
- B₃ そういう古い憶い出が、東京の友人宅での冗談話に誘発され、帰りの電車の中で私をちくりと刺したのだった。〔ま〕
- B₄ えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧えつけていた。〔檸〕
- B₅ 嘉門とまつ子との間の感情の波の起伏、その勝敗の関係ほど奇怪な倒錯にみちているものはない。〔冬〕
- C₁ 産む必要がない身に妊孕可能の赤い通達があったとて、むだな排泄と云うほかない。〔流〕
- C₂ 打つべき釘を、打ち残した気持がつづき、香葉江は、答えをせぬことで、わずかに相手をはねかえす気組みを守った。〔風〕
- C₃ 山科の実家は、衿子のおかれていた席の不自然さに、ある種の不安を感じていたというほどの、そんな大げさなものではなかったであろう。〔顔〕
- C₄ 兄も姉も、それぞれに貰い子であるが、一ぼしのつかい者になるまでには、おかつの苛酷な手剛さはとうに骨抜きの人間に、かれらを叩き上げていた。〔杏〕

C: 「だけれど、あたしだって女ですもの」

杉下はまたしてもギクリと心臓を突き刺されて顔を顰めた。〔ハ〕

2.22 比喩表現と比喩理解

以上、3グループに分けた計15の表現例を並べてみたが、大多数の読者は、これらのどの表現にも、程度の差はあれ、何らかの比喩性を感じるにちがいない。ただし、15の表現例のそれぞれから比喩性を感じるとは言っても、全部で15箇所の比喩表現に接するという意味ではない。一つの表現例の中にいくつかの比喩が現れる場合もあり、また、それらが組みあわさって複雑でより高度な比喩的効果をあげる場合もあるので、簡単に何個の比喩があると言うわけにはいかない。例えば、「忘却は潮のようにおし寄せて、ちっぼけなおもちゃの悲しみを流し去った」という表現があるとしよう。これは、確かに、比喩性の濃厚な一文である。しかし、一つのまとまった比喩表現例ではあっても、簡単に1個の比喩だと言いきるにはあまりにも多様な比喩がからみ合っている。事実そこにはいくつかの比喩的な思考の跡が認められ、受容過程でも、それらの部分的な比喩が成立しつつ、より大きな比喩へと伸びてくると予測される。この表現を生み出す過程では、おそらく、〈悲しみが一瞬のうちになくなる〉意を「悲しみが流れ去る」ととらえ、次に、その〈悲しみ〉がなくなるのは、新しい喜びによって相殺されるからではなく、それを忘れる形で解消するのだ、というところから、それを「流し去る」主体として〈忘却〉という観念を想定し、作用にすぎぬその抽象体を主語の位置にすえることを思いつく。そして、一瞬にして流し去るに足る大量の液体ということから〈潮〉が立ち、その縁でそれと慣用的に結びつく動詞「おし寄せる」を選び出すことにより、主語である「忘却」との関係に、結果としてずれを生じる。また、一方、簡単に忘れることのできる悲しみの程度を、〈弱い〉とか〈浅い〉とかではなく、〈小さい〉ととらえて、それを物体なみに「ちっぼけな」と規定し、さらに、その悲しみは本格的なものではないという意味で、やや慣用的な「おもちゃの」を追加したものである。思考の順序に多少の異同はあっても、前記の例文は、ほぼ以上のような断続する比喩的思考の一群を取りこんで、1文にまとめた際に現れる表現であると考えられる。

今度は、これを受けとる側から、特にその比喩性の理解過程を考えてみよう。表現主体の思考過程がどうであれ、受容主体としては、最終的に表現された形式を受けとるほかはなく、しかも、言語の性質上（雑起の現象〈時枝誠記『国語学原論』〉）時間的な先後関係に決定的に影響されるので、表現過程で考察したような関係や順序で伝わるとは限らない。この表現に接した受け手は、おそらく、次のような経過をたどって全体を把握することとなる。初めに、「忘却は潮のように」の部分で、まず、〈忘却〉という抽象体が〈潮〉に似ているものとしてとらえられていることに気づく。次に、「おし寄せて」を受けとって、高潮の接近を告げる高波のイメージをバックに、忘却が迫ってくるという事がらを理解す

る。比喩的な映像はここで中断し、代わって、「ちっぽけなおもちゃの悲しみ」という物体化された感情に行きあたることになる。そして、「流し去った」という述語を得て、「悲しみを」という抽象体の対象語との関係、および、最初に投げだされたまま宙に浮いていた「忘却は」というやはり抽象体である主語との関係において、非慣用的な結合であり、かつ、表面的には非論理的な意味をなす、という点での意外性をほぼ同時に意識するものと思われる

2.23 比喩の単位

この例の表現過程および受容過程を推測すれば、その通常のケースは、だいたい以上のようになるだろう。このような事実を何個の比喩として登録するのが適当か、という問題になると、答えは必ずしも一定しない。それぞれの立場により、いろいろなレベルでの切りとりが考えられる。まず、細かくとらえるなら、それぞれの比喩性やその度合いは一律でないにしても、「忘却は潮のようだ」「忘却がおし寄せる」「忘却が流し去る」「悲しみを流し去る」「ちっぽけな悲しみ」「おもちゃの悲しみ」という6箇所の比喩を指摘することができよう。しかし、それらは、ただでたらめに列挙された断片群なのではなく、相互に連関を持って配置されたものである。したがって、それらが組みあわさって複雑で高度な1個の比喩表現を成しているとも考えることもできる。しかし、また、「忘却」を「潮」ととらえる見方に関する最初の3箇所と、「悲しみを流し去る」を物体化した最後の2箇所という2系列に分け、「悲しみを流し去る」を、その両者をつなぐもの、つまり、両系列が一つの全体像を形づくるための、いわば接点の役わりを果たすものとして位置づける考え方もありえよう。

本書では、便宜上、第1の方法、すなわち、できるだけ小さい比喩点の連鎖として処理し、最小の比喩関係を単位として整理する立場をとった。それは、今回の調査で文学作品を基礎資料とはしたが、文学作品そのものの全体的な比喩表現効果を解剖することを直接の目的としたものではなく、まず、比喩という言語表現のあり方をできるだけ単純な姿でとらえてみようとしたものだからである。しかし、ともかく、今指摘したようないろいろなレベルでの切り方が可能なので、前掲の15の表現例を15の比喩表現例であると簡単に言ってしまうわけにはいかないのである。なお、今回の50編の文学作品の調査において約2万の比喩用例を採集したが、それは、そのような最小の比喩関係に切りはなして登録した用例カードの数を示すものであり、約2万箇所の比喩的な文章例があったという意味ではないことを、ここで断っておく。

2.24 A型把握——比喩第1類

さて、文学作品から適当に抜きだした15例の実際の比喩表現例をもとに、読者がそこにもどるように比喩を感じとるか、それぞれについて考えてみよう。

まず、A₁では「あたかも蟹のように」という箇所比喩性を感じることはまちがいない。そして、「和蘭の使節」を「蟹」にたとえる表現主体の比喩行為が「あたかも…よう」という言語形式に明確に反映していることを知る。

A₂では、「頬の皮膚が糊でもついているように、こわばって、ひきつる」の部分に、大多数の読者は比喩性を感じると思われる。ただし、A₁の場合あいは「和蘭の使節」が「蟹」であるはずはないから全く明確な比喩となっているが、このA₂の場合あいは、「頬の皮膚」に「糊」がついていることは、事がらとしてありえないわけではない。しかし、「糊がついている」でなく「糊でもついているように」となっており、さらに「よな気がした」という追いうちがかかっているので、比喩らしさが濃く感じられるのであろう。すなわち、「でも…ように…よな気がする」という形式を表現主体の比喩意識の反映と見ることができるのである。

A₃では、「まるで皮膚病やみの野良犬みたいに」の部分が比喩的であることにすぐ気づく。次の「追い立てられ」という動詞の選択にも、その「野良犬」との関連が意識されたかもしれないが、しかし、人間が「追い立てられる」というとらえ方は、少なくとも現代語の表現にふつうに見られるので、そこは結果として、比喩性の増強にとどまり、比喩性の形成段階では目だった働きをしていないと考えるべきであろう。そして、結局、この表現の比喩性は、「まるで……みたい」という言語形式に運ばれて明確に伝わるのだと推測される。

A₄では、「宙を歩いている」という事がらの非現実性が「よな気がする」という形式に乗せて運ばれてくる。

A₅では、A₁~A₄ほどに明確な比喩感が伝わってこないだろう。あるいは、比喩性を意識しない読者もいるかもしれない。しかし、単に「忠言がありがたかった」とつながらないで、その間に「扇風機よりも」という文脈上無縁な対比規準が現れることにより、理解過程に屈折を生じ、一瞬のまとどいを覚えることは確かだろう。そして、実は、これも一種の比喩性にほかならないのである。というのは、忠言のありがたさが扇風機のありがたさをしのぐと考える過程には、「忠言」を「扇風機」と対比できる性質の存在とする思考が働いたはずだからである。つまり、「忠言」を「扇風機」のカテゴリーでとらえるのは、「忠言」という抽象体を「扇風機」という物体なみに扱うことであり、抽象体の具象化という線に沿う表現手段に位置づけうるのである。また、この場合あいは、「あたかも」とか「まるで」、あるいは、「ごとし」とか「よう」とか「みたい」とかいった比喩表現に類出する形式をそなえてはいないが、このような比較規準を示す「より」も、比喩表現を導く形式群の一つに数えることができよう。事実、従来も、「父の恩は山よりも高く、母の愛は海よりも深し」などを直喩形式をそなえた例として扱ってきた（『文章表現辞典』中の「比喩法」の項など）のである。

以上のように、Aグループとしてあげた5例は、いずれも、概念の移行や転換のほかにも、

表現主体の比喩意識の反映と見られる何らかの言語形式をそなえており、それが受容主体の比喩把握に一役買っていることが推察される。

2.25 B型把握——比喩第2類

それでは、次のBグループの例を見てみよう。B₁からB₆までのどの例にも、Aグループの各例に見られたような表現主体の比喩行為の跡を言語面に見いだすことはできない。しかし、そこに我われ読者が比喩性を感じる事が事実なら、その比喩感はいったいどこから来るのだろうか。換言すれば、表現側のどのような言語的な性格を契機として成立するのか、ということである。

B₁では、「わかりにくさが…(自省となって)跳ねかえてくる」というところが一つの刺激となったものと予想される。つまり、「わかりにくさ」というある状態をさす抽象体が、「跳ねかえる」というボールなみの物体扱いにされた、いわゆるカテゴリーの転換が、やや慣用的ながら、まだ、ずれを感じさせる働きを失っていないからであろう。

B₂にも、表現主体の比喩意識を明確に伝える言語形式を発見することはできないが、しかし、明らかに比喩性が伝わってくる。それは、主として「こちんと突き当る表情」の部分よりかかると思われるが、その前の「責任は…かえてくる」という主述の対応も、多少働いているかもしれない。ただし、「責任」という抽象体を「かえてくる」ととらえるのは、すでに慣用化し、ほとんどふつうの用法になりかかっているのだから、そこになお比喩性を感じるかどうかは、その受容主体自身が「かえてくる」の基本的用法における主体としてどのような範囲の名詞を許容するか、という個人的な言語意識によって決まると思われ、現段階では両方の読者が存在すると予想される。ただし、比喩性を意識する場あいでも、それほど強い感じは伴わないであろう。しかし、「こちんと突き当る表情」の部分では、ほとんど例外なく比喩的な感じを受けるにちがいない。引用例の範囲の文脈からは、二つの意味にとれる。すなわち、何が何に「突き当る」のか、という点の解し方によって、二つに分かれるのである。一つは、その表情の所有者が何かに「突き当る」という意味で、「何かに突き当たったような表情」の意として受けとる場あいである。もう一つは、見る人がその表情に「突き当る」と考える場あいである。筆者にとっては、このほうが自然で、初めの意味は、そのように解することも可能だとして、後から引きだしたものである。筆者が直感的に後者の意味を受けとった背後にはそれなりの誘因があったであろう。それが何であったか、後から正確につきとめることはできないが、例えば、次のような点が働いたかもしれない。前者の意味が実現するには、まず、「何かに突き当る」の「何かに」がかなり重要な成分なので簡単に省略できないはずだという認識があったことである。また、そういう意味なら、「突き当る表情」よりも「突き当たった表情」のほうが適切だという言語意識が働いたとも考えられる。あるいは、「突き当る表情」の部分を読んだ時に、「険しい表情に出あう」「きつい表情に出くわす」「厳しい表情にぶつかる」といっ

た一連のやや慣用的な言いまわしの一つである「表情に突き当る」という型を無意識のうちにでも連想したのかもしれない。しかし、作者側の真意は、むしろ初めのほうの解釈に近かったのかもしれないのだ。確かにそう解することも文脈的に十分可能である。すなわち、「責任がかえてくる」ことは、明子が結局は自分に責任があるのだと気づくことであり、そのことにはっと思いあたるのは一種の衝撃に似るので、そのショックを顔色から隠しきれずに、明子が「突き当る表情」を見せる、と表現することも、けっして不自然ではないはずなのである。しかし、また、そう断定するわけにもいかない。明子が自己の責任に思いあたる際の衝撃は自明のこととしてその部分の叙述の筆を省き、その結果として現れる明子の厳しい顔つきを、見る者の視線をはね返すような硬い表情として「突き当る表情」と描写した、ということも、少なくとも形式的には三人称小説として、明子の外側に叙述の目(樺島忠夫・寿岳章子『文体の科学』参照)を設定する作品においては、やはり十分にありうるからである。そして、表現過程の違いに対応するこの二つの解釈のどちらをとるにしても、結果として定着したその言語表現が伝達する明子の表情そのものには、それほど差が出てこないであろう。そして、また、いずれにしても、ここで重要なことは、「突き当る」に添えられた「こちんと」という擬声語による連用修飾の存在である。これがなくても、「突き当る表情」だけで一応比喩は成りたつが、この「こちんと」があることで、その比喩性が高まっていることは疑えない。二つの解釈のうち、「何かに突き当たった時に見せるような表情」の意にとれば、その「突き当る」という抽象的な意味をも帯びてきた表現に、この「こちんと」を添えることによって、ふたたび形象性を強める効果をあげていることになろう。また、「見る者の視線をはねつけるような硬い表情」の意にとったとすれば、前述のやや慣用的な「表情に突き当る」という句を、この「こちんと」の挿入によって、まだ慣用化せずに新鮮みを保っていた当時の比喩の形象性をとりもどす働きをしていることになると思われる。

以上の検討の結果、B₂から感じとる比喩性の中核は「突き当る」と「表情」との結合関係に触発されたものであり、その生気を失いつつある、いわば死にかけている比喩を、「こちんと」という修飾語が復活させることによって、生きいきと伝えてくるのだ、という推論が立つのである。

B₃の場合も、これとよく似たケースである。すなわち、「古い憶い出が」という主語が「誘発され」るところまでは、まだ微妙であるが、その抽象体が「私をちくりと刺した」と展開するに至って、完璧な比喩性を獲得するのであり、ここでも、「ちくりと」というオノマトペの修飾語が比喩性強化の役を果たしている、と考えられるのである。

B₄では、この短い引用箇所の中に、いくつかの比喩的な表現が組みこまれている。まず、最初の「えたいの知れない不吉な塊」という箇所であるが、これは明確な比喩ではないにしても、外界の事実の客観的記述とは縁どおいものである。「不吉な塊」という表現の指示体はせいぜい心理上の實在にすぎないであろう。とすれば、それが「圧えつけていた」

とするのも、一つの見たてであり、しかもそれが「私の心を圧えつけ」となることによって、いっそう比喩性を増すものと見られる。つまり、部分的には、必ずしも明確とは言えない比喩的表現や、「心を圧えつけ」といった、今ではやや慣用化したとも思える句を用いながら、全体としては、仮想の抽象体が精神活動というやはり抽象体に働きかけるといふ、まぎれもない比喩表現に仕立てあげたものと考えられるのである。

B₅の比喩性は、「感情の波の起伏」という部分に兆すことはまちがいない。ただし、「感情の起伏が激しい」という言いまわしも、まだ多少の比喩性を残して使われるが、この場あいは、そういった言いまわしが念頭をかすめたとしても、その前に「感情の波」とあるので、その「波」に引きずられて「起伏」が続いたと見るほうが自然だろう。つまり、「感情の波」というところに比喩性の中核があり、それによって比喩的な意味にずれた「波」を、基本的な意味にもどして、「波の起伏」と展開したものであって、その部分は、この比喩が成立するための必須成分ではないと考えられる。しかし、二次的ななかかわりではあっても、「感情の波」として成立した比喩に追いうちをかけて、受容過程における比喩性の強化に一役果たしていることは否定できない。ともかく、はっきりしていることは、「感情の」と「波」との結合の異常性が契機となって、最小単位の比喩が成りたっていることである。

以上の検討をとおして、このBグループの例は、いずれも、Aグループの場あいのように、表現主体の比喩意識を推測できる言語形式を取りだすことはできないが、その表現を構成している要素間の結合、あるいは、成分間の呼応に、慣用からの著しいずれが見られ、それに起因する意外性や非論理性が、その表現の比喩らしさを演出している、という共通点のあることが認められる。

2.26 C型把握——比喩第3類

それでは、Cグループの例ではどうであろうか。これらの例には、まず、Aグループの場あいのような、比喩の目じるしになる特定の言語形式は発見できない。また、そうかといって、Bグループの場あいのような、表現内の構成要素間の結びつきに、はっきりとした異常さがつきとめられるわけでもない。つまり、その表現形式の外見では、言語形式上の、あるいは、用法上の、何らのずれも不自然さも指摘することはむずかしいのである。換言すれば、比喩であることを表明する言語形式をそなえているわけでもないし、比喩であることを暗示する異常な結合が見られるわけでもない。すなわち、その表現の内部に比喩らしさの徴候を見いだせない場あいであり、その言語表現の範囲内では、比喩だとは言えない場あいである。例えば、「我われはようやく峠を越えることができた」とか、「長いトンネルの向こうにかすかな明かりが見えてきた」とかいった文があったとしよう。これらの表現には、「まるで」とか「よう」とかいった比喩を予想させる要素は全く見られない。また、構成要素間のどの結合にも、比喩を思わせる異常な結びつきを指摘するのは困難で

ある。すなわち、「我われは…越える」にしても、「峠を…越える」にしても、あるいは、「トンネルの向こうに…明かりが見える」にしても、ごくふつうに見られる結びつきなのである。事実、このような表現は、比喩でない一般的な文章の中にいくらでも現れるし、その範囲では、通常表現としてさしつかえない。しかし、この表現がどういう場面で、どういう文脈において行われたかがはっきりしないと、そういった判定は、実は、不可能なのである。もし、グループでハイキングをしている途中での発言であれば、前者の例はほとんどの場あい、比喩表現ではありえない。しかし、そのような山には関係のない場面で、例えば、何かの難事業に取りくんでいる際に、それを話題にして発言したのだとすれば、その事業での最もむずかしい部分が終わった、という意味を、山越えにたとえて「峠を越えた」と表現した比喩であると考えられる。後者の例でも同じことが言えるだろう。すなわち、自動車で実際に長いトンネルを抜けようとしている時の発言なら、もちろん比喩ではないが、やはりむずかしい問題に取りくんでいて、やっと解決の糸口がつかめかけた時とか、あるいは、苦しい下づみの生活を続けた後に、実力を世に問うチャンスが訪れた時とかに、そう発言したのだとすれば、苦勞の時期を「トンネル」にたとえ、待ち望んできた事態の兆しをその出口からさしこむ「明かり」にたとえた比喩表現だと考えられるのである。

要するに、これらは、場面や文脈を抜きにしては比喩が成立しない表現である。逆に言えば、ある場面や文脈に置かれた時に、その場面や文脈との無縁性によって初めて比喩となる表現だということになるであろう。

Cグループの例は、程度の差はあっても、このような性格を共通して持っているはずである。

C₁では、「妊孕可能の赤い通達」の箇所がそれである。どこにも比喩の目じるしはないし、その言いまわしの中のどの結びつきにも、特にこれといった異常さは認められない。すなわち、妊娠能力の有無を検査した結果が病院から赤いはがきか文書かで知らされてきた、という文字どおりの意味に解することもできるのである。しかし、我われは、そういう意味ではないと考える。つまり、比喩だと考えるはずである。なぜそう考えるのであろうか。比喩の目じるしも、結合上の異常さもないのに、なぜそれを比喩だと考えるのだろうか。我われが比喩だと考えること自体は動かせない事実である。その表現の外観はどうであれ、それが比喩であると我われにわかるのは、やはりふつうの表現とどこかが違うからなのだ。このCグループでは、我われがそれを比喩だと判断する根拠を、その表現の内部ではなく、その環境、つまり、場面上の意外性に求めることができる。その表現自体が比喩的な性格を内蔵してはいないが、その表現がそこに置かれることが文脈的にしっくりしないのである。そのいわば居ごちの悪さが、受容主体を刺激して、比喩の把握に駆りたてるのだ、と推測される。このC₁の場あいは、文字どおりの意味に解すると、後続する「排泄」という語と反発して、その結果、文全体の意味が分裂を来し、まとまった文意が通らなくなる。これは、従属節と主節といった、節を超える間での対応・交渉の関係で

はあっても、ともかく、1文の内部に文意の統一性を妨げる対立の見られるケースであるが、文を超える範囲に及ばないと、その種のいわば反りの合わない点に気づかないケースも少なくないし、その幅が広いものほど、このグループの比喩機構上の特色をそれだけ濃厚にそなえている、と考えることもできよう。

C₂はそういった例の一つと見られる。すなわち、「打つべき釘を、打ち残した気持」の箇所がそれである。この引用例のどこにも、この部分を比喩として押しだす特定の言語形式があるわけではないし、この表現を構成している要素間のどこにも異常なつながりは見いだせない。そして、実際に、香葉江が大工しごとをして「打つべき釘を、打ち残した」ということも、現実的にありえないわけではない。しかも、C₁の場合とは違って、この例文では、「気組みを守った」として1文が結ばれても、その文字どおりの意味を否定する条件は依然として現れないのである。しかし、それにもかかわらず、我われがそういった文字どおりの意味ではないと感じるのは、その表現の前後関係を知っているからである。その表現の文字どおりの意味が、場面や文脈にふさわしくないと判断し、その全体の文意に照らして、そこにマッチする別の意味を、その表現形式から引きだそうとするのである。なお、「相手をはねかえす」の部分も同様に考えられるが、この「はねかえす」は、「答えをせぬこと」という連用修飾句との結合に基本的な用法からの逸脱が見られるので、やや異質な問題を含んでいる。つまり、「ことで…はねかえす」という場あいは、「はねかえす」という動詞との関係で、「こと」という抽象体があたかも「道具」扱いにされた感を呈し、そのことが逆に「はねかえす」のほうにも作用して、その「はねかえす」の意味を抽象化する結果になると考えられる。

C₃の文では、「衾子のおかれている席の不自然さ」という部分が、その文脈との関係で比喩になる例である。すなわち、この場あいの「衾子のおかれている席」というのは、いすとか、きめられた場所とかいった空間をさすのではなく、田能村家における衾子の立場といった抽象的な関係をさしていることが、その文脈からわかるのである。ただし、「席」のこういう用法はかなり慣用的であり、「席」という語が獲得した一義だ、と考えることも、もちろん可能だが、しかし、そのことがこの表現の比喩性を跡かたなく洗い流してしまったと考えるのは乱暴であろう。正確には、確かに慣用化に伴ってその比喩性のかなりの部分を失ったことは事実だが、「席につく」「席に座る」「席にしがみつく」「席を譲る」といった一連の慣用的な句が、例えば「妻の座をあげ渡す」のような句が保っている程度の比喩性を残している、と見るべきであろう。

C₄の「骨抜きの人に…叩き上げ」の部分は、文字どおりの意味のほうはかなり非現実的でもあるし、また、「骨抜き」の転義が、「骨ぬきの法案」とか「計画を事実上骨ぬきにする」とか慣用的に使われるように、ほぼ固定して一般化したこともあって、この表現の比喩性は著しく後退したと思われるが、しかし、フィクションの世界でもあり、また、この場あいは、「法案」や「計画」のような抽象体ではなく、鳥類や魚類ではないまでもとも

かく人間という生きものである以上、“骨”を“抜く”というイメージが読む者の脳裡をかすめないとも限らないので、やはり、同じ方向で考えうる例に数えられよう。

C₂では、「心臓を突き刺されて」がそれである。この引用部分だけからでは、「心臓を突き刺す」という事実を完全に否定し去ることはできないが、読者は、これが殺人事件の描写ではないことを先行部分からの流れとして知っているのである。ここで「ギクリ」というオノマトペによる連用修飾の存在も無視できない。これが二つの別方向の働きをしているのである。一つは、B₂の「こちんと」やB₃の「ちくりと」のように、その比喩の形象性を強める働きで、これについては、その効果をあらためて説明するまでもあるまい。もう一つは、これが、「グサリ」や「ブスッ」ではなくて、「ギクリ」だ、ということである。でば庖丁が短刀などを実際に心臓に突きたてるのなら、そこにオノマトペを用いて修飾する場あい、ふつう、「グサリ」とか「ブスッ」とか状態的な語が選ばれるはずである。あるいは、針のようなもので突き刺すのなら、「チクリ」とか「チクッ」とかになるかもしれないが、いずれにしても「ギクリ」とはならないだろう。「ぎくり」はむしろ心理的なのである。しかも、これは「ぎくりとする」で慣用的に「驚く」意を表す固定的用法をそなえているのである。もちろん、はり治療か何かで「ギクリ」と感じることは言えないが、しかし、「ぎくり」という副詞は、そういった物理的な刺激に対してよりも、「驚く」という心理的・精神的な打撃に対して、はるかに強く結びつきやすい傾向のあることは確かだろう。とすれば、この「ギクリと」が先行することは、後続の動詞を意味的に「驚き」の方面に限定する働きをすることになるのである。したがって、この場あいには、「心臓を突き刺され」の意味を抽象化する方向に働いている、と見られる。また、実際に「心臓を突き刺され」たのなら、とうてい「顔を顰めた」程度では済まないで、その「顔を顰めた」の部分も、「心臓を突き刺され」が比喩である確率を間接的に高める結果になっているかもしれない。ところが、逆に、その「心臓を突き刺され」の抽象化の進行が、「顔を顰めた」のほうに影響を及ぼし、それを抽象化することも考えられる。すなわち、実際に「顔を顰めた」のでなく、それに相当する精神的なショックのあったことを伝えるにすぎない表現なのかもしれないのである。しかし、実際に「顔を顰めた」ことを否定する言語事実も、文脈さえも、どこにもあるわけではない。事実、実際に「顔を顰めた」としても、そのような外見の変化を伴わないとしても、このような表現はよく使われるし、読者のほうもそういった区別の意識なしに自然に受けとるのがふつうだろう。ただ、もし、はっきりと、精神的な変化だけを表すためにその言語形式を借りたのだとすれば、一種の比喩になることはまちがいないから、動作描写であることが明確でないこのような場あいも、比喩とのかかわりを断ちきるわけにはいかない、ということである。「目を見はらせる」とか「頭が下がる」とか「大手を振って」とか「胸をなで下ろす」とか「頭が痛い、あるいは「ため息をつく」にしても、そういった心理的・精神的な状態を表す言いまわしであるが、その結果、それぞれの言語形式が示す文字どおりの意味であるそういった動作が、現実に行わ

れたことを否定しているわけではないので、類例に数えられよう。このような場あいは、いずれも、ある事がらをそっくり他の事がらに転換したとは言いきれないが、一種の移行をはらんだ表現である、という意味で、慣用句論（宮地裕「成句の分類」〈大阪大「語文」32の“連語成句”を含む。また、高木一彦「慣用句研究のために」〈教育国語〉38 参照）と比喩論とのぶつかり合う領域での問題となることを指摘しておきたい。

さて、C₅の「心臓を突き刺され」の部分比喩だとする判断に誘う点がもう一つある。それは、会話文の意味的な連関である。そこに、いわば裸で投げだされてある「あたしだって女ですもの」という会話文が、意味の上では、「そのことばで」というデ格で「（心臓を）突き刺され」にかかっている関係が認められる。「ことばで…突き刺す」という文字どおりの意味は現実には通らないので、そこに比喩性が感じられる。「ことば」というのは音声という物理的な現象だとも考えられるが、この場あいは、「突き刺す」にかかっているのは、それが運ぶ意味情報という抽象体だと考えられる。とすれば、「ことばで」が「突き刺す」と結びつくことによって、その〈ことば〉という抽象体が“道具”視された感じが出てくるわけであるが、それは裏を返せば、道具を予想させる位置に抽象体が立つことであり、結果として、「突き刺す」の意味を抽象化する方向に働く、と見ることもできるのである。しかし、現実には、その会話部分は、ただ、投げだされてそこにあるだけである。デ格で「突き刺す」にかかると考えるのは、受容主体の解釈であって、その表現を構成している要素間の結合に、はっきりとした異常性をつきとめたことにはならないのである。

以上の分析で明らかになったように、このC₅の表現の比喩的な性格を暗示するものとして、「ギクリ」という修飾語の選択、「顔を顰めた」との論理的な関係、それに、今あげた会話文の意味的な働きかけ、という3点が指摘できるものの、そのうちのどれも決定的な条件ではないし、また、その3点がそろったところで、比喩であることが確実になるわけでもないのである。そして、この表現の比喩性を決定づけるのは、結局、「あたしだって女ですもの」という会話を「心臓を突き刺されて」にかかると判断したような、文脈とのかかわりなのである。

2.3 比喩表現の基本分類

以上、文学作品に実際に現れたA₁~A₅, B₁~B₅, C₁~C₅の計15個の具体例を取りあげ、それぞれの表現における比喩性のありかをたずねながら、読者がその各表現を比喩として受けとる際の言語側の条件を探ってきた。そして、そこには三つの違った型があることを指摘したつもりである。つまり、受容主体がその表現を比喩であると判断するよりどころに、三つの種類があるということである。

その一つは、Aグループの例に共通して見られるように、「まるで」とか「よう」とか

いう、比喩表現によく使われる特定の言語形式がついているために、すぐに比喩表現を予想する場あいである。次は、そのような比喩であることを予想させる言語形式はそなえていないが、その表現内のどこかに異常な結びつきが見られるために、その結合全体の筋を通すために、その異常な組み合わせの一方または両方を表面上の意味からずらして解釈せざるをえない場あいである。そして、もう一つは、比喩の目じるしとなる特定の形式も、構成要素間の異常な結合も見られないが、文脈上の意外性・無縁性が強く感じられる場あいである。

筆者は、比喩であることのわかり方の違いに基づくこの3類を、受け手側に立つ比喩分類の基本にすえたいと考える。そこで、最初の場合を第1類、次の場合を第2類、最後の場あいを第3類として立てることにする。そして、読者が比喩性を汲みとる契機の違いをもとにして、第1類を「指標比喩」、第2類を「結合比喩」、第3類を「文脈比喩」と名づけよう。「指標」というのは、「あたかも」「まるで」「ごとし」「よう」「みたい」などを比喩であること目じるしと考へ、それが単独で現れた場あいに限らず、いくつか組みあわさった場あいをも含めた総称である。「結合」というのは、例えば、「空」とか「微笑」とか「感情」とか「欲望」とか「炎」とか、あるいは、「泣く」とか「こぼれる」とか「黒い」とかいった語は、単独では比喩とのかかわりを持たないが、それらが組みあわさって、「空が泣きだす」「こぼれる微笑」「感情の炎」「黒い欲望」などと用いられた時に、その結びつきによって比喩性が生ずることをさす。また、「文脈」というのは、前述のように、その表現がそういう文脈に置かれることによって初めて比喩となる種類のものだからである。

2.31 指標比喩の定義と実例

それでは、ここで、定義的にまとめておこう。

まず、第1類の指標比喩は、受容主体が表現主体の比喩意識を感じとる、換言すれば、受け手側での比喩の成立に直接に形式的に関与している、特定の言語形式をそなえており、それを、(第2類の場合のような)2項間の関係の特異性としてでなく、他から独立に抽出できる種類の比喩表現である、と言うことができる。

文学作品に現れた実例の一部はA₁~A₅に掲げたが、具体例を補充すると、次のような例はこの型の典型と見られる。

A₆ まるで顕微鏡でものぞくみたいに観察しているうちに、どうやら自分の方があやしくなってきたに違いありません。〔遠〕

A₇ その露は月光を吸いちょうど荒絹のようにぼんやりと照っていた。〔花〕

なお、次のように、比喩の代表的な指標をそなえ、かつ、その内部の要素間に異常な結合の見られる例も少なくない。

A₈ 孤独はどんどん肥った、まるで豚のように。〔金〕

A₉ 時間と距離とを短縮する交通の変革はあたかも押し寄せて来る世紀の洪水のように、各自の生活に浸ろうとしていた。〔夜〕

A₁₀ 電車もバスもきょうはみがいたような窓を揃えて、あまえているみたいに、すべて響きもしずかだった。〔杏〕

A₆では、「まるで」と「よう」という指標があるほか、「孤独が一肥る」という異常な結合がある。A₉でも、「あたかも」と「よう」という指標があるほか、「変革が一浸る」「世紀の一洪水」「生活に一浸る」という異常な結合がある。また、A₁₀でも、「みたい」という指標があるほか、「電車・バスが一すべる」の結合は慣用化が進んで「滑べる」の一転義と考へるにしろ、なお「電車・バスが一あまえる」という擬人的な結合に気づくのである。

そこで、これらの例を、指標比喩と結合比喩との混合例、あるいは、中間的な例とする考え方もありえよう。が、筆者は、むしろ、そこには指標比喩と結合比喩とがある、と考へたい。最小の比喩点として見れば、複数の比喩を抱えこんだ表現例ということになるだろう。そして、引用例全体としては、結合比喩を組みこんだ指標比喩と考へ、指標比喩の中に配すべきだろう。というのは、指標比喩・結合比喩・文脈比喩という分類は、受容主体がその表現からどのように比喩性を感じとるかを基本的な立場としているからである。つまり、これらの例で言えば、読者がその表現が比喩であると知るのには、まず、「まるで」とか「よう」とかいった指標に接することを契機にしてだと予想されるからであり、仮にそのような結合上の異常性を兼ねそなえていなかったとしても、その表現は読者において比喩として成立すると考へられるからである。

これを一般化して言えば、そもそもが、比喩であることのわかり方の違いを出発点としたこの分類の基本的な性格によると言うことができよう。すなわち、この分類における指標比喩・結合比喩・文脈比喩は、一線に並んで、そのうちのどれかに分かれるというよりは、指標の有無が先行し、指標比喩とは認めえないものについて、結合上の異常のチェックがなされ、結合比喩とも認めえないものについて、最後にその文脈上の断絶を問題にする、というように、いわば、表面のことは側から奥の事がら側への各層を代表する、と考へるべき性質のものなのである。

2.32 結合比喩の定義と実例

次に、第2類の結合比喩は、何らかの言語単位、すなわち、接辞・造語成分・語・句などのある結びつきに、慣用からの顕著な逸脱や非論理性、少なくとも言語上の論理的な飛躍が感じられる種類の比喩表現である、と言うことができる。これも文学作品から各種の例を補充して示そう。

B₆ 着物一ども 〔蔵〕

B₇ 空一よ 〔毒〕

- B₈ どす黒い一臭い〔田〕
 B₉ 吃り吃り一咲き出す〔金〕
 B₁₀ 家風が一面くらう〔顔〕
 B₁₁ 立場が一悲鳴を洩らす〔ハ〕
 B₁₂ 情気を一扱き上げる〔母〕

まず、B₈は、通常は下位の人間や動物に対して使われ、その複数を意味する接尾辞の「ども」が、意外にも生物でさえない「着物」という語と結びつくことにより、〈着物〉が生あるものとして遇された感じが出てくる例である。なお、これは、断片的な擬人化ではなく、作中の「私」として〈着物〉が“愛するおなご”なみの存在であり続けることと緊密につながるものであり、いわば作品世界の必然が要求した形式とも考えられよう。つまり、現象的には、「ども」の逸脱用法であるが、視点人物（西郷竹彦『教師のための文芸学入門』参照。なお、視点の問題については、今井文男に『表現学仮説』を始めとする論考があり、「表現研究」14で〈視点論〉の特集もなされた）の意識の上では逸脱はなく、むしろその意識を忠実に反映したものとも言えるのである。

B₁は、間投助詞の「よ」が続くことによって、「空」に対して呼びかける感じが強くなる例である。つまり、感情を持たぬ〈空〉が呼びかけられる対象として扱われたわけであり、一種の擬人化の手づきと見ることもできるだろう。なお、このような「よ」が添わなくとも、「空」が裸で投げだされただけで同様の効果をあげることも、もちろんありうる。そして、そのような、1語文あるいは独立成分として投げだされた1個の裸名詞でも、そのことによって人めかした感じが伝わってくるなら、やはり比喩であることに変わりはない。その場あいは、独立格に置かれることが確率的に呼びかけと結びつき、間接的に比喩性を引きおこす働きを有するなら、それも一種の比喩の指標と考えられないこともないし、また、“裸”であることが、「よ」などの代わりに“ゼロ”と結びついたらと考え、結合による比喩と見なすことも全くできないわけではない。しかし、指標比喩と考えるにしろ、結合比喩と考えるにしろ、ゼロ指標とか、ゼロとの結合とかいう仮定のもとでの強引な処理をしなければ説明がつかないので、事実の裏づけを伴わない観念の遊戯に落ちる危険がある。また、そのような意味でのゼロ指標は文法的な手づきである点で、「まるで」とか「よう」とかいう語彙的な指標とは次元が異なるし、一方、ゼロとの結合には顕著な逸脱を認めがたい。そして、なによりも、そのような名詞の「投げだし」をそれに対する「呼びかけ」という人格化と受けとるのは、読者がその文脈を知っているからなのである。例えば、「空」として投げだされた1名詞を〈空〉に対する呼びかけと解するのは、先行部分に〈空〉を相手どった感情表出がなされていたり、後続部分に、それを受ける二人称代名詞や、それに働きかける命令や勧誘の文末が現れたりする広い言語的環境においてのことだと考えられる。したがって、そのようなケースは、それがもし比喩的な効果を果たすなら、第3類の文脈比喩の一例とし、間投助詞の付加による結合比喩とは切りはなすべ

きであろう。

B₆は、「どす黒い」という通常は色彩を表す形容詞が「臭い」という嗅覚を刺激するものをさす名詞を修飾した例である。「におい」という語が「華やかに照りはえる色」という視覚的な意味を失った現代では、視覚性の形容詞と嗅覚性の名詞との結びつきと考えると問題はなかろう。「どす黒い」が「濁り」を意味的に含んでいて、その「濁り」が「どろどろした質感」から間接的に触覚に訴えることはあるかもしれないが、「どす黒い」が「どぶ」を連想させ、その連想が「どぶのにおい」を伴うことがあるにしろ、「どす黒い」が直接「臭い」と結びつくと飛躍が大きすぎ、そのことが単なる「どぶのにおい」を超える何かを想像させることになると考えられるのである。なお、その際に、「どす黒い」という視覚性の形容詞が嗅覚化したのか、逆に、「におい」という嗅覚性の名詞が視覚化したのか、という比喩的転換におけるカテゴリーの移行、あるいは、その一視点である感覚系統レベルでの転換の方向の問題があるが、効果という面から言えば、このように系統の違う語が結びつく場あいは、一方から他方への転換であるよりも、相互作用の結果、その結びつき全体の意味を抽象化する方向が認められるようである。

B₇は、「吃る」という動詞を重ねた畳語的な副詞句「吃り吃り」が動詞「咲く」を修飾するという論理的に異常な結合が比喩性の源泉となった例である。「どもる」というのは「ことばが滑らかに言えない」とか「ことばがつかえて、意図に反して同音が連続する」とかいう意味だから、その主体は、ことばを発しうる唯一の動物、すなわち人間に限られる。ところが、そういう動作をくり返す状態を示す副詞句の「吃り吃り」が、意外にも人間どころか動物でさえない、植物の〈花〉専用の動詞「咲く」にかかるのである。この場あいは、おそらく、その咲き方が、いっせいにぱっと花ひらくのではなく、また、次つぎに連続的に咲きだすのではなく、一つのつぼみが開いても次のつぼみがなかなか開かず、ぽつんと咲いては、しばらくおいて、またぽつんと咲く、というような、「遅桜」の途切れとぎれな咲き方を想像した表現であろう。しかし、それがいかにも確かな比喩であろうとも、ただその状態を髣髴させるためだけに選ばれた、その場かぎりでの比喩表現ではないのである。実は、「どもり」のコンプレックスを背おい、「感情にも吃音があった」と考える主人公の「私」にふさわしい執拗な想像なのである。ここで深入りする余裕はないが、文学における比喩表現の分析には、このような作品の流れの中でとらえる配慮が必要であろう。

なお、この例では、現実的な意味との対応において、「吃り吃り」のほうが逸脱し、「咲き出す」のほうはずれていないことになるが、間接的ながら、「遅桜」が擬人化されたわけであり、そうとらえる主人公の心理状態を読みとることができよう。

B₁₀は、「公子のために、吉祥寺の家風が面くらっている」という例を骨ぐみだけ示したものである。文意は、公子という若い女性が入りこんで来たために、それまでの吉祥寺の家が保ってきた旧来の風習が乱されることに対するとまどいである。既成道徳が壊されてとまどうのは、その吉祥寺の家に住む人間なのであるが、「家風」そのものを「面くら

う」の主体に立ることによって、抽象体を擬人化した例である。

B₁₁も似た例であるが、こちらは述語部分が単純な1語の動詞ではなく、「悲鳴を洩らす」という慣用句になった場あいである。これを構成要素に分解して、小さい単位で見ると、まず、「立場」という抽象的な関係を表す名詞が「洩らす」主体に位する結合上の異常性が指摘され、次に、「悲鳴を」と「洩らす」とのつながりにも、すでにほとんど慣用的ではあるが、基本的用法からのずれがわずかながら認められるはずである。前者は、抽象体が生きもの扱いにされたことになり、後者では、「秘密を漏らす」や「胸中を漏らす」などの例はあっても、その中心は液体や気体、または細かい固体だ、という意識が残っているなら、「悲鳴」という音声現象を「漏れる」ものとして扱うことが一種の物質化に通じるからである。しかし、このような認識はかなり反省的・分析的で、それが基本にあるとしても、この表現の比喩性が直接感じられる箇所と言え、やはり、「立場が」と「悲鳴を洩らす」全体との接点だと言えよう。すなわち、「悲鳴を洩らす」は「悲鳴をあげる」であり、それはまた「叫び声をたてる」意であって、つまりは「叫ぶ」という1語相当に機能すると見るわけである。ただし、いわゆる慣用句にもいろいろなレベルがあり、それに伴ってその1語性にも段階が生ずるし、また、特に文学作品においては、慣用句になることによってその構成要素の個々の意味を全く失ってしまうわけではないので、どこに比喩点を求めるかということ是用例によって微妙な場あいが少なくない。

B₁₂は、「惰気」という精神状態に関する抽象的な名詞が「扱く」という動作の対象の位置に配されることから比喩性の生ずる例である。ふつう、「扱く」という語は、「イネを扱く」などのように、くっついている細かいものに物理的な刺激を与えて離れさせるために、細長い物体を強くこする、といった場あいに用いられる。したがって、「扱く」対象すなわち「扱かれるもの」は、そのかき落とされる細かいもの、あるいは、こすられる細長い物体、のどちらかになるわけで、いずれにしても〈実体〉である。ところが、例では、そこに「惰気」が現れているので、抽象体の具象化が行われたことになり、そこから比喩性が読者に感じられるのだと考えられる。また、俗語的ではあるが、「尻を扱く」「何を扱くか」といった用法もあるので、そこを思考上の起点にとれば、この例は、「惰気」が気体やことばのようなものとして扱われた感じになる。〈気〉というものの存在形態をどう考えるかにもよるが、体の内部にあるものを外に出す意である、こういった俗っぽい用法を基準に考えたほうが、「惰気を扱く」の結びつきの飛躍が少なくなるだろう。ただし、単なる「扱く」でなく「扱き上げる」となっている点は、そういう意味に解するには不利な条件として働くと思われる。ともかく、どちらを規準において考えたにしろ、〈惰気〉の抽象性が大はばに減ずることは確かなので、その結合が比喩性を帯びていることはまちがいないだろう。

2.33 文脈比喩の定義と実例

もう一つの、第3類の文脈比喩は、比喩の目じるしとなる指標も、要素間の結合上の異

常性も特に認められないが、その表現形式が表す言語的な意味と、それがその場で表していると思われる個別的な意味との対応に慣用からの著しいずれが意識される種類の比喩表現である。換言すれば、その言語形式の内部に比喩性を持たず、それがある文脈に置かれた時に、主として先行表現との関係で、より正確には、その表現の基本的な言語の意味ではむしろ関連を持たないことを契機として、それとは違うその場での臨時的な個別の意味を推測させることによって、その全体が比喩として成立する表現だ、とも言える。そして、見方によっては、文を超える大きな単位での結合比喩と考えることもできよう。しかし、ここで結合比喩と規定して扱った範囲の用例なら、連語論といった語彙=文法的な方面の研究成果などを踏まえて、将来はかなり客観的に処理できるところまでこぎつける見とおしも立つが、ここで文脈比喩として一括した用例のほうは、そのほとんどが、形態論・構文論と並ぶ文法論の一部としての文章論ではなく、意味論的文章論とも言うべききわめて困難な分野に依拠しなければならない面が大きいし、また、さらには、作品全体を対象とする文学研究そのものとも学問的に交渉する必要もあるので、そのレベルの上で両者を分けておくべきだと判断したのである。

これも用例を補足しておく、例えば、次のようなものは、この典型的な例と言えるだろう。

C₆ かじとりのぼくが下手だからといって、中でおまえがあばれだしたら、小舟はひっくりかえって全滅するだけなんだ。〔棘〕

この引用部分のどこにも、「まるで」とか「よう」とかいう比喩の目じるしとなる言語形式はないし、また、どの要素間の対応にも、比喩を思わせるこれといった異常な結びつきは感じられない。外見的には比喩ではないのである。それでもなお我われがこれを比喩として受けとるのは、それが舟でこぎだした場面ではなく家庭の問題であることを先行表現から知っており、その表現の文字どおりの意味がそういった文脈に反撥すると感じるからである。

C₇ どうせ芸なし猿の役立たずなんだもの。〔流〕

C₈ 衤子の血が逆流をはじめた。〔顔〕

C₉ ゆうべの夢の出来事が、今夜もくりかえされた。〔顔〕

C₁₀ 満身創痍となれば、少々の古疵のうずきで、さほどたじろぐこともない。〔ま〕

C₁₁ 私が本当に太陽へ顔を向けられるためには、世界が減びなければならぬ。〔金〕

C₁₂ 初めいたわり合っていた彼らは、お互いの傷をむしり合う荒々しさにもかり立てられた。〔く〕

C₆は、この引用文の範囲では、サルまわしのサルについて述べたものともとれるが、実は「芸なし猿」が〈サル〉ではなく〈人間〉をさしている。そして、そのことがわかるのは、「芸なし猿」という表現やそれを含む文からではなく、その文をとり囲む文脈、特にその先行部分によってである、という意味で、同類である。

C₈は、「血が逆流する」ことが事実としてきわめて起こりにくいので、「血が」と「逆流する」との結合に意外性のあることは確かであるが、手術上のミスや実験などによって一時的・局所的に実際起こることも絶対には断言できないし、それが実は〈精神的ショックの強さ・大きさ〉をさしているのだと理解するのは、その先行表現に包まれてのことだから、これも文脈比喩の例に数えられよう。

同じ作品にあるC₉も同様である。「ゆうべの夢の出来事が、今夜もくりかえされた」という文字づらは、二晩続けて同じ夢を見たことを、まず、さす。この引用の範囲では、そう解してもどこにも不自然さはない。しかし、読者は、「ゆうべの夢の出来事」が実は夢ではなく現実のできごとをさしていることを先行表現との関係で知っている。愛する人の父親に犯されるといふ重大な事件が衿子にとって夢うつつのうちに行われたことがすでに知らされているのである。

C₁₀はやや慣用的であるが、「満身創痍」と「古疵のうずき」が〈精神的な痛手〉をさすことがその文脈からわかる点、やはり同様の性格が認められる。

C₁₁は、「太陽へ顔を向け」ることと「世界が減び」ることとの関係を、後者は前者が可能になるための条件だとしてとらえている点に、常識からの論理的逸脱が感じられるものの、「太陽へ顔を向け」ることの意味を抽象化して考える決定的な原因は、この文の外にあると思われるので、やはり類例と言うことができよう。

C₁₂も、どこにも異常性は認められないが、それが、しかし〈取っ組みあいのけんか〉ではないことを、その先行表現から知ることができるという意味で、典型的な文脈比喩であると考えられる。

なお、今回の調査外であるが、川端康成の『雪国』にある「女に友情のようなものを感じたといっても、彼はその程度の浅瀬を渡っていたのだった。」も、「浅瀬を渡っていた」が〈川の深さ〉でなく〈恋愛感情の稀薄さ〉をさすとする判断の多くが、場面や文脈によりかかることは否定できないので、やはり文脈比喩の範囲をはみ出るものではあるまい。

2.4 比喩表現の下位分類

以上、いくつかずつの例をあげて説明したように、ある言語表現に接した読者がそこからどのように比喩性を汲みとるか、という読者の受容過程を起点として、現実の比喩表現例を指標比喩・結合比喩・文脈比喩の3類に大別することができるはずである。基本的な分類はこれで終わるわけであるが、しかし、それぞれのなかみはとなると、かなりいろいろなものが含まれていることに気づく。すなわち、大分類の際に規準とした受容過程における基本的な性格という点を除くと、いろいろな点でいろいろな性格を持つ用例が集まっているのである。そこで、それをどのような観点で下位分類するかが、次の問題となる。それには、比喩的転換の質的な違いを規準として意味の面に踏みこんだ分類も考えられ、

また、それもぜひ必要な観点なのであるが、今回は、それぞれの比喩表現を構成している要素の言語的な性格による側面から整理しておく。ただし、分類はそこで完成するものと考えているわけではない。もっと詳しくする必要があるのはもちろんだが、そういった内容上の分類とクロスして、将来は、形式面・内容面の十字分類、あるいは、さらに多面的な分類を設計すべきであろう。したがって、本書に収めた分類結果は、そのような構想における形式面を主体とした分類試案として位置づけられる。

2.41 指標比喩の分類

それでは、まず、指標比喩を下位分類するための分析手順を示そう。指標比喩というのは、その性格規定で明らかにしたように、表現主体の比喩意識を反映する何らかの言語形式をそなえ、それを契機として、受容主体が比喩を感じとる、という種類の比喩表現である。したがって、指標比喩の分析は、指標比喩を指標比喩たらしめているその特定の言語形式を抜きだすことから始まる。比喩性を帯びた文章やその断片を一般に「比喩表現例」と呼び、指標比喩を特色づけており、比喩の目じるしとして受容主体がその表現から比喩性を感じとる直接の契機となる特定の言語形式を「比喩指標」と呼ぶことにしよう。そうすれば、指標比喩とは比喩指標を抽出することのできる比喩表現である、と言うことができ、指標比喩の分析作業の最初の、そして最も重要な操作は、比喩表現から比喩指標を抜きだすことだと言うことができる。

例えば、「彼の形相はまるで鬼をもひしが**んばかり**に見えた」という言語表現例があったとしよう。この比喩表現例から、そういう意味での比喩指標を抜きだすとすれば、おそらく「まるで……も…**んばかり**に見えた」という箇所を、まず下線を施すことになる。

なお、ここで「比喩指標」と呼ぶものは、比喩的思考を運ぶ特定の型、つまり、比喩表現となりうる言語形式であって、必ずしも比喩表現専用の言語形式であるとは限らない。第1部でも述べたように、比喩の代表的な形式とされる「よう」でさえも、「どうやら本ものようだ」など、比喩でない用法の例がいくらかでもある。「まるで」にしても、本来が「まるまる」に示される「そっくりそのまま」の意味を持つだけに、「まるでだめだ」など、「全部が全部」のような意味を残す用例が厳然と多数認められるし、「あの娘はまるで子どもだ」と言っても、程度を表す例かもしれず、比喩であると決めるわけにはいかない。もちろん、「あの娘はまだまるで子どもだ」と「あの娘はまるで子どものようだ」とに表現し分けることは可能だが、それぞれの意味を実現する上で、その「まだ」や「よう」が必須の言語形式だとは言えず、事実、最初の表現形式がその両方の意味を表すのに用いられる。しかし、また、その「まるで」や「よう」が比喩をも表すことは否定できない。したがって、比喩指標というのは、比喩専用の形式ではないまでも、ともかく比喩表現に偶然でなくよく現れるので、受容主体がそれを比喩表現として受けとめる直接のきっかけとなる言語形式である、と言うことはできよう。

さて、前掲の例にもどると、その構造は、「AはまるでBをもCんばかりに見えた」となる。このうちのアルファベットに当たる名詞(句)や動詞を除いた部分が、その比喩的な表現のいわば比喩的思考を比喩として運ぶ形式だと考えることもできる。しかし、係助詞の「は」を伴う「Aは」は、この場合あいはい主格に立つが、主格に立つことは、「は」でなく、格助詞「が」で表すことも可能だし、仮に「が+は=は」と考えてみても、主格に係助詞「は」を添えることは、その主格を「取りたて=強調」あるいは「区別」のニュアンスを伴わせる働きはあるが、比喩との直接の関連は認められず、また、Aが主格に立つこと自体も比喩に直接の関係はないので、この「は」は、文型上の要請であり、比喩との共起は偶然にすぎない、と考えられる。「Bを」の「を」も、「ひしぐ」という動詞の文法的な性格の支配を受けて現れたもので、比喩との本質的なつながりは認められない。そこで、この両者は、比喩指標から当然外されることになる。このように見ていくと、「鬼をも」の「も」や「に見えた」の「に」も排除してさしつかえないように思われるが、比喩とのつながりが直接には認められないにもせよ、次に述べる理由で、その不要さは「は」や「を」と同列ではないと考えられる。すなわち、まず、「も」は、「鬼のような強くて恐ろしいものでさえも」というニュアンスを添える確かな働きをしている。そこには「並たいていのものはもちろん」といった潜在的な情報のあることを、その「も」が、よりはっきりと示すわけである。このように、「でさえも」という意味を添えることは、換言すれば、その前の名詞、この例では「鬼」に当たる語であるが、それが極端な例として持ちだされたことを暗示することによって「彼の形相」のものすごさを強調することである。となると、それは、強調的比喩を作り出す言語的につづきの一つと考えざるをえないことになる。単独で比喩表現にはなりにくいとしても、他の言語形式と組みあわせて、一つの比喩の表現形式をなす、という働きを否定するわけにはいかないだろう。したがって、この「も」は、比喩指標の一構成要素としての資格をそなえていると考えられるのである。一方、「に見えた」の「に」は、「見える」という動詞の文法的な性格上の要請、すなわち、いわゆる動詞の格支配の結果として現れたものなので、比喩とのかかわりは非本質的である。しかし、非本質的ではあっても、「が見える」と「に見える」とを比べると、比喩表現には後者のほうがはるかに多く現れると予想されるので、少なくとも現象的には比喩とのいわば連動関係が認められる。また、「ひしがんばかり」の「ん」という形式も、それと似たレベルでの比喩とのつながりが感じられる。動詞「はかる」を起源に持つとされる副助詞「ばかり」には、動詞に続く場あい、大きく分けて、傾向的に終止形を受けて「程度」を表す用法と、連体形を受けて「限定」を表す用法とがある、とする立場がある(『日本文法大辞典』宮地敦子執筆項目参照)。このうち、限定を表す用法は比喩とは関係がない。程度を表す用法の一部が、他の何らかの言語的な条件のもとで、比喩を表す指標の一構成要素としての働きを分担する場あいが起こるのである。そして、その程度を表す「ばかり」が比喩表現に用いられる時に、前の動詞にいわゆる助動詞を伴った形について「んばかり」

として現れるケースが多いので、この「ん」も傾向的に比喩と連動すると考えることもできよう。

この「ん」とか、先ほどの「に」とかは、最初に比喩指標から外した「は」や「を」とは違って、比喩表現に現れやすい傾向的なつながりが見られるものの、しかし、そうかといって、この例における「も」や「ばかり」のように、比喩の実現に意味的な参与を果たしているわけではない。つまり、両者の中間的な段階のかかわりと考えられる。そこで、これらも、一応は比喩との連関を認めた上で、特に「傾向環境」と呼び、比喩指標の中核的なものとは区別することにしたい。

そうすると、指標比喩の分析作業の手順における次の操作は、抽出された比喩表現の構成形式を示す下線部からその傾向環境を捨象することである。この例では、「まるで…も…んばかりに見えた」という下線部分から、傾向環境と認定される「ん」と「に」とを外すことであり、その結果、「まるで・も・ばかり・見えた」となる。このうち、「まるで」は副詞、「も」と「ばかり」は助詞であるから、いずれも活用を持たないが、「見えた」は動詞（あるいは動詞に助動詞のついたもの）なので文法的機能による語尾変化を起こす。すなわち、「見えた」は「見える」の過去形である。ところが、現在形（あるいは、現在未来形＝すぎさらずく鈴木重幸『日本語文法・形態論』）であるか過去形であるかということは、比喩であるかどうかの判定にも、その比喩の性格を決める上でも、ほとんど影響力を持たないと予想される。

そこで、次に、その表現に現れた活用形について、その形であることが比喩にかかわらない場あいは、代表形（語幹の場あいもあるが、主として、普通・断定・現在・肯定・終止の形）にもどす、という操作が作業手順として考えられる。なお、ここで「活用形から代表形にもどす」というのは、文法的な語形変化の場あいに限らず、もう少し広い意味で適用したい。例えば、「見られないこともない」とか「見られないでもない」とか「としか見られない」とかいった形で現れても、それは結局「見られる」ということであって、そう変形しても、その表現における比喩性がゆがめられないかぎりには、「見られる」として考えたい、という意味である。ただし、この「見られる」を「見える」に併合することは、両者の比喩の幅に差が出ると予想されるので、避けることとし、また、さらに「見る」までもどすことも、比喩関係に違いが生ずる可能性が強いので、やはり、控えることにする。

それはともかく、この例にそういう操作を施すと、最終的に、「まるで・も・ばかり・見える」という形が得られる。これが、指標比喩であるこの言語表現の、比喩としての骨ぐみを示す、と考えることにしたい。そこで、その比喩表現の指標比喩としての型を最も簡略に示す形式全体を「比喩指標」と呼び、その比喩指標を構成する個々の要素を、比喩表現の目じるしの一部という意味で「比喩指標要素」と呼ぶことにする。この例で言えば、「まるで・も・ばかり・見える」全体が「比喩指標」であり、「まるで」「も」「ばかり」「見

える」という一つひとつの言語形式が「比喩指標要素」になる。

では、ここで、用語の関係についてまとめておこう。

まず、比喩性を帯びた言語表現を一般に「比喩表現」と名づけ、その種の文章やその断片一つひとつを「比喩表現例」と呼ぶ。

そして、「比喩表現」のうち、「指標比喩」というのは、「比喩指標」の抽出が可能な「比喩表現例」の総称である。

その「比喩指標」は抽象レベルでの名称であり、実際には、その各構成要素の出現形態に「傾向環境」を加えた形で現れる。すなわち、見方を変えて言えば、「比喩指標」というのは、抽出された比喩構成部から「傾向環境」を除き、残った部分を代表形に置換した際に得られる、抽象レベルでの形式である。その際の、傾向環境を除き代表形に直す抽象化の手づぎを、まとめて「比喩指標の実現形を基本形に変換する」と呼ぶ。そして、比喩指標の基本形を構成する個々の言語形式が「比喩指標要素」である。

なお、「比喩指標要素」には、単独で「比喩指標」を構成しうるものと、単独では「比喩指標」になりえず、常に他の「比喩指標要素」との組みあわせで「比喩指標」を成すものがあると思われるので、前者を「自立（比喩指標）要素」、後者を「付属（比喩指標）要素」と呼び分けることも考えられる。ただし、どれとどれが自立要素で、どれとどれが付属要素なのか、という具体的な点になると、十分な大きさの調査量をこなした後でない限りと明確な区別はできない。今回扱った程度の用例では、「なることもありそうだ」とか「なりにくい」とかいう傾向がおさえられるにすぎないから、ここではそういう指摘にとどめ、そこまでは立ち回らないでおく。また、もし付属要素どうしの組みあわせでは比喩指標を成しえないことがはっきりすれば、比喩指標は必ず自立要素を持つことになるから、もう一段の抽象化を経て、自立要素を中心とした比喩形式の記述が可能になるかもしれないが、単独では比喩指標となりえない要素だけでも、それがいくつか組みあわさって比喩指標を成す場あいいいとは言えないので、指標抽出のレベルも、今は、そこでとどめたい。

それでは、指標比喩の分析手順を、文学作品中の実例を用いて、もう一度、簡単にまとめて示そう。

ここに、こういう比喩表現例がある。

A₁₁ その何気なしにしている、それでいていかにも自然に若い女らしい手つきは、それがまるで私を愛撫でもし出したかのような、呼吸づまるほどセンシュアルな魅力を私に感じさせた。〔立〕

まず、そこには、「まるで」とか「よう」とかいう、表現主体の比喩意識を感じさせる特定の言語形式が見られるので、指標比喩と判断できる。

そこで、まず、比喩指標の実現形を抜きだすと、次のようになる。

⇒ まるで・でも・かのような

次に、傾向環境を捨象すると、こうなる。

⇒ まるで・でも・ような

次いで、活用形を代表形に置換すると、こうなる。

⇒ まるで・でも・よう

このようにして得られた「まるで+でも+よう」といった型が比喩指標であり、それを構成する「まるで」「でも」「よう」という個々の要素が比喩指標要素である。

実際の分析例をもう一つあげておこう。

A₁₂ 日本は負け敵は本土に上陸して日本人の大半は死滅してしまうのかも知れない。

それはもう一つの超自然の運命、いわば天命のようにしか思われなかった。〔白〕

⇒ いわば・ようにしか思われなかった

⇒ いわば・ように思われた

⇒ いわば・よう・思われる

そして、結局、指標比喩をこの比喩指標の基本形によって分類し、その違いに基づいて整理しようというわけである。

2.42 結合比喩の分類

第2類の結合比喩の場合はいは、第1類の指標比喩の場合いと違って、特定の言語形式が抽出できないので、形式面での下位分類はそれだけ制限されることになる。しかし、次の第3類の文脈比喩とは違って、その表現の内部に、ともかく、何らかの意味での結合上のずれが認められるはずなので、そのあり場所が下位分類の起点となりうる。すなわち、何と何との間に結合上の異常性が見られるかという点を規準として、下位分類に着手することが考えられる。そこで、その「何と何との間」という点を「比喩的結合点」と考え、その結合要素の文法的な性格に基づいて整理してみよう。

すなわち、第1操作としては、結合比喩を構成している各要素の文法的な性格によって分類するわけである。ここで「構成要素」と考えるものの大きさは、単位としては、だいたい「語」のレベルに相当するものであるが、時には、語連続としての「句」であったり、あるいは逆に、「造語成分」や「接辞」のような「語」より小さい単位であったりする場合あいもあって、一定しない。しかし、音素レベルまで分解することは、比喩性という意味面を問題とするかぎり、考えられないとしても、ある言語単位間の結合を取りあげて「結合比喩」を立てた立場からは、形態素レベルまでを一括して扱っても一次的な処理としてはさしつかえないであろう。したがって、各要素の文法的性質による最初の区分けでは、主として、品詞に基づいて行われるが、それと並んで、助詞とか語構成要素のような語より小さい単位が一括して扱われることになる。

各種の結合を実例で説明しよう。

B₁₃ 年月を経るうちに、死体も一緒に成長したのか〔他〕

- B₁₄ 康太は衿子の心にふれた。〔顔〕
- B₁₅ 何か共通の気分のうち溶けたい願いが、めいめいの顔色に流れた。〔母〕
- B₁₆ その経緯自体に、いろいろの物語がからまり付くのである。〔娼〕
- B₁₇ 思えば死は僕らを見張り、僕らの前途に待ち構えていたのだ。〔草〕
- B₁₈ 名妓の手法なんか口へほうり込んで食っちゃまえ〔流〕
- B₁₉ 山の煤をまぜた流れが、慌ててこのわかい女の太股の、伸びちぢみする、かげを捉えた。〔杏〕
- B₂₀ 私自身の現在も将来も、この二人の言葉の中にちりばめこまれていたかもしれぬ。
〔絵〕
- B₂₁ 公子のことばは、衿子の胸のなかにもものしさを投げこんだ。〔顔〕
- B₂₂ 看護衣の漂白の青味がかかった神経質な白さが皺くちゃに疲れている私の神経に刺し込んで来た。〔施〕
- B₂₃ 夫と三人の^{スーパ}苦力監督が企てたテロのために、四人は監獄へほうり込まれ、争議は根こそぎ負けた。〔施〕
- B₂₄ 彼の買い方は穴というような馬を、つねに単式で買い、もちろん他の人間と相談したり共同で買うようなことはなく、またどんな場合にも買わずに見ているようなこともなく、ただ一直線にまっしぐらに賭けるというのであった。〔冬〕
- B₂₅ 嘲笑というものは何と眩しいものだろう。〔金〕
- B₂₆ 私たちは貧乏でした、物にも記憶にも。〔遠〕
- B₂₇ 気管支がこっそり悪くてもさして目立ちませんが〔遠〕
- B₂₈ アイロンのきいた開きんシャツが、なめらかに日焼けした、首から胸の若さを、くっきりと印象づけた。〔風〕
- B₂₉ 無能老朽は正に私なぞの^{はまぐやく}適役であったが〔実〕
- B₃₀ 彼は世界中で見集め、聞き集め、考え蓄めた幸福の集成図を組み立てにかかった。
〔母〕
- B₃₁ それは世界を規定する秩序から、無規定のものへ、おそらくは官能への橋を意味していた。〔金〕
- B₃₂ さあ、時間よ、ぐんぐん凝縮をつづけて、ぼくら二人だけを包む壺になってしまうがいい。〔他〕
- B₃₃ やはり杏子のどこかが、亭主兵營に引っかかっているのを眺めた。〔杏〕
- B₃₄ 毎年毎年、マロニエが巴里の街路に咲き進むであろう。〔母〕

B₁₃は「死体が-成長する」、B₁₄は「心に-ふれる」、B₁₅は「願いが-顔色に-流れる」、B₁₆は「経緯に-物語が-からまり付く」、B₁₇は「死が-見張る」と「死が-待ち構える」、B₁₈は「手法を-口へほうり込む」と「手法を-食う」、B₁₉は「流れが-かげを-捉える」、B₂₀は「現在・将来を-ことばに-ちりばめこむ」、B₂₁は「ことばが-胸に-ものものしさ

を「投げこむ」という結合をそれぞれ問題にできる。その限りでは、 $B_{13} \sim B_{21}$ はすべて名詞と動詞との結びつきとして、まず一括して取りあげることになる。次に、 B_{22} は「神経質な - 白さ」「皺くちやに - 疲れる」「白さが - 刺し込む」「神経に - 刺し込む」といった多様なレベルの比喩的な結合を含んでいるが、そのうちの「皺くちやに - 疲れる」の結びつきについて言えば、いわゆる形容動詞と動詞との間の結合の例になる。なお、今回の品詞分類においては、本来の形容詞といわゆる形容動詞とを一括して形容詞とし、「形容（動）詞」と表示する。したがって、 B_{22} は形容（動）詞と動詞との間の比喩的結合例となる。また、 B_{23} は「根こそぎ - 負ける」という副詞・動詞間の例と考えられ、 B_{24} も「一直線に - 賭ける」と「まっしぐらに - 賭ける」を問題にすれば、同じ範疇に属する。次の B_{25} は「嘲笑が - 眩しい」、 B_{26} は「記憶に - 貧乏だ」を取りあげると名詞と形容（動）詞との間の結合の例としてまとめられる。 B_{27} は「こっそり - 悪い」という副詞と形容（動）詞との結びつきに非慣用性の強い例である。 B_{28} は、「開きんシャツが - 印象づける」を比喩として取りあげれば、名詞と動詞との結合の問題になるが、「若さ」という抽象体を視覚的に扱ったとも解せる「若さ - くっきり」の関係としてとらえるなら、それは名詞と副詞との関連の問題となるだろう。 B_{29} は「無能老朽が - 適役だ」という関係が問題になるし、 B_{30} は「幸福の - 集成図」というつながりに比喩性が感じられ、 B_{31} は「官能への - 橋」の部分に常識的な論理からの逸脱が認められるので、いずれも名詞間の結合が問題となる例と言えよう。ここまでは、前述の品詞レベルの分類であり、ほとんどの用例が処理できる。

次の B_{32} は、「時間」という抽象概念を表す名詞を、呼びかける対象に仕立てる助詞の「よ」、それに、一種の命令文末を兼ねそなえた例である。また、 B_{33} は「亭主 - 兵營」という複合名詞の構成要素間の関係に、 B_{34} は「咲き - 進む」という複合動詞の構成要素間の関係に、それぞれ非慣用性の認められる例である。 B_{33} や B_{34} のような複合語の構成要素間のずれを問題にする場あいは、第1部第1編第3章に述べたような「比喩性の段階」をどの辺で切るかによって、その用例数は大はばに違ってくる。今回の用例採集では、筆者自身がそこに何らかの比喩性を意識した場あいに限ったので、かなり慣用的な例のいくつかが特に拾われたほかは、いわゆる語源的な比喩のほとんどが捨てられたものと予想される。したがって、この調査結果では、そのような語より小さな単位での結合を問題とした例は、 B_{32} のような助詞の例を含めて、「その他」として一括しても、結合比喩のせいぜい3パーセントを占めるにすぎない。

ここで、結合比喩の要素の抽出法について一言しておこう。結合比喩表現例の構成要素のうち、その結合上のずれが比喩の成立に直接関与している部分を抜きだして、その結びつきとして示すことにする。例えば、 B_{14} は、「康太が - 衿子の - 心に - ふれた」という成分に分かれるが、まず、「康太が - ふれる」という結びつきには異常性がないし、「衿子の - 心」というつながりにも何ら非慣用性は認められない。つまり、「康太が」でなく「太郎が」であっても、また、「衿子の心」でなく「花子の心」であっても、この表現における

比喩性は少しも損なわれない。したがって、それらは比喩の成立に直接かかわらないと考えられる。そして、結局、この比喩表現の中核は「心に-ふれる」という結合に求められるのである。B₁₇の「死は僕らを見張り」の部分も、「僕らを」という成分は比喩の成立に無関係なので、「死が-見張る」という結合を抜きだすことになる。ところが、B₁₆では、「経緯に-物語が-からまり付く」という構造のうち、どの成分も比喩性を生みだす確かな働きをしていると考えられる。すなわち、「経緯に-からまり付く」と「物語が-からまり付く」というどちらの結びつきにも、ある種のカテゴリー間の比喩的転換が感じられるからである。これを最小の比喩点という立場から見れば、「からまり付く」に対する二つの比喩的結合があると考えられることもできよう。そして、二つの比喩的な結合があることは事実なのであるが、「経緯に」と「物語が」という両要素がそろってその表現部分の意味が充足すると思われるので、二つの比喩表現例とはせずに、2箇所を比喩的結合をそなえた一つの比喩表現例として扱うことにする。したがって、この表現の比喩構造は、「経緯に-物語が-からまり付く」という3要素をもって、その骨ぐみが記述できるわけである。ただし、同じように見えても、次のような場あいは、また、扱いが異なる。

B₃₅ その口紅はどんな運命をたどるのだろう〔く〕

この表現の骨ぐみは一応「口紅が-運命を-たどる」として示すことができる。しかし、こういう形式的な切り方をするかぎり、比喩性のありかは明確にならない。すなわち、まず、「運命を」と「たどる」との関係は、「運命」という抽象的概念を表す語がヲ格で自動詞の「たどる」と結びつくことで、その〈運命〉が一種の〈経路〉なみに空間化された感じが伴うことを全面的に否定することはできないにしろ、その結びつきは慣用的にすっかり固定し、すでにほとんどずれを意識する余地がないし、「口紅が」と「たどる」との関係も、「運命を」という成分を抜きにしては、比喩的であるかどうかを問題にする前に、その意味が充足しない。したがって、このような場あいは、「口紅が」と「運命をたどる」という慣用的な動詞句全体との間の結合を問題にすべきであろう。すなわち、比喩点は1箇所であると推定される。このようなケースは、必ずしも慣用句の場あいだけではない。例えば、次のような例がある。

B₃₆ 毛穴の一つ一つが…だらりと舌を出してあえいでいる。〔他〕

B₃₇ つめたい風が、喉から胸にながれた。〔顔〕

B₃₆は、「毛穴が-舌を-出す」という3要素から構成されていると考えてしまうと、「舌を-出す」には何の異常さもないし、「毛穴が-出す」の結びつきのずれも、「汗を出す」との関係もあって、それほどはっきりとは出てこない。つまり、「毛穴が-舌を出す」という2要素の結合と考える時に、初めて比喩性が色濃く現れるものと思われる。しかし、この場あいの「舌を出す」は、「足を出す」などとは違い、その句の全体の意味がその構成要素の個々の意味の総和から完全にずれているわけではないから、少なくとも典型的な慣用句とは見られない。なお、「毛穴が-あえぐ」はもう一つの比喩点と考える。また、B₃₇

も、「ながれる」と「風が」「喉から」「胸へ」のどの成分との結合を考えても、これといった異常さは感じられないので、やはり、「風が」と「喉から胸へながれる」全体との結びつきを問題とすべきだろう。これなどは全く慣用句とは言えないが、比喩点は1箇所だと考えられる。

さて、結合比喩の下位分類の第1段階は、以上のような形で、主としてどのような品詞間の結合が問題となっているかによって分類されるが、それはさらに細分して整理する必要がある。

そこで、品詞による分布を見ると、結合比喩例のほとんどに名詞がからんでいることがわかる。これは、隠喩の成立条件として、名詞とその文の他の語との間に、修飾-被修飾、主語-述語、動詞-補語といった広い意味での接続関係が認められること、名詞に特性を付与する論理上の資辭構成があることがあげられる（『日本文化研究論集』所収のイレース・メックス「太宰治とオーディベルティにおけるいくつかの比喩の用法」を参照）ように、比喩表現の性格上、当然の現象である。また、その名詞を含む結合比喩例の多くは動詞との結びつきが取りあげられたものであることもわかる。そして、その動詞が自動詞であるか他動詞であるかの違いによって、名詞とで作る結合比喩の性格にかなり異なった傾向が現れると予想されるので、次の分類手順として、動詞の自他を区別することにする。前掲のB₁₃~B₂₁およびB₃₅~B₃₇はいずれも名詞・動詞間の結合比喩例であるが、このような動詞の自他を区別する操作を経ると、B₁₃~B₁₆は名詞と自動詞との間の比喩的結合例、B₁₇~B₂₁は名詞と他動詞との間の比喩的結合例となって、まず分かれる。また、B₃₅~B₃₇については次のように処理する。B₃₆は「舌を-出す」の関係を問題にするのではなく、ここでは「舌を出す」全体と「毛穴が」との関係を問題とするわけであるから、意味的には「舌を出す」という動詞句を例えば「あえぐ」のような自動詞相当に扱って、前者側で考えるのが本すじであろうが、語結合の慣用句性が十分に明らかにされていない現段階では、「顔を出す」「頭をもたげる」「口を明ける」「光を当てる」「眉をひそめる」などの自動詞性を学問的に判定して、その意味による位置づけを客観的に行うのはむずかしいので、配列の便宜上、原則としてその動詞部分の自他を規準にとり、一応の整理をしておく。B₃₅とB₃₇のほうは、いずれにしても自動詞なので、そういった問題はない。

これで、動詞を要素に持つ結合比喩はその自他によって二分され、名詞と動詞との組み合わせも、名詞と自動詞、および、名詞と他動詞の2群に分かれることとなる。

そして、次に、比喩点の数、すなわち、比喩的結合の箇所数によって、その型を区別する。例えば、B₁₃~B₁₆やB₃₅およびB₃₇はいずれも名詞と自動詞との比喩的結合のグループに属してはいるが、そのうちB₁₅とB₁₆は2箇所の比喩的結合が組みこまれて1比喩表現例となっている点で他と分かれる。すなわち、ほかがすべて「名詞-自動詞」として表せるのに対し、B₁₅とB₁₆とは「名詞-名詞-自動詞」で表され、それは結局〈名名自〉という構造になるのである。同様に、名詞と他動詞との場合も、B₁₇とB₁₈とは〈名他〉

であるが、 B_{19} と B_{20} とは〈名名他〉となり、 B_{21} はさらに〈名名名他〉という関係が認められるはずである。

次に、例えば、同じ「名詞-他動詞」でも、その名詞が動詞の主体を表す場あいと対象を表す場あいとは、その比喩関係が違ってくると思われるので、名詞の格を考慮する必要がある。これは、もちろん、名詞を構成要素に持つ場あいだけであるが、前述のように、結合比喩の採集例のほとんどに適用できるわけである。そこで、名詞についての格助詞をもとにし、格助詞を伴わない場あいはその格を推定して、その細分を進めることにする。その結果、例えば、 B_{13} と B_{14} とは、ともに〈名自〉の関係にあるが、その名詞の格が違うので、それによって別の型に分かれることになる。すなわち、 B_{13} は「死体も…成長した」であるが、「死体」は「成長する」という動詞の主体を表すと思われるので、実質的に「死体 カ -成長する」という関係を認めることができる。格助詞に係助詞の「も」がつく場あい、「をも」「にも」「へも」などとはなるが、「がも」という形はないので、いわば「が+も=も」として現れたと考えることができるのである。一方の B_{14} は問題なく「心 ニ -ふれる」であるから、結局、 B_{13} は〈名 カ 自〉、 B_{14} は〈名 ニ 自〉として登録されることになるわけである。同様に、〈名他〉としてまとめられている B_{17} と B_{18} とは、名詞の格の違いによって、前者は〈名 カ 他〉、後者は〈名 ヲ 他〉として分かれる。なお、この場あいは、比喩的結合の所在を指摘する際に示したように、 B_{17} は〈名 カ 他〉を、 B_{18} は〈名 ヲ 他〉を、それぞれ2箇所含んでいるものと考えることができる。〈名名他〉となっている B_{19} と B_{20} も、同様に、前者は〈名 カ 名 ヲ 他〉、後者は〈名 ヲ 名 ニ 他〉となって分かれる。 B_{20} は「現在も将来も-言葉(の中)に-ちりばめこまれている」という骨ぐみであるが、この表現は〈(何ものか ガ -)現在・将来を-言葉に-ちりばめこむ〉という思考を基礎として成立するものと考え、これも〈名 ヲ 名 ニ 他〉という構造として登録する。また、この例では、〈名 ヲ 〉に相当する部分に「現在」と「将来」という2語を持つので、全く同型の転換ながら、そこに2個の比喩的思考を認めるべきであろう。これは、例えば、「言語や文学とのつきあい」を「女や競馬とのつきあい」と区別するためである。すなわち、前者では、〈言語とつきあう〉と〈文学とつきあう〉という2個の擬人的思考が働いたと考えられるのに対し、後者では、〈競馬とつきあう〉という1点にそれが認められるにすぎないのである。

名詞の格の違いによって、さらに、形容(動)詞との結合を取りあげた B_{25} と B_{26} とも、前者は〈名 カ 形〉後者は〈名 ニ 形〉となって分かれるし、名詞どうしの結びつきを問題にした B_{29} と B_{30} とも、前者は〈名 カ 名 だ 〉、後者は〈名 ノ 名〉として、別々の型に区別されることになる。

また、 B_{15} と B_{16} とは、ともに、名詞の カ 格および ニ 格と自動詞との組みあわせに比喩性を認めたものであるが、 カ 格と ニ 格との出現順序が偶然でない場あいが多いので、結合比喩の構成要素に2個以上の名詞を持つものについてその順序を考慮すると、 B_{15} は〈名 カ 名 ニ 自〉 B_{16} は〈名 ニ 名 カ 自〉となって、それぞれ別の型に分類される。どういう格の名詞をどうい

順にとるかという点は、その動詞によって、比較的自由的な場あいと、かなり拘束性の強い場あいとがある(奥田の前掲論文や『電子計算機による国語研究』に断続掲載されている石綿敏雄の諸論文、それに国研論集『ことばの研究』5所収の村木新次郎「動詞文の基本型」などを参照)。例えば、「髪を高島田に結う」と「高島田に髪を結う」とは、論理的情報をもその重点をも移さずに、比較的自由に変換できるが、「銀座で友だちに会う」と「友達に銀座で会う」や、「喫茶店で人を待つ」と「人を喫茶店で待つ」の場あいは、情報の重点が異なると考えられる。また。「お湯で顔を洗う」と「顔をお湯で洗う」とでも、後者は〈水ではなくて〉とかく化粧の第1手順として〉とかいう潜在的情報が、前者よりも強く感じられる。さらに、「キュウリをみそであえる」を「みそでキュウリをあえる」とするとやや不自然になるし、「運動会で1等になる」を「1等に運動会でなる」としたり、「マラソンで上位を占める」を「上位をマラソンで占める」としたり、あるいは、「オリンピックで3位以内にくだむ」を「3位以内にオリンピックでくだむ」としたりすれば、native speaker にとっての acceptability (『現代言語学』所収の牧野成一「変形文法における文体論的位置」)はさらに減ずることになる。それは、動詞の格支配における結びつきの強さに段階差があって、いわゆる任意成分から必須成分に近づくにつれて、動詞側に引きつけられる傾向のあることと関連すると思われる。そして、近くに引きよせる力が強く働くものほど結合度が大きいとも言えるわけで、それは、結局、その動詞と名詞とが一体となっているということでもある。したがって、ひとまとまりの表現という性格の強い慣用句がその極にあるのだと考えられる。例えば、「宴会で足が出る」が「足が宴会で出る」となったり、「新しい研究に手をつける」が「手を新しい研究につける」となったりすることは正常な表現では起こらないだろう。なお、「水商売から足を洗う」のように、形式的には、動詞がカラ格とヲ格の両者をその順に要求する場あいもある。これは、「洗う」という動詞の基本的な用法では考えられないカラ格をとった例であるが、実は「足を洗う」という1動詞相当の慣用句全体がカラ格をとったと考えるべきであろう。逆に言えば、カラ格をとること自体が「足を洗う」の慣用句性を明示しているわけである。いずれにしても、これが「足を水商売から洗う」とはきわめてなりにくい点、やはり類例と見るべきであろう。

以上のように、動詞が二つ以上の名詞にかかわる場あい、その序列の固定性にはいろいろな段階があるものの、一般には、偶然とは見なしにくい例が多いので、1動詞と2名詞以上とを要素とする結合比喩の下位分類の際に、格の組みあわせが同じであっても、その出現順が違えば、一応別の型として扱っておこうというわけである。したがって、B₁₅とB₁₆とはこの操作段階で分かれることになる。

ここまでのところは、一応、外形的にとらえる性格に基づいての分類である。もちろん、省略されたり変形されていたりして、機械的に処理できない場あいも少なくないが、ともかく、その基本的なあり方が形式的に推測できるはずのものであり、外形的な手がかりを少なくとも想定することはできよう。

そして、その結果、〈名_カ名=自〉とか、〈名_カ他〉とか、〈名_カ形〉とかいった、類似の形式の結合比喩例が並ぶことになる。これは原文どおりではなく、ある程度抽象されたものではあるが、原文の比喩的思考のタイプをねじ曲げてはいないはずである。形式上の分類はこういった型を抽出する段階でとどまっていわけであるが、同型の例が多くなると、その結合上の傾向がつかみにくいので、初めて意味を考慮に入れ、その中をグループ化するように整理することにしたい。前にもふれたように、この結合比喩は名詞と何かとの結合を取りあげた例がほとんどであるが、ここでは、その名詞について述べる動詞・形容詞といった述語相当部分など、後続要素をもとに配列することにする。それは慣用句や格支配などを考えてみても、そのほうが共通性の高い例が近くに並びやすいと予想されるからである。例えば、「匂い_カ青春_ヲ包む」「匂い_カ庭木_ヲ眠らせる」「戦争_カ青春_ヲむしりとる」「不満_カ生活_ヲ包む」の4例の間では、第2例以下いずれも第1例と共通項を持つが、上の原則によって、第4例が第1例の最も近くに並ぶわけである。

以上述べてきた下位分類手順を簡単に整理しておくと、次のようになる。

まず、採集された比喩表現例のうち、結合比喩と判定された諸用例について、それを構成している要素の文法的性質、特に品詞性を調べ、その組み合わせの種類によって分類する。

その結果、例えば、次のような形で区分される。

名・名 名・動 名・形 副・動

ただし、その際、必ずしも原文に現れた形式にとらわれず、そこに働いている比喩的思考の型をできるだけ単純に整理するために、必要な変形を行う。例えば、「仮面の反撃(がはじまる)」や「仮面の運転(をあやまる)」などは、現象的には名詞どうしの結合であるが、その表現は、それぞれ、〈仮面が反撃する〉と〈仮面を運転する〉という比喩的思考を基礎として成立したと考え、〔名・名〕ではなく〔名・動〕として処理する。

次に、動詞を構成要素に持つ群については、その自他の別によって二分する。

その結果、例えば、次のような形で分けられる。

名・自 名・他

ただし、「浴びる」「からかう」「くぐる」「授かる」「張りこむ」「喜ぶ」など、辞典による判定の揺れの目だつ動詞が相当の数に上る(国立国語研究所『動詞・形容詞問題語用例集』参照)事実もあり、道路を「渡る」や「よぎる」が自動詞で「横切る」や「横断する」が他動詞であったり、峠を「越す」が他動詞で「越える」が自動詞であったりするような、ヲ格名詞の対象性と移動空間性と判別が言語主体の意識の現実に添わない例も多い。結合比喩の型としてはそういった判定とは別の処理をしたい場合もあるが、意味による類別は現状では主観的になりやすいので、今は形式的処理にとどめておく。

また、その際、1語の動詞との関係ではなく、その動詞を含む句との関係に比喩性を認めたために、動詞句として抽出された要素においても、本来は、句の構成要素となってい

る動詞の自他にこだわらず、結合比喩が成立するための要素であるその動詞句全体の機能によって判断すべきなのであるが、これも前述の理由で、動詞要素を規準とした形式的処理を施しておく。

つまり、ここでの自他判別は、結合比喩の型を類別するための一次的な手順として、一応、客観的な処理をしておこうとしたものである。

次に、品詞の組みあわせも、動詞の自他も同じである群について、比喩的結合の箇所数によって分類する。

その結果、例えば、次のような形で分けられる。

名・他 名・名・他 名・名・名・他

ただし、これはその表現を構成している要素ではなく、動詞との関係で結合比喩の成立に直接関与している要素だけを取りだした場あいである。例えば、「時間が感傷をぬぐい去る」は〔名・名・他〕となるが、同型に見える「時間が傷あとをぬぐい去る」の場あいは、「時間が-ぬぐい去る」だけが取りたてられ、〔名・他〕として処理される。

次に、名詞の格の違いに応じて細分する。その結果、それまで、品詞も動詞の自他も比喩的結合箇所数も同じであるために一括されてあった用例群が、例えば、次のように小分けされる。

名^o他 名=他 名^o他

ただし、これはその表現の土台となった比喩的思考を記述した形式なので、その際の変形によって格関係が原文と違ってくる場あいもある。例えば、「不安に襲われる」では、〈不安が(その人を)襲う〉という思考が起点となっていると考え、〔名=自〕ではなく〔名^o他〕として処理することになる。しかし、このような voice の転換は微妙な場あいがある。「愛情に包まれる」というやや慣用的な比喩句があるが、特に文学作品などでは「愛情にすっぽりと包まれる」のようにオノマトペを伴うことがあり、その比喩性はまだ生きていてと推測される。ところが、それを思考レベルまでもどして、voice を変えようとすると、問題が出てくる。すなわち、〈愛情が(その人を)包む〉のか、あるいは、〈(何ものかが)(その人を)愛情に〔または「で」〕包む〉のか、という点のはっきりしないのである。「敵に囲まれる」なら〈敵が囲む〉だし、「ふろしきに包まれる」なら〈(だれかが)ふろしきに〔または「で」〕包む〉だが、「愛情に包まれる」の場あいは、〈愛情〉が、〈包む〉という動作の主体として〈人間〉なみに扱われたのか、それとも、〈包む〉ための道具として〈ふろしき〉なみに考えられているのかがあいまいなのである。また、〈愛情がそれ自身で包む〉として〈愛情〉に二役を想定する解し方もあろう。このような場あいは、用例ごとに筆者個人の判断で(特に判定に窮した例については他の所員の意見を参考にし)て処理したが、「駅から乗客が吐き出される」など、それに類する例がかなりの数に上るので、客観性を欠いた判定も少なくないだろう。ただし、何らかの変形操作を施した例については、その旨の注記を添えておく。

なお、このような受身の場合はいは、元にもどしても、格関係が変わるだけで、比喩関係には影響がないが、使役の場合はいは、元にもどすと比喩性が消えることもあるので、変形をせずに、そのままの形で、1語の他動詞として扱う。例えば、「決心が恐怖を降伏させた」は「恐怖が降伏する」と考えても比喩性が減るだけで消滅はしないが、「恐怖が私を降伏させた」を「私が降伏する」とすれば比喩性が跡かたなく消え去るからである。

また、連体修飾として現れた動詞や形容(動)詞についても、可能な場はいは述語の位置にもどして、その関係によって名詞の格を推定する。例えば、「物言わぬ団欒」〔田〕や「汚れた美しさ」は修飾関係上の異常性であろうが、「逃げ去った幸福」は〈幸福が逃げ去る〉、「とり逃がした幸福」は〈幸福をとり逃がす〉、「ぶ厚い幸福」は〈幸福がぶ厚い〉と考えることができよう。

その次に、格まで考慮に入れても同型に属する用例群について、その要素の出現順の違いによって分類する。その結果、例えば、次のように区分けされる。

名=名ヲ他 名ヲ名=他

ただし、その格が明示されていない場あいや変形によって得られた場あいには、どちらが自然であるかを推測した結果で処理する。例えば、「敵意をにじませた笑顔」は〈笑顔に敵意をにじませる〉と考え、「敵意を包んだ笑顔」は〈敵意を笑顔に包む〉と考えることになるが、その辺の判断はやはり主観性の濃い場あいの出ることは避けられないであろう。

そして、最後に、同型の用例群を、『分類語彙表』(国立国語研究所資料集 6)を参考にして、その結合中の要素の意味上の類関係から、似たものが近くに並ぶようにグループ化して配列する。その際、規準にとる優先順位は、後要素を上位とし、そこが同じ場あいに前要素の意味の類縁性を考慮する。したがって、前要素から得た結合範囲はまとめてつかめないで、索引を添えてカバーする。

その結果、例えば、次のような形で整理される。

〔名ガ	自〕
死・連想	来る
眼	引き返す
.....	
笑い・嗤い・微笑	浮かぶ
陰影	浮かび出る
姿	浮き上がる
目・心	沈む

〔名ガ	名ヲ	自〕
苦しみ	愛	殺す
死	記憶・情熱	殺す
.....		

失敗	生涯	傷つける
こと	精神・神経	傷つける

なお、その結合の臨時性の度あいを示すため、かなりよく見られる例には「慣用的」という意味で「慣」と記し、一般化と言えるほど固定してはいないが、その作品以外でも接した記憶のある例には、それに準ずる、すなわち、「半慣用的」という意味で「(慣)」と記すこととし、その作品で初めて接した感じがするほどに非慣用的な結合例は無じるしとすることによって、3段階の表示を行う。この判定は、簡単に言えば、よく耳にするもの、聞いたことのあるもの、ごく珍しいもの、といった、粗っぽい規準による主観的なものであるが、これは分類ではなく、補足的な情報として参考までに添えるだけである。3段階の差の区別を例によって示すと、例えば、次のようなぐあいになる。

	心理ヲ掘り起こす
(慣)	心理ヲ掘り出す
慣	心理ヲ掘り下げる

2.43 文脈比喩の分類

文脈比喩は下位分類の観点が最も立ちにくい。その理由は、逆に、指標比喩と結合比喩との下位分類をふり返ることによって明らかになるはずである。指標比喩は、その名のとおり、その表現の内部に、表現主体の比喩的思考を反映し、受容主体がそこからその表現の比喩性を感じとる手がかりとなる、何らかの指標としての特定の言語形式をそなえている。したがって、その指標の言語的性格、および、その序列・組みあわせに着目した型分類が可能なのである。次の結合比喩の場合あいも、そういった指標としての言語形式を抽出することこそできないが、その表現を構成している要素のどれかの結びつきの間に、通常の表現では現れにくい組みあわせが必ず見いだされる。したがって、その異常な結合をなしている要素を規準として、やはり、その言語的性格や序列・組みあわせ上の違いに着目した型分類が可能である。ところが、文脈比喩の場合あいは、比喩に関連する特定の形式を指標として抽出することはできないし、また、構成要素間の異常な結合をさし示すこともできない。つまり、その表現の内部に、正常な表現からの逸脱を、部分として指摘することはできないのである。それでも比喩であることがわかるのは、先行表現によって形成され、その表現の場にも及んでいる文脈とのかかわりにおいてであった。しかし、文脈はことばによって作られたものであるにはちがいないが、それ自体はことばではない。したがって、表現形式と文脈との対応、この場合あいは、むしろ不適合なのであるが、ともかく、その辺を分類の規準にとろうとすると、ことばではなく事がらのほうの意味、いわば概念を分類する段階を経なければならなくなる。しかし、概念そのものの分類は、つき詰めていけば、世界をどう切るかという問題にぶつかる。それに、『分類語彙表』の場合あいのような語単位や β 単位のことば側の類別というわけにはいかず、どうしても、その表現全体

を単位とした、しかも事から側の類別を避けて通ることはできないのである。そして、それも、この種の比喩表現の体系をとらえる上で有効だし、いずれは可能になるかもしれないが、その分類基盤を持たぬ現段階での試行は、かえって混乱を招くことになりかねない。

そこで、その文脈比喩例がその場で臨時に表している特殊な意味のほうはひとまずおき、ともかく文脈比喩を果たしていると考えられる表現側の言語的な構造に形式的分類を施すにとどめたい。

文脈比喩は、すでにくりかえし述べたように、その表現の内部に比喩性を持たないので、そのうちの一部分を取りだしにくい。しかし、そういった“まるごと”性はあるにしろ、その表現中の比喩的な中核部を区別することは、ある程度可能だろう。すなわち、その表現が全体として比喩的な働きをしているという事実はあるにしろ、その表現の構成要素のすべてが比喩の成立に等分に働いているわけではない。それを欠いては比喩として成り立たない要素もあるだろうし、逆に、省略しても、あるいは他形式と置換しても、その表現の比喩性に大きく影響を与えない、つまり、比喩表現であるための必須成分とは言えない要素もあるだろう。少し例をあげて説明しよう。

前にふれた『雪国』の例「島村はまだ浅瀬を渡っているのだった」について考えてみると、まず、この表現の内部のどこにも比喩を予想させる特定の要素を含んではいない。そういう意味では、その全体がその表現をとり巻く言語的環境との関係で比喩をなしていると考えらるべきであろう。しかし、そのうちの「島村」という語は、そういった文脈の流れを、いわばせきとめることなく、素直に受けいられる。すなわち、その語がその作品でそれまでにさしてきたある人物を、そこでもさしていると考えて全く矛盾はないのである。そして、その「島村」を仮に「村島」とか、あるいは全然違う「太郎」といった人名に置換したり、「彼」という人間をさす代名詞で表したとしても、作品内容の事実関係をゆがめることにはなるが、その表現の比喩性は損なわれない。したがって、その「島村」という主語部分は、その表現を比喩たらしめる重要な働きを担っていない、と考えられる。「まだ」も同様である。ところが、「浅瀬を渡る」の部分は、それを字句どおりに解することは、女との間の感情の質を友情から愛情に至る流れの中に位置づけようとしている文脈上の制約のもとでは、いわれない話題の豹変を強引に正当化するという、叙述の自然な進行をねじ曲げる無理を重ねる結果になる。したがって、それは「川を横切る」ことではなく、友情から愛情へと高まる恋愛感情というとらえ方をした場あいにその入口に近い低い段階にあることを暗示したものと解するほうが文脈に忠実だという判断から、そういった比喩的な意味のほうの解釈を選びとるものと思われる。もちろん、このような解釈が自然に行われる背後には、「首ったけ」「恋の深みにはまる」「深い関係に入る」といった、恋愛感情の度あいを〈深さ〉でとらえる一連の既成表現の存在が見のがせないであろう。それはともかく、この表現が比喩となる上で、この「浅瀬を渡る」が中核的な役わりを果たしていることは疑えない。

文脈比喩の下位分類においては、各用例からこの意味での中核部を抜きだし、その言語的な構造に基づいて整理することにした。

しかし、一口に中核部とは言っても、1語のものから、修飾部を伴った長い句、さらには、主述をそろえた文相当のものまで、その大きさはいろいろある。そして、大きな単位でとらえねばならないものほど、文脈比喩としての性格を濃厚にそなえた例と考えられよう。本書では、文を超える範囲に及ぶ比喩表現例も採集はしたが、分析段階で、それを比喩的思考の分節ごとに切りはなして処理したので、結果として、文段や文章という単位で掲げた例はない。しかし、文脈比喩が指標比喩・結合比喩に対して持つ弁別的特徴としての性格から言うなら、作品全編にも及ぶ長い用例にこそ文脈比喩の典型を見ることになるだろう。寓話はその一例であるが、文学は比喩であると言われるように、その明瞭さに差はあっても、それは文学作品すべてに共通する性格である。そこまで行けば、文学研究のまっただ中に切りこむことになり、もはや言語学の専有領域とは言えない。なわ張りかどうであれ、そういったいわば作品単位の意味論も必要ではあるが、有効な分析記述の方法を持たない今は、整理のレベルをそろえる都合もあって、文を超える比喩表現例については、文以下の比喩表現の連鎖として処理しておく。

整理の手順を簡単に示そう。

まず、文脈比喩と認定された比喩表現例から、比喩性の成立に直接関与しているその中核部を抽出する。

次に、その抽出部分を構成している要素（主に「語」）を単位にとり、それぞれの品詞性に基づいて分類する。

その際、結合比喩の場合いとは違って、表現内部の関係を問題にするわけではなく、その構造を示すのが目的なので、できるだけ忠実に記述する。したがって、不要部分を切りすて、実現形を基本形にもどす程度の操作にとどめ、なるべく変形処理をしない。例えば、動詞の自他の区別も表面に立てず、voiceの変換や語順の転換も行わない。

そして、名詞には格を考慮し、全体の構造を〔名₁動〕〔名₂名=動〕〔形 名〕のような形で表して、同型の例を列挙する。その際、「口濡らす」といった例は、記載はそのままの形で行うが、「口を濡らす」の意と解して格を想定し、〔名₂動〕の部に属する例として登録する。「天井も壁も傾く」のように、係助詞が格助詞を追いだしたか、あるいはそれを兼ねているとも考えられる例においても、不自然で実現性の乏しい形式であれ、その構造を明確に示すため、論理上の格助詞を推定して、〔名₁名₂動〕の型を立てて所属を決める。

また、動詞が接続助詞を伴って他の要素にかかっていく場合は、その助詞をも型分類の目やすとして採用する。

このような形式的な操作の結果、文脈比喩は、例えば、次のような形で整理されて示されることになる。各1例だけあげる。

〔形 名〕 薄暗い下り坂

〔形 名ヲ動〕 苦い塩を嘗める

〔動〕 揺り動かす

〔動 名ヲ動 名〕 転がる帽子を追いかける努力

〔名〕 監獄生活

〔名ガ形〕 荷が大きい

〔名ガ形 名へ動〕 風がおもいがけないところへ吹く

〔名ガ動〕 紐が緩む

〔名=動〕 波に流される

〔名ヲ動〕 鎖をふりほどく

〔名=動ヲ動〕 下敷きになって押しつぶされる

〔名ヲ動バ名ガ動〕 糸を引けば手足が動く

〔名ガ名〕 全身瘤だらけ

〔名ノ名〕 壁の外側

〔名ヨリ名〕 顔よりも胃袋

〔名ヲ名ノ名=動〕 不発弾を胸の奥にいただく

なお、これについても、結合比喩と同じ規準で、慣用的なもの、準慣用的なものに印をつけて区別する。文脈比喩的な表現を分解して、小さい単位で整理したためもあって、この場あいはいかなりの部分に印がつくことになる。

〔注〕 以下に、3種の比喩に関する分類結果を具体的に示す各種の資料を掲げるが、数量的処理は指標比喩において最小限施すにとどめ、結合比喩および文脈比喩についてはいっさい行わないことにする。その理由は主として次の点にある。指標比喩は、言語形式をよりどころとするので、採集時の漏れは比較的少ないと予想されるが、結合比喩は、特定の言語形式に拠点を持たず、要素間の結合上のずれを規準とするので、その判断が主観的になりやすく、文脈比喩はその程度の手がかりさえないので、さらに独断的になる危険があること、そのために、文脈比喩はもちろん、結合比喩も、指標比喩に比べて、採集上・分類上の問題点をはるかに多くなりやすいこと、また、調査作品の一部については、その全採集例を処理しきれなかったことがあるからである。したがって、結合比喩・文脈比喩関係の資料は、少なくともこのような例がその箇所から得られたことを示すにすぎず、それですべてだと積極的に主張するものではない、という性格を、指標比喩の場あいより濃厚にそなえているわけである。

3. 分類結果

3.1 指標比喩

〔作り方〕

- 1) 比喩指標要素（見たてる、疑われる、思い起こさせる、当てはまる、まるで、いわば、なんだか、ほど、でも、同じ、よう、みたい、ぐあい、感じ、ある種の、…ばり、…さながら ナド）の類（D, F, J, K, M, R, S）・種（D₅, F₂, K₉, M₃, S₄ ナド）・号（D₅₋₇, F₂₋₁, K₉₋₁, M₃₋₂ ナド）の組み合わせ（D₇₋₈とF₁₋₁, D₁₋₁とK₉₋₁, D₆₋₁とJ₃₋₄とK₉₋₁ ナド）・順序〔前要素を優先。以下同様〕（F₁₋₁D₇₋₈, K₉₋₁D₁₋₁, K₉₋₁J₃₋₄D₆₋₁ ナド）によって比喩指標（疑われる・くらい D₅₋₇J₁₋₂, かなにか・よう・思われる J₂₋₃K₉₋₁D₅₋₄, ちょうど・よう・気持ち F₁₋₄K₉₋₁M₃₋₅, まるで・でも・よう・ようす F₁₋₁J₂₋₁K₉₋₁M₂₋₁ ナド）を分類する。
- 2) 分類された比喩指標を類のアルファベット順（DJ, FD, FJKM, FKM, JKD, KD, KJD ナド）に配列する。
- 3) 同類の内部を種の番号順（F₁D₁, F₁D₅, F₂D₃, F₃D₇, F₃D₁₂, F₈D₅ ナド）に配列する。
- 4) 同種の内部を号の番号順（F₁₋₁K₁₋₃, F₁₋₁K₁₋₄, F₁₋₁K₂₋₁₀, F₁₋₄K₂₋₃……F₂₋₁K₉₋₁, F₂₋₁K₉₋₃, F₂₋₇K₉₋₁, F₂₋₈K₉₋₁ ナド）に配列する。
- 5) 各比喩指標の実現形（に見える、をみるようなもの、あたかも・ような、今にも・そのような感じ、というよりもむしろ・と云ったほうがよかった、と同じ役目、一種の・ようなものさえ・感じた ナド）をそれぞれ五十音に基づく番号順（と・似ていた、に似た、に似ていた、に・似ていた、に似ていないものでもない、に似ている……まるで・ように感じられる、まるでように感ぜられる ナド）に列挙する。ただし、比喩指標の基本形と同形の実現形だけの場あいは省略する。
- 6) 各実現形に文脈つきの実例（F₁₋₄K₉₋₁・1 そのきゃしゃな踵なぞはちょうど鹿のようだ。〔歌〕, K₉₋₃D₅₋₉ 毛を揺られたにわとりみたいに見えるわ〔唄〕 ナド）を添える。比喩指標あるいはその実現形が1例だけで、出所が明らかな場あいは作品名を省略する。
- 7) 比喩索引による検索の便を考え、各実例に通し番号をつける。
- 8) 各実現形の該当例が出現した異なり作品数と延べ箇所数（F₈₋₄K₉₋₁D₆₋₁・5 何だか・ような気がする 3-5 ナド）および、その内わけ（夜₃縮杏 ナド）を表示する。ただし、1例だけの場あいは数字を省略する。
- 9) 各比喩指標の該当例が出現した異なり作品数と延べ箇所数（F₈₋₄K₉₋₁D₆₋₁ なんだか・

よう・気がする 8-12 ナド), および, その内わけ(夜₄風₂縮₂溼₂杏₂女₂草₂他₂ ナド)を表示する。ただし, 内わけで1例だけの作品は数字を省略する。

- 10) 比喩指標を種レベルでとらえた場あいに, その該当例が出現した異なり作品数と延べ箇所数 (F₈K₉D₆ 9-15, J₂K₉ 31-115 ナド) を表示する。
- 11) 比喩指標を類レベルでとらえた場あいに, その該当例が出現した異なり作品数と延べ箇所数 (FKD 23-56, JK 33-148 ナド) を表示する。

〔読み方〕

- 1) アルファベット (D, F, K ナド), および, その組みあわせ (DK, FD, FJKM ナド) は, 比喩指標の類レベルでの型 (K型, FD型, FKM型 ナド) を示す。
- 2) 番号つきのアルファベット (D₁₁, F₁₈, K₂ ナド), および, その組みあわせ (D₇K₉, F₈D₁₂, F₁J₂K₉M₂ ナド) は, 比喩指標の種レベルでの型 (K₂型, F₈D₁₂型, F₁K₉M₂型 ナド) を示す。
- 3) 枝番つきのアルファベット (D₁₂₋₃, F₁₉₋₃, K₉₋₃ ナド), および, その組みあわせ (F₁₋₁K₉₋₃, F₁₋₃K₂₋₄, K₉₋₁J₃₋₄D₆₋₁ ナド) は, 比喩指標の号レベルでの型 (F₁₉₋₃型, F₁₋₁K₉₋₃型, K₉₋₁J₃₋₄D₆₋₁型 ナド) を示す。
- 4) 「・」つきの数字 (・7・3・4 ナド) は, その号レベルでの比喩指標 (D₄₋₁, F₁₋₃D₁₂₋₁, F₈₋₄K₉₋₁D₆₋₁ ナド) に属する実現形(ことになる, となって, になった…あたかも・に似た, あたかも・に似ていた……何だか・ような気がした, 何だか・ような気がする ナド) が2種以上の場合あいのその序列を示す。
- 5) 枝番つきのアルファベットに先導される見だし (F₂₋₁ いわば, F₁₋₁D₁₋₅ まるで・受けとる, F₁₋₃K₉₋₁M₂₋₁₁ あたかも・よう・ぐあいナド) は, 号レベルでの比喩指標を示す。
- 6) 枝番つきのアルファベットの次の番号に先導される見だし (F₂₋₁・2 言わば, F₁₋₁D₁₋₅・1 まるで・としか受け取れなかった, F₁₋₃K₉₋₁M₂₋₁₁・2 あたかも・ような具合 ナド) は, その比喩指標に属する一つの実現形を示す。ただし, 基本形のままで実現した例だけの場あいは, この欄が省略されている。
- 7) 「-」でつながれた数字 (40-300, 19-42, 3-4 ナド) は, 前 (40, 19, 3 ナド) が出現作品数 (異なり) を, 後 (300, 42, 4 ナド) が出現箇所数 (延べ) を, それぞれ示す。ただし実現形の「1-1」は省略されている。
- 8) 「-」でつながれた数字の次の〔 〕内 (3-4 [裸₂杏₂永₂] ナド) は, その内わけ (作品ごとの出現箇所数) を示す。ただし, 1例の場合あいは, 数字が省略され, 作品名だけが示されている。
- 9) 比喩指標実現形 (F₈₋₁K₉₋₁D₆₋₉・1 何か・ように見えた ナド) ごとに掲げた文章片 (しっかりと落ちついてふるまっている倫の身体に何か常でない錘が沈んでいるように見えた。〔女〕) は, その実際の用例のサンプルを示したものであり, 下線の箇所がその

202 3. 分類結果

実現形の部分、末尾の〔 〕内が出典を表す。出所が明記されていない場合は、1 作品にだけ現れ、作品名をすでに示したものである。

10) 用例見本の前に添えられた数字は、指標比喩の用例の通し番号である。

例 1: F 30-81

F 類の比喩指標要素(まるで、いわば、ほとんど、まさに、要するに、なんだか ナド)が単独で構成する比喩指標は、30作品にわたって、延べ81例採集された。

例 2: KD 43-412

K 類の比喩指標要素(近い、同様、よう ナド)とD類の比喩指標要素(見たてる、感じられる、気がする、思わせる、似る、相当する ナド)とが、その順に組みあわさって構成する比喩指標は、43 作品にわたって、延べ412例採集された。

例 3: K₉ 50-4104

K₉種の比喩指標要素(よう、ごとし、みたい ナド)が単独で構成する比喩指標は、50 作品全部にわたって、延べ4104 例採集された。

例 4: F₁K₉ 32-312

F₁種の比喩指標要素(まるで、さながら、あたかも、ちょうど ナド)とK₉種の比喩指標要素とが、その順に組みあわさって構成する比喩指標は、32 作品にわたって、延べ312 例採集された。

例 5: R₄₋₁ 一種の 8-13 [草₃明₂神蔵母流ハ金]

R₄₋₁号の比喩指標要素「一種の」が単独で構成する比喩指標は、8 作品にわたって、延べ13 例採集され、その内わけは、『草の花』5 例、『明暗』2 例、『神経病時代』『蔵の中』『母子叙情』『流れる』『ハイネの月』『金閣寺』各1 例であった。

例 6: F₁₋₁J₂₋₁K₉₋₃ まるで・でも・みたい 2-3 [遠₂他]

F₁₋₁ 号の比喩指標要素「まるで」と J₂₋₁ 号の比喩指標要素「でも」と K₉₋₃ 号の比喩指標要素「みたい」とが、その順に組みあわさって構成する比喩指標は、2 作品にわたって、延べ3 例採集され、その内わけは、『遠来の客たち』2 例、『他人の顔』1 例であった。

例 7: S₉₋₂・4 といった 2-2 [母流]

すると老紳士は、幼年生に巧みにいい返された先生みなぎといった快笑を顔中に漲らせて、頭を搔いた。〔母〕

S₉₋₂ 号の比喩指標要素「という」が単独で構成する比喩指標「S₉₋₂」に属する実現形のうちの4 番目に当たる「といった」は、調査した50編のうち2 作品から2 例採集され、その内わけは、『母子叙情』に1 例、『流れる』に1 例で、『母子叙情』から実例を示すと、「…幼年生に巧みにいい返された先生みなぎといった快笑…」となり、そのうち下線箇所「といった」がそれに該当する部分である。

例 8: F₁₋₁J₂₋₁K₉₋₁・6 まるで・でも・ような 7-12 [永₃神₂海₂他₂夜母裸]

真顔で、まるで落し物でも聞くような口ぶりである。〔裸〕

F_{1-1} 号の比喩指標要素「まるで」と J_{2-1} 号の比喩指標要素「でも」と K_{9-1} 号の比喩指標要素「よう」とが、その順に組みあわさって構成する比喩指標「 $F_{1-1}J_{2-1}K_{9-1}$ 」に属する実現形のうちの6番目に当たる「まるで・でも・ような」は、7作品にわたって、延べ12例採集され、その内わけは、『永遠なる序章』に3例、『神経病時代』『海辺の光景』『他人の顔』に各2例、『夜明け前』『母子叙情』『裸の王様』に各1例で、『裸の王様』から実例を示すと、「…まるで落し物でも聞くような口ぶり…」となり、そのうち下線箇所「まるで…でも…ような」がそれに該当する部分である。

〔使 い 方〕

- 1) 指標比喩の全貌（どんな比喩指標要素が、単独で、また、どんな比喩指標要素とどんな順序で組みあわさって、どんな比喩指標を成し、それがどんな実現形で、どんな作品に、どのぐらい現れ、どんな文脈つき実例があるか ナド）を概観する。
- 2) 指標比喩にはどんな類の比喩指標（D, FD, FFJK, FDK, KM, RJ, S ナド）があるかを調べる。
- 3) 各類の比喩指標（D類, FK類 ナド）がどんな種（ D_1 種, D_3 種, D_6 種 ナド… F_1K_1 種, F_1K_9 種, F_3K_2 種 ナド）から成るかを調べる。
- 4) 各種の比喩指標（ D_5 種, F_1K_9 種 ナド）がどんな号（ D_{5-3} 思える, D_{5-7} 疑われる, D_{5-11} 見なされる ナド …… $F_{1-1}K_{9-1}$ まるで・よう, $F_{1-2}K_{9-2}$ さながら・ごとし, $F_{3-3}K_{9-3}$ ほとんど・みたい ナド）から成るかを調べる。
- 5) 各号の比喩指標（ D_{5-9} 見える, $F_{1-1}K_{9-1}$ まるで・よう ナド）がどんな実現形（ $D_{5-9} \cdot 1$ かと見えた, $\cdot 2$ としか見えなかった, $\cdot 3$ に見えた ナド …… $F_{1-1}K_{9-1} \cdot 1$ まるで・かのようにであった, $\cdot 2$ まるで・かのように, $\cdot 3$ まるで・ようじゃないか ナド）で現れるかを調べる。
- 6) 各類の比喩指標がいくつの作品に何例現れるか（FK 36-416, KJD 16-27, M 30-141 ナド）を調べる。
- 7) 各種の比喩指標がいくつの作品に何例現れるか（ D_1K_9 5-6, $F_1J_2K_9$ 18-60, R_4 9-16 ナド）を調べる。
- 8) 各号の比喩指標がどういう作品に何例現れるか（ $F_{1-3}J_{2-1}K_{9-1}$ あたかも・でも・よう 4-10 [明⁴立⁴夜草] ナド）を調べる。
- 9) 各実現形がどういう作品に何例現れるか（ $F_{1-3}J_{2-1}K_{9-1} \cdot 1$ あたかも・でも・かのように 2-4 [立³草] ナド）を調べる。
- 10) 各レベル（FK類 $J_2K_9D_5$ 種, $S_{9-2}K_{9-1}M_{2-11}$ 号 ナド）の比喩指標の実例を実現形ごとを知る。

例 1: FJ 類にはどういう比喩指標が含まれるか?

アルファベット順に配列されている類表示をもとに「FJ」を探しだし、その部に配属

されている比喩指標を調べる。その結果、次のような情報を得ることになる。

F_{1J_2} (まるで・でも), F_{AJ_1} (ほとんど・くらい), F_{4J_1} (それこそ・ほど), F_{4J_3} (まったく・というものは), F_{AJ_1} (なんだか・ほど)

例 2: FKD 類の代表的な比喩指標にはどんなものがあるか?

アルファベット順を利用して「FKD」の部を引きあて、それに属する種の出現状況欄 ($F_1K_9D_6$ 4-5, $F_2K_9D_5$ 2-2 ナド) を比較して特に広く(作品数)多く(例数) 使用された種を探りだし、その内部をもう一度同様の手順で調べる。その結果、次のような比喩指標が選びだされるはずである。

$F_1K_9D_5$: まるで(あたかも)・よう・見える $F_6K_9D_5$: なんだか・よう・気がする

例 3: $K_{9-1}D_{5-4}$ 号の比喩指標はどのような実現形で現れるか?

アルファベット順を利用して KD 類の部を見つけ、前の比喩指標要素 (K) の番号順 (K_1, K_2, \dots, K_9) に着目して K_9 を探し、その中で後の比喩指標要素 (D) の番号順 (D_1, D_2, \dots, D_5) に着目して D_5 を探すと、 K_9D_5 種の部が見つかるので、次に枝番号 (K_{9-1}, D_{5-4}) に着目して同様の手順で $K_{9-1}D_{5-4}$ 号の比喩指標 (よう・思われる) を探しあて、そこに配属された実現形を調べる。その結果、次のような情報が得られることになる。

かのように思われた, ようにおも(思)われ, ように思われた, ように・思われた, ようにおも(思)われて, ように思われていた, ようにおもわれてくる, ように思われなくてもない, ように思われまして, ように思われます, ように思(想)われる, ようにしか思われなかった, ようには思われず, ようにもおもわれた, よに思われた, よに思われまして, よに思われます

例 4: 比喩指標「あたかも・ごとし」と「あたかも・よう」とはどちらがよく使われるか?

五十音順の「比喩索引」を引いて、そこに示されている「あたかも・ごとし」と「あたかも・よう」との用例番号によって、この指標比喩の分類結果の中からそれぞれの該当箇所を探しだして、その出現状況欄を比較する。

その結果、「あたかも・よう」のほうが12作品にわたって45例採集されているのに対し、「あたかも・ごとし」のほうは『明暗』の「相思の恋愛事件が、あたかも神秘的焰のごとく、継子の前に燃え上がった」の例が採集されているだけあり、「あたかも・よう」の用例が、『夜明け前』に集中(25例)しているとはいえ、島崎藤村以外にも11作家の作品に20例現れた事実がある以上、比喩を表す形式として「あたかも・ごとし」よりも現代ではよく使われていると推定されることがわかる。

例 5: 比喩指標要素「よう」が単独で構成する比喩指標において、「ようだ」として言いきる場あい、「ようで」として中止する場あい、「ように」として連用的に使われる場あい、「ような」として連体的に用いられる場あいは、それぞれどんな割合を占めるか?

「比喩索引」の五十音順を利用して「よう」を引くと、その用例番号が出るので、その番号によって、この指標比喩の分類結果中の位置を知ることができる。そして、探しあてたK類9種1号の比喩指標「よう」の部に掲げてある各実現形を言いきり・中止・連用・連体に分け、それぞれの出現状況を調べる。その結果、次のような情報を得るはずである。

連用（ように、かのように ナド）	2241例
連体（ような、かのような ナド）	1296例
言いきり（ようであった、ようである、ようだ、ようだった ナド）	294例
中止（ようで ナド）	43例

例6：書きことばにおける代表的な比喩指標要素「よう」に対して、話しことばにおける典型的な比喩指標要素である「みたい」は、動詞「見る」の過去形に助動詞「ようだ」の添った「みたよう」が音変化を起こして成立したとされるが、今回調査の対象とした時期の作品から、そのような変遷をうかがわせる用例が得られたか？

「比喩索引」を引いて、「みたい」の用例番号をつかみ、まず、それが単独で比喩指標を構成した場合の実現形を調べ、もし必要なら、さらに、その「みたい」を伴う全実現形に当たってみるために、4.31の「比喩指標要素個別出現状況」を利用して、この指標比喩の分類結果の各該当指標に掲げられた各実現形に目を通す。この場あいは、K₉₋₁種の比喩指標の部分だけで、次の推論を支える情報が得られる。

方言の語り体をベースとした宇野千代『おはん』にある「みたような」「みたよな」「みたように」「みたよに」の例を別にしても、「みたような」「みたように」の形は漱石の『明暗』や幸田文の『流れる』にも見られるほか、「みたように」の例はさらに滝井孝作の『無限抱擁』や中野重治の『歌のわかれ』にも見いだされるし、『明暗』には「みたようで」の例もある。これらは、岩国なり飛騨高山なり金沢なりの方言の影響であったり、古い東京語の話しことばの写生であったり、あるいは、地方色を積極的に演出する一手段として意図的に選ばれたものであったり、その事情は一様でないとしても、それをある時期に実際に行われた形の反映と考えることはできるだろうし、泉鏡花の『高野聖』からは、「鉄てこ挺ていを見たような拳こぶし」のように、格助詞「を」の残存した、動詞性のさらに明確な例も2度にわたって採集されている。

も く じ

D	1~152	DK	172~185
DD	153~154	DKD	186~189
DFD	155	DKJD	190
DJ	156~169	DKM	191~192
DJKD	170	DRM	193
DJM	171	F	194~231

206 3. 分類結果

FD	232~264	J	582~612
FDJ	265~266	JD	613~637
FDJD	267	JDJ	638~639
FDJSK	268	JDK	640~641
FDK	269	JF	642~643
FDKD	270	JFD	644~645
FDKKM	271	JFJK	646
FF	272	JFK	647~648
FFJK	273~274	JFSK	649
FFK	275~277	JJ	650~653
FFKD	278	JK	654~692
FFKM	279	JKD	693~702
FJ	280~290	JKJ	703~704
FJD	291~293	JKM	705~711
FJK	294~326	JM	712~718
FJKD	327~331	JS	719~720
FJKM	332~333	JSK	721~722
FJM	334~337	JSKM	723
FJSK	338	JSM	724
FK	339~459	K	725~827
FKD	460~509	KD	828~957
FKDJ	510~511	KDJ	958~959
FKJ	512	KJ	960~974
FKJD	513	KJD	975~997
FKK	514~516	KJKJ	998
FKKM	517	KJMJ	999
FKM	518~550	KK	1000~1003
FKRM	551	KKJD	1004
FM	552~565	KKK	1005
FR	566	KKKJ	1006
FRKM	567	KKM	1007~1008
FS	568~573	KM	1009~1082
FSK	574~575	M	1083~1117
FSKD	576	MD	1118~1119
FSM	577~581	MJ	1120

R	1121~1127	SD	1213~1220
RD	1128~1129	SDJ	1221
RJ	1130~1131	SJ	1222~1223
RJK	1132	SK	1224~1229
RJM	1133	SKD	1230
RK	1134~1141	SKM	1231~1239
RKM	1142	SM	1240~1260
RKMJD	1143	SMD	1261
RS	1144~1148	SMJ	1262
S	1149~1212	SS	1263~1264

D 40-302	7 収檻 <small>しゅうかん</small> された動物に特有の臭気 <small>か</small> と 思っていた。けれどもいまは、その臭 いのいくぶんかは痔瘡 <small>しじやう</small> の治療のときに つかわれる薬品のためであることがわ かった。
D ₁ : 19-42	・4 と思う〔高〕
D ₁₋₁ : 感じる 3-4〔裸: 杏 永〕	8 山は驟雨 <small>ゆう</small> , 親仁が婦人にもたらした 鯉もこのために生きて孤家についたろ うと思う大雨であった。
・1 感じた〔杏〕	・5 と思った〔金〕
1 原稿紙の上に蝶々や小鳥の飛ぶ喜び を、書きながらいつになく <u>感じた</u> 。	9 遠い田の面 <small>も</small> が日にきらめいているの を見たりすれば、それを見えざる金閣 寺の投影だ <u>と思った</u> 。
・2 と感ずる〔裸〕	・6 と思ったり〔何〕
2 小さな、生きた肉体の群れをキャン バスと感ずるようになっていた。	10 花の散るのを蝶々だ <u>と思ったり</u>
・3 を感じた〔裸〕	・7 …に…を思った 2-2〔金 他〕
3 ぼく以外の人間にとってはしみでし かない画用紙をまえにしてぼくはぼっ かりとひらいた傷口を <u>感じた</u> 。	11 そのボタンに、老女 <small>らうにょ</small> に溺愛 <small>じやくあい</small> されて育 った孤独な猫を <u>思った</u> 。〔他〕
・4 を感じて〔永〕	・8 を思う〔顔〕
4 自分のなかに確かな地盤を <u>感じて</u> 微 笑している。	12 いのちの燃焼を <u>思う</u> 。
D ₁₋₂ : 思う 7-12〔顔: 高 ₂ : 金 ₂ : 何 毒 他 海〕	・9 をおもった〔顔〕
・1 かとおもう〔高〕	13 組上の鯉をおもった。案外そのとき になって自分はうろたえないだろうと いう気がする。
5 鉛 <small>なまり</small> の錘 <small>つり</small> かとおもう心持	
・2 かと思った〔毒〕	
6 はじめは下宿からほど遠くない海の ざわめきか <u>と思った</u> 。だが海のざわめ きは別の方角から聞えていた。	
・3 かと思っていた〔海〕	

・10 を思った〔顔〕

14 このホテル独特の迷路のような廊下
をあるきながら、屠所にひかれる羊の
気持を思った。

・11 を・思った〔顔〕

15 証拠をつきつけられても、なお犯行
を否定する嫌疑者を耕は思った。

D₁₋₃ 考える 1-1〔他〕

としか考えなく

16 はじめは、仮面で自分を取り戻そう
としていたようですが、でも、いつ
の間にやら、自分から逃げ出すための
隠れ襲としか考えなくなってしまいま
した。

D₁₋₅ 受け取る 1-1〔流〕

としかうけとれない

17 斬られた顔としかうけとれない陰惨
な笑顔である。

D₁₋₈ 見る 2-4〔夜、目〕

・1 とは見ない〔目〕

18 細君を玩弄物とは見ない。

・2 と見た〔夜〕

19 明治の帝の中興に大関係ある白骨勝
負と見た。

・3 を・と見る 1-2〔夜、目〕

20 ふみわくる深山紅葉を敷島のやまと
にしきと見る人もがも

D₁₋₁₀ 見立てる 1-1〔立〕

に見立て

21 空を競馬場に動いている雲をいろい
ろそれに似た動物に見立て

D₁₋₁₂ たとえる 5-11〔夜、顔、溼、田、無〕

・1 譬えて〔夜〕

22 「熊。」現在の境涯を譬えて見せた。

・2 とたとえた 1-2〔顔〕

23 恋するひとに共通のおろかしさであ
ろう。この心情を、病氣とたとえたひ
とがある。

・3 に譬うべき〔夜〕

24 ただ御一人の帝、その上を措いて時
代を貫く朝日の御勢に譬うべきものは
他に見当らなかつた。

・4 に喩えた〔無〕

25 松子の幼姿を日本犬に喩えた。

・5 に・たとえた〔田〕

26 「帰れる放蕩息子」に自分自身をた
とえた

・6 に譬えたい〔夜〕

27 あの時に帝の誓われた五つのお言葉
と、官武一途はもとより庶民に至るま
でおのおのその志を遂げよと宣せられ
たその庶民との間には、いつの間にか、
天の盤戸に譬えたいものが出来た。

・7 にたとえますと〔顔〕

28 あの方の交際圏を銀座のとおりにた
とえますと、私なんか、ひとどおりの
すくないお邸町の小さい路地にすぎな
いのですわ。

・8 に譬えられている〔溼〕

29 中年後に覚えた道楽は、むかしから
七ツ下りの雨に譬えられている

・9 に譬えられる〔夜〕

30 当時の横浜関内は一羽の蝶のかたち
に譬えられる。

・10 に譬える〔夜〕

31 賀茂真淵から本居宣長、本居宣長か
ら平田篤胤と、諸大人の承け継ぎ承け
継ぎして来たものを消えない学問の燈
火に譬える。

D₁₋₁₃ なぞらえる 1-1〔他〕

なぞらえて

32 自分を、テレビの漫画に出てくる、
覆面の怪人になぞらえて

D₁₋₁₄ 諷諭する 1-1 [碑]

諷諭した

33 天狗とおかめの面のとりあわせは、
人生行路を簡単に諷諭した思いつき

D₁₋₁₆ する 3-6 [夜、他、草]

・1 とし [夜]

34 築地を梶とし

・2 とする [夜]

35 家を砦とする戦闘

・3 にし [他]

36 研究所では、仕事を他人との通路に
し

・4 にして 3-3 [夜 草 他]

37 手をメガフォンにして、おおいおおい、
と二度ほど声を張り上げた。[草]

D₂ 1-1

D₂₋₂ 比較する 1-1 [夜]

に比較すべきもの

38 恵那山の上の空に、美しい冬の朝の
雲を見つけて、夜ごとの没落からまた
朝紅の輝きにと変って行くようなあの
太陽に比較すべきものを想像した。

D₃ 2-2

D₃₋₂ 言い直す 1-1 [顔]

といいなおしてもよかった

39 やがて軽井沢駅に停車する列車は、
運命といいなおしてもよかった。

D₃₋₄ 形容する 1-1 [冬]

と形容した

40 支那人が『水滸伝』の豪傑あたりに
臥蚕と形容した太い眉毛

D₄ 12-50

D₄₋₁ なる 9-42 [他₂₄ 杏₆ 田₃ 顔₃ 流₂
夜 女 ハ 金]

・1 ことになり [他]

41 顔を失ったぼくは、永遠に通路のな
い独房に閉じ込められてしまったこと
になり

・2 ことになる 1-2 [杏₂]

42 おれのはたらいた飯を蹴飛ばすこと
はおれの顔と仕事を足でふみにじった
ことになる。

・3 となって 1-2 [顔₂]

43 青空に目を向けると、衤子のすがた
が、大きく、うすい墨絵となってうつ
った。

・4 となり 2-2 [女 顔]

44 雨がひとかたまりになって、滝とな
り、落下する。

・5 になった 4-7 [杏₂ 他₂ 流 金]

45 誰かの足音が、しだいに高まり、近
づいていた。ぐんぐん近づいてきて、
そのままぼくの動悸になった。[他]

・6 になって 6-14 [他₂ 夜 田 杏 流 ハ]

46 汗ばんだ痛みが、小さな燐ほたるになって、
眼の底でちらちら燃えていた。[他]

・7 になり 2-12 [他₁₀ 田₂]

47 考えれば考えるほど、ぼくはますます
す穴だらけの虱になり [他]

・8 になる 1-2 [他₂]

48 この面してじゃ、言えは言うほど、
ひかれ者の小唄になる

D₄₋₂ 化す 5-6 [金₂ 夜 顔 白 娼]

・1 と化さなくてはなるまい [娼]

49 あのような女の恋人になるために
は、男は全身が一箇の巨大な性器と化
さなくてはなるまい。

•2 と化した〔夜〕

50 日ごろ彼なぞが力と頼む本居翁も口
さがない人たちにかかっては、滑稽な
戯画の中の人物と化した。

•3 と化して〔白〕

51 女が咒文に憑かれた鬼と化して日々
ブツブツ呟いている。

•4 に化して〔金〕

52 私は自分が石に化してしまったのを
感じた。

•5 に化していた 2-2〔顔 金〕

53 人間であることをやめてしまい、け
だものに化していた。〔顔〕

D₄₋₃ 変わる 2-2〔永 他〕

•1 に変って〔他〕

54 おまえは点になり、線になり、面にな
り、ついには輪廓もないただの空間
に変って

•2 に変っている〔永〕

55 フィルムの青い色が銀次郎の顔に落
ち、たちまちその白い顔はいやらしい
死人の顔に変っているのだ。〔永〕

D₅ 14-22D₅₋₁ 感じられる 3-4〔杏 海 娼〕

•1 感じられた 2-2〔杏 娼〕

56 剥き出しになった肩の肉からも、黒
いハイヒールの上のぞいているくる
ぶしのあたりからさえも、彼女の軀の
あらゆる部分から、性器が感じられ
た。〔娼〕

•2 感じられていた〔杏〕

57 何千枚という原稿紙は、もはや原稿
紙と名のつく枚数ではなく、ただの白
紙の虚しさが感じられていた。

•3 感じられる〔海〕

58 そんな父にはふと、へこたれたオス
が感じられる

D₅₋₄ 思われる 3-5〔高 縮 ま〕

•1 と思われた〔高〕

59 遠くのかなたからひたひたと小刻み
に駆けて来るのは、二本足に草鞋をは
いた獣と思われた。

•2 …か…かと思われる〔高〕

60 愛嬌も嬌態も、世話らしい打ち解け
た風はとみに失せて、神か、魔かと思
われる。

•3 かと思わる〔高〕

61 炉の大いなる自在鍵の鯉が黄金
造りであるかと思わるる艶を持った

•4 かと思われる 2-2〔縮 ま〕

62 波の音かと思われる鼓や太鼓が浜風
に伝わった。〔縮〕

D₅₋₅ 考えられる 1-1〔明〕

としか考えられない

63 世界のうちで自分だけが魔に取り巻
かれてとしか考えられないので、
なお心細くなるのです

D₅₋₉ 見える 9-11〔杏 金 明 無 流 顔 他 棘 海〕

•1 かと見えた〔金〕

64 たゆとう水の反映によって堅固な形
態の縛めを解かれ、かかるときの金閣
は、永久に揺れうごいている風や水や
焰のような材料で築かれたものかと見
えた。

•2 としか見えなかった〔明〕

65 洋袴の折り目がまだ少しも崩れてい
ないので、誰の目にも仕立おろしとし
か見えなかった。

•3 に見えた 5-5〔杏 無 金 棘 海〕

- 66 彼らには町家がゴミの山に見えたら
しかった。〔杏〕
- ・4 にみえて〔顔〕
- 67 このひとは、カツプシではない。世
津子の顔が、だんだんと若い猫の顔に
みえて
- ・5 に見えて来て〔杏〕
- 68 くわいというものの頭の青さが、二
つくらいの子供の頭に見えて来て
- ・6 に見える 2-2〔流 他〕
- 69 お向うの軒燈の暈の中を降りてくる
などは、風に追われて横さまな群れに
なって逃げるとき、笑い笑い駆けだし
て行く恰好に見える。〔流〕
- D₅₋₁₆ 響く 1-1〔母〕
- とよりしか響かなかった
- 70 老いぼけて惨めな現在の父がそれを
いうと、地獄の言葉とよりしか響かなか
った。
- D₆ 13-21
- D₆₋₁ 気がする 12-20〔無₆ 杏₃ 何₂ 春 母
施く 顔 風 永 草 海〕
- ・1 気がした 7-12〔無₆ 杏₂ 何₂ 顔 風 草 海〕
- 71 「私も老い込んだでしょう」と、神
経がピリリと動いた。もうもがいてい
ても匍はい上ることの出来ぬ谷に落ちた
気がした。〔何〕
- ・2 気がし出した〔杏〕
- 72 番組が進んで、杏子はおろおろした
ものが、しだいにおちつきのないところ
に、連れ込まれて脅かされる気がし
出した。
- ・3 気がして〔永〕
- 73 畳から気味の悪い死が、沁み移った
気がして

- ・4 気がする 5-5〔何 春 無 施く〕
- 74 ああ、久しぶりで手めえの体になっ
た気がする。〔春〕
- ・5 気もする〔母〕
- 75 親の責務の一端が肩から降りた気も
するのである。
- D₆₋₃ 心地がする 1-1〔田〕
- 心地がした
- 76 彼はこうして数分間か、それとも数
秒間に、メルヘンにある小人国から巨
人国へ、それから再び、巨人国から小
人国へ、ただ一翔かけりて往復している心
地がした。
- D₇ 16-44
- D₇₋₁ 感じさせる 2-2〔顔 他〕
- を感じさせる 2-2〔顔 他〕
- 77 適度に甘味があって、ねばり気があ
って、ふんわり体温を感じさせる緑日
の露店で売っている綿菓子〔他〕
- D₇₋₂ 思わせる 12-25〔海₆ 顔₅ 金₅ 田 神
母 流 冬 草 毒 他 裸〕
- ・1 をおもわせた 1-2〔海₂〕
- 78 窓枠で四角く区切られたそんな光景
はチカチカ光りながら、フィルムの切
れかけた映画の一とコマをおもわせ
た。
- ・2 を思わせた 5-8〔金₄ 田 神 冬 草〕
- 79 指先のふくらみが、雨蛙の吸盤を思
わせた。〔神〕
- ・3 を想わせた〔毒〕
- 80 それ（蝶）はなぜか、ぼくに若い踊
子を——頭に白い羽毛をつけ、銀粉を
全身にぬって片脚をかるく上げて、今、
空中に飛び上ろうとする美しい踊子を
想わせた。

•4 を思わせて〔流〕

81 雪は眼のとどくあたりから押しだされ黒く降りてくるが、庇の高さから塀の高さから、あちらのほうはごみ箱の高さあたりでくるとひっくりかえると、白くなって降りる。羽根とか綿とか暖かいものを思わせて

•5 をおもわせる 2-6〔顔・海〕

82 トリ小屋というよりは絵本に見るリンカーンの丸木小屋をおもわせる壮大なものになった〔海〕

•6 を思わせる 5-6〔顔・母 金 他 裸〕

83 金属製の応接室を思わせるその当年型のシボレー〔裸〕

•7 を想わせる〔海〕

84 寺院を想わせる大きな屋根

D₇₋₃ 思い出させる 1-2〔毒〕

•1 を・思いださせた

85 夕暮になるとこの医学部の建物や病院の窓々にはうんだ灯がともし、港にはいる満艦飾の船のように見えたものである。それは昔のノブにF市に隣接する博多港の祭のことをいつも思い出させたものだった。

•2 を・思いださせる

86 白い菜みがつき、カサカサに鱗のよったその皮膚の感触は彼におぼはんの腕のことをふと思いださせる。

D₇₋₄ 思い起こさせる 3-3〔縮 田 金〕

•1 を思い起させる〔田〕

87 その眩暈くぼかりの重い香は、彼には最初の接吻の甘美を思い起させるものであった。

•2 を憶い起させる〔縮〕

88 銀子のある瞬間が世にありし日の懐

かしい夫人の感じを憶い起させる

•3 を・思い起させた〔金〕

89 その不快な姿が、今は語り伝えにだけ残っているあの羅切という兇暴な行為を私に思い起させた。

D₇₋₅ 思い浮かべさせる 1-1〔田〕

を・思い浮かべさせた

90 軟かなまだ完成しない羽は…。ただその緑色の筋ばかりが…。爽やかな快活なみどり色で、彼の聯想は白く割れた種子を裂き開いて突き出した豆の双葉の芽をありありと思い浮かべさせた

D₇₋₆ 想像させる 1-1〔母〕

を想像させる

91 湖面を想像させる冷い硝子の発散気

D₇₋₇ 空想させる 1-1〔海〕

を空想させ

92 「壁の少ない、吹きぬぎの建築」は、船の構造を空想させ、

D₇₋₈ 連想させる 5-7〔顔・海・歌・流・ハ〕

•1 を連想させた 2-2〔ハ 海〕

93 徳子は小柄で、多少骨張った感じもないではないが、その代りに肉のむちむち話ったような新鮮な鱈を連想させた。〔ハ〕

•2 を・連想させた〔海〕

94 彼らの姿はたしかに墓場に集まってくる幽霊を信太郎にも連想させた。

•3 を連想させる 3-4〔顔・歌・流〕

95 薬しべを連想させる細い眼〔流〕

D₇₋₉ 髻髷させる 1-1〔明〕

を・髻髷せしめた

96 桐でこしらえた小型の長火鉢が、普通の家庭に見る茶の間の体裁を小規模ながら髻髷せしめた。

D₇₋₁₁ 象徴する 1-1 [顔]

を象徴する

- 97 風の音は、守富をかかえた、これからのながい人生の困難を象徴する。

D_e 1-1D₈₋₁ 見いだす 1-1 [杏]

…に・を見出す

- 98 十三歳よりさ子に同じ年ごろの杏子を見出す

D₉ 2-3D₉₋₁ 思い合わされる 1-1 [蔵]

が思いあわされて

- 99 台所への女中たちの足音だけに、…遊廓ゆうかくの一夜の女郎たちの草履の足音が思いあわされて、

D₉₋₂ 髻鬘とする 1-2 [田₂]

•1 に髻鬘していた

- 100 羽全体が植物の芽生えに髻鬘はうまつしていた。

•2 に髻鬘として

- 101 石油は地の上から三四寸浮いたところに大きな軽い火の塊かたまりをつくって燃え立った。…それは全く何の精神統一もない人の——彼自身のような人の昂奮かうふんに髻鬘として燃えた。

D₁₀ 1-1D₁₀₋₁ 想像される 1-1 [顔]

が想像される

- 102 蜜月旅行の初夜の不安が、自信のない気持が想像される。

D₁₁ 11-18D₁₁₋₁ 思い出す 9-10 [顔₂夜 蔵 母 冬 ハ 金 毒 海]

•1 から…を思い出した [金]

- 103 自分の乳房をじっと見て軽く揺ゆっ

た。私はその肉のたゆたいから、舞鶴湾の夕日を思い出した。

•2 をおもい出さないわけにはいかなかった [海]

- 104 その姿に信太郎は、柵さくの中に追いつめられて行く動物をおもひ出さないわけにはいかなかった。

•3 を思い出した 2-2 [顔 毒]

- 105 黒い水の上に仔犬の死骸やふるいゴム靴が浮いていた。私は勝呂医院の庭や診療室の臭いにおいを思い出した。[毒]

•4 を思い出した 2-2 [夜 冬]

- 106 慶喜公が投げ出したと聞いた時、わたしはあの竹の折れる音の鋭さを思い出した。[夜]

•5 を想い出した [母]

- 107 かの女は一行とゆるゆる日比谷公園の花壇や植込みの間を歩きながら、春と初夏の花が一時に蕾をつけて、冬からはまるで幕がわりのように、とみに長閑な貌様を呈して来る巴里パリの春さきを想い出した。

•6 を思い出しながら [ハ]

- 108 立派な彼の旅行鞆をぶらさげてきて、多分空だと思っていると、そのなかから一回り小さな鞆を出し、またその鞆からもう一つ小さな鞆を順番に開けて出すので、徳子はむかし子供のもので次から次へといくつでも達磨の出てくるオモチャのあったのを思い出しながら

•7 を思い出しました [蔵]

- 109 反古紙はんこしにつつまれた着物の包みが幾層かの柵さくに順序よくならべられている中を通り抜ける時、私はまだ学校を出

214 3. 分類結果

たての勉強ざかりのころ、母校の図書館の図書室に教授の紹介で、はいたった時のことを思い出しました。

・8 を思い出す〔顔〕

110 足袋の白さが妙に官能的だった。耕は壺のマダムを思い出す。

D₁₁₋₂ 思い浮かべる 1-1〔他〕

を思い浮かべてみてもらいたい

111 一本のレコードの溝のことを思い浮かべてみてもらいたい。あんな簡単な仕かけからでも、何十という音色が再現できるのだ。まして人間の心が、対立する二つの音色を同時に鳴らしたからといって、べつだん驚くほどのことはないだろう。

D₁₁₋₃ 想像する 3-4〔金、機 他〕

・1 …は…だと想像する〔他〕

112 ぼくは、座席を疾走する乗物なのだと想像する。

・2 を想像した〔金〕

113 若葉の山腹が西日を受けて、野の只中に金屏風を建てたように見える。それを見ると私は、金閣を想像した。

・3 を想像していた〔金〕

114 雪片はごく薄い錫の箔をうちあてるような音を立てて、私の歯にさわり、さて、温かい口腔の中へ、隈なく雪が散って来て、私の赤い肉のおもてに融け浸み入るのが感じられた。そのとき私は究竟頂上の鳳凰の口を想像していたのだった。あの金色の怪鳥の、なめらかな熱い口を。

・4 を想像すると浮んで来る〔機〕

115 実際私の家の主人はせいぜい五つになった男の子をそのまま四十に持って

来たところを想像すると浮んで来る。

D₁₁₋₄ 連想する 3-3〔母 顔 他〕

・1 連想する〔他〕

116 顎ひげと聞いてまず連想するのは、残念ながら、まずあの駅前の交番の巡査だろう。

・2 を連想して〔母〕

117 思いきって指を出し、鳶の小さい芽の一つに触れると、どういものか、すぐ、むすこのことを連想して、胸にくくと込み上げる感情が、意識された。

・3 を聯想する〔顔〕

118 四人の妻を擁して、田能村清州が永遠のねむりにつく図を想像すると、衿子は何となく笑いたくなくなってしまふ。何匹かの雌を擁したオットセイの雄を聯想する。

D₁₂ 22-84

D₁₂₋₁ 似る 21-75〔顔、永、金、杏、毒、田、冬、夜、海、死、明、神、母、流、白、風、草、縮立、花、ハ〕

・1 と・似ていた〔金〕

119 金閣はいたるところに現われ、しかもそれが現実に見えない点では、この土地における海とよく似ていた。

・2 に似〔金〕

120 その時間の推移は、募ってゆく苦痛に似、

・3 に似た 17-33〔杏、永、毒、明、冬、金、縮田、神、立、母、流、顔、花、ハ、草、死〕

121 馬鹿げた感激の後に来る重い気分に似た煙が、一度にどっと塊ってさもけだるげに昇った。〔田〕

・4 に似て 4-4〔杏、流、顔、草〕

- 122 新しいワーゲンのおしりは昆虫に似て〔流〕
- 5 に似ていた 9-15〔顔、金、毒、夜、田、神、風、冬、白〕
- 123 女は、微かであるが今まで聞き覚えのない肝声いびきをたてていた。それは豚の鳴き声に似ていた。〔白〕
- 6 に似ていた〔田〕
- 124 そんな時の彼の心持ちは、ただ一人で監禁された時には、無心で一途に唐草模様を描き耽るものだという狂気の画家たちによほどよく似ていた。
- 7 に似ていて〔冬〕
- 125 嘉門の顔は巨大な子供の顔に似ていて
- 8 に似ていないものでもない〔海〕
- 126 悪かれたような茶色い眼をみひらきながらトウモロコシ粉のパンを貪り食っている父の顔は、せきこんで餌を喉につまらせたトリが仰向いたときの顔に似ていないものでもない。
- 9 に似ている 8-14〔顔、夜、田、死、母、風、永、金〕
- 127 少女のクリトリスが植物の芽に似ているのを素早く見た。〔死〕
- 10 に似てきた〔海〕
- 128 ごらんよ、お父さんを。このごろは顔までニワトリに似てきたじゃないかね。
- 11 に似て来やがった〔永〕
- 129 道理で、今朝、鏡を見たら、俺の顔、蝗いんこに似て来やがったじゃねえか。
- 12 に似てくる〔海〕
- 130 そういうときの父の眼はだんだんニワトリの眼つきに似てくる
- 13 によく似た〔白〕
- 131 家鴨によく似た屋根裏の娘が荷物をブラさげてうろうろしていた。
- D₁₂₋₃ 似通う 2-3〔金、顔〕
- 1 に似かよい〔金〕
- 132 埃の雲は、諸菩薩を包んでいる金色の雲に似かよい、
- 2 に似通ったもの〔顔〕
- 133 以前とはちがった袴子の美しさを発見していた。それは、はなやかなものではなかった。隠花植物の妖しい美しさに似通ったものである。
- 3 に似かよっていた〔金〕
- 134 金閣が埃に霞む姿も、古い褪色した絵具やすりきれた絵柄に似かよっていた。
- D₁₂₋₄ 通じる 2-2〔顔、他〕
- 1 にかよものがある〔顔〕
- 135 藤原時代の和様建物の印象が、どこか袴子の印象にかよものがある
- 2 に通ずる〔他〕
- 136 よく小説などに出てくる、浮浪者がとかく金持の親類の話をしたがる、あの心理に通ずる
- D₁₂₋₅ 一脈通じる 1-2〔顔₂〕
- 1 と一脈通じた
- 137 商人が客にあいそ笑いをうかべるのと、一脈通じた
- 2 と一脈通じるものがある
- 138 わが子を手ばなす母親の傷心と、一脈通じるものがある
- D₁₂₋₆ 共通する 1-1〔顔〕
- に共通している
- 139 沢きぎょうのさみしい可憐さ、むらさき草のさみしい、清楚な可憐さが、

ある人に共通している。

D₁₂₋₇ 比較される 1-1 [杏]

が…に比較される

140 男が遊びに行つて相手の女がどうい
う器量を持っていても、それをせんさ
く出来ないぎりぎりの気持が、これに
比較される。

D₁₃ 4-5

D₁₃₋₁ 当たる 2-2 [田 流]

にあたる 2-2 [田 流]

141 自分の年齢が中年と老年との接ぎあ
わせ目にあたる [流]

D₁₃₋₃ 相当する 1-1 [樽]

に相当した

142 毎日飲んでいると宿酔に相当した時
期がやって来る。

D₁₃₋₅ よくある 1-2 [母₂]

・1 によくある

143 自我の強い親の監督の下に、いのち
が芽立ち損じたこともによくある、臆
病でチロチロした瞳の動き方をしてい
た。

・2 よく・にある

144 よく、物語にある、仇討ちの女が助
太刀の男に感謝のころから、恋愛を
惹起して行く。そんな気持だった。

D₁₅ 1-1

D₁₅₋₁ 違う 1-1 [風]

とは違う

145 「亭主の教育次第で理想的な女房に
なる女なんだ」「古風な話だね」「ピ
カソ展やマチス展とは違うさ。

D₁₆ 4-5

D₁₆₋₁ 成す 4-5 [風₂ 溼 ハ 草]

・1 を・となし [溼]

146 銀座の表通りに燈火を輝かすカフェ
ーを城郭となし、

・2 をなした [風]

147 陽子の胸のふくらみが、強く、線を
なした。

・3 を成した [ハ]

148 原稿が、山を成した

・4 をなして [草]

149 頭上を覆つた枝々の間から、午後の
太陽の光線が奇妙な濃淡の斑模様をな
して流れ込んだ。

・5 をなす [風]

150 落下する花火の殻の黒々と点をなす
のは、ようやく暮れはじめたのを語っ
ていた。

D₁₇ 1-1

D₁₇₋₁ ならう 1-1 [他]

にならう

151 蛇嫌いの治療法にならうて、化粧の
心理に、意識のすべてを集中してみる
ことにする。

D₁₈ 1-1

D₁₈₋₁ 例にする 1-1 [女]

例にして

152 たださえ白かった皮膚が濡子のよう
な光を持ってぬめぬめと滑っこ絹漉
し豆腐のように今にも崩れそうなのを
道雅は白豚だとか象鳴だとか醜いもの
ばかり例にして美夜を怒らせていた。

DD 1-2

D₁₂D₅ 1-1

D₁₂₋₃D₅₋₉ 似通う・見える 1-1 [金]

に似通って見えて

153 音楽はいかに生に似通って見えて

も**塵物の架空の生**でしかなく

D₁₃D₅ 1-1

D₁₃₋₄D₅₋₉ 類する・見える 1-1 [金]

に類して見えて

154 俺には、世間で云われている不安な
どというものが、兎戯に類して見え
て仕方なかった。

DFD 1-1

D₁₁F₃D₁₃ 1-1

D₁₁₋₃F₃₋₄D₁₃₋₁ 想像する・ほぼ・当たる 1
-1 [他]

を想像してもらえばほぼ当たっているかもし
れない

155 しびれるような苦悩の輪が、足元か
ら一定の間隔をおいて、次々に這い上
り、頭の上へ抜けて行く。むかでの足
の運動を想像してもらえば、ほぼ当っ
ているかもしれない。

DJ 16-19

D₁J₁ 4-4

D₁₋₂J₁₋₁ 思う・ほど 3-3 [縮 女 永]

かと思うほど 3-3 [縮 女 永]

156 一足一足、往来に下駄の歯が吸いつ
くかと思うほど足が重く [女]

D₁₋₇J₁₋₁ 紛う・ほど 1-1 [顔]

とまごうほど

157 折江と耕の場合、ほんものとまがう
ほどにしみじみとした母子の情感が感
じられる

D₂J₁ 1-1

D₂₋₁J₁₋₁ 比する・ほど 1-1 [夜]

に比するほど

158 楠公を**権助に比する**ほどの偶像破壊

者があらわれるに至った

D₃J₁ 3-3

D₃₋₁J₁₋₁ 言う・ほど 2-2 [樽 女]

・1 と言いたいほど [女]

159 年は皆十四、五であろうか。中に二
人は梅、桜と言いたいほど美しかった
が

・2 と云いたくなったほど [樽]

160 実際あんな単純な冷覚や触覚や嗅覚
が、ずっと昔からこればかり探してい
たのだと云いたくなったほど私にしっ
くりしたなんて私は不思議に思える

D₃₋₄J₁₋₁ 形容する・ほど 1-1 [顔]

と形容したいほど

161 形骸をとどめずと形容したいほどの
みごとな食べ方であった。

D₅J₁ 9-9

D₅₋₄J₁₋₁ 思われる・ほど 4-4 [母 冬 海
遠]

かと思われるほど

162 ある街道筋の裏に斑々する孟宗藪の
小径を潜ると、かの女の服に翠色が
滴り染むかと思われるほど涼しい陰が
都会近くにあることをかの女に知らし
たい。[母]

D₅₋₄J₁₋₂ 思われる・くらい 1-1 [明]

と思われるくらい

163 象が乗っても音がしまいと思われ
るくらい巖文に出来ていた。

D₅₋₇J₁₋₁ 疑われる・ほど 2-2 [藏 杏]

・1 ではないかと疑われるほど [杏]

164 突然、この女は神様ではないかと疑
われスほど、はっきりした声で

・2 と疑われるほど [藏]

165 急にどこかへ出かけるのか、と疑

れるほど、ふと思立って、帯だけを
ちょっと巻きかえてみたり、あるいは
羽織と着物の組み合わせを変えてみた
り

D₅₋₇J₁₋₂ 疑われる・くらい 1-1〔流〕

と疑われるくらい

166 おちついた奥様というつくり、あが
って来る裾のあたりが水気を含んでい
るんじゃないかと疑われるくらい、か
らだじゅうにしとっと軽くないけはい
がある。

D₅₋₉J₁₋₁ 見える・ほど 1-1〔夜〕

かに見えるほど

167 祭の日なぞには別の人かと見えるほ
ど快活な男を發揮した。

D₇J₁ 1-1

D₇₋₂J₁₋₁ 思わせる・ほど 1-1〔他〕

を思わせるほど

168 眉間や、額や、頬や、下顎などの、
骨の継ぎ目が解剖図を思わせるほど正
確さで浮彫りにされており

D₁₂J₁ 1-1

D₁₂₋₁J₁₋₂ 似る・くらい 1-1〔白〕

やや似たものがあるとすれば・ぐらいのも
のだろう

169 やや似たものがあるとすれば、一寸
五分ほどの芋虫が五尺の長さにふくれ
あがってもがいている動きぐらいのも
のだろう。

DJKD 1-1

D₁J₁K₉D₅ 1-1

D₁₋₂J₁₋₁K₉₋₁D₅₋₉ 思う・ほど・よう・見
える 1-1〔お〕

かと思うほど・ように見えました

170 汗かいた髪の毛の、べったりと頬に
かかったその顔の、これがあのおはん
かと思うほど、きらめくように見えま
したも、思えば不思議でござります。

DJM 1-1

D₃J₁M₁ 1-1

D₃₋₁J₁₋₂M₁₋₂ 言う・くらい・もの 1-1
〔明〕

としいたいくらいのものだ

171 今度だって荷物なんか何にも持って
来やしませんや、この合切袋とこの大
将のあの鞆を差し引くと、残るのは命
ばかりとしいたいくらいのものだ。

DK 8-17

D₁K₉ 5-6

D₁₋₂K₉₋₁ 思う・よう 1-2〔縮〕

かと思うような

172 父はルンペンかと思うような身装

D₁₋₃K₉₋₁ 見る・よう 3-3〔高流海〕

・1 を見るよう〔高〕

173 足を見ながら情けなそうな顔をす
る、蟋蟀がもがれた脚を口にくわえて
泣くのを見るよう、目もあてられたも
のではない。

・2 を見るようだった〔流〕

174 顔は、—秋の野山を見るようだっ
た。青いところと赤いところと、ぶち
ぶちむらむらになっている。

・3 を見るような〔海〕

175 自分が南方から持ちかえった品物だ
けは、チガイ棚の上にきちんと屯營の
整頓棚を見るような奇妙な丹念さで片
づけている。

D₁₋₁₂K₉₋₁ たとえる・よう 1-1 [夜]

にも譬えてみたいような

176 こんなに深く籠り暮して来た窓の下
にいて、長い鎖国にも譬えてみたいよ
うなその境涯

D₃K₁₁ 1-1

D₃₋₄K₁₁₋₄ 形容する・と言っていていい 1-1
[顔]

強いて・を形容すれば・といってもよかつた

177 強いてこの瞬間の田能村清州の表情
を形容すれば、ながい間味方だと思
いでいたものの口から、思いがけな
い敵意をしめされて、おどろいている
といってもよかつた。

D₄K₁₀ 1-1

D₄₋₁K₁₀₋₂ なる・かねない 1-1 [木]

になりかねない

178 かすかに船縁を叩く水音がなかつた
なら、海は二人のため、磨かれたフロ
アになりかねない。

D₅K₉ 1-1

D₅₋₁K₉₋₁ 感じられる・よう 1-1 [海]

感じられるように

179 そばに立ったこの五十恰好の小肥り
した女に、つれないメスが感じられる
ように……。

D₇K₉ 2-7

D₇₋₁K₉₋₁ 思わせる・よう 2-5 [顔、夜₂]

・1 をおもわせるような [顔]

180 寺院の庫裡をおもわせるような雰
囲気

・2 を思わせるような 2-3 [顔、夜]

181 何となく雲脚の早さを思わせるよ
うな諸大名諸公役の往来 [夜]

・3 を想わせるような [夜]

182 剣を抜いて敵王の衣を刺し貫いたと
いう唐土の予譲を想わせるような烈し
い水戸人の気性

D₇₋₃K₉₋₁ 思い出させる・よう 1-1 [夜]

を思いださせるような

183 半蔵が郷里の馬籠の家に残して来た
お糸を思い出させるような年頃の小娘
たち

D₇₋₈K₉₋₁ 連想させる・よう 1-1 [夜]

を連想させるような

184 代官の生活を連想させるような幅を
その部屋の床の間に掛けて見せた。

D₁₃K₉ 1-1

D₁₃₋₄K₉₋₁ 類する・よう 1-1 [実]

に類した様な

185 窮地に陥ちて、相手に負けて、口惜
しさが胸に詰まって来たと言う風であ
った。女の癪と云ふのはよく知らな
いが、それに類した様な事かと思はれ
た。

DKD 4-4

D₁K₉D₆ 1-1

D₁₋₈K₉₋₁D₆₋₁ 見る・よう・気がする 1-1

[神]

を・見たような気がした

186 定吉はそういう間に子供が成長して
行くという事実が恐ろしくなつて来
た。彼は何かわけの解らない空洞を眼
の前に見たような気がした。

D₃K₉D₆ 1-1

D₃₋₁K₉₋₁D₆₋₁ 言う・よう・気がする 1-1

[田]

と言いたいような気がする

220 3. 分類結果

187 幅六尺ほどのこの渠は、事実は田へ水を引くための灌漑^{かんがい}であつたけれども、遠い山間から来た川上の水をまっすぐ引いたものだけに、その美しさは溪^{たにがわ}と言いたいような気がする。

D₅K₃D₆ 1-1

D₅₋₉K₉₋₁D₆₋₁ 見える・よう・気がする 1-1 [金]

みえるような気がした

188 月は、風もないのに、千々に碎けてみえるような気がした。

D₁₂K₉D₅ 1-1

D₁₂₋₁K₉₋₁D₅₋₃ 似る・よう・思える 1-1 [死]

と似ているように思えてくる

189 私はお腹の皮膚の厚みの下にいる、軟骨と粘液質の肉のかたまり、肉の紐につながって肥っている小さいかたまりが、この水槽の人たちと似ているように思えてくるのよ。

DKJD 1-1

D₁K₉J₃D₆ 1-1

D₁₋₈K₉₋₁J₃₋₄D₆₋₁ 見る・よう・さえ・気がする 1-1 [遠]

を見るような気さえしました

190 軽くなってお尻をひょこひょこふりあげながら、船が着くの遅れじと全速力で走っているバスの姿が時々遠くの間かげに見えろと、私たち従業員のホテルサービス精神の、チャチで滑稽でぶざまな恰好の諷刺画を見るような気さえしました。

DKM 2-2

D₁K₉M₁ 1-1

D₁₋₈K₉₋₁M₁₋₂ 見る・よう・もの 1-1 [冬]
をみるようなもの

191 まったくの偶然で、その瞬間まで存在するとも知らなかった人々が構成している家の中に投げ込まれたのである。この関係を、私は、生物の断面図をみるようなものだと思った。

D₁₂K₉M₃ 1-1

D₁₂₋₁K₉₋₁M₃₋₂ 似る・よう・感じ 1-1 [永]

似ているような感じ

192 そのねずみの眼がなんとなく今の自分の心とひどく似ているような感じがしている。

DRM 1-1

D₁₁R₄M₆ 1-1

D₁₁₋₂R₄₋₁M₆₋₂ 思い浮かべる・一種の・相似 1-1 [草]

を思い浮かべれば、そこに一種の相似が汲み取られる

193 もし若年の Anna de Noailles 伯爵夫人の肖像を思い浮かべれば、そこに一種の相似が汲み取られるだろう。

F 30-81

F₁ 15-21

F₁₋₁ まるで 13-18 [夜₁ 明₂; 他₂ 高田 蔵 機 母 流 ま 顔 風 白]

194 よく見るとそれは私服でなくて税務署関係の人だとわかったが、あまり大勢でまるで捕物である。[流]

F₁₋₂ さながら 2-2 [夜 溼]

195 水に流れる提灯の影がさながら火の

都島であった〔夜〕

F₁₋₄ ちょうど 1-1〔く〕

196 ちょうどで英国の写真で見る鶯つたのからんだこじんまりした洋館

F₂ 11-17

F₂₋₁ いわば 9-14〔く；草；田；ま；顔；碑；永；金；他〕

・1 いわば 9-13〔く；草；田；ま；顔；碑；永；金；他〕

197 明子の執着は悲しく煽あおられる。いわば空まわりをする車輪であった。〔く〕

・2 言わば〔田〕

198 樹と樹との枝と葉とが形作るアアチの曲線は、生垣の頭のまっすぐな直線で下から受け支えられていた。言わばそれらが緑の枠をつくっていた。

F₂₋₃ 言ってみれば 2-2〔夜；他〕

・1 言ってみれば〔他〕

199 どことなく秘密めかした、無邪気な悪のよそおいをこらしている。言ってみれば瓶詰めのジュースよりも三角の袋に入った着色砂糖水のほうを好む、あの子供の心理に臆面もなくってらっているのだ。

・2 言ってみれば〔夜〕

200 言ってみれば、ここは大きな関所だ。

F₂₋₁₀ たとえて言うなら 1-1〔へ〕

201 僕は芝居の黒ん坊の役割を帯び、たまに姿を現わさぬとは限らない。だが、要するに黒ん坊は黒ん坊で、たとえて言うなら、僕は徳子の背後しやうから床とこ几この類をあてがったり、舞台上で着付けを直す際に、ヒラリと揚幕のうしろから忍び出て、彼女の襟えりや裾すそを弄り、またそそくさと奥へ引き退るのが精一杯

だ。

F₃ 2-2

F₃₋₃ ほとんど 2-2〔歌；金〕

202 それは内蔵太や安吉にとってほとんど物語でさえあった。〔歌〕

F₄ 6-8

F₄₋₁ まさに 1-1〔他〕

203 まさに一人二役の三角関係だ。

F₄₋₂ まったく 2-2〔女；顔〕

・1 まったく〔顔〕

204 まったくひとごとの口吻である。

・2 全く〔女〕

205 全く西太后だって誰かが言ってるけど、いやな婆ばあさんですね。

F₄₋₃ 実に 2-3〔夜；田〕

206 彼の故郷のクライマックスの多い戯曲的な風景にくらべて、この丘つづき、空と、雑木原と、田と、雲雀つばきとの村は、実に小さな散文詩であった。〔田〕

F₄₋₄ ほんとうに 1-2〔永；2〕

ほんとに

207 ほんとうになんというけだもの！ほんとにけだものですが、自分で死ぬるわけはございませんわ。

F₇ 5-6

F₇₋₁ つまり 4-4〔溼；冬；他；棘〕

・1 つまり 3-3〔溼；冬；他〕

208 正当な妻女の偽善的虚栄心、公明なる社会の詐欺的活動に対する義憤は、彼をして最初から不正暗黒として知られた他の一方に馳はせ赴おもむかした唯一の力であった。つまり彼は真白だと称する壁の上に汚いさまざまな汚点を見出すよりも、投げ捨てられた襤褸らんろの片に

222 3. 分類結果

も美しい縫取りの残りを発見して喜ぶ
のだ。〔溷〕

•2 つまりは〔棘〕

209 舌にのこるにがさは、つまりは自分
の利己の残滓だけ

D₇₋₃ 要するに 2-2〔冬 ハ〕

210 こんどは南から日本人が、昔から何
度となく北に向ってここを廊下にする。
ロシア人まで廊下にしようとする。
朝鮮の歴史は、要するにその廊下
さ、通路さ。〔冬〕

F₁₃ 1-1

F₁₃₋₁ 葉にしたくも 1-1〔女〕

211 年増盛りの女に見られる熟れた肉感
など葉にしたくもなく、

F₁₅ 1-1

F₁₅₋₁ から見れば 1-1〔夜〕

212 吉左衛門から見れば、これらの小前
のものはみんな自分の子供だった。

F₁₆ 4-4

F₁₆₋₂ で言えば 3-3〔明 歌 ハ〕

•1 でいえば 2-2〔歌 ハ〕

213 「わがそでの記」はソプラノだ。しら
べ高い女のこえだ。そしてまず楽器で
いえばヴァイオリンだ。

•2 で言えば〔明〕

214 相撲で言えば、彼女はいつでも津田
の声を受けて立った。

F₁₆₋₃ にたとえると 1-1〔高〕

215 その時は、はや、夜がものに響える
と谷の底じゃ、

F₁₇ 4-4

F₁₇₋₁ がよく…ように 1-1〔金〕

がよくそうするように

216 鶴川は、人間の感情を、昆虫の標本

を作ることの好きな少年がよくそうす
るように、自分の部屋の小綺麗こけいな小抽
斗こぶにきちんと分類しておいて、時々そ
れをとりだして実地にためしてみると
謂った趣味があるらしかった。

F₁₇₋₂ に見るように 1-1〔母〕

に見るような

217 高い天井は、他の室と同じ英国貴族
の邸宅に見るような花紋の浮彫りがし
てあり、

F₁₇₋₃ にあるように 1-1〔縮〕

にあるような

218 さあね、やはり芝居にあるような義
理人情に追いつめられたんじゃない
か。

F₁₇₋₄ に時々あるように 1-1〔蔵〕

219 その徽章が活動写真にとどきある
ように、音も立てないでぱっと左右二
つに割れて、その左側の方がすっと消
えてしまいました。

F₁₈ 4-7

F₁₈₋₁ ということがある 1-1〔冬〕

っていうことがある

220 シーザーのものはシーザーに、って
いうことがある。僕のは僕に、

F₁₈₋₂ と言うでしょう 1-1〔顔〕

というでしょう

221 顔は心を鏡にうつしたものという
でしょう

F₁₈₋₃ と言うじゃありませんか 1-1〔夜〕

とも言うじゃありませんか

222 川育ちは川で果てるとも言うじゃあ
りませんか。今度はあの仲間が自分に
復讐を受けるようなことになりました
ね。

F₁₈₋₄ ということがあるでしょう 1-1〔顔〕

223 将を射んとすれば、まず馬を射よと
いうことがあるでしょう。射るんじゃ
なくて、私の場合は、敵の事情に通じ
ることが大切なの

F₁₈₋₅ という諺があるでしょう 1-1〔顔〕

ってことわざがあるでしょう

224 「ぼくが軽井沢にいかなければ、あ
なたの心をわずらわすこともないわけ
でしょう」「季下に冠を正さずってこ
とわざがあるでしょう。そうして下さ
ると私もほっとするわ

F₁₈₋₇ ということもあるわけだし 1-1〔他〕

225 あんな知能のおくれた小娘に、そん
な複雑な駆け引きができるわけがない
じゃないか……と視野の狭さのせい
にしてしまうのは、たやすいことだ
が、しかし、視野の狭い犬のほう
が、嗅覚だけはかえって鋭敏だとい
うこともあるわけだし

F₁₈₋₈ のたとえ通り 1-1〔他〕

226 毒をもって毒を制するの譬えどお
り、二つの毒が相殺し合って、ぼくは
束の間の平穏を手にすることができた
のだ。

F₁₉ 9-10

F₁₉₋₁ ではあるまいし 7-7〔何明春杏
流他太〕

・1 じゃあるまいし 6-6〔何明春杏
流他太〕

227 猫の蕎麦屋じゃあるまいし、塀を伝
って配達なんてそんなことできるもん
か。〔流〕

・2 じゃあるめえし〔春〕

228 「ビックリして眼をまわしたか？」

三浦はすぐ茶化して「『夏小袖』の灰
吹やじゃあるめえし

F₁₉₋₂ ではないが 2-3〔お2母〕

・1 じゃありませんが〔母〕

229 マアテルリンクじゃありませんが、
人生の幸福はやっぱり翼のある青い鳥
じゃないでしょうか。

・2 ではござりませぬが〔お〕

230 芝居の伊左衛門ではござりませぬが
今宵はその掛け行灯の暗い灯が、なに
やらもの言うてるように思われまして
なア。

・3 ではござりませぬど〔お〕

231 浄瑠璃の玉手御前ではござりませぬ
ど、こななとき、迷うて会いにきはせ
ぬかと、雨戸のそと見ることもたびた
びでござります。

FD 20-35

F₁D₁ 1-1

F₁₋₁D₁₋₅ まるで・受け取る 1-1〔明〕

まるで・としか受け取れなかった

232 白縮緬の襟のかかった襦袢の上へ薩
摩紵を着て、茶の干筋の袴に透綾の羽
織をはおったそのこしらえは、まるで
傘屋の主人が町内の葬式の供に立った
婦りがけで、強飯の折りでも襖に入れ
ているとしか受け取れなかった。

F₁D₅ 2-2

F₁₋₁D₅₋₉ まるで・見える 2-2〔縮草〕

・1 まるで・としか見えなかった〔草〕

233 まるで病気で何もでもないのに、間
違ってサナトリウムの一室へ紛れ込ん
だとしか見えなかった。

・2 まるで・に見え〔縮〕

234 彼女は鬢を少し引詰め加減の島田に
結い、小浜の黒の出の着つけで、湯島
の家で見た時の、世帯に燻った彼女と
はまるで別の女に見え、常子も見惚れ
ていた。

F₁D₇ 3-3

F₁₋₁D₇₋₈ まるで・連想させる 2-2 [明
顔]

まるで・を連想させる

235 清州は音をさせて、レタスやキャベ
ツやセロリをたべた。まるで鬼の食欲
を聯想させる。[顔]

F₁₋₂D₇₋₂ さながら・思わせる 1-1 [他]

さながら・を思わせる

236 その弱腰は、かえって一部の者の好
奇心を刺激して、密造工場と闇売りの
組織をはびこらせる結果になり、さな
がらアメリカの禁酒法時代を思わせる
混乱の季節がやってくる。

F₁D₁₂ 6-6

F₁₋₁D₁₂₋₁ まるで・似る 1-1 [永]

まるで・に似ている

237 それはまるで卒業証書を親に渡す無
邪気な子供の眼に似ている。

F₁₋₃D₁₂₋₁ あたかも・似る 3-3 [田 杏
山]

•1 あたかも・に似た [山]

238 ある夜、一びきの小蝦が岩屋のなか
へまぎれ込んだ。この小動物は今や産
卵期のまっただなかにあるらしく、透
明な腹部一ぱいにあたかも雀の稗草の
種に似た卵を抱えて、岩壁にすがりつ
いた。

•2 あたかも・に似て [田]

239 それはあたかもあの主人に信頼しき

っている無智な犬の澄みきった眼でじ
っと見上げられた時の気持に似て、も
っともっと激しかった。

•3 あたかも・に似ていた [杏]

240 書物への愛情を失っている人間のあ
る時期は、あたかも放浪時代に何冊か
の本を売る素気なさに似ていた。

F₁₋₃D₁₂₋₂ あたかも・相似る 1-1 [瀬]

あたかも・と相似ている

241 紅茶珈琲の本来の特性は暖かさにあ
るや明らかである。今これを邦俗に従
って冷却するのは本来の特性を破損す
るもので、それはあたかも外国の小説
演劇を邦語に訳す時土地の人物の名を
邦化するものと相似ている。

F₁₋₄D₁₂₋₁ ちょうど・似る 1-1 [蔵]

ちょうど・に似た

242 私の愛する着物どもがかくまで優待
されているかと思って、ちょうど親た
ちが、養子にやった息子、嫁にやった娘
がそれぞれ行く先で豊かに暮らしてい
るのを見た時に覚えるにちがいない。
それに似た満足は私は感じました。

F₂D₁ 1-1

F₂₋₇D₁₋₂ たとえば・思う 1-1 [山]

たとえば・と思った

243 彼は彼自身のことをたとえばブリキ
の切屑であると思ったのである。

F₂D₃ 2-2

F₂₋₁D₃₋₄ いわば・形容する 1-1 [顔]

いわば・と形容するよりほかはない

244 耕にとってこの顔は、いわば宿命的
な顔と形容するよりほかはない。

F₂₋₂D₃₋₁ 言えば・言う 1-1 [永]

云えば・というべきもの

245 神は、云えば人間に対する徹底的な無関心というべきものなんだ。

F₂D₁₂ 2-2

F₂₋₆D₁₂₋₄ 例をとれば・通じる 1-1〔他〕
例をとれば・に通ずる

246 もっと卑近な例をとれば、まぶしくもないのにサングラスをかけたがる、あの伊達者の心理に通ずるものだ。

F₂₋₁₁D₁₂₋₁ たとえに言うが・似る 1-1〔高〕
譬えにもよくいうが・に似ている

247 譬えにもよくいうが松の木は虻に似ているで。

F₃D₇ 1-1

F₃₋₃D₇₋₂ ほとんど・思わせる 1-1〔金〕
ほとんど・を思させた

248 その姿勢は、矜りも威信も失くして、卑しさがほとんど獣の寝姿を思させた。

F₃D₁₂ 2-3

F₃₋₃D₁₂₋₁ ほとんど・似る 2-3〔夜、毒〕

・1 ほとんど・に似た〔毒〕

249 あの柔らかな銀色に光った腹部に注射針をさしこむ快感をぼくはほとんど情欲に似た気持で思いうかべていた。

・2 ほとんど・に似ていて 1-2〔夜₂〕

250 水戸の党派争いはほとんど宗教戦争に似ていて、成敗利害の外にあるものだ

F₄D₅ 2-2

F₄₋₄D₅₋₇ ほんとうに・疑われる 1-1〔金〕
本当に・かと疑われた

251 若い美しい女は端然と坐っていて、その白い横顔は浮彫され、本当に生きている女かと疑われた。

F₄₋₇D₅₋₉ どう見ても・見える 1-1〔流〕

どう見ても・かに見える

252 染物屋だという。節羽二重の無地の羽織に袖の着流し、角帯白足袋、——風呂敷包みがなければどう見ても三味線を弾くかかに見える。

F₈D₅ 1-1

F₈₋₃D₅₋₃ なにやら・思える 1-1〔お〕
なにやら・かと思えた

253 「おはん、おはん」と喚いてるおのれの声の、なにやら他人の声かと思えたのでござります。

F₈D₇ 3-3

F₈₋₁D₇₋₂ なにか・思わせる 2-2〔顔 太〕

・1 何か・を思させた〔顔〕

254 みごとな食べ方であった。それはもはや嗜好の問題ではなく、何か名人芸を思させた。

・2 何か・を想わせる〔太〕

255 そうした風景は、清潔でしんと沈んで、乾ききってはいながら何か血腥い屠殺場を想わせる。

F₈₋₈D₇₋₂ どことなく・思わせる 1-1〔裸〕

どことなく・を思わせる

256 彼は無口で内気で神経質そうな少年で、夫人とぼくが話しているあいだじゅう身じろぎもせず背を正して椅子にかけていた。その端正さにはどことなく紳士を思わせるおとなびたものさであった。

F₈D₁₂ 3-4

F₈₋₅D₁₂₋₁ どこか・似る 2-3〔田、杏〕

・1 どこか・に似た〔田〕

257 それはどこか竹に似た形と性質とを持った強そうな草であった。

・2 どこか・に似ていた〔田〕

258 その丘はどこか女の脇腹の感じに似ていた。

・3 どこか・に似ていて〔杏〕

259 奇怪なふくろうの鳴く声は、毎晩きこえた。ふつうの声でなく、どこか酔っぱらいの声に似ていて、うろう、と鳴くのである。

F₈₋₈D₁₂₋₁ どことなく・似る 1-1〔毒〕

どことなく・に似ている

260 この瘦せた米人の顔にも動作にもどことなくクーパーに似ているところがあった。

F₁₄D₅ 1-1

F₁₄₋₁D₅₋₁ を見ると・感じられる 1-1〔杏〕

…を見ていると・…が感じられた

261 杏子の顔を見ていると、乾いた球の音が感じられた。

F₁₄D₁₁ 1-1

F₁₄₋₂D₁₁₋₁ を見たら・思い出す 1-1〔毒〕

を見てたら・を思いだした

262 あの人形のうすら蠍を見てたらエジプト砂漠のスフィンクスを思い出したのさ

F₁₆D₁₃ 1-1

F₁₆₋₁D₁₃₋₅ なら・よくある 1-1〔海〕

なら・によくある

263 五分刈りにした半白の頭髮や、削いだように肉の落ちた頬に、頑固で神経質そうな性格がうかがわれる。軍隊なら内務係准尉によくある顔だ。

F₁₈D₁₃ 1-1

F₁₈₋₆D₁₃₋₂ …という…があるが・当てはまる 1-1〔顔〕

…という…があるものだがこの場合…にそれがあてはまる

264 二番目の妻が^{あかけ}一番目の妻には嫉妬をするが、本妻は敵にまわさないというおかしな感情があるものだが、この場合、衿子にそれがあてはまるのも、おかしい。

FDJ 2-2

F₁D₁J₁ 1-1

F₁₋₁D₁₋₅J₁₋₂ まるで・受け取る・くらい 1-1〔明〕

まるで・としか受け取れないくらい

265 中に述べ立ててある事柄に至ると、

まるで別世界の出来事としか受け取れないくらい、彼の位置及び境遇とはかけ離れたものであった。

F₁D₅J₁ 1-1

F₁₋₁D₅₋₄J₁₋₁ まるで・思われる・ほど 1-1〔海〕

まるで・かと思われるほど

266 しかし先頭に立って歩いて行く医者と自分との距離は、まるで医者がワザとそういう歩き方をするのかと思われるほど、おそろしく長く延びたり、またたちまち軀をぶっつけそうになるほど縮んだりするのだ。

FDJD 1-1

F₃D₁J₂D₃ 1-1

F₃₋₁D₁₋₁₂J₂₋₁D₃₋₁ 仮に・たとえる・でも・言う 1-1〔溼〕

かりに・譬えて見たら・とでも言うべき

267 かりにこれを北里に譬えて見たら、京町一丁目も西河岸に近いはずれとも言うべきものであろう。

FDJSK 1-1

F₁D₁J₂S₉K₉ 1-1F₁₋₁D₁₋₁₆J₂₋₁S₉₋₂K₉₋₁ まるで・する・でも
・…という・よう 1-1〔他〕

まるで・にして・とでもいうように

268 彼女はスカートの下で、二つの^{ひざ}膝を、
まるで一本の棒にしてしまおうとでも
いうように、強くこすり合わせつづけていた。

FDK 1-1

F₁D₁K₉ 1-1F₁₋₁D₁₋₈K₉₋₁ まるで・見る・よう 1-1〔海〕

まるで・を見るようだ

269 まるでそれは機械が物を処理して行く
正確さと、ある種の家畜が自己の職務を遂行している忠実さとを見るよう
だ。

FDKD 1-1

F₁D₁₂K₉D₆ 1-1F₁₋₃D₁₂₋₁K₉₋₁D₆₋₂ あたかも・似る・よう・
心持がする 1-1〔溼〕

あたかも・に・似ていたような心持がした

270 わたくしは翁の不遇なる生涯を思い返して、それはあたかも、待っていた赤電車を眼前に逸しながら、狼狽の色を示さなかった態度によく似ていたような心持がした。

FDKKM 1-1

F₃D₃K₇K₉M₁ 1-1F₃₋₇D₃₋₁K₇₋₁K₉₋₁M₁₋₃ むしろ・言う・ふ
さわしい・よう・代物 1-1〔他〕むしろ・と言ったほうがふさわしいような

代物

271 描いては消し、消しては描き、時間も順序も無視して勝手放題こねまわした、黒板の落書きのような妄想に…というよりは、むしろ公衆便所の落書きと言ったほうが、ふさわしいような代物に……まがりなりにも文章らしい脈絡を与えたりしたらかえっておかしなものになってしまうだろう。

FF 1-1

F₁₀F₁ 1-1F₁₀₋₃F₁₋₁ それじゃ・まるで 1-1〔草〕272 それじゃまるで夢よ。

FFJK 2-2

F₁F₁J₂K₉ 1-1F₁₋₁F₁₋₁J₂₋₁K₉₋₁ まるで・まるで・でも・
よう 1-1〔永〕

まるで・まるで・でもあるかのように

273 まるでおかねのところへ帰るとい
ことが、まるで彼自身へ帰ることも
あるかのように。F₁₀F₁J₃K₉ 1-1F₁₀₋₁F₁₋₁J₃₋₁K₉₋₁ これでは・まるで・も・
同然 1-1〔他〕274 せっせと報告書をしたためて、自分からそのアリバイ崩しにせいを出していたというのだから、世話はない。これではまるで、陰茎がないくせに観念的に性欲だけが旺盛な、薄汚い不能者も同然ではないか

FFK 3-3

F₁F₈K₉ 1-1

228 3. 分類結果

F₁₋₁F₉₋₁K₉₋₁ まるで・なにか・よう 1-1
〔永〕

まるで何か・ようだった

275 一斉に鳴り始めたそれらの無数の音
は、まるで何かの歌声のようだった。

F₁₀F₁K₉ 1-1

F₁₀₋₄F₁₋₁K₉₋₃ あれじゃ・まるで・みたい
1-1〔流〕

あれじゃまるで・みたいに

276 あれじゃまるで電気じかけみたいに
踊らされちまう。いっそ操り人形のほ
うがよくはない？

F₁₀F₁K₁₁ 1-1

F₁₀₋₃F₁₋₁K₁₁₋₃ それでは・まるで・ではな
いか 1-1〔顔〕

277 それではまるで仇敵ではないか

FFKD 1-1

F₄F₁K₉D₃ 1-1

F₄₋₂F₁₋₁K₉₋₁D₃₋₉ まったく・まるで・よう
・見える 1-1〔永〕

全くまるで・ように見えるではないか

278 全くまるで得態の知れない何かがこ
の彼らをおびやかしているように見え
るではないか。

FFKM 1-1

F₁₀F₁K₉M₁ 1-1

F₁₀₋₁F₁₋₁K₉₋₁M₁₋₂ これでは・まるで・よ
う・もの 1-1〔他〕

これではまるで・ようなもの

279 一週間ぶりにぼくを迎えたおまえ
は、まるっきりやましさの影さえ見せ
ず、動作や表情の隅々にまで、ちゃん
と一週間ぶりの微笑をたたえ、その屈

託のなさには、ぼくもしばらく呆然と
するしかなかった。これではまるで、
一週間前のおまえを、そのままそっく
り冷凍输送机に乗せて搬んできたよう
なものである。

FJ 9-14

F₁J₁ 4-8

F₁₋₁J₁₋₁ まるで・ほど 1-3〔他₃〕

280 ぼくが道々用意してきた、質問——
あるいは会話のきっかけ——など、ま
るで氷山にマッチの火を落したほどの
ものでしかなかったのである。

F₁₋₁J₁₋₂ まるで・くらい 1-1〔永〕

281 おそらく銀次郎は、この世の中へ火
をつけたつもりだったのかも知れな
い。しかしその跡は、まるで少しばか
り大きな焚火をしたくらいの跡に過ぎ
ないのである。

F₁₋₁J₁₋₃ まるで・ばかり 1-1〔顔〕

まるで・んばかり

282 まるでこの世界を、自分のものとい
わんばかりだね

F₁₋₃J₁₋₁ あたかも・ほど 1-1〔田〕

283 それのある部分は葉を生かすことが
出来なくなって、あたかも城壁の覗き
窓ほどの穴がぼっかりとあいていると
ころもあった。

F₁₋₄J₁₋₁ ちょうど・ほど 1-1〔田〕

284 試みにその一部分をとって根引にし
ようとすると、その房々した無数の細
い根は黒い砂まじりの土を、ちょうど
人間が手でつかみ上げるほどずつ持ち
上げて来る。

F₁₋₅J₁₋₃ いかにも・ばかり 1-1〔顔〕

いかにも・んばかり

285 この足も四十歳をこえと、扁平になり、いかにも四十年間体重をささえてきたといわんばかりに足の裏も固くなってしまふのだ。

F₁J₂ 1-1

F₁₋₁J₂₋₁ まるで・でも 1-1〔母〕

286 まるで病人の気保養させるつもりででもあるらしく、機嫌を取ってまで連れ出す。

F₃J₁ 2-2

F₃₋₃J₁₋₂ ほとんど・くらい 2-2〔立草〕

287 ほとんど悲しいくらいの幸福な感じ……目に鮮かに浮んで来た。〔立〕

F₄J₁ 1-1

F₄₋₆J₁₋₁ それこそ・ほど 1-1〔流〕

288 女将は蔦次と同じように意見を云わないけれど、ちょっぴり、——それこそお汁粉について来る山椒ほどちょっぴり

F₄J₅ 1-1

F₄₋₂J₅₋₁ まったく・というものは 1-1〔顔〕

まったく・って

289 まったく、女って化物だね

F₈J₁ 1-1

F₈₋₄J₁₋₁ なんだか・ほど 1-1〔無〕

290 何だか不審な手にイジラれたほどの感情が、生々と蘇った。

FJD 2-3

F₁J₃D₅ 1-1

F₁₋₄J₃₋₄D₅₋₄ ちょうど・さえ・思われる 1-1〔田〕

ちょうど・かとさえ思われた

291 彼らはちょうど、あの意地わるの女

主人に言いつかって、彼を擲するために来たかとさえ思われた。

F₂J₃D₁₂ 1-1

F₂₋₇J₃₋₁D₁₂₋₁ たとえば・も・似る 1-1〔田〕
譬えば・にも似ていた

292 譬えば一つの緑玉が、ただそれ自身の緑色を基調にして、しかし、その磨かれた一つ一つの面に応じて、おのおの相異なった色と効果とを生み出している有様にも似ていた。

F₃J₃D₃ 1-1

F₃₋₃J₃₋₁D₃₋₁ ほとんど・も・言う 1-1〔神〕

ほとんど・とも言うべき

293 ある物の自分に欠けているのを意識した。それはほとんど一つの反射運動とも言うべきものであった。

FJK 21-85

F₁J₂K₉ 18-60

F₁₋₁J₂₋₁K₉₋₁ まるで・でも・よう 16-44

〔永、他、神、海、毒、夜、明田立母く、女顔冬ハ裸〕

・1 まるで・でも・かのような〔立〕

294 その何気なしにしている、それでいかににも自然に若い女らしい手つきは、それがまるで私を愛撫でもし出したかのような、呼吸づまるほどセンシュアルな魅力を私に感じさせた。

・2 まるで・でも・かのように 2-2〔夜永〕

295 まるで、警察のスパイでもあるかのように。〔永〕

・3 まるで・でも・よう〔神〕

296 まるであたしに喧嘩でも吹っかけるようね

230 3. 分類結果

- 4 まるで・でも・ようじゃないか〔明〕
 297 大変な権藤けんとうだね。まるで詰問でも受
 けているようじゃないか
- 5 まるで・でも・ようだった〔毒〕
 298 私たち新兵を苛める時、彼らの細な
 がい象のような眼はまるで微笑でもし
 ているようだった。
- 6 まるで・でも・ような 7-12〔永、
 神、海、他、夜、母、裸〕
 299 真顔で、まるで落し物でも聞くよう
な口ぶりである。〔裸〕
- 7 まるで・でも・ように 12-26〔永、他、
 神、毒、海、夜、田、く、女、顔、冬、ハ〕
 300 まるで自然に感情の痒みでも搔くよ
うに、自分でもそれほどの自覚なしに
 突然思いきり歯を剥き出して、いいッ
 と顔をひん曲げた〔く〕
- F₁₋₁J₂₋₁K₉₋₃ まるで・でも・みたい 2-3
 〔遠、他〕
 まるで・でも・みたいに
 301 《あんな臆病な人の気がしれない、一
 体どういう精神構造なのかしら》とま
るで顕微鏡でものぞくみたいに観察し
 ているうちに〔遠〕
- F₁₋₁J₂₋₃K₉₋₁ まるで・かなにか・よう 1-
 1〔夜〕
 まるで・か何か・ように
 302 その一つ一つを示すしなやかな姿態
 は、まるで、草と花のことだけしか思
 わない娘たちか何かを見るように。
- F₁₋₃J₂₋₁K₉₋₁ あたかも・でも・よう 4-10
 〔明、立、夜、草〕
- 1 あたかも・でも・かのよう 2-4
 〔立、草〕
 303 その物語自身があたかもそういう結

- 果を欲しでもするかのように、病める
 女主人公の物悲しい死を作為しだして
 いた。〔立〕
- 2 あたかも・でも・かのよう 〔夜〕
 304 両手を後方に組み合わせながら、あ
 ちこちとその部屋の内を静かに歩き廻
 った。あたかもその壁や柱にむかっ
 て話しかけでもするかのように…
- 3 あたかも・でも・ような 1-3〔明〕
 305 小林はあたかもそこに自分の兄弟分
でも揃っているような顔をして、一同
 を見廻した。
- 4 あたかも・でも・ように 2-2〔明
 立〕
 306 四月下旬のある薄曇った朝、停車場
 まで父に見送られて、私たちはあたか
も密月の旅へでも出かけるように、父
 の前はさも愉しそくに、山岳地方へ向
 う汽車の二等室へ乗り込んだ。〔立〕
- F₁₋₃J₂₋₃K₉₋₁ あたかも・かなにか・よう 1
 -1〔夜〕
 あたかも・か何かのようである
 307 本陣は、あたかもその武装を解かれ
 て休息している建物か何かのようであ
 る。
- F₁₋₆J₂₋₁K₉₋₁ さも・でも・よう 1-1〔明〕
 さも・でも・ような
 308 津田は眼をばちつかせて、赤い手絡
 をかけた太丸髻と、派手な刺繍をした
 半襟の模様とそれからその真中にある
 化粧後の白い顔とを、さも珍しい物
でも見るような新しい眼付きで眺め
 た。
- F₁J₃K₁ 1-2
 F₁₋₁J₃₋₁K₁₋₃ まるで・も・同じ 1-1〔夜〕

309 まるで無統治, 無警察も同じである。

F₁₋₃J₃₋₁K₁₋₂ あたかも・も・等しい 1-1
〔夜〕

- 1 あたかも・にもひとしい

310 それらの手合いは自称浪士の輩ととも
もに市中を横行し、あたかも押借り強
盗にもひとしい所行に及び、

F₁J₃K₂ 1-1

F₁₋₁J₃₋₁K₂₋₁ まるで・も・同様 1-1 〔夜〕
まるで・も同様に

311 まるで人質も同様に籠り暮した江戸

F₄J₃K₁ 1-1

F₄₋₆J₃₋₁K₁₋₂ それこそ・も・等しい 1-1
〔夜〕

- それこそ・にもひとしい

312 もしこんな懐剣を隠し持つとした
ら、それこそ朝廷を疑い奉るにもひと
しい、はなはだもって無礼ではないか
と。

F₃J₂K₉ 10-18

F₈₋₁J₂₋₁K₉₋₁ なにか・でも・よう 7-13
〔永₅ 立₂ 顔₂ 母₂ 冬₂ 絵〕

- 1 何か・でももあるような〔母〕

313 青年が何気ない座談で聞かせてくれ
たその言葉は、かの女に、自分のむす
こに貰いで勉強さしとくことが、何か
ふしだらでももあるような危惧の念を
抱かした。

- 2 何か・でももあるようだ〔永〕

314 その放心のなかには、奇妙にも異様
な緊張が高鳴っている。それは何かの
勝利の凱歌でもあるようだ。

- 3 何か・でも・かのように 1-2 〔立₂〕

315 裏の雑木林では、何かが燃え出し
もしたかのように、蟬がひねもす啼き

止まなかった。

- 4 何か・でも・よくな 2-3 〔永₂ く〕

316 何か籠の中にでもいるような、甘い
焦燥と、哀調の希望とを見せていた。
〔く〕

- 5 なにか・でも・ように 〔冬〕

317 狸犬の嗅覚をひどくあおり立てて、
なにか獲物でも探し出させようとする
ように、嘉門の動物的な鋭敏な本能を
煽^{おほ}って、あばぎ立てなくてもいい人世
の秘事を、醜くも嗅ぎ探させながら、
何か知識を得たとでも思っていたので
はないか。

- 6 何か・でも・ように 3-5 〔顔₂ 永₂
絵〕

318 それは、ポールをかけかえる後部車
掌のオーライという声をうけて、それ
を運転手にしらせ、いそいで前の方の
自分の持場の出入口に帰って行く、た
だそれだけのことであったが、女車掌
はそれが何かたのしいゲームのひとつ
まででもあるように、いそいそとして
いるのだった。〔絵〕

F₈₋₃J₂₋₁K₉₋₁ なにやら・でも・よう 1-2
〔お₂〕

- 1 なにやら・でも・ように

319 私の胸の中は、なにやらどしんと重
たいものがかぶさりでもしたように、
重くるしゅうなってしもうたのでござ
ります。

- 2 なにやら・でも・よな

320 頭を低うさげて車押ししてるのも、な
にやらおのれの罪深い心ざまの償いで
もしてるよな、ひょんな気になったの
でござります。

232 3. 分類結果

F₈₋₁J₂₋₁K₉₋₁ なんだか・でも・よう 2-2
〔何 神〕

・1 何だか・でも・ようで〔何〕

321 何だかこう穴の中へでも入ってるよ
うで、気が落ちつかなくなるし、

・2 何だか・でも・ような〔神〕

322 定吉は何だか挑戦でもするような調
子で語尾に力を入れて言った。

F₆₋₇J₂₋₁K₉₋₁ どこぞ・でも・よう 1-1
〔お〕

どこぞ・でも・ような

323 ま新しい浴衣きて、ほんに、どこぞ
祭にでも行きますような姿のまま、そ
こに寝てたのでござります。

F₈J₂K₁₀ 1-1

F₆₋₁J₂₋₁K₁₀₋₁ なにか・でも・そう 1-1
〔田〕

何か・でも・そんな

324 馬追いの口は、何か綱で出来た精巧
な機械にでもありそんな仕掛けに、ば
っくりと開いては、すぐ四方から一度
に閉じられた。

F₉J₈K₁₁ 1-1

F₉₋₁J₈₋₁K₁₁₋₃ もし…が…なら…は…で
はないか 1-1〔夜〕

もし・が・なら・は・ではなかるうか

325 もし先輩が道化役者なら、それを面
白がって見物する後輩の同僚は一層の
道化役者ではなかるうかと。

F₁₁J₂K₁₂ 1-1

F₁₁₋₂J₂₋₁K₁₂₋₁ なにも・でも・ではない 1
-1〔母〕

なにも・でも・じゃなし

326 むすこは純芸術家だ、画家だ、なに
も修身の先生にでもするのじゃなし。

FJKD 5-5

F₁J₂K₉D₁ 2-2〔明く〕

F₁₋₁J₂₋₁K₉₋₁D₁₋₂ まるで・でも・よう・思
う 1-1〔く〕

まるで・でも・ようにおもう

327 相手の男がまるで女の領髪でもとっ
ていたようにおもう

F₁₋₆J₂₋₁K₉₋₁D₁₋₁ さも・でも・よう・感じ
る 1-1〔明〕

さも・でも・ように感じた

328 お延は昨日に違った下女のはっきり
した態度を、さも自分の手柄ででもあ
るように感じた。

F₁J₂K₉D₅ 1-1

F₁₋₁J₂₋₁K₉₋₁D₅₋₉ まるで・でも・よう・見
える 1-1〔立〕

まるで・でも・かのように見えた

329 そんな物語の結末がまるでそこに私
を待ち伏せてでもいたかのように見え
た。

F₄J₂K₉D₅ 1-1

F₄₋₄J₂₋₁K₉₋₁D₅₋₉ ほんとうに・でも・よう
・見える 1-1〔永〕

ほんとうに・でも・ように見える

330 そのゆれる光に、ふと眼の前の柱
に、ほんとうににタールでも垂れている
ように見える部分がある。

F₆J₂K₉D₆ 1-1

F₈₋₁J₂₋₁K₉₋₁D₆₋₁ なにか・でも・よう・気
がする 1-1〔海〕

何か・でも・ような気がした

331 信太郎は思わず、母の手を握った掌
の中で何か落し物でもしたような気が
した。

FJKM 2-2

F₁J₂K₃M₂ 1-1F₁₋₁J₂₋₁K₃₋₁M₂₋₁ まるで・でも・よう・よ
うす 1-1〔毒〕

まるで・でも・ような様子

332 それはまるで将校集会所で会食の席
でも待っているような様子だった。F₂J₂K₃M₃ 1-1F₂₋₇J₂₋₁K₃₋₁M₃₋₇ たとえば・でも・よう・
心持ち 1-1〔田〕

譬えば・でも・ような心持

333 譬えば、それはふとした好奇心出来
心から親切を尽してやって、今はす
でに全く忘れていた小娘に、後に偶然に
めぐり逢うて「わたしはあの時このか
た、あなたのことばかりを思いつめて
来ました」とでも言われたような心持
であった。

FJM 3-4

F₁J₂M₂ 1-1F₁₋₃J₂₋₁M₂₋₁ あたかも・でも・ようす 1-
1〔母〕

あたかも・でも・御様子

334 するとあなたはあたかも不良青年に
でもおびやかされた御様子で、逸作先
生……の方へお逃げになりました。F₁J₂M₃ 1-1F₁₋₁J₂₋₁M₃₋₁₂ まるで・でも・つもり 1-1
〔顔〕335 公子は、まるでスラックスでもはい
ているつもりである。F₃J₁M₁ 1-1F₃₋₁₁J₁₋₂M₁₋₄ せいぜい・くらい・こと 1
-1〔他〕

せいぜい・くらいのこと

336 なんの感傷もないわけではなかった
が、せいぜい薄荷が目に入ったくらい
のことで、虫に刺されたほどの痛みも
感じなかったのは、むしろ意外なくら
いだった。F₃J₁M₃ 1-1F₃₋₁₁J₁₋₂M₃₋₅ せいぜい・くらい・気持ち
1-1〔他〕337 あの日ぼくは、せいぜい可愛い子に
旅をさせてやるくらいの、軽い気持で、
仮面に付き添って出たものだった。

FJSK 1-1

F₁J₂S₃K₃ 1-1F₁₋₁J₂₋₁S₃₋₂K₃₋₁ まるで・でも・…という
・よう 1-1〔他〕

まるで・とでもいうように

338 まるで嫉妬に未練があるとでもいう
ように、かえって仮面をけしかけ、そ
そのかしてさえたものだ。

FK 36-416

F₁K₁ 3-3F₁₋₁K₁₋₃ まるで・同じ 1-1〔明〕

まるで・と同じ

339 ほかの女を女と思っちゃいけないと
なるとまるで自殺と同じことよ。F₁₋₁K₁₋₄ まるで・そっくりだ 2-2〔立
他〕

・1 まるで・とそっくり〔他〕

340 ぼくがいなくても、すこしもその輝
きを変えない、自若とした居間の明り
……まるでおまえとそっくりだ…

・2 まるで・にそっくり〔立〕

234 3. 分類結果

341 この明りの影の具合なんか、まるで
おれの人生にそっくりじゃないか。

F₁K₂ 2-3

F₁₋₁K₂₋₁₀ まるで・異ならない 1-1 [明]

まるで・に異ならなかった

342 ことさらに爪先を厚く四角にこしら
えたいかつい並米利加型の靴をごと
と鳴らして、太い洋杖をわざとらしく
振り廻す彼の態度は、まるで冷たい空
気に抵抗する示威運動者に異ならな
かった。

F₁₋₁K₂₋₃ ちょうど・同程度 1-1 [他]

343 仮面の登録制度を提唱しはじめたり
するだろうが……仮面と登録制度と
は、ちょうど扉のない牢獄が意味をな
さないのと同程度に、まったく相容れ
ることのできないものなのである。

F₁₋₁K₂₋₅ ちょうど・一般 1-1 [明]

ちょうど・と一般

344 その薄ら寒い外から帰ってきた彼は
ちょうど暖かい家庭の燈火を慕って、
それを目標に足を運んだのと一般であ
った。

F₁K₉ 32-312

F₁₋₁K₉₋₁ まるで・よう 28-207 [顔₃₇ 永₂₁
他₂₁ 夜₁₇ 海₁₆ 神₁₀ 母₉ く₉ 金₈ 明₇ 立₆
女₅ 毒₅ 蔵₄ 冬₄ 白₄ 杏₂ 流₂ 風₂ 花₂ 草₂
静₂ 高₂ 縮₂ 田₂ 機₂ ハ₂ 裸₂]

・1 まるで・かのようにであった [金]

345 かれらの目にさらされる私たち、私
たちの僧衣の姿、それは今でははっき
りした対照をなし、まるでわれわれは
酔興に僧侶の役を演じているか^のよう
であった。

・2 まるで・かのように 8-17 [永₈ 立₂

金₂ 夜₂ 神₂ 顔₂ 他₂ 静₂]

346 金閣は雨夜の闇におぼめいており、
その輪郭は定かでなかった。それは黒
々と、まるで夜がそこに結晶している
かのように立っていた。[金]

・3 まるで・ようじゃないか [冬]

347 まるで僕を監視しているようじゃな
いか

・4 まるで・ようだ 5-6 [海₂ 母₂ 顔₂ 花₂
他₂]

348 床の面積に比較して天井がひどく高
く、まわりは分厚いコンクリートの壁
にかこまれているために、なかに坐る
とまるで塔か煙突の中にいるようだ。
[海]

・5 まるで・ようだった 5-6 [顔₂ 夜₂ 冬₂
毒₂ 他₂]

349 (みんなは瞞されてもネ、僕は知っ
ているよ) その微笑はまるでそう言っ
ているようだった。[毒]

・6 まるで・ようだろう [明]

350 まるでお客さまに行ったようだろう

・7 まるで・ようで [他]

351 まるで、世間をまぶしがっているよ
うで、それが哀愁をたたえた横顔にふ
さわしく、いっそう可憐な印象

・8 まるで・ようであった 7-9 [顔₃ 夜₃
縮₃ 母₃ く₃ 冬₃ 金₃]

352 健康に、いきいきとして彼らは輝い
ていて、彼らのまわりばかりには、ま
るで暖かな明るい太陽の光が落ちてい
るようであった。[冬]

・9 まるで・ようであり [顔]

353 花嫁はすこしも固くなっていなかつ
た。まるでこうしたことを二度も三度

- もくりかえしているひとのようであり、新鮮さがない。
- ・10 まるで・ようである 2-5 [顔₃ 永₂]
354 顔は黒くまるで燻製のようである。
[永]
- ・11 まるで・ようでした [夜]
355 なにしる、京都を出る時は、二昼夜歩き通しに歩いて、まるで足が棒のようでした。
- ・12 まるで・ようです [顔]
356 貞節をまもりとおすことが、これほど本人をいい気持にさせるものか。まるで悪の魅力のようです。
- ・13 まるで・ようではないか 2-3 [永₂ 白]
357 この女はまるで俺のために造られた悲しい人形のようではないか。[白]
- ・14 まるで・ような 22-50 [他₁₀ 顔₅ 海₅ 夜₄ 明₂ 蔵₂ 神₂ 杏₂ 母₂ く₂ 女₂ 流₂ 高田 機立 冬 白 ハ 永 金 毒]
358 各社はこうした事件にぶつかると、まるで早魃に滋雨を得た百姓のような喜びをもって、勇んで活動し始めるのである。[神]
- ・15 まるで・ように 20-104 [顔₂₀ 永₁₄ 夜₃ 海₃ 神₃ 他₇ く₆ 母₃ 明₄ 立₃ 女₃ 金₃ 毒₃ 蔵₂ 白₂ 草₂ 風₂ 花 静 裸]
359 まるで息をしていないように眠っていた。[静]
- F₁₋₁K₉₋₃ まるで・みたい 12-24 [顔₅ 他₄ 杏₃ 永₃ 明₂ 春 蔵 機 母 流 冬 ハ]
- ・1 まるで・みたい 2-4 [顔₃ 杏]
360 楽屋といっても、昔のようではありませんわ。まるでアパートの部屋みたい。[顔]

- ・2 まるで・みたいじゃないか 2-2 [杏 永]
361 まるで乞食みたいじゃないか。[杏]
- ・3 まるで・みたいだ 3-4 [永₂ 明 母]
362 出て来たばかりの病院を見ながら、思わず忌々しい声で呟いた。——まるで大きな墓みたいだ。[永]
- ・4 まるで・みたいですよ 3-3 [明 蔵 杏]
363 まるでお爺さんと(ごめんなさい)お婆さんとお染久松みたいですわね。
[蔵]
- ・5 まるで・みたいな 2-2 [流 ハ]
364 まるでとしまみたいな意地の悪い利口さをもっていた。[流]
- ・6 まるで・みたいに 5-9 [他₄ 顔₃ 春 機 冬]
365 まるで猫みたいにおとなしくなってしまうじゃアないか? [春]
- F₁₋₂K₉₋₁ さながら・よう 1-1 [夜]
さながら・ような
366 幕府は無力を暴露し、諸藩が勢力の割拠はさながら戦国を見るような時代を顕出した。
- F₁₋₂K₉₋₂ さながら・ごとし 1-1 [夜]
さながら・ごとき
367 外国の旋条銃と日本の刀剣とで固めた護衛の武士の風俗ばかりでなく、……新旧時代の入れ混ったところは、さながら虹のごとき色さまざまな光景をも想像し、この未曾有の行幸を拜する沿道人民の熱狂にまでその想像を持って行った。
- F₁₋₃K₉₋₁ あたかも・よう 12-45 [夜₂₅ 明₄ 金₄ ハ₃ 田₂ 高 瀬 蔵 立 母 他 静]
- ・1 あたかも・かのように 2-4 [夜₃ 立]

- 368 私はあたかも夢から覚めたかのよう
に何んともかとも言いようのない恐怖
と羞恥とに襲われた。〔立〕
- ・2 あたかも・かのように 1-5〔夜₂〕
- 369 大政奉還と、引き続く將軍職の拝辞
とによって、まことの公武一和の精神
がいかなるものであるかを明らかにし
た。あたかも高く飛ぶことを知る鳥
は、風を迎え、翼を取めることをも知
っていて、自然と自分を持って行って
くれる風の力に任せようとするかのよ
うに。
- ・3 あたかも・よう〔高〕
- 370 戸外はあたかも真昼のよう、月の光
は開け拡げた家の内へはらはらとさし
て、紫陽花の色も鮮やかに蒼かった。
- ・4 あたかも・ようだ〔夜〕
- 371 戦争が長引けば長引くほど山の中
にはいろいろなことを言う者が出て来
て、土州因州あたりは旧士族ばかりで
なく一般の人々の気受けも薩摩の捷報
をよろこぶ色がある、あたかも長州征
伐の時のようなど言い触らすものさ
えある。
- ・5 あたかも・ようで〔金〕
- 372 私の内界の重さと濃密さは、あたか
もこの今の夜のようで、
- ・6 あたかも・ようであった〔金〕
- 373 叡山の頂きは突兀としていたが、そ
の裾のひろがりは限りなく、あたかも
一つの主題の余韻が、いつまでも鳴り
ひびいているようであった。
- ・7 あたかも・ような 5-6〔ハ₂ 明 田
蔵 母〕
- 374 それには、僕は直接徳子から耳にし
ていた談話を補い、また、その談話に
は、逆にこの原稿に綴られたところを
補い、あたかも二個のレンズによっ
て一の物象を的確に捉えるようなやり方
で、次第に徳子という人間を鮮明に描
き出した。〔ハ〕
- ・8-1 あたかも・ように 7-19〔夜₁₀ 明₃
金₂ 湊 田 ハ 静〕
- 375 子供らの声がこの家のあちにもこ
ちちにも、あたかも感嘆符を打ったよ
うに浮んで残っている。〔静〕
- ・8-2 あたかも・ように。 2-3〔夜₂ 他〕
- 376 こんな娘たちの深い窓のところへ
も、この国全体としての覚醒を促すよ
うな御一新がいつの間にかこっそり戸
を叩きに來た。あたかも燃ゆるがごと
き熱望に充ち、温かい情感に溢れ、あ
の昂然とした独立独歩の足どりで、早
くこの戸を明け放てと告げに來る人の
ように。〔夜〕
- ・9-1 あたかも・ように 1-2〔夜₂〕
- 377 武家六分、町人四分と言われた江戸
から、諸国大小名の家族がそれぞれ国
もとをさして引き揚げて行った後の町
町は、あたかも大きな潮の引いて行っ
た後のようになった。
- ・9-2 あたかも・ように。 1-2〔夜₂〕
- 378 国を開くか開かないかの早いころに
来て日本人の胸の底に潜むようになった
のである。あたかも、心の柔らかく
感じやすい年ごろに受け入れた感化の
人の一生に深い影響を及ぼすように。
- F₁₋₃K₉₋₂ あたかも・ごとし 1-1〔明〕
あたかも・ごとく
- 379 津田と彼女との間に起った相思の恋

- 愛事件が、あたかも神秘の焰のごとく、
継子の前に燃え上がった。
- F₁₋₄K₉₋₁ ちょうど・よう 12-29 [田₁₁
花₁ 他₁ 高₂ 縮歌女 顔白 絵 永 金]
- ・1 ちょうど・ようだ [歌]
380 そのきゃしゃな躰なぞはちょうど鹿
のようだ。
- ・2 ちょうど・ようで [高]
381 木の丸太を渡るのじゃが……草のな
かに横倒れになっている木地がこうち
ょうど鱗のようで、
- ・3 ちょうど・ようである [田]
382 すべての平和と幸福とは、短い人生
の中であって最も短い。それはちょう
ど、秋の日の障子の日向の上にふと影
を落す鳥かげのようである。
- ・4 ちょうど・ような 6-6 [高 縮 田 女
永 他]
383 オルガンの音は、まさにそれ特有の
音色をもって、爽やかに、甘く、物哀
れに、ちょうど晩春の夕方のような情
調をもって、よく聞きなれた何かの行
進曲を、風のまにまに漂わせて来るで
はないか。[田]
- ・5 ちょうど・ように 7-20 [田₉ 花₁
他₃ 顔白 絵 金]
384 その鵲は月光を吸いちょうど荒絹の
ようにぼんやりと照っていた。[花]
- F₁₋₅K₉₋₁ いかにも・よう 1-1 [海]
いかにも・ような
385 せっかく憶えた新しいアクセントの
言葉で話していると、大学生の従兄が
やってきて、「おっと、信ちゃん江
戸っ子弁で話しよるの？」と、いかに
もオウムの芸当に感心するような口調

で云うのだ。

F₁₋₆K₉₋₁ さも・よう 2-3 [ハ₂ 夜]

- ・1 さも・かのように [夜]
386 飼われている一匹の狎もあって、田
舎からの珍客をさもめずらしがるかの
ように、矮小な体軀と滑稽な面貌とで
廊下のところをあちこちと走り廻って
いる。
- ・2 さも・ように 1-2 [ハ₂]
387 白いレースの飾りの付いた濃紺のワ
ンピースの肩先を、さも何か忌わしい
ものから護るように、ふと徳子の洋傘
の骨にふれてもわざとらしく引っ込め
てゆっくり歩いた。

F₁K₁₁ 1-1

F₁₋₁K₁₁₋₁₁ まるで・にすぎない 1-1 [他]

- 388 仮面をかぶって、他人になりすます
という、この自分ではせい一杯のつも
りの大芝居も、ひっきょう芝居にすぎ
ず、日暮れになり、スイッチをひねれ
ば、居間の明りがともるとい、その
日常的な確かさの前では、まるで影の
薄い、ひ弱なものにすぎないのではあ
るまいか。

F₂K₁ 1-1

F₂₋₉K₁₋₁ たとえて言うのと・近い 1-1 [明]

- たとえて言うのと・近い
389 男女両性の間にしか起り得ない特殊
な親しみであった。たとえて言うと、
ある人が茶屋女などに突然背中をどや
された刹那に受ける快感に近いある物
であった。

F₂K₂ 1-1

F₂₋₅K₂₋₄ 言うたら・一つ 1-1 [お]

言うたら・と一つ

390 言うたら飼い馴らされた犬畜生の、
日が暮れたら尾をふって、おのれの家
へもどって行く有様と一つや

F₂K₉ 7-11

F₂₋₁K₉₋₁ いわば・よう 2-3 [金₂ 太]

•1 言わば・ような [太]

391 拳闘の試合で、こちらがポイントす
れば必ずそれだけ打ち返してくる、言
わば互角のしぶとい相手に対するよう
な感嘆でもあった。

•2 いわば・ように 1-2 [金₂]

392 その顔は申し分のない忠実さで、私
の滑稽な焦躁感をそのままに真似、い
わば私の怖ろしい鏡のようになっ
ていた。

F₂₋₂K₉₋₃ 言えば・みたい 1-1 [杏]

393 わたくしがお金を作っているのは、
わたくしがこれ以上ひどい目にあわな
いための用心なのよ、まあ言えば自
分で自分をすくっているみたい。

F₂₋₇K₉₋₁ たとえば・よう 5-6 [他₂ 夜
田 金 海]

•1 たとえば・ような [海]

394 屍臭しじゅうというのともちがって、たとえ
ば猫の尿と腐ったタマネギと、煮え立
った魚のアラの臭いをいっしょにした
ような、一種独得の臭気である。

•2 たとえば・ようなもの [他]

395 外向的で、調和的だということは、
たとえば厚さ一メートルの生ゴムの壁
のようなものだろう。

•3 譬へば・やうなもの [夜]

396 譬へば、猿に利刀持たせ、馬鹿に鉄
砲を放たしむるやうなもので、まこと
に危いことの甚しいでござる。

•4 たとえば・ように 2-2 [金 他]

397 物を言わなかったが、その蔑みは、
たとえば着物に刺った秋のいのこずち
の実のように、万遍なく私の肌を刺し
ていた。[金]

•5 譬えば・ように [田]

398 梅の新らしい枝が直立して長く高く
譬えば天を刺し貫こうとする檜のよう
に突っ立っているのがであった。

F₂₋₃K₉₋₁ たとえて言えば・よう 1-1 [他]

たとえて言えば・ようなもの

399 ぼくの態度は、たとえて言え**ば**、白
人の乞食が有色人種の帝王を仲間あつ
かいにするようなものだった。

F₃K₁ 3-3

F₃₋₁K₁₋₃ そっくり・同じ 1-1 [他]

400 骨ばったマネキン人形とそっくり同
じ流行の衣裳をつけた豚のような娘た
ち

F₃₋₃K₁₋₁ ほとんど・近い 1-1 [歌]

ほとんど・に近い

401 ほとんど仏像に近い静かな美しさ

F₃₋₅K₁₋₆ まず・似たりよったり 1-1
[草]

とまず似たりよったり

402 防波堤に倚りかかっている僕らの恰
好ときたら、動物園でオットセイが日
向ぼっこをしているのとまず似たりよ
つたりだった。

F₃K₂ 1-2

F₃₋₃K₂₋₇ ほとんど・変わりがない 1-1
[夜]

とほとんど変りがなかった

403 たとい御隠居はそこにはないまでも
一行が「従二位大納言」の大旗を奉じ

- ながら動いて行くところは、生きてる人を護るとほとんど変りがなかったからで。
- F₃₋₃K₂₋₁₀ ほとんど・異ならない 1-1 [夜]
ほとんど・に異ならなかった
- 404 厳めしい鉄砲、^{まとい}纏、^{ばれん}馬簾の陣立ては、ほとんど戦時に異ならなかった。
- F₃K₉ 11-24
- F₃₋₃K₉₋₁ ほとんど・よう 8-11 [夜₂ 杏₂ 金₂ 神歌女 永草]
- ・1 ほとんど・ような 4-5 [夜₂ 杏歌金]
- 405 ほとんどゆめのような暖炉のほとぼりが頬をなで、[杏]
- ・2 ほとんど・ように 5-5 [神 杏 永金 草]
- 406 それはすぐに、ほとんど電流のように河野の腹に伝わって行って、そこでもまたきゅっと鳴ったらしかった。[神]
- ・3 殆ど・ように [女]
- 407 殆ど詫びるように美夜をなだめながら
- F₃₋₃K₉₋₃ ほとんど・みたい 1-1 [ハ]
ほとんど・みいたいな
- 408 徳子は笑い、ガタガタ慄え、次いでほとんど病人みいたいな真ッ蒼な顔をして電話を切って、
- F₃₋₃K₉₋₁ 半分・よう 2-9 [夜₃ 女₁]
- ・1 半分・ようで [女]
- 409 須賀や由美が半分女中のようではあっても
- ・2 半分・ような 2-4 [夜₃ 女]
- 410 山のなかに成長して樹木も半分友達のような三人

- ・3 半分・ように 2-3 [夜₂ 女]
- 411 半分ひとりごとのように言った。[夜]
- ・4 半分は・ような [女]
- 412 白川の家での妾が縫物や料理もする半分は女中頭を兼ねたような立場にいる
- F₃₋₃K₉₋₁ なかば・よう 2-2 [無 草]
- ・1 半ば・ような [無]
- 413 信一は中腰のまま妻の肩に置いた手で、半ば木偶のような松子の顔の向きを変えた。
- ・2 半ば・ように [草]
- 414 半ば走るように足を急がせる
- F₃₋₁₀K₉₋₁ ただ・よう 1-1 [高]
- 415 目の届く限り残らず岩で、次第に大きく水にひたったのはただ小山のよう
- F₃K₁₁ 2-2
- F₃₋₂K₁₁₋₁ もはや・である 1-1 [夜]
- 416 吉左衛門とおまんとは最早好い茶呑み友達である。
- F₃₋₃K₁₁₋₄ ほとんど・と言っていい 1-1 [金]
- ほとんど・と云ってよかった
- 417 この言葉はほとんど^は羽搏いていると云ってよかった。
- F₄K₁ 2-3
- F₄₋₂K₁₋₃ まったく・同じ 1-1 [田]
- と全く同じ
- 418 家の中は荒野と全く同じであった。
- F₄₋₂K₁₋₅ まったく・瓜二つ 1-1 [他]
- 419 もっとも至極な、醒めきった論理だとは思いますが、こうして並べてみると、その構造は、アルコールびたしの仮面の屁理屈と、まったく瓜二つではない

240 3. 分類結果

か。

F₄₋₄K₁₋₄ ほんとうに・そっくりだ 1-1
〔他〕

420 本当に, 朝鮮人の田舎者とそっくり
だぞ。

F₄K₉ 8-14

F₄₋₁K₉₋₁ まさに・よう 3-4〔金₂ 他 海〕

・1 まさに・ような 2-2〔金 海〕

421 和尚の精神にとっては、まさに妾の
ようなその肉〔金〕

・2 まさに・ように 2-2〔金 他〕

422 零歳の仮面の可能性は、まさに赤ん
坊のように自由でありすぎた。〔他〕

F₄₋₂K₉₋₁ まったく・よう 3-5〔永₃ 夜
草〕

・1 まったく・ようであった〔夜〕

423 日ごろ慕い奉る帝が木曾路の御巡幸
と聞くさえあるに、彼ら親子のもの
の住居にお迎えすることが出来ようなぞ
とは、まったく夢のようであった。

・2 全く・ような 1-2〔永₂〕

424 全くけだもののような声であった。

・3 まったく・ように〔草〕

425 戦争というものは、人間の生命はま
ったくごみのように無視して、成立す
るんだ。

・4 全く・ように〔永〕

426 その古びたコンクリートの建物は、
樹木にかこまれて、全く墓のようにひ
っそりしている。

F₄₋₄K₉₋₁ ほんとうに・よう 1-1〔歌〕

ほんとうに・ように

427 石段だの木の根っ子だのを踏んで丘
陵地の上へあがりきるとほんとうに山
の上へ出たようにあたりが明るかつ

た。

F₄₋₅K₉₋₁ ほんなこと・よう 1-1〔毒〕

ほんなこと・ようだ

428 この人ったらほんなこと石のようだ
よ。

F₄₋₆K₉₋₁ それこそ・よう 1-1〔他〕

それこそ・ように

429 時と場合に応じて、気軽に服を着替
える習慣をつけることである。それこ
そ、一本のレコードの溝が、同時にい
くつもの音色をかなでることができる
ように

F₄₋₆K₉₋₃ それこそ・みたい 1-1〔草〕

それこそ・みたいに

430 「フロー」の奴、それこそ蚤みたい
に教壇で一時間立往生。

F₄₋₈K₉₋₁ 文字通り・よう 1-1〔夜〕

文字通り・ような

431 その一行は、公卿、だいそうじょう
大僧正をはじめ約五百人からの大集団で、例の金の御
幣を中心に文字通りの大嵐のような勢
いで、四月六日には落合泊りで馬籠の
宿場へ練り込んで来た。

F₆K₉ 1-1

F₆₋₁K₉₋₁ 今にも・よう 1-1〔金〕

今にも・かのように

432 蜜蜂を迎え入れた夏菊の花が…今に
も茎を離れて飛び翔とうとするかのよ
うに、はげしく身をゆすぶる

F₆K₁₀ 5-8

F₆₋₁K₁₀₋₁ 今にも・そう 4-7〔顔₄ 女 冬
草〕

・1 いまにも・そう 1-2〔顔₂〕

433 小さいとき、ぼくは頭ばかりが異様
に大きくて、いまにも細い首のところ

で、ぼきと折れそうでした。

・2 いまにも・そうな 2-2 [顔 冬]

434 うちの嘉門も、ああいう恐ろしい地獄に、いまにも墮ちそうな人だ、と思われてきました。[冬]

・3 今にも・そうな [顔]

435 下唇のこころ持ちつき出たゆるみ加減の受け口と細い眼の尻に、笑うと得も言えぬ愛嬌がこぼれ、今にも溶けてしまいそうな危げな美しさになった。

・4 いまにも・そうに [顔]

436 いまにも一滴になりそうに、檜皮葺はしっとりとして重たげである。

・5 今にも・そうに [草]

437 オリオンの星座が今にも風に吹き飛ばされそうに中空に懸かっていた。

F₆₋₂K₁₀₋₁ あわや・そう 1-1 [母]

あわや・そうな

438 未練やら逡巡やらのむしゃむしゃした感情を一まとめにかき集めて、あわや根こそぎ持ち去って行きそうな切迫をかの女に感じさせた。

F₇K₉ 1-1

F₇₋₄K₉₋₁ いずれ・よう 1-1 [他]

いずれ・ようなもの

439 いずれ、ぼくたちのやりとりは、ろくすっぽ測量もせずに置かれた、二本のレールのようなものだった。

F₇K₁₁ 1-1

F₇₋₂K₁₁₋₁₀ 結局・にすぎない 1-1 [他]

けっきょくは・にすぎない

440 やれ秩序だ、やれしきたりだ、やれ節度だなどと息巻いても、けっきょくは素顔というほんの薄皮一枚に支えられた、心細い砂の城にすぎないの

ではあるまいか。

F₈K₉ 15-20

F₈₋₁K₉₋₁ なにか・よう 6-6 [夜 縮 母 顔 冬 永]

・1 何か・ようだ [冬]

441 君、海の水の匂いは、何か生物の匂いのようだね

・2 何か・ようで [顔]

442 矜子は何か根こそぎにされたようではげしい弱さを感じた。

・3 何か・ような 2-2 [縮 母]

443 何か若草のような柔かい心の持主で、いつ陰しい顔をして怒るといこともなかった。[縮]

・4 何か・ように 2-2 [夜 永]

444 外国人の入り込む開港場へ海から何か這うようにやって来る闇の恐ろしさは、それを経験したものでなければ解らない。[夜]

F₈₋₁K₉₋₃ なにか・みたい 1-1 [静]

何かみたいに

445 よくキツネが出て来て岸のところに立ってこちらを見ている。じっとこんな風に置物にした何かみたいに見ている

F₈₋₂K₉₋₁ なにかしら・よう 1-1 [夜]

何かしら・ような

446 何かしら行儀正しいものを打ち壊すような野蛮に響く力がある。

F₈₋₄K₉₋₁ なんだか・よう 6-7 [母2 縮 溼 田 神 ま]

・1 何だか・ようだ 2-2 [溼 田]

447 「そうね。何だか着物のようだわ」この丘は深い好みの御召の着物を着ていると、彼の妻は思っている。[田]

- 2 何だか・ようで 2-2 [縮母]
448 この子の目だけは何だか雲がかかったようにはつきりしないよ。[縮]
- 3 何だか・ような 2-2 [母ま]
449 あたしがここへ来たら、何だか雨が降ってるような音がするんです。お天気なのにおかしな、とよく見たら、それが毛虫の糞の落ちる音なんですよ。[ま]
- 4 何だか・ように [神]
450 定吉は自分の張り上げた声か、何だか泣き声のように甲高く調子が外れて来るのを感じた。
- F₈₋₄K₉₋₃ なんだか・みたい 3-3 [風 冬 草]
•1 なんだか・みたいだ 2-2 [風 草]
451 夜の川に、よろしく。……なんだか、相撲みたいだな [風]
•2 なんだか・みたいな [冬]
452 なんだか黄色い犬みたいな啼き声ね。
- F₈₋₅K₉₋₁ どこか・よう 1-1 [春]
どこか・ような
453 年々だんだん師匠との折合いがつかなくなってきた。……というほどのことはなくとも、その間に、へんにどこか籬のゆるんできたようなホゾの外れて来たようなかたちのあるのがかこれに感じられてきた。
- F₈₋₅F₉₋₃ どこか・みたい 1-1 [杏]
どこか・みたいに
454 女の子というものは、その家に一人いれば、きまってもう一人いるはずの、どこかさかなの姉妹みたいに、二人かあるいはもっと多ければ、三人もいる

ものであった。

- F₁₁K₁₂ 1-1
F₁₁₋₁K₁₂₋₂ まさか・ではあるまい 1-1 [田]
455 まさか狐狸の住家ではあるまい
- F₁₂K₂ 4-4
F₁₂₋₁K₂₋₆ 大して・違いがない 1-1 [女]
と大して違いのない
456 女の貞操を無視して生きていられる美夜は、倫から見れば犬や猫と大して違いのないあさましい牝である。
- F₁₂₋₁K₂₋₇ どれだけも・変わりがない 1-1 [杏]
とどれだけでも変りがなかった
457 六つか七つくらいから、掃除、子守、使い走り、洗濯物にこきつかい、十二、三になると役所や会社の給仕の勤めに出し、一と月働いて一円五十銭の俸給になるやつを、それを全部取り上げていた。貰い子の親はただ食わせているだけの、手数のかからない犬を飼っているのと、どれだけでも変りがなかった。
- F₁₂₋₄K₂₋₈ 露一つ・違わない 1-1 [冬]
と露一つちがわぬ
458 それは父に逆らうときとか、妹の咲子をいじめるときとかにチラとあらわれるもので、その閃きは、私には嘉門が狂暴になるときの眉間の色と露一つちがわぬ色のものの芽生えとしか思われなかった。
- F₁₂₋₅K₂₋₈ 寸分・違わない 1-1 [金]
と寸分ちがわず
459 荒々しい一聯の動作は、実に先ほど、活け花をしていて葉や茎を缺て切っているときの、静かな残忍さと寸分ちが

わず、そのままの延長のように思われた。
た。

FKD 23-56

F₁K₁D₁ 1-1

F₁₋₄K₁₋₃D₁₋₁ ちょうど・同じ・当たる
1-1〔夜〕

ちょうど・同じ・にあたる

460 今の時はちょうど遠い昔に漢土の文物を受け納れはじめたその同じ大切な時にあたる。

F₁K₉D₁ 4-4

F₁₋₁K₉₋₁D₁₋₂ まるで・よう・思う 1-1
〔く〕

まるで・ようにおもっている

461 俺の方はこれからなんとかして自分を築きたいと、まるで馬鹿のようにおもっているんだから。

F₁₋₃K₉₋₁D₁₋₁₁ あたかも・よう・見せかける 1-1〔毒〕

あたかも・ように見せかけながら

462 その死体をあたかも生きているように見せかけながら、病室まで運んでいった大場看護婦長。

F₁₋₃K₉₋₂D₁₋₉ あたかも・ごとし・眺める 1-1〔明〕

あたかも・ごとくに眺めた

463 夫のこの驚ろきをあたかも自分の労力に対する報酬のごとくに眺めた。

F₁₋₅K₉₋₁D₁₋₂ いかにも・よう・思う 1-1
〔顔〕

いかにも・ように思う

464 克明に日記をつけることによって、自分が生んだことのない耕を、いかにも自分の子のように思うことができた

のかも知れない。

F₁K₉D₁ 10-16

F₁₋₁K₉₋₁D₁₋₁ まるで・よう・感じられる
2-2〔神金〕

・1 まるで・ように感じられる〔金〕

465 それはまるで真黒な、重い、鉄製の、工作機械のように感じられる。

・2 まるで・ように感ぜられる〔神〕

466 それに彼にはまるで何か威圧して来る板のように感ぜられるのである。

F₁₋₁K₉₋₁D₁₋₄ まるで・よう・思われる 1-1
〔他〕

まるで・ように思われた

467 この隠者のための時は、まるで自分だけのために用意された、素晴らしい特別席のように思われたものである。

F₁₋₁K₉₋₁D₁₋₅ まるで・よう・考えられる
1-1〔永〕

まるで・ように考えられる

468 自分がまるで醜悪への志向を持っているように考えられる。

F₁₋₁K₉₋₁D₁₋₉ まるで・よう・見える 4-4
〔機立顔他〕

・1 まるで・ようにみえた〔顔〕

469 ひっそりと椅子にかけている衾はまるでうんと常識的に、わが身におこった不慮な出来事に、万全の善後策を講じているひとのようにみえた。

・2 まるで・ように見えた〔他〕

470 窓枠と、隣の軒とで切り取られた、白っぽい長方形の空が、まるで刑務所の塀の延長のように見えた。

・3 まるで・ように見えて来た〔機〕

471 軽部までがまるで私の家来のように見えて来た

・4 まるで・ように見える〔立〕

472 人間に大きな衝動を与える出来事なんぞと云うものはかえてそれが過ぎ去った跡は何だかまるで他所のことのように見えるものだなあ

F₁₋₁K₉₋₃D₅₋₉ まるで・みたい・見える 1-1〔金〕

まるで・みたいに見えた

473 道證和尚は、まるで桃いろのお菓子みたいに見えた。

F₁₋₃K₉₋₁D₅₋₉ あたかも・よう・見える 3-5〔夜₂ 金₂ 杏〕

・1 あたかも・かのように見える〔夜〕

474 例えば、杉の葉の長く垂れ下ったような粗い髪、延び放題に延びた草のような髻。あたかも暗い中世はそんなところにも残って、半蔵の眼の前に光っているかのように見える。

・2 あたかも・かのようにも見えた〔夜〕

475 宣長と署名した書体にも特色があった。あたかも、三十五年にわたる古事記の研究を遺した大先輩がその部屋に語り合う正香と半蔵との前にいて…そこにいる弟子の弟子たちを励ますかのようにも見えた。

・3 あたかも・ように見えた〔杏〕

476 夕染えが丘の上にあるので、坂下から見上げると、彼らはあたかも、雲の中を歩いているように見えた。

・4 あたかも・ように見える 1-2〔金₂〕

477 猫を斬ったことは、あたかも痛む虫歯を抜き、美を^{てつかつ}剔決したように見える

F₁₋₃K₉₋₁D₅₋₁₁ あたかも・よう・見なされる 1-1〔夜〕

あたかも・ように見なされる

478 今や維新と言い、日進月歩の時と言って、国学にとどまる平田門人ごときはあたかも旧習を脱せざるもののように見なされるのも止むを得なかった。

F₁₋₄K₉₋₁D₅₋₁ ちょうど・よう・感じられる 1-1〔高〕

ちょうど・ように感じられる

479 この折から聞えはじめたのはどつという山彦^{やまひこ}に伝わる響き、ちょうど山の奥に風が渦巻いて、そこから吹き起る穴があったように感じられる。

F₁K₉D₆ 4-5

F₁₋₁K₉₋₁D₆₋₁ まるで・よう・気がする 3-4〔夜₂ 神_毒〕

・1 まるで・ような気がした〔神〕

480 僕はまるで足がすくんでしまうような気がしたよ。

・2 まるで・ような気がしてきた〔毒〕

481 それらの会話をきくと勝呂はまるで普通の手術にたちあっているような気がしてきた。

・3 まるで・ような気がする〔夜〕

482 過去を振り返ると、まるで夢のような気がする

・4 まるで・ような気もする〔夜〕

483 半蔵が運命の激しさを考えるたびに、まるで嘘のような気もする

F₁₋₃K₉₋₁D₆₋₁ あたかも・よう・気がする 1-1〔碑〕

あたかも・ような気がする

484 高範にしてみると、たんに日歩の金を集めにまわるにすぎないのだが、彼の容貌のうえにみじんも愛嬌^{あいせう}がないのであるから、人々はあたかも通り魔におそわれたような気がするのである。

F₂K₉D₅ 2-2F₂₋₁K₉₋₁D₅₋₄ いわば・よう・思われる 1-1 [白]

いわば・ようにしか思われなかった

485 日本は負け敵は本土に上陸して日本人の大半は死滅してしまうのかも知れない。それはもう一つの超自然の運命、いわば天命のようにしか思われなかった。

F₂₋₁K₉₋₁D₅₋₉ いわば・よう・見える 1-1 [永]

いわば・ように見えた

486 それは自分とは無縁な、いわば人間でないある醜悪な生物の顔のように見えた。

F₃K₉D₆ 1-1F₃₋₃K₉₋₁D₆₋₁ ほとんど・よう・気がする 1-1 [明]

ほとんど・ような気がした

487 彼はこの宵の自分を顧りみて、ほとんど夢中歩行者のような気がした。

F₄K₉D₆ 1-1F₄₋₂K₉₋₁D₆₋₁ まったく・よう・気がする 1-1 [顔]

まったく・ような気がする

488 自分のうまれた家でありながら、まったくよそにきているような気がする。

F₆K₉D₆ 1-1F₆₋₁K₉₋₁D₆₋₁ 今にも・よう・気がする 1-1 [夜]

今にも・ような気がします

489 塩の握飯をくれとでも言って、今にも屋外から帰って来るような気がしますよ。

F₆K₁₀D₅ 1-1F₆₋₁K₁₀₋₁D₅₋₄ 今にも・そう・思われる 1-1 [顔]

いまにも・そうに思われる

490 胡粉^{こほん}をあつくぬった顔は、生きてい
るようであった。唇の彫りなど、いま
にもかすかに動きそうに思われる。

F₆K₁₀D₆ 1-1F₆₋₁K₁₀₋₁D₆₋₁ 今にも・そう・気がする 1-1 [顔]

いまにも・そんな気がする

491 無理に力をいれると癒着したばかりの腹の皮がいまにも裂けそうな気がする。 そんなことがありえないのだが、ありえないことが自分の上におこりそうに不安だった。

F₈K₉D₁ 2-2F₈₋₁K₉₋₁D₁₋₂ なにか・よう・思う 1-1 [母]

何か・ように思う

492 青年というものは、とかく否定好きなものなのよ。肯定は古くて否定は何
か新鮮ように思うのね。

F₈₋₃K₉₋₁D₁₋₂ なにやら・よう・思う 1-1 [お]

なにやら・よに思いました

493 なにやら肩に重たいものの落ちか
ったよに思いましたも一ときのこと
でござります。

F₈K₉D₅ 3-6F₈₋₁K₉₋₁D₅₋₉ なにか・よう・見える 2-2 [田 女]

・1 何か・ように見えた [女]

494 しっかりと落ちついておまわっている倫の身体に何か常でない鍾が洗んで

いるように見えた。〔女〕

・2 何か・ようにも見えた〔田〕

495 風呂釜の火が一しきりゆらゆらと燃え上って、ふと、この腰の全く曲っている老婆を照すと、片手に長い薪を持った老婆は、広い農家の大きな物置場の暗闇の背景からくっきり浮き上って何か呪いを呟く妖婆のようにも見えた〔田〕

F₈₋₃K₉₋₁D₅₋₄ なにやら・よう・思われる

1-1〔お〕

なにやら・ように思われて

496 そのぬくとい、湯のような涙のわが内懐^{うちまごころ}を伝うては流れるのが、なにやら肝にしみるように思われてきましてなッ

F₈₋₃K₉₋₁D₅₋₉ なにやら・よう・見える 1-1〔お〕

なにやら・ように見えます

497 暗い夜空をうつした水の面の、なにやら足を吸い込むように見えますのも、気のせいでござりましょうか。

F₈₋₃K₉₋₄D₅₋₉ どこか・らしい・見える 1-1〔女〕

どこか・らしく見える

498 瑠璃子の母の美夜がどこか芸者らしく見える垢ぬけた様子なのに似て、瑠璃子も……すっきり涼しげな風情

F₈₋₃K₉₋₁D₅₋₁、どこやら・よう・思われる 1-1〔お〕

どこやら・よに思われた

499 立ち騒いでるお人の声の中に、お寺さまの読経の声も、裏庭の蟬の声も一しょになって、どこやら遠いところから聞えてくるよに思われたのでござり

ました。

F₈K₉D₆ 9-15

F₈₋₁K₉₋₁D₆₋₁ なにか・よう・気がする 1-1〔縮〕

何か・ような気がして

500 それでも何か居候のような気がして、これが自分の家という感じがしなかった。

F₈₋₃K₉₋₁D₆₋₁ なにやら・よう・気がする 2-2〔溼 お〕

・1 何やら・ような気がして来る〔溼〕

501 寝苦しかった残暑の夜の夢も涼しい月の夜に眺めた景色も、何やら遠いむかしのことであったような気がして来る。

・2 何やら・よな気がしまして〔お〕

502 言葉につくせぬかずかずの心の重荷が、なにやらすうっと軽くなるよな気がしましてなッ

F₈₋₄K₉₋₁D₆₋₁ なんだか・よう・気がする 8-12〔夜、風₂縮溼杏女草他〕

・1 何だか・ような気がした 2-2〔女草〕

503 何だか自分の真剣な気持を水まじされているような気がした。〔草〕

・2 なんだか・ような気がして〔風〕

504 外国映画を見て、夜外へ出ると、なんだか自分がその映画の中の人物のような気がして歩き方や、手の上げ下げにまで、知らず知らずのうちに気分がのりうつっていることがありますわ。

・3 何だか・ような気がしている〔溼〕

505 おれ昨夜から急に何だか若くなったような気がしているんだ。

・4 なんだか・ような気がします〔風〕

506 なんだか、もう一週間も二週間も、こ
こへおじゃましているような気がしま
すわ

・5 何だか・ような気がする 3-5 [夜、
縮杏]

507 「どうだ気分は?」

「何だか殴られたような気がするわ。」
[杏]

・6 なんだか・ような気もした [他]

508 あまり、あっけなさすぎて、なんだ
か馬鹿にされたような気もした。

・7 何だか・ような気もします [夜]

509 こうしてお盃を取りかわすなんて、
何だか夢のような気もします。

FKDJ 2-2

F₁K₁₃D₁J₁ 1-1

F₁₋₁K₁₃₋₂D₁₋₂J₁₋₁ まるで・とはよくも名
付けた・思う・ほど 1-1 [機]

まるで・とはよくも名附けたと思えるほど

510 まるで心は肉体と一緒にびったりと
くっついたままの存在とはよくも名附
けたと思えるほど心がただ黙々と身体
の大きさに従って存在しているだけな
のだ。

F₄K₁₁D₅J₁ 1-1

F₄₋₆K₁₁₋₃D₅₋₄J₁₋₁ それこそ・ではないか・
思われる・ほど 1-1 [遠]

それこそ・ではないかと思われるほど

511 部屋自体がそれこそうどんの**茹釜**で
はないかと思われるほど暑い地下室の
従業員食堂

FKJ 1-1

F₃K₁J₁ 1-1

F₃₋₃K₁₋₂J₁₋₂ ほとんど・等しい・くらい
1-1 [明]

ほとんど・に等しいくらい

512 ほとんど反響に等しいくらい早く彼
の鼓膜を打ったその声の主は、下女で
なくてお延であった。

FKJD 1-1

F₁K₉J₃D₅ 1-1

F₁₋₁K₉₋₁J₃₋₄D₅₋₉ まるで・よう・さえ・見
える 1-1 [他]

まるで・ようにさえ見えてくる

513 やがてぼくには、その絵が、まるで
彼女の眼にうつった、ぼく自身の顔の
ようにさえ見えてくる。

FKK 3-3

F₁K₁K₉ 3-3

F₁₋₁K₁₋₃K₉₋₁ まるで・同じ・よう 1-1
[毒]

まるで・と同じような

514 それはまるで患者の死体解剖などを
すませた後、次の仕事を説明する時と
同じような落ちつきのある声だった。

F₁₋₄K₁₋₃K₉₋₁ ちょうど・同じ・よう 2-2
[太蔵]

・1 ちょうど・と同じような [太]

515 いつまで経ってもはつきりした態度
をとらぬ自分に、彼女がいらいらする
のを眺めるのは、ちょうど時間に、
元々買う気はなくネクタイを長々と選
んで見せ、売り子をやきもきさせるの
と同じような面白さがあった。

・2 ちょうど・と同じように [蔵]

516 下宿屋は、たいてい一つの庭をかこ

んで、ちょうど女郎屋のある種の造りと同じように、いやしい例を取ってすみません、蹄鉄形に部屋がならんでいるものですが、

FKKM 1-1

F₂K₁K₉M₁ 1-1F₃₋₃K₁₋₁K₉₋₁M₁₋₂ ほとんど・近い・よう
・もの 1-1 [夜]

ほとんど・に近いようなもの

517 まあほとんど骨抜きに近いようなものでしょう。

FKM 20-53

F₁K₉M₁ 5-12F₁₋₁K₉₋₁M₁₋₂ まるで・よう・もの 5-11
〔他₃ 夜₂ 明₂ 顔₂ 白〕

まるで・ようなもの

518 ブンブンという頭上通過の米機の音も至極かすかに何食わぬ風に響いて、それはまるでよそ見をしている怪物に大きな斧で殴りつけられるようなものだ。〔白〕F₁₋₄K₉₋₁M₁₋₂ ちょうど・よう・もの 1-1
〔他〕

ちょうど・ようなもの

519 理屈の上では、たしかにその通りだと納得しながら、しかもその人格を、全体としては思い浮べることができないのだから、ちょうど記憶喪失症にかかったようなものだった。F₁K₉M₂ 4-5F₁₋₁K₉₋₁M₂₋₁₁ まるで・よう・ぐあい 2-2
〔お顔〕

・1 まるで・ような工合〔顔〕

520 まるで今夜はおとなしくねないと宣言したような工合である。

・2 まるで・ような具合〔お〕

521 垣の内側はまるで屏風立てたような具合でなァ、参詣のお人の眼もとどかん具合になってるのでござります。F₁₋₃K₉₋₁M₂₋₁₁ あたかも・よう・ぐあい
2-2 [明 碑]

・1 あたかも・ような工合〔碑〕

522 茂次郎の身体が突然後へ返って、仰向けにどうと倒れたなり動かなくなった。あたかもはりきっていた旋衆が、ピーンとはじきかえったような工合である。

・2 あたかも・ような具合〔明〕

523 彼はそれを更紗の風呂敷に包んで、あたかも鳥籠でもぶら下げているような具合にしてお廷に示した。F₁₋₄K₉₋₁M₂₋₁₇ ちょうど・よう・かっこう
1-1 [碑]

ちょうど・ような恰好

524 一座を腕めまわしながら、膝の上の右拳をびくりびくりとうごめかしてくる。ちょうど蛇が鎌首をもたげるような恰好で、あまり気味がよくない。F₁K₉M₃ 8-10F₁₋₁K₉₋₁M₃₋₂ まるで・よう・感じ 4-4
〔明 顔 永 毒〕

・1 まるで・ような感じ 2-2 [明 永]

525 その彼は、自分がまるでふいに殻をむしりとられた蛹のような感じがしている。〔永〕

・2 まるで・ような・感じ 2-2 [顔 毒]

526 それはまるで、ぼくの心の底を読みとっているような奇妙な感じを与え

た。〔毒〕

F₁₋₁K₉₋₁M₃₋₃ まるで・よう・感触 1-1
〔ハ〕

まるで・ような感触

527 ザラザラした異様な風は、まるで不快な固物の撫で回すような感触を持っていた。

F₁₋₁K₉₋₁M₃₋₅ まるで・よう・気持ち 2-2
〔蔵 他〕

・1 まるで・ような気持ち〔他〕

528 男が湯船から上ると、桜の花に埋まった般者の像が、体をくねらせながら^{はんにや}餍色の汗を流し、ぼくはまるで共犯者になったような気持ちで、その拒絶の姿勢をひどく爽快に感じていたものだ。

・2 まるで・ような気持ち〔蔵〕

529 そのころの私は、まるで気がいのような気持ちになって、我れを忘れて、金で自由になる女のところへは、足のむくままでにどこへでも出かけて行きました。

F₁₋₁K₉₋₁M₃₋₁₀ まるで・よう・思い 1-1
〔他〕

まるで・ような・思い

530 その顔をとっさに拒否しなかったおまえに対しても、ぼくはまったくの別人を感じ、まるで宝石をまぶした毒薬を見るような、切ない思いをさせられていたのである。

F₁₋₂K₉₋₁M₃₋₁₀ さながら・よう・思い 1-1
〔縮〕

さながら・ような思い

531 幾日目かに温かい飯にありついて、その匂いをかいだ時、さながら天国へ昇ったような思いをするのであった。

F₁₋₄K₉₋₁M₃₋₅ ちょうど・よう・気持ち 1-1
〔永〕

ちょうど・ような・気持ち

532 それはほんとにいやな、ちょうど歯のお医者さんから無理に歯を抜かれるときのような、注射がしてあって、痛みもないのに油汗の出るような^{いや}厭な気持ちですわ。

F₂K₁M₁ 1-1

F₂₋₇K₁₋₃M₁₋₄ たとえば・同じ・こと 1-1
〔夜〕

譬えば・と同じことだ

533 自分らが幕府の御用をするというのは何も人物がえらいといって用いられているのじゃない、これは横文字を知ってるというに過ぎない、譬えば^{かおぞい}革細工だから雪駄^{せつた}直しにさせると同じことだ、

F₂K₉M₁ 4-5

F₂₋₁K₉₋₁M₁₋₂ いわば・よう・もの 3-3
〔明 永 他〕

いわば・ようなもの

534 それもみんな彼女の方から話しかけて、必要な返事だけを、いわば相手の咽喉から庄し出したようなものであった。〔明〕

F₂₋₂K₉₋₁M₁₋₂ 言えは・よう・もの 1-1
〔春〕

いえは・ようなもの

535 若木といえは聞えがいい、細い、脂っこい、みじめな、いえは気まじな枯枝のようなもの

F₂₋₂K₉₋₃M₁₋₂ 言えは・みたい・もの 1-1
〔永〕

云えは・みたいなもん

250 3. 分類結果

536 神は人間なんかどうでもいいんだ。
人間に何ものも命じないし、人間の何
ものも信じない。ただ、徹底的な無関
心としてあるのだ。…云えば、そこら
へんに転がっている石ころみたいなも
んだ。

F₃K₉M₁ 1-1

F₃₋₆K₉₋₁M₁₋₂ まあ・よう・もの 1-1 [草]
まあ・ようなもの

537 まあ小説のようなものだ

F₃K₉M₃ 1-1

F₃₋₈K₉₋₁M₃₋₅ 半分・よう・気持ち 1-1
〔他〕

半分・ような気持

538 ぼくは、半分死んだような気持で、
汗をぬぐい、仮面をかぶりなおした。

F₄K₁M₁ 1-1

F₄₋₂K₁₋₃M₁₋₄ まったく・同じ・こと 1-1
〔白〕

まったく・と同じこと

539 ひとかたまりに死んでいる。まった
く焼鳥と同じことだ。

F₄K₉M₁ 1-2

F₄₋₁K₉₋₁M₁₋₂ まさに・よう・もの 1-2
〔他₂〕

まさに・ようなもの

540 ぼくの現状は、まさに蠟細工のよう
なもので、暑さに対してはからきし意
気地がないのだ。

F₆K₁₀M₃ 1-1

F₆₋₁K₁₀₋₁M₃₋₂ 今にも・そう・感じ 1-1
〔絵〕

今にも・そんな感じ

541 中学生が次第に激してくるのが私に
わかった。それは、はりつめられた糸

が、今にもポツンと音をたててきて
しまいそんな感じであった。

F₇K₉M₁ 2-2

F₇₋₁K₉₋₁M₁₋₂ つまり・みたい・もの 1-1
〔永〕

つまり・みたいなもん

542 あるというだけのものなんだ。つま
り俺みたいなもんさ。

F₇₋₃K₉₋₁M₁₋₂ 要するに・よう・もの 1-1
〔他〕

要するに・ようなもの

543 表情というものは……どう言ったら
いいか……要するに、他人との関係を
あらわす、方程式のようなものでしょ
う。

F₈K₉M₁ 3-3

F₈₋₁K₉₋₁M₁₋₂ なにか・よう・もの 3-3
〔田 神 他〕

・1 なにか・ようなもの〔他〕

544 なにか、辛子のようなものがひりひ
り全身の毛穴を刺していた。

・2 何か・ようなもの〔田〕

545 今日天地の間に何かよるこびのよ
うなものを見ることができた。

・3 何か・ようなもの〔神〕

546 何か熱湯のような熱いものが胸の中
に込み上げて来る

F₈K₉M₃ 4-9

F₈₋₁K₉₋₁M₃₋₅ なにか・よう・気持ち 2-2
〔立 冬〕

何か・ような気持

547 私は何か胸をしめつけられるような
気持になりながら〔立〕

F₈₋₃K₉₋₁M₃₋₄ なにやら・よう・気 1-2
〔お₂〕

なにやら・よな気

- 548 そりゃもう、誰知らぬものもない話
でござりますけに、なにやら名物見て
るよな気でなァ

F₈₋₃K₉₋₁M₃₋₇ なにやら・よう・心持ち
2-5 [お、海]

・1 なにやら・よな心持 2-2 [お 海]

- 549 われにもなくうっとりしているおか
よの顔をみてますと、なにやら胸の騒
ぐよな心持でござりました。[お]

・2 何やら・よな心持 1-3 [お]

- 550 今朝ぬけて出たわが家の、二階の手
摺にかけてある手拭の、何事もないう
風に、ひらひらしているのを見ましたと
き、なにやら夢から醒めたよな心持に
なりましてなァ、

FKRM 1-1

F₁K₃R₄M₃ 1-1

F₁₋₁K₃₋₁R₄₋₁M₃₋₁ まるで・よう・一種の・
感 1-1 [金]

まるで・よな一種の・感

- 551 それはまるで、職務をあまりにも忠
実にやっけてのけたという感銘を与え、
死に方を教えて廻っていた者が、自ら
実演してみせてあやまって死んだよう
な、一種の過失と謂った感を与える。

FM 11-16

F₁M₂ 4-6

F₁₋₁M₂₋₁₁ まるで・ぐあい 1-2 [顔]

- 552 見合写真が五、六枚ほうりだされて
いる。さんざん勝手な批評を下したあ
げく、不合格としてなげだされた写真
である。まるで商品の合格不合格が審

査された工合であった。

F₁₋₁M₂₋₁₆ まるで・形 1-1 [高]

- 553 手を挙げ足を踏んで、まるで躍り狂
う形で歩き出した。

F₁₋₃M₂₋₆ あたかも・ふう 1-1 [杏]

あたかも・ふうに

- 554 商社夫人は一台のピアノのフタをと
ると、歯のようなキイのうえをあたか
も平四郎を脅かすふうに弾いてみせ
た。

F₁₋₅M₂₋₄ いかにも・おもむき 2-2 [顔
他]

- 555 仮面のアリバイは完璧であり、約束
してくれている自由は、無尽蔵だとい
うのに、もの欲しそうにふるまう自由
だけで満足しているというのは、いか
にも持ちつけない大金を手にしてとま
どっている、文なしのおもむきで、か
えって見苦しいのではあるまいか。
[他]

F₁M₃ 2-2

F₁₋₁M₃₋₂ まるで・感じ 1-1 [く]

まるで・の感じ

- 556 油でべとべとになったコール天のズ
ボンや丸っこい帽子の故か、それはま
るで猫の子の感じなのであった。

F₁₋₁M₃₋₁₂ まるで・つもり 1-1 [永]

- 557 あいつら、まるで見世物のつもりで
いやがる。

F₂M₄ 1-1

F₂₋₄M₄₋₄ 言ってみるなら・代わり 1-1
[夜]

- 558 獣の皮で造った靴が日本で言ってみ
るなら雪駄の代りだ。

F₂M₅ 1-1

F₂₋₁M₅₋₂ いわば・一種 1-1 [金]

いわば・の一種

559 その人生には自然さも欠けていれ
ば、金閣のような構造の美しさも欠け
ており、いわば痛ましい瘡癩の一種に
ほかならなかった。

F₄M₂ 1-1F₄₋₁M₂₋₁₀ まさに・概 1-1 [碑]

560 まさに死に投じて生をつかんだ概が
あったのである。

F₄M₃ 2-2F₄₋₂M₃₋₅ まったく・気持ち 1-1 [母]

561 かの女は、すっかりうれしくなって、
全く子供の遊び友達を迎える気持ち
で、彼らの席をつくった。

F₄₋₂M₃₋₁₃ まったく・印象 1-1 [草]

562 悪夢、——それはまったく悪夢の印
象だった。

F₂M₃ 3-3F₂₋₁M₃₋₂ なにか・感じ 1-1 [杏]

563 お春はからからになった大河の乏し
い水を見て、喉が乾いて、なにかわす
れ物をした感じで、乳房にぞくぞく寒
気が感じられた。

F₂₋₁M₃₋₅ なにか・気持ち 1-1 [顔]

564 衿子は何かバランスをうしなった気
持で、とおりにいっぺんの鑑賞しかでき
なくなった。

F₂₋₃M₃₋₂ どこか・感じ 1-1 [永]

どこか・の感じのする

565 山本は、安太を、まっすぐな、どこ
か子供の感じのする眼で見つめた。

FR 1-1

F₇R₄ 1-1F₇₋₂R₄₋₁ 結局・一種の 1-1 [他]

けっきょくは一種の

566 はじめの素顔も、けっきょくは一種
の覆面だったのだとあきらめて、じた
ばたせず現状に甘んじるべきではあ
るまいか。

FRKM 1-1

F₂R₄K₉M₁ 1-1

F₂₋₁R₄₋₁K₉₋₃M₁₋₂ いわば・一種の・みた
い・もの 1-1 [碑]

いわば・一種の・みたいなもの

567 いわば茂次郎の後半生は、彼のむち
ゃな前半生にたいする一種の注解みた
いなもので二つあわさってそれぞれ人
生の表裏となり、茂次郎らしい一つの
生涯ができあがった形である。

FS 5-7

F₁S₁ 1-1F₁₋₁S₁₋₁₆ まるで……級 1-1 [顔]

568 住居も、まるで部長級の住宅をちゃ
んと用意してもらうのだ。

F₁S₄ 1-1F₁₋₁S₄₋₃ まるで……扱ひ 1-1 [ま]

569 まるで私を不貞の共犯者扱いする杉
原老人の逆上ぶり

F₁S₃ 2-3

F₁₋₁S₃₋₂ まるで……さながら 2-2 [金
他]

570 一つの言葉はいつものように、まる
で袋の中へ手をつっこんで探すとき、
ほかのものに引っかかってなかなか出
て来ない品物さながら、さんざん私を
じらせて唇の上に現われた。[金]

$F_{1-1}S_{8-3}$ まるで…よろしく 1-1〔他〕

571 まるで、やっと食事制限を解かれた胃病患者よろしく、ぼくはおまえの白い額に、手首の腹の薄桃色の火傷の跡に、巻貝の裏側のようなくろぶしの線に、車体の震動にあわせて、ひげ蔓のような触手を力いっぱい繰り出し始めていたものである。

F_2S_9 1-1

$F_{2-1}S_{9-2}$ いわば…という 1-1〔ま〕

572 二人は、いわば筒井づつ、という間柄なのだ。

F_3S_7 1-1

$F_{3-6}S_{7-3}$ まあ…同然 1-1〔明〕

573 わたしなんかの眼はまあ盲目同然よ。〔明〕

FSK 2-2

$F_1S_9K_9$ 1-1

$F_{1-2}S_{9-2}K_{9-1}$ さながら…という・よう 1-1〔溼〕

さながら…というような

574 銀座通りに柳の苗木が植えつけられ、両側の歩道に朱骨の雪洞が造り花の間に連ねともされ、銀座の町がさながら田舎芝居の仲の町の場というような光景を呈し出したのは、次の年の四月ごろであった。

$F_2S_9K_9$ 1-1

$F_{2-1}S_{9-2}K_{9-1}$ いわば…という・よう 1-1〔永〕

いわば…というような

575 その醜悪への意志のなかに、社会から追いつめられているもの間にだけ可能な、しかも愛さえ超えているある

もの、いわば存在の根源で強く結びあっているというような、何か肉体の根底から強く揺り動かすものがある。

FSKD 1-1

$F_1S_8K_9D_6$ 1-1

$F_{1-3}S_{8-2}K_{9-1}D_{6-1}$ あたかも…さながら・よう・気がする 1-1〔立〕

あたかも…さながらのような気がしながら

576 バルコンの上^かに落ちて^かいる明りの影が窓を離れるにつれてだんだん幽かになりながら、暗に四方から包まれて^かいるのを、あたかも自分の心の裡さながらのような気がしながら、ぼんやりと見入っている。

FSM 4-5

$F_1S_9M_2$ 1-2

$F_{1-3}S_{9-2}M_{2-6}$ あたかも…という・ふう 1-2〔夜₂〕

・1 あたかも…というふう^にに〔夜〕

577 小さな葛籠の風呂敷包みにしてあるのを取り出して来た。あたかも、和尚の本心はその中に籠めてあるというふうに。

・2 あだかも…というふう^にに〔夜〕

578 多感で正直なこの先輩は色の褪せた着物の襟をかき合わせた。あだかもつくづく身の落魄を感ずるというふうに。

$F_3S_9M_2$ 2-2

$F_{3-6}S_{9-2}M_{2-16}$ まあ…という・形 1-1〔縮〕

579 まあ私は罐詰という形ね。

254 3. 分類結果

F₉₋₁₂S₉₋₂M₂₋₄ いささか・…という・おもむき 1-1〔流〕

いささか・…といった趣

580 染香の着物は赤い糸の刺繡を入れて朝日の松という売りこみだったが、いささか夕やけの松といった趣で、もうじき夜になりそうなけしきである。

F₇S₉M₁ 1-1

F₇₋₁S₉₋₂M₁₋₆ つまり・…という・わけ 1-1〔風〕

つまり・…ってわけ

581 「お律の中にだって、本人の知らない、魔性のものが住んでいて、なんとか縄を解いて、暴れようとしている…道原は、そういうんだよ」「つまり、戻り橋ってわけね」

J 41-290

J₁ 41-211

J₁₋₁ ほど 34-139〔顔₂₂ 田₁₂ 他₁₀ お₉ 女₉ 草₈ 毒₇ 高₆ 縮₅ 夜₄ 無₄ く₄ 金₄ 海₄ 春₃ 美₃ 母₃ 明₃ 歌₂ 流₂ 風₂ 永₂ 何 蔵 実 立ま 冬花ハ 絵 棘 裸 死〕

582 色あざやかな石竹色の軟かい刺があつて、軽く枝を捉えた彼の手を軽く刺した。それは甘える愛猫が彼の指を優しく噛む時ほどの痒さを彼に感じさせた。〔田〕

J₁₋₂ くらい 12-24〔他₈ 実₈ 永₈ 顔₂ 目 美 杏 日 歌 女 ま 白〕

・1 くらい 6-15〔他₈ 永₈ 美 歌 杏 日〕

583 潜水艦用の煙草の箱くらいの、小型な鮭の罐詰〔杏〕

・2 位〔実〕

584 その頃細巻の騙蝠傘がはやって一番

細いのはステッキ位しかないのもあつた。

・3 くらい 5-6〔顔₂ 目 女 ま 白〕

585 同じように落ちてくる爆弾でも焼夷弾と爆弾では凄みにおいて青大将と襲ぐらいの相違があり〔白〕

・4 ぐらゐ 1-2〔実₂〕

586 馬鈴薯を搾り潰して裏漉しにかけてマッシュを造り、おや指の一節ぐらゐの団子にして、マゾラ油で揚げて小さなコロケにする。

J₁₋₃ ばかり 12-27〔他₈ 顔₈ 夜₄ 明₂ 風₂ 金₂ 溼 田 お 母 流 草〕

・1 とばかり 2-2〔夜 流〕

587 見つきに水屋ができていて、まっ白な布巾がこの清潔さを見ろとばかりにかけてある。〔流〕

・2 ないばかりに〔夜〕

588 このことを聞いたお民などは腰を抜かさないばかりに驚いて、娘のお櫃に助けられながら辛うじて足を運んだ。

・3 …ぬばかり 3-3〔明 溼 風〕

589 巡査はだまれと言わぬばかり、わたくしの顔を腕み〔溼〕

・4 ばかり 5-6〔夜₂ 明 田 母 金〕

590 処女としては水の滴たるばかりの、この従妹を軽い嫉妬の眼で視た。〔明〕

・5 んばかり 6-15〔他₈ 顔₈ お 風 金 草〕

591 釣瓶はかるがると羽搏かんばかりにあがり〔金〕

J₁₋₄ より 13-20〔田₄ 他₃ 明₂ 裸₂ 夜 杏 施 ま 顔 碑 冬 金 海〕

・1 より 5-7〔明₂ 裸₂ 夜 杏 ま〕

592 ああうるさいうるさいB29よりもっ

- とうるさい〔ま〕
- ・2 よりも 8-13〔田、他、施、顔、碑、冬、金、海〕
- 593 互いに式退をかわして蟻の歩みよりも遅いくらいに近づき合い、刃を一合するまでに十分二十分の時間がかかる。〔碑〕
- J₁₋₅ というより 1-1〔母〕
- というよりも
- 594 それは答えるというよりも、裁く態度だ。
- J₂ 5-10
- J₂₋₁ でも 5-9〔冬、夜、何、ハ、他〕
- 595 近松や透谷の作を読んで泣き、華々しいナポレオンの生涯に胸を躍らせた時分は、星は優しい音楽を奏し、鳥は愛の歌でも読んでいたのだ。〔何〕
- J₂₋₂ など 1-1〔他〕
- 596 ぼくらの沈黙は、べつに会話を押し出してしまったためにおきた、真空などではなかったのだ。
- J₃ 5-6
- J₃₋₁ も 1-1〔白〕
- 597 ここは昔この家の肺病の息子がねていたそうだが、肺病の豚にも贅沢すぎる小屋ではない。
- J₃₋₃ だって 4-4〔杏、冬、永、他〕
- 598 心にだって、それにふさわしい、計算つくされた仮面が必要なのである。〔他〕
- J₃₋₅ すら 1-1〔他〕
- 599 おとぎばなしの世界ですら、醜いアヒルの子は、けっきょく、最後には白鳥に生まれ変わる権利を与えられていたのではないか

- J₄ 2-2
- J₄₋₁ に 1-1〔流〕
- 600 貰いものも山に溜って
- J₄₋₂ と 1-1〔顔〕
- 601 研の胸のなかには、ゆたかなものと、火ともえる聯想がしきりとくりかえされる。
- J₆ 20-49
- J₆₋₁ の 20-49〔杏、顔、金、他、実、母、く、毒、施、流、白、高明、春、女、冬、棘、海、遠、死〕
- 602 小型タクシーの中は蒸し風呂の暑さだ。〔海〕
- J₇ 3-3
- J₇₋₁ …であれ…であれ 1-1〔母〕
- 603 鬼であれ蛇であれ、むすこの相手になってくれるものに、何で好感を持たずにいられようか。
- J₇₋₂ …と…は 2-2〔美、風〕
- 604 すしと、ジープは、小さいとこに、ねうちがあります〔風〕
- J₈ 6-9
- J₈₋₁ …が…なら…は… 2-2〔杏、他〕
- ・1 …が…なら…は…だ〔他〕
- 605 連中の自由が磨りガラスの自由なら、ぼくのは完璧な透明ガラスの自由だ。
- ・2 …が…なら…は…であった〔杏〕
- 606 みにくい弥左衛門が蟹なら、赤ん坊はその蟹の子の蟹であった。
- J₈₋₂ …なら…が…では… 1-1〔顔〕
- 607 女中ならひまがとれるが、良人では、ひまをとるわけにもいかない。
- J₈₋₃ …を…とすれば…は… 2-2〔田、他〕
- 608 仮面を通路の拡大だとすれば、覆面は通路の遮断であり、むしろ対立的な

関係にあるはずのものなのだ。〔他〕

J₈₋₄ …を…と呼ぶなら…は…1-1〔金〕

…を…と呼ぶなら…は…である

609 非情の実践によって、猫の首を斬り、一切の矛盾、対立、自他の確執を断つたのである。これを殺人刀と呼ぶなら、趙州のそれは活人劍である。泥にまみれ、人にさげすまれる履というものを、限りなく寛容によって頭上にいただし、菩薩道を実践したのである。

J₈₋₅ …を…とすれば…は…にたとえてもいい 1-1〔他〕

…を…とすれば…は…にたとえてもいいくらいのものだ

610 前者を壁に画いた書割のドアだとすれば、これは太陽のかぐわしさがじかに吹き込んでくる、開けばなしのドアにたとえてもいいくらいのものだ。

J₈₋₆ …は…だが…も… 1-1〔他〕

611 もぐらは、ひげの先が何かに触れていないと、ノイローゼにかかってしまうそうだが、ほくも、なにかの手ざわりを求めて……猛毒であることは、重々承知しながら、薬が切れた、中毒患者のように……どうやらすでに禁断症状をおこしかけていたらしい。

J₈₋₇ …がかえって…でありむしろ…は…である 1-1〔夜〕

612 うっかりすると一切女房任せな多吉の方がかえって女房であり、むしろお隅はこの家の亭主である。

JD 15-38

J₁D₅ 2-2

J₁₋₁D₅₋₁ ほど・感じられる 1-1〔冬〕

ほど感じられた

613 萌え立つ緑色、マーガレットの白、罌粟の紅さえ心の眼に沁むほど感じられたものだ。

J₁₋₅D₅₋₁ というより・感じられる 1-1〔田〕

というよりも・としか・感じられなかった

614 農作物が刈りとられているというよりも、紫色の土が今むくむくと持ち上ってくるとしか、彼の目には感じられなかった。

J₂D₄ 1-1

J₂₋₁D₄₋₁ でも・なる 1-1〔永〕

にでもなって

615 僕はあなたの神様にでもなっていたのでしょう。

J₂D₆ 1-1

J₂₋₁D₆₋₁ でも・気がする 1-1〔永〕

でも・気がして

616 彼は、気管にタールでも付着して行く気がして咳き込む。

J₃D₁ 2-3

J₃₋₁D₁₋₁₂ も・たとえる 1-1〔夜〕

にも譬えて

617 百姓らが二百十日の大嵐にも譬えて恐怖していたのも、またその勅使代理の一行であった。

J₃₋₆D₁₋₂ まで・思う 1-1〔高〕

とまで思った

618 真逆さまに滝の中へ飛び込んで、女滝をしかと抱いたとまで思った。

J₃₋₆D₁₋₁₃ まで・なぞらえる 1-1〔夜〕

にまでなぞらえて

619 それがまたまるで見かけ倒しだなぞと、上州縮の唄にまでなぞらえて愚

弄するものがある

J₃D₃ 3-10

J₃₋₁D₃₋₁ も・言う 3-9 [夜₇ 蔵 歌]

・1 ともいうべき 3-3 [夜 蔵 歌]
620 友だちはなし、女はなし、私の命と
もいうべき着物はなし、[蔵]

・2 とも言うべき 1-5 [夜₅]
621 傾きかけた徳川幕府の大身代をどう
かして支えられるだけ支えようとして
いるような、その大番頭の一人とも言
うべき小栗上野の口から出た言葉

・3 とも言われよう [夜]
622 樹木の繁った弁天の境内は、蝶の翅
に置く唯一の美しい斑紋とも言われよ
う。

J₃₋₁D₃₋₃ も・呼ぶ 1-1 [夜]

とも呼べるべき
623 あの鈴の屋の翁こそ、「近代」の
人の父とも呼べるべき人であった。

J₃D₃ 5-6

J₃₋₁D₃₋₃ も・思える 1-1 [立]

かとも思えた
624 かつて私たちの幸福をそこに完全に
描き出したかとも思えたあの初夏の夕
方のそれに似た——しかしそれとは全
然異った秋の午前の光

J₃₋₁D₃₋₄ も・思われる 2-2 [高 金]

・1 か…かとも思われる [高]
625 姿も寝れ容も細って、流るる音さえ
別様に、泣くか、怨むかとも思われる
が、あわれにも優しい女滝じゃ。

・2 かとも思われた [金]
626 私はどこやらに何か美しい小さな色
彩の渦のようなものを感じていた。そ
れは今見てきた天井画の極彩色の残像

かとも思われた。

J₃₋₁D₃₋₉ も・見える 2-3 [母₂ 風]

・1 とも見えた [風]
627 雨にふり込められた、中年の道楽者
が、女給たちの後片づけを無視して、
あれこれと胸算用している姿とも見え
た。
・2 にも見える 1-2 [母₂]
628 わずかに得た人生の須臾の間の安ら
かな時間を、ひたすら受け容れようと
して、日常の生活意識を杜絶した人々
がみんな蝶にも見える。

J₃D₁₂ 6-10

J₃₋₁D₁₂₋₁ も・似る 6-10 [金₃ 縮₂ 杏₂ 田
母 他]

・1 にも似た 4-5 [縮₂ 杏 母 金]
629 媚薬の痺れにも似た中歐の青深い、
初夏の晴れた空 [母]
・2 にも似たところがあって [他]
630 「虚数」という数がある。二乗する
と、マイナスになってしまう、おかし
な数だ。仮面というやつにも、似たと
ころがあって、仮面に仮面を重ね合わ
せると、逆に何もかぶっていないのと
同じことになってしまうらしいのであ
る。

・3 にも似ていた [田]
631 それは気高い愛嬌のある微笑をもっ
た女の口の端にも似ていた。

・4 にも似ている 2-3 [金₂ 杏]
632 吃りが、最初の音を発するために焦
りにあせているあいだ、彼は内界の
濃密な霧から身を引き離そうとじたば
たしている小鳥にも似ている。[金]

J₃D₁₃ 4-4

J₃₋₁D₁₃₋₁ も・当たる 3-3〔夜 母 顔〕

・1 にも当たった〔夜〕

633 過ぐる七ヶ月は寛齋にとって、二年にも三年にも当たった。

・2 にもあたる〔顔〕

634 年ごろの娘にとっては、社交界は商品の見本市にもあたる

・3 にも当る〔母〕

635 そこはもたれ壁の樹目の幾側かに取り囲まれ、花の芯にも当る位置にあった。

J₃₋₃D₁₃₋₃ だって・相当する 1-1〔他〕

636 俳優でなくても、顔くらいは持っているからね。魚にだって、昆虫にだって、ちゃんと顔くらいある。椅子や机にだって、それに相当するものがあった、気に入ったり、入れられなかったりするわけだ。

J₃D₁₄ 1-1

J₃₋₁D₁₄₋₁ も・劣る 1-1〔顔〕

にもおとる

637 耕を恋しいと思うことは、おのれが犬畜生にもおとることになる。

JDJ 2-2

J₂D₃J₁ 1-1

J₂₋₁D₃₋₁J₁₋₁ でも・言う・ほど 1-1〔美〕
とでも云いたいほど

638 両側から大木が被さり合って、それゆえ蟬のトンネルとでも云いたいほど、騒々しく鳴きしきる、急な坂道をおりて行った。

J₃D₃J₁ 1-1

J₃₋₁D₃₋₁J₁₋₁ も・言う・ほど 1-1〔田〕

とも言いたいほど

639 それらの虫どもは、夏の自然の端々を粉にしたとも言いたいほどのごく微細な、ただ青いだけの虫であった。

JDK 1-3

J₂D₅K₉ 1-2

J₂₋₁D₅₋₁K₉₋₁ でも・思われる・よう 1-2
〔夜₂〕

でも・かと思われるような

640 新しい青い部屋の聲は、驚でも啼き出すかと思われるような温かい空気に香って

J₃D₁K₉ 1-1

J₃₋₁D₁₋₁K₉₋₁ も・見る・よう 1-1〔夜〕

とも見るような

641 年若な日本の政治家の多い新政府の人たちを自分の生徒とも見るような心構え

JF 2-2

J₁F₃ 2-2

J₁₋₅F₃₋₇ というより・むしろ 2-2〔明流〕

・1 と云うよりむしろ〔流〕

642 味噌汁の大根を刻みながら、聴くと云うよりむしろ堪えていた。

・2 というよりもむしろ〔明〕

643 彼らは叔父甥というよりもむしろ親子であった。

JFD 2-2

J₁F₃D₃ 1-1

J₁₋₅F₃₋₇D₃₋₁ というより・むしろ・言う 1-1〔金〕

というよりもむしろ・と云ったほうがよ

かった

644 実際その出来合の手は、手というよりむしろ手袋と云ったほうがよかった。

J₅F₅D₁ 1-1

J₅₋₁F₅₋₁D₁₋₂ というものは・つくづく・思う 1-1 [顔]

ってつくづく・だと思った

645 女って、つくづく化物だと思ったわね。

JFJK 1-1

J₁F₃J₂K₉ 1-1

J₁₋₅F₈₋₁J₂₋₁K₉₋₁ というより・なにか・でも・よう 1-1 [毒]

と言うよりは・なにか・でも・ような

646 冷たさと言うよりは私を一人の患者でなく、なにか実験の物体でも取り扱っているような正確さ、非常さがあった。

JFK 2-2

J₁F₃K₁ 1-1

J₁₋₅F₃₋₇K₁₋₁ というより・むしろ・近い 1-1 [他]

というよりはむしろ・に近い

647 あの仮面は、仮面というよりはむしろ新しい素顔に近いものだった。

J₃F₁₂K₂ 1-1

J₃₋₂F₁₂₋₂K₂₋₉ だって・あんまり・変わらない 1-1 [風]

だって・だってあんまり・と変らない

648 お客だって友達だって、あんまり犬と変らないわ。

JFSK 1-1

J₁F₂S₉K₉ 1-1

J₁₋₅F₂₋₁S₉₋₂K₉₋₁ というより・いわば・… というよう 1-1 [蔵]

というよりはいわば・というような

649 客と、いうよりは、いわば遊廓などの地まわりというような連中

JJ 5-12

J₁J₁ 1-1

J₁₋₆J₁₋₇ に比べて・のほうが 1-1 [杏]

650 小説家平山平四郎という人間の素性も、その血統にいたっては一生つながれている犬にくらべて、犬の方がよほど正しいと見た方がよい。

J₃J₁ 4-11

J₃₋₁J₁₋₁ も・ほど 2-2 [高冬]

651 「天使の羽搏きもきこえるほどになった」咲子を、神は召していただけるのですか[冬]

J₃₋₁J₁₋₃ も・ばかり 2-9 [夜、溼]

・1 も・ないばかりに [夜]

652 大事な入れ歯も吹き出さないばかりに笑って

・2 も・ばかり 2-8 [夜、溼]

653 奉納の徹は竿も折れるばかり [溼]

JK 33-151

J₁K₉ 1-1

J₁₋₄K₉₋₁ より・よう 1-1 [母]

…より・ように

654 かの女を妻と思うより娘のように愛撫し

J₂K₆ 1-1

J₂₋₂K₆₋₁ など・比でない 1-1 [他]

などの比ではない

655 人間が自分の分泌物で日常生活を汚染していく度合は、どうやら犬の小便などの比ではないらしい。

J₂K₉ 31-118

J₂₋₁K₉₋₁ でも・よう 30-104 [夜₁₅ 永₈ 他₇ 明₆ 立₅ 女₄ 流₃ 縮₂ 神₁ 母₀ く₀ 顔₀ 毒₀ 春₀ 田₀ 蔵₀ 何₀ 風₀ 冬₀ 絵₀ 海₀ 溼機 歌まハ金草遠太]

・1 でもあるかのようだった [金]

656 雲は自然のあてどない衝動の反映でもあるかのようだった。

・2 でも・かのようで [夜]

657 父のような人を都会に置いて考えることすら何か耐えがたい不調和ででもあるかのようで、やはり父は木曾の山の中の方に置いて考えたいもの

・3 でも・かのような 2-2 [夜 く]

658 夫婦で意見が一致していると言われたことが、何か明子に気の毒なことででもあったかのような一座の空気なのであった。[く]

・4 でも・かのように 7-12 [立₃ 田₂ 風₂ 冬₂ 夜₁ 母₁]

659 くつの底に、精巧なバネででも仕かけてあるかのように、まっすぐな二本の脚がコンクリートの上で少しはずんだ [風]

・5 でも・ようで [機]

660 そうして軽部に殴られているうちに今度は不思議にも軽部と私とが示し合わせて彼に殴らせてでもいるようで…軽部と私とが共謀して打った芝居みたい

・6 でも・ようである [顔]

661 このひとは何をいわれても、心に刺さってこないとでも思っているようである。

・7 でも・ような 14-25 [夜₃ 明₃ 流₃ 永₃ 母₂ 女₂ 他₂ 縮 春 蔵 立 顔 毒 海]

662 医者はピンセットのさきにずるずると血膿ちみよに汚れて重そうに垂れ下るガゼを、そばでも食うような手つきで引っぱり上げる [海]

・8 でも・ように 26-61 [夜₉ 永₈ 他₇ 神₇ 毒₇ 縮₆ 明₆ く₆ 女₆ 春₅ 蔵₅ 立₅ 流₅ 顔₅ 絵₅ 何 溼 田 歌 ま 母 ハ 草 遠 太 海]

663 かの女たちの薄幸はつこうな生活を芝居でも見るように、上から見下してよるこぶのだ [溼]

J₂₋₁K₉₋₂ でも・ごとし 1-1 [何]

でも・ごとく

664 救助の舟でも来たごとく望みをかけて待っていた。

J₂₋₁K₉₋₃ でも・みたい 1-1 [草]

でも・みたいに

665 僕は悪夢の中にでもいるみたいに、遠ざかって行く藤木の後ろ姿を眺めていた。

J₂₋₃K₉₋₁ かなにか・よう 4-7 [歌₃ 田₂ 夜 無]

・1 かなにかのような [歌]

666 安吉がこの町へきた時の県庁は昔の大名屋敷がかなのような木造建築だった。

・2 かなにかのように 3-5 [田₂ 歌₂ 夜]

667 沢村夫人は叔父さんにせがんでいる姪がかなのように炬燵のなかで膝をゆすった。[歌]

- ・3 か何か・ような〔無〕
668 樹木か何か播さぶらわれているような
自分の心持を訴えるのであった。
- J₂₋₁K₉₋₁ かな(ん)ぞ・よう 4-5〔母₂
立金他〕
- ・1 かなぞのように 1-2〔母₂〕
669 乗りものを騎馬かなぞのように鞭う
って早く賑やかな街へ進めたい
- ・2 かなんぞのような〔他〕
670 その触感をもったおまえがなんらか
の形で、他人を受け入れる準備をして
いるのだと思うと、ぼくは自分が、間
男されたるうに、理由もなく叩き出さ
れた不能者かなんぞのような、たまら
なくみじめな気持になってしまうのだ
った。
- ・3 かなんぞのように〔立〕
671 ときおり軟らかな風が向うの生牆の
間から抑えつけられていた呼吸かなん
ぞのように押し出されて、私たちの前
にしている茂みにまで達し
- ・4 か何ぞのように〔金〕
672 金閣を焼くという考えは、仕立卸し
の洋服か何ぞのように、つくづくびつ
たりと私の身についた。
- J₂K₁₀ 5-7
- J₂₋₁K₁₀₋₁ でも・そう 4-6〔縮₂ 女₂ 永
海〕
- ・1 でも・そう〔女〕
673 私がお嫁さんになったらこんなでし
ょう。強いわね。雑刀でもかまえそう
ね
- ・2 でも・そうで〔海〕
674 もっとも、この男の方から追いつが
るような眼つきで、こちらを見られた

としたら、それはそれで、苦しい弁解
でもきかされそうで、こちらが逃げ出
すかもしれないけれど

- ・3 でも・そうな 2-3〔縮₂ 永〕
675 宿屋の構えも広重の画にでもありそ
うな、脚絆甲掛けに両掛けの旅客でも
草鞋をぬいでいそうな広い土間が上り
口に取ってあったり〔縮〕
- ・4 でも・そうに〔女〕
676 いくら夕陽でも招きかえしそうに我
が儘な行友でも死んでゆく美夜の生命
をとり戻すことは出きないのだ。
- J₂₋₁K₁₀₋₂ でも・かねない 1-1〔ハ〕
677 結局、それは、あなたが文学となら
心中でもやりかねないけど、あたしと
いう人間とはそれが出来ないというこ
とかしら

J₂K₁ 2-4

J₃₋₁K₁₋₂ も・等しい 2-4〔顔₃ 夜〕

にもひとしい

- 678 追いつめられた衾子の断末魔にもひ
としい立場が感じられるからだ。〔顔〕

J₃K₂ 3-3

J₃₋₁K₂₋₁ も・同様 2-2〔夜 永〕

・1 も同様〔永〕

- 679 親戚なんか、ないも同様ですわ。

・2 も同様な〔夜〕

- 680 あまつさえ外夷の応接には骨肉も同
様な親切を見せながら、

J₃₋₁K₂₋₄ も・一つ 1-1〔お〕

- 681 ほんとやでエ、お仙ちゃんさえいて
たら、ほんに金のなる木植えたもひと
つやて留さんも言うてたわ

J₃K₃ 3-4

J₃₋₁K₃₋₁ も同然 3-4〔顔₂ ま他〕

262 3. 分類結果

682 耕さんにとっては、寝首をかかれた
ものも同然ですわ。〔顔〕

J₃K₅ 2-2

J₃₋₃K₅₋₁ だって・その通り 1-1〔夜〕

683 ある駒は飛ぶことは出来ても一歩ず
つ進むことは知らない。ある駒はまた、
一歩ずつ進むことは出きても飛ぶこと
は知らない。この街道に生まれて来る
人間だって、その通りさ。

J₃₋₃K₅₋₂ だって・そうだ 1-1〔遷〕

だってそうじゃないですか

684 一度崩れてしまったら、二度よくな
ることはないですからね。芝居でも遊
芸でもそうでしょう。文章だってそう
じゃないですか。

J₃K₉ 5-8

J₃₋₁K₉₋₁ も・よう 3-5〔お、縮 杏〕

・1 も・よurna 2-4〔お、縮〕

685 近在は申すもおろか、京大阪、門司
博多の遠方から、汽車に乗って銭捨て
にくる客のために、町も破れるよurna
繁昌でござりますが、〔お〕

・2 も・よurna〔杏〕

686 のんきな男は石垣もくずれるよurna
笑い、

J₃₋₂K₉₋₂ もまた・ごとし 2-2〔夜 冬〕

・1 亦如此也〔夜〕

687 然 艸有_も 蘭菊之芳_{らんぎくのほりあり}
而 木有_も 松柏之操_{しょうはくのそうあり}焉。
人亦猶如_{ひとまたなかくのごときものなり}此也

・2 もまたかくのごとく〔冬〕

688 思想もまたかくのごとく掘り返せば
ますます燃え立つ

J₃₋₃K₉₋₁ だって・よう 1-1〔杏〕

だって・よurnaもの

689 それはね、女の人の心にはいつもピ
アノのような音色があるという意味な
んだよ、愛情だってピアノが鳴るよurna
なものじゃないか。

J₃K₁₀ 3-3

J₃₋₁K₁₀₋₁ も・そう 1-1〔く〕

も・よurna

690 その感情のまんま、息も詰まってし
まいよurna圧迫された声になってい
た。

J₃₋₁K₁₀₋₂ も・かねない 1-1〔他〕

にもなりかねない

691 油断をしていると、仮面を裏切る証
拠資料の羅列にもなりかねない

J₃₋₆K₁₀₋₁ まで・そう 1-1〔女〕

まで・よurna

692 華奢^{きやしゃ}すぎるほど細い身体つきで骨ま
で軟かよurnaに繊細

JKD 10-11

J₁K₉D₅ 1-1

J₁₋₅K₉₋₁D₅₋₃ というより・よう・思える
1-1〔海〕

というよりは・よurnaにも思えた

693 父親というよりは遠い親戚のよurna
も思えた。

J₂K₉D₁ 4-4

J₂₋₁K₉₋₁D₁₋₂ でも・よう・思う 1-1〔く〕

でも・よurnaにおもった

694 この中にうちの子供たちだけを取り
残しておいたのか、と明子は捨子でも
しておいたよurnaにおもった。

J₂₋₃K₉₋₁D₁₋₁ かなにか・よう・感じる 1-

1〔他〕

か何かのよurnaに・感じて

695 安っぽいテーブルに向って、焼肉を注文している自分を、ぼくは映画の主人公が何かのように、極彩色で感じていたものである。

J₂₋₃K₉₋₁D₁₋₂ かなにか・よう・思う 1-1
〔風〕

かなにかのように思いながら

696 ここにいる自分自身を、借物物かなにかのように思いながら、

J₂₋₄K₉₋₁D₁₋₁₅ かな(ん)ぞ・よう・扱う 1-1
〔流〕

かなんぞのように扱う

697 包み紙も大切に大切に金箔きんぱくかなんぞのように扱う。

J₂K₉D₅ 3-4

J₂₋₁K₉₋₁D₅₋₈ でも・よう・錯覚される 1-1
〔冬〕

でも・ように錯覚される

698 三日続いて起ったことの、はじめの日はほんとうに冬のように、次の日は春、その次の日は秋、のことででもあったように錯覚されることもある。

J₂₋₁K₉₋₁D₅₋₉ でも・よう・見える 1-1
〔永〕

でもあるかのように見える

699 商店街と露店の間に人々がひしめき合い、駅に近いあたりは渦を巻いている。それが彼には、お祭りの人出でもあるかのように見える。

J₂₋₂K₉₋₁D₅₋₄ など・よう・思われる 1-1
〔冬〕

かなどのように思われてくる

700 一昔前の風俗をして伏し目がちに、すこし離れて、寒風の中を裾をおさえながら、屋敷町の垣根にそって歩いて

くる彼女をみていると、私も、古い明治時代の東京を歩いている人物かなどのように思われてくるのだった

J₂₋₃K₉₋₁D₅₋₄ かなにか・よう・思われる 1-1
〔歌〕

かなどのように思われて

701 佐野が入口わきのテーブルで飲めることは、今夜の安吉には不吉な前兆かなどのように思われて生理的に不快であった。

J₂K₉D₆ 2-2

J₂₋₁K₉₋₁D₆₋₁ でも・よう・気がする 2-2
〔夜 縮〕

でも・ような気がする

702 たまに返してもらえば、思わぬ株の配当でも貰ったような気がするのだった。〔縮〕

JKJ 2-2

J₃K₇J₁ 2-2

J₃₋₁K₇₋₃J₁₋₁ も・ひけをとらない・ほど 1-1
〔顔〕

にもひけをとらないほど

703 和室だったものを洋風になおしたもののだが、ホテルの部屋にもひけをとらないほど調度品でかざられている。

J₃₋₁K₇₋₄J₁₋₂ も・及ばない・くらい 1-1
〔裸〕

704 じっさい、壺のなかにはエムデン海溝もおよばないくらいの深さと渾沌こんとんがよどんでいた。

JKM 7-8

J₂K₉M₃ 4-4

J₂₋₁K₉₋₁M₃₋₅ でも・よう・気持ち 3-3

264 3. 分類結果

〔縮 蔵 冬〕

・1 でも・ような気持 2-2〔縮 冬〕

705 彼らは寄り寄り秘密に相語らい、監獄部屋でも脱出するような気持で〔縮〕

・2 でも・ような・気持ち〔蔵〕

706 私は酒でも飲んだような愉快的な気持ちで下宿に帰って行きました。

J₂₋₁K₉₋₁M₃₋₆ でも・よう・気分 1-1〔明〕

でも・ような気分

707 まったく形を成さないこの家の奇怪な生活と、変幻きわまりなきこの妙な家庭の内情が、朝から晩まで恐ろしい夢でも見ているような気分になって、僕の頭に祟ってくるんです。

J₃K₁M₁ 2-3

J₃₋₁K₁₋₃M₁₋₄ も・同じ・こと 2-2〔顔他〕

・1 もおなじこと〔顔〕

708 応接間にはいってしまえば、家のなかで隔離されたもおなじことになる。

・2 も同じこと〔他〕

709 これはもう、黒板に描いた墨絵も同じことである。

J₃₋₃K₁₋₃M₁₋₄ だって・同じ・こと 1-1〔他〕

710 ある場合には、小切手や電報為替が、また別の場合には宝石や貴金属が、かえて便利なことがある。魂や心だって、同じことで、顔でしか流通させられないと思うのは、習慣からくる一種の先入観なのではあるまいか。

J₃K₉M₃ 1-1

J₃₋₁K₉₋₁M₃₋₇ も・よう・心持ち 1-1〔お〕も・ような心持

711 私は息の根もとまったような心持で

おかよの体をのけました。

JM 5-7

J₁M₃ 2-4

J₁₋₁M₃₋₂ ほど・感じ 1-1〔顔〕

ほどの感じ

712 遺骨が手もとにのこっていたあいだは、まだ何かのこっているような気持だったが、わたししてしまうと、さっぱりとした気持である。…羽織をぬぎすてたほどの感じは、否定することができなかった。

J₁₋₁M₃₋₅ ほど・気持ち 1-1〔顔〕

ほどの気持

713 田能村清州には、耕のアメリカ行をちょっと九州あたりへやるほどの気持らしい。

J₁₋₁M₃₋₁₀ ほど・思い 1-1〔他〕

ほどの思い

714 暴動の光景に、息づまるほどの思いをさせられた

J₁₋₃M₃₋₁₀ ばかり・思い 1-1〔他〕

んばかりの思い

715 幼いぼくは、カンカン帽の後ろ姿を、胸も張り裂けんばかりの思いで見送りながら

J₂M₃ 2-2

J₂₋₁M₃₋₄ でも・気 1-1〔何〕

716 荒海の波の音を聞いて唄うと百万の蒙古勢でも退治する気になる。

J₂₋₁M₃₋₁₀ でも・思い 1-1〔夜〕

717 彼は知らない世界にでも入って行く思いで、

J₃M₃ 1-1

J₃₋₁M₃₋₁₀ も・思い 1-1〔お〕

718 人の身の定めなきに胸もふさがる思
いでござります。

JS 2-2

J₂S₉ 1-1

J₂₋₁S₉₋₂ でも…という 1-1 [母]

とでもいった

719 社会教育の参考資料にとでもいった
調査的な聞きぶりだった。

J₃S₈ 1-1

J₃₋₁S₈₋₃ も…よろしく 1-1 [溼]

720 種田の家はある時はさながら講中の
寄合い所、ある時は女優の遊び場、あ
る時はスポーツの練習場もよろしくと
いうありさま。

JSK 3-4

J₂S₉K₉ 3-4

J₂₋₁S₉₋₂K₉₋₁ でも…という・よう 3-4

[他₂ 風 永]

・1 とでもいうような [風]

721 同意を与えなかった結婚に、破れて
間もない娘のにおいを、ことさらにさ
ける、とでもいうような様子に見えた。

・2 とでもいうように 2-3 [他₂ 永]

722 娘は、外からの刺激を受け入れる器
官を一切持ち合わせていないとでもい
うように、なんの反応も示さない。
[他]

JSKM 1-1

J₂S₉K₉M₁ 1-1

J₂₋₁S₉₋₂K₉₋₁M₁₋₂ でも…という・よう・

もの 1-1 [冬]

とでもいうようなもの

723 帰りにも、後からきた従妹とぶつか
りそうになって避けるとき、不自然な、
しかし必然な引力とでもいうようなも
のによって、彼の眼とまた出逢った。

JSM 1-1

J₁S₉M₃ 1-1

J₁₋₅S₉₋₂M₃₋₂ というより…という・感じ
1-1 [毒]

724 女というより遅しい青年という感じ
がした。

K 50-4222

K₁ 18-41

K₁₋₁ 近い 4-6 [夜、明 冬 他]

・1 に近い 3-3 [夜 明 冬]

725 何喰わぬ顔をしながら、それがたと
え無意識ではあるにしても、両方に火
をつけて楽しんでる小悪魔に近いか
も知れぬ。[冬]

・2 に近く 1-2 [夜]

726 二つの天狗の面が半蔵の注意をひい
た。耳のあたりまで裂けて牙齒のある
口は獣のものに近く、隆い鼻は鳥の
ものに近く、黄金の色に光った眼は神の
ものに近い。

・3 のほうに近い [他]

727 その点では、仮面よりも、かえて
縋帯の覆面のほうに近いかも知れな
い。

K₁₋₂ 等しい 6-13 [顔、金、縮 母 永
棘]

・1 と等しくなります 1-2 [金₂]

728 それを包む私の心の暗黒が、この無
数の灯を包む夜の暗黒と等しくなりま

すように！〔金〕

•2 にひとしい 2-4 〔顔、金〕

729 それを見たとなん、私が表現しよう
と思う大切なものは、瓦にひとしい無
価値なものに墮ちてしまう。〔金〕

•3 に等しい 4-4 〔母 永 金 棘〕

730 ちらと私を見ると、また伏目になっ
て、蚕が桑の葉を噛むのに等しい単調
な咀嚼をつづけた。〔金〕

•4 にひとしかった 〔顔〕

731 寝室にガスをともすことが、どうい
うことを意味しているか、それは夫婦
だけに通じる暗号にひとしかった。

•5 に等しかった 2-2 〔縮 顔〕

732 目に見えない金が消え、先の生活の
保証のつく当てもなく、ゴールのない
レースを無限に駆けつづけているに等
しかった。〔縮〕

K₁₋₃ 同じ 14-19 〔顔、溼、冬、夜 縮 何
明 実 杏 歌 母 流 金 他〕

•1 とおなじ 2-4 〔顔、杏〕

733 知っている旅館でしたら、玄関で私
は死んだとおなじになりますわ。〔顔〕

•2 と同じ 10-11 〔冬、夜 明 溼 実 歌
流 顔 金 他〕

734 四竹を鳴らして説経を唱っていた娘
が、三味線をひいて流行唄を歌う姉さ
んになったのは子子が蚊になり、オボ
コがイナになり、イナがボラになった
と同じでこれは自然の進化である。
〔溼〕

•3 と同じく 3-3 〔縮 何 溼〕

735 日々世界の色は褪せ行き、幾万の人
間の響動は葦や尾花の戦ぐと同じく無
意義に聞えるようになった。〔何〕

•4 に同じ 〔母〕

736 それは遠い昔、たった一つしたかの
女のいちがけの、辛い悲しい恋物語を
ふざけた浮気筋や、出世の近道の男釣
りの経歴と一緒に噂される心外な不愉
快さに同じだった。

K₁₋₄ そっくりだ 3-3 〔田 金 他〕

とそっくりな

737 彼の半長靴が駆ける道のゆくてには
戦争における死とそっくりな貌をした
朝焼けのような無秩序があった。〔金〕

K₂ 6-8

K₂₋₁ 同様 2-3 〔他、金〕

•1 と同様 2-2 〔金 他〕

738 そのとき私の内には異様な衝動が生
まれていた。大事な言葉が逆ろうと
して吃音に妨げられる時と同様、この
衝動は私の咽喉で燃えていた。〔金〕

•2 と同様に 〔他〕

739 いや、むしろ、発育のおくれた娘だ
からこそ、かえて見抜かれてしまっ
たというべきだろう。仮面が、犬をご
まかしきれないのと同様に。

K₂₋₂ 同列 1-1 〔母〕

と同列

740 昔の恋人の娘をむすこの許嫁にした
御都合主義も、客に茶葉ばかりむやみ
にすすめにかかる夫人の無知と同列な
のではなからうか、

K₂₋₄ 一つ 1-1 〔春〕

と一つ

741 若宮のおやじやおふくろのああ若宮
を大切にしたのはつまり猿廻しが猿を
大切にする…手めえたちの稼業道具を
大切にするのと一つだったんだ。

K₂₋₅ 一般 1-1 [明]

と一般

742 津田の言葉は誰にでもわかりきった理屈なだけに、同情に飢えていそうな相手の気分を残酷に射貫いたと一般であった。

K₂₋₉ 変わらない 1-1 [棘]

と変わらない

743 週の二回の出校日は、禁忌の場所に囲まれていて、薄い氷の上を歩くのと変わらない。

K₂₋₁₁ 選ぶところがない 1-1 [他]

と選ぶところはない

744 面の皮にどんな看板を下げているとその中身は、いずれ難破船の漂流者と選ぶところはないはずである。

K₃ 2-2K₃₋₁ 同然 2-2 [顔 永]

と同然

745 復員してから、女への興味をすっかり失ったように一步も外出しないで、家にとじこもっているのだ。そう、彼は死んでいるのと同然なのだ。[永]

K₆ 1-4K₆₋₁ わからない 1-4 [杏]

・1 だか…だか…だか判らない [杏]

746 男と寝てみなければ判らない…とこの親父だか友達だか、どこからか、雇われて来た口達者な男だか判らない奴がぬげぬげと喋った。

・2 だか…だかわからない 1-2 [杏₂]

747 丸山看護婦は赤ちゃんはびんびんですといい、平四郎は生後五日目の、全くのねずみの子だか、何かの臓物だかわからないものを眺めた。

・3 だか…だか判らない [杏]

748 青井のおかつは、りえ子が抱いた赤ん坊を覗きこんで、ねずみの子だか、人間の子だか判らないものを、いまは抱きあげることが控えられた。

K₇ 2-2K₇₋₄ 及ばない 2-2 [美 杏]

・1 に・及ばず [美]

749 べた金の襟章も、一片の乳糖にさえ及ばず、薄く霞んでしまった。

・2 に・及ばない [杏]

750 どんなに、小鳥の声が美しいといっても、人間の、女の人のよい声には及ばない。

K₉ 50-4104K₉₋₁ よう 50-3875 [顔⁹⁷⁶ 他²⁷⁷ 夜²⁵⁸

女²⁵⁰ 金²²⁹ 草¹⁷⁵ 明¹⁶⁹ 冬¹³⁷ 永¹³³ 母¹²⁵
く¹²⁵ 杏¹⁰⁸ 田¹⁰² 毒⁹² 施⁹⁰ 海⁸⁸ 縮⁶¹ 流⁵⁸
お⁵⁴ 歌⁴⁹ 高⁴⁸ 風⁴⁴ 神³⁷ 花³⁶ 春³⁵ 絵³⁵
死³⁴ 蔵³² 無³¹ 棘³¹ 遠²⁸ 立²⁶ ハ²⁴ 裸²⁴
白²² 太¹⁷ 溼¹⁵ ま¹⁴ 何¹³ 碑¹² 機¹¹ 実¹⁰
目⁹ 美⁸ 娼⁷ 樽⁵ 日⁵ 静⁴ ひ 山]

・1 かつて…ように今またその形を変えたもの [夜]

751 かつて水戸から起ったものが筑波の旗上げとなり、尊攘の意志の表示ともなう、活きた歴史を流れたように、今またその形を変えたものが佐賀にも、土佐にも、薩摩にも生き返りつつあるのかと疑った。

・2 かのよう。1-2 [夜₂]

752 店座敷の狭いところに三人枕を並べたが、遅くまで母親に話しかける彼女の声は尽きることを知らないかのよう。

- 3 かのようだ 3-3 [風 金 棘]
753 左右にゆるく、車輛をかしげながら、
自分の速力を、ひそかにたのしんでいる
かのようだ。[風]
- 4 かのようだった 2-7 [金、立]
754 春と夏とがほとんど同じに押し寄せ
て来たかのようだった。[立]
- 5 かのようで [機]
755 今まで殴られていた屋敷の目前で彼
の罪を引き受けて殴られてやる方が屋
敷にこれを見よと言うかのようで全く
晴れ晴れとして気持ちがいのだ。
- 6 かのようであった 4-6 [金、夜、山、冬]
756 雲がまた含羞から醒め切らぬかのよ
うであった。[金]
- 7 かのようである 3-3 [夜、流、金]
757 灌木の葉末のおびただしい露には、
朝焼けの名残りが映って、時ならぬ淡
紅の実が生ったかのようである。[金]
- 8 かのような 5-13 [夜、顔、神、風、金]
758 衿子は自分が線路に立っているかの
ような絶望をおぼえる。[顔]
- 9 かのようには 13-35 [夜、顔、永、金、田、立、冬、海、機、く、草、棘、娼]
759 その瞬間に、輝雄と私の交渉がフ
ィルムを逆に映し出すかのようには、ぐ
んぐんと心の中に再生してきた。[冬]
- 10 (名詞) かのようには [歌]
760 荒れた眼つきをしてケダモノかのよ
うにどンドン帰って行く生徒に幾組も
すれちがった。
- 11 か…のような [白]
761 眼の細々とうとうしい、瓜実顔の

- 古風な人形か能面のような美しい顔立
ち
- 12 でしかないような [白]
762 その芸術の前ではただ一粒の塵埃で
しかないような二百円の給料が…骨身
にからみつき生存の根底をゆさぶるよ
うな大きな苦悶になる
- 13 よう 4-6 [高、杏、母、棘]
763 黒い氷の塊のよう、吐き出す冷気が
しんとおそった。[杏]
- 14 ようじゃ 1-2 [高₂]
764 他愛のない、力のない、膝の上へわ
がねて宝物を守護するようじゃ。
- 15 ようだ 14-26 [顔、流、死、女、他、春、歌、母、花、永、毒、棘、海]
765 よくできた權のようだと僕は思いな
がら、その女が軽い布地の服を着こん
で舗道を歩く姿勢について考えた。
[死]
- 16 ようだった 13-24 [顔、草、杏、他、海、2、死、歌、母、女、流、ま、金、海]
766 舌ばかりでなく彼の精神が唾をたら
すようだった。
- 17 様だった [実]
767 それは揺れましたよ。かうして仰向
けに寝てみると、二階全体が動き出
して、背中の下で、のノ字をいくつも書
いている様だった。
- 18 ようで 13-40 [杏、女、縮、顔、高、夜、無、金、母、明、機、お、く]
768 女滝の心を砕く姿は、男の膝に取り
ついて美女が泣いて身を震わすよう
で、岸にいてさえ体がわななく、肉
が跳る。[高]
- 19 様で [実]

- 769 成る程草平さんのは太くて木綿張りの傘の様で、
- 20 ようであった 12-107〔顔⁸⁶ 田³ 杏³ 金³ 夜² 歌² 冬² 絵² 何 無^く 女〕
- 770 義のためには死を厭わぬ、いかなる苦痛をも忍ぶ、辱しめられるれば死すなどの感じが、その明晃々たる切尖から彼れの腸に染み込むようであった〔何〕
- 21 様であった〔実〕
- 771 傍で見てみて、こっちが呼吸が詰まる様であったが、
- 22 ようであり〔縮〕
- 772 銀子がいたのでは物が歯に挟まったようであり、
- 23 ようである 6-96〔顔⁸⁴ 金⁵ 杏³ 冬² 夜 流〕
- 773 不安が、肌をほうようである。〔顔〕
- 24 ようでござります 1-3〔お〕
- 774 その日のうちの出来ごとは、いま思い出しましても夢のようでござります。
- 25 ようでした〔顔〕
- 775 ちりひとつ落ちていない、きれいなお庭のようでした。
- 26 ようでしょう〔女〕
- 776 お由美さんが岩本さんといれば、金仏さまと弁天さまが並んでいるようでしょう
- 27 ようです 2-2〔顔 遠〕
- 777 彼女自身の風情の中にまでも、そのすっからかんと風の吹きぬける空洞があるようです。〔遠〕
- 28 ようではなかった（ではないかのようだった）〔白〕
- 778 彼らの声は一様につぶれ、人間の声

のようではなかった。

- 29 ような 46-1266〔顔¹⁵² 他¹¹⁷ 夜¹¹⁴ 女⁸² 金⁷⁸ 明⁷¹ 永⁵⁰ 草⁴⁸ 母⁴⁷ 杏⁴² 毒³⁹ く³⁶ 田³⁵ 海³³ 冬³⁰ 縮²⁸ 施²⁵ 高²⁴ 歌²³ 流²² 神¹⁷ 白¹⁵ 無¹⁴ 立¹² ハ¹² 遠¹¹ 蔵⁹ 絵⁹ 裸⁹ 春⁷ お⁷ 花⁷ 死⁷ 溼⁷ 風⁶ 目⁴ ま⁴ 碑⁴ 何² 美² 日 檸 機 静 娼 太〕
- 779 腕は木のような音を立てて抵抗し、それから、剥き出しの下部の上に重ねられた。〔死〕
- 30 様な 1-7〔実?〕
- 780 泥坊が落とした様な大きなのが真白い瀬戸物の便器に横たはっている。
- 31 ようなところ 2-4〔顔³ 夜〕
- 781 京都の女性は、いつも財布の口をしっかりとおさえているようなところがある。めったにひとに心をゆるさないところがあるといわれています。〔顔〕
- 32 ようなのだ〔他〕
- 782 おまえの叫びが、声もなく、封じ込められているようなのだ。
- 33 ように 48-2191〔顔³²⁶ 女¹⁵⁷ 他¹⁵⁵ 金¹²³ 草¹²² 夜¹¹⁸ 冬¹⁰⁰ 明⁹⁷ く⁸⁶ 永⁷⁷ 母⁷³ 施⁶⁵ 田⁶¹ 毒⁵² 杏⁵⁰ 海⁴⁷ 風³⁶ 流³⁰ 花²⁸ 縮²⁷ 春²⁷ 棘²⁷ お²⁵ 絵²⁴ 蔵²³ 死²² 歌²¹ 神¹⁹ 高¹⁶ 遠¹⁶ 太¹⁶ 裸¹⁵ 無¹³ ハ¹² 何¹⁰ 立¹⁰ 溼⁹ ま⁹ 碑⁸ 機⁷ 美⁶ 目⁵ 娼⁵ 檸⁴ 日⁴ 白⁴ 静³ ひ〕
- 783 日に二合ずつの牛乳を呑むにかかわらず、乾燥した皮膚をして兎のように赤い限の玉をキョロキョロさせ、身体中から垢の臭いを発散させ〔日〕
- 34 よでござります〔お〕
- 784 この竜江で、足ふみはずして危う命おとし損うたときの恐ろしさも、つい昨日のこのよでござります。

- 35 よな 2-7 [お、夜]
785 声を掻き消すほど妻まじい音たてて、木立といわず縁といわず、叩きつけるよな勢いで降ってきたのでござります。[お]
- 36 よに 1-11 [お₁₁]
786 車のあと押しする間も俺のよに汗流して息つくもようようでござります。
- K₉₋₂ ごとし 17-82 [杏₁₆ 明₁₁ 夜₁₀ 冬
草、歌、高、何、溼、田、無、白、美、機、
縮実海]
- 1 がごとき [美]
787 つい昨今まで……怒鳴りつけたりしていた人から、にわかには忠僕・足立茂三郎を表彰するがごとき口吻の洩らされるのも、決して愉快ではなかった。
- 2 がごとく 1-2 [溼₂]
788 花の散るがごとく、葉の落つるがごとく、わたくしには親しかったかの人々は一人一人相ついで逝ってしまった。
- 3 かのごとき [機]
789 私たちの間には一切が明瞭に分っているかのごとき見えざる機械が絶えず私たちを計っていてその計ったままに私たちを押し進めてくれているのである。
- 4 ごとき 6-21 [杏₁₂ 夜₃ 冬、田 白草]
790 それはあらゆる時間に目覚め、虫のごとき倦まざる反応の蠢動を起す肉体であるにすぎない。[白]
- 5 ごとく 16-34 [夜、何、杏、明、無、冬、草、高、縮溼美田機歌白海]
791 翁は坐中の談話がたまたまその地の

ことに及べば、まず傍人より万年筆を借り、バットの箱の中身を抜き出し、その裏面に市中より迷宮に至る道路の地図を描き、ついで路地の出入口を記し、その分れて那邊に至りまた那邊に合するかを説明すること、掌を指すがごとくであった。[溼]

- 6 如く [実]
792 烈火の如く憤り、本もあらうに聖書を値切って買はうとする様な、そんな心根の者にうちの店の本を売るわけには行かない。
- 7 如ク [溼]
793 老愁ハ葉ノ如ク掃ヘドモモキズ
- 8 ごとくに 5-14 [明、高、夜、田 白]
794 冷たい感覚が彼の背筋の真中を閃くがごとくに直下した。[田]
- 9 ごとし 2-6 [歌、草]
795 死んだ奴とはおよそ縁のない世界に生きているんだ……死の灯影の廻りを飛び交う蛾のごとし [草]
- 10 如 [夜]
796 読書破万卷、下筆如神
- K₉₋₃ みたい 33-147 [お₁₈ 杏₁₆ 顔₁₆ 流₁₃ 他₁₂ 明₁₀ 草、毒、女、風、冬、永、歌、死、高、日、立、ハ、棘、縮田蔵無機ひ母ま碑金海遠静裸]
- 1 みたい 8-17 [杏、風、明女流ま顔死]
797 猫みたい。[ま]
- 2 みたいじゃないの? [顔]
798 耕さんのことなんか、おいてきぼり

- にして、自分だけで立派になったみた
いじゃないの？
- ・8 みたいだ 7-13 [顔: 草: 杏 立 女
流 死]
799 お前は今日はなんだか見知らない薔
薇色の少女みたいだよ [立]
- ・4 みたいだ [田]
800 おとなしく尾を振っている犬をそん
なに怖がる奴は泥棒みたいだ
- ・5 みたいだった 2-2 [毒 海]
801 バラソルを杖のように地面に立て
たまま、真直ぐなスカートを着けた軀
が棒みたいだった。[海]
- ・6 みたいで 3-5 [杏: 顔: 女]
802 平四郎さんは動物園で年とった熊み
たいで、お腹の毛もみんな脱けちゃっ
ているんですもの。[杏]
- ・7 みたいで [蔵]
803 この辺はすこし泉鏡花の小説みた
いですが、なかなかあんな意気なもの
はありません。
- ・8 みたいな 16-39 [顔: 明: 毒: 流:
他: 冬: 杏: 歌: 女: 風: ハ: 縮 日 母
碑 棘]
804 ずいぶん冷えているわね、水みた
いな体よ [冬]
- ・9 みたいに 18-39 [他: 草: 流: 永:
杏: 顔: 機 日立 冬 金 毒 棘 遠
静 裸 死]
805 お前さんのように、淫売みた
いにニ
ヤニヤできるもんか [日]
- ・10 みたようで [明]
806 始終ご馳走はないかないかって、き
ょろきょろそこいらを見廻してる人み
たよう
- ・11 みたような 3-5 [明: お: 流]
807 糸みたようなおはんの眼がつりあが
って、さっと顔から血の気がひきまし
た。[お]
- ・12 みたように 5-7 [明: お: 無 歌
流]
808 二人連れの大学生が、女学生みたよ
うにきゃっきゃっ行ってしゃべって行
った [歌]
- ・13 みたよな 1-5 [お:]
809 ただの学校もどりの子供の一人が、
もの買いに寄ったというて、まァこの
私の、早鐘みたよな胸の動悸は何ごと
でござりましょうぞ。
- ・14 みたよに 1-9 [お:]
810 それはもうくるたんびに、猫の目み
たよに機嫌がかわるのでござります。
- ・15 を見たような 1-2 [高:]
811 親仁は少年の傍へにじり寄って、鉄
挺みたよな拳で背中をどんとくら
わした、
- K₁₀ 18-40
K₁₀₋₁ そう 18-38 [女: 海: 高: 明: 流:
杏: 顔: 冬: 棘: 目 神 実 無 施 く 花
ハ 他]
・1 そうだ 4-5 [海: 高 顔 棘]
812 あせりがからだからふきだしそう
だ。[棘]
・2 そうな 14-20 [明: 高: 女: 流: 海:
目 神 実 杏 無 く 花 ハ 他]
813 大げさに云えば、耳から押しこんで
来た音が胃のなかを掻きまわして、も
う一度げろっと外へ押し出してそう
な気持の悪さである。[流]
・8 そうに 8-13 [女: 冬: 杏 施 流 顔

棘海]

814 雪はもはや一片もふっではいない、
ただ、恐ろしい寒さのなかで月がずり
墜ちそうに低く見えた。〔杏〕

K₁₀₋₂ かねない 1-2〔他〕

815 ただ黙って、眺めているだけでは、
唾液が自分の口を融かしかねない。

K₁₁ 11-18K₁₁₋₂ さ 1-1〔夜〕

816 壮士ひとたび去ってまた帰らずさ。

K₁₁₋₅ というところだ 2-2〔顔 風〕

817 新古風派というところだ。〔風〕

K₁₁₋₆ といったところだ 1-1〔他〕

といったところ

818 心理形態学的に言えば、つまり、内
向的で、対立的で、しかも安定を欠い
た表情ということになる。どうひいき
めに見ても、せいぜい、一度も損をし
たことがない高利貸といったところが
落ちだろう。

K₁₁₋₇ というものだ 1-1〔夜〕

819 やれやれ、俺もこれで生き返ったと
いうものだ。

K₁₁₋₈ にほかならない 1-1〔他〕

ことにほかならない

820 仮面の種を明かすことは、武装解除
されることにほかならない。〔他〕

K₁₁₋₉ というよりほかはない 1-1〔流〕

と云うよりほかもない

821 刀痕と云うよりほかもない、陰気な
おそろしいえくぼだ。

K₁₁₋₁₀ にすぎない 8-10〔草₂ 他₂ 明 杏
顔 白 海 太〕

・1 にしかすぎない〔他〕

822 どんな他人も、あなたにとっては、

いずれ自分を映す鏡にしかすぎないの
ですから。

・2 にすぎない 5-6〔草₂ 顔 白 他 海〕

823 この日々の繰返しも、どうやら日常
化された戦場にすぎないらしいのだ。
〔他〕

・3 に過ぎない 3-3〔明 杏 太〕

824 良人というものは、ただ妻の情愛を
吸い込むためにのみ生存する海綿に過
ぎないのだろうか。〔明〕

K₁₁₋₁₁ なんでも…と…ばまちがない

1-1〔夜〕

825 小父さんが面白ことを言ったで
—なんでも、東下りの業平朝臣だと
思えば、間違いないなんて。

K₁₂ 1-1K₁₂₋₁ ではない 1-1〔風〕

じゃねえや

826 宮下！ またお前、ひげを当て来
ないな。このごろ、活動写真で、そう
いうのが流行るそうだが、この会社じ
ゃ、もてないね。カメの子だわしの、
競りをやるんじゃねえや。

K₁₃ 2-2K₁₃₋₁ …はよかった 2-2〔夜 田〕

827 「なんでも東下りの業平朝臣だと思
えば、間違いないなんて。」
「業平朝臣はよかった。」〔夜〕

KD 43-412

K₂D₅ 1-1K₂₋₁D₅₋₄ 同様・思われる 1-1〔機〕

と同様・に思われて

828 尊敬している男が苦痛のために醜い
顔をしているのは心の醜さを表わして

いるのと同様なように思われて不快になつて困り出した。

K₉D₁ 14-38

K₉₋₁D₁₋₁ よう・感じる 7-15 [顔、く、草、立女流冬]

- 1 ように感じ 2-2 [く 草]
829 明子は突然大きな重い荷を肩にのつけられたように感じ、深い溜息をついた。[く]
- 2 ように・感じ(動詞) [く]
830 呪うように自分自身を感じ、
- 3 ように感じた 2-2 [く 顔]
831 子供の小さな頭を二つ中に挟んで、その向うにこちらを向いている広介を見て、明子はまざまざと自分たちの繋がりを指し示されたように感じた。[く]
- 4 ように・感じた [女]
832 倫の孤独な魂に与えてくれた贈物のように尊く感じた。
- 5 ように感じて [冬]
833 障壁が破れたように感じて、今までは意識下に押しつんでいた情欲を一時に解き放つてしまつて、
- 6 ように感じました [顔]
834 耕さんが突然アパートにうつるとおっしゃったとき、私は、いきなり頬を打たれたように感じましたわ。
- 7 ように感じる 2-5 [顔、草]
835 耕は呼吸をはばまれているように感じる。[顔]
- 8 ように・感じる [流]
836 こんなことぐらいは少し眼で見えて覚えれば自分にだってできる、——と思うと、ふと光がさして来たように梨花

は感じる。

- 9 ように感ぜずにはいられた[立]
837 何んでもないのにそんなに怯え切っている私自身をかえつて子供のように感ぜずにはいられた。

K₉₋₁D₁₋₂ よう・思う 7-10 [顔、く、夜目田流海]

- 1 かのうに・思つて [田]
838 自分の夫のことをその小説のなかの一人が、自分の目の前へ——生活の隣りへ、その本のなかから抜け出して来たかのようにも思つて見た
 - 2 ように思いました [顔]
839 私は、公子さんにそういわれましたことで、何かがあかるくなつたように思いました。
 - 3 ように思います [顔]
840 今日の日のために、私は生きてきたように思います。
 - 4 ように思う [顔]
841 守富のようなすこやかな子供がうまれたことを、康太はときどき奇蹟のように思う。
 - 5 ようにおもつた 2-3 [く、海]
842 頭の真上からイキナリ強烈な日光が照りつけて、眼をつむると、こんどは足もとが揺らぐようにおもつた。[海]
 - 6 ように思っている 3-3 [夜目流]
843 女を玩弄物のように思っている人々の口の端にのぼるのはいやだ。[目]
- K₉₋₁D₁₋₃ よう・考える 2-2 [顔 草]
- 1 ように考えた [草]
844 僕は検査の朝に一升の醤油を飲んで、首尾よく兩種になつた友人を英雄のように考えた。

・2 ように考えている〔顔〕

845 耕は女中を部屋の調度品のように考
えているらしい。

K₉₋₁D₁₋₄ よう・心得る 1-1〔顔〕

ように心得ている

846 園子はデパートをわが家のように心
得ている人間ですからね

K₉₋₁D₁₋₆ よう・錯覚する 1-2〔顔₂〕

・1 ように錯覚をした〔顔〕

847 耕はアメリカにいるときのように錯
覚をした。

・2 ように錯覚をして〔顔〕

848 中にはいっていますと、一軒建のよ
うに錯覚をしてしまいます。

K₉₋₁D₁₋₈ よう・見る 3-3〔夜 女 死〕

・1 ように見た 2-2〔女 死〕

849 美しい牝の官能が美夜の蠟のように
白い頬へ一瞬戻ろうとして仄かに揺ら
ぎ、たちまち遠く飛び去るのを行友は
蜻蛉の光る薄い羽を見送るように見
た。〔女〕

・2 ように見る〔夜〕

850 人心動揺して外人が警敵のように見
る。

K₉₋₁D₁₋₉ よう・眺める 1-2〔明₂〕

・1 ように・眺めた〔明〕

851 彼女は生豆腐の前に、胡座をかいて
いる剽軽な彼の顔を、過去の記念のよ
うに懐かしげに眺めた。

・2 ように眺める〔明〕

852 日常瑣末の事件のうちに、よくこの
特色を發揮する彼女の所作を、津田は
時々自分の眼先にちらつく洋刀の光の
ように眺めることがあった。

K₉₋₂D₁₋₁ ごとし・感じる 1-3〔何₃〕

・1 ごとし感じ〔何〕

853 二年目の試験前、制服を囚衣のごと
く感じ、引き脱いで自由の身とならん
としたが、

・2 ごとし感じた〔何〕

854 健次は今も鬱陶しい毒気が壁の隅か
ら噴き出て、自分を圧迫するごとく感
じた。

・3 ごとし感ずる〔何〕

855 社の階子段は、社員の多年の足の力
で凹んで、砂埃がその中に溜っている。
健次はそれを一つ一つ踏み上るごと
に、夕暮れの果てのない旅路をたどる
ごとく感ずるのだが、

K₉D₅ 35-203

K₉₋₁D₈₋₁ よう・感じられる 10-21〔顔、
永₃ 田₂ 母₂ 金₂ 明 碑 冬 他 棘〕

・1 ように感じられた 3-6〔顔₂ 金₂ 母〕

856 私の内臓は、私のみすばらしい、し
かし決して馴れない飼犬のように感じ
られた。〔金〕

・2 ように・感じられた〔碑〕

857 ただ一人、暗い屋敷内に起き伏しし
ている高範の孤独な姿は、しんしんた
る鬼気をはなっているように人々に感
じられた。

・3 ように感じられている 1-2〔永₂〕

858 ふと安太には、こんなところへしば
しば来るらしい登美子が自分と何のか
かわりもない女のように感じられてい
る。

・4 ように感じられる 3-6〔顔₂ 田 永〕

859 その蚤の巢のように感じられる体を
洗ってさっぱりするために、〔田〕

・5 ように・感じられる 2-2〔他 棘〕

- 860 安らぎは^か湧きのときの一滴の水のよ
うに甘美に感じられる。〔棘〕
- ・6 ように・感ぜられた〔田〕
- 861 その蔓を纏をもどすようにくるくる
廻しながら松の幹から引き分けると、
松はその時ほっと深い吐息をしてみせ
たように彼には感ぜられた。
- ・7 ように感ぜられつつある〔母〕
- 862 ちょっと広間の周囲の空気からは、
ここはエアポケットに陥ったように感
ぜられつつある。
- ・8 ように感ぜられる〔明〕
- 863 高台のここかしこに年々建て増され
る大小の家が、年々彼の眼から蒼い色
を奪って行くように感ぜられる
- ・9 ようにしか感じられなかった〔冬〕
- 864 この一夜のことが、この光の中では、
遠い、薄れはてた、幾分滑稽でみじめ
な夢のようにしか感じられなかった。
- K₉₋₁D₅₋₂ よう・覚える 1-1〔目〕
ように覚えた
- 865 自分の胸はせばまるように覚えた。
- K₉₋₁D₅₋₃ よう・思える 9-10〔母₂明
杏無歌白絵棘海〕
- ・1 ように・思え〔母〕
- 866 アメリカは、ほとんど^{まばく}沙漠の中の蚕
地のように遠く思え、
- ・2 ように思えた 6-6〔明 杏無母絵
海〕
- 867 毀れかかった古めかしいそのカバン
の中から、混乱した母の思考が流れ出
し、執拗に自分を捉えようとしている
ように思えたからだ。〔海〕
- ・3 ように思えてくる 2-2〔歌 花〕
- 868 その人ごみのなかには何かを眼を光

らせ、網を張っているように思えてく
る。〔花〕

- ・4 ように思える〔棘〕
- 869 離れるとき女が吸いつけてよこした
たばこを私もブラットフォームで吸
い、女の火を見ると、ほたるが浮遊し
ているように思える。〔棘〕
- K₉₋₁D₅₋₄ よう・思われる 18-61〔金₁₇
お₉顔₆女₆他₃海₃神₂無₂毒₂夜₂明
田 杏 母 く 流 風 冬〕
- ・1 かのうに思われた〔無〕
- 870 先ほど重荷の肩より抜けた感とも
にはるか過去の出来事かのうに思わ
れたのだが、
- ・2 ようにおもわれ〔く〕
- 871 周囲をさえぎるもののない沖で、広
介の身体だけが大きくひろがってゆく
ようにおもわれ、
- ・3 ように思われ 2-2〔金 他〕
- 872 あなたのしていることが、すこし照
れ臭がっているようだけど、とても繊
細で、やさしい、ダンスの申し込みの
ように思われはじめたのです。〔他〕
- ・4 ように思われた 12-22〔金₈神₂女₂
顔₂明 田 杏 無 母 風 毒 他〕
- 873 彼らの姿やその笑い声は勝呂の心を
圧倒し、逃げ路を防ぐ厚い壁のように
思われた。〔毒〕
- ・5 ように・思われた 2-2〔女 毒〕
- 874 こうした苦しさを妻に与えて、平気
でいる夫は地獄の鬼のように無情に倫
には思われた。〔女〕
- ・6 ようにおもわれて〔流〕
- 875 すぐそこの茶の間で大柄おおがらにぼったり
したひとが唄っているとわかっていて

- も、瘦せぎすな人が遠いところで唄っているようにおもわれて不思議である。
- ・7 ように思われて 2-2 [夜 顔]
876 浄瑠璃寺からもってかえたものが、お湯のなかにとけていくように思われて……すこしでも、ながくもっていたかっただのですわ [顔]
- ・8 ように思われていた [女]
877 色とか恋とかいうものにはいつもはなやかな浄瑠璃や衣裳がまどっているように思われていた。
- ・9 ようにおもわれてくる [海]
878 樹液をしたたらせた艶のある桜の幹の一本一本が、見えない“狂気”を大地から吸いとしては、淡紅色の花のかたちにして吐き出しているようにおもわれてくるのだった。
- ・10 ように思われなくてもいい [女]
879 倫には美夜の薄命が天の配剤のように思われなくてもいい。
- ・11 ように思われまして 1-2 [お₂]
880 おかよの甲高かんたかい口三味線の声まで、なにやら私には、わが身みにかかわりのない、遠いよその世界のこのように思われましてな。
- ・12 ように思われます 2-2 [お 顔]
881 二年がすぎたなど、うそのように思われます。 [顔]
- ・13 ように思われる 3-13 [金₈ 顔₄ 他]
882 金閣は私の目からばかりでなく、頭からも滲み入って来るように思われる。 [金]
- ・14 ように想われる [海]
883 彼女の顔に苦痛の色がまったくなく
- 眉のひらいた丸顔の、十年の昔の顔にもどっているように想われる。
- ・15 ようにしか思われなかった [冬]
884 兄の悪戯に悩まされてひいひい泣くところをみると、私には「嘉門とまつ子」との争いの縮図のようにしか思われなかった。
- ・16 ようには思われず [女]
885 須賀は自分の心身が花開いたように思われず
- ・17 ようにもおもわれた [海]
886 冬の戸外の便所のそとで、女房の用がすむ音を、じっとたたずみながら聞いている父の姿は、信太郎にもその辛苦を想像することができた。しかしそれはまた、いかにも一人の男の“生涯”を象徴しているようにもおもわれた。
- ・18 よに思われた 1-2 [お₂]
887 篠つく昨日の雨の中を、山道ぬけて南河内から駆けもどって来たこの子の姿が、眼に見えるよに思われた
- ・19 よに思われまして [お]
888 道をおおう大樹のあわいに、ただ一とこガス燈のともってますのが、かえって暗さをますよに思われましてな。
- ・20 よに思われます 1-3 [お₂]
889 泣いて恨んだあの声も、いまこの耳に聞いているよに思われます。
- K₉₋₁D₅₋₆ よう・取れた 1-1 [明]
ようにも取れた
890 衣裳といい…注意といい…態度といい、ことごとく芝居の二字に向かって注ぎ込まれているようにも取れた。
- K₉₋₁D₅₋₈ よう・錯覚される 1-2 [草₂]

ように錯覚された

891 僕の手の中に抱かされている千枝子
が、ふと、僕にとつての未知の女、僕の
内部への闖入者のように錯覚された。

K₉₋₁D₅₋₉ よう・見える 25-92 [金₁、顔₁₁、
杏₇、冬₅、明₅、草₅、夜₄、母₄、他₄、棘₄、く₃、女₃、
永₃、縮₂、海₂、高₂、何₂、漫₂、檸₂、歌₂、立₂、流₂、風₂、
毒₂、静₂]

・1 かのように見える [夜]

892 そこにある低い天井も、簡素な壁も、
静かな窓も、海の方から聞えて来る漪
の音も、すべてはこの山上の主人がた
ましいを落ち着けるためにあるかのよ
うに見える。

・2 ような・見えて来た [杏]

893 杏子はどこかの警官のような男に、
平四郎が見えて来た。

・3 ようにしか見えなかった [金]

894 頂きの鳳凰も鴉がとまっているよう
にしか見えなかった。

・4 ようにみえ 1-2 [冬₂]

895 暗い貧民街の家並みがつづいてい
て、この低い家は、どこまでもつづく
ようにみえ、

・5 ように見え 6-7 [草₅、杏₇、流₂、顔₁₁、
棘₄]

896 林立する細身の柱が月光をうけると
きには、それが琴の絃のように見え、

・6 ようにみえた 3-7 [顔₁₁、冬₅、金₁]

897 嘉門の体はこの狭い室には溢れるよ
うにみえた。[冬]

・7 ように見えた [毒]

898 夕暮になるとこの医学部の建物や病
院の窓々にはうるんだ灯がともし、港
にはいる満艦師の船のように見えたも

のである。

・8 ように・みえた 16-30 [金₉、明₅、杏₂、
く₃、草₅、他₂、高₂、夜₂、漫₂、立₂、母₂、顔₂、風₂、冬₂、
棘₂、海₂]

899 はるか向うの目の下に、虫のように
コースを歩いている人間がみえた。
[顔]

・9 ように・見えた 3-3 [杏₇、歌₂、女₃]

900 それらすべてが、まだ芽の出ない樞
並樹の大木に上を区切られて、一枚の
額縁のなかの絵のように安吉に美しく
見えた。[歌]

・10 ように見えて 2-2 [縮₂、女₃]

901 白川からみれば十以上も若い筈の妻
が時に姉のように見えて驚かされるこ
とがあった。[女]

・11 ようにみえていた [冬]

902 黄色い地に白い菊の花の模様のある
美しいスウェタが少女の胸の半分を包
めるほどでかけていて、白い花模様
は小さな乳房のようにみえていた。

・12 ように見えている [夜]

903 芭蕉の句塚までが、その木曾路の西
の入口に、旅人の眼につく路傍の位置
に彼を迎えるように見えている。

・13 ように見えてきた [棘]

904 おなじほどのまを置いて点滅するそ
の火は、都合が悪くなりあたふたと背
中を見せて逃げて行く男を、どう審い
てやろうかと思案している女の意志の
ように見えてきた。

・14 ように見えて来た 2-2 [夜₂、杏₇]

905 その眼には亮吉と平之介が凶暴の限
りをつくした有様が、縮んだ動かない
写真のように見えて来た。[杏]

•15 ように見えてくる〔他〕

906 妻が発作に専念できる…せまいわが家だと思つと、足がすくみ、休むひまなく夫を責めにかかる妻がおそろしい怪物のように見えてくる。

•16 ように見えます〔女〕

907 若奥さまは若旦那さまと御一緒でなくてもちつともお淋しそうではございませんね。かえつてお若くなつてお嬢さまのように見えますわ

•17 ように見える 2-5〔顔、金〕

908 それは決して池へ長々とさしのべられているのではないのに、金閣の中心からどこまでも遁走してゆくように見えるのである。〔金〕

•18 ように見える 13-22〔金、母、永、明、縮、何、杏、冬、草、棘、海、静〕

909 しかし幾ら飾つても、心の艶は失せてる。僕にや二人が奇麗なお墓の中に埋もつてるように見える〔何〕

•19 ように・見える 2-2〔樽、金〕

910 書籍、学生、勘定台、これらはみな借金取りの亡霊のように私には見えるのだった。〔樽〕

•20 ようにも見えなくはない〔他〕

911 グレーのペン描きのデッサンだった。その顔は、幾本かの平行線で水平に仕切られていて、見方によっては、繃帯でぐるぐる巻きにしたようにも見えなくはない。

K₉₋₁D₅₋₁₀ よう・見られる 1-1〔溼〕

ようにも見られた

912 赤い帯をしめ、黒塗りの下駄の鼻緒も赤いのをかけた様子は女義太夫の弟子でなければ、場末の色町の半玉のよ

うにも見られた。

K₉₋₁D₅₋₁₂ よう・眺められる 2-3〔金、女〕

•1 ように・眺められ〔金〕

913 すべてが銅版画のように精密に眺められ、しかも精密なまま、それらは私から一定の距離のところから平らに貼りついていた。

•2 ように眺められた〔金〕

914 闇を背にして、唯一のよそゆきの摺り切れた金糸の縫取のある帯をめで、粗末な着物はおろかしく着崩れた姿が、そこに立ったまま死んでいる人のように眺められた。

•3 ように・眺められる〔女〕

915 倫にはそれが自分の不幸の代償に得た幸福の象徴のようにたのしく眺められる時もあるれば、

K₉₋₁D₅₋₁₃ よう・眼に映る 3-3〔女、草、娼〕

•1 眼に・ように映った〔草〕

916 楽譜が僕の眼にいぶかしい暗号のように映った。

•2 ように・眼に映った 2-2〔女、娼〕

917 黄味のある滑らかな皮膚の臉の重い古めかしい顔がびっちりつまった衿の上に窮屈そうに据つて、少し大きめな唇をきつと結んでいるのが、支那の女のようにきんの眼に映った。〔女〕

K₉₋₁D₅₋₁₄ よう・映る 1-1〔顔〕

ように映る

918 衿子の目には、年齢のはなれた男女の客をみると、自分と清州の立場のように映るらしいのだ。

K₉₋₁D₅₋₁₅ よう・聞こえる 2-2〔無、永〕

・1 かのうに聞える〔無〕

919 私に向い、田舎は仏に供げる物もないよ、と云うのが不便な田舎住居を叱るかのうに聞えるのでした。〔無〕

・2 ように聞える〔永〕

920 ちょっと勇壮な行進曲のように聞えるじゃありませんか。

K₉₋₁D₅₋₁₈ よう・扱われる 1-1〔顔〕

ようにあつかわれている

921 親鸞も哲学も、さしみのつまのようにあつかわれている。

K₉₋₂D₅₋₁ ごとし・感じられる 1-1〔草〕

ごとく感じられた

922 支えとなるべき自分の心さえ、むしろ鞭のごとく感じられた。

K₉₋₃D₅₋₃ みたい・思える 1-1〔遠〕

みたいに思えて

923 臆病者の順ちゃんの保護色みたいに思えて、その時私はおかしくなりさえたものでしたが、夏、真黒い服を着るということは、どうしてどうして一癖なければ出来ないゲイトウです。

K₉₋₃D₅₋₉ みたい・見える 2-2〔お 娼〕

・1 みたいに見える〔娼〕

924 毛を掻られたにわとりみたいに見えるわ

・2 みたよに見える〔お〕

925 屋台の氷店やの、小屋がけの見世物やの灯が、ほおずきみたよに見えるしてなア

K₉D₆ 31-160

K₉₋₁D₆₋₁ よう・気がする 31-156〔顔₄₈〕

夜₁₃ 杏₁₂ 金₉ 明₆ 神₈ 草₆ 他₅ 蔵₄ お₄ 流₄ 毒₄ 海₄ 裸₄ 縮₃ 無₃ 永₃ 目₂ 立₂ 冬₂ 死₂
瀧田 樽 機 母 施 ま ハ 遠 太]

・1 ような気がいたします〔お〕

926 そのおはんの笑い声は、いまでも耳に聞えてくるような気がいたします。

・2 ような気がし 3-3〔杏 太 死〕

927 彼女には自分が鉤にかかったまま、水から上げたり下げたりされる獲物のような気がし、また惨めな気持になるのだ。〔太〕

・3 ような気がした 16-53〔杏₆ 顔₆ 神₆ 金₆ 明₄ 草₄ 他₃ 海₃ 裸₃ 毒₃ 夜 樽 無 母 ま ハ〕

928 私は埃っぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。〔樽〕

・4 ような気が・した 1-2〔顔〕

929 未来とか、運命とか、永遠というものに、もし影があるとすれば、そのような影が胸の中にながれこんだような気が耕はした。

・5 ような・気がした〔死〕

930 拭いきれないほど汚れているような…肺中のあらゆる粘膜が死者の臭いのする微粒にこびりつかれて強わばっているような、いたたまれない気がした。

・6 ような気がしだした〔立〕

931 看護婦の姿を見つめているうちに、私は急に心臓がしめつけられるような気がしだした。

・7 ような気がして 8-13〔夜₄ 縮₂ 永₂ 機 顔 冬 草 他〕

932 チャブ台が意地の悪い鬼婆のような気がしてならなかったのである。〔永〕

・8 ような気がしていた 3-5〔流₂ 金₂ 杏〕

933 金剛不壊の金閣と、あの科学的な火

- とはお互いにその異質なことをよく知っていて、会えばすると身をかわすような気がしていた。〔金〕
- 9 ような気がしている 2-2〔夜 永〕
934 その足音のなかには、やはりお互いの無限の許容があるような気がしている。〔永〕
- 10 ような気がしてくる〔海〕
935 どういうわけか、もう長い間、自分が棲みなれた部屋のような気がしてくるのだ。
- 11 ような気がしてなりませんでした〔遠〕
936 私は茫然ときつねにだまされているような気がしてなりませんでした。
- 12 ような気がしながら〔立〕
937 私は心臓をしめつけられるような気がしながら、そんな身知らない彼女の姿を見つめていた。
- 13 ような気がしました 2-5〔蔵、無〕
938 私は、久しぶりで、気晴らしに私の着物どもを見ようと思った企てが成功した上に、美人と間接ながら知り合いになったという喜びを得て、急に世の中が明るくなったような気がしました。〔蔵〕
- 14 ような気がします 4-5〔夜、明 杏毒〕
939 土の牢の中で苦しんでいる僕には日光がないばかりか、もう手も足もないような気がします。〔明〕
- 15 ような気がする 16-57〔顔、夜、目、縮 澤田 杏 無 施 流 冬 金 草 毒 他 裸〕
940 隅っこのボックスに納まって、スト
- ロオを口にしている乳くさい学生のアベックなどを見ると、齒の浮くような気がする〔縮〕
- 16 ような・気がする〔流〕
941 たえず人通りがあってそのたびに見とがめられているような急いた気がするし、
- 17 ような気のした〔明〕
942 これで幾分か溜飲が下りたような気のした津田には、
- 18 よな気がしまして 1-2〔お₂〕
943 おはんと悟と二人、もう人中に挟まるように身を屈めてくらしてます有様が、なにやら眼にみえるよな気がしましてな^ア。
- 19 よな気のしました〔お〕
944 その淵の滴巻の、きらきらと陽をうけてくるめきながら川下へ流れて行くさまの、なにやらもの言うてるよな気のしましたも、あれも虫の知らせであったやらと思うもあとの祭でござります。
- K₉₋₁D₆₋₃ よう・心地がする 1-1〔金〕
ような心地がしていた
945 しらずしらず廊下の奥、底知れぬ奥の間へ踏み込んで行くような心地がしていた。
- K₉₋₃D₆₋₁ みたい・気がする 3-3〔杏 永〕
•1 みたいな気がする〔お〕
946 おかしいな^ア、何やこの家、よう知ってる家みたいな気がするな^ア。
•2 みたいな気がしている〔永〕
947 前世の因縁みたいな気がしているんだよ。

*3 みたいな気がする [杏]

948 もう引っぱたかれたことも遠い日
みたいな気がするわ。

K₉D₇ 2-2

K₉₋₁D₇₋₁ よう・感じさせる 1-1 [立]

ように感じさせた

949 父の側にいることがお前にはほとんど
無意識的に取らせているにちがいない
様子や動作は、私にはお前をついぞ見
かけたこともないような若い娘のよう
に感じさせた。

K₉₋₁D₇₋₁₀ よう・錯覚させる 1-1 [顔]

ように錯覚させる

950 ゆうべの記憶が、正常な歩行を正常
でないもののように錯覚させる。

K₁₀D₅ 6-8

K₁₀₋₁D₅₋₁ そう・感じられる 1-1 [冬]

そうに・感じられた

951 頭を撫でたが、その皮膚は…泡にさ
わるようにやわらかく、融けてしまい
そうに私の手には感じられた。

K₁₀₋₁D₅₋₃ そう・思える 1-2 [母2]

そうに思える

952 むすこのいる巴里は手を出したら摺
めそうに思える。

*2 そうにも思えた

953 かの女はこんなでできた美丈夫が
むすこの友達だなんて信じて好いのか
と思った。むすこを片手で摺んで振り
廻しそうにも思えた。

K₁₀₋₁D₅₋₄ そう・思われる 1-1 [明]

そうに思われた

954 医者態度には、熟練からのみ来る
手ぎわが閃めいてそうに思われた。

K₁₀₋₁D₅₋₉ そう・見える 4-4 [夜 田 女

冬]

*1 そうに見えてきた [夜]

955 半蔵が同門の諸先輩ですら、ややも
すれば激しい潮流のために押し流され
そうに見えてきた。

*2 そうにみえる [冬]

956 明るい光の中で白く消え入りそうに
みえる女のうつむいた顔

*3 そうに見える 2-2 [田 女]

957 今もち上ったばかりの紫色の土はオル
ガンの最も低い音色のような声をし
て、何か一齊に叫び出しそうに見え
る。[田]

KDJ 2-2

K₁₀D₅J₁ 2-2

K₁₀₋₁D₅₋₃J₁₋₁ そう・思える・ほど 1-1
[海]

そうにおもえるほど

958 コンクリートの壁に汗がたまって、
緑色のペンキが溶けて流れそうにおも
えるほどだ。

K₁₀₋₁D₅₋₉J₁₋₁ そう・見える・ほど 1-1
[夜]

そうに見えるほど

959 同門の先輩正香ですらややもすれば
押し流されそうに見えるほど進むに難
い時勢に際会している。[夜]

KJ 12-21

K₁J₁ 4-5

K₁₋₃J₁₋₁ 同じ・ほど 2-3 [金2 遠]

と同じほど

960 大きな星条旗が指さされた方向の壁
に、全く風のない日のカーテンと同じ

ほどの頹廢的な様子で、ぶらりと垂れさがっています。〔遠〕

K₁₋₃J₁₋₂ 同じ・くらい 2-2〔杏 死〕

と同じくらい

961 私は、自分が生きて行くことに、こんなに曖昧な気持なのに、新しくその上に別の曖昧さを生み出すことになる。人殺しと同じくらいに重大なことだわ。〔死〕

K₆J₁ 1-1

K₆₋₁J₁₋₁ わからない・ほど 1-1〔お〕

やら・やら・分らぬほど

962 近所の衆の寄り合うて、がやがやと立ちさわいでいるさまは、お祭やら葬式やら、見る眼には分らぬほどでござります。

K₇J₁ 1-1

K₇₋₂J₁₋₁ 負けない・ほど 1-1〔冬〕

に負けぬほど

963 西日に射しこまれて、ざらざらの壁面をみせている部屋の中で、私の目についたものも、この女の顔や着物に負けぬほど変わったところがあった。

K₉J₃ 7-11

K₉₋₁J₃₋₁ よう・も 6-9〔夜₂ 縮₂ 母₂ 顔 金 海〕

・1 かのようでもある 1-2〔夜₂〕

964 遠い祖先の昔はまだそんなところに残って、子孫の眼の前に息づいているかのようでもある。

・2 ようでもあった 2-2〔顔 金〕

965 豊富な色の凝集した感じは、あの迦陵頻伽に似た鳥が、いちめんの若葉や松のみどりのどこかしらの枝に隠れていて、華麗な翼のはじを垣間見せてい

るようでもあった。〔金〕

・3 (ようでもあれば) ようでもあった〔縮〕

966 電燈の明るい二階座敷や、障子の陰に見える客や芸者の影、箱をかついで通る箱丁、小刻みに歩いて行く女たちの姿などが…花道のようでもあった。

・4 ようでもある〔海〕

967 ずらせた背中が壁に当たると、その固い手ごたえが、つい昨日やって来たばかりのようでもある。

・5 (ようでもあれば) ようでもある〔母〕

968 ぼちぼちと紅色の新芽が、無数に蔦の蔓から生えていた。それは…吹きつけた火の粉のようでもある。

・6 ようでもあれば (ようでもあった)〔縮〕

969 電燈の明るい二階座敷や、障子の陰に見える客や芸者の影、箱をかついで通る箱丁、小刻みに歩いて行く女たちの姿などが、芝居の舞台や書割りのようでもあれば

・7 ようでもあれば (ようでもある)〔母〕

970 ぼちぼちと紅色の新芽が、無数に蔦の蔓から生えていた。それは爬虫類の掌のようでもあれば

K₉₋₁J₃₋₁ よう・さえ 1-2〔他₂〕

・1 ようでさえあった〔他〕

971 仮面のやつは、わざとポケットの上から、固い感触を叩いてみせたりしながら、ぼくの困惑を笑い、たのしんでいるようでさえあった。

・2 ようでさえある〔他〕

972 能面のほうは、むしろ生に結びつくすべてを拒否しようとして、やっきに

なっているようでさえある。

K₁₀J₁ 2-2

K₁₀₋₁J₁₋₁ そう・ほど 2-2 [金 他]

そんなほど 2-2

973 皺の束にまぎれ込んでしまいそんな
ほど、固く閉ざされた上下の隙 [他]

K₁₁J₁ 1-1

K₁₁₋₄J₁₋₁ と言っていていい・ほど 1-1 [顔]

といってもよいほど

974 家族のつながりが、これほど矛盾した、いかげんなものであってもよいのだろうか。虚構といってもよいほどのたよりなさである。

KJD 16-27

K₉J₃D₁ 3-3

K₉₋₁J₃₋₁D₁₋₂ よう・も・思う 1-1 [顔]

ようにも思った

975 掌中のたまが汚されたようにも思
った

K₉₋₁J₃₋₄D₁₋₁ よう・さえ・感じる 1-1

[く]

ようにさえ感じる

976 自分の将来を突きつけられたように
さえ感じるのであった。

K₉₋₁J₃₋₄D₁₋₂ よう・さえ・思う 1-1 [田]

ようにさえ思う

977 言葉についてはいろいろな空想を喚び起す…いわゆる言^{ことば}霊をありありと見るようにさえ思うこともあった。

K₉J₃D₅ 13-19

K₉₋₁J₃₋₁D₅₋₁ よう・も・感じられる 2-2

[田 母]

ようにも感じられた

978 感情のまままっしぐらに行くかの女

の姿を見ると、何となく人生の水先案内のようにも感じられた。[母]

K₉₋₁J₃₋₁D₅₋₄ よう・も・思われる 1-2
[金₂]

ようにも思われた

979 時には鶴川は、あの鉛から黄金を作り出す錬金術師のようにも思われた。

K₉₋₁J₃₋₁D₅₋₈ よう・も・錯覚される 1-1
[顔]

ようにも錯覚される

980 大きな安堵が、かえって大きな気落ちのようにも錯覚されるの。

K₉₋₁J₃₋₁D₅₋₉ よう・も・見える 5-7 [母₂]
く₂ 杏 冬 草]

・1 ようにも見えた 2-3 [母₂ 草]

981 瞬き盛りの銀座のネオンは…谷に人を追い込めて、脅かしたぶらかす妖精群のようにも見えた。[母]

・2 (ようにも)・ようにも見えた [く]

982 線路に沿った小道を草の露に足を濡らして歩いてゆく二人の姿は、…また、たちこめる霧の中に浮び上るようにも見えた。[く]

・3 ようにも・(ようにも) 見えた [く]

983 線路に沿った小道を草の露に足を濡らして歩いてゆく二人の姿は、次第に暗闇の中に消えるようにも…見えた。[く]

・4 ようにもみえたらう [冬]

984 青年にとっては、これは怪物どころか、軍服を載せた英雄の闘士の葬送のようにもみえたらう。

・5 ようにも見えていた [杏]

985 女というものが、それ自身、全部たぐいまれなる瞳孔の形をした穴である

ようにも見えていた

C

K₉₋₁J₃₋₄D₅₋₃ よう・さえ・思える 2-2〔目田〕

・1 ようにさえ・思えた〔田〕

986 その虫は、それ自身の体の半分ほどもあるような長い触角を、自分自身の上の方でゆるやかに動かしながら、ランプの円い^ま笠の紅い場所をぐるぐる青く動いて進んで行った。それは円く造られた庭園の外側に沿うて散歩する人のような気どった足どりのようにさえ彼には思えた。

・2 ようにさえ思える〔目〕

987 皆の口から出る言葉は自分に今後会へくるなど宣言しているようにさえ思えることがあった。

K₉₋₁J₃₋₄D₅₋₄ よう・さえ・思われる 1-1〔他〕

ようにさえ思われた

988 本物の陸地であるようにさえ思われた。

K₉₋₁J₃₋₄D₅₋₉ よう・さえ・見える 2-2〔日他〕

・1 ようにさえ見えてくる〔他〕

989 痴漢の眼で、あらためて周囲を眺めまわしてみると、街全体が、まるで性の立入り禁止の札で組み上げられた奇怪な城のようにさえ見えてくる。

・2 ようにさえ見える〔日〕

990 牧事場でも、それから夏を除いては隔日に立てられる風呂でも出来るだけ汚くしようとしているようにさえ見える。

K₉₋₁J₃₋₅D₅₋₄ よう・すら・思われる 1-1〔白〕

ようにすら思われる

991 ひと思いに兵隊にとられ、考える苦しさから救われるなら、弾丸も飢餓もむしる太平楽のようにすら思われる時があるほどだった。

K₉₋₂J₃₋₁D₅₋₉ ごとし・も・見える 1-1〔明〕

かのごとくにも見えた

992 注意深くも見えた。または自衛的に慢ぶる神経の光を放つかのごとくにも見えた。

K₉J₃D₆ 4-5

K₉₋₁J₃₋₁D₆₋₁ よう・も・気がする 4-4〔夜立母静〕

・1 ような気もしていた〔夜〕

993 まだ半蔵は半分旅にあるような気もしていたが、

・2 ような気もして来る〔静〕

994 一匹だけ釣れたということが、よけいに何かのめぐりあわせのような気もして来るのだ。

・3 ような気もしてならない〔立〕

995 なぜだか分からないけれど、私がまだはっきりさせることの出来ずにいる私たちの生の側面には、何んとなく私たちのそんな幸福に敵意もっているような気もしてならない。

・4 ような気もする〔母〕

996 未来永遠に聴ける約束の声であるような気もする。

K₉₋₁J₃₋₄D₆₋₁ よう・さえ・気がする 1-1〔夜〕

ような気さえした

997 古い神社の方へ行って仕えられる日

の来たことは、それを考えたばかりでも彼には夢のような気さえした。

KJKJ 1-1

K₉J₃K₉J₃ 1-1

K₉₋₁J₃₋₁K₉₋₁J₃₋₁ よう・も・よう・も 1-1 [女]

ようでもあり・ようでもあって

998 須賀には行友が父親のようでもあり主人のようでもあって

KJMJ 1-1

K₉J₃M₂J₃ 1-1

K₉₋₁J₃₋₁M₂₋₁J₃₋₁ よう・も・ようす・も 1-1 [杏]

ようでもあり・様子でもあった

999 その自分自身の顔ののびのびした容子が、こちら向きになって笑い、ばかあねえというようでもあり、ふふ、と笑っている様子でもあった。

KK 9-13

K₁K₉ 8-11

K₁₋₃K₉₋₁ 同じ・よう 8-11 [永₃ 明₂ 田 神 無 冬 白 毒]

・1 と同じような 3-4 [明₂ 神 無]

1000 彼は八行ばかりに書いた老婆の記事を二行に縮めようと苦心したが、なかなか出来なかった。どこもかしこも必要のような気がした。そして死人を棺につめる時、棺の外にはみ出る手足をぼきぼき折ってしまうあの葬儀屋の男と同じような残虐を、自分が働いているような気がした。[神]

・2 と同じように 5-7 [永₃ 田 冬 白

毒]

1001 人間は地虫をみればすぐ踏み潰そうとするし、猛悪な獅子をみるとすぐ讚美してしまふ、それと同じように、弱々しいものに冷酷になるという本能でもその時の私を動かしたのであろう。
[冬]

K₉K₉ 1-2

K₉₋₁K₉₋₃ よう・そんなもの 1-2 [く₂]

・1 (よな)・よなそんなもの [く]

1002 それを自分でも自覚しているよなな。そんなものであった。[く]

・2 よな・(よな) そんなもの [く]

1003 それは強気な諦めを根底に持って、ほとぼしる感情に捨て身身を横たえているよなな、…そんなものであった。
[く]

KKJD 1-1

K₄K₉J₃D₆ 1-1

K₄₋₁K₉₋₁J₃₋₄D₆₋₁ 同類・よう・さえ・気がする 1-1 [他]

同類・ような気さえする

1004 生き甲斐を感じながら、せせせと仕事にはげんでいたのは、じつはぼくではなく、ぼくに似た別の誰かで、このぼくは、臭いや、足音とおなじく、木霊の同類にすぎなかったよな気さえする。

KKK 1-1

K₉K₉K₉ 1-1

K₉₋₁K₉₋₁K₉₋₁ よう・よう・よう 1-1 [田] ようにあるいは・ようにあるいは・ように

1005 彼らは出会うときには、会釈するよ
うに、あるいは噂をし合うように、あ
るいは言伝てを託しているように両方
から立ち停って頭をつき合わせてい
る。これはよくある蟻の転宅であっ
た。

KKKJ 1-1

K₉K₉J₃ 1-1

K₉₋₁K₉₋₁K₉₋₁J₃₋₁ よう・よう・よう・も

1-1〔顔〕

ようであり・ようであり・ようでもあった

1006 相手は祖父のようであり、父のよう
であり伯父のようでもあったのだ。

KKM 2-2

K₁K₉M₁ 2-2

K₁₋₁K₉₋₁M₁₋₂ 同じ・よう・もの1-1〔太〕

と同じようなものがあった

1007 龍哉が強く英子に魅かれたのは、彼
が拳闘に魅かれる気持と同じようなも
のがあった。

K₁₋₁K₉₋₁M₁₋₄ 同じ・よう・こと1-1〔顔〕

とおなじようなこと

1008 こうしたおせっかい屋が存在するた
めに、どれだけ救われているかも知れ
ない。結婚相談所とおなじようなこと
をしているにしても、無償のおせっか
いである。

KM 43-425

K₁M₁ 4-11

K₁₋₁M₁₋₂ 同じ・もの1-1〔冬〕

1009 馬と女とは、同じものです。ちゃん
と一目で見れば分るもんだ。

K₁₋₁M₁₋₄ 同じ・こと3-10〔明、他、顔₂〕

・1 とおなじこと〔顔〕

1010 耕の結婚のことを、父は今まであまり
考えていなかったと白状したとおなじ
じことになった。

・2 と同じこと3-9〔明、他、顔〕

1011 たしかに表情というやつは、人目は
はばかる隠し戸でもないかぎり、玄関
の扉と同じことで、まず外来者の目を
意識して作られ飾られている。〔他〕

K₁M₂ 1-1

K₁₋₁M₂₋₁₁ 同じ・ぐあい1-1〔顔〕

と同じ工合

1012 樹木あり、バンカーあり、思いがけ
ない穴があったりするの、これから
の矜子ちゃんの人世と同じ工合だ。

K₁M₃ 1-1

K₁₋₁M₃₋₅ 同じ・気持1-1〔顔〕

とおなじ気持

1013 矜子は、だれの顔もみなかった。砂
漠をあるいているのとおなじ気持であ
る。

K₁M₄ 1-1

K₁₋₁M₄₋₁ 同じ・役目1-1〔絵〕

と同じ役目

1014 「コケッコウ、ヨガアケタ」…女の
子のその遊びは、九時近くまで寝てい
る私へのあてつけでももちろんなかっ
たであろうけれど、私には、やはりそ
れと同じ役目をはたした。

K₉M₁ 35-190

K₉₋₁M₁₋₂ よう・もの33-148〔冬₂₁ 杏₂₀

顔₁₉ 金₁₃ 他₁₃ 草₇ 夜₆ 明₅ 歌₅ 流₄ 永₃ 静₃

神₂ 蔵₂ 無₂ く₂ 風₂ 棘₂ 海₂ 太₂ 何 濕

春 美 田 実 立 お 母 ま ハ 絵 毒]

・1 ようなもの 29-141 [冬₂₁ 杏₁₉ 顔₁₉
金₁₃ 他₁₃ 草₇ 夜₆ 明₅ 歌₅ 流₃ 永₃ 静₂ 神₂
藏₂ < 2 風₂ 棘₂ 海₂ 太₂ 何₂ 瀧₂ 美₂ 田₂ 無₂
立₂ 母₂ ま₂ ハ₂ 絵]

1015 元々、子供が欲しいと思う彼の心は、
通りすがりのウィンドに覗いたネクタイが急に欲しくなる気まぐれのようなものなのだ。[太]

・2 ような物 2-2 [杏 無]

1016 そのうち味噌^{みそ}漉^こしのような物の小形の物をフッと鼻にあてがわれたと思うと、急に佳^よい匂^{にお}いがして来て [無]

・3 様なもの [実]

1017 今度の仕事は自分で書きよささうな漱石先生の俳句を勝手に選んで、それに就いての鑑賞を文章にすればいいのだから、らくな答案を書く様なもので私にも出来さうであった。

・4 ようなもん 3-3 [春 流 毒]

1018 一番馬鹿をみたのは吾妻だ。——わざわざ死^しにに狸穴^{ねこあな}から這^はい出したようなもんだ。[春]

・5 よなもん [お]

1019 ほんにあの娘、ただで拾^{ひろ}うてきたよなもんやのに、案外や。

K₉₋₁M₁₋₄ よう・こと 6-10 [他₃ 実₂ 顔₂
夜 杏 流]

・1 ようなこと 5-8 [他₃ 顔₂ 夜 杏 流]

1020 おそらく灸^{きゅう}所^{じょ}灸^{しよ}所^{じょ}へ水を廻^{まわ}しておいて、ううもすうもなく鋤^すきかえしちまうようなことを指すのだろうが、この若^{わか}きでよくもそうしたことが頭^{かぶ}へ浮^ういてくる。[流]

・2 様な事 1-2 [実]

1021 旧作に羽根が生えた様な事になり、以前に比べて見違^まへる程^{ほど}お手許^{てのひら}の都合が好^よくなった

K₉₋₁M₁₋₅ よう・まね 2-3 [他₂ 冬]

ような真似

1022 なにも映画に出てくる悪党のような真似までする必要はなかった [他]

K₉₋₂M₁₋₂ ごとし・もの 3-3 [夜 杏 他]
ごときもの

1023 淡々として水のごときものを感じて呆^{ぼろ}れてしまうくらいであった。[杏]

K₉₋₃M₁₋₂ みたい・もの 12-22 [杏₇ 流₃
明₂ 顔₂ 高₂ 夜₂ お女₂ ま 風₂ ハ 草]

・1 みたいなもの 7-14 [杏₇ 流₃ 顔₂ 女₂ ま ハ 草]

1024 辛宅^{からく}なんていうものは、もっと立派^{りつぱ}で気^きが利^りいていて、金^{かね}にあかして飾^{かざ}り立てたそのくせ精神的な何ものもない蟬^{せみ}のぬけがらみたいなものだよ…… [ハ]

・2 みたいな物 1-2 [杏₂]

1025 えん子は手帖^{てあし}になにか詩^{うた}の屑^{くず}みたいな物^{もの}を書^かいている

・3 みたいなもん [風]

1026 選挙^{せんぎょ}の、ポスターみたいなもんだな

・4 みたようなもの 2-3 [明₂ お]

1027 一^{いっ}しよにいますうちにおぎゃアと生まれておりましたら…こういうときの男^{おとこ}の心^{こころ}いうたら、畜生^{ちくせい}みたようなものでござりますわなア。[お]

・5 見たようなもの [高]

1028 何^{なん}しろ路傍^{ろぼう}の草^{くさ}いきれが恐^{おそ}ろしい、大鳥^{おおいどり}の卵^{たまご}見たようなものなんぞ足^{あし}もとにごろごろしている茂^もりあんばい。

・6 みたようなものだ [夜]

1029 洋学者は雪駄直しみたようなもの
だ。

K₉₋₃M₁₋₄ みたい・こと 2-2〔流 永〕
みたいなこと

1030 こんな手品みたいな、おぼけみたいな
なことってあるでしょうか。〔流〕

K₉₋₃M₁₋₅ みたい・まね 1-1〔他〕
みたいな真似

1031 いまさら、なんだって、女衞みたい
な真似をさせられなければならないの
だろう。

K₉₋₄M₁₋₂ らしい・もの 1-1〔母〕

1032 青年に対する負債らしいものを果す
義務を感じた。

K₉M₂ 19-39

K₉₋₁M₂₋₂ よう・気配 1-1〔ハ〕
ような気配

1033 仕切りのぼろ襖をふわりと撫ませる
ような気配で部屋に入り、

K₉₋₁M₂₋₄ よう・おもむき 3-3〔澤田歌〕
ような趣

1034 取り払われた玉の井停車場の跡が雑
草に蔽われて、こなたから見ると城址
のような趣きをなしている。〔澤〕

K₉₋₁M₂₋₅ よう・風情 1-1〔歌〕
ような風情

1035 この便所ばかりは地震直後そのまま
のような風情でまっぴるまのほこり風
に吹かれていた。

K₉₋₁M₂₋₆ よう・ふう 3-3〔明 蔵 お〕
・1 ような風 2-2〔明 蔵〕

1036 津田は袖を通したわが姿を、奴の
ような風をして、少しきまり悪そうに
眺めた。〔明〕

・2 よな風に〔お〕

1037 あんさん言うたら、こなにあてを愛
しがって、とそれはもう、唄の文句に
なっているよな風に言うのでござりま
す。

K₉₋₁M₂₋₈ よう・状態 2-3〔他₂ 顔〕
ような状態

1038 血管がひろがり、汗腺がよだれを流
しているよな状態〔他〕

K₉₋₁M₂₋₉ よう・観 1-1〔日〕
よな観を呈している

1039 それは貸さない口実を見つけ出すた
めの調査料のよな観を呈している。

K₉₋₁M₂₋₁₁ よう・ぐあい 2-2〔高明〕
・1 ような具合〔高〕

1040 疵の痛みがなくなって気が遠くなっ
て、ひとくつついている婦人の身体
で、私は花びらの中へ包まれたよな
具合。

・2 ような具合〔明〕

1041 お秀は津田の肩を揺ぶるよな具合
に、再び前の言葉を繰り返した。

K₉₋₁M₂₋₁₂ よう・あんばい 1-1〔無〕
よなあんばい

1042 私は田端にいて、さような借家を手
に入れているゆえ、…我孫子の有様を
思う日が多く、またそれを楽しんでい
て、田舎に控家があるよなあんばい
でありました。

K₉₋₁M₂₋₁₃ よう・調子 5-7〔歌₃ 高明 く
海〕

・1 かのよな調子〔歌〕

1043 突然機関車から一つの手が差し出さ
れた。それは人がショベルをつき出し
たかのよな調子で機械的につき出さ
れた。

- ・2 ような調子 5-6 [歌: 高明く海]
1044 彼女の枯木のような調子は、安吉の子供時分以来寸分かわらぬ善意にみちていた。[歌]

K₉₋₁M₂₋₁₄ よう・口調 1-1 [明]

ような口調

- 1045 しばらく間を置いてからひとりごと
のような口調で彼は妙なことを言い出した。

K₉₋₁M₂₋₁₆ よう・形 9-12 [田: 明 春 顔
ハ 金 他 海 死]

・1 ようなかたち 2-2 [春 海]

- 1046 師匠との折合いがつかなくなって来た。…どこか籠かごのゆるんで来たような、ホゾの外れて来たようなかたちのあるのがかれに感じられて来た。

・2 ような形 6-9 [田: 明 顔 金 他 死]

- 1047 僕は兵隊の脇腹に銃創しゅうそうがあり、そこだけ萎んだ花卉しげのような形で、周りの皮膚より黒ずんで厚ぼったく変色しているのを見た。[死]

・3 ような・形 [ハ]

- 1048 彼女はいま現にいる寄寓先の同居人のことは話すが、その同居人と自分との交渉については多くを語らぬ。で、僕は、肝腎の実像のそのまわりにチラチラひら閃めく照明のような光ばかりを見せつけられる形であった

K₉₋₁M₂₋₁₇ よう・かっこう 3-3 [歌 流 娼]

ような恰好

- 1049 毛を揺られたにわたりのような恰好で、彼女の部屋にはいり、にわかかつこうに兇暴ひさばになって彼女の軀を貪り食う。[娼]

K₉₋₃M₂₋₆ みたい・ふう 1-1 [お]

みたような風

- 1050 お仙のくれた着物きて、なにやら土つち偶まみたような風してなァ、

K₉M₃ 33-172

K₉₋₁M₃₋₂ よう・感じ 16-41 [縮: 顔: 金: 他: 無: 永: 毒: 流: ハ: 死: 神 立 施 く 女 海]

- ・1 ような感じ 16-40 [縮: 顔: 金: 他: 無: 毒: 流: ハ: 永: 死: 神 立 施 く 女 海]

- 1051 銀子は気持が暗くなり、高いところから突き落されたような感じだったが、占いを信ずる気にもなれなかった。[縮]

・2 ように・感じ(名詞) [永]

- 1052 彼女は、もうその微笑にいないのに、その微笑した顔だけが、鋳型のようにそこに残っている感じなのだ。

K₉₋₁M₃₋₃ よう・感触 1-1 [他]

ような・感触

- 1053 蠟石ろうせきの粉をまぶしたようなおまえの内股うちまたの感触

K₉₋₁M₃₋₄ よう・気 8-16 [お: く: 杏: 無 女 顔 風 金]

・1 ような気 6-9 [く: 杏: 無 女 顔 金]

- 1054 明子は塀を倒してどろっと流れ入ってくる水に対して、不可能な抵抗の両腕をあげたまま、逃げまどうような気でぐるぐる部屋の中を見廻した。[く]

・2 ような気になる [風]

- 1055 そういう連中が、ラッシュ・アワーのビルを出る時や、駅の階段を押し出される時、不意にね、自分がパチンコ玉のような、気になることがあるんだ

- ってさ
- ・3 よな^き気になった 1-5 [お_s]
- 1056 今朝起きぬけに捨ててきたおのれの家のありさまが、まごまご^きと眼に見えよな^き気になったのでござります。
- ・4 よな^き気になった [お]
- 1057 にわか^きに急ぎたてられたよな^き気になったのでござります。
- K₉₋₁M₃₋₅ よう・気持ち 20-56 [顔₁₀ 縮₆ 他₆ く₄ ま₄ 杏₃ 母₃ 冬₃ 草₃ 無₂ 女₂ ハ₂ 神 蔵 歌 立 流 白 海 裸]
- ・1 かのよな^き・気持 [白]
- 1058 しかも彼は一足でると、もう白痴の女のことなどは忘れており、何かそういう出来事がもう記憶にも定かでない十年二十年前に行われていたかのよな^き速い^き気持がするだけだった。
- ・2 ような気もち [流]
- 1059 ハイヤーはそのほぎ目のところを難なく出て行くが梨花には感情がのこる。せっかくもぐった穴から曳きずり出されるよな^き気もちだ。
- ・3 ような気持 17-46 [顔₁₀ 縮₆ く₄ ま₄ 他₄ 杏₃ 女₂ 冬₂ ハ₂ 草₂ 神 蔵 無 歌 立 海 裸]
- 1060 草履をはいて、久しぶりに屋敷うちを歩いたときは、嬉しくて、宙に浮いているよな^き気持だった。[ま]
- ・4 ような気持ち [母]
- 1061 かの女は危く叫びそうになって、きっと心を引き締めると、身体の中で全神経が酔を浴びたよな^き気持ちがした。
- ・5 ような・気持 4-5 [他₂ 無 冬 草]
- 1062 さんざんもったいをつけて、書齋に

- 引きこもってはみたものの、ぼくは雨にうたれた紙の凧のよな^きなみじめ^きつたらしい^き気持になっていた。[他]
- ・6 ような・気持ち 1-2 [母₂]
- 1063 薄日が急にさして、あたりを真^{しん}鍍^{もく}色^{いろ}に明るくさせ、それが二人をどこの山路を踏み行くか判らないよな^き線^{ひょう}渺^{びょう}とした^き気持ちにさせた。
- K₉₋₁M₃₋₆ よう・気分 5-9 [他₃ 明₂ 海₂ 永 棘]
- よな^きな気分
- 1064 ぼくは盲人が感触をたのしむよな^き気^き分^{ぶん}で、まだぬくもりが残っているアンチモニイの顔型の表面を、いたわるようにさすってやりながら、[他]
- K₉₋₁M₃₋₇ よう・心持ち 8-21 [お₁₀ 明₄ 神₂ 縮 濯 無 顔 海]
- ・1 ような心持 7-13 [明₄ お₃ 神₂ 縮 無 顔 海]
- 1065 それを耳にした津田は、突然籠の中にいる小鳥の訴えを聞かされたよな^き心^き持^ちがした。[明]
- ・2 ような・心持 [濯]
- 1066 物に追われるよな^きこの心^き持^ちは
- ・3 よな心持 1-7 [お₇]
- 1067 切ない胸の中が、もうからりと晴れるよな^き心^き持^ちでござります。
- K₉₋₁M₃₋₈ よう・心地 2-2 [夜 金]
- よな^きな心地
- 1068 田舎風な風呂に峠道の汗を忘れた時は、いずれも活き返ったよな^き心^き地^ちになった。[夜]
- K₉₋₁M₃₋₉ よう・心 3-7 [冬₅ 明 無]
- よな^きな心
- 1069 私もまたその声と一緒に低い暗いと

- ころに引き摺りこまれてゆくような心になった。〔冬〕
- K₉₋₁M₃₋₁₀** よう・思い 10-13〔く₂ 顔₂ 他₂ 溼 お 母 碑 白 永 草〕
- ・1 ようなおもい〔く〕
- 1070 東京の家の方に残っている広介を想像したとしても、かっと目をひらくようなおもいはなく、
- ・2 ような思い 7-9〔顔₂ 他₂ 溼 お く 碑 永〕
- 1071 わたくしは若い女たちが、その雇主の命令に従って、その顔とその姿とを、あるいは店先、あるいは街上に曝すことを恥とも思わず、中には往々得意らしいのを見て、公娼の張店が復興したような思いをなした。〔溼〕
- ・3 ような想い〔母〕
- 1072 かの女は笑いに巻き締められるような想いが胸に泛んだ。
- ・4 ような・思い〔白〕
- 1073 その宿命の髪の毛を無心になでているような切ない思いになるのであった。
- ・5 ように・想い〔草〕
- 1074 静寂は泉のように胸の中に溢れて来る想いだった。
- K₉₋₁M₃₋₁₂** よう・つもり 1-1〔他〕
ようなつもり
- 1075 選択権をおまえにゆだねることにし、ほっと肩の重荷を下ろしたようなつもりでいたのに、どっこいそうは問屋がおろさなかったというわけだ。
- K₉₋₁M₃₋₁₃** よう・印象 2-2〔日 金〕
ような印象
- 1076 脱ぎすてられたそれらのものは、誉

- れの墓地のような印象を与えた。〔金〕
- K₉₋₃M₃₋₅** みたい・気持 2-3〔顔₂ 金〕
- ・1 みたいな気持 1-2〔顔₂〕
- 1077 大げさにいえば、雲の中をあるいているみたいな気持で、部屋にもどりました。
- ・2 みたような気持〔金〕
- 1078 あんたが弟みたような気持がするんだもの
- K₉M₄** 1-1
- K₉₋₁M₄₋₁** よう・役目 1-1〔毒〕
ような役目
- 1079 看護婦とよばれるわたしは下女のような役目をするのです
- K₉M₈** 6-8
- K₉₋₁M₈₋₁** よう・錯覚 6-8〔顔₂ 他₂ 女 流 冬 棘〕
- ・1 かのような錯覚〔他〕
- 1080 唐突な笑いが、自分の責任であるかのような錯覚にとらわれていた。
- ・2 ような錯覚 6-7〔顔₂ 女 流 冬 他 棘〕
- 1081 切り口を見れば、まぎれもなくプラスチック模型以外の何物でもないのに、つんと死臭を嗅がされたような、錯覚にさえとられる。〔他〕
- K₁₀M₃** 1-1
- K₁₀₋₁M₃₋₂** そう・感じ 1-1〔縮〕
そんな感じ
- 1082 何となし相手の気持をもって行かれような感じであった。
- M** 31-141
- M₁** 2-2
- M₁₋₁** やつ 2-2〔女 冬〕
- 1083 消える前の蠟燭の**ば**あっと燃え上る

292 3. 分類結果

- 奴さ。〔女〕
- M₂ 16-34
- M₂₋₃ ありさま 1-1〔無〕
- 1084 家のすべての物が急に歪んだ有様であった。
- M₂₋₄ おもむき 1-1〔顔〕
- 1085 はなれには、ひととおり和風の庭がつくられている。が、石の橋や灯籠の配置がエキゾチックにできている。逆輸入の日本庭園のおもむきである。
- M₂₋₇ 態 1-1〔歌〕
- 1086 街全体は、ふたつの川と三つの丘とにまたがってばんやりと眠っている態であった。
- M₂₋₁₁ ぐあい 1-1〔顔〕
- 1087 耕も、帖子のひとみを見いった。ながめごっこをしている工合である。
- M₂₋₁₂ あんばい 1-1〔無〕
- 1088 煉瓦壁の夜空のやや高い辛夷の梢は、ぬれ紙のあんばいの花が漂うのであった。
- M₂₋₁₅ 姿勢 1-1〔娼〕
- 1089 娼婦の軀に軀を寄り添わせて、傷口を舐めている姿勢だった。
- M₂₋₁₆ 形 12-18〔流、顔、高夜縮田蔵母山冬金娼〕
- ・1 かたち 1-4〔流、〕
- 1090 特殊な女ばかりの世界とこうしてあたりまえの世界が背なか合せのかたちでくつき、
- ・2 形 11-14〔顔、高夜縮田蔵母山冬金娼〕
- 1091 私はしずかに軀を秋子の軀に寄り添わした。傷ついた二匹の獣が、それぞれ傷口を舐めながら、身を寄せ合い体

- 温を伝え合っている形になることをおそれまいと私は思った。〔娼〕
- M₂₋₂₀ おもかけ 1-1〔ま〕
- 1092 病気で家にぶらぶらしている父には、世捨人の面影があった。
- M₂₋₂₁ 色 3-8〔金、杏、母〕
- 1093 さかなのいろをした空気はあまくて〔杏〕
- M₂₋₂₂ 形式 1-1〔山〕
- 1094 銭苔は緑色の鱗でもって地所とりの形式で繁殖し、
- M₃ 25-93
- M₃₋₁ 感 1-1〔母〕
- の感があった
- 1095 中央の喧騒から遠ざかり、別世界の感があった。
- M₃₋₂ 感じ 14-28〔顔、永、杏、無、く、女、夜縮歌流冬金毒棘〕
- ・1 感じ 13-27〔顔、永、杏、無、く、女、夜歌流冬金毒棘〕
- 1096 鋤山ががたがたと云うあいだへ、きんきんした勝代の声が短く挟まって、鈍感な豚を鎌で突ついて檻へ追いこむ感じた。〔流〕
- ・2 の感じ〔縮〕
- 1097 小菊に芸者屋を出さず相談であったが、彼女も最初は首をひねり、盗人に追銭の感じがして、びったり来ない感じだった
- M₃₋₄ 気 3-3〔縮 顔 ハ〕
- 1098 このうちは、月々吉祥寺から援助されているんだから、大船にのった気でいたらいいですよ〔顔〕
- M₃₋₅ 気持ち 7-14〔顔、母、施、く、毒、風草〕

- ・1 気持 6-12 [顔₄ 施₂ く₂ 毒₂ 風 草]
- 1099 明子は自分の人知れぬ残酷な希望を、小刀で刺して、どうじゃ、と指し示された気持であった。[く]
- ・2 気持ち 1-2 [母₂]
- 1100 見残した芝居の幕のあとを見届ける気持ちで半町ほど距たった人混みの中のかの女を追った。
- M₃₋₇ 心持ち 1-1 [海]
- 1101 彼は忘れていた人物にひさしぶりで出会った心持だった。
- M₃₋₈ 心地 2-2 [夜 顔]
- 1102 寛斎は前途百里の思いに胸の塞がる心地で起ちあがった。[夜]
- M₃₋₁₀ 思い 14-39 [顔₁₀ 他₆ 夜₃ く₃ 実₂ 流₂ ま₂ ハ₂ 海₂ 機 女 風 永 草]
- ・1 おもい 2-3 [く₂ 海]
- 1103 どこからか二人の間には風がしみとおってくるおもいだ。[く]
- ・2 思い 14-35 [顔₁₀ 他₆ 夜₃ 流₂ ま₂ ハ₂ 実 機 く 女 風 永 草 海]
- 1104 崖からとび下りる思いでした[顔]
- ・3 思ひ [実]
- 1105 何を議して、どう云ふ事を論じたか忘れてしまったけれど、その度に憤慨して、一味のなす所、恨み骨髄に徹する思ひがした
- M₃₋₁₁ 感慨 1-1 [杏]
- 1106 亭主とくらしていることは、そこで年季奉公に行っている感慨であった。
- M₃₋₁₂ つもり 3-3 [顔 永 静]
- 1107 自分の心は、あくまで雲のかからないう月のかがやきのつもりであった。
[顔]
- M₃₋₁₃ 印象 1-1 [顔]

の印象

- 1108 あまりの類似に、耕はよろこんでよいやら、うろたえてよいやら、判らなかった。衿子の印象だった。
- M₄ 7-8
- M₄₋₁ 役目 3-3 [日 顔 他]
- 1109 闘争が激化しないように安全弁の役目をつとめることが一つ [日]
- M₄₋₂ 役割 1-1 [ハ]
- 1110 その物語をより簡単に運ぶ必要が生じた際には、一応僕は芝居の黒ん坊の役割を帯び、たまに姿を現わさぬとは限らない。
- M₄₋₃ 模型 1-1 [金]
- 1111 その実在感が形のない虚無のもっとも実在的な模型であり、
- M₄₋₄ 代わり 3-3 [母 顔 冬]
- ・1 の代り 2-2 [母 冬]
- 1112 宗教は阿片の代りになりませんか [冬]
- ・2 の代りをつとめてくれる [顔]
- 1113 足は心の代りをつとめてくれる
- M₅ 1-1
- M₅₋₁ たぐい 1-1 [杏]
- 1114 脳溢血の発作から、十九年間のきょうにいたるまで彼女は半身不随であり、ほとんど妻というものではなく、母親か、姉か、そしてふしあわせな妹かの類であった。
- M₆ 1-1
- M₆₋₁ 類似 1-1 [顔]
- 1115 藤原時代の和様建物の印象が、どこか衿子の印象にかよふものがあると思っただからだ。潇洒であり、ひどく趣をことにしているのだ。衿子の姿からく

る潇洒な線の類似だったろうか。

M₇ 2-2

M₇₋₁ 比喩 1-1 [金]

1116 その明瞭な形態が不明瞭な無形態のもっとも明確な比喩であり、

M₇₋₂ たとえ 1-1 [夜]

1117 飛鳥尽きて良弓収まるの譬^{たと}えを引き、彼ら戦功の兵も少々厄介^{ごうがい}視せられる姿になって行ったと評した。

MD 2-2

M₃D₅ 1-1

M₃₋₂D₅₋₉ 感じ・見える 1-1 [母]

感じに見えた

1118 父が死んで荷^{かち}を卸した感じに見えた母親

M₇D₁₁ 1-1

M₇₋₂D₁₁₋₁ たとえ・思い出す 1-1 [顔]

たとえを・思い出す

1119 若い肉体と、魅力ある顔をもっている。話題も豊富であり、その教養が耕の気にいらなはずはない。猫にカツオブシというたとえを、衿子は思い出す。

MJ 1-1

M₃J₁ 1-1

M₃₋₁₀J₁₋₁ 思い・ほど 1-1 [夜]

1120 驚くばかりさかんな大老の権威の前には幕府内のは皆屏息^{へいそく}して、足を累^{かさ}ねて立つ思い^{おも}いをしているほどだ。

R 11-22

R₃ 5-5

R₃₋₁ いわゆる 4-4 [夜 母 ハ 太]

1121 駿河らをつかまえて言うには、各国公使は軍艦を率いて来て、開港を要求している、これはいわゆる城下の盟^{もが}であって、

R₃₋₃ ほんとの 1-1 [死]

1122 脱出したいだろうな、今こそ、ほんとの監禁状態なのだから。

R₄ 9-16

R₄₋₁ 一種の 8-13 [草 明 神 蔵 母 流 ハ 金]

1123 姪の子だってなんでただ世話するのですか。あれは一種の投資なのよ、信託預金なのよ。期間は長いけれど利廻り确实だわ [流]

R₄₋₂ ある種の 1-1 [ハ]

1124 自分にある種の呪縛を与えておくのが身の安全であろうかと徳子は思った。

R₄₋₃ 一つの 1-1 [永]

1125 あなたは一つの立派な永遠なる序章だ。

R₄₋₄ 第二の 1-1 [明]

1126 彼等は叔父甥というよりもむしろ親子であった。もし第二の親子という言葉が使えらなら、それは最も適切にこの二人の間柄を説明するものであった。[明]

R₅ 1-1

R₅₋₁ 小… 1-1 [母]

1127 銀座の夜に見たむすこであり、美しい若ものである小ナポレオンの姿

RD 2-2

R₁D₃ 1-1

R₄₋₁D₃₋₃ 一種の・呼ぶ 1-1 [金]

一種の・と呼んでもよかった

1128 卑劣さをそのまま勇氣に変え、われわれが悪徳と呼んでいるものをふたたび純粋なエネルギーに還元する、一種の錬金術と呼んでもよかった。

R₄D₁₂ 1-1

R₄₋₁D₁₂₋₁ 一種の・似る 1-1〔冬〕

一種の・に似たようなもの

1129 このふたりの争闘の揉み合いのうちには、一種の、火が燃えしきるときにはぱッと立つところの光耀に似たようなものがちらついていることを感じた。

RJ 2-2

R₁J₁ 1-1

R₁₋₁J₁₋₁ へたな・より 1-1〔縮〕

1130 倉持の家は、写真で見ても下手なお寺より大きい構えで、

R₃J₁ 1-1

R₃₋₂J₁₋₁ ほんの・ほど 1-1〔お〕

1131 月々の掛金いうたら、ほんの蚊の涙ほどのわずかなことでござります

RJK 1-1

R₁J₂K₉ 1-1

R₁₋₂J₂₋₁K₉₋₁ どんな・でも・よう 1-1〔春〕

どんな・でも・ように

1132 その五日ほどの間に、かれは、うそのようにげっそり衰れた。どんな長煩いでもしたあとのように自分にもそうトボンと感じられた。

RJM 1-1

R₃J₁M₃ 1-1

R₃₋₂J₁₋₂M₃₋₅ ほんの・くらい・気持ち

1-1〔他〕

1133 ぼくはこの計画を、さした決断もなしに、ほんのどぶ川を渡るくらいの軽い気持ちで選んだのだった。

RK 7-10

R₂K₂ 2-2

R₂₋₁K₂₋₇ 大した・変わりがない 1-1〔杏〕

と大した変りがあるものか

1134 原稿紙の上で一字も動かないことは百貫もある石のうごかないのと大した変りがあるものか

R₂₋₂K₂₋₇ なんの・変わりがない 1-1〔草〕

と何の変りもなかった

1135 汐見の顔は、手術後の麻酔から醒めきらないで眠っているのと、何の変りもなかった。

R₃K₉ 2-2

R₃₋₁K₉₋₁ いわゆる・よう 1-1〔ま〕

いわゆる・ような

1136 東京の、いわゆる生馬の目を抜くような世界

R₃₋₂K₉₋₁ ほんの・よう 1-1〔花〕

ほんの・ように

1137 長い間、異邦の両親の膝の間にほんの仔猫のように愛撫されてきた

R₁K₉ 4-6

R₄₋₁K₉₋₁ 一種の・よう 4-5〔歌₂ハ 金草〕

・1 一種特別の・ように〔歌〕

1138 彼は一種特別の休憩時間のようにしていつものように安吉にしゃべりつづけた。

•2 一種の・ような 2-2 [歌 草]

1139 一種の笛のような声 [歌]

•3 一種の・ように 2-2 [ハ 金]

1140 一種の衝動のように重いどっしりした
 感じでもって胸の中に沈んだものは
 …という風な疑問だった。[ハ]

R₄₋₁K₉₋₃ 一種の・みたい 1-1 [草]

一種の・みたいじゃないか

1141 どうしてみんな、あの沢田さんのと
 ころに集まるんだろう？ 一種の流行
みたいじゃないか。

RKM 1-1

R₄K₀M₁ 1-1

R₄₋₁K₉₋₁M₁₋₂ 一種の・よう・もの 1-1
 [杏]

一種の・ようなもの

1142 何のための夜警であるかは判らない
 が、判らないままの一種の威嚇のよう
なものが軍の方面からほとぼりして出
ていた。

RKMJD 1-1

R₄K₉M₁J₃D₁ 1-1

R₄₋₁K₉₋₁M₁₋₂J₃₋₄D₁₋₁ 一種の・よう・もの
 さえ・感じる 1-1 [杏]

一種の・ようなものさえ・感じた

1143 おれは拘兎ではないが拘兎であり、
 騙りではないけれど騙りであり、一種
のゆすりのようなものさえあわせて感
じた。

RS 3-7

R₄S₁ 1-2

R₄₋₁S₁₋₆ 一種の・…状態 1-1 [母]

1144 かの女の稚純な白痴性がかの女の自
 他に与える一種の麻痺状態

R₄₋₁S₁₋₈ 一種の・…性 1-1 [母]

1145 稚純極まる内気なるものは、かの女
 の一方の強靱な知性きょうじんに対応する一種の
 白痴性まどうじんではないか。

R₄S₂ 2-3

R₄₋₁S₂₋₁ 一種の・…的 2-3 [他₂ 田]

1146 おまえは、電気ドリルと、ゴキブリ
 と、板ガラスをこする音が、大の苦手
 だが、だからといって、まさかそれを
 人世の重大事などとは言出しはすま
 い。電気ドリルは歯医者きしやの機械からの
 連想だろうと、おおよその見当はつけ
 られるが、あとの二つについては、一
種の心理的蕁麻疹だろうくらいしか言
 いようのない代物だ。[他]

R₄S₉ 1-1

R₄₋₁S₉₋₄ 一種の・…として 1-1 [他]

1147 屈辱が、一種の刺戟療法として働き、
 ぼくを掟破りの方へと駆り立ててい
 った。

R₉S₁ 1-1

R₉₋₁S₁₋₃ 小……式 1-1 [母]

1148 凛々しい小ナポレオン式なの面貌

S 38-409

S₁ 24-117

S₁₋₁ …もの 2-2 [夜 流]

•1 …もの [流]

1149 なぜならそのことがきちんと行われ
 ている家はほとんどないからで、あれ
 ば表彰ものなのだ。

•2 …物 [夜]

1150 ところでこの公武合体ですが、こい

- つがまた眉唾物^{まゆつばもの}ですて。
- S₁₋₂ …色 9-31 [毒₂ 田₃ 杏₃ 母₃ 蔵₂ 顔₂ 裸₂ 日 死]
- 1151 資料課の窓から古綿色^{ふるわたいろ}の雲が低くこの街を覆っているのがみえた。[毒]
- S₁₋₃ …式 2-2 [流 他]
- 1152 なんでも百円式^{ひゃくえんしき}の、いいかげんな自由さ [他]
- S₁₋₄ …なり 2-2 [杏 ハ]
- 1153 鎌^{かま}なり^{なり}の鋭い月 [ハ]
- S₁₋₅ …状 2-2 [杏 他]
- 1154 一銭で買える金魚^{きんぎょ}状^{じょう}の火の舌なめずりが、ちょろ・ちょろ非常な速力で、右と左に競走しながら走りはじめた。[杏]
- S₁₋₆ …状態 4-6 [他₃ 杏 母 毒]
- 1155 にわかには歩行が疾風^{はやかぜ}状態^{じょうたい}に変わった。[杏]
- S₁₋₇ …様 1-1 [他]
- 1156 表皮のガラス様物質^{ガラスようぶつ}について言えば、それはケラチンと呼ばれる、微量の螢光物質^{えいこうぶつ}を含んだ角質蛋白^{かくしつたんぱく}
- S₁₋₈ …性 2-3 [母₂ 他]
- 1157 ときどき店の奥のスタンドで、玻璃^{はり}蓋^{がい}にソーダのフラッシュする音が、室内の春の静物図に揮発性^{きぱくせい}を与えている。[母]
- S₁₋₉ …役 3-6 [女₃ 顔₂ ハ]
- 1158 年上の須質^{すしつ}の中にしまわれている人形役^{にんぎょうやく}が紺野^{こんの}には見ぬけず、[女]
- S₁₋₁₀ …ふう 12-22 [顔₃ 他₄ 夜₂ 無₂ 歌₂ 縮 美 流 冬 金 海]
- 1159 岬に抱かれ、ポッカリと童話風^{どうわふう}の島を浮かべたその風景 [海]
- S₁₋₁₁ …づら 3-4 [毒₂ 杏 他]
- 1 …づら 1-2 [毒₂]
- 1160 自分一人が聖女^{せいじょ}づら^{づら}をするために病院の患者や看護婦がどんなに迷惑を蒙っているのか、あの女は気づかないのです。
- 2 …面^{つら} 2-2 [杏 他]
- 1161 めそめそ悲劇の主人公面^{つら}する [他]
- S₁₋₁₂ …はだ 1-1 [母]
- 1162 おくさんのような、華やかなそして詩人肌^{しにんがは}の方
- S₁₋₁₃ …ぱり 1-1 [縮]
- 1163 浪曲^{なみうた}は何よりも好きで、機嫌^{きげん}のいい時^{とき}は楽燕^{らくえん}張り^{はり}の節廻^{ふまわり}しで、独りで南部^{なんぶ}坂^{さか}を唸^{うな}ったりしていた。
- S₁₋₁₄ …なみ 1-1 [他]
- …なみに
- 1164 この手記の中では、おまえについて、こんな書き方をしたのは、これが始めてだろう。だがそれは、決しておまえを定期預金の通帳^{つうちょう}なみに、満期^{まんき}がくるまで預けっぱなしなどと考えていたせいではなく、
- S₁₋₁₅ …格 1-2 [縮]
- 1165 私が養女^{やうにょ}格^{かく}で別扱い^{べつたい}だもんだから、変な目で見える人もあるのよ。
- S₁₋₁₇ …大 1-1 [海]
- 1166 黒いゴマ粒^{ごまつぶ}大^{だい}のものが入っていた。香辛料^{かうしんりょう}とタバコの種子^{たねこ}だという。
- S₁₋₁₈ …程度 2-6 [顔₃ 他₃]
- 1 …ていど [他]
- 1167 けっきょく、嫉妬^{しつと}そのものが、権利^{けんり}だけ主張^{しやう}して義務^{ぎむ}は認めようとしないう、愛玩用^{あいがんよう}の猫^{ねこ}てい^{てい}どの代物^{しろもの}だということになるのだろうか。
- 2 …程度 2-5 [顔₃ 他₂]

- 1168 おでき程度の虫垂炎に大さわぎする
のがおかしいのかも知れない。〔顔〕
S₁₋₁₉ …以上 3-3〔歌 草 他〕
…以上の
- 1169 今の瞬間における彼とウォーカーと
の関係は、駐車場の改札口で偶然前う
しろに並んだ同士以上の影響をウォー
カーの生涯に及ぼすはずはない。〔歌〕
S₁₋₂₀ …型 7-16〔母₂ 田₂ 他₂ 蔵 施 顔
金〕
- ・1 …形 6-7〔田₂ 蔵 母 施 顔 金〕
- 1170 海は砂浜から掘鉢形に急激に陥ち込
んでいた。〔金〕
- ・2 …型 2-9〔母₂ 他₂〕
- 1171 あのナポレオン型の美青年〔母〕
S₁₋₂₁ …形 1-4〔蔵₄〕
- 1172 庭をかこんで…、蹄鉄形に部屋がな
らんでいる
- S₁₋₂₂ …気分 1-1〔海〕
- 1173 母のことさえ気になければ、ま
ったく申し分のない遠足気分になれ
るわけだ
- S₂ 18-90
- S₂₋₁ …的 18-90〔他₂₁ 顔₁₅ 草₈ 毒₈ 母₆
永₆ 金₆ 流₄ 田₃ 冬₃ 神₂ ま₂ 夜₂ 縮₂ 美₂ 樟₂
ハ 海〕
- 1174 酒間の円滑油の介添業を芸妓の表看
板としている一般しろとの観かた
〔流〕
- S₃ 3-4
- S₃₋₁ …化 3-4〔金₂ 永 他〕
- 1175 唯物史観なんて、客観的真理の奴隷
化であり、〔永〕
- S₄ 8-16
- S₄₋₁ …気取り 1-1〔他〕

- 1176 ぼくは、祭を見物に出かける、伊達
者気取りでいた
- S₄₋₂ …紛い 2-2〔く 他〕
- 1177 海の中に、潮に脚をひたすようにし
て建っている、大きな海の家というの
が、竜宮まがいの屋根に貧弱なイルミ
ネーションをつけて存在を示している
〔く〕
- S₄₋₃ …扱い 4-10〔明₄ 顔₃ 他₂ 母〕
- ・1 …あつかい 2-5〔顔₂ 他₂〕
- 1178 ひどいものになると、私の仕事を、金
が目当ての高等美容師あつかいなんで
すからな〔他〕
- ・2 …扱い 2-5〔明₄ 母〕
- 1179 恋人を實際生活の上でほんとの女神
扱いにする〔母〕
- S₄₋₄ …代わり 3-3〔杏 金 毒〕
- 1180 釧なぞ東京では売れないがここだと
おもちゃ代りに売れるのさ。〔杏〕
- S₅ 21-58
- S₅₋₁ …めく 8-11〔顔₂ 永₂ 蔵 杏 流 毒
他 海〕
- ・1 めいた 8-9〔顔₂ 蔵 杏 流 永 毒 他
海〕
- 1181 あの図書館の図書室めいた着物の反
古紙包みの山の中〔蔵〕
- ・2 めいている 2-2〔顔 永〕
- 1182 明治時代の客車のごとごとと走って
いるのは童話めいている。〔顔〕
- S₅₋₂ …びる 1-1〔女〕
…びた
- 1183 大人びた顔になって深く臉を伏せ
た。
- S₅₋₃ …じみる 16-44〔女₈ 顔₆ 冬₄ 永₄ 他₄
明₃ 母₃ 歌₂ 草₂ 海₂ 縮 杏 立 お 施 く〕

- ・1 …じみた 13-28 [女₂ 冬₃ 永₃ 他₃ 明₂
歌₂ 母₂ 海₂ 縮 杏 立 顔 草]
- 1184 おかねの顔の妖怪じみた醜さが嘘の
ように感じられないのだ。〔永〕
- ・2 …染みた 2-2 [施 く]
- 1185 昨日までの、あの、油染みた、絶望
に怯おびやかされる自分を脱ぎ捨てよう。
〔施〕
- ・3 …じみて 4-5 [顔₂ お 母 女]
- 1186 小麦色の肌理の少し粗い皮膚も男性
じみて須賀にはこころよかった。〔女〕
- ・4 …じみていた [顔]
- 1187 耕は衾子のなかに自分をうずめつく
そうと、狂気じみていた。
- ・5 …染みていた [明]
- 1188 何だか子供染みていた。
- ・6 …じみていて [永]
- 1189 眼が気狂いじみていてぎろぎろと大
きい。
- ・7 …じみている 4-5 [顔₂ 女 冬 草]
- 1190 園子の方が一つ年上なのに、きもの
に対する趣味がいまだに女学生じみて
いる〔顔〕
- ・8 …じみる [他]
- 1191 四十面を下げた赤ん坊では、どんな
笑い方をしたところで、化物じみるの
が当然だろう。
- S₅₋₄ …なす 2-2 [夜 溼]
- 1192 錦なす葉の萎れながらに色増す姿ぞ
いたましき。〔溼〕
- S₆ 10-17
- S₆₋₁ …ぼい 10-16 [顔₃ 母₂ 草₂ 杏 く
女 風 金 他 海]
- ・1 …っぼい 9-13 [顔₂ 草₂ 杏 母 く 女
風 金 海]

- 1193 その男は垢あかっぼい感触を持つてるの
で、なるべく一人垣かきを隔てた向うへど
うしても置きたかった。〔母〕
- ・2 …っぼく 3-3 [母 顔 他]
- 1194 随分僕を子供っぼく見てるんです
ね。〔母〕
- S₆₋₂ …くさい 1-1 [他]
- 1195 生後四十時間にみたくない仮面の、乳
臭い求心的な欲望
- S₇ 16-22
- S₇₋₁ …そっくり 8-9 [他₂ 歌 く ま 永
棘 遠 静]
- 1196 太い短かい首、ブルドックそっくり
に頬の肉のたるんだ、大尉の徽章をつ
けたでっぶり型の男〔遠〕
- S₇₋₂ …同様 6-8 [縮₂ 明₂ 杏 流 ま 他]
- 1197 この土地に生活の根拠をもたず、居
食い同様な疎開者たち〔ま〕
- S₇₋₃ …同然 5-5 [春 美 お ハ 他]
- 1198 光沢なく、髷あちちけた断髪を振り散らし、
どす黒く濁びた乞食同然の志保〔美〕
- S₈ 5-7
- S₈₋₁ …そのまま 3-3 [夜 風 棘]
- 1199 ぬれしよぼれた、ボール箱そのまま
の、ちまちました家々〔風〕
- S₈₋₂ …さながら 2-3 [他₂ 縮]
- 1200 酒の酔いに、その解放感の酔いまで
が加わって、全身欲望の結節でぐりぐ
りになり、ぼくは瘤こぶだらけの老木さな
がらになっていた。〔他〕
- S₈₋₃ …よろしく 1-1 [他]
- 1201 仔犬よろしくじゃれ合ったり
- S₉ 10-64
- S₉₋₁ …たる 1-1 [夜]
- 1202 柱石たる人々

- S₉₋₂ …という 8-53 [他₂₅ 杏₈ 顔₈ 流₅
母₄ 夜明₄ 金]
- ・1 …って [流]
- 1203 しけた柄だね, ビタミンが不足です
って松だねこりゃ。
- ・2 …という 6-48 [他₂₅ 杏₈ 顔₈ 母₃ 流₃
明]
- 1204 重い厚い花卉がひろがってくるよう
な, 咲くという眼なぞしだった。 [流]
- ・3 …というべき [夜]
- 1205 一村の父というべき半蔵
- ・4 …といった 2-2 [母 流]
- 1206 老紳士は, 幼年生に巧みにいい返さ
れた先生といった快笑を顔中に漲らせ
て, 頭を掻いた。 [母]
- ・5 …と謂った [金]
- 1207 鶴川は, 人間の感情を, 昆虫の標本
を作ることの好きな少年がよくそうす
るように, 自分の部屋の小綺麗な小抽
斗にきちんと分類しておいて, 時々そ
れをとりだして実地にためしてみると
謂った趣味があるらしかった。
- S₉₋₃ …という名の 1-1 [他]
- 1208 民族, 国家, 同業組合, 階級, 人種,
宗教等々の集団が…忠誠という名の祭
壇を築こうとする
- S₉₋₄ …として 6-9 [他₃ 母₂ 夜田 杏 ま]
- 1209 薔薇の色と香と, さては葉も刺も,
それらの優秀な無数の詩句の一つ一つ
を肥料として己れのなかに汲み上げ吸
い込んで [田]
- S₁₀ 10-12
- S₁₀₋₁ …そのもの 10-12 [永₂ 金₂ 明 歌
風 冬 白ハ 他 裸]
- ・1 …そのもの 9-11 [永₂ 金₂ 歌 風 冬

白ハ 他 裸]

- 1210 この家は考えると太郎そのものであ
った。 [裸]
- ・2 …その物 [明]
- 1211 彼女の言葉は継子にとってついに永
久の真理その物になった。
- S₁₁ 1-2
- S₁₁₋₁ …ひとつ 1-2 [他₂]
- 1212 ぼくの仮面には, 生まれたての赤ん
坊のように, まだ年輪のひだ一つ, 刻
まれてはいないのだ。
- SD 6-10
- S₁D₁ 1-2
- S₁₋₁₄D₁₋₃ …なみ・考える 1-1 [他]
…なみに考えていた
- 1213 《仮面》は単なる補填物という以上
に, 自分を超越した何かに変身したい
という, すこぶる形而上学的な願望の
表現なのだそうである。ぼくだって,
べつに好きに脱ぎ替えてできる, シャツ
やズボンなみに考えていたわけではな
い。
- S₁₋₁₄D₁₋₁₅ …なみ・扱う 1-1 [他]
…なみに扱う
- 1214 べつに, 自尊心を, 尾髄骨なみに扱
うつもりはない
- S₁D₁₃ 1-1
- S₁₋₁₀D₁₃₋₆ …ふう・ままある 1-1 [母]
風・にままある
- 1215 この老紳士は自分の気持ちを他人の
上に移して, 心やりにする旧官僚風の
人物にままある気質の人で,
- S₅D₅ 2-3
- S₅₋₃D₅₋₉ …じみる・見える 2-3 [永₂ 母]

…じみて見える

1216 壁の前に、左の腕にナフキンをかけた彫刻のように突っ立っているギャルソンの頭が、妙に怪物じみて見える。
〔母〕

S₅D₅ 1-1

S₉₋₁D₅₋₁₇ …として・印象づけられる
1-1〔草〕

…として印象づけられた

1217 音楽として印象づけられた人生

S₅D₆ 1-1

S₉₋₂D₆₋₁ …という・気がする 1-1〔顔〕

1218 清州ほどに生きてくれば、精神の皺にもあかはたまるはずである。冷水摩擦は、単に皮膚の上だけのことではないという気がする。

S₁₀D₄ 1-1

S₁₀₋₁D₄₋₂ …そのもの・化す 1-1〔草〕

…そのものに化していた

1219 月明下の海の上で、僕は魂そのものに化していた。

S₁₀D₅ 1-1

S₁₀₋₁D₅₋₉ …そのもの・見える 1-1〔金〕

…そのものに見えた

1220 白い曇った光線の加減で、この瞬間、私には美しい令嬢の顔が、いつか柏木の話した六十幾歳の老婆の顔そのものに見えたのである。

SDJ 1-1

S₉D₆J₁ 1-1

S₉₋₂D₆₋₁J₁₋₂ …という・気がする・くらい 1-1〔裸〕

1221 ぼくの皮膚そのものが子供のものではないかという気がするくらい、それ

は体にしみついている。

SJ 2-2

S₅J₁ 1-1

S₅₋₃J₁₋₁ …じみる・ほど 1-1〔冬〕

…じみたほど

1222 嵐のひびきと入りまじって、神と死とを歌うその声は気遣いじみたほど激しく慄えながら、いつまでもつづいた。

S₉J₁ 1-1

S₉₋₂J₁₋₁ …という・ほど 1-1〔母〕

…といったほど

1223 先輩というより、兄分といったほどに寛いでむすこが交際している

SK 5-8

S₁K₉ 1-1

S₁₋₅K₉₋₁ …状・よう 1-1〔他〕

…状・ようだった

1224 急にあたりの時間が、ゼリー状に凝固しはじめたようだった。

S₉K₉ 4-6

S₉₋₂K₉₋₁ …という・よう 4-6〔く、神冬 絵〕

・1 …というように 2-3〔く、冬〕

1225 その歯は、苦痛を噛みしめてそんなに白くなったというように光っていた。〔冬〕

・2 …と言うように〔神〕

1226 何事もなかったと言うようにニコニコして。

・3 …といったような〔く〕

1227 家の中にどこか元日らしいざわめきを包みながらも、今夜は早寝です、といったような静かな町

- ・4 …といったように〔絵〕
- 1228 西野は上京してくると、もはや奴僕
は必要なくなったといったように私の
願いをききいれようとしなかった。
- S₁₀K₉ 1-1
- S₁₀₋₁K₉₋₁ …そのもの・よう 1-1〔他〕
- …そのもの・ような
- 1229 自分自身が、破壊そのものであるよ
うなそんな仮面
- SKD 1-1
- S₉K₉D₅ 1-1
- S₈₋₂K₉₋₁D₅₋₄ …さながら・よう・思われ
る 1-1〔金〕
- …さながら・ように思われた
- 1230 金閣はあのエウリュディケーさなが
ら、姿は忽ち掻き消されているように
思われた。
- SKM 9-9
- S₉K₉M₁ 1-1
- S₉₋₂K₉₋₁M₁₋₂ …という・よう・もの
1-1〔顔〕
- …というようなもの
- 1231 たとえどんなことがあったにして
も、災難のようなものだ。道を歩いて
いて、思わずつまずいて、倒れたとい
うようなものだ。
- S₉K₉M₂ 5-5
- S₉₋₂K₉₋₁M₂₋₄ …という・よう・おもむ
き 1-1〔樽〕
- …といったような趣き
- 1232 雨や風が蝕んでやがて土へ帰ってし
まう、といったような趣きのある街
- S₉₋₂K₉₋₁M₂₋₁₁ …という・よう・ぐあい

2-2〔ひ 他〕

- ・1 …というような工合〔ひ〕
- 1233 三井さんの例などでなしに、山下清
画伯みたいに、兵隊の位で言った方が
分りよかったかもしれないわね。『大将
と兵卒』というような工合に
- ・2 …というような具合〔他〕
- 1234 どんな小さな言葉でも、たちまち相
手の共鳴によって、二倍にふくれ上る
というような具合だったのだ。
- S₉₋₂K₉₋₁M₂₋₁₇ …という・よう・かっこ
う 1-1〔神〕
- …といったような恰好
- 1235 うつむいて、一心に地面を見つめて
いるといったような恰好で、歩いてい
た。
- S₉₋₂K₉₋₁M₂₋₂₃ …という・よう・図
1-1〔冬〕
- …といったような図
- 1236 美しく晴れた秋の朝、巨大な地主が
一族郎党を従えてこんな外套をきて教
会にゆく、といったような図
- S₉K₉M₃ 3-3
- S₉₋₂K₉₋₁M₃₋₂ …という・よう・感じ
3-3〔母 流 永〕
- ・1 …というような感じ〔永〕
- 1237 彼の病気を一挙に快癒させる薬品と
いうような感じがいかみで銀次郎に会いたくな
っているのである。
- ・2 と言ったような感じ〔母〕
- 1238 新中世紀趣味と言ったような感じ
- ・3 …といった・ような感じ〔流〕
- 1239 たとえ対手を殺しても自分だけの
しあがりたいといった、妻まじい競り
あいのような感じ〔流〕

SM 15-34

S₂M₃ 1-1S₂₋₁M₃₋₂ …的・感じ 1-1〔永〕

…的な感じ

1240 濡れた、暗い、動物的な感じのする
眼でじっと眺めている。S₉M₁ 2-2S₉₋₂M₁₋₁ …という・やつ 2-2〔杏 風〕1241 カイザルの物はカイザルに返せとい
う奴か。〔杏〕S₉M₂ 13-24S₉₋₂M₂₋₅ …という・風情 1-2〔高₂〕

・1 …という風情

1242 ただ一筋でも巖を越して男滝に縋り
つこうとする形、それでも中を隔てら
れて末までは雫も通わぬので、揉まれ、
揺られてつぶさに辛苦を嘗めるという
風情

・2 …といった風情

1243 その悪戯にいたく機嫌を損ねた形、
あまり子供がはしゃぎ過ぎると、若い
母様には得である図じゃ。本当に怒り
出す。といった風情で面倒くさそうに衣服を
着ていたから、私は何にも問わずに小
さくなって黙って控えたS₉₋₂M₂₋₆ …という・ふう 9-15〔流₃ 金₃
夜₂ 明₂ 縮 樽 く 顔 永〕・1 …という風 6-8〔流₂ 金₂ 夜 明 く
顔〕1244 歩行は実に凝っていた。いつもぬか
るみの中を歩いているようで一方の足
をぬかるみからようやく引き抜くと、
もう一方の足はまたぬかるみにはまり
込んでいるという風なのである。〔金〕

・2 …というふうに〔夜〕

1245 人々の肩に昇がれ、輿に乗せられて
生贄を送るというふうに、親たちに泣
かれて嫁いだのであった。

・3 …という風に 2-2〔縮 樽〕

1246 あんな色彩やあんなヴェリユウムに
凝り固まったという風に果物は並んで
いる。〔樽〕

・4 …とといった風 2-2〔明 永〕

1247 一分の隙もない洋行帰りの上流紳士
といった風〔永〕

・5 …と云った風〔金〕

1248 雨がひろがり方を失って、この町の一
隅に迷い込んで、立ちすくんでいると
云った風である。

・6 …とといったふうな〔流〕

1249 そのからだつきも急にも一ときわ幅を
広げたといったふうなものが感じられ
た。S₉₋₂M₂₋₁₁ …という・ぐあい 2-2〔母 顔〕

・1 …という工合〔顔〕

1250 妥協点をみだして、労資が握手をす
るという工合にはいかない問題だよ。

・2 …とといった工合〔母〕

1251 春もやや準備ができたといった工合
に、和やかなものが、晴れた空にも、
建物を包む丘の茂みにも含みかけてい
た。S₉₋₂M₂₋₁₃ …という・調子 1-1〔顔〕

…とといった調子

1252 ふだん胸にためていることを、こ
の機会にぶちまけるといった調子であ
る。S₉₋₂M₂₋₁₆ …という・形 1-1〔春〕

…とといったかたち

- 1253 どこを風がふくといったかたちに、
冬がれや、冬枯れの……しきりに一
人、句をあんじながらあるいた。
S₉₋₂M₂₋₁₇ …という・かっこう 1-1 [海]
1254 父親というよりは遠い親戚のよう
にも思えた。親戚の老人が上京したつ
いでに、ちょっと寄ったという恰好だ。
S₉₋₂M₂₋₁₈ …という・顔 1-1 [顔]
…といった顔
1255 はらの大きくなったのは自分の責任
ではないといった顔
S₉₋₂M₂₋₁₉ …という・顔つき 1-1 [母]
1256 それは仄かで濃厚な黄昏を味わうと
いう顔つきに一致して、いづらか横着
に構えた貪欲な落着きにさえ見えた。
S₉M₃ 5-7
S₉₋₂M₃₋₂ …という・感じ 4-5 [流: 縮
風 海]
・1 …という感じ 2-2 [縮 風]
1257 法律家の渡弁護士が自然、主人歿後
の倉持家に重要な地位を占めることと
なり、年の若い倉持には、ちょっと目
の上の瘤という感じで、[縮]
・2 …といった感じ 2-3 [流: 海]
1258 すでに行く道が手固くかためてある
といった感じである。[流]
S₉₋₂M₃₋₅ …という・気持ち 1-1 [顔]
1259 衿子という存在を、たしかにつかん
だという気持だった。
S₉₋₂M₃₋₁₀ …という・思い 1-1 [流]
1260 心細くぼつんと、ちがった水の中に
甦まれたという思いである。

- SMD 1-1
S₉M₂D₅ 1-1
S₉₋₂M₂₋₆D₅₋₉ …という・ふう・見える
1-1 [金]
…という風に見えた
1261 庇を漆黒に反射させている制帽や、
そのかたわらに掛けられた帯革と短剣
は…若い英雄の遺品という風に見えた
のである。
SMJ 1-1
S₂M₃J₁ 1-1
S₂₋₁M₃₋₂J₁₋₁ …的・感じ・ほど 1-1 [永]
1262 それは全く病的な感じがするほど白
い。
SS 2-2
S₁S₄ 1-1
S₁₋₁₄S₄₋₃ …なみ・…扱い 1-1 [他]
1263 この最後の労働だけは、そう軽々し
く排泄なみの手段扱いしてしまっ
ては、やはり不謹慎なの譏りをまぬかれな
いかもしれぬ。
S₁S₅ 1-1
S₁₋₈S₅₋₃ …性・…じみる 1-1 [母]
…性じみて
1264 人間性の、あらゆる洗練を経た後の
あわれさ、素朴さ、切実さ——それが
馬鹿らしいほど小児性じみてしかも無
性格に表現されている巴里。

3.2 結合比喩

〔作り方〕

- 1) 結合比喩と認定された比喩表現例は、比喩思考の原型を表示するため、実現形を基本形に変換する。
 - (1) 表現例から中核部を抽出する。

例： なんともいいようのない孤独感が押しよせてきた〔冬〕⇒孤独感が押しよせた
 - (2) 形式より意味の実質を重視し、同意の単純形式で表す。

例： 爆発をする、爆発を見せる、爆発を起こす、爆発を始める⇒爆発する
 - (3) 名詞の格を明示する。

例： 感情は逃げた〔樽〕⇒感情が逃げた
例： ためらい目がけて〔他〕⇒ためらいを目がけて
 - (4) 活用語は代表形に統一する。

例： やる瀬なさにひたって〔顔〕⇒やる瀬なさにひたる
例： 意識が重かった〔風〕⇒意識が重い
 - (5) 動詞・形容(動)詞と関係の深い名詞は変形して述語の位置に置く。(「名」で表示)

例： 心臓の喘ぎ〔母〕⇒心臓が喘ぐ
例： 性格がにが味が帯びる〔碑〕⇒性格がにがいがい
 - (6) 受動、および、それに準ずるものは能動にもどす。(「受」で表示。その際、語順も換われば「順」も併奉。)

例： 無意味に襲われる〔永〕⇒無意味が襲う
例： 人生から復讐を受ける〔く〕⇒人生が復讐する
 - (7) 使役は、比喩関係を崩さないかぎり、元にもどす。(「使」で表示)

例： あこがれを納得させる〔母〕⇒あこがれが納得する
(「痛みがさせる」〔女〕のように、使役であること自体が比喩の成立に重要なかわりを持つ場あいは、そのままの形で他動詞扱いにする。)
 - (8) 可能の形はもとになった形に直す。(「可」で表示)

例： 心がひきだせる〔顔〕⇒心をひきだす
 - (9) 修飾関係のうち、変形可能なものは、主述関係に移す。(「順」で表示)

例： 語っている永遠〔金〕⇒永遠が語る
例： 蒼い疲れ〔く〕⇒疲れが蒼い
 - (10) 否定は、比喩関係を崩さないかぎり、肯定に変える。(「否」で表示)

例： 気持ちは吐かない〔母〕⇒気持ちを吐く
 - (11) 名詞のノ格に名詞が続く形式の結合比喩において、後続名詞は作品の論理的な意味

情報を担い、明確に先行名詞のほうが比喩的に選択された例を区別する。(「前」で表示)

例： 皮膚病やみのドア〔他〕 特製の生〔金〕 ひとかけらの匂い〔顔〕

(通常は「雨の聲音」〔田〕のように後統部の意味がずれるか、両方ずれて文脈比喩に移行しやすい)

- 2) 各結合要素の文法的な性質に基づいて品詞性の表示を行う。

例： 考え方⇒名詞 ふくれあがる⇒動詞

- 3) 比喩的結合を作っている要素の品詞などに基づき、その組みあわせによって分類する。

例： 名・名, 名・動, 名・形, 副・動

- 4) 動詞の自他の別によって分類する。

例： 名・自, 名・他, 副・自

- 5) 比喩的結合の箇所数によって分類する。

例： 名・自, 名・名・自, 名・名・名・他

- 6) 名詞の格の違いによって分類する。

例： 名_テ自, 名_ニ自, 名_ガ名_ヲ他, 名_ガ形

- 7) 格助詞の組みあわせの五十音順に分配する。

例： 名_テ名_ニ他, 名_テ名_ヲ他, 名_ニ名_ヲ他

- 8) 同じ組みあわせの内部は、結合における格助詞の五十音順で先後を決める。

例： 名_ガ名_ニ自, 名_ニ名_ガ自, 名_テ名_ニ自, 名_ニ名_テ自

- 9) 結合要素の意味上のグループに応じて分類する。

例： うつくしさ_ガ盛りこぼれる〔杏〕

感傷_ガ(飯から)こぼれる〔流〕

光_ガこぼれる〔冬〕

微光_ガ滴る〔金〕

星座_ガ(目蓋から)滴り落ちる〔草〕

- 1) このグループ化には主として『分類語彙表』を利用する。

- 2) 『分類語彙表』に見あたらない場あいは、次のように、同類の他形式によってその位置を推定する。

例： さかなでにする⇒なでる

滑り出す⇒滑る(「滑り出し」にはしない)

エネルギー⇒力強い

草平⇒人

金閣⇒堂

- 3) 2字以上の漢語に「する」のついたサ変動詞(行動する, 成立する ナド)は、一般の辞書と同様、『分類語彙表』でも、その漢語部分だけを体言として取りあげてい

るので、名詞なみの分類番号になるが、ここでは動詞の形でその番号を利用する。したがって、同型においては、その種のサ変動詞が、個々の意味に関係なく一括して前に出る。

- (4) 「幸福感」「可能性」などは、造語成分「…感」「…性」などの分類番号を利用する。
 (5) 「知的」「挑発的」などは『分類語彙表』の番号をそのまま使い、「人工的」「封建的」などのように、その形では表に現れないものは、接尾辞「…的」を除く部分(「人工」「封建」ナド)の分類番号を利用する。
 (6) 「…さ」の場合には、比喩関係の成立事情を考慮して決める。

例：「重さが押しつぶす」では接尾辞の「…さ」(「軽さ」でも「うれしさ」でも比喩は成立する)を使い、「事件の重さ」は「重い」(そういうとらえ方が比喩成立の基盤になる)を使う。

10) 同型(最小見だし)の内部を結合要素の分類番号順に配列する。

- (1) 最終要素を最優先にする。結合比喩例の7割は名詞と動詞との組みあわせなので、その結果、この表の多くは動詞が規準となり、名詞と形容(動)詞との組みあわせでは形容(動)詞が、名詞どうしの組みあわせでは後続の名詞が、それぞれ規準となって並べられることになる。
 (2) 3要素以上から成る場合いは、まず、最後の第3要素を規準に配列し、あとは初めの要素から順に規準にとる。したがって、規準とする優先順位は、例えば、次のようになる。

名₁名₂名₃=名₄他

⇒優先順位 他, 名₁, 名₂, 名₃, 名₄

- (3) 規準とした要素の分類番号が同番である場合いは、『分類語彙表』中の配列順に従う。
 (4) 同要素の場合いは、第2規準要素の分類番号順とする。

例：「草平=欲望が萌す」と「胸=念が萌す」とでは、第1規準が同語なので、第2規準である第1要素を比較すると、「草平」は人名だから「人」の分類番号1.202をとり、「胸」は1.572となる。したがって、動詞の直前にある「欲望」が1.3042で「念」が1.3040であるにもかかわらず、前者の例が先に出る。

- (5) その形では『分類語彙表』に収められていない複合語では、その意味の中核を担うと思われるほうの要素を規準にし、その相互の配列順は、基本の語を最初立て、あとは、その付加部分の五十音順に並べる。

例：こぼれる、こぼれこむ、こぼれでる

11) その結合比喩例の意味の理解に役立つ最小限度の文脈を()内に追加する。

例：火が(壁を) 舐める

ただし、その部分が明示されないと結合比喩を構成しないか、意味関係が充足しない

308 3. 分類結果

ために、結合比喩としての成立が不たしかになるものは、追加文脈とはせずに、それを含む句全体をそこに立てる。

例： 仮面=酔いがまわる

例： 金カラ血が出る

- 12) 結合比喩の成立を支えているわけではないが、その表現の比喩性を増加させる働きをしている文脈を（ ）内に追加する。

例： 機会ガ(向うから)やって来る

- 13) 全要素が同語である用例が複数個ある場あいは、その出所を「巻名-ページ」の順に列挙する。

例： 心ガ震える 32-19, 37-314, 64-61

- 14) その結びつきが慣用化しているものは「慣」、それに準ずるものは「(慣)」と表示する。

例： 頬笑みガ来る

幸福ガ来る(慣)

平和ガ来る 慣

- 15) 「比喩索引」による検索の便を図って、通し番号をつける。

〔読み方〕

- 1) 結合比喩を作りだしている要素の性格が品詞の組みあわせで表示され、次の順序に配列されている。

名詞・動詞

形容(動)詞・動詞

副詞・動詞

名詞・形容(動)詞

副詞・形容(動)詞

名詞・副詞

名詞・名詞

その他(連体修飾・名詞, 名詞・助詞, 語構成要素どうし)

- 2) 動詞は自他に区分されており、自動詞が前に配列されている。

例： 形・自, 形・他, 副・自, 副・他

- 3) 比喩的結合の箇所数(名詞要素の数に対応)の少ないほうが前に配列されている。

例： 名自, 名名自……名他, 名名他, 名名名他

- 4) 名詞要素が1個の場あいは、その格助詞の五十音順に配列されている。

例： 名ガ他, 名テ他, 名ニ他, 名ヨ他

- 5) 名詞要素が2個以上の場あいは、まず、その格助詞の組みあわせの五十音順で区分さ

れ、同じ組の内部は結合順における格助詞の五十音順に配列されている。

例： 名_カ名_ヲ他、 名_ヲ名_ガ他、 名_デ名_ヲ他、 名₌名_デ他、 名₌名_ヲ他、 名_ヲ名₌他

- 6) 最小見だし(同型)の内部は、最終要素の意味グループとして(『分類語彙表』の分類番号に準じて)配列されている。

例： ピアノト格闘する

樹木ト格闘する

問題ト対決する

顔ト対決する

- 7) 最終要素が同語の場合はいは、第1要素、第2要素……の順に優先規準を決め、その意味グループに応じて配列されている。

例： 闇_ガ金閣_ヲ呑む

闇_ガ勾欄_ヲ呑む

雲_ガ月_ヲ呑む

雲_ガ頭蓋骨_ヲ呑む

火_ガ病院_ヲ呑む

- 8) 冒頭の数字は、結合比喩例の通し番号で、結合比喩の分類結果におけるその用例の位置を示す。したがって、「比喩索引」を引いてその用例を探しだす際の用例番号の役を果たす。

- 9) 次が結合比喩例の中核を変形・整理して示した言語形式である。

(1) 小さく添えたカタカナは、その名詞の格を表す助詞である。

例： 要求_カ意味_ヘ気持ち_ヲ追加する

(2) ()内は、その用例の意味の理解を助ける文脈、あるいは、その結合の比喩性を高める働きをしている文脈の、最小限度の補足部分である。

例： 生活_ガ(ふたりの前に)ひらける

例： 夜_ガ(パンティ_ヘ)降りる

- 10) 次の「慣」印はその結合が慣用的であることを、「(慣)」印は半慣用的であることを、また、無じるしは珍しい結合であることを、それぞれ示す。

例： 空気_ガ重い

声_ガ重い (慣)

気分_ガ重い 慣

- 11) 次の数字はその用例の出所を明示したもので、「-」の前が資料とした「日本の文学」中の巻数を、「-」の後がその該当ページを示す。

例： 文学ト結婚する 64-63 (64巻の63ページ)

- 12) 最後に散見する諸種の記号は、それぞれ次のような情報を伝える。

名= 原文では名詞の形

310 3. 分類結果

- 例： 言葉_ガ溶ける 名 ⇨言葉の溶け方
- 例： 不安_ガ重い 名 ⇨不安の重さ
- 受＝ 原文では受身の形
- 例： にじみ_ヲ吹き消す 受 ⇨にじみが吹き消される
- 使＝ 原文では使役の形
- 例： 苦痛_ガ甘えかける 使 ⇨苦痛を甘えかけさせる
- 可＝ 原文では可能の形
- 例： 心_ヲひきだす 可 ⇨心がひきだせる
- 順＝ 原文では異なった語順
- 例： 年の瀬_ガ絡みつく 順 ⇨絡みつく年の瀬
- 例： 匂い_ガ高い 順 ⇨高い匂い
- 否＝ 原文では否定の形
- 例： 心持_ガ死_ヲ合点する 否 ⇨心持が死を合点しない
- 前＝ 名詞どうしの結合のうち、明らかに前要素に意味のずれがある
- 例： ひときれノ考え 前

〔使い方〕

- 1) 結合比喩の全貌（どんな要素とどんな要素とのどんな結合によるどんな比喩例がどこにどんな形でどのぐらい現れるか ナド）を概観する。
 - 2) 結合比喩にはどんな類（名詞と動詞との結合、名詞と形容詞との結合、名詞どうしの結合、語構成要素間の結合 ナド）があるかを調べる。
 - 3) 結合比喩にはどんな種（名自、名名自、名名名他、副自、名形、名名 ナド）があるかを調べる。
 - 4) 結合比喩にはどんな関係（名_ガ自、名_ガ名＝自、名_ヲ他、名_ガ名_ヲ他、名_ガ形、名ノ名 ナド）があるかを調べる。
- 結合比喩の各型にはどんなタイプ（精神・放心・怯えノ敏、調子・微笑・はしゃぎよう・陽気さ＝感染する ナド）があるかを調べる。
- 6) 各用例の出現状況（感情_ガ流れる 46-298, 55-170, 62-281 ナド）を調べる。
 - 7) 各用例がどんな形（名詞形、受身、連体修飾 ナド）で現れるかを調べる。
 - 8) 各要素（「落ち込む」 ナド）がどんな結合（言葉・胸_ガ、睡り・試み・会話・憂鬱＝ナド）をなす例があるかを、「比喩索引」を併用して調べる。

例1： 「消す」意の動詞が「名_ガ名_ヲ他」の型で2箇所比喩点をもって現れた用例の出現状況は？

まず、「名詞・動詞」の部から「名名他」の部を探しだし、次に、格助詞の五十音順を利用して「ガラ」つまり「名_ガと名_ヲとの組みあわせ」の部分を見つける。そして、こ

の場合はいは「名_カ名_ヲ」の順なので、そのうちの前のほうを見ると、求める「名_カ名_ヲ他」の型の用例が並んでいる。そこで、その動詞要素に目を走らせると、「消す」が見つかり、次いで、その「消す」を中核とした類意の複合動詞が見いだされる。その箇所から次の情報が得られる。

「消す」という動詞では遠藤周作の『海と毒薬』に「諦め_カ性欲_ヲ消す」の用例が見られるだけだが、その同類として、「薄明_カまどろみ_ヲ消し去る」と「不安_カ陶醉_ヲ掻き消す」の例が福永武彦の『草の花』に、「息_カ考え_ヲ吹き消す」の例が椎名麟三の『永遠なる序章』に各1例あり、そのうち最後の例だけは、そのままの形ではなく、受身で語順も違った「考え_カ息=吹き消される」といった形で現れた。

例2: 「名_カ他」の型で「襲う」が使われた用例のうち、受身(名=襲われる)にならずに現れた場あいの名詞部分にはどんな語が来るか?

これも前例と同様の手順で、「名詞と動詞」の部から「名他」の部を見つけ、格助詞に注意して「名_カ他」の型の部分を探しだすことも考えられるが、多数の用例を抱えこんだこの型の場合はいは、そこから「襲う」の用例を探しあてるのは容易なことではない。

また、この配列の規準とした『分類語彙表』の索引を利用して「襲う」の分類番号を調べて見当をつけるのも一法であるが、それよりも「比喩索引」を使ったほうが早い。ただし、そこには「襲う」が結合比喩として現れたすべての用例があげられているので、「襲う」の結合上の全貌を知るには便利だが、この場合はいは「名_カ他」の型だけが対象だから、そこから該当するものを選びとらなければならない。とは言っても、いちいち吟味する必要はなく、分類結果の結合比喩の部の「もくじ」を利用して「名_カ他」の用例が何番から何番までを占めているかを調べ、その範囲の用例番号を拾いだせば済む。

このようにして調べた結果、用例の7割以上(26/36)が「後悔に襲われる」式の受身で現れ、修飾関係を主述関係に解釈的に置換したために語順の変った1例(寂莫感)をも除外するとすれば、「襲う」の主語に立つ名詞は「うしろすがた、冬来、痛み(2例。受身でも1例)、睡気、睡り(受身でも)、従順、こだま、憂鬱(受身でも)」となる、という求める情報が得られるはずである。

例3: 「溶けこむ」が結合比喩として現れた全用例は?

「溶けこむ」は自動詞なので、その意味での限定はある程度可能だが、それは「名_カ自」の型で使われるだけでなく、その格支配の性質上、「名=自」という型の結合比喩例になることも十分に考えられるし、また、「名_カ名=自」という2比喩点をそなえた型に現れるかもしれない、さらには、形容(動)詞や副詞との組みあわせの部分も考慮に入れなければならないので、直接にこの結合比喩の分類結果に当たるのは得策ではない。そこで、「比喩索引」を使用すると、この調査に現れた結合比喩の各要素の全用例のありかをつかむことができる。すなわち、五十音順を利用して、問題にしたい要素を引くと、そこにその要素の全用例が番号で示されている。その番号を使って、結合比喩の分類結果中の各箇所を調べ

ると、次の情報が得られる。

「感覚・憤怒・希望・懷疑 \mathcal{A} とけこむ」といった抽象的な主語を受ける例が阿部知二の『冬の宿』の同一ページ内に現れ、「音・空・海 \mathcal{A} とけ込む」といった可感的な存在を主語とする例が佐多稲子の『くれない』に、これもごく狭い範囲に集中的に現れたほか、「顔 \mathcal{A} 溶けこむ」のように人体部分を〈溶けこむ〉ととらえた例が安岡章太郎の『海辺の光景』にある。一方、「溶けこむ」対象としては、「名=自」として円地文子の『女坂』に「話=溶けこむ」の例が見え、その主体と対象との両方と比喩的な結合をなした例としては、『海辺の光景』に「姿 \mathcal{A} 景色=とけこむ」、佐藤春夫の『田園の憂鬱』に「彼 \mathcal{A} 自然 \sim 溶け込む」の例が見える。

例4： 「一片」や「ひとかけら」に類する要素はどのような名詞と結びついて結合比喩を成しているか？

求める用例は「名ノ名」の型に見られると予想される。ところが、この型の用例の配列順は、名詞が動詞・形容詞と結びつく場あいと同様、後続要素の分類番号を規準としているので、「名ノ一片」に類する形で出る用例は一括してつかめるが、この種の要素は、「一片ノ名」という語順で現れることも考えられ、むしろそのほうが多いかもしれない。となると、「名ノ名」の部の全体に目を通す必要が出てくる。ただし、その類の要素をすべてあげ尽くさなくてもいいのなら、「一片」「一滴」「ひとかけら」「ひときれ」などをねらいうちにし、「比喩索引」を利用して、それぞれの全用例をこの結合比喩の分類結果から拾い出すことができる。いずれにしろ、次のような情報が得られるはずである。

一片： 河面・野原・叛逆精神・記憶・関心・歴史

薄片： 青空

片鱗： 考え

(ひと)かけら： 反省・健忘性・愛情・自信・匂い

ひときれ： 考え

ひとつ： 感情

一枚： 波・素顔

一頁： 青春

ひと握り： 思い出

一滴： 満足感・悦び

一雫： 愛情

も く じ

〔名ガ自〕	1~1262	〔名カラ名ヲ他〕	4070~4073
〔名カラ自〕	1263~1279	〔名ヲ名カラ他〕	4074~4080
〔名テ自〕	1280~1318	〔名テ名ヲ他〕	4081~4088
〔名ト自〕	1319~1349	〔名ヲ名テ他〕	4089~4098
〔名ニ自〕	1350~1586	〔名ニ名ヲ他〕	4099~4127
〔名ヘ自〕	1587~1595	〔名ヲ名ニ他〕	4128~4188
〔名ヲ自〕	1596~1627	〔名ヘ名ヲ他〕	4189~4191
〔名ガ名カラ自〕	1628~1633	〔名ヲ名ヘ他〕	4192~4195
〔名カラ名ガ自〕	1634~1640	〔名ガ名カラ名ヲ他〕	4196~4197
〔名ガ名テ自〕	1641~1647	〔名ガ名テ名ヲ他〕	4198~4199
〔名テ名ガ自〕	1648	〔名ガ名ヲ名テ他〕	4200
〔名ガ名ト自〕	1649~1656	〔名ガ名ニ名ヲ他〕	4201~4210
〔名ガ名ニ自〕	1657~1758	〔名ガ名ヲ名ニ他〕	4211~4216
〔名ニ名ガ自〕	1759~1807	〔名ガ名ヘ名ヲ他〕	4217
〔名ガ名ヘ自〕	1808~1810	〔名ヘ名ガ名ヲ他〕	4218
〔名ヘ名ガ自〕	1811	〔形自〕	4219~4233
〔名ガ名ヲ自〕	1812~1825	〔形他〕	4234~4236
〔名ヲ名ガ自〕	1826~1827	〔副自〕	4237~4248
〔名テ名ニ自〕	1828	〔副他〕	4249~4254
〔名ガ名カラ名ヘ自〕	1829	〔名ガ形〕	4255~4603
〔名ガ他〕	1830~2653	〔名カラ形〕	4604
〔名カラ他〕	2654~2659	〔名ニ形〕	4605~4608
〔名テ他〕	2660~2695	〔名ヨリ形〕	4609
〔名ト他〕	2696~2704	〔名ガ名ト形〕	4610
〔名ニ他〕	2705~2802	〔名ガ名ニ形〕	4611~4612
〔名ヘ他〕	2803~2809	〔名ガ名ヨリ形〕	4613
〔名ヲ他〕	2810~3699	〔副形〕	4614
〔名ガ名カラ他〕	3700~3701	〔名副〕	4615~4628
〔名ガ名テ他〕	3702~3709	〔名名〕	4629~4632
〔名ガ名ニ他〕	3710~3743	〔名ガ名〕	4633~4834
〔名ガ名ヘ他〕	3744~3749	〔名カラノ名〕	4835
〔名ガ名ヲ他〕	3750~4066	〔名テ名〕	4836~4840
〔名ヲ名ガ他〕	4067~4069	〔名ト名〕	4841~4843

314 3. 分類結果

[名=名] 4844
 [名ノ名] 4845~5430

[名へノ名] 5431~5433
 その他 5434~5537

名詞・動詞

名自

[名ガ自]

- 1 ごめんなさいねガ(どの道に)連絡する 63-13
- 2 正義感ガ発露する 69-180
- 3 歴史ガ(昔の顔のまま)登場する 35-317
- 4 愛情ガ(舞台に)登場する 46-338
- 5 頭と頭ガ対立する 36-132
- 6 腕ミガ留守する 37-311名
- 7 欲情ガ(ひとたまりもなく)消滅する 償62-301
- 8 空気ガ緊張する 償72-414順
- 9 愛憎ガ交錯する (償)49-84
- 10 彼ガ変色する 49-44
- 11 乳房ガ金閣に変貌する 69-223
- 12 (嫉妬の)毒ガ(血管のなかで)運動(を)する 73-301
- 13 ものガ蠢動する 55-383
- 14 声ガ空まわりする 49-76
- 15 心持ガ動揺する 償36-12
- 16 足(の先)ガ動揺する 55-462順
- 17 時間ガ停止する 73-351順
- 18 音ガ停滞する 69-241
- 19 仮面ガ立往生する 73-301
- 20 心ガ転倒する (償)55-294
- 21 愛欲ガ顛倒する (償)40-267
- 22 病氣ガ転倒する 55-366使
- 23 自然(全体)ガ転覆する 69-238使
- 24 感情ガ飛躍する (償)49-32順
- 25 希望ガ氾濫する 76-360名
- 26 饑餓ガ冬来する 35-291名
- 27 処理ガ独走する 償73-210

- 28 蜻蛉ガ滑走する 31-56
- 29 悪疾ガ滲透する 償62-328順
- 30 人生ガ進行する 55-183
- 31 絵本ガ侵入する 76-250
- 32 ゼニゴケガ侵入する 52-134順
- 33 他人ガ浸水する 69-272
- 34 夏ガ沈潜する 49-33
- 35 音声・歩きぶりガ勢揃いする 35-386
- 36 心ガ分裂する (償)37-317使、46-343使
- 37 心持ガ接触する 36-109名
- 38 冬ガ固着する 62-310
- 39 病いガ固着する 62-310
- 40 心ガ抵抗する (償)63-24名
- 41 心ガ屈折する 55-114名
- 42 風景ガ屈折する 73-352名
- 43 心ガ屈曲する 69-172名
- 44 自分ガ破裂する 68-114
- 45 ヒステリイガ破裂する 33-36
- 46 バッハガ崩壊する 73-188順、198順
- 47 観念ガ崩壊する (償)73-296
- 48 彼ガ磨滅する 69-169
- 49 言葉ガ磨滅する 73-351
- 50 穴ガ整列する 50-262
- 51 邪悪ガ繁殖する 69-171
- 52 氣拙さガ山積する 64-59
- 53 金額ガ膨脹する 50-335
- 54 腹立ちガ膨脹する 73-265
- 55 氣配ガ充滿する (償)73-250
- 56 死ガ充滿する 73-346
- 57 (仮面の内側に)笑いガ充滿する 73-322
- 58 (頭に)憂鬱ガ充滿する 32-49

- 59 精神が化身する 69-227
- 60 不完全燃焼が狂気じみる 73-354順
- 61 瞳が休息(を)する 31-95
- 62 肉性(の一点)が歓喜する 62-307
- 63 薔薇が憂悶する 31-90
- 64 仮面が鼻白む 73-301
- 65 母性が激怒する 46-356名
- 66 仮面が狼狽する 73-322名
- 67 仮面が満足する 73-324
- 68 藤蔓が満足する 31-67
- 69 足が満足する 55-333
- 70 心理が遠慮(を)する 50-265
- 71 屋外が咆哮する 55-325
- 72 あらしが咆哮する (慣)55-318
- 73 仮面が(掟破りに)専念する 73-356順
- 74 仮面がお喋りする 73-322
- 75 藤蔓が傲語する 31-74
- 76 雑用が会釈する 50-260
- 77 金閣が対話する 69-154
- 78 あなたと僕が交響する 46-353
- 79 ねがいと気持が同居する 55-484
- 80 成熟と未熟さが同居する 73-324
- 81 木が盛装する 72-164
- 82 お歳暮が頰冠りする 50-347
- 83 吉祥寺が避暑(を)する (慣)55-265
- 84 旅がいたずらする 慣55-457名
- 85 運命がいたずらする 慣52-146名
- 86 仮面が暴行する 73-280名
- 87 仮面が一人歩きする 73-271
- 88 音が疾走する 49-68
- 89 雲が疾走する (慣)62-353
- 90 気持が足ぶみ(を)する 55-119
- 91 火が舌なめずりする 35-182名
- 92 仮面が行動する 73-271名
- 93 仮面が悪足掻きする 73-322名
- 94 金閣が対面する 69-154
- 95 意識が(ざわめきに)共鳴する 73-342
- 96 人生が復讐する 49-62受, 63
- 97 情事が繁昌する 55-286
- 98 心が発光する 72-230
- 99 誘惑が発光する 72-230
- 100 線が明滅する 76-227
- 101 行為が反射する 73-480
- 102 避難民が雪崩れ込む 慣28-455順
- 103 緊張が暴発する 73-292名
- 104 気持が爆発する (慣)55-325
- 105 感情が爆発する 73-319名
- 106 怒りが爆発する 慣74-271使
- 107 憤怒が爆発する (慣)32-43
- 108 憤憤が爆発する (慣)64-59
- 109 怒号が爆発する (慣)62-261名
- 110 嵐が爆発する 32-19名
- 111 決意が凝固する 72-223
- 112 情熱が沸騰する 72-297使
- 113 玄関が沸騰する 50-352名
- 114 胸が沸騰する 73-468
- 115 肉が沸騰する 73-224名
- 116 皮膚が沸騰する 73-180
- 117 連中が蒸発する (慣)73-196
- 118 緑り言が蒸発する 73-266
- 119 夜が沈澱する 69-284順
- 120 町の汚れが(皮膚の裏側に)沈澱する 74-280順
- 121 宗教心が燃焼する 55-270名
- 122 (感情)生活が燃焼する 72-175使
- 123 経緯が奔流する 50-33
- 124 仮面が誕生する 73-270順
- 125 男らしいものが成長する (慣)28-460名
- 126 孤独が成長する 72-220
- 127 仮面が成長する 73-288

316 3. 分類結果

- 128 死体が成長する 73-312
- 129 ネオンが呼吸する 73-237順
- 130 全身が呼吸する 74-45
- 131 皮膚が呼吸する 慣76-360
- 132 中身が息づく 55-364
- 133 表情が窒息する 73-227使
- 134 陽の光がまばたく 73-446
- 135 恥らいが感染する 73-205
- 136 妄想が感染する 31-92
- 137 風習が感染する (慣)62-255使
- 138 死が感染する 73-193使
- 139 原稿が夜鳴き(を)する 35-233
- 140 良心が麻痺する 慣72-400
- 141 消息がひびく 62-153
- 142 手紙が響く 46-353名
- 143 肉体がひびく 慣68-101名
- 144 大理石が汗ばむ 76-350
- 145 気持が被さる 49-26
- 146 (浅間)山がかぶさる (慣)72-287
- 147 憂鬱が(額に)かぶさる 48-7
- 148 諦めが(胸に)覆いかぶさる 72-431
- 149 空が蔽いかぶさる (慣)49-72
- 150 出来事が振りかかる (慣)46-191
- 151 圧力がのしかかる 50-124
- 152 重さのがのしかかる 62-138
- 153 心がのしかかる (慣)36-214
- 154 欲望が(肩に)のしかかる 69-205
- 155 業が(重く)のしかかる (慣)50-75順
- 156 ニヒリズムが手に負える (慣)48-18順・否
- 157 沈黙が手に負える 73-241順
- 158 (背・首筋に)視線がまといつく 76-366
- 159 空気がまといつく 76-349受
- 160 汗が(肌)にまといつく (慣)64-238
- 161 余韻が(耳に)まつわる 64-228使
- 162 偏見がまつわる 慣73-254順
- 163 酔いが絡む 50-350
- 164 経験が手垢にまみれる 73-210
- 165 知性が泥にまみれる 55-382
- 166 教養が泥にまみれる 55-382
- 167 和やかなものが(空に)含む※自動詞用法
46-365
- 168 うろたえるものがある 慣55-346
- 169 人間関係がふくらみがある 73-199順
- 170 一瞬間がそこにある 35-389
- 171 病人が頭にある 慣36-95
- 172 心がどこにある 55-26
- 173 魂が手もとにある 72-204
- 174 魂が皮膚にある 73-195
- 175 (巴里の)味がキャフェにある 46-308
- 176 死が遠いところにある 72-231
- 177 佛が(かの女の裡に)いる 46-373
- 178 (そこに浅間)山がいる 35-331
- 179 死が(身近に)いる 73-266
- 180 美が(そこ)におる 69-166
- 181 金閣が(むこう)におる 69-166
- 182 事実がひかえる (慣)55-96
- 183 当惑が眸にあらわれる 55-465
- 184 のぞみが眼差にあらわれる (慣)55-26
- 185 金閣が立ち現われる 69-287
- 186 光が肉体から出る 37-313
- 187 秘密がかかれる(場所) 55-93名
- 188 小説の女がかかれる 35-233
- 189 感情がかかれる 36-43順
- 190 辛いものが潜む 46-364使
- 191 好みか潜む 46-341
- 192 意志が潜む (慣)46-342使
- 193 自分の肉体が自分のものでなくなる 慣55-92
- 194 生き甲斐が湧く 慣33-34
- 195 嬉しさが湧く (慣)72-371
- 196 (いたずら)心か湧く 慣62-182

- 197 感慨ガ湧く 慣73-249
- 198 気持ガ湧く 慣72-371
- 199 悦びガ湧く 慣72-397
- 200 満足感ガ湧く 慣72-397
- 201 希望ガ湧く 慣72-364
- 202 興味ガ湧く 慣37-313, 72-373
- 203 好奇心ガ湧く 慣37-321, 72-373
- 204 疑問ガ湧く 慣73-202
- 205 音楽ガ湧く 50-392順
- 206 恋しさガ湧き起る (慣)64-58
- 207 憤りガ湧き起る (慣)32-49
- 208 ころろガ湧き上る (慣)46-364
- 209 脅迫観念ガ湧きあがる (慣)64-53順
- 210 疑惑ガ湧き上る 慣73-459
- 211 生命ガ湧き上る 50-57
- 212 叫びガ残る 72-240
- 213 思い出ガ残る 慣55-421
- 214 幸福ガ消え去る 慣31-62, 64-231
- 215 平和ガ消え去る 慣31-62
- 216 登音ガ消え去る 慣64-229
- 217 気持ガ消え失せる 慣40-270
- 218 声ガ死に絶える 76-265
- 219 息ガ死に絶える 76-265
- 220 密室ガ滅びる 69-284
- 221 夢ガ消える 慣72-194
- 222 不安ガ消える 慣72-400
- 223 年功ガ消える (慣)50-380順
- 224 登音ガ消える 慣64-239
- 225 声ガ掻き消える 46-183
- 226 心遣いが(ばらばらに)乱れる 50-366
- 227 運命ガ狂う 慣55-132使
- 228 影ガ散らかる 34-127
- 229 妾宅ガ気が利く 64-67
- 230 あかりガ気が利く 55-318順・名
- 231 値ガ張る 慣73-183, 316
- 232 枯枝ガ骨張る 62-256順
- 233 緊迫感ガ張りつめる 慣72-415順
- 234 気持ガ張りつめる 慣40-266順
- 235 (ぼくたちの間に)沈黙ガ張りつめる (慣)73-238
- 236 闇ガ張りつめる 69-285
- 237 世の中(の一切)ガゆるむ 68-9
- 238 神経ガ弛む 37-310名
- 239 手ガあく 慣46-154
- 240 熱海ガひしめく 55-87
- 241 闇ガ(まわりに)ひしめく 31-122
- 242 鱗雲ガひしめく (慣)62-328名
- 243 雲ガ押しひしめく 62-310
- 244 言い分ガ力む 62-140順
- 245 眉ガ力む 50-45
- 246 瞳ガ盛り上る 46-316使
- 247 金閣ガ化ける 69-142
- 248 じんならガ化ける 35-268
- 249 暴行ガ肩がわりする 73-280使
- 250 人形ガ土にかえる 63-22
- 251 気ガ引ける 慣33-23
- 252 娘ガかたづく 慣52-129
- 253 死ガ(彼の前に)立ちつづける 68-7
- 254 事件ガ動く 慣64-78名
- 255 心ガ動く 慣55-5名, 22名, 416使
- 256 気持ガ動く 慣72-290
- 257 好奇心ガ動く 慣33-16使
- 258 苦悶ガ動く 63-20
- 259 色ガ動く (慣)28-462(得意の), 50-30
- 260 気ガ動き出す 慣62-162
- 261 金閣ガ身じろぎする 69-226
- 262 穴ガうごめく 69-132順
- 263 心ガうごめく 55-201
- 264 血ガうごめく 55-353
- 265 鼻ガ動じる 69-203香

318 3. 分類結果

- 266 不安定^カ揺れる 68-80順
- 267 気持^ガ揺れる 價49-41順
- 268 決意^ガ揺れる (價)72-223
- 269 心^ガ揺らぐ (價)72-268, 268名
- 270 感情^ガ揺らぐ (價)72-290
- 271 自信^ガゆらぐ 價73-263
- 272 (左右に)心^ガふれる 55-427
- 273 日^ガ顛える (價)35-423順
- 274 ホテル中^ガふるえる (價)62-349
- 275 心^ガ震える (價)32-19, 37-314, 64-61
- 276 建築^ガ予感に慄える 69-289
- 277 着ているもの^ガ顛える 72-297
- 278 緑^ガ(風に)そよぐ 64-234使
- 279 気持^ガぐらつく 價64-67, 68順
- 280 感覚^ガよろめく 69-181名
- 281 鳳凰^ガよろめく 69-154
- 282 意志^ガ(上半身に)まわる 55-405
- 283 生活^ガ廻る (價)37-308番
- 284 話^ガートまわりする 50-258使
- 285 時間^ガ止る 72-283
- 286 時^ガ(永遠に)とどまる 72-298
- 287 理性^ガ(前に)立つ 68-60順
- 288 (愛嬌のある)顔^ガ立つ (價)40-275
- 289 腹^ガ立つ 價 28-457, 463, 34-159, 37-314
40-266, 73-320
- 290 腕^ガ立つ 價50-33
- 291 耳^ガ起きる 50-272
- 292 焰^ガ立上る (價)69-147
- 293 現実^ガ横たわる (價)69-128
- 294 漁船^ガ寝そべる 72-229
- 295 テレビ^ガ(でんと)すわる (價)55-14
- 296 目^ガ据る 價69-173
- 297 腹^ガ据る 價64-61(2回)
- 298 感じ^ガのさばる 55-334
- 299 仮面^ガのさばる 73-288
- 300 顔^ガのさばる (價)73-224
- 301 心^ガが^{そばだ}凍つ 46-343
- 302 心^ガ倒れかかる 55-457順
- 303 無駄^ガころがる (價)62-100
- 304 不安^ガころがり出す 73-447
- 305 波^ガ翻る (價)63-352順
- 306 空^ガ垂れる 價62-315
- 307 空^ガ垂れ込める 價72-182
- 308 空^ガ垂れさがる 49-67順
- 309 問題^ガ蔓にひっかかる 50-282
- 310 言葉^ガ引ひかかる 價32-51, 50-80,
- 311 下駄^ガ頭の中に(かりがり)引ひかかる
35-214
- 312 正義派^ガ型にはまる 價62-134
- 313 考え^ガ型にはまる 價62-134順
- 314 天才^ガ埋もれる 價72-267順
- 315 濃淡^ガ埋もれる 69-193
- 316 苦惱^ガ(地下)もぐる 55-477
- 317 本心^ガ(底)もぐる 55-157
- 318 気分^ガのりうつる 價62-184
- 319 魅力^ガ乗り移る (價)37-319
- 320 機会^ガ(向こうから)それる 55-104
- 321 心^ガが着く 31-96
- 322 骨^ガねむりにつく 55-497
- 323 愛情^ガ沸騰点に達する 50-29
- 324 欲望^ガ沸騰点に達する 73-289
- 325 生命^ガ頂点に達する (價)76-229
- 326 言い方^ガ痒いところに手がとどく (價)35-
404順
- 327 眼^ガとどく 價46-182
- 328 冷たさ^ガ通りすぎる 72-245
- 329 考え^ガ(頭から胸へ)通りすぎる (價)35-339
- 330 戦慄^ガ通り過ぎる (價)68-11(体のなか
を), 46(身内を)
- 331 気配^ガ(手先から身体中に)走る (價)52-147

- 332 日カ(白砂の上を)走る 35-318
- 333 線カ走る 慣76-220
- 334 渦(の群)カはしる (慣)41-150
- 335 小皺カ走る (慣)69-173順
- 336 (水面に)縞カ走る (慣)72-195
- 337 意識カ走る 72-277
- 338 (胸に)痛みカ走る 慣72-341
- 339 (足に)疼うずきカ走る (慣)48-7
- 340 気性カ走る 35-437
- 341 しゅう恥カ(身を)走る (慣)62-153
- 342 微笑カ走る 64-234使
- 343 鉛筆カ走る (慣)32-8
- 344 明りカはしる (慣)35-294
- 345 くちべにカ走る 35-421
- 346 窓カはしる 慣55-437順
- 347 電気メスカ走る (慣)72-429使
- 348 水カ走る (慣)69-157
- 349 雪カ(壁のうえを)走る 62-301
- 350 眼カ走る 慣50-11使
- 351 神経カ走る 慣62-263
- 352 痙攣カ走る 慣73-211
- 353 戦慄カ(肌を)走る 慣69-211
- 354 故郷カ(車窓のそとを)走り過ぎる 28-460
- 355 灯影カ(暗闇の中を)走り過ぎる (慣)72-306
- 356 (若い)血カはしり出す 55-386
- 357 列車カ飛ぶ 63-356
- 358 雲カ飛ぶ (慣)72-357, 431(2回)
- 359 手カ飛ぶ 慣73-311
- 360 声カとんでくる (慣)55-17
- 361 感情カふつとぶ (慣)55-57
- 362 悦びカ吹き飛ぶ (慣)72-281
- 363 苦しみカ吹き飛ぶ (慣)72-281
- 364 愛情カ吹き飛ぶ (慣)72-281
- 365 才能カ吹き飛ぶ (慣)72-281
- 366 利口さカ弾む 35-398
- 367 気持カはずむ 慣73-293
- 368 声カ弾む 慣50-284順, 73-204順
- 369 顔カ弾む 46-305
- 370 胸カはずむ 慣55-30, 502
- 371 にくさが跳ねかえる 64-72
- 372 言葉カはねかえる 72-414
- 373 遅しいものカ流れる 46-357順
- 374 すなおでないものカ流れる 55-136
- 375 デイテールカ流れる 74-50
- 376 気配カ流れる (慣)62-148
- 377 雑踏カ流れる (慣)73-316名
- 378 人通りカ流れる (慣)68-90
- 379 群集カ(国道を)流れる (慣)63-27
- 380 時カ流れる 慣73-338名
- 381 時間カ流れる 慣73-255名
- 382 月日カ流れる 慣46-367名
- 383 線カ流れる 慣55-206順(背から腰に), 351順(肩から手の先に)
- 384 人間カながれる 慣35-189名
- 385 人カ流れる 慣46-326名, 55-191名, 62-187名, 73-225名
- 386 人々カ流れる (慣)68-15順, 99名, 100名
- 387 避難民カ(府道を)流れる (慣)63-24順
- 388 乗降客カ流れる 慣73-221名
- 389 感情カ流れる (慣)46-298, 55-170, 62-281名
- 390 恐怖カ(背を)流れる 68-36
- 391 友情カ流れる (慣)76-166
- 392 肉声カ(廊下を)流れる (慣)48-16
- 393 笑い声カ(風に)流れる 慣72-193
- 394 音楽カながれる 慣55-130
- 395 口笛カ(暗がり)を流れる 48-8
- 396 生活カ流れる 68-12
- 397 天井板カ片おろしに流れる 慣50-262順

320 3. 分類結果

- 398 ラッパが流れる 慣49-66
- 399 燈火が流れる 72-306
- 400 ネオン(の群)が流れる 73-237順
- 401 光りが(額・目・鼻筋・頬の上を)流れる (慣)
69-134
- 402 音が流れる (慣)63-24名, 68-12
- 403 匂いが(画面から)流れる 62-256
- 404 風が流れる 55-178 (喉から胸に), 62-256
(画面から)
- 405 景色が流れる 慣62-370順
- 406 肉体が流れる 76-265順
- 407 顔がながれる 35-215名
- 408 西陽が流れ落ちる (慣)72-399
- 409 空想が流れ去る 72-209
- 410 自動車が流れ去る (慣)68-79
- 411 揉めごとが底流れ(を)する 50-400
- 412 可能性が漂う 69-250
- 413 気温が漂う 46-301使
- 414 (人間)臭がただよう 慣55-126
- 415 感じがただよう 慣55-445使
- 416 気分が漂う (慣)46-346使
- 417 声が(そのへんに)漂う 74-75
- 418 片意地(なもの)がただよう 68-39
- 419 平安がただよう 76-239使
- 420 静寂がただよう 55-475使
- 421 金閣が漂い出す 69-155
- 422 心がすべる 55-447(傾斜を), 447
- 423 言葉が滑る (慣)31-122, 69-128順
- 424 話が(滑らかに)すべる 37-319
- 425 生活がすべる 49-28使
- 426 影がたる 69-144使
- 427 口がすべる 慣55-111
- 428 冷たさが滑り出す 5-10
- 429 態度がすべり出る 49-48順
- 430 考えがすべり出る (慣)49-48順
- 431 世界が雪崩れ込む 69-134
- 432 感じがはう 55-493
- 433 緊張がはう 55-405
- 434 ラッパが(塵肌を)這う 64-228
- 435 影が這う 慣63-352
- 436 寒風が這う 62-310順
- 437 茎が這う 慣31-67
- 438 かさぶたが這う 63-358
- 439 愛情がほとばしる 慣49-88
- 440 人間が渦まく (慣)62-365名
- 441 感情が渦巻く (慣)49-73順
- 442 笑いが渦巻く (慣)64-244
- 443 期待が渦まく (慣)73-254名
- 444 予想が渦(を)巻く 72-243
- 445 説得が渦(を)まく 72-420
- 446 星が渦(を)まく 73-313
- 447 頭が渦(を)巻く 32-48
- 448 青春がめぐる (慣)62-140
- 449 沈黙が廻る 72-170
- 450 嫉妬がかけめぐる 50-19
- 451 欲望が(軌道を)駆けめぐる 69-205
- 452 放言があるきまわる 55-162
- 453 予言があるきまわる 55-162
- 454 仮面が歩きまわる 73-271使
- 455 大恥(の群)が這いまわる 73-347
- 456 眼が(肌を)這いまわる 62-304
- 457 手が(からだを)はいまわる 55-374
- 458 覚悟が伝わる 慣46-312
- 459 精神が背骨を伝わる 46-313
- 460 言葉が響に伝わる 74-272
- 461 口紅が運命をたどる 49-80
- 462 むず痒さが峠をこえる 慣73-288
- 463 笑いが規定量を超える 73-224順
- 464 笑い声 が魚籠・船荷・乗客の上を 飛び越える
72-193

- 465 呼吸づかいが陸根をこえる 62-177
- 466 恐ろしさガのどもと過ぎる (慣)46-173^訓
- 467 想像ガ脳裡を過ぎる (慣)64-74
- 468 背に戦慄ガ過ぎる (慣)68-17
- 469 美ガ(体内を)とおろすぎる 69-216
- 470 珍しさガ先(に)立つ 慣40-271
- 471 感情ガ逃げる 36-214
- 472 雪ガ逃げる 50-334^受
- 473 敵意ガ進む (慣)37-310
- 474 疑いガ進む (慣)37-318
- 475 プラットフォームガ退く 69-243
- 476 陽ガ(廊下を)退く 72-352
- 477 色彩ガひきさがる 50-291
- 478 時間ガよどむ 73-351
- 479 心ガ澱む 72-292
- 480 苦笑いガ(胸に)よどむ 49-92
- 481 光ガ淀む (慣)46-370
- 482 (私に)美ガ(遠く)来る 69-223
- 483 がたガ来る 慣73-256
- 484 時ガ来る 慣62-164, 73-281, 312
- 485 春ガ(すぐそこまで)来る 慣72-307
- 486 夏ガ来る 慣72-164, 73-180
- 487 (末弟に徴兵)適齡ガ来る 慣28-453
- 488 (胸に)うとましさガくる 64-70
- 489 金閣ガ来る 69-206 (自ら, 知らせに), 266 (通りに)
- 490 痛みガ来る 慣48-15
- 491 疲労ガ来る 慣69-289
- 492 (顔に)頬笑みガ来る 36-40
- 493 解決ガ来る 慣73-242
- 494 連想ガ来る 慣50-257
- 495 言葉ガ心臓に来る (慣)64-61
- 496 幸福ガ来る (慣)31-62
- 497 平和ガ来る 慣31-62
- 498 幻影ガ(ひとりで)来る 31-112
- 499 暗黒ガ来る 72-191
- 500 夜風ガ来る (慣)69-171
- 501 徴ガ来る 慣33-21
- 502 死ガ来る (慣)68-119
- 503 麻痺ガ来る 慣32-31
- 504 怯えガ来る (慣)46-331
- 505 風ガ(目つぶしに)向って来る (慣)48-21^順
- 506 事態ガ(姿で)やって来る 49-51
- 507 効きはじめガやってくる 73-255
- 508 機会ガ(向うから)やって来る 73-441
- 509 時期ガやって来る 慣72-191
- 510 季節ガやってくる 慣73-299
- 511 やましさがやって来る 73-248
- 512 気ガやってくる 74-20(2回)
- 513 感動ガやってくる (慣)74-80
- 514 失望ガやってくる 74-60
- 515 狼狽ガやってくる 74-60
- 516 沈黙ガやってくる 74-33
- 517 警告ガやってくる 73-186
- 518 (母親から)甘味ガ去る (慣)46-312
- 519 眩暈ガ去る 慣72-421
- 520 駅ガ飛び去る (慣)62-89, 96
- 521 灯ガ飛び去る 慣41-160
- 522 街ガ走りさる 慣55-113^順
- 523 明りガ走り去る (慣)72-306
- 524 魂ガ(的の方に)行く 72-204
- 525 (生活)気分ガ(どこへ)行く (慣)68-79
- 526 納豆ガ行く (慣)50-272
- 527 影ガ行く (慣)48-9
- 528 時間ガ(過去へ)帰る 72-231
- 529 心ガ(アルカシアに)帰る 72-233
- 530 眼ガ引き返す (慣)46-314
- 531 問題ガはみ出す 慣52-128^順
- 532 幸福感ガ溢れ出る 慣72-205^順
- 533 言葉ガ溢れ出る 慣72-281^順

322 3. 分類結果

- 534 蛭ガわがもの顔に這い出す 73-184順
- 535 意志ガ(てのひらから)逃げ出す 73-444順
- 536 皿ガ(お前の手から)逃げ出す 31-121
- 537 仮面カ逃げ出す 73-335
- 538 悲哀カ泌み出る (慣)46-364
- 539 感情カにじみ出す 慣73-351
- 540 思考カにじみ出す 73-315順
- 541 通勤者カ流れ出る (慣)68-50
- 542 ぼくの中身カ流れ出す 73-186
- 543 喜びカ流れ出す 48-8
- 544 体カ流れ出す 74-36
- 545 豊富カ湧き出す 31-95
- 546 言葉ガ眼に入る 慣62-304
- 547 鳥の子餅ガお湯にはいる 35-228
- 548 大声カ(胸に)食いこむ 63-17
- 549 亀裂ガくい入る 慣73-245
- 550 (現実の)重味ガ(肩に)食い入る 72-278
- 551 寒気ガ(背骨に)くい入る 35-363
- 552 汗カ滑り込む 74-79
- 553 声カ飛び込む (慣)52-120
- 554 文句カ飛び込む 慣73-226
- 555 (眼へ)眼カ飛び込む 46-308
- 556 サラリーマンカ流れ込む 慣62-135
- 557 一行カ流れ込む (慣)62-96
- 558 明るさカ流れ込む (慣)64-235
- 559 明りカ流れ込む 慣72-205
- 560 陽光カ流れ込む 慣72-188
- 561 陽カ流れ込む 慣72-379
- 562 景色カながれこむ (慣)55-500
- 563 風景カ闖入する 69-238
- 564 (咳の)声カ舞い込む 48-18
- 565 花びらガまいこむ 慣55-402
- 566 ぼくガ小腸(の腸のあたり)にもぐり込む
73-270
- 567 (太陽)時間カまぎれ込む 73-321
- 568 衰れみカしのびこむ 64-240使
- 569 感覚ガ(空気に)とけこむ 55-218
- 570 憤怒ガとけこむ 62-353
- 571 希望ガとけこむ 62-353
- 572 懐疑ガとけこむ 62-353
- 573 音ガ(雨に)とけ込む 49-68
- 574 空ガとけ込む 49-71
- 575 海ガとけ込む 49-71
- 576 顔ガ(薄墨色のなかに)溶けこむ 74-30
- 577 安らかなものが染み込む 62-105使
- 578 欠乏カ染み込む 73-292
- 579 冷えカ染み込む (慣)62-86
- 580 男尊女卑ガ(骨の髄に)染みこむ 50-95使
- 581 白さカ刺し込む 48-11
- 582 感情カ納まる 46-330
- 583 息ガ(身体から)ぬける 慣50-118
- 584 寂しさカ沁みる 慣46-320
- 585 蒼さガ(胸に)沁みる 68-37
- 586 弱気ガ(内臓に)しみる 35-235
- 587 技巧(のなごり)カ浸みる 50-369順
- 588 音カ浸み入る (慣)50-392順
- 589 (私語の)ぞめきガ(柱へ)しみ入る 69-197
- 590 日光ガ(皮膚から)しみ入る 69-185
- 591 (弱々しい)ことカ沁み残る 36-49
- 592 淋しさカ沁みとおる 49-68
- 593 心持ガ(真居へ)しみ透る 36-43
- 594 (光の)切口カ沁みとおる 73-249
- 595 言葉ガ(全身に)しみわたる 73-332
- 596 平和ガ沁み渡る 68-6使
- 597 光ガ(背筋から脳髓の方へ)沁み渡る 68-91
- 598 事件ガ洩れる 慣72-423
- 599 おかしさガ(口の端から)洩れる 46-310
- 600 (手に)感情カこもる 慣55-493
- 601 (眼に)不安カこもる 慣72-353
- 602 憂鬱ガ立てこめる 36-214

- 603 (乳の下まで)痺れカ上る (慣)48-17
- 604 気持カはねあがる 64-53
- 605 埃カ舞い上る 慣48-11
- 606 塵カ舞い上る (慣)48-16
- 607 不吉なものが(肌を)はいあがる 55-384
- 608 寒さが(土を)這いあがる 50-290
- 609 戦慄カ(四肢から体の方へ)這い上る 48-7
- 610 言葉カ(唇まで)昇る 72-244否
- 611 登音カ上って来る (慣)64-242
- 612 雑沓カ立ち昇る (慣)72-287
- 613 寝息カ立ち昇る 48-11
- 614 心カ(背骨を)よじのぼる 73-222順
- 615 (尊敬の)念カ(昇りつめるところまで)昇りつめる 46-316
- 616 鮮度カ落ちる 慣52-124
- 617 記憶カ落ちる 慣72-235
- 618 沈黙カ落ちる 72-208
- 619 唄カ落ちる 50-392
- 620 月影カ(暗闇に)落ちる 慣72-217
- 621 影カ(べったりと地面に)おちる 慣46-158
- 622 陰カ落ちる 慣73-322
- 623 節廻シカ(梨花の)脚に落ちる 50-392
- 624 雨気カ落ちる 46-330
- 625 陽カおちる 慣55-95
- 626 頬カ落ちる 慣68-71
- 627 瞳カ落ちる 31-54
- 628 断念カ墜ちつくす 73-319順
- 629 (帽子のつばの下から)目つきカおっこちる 73-220順
- 630 言葉カ(ほとりとほとくのなかに)落ちこむ 73-332
- 631 胸カ陥ちこむ 49-61
- 632 うつくしさが盛りこぼれる 35-194
- 633 感傷カ(飯から)こぼれる 50-302
- 634 光カこぼれる 慣62-316
- 635 微光カ滴る 69-155便
- 636 星座カ(目蓋から)滴り落ちる 72-235
- 637 暗闇カ垂れ込める (慣)72-241
- 638 (皿に)食欲カのる 55-38受・使
- 639 生活カ軌道に乗る 慣46-373
- 640 太鼓カ風に乗る 46-182
- 641 夜カ(バンティへ)降りる 慣50-262
- 642 はためきカ下りる 73-355
- 643 うめき声カ(喉から胃に)下りる 55-132
- 644 宵闇カおちる 慣55-51
- 645 気持カ浮く 慣64-73
- 646 座敷カ浮く 慣50-290順
- 647 年齢カ浮かぶ 慣72-379
- 648 醜さカ浮ぶ (慣)37-311
- 649 疑問カうかぶ 慣64-45
- 650 考えカ泛かぶ 慣64-77
- 651 気持カ浮ぶ (慣)46-333
- 652 表情カ浮ぶ 慣73-240
- 653 笑いカうかぶ 慣68-36, 49, 72-370, 73-207
- 654 微笑カうかぶ 慣68-81, 88
- 655 名案カ浮ぶ 慣73-261
- 656 言葉カ浮び出る 慣46-305
- 657 (骨の)陰影カ浮び出る 慣73-228
- 658 白さカうかび上る (慣)72-414
- 659 言葉カ浮かび上る (慣)72-428
- 660 立場カ浮きあがる 慣55-71
- 661 心カ浮き上る 37-317
- 662 思い出カ浮きあがる (慣)50-395
- 663 心カ沈む 慣31-94順, 72-287
- 664 気カ沈む 慣52-146
- 665 憎悪カ沈む 76-361
- 666 声カ(谷間に)沈む 55-451
- 667 自嘲カ沈む 49-93
- 668 色カ沈む 慣55-15順
- 669 空気カ沈む 72-416

324 3. 分類結果

- 670 顔が棺(の中)に沈む 價61-83
- 671 目が沈む (價)69-173
- 672 目つきが(胸に)くぐりぬける 35-383
- 673 たかぶりが肩すかしに合う 73-451
- 674 声と声もつれる 35-297
- 675 香と湿気もつれる 48-9
- 676 波もつれる 63-344順
- 677 気持ちと気持ちも纏れ合う 46-356
- 678 人々も散る 價62-89
- 679 群衆が(箇の中に)散る (價)72-259
- 680 (波のなかに)岩も散る 63-350
- 681 波も散る 價72-213
- 682 心が開く (價)73-237順
- 683 心がむすびつく (價)55-84
- 684 もどかしさがひびきに重なり合う 73-187
- 685 笑い声が背中に重なり合う 72-288
- 686 予想も重なり合う 價72-240
- 687 不眠もつる 價73-190順
- 688 話もつる 價28-463順
- 689 仮面が(おまえと)出会う 73-276名
- 690 頭も出会う 36-60
- 691 眼と眼も出逢う (價)62-362
- 692 臭いもつきまとう (價)73-348
- 693 感情と快さも触れ合う (價)46-330
- 694 ことが(皮膚一枚で外界の物象と)接する 69
-148
- 695 苦悩も身につく 46-364
- 696 機敏さも身につく 價62-92
- 697 (頭に)憶い出もくつつく 36-108
- 698 ディテールもくつつき合う 74-50
- 699 恐怖も(顔・全身に)凝りつく 63-20
- 700 苦悶も(顔・全身に)凝りつく 63-20
- 701 痛ましさも(眼の裏側に)貼り付く 74-281
- 702 気分も(眼の裏側に)貼り付く 74-281
- 703 (冬の)陽も貼りつく 50-274
- 704 永遠も(顔・手・腹に)貼りつく 69-167順
- 705 年の瀬も絡みつく 50-327順
- 706 苦悶も(骨身に)からみつく 63-16順
- 707 情事も(自分に)からみつく 50-118
- 708 臭いも(粘膜に)からみつく 76-350
- 709 生命も絡みつく 50-297
- 710 疲労も(全身に)まつわりつく 73-252
- 711 顔もごびり付く (價)35-225
- 712 冷たさも(肌身に)すがりつく 35-314
- 713 都会も取り憑く 價46-292受
- 714 疑問も取り憑く (價)72-188
- 715 インフルエンザも取っ憑く 34-134受
- 716 凶事も寄って来る 50-377
- 717 腹痛もよせて来る (價)48-10
- 718 壁も隔り寄る 72-190
- 719 現実も(一足ずつ)歩み寄る 72-265
- 720 孤独感も押しよせる 62-365
- 721 気持ちもおし寄せる 49-74
- 722 不快も押し寄せる 32-19
- 723 沈黙も(まわりから)押しよせる 74-13
- 724 騒音もおしよせる 55-289
- 725 熱気もおしよせる 55-289
- 726 言葉も近づく 69-290
- 727 危険も迫る 價72-278
- 728 ことばも迫る (價)64-69
- 729 夕闇も迫る 價72-428
- 730 山も(そこに)迫る 價55-87
- 731 生も迫る 69-228
- 732 必要もせまる 價55-412受
- 733 壁もせまってくる (價)73-226順
- 734 威も寄りつく 35-409
- 735 光も寄りつく 73-310否
- 736 金閣も礎を離れる 69-155
- 737 山も霧から離れる 62-353
- 738 心も離れ合う (價)62-266

- 739 気持が吹っ切れる 慣64-62
- 740 すれ合いが燃え立つ 49-18
- 741 樹が行儀よく並ぶ 72-346順
- 742 黄熟感が(胸に)打つかる 35-268
- 743 声(が壁に)ぶつかる (慣)72-419
- 744 仕事(が)打つ突かる 慣49-93
- 745 衝動(が)ぶつかり合う 62-350
- 746 (眸に)うるたえたもの(が)かすめる 55-176
- 747 (目に)色(が)かすめる 55-30
- 748 感情(が)すれ合う 49-18名
- 749 叫び(が喉に)つまる 73-323
- 750 口惜しさが(胸に)詰まる 34-125
- 751 (人間の)姿態(が)詰まる 46-309
- 752 (色彩の)閃き(が)詰まる 46-309
- 753 (言葉の)抑揚(が)詰まる 46-309
- 754 山門(が)立ちふさがる (慣)69-157
- 755 死(が自分の前に)立ち塞がる 68-104
- 756 壁(が)立ちほだかる (慣)73-330
- 757 雲(が)立ちほだかる (慣)69-140
- 758 気持(が)折れる 慣40-266, 55-18
- 759 感情(が)折れる (慣)55-266
- 760 権勢欲(が)へし折れる 50-51
- 761 気(が)くずおれる (慣)31-101
- 762 影(が)曲って行く (慣)68-59
- 763 雑踏(が)うねりまわる (慣)73-315
- 764 笑い(が)歪む (慣)49-76順, 68-16順, 88
- 765 良識(が)ひんしゅくする 73-291
- 766 仕事(が)よじれ合う 49-93
- 767 灯影(の一条)が畳まり込む 46-353
- 768 優しさがこわれる 49-35
- 769 家庭(が)こわれる 慣62-98
- 770 表情(が)壊れる 73-306順
- 771 体(が)毀れる (慣)62-328順
- 772 面目(が)つぶれる 慣52-159名, 72-371名
- 773 薄笑い(が)ひしやげる 73-333順
- 774 きずな(が音をたてて)碎ける 73-222
- 775 心が崩れる (慣)55-114, 62-320
- 776 虚勢(が)崩れる (慣)62-372順
- 777 気持(が)崩れる 慣72-407
- 778 自信(が)崩れる 慣72-395
- 779 態度(が)崩れる 慣68-18
- 780 信仰(が)頹れる 慣72-274
- 781 身体(が)崩れる 慣68-33
- 782 心が傷つく 慣64-46, 72-266順
- 783 原稿(が)傷つく 64-65
- 784 口(が)綻ぶ 慣46-318
- 785 夢(が)破れる 慣34-157, 64-236
- 786 感情(が)破れる 62-285
- 787 観念(が)打ち破れる 慣64-58
- 788 群衆(が)割れる 慣35-184
- 789 話(が)切れる 慣46-346
- 790 資本(が)切れる 慣28-458
- 791 風(が)斬りつける 50-337
- 792 文字(が)突き刺さる 35-237
- 793 (喉に)叫び(が)突きささる 73-188
- 794 呻き声(が(神経に)つきささる 74-438
- 795 繰り言(が)剝がれ落ちる 73-327
- 796 祖父(が)摺り減る 48-17
- 797 父(が)摺り減る 48-17
- 798 感覚(が)磨り減る (慣)72-403使
- 799 気分(が)みちる 慣62-148
- 800 歡喜(が)満ちる 慣68-8順
- 801 仕事(が)劇薬で満ちる 37-308
- 802 音(が(車内に)みちる (慣)62-89
- 803 風景(が謎と霧き)にみちる 73-260順
- 804 血管(が)像にみちる 76-265
- 805 感慨(が)あり余る 28-460
- 806 陽(が(窓に)溜まる (慣)72-419
- 807 快笑(が)漲る 46-302使
- 808 念(が)漲る 慣32-28

326 3. 分類結果

- 809 沈黙がみなぎる 74-13順
- 810 情感があふれる 價73-331使
- 811 (そこに)気分があふれる 價68-124
- 812 影が溢れる 62-343
- 813 波が体からあふれる 76-265
- 814 (うちの中に)健康さがあふれる 價55-18
- 815 顔色がはみ出る 50-299
- 816 国道が伸びる 價72-335, 347
- 817 耳が(あちらへ)延びる 50-351
- 818 声がちぢむ 35-359順
- 819 顔が縮む 50-95
- 820 生きること凝縮する 72-168
- 821 時間が凝縮する 73-321
- 822 虚無がひろがる 50-42
- 823 夜がひろがる 72-302
- 824 落胆が(胸に)ひろがる 55-218
- 825 情緒が(胸に)ひろがる (價)55-498
- 826 思いがひろがる 價64-230
- 827 恐怖が(胸に)ひろがる 72-409
- 828 不安が(胸に)ひろがる 72-409
- 829 友情がひろがる 72-221
- 830 戦争が拡がる 價72-383
- 831 損が拡がる (價)40-265
- 832 妄想がふとる (價)73-452
- 833 決心が深まる 價64-74
- 834 考え方が深まる 價64-74
- 835 汽車がふくれる 41-151順
- 836 河が膨れる 價35-169
- 837 夢がふくれあがる (價)55-498
- 838 言葉が(喉の内側で)膨れあがる 76-353
- 839 海がふくれ上る 73-354順
- 840 海面が膨れあがる (價)74-39
- 841 感情が膨れる 76-376順
- 842 夢がふくらむ 價62-184
- 843 距離がうすれる 55-75
- 844 気がうすれる 價33-16
- 845 樹々ガ立ち竦む 72-302
- 846 日常が甲羅を経る (價)73-278
- 847 人生がおくれる 55-73使
- 848 丘が瞳にむかう 31-95
- 849 足が(部屋に)向う 價55-6
- 850 話が(横道に)それる 價33-14
- 851 灯影(の一条)が眼底で交る 46-353
- 852 声が尖る 49-16
- 853 言葉がとがる 36-110名
- 854 音が尖る (價)69-143
- 855 気分がささくれたつ (價)73-186順
- 856 心が痛む 價55-277, 72-309
- 857 良心がいたむ 價55-212名
- 858 やましさがうずく 73-251順
- 859 心が疼く (價)72-425
- 860 欲望がうずく 73-294順, 300順
- 861 仮面が酔う 73-280名
- 862 気持がうわずる 價55-498
- 863 なつかしさがこみ上げる 價46-324
- 864 力が込み上げる 價46-309
- 865 心が(胸の底から)こみ上げる 價46-351
- 866 疲労がこみあげる (價)72-429
- 867 感情が込み上げる (價)46-291(胸に), 55-110(胸に), 72-386(胸に), 76-376(喉へ)
- 868 怒りがこみ上げる 價73-355
- 869 苛立ちがこみ上げる (價)73-195
- 870 反感がこみ上げる 價48-14順
- 871 信頼がこみあげる (價)63-348順
- 872 笑いがこみ上げる 價73-274
- 873 欲望が(喉に)こみあげる (價)55-481
- 874 言葉がこみあげる 價76-353
- 875 心が休まる 價62-171
- 876 太股が飽きあきする 73-307
- 877 空気が疲れる 49-5

- 878 ズボンがくたびれる 慣68-51順
 879 乳色がくたびれる (慣)46-323
 880 知覚がねむる (慣)55-91
 881 記憶が眠る 62-344順
 882 葉が(眼りを)眠る (慣)72-298
 883 漁村がまどろむ 72-199
 884 お寺がまどろむ 72-307
 885 小川がまどろむ 72-307
 886 金閣が目ざめる 69-211
 887 精神が眼ざめる (慣)62-326使
 888 魂が目覚める (慣)46-297順
 889 日ざしが目ざめる 69-192
 890 肩が目ざめる 69-183
 891 灯りがねぼける 46-296
 892 勾欄が夢みる 69-289
 893 胃が夢みる 69-280
 894 背のびがたたる 55-150受
 895 沿道がおどろく 55-162
 896 家風が面くらう 55-334
 897 仮面がまごつく 73-322使
 898 回復が聞いて呆れる 慣73-317
 899 案内が聞いてあきれる 慣50-260
 900 火が喜ぶ 62-354
 901 頭が困る 36-60
 902 本能が怒る 46-356
 903 くわいが怒る 35-328
 904 毛虫が怒る 52-136
 905 マツケムシが怒る 52-137
 906 表情がふくれる (慣)37-316
 907 原稿が悩む 64-65
 908 仮面があせる 73-322
 909 警笛が焦立つ 46-328使
 910 顔がうろたえる (慣)50-95, 55-339
 911 小説の女がはずかしがる 35-233
 912 魂があこがれる 46-309名
 913 苦痛が甘えかける 49-92使
 914 (顔に)怒りがなじむ 73-250
 915 (顔に)笑いがなじむ (慣)73-250
 916 仮面がしたがる 73-273
 917 仮面が笑う 73-250
 918 眸が笑う (慣)55-456
 919 画が笑いさざめく 76-260
 920 若さが泣く 慣55-392
 921 美貌が泣く 慣55-392
 922 肉体が嘸り泣く 46-354順
 923 林が囁る 69-149
 924 ぼくが吠える 73-222
 925 サイレンが吠える 49-22
 926 風が吼え猛る 35-297
 927 吹雪がうなる (慣)62-301順
 928 嵐が唸る 62-300
 929 生木がわめく 55-318
 930 内臓がうめく 73-325名
 931 仮面がやにさがる 73-320順
 932 金閣が耐える 69-139
 933 腫が感心に堪えかねる 46-316順
 934 くわいが威張る 35-328
 935 一円札が威張り返る 35-168順
 936 草屋根が卑下る 31-55順
 937 なにもかもがようすぶる 50-267
 938 疑似仮面どもが白っばくれる 73-291
 939 生理がとぼける 55-99
 940 ものが氣どる 50-267
 941 手が宙にまよう 55-492
 942 匂いが立ち迷う 69-284
 943 知覚がとまどう 55-319
 944 努力がとまどう 55-11
 945 仮面(自身)が分る 73-270
 946 匂いが(軒下から)迷い出る 50-120
 947 時間が見える 35-328

328 3. 分類結果

- 948 暖かさが見える 50-321
- 949 気持がみえる 55-460
- 950 死が(眼の前に)見える 68-79
- 951 窮屈さが見える (慣)35-464
- 952 言いわけが見え透いている 慣40-262順
- 953 前身が覗く 50-368
- 954 (窓に)夜空が覗く 慣74-76
- 955 雑草がのぞく 慣40-259
- 956 小鳥がしゃべる 52-128
- 957 死者たちが黙りこむ 76-349
- 958 雪が吃る 69-172
- 959 仮面が口ごもる 73-301
- 960 死者たちが囁く 76-349
- 961 からだがささやく 55-406
- 962 葉が囁く 46-348
- 963 心が眩く 72-418名
- 964 狂気(なもの)がさけぶ 55-318
- 965 声が叫ぶ (慣)72-226
- 966 石が叫ぶ 35-456
- 967 木枯らしが叫ぶ 72-172名
- 968 胃が叫ぶ 69-287
- 969 心細さが(胸に)こたえる 慣64-58
- 970 ことばが(胸に)こたえる 55-242
- 971 感情が(船の速度に)応じる 55-57
- 972 可能性がひらける 慣73-214
- 973 生活が(ふたりの前に)ひらける 慣55-84
- 974 観念が憑く 慣72-166受
- 975 魅力が憑く 慣46-294受, 55-354受
- 976 空隙が醒める 73-308順
- 977 論理が醒める 73-289順
- 978 小路が醒める (慣)50-272
- 979 小路小路が醒める (慣)50-274
- 980 胃袋がくらくらいつく 73-301
- 981 関係が(…側に)住む 73-310
- 982 木霊が住む (慣)73-328
- 983 悪魔が巢食う 50-76
- 984 魂が(皮膚に)宿る (慣)73-195
- 985 神経が(皮膚に)宿る (慣)73-347
- 986 視線がうろつく 37-319順
- 987 眩きうろつき廻る 63-13
- 988 蚊がうろつく 69-269順
- 989 文字が踊る 慣74-67順
- 990 影法師がおどる 55-320使
- 991 足音が踊る 76-258
- 992 皿が躍る 慣32-17
- 993 コップが躍る 慣32-17
- 994 光が躍る 慣62-304順
- 995 ビラが舞う 慣64-242
- 996 雪が舞う 慣42-169
- 997 ちょうが舞う 慣62-76
- 998 蛾が舞う (慣)50-106
- 999 靴音が舞い落ちる 慣69-137
- 1000 花びらが舞いおりる 慣72-382
- 1001 火の粉が舞い狂う (慣)63-25
- 1002 土埃が舞い立つ 慣69-193順
- 1003 埃が舞い立つ 慣69-196順
- 1004 蛾が舞い疲れる (慣)50-106
- 1005 ココロが泳ぐ (慣)74-445
- 1006 魂が遊びに行きたがる 72-204
- 1007 雲が戯れる 69-250名
- 1008 波が戯れる (慣)72-306
- 1009 結果が(犬と)ふざける 55-20
- 1010 心が騒ぐ 慣46-187
- 1011 聴覚が騒ぐ 55-100
- 1012 血がさわぐ 慣55-468
- 1013 危篤が(電話で)騒ぐ 50-318
- 1014 心がうなだれる 52-160
- 1015 ネオンが瞬く 慣46-293名
- 1016 灯が瞬く 慣72-238, 242
- 1017 灯影が瞬く 慣72-302

- 1018 立木ガもみあう 55-324
- 1019 鳳凰ガ(台座に)つかまる 69-154
- 1020 着ているものガ(蓋取に)腕く 72-297
- 1021 心ガもがく 55-391名
- 1022 苦悶ガもがく 63-20
- 1023 鼻ガ坐る 價62-255順
- 1024 街ガ蹲る 72-346
- 1025 建物ガ蹲る 72-166
- 1026 屋根ガうづくまる 62-256
- 1027 金閣ガ踞座う 69-285
- 1028 形骸ガ歩く 63-357
- 1029 足袋ガ歩く 50-348
- 1030 季節ガ歩む 49-19名
- 1031 木枯らしガ翔ける 72-172順
- 1032 (いいたい)ことガかけのぼる 55-327
- 1033 (足の)くたびれガ(背中に)掻きのぼる
35-385
- 1034 金閣ガ搏く 69-289
- 1035 水ガ喘ぐ 31-59
- 1036 心臓ガ喘ぐ 46-355名
- 1037 毛穴ガあえぐ 73-317
- 1038 大地ガ息吹く (價)49-19
- 1039 嫉妬心ガ(私に)咬みつく 74-274受
- 1040 不在ガ(染香へ)吹く 50-362
- 1041 あらしガ胸をふく 55-332順
- 1042 仮面ガ(假極的に)ふるまう 73-320
- 1043 春ガ訪れる 價72-382
- 1044 明日ガ訪れる 價73-352順
- 1045 死ガ訪れる (價)69-267
- 1046 声ガ誘いかける (價)72-183
- 1047 肉ガ誘いかける 69-223順
- 1048 仮面ガ折れ合ひ 73-336
- 1049 声ガつけこむ 73-442
- 1050 欲求と復讐心ガせめぎ合ひ 73-245
- 1051 出来事ガ(生身に)襲いかかる 64-78
- 1052 衝動ガ襲いかかる 73-244
- 1053 激情ガ襲いかかる 73-279
- 1054 嫉妬ガ襲いかかる 74-273
- 1055 香ガ襲いかかる 48-9
- 1056 湿気ガ襲いかかる 48-9
- 1057 はずみガ手伝う 價64-70, 73-258
- 1058 解放感ガ手つだう 價55-450
- 1059 酔いガ手つだう (價)55-365
- 1060 欲情ガ手伝う 價46-301
- 1061 美しいものガ媚びる 36-212
- 1062 蝶々ガ魅入る (價)50-106
- 1063 肉ガいつわりに富む 69-265
- 1064 恋ガ運ぶ (價)64-45
- 1065 賢さガ光る 價62-326
- 1066 (ピアノの)和音ガ(ささらと)光る 72-262
- 1067 有難さガ光る 35-167順
- 1068 年功ガ底光りする (價)50-380
- 1069 無秩序ガ輝やく 69-169
- 1070 行為ガ輝やく 69-181
- 1071 美ガきらめく 69-287
- 1072 女ガきらめく 69-195
- 1073 精神ガ閃く (價)46-317使, 62-326名
- 1074 感覚ガ閃く (價)46-345順
- 1075 眼差しガ閃く 價46-330順
- 1076 悪ガ煌めく 69-181名
- 1077 倅セカちらつく 35-230
- 1078 時代ガ(自分に)映る 49-84
- 1079 感情ガ映る 55-134
- 1080 空想ガ映る 49-51
- 1081 暖かさガ透き通る 50-321
- 1082 他人ガ透きとおる 73-312
- 1083 声ガ透きとおる (價)49-11
- 1084 追憶ガ色づく 72-196使
- 1085 匂いガ色づく 73-344
- 1086 記憶ガ(白々と)褪める 72-208順

330 3. 分類結果

- 1087 (秋の)ことガ染まる 62-253
 1088 記憶ガ(季節の色に)染まる 62-253
 1089 語気ガ黒ずむ 73-320
 1090 魂ガ汚れる (償)72-221順
 1091 精神ガうす汚れる 55-382
 1092 悦びガうす汚れる 72-200
 1093 悲しみガうす汚れる 72-200
 1094 頭ガ(がんと)鳴る 償35-280
 1095 血ガ鳴る 55-382
 1096 緊張ガ高鳴る (償)68-34
 1097 言葉ガ鳴り渡る 32-24
 1098 実感ガ響く 50-356
 1099 構えかたガ(すき腹に)響く 50-274
 1100 言葉ガ胸に響く 償72-414
 1101 美ガ鳴り響く 69-289(2回)
 1102 金閣の全貌ガ鳴りひびく 69-145名
 1103 無力ガ匂う 69-240名
 1104 罪ガ臭う (償)55-276名, 73-298名
 1105 悪徳ガ臭う 73-298名
 1106 嘘ガ匂う (償)76-236名
 1107 悔恨ガ薫る 72-196名
 1108 空気ガ(丸く)かたまる 33-24順
 1109 笑いガ粘りつく 76-374
 1110 空気ガ粘つく 76-349順
 1111 努力ガ濁る 55-11
 1112 匂いガ濡れる 31-118順
 1113 声ガうるむ 償64-246順
 1114 心ガ乾く 49-86
 1115 表情ガ乾く (償)49-69
 1116 声ガ乾く (償)49-76順, 72-335順
 1117 希望ガ乾き上る 48-13
 1118 嘲笑ガ乾く 50-107順
 1119 音ガ乾く (償)72-409順
 1120 敗北感ガにじみ込む 49-93使
 1121 後悔ガにじむ 73-295
 1122 眉ガ翳る (償)73-271使
 1123 声ガ曇る 償46-324
 1124 理性ガ曇る (償)64-53
 1125 (天から)永遠ガ降る 69-167順
 1126 光リガふりそそぐ 償69-154順
 1127 日光ガ降りそそぐ 償72-188順
 1128 日射シガ降り注ぐ 償72-307順
 1129 心ガ霧れる 償72-275
 1130 気ガ晴れる 償62-152
 1131 淋しさガ荒れる 49-10
 1132 狂暴なものガ荒れ狂う 68-39
 1133 感情ガ風ぐ (償)50-61
 1134 心ガ波(を)打つ (償)72-268
 1135 プロオログガ波立つ 31-55順
 1136 胸ガ波立つ 償74-45
 1137 胸苦しさガ浪立つ 62-178
 1138 心ガ波立つ (償)72-268
 1139 腹ガ波立つ 償69-151
 1140 愛情ガ凍り果てる 50-29
 1141 微笑ガ凍る 72-198
 1142 薄笑いガ凍りつく 73-333使
 1143 雲ガ凍りつく 72-164
 1144 心ガこごえる 68-13順
 1145 パッハガ融ける 73-187順
 1146 世界ガ融ける 69-272
 1147 恐怖ガ溶ける 50-106
 1148 希望ガ融ける 76-360
 1149 言葉ガ溶ける 35-285名
 1150 労作ガ(自然のなかへ)溶け入る 31-95
 1151 孤独ガ溶け去る 72-266
 1152 性格ガ融け合う 35-202
 1153 声ガ錆びる (償)36-96順
 1154 世話ガ焼ける 償73-320
 1155 空カ灼け爛れる 31-81順
 1156 視線ガ焼けつく 73-477順

- 1157 雲ガ焦げる 72-235使
 1158 感情カ燃える 慣49-79順
 1159 雪ガ燃える 62-177
 1160 頭ガ燃える 62-301
 1161 頬ガ燃える (慣)62-348順
 1162 胸ガ燃える 慣55-435
 1163 腹ガ燃える 69-209
 1164 心持カ燃え始める (慣)72-211
 1165 欲情カ燃え立つ (慣)62-352, 352名
 1166 視線カ燃え立つ (慣)49-48順
 1167 身内ガもえあがる 慣55-498
 1168 心ガ燃え上る (慣)72-288, 295順
 1169 愛ガ燃え上る 慣72-310順
 1170 愛ガ燃えさかる (慣)72-266順
 1171 仮面の下ガ煮えたぎる 73-311
 1172 心ガあたたまる 慣55-75, 64-236
 1173 悪たれガ沸き立つ 46-327使
 1174 さからうものガたぎりたつ 73-451
 1175 情ガたぎりたつ (慣)55-457
 1176 わりきれないものガうまれる 慣55-354
 1177 真実ガうまれる 慣55-463
 1178 海ガ生れる 69-246順
 1179 真実ガ生きる (慣)55-354, 448
 1180 過去ガ生きる 55-365
 1181 精神ガ生きる (慣)72-168
 1182 疑惑ガ(私の中で)生きる 52-150
 1183 ことばガ生きる 慣55-173順, 187
 1184 紐ガ生きる 50-10順
 1185 ルージュガ生きる 68-32
 1186 道具ガ生きる 慣35-327順(2回)
 1187 仮面ガ生きる 73-270順, 276(2回)
 1188 自然ガ生きる (慣)72-164
 1189 石ガ生きる 55-352順
 1190 花々ガ生きる (慣)69-145
 1191 死体ガ生きつづける 73-312
 1192 しかばねガ生きる 慣73-457順
 1193 唇ガ生きる 31-115
 1194 (隣人の)存在ガ生きながらえる 73-348
 1195 出来事ガよみがえる 慣73-187
 1196 一夜ガよみがえる 慣55-385
 1197 声ガ甦る (慣)72-424
 1198 喚声ガよみがえる 慣69-192
 1199 希望ガ甦る 慣72-230
 1200 記憶ガよみがえる 慣68-41
 1201 謔言ガ蘇る (慣)46-300
 1202 香りガ蘇る (慣)72-392
 1203 (子供)心ガ(日蔭に)育つ 46-167順
 1204 疑惑ガ育つ 52-150
 1205 心ガ老いる 62-140
 1206 自由ガ芽生える (慣)72-293名
 1207 自覚ガ芽ぐむ 46-307
 1208 芽ガ生活の上に萌え出る 50-57
 1209 可憐(きまわるもの)ガ咲きほこる 35-425
 1210 心ガ実る 50-53順
 1211 愛ガ実る 慣72-223使
 1212 肉感ガ熟れる 50-10順
 1213 水面ガ死ぬ (慣)69-246順
 1214 感覚ガ死ぬ (慣)48-20, 55-405
 1215 感情ガ死ぬ (慣)35-358順
 1216 部屋ガ死ぬ (慣)73-179順
 1217 仮面ガ死ぬ 73-345
 1218 味ガ死ぬ (慣)55-188
 1219 金ガ死ぬ 50-292順
 1220 空気ガ死す 35-314順
 1221 空気ガ死ぬ 35-314順
 1222 風ガ死ぬ (慣)50-106
 1223 葉ガ死ぬ (慣)42-161順
 1224 指ガ死ぬ (慣)76-249
 1225 形態ガ死に絶える 69-228
 1226 雪片ガ息絶える 69-173

332 3. 分類結果

- 1227 男が萎びる 40-267
 1228 心が萎びる 31-77
 1229 財布がしなびる 50-310順
 1230 顔が萎びる 慣46-312, 64-232順
 1231 襟が萎える 50-262
 1232 ぼくが萎えしぼむ 73-250使
 1233 (肩の)線がしぼむ 72-293
 1234 気が萎む 46-305
 1235 着物がしぼむ 50-335
 1236 女が枯れる (慣)62-325
 1237 魂が飢える 73-271順, 293名
 1238 眼が飢える 35-357
 1239 声がかわく 慣64-245順
 1240 生活が渴く (慣)55-452名
 1241 渴きが干りつく 50-317
 1242 世界が腐る 31-93使
 1243 気が腐る 慣48-15使
 1244 嘘がくさる 73-464順
 1245 空気が腐る (慣)31-132
 1246 薔薇が病む 31-54順
 1247 蜘蛛の巣がわななく 69-276
 1248 (葉の)弁がわななく (慣)69-217
 1249 三角関係が爛れる (慣)73-324順
 1250 自己嫌悪が(白く)爛れる 46-330順
 1251 叫びがごろごろする 73-323
 1252 不安がびりびりする 72-235順
 1253 空気がびりびりする 72-165順
 1254 光がそわそわする 31-54順
 1255 捌きが灰汁抜け(が)する 慣46-334順
 1256 物言いがざらりとする 50-381順
 1257 苛立たしさがギラギラする 64-60
 1258 憂鬱がとろんとする 46-319順
 1259 空虚感が白々とする 72-372順
 1260 人間性がねばねばする 46-370順
 1261 精神が生生きする 46-313順

- 1262 金がいいきりする 50-292順
 [名カラ自]
 1263 金カラ血^{かわ}が出る 50-292順
 1264 自分の顔カラ外に出る 73-203
 1265 秩序カラ一歩はずれる (慣)55-79
 1266 奥さんカラ飛び出す (慣)64-68
 1267 (台風の)シーズンカラのがれる 55-379
 1268 記憶カラ逃れる (慣)73-312
 1269 覆面カラ逃れる 73-235
 1270 嘲笑カラ抜ける 72-397可
 1271 自分カラ逃げ出す (慣)73-226可・否, 346
 1272 意識(の中)カラ逃げ出す 72-224
 1273 嗜好カラ逃げ出す 73-268
 1274 世界カラ精が抜ける 46-324順
 1275 気分カラ抜ける 慣62-89
 1276 自由詩カラ気が抜ける 慣72-263順
 1277 勉強カラずり落ちる 64-62否
 1278 輪禍カラ(とおく)はなれる 55-9
 1279 事態カラ生まれる (慣)64-77
 [名デ自]
 1280 腹(の中)デ溜息する 慣32-9
 1281 胸(の中)デ合点する 慣46-193
 1282 頭(の中)デ会話する 慣37-319
 1283 墓(の中)デ同居する 55-250
 1284 閣デ覆面する 31-90
 1285 心のなかデ演技する 55-201
 1286 彼の内部デ発火する 76-224
 1287 肩デ息する 慣46-155
 1288 (全身が)円みデできる 50-270
 1289 胸のなかデはりつけになる 55-299
 1290 子供の内側デ窒息が起る 76-232
 1291 からだの奥の方デふるえる 55-138
 1292 血デ浮く(眼) (慣)76-12
 1293 精神デ触れる 36-116
 1294 言い方デ触れる 慣73-342

- 1295 記憶(のなか)で遠ざかる (慣)73-277
 1296 鼻(の穴)で笑う 慣48-17
 1297 腹(の中)で笑う 慣52-129
 1298 心(のなか)で泣く 慣55-8
 1299 胸(のなか)でわめく 55-377
 1300 胸(の底)でわめきちらす (慣)55-385
 1301 心(の中)で呻く 慣72-425
 1302 俺(の中)で(まつ子が)勝ち誇る 62-307
 1303 心で呟く 慣32-25(一のどこか), 68-58, 69, 72-393, 426(一の中)
 1304 胸で呟く 慣46-328
 1305 腹(の底)で呟く 慣35-244
 1306 頭(の中)で叫ぶ (慣)32-43
 1307 心(のなか)で叫ぶ 慣64-58
 1308 心(の中)でうろつき廻る (慣)62-307
 1309 千絵(のなか)であばれまわる 55-397
 1310 真実で息づく 55-495
 1311 私(の中)で(まつ子が)勝つ 62-307
 1312 (音楽が)ひとりで鳴る (慣)55-130
 1313 (花火の音が)眼球(の底)で鳴りつづける 73-266
 1314 心(の奥深いところ)で(絃が)鳴り渡る 72-221
 1315 潔癖でこりかたまる 慣55-326
 1316 胸(のなか)で(強風が)ふきまくる 55-132
 1317 体当りで生きる (慣)62-140
 1318 肉体だけで生きる 64-65
- [名ト自]
- 1319 文学ト結婚する 64-63
 1320 文学ト心中する 64-62
 1321 自分ト和解する 55-389
 1322 仮面ト訣別する 73-289名
 1323 (爆音が)孤独ト共鳴する 72-275
 1324 ピアノト格闘する 35-255
 1325 樹木ト格闘する 35-455

- 1326 問題ト対決する 73-274
 1327 顔ト対決する 73-188名
 1328 (匂いが)守富ト(いっしょに)ながれこむ 慣55-18
 1329 眼ト出会う (慣)68-24
 1330 心トむきあう 55-499, 500
 1331 印象ト(眼底で)交る 46-353
 1332 焼けばつくいと寝る 50-324
 1333 死ト(ともに)暮す 72-231
 1334 毛虫トつき合う 52-137
 1335 孤独トわかるる 55-170
 1336 気持ト闘う (慣)49-36
 1337 不安ト闘う (慣)72-186, 265
 1338 絶望ト闘う 72-192
 1339 意識ト闘う (慣)72-410
 1340 宗教ト戦う 46-360
 1341 試練ト闘う 慣73-351
 1342 神聖視ト闘う 73-249
 1343 強制ト闘う 72-299
 1344 誘惑ト闘う (慣)72-299
 1345 ウメケムシト闘う 慣52-137
 1346 ブランコケムシト闘う 慣52-137
 1347 素顔ト闘う (慣)73-344名
 1348 死ト闘う 慣73-276名
 1349 弱気ト闘う 73-220
- [名=自]
- 1350 夢(の中)=彷徨する 49-73
 1351 慰めるもの=反抗する 32-48
 1352 事態=直面する 慣73-298
 1353 感情=直面する 69-179
 1354 死=直面する 慣73-300
 1355 (曲の)調べ=化身する 69-227
 1356 孤独=食傷する 73-284
 1357 面の皮=気がねする 73-254名
 1358 心=言いわけ(を)する 62-165

334 3. 分類結果

- 1359 (梨花が)ボンコ(猫)=見参する 50-263
- 1360 地位=復讐する 55-274名
- 1361 運命=復讐する 46-356名
- 1362 約束=復讐(を)する 73-234
- 1363 精神=発光する 72-230
- 1364 調子=感染する 73-259
- 1365 微笑=感染する 72-275
- 1366 はしゃぎよう=感染する 73-282
- 1367 陽気さ=感染する 72-197
- 1368 欲望=したがう 償55-78
- 1369 運命=従う 償55-117
- 1370 (手が)心=かむさる (償)55-426
- 1371 心=おおいかむさる (償)55-294
- 1372 (痴漢が)自虐=まみれる (償)73-326使
- 1373 音(のなか)=恐怖がまじる 55-330
- 1374 心=吐け口がある (償)50-77順・否
- 1375 心=(…する)ものがある 55-357
- 1376 気持ち=こわれ物がある 35-376
- 1377 気持ち=距離がある (償)55-9
- 1378 感情=吃音がある 69-150
- 1379 憎悪=距離がある 49-76順
- 1380 悲しみ=窓がある 49-37
- 1381 笑い=寒白いものがある 46-356
- 1382 声=角がある (償)35-312順
- 1383 記憶(の処々)=発条がある 69-290
- 1384 愛=底がある (償)50-53順・否
- 1385 友情=実がある 償72-306順
- 1386 感傷=味がある (償)50-327
- 1387 愚痴=味がある (償)50-327
- 1388 言葉=前物語がある 46-298
- 1389 言葉=毒がある 償72-293順
- 1390 言葉=刺がある 償72-350順
- 1391 歩行=感情がある 35-294順・否
- 1392 腫物=悪意がある 69-165順
- 1393 画=肉体がある 76-260順・否
- 1394 千円札=(うすい)静脈がある 35-358順
- 1395 横着=陰影がある 46-337
- 1396 暮し= シンとしたところがある 62-156
- 1397 顔=味がある 償55-203順
- 1398 人生=休息がある 償62-365否
- 1399 空気=あじわいがある 35-355順・否
- 1400 振幅(のなか)=いる 55-428
- 1401 微笑=いる 68-30否
- 1402 記憶(のなか)=いる 73-187
- 1403 美(の裡)=いる 69-211
- 1404 敗北(の中)=いる 49-36
- 1405 頭=浮き出る (償)36-53
- 1406 言葉(の裏)=ひそむ 償72-423
- 1407 床=帯ができる 76-357
- 1408 家(の中)=風波が起こる 償34-127
- 1409 仮面=酔いがまわる 73-288
- 1410 立場=佇む 64-62
- 1411 おぞましさ(の上)=寝る 50-270
- 1412 考え方=傾く 73-319
- 1413 衝動=のめり込む 73-306
- 1414 人情(のはずれ)=幕が垂れる 46-320
- 1415 愛=着物・金が挟まる 32-14
- 1416 ニヒリズム=はまる (償)48-18
- 1417 仕事=うずもれる 68-67
- 1418 やる瀬なさ=ひたる (償)55-202
- 1419 世界=ひたる 償55-194
- 1420 恍惚感=涵る 償36-12
- 1421 夢=ひたる 73-210
- 1422 感情=ひたる 償55-121
- 1423 楽しみ=浸り込む 償46-291
- 1424 悲しみ=ひたる 償55-241, 254
- 1425 愛情=浸る 償40-263
- 1426 不仕合わせ=浸る 36-130
- 1427 群(の中)=潰かる 62-365
- 1428 結婚=踏み切る 償73-244

- 1429 時代=たどり着く 73-349
- 1430 後ろめたさ=たどり着く 73-260
- 1431 光景=たどり着く 73-280
- 1432 顔=たどり着く 73-218
- 1433 頭蓋骨=たどり着く 73-228
- 1434 感情=はしる 償55-290
- 1435 安太の中=音が流れる 68-14
- 1436 偶然のなか=ただよう 68-79
- 1437 理屈=(太く、つよく)筋がとおる 償55-187
- 1438 生き方=しんがとおる 償55-507願
- 1439 時間=追いつく 73-181
- 1440 心の中=もどる 55-422
- 1441 (ぼくの)時間=遡る 73-180
- 1442 時間=入る 償64-70
- 1443 心=はいる (償)55-16(一の奥), 59, 77
(一の中)
- 1444 心=ひびがはいる 72-381
- 1445 友情=ひびがはいる (償)55-477
- 1446 人生=ひびがはいる 72-381
- 1447 財産=ひびが入る (償)62-324
- 1448 生活のなか=はいる 55-67
- 1449 冒険=入る (償)62-113
- 1450 社会=喰い入る 46-294
- 1451 誘惑=すべりこむ 40-266
- 1452 顔(の中)=すべり込む 73-253
- 1453 話(のなか)=とびこむ 償55-229
- 1454 清州(のなか)=(一歩)ふみこむ 55-242
- 1455 むすこ=踏み込む 46-369
- 1456 話=溶けこむ 50-18
- 1457 闇=融け込む (償)73-339
- 1458 からだ=とけこむ 55-404
- 1459 心持(の上)=沁み残る 36-49
- 1460 眠り=落ちる 償41-173, 55-91, 93, 73
-266(睡り)
- 1461 運命=落ちる 償50-45
- 1462 睡り=落ちこむ 償62-304
- 1463 試み(の中)=おちこむ 73-467
- 1464 会話=落ちこむ 償46-322
- 1465 憂鬱=陥ち込む (償)64-69
- 1466 眼り=陥る 償68-86
- 1467 思い=おち入る (償)68-11
- 1468 交渉=陥る 64-62
- 1469 雑沓=のる 55-456
- 1470 運=乗る (償)46-292受・使
- 1471 相談=乗る 償52-127
- 1472 (月の)光=乗る 50-66
- 1473 心=泛ぶ 償46-300
- 1474 眼=浮かぶ 償46-185
- 1475 胸=うかぶ 償68-8
- 1476 眼=浮かび上る 償72-382
- 1477 気持=(深く)沈む (償)52-159
- 1478 気分=沈む 償64-52
- 1479 思い=しずむ 償68-39
- 1480 もの思い=沈む 償55-488, 72-169
- 1481 悲しみ=沈む 償75-229
- 1482 悪=(深く)沈む 69-170
- 1483 拒絶=会う 償73-198
- 1484 テキ=とりこむ 55-213
- 1485 くらがり=笑いがもれる 62-141
- 1486 眼=火花が散る (償)76-256
- 1487 頬=火花が散る 76-256
- 1488 規準と問題とのあいだ=水路が開ける
73-214
- 1489 眼=花がひらく 76-256
- 1490 頬=花がひらく 76-256
- 1491 心(のなか)=二階がしまる 55-338
- 1492 抵抗=出会う (償)73-188
- 1493 狼狽=出会う (償)73-330
- 1494 凝視=出会う (償)73-314
- 1495 目的=めぐり合う 73-293願

336 3. 分類結果

- 1496 機会=巡り合う 慣73-286
 1497 真相=行き当る (慣)73-255
 1498 宗教=とびつく (慣)55-86
 1499 仮面=付き添う 73-282
 1500 心=ふれる 慣55-14
 1501 知識=ふれる (慣)55-334
 1502 思案=ふれる 62-98
 1503 法=ふれる 慣73-291
 1504 永遠=(指で)触れる 69-206
 1505 人生=(指で)触れる 69-206
 1506 文明=(頭で)触れる (慣)36-59
 1507 愛情=接する 慣55-75
 1508 ヒステリイ=火がつく (慣)33-37
 1509 胸(の奥)=道がつく 50-339
 1510 権威=しがみつく 慣73-340
 1511 水(の表面)=波がよる 73-322
 1512 心=迫る 慣68-33
 1513 (顔の)習慣=よりかかる (慣)37-199
 1514 心づくし=もたれかかる 49-67
 1515 こと=打つかる 慣49-92, 52-166
 1516 限差し=(眼が)ぶつかる 46-330
 1517 (体ごと)戦争=ぶつかる 62-125
 1518 事態=つきあたる 慣55-8
 1519 表情=(こもんと)突き当る 49-15順
 1520 不可能=突き当る (慣)68-104
 1521 光=みちる 慣68-124
 1522 飲び=溢れる 慣46-325
 1523 歓喜=あふれる 慣68-49
 1524 (眼が)媚び=あふれる 慣68-53
 1525 (音が)心=拡がる (慣)72-389
 1526 心=むかう 55-386
 1527 睡気=さからう 慣48-10順・否
 1528 能力=酔う (慣)73-259
 1529 恋=酔う 慣46-320
 1530 肉(の味)=酔う (慣)62-325

- 1531 税=酔っぱらう 62-100
 1532 自分の身体=脅える 68-7
 1533 おのれ=あたりちらす (慣)55-394
 1534 自分=呼びかける 72-241
 1535 料理場=叫びかける (慣)40-270
 1536 幻影=呼びかける (慣)48-10
 1537 心=つぶやく 慣46-176, 194(一の内), 68
 -5, 26, 40(一の中), 53, 85(一の中), 91, 93,
 111(一のなか), 113, 123(一のなか)
 1538 ズボン=眩く 72-419
 1539 肩=つぶやく 62-173
 1540 胸=眩く 慣46-190
 1541 心=叫ぶ 慣52-159順, 68-7, 52(一の中),
 124
 1542 (ひとことが)胸=こたえる 慣55-457
 1543 次元=住む (慣)52-154
 1544 沈黙=すむ 73-239
 1545 頭(の中)=住む 72-256
 1546 愛=息づく (慣)72-303
 1547 苦笑=むせる 46-294
 1548 想像力=物乞い(を)する 69-201
 1549 時節=会う (慣)46-298
 1550 惨め=あう 28-456
 1551 景色=逢う (慣)35-206
 1552 死=逢う (慣)52-150(2回)
 1553 (想像上のもの)そんなもの=お目にかか
 る 73-201
 1554 自分=笑いかける 68-51
 1555 寂しさ=打ち克つ (慣)72-311
 1556 沈黙=うちかつ 73-238
 1557 誘惑=うちかつ 慣73-179
 1558 素顔=打ち克つ 73-356
 1559 弱さ=負ける (慣)55-324
 1560 欲望=負ける 慣55-293
 1561 観念=たよる (慣)55-374

- 1562 可能性=すがる (慣)73-189
 1563 心=光る 68-122
 1564 幸福=かがやく 68-14
 1565 頭=閃く 慣62-365
 1566 心=鳥影がさす 55-80順
 1567 雰囲気=染まる 慣62-183
 1568 影=染む (慣)62-158
 1569 胸(のなか)=あらしが吹く 55-325
 1570 よろこび=溶ける 50-31
 1571 愛=焼け爛れる 46-319
 1572 憎しみ=焼け爛れる 46-319
 1573 恥ずかしさ=燃える 慣62-344
 1574 意気=燃える 慣46-294
 1575 恨み=燃える 慣62-344
 1576 確信=燃える 慣64-63
 1577 生命=火照る 46-313
 1578 男(のなか)=生きる (慣)55-195
 1579 ことば=生きる (慣)55-269
 1580 古典の中=生きる (慣)72-256
 1581 彼(のなか)=草が生える 76-258否
 1582 老人に苔が生える 69-151
 1583 あなたのバカ=ひげが生える 35-442
 1584 世間話=花が咲く 慣50-7
 1585 つきあい=溺れる 62-82
 1586 恩義=ぺこぺこする 55-36

〔名へ目〕

- 1587 虚無(の中)へ行進する 68-54
 1588 死(のなか)へ行進する 68-54
 1589 人生へ突入する 49-32
 1590 悪へ駆け出す 69-169
 1591 寂しさへ陥ち込む 64-53
 1592 闇へ呼びかける (慣)69-137
 1593 スケッチ・ブック(の中)へつぶやく
 62-87

- 1594 過去へ語りかける 69-134

- 1595 未来へ語りかける 69-134

〔名ヲ自〕

- 1596 子供の内部ヲ旅行する 76-251
 1597 家庭ヲ飛び出す 慣64-68, 73
 1598 姿ヲたどる 62-101
 1599 印象ヲ(手探りで)たどる 73-246
 1600 記憶ヲたどる 慣33-8
 1601 日の跡ヲ迎る 34-123
 1602 自分の内面ヲ走る 69-132
 1603 時間(のなか)ヲ飛ぶ 69-139
 1604 水準ヲ滑る 41-131
 1605 思想(の上つら)ヲ滑る (慣)31-122
 1606 水ヲ滑る 慣72-196
 1607 生活(のなか)ヲ歩きまわる 76-221
 1608 夢と現実(の間)ヲさまよう 55-91
 1609 人生ヲさまよう (慣)50-53
 1610 (他人の)顔ヲ通る 73-254
 1611 感情と理知とのあいだヲ行き戻る 50-379
 1612 恐怖ヲくぐる 55-12
 1613 絶望ヲくぐる 55-12
 1614 悲嘆ヲくぐる 55-12
 1615 時間ヲくぐり抜ける 73-179
 1616 何年間ヲ潜り抜ける 64-55
 1617 先入観ヲくぐり抜ける 73-227
 1618 (風が)胸(の中)ヲふきぬける 55-176
 1619 夜(の方)ヲ向く 72-257
 1620 抽象(の中)ヲうろつく 62-364
 1621 青春ヲ歩く 72-192
 1622 世の中ヲ歩く 慣50-74
 1623 小説(の中)ヲ歩く 35-208
 1624 人生ヲ歩く 慣55-179, 64-75名
 1625 眼ヲ逃れる 慣46-173
 1626 小説ヲ生きる 72-284
 1627 死ヲ生きる 68-86

名名自

〔名ガ名カラ自〕

- 1628 仮面ガ素顔カラ飛躍する 73-349
 1629 僕たちが孤独カラ(の世界に)飛翔する
 72-226
 1630 ことばガひっそり(のなか)カラ脱けだ
 す 50-274

- 1631 我ガ羨カラはみ出す 46-331
 1632 陽の光ガ青空カラ降り注ぐ 價62-306
 1633 旋律ガ手カラ生まれる (價)72-301願

〔名カラ名ガ自〕

- 1634 肉体(の底)カラ本能ガ湧き出す 50-33願
 1635 笑顔カラ愛嬌ガこぼれる 價50-63願
 1636 春じたくカラ嬉しさがこぼれ出る
 (價)50-334願
 1637 身体カラ感じガあふれる 價68-93
 1638 虚無カラ生命ガ輝き出す (價)46-352
 1639 空カラ日ガにじむ (價)69-250
 1640 唯物論カラ芸術ガ生まれる 價46-360

〔名ガ名デ自〕

- 1641 ものガ胸(のなか)デ湧きあがる 價55-363
 1642 説得ガ心(の中)デ撥ねかえる 72-420
 1643 泉ガ人間の内部デ眠る 72-216願
 1644 軀ガ表情デ語りかける 74-272
 1645 力ガ咽喉元デ燃える 69-183願
 1646 顔ガ記憶(の中)デ生きつづける 73-196
 1647 生活ガ脳裡デふとりだす 73-481

〔名デ名ガ自〕

- 1648 生(の中)デ意味ガかがやく 69-228

〔名ガ名ト自〕

- 1649 印象ガ女性像ト交流する 72-251
 1650 みどりガ若葉ト張りあう 55-138
 1651 囁きガ憎悪トもつれあう 64-240
 1652 匂いガ悪臭ト繋がる 價69-229
 1653 体ガ死ト戦う (價)62-310

- 1654 仮面ガ偏見ト闘う (價)73-254
 1655 欲求ガ復讐心トせめぎ合う 73-245
 1656 電気ガ外光ト溶ける 36-106

〔名ガ名=自〕

- 1657 街ガ頭=往来する (價)36-132
 1658 田舎ガ頭=往来する (價)36-132
 1659 心持ガ頭=往来する (價)36-126(2回)
 1660 感慨ガ心頭=去来する 價72-308
 1661 体験ガ繰り返し=陥没する 69-226
 1662 安太ガ思想=共鳴する (價)68-14
 1663 娘ガ意見=共鳴する 價55-142
 1664 美ガ矛盾(の上)=君臨する 69-288
 1665 美ガ破調(の上)=君臨する 69-288
 1666 美ガ争い(の上)=君臨する 69-288
 1667 労働ガ欲望=君臨する 73-302
 1668 感情ガ胸=反映する 價36-77
 1669 蒼ざめたものガ心=投影する ※自動詞
 用法 72-230
 1670 思いガ心=ひびく (價)55-375
 1671 非難ガ心=ひびく 價55-355
 1672 ものガ心=おおいかぶさる (價)55-435
 1673 言葉ガ心=のしかかる 50-127
 1674 秘密ガ心(の奥)=かくれる (價)55-14
 1675 気持ガ心(のどこか)=かくれる(價)55-29
 1676 魔力ガむすこ=ひそむ 價46-320
 1677 (洞窟の)闇ガ心(の底)=ひそむ 55-97願
 1678 戦慄ガ心=湧く 72-415
 1679 声ガ愛情=ゆれる 68-83
 1680 心ガ妥協=傾く 價55-326
 1681 愛情ガ鷹夫=はまり込む 50-92
 1682 羞恥心ガ心=のりうつる 價74-18
 1683 (暗い)鬚ガ頬=走る 64-231使
 1684 心ガ期待=はずむ 價72-253
 1685 願いが顔色=流れる 46-318
 1686 心ガ風景(の中)=さまよい出る 73-255

- 1687 小路小路カ疲労=激む 50-406
- 1688 小路小路カ寂寥=激む 50-406
- 1689 直感カ心=来る (慣)64-76
- 1690 (感情の)すれ合いカ(生活)態度=突き入
る 49-18
- 1691 ポンポン(船)カ視線(の中)=滑り込む
(慣)72-250
- 1692 決心カ心=舞い込む 48-17
- 1693 時間カ日常(のなか)=融け込む 69-169順
- 1694 姿カ景色(の中)=とけこむ 74-30
- 1695 気持ちカ心=沁み拡がる 46-305
- 1696 感情カ胸=噴き上げる (慣)50-9
- 1697 行為カ心=のぼる 72-414
- 1698 影カ光=乗る 50-66
- 1699 ことカ心=浮かぶ 慣55-101, 72-391
- 1700 年齢カ頭=浮かぶ 慣72-379
- 1701 不安カ頭=浮かぶ 慣72-403
- 1702 声カ心=浮かぶ (慣)72-388
- 1703 笑いカ唇=うかぶ (慣)72-395
- 1704 考えカ頭=浮ぶ 慣40-270
- 1705 想像カ心=浮かぶ 慣72-364
- 1706 たくらみカ心(の表面)=うきあがる
(慣)55-200
- 1707 詩カ心=浮かぶ 慣72-356
- 1708 不思議さカ心=泛ぶ (慣)46-300
- 1709 諦めカ(自己)主張=沈む 49-93
- 1710 ことカ記憶=結びつく 慣41-152
- 1711 直覚カ笑い方=結びつく (慣)48-20順
- 1712 時間カ現在=重なる 73-181
- 1713 回想カ事件=行き当る (慣)69-131
- 1714 笑いカ心=触れる 68-20
- 1715 考えカ心=触れる 32-12
- 1716 態度カ積=さわる 慣28-454
- 1717 憶い出カ我=触る 36-41
- 1718 話カ我=触る (慣)36-41
- 1719 明りカ網膜=焼きつく (慣)72-306
- 1720 顔カ心(の中)=灼きつく 慣46-165
- 1721 生命力カ応酬=迫る 46-308
- 1722 松カ空=伏す (慣)69-241
- 1723 道中カ欠乏=満ちる (慣)28-460
- 1724 道中カ屈辱=満ちる (慣)28-460
- 1725 予感カ熱気=満ちあふれる 73-342
- 1726 悦びカ心=充ち溢れる 慣72-271
- 1727 心カ笑い=あふれる 68-80
- 1728 戦慄カ歡喜=あふれる 慣68-8
- 1729 冴え冴えしたものカ心=ひろがる
48-13
- 1730 丘カ瞳=(むかって)言いかける 31-95
- 1731 魅力カ人生=憑く 55-266受
- 1732 感情カ彼の底=巢喰う 62-324
- 1733 退屈カ心(の奥底)=巢喰う 31-77
- 1734 可能性カ心=やどる 慣55-276
- 1735 顔カ衿(の上)=据る 50-37
- 1736 住いカ戦災=逢う 慣62-82
- 1737 計算カ感情=勝つ 50-366可・否
- 1738 手カ意志=したがう (慣)55-495
- 1739 眼つきカ胸=閃く 慣46-309
- 1740 微笑カ胸=閃く (慣)46-309
- 1741 声カ胸=閃く (慣)46-309
- 1742 考えカ頭=閃く 慣46-320
- 1743 手カ胸=閃く (慣)46-309
- 1744 窮屈さカ沈滞(の中)=ちらつく 35-464
- 1745 不幸カ主張=映る (慣)49-82
- 1746 家並みカ西日=染まる 慣62-255順
- 1747 感情カ情痴=濡れる (慣)49-57
- 1748 愛情カ歡喜=燃ゆ 慣49-86順
- 1749 思いカ身内=煮えたぎる (慣)50-75
- 1750 情緒カ胸(のなか)=うまれる (慣)55-497
- 1751 気分カ心=生まれる 慣62-136
- 1752 真実カ胸=生きる (慣)55-327

340 3. 分類結果

- 1753 わが家カ胸=よみがえる 價62-110
 1754 感じカ肉体=よみがえる 價68-38
 1755 感覚カ肉体=よみがえる 價68-6
 1756 言葉カ心=蘇る (價)72-406
 1757 四肢カ胸=よみがえる 價62-180
 1758 気持カ心(の底)=芽生える (價)72-253
 [名=名ガ自]
 1759 世界=魂カ飛翔する (價)72-226
 1760 屋根瓦=粉雪ガ化粧する (價)50-120
 1761 ころろ=切実さガひびく 價55-269
 1762 ことば=運命ガひそむ (價)55-68
 1763 草平(の内)=欲望ガ萌す (價)34-153
 1764 胸=念ガ萌す (價)64-70
 1765 心=快感カわく 價72-428
 1766 眼=表情カわく (價)62-85
 1767 身うち=敵意ガわき上る (價)62-139順
 1768 胸=思いカ湧きあがる 價46-170
 1769 強烈なもの(の上)=静かさガ張りつめる (價)49-33
 1770 顔=肉ガひしめく 69-173順
 1771 身粧^{みづくらい}=心カ留まる (價)36-37
 1772 (...の)有無(の中)=口実ガころがる (價)40-260
 1773 ...工合(の中)=口実ガころがる 價40-260
 1774 空=稲妻ガ走る 價69-169
 1775 壁=施律カただよう (價)76-247
 1776 眼=微笑カただよう (價)68-86
 1777 唇=微笑カただよう (價)68-53
 1778 胸=喜びガ迸る (價)69-236
 1779 庭草=月の光ガさまよう (價)50-31
 1780 天井=闇カ澱む 69-224
 1781 私(の中)=感謝カ湧き出す 69-262順
 1782 広介=感情カ溶け込む 49-34否
 1783 唇=微笑カうかぶ 價72-427
 1784 顔=微笑カうかびあがる 價55-250

- 1785 経緯=物語カからまりつく 74-274
 1786 心=姿ガこびりつく (價)50-44
 1787 心=願いカかすめる 68-48
 1788 心=疑惑カかすめる 68-22
 1789 空気=頭ガよれる 62-188順
 1790 様子=少女らしさガあふれる 價68-26
 1791 感じ=新しさがあふれる (價)68-118
 1792 声=感じガあふれる 價68-41
 1793 物腰=ぎこちなさガあふれる 68-20
 1794 からだ=生活力ガあふれる 55-253
 1795 顔=やさしさがあふれる 價68-98
 1796 いびき(のなか)=連帯感ガあふれる 68-60
 1797 心=笑いカこみあげる 73-230順
 1798 顔色=自嘲(のいり)カ掻きのぼる35-458
 1799 動作=影カ滲む 50-85
 1800 風=匂いカにじむ 73-190
 1801 眸=憎悪カたぎり立つ (價)55-95
 1802 眸=殺氣カたぎり立つ (價)55-95
 1803 手(の中)=真実カ生きる 55-354
 1804 眼(の裏)=場面カ甦る 價72-418
 1805 皮膚(の上)=感触カ蘇る 價72-345
 1806 私=心カ芽生える (價)69-134
 1807 躰=疲れカ芽生える (價)76-361
 [名ガ名へ自]
 1808 彼ガ自然へ溶け込む 31-55
 1809 気楽なものガしろと臭さへ浸みる 50-258
 1810 冷たさが心へ沁み通る 68-36
 [名へ名ガ自]
 1811 むすこへ念カ萌す 價46-316順
 [名ガ名ヲ自]
 1812 お辞儀カ聞えと聞えとの間ヲ往復する 50-403
 1813 思案ガ頭(の中)ヲ往き来する (價)62-98

- 1814 金閣ガ夜ヲ渡る 69-139
 1815 空恐ろしさガ底ヲよぎる 46-173順
 1816 僕らガ夢(の境界)ヲ漂う (償)72-244
 1817 風ガ水面ヲ滑る 31-56
 1818 声ガ通りヲほとぼしる 35-198
 1819 恥ずかしさガ心ヲかけまわる 64-244
 1820 声ガ僕(の内部)ヲ突き抜ける 72-244
 1821 言葉ガ頭ヲとおりすぎる 35-236
 1822 (ピアノの)和音ガ意識(の中)ヲ通り過ぎ
 る 72-262
 1823 愛ガ死ヲ乗り越える 償72-248順
 1824 関係ガ空想ヲ踏み越える 64-51
 1825 感じガ心ヲ離れる (償)62-124
 [名ヲ名ガ自]
 1826 問えのあいだヲお辭儀ガ往復する 50-403
 1827 意識(の中)ヲ記憶ガ過ぎる 72-208
 [名ヲ名=自]
 1828 頭ヲ成果=たどり着く 73-217

名 名 名 自

[名ガ名カラ名へ自]

- 1829 人間ガ現実カラ現実へ飛び移る 46-323

名 他

[名ガ他]

- 1830 色彩ガ吸収する 36-215
 1831 過去ガ圧迫する 50-270受
 1832 感情ガ圧倒する (償)68-8受
 1833 光リガ邪魔(を)する 35-418
 1834 流れガ邪魔(を)する 35-418
 1835 あらしガ(ゆく手を)遮断する 55-318
 1836 欲望ガ(生涯を)左右する (償)55-488
 1837 過失ガ(運命を)左右する (償)55-487
 1838 仮面ガ我慢する 73-303
 1839 頭ガ我慢する 36-56

- 1840 海藻ガ後悔する 72-222名
 1841 金閣ガ知悉する 69-206(2回)
 1842 魂ガ再確認する 55-504
 1843 虫ガ承知する (償)35-335
 1844 あこがれガ納得する 46-309使
 1845 ときガ(問題を)解決する (償)55-72, 429
 1846 仮面ガ空想する 73-282名
 1847 仮面ガ主張する 73-272順
 1848 影ガ主張する 69-185順
 1849 木ガ(存在を)主張する 52-119
 1850 眼ガ主張する 62-331
 1851 仕上リガ(疑問を)用意する 73-212
 1852 人形ガ凝視する 72-343, 347
 1853 蝨ガ愛撫する 69-275
 1854 木の葉ガ表現する 31-57
 1855 金閣ガ黙過する 69-227
 1856 目(のうごき)ガ裏書する 償55-27
 1857 口(のうごき)ガ裏書する 償55-27
 1858 手ぶりが裏書する 償55-27
 1859 金閣ガ抱擁する 69-206受, 208(私を)
 1860 「母子情」ガ仲介(を)する 46-350, 353
 1861 仮面ガ約束する 73-333順
 1862 夕映ガ(快晴を)約束する 償31-81順
 1863 言葉ガ不意打ちする 74-271
 1864 領土ガ(領土を)侵略する 31-98
 1865 言葉ガ支配する 68-13順
 1866 沈黙ガ支配する 73-238
 1867 生花ガ支配する 41-172
 1868 ダイヤモンドガ指揮する (償)50-277名
 1869 空気拳銃ガ誘導する 73-291
 1870 薬ガ世話する 55-106受
 1871 目ガ(…せよと)要求する (償)48-10
 1872 仮面ガ(自治権を)要求する 73-288名
 1873 胃の腑ガ催促する 73-258名
 1874 叫びガ鼓舞する 69-206

342 3. 分類結果

- 1875 言葉が鼓舞する (慣)69-290
 1876 仮面が誘惑する 73-320
 1877 煙草が(病人を)誘惑する (慣)72-170名
 1878 肉体が(死へと)誘惑する 72-298
 1879 猫が失礼する (慣)50-381
 1880 藤蔓が擲搦する 31-74
 1881 激動が翻弄する 49-55
 1882 情熱が翻弄する 73-354受
 1883 音が(大広間を)占領する 46-323
 1884 仮面が(アライブを)提供する 73-310
 1885 森が縁取りする 72-307順
 1886 ことが刺戟する (慣)73-311
 1887 嫉妬が(骨の髄を)腐蝕する 73-304
 1888 美が包む (慣)69-206受, 211受, 212受
 1889 (孤独の)厚みが(とつぶり四周を)つつむ
 63-24
 1890 金閣が(私を)包む 69-206, 211
 1891 陶酔が包む 76-23受
 1892 笑いがつつむ 64-244
 1893 声が(遺骨を)つつむ 慣55-448受
 1894 影が包む 慣74-70受
 1895 (雨の)音が(耳を)つつむ 64-245
 1896 匂いがつつむ 慣55-451受
 1897 雪が包む 50-337
 1898 体温が(相手を)包む 62-152順
 1899 感情が包み込む 73-253受
 1900 記憶が(からだを)包み込む 73-451
 1901 懊悩が(顔を)蔽う 50-110順
 1902 音がおおう 62-102受
 1903 霞が(眼を)蔽う (慣)50-129順
 1904 老杉が(空を)蔽う (慣)55-451
 1905 時間が(懐らを)囿む 72-244順
 1906 朝日が縁取る 62-353受
 1907 自然が(山寺を)とりかこむ (慣)55-474
 1908 愛情が(私をやさしく)取り巻く 49-64
 1909 虚無が(扱を)背負う 46-354順
 1910 顔が口をはさむ 73-186
 1911 色が悪意を帯びる 69-202
 1912 ざわめきが響きを帯びる 46-323
 1913 画面が私たちを含む 順69-203受
 1914 微笑が陰影を含む (慣)49-67
 1915 ことばが針を含む 73-468
 1916 皮肉が刺をふくむ (慣)55-247
 1917 風が敵意を含む 72-240
 1918 空が(鋼を含む) 46-366
 1919 海が怒気を含む 69-246
 1920 街が(昼間の)顔を現わす 73-327
 1921 影が姿を現わす 68-59
 1922 富士山が顔を現わす (慣)31-81
 1923 年齢が(かおを)出す (慣)55-29
 1924 恋が芽を出す (慣)31-58
 1925 野心が顔をだす (慣)55-338
 1926 ガーゼが顔を出す 慣74-44
 1927 ざわめきが精力を出す 46-323
 1928 きものが(線を)浮かしだす 55-346
 1929 扉が隠す 72-184
 1930 夜霧が(星を)隠す (慣)62-310
 1931 火が身を隠す 69-291
 1932 概念が洪水を起す 76-250
 1933 健康さが身障いを起す 76-361
 1934 慈愛が(耕を)つくりあげる 55-285
 1935 仮面が落着きをなくす 73-319
 1936 苦悶が涙を落す 63-20
 1937 樹立が(葉を)落す 慣62-256
 1938 目が涙を落とす (慣)36-114
 1939 宗教臭が(姿を)消す 46-360
 1940 感情が高音を保つ 49-93
 1941 花が色彩を調える 46-301
 1942 年齢が意地を張る 50-265
 1943 喜びが根を張る 69-180

- 1944 仮面ガ強情をはる 73-281
- 1945 痴愚ガ根を張る 50-53
- 1946 仮面ガしめつける 73-326受
- 1947 想いガ胸を締めつける 72-209
- 1948 自由ガ(おか)ねを)変える 68-124
- 1949 木ガ居所を変える 31-65
- 1950 尻ガ睡つたふりをつづける 73-274
- 1951 自我ガ問答を繰り返す 72-278
- 1952 感じガ(安太)を動かす 68-114
- 1953 風聞ガ(かの女を)動かす 慣46-356受
- 1954 哀願ガ動かす 64-76受
- 1955 欲喜ガ揺り動かす 68-8
- 1956 いびきガ揺り動かす 68-86受
- 1957 嵐ガ(梢を)揺るがす (慣)72-307
- 1958 狼狽ガゆすぶる 55-51
- 1959 笑いガゆすぶる 64-244
- 1960 あらしガゆすぶる (慣)55-323
- 1961 風ガ(窓を)ゆさぶる 慣73-180
- 1962 観念ガ怖気を慄う 64-67
- 1963 思いガ息の根をとめる 55-504
- 1964 風物ガ(動きを)止める 74-82
- 1965 若さガひきとめる 50-327
- 1966 警告ガ足音をたてる 73-186番
- 1967 仮面ガ計画を立てる 73-273
- 1968 鳳凰ガ爪を立てる 69-152
- 1969 顔ガ(びりびり)音をたてる 73-344
- 1970 心臓ガ(びりびり)音をたてる 73-344
- 1971 こわいものガ頭をもたげる (慣)55-220
(2回)
- 1972 感覚ガ頭を抬げる 62-300
- 1973 不安ガ頭を抬げる 慣46-341, 61-80
- 1974 欲望ガ頭をもたげる (慣)55-321順
- 1975 概念ガねじふせる 55-338
- 1976 電車ガ車体をかしげる (慣)62-76
- 1977 思慕ガおし倒す 55-506受
- 1978 感じガ(わたしを)打ち倒す 72-382
- 1979 指ガ(かぎを)おく 62-178
- 1980 研究ガ支える 73-226
- 1981 赤ん坊ガ四面を下げている 73-250
- 1982 「ある童貞」ガ迷惑をかける 36-102
- 1983 灯ガペールをかける 46-330
- 1984 闇ガ掬い去る 46-301
- 1985 永遠ガ(われわれを)埋める 69-167順
- 1986 葉ガ(通りを)埋める 慣36-62
- 1987 姿ガ(周囲を)浸す 46-323
- 1988 光線ガ(部屋を)浸す 46-324順
- 1989 現実ガ腐臭を放つ 69-128順
- 1990 感情ガ光りを放つ 69-162順
- 1991 邪悪ガきらめきを放つ 69-171
- 1992 風ガ投げつける 48-10
- 1993 仮面ガ顔をそらせる 73-271
- 1994 風ガ送る (慣)46-325受 (一の流れ), 72-382受(花を)
- 1995 ことガ(微笑を)もたらす (慣)68-90
- 1996 偶然ガ齧す (慣)72-166
- 1997 予感ガ警告を発する 73-247
- 1998 激怒ガ叱駆する 46-356
- 1999 衝動ガ駆る 慣46-293受, 314受, 55-479受, 484受, 72-346受, 424受, 73-137受, 294受, 352受
- 2000 気持ガ駆る 慣40-270受, 64-68受, 72-293受
- 2001 思いガかる 慣62-95受
- 2002 怒りガ駆る 慣69-180受
- 2003 心配ガ(定吉を)駆る 32-38
- 2004 不安ガ駆る 慣64-56受
- 2005 焦躁ガ駆る 慣40-267受
- 2006 好奇心ガ駆る 慣72-178受
- 2007 窓ガ(砂塵を)はじく 慣48-11
- 2008 心ガ血をながす 55-201

344 3. 分類結果

- 2009 像が汗を流す 73-310
- 2010 仮面が受け流す 73-272名
- 2011 感情が引きずる 慣46-314受
- 2012 エネルギーが引き廻す 52-165受
- 2013 邪気が掻き廻す 35-234
- 2014 (輪廻の)業がひきまわす 50-93受
- 2015 掌が血を通わす 49-90
- 2016 性質が(人を)貫く 慣46-351順
- 2017 恐怖が(身体を)つらぬく (慣)68-63順
- 2018 声が(肺臓を)つらぬく 55-220
- 2019 記憶が貫く 72-235
- 2020 視線が貫く 37-319
- 2021 戦慄がつらぬく (慣)68-8受, 87(身体を),
91, 101(身体を)
- 2022 魚が眼の内側をよこぎる 76-240
- 2023 悪が(僕を)追う 72-277順
- 2024 視線が追う (慣)49-81受
- 2025 金^カ追う 慣40-263受
- 2026 風が(舟を)追う 72-240受
- 2027 炎が追う (慣)72-405受
- 2028 生活が追いまくる 慣72-401受
- 2029 鉄^カ追い駆ける 31-74
- 2030 音が(あとを)追いかける (慣)72-218
- 2031 観念が追いつめる 73-281順
- 2032 会話が追いつめる 62-348受
- 2033 思いが(顔を)おしやる 55-438
- 2034 幻聴が連れて来る 31-112
- 2035 建物^カ人間臭を取戻す (慣)73-329
- 2036 商館^カ落着きをとよりもどす 慣62-135
- 2037 肩^カ幹りを取戻す 69-183
- 2038 感情^カ押しもどす 76-376
- 2039 仮面^カ休戦に持ち込む 73-301
- 2040 毛穴^カ舌を出す 73-317
- 2041 勾欄^カ胸をさし出す 69-289
- 2042 枝^カ手を差し出す 72-163
- 2043 煙突^カ(煙を)吐き出す 慣72-274
- 2044 花^カ吐息を吐き出す 31-83
- 2045 体^カ(僕を)閉め出す 62-267受
- 2046 こと^カひきずりこむ (慣)40-266
- 2047 心^カ叫びをあげる 55-457
- 2048 意識^カうめき声をあげる 73-342
- 2049 不平^カ声をあげる 50-400
- 2050 帯^カ(絹の)叫びをあげる 69-223
- 2051 煙突^カうめき声をあげる 73-353
- 2052 面^カ顔を上げる 73-227
- 2053 プレス機^カ悲鳴をあげる 73-352
- 2054 舟^カ悲鳴をあげる 72-240
- 2055 舟^カ声をあげる 72-246
- 2056 感情^カ頭を持ちあげる (慣)76-370順
- 2057 風^カ(砂塵を)捲き上げる 慣62-315
- 2058 眼鏡^カ(私を)吸い上げる 48-10
- 2059 車体^カ(乗客を)揺り上げる 46-301
- 2060 孤独^カ温度を下げる 73-222
- 2061 牧草^カ頭^{こらべ}を垂れる (慣)72-284
- 2062 着ているもの^カ符牒を合わせる 73-224
- 2063 死^カ解き放す 50-127
- 2064 満足感^カ薬袋をときほぐす (慣)55-235
- 2065 死者たち^カ腕を絡みあう 76-349
- 2066 もの^カとも^カの手をつなぐ 69-238
- 2067 同情^カ(娘を)追い立てる 73-352
- 2068 靴(の先)^カガ口をあける 慣73-476
- 2069 (顔に)洞穴^カガ口をあける 73-188
- 2070 欲望^カ(煙の巢を)こじあける 73-300
- 2071 疑惑^カとぎす (慣)68-14受
- 2072 おの^カのき^カ(歯ぎしりを)封じる 73-333
- 2073 仮面^カガ口をつぐむ 73-323
- 2074 面影^カ像を結ぶ 72-251
- 2075 火と火^カ手を結ぶ 69-257
- 2076 先入観^カしぼる 慣73-254受
- 2077 固定観念^カ縛る 慣72-171受

- 2078 常軌^カしばる 慣73-293受
 2079 凍^{いて}カ縛る 50-301
 2080 潔癖^カ(体を)しばる 76-241順
 2081 仮面^カ(体に)手を触れる 73-279
 2082 対照^カ(目を)吸いつける 31-79
 2083 日光^カ(金箔を)貼る 69-154
 2084 死者たちが^カ膝をすりつけあう 76-349
 2085 死体^カ膝を擦りつける 76-356
 2086 言葉^カ(わたくしを)しばりつける 35-310
 2087 街並^カ(屋根屋根を)並べる (慣)72-274
 2088 時間^カ腕を打つ 69-139
 2089 姿^カ打つ 慣37-311受
 2090 愕き^カ搏つ 69-195受
 2091 歓喜^カ(彼を)うつ 68-54
 2092 恐怖^カ打つ 慣31-118受
 2093 悲しみ^カ打つ 慣72-208受
 2094 言葉^カ胸を打つ (慣)62-95
 2095 ピアノ^カ耳を打つ (慣)68-12
 2096 音^カ(彼を)打つ 68-12
 2097 爆音^カ鼓膜を打つ 慣62-168
 2098 戦慄^カ(彼を)うつ 68-54
 2099 不思議さ^カうつ 慣46-361受
 2100 剛毅^カ打つ (慣)72-168受
 2101 雨^カ(屋根を)叩く 慣72-344
 2102 雨足^カ(土を)たたく 慣73-484順
 2103 風^カはたき落す (慣)72-196
 2104 卒業試験^カ(頭を)どやしつける 62-286
 2105 就職難^カ(頭を)どやしつける 62-286
 2106 文明^カ光を当てる 73-336
 2107 梅雨^カ(屋根を)叩きつける (慣)64-238
 2108 痛み^カ押す 48-10
 2109 感情^カ押す (慣)48-13受
 2110 思い^カ押す (慣)55-303受
 2111 雰囲気^カ押す 慣49-33受
 2112 川^カ押し合う 31-55
 2113 体温^カ圧す 62-152受
 2114 日々^カ(胸を)圧す 62-78
 2115 (心の)重さ^カおさえる 55-478受
 2116 頭^カ感情を抑える 36-104
 2117 臭い^カ(胸を)押しつける 68-23
 2118 死者たちが^カ頭を押しつけあう 76-349
 2119 死体^カ膝を押しつける 76-359順
 2120 ひびき^カ胸を突く (慣)62-116順
 2121 こと^カ突つき返す 35-280
 2122 胎動^カ突きあげる 48-8順
 2123 感じ^カ胸もとをつき上げる 52-157
 2124 怒り^カ突き上げる (慣)49-19
 2125 泣き声^カ突き上げる (慣)49-63順
 2126 笑い^カ小突きまわす 69-274受
 2127 虚無^カひく 慣68-39受
 2128 気持の張り^カ(ぐいと)惹き寄せる 36-77受
 2129 球^{たま}^カ線をひく (慣)55-156
 2130 熱情^カひく 慣46-330受
 2131 気持^カ牽く 慣46-309受
 2132 驚き^カ余韻をひく 73-227
 2133 ラッパ^カ尾を引く 慣48-15順
 2134 サイレン^カ尾を引く 慣49-22
 2135 柳(の銀)^カ尾を引く 慣62-170
 2136 著書^カ引っぱる 46-352受
 2137 臭い^カ(鼻腔を)さする 73-255
 2138 匂い^カ(鼻を)かすめる (慣)73-339
 2139 微笑^カ(目を)さえぎる 73-216
 2140 (禁止の)柵^カさえぎる (慣)73-319
 2141 傷^カさえぎる 73-188受
 2142 首^カ(接近を)はばむ 73-265
 2143 吃り^カ(言葉)阻む 69-206受
 2144 吃音^カ(言葉)阻む 69-232受
 2145 木材^カ行く手を塞ぐ (慣)72-166
 2146 こと^カ(私を)うちのめす (慣)55-487
 2147 思い^カ打ちのめす 慣52-160受

346 3. 分類結果

- 2148 尋問がうちのめす (慣)73-444受
 2149 像が(体を)くねらせる 73-310
 2150 電車が(車体を)くねらせる 慣73-446
 2151 微笑が(頬の肉を)歪める 72-218
 2152 炎が(柱を)ねじまげる 73-293
 2153 あらゆるものガ身をよじる 73-352
 2154 夜風が(体を)捲く 69-171
 2155 頭(の中)が渦を巻く 32-41
 2156 笑いガ巻き締める 46-364受
 2157 カガ締め上げる 52-145
 2158 時間ガ(汗・あぶらを)しぼる 35-202
 2159 (内部)の力ガ(顔の皺いを)壊す 69-282
 2160 悲嘆ガおしつぶす (慣)55-12受
 2161 恐怖ガおしつぶす (慣)55-12受
 2162 絶望ガおしつぶす (慣)55-12受
 2163 ことガ(肉体を)傷つける 慣49-84
 2164 沈黙ガ傷つける 55-290順
 2165 孤独ガ(人を)傷つける (慣)72-220
 2166 眼ガ(膜を)やぶる 76-249
 2167 仮面ガ綻を破る 73-325名
 2168 咬きガ(唇を)衝き破る 28-457
 2169 木ガスタートを切る (慣)52-120順
 2170 仮面ガしびれを切らす 73-322順
 2171 光線ガ(形を)切り出す 46-291受
 2172 遠心力ガ(ロープを)引きちぎる 73-206
 2173 炎ガ(天井を)引き裂く 73-293
 2174 自嘲ガ(全面を)つんざく 35-459
 2175 憶い出ガ(ちくりと)刺す 52-162
 2176 毛布ガ(肌を)さす 49-26順
 2177 音ガ(唇の間を)刺し徹す 31-114
 2178 風ガ刺す 50-337
 2179 雨ガ(水面を)刺す 69-146受
 2180 顔ガ(目を)刺す 73-447
 2181 ひとミガとげを刺す 73-469順
 2182 海ガ牙をむく 55-94
 2183 庖丁ガ(皮膚を)削る 50-392
 2184 ことがすり減らす 49-84
 2185 他人ガ水増を増す 69-272
 2186 心ガ明るさを増す 慣73-264
 2187 歓喜ガ力をます 68-8
 2188 欲望ガ重みを増す 69-205
 2189 夜ガ密度・重さを増す 69-284
 2190 囁りが(まわりを)みたす 69-137受
 2191 顔ガ偽足をのばす 73-237
 2192 樹々ガ枝を差し延べる 慣72-253
 2193 木ガ枝をひろげる 慣72-163
 2194 エッフェル塔ガ脚を張り拡げる 46-366
 2195 幸福感ガ胸をふくらます (慣)72-205
 2196 淵ガ口をあける (慣)69-287
 2197 事実ガ重量感をもつ 55-463
 2198 金閣ガ(炭索の)肉体を持つ 69-155
 2199 願望ガせき立てる 73-341受
 2200 扉ガせきたてる 73-254
 2201 夜ガせき立てる 68-5受
 2202 精神ガ痛手を感じる 72-168
 2203 過去ガ羞恥を感ずる 68-47
 2204 (雨戸の)音ガ目をさませせる 73-309受
 2205 精神ガ夢みる 69-280
 2206 あざやかさがおどろかす (慣)55-336
 2207 秘密ガ苦しめる 慣55-98受
 2208 性質ガ苦しめる 46-342
 2209 反動ガ苦しめる 46-358
 2210 所在なきガ苦しめる 慣32-33受
 2211 反省作用ガ苦しめる 32-48受
 2212 癖ガ苦しめる 46-342
 2213 考えガ苦しめる (慣)40-266
 2214 決意ガ苦しめる 72-223
 2215 憂鬱ガ苦しめる 慣32-7受
 2216 不安ガおびやかす 慣55-130受
 2217 絶望ガ怯かす (慣)48-13受

- 2218 人生が脅かす 32-35受
 2219 反省が悩ます 32-15
 2220 傷が悩ます 慣73-205受
 2221 病苦がなやます 慣55-69受
 2222 (そういった)ものか慰める 36-212
 2223 火が(私を)慰める 69-291
 2224 蛭がうらむ 73-291名
 2225 蜂が(私を)慕う 69-228受
 2226 羽蟻が恋い慕う 72-287
 2227 蛾が恋い慕う 72-287
 2228 仮面が名残りを惜しむ 73-336
 2229 体(のどこか)がまぶしがる 73-257
 2230 薔薇が煙がる 31-132
 2231 視線がうるさがる (慣)46-348使
 2232 仮面が眉をひそめる 73-272
 2233 美が力を揮う 69-289
 2234 時間が待つ 73-196
 2235 戦争が(僕を)待つ 72-257順
 2236 葉が待つ 72-298
 2237 死が待ち構える 72-231
 2238 つまづきか待ち伏せる 73-479
 2239 胃が保証を求める 69-280
 2240 足が道を覚える 69-246
 2241 趣味が(年齢を)わすれる 慣55-127
 2242 都が忘れる 69-155
 2243 建築が(眼りを)忘れる 69-226
 2244 壁が(表情を)忘れる 73-179順
 2245 頭が憶い出す 36-126
 2246 手が知る 55-374, 393(体温を), 420
 2247 腕が(やさしさを)知る 55-492
 2248 指(のはら)が(唇を)知る 55-492
 2249 感情が(事実を)認める (慣)55-96
 2250 理性が(事実を)認める (慣)55-96
 2251 大恥(の群)が選ぶ 73-347
 2252 炎が(雲を)目指す 73-293
 2253 血が(頭を)めがける 55-382
 2254 涙が(耳の穴を)めがける 73-354
 2255 心がまさぐる 69-290
 2256 声(が弱り目を)うかがう 73-442
 2257 (男女間に)虫(が対手を)うかがう 35-325
 2258 金閣が見のがす 69-227
 2259 仮面が見逃す 73-335
 2260 死が見のがす 69-267
 2261 運命が(女を)決める 32-18
 2262 頭が打ち消す 36-110
 2263 金閣が(美を)いつわる 69-142
 2264 仮面が脱出をはかる 73-228
 2265 夏雲が見下ろす 69-154
 2266 花(が四辺を)見まわす 31-83
 2267 壁が見返す 73-179受
 2268 (空の)明るみ(がぼくを)見返す 73-265
 2269 写真がながめる 55-120
 2270 隙が眺める 68-20
 2271 表情が見入る 72-294
 2272 死が(僕らを)見張る 72-231
 2273 機械が(私を)狙う 37-327
 2274 頂上(が顔を)覗ける (慣)41-111
 2275 影響が見せる 46-318
 2276 考え(が形を)見せる 52-150
 2277 汽車が(機腹を)見せる 慣41-151
 2278 木(が葉の色を)見せる 慣52-119
 2279 体(がみせる) 76-221
 2280 嫉妬(が目を)くらます (慣)73-356受
 2281 仮面(が聞く) 73-336
 2282 くらやみが(しのび泣きを)きく 55-183
 2283 体(が心の言うことを)聴く (慣)72-381否
 2284 言葉(が私を)呼ぶ 69-290
 2285 煙(がよぶ) 72-373
 2286 炎(がよぶ) 72-373
 2287 時計(が曲を)うたう (慣)40-264順, 265

348 3. 分類結果

- 2288 画^ガ(歌を)うたう 76-260
- 2289 ホームドラマ^ガ(家庭讃歌を)うたう
73-348
- 2290 地面^ガ(物を)言う 32-34
- 2291 心^ガ言う 72-381
- 2292 泥鰌^ガ(言葉)をいう 35-168
- 2293 眼^ガ言う (慣)72-418
- 2294 唇^ガ(ものを)言う 31-115
- 2295 頭^ガ(考え)を捲くし立てる 35-352
- 2296 あらゆるもの^ガ哀悼の意を表す 73-352
- 2297 空気^ガ知らせる 50-339
- 2298 軀^ガ言葉を伝える 74-273
- 2299 ダイヤ^ガ話す 50-278
- 2300 こと^ガ語る (慣)40-261
- 2301 点をなす^ガ語る (慣)62-168
- 2302 永遠^ガ語る 69-167順
- 2303 眼^ガ語る 72-194
- 2304 膝^ガ語る 50-80
- 2305 化物^ガ論ずる 73-274
- 2306 心(の一部)^ガ告げる 69-290
- 2307 杖^ガ告げる 31-110
- 2308 黒^ガ告げる 62-87
- 2309 (花火の)音^ガ(開始)を告げる (慣)73-266順
- 2310 枝^ガ(身の上)を告げる 31-59
- 2311 金閣^ガ打明ける 69-148
- 2312 意識^ガ(おずおずと囁き声で)問い返す
73-342
- 2313 眸^メ^ガ訊ねる 36-100
- 2314 ベン^ガ書く 55-446
- 2315 隈どり^ガ(地図)を描く 48-10
- 2316 木目^ガ描く (慣)69-134
- 2317 心^ガ(模様)をえがく 72-230
- 2318 誘惑^ガ(模様)をえがく 72-230
- 2319 長刀^{ナギなた}^ガ(虹)をえがく 61-82
- 2320 光^リ^ガえがく 55-330
- 2321 煙^ガ(線)を描く (慣)62-168
- 2322 風^ガ(海)を描く 69-248
- 2323 小枝^ガ(網の目)を描く (慣)32-50
- 2324 ハゼ^ガ(楔形文字)を描く 76-229
- 2325 寝巻^ガ(肉体)をえがきだす 55-86
- 2326 風^ガ(姿)を描き出す 31-81
- 2327 溝^ガ(音声)かなでる 73-329
- 2328 匂い^ガ(余韻)かなでる 35-351
- 2329 時計^ガ(音楽)を奏する (慣)40-265
- 2330 顔^ガ腫をつく 73-207
- 2331 (鳥の子)餅^ガ(心のきものを)着る 35-228
- 2332 丘^ガ(着物)を着る 31-95
- 2333 樹^ガ(葉)を着ける (慣)31-66
- 2334 あわれさが^ガ(偷)捕える 50-96
- 2335 頼りなさ^ガ捉える 32-54
- 2336 孤独感^ガ捉える (慣)46-313受
- 2337 寂寥感^ガ捉える (慣)72-429受
- 2338 睡気^ガ(私)をとらえる 62-304
- 2339 気持^ガ捉える (慣)52-162, 72-429受(孤独
な一)
- 2340 恐怖^ガ(全身)を捉える (慣)32-36
- 2341 欲望^ガをとらえる (慣)55-385受
- 2342 失望^ガ捕える (慣)50-62受
- 2343 思い^ガ(彼)を捕える (慣)41-140
- 2344 脅迫観念^ガ捉える 64-53受
- 2345 言葉^ガ捉える 64-69受
- 2346 痙攣^ガをとらえる (慣)73-319受
- 2347 孤独感^ガ捉える (慣)49-80受
- 2348 感覚^ガ捉える (慣)72-422受
- 2349 錯覚^ガをとらえる (慣)73-192受, 224受
- 2350 気持^ガ捉える (慣)72-415受
- 2351 悲哀^ガ捉える (慣)49-46受
- 2352 (全身)を激怒^ガをとらえる 55-95受
- 2353 思い^ガ囚える (慣)36-51受(憶い)46-180受
- 2354 憶い出^ガ(頭)を捉える 36-107受

- 2355 船ガ(波を)蹴立てる 價69-161
- 2356 悲しみガつかむ 55-92受
- 2357 不安ガ掴む 49-26受
- 2358 咳ガ(体を)揉む 36-99
- 2359 咳嗽ガ(体を)押し揉む 36-96
- 2360 仮面ガ(指で)なでる 73-271
- 2361 ほとぼりガ(頬を)なでる 35-295
- 2362 嫉妬ガ(胸を)噛む 49-49
- 2363 後悔ガ(胸を)咬む (價)74-72
- 2364 浪ガ(岩を)噛む 價50-65順
- 2365 海と山ガ咬み合う 31-55
- 2366 火ガ(壁を)舐める 價68-90受
- 2367 炎ガ舐める 價31-101(薪を), 73-293(壁を)
- 2368 立場ガ悲鳴を洩らす 64-66順
- 2369 梢ガ(けむりを)吸う (價)55-300受
- 2370 ことガする (價)40-265(憂鬱に), 268(2回)
(孤独に)・(下手に), 368(2回)(平凡に)・(年寄り
臭く), 72-172(近しく)
- 2371 世情ガ(重苦しく)する 41-125
- 2372 混乱ガ(明子でなく)する 49-62
- 2373 春ガ(孤独に)する 31-55
- 2374 悲しみガ(明子でなく)する 49-62
- 2375 金閣ガする 69-224(隔てようと), 285(不
安でいっぱい)
- 2376 都会ガ(鋭敏に)する 31-55
- 2377 街ガ(快活に)する 41-163
- 2378 酔いガ(暗く)する 72-265
- 2379 気持ガ(かたくなに)する 73-204
- 2380 不満ガする (價)46-334(…に), 69-176
(体を熱く)
- 2381 愛情ガ(偉く)する 46-297
- 2382 嫉視^{とろこ}ガ(虚に)する 69-252
- 2383 恋ガ(のろまをすばやく)する 42-112
- 2384 自覚ガする 46-339(愉快に), 339(爽やかに)
- 2385 物語ガ(重苦しく)する 41-125
- 2386 歴史ガ(昔の)顔をする 35-317
- 2387 別れガ(清く)する (價)50-346
- 2388 スプリングガ私のかわりをする 55-92
- 2389 仮面ガ(聞こ)うとする 73-319
- 2390 船ガ(そしらぬ顔)をする 69-139
- 2391 影ガ(暗く)する 價41-114
- 2392 寒波ガ(おうちやくものに)する (價)55-35
- 2393 山ガ(氣むずかしい)顔をする 35-267
- 2394 眺めガ(心を悲しく)する (價)72-298
- 2395 風景ガ(の)ものにする 73-198
- 2396 太股ガあくびをする 73-307
- 2397 肉ガ(…をもって)する 69-265
- 2398 皮膚ガ(憂鬱に)する 價41-164
- 2399 涙ガ汗のかわりをする 73-288
- 2400 何かさせる 價48-10, 55-328(そう), 64-
60(ビクビク)
- 2401 何かガ(いたたまらず)させる 36-211
- 2402 ことガ(気持ちに)させる 46-344
- 2403 (運命の)趨勢ガ(そう)させる (價)46-338
- 2404 日附ガ(はつきり)させる 62-78
- 2405 悲しさが(身悶え)させる 46-309
- 2406 口惜しさが(身悶え)させる 46-309
- 2407 死者ガ(脈を回転)させる 76-349
- 2408 (マロエの)都ガ(復讐)させる 46-300順
- 2409 痛みガさせる 50-106
- 2410 酔いガ(そう)させる 價55-210
- 2411 憶いガさせる 52-146
- 2412 喜びガ(感傷を)させる (價)52-120順
- 2413 悲しみガ(大人に)させる 55-71
- 2414 信頼ガ(安心)させる 72-410
- 2415 争奪欲ガ(そう)させる 價55-340
- 2416 自覚ガ(絶望)させる 48-18
- 2417 たくらみガ(ぎょっと)させる (價)36-215
- 2418 お膳立ガ(憂鬱に)させる (價)73-190
- 2419 会話ガ(混乱)させる 價55-336

350 3. 分類結果

- 2420 生活カ(満足)させる (慣)72-381
- 2421 副業カ(生き生きと)させる (慣)40-260
- 2422 副業カしからしめる (慣)40-260
- 2423 品物カ(遺憾)さす 36-64
- 2424 バスカ(乗り降り)させる 46-293
- 2425 味カさせる 62-137
- 2426 (東風)風カ(星を明滅)させる 46-325順
- 2427 死カ(ほっと)させる (慣)52-151
- 2428 死カ(一変)させる (慣)68-104
- 2429 アデノイドカさせる(わざ) 46-368
- 2430 真面目カ(悲しく)させる (慣)62-291
- 2431 醜カ奇蹟を行う 37-313
- 2432 ぼくと仮面カ霧ガり合いを演じる 73-282
- 2433 ・ペン字カ感慨を催す (慣)72-309
- 2434 現実カ待つ 69-128順
- 2435 悲しみカ(そこに)待つ 55-92
- 2436 行為カ(始動)待つ 69-289
- 2437 (春の)外気カ(大手をひろげて)待つ 63-345
- 2438 死カ待つ (慣)72-257
- 2439 死カ待ち受ける (慣)72-231
- 2440 名所旧蹟カ(旅人を)誘う (慣)72-199順
- 2441 魂カ誘う 72-221受
- 2442 媚カ誘う 50-270
- 2443 静かさカ誘いこむ 62-143
- 2444 夢カさそいこむ 55-303
- 2445 菊カ誘う 69-228受
- 2446 樽カ誘う 69-247
- 2447 鞭カ見舞う 慣68-46
- 2448 不幸カみまう 慣55-135受
- 2449 仮面カとりもつ 73-280順
- 2450 足ざわりカいざなう 62-177
- 2451 仮面カ裏切る 73-348受
- 2452 生理カ(自分を)裏切る 55-96
- 2453 指カ(髪を)求める 72-297
- 2454 肉カ懇うえる 69-223順
- 2455 心カせがむ 31-56
- 2456 金閣カ(私を)受け入れる 69-208
- 2457 魔力カ(抵抗を)許す 52-159順・否
- 2458 金閣カ(酩酊・忘我を)許す 69-227
- 2459 自覚カ(行為を)許す 52-157
- 2460 仮面カ受け流す 73-272
- 2461 心と心カ争う (慣)62-362
- 2462 うしろすがたカ襲う 73-469
- 2463 寂しさカおそう 慣72-384受
- 2464 愛感カ襲う 46-338受
- 2465 冬来カ襲う 35-291
- 2466 嘔吐感カ襲う 慣73-339受
- 2467 孤独感カおそう 慣73-312受
- 2468 寂莫感カ襲う (慣)73-235受, 236順
- 2469 痛みカ襲う (慣)32-38, 42受, 55-279
- 2470 衝動カ襲う (慣)55-364受, 62-309受
- 2471 睡気カ襲う 慣48-10
- 2472 睡りカおそう 慣35-184受, 55-92
- 2473 夢カ襲う (慣)32-18受
- 2474 気分カ襲う 慣32-19受, 64-51受, 68-48受
- 2475 恐怖カ襲う 慣68-14受(2回)
- 2476 苛立ちカ襲う 慣73-339受
- 2477 狼狽カ襲う (慣)73-320受
- 2478 嫌悪カ襲う 慣62-327受
- 2479 後悔カ襲う 慣41-124受, 73-241受
- 2480 強迫観念カおそう 慣73-240受
- 2481 幻想カ襲う (慣)68-86受
- 2482 従順カ(妻を)襲う 73-459
- 2483 こだまカおそう 62-178
- 2484 めまいカ襲う (慣)73-255受
- 2485 憂鬱カ襲う 慣32-35受, 35-327(身边を)
- 2486 無意味カ襲う 68-46受
- 2487 静寂カおそう 73-254受
- 2488 光カ越権行為をおかす 73-236
- 2489 美カ(自分を)護る 69-142

- 2490 金閣ガ(私を)護る 69-224
- 2491 音ガ(頬を)避ける 48-7
- 2492 戦いガ死活を司る (慣)40-273
- 2493 仮面ガ狩人をもって認ずる 73-294順
- 2494 雲ガ(背さを)ひきたてる 55-355
- 2495 ことガ教える 72-266
- 2496 光ガ教える 73-277
- 2497 肉体ガ(ねばりつよさを)教える 55-491
- 2498 生理ガ(知恵を)おしえる 55-114
- 2499 性欲観ガ(ぼくを)導く 73-296受
- 2500 綱ガ導く (慣)40-259
- 2501 闇ガ導く 69-291
- 2502 写象ガ導く 72-172
- 2503 原稿ガ養う 33-15順
- 2504 ことガ救う (慣)40-266
- 2505 金閣ガ救う 69-224
- 2506 足音ガ救う 32-21
- 2507 仮面ガ手伝う 73-295使
- 2508 怒りガ(はげ口を)求める 49-19
- 2509 せせらぎガ(解愁の海を)求める 72-284
- 2510 幻ガ勝を制する 69-127
- 2511 「まあまあ」ガ制する 50-280
- 2512 気持ガ(辛抱を)強いる 36-101
- 2513 財布ガ強いる 50-310
- 2514 手ガ強いる 55-96
- 2515 美ガ身を委せる 69-218
- 2516 虚無ガ(白ま)せる 50-42
- 2517 (鑑賞的)要素ガ(向わ)せる 73-276
- 2518 上背(の高さ)ガ(胸を反ら)せる 50-316
- 2519 夜店ガ(くねら)せる 46-328順
- 2520 潔癖感ガ(口をつぐま)せる 73-187
- 2521 気持ガ(微笑ま)せる 36-215
- 2522 恐怖ガ(立ち上がら)せる 31-103
- 2523 悲しみガ(唇をわななか)せる 72-234
- 2524 不安ガ(買わ)せる 69-280
- 2525 憧憬ガ(思い込ま)せる 46-300
- 2526 嫉妬ガ(思い出さ)せる 73-283
- 2527 執着ガ(唇をわななか)せる 72-234
- 2528 絶望ガ…せる 46-300(死を選まー), 300
(言わー)
- 2529 意志ガ(選ば)せる 72-274
- 2530 考えガ…せる (慣)42-176(立たー), 69-
155(酔わー), 73-203(まごつかー)
- 2531 行為(そのもの)ガ(こたわら)せる 73-310
- 2532 焼肉ガ(立ち寄ら)せる 73-259
- 2533 ジンガ(酔わ)せる 55-90
- 2534 電車ガ(レールを軋ま)せる (慣)64-229
- 2535 日射しガ(睡気を催さ)せる 慣72-202
- 2536 水ガ(舞か)せる 72-366
- 2537 眺めガ(興がら)せる 36-213
- 2538 眺望ガ(疑わ)せる 69-171
- 2539 おののきガ(凍りつか)せる 73-333
- 2540 空虚ガ(弾ま)せる 46-354順
- 2541 部屋ガ(臭いをただよわ)せる (慣)73-179順
- 2542 死体ガ(思い出さ)せ(てくれる) (慣)73-312
- 2543 何かガす 50-396(踏みとどまらー), 72-
297(ためらわー)
- 2544 話しぶりガ(怖気づか)す 69-149
- 2545 昂ぶりガ(猛ら)す 49-77
- 2546 冬来ガ(氷ら)す 35-291
- 2547 明るさガ(沁み渡ら)す 68-6
- 2548 ゆめガ(沈みきら)す 35-445
- 2549 記憶ガ(よるめか)す 72-235
- 2550 憶い出ガ(顔笑ま)す 36-91
- 2551 視線ガ(ひるま)す 62-82
- 2552 文句ガ(泣か)す 48-19
- 2553 壁ガ(ただよわ)す 76-239
- 2554 電車ガ(レールをきしま)す 64-238
- 2555 陽ざしガ(ふくらま)す 50-126
- 2556 音ガ(空気を傾わ)す 72-214

352 3. 分類結果

- 2557 節ガ(立筋ら)す 50-392順
 2558 雲ガ(雪を降ら)す 價68-72
 2559 西日ガ(反射をゆらめか)す 69-141
 2560 樹ガ(蕾をふくらま)す 價72-196
 2561 山ガ(女をわすれ)さす (價)55-384
 2562 ことガ(うろたえ)させる (價)55-101
 2563 ことガ(貫禄をつけ)させる 55-129
 2564 街ガ(疲れ)させる 73-203
 2565 感覚ガ(飽き)させる 72-247
 2566 気持ガ(計画をたて)させる 46-305
 2567 無愛想ガ(考え)させる 36-55
 2568 記憶ガ(感じ)させる 73-463
 2569 バスガ(立て)させる 46-293
 2570 憂鬱ガ(感じ)させる 68-98
 2571 感情ガ促す 72-266
 2572 光ガ(時の進行を)うながす 73-236
 2573 仕事ガ見放す (價)35-237
 2574 目ガとがめる (價)55-6
 2575 言葉ガとつちめる 35-236
 2576 形態ガ縛しめる 69-155受
 2577 観念ガ(私を)縛しめる 69-242順
 2578 (雨の)音ガ思いをそそる 價64-238
 2579 怠惰ガごちゃまかす 32-48
 2580 感覚ガたぶらかす 46-327受
 2581 生理ガなだめる 55-96
 2582 仮面ガなだめすかす 73-301
 2583 樹ガいたわる 46-354順
 2584 悲しみガ(肉体を)苛めつける 50-99
 2585 後悔ガさいなむ (價)73-203受
 2586 風ガ(私を)吹きなぶる 46-194受
 2587 仮面ガ嘲る 73-335受
 2588 憎しみガ力をもつ 32-16
 2589 友情ガ壁を持つ 72-221
 2590 部屋ガ(窓を)持つ 價33-18
 2591 芽ガいのちを持つ 46-291

- 2592 意志ガ勝ちをしめる 62-362
 2593 (意識の全領域を)恍惚感ガ占める 72-244
 2594 病氣ガ(娘を)とる (價)36-127受
 2595 結婚ガ(私から友達を)とり上げる 55-198
 順
 2596 一と言ガ(自信を)奪う (價)73-319
 2597 感情ガ(頭を)掠める (價)36-45
 2598 (頭を)追憶ガ掠める (價)36-67
 2599 考えガ(頭の半面を)掠める (價)36-48
 2600 偶然ガ(差を)さらう 63-362順
 2601 茫漠性ガ害を与える 46-359
 2602 空想ガ衝撃を与える 73-278
 2603 ものガ…てくれる 價35-175否
 2604 悔恨ガ…てくれる 69-235否
 2605 頭ガうけとる (價)36-131
 2606 広告ガ賑はす 34-148
 2607 ライトガ(線を)織る 50-338
 2608 脆さガ(加害者に)仕立て上げる 73-222
 2609 (顔を)光リガ洗う 69-134受
 2610 (脚柱を)波ガ洗う 價72-230
 2611 (手を)波ガ洗う 價72-240
 2612 涙ガ洗う 價50-45受
 2613 (池の)月かげガ(池の面を)掃く 69-212
 2614 渦ガ(縮目を)飾る 72-195順
 2615 疾病ガ爪を磨ぐ 72-231
 2616 風ガ塗りこめる 76-39
 2617 雪ガ(全身を)塗る 35-297受
 2618 眼つきガ射る 35-384受
 2619 コップガ(目を)射る 31-131
 2620 光リガ射抜く 37-313受
 2621 手紙ガ撃つ (價)46-333受
 2622 靴ガ気をつかう 55-452
 2623 ことガ(私を)つくる 55-485
 2624 跡ガ血まめをつくる 73-247
 2625 線ガ(傾斜を)つくる (價)55-404

- 2626 人生ガ臨碑をつくる 62-365
 2627 樹木ガ(影を)つくる 慣55-479
 2628 (義満)像ガ目をカカガヤカカす (慣)69-291
 2629 手紙ガ(姿を)映し出す 40-267
 2630 口紅ガ(口を)染める 慣62-105
 2631 光ガ染める (慣)49-50
 2632 影ガ染めわける 41-112
 2633 潔癖ガ(母子情を)汚濁する 46-353
 2634 心ガ(音色を)鳴らす 73-318
 2635 風ガ鳴らす (慣)62-315(枯草を), 72-347

(窓を)

- 2636 不安ガ絃をひびかせる 72-245
 2637 愛ガ絃をひびかせる 72-248
 2638 世界ガ装いをこらす 73-254
 2639 光ガ濡らす 62-347
 2640 雪(のかたまり)ガ濡らす 41-114
 2641 想念ガ照らす 69-249
 2642 明知ガ照し出す (慣)72-221順
 2643 おねえさんが吹きまわす(風) 50-362
 2644 風ガ(霧雲を)吹きおろす 慣62-349
 2645 毒ガ息を吹き返す 73-301
 2646 夕陽ガ(山肌を)焼く 72-312
 2647 仮面ガ(枝葉を)繁らせる 73-318
 2648 一本(木)ガ(枝葉を)繁らす 慣52-120
 2649 気持ガ(人)を生かす 72-180
 2650 記憶ガ(悪根を)育てる 62-344
 2651 苦しみガ(僕を)殺す 72-231
 2652 貧乏ガ殺す 40-264
 2653 登攀ガ癒やす (慣)69-171

〔名カラ他〕

- 2654 体カラ信号を出す 73-325順
 2655 心の底カラゆすぶる 慣55-468
 2656 わがままカラつれだす 55-230
 2657 人生カラ隔てる 69-224
 2658 運命カラ射ぐ (慣)40-270

- 2659 同棲カラ振ぎはずす 46-294

〔名デ他〕

- 2660 胸(のすみ)デ非難する (慣)55-179
 2661 蛭の巣デ肉づけする 73-228受
 2662 放任デ拷問する 69-230
 2663 心(のなか)デ言葉を繰り返す 慣68-42
 2664 胸(のなか)デことばをくりかえす 慣55-16
 2665 心の抵抗デ滑りを止める 63-24
 2666 人間くささデうずめる 55-120
 2667 空気デ埋める 49-51
 2668 心デ追う (慣)64-242
 2669 眼デ追う 慣46-326, 62-128
 2670 胸(の底)デ悲鳴をあげる (慣)55-154
 2671 悔いデ叩きのめす 49-63
 2672 胸(の中)デ溜息をつく 慣73-330
 2673 一言デ打ちのめす (慣)64-68受
 2674 文句デ充たす 慣40-267
 2675 眼の隅デ知る 41-147
 2676 鍵デ謎を解く 慣73-205順
 2677 目デたずねる 慣69-230
 2678 心(の中)デいう 慣68-103
 2679 胸デ言う 慣46-314
 2680 全身デきく (慣)55-75
 2681 頭の中デ描く 慣55-202
 2682 胸の中デ描く 慣55-78
 2683 鞭の下デ稼ぐ 46-297
 2684 視線デ捕える 慣49-42
 2685 感情デ(身体を)もむ 49-76
 2686 心デ噛みにじる 46-314
 2687 全身デ待つ (慣)55-216
 2688 内心デ手を打ち合わせる 慣73-316
 2689 からだデあやまる (慣)35-210
 2690 逸話デ飾りたてる (慣)50-275
 2691 心(の中)デ捏ねあげる 62-292
 2692 夕明りデ(眼を)射る 35-281

354 3. 分類結果

- 2693 人形ヲ政府をつくる 76-240
 2694 家を空気ヲこしらえる 49-51
 2695 堅固ヲならず 價73-354
 [名ト他]
 2696 軀ト会話を取りかわす 74-272
 2697 現実ト嘘りを戻す (價)73-328
 2698 問題ト顔をあわせる 55-326
 2699 悲劇ト顔をあわせる 55-95
 2700 仮面ト歩調を合わせる 73-319
 2701 生唾ト(一緒に)ドアを開ける 73-344
 2702 悲劇ト顔をつきあわす 55-92
 2703 死ト見つめ合う 68-15
 2704 微笑ト(ともに)ながめる (價)52-154
 [名=他]
 2705 感情=翻訳する 69-179
 2706 心=宣言する (價)55-448
 2707 自身=注文する 46-358名
 2708 弱やかなもの=覆い包む 46-355
 2709 (家を)疲労(の色)=包む 74-50受
 2710 おそろしき=さらす 55-9受
 2711 視線=針をかくす 73-203受
 2712 心=陰影を残す (價)49-68
 2713 人生=足跡を残す 72-233
 2714 気持ち=取り残す (價)46-330受
 2715 事実の上=手綱を引き締める 46-316
 2716 心=繰り返す 價68-61(ことばを), 115(ことばを)(一のなか)
 2717 コンパスの脚を愛(の上)=立てる 73-329
 2718 やさしき=耳を傾ける 73-251
 2719 面の皮=看板を下げる 73-264
 2720 好み=糸をたれる 73-239
 2721 他人(との間)=橋をかける 69-213順
 2722 二つの世界=股をかける 69-140
 2723 顔=鏡前を掛ける 73-348
 2724 温み(の中)=(指を)埋める 72-295

- 2725 静寂(のなか)=浸す 74-70受
 2726 段取り=漕ぎつける 價64-73
 2727 荒々しき=かり立てる 價49-93受
 2728 思想=引き入れる 價46-353受
 2729 空気=ひびを入れる (價)76-350
 2730 情景=活を入れる 46-324順
 2731 死者の世界=足を踏み入れる 76-361
 2732 (歌舞伎の)世界=ひきこむ 價55-159受
 2733 ねむり=ひきこむ 價55-486受, 64-229受
 2734 鬱陶しき(の中)=引きずり込む 49-71
 2735 胸(のなか)=投げこむ 55-383
 2736 事実(の前)=頭をさげる (價)55-476
 2737 顔=鑑戸を下ろす 73-348
 2738 逆境=突き落す 價40-270
 2739 悲哀=突き落す (價)49-62受
 2740 泥水稼業=沈める (價)50-16
 2741 暗がり=沈める 73-353
 2742 言葉(の中)=ちりばめる 64-233受
 2743 話=窓をあける 41-166
 2744 身分=鎖をつける 50-38
 2745 衿子=しるしをつける 55-499(一の中), 499(一の上)
 2746 心=傷をうける 價55-22順
 2747 痛ましき=軀を寄り添わす 74-281受
 2748 孤独=鞭を当てる 72-168
 2749 感情=とぐろを巻く 49-29
 2750 心=刻む 價46-197
 2751 心=刻み込む 73-245受
 2752 記憶=刻み込む (價)72-300
 2753 眸のおく=きざみこむ 55-426
 2754 心(の上)=きざみつける (價)55-375
 2755 妄想=とどめを刺す 73-281
 2756 夫婦の間=溝渠を穿つ 50-32
 2757 感情=引き戻す (價)73-312受
 2758 殺人=彩りを添える 73-303

- 2759 心(の中)＝(手のうごきを)感じる 價55-492
 2760 背中＝視線を感じる (價)72-250
 2761 いびき＝地盤を感じる 68-86
 2762 胸(のおくふかく)＝思いつづける 價55-322
 2763 心(の中)＝言葉をみつけ出す 價64-242
 2764 精神＝芽生えの穂先を見出す 63-18
 2765 考えの間＝頭をのぞける 40-270
 2766 靴＝(ものを)言わせる 價35-381
 2767 仮面＝別れを告げる 73-264
 2768 顔＝といかける 55-30
 2769 自分＝言い聞かせる 價62-148, 73-255, 330, 334
 2770 (最後の一言を)現実＝書く 72-300
 2771 心＝えがく 價55-96, 279, 64-243
 2772 心のまわり＝ピアノを弾く 35-274受
 2773 岸边＝吸い寄せる (價)72-307受
 2774 頑なさ＝唾液を吐きかける 50-53
 2775 気分＝誘う 價72-357受
 2776 笑い＝誘う 價46-363受
 2777 仮面＝(体散を)申し入れる 73-283
 2778 仮面＝蔓延を許す 73-297
 2779 仮説(の前)＝引き立てる 73-228受
 2780 憂鬱＝導く 32-21
 2781 自分＝いいつける (價)55-105
 2782 仮面＝命ずる 73-280
 2783 動揺＝身をまかせる (價)68-96
 2784 衝撃＝身を任せる 價52-162
 2785 根気＝まかせる 價62-76
 2786 誘惑＝身をまかせる (價)73-293
 2787 顔＝大任をまかせる 73-199
 2788 脚＝まかせる 價62-76
 2789 志向＝身をゆだねる 73-208
 2790 口＝(いわ)せる 55-280
 2791 芸術＝一身を捧げる 價32-55

- 2792 (初恋の芽を)胸＝植えつける 50-99
 2793 (酒で食物を)腹(の中)＝洗い流す (價)62-367
 2794 不安＝曝す (價)64-54受
 2795 空＝光の粉を掃く 72-218
 2796 物云い＝(顔を)飾る 50-261受
 2797 心(の中)＝紐をつかう 55-506
 2798 気もち＝折れ目をつくる 50-385
 2799 孤独(の廻り)＝壁をつくる 72-221
 2800 意味＝色づけする 62-343
 2801 方法＝てらす 價73-215
 2802 野心＝火を点ず 69-168

〔名へ他〕

- 2803 (発条が)未来へ弾き返す 69-290
 2804 掟破り(の方)へ駆り立てる 73-313
 2805 頭へ(ものを)ぶちこむ (價)50-405
 2806 心(のなか)へ石をなげこむ 55-389
 2807 心(の奥底)へおさえこむ 62-365
 2808 気分へ誘い込む 價46-303受
 2809 人生へ促す 69-193

〔名ヲ他〕

- 2810 人間ヲ廃業する 35-463
 2811 顔ヲ紛失する 73-348
 2812 文学ヲ性が構成する 46-353順
 2813 顔ヲ交換する 73-241名
 2814 私ヲ修正する 55-339受
 2815 夢ヲ恢復する 62-282
 2816 若さヲ中断する 55-250受・順
 2817 家(の中)ヲ運転する 37-308名
 2818 仮面ヲ試運転する 73-295名
 2819 (私語の)ぞめきヲ濫過する 69-197受
 2820 虚無ヲ造形する 69-224受・順
 2821 豪雨ヲ切断する (價)55-321受
 2822 文学ヲ粉碎する 35-237受
 2823 信用ヲ蓄積する 價46-364受

356 3. 分類結果

- 2824 食欲の型ヲ網羅する 73-230
- 2825 感情ヲ圧搾する 49-20受
- 2826 二十歳ヲ痛感する (償)55-99受
- 2827 肉ヲ軽蔑する 69-168受・順
- 2828 世界ヲ(薬品で)解決する 62-154
- 2829 声ヲ合算する 73-286
- 2830 女ヲ計量する 55-27名
- 2831 誠実ヲ計量する 55-285受
- 2832 (人間)関係ヲ御破算にする 73-296名
- 2833 事情ヲ打診する 償46-304
- 2834 好意ヲ用意する 55-165
- 2835 人生ヲ俯瞰する 31-80
- 2836 問題ヲ直視する 償73-280順
- 2837 笑いヲ擬装する 償50-124順
- 2838 感情ヲ卒業する 36-93
- 2839 感情ヲ反芻する 46-323
- 2840 問題ヲ反芻する (償)46-291
- 2841 言葉ヲ反芻する 償31-58
- 2842 生活ヲ演技する 55-15受
- 2843 ライターヲ攻撃する 76-256
- 2844 (頭の)働きヲ動員する 50-356受
- 2845 印象ヲ総動員する 73-243
- 2846 記憶ヲ総動員する 73-243
- 2847 会話ヲ総動員する 73-243
- 2848 うしろめたさヲ催促する 50-395
- 2849 線ヲ解放する 55-404受
- 2850 着物(ども)ヲ優待する 33-9受
- 2851 男ヲ獲得する 償40-265可
- 2852 気持ヲ占領する 62-363
- 2853 顔ヲ占領する 73-339
- 2854 想像力ヲ貯蔵する 73-284名
- 2855 自由ヲ貯蔵する 73-289名(2回), 302名
- 2856 自由ヲ消費する 73-289, 289名, 291名,
292名, 296名(2回), 302名, 304
- 2857 愛欲ヲ浪費する 40-267
- 2858 風ヲ(野の上に)浪費する 69-248受
- 2859 生命ヲ浪費する (償)73-353名
- 2860 感情ヲ現金払い(に)する 46-323
- 2861 共産主義ヲ輸入する 74-459受
- 2862 孝行ヲ押し売りする 償55-170名
- 2863 治療ヲ押し売りする 73-198名
- 2864 お小言ヲ頂戴する 償34-147
- 2865 自由ヲ節約する 73-291名, 73-294名
- 2866 緑色ヲ収穫する 31-96
- 2867 おまえヲ捕獲する 73-324
- 2868 虚無ヲ構築する 69-224受・順
- 2869 女ヲ料理する (償)35-441
- 2870 男ヲ料理する (償)35-354
- 2871 自由ヲ料理する 73-290
- 2872 世界ヲ清掃する 69-197
- 2873 微笑ヲ(片頬に)装飾する 46-319
- 2874 心ヲ操作する 55-17名
- 2875 虚勢ヲ收拾する 62-372
- 2876 酔いヲ充電する 73-355受
- 2877 自信ヲ充電する 73-355受
- 2878 精神ヲ投射する 62-366
- 2879 ひびきヲ反射する 62-347
- 2880 気持ヲ固定する (償)72-253
- 2881 情熱ヲ漂白する 63-17受
- 2882 自己ヲ燃焼する 72-175
- 2883 (冬の)色ヲ冷却する 62-253順
- 2884 (若い)血ヲ虐殺する 55-302名
- 2885 苦悩ヲ吸収する 73-318
- 2886 警戒色ヲ身につける 73-311
- 2887 (私から)醜さヲ脱ぎ去る 69-272受
- 2888 (私から)貧しさヲ脱ぎ去る 69-272受
- 2889 (私から)吃りヲ脱ぎ去る 69-272受
- 2890 自分ヲ脱ぎ捨てる 48-13
- 2891 嬉しさヲつつむ 償33-12
- 2892 微笑ヲ口に含む (償)72-173

- 2893 悪足掻きヲ包み込む 73-322
- 2894 事実ヲ蔽う 價64-58
- 2895 肉性ヲ蔽い包む 62-307受・順
- 2896 (顔に)責任ヲかぶせる (價)73-206
- 2897 雑用ヲかぶせる (價)50-260受
- 2898 月ヲ浴びる (價)63-353
- 2899 (殺し)文句ヲ浴びせる 價64-65
- 2900 小言ヲ浴びせる (價)64-71
- 2901 非難ヲあびせる 價73-235受
- 2902 問題ヲ吹きかける (價)52-150
- 2903 恋愛ヲ(女に)投げかける 46-321
- 2904 讃辞ヲ投げかける 價46-292
- 2905 感覚ヲ振りがざす (價)41-165
- 2906 正義ヲ振り翳す 價34-132
- 2907 芸術ヲ振りがざす 46-296
- 2908 悩みヲ担う (價)46-319順・否
- 2909 罪業ヲ担う (價)64-74
- 2910 悲劇ヲ背負う 40-266
- 2911 問題ヲ背負い込む 價73-356
- 2912 満足ヲ抱きしめる 64-58
- 2913 言葉ヲ挟む 價46-350
- 2914 (挨拶に)驚きヲまじえる 價73-329
- 2915 嘘と誠ヲこきまぜる (價)33-13
- 2916 死ヲ控える 價68-39(眼の前に), 84
- 2917 苦勞ヲ生で出す 46-364
- 2918 破滅ヲ隠す 69-156
- 2919 抗議ヲかくす 55-383受
- 2920 気持ヲ押しかくす 價52-119
- 2921 いつわりヲかくし持つ 73-454
- 2922 顔立ヲ仕上げる 55-5受
- 2923 夢ヲつくりあげる 72-251
- 2924 愛嬌ヲ(手古盛りに)盛り返す 14-395
- 2925 心ヲ残す 價33-24
- 2926 薄笑いヲ残す (價)73-179
- 2927 心構えヲなくす 價40-270
- 2928 落ちつきヲ失う 價40-270
- 2929 笑いヲ失う 價68-108
- 2930 贅沢ヲ喪う 62-273
- 2931 酔い(の残り)ヲ掻き落す 73-308
- 2932 夫ヲ食いつくす 50-26
- 2933 青春ヲ使いはたす (價)55-227
- 2934 姿ヲ消す 價28-458
- 2935 夢ヲ(えがいて)消す 72-232
- 2936 笑いヲ消す (價)49-48
- 2937 事実ヲ消し去る 價68-89
- 2938 恐怖ヲ掻き消す 價72-192受
- 2939 唸るのヲ掻き消す (價)40-276受
- 2940 にじみヲ吹き消す 73-230受
- 2941 人間臭ヲはらいおとす 55-450
- 2942 距離ヲ調子取る 46-330
- 2943 母性ヲ奪る (價)72-382受
- 2944 張りヲ捨てる (價)52-133
- 2945 神ヲ棄てる 價72-274
- 2946 男ヲ捨てる 價46-317
- 2947 女ヲ捨てる 價33-8, 46-188
- 2948 家庭ヲすてる 價55-212
- 2949 夢ヲすてる 價55-267
- 2950 ひがみヲ捨てる 價46-308
- 2951 誇りヲすてる 價62-124
- 2952 特権ヲ捨てる 價62-125
- 2953 手足ヲ捨てる 36-90
- 2954 手ヲすてる 55-493受
- 2955 妻の座^{いつてき}ヲ一擲する (價)55-156
- 2956 つつましき^{いつてき}ヲかなぐりすてる (價)55-497
- 2957 (魂の)平和ヲ(地に)投げうつ (價)72-312
- 2958 大人らしきヲ掻き乱す (價)46-314
- 2959 心ヲ引き締める 價46-326
- 2960 心ヲしめつける (價)55-71
- 2961 世界ヲ(底辺で)引きしぼる 69-130

358 3. 分類結果

- 2962 衤子ヲかきたてる (償)55-494受・順
 2963 競争意識ヲ掻き立てる 償40-265受
 2964 衝動ヲ掻き立てる 償73-248
 2965 闘志ヲかき立てる 償52-136
 2966 血ヲかきたてる 償55-66受
 2967 血潮ヲかきたてる 償55-125受・順
 2968 顔ヲすりかえる 55-121
 2969 土地ヲ(地理に)置き換える 46-308
 2970 おのれヲ建てなおす (償)55-93
 2971 心ヲたてなおす (償)55-412
 2972 (第一)外科ヲたてなおす (償)72-423
 2973 話ヲしましう 33-38
 2974 人間ヲ磨める 35-463
 2975 眼ヲ片付ける 35-388, 389(どこに)
 2976 ねかいいくりかえす (償)55-477受
 2977 感情ヲ揺する (償)49-20受・順
 2978 弁舌ヲ振う 償40-260
 2979 理屈ヲ振りまわす 償73-289
 2980 特権ヲふりまわす 償62-140
 2981 氣ヲ回す 償64-61
 2982 言葉ヲとどめる (償)72-281
 2983 つながりヲ取りとめる 46-301
 2984 生命ヲ取りとめる 償40-275
 2985 感情ヲ立てる 49-80
 2986 生活ヲ立てる 償68-13
 2987 聞き耳ヲ立てる 償34-128
 2988 腹ヲ立てる 償34-125, 137, 37-323, 324
 52-127, 128, 150, 73-252(2回)
 2989 向ッ腹ヲ立てる 償52-135, 145, 148
 2990 部屋ヲ起す (償)40-262
 2991 眼ヲ起す (償)72-290
 2992 眼ヲ伏せる 償46-185
 2993 笑いヲねじ伏せる 68-53
 2994 記憶ヲねじ伏せる 73-444
 2995 概念ヲねじふせる 55-338
 2996 前言ヲひるがえす 償73-236
 2997 男ヲすえる 35-354
 2998 時代ヲ(いつに)置く (償)46-367
 2999 感情ヲ置く 37-314名
 3000 自由ヲ(鼻先に)おく (償)73-290受・順
 3001 (廻りに)孤独ヲ置く 72-172
 3002 顔ヲぶら下げる 73-202
 3003 (国外が)ハルトマンヲさげる 41-146
 3004 柁^{てがせ}ヲ心にかける 50-40
 3005 酒ヲ引ッ掛ける 償64-79
 3006 (年齢の)相逢ヲうずめる (償)55-269
 3007 悲しきヲうずめる 55-498
 3008 正義感ヲ(土に)埋める 69-180
 3009 空虚感ヲうずめる 償55-334
 3010 苦悩ヲうずめる 55-498
 3011 うらみヲうずめる 55-498
 3012 顎ヲ埋める 償46-293
 3013 孤独ヲ埋める 償73-222
 3014 屁理屈ヲ(アルコールに)ひたす 73-289
 名・順
 3015 ことばヲ投げる 償55-385, 387
 3016 非難ヲ投げる (償)55-190順
 3017 眼つきヲ投げる 41-110
 3018 眼差ヲなげる 償55-54
 3019 視線ヲ投げる (償)41-110, 55-113
 3020 目くばせヲ投げる (償)69-203
 3021 目ヲなげる 償55-208, 500, 69-208(白い一)
 3022 言葉ヲ投げ合う (償)41-165名(2回), 165順
 3023 自分ヲ抛り投げる 72-257
 3024 孤独ヲ抛り投げる 72-293
 3025 言葉ヲ放つ 償64-68順
 3026 瞳ヲ放つ 償46-338
 3027 半眼ヲ(中空に)はなつ 償74-14
 3028 眼ヲ(八方に)向け放つ (償)46-318
 3029 身ヲ投じる 償52-164

- 3030 言葉ヲ投げかける 慣72-422
- 3031 自分ヲなげだす 慣55-447, 478, 483
(2回), 486
- 3032 気持ヲ(他人の上に)移す 慣46-305
- 3033 眼ヲ移す 慣46-304
- 3034 本心ヲわきにのける 55-175
- 3035 思いヲわきにのける (慣)55-295
- 3036 考えヲわきにのける (慣)55-221
- 3037 衝動ヲ手渡す 73-446受・順
- 3038 いつわりヲ手渡す 73-454
- 3039 話ヲ持って行く 慣33-23
- 3040 理屈ヲ運んで行く 14-396
- 3041 責任感ヲ(子に)送る 46-357受
- 3042 目礼ヲ送る 慣28-453
- 3043 哀憐ヲ(子に)送る 46-357受
- 3044 死ヲおくる 慣55-243(2回), 293
- 3045 忿満ヲ飛ばす (慣)46-332
- 3046 冗談ヲ吹き飛ばす (慣)35-241
- 3047 寂莫感ヲはらいのける (慣)73-236
- 3048 印象ヲ払いのける (慣)62-262
- 3049 苦悩ヲはらいのける 55-497
- 3050 嘘ヲはねのける 50-34
- 3051 ごまかしヲはねのける 50-34
- 3052 自分自身(というもの)ヲつっぱなす(慣)
55-331
- 3053 心持ヲつっぱなす (慣)55-298
- 3054 心ヲはずませる 慣73-254
- 3055 舌ヲはずませる 慣62-102
- 3056 ことヲ流す (慣)49-58
- 3057 何日かヲ流し去る 73-450
- 3058 陰ヲ流し去る 46-339
- 3059 疲れた身体ヲひきずる 68-91
- 3060 不満ヲ引き摺り出す 48-10受
- 3061 衝動ヲ持ってまわる 73-301(2回)
- 3062 実感ヲ消す 68-114順・否
- 3063 年月ヲ追う 慣55-292
- 3064 夢ヲ追う 慣55-267, 62-108
- 3065 言葉ヲ追う 62-152
- 3066 片づけ物ヲ追う 62-164
- 3067 襟ヲ追う 48-16
- 3068 後味ヲ追う (慣)72-259
- 3069 風景ヲ追う 慣62-91
- 3070 瞳ヲ追う 慣46-313
- 3071 金ヲ追いかける (慣)68-103(2回)
- 3072 (ここまでの)心ヲ追いつめる 55-426受
- 3073 金ヲ追い越す 68-103
- 3074 痕跡ヲ追い払う 74-271
- 3075 時間ヲ追い立てる 73-321
- 3076 機会ヲとり逃がす 慣68-77
- 3077 心ヲかよわす 慣55-97
- 3078 老朽無能ヲ斥ける 慣34-154
- 3079 若さヲもどす 55-250
- 3080 涙ヲ振り戻す 46-365
- 3081 青春ヲとりもどす (慣)62-141
- 3082 過去ヲとりもどす (慣)55-257
- 3083 自分ヲとり戻す 慣68-87
- 3084 愉快ヲ取り戻す (慣)46-302
- 3085 会話ヲ取り戻す (慣)73-238
- 3086 心ヲひきもどす (慣)55-330
- 3087 生命ヲ呼び戻す (慣)72-233
- 3088 誤解ヲ押し戻す 73-244
- 3089 案ヲおし返す (慣)73-335
- 3090 可能性ヲひきだす 慣55-285受
- 3091 心ヲひきだす 55-442可
- 3092 余裕ヲ採り出す (慣)46-336
- 3093 心理ヲ掘り出す (慣)37-321
- 3094 康太ヲはき出す 55-12受
- 3095 言葉ヲ吐き出す (慣)68-121受
- 3096 優しさヲ閉め出す 73-211
- 3097 息ヲ押し出す 48-10

360 3. 分類結果

- 3098 (自分から)嘘ヲ追いだす 73-454
- 3099 事件ヲ棚に入れる 50-361順
- 3100 話ヲ引っ込める 價61-49
- 3101 ことばヲ引っこめる 價64-74
- 3102 影ヲ(心臓に)打ち込む 64-66順
- 3103 自分ヲ殺に押し込む 46-354
- 3104 手法ヲロへほうり込む 50-315
- 3105 本能(のすべて)ヲ抱き込む 62-326
- 3106 日常性ヲ吸い込む 73-331
- 3107 女心ヲレコードに吹き込む (價)46-319
- 3108 神道ヲ吹き込む 價52-149
- 3109 音楽(の要素)ヲ流し込む 72-263可
- 3110 話題ヲ渦に巻きこむ 12-377受
- 3111 告白ヲたたみこむ 55-478受
- 3112 思いヲ織り込む 49-20
- 3113 (あの子が)秋風ヲおくりこむ 55-338
- 3114 好奇心ヲ(臉の下に)詰める 73-220
- 3115 闇ヲ(部屋へぎつしり)つめ込む 31-98受
- 3116 (床から)自分のからだヲ引抜く 50-369
- 3117 心痛ヲ洩らす (價)34-136
- 3118 微笑ヲ洩らす 價41-331, 68-93, 69-89
- 3119 口調ヲ洩らす (價)46-344
- 3120 精力ヲすいとる 價72-382
- 3121 吃りヲ漉し取る 69-153
- 3122 矛盾ヲ棚にあげる 價55-291
- 3123 対等ヲ釣り上げる 73-232
- 3124 声ヲおとす 價46-192
- 3125 視線ヲ落す 價46-304
- 3126 (軽氣球が)影ヲ落す 價40-259
- 3127 身ヲ落す 價28-465
- 3128 眼ヲ落す 價55-444, 462, 62-123, 68-20, 24, 28, 30, 38, 65, 82, 116
- 3129 身の上ヲ(谷底へ)つきおとす 46-156
- 3130 愚痴ヲこぼす 價52-127, 64-233
- 3131 同情ヲそそぐ 價55-416受
- 3132 愛ヲ注ぐ (價)64-79
- 3133 愛情ヲそそぐ 價55-443
- 3134 友情ヲ注ぐ (價)72-306
- 3135 表情ヲ(窓・壁・電燈・柱に)そそぐ (價)73-240
- 3136 思いヲ注ぐ (價)50-57受
- 3137 視線ヲそそぐ 價62-91受
- 3138 眼ヲ注ぐ 價55-420, 64-77(車道に), 237受
- 3139 ストリップヲ(自動車に)のせる 62-158
- 3140 表情ヲ浮べる 價73-332
- 3141 笑いヲうかべる 價50-80, 64-245, 68-16, 42, 43, 47, 52, 56 (2回), 57, 68, 78, 79, 82(2回), 120, 72-354
- 3142 愛想笑いヲうかべる 價68-47
- 3143 含み笑いヲ浮べる 價73-195
- 3144 作り笑いヲ浮べる 價73-250
- 3145 微笑ヲ浮べる 價46-326, 55-54, 127, 68-21, 22, 26, 30, 54, 104, 72-220, 350, 353, 359, 413, 73-216, 240
- 3146 薄笑いヲ浮べる 價73-333
- 3147 苦笑ヲ浮べる 價55-123, 306, 64-56, 72-407, 73-233, 268
- 3148 金ヲ浮かす 價72-380
- 3149 悦びヲ押し沈める 72-287
- 3150 悲しみヲ押し沈める 72-287
- 3151 顔ヲ解きほぐす 49-35受・順
- 3152 緊張ヲときほぐす 價55-235
- 3153 氣持ヲときほぐす 價55-371
- 3154 空気ヲほぐす (價)72-414
- 3155 物語ヲ(一本に)綴り合わせる (價)64-65
- 3156 家と家を縫いつなぐ 62-79
- 3157 村と町を縫いつなぐ 62-79
- 3158 感情ヲ形に纏める 46-322
- 3159 考え方ヲ(ぶんぶん)振りまく 64-74受
- 3160 色彩ヲばらまく 55-47
- 3161 星ヲばらまく (價)63-343受

- 3162 不満ヲぶちまける 價55-156
 3163 渦巻ヲまきちらす 62-366受
 3164 空世辞ヲ撒き散らす 28-460
 3165 運命ヲ頗ち合う (價)73-286
 3166 騒音ヲかき分ける 73-288
 3167 仕事ヲ切り放す 價35-237受
 3168 事実ヲちりばめる 52-130
 3169 時間ヲあける 價73-190
 3170 視野ヲ鎖す 價72-212受
 3171 心ヲ閉ざす 價32-41, 55-416
 3172 空ヲ閉ざす 73-339
 3173 日々ヲ閉ざす 73-324受
 3174 実感ヲつなぎとめる 62-352
 3175 命ヲ繋ぐ (價)50-303受・順
 3176 縋帯と質問ヲ結びつける 73-205
 3177 心ヲむすぶ 價55-479受
 3178 夢ヲむすぶ 價46-194
 3179 ロヲ結ぶ 價48-9順
 3180 印象ヲつづる 62-186
 3181 日夜ヲ重ねる 價64-58
 3182 年齢ヲ重ねる 價72-310
 3183 孤独と孤独ヲ重ね合わせる 72-229
 3184 記憶ヲ積み重ねる 價62-344受
 3185 人生ヲ積み重ねる 48-10順
 3186 商売ヲ積み重ねる 價62-77
 3187 闘ヲ積み重ねる 31-122
 3188 倅ヲ連れ出す 46-373
 3189 魂(の後)ヲつける 73-271
 3190 障壁ヲ巻きつける 62-301
 3191 表情ヲ(窓に)つきつける 55-95
 3192 罪業感ヲ寄せる 價64-74
 3193 魂ヲよせ合う (價)55-58
 3194 意味ヲよせつける 73-219否
 3195 かげロヲよせつける (價)55-172否
 3196 感情ヲたぐり寄す 49-74
 3197 記憶ヲたぐりよせる 74-45
 3198 眼ヲ離す 價46-305
 3199 情欲ヲ解き放つ 62-300
 3200 声ヲ振り切る (價)62-302
 3201 不平ヲならべる 價33-34
 3202 理屈ヲ並べる 價64-62
 3203 心ヲ打つ 價55-327受, 68-5
 3204 卑小さヲ鞭打つ 價73-326
 3205 精神ヲ鞭打つ 72-299
 3206 風ヲ鞭打つ 69-212
 3207 給料ヲはたく 價52-125
 3208 言葉ヲぶつつける (價)52-149, 72-320
 3209 台詞ヲぶつつける (價)73-314
 3210 嫌悪ヲたたきつける 55-326
 3211 嘲りヲたたきつける 55-326
 3212 言葉ヲ叩きつける 價72-293
 3213 雨ヲたたきつける 價55-323
 3214 心の尖^{とぎ}ヲおさえる 62-363
 3215 感情ヲ抑える 價72-266
 3216 要求ヲ圧える 價52-149
 3217 親愛ヲ押しつける (價)50-260
 3218 心ヲひく 價46-152
 3219 気ヲひく 價46-153
 3220 高笑いヲ(自分の方へ)引く 49-66
 3221 言葉ヲさえぎる 價64-233
 3222 気ヲ曲げる (價)62-83使
 3223 気持ヲ曲げる 價28-456
 3224 気持ヲゆがめる (價)62-139
 3225 性ヲゆがめる 價73-284受・順
 3226 拳動ヲ捻じ曲げる 62-344
 3227 波ヲ畳む 69-248受・順
 3228 コンプレックスヲ裏がえす (價)55-198
 3229 習慣ヲ裏がえす 55-504
 3230 声音ヲしぼる 價35-365受・順
 3231 (腹の底から)叫びヲ絞り出す 62-370順

362 3. 分類結果

- 3232 世界ヲ毀す 50-42受
 3233 夢ヲ壊す 償76-19
 3234 気分ヲこわす 償55-219受
 3235 悲しみヲ毀す 50-32受・順
 3236 日常ヲ打ち壊す 73-324
 3237 夢ヲ打ち毀す 償62-282受・順
 3238 宗教ヲ打ち壊す 46-360
 3239 (考えに耽る)ことヲ叩きこわす 35-355
 3240 (感傷)風景ヲ叩きこわす 35-185
 3241 潔癖ヲたたきこわす 76-241
 3242 怯懦ヲ叩きこわす 63-360
 3243 日ヲつぶす 償35-423受, 55-90
 3244 時間ヲ叩き潰す 35-286
 3245 期待ヲ叩きつぶす 55-235受
 3246 罪業感ヲ噛みつぶす 64-79
 3247 夢ヲふみにじる (償)55-152
 3248 嗜好ヲ踏みにじる (償)73-268
 3249 認識ヲ踏みにじる 69-224受
 3250 心ヲ(もみくち)に打ちくだく 償46-156
 3251 心持ヲ打ち砕く (償)36-55受・順
 3252 空想ヲ打ち砕く (償)36-55受
 3253 身ヲ(もみくち)に打ちくだく 償46-156
 3254 気構えヲくずす 償62-27
 3255 一生ヲ傷つける 償40-270受・否
 3256 生涯ヲ傷つける (償)72-403
 3257 心ヲ傷つける 償62-140, 64-63受
 3258 平和ヲ傷つける 72-308
 3259 悲しみヲ損う 50-32受・順
 3260 顔ヲほころばせる 償73-260
 3261 あなたヲ撈ぎとる 50-405
 3262 自由(の芽生え)ヲ挽ぎ取る 72-293受
 3263 静かさヲ破る 償41-127受
 3264 単調さヲやぶる 償55-193
 3265 予定ヲ破る 償40-268否
 3266 緊張ヲ叩き破る 35-433
 3267 言葉ヲ切る 償64-235, 241
 3268 ロヲ切る 償62-160
 3269 言葉ヲ切り捲くる 35-292順
 3270 関連ヲ絶ち切る 償73-234
 3271 苦悩ヲ断ち切る 償73-184
 3272 (自分から)過去ヲ切り落す 48-17
 3273 未来ヲ切り落す 48-17
 3274 考えヲ叩き斬る 35-403
 3275 心ヲ引き裂く (償)72-188, 73-186受
 3276 気持ヲ引き裂く 償73-480受
 3277 闇ヲ切り裂く 73-223
 3278 風景ヲ(力まかせに)切り裂く 73-198
 3279 時間ヲさく 償73-195
 3280 時間ヲ刻む 償72-275受
 3281 罪のしるしヲわが身に刻む 73-310
 3282 光リヲ彫り込む 69-146
 3283 生理ヲえぐる 72-382受(根こそぎ)(2回),
 386受, 390受(根こそぎ)
 3284 心(のすみ)ヲほじくる 55-447
 3285 二年間ヲほりかえす 55-132受
 3286 眼ヲ剝く 償72-174
 3287 夢ヲ剝ぐ 46-330受
 3288 痛手ヲ剝ぐ 35-204
 3289 偽善ヲ引き剝がす 73-331
 3290 人間のなものヲ(全身から)剝ぎとる
 74-77
 3291 夫ヲ剝ぎとる 50-34
 3292 (杏子から)はにかみヲ剝ぎとる 35-363
 3293 羞恥ヲはぎとる 55-485
 3294 うぬぼれヲはぎとる 55-485
 3295 家ヲ剝ぎとる 50-34
 3296 文句ヲ削る 償73-273
 3297 健康ヲけずり出す 62-84
 3298 肉体ヲすり減らす (償)49-84
 3299 神経ヲすり減らす (償)49-84

- 3300 精神ヲ滅らす (慣)36-105
- 3301 幸福ヲ充たす (慣)72-225受
- 3302 笑いヲ溜める (慣)50-100(類に), 104
- 3303 美ヲ湛える 慣31-94
- 3304 悲しみヲたたえる 慣55-410
- 3305 微笑ヲ湛える 慣46-363, 72-204, 73-330
- 3306 横着ヲ(唇に)たたえる 46-318
- 3307 覚悟ヲ(唇に)たたえる 46-318
- 3308 色ヲたたえる 慣55-494
- 3309 (東京)生活ヲ切り上げる 慣52-119
- 3310 存在ヲきりすてる 55-176
- 3311 夢ヲきりすてる 55-266
- 3312 自身ヲ切りつめる (慣)46-292
- 3313 苦しさヲ舞台にひろげる 55-398
- 3314 想像ヲ押しひろげる 73-338
- 3315 静寂ヲ繰りひろげる (慣)72-298
- 3316 心ヲ向ける 慣46-348, 68-30
- 3317 眼ヲ過去にむける (慣)72-192
- 3318 心ヲふりかえる (慣)55-326
- 3319 眼色ヲはずす 46-312
- 3320 声ヲとがらす 慣46-179
- 3321 時間ヲ眼に感じる 35-378
- 3322 けはいヲ肌を感じる 慣64-229受
- 3323 ながめられるのヲ顔に感じる 55-128
- 3324 鍵ヲ感じる 76-225
- 3325 官能ヲよびさます (慣)55-495受・順
- 3326 幻滅ヲ味わう 慣55-296
- 3327 瞬間ヲ味わう 慣55-122
- 3328 快さヲ味わう 慣46-356
- 3329 武蔵野ヲ味わう (慣)46-340
- 3330 心ヲ味わう (慣)55-201
- 3331 いたみヲ味わう (慣)55-277
- 3332 気持ヲ味わう (慣)55-22, 302
- 3333 気分ヲ味わう 慣28-458
- 3334 感情ヲ味わう (慣)55-329
- 3335 スリルヲ味わう (慣)55-284
- 3336 落着きヲ味わう (慣)62-100
- 3337 思いヲ味わう 慣55-202
- 3338 空想ヲ味わう (慣)73-223
- 3339 人生(の本もの)ヲ味わう (慣)46-334, 335, 335可
- 3340 放蕩ヲ味わう 慣55-461
- 3341 覇氣ヲもちあぐむ 46-298
- 3342 吹雪ヲ(相手に)怒る ※他動詞的 35-294
- 3343 墮ヲ落ち着ける 慣46-313
- 3344 (わか)心ヲなぐさめる 55-173
- 3345 声ヲ愛す (慣)62-307
- 3346 着物ヲ愛する 33-7順, 12順
- 3347 蒲団ヲ愛する 33-18順
- 3348 記憶ヲいつくしむ 73-312
- 3349 零歳ヲ見くびる 73-270
- 3350 からだヲあまやかす (慣)55-188
- 3351 耕ヲけむたがる 慣55-23
- 3352 人々ヲ吐き出す (慣)68-5受・順
- 3353 苦しみヲ待つ 72-424
- 3354 川ヲ習う (慣)75-253
- 3355 娘らしさヲわすれる 慣55-119
- 3356 若々しさヲ(どこかに)おきわすれる 55-109
- 3357 自分の女ヲ知る 55-385
- 3358 灯ヲ恋する (慣)62-83
- 3359 光ヲ恋しがる (慣)72-307
- 3360 感情ヲ見知る 慣55-333順・否
- 3361 表情ヲ汲みとる 慣49-76
- 3362 態度ヲかみ分ける 62-137
- 3363 労働ヲふるい分ける 慣73-303
- 3364 死ヲ選び取る (慣)72-192
- 3365 夜ヲ計る 69-284
- 3366 宮下ヲはかりにかける 62-163
- 3367 可能性ヲ節にかける 73-207

364 3. 分類結果

- 3368 ロヲ割る 價73-262使
- 3369 ためらいヲ目がける 73-315
- 3370 感情ヲ探る (價)49-74
- 3371 記憶ヲさぐる (價)73-242
- 3372 心ヲ見いだす 55-326
- 3373 秘密ヲ嗅ぎつける 價72-401受・否
- 3374 心の底ヲ量る 50-85 (價)85否
- 3375 顔ヲ秤ではかる 73-207順
- 3376 時ヲさばく (價)73-238
- 3377 未来ヲ見る (價)72-181
- 3378 (行の間に)心情ヲみる (價)62-266
- 3379 焦躁ヲ見る 72-212
- 3380 幸福ヲ見る 68-55
- 3381 呼吸づかいヲ見る 35-305受
- 3382 自由ヲ垣間見る 73-255
- 3383 解放感ヲ見なおす 73-328
- 3384 (自分の持っている)幼稚なものヲ眺める
46-359
- 3385 心ヲながめる (價)55-447
- 3386 感情ヲ眺める 49-36
- 3387 秘密ヲのぞく (價)55-17使・順・否
- 3388 未来ヲのぞく 55-68可・否
- 3389 心ヲのぞく 價55-27使・否(一の内奥),
156, 172, 177, 481使・否
- 3390 (肉体のかげに)心ヲくらます 52-159
- 3391 心の奥ヲきく 55-135
- 3392 無音ヲ聴く 69-166
- 3393 丸味ヲ聞き取る 46-302使
- 3394 作用ヲよぶ 價49-44
- 3395 心ヲ読む (價)62-257
- 3396 意図ヲ読む (價)73-349可
- 3397 意図ヲ読みちがえる 價73-228
- 3398 急所ヲ読みとる 價37-313
- 3399 秘密ヲ読みとる 價37-322
- 3400 (かれらの上に)将来ヲえがく (價)55-84
- 3401 夢ヲ描く 價48-10, 55-302, 72-232, 257
- 3402 幻ヲ描く 價69-287
- 3403 幻影ヲ(天井に)描く (價)48-10
- 3404 (キャンパスに)心ヲ描き出す(價)73-269
- 3405 気持ヲなぞる 73-310
- 3406 瞳ヲ働かす (價)46-302
- 3407 時ヲかせぐ 價73-287
- 3408 擬態ヲ鑑う 50-47順
- 3409 (悪い)ところヲ着せる (價)35-209
- 3410 (土の)匂いヲ身につける 76-251
- 3411 身の皮ヲ脱ぐ 50-330
- 3412 無頓着ヲよそおう 價46-294
- 3413 閉め出しヲ喰う 價62-267
- 3414 時間ヲくう 價73-342
- 3415 手法ヲ食う 50-315
- 3416 いのちヲ食う 46-368
- 3417 逆振じヲ食わせる 價35-282
- 3418 背負投げヲ食わす 價40-267
- 3419 おいてきぼりヲくらう 價55-333
- 3420 足どめヲくらう 價55-321
- 3421 罰ヲくらう 價55-416
- 3422 悲しさヲ眼に宿す 64-63
- 3423 …ことヲ葬る 價73-465
- 3424 時期ヲ葬る (價)55-331
- 3425 胸ヲ躍らす 價46-370
- 3426 身ヲおよがす (價)55-155
- 3427 手ヲおよがす (價)55-319
- 3428 世界ヲつかまえる 69-130
- 3429 自信ヲ捉まえる 64-64
- 3430 意志ヲつかまえる 73-444
- 3431 機会ヲ捉える 價46-350
- 3432 キツカケヲ捉える 價64-55
- 3433 気持ち(の頂上)ヲ捉える 64-53
- 3434 心ヲ捕える 價46-350, 55-305, 72-168
- 3435 精神ヲ捉える 64-72

- 3436 考えヲ捉える (慣)46-312受
 3437 言葉ヲ捉える 慣64-46
 3438 人生(の本もの)ヲ(飛びかかて)捉える
 46-335受
 3439 視線ヲとらえる 慣55-54
 3440 死ヲ(手の中に)捉える 74-82受
 3441 病氣ヲ生捕る 42-135
 3442 秘密ヲいだく 慣55-98
 3443 「はいね」ヲ抱く (慣)64-46
 3444 愉しさヲ抱く 慣52-156
 3445 懼れヲ抱く 慣52-156
 3446 親近感ヲ抱く 慣73-260
 3447 不潔感ヲ抱く 慣52-132
 3448 感じヲ抱く 慣64-47
 3449 嫌悪ヲ抱く 慣72-277
 3450 親しみヲ抱く 慣69-254
 3451 抱負ヲ懐く 慣34-139
 3452 希望ヲ懐く 慣34-139, 73-286使
 3453 興味ヲ抱く 慣73-219
 3454 関心ヲ抱く 慣73-219
 3455 幻想ヲ抱く 慣73-348
 3456 決心ヲ抱く 慣64-53
 3457 天地ヲ(懐に)抱く 31-120
 3458 ことヲ(胸に)だきしめる 55-327
 3459 観念ヲ抱きしめる 64-58順
 3460 文学ヲ抱きしめる 64-63
 3461 心ヲ抱きかかえる 50-49
 3462 場数ヲ踏む 慣46-321, 52-130
 3463 (言う)ことヲ蹴つ飛ばす 50-382
 3464 家庭ヲ蹴飛ばす (慣)64-63(2回)
 3465 文学ヲ蹴飛ばす 64-63
 3466 秘密ヲ握る 慣72-395受
 3467 途ヲ握る 49-71
 3468 真相ヲつかむ 慣64-73
 3469 機会ヲ掴む 慣28-460, 73-237可, 264可
 3470 キッカケヲ掴む 慣64-55
 3471 心ヲつかむ 慣55-255, 259, 503
 3472 信仰ヲ掴む 72-275可
 3473 芸術ヲ掴む 慣46-357
 3474 ミドリヲつむ 52-135
 3475 心ヲ撫でる 74-280
 3476 心ヲさかなで(に)する 55-256
 3477 空気をかかく 55-17
 3478 (眼の)柔しさを掻きむしる 35-171
 3479 家ヲ掻きむしる 49-88
 3480 髓ヲ掻き搦る 31-120
 3481 (方向へ)環境ヲ手繰る 46-309受
 3482 距離ヲたぐる 73-237
 3483 酔い(の残り)ヲしぼり出す 73-309
 3484 おかしさを(前歯で)噛む 46-320
 3485 信頼ヲ噛む 63-348
 3486 笑いヲ(歯で)噛む 46-327
 3487 虚無ヲ噛み締める 46-352
 3488 孤独ヲ噛みしめる (慣)50-96
 3489 詩ヲ噛みしめる 72-257
 3490 苦しみを舐める 慣73-294使
 3491 苦悩ヲなめる 慣55-183
 3492 苦勞ヲ舐める 慣73-272受・使
 3493 声ヲのむ 慣46-173
 3494 鏡台ヲ飲む (慣)32-14
 3495 月ヲ呑む 31-124
 3496 男ヲまる呑み(に)する 35-443
 3497 実情ヲ呑み込む 慣28-459
 3498 感情ヲのみこむ (慣)76-376
 3499 意味ヲ呑み込む 慣64-76可, 68-26可
 3500 手法ヲ嚙みこむ (慣)50-315
 3501 主義ヲ丸呑み込み(に)する 慣46-297
 3502 理想ヲ丸呑み込み(に)する 慣46-297
 3503 人々ヲ吸いよせる 62-365受
 3504 姿ヲ吸いこむ (慣)62-96受

366 3. 分類結果

- 3505 足音ヲ吸いこむ (慣)76-258受
 3506 あくどさヲ吐く 35-168
 3507 気持ヲ吐く (慣)46-322否
 3508 雑言ヲ吐く 慣73-242順
 3509 述懐ヲ吐く (慣)46-315
 3510 倫理ヲ吐き棄てる 50-35
 3511 台辭ヲ吐きちらす 64-71
 3512 同志ヲ嗅ぎ出す (慣)69-186
 3513 信者ヲ嗅ぎ出す (慣)69-186
 3514 欲望ヲ宙吊りにする 73-306名順
 3515 昂奮ヲ二倍にする 64-73
 3516 目ヲあそばせる (慣)55-475
 3517 人生ヲ演じてみせる 69-197順
 3518 間抜けヲ演じる 慣73-348
 3519 運命ヲ迎える (慣)55-447
 3520 死ヲ迎える (慣)72-190順
 3521 計画ヲ見送る 慣73-318
 3522 おびえヲさそい出す 73-354
 3523 像ヲ裏切る 46-362否
 3524 悲しみヲ(一手に)ひきうける 55-71
 3525 泣き声ヲ(全身で)ひきうける 55-76
 3526 思想ヲ打ち払う 32-12
 3527 盗みヲ守る 37-324
 3528 心ヲ御す (慣)72-268
 3529 仮面ヲそそのかす 73-280
 3530 悲しみヲひきたてる 55-94
 3531 心ヲ導く 慣32-25
 3532 ロヲ養う (慣)74-269
 3533 青春ヲ持剩す (慣)46-325
 3534 ながにがしさヲ持て剩す 46-292
 3535 自分ヲ叱る (慣)52-151
 3536 自分ヲ叱りつける (慣)55-176, 346
 3537 (わが)心ヲしかりつける 55-173
 3538 仮面ヲけしかける 73-280
 3539 心ヲいいくるめる 55-294
 3540 気持ヲあやす 62-148
 3541 自分ヲだます (慣)55-175
 3542 人生ヲだます 55-175
 3543 自分ヲいじめる (慣)55-394
 3544 車ヲいじめる (慣)55-500受
 3545 藤蔓ヲ切り虐む 31-75順
 3546 因縁ヲ持つ 慣64-45
 3547 機会ヲ持つ 慣64-46
 3548 過去ヲ持つ 慣72-346
 3549 線ヲもつ (慣)55-207
 3550 信用ヲ持つ 慣33-8
 3551 好意ヲ持つ 慣40-270
 3552 人生ヲもつ 慣55-292順
 3553 にやりとした顔ヲもつ (慣)55-368
 3554 孤独ヲ持つ (慣)72-166, 168
 3555 平穩ヲ手にする (慣)73-219
 3556 特許ヲ手離す 慣73-235
 3557 氣ヲ取る 慣33-23受
 3558 (霧麻疹で)命ヲとる 73-181受
 3559 色調ヲ眺め取る 46-293
 3560 神様ヲ取りあげる 46-352受
 3561 時間ヲ奪う 73-351受
 3562 心ヲ奪う 慣55-194受, 340, 68-99
 3563 氣ヲ奪う 慣72-359受
 3564 反省ヲ奪う 69-142
 3565 罰金ヲ巻き上げる 慣73-310
 3566 秘密ヲ盗む 慣37-318, 322
 3567 方法ヲ盗む 慣37-319 (2回), 320
 3568 方程式ヲ盗む 慣37-326
 3569 仕事ヲ盗む 慣37-314(3回)
 3570 足ヲ盗む (慣)50-398
 3571 秘密ヲ盗み込む 慣37-320
 3572 秘密ヲ盗み出す 慣37-312
 3573 意志ヲ蓄える 46-349
 3574 理想ヲ蓄える (慣)46-334順

- 3575 髻ヲ蓄える 價28-453
 3576 愛想ヲ支払う 73-182
 3577 秘密ヲ売る 價37-312
 3578 名ヲ売る 價34-159
 3579 暗黒ヲ売る 73-222名
 3580 自由ヲ売り渡す (價)72-273
 3581 反感ヲ買う 價46-364
 3582 怨みヲ買う 價37-315
 3583 顰蹙ヲ買う 價52-155
 3584 一日ヲ与える 33-11順
 3585 人生ヲあたえる 55-375
 3586 笑いヲ贈る (價)46-363
 3587 信頼ヲ捧げる 價28-455
 3588 眼ヲやる 價46-314
 3589 忌々しさヲやる (價)64-67名
 3590 微笑ヲ受ける 73-278
 3591 微笑みヲ受けとる 35-332
 3592 言葉ヲ引きとる (價)62-152
 3593 話ヲ引きとる 價33-23
 3594 時間ヲ受け容れる 46-367
 3595 目ヲ借りる 73-196
 3596 若さヲかえす 55-249
 3597 (母の)力ヲ培わす (價)46-358
 3598 自分ヲ植えつける 55-485
 3599 敗北感ヲ植えつける (價)73-325受・順
 3600 疑惑ヲ植えつける (價)52-150順
 3601 不幸ヲ刈りとる 55-135
 3602 用件ヲ切り出す 價73-204
 3603 孤独ヲ鍛える 72-226受
 3604 自分ヲ築く (價)49-84
 3605 心がまえヲ築く 62-138
 3606 生活ヲきぎづく 價55-142受
 3607 生活ヲきぎぎあげる 價55-142
 3608 運命(というこわいもの)ヲ(汽車が)はこぶ

- 3609 自分ヲ運ぶ 31-100
 3610 思いヲ運ぶ 49-20
 3611 計画ヲ運ぶ 價64-74
 3612 物語ヲ運ぶ (價)64-52
 3613 (汽車が)賭けヲはこぶ 55-425
 3614 身体ヲ運ぶ (價)40-271, 55-57(飛行機が
 巨大な一)
 3615 足ヲ運ぶ 價72-188
 3616 足(のあいだ)ヲ縫う 價55-219
 3617 間ヲ縫う 價63-356
 3618 人垣ヲ縫う 35-288
 3619 露地ヲ縫う 價73-293
 3620 下枝ヲぬう (價)64-228
 3621 追憶と空想ヲ織りまぜる 72-196
 3622 心ヲ洗う (價)62-101, 72-233受
 3623 素姓ヲあらう 價68-67(2回)
 3624 魂ヲ洗いきよめる (價)72-183受
 3625 実質ヲ洗い去る 69-166
 3626 実体ヲ洗い出す 73-264受
 3627 本質ヲ洗い出す 73-264受
 3628 眼ヲ曝す (價)64-53
 3629 心ヲ拭う 46-202
 3630 (死の)恐怖ヲ拭いとる 68-37受
 3631 寂寥ヲ拭いとる 68-37受
 3632 (悪夢の)痕跡ヲ拭い去る 73-342
 3633 (顔から)爽快さヲ拭い去る 69-239受
 3634 氏名ヲ拭い去る 73-288
 3635 職業ヲ拭い去る 73-288
 3636 家族ヲ拭い去る 73-288
 3637 戸籍ヲ拭い去る 73-288
 3638 気持ヲ飾る (價)72-314
 3639 表情ヲ飾る 73-236受
 3640 笑顔ヲ飾る 72-345受
 3641 孤独ヲ磨く 72-277
 3642 記憶ヲとぎすます 73-480受

368 3. 分類結果

- 3643 夜風ヲ研ぎ澄ます 73-283受・順
 3644 頭蓋骨ヲ研ぎすます 31-124順
 3645 彼女ヲ髣す 46-335受
 3646 方言ヲないまぜる 64-239
 3647 出来事ヲ塗る 62-253受
 3648 私ヲ(壁上に)塗りこめる 69-167
 3649 海ヲぬりつぶす 55-86受
 3650 一日ヲ(三度に)割って使う 33-11順
 3651 影ヲつくる 價55-479
 3652 異性ヲ(船で)作る 35-316
 3653 絶望ヲ創りあげる 72-192 順
 3654 心ヲ創り出す 73-268
 3655 女ヲこしらえる 價46-152, 157
 3656 空ヲ(一刷毛で)ほかす 31-105受
 3657 波ヲ染め分ける 72-195順・受
 3658 心ヲ汚す 價55-428
 3659 心ヲしずめる 46-153
 3660 感情ヲ(底に)鎮める 49-78
 3661 勢力ヲかためる 價72-423
 3662 決心ヲ固める 價64-45, 52
 3663 決意ヲかためる 價40-272
 3664 身ヲかためる 價40-268
 3665 決心ヲ踏み固める (價)64-73
 3666 神経ヲ澄ます (價)49-78
 3667 耳ヲすませる 價73-187
 3668 言葉ヲ濁す 價46-304
 3669 抵抗ヲ(体に)滲ませる 50-80
 3670 青春ヲ照す 72-231受
 3671 (月が)笑いヲ照らす 49-32使
 3672 立場ヲ照らし出す 64-70
 3673 心ヲ齧らす 價72-265
 3674 (風が咳の)声ヲ吹きまくる 48-18
 3675 沈黙ヲ融かす 73-239(2回)
 3676 陽ヲ融かす 69-199受
 3677 匂いヲ溶かし流す 50-107

- 3678 触感ヲ溶かし流す 50-107
 3679 自分ヲ陽にさらす 50-87
 3680 好奇心ヲもやす 價55-311
 3681 親交ヲ暖める 價64-50
 3682 旧好ヲ温める 價34-158
 3683 噂ヲ生む 價44-443
 3684 須賀ヲ花咲かす 50-75
 3685 重味ヲ殺す 55-65
 3686 魂ヲ殺す 72-169
 3687 感受性ヲ殺す 價72-169
 3688 気分ヲ殺す (價)72-175
 3689 情意ヲ殺す 價63-21
 3690 (自己)満足ヲ殺す 46-359
 3691 欲望ヲころす 價55-78
 3692 本心ヲころす 價55-15
 3693 息ヲ殺す 價55-406, 73-356
 3694 自由ヲころす (價)55-397
 3695 孤独ヲ殺す 72-298
 3696 羞恥ヲ圧殺する (價)55-365
 3697 声ヲ噛み殺す 價31-106
 3698 情熱ヲおしころす (價)55-481
 3699 死ヲ孕む (價)72-231

名 名 他

[名ガ名カラ他]

- 3700 言葉ガ錯覚カラ突き落す 72-408
 3701 常識ガ東カラ考える 41-166

[名ガ名デ他]

- 3702 溜息ガ(呪詛の)ひびきデ充滿する 73-286
 3703 眩きガ(呪詛の)ひびきデ充滿する 73-286
 3704 すすり泣きガ(呪詛の)ひびきデ充滿する 73-286
 3705 夕焼ガ暑サデ威嚇する 31-81順
 3706 髪ガ艶デふちどる 50-16
 3707 風ガ爪先デはじく 73-211

- 3708 美ガ無力感ヲ縛る 69-289
- 3709 ことガ悔いテ叩きのめす 49-63
〔名ガ名=他〕
- 3710 主婦ガ生活ニ根をはる (慣)55-169
- 3711 絶望ガ(痴呆)状態ニ置く 46-300
- 3712 憎しみガ笑いニうずめる 64-244
- 3713 声ガ我ニ帰らす (慣)32-16
- 3714 声ガ現実ニ引き戻す (慣)72-245
- 3715 靴音ガ空気ニひびを入れる 76-350
- 3716 媚態ガ激情ニ追い込む 40-270
- 3717 海ガ鬱陶しさニ引きずり込む 49-71
- 3718 仮面ガ顔ニ根をおろす 73-257
- 3719 遺瀨なさガ夢ニ浮かす 46-330
- 3720 蜜蜂ガ酩酊ニ身を沈める 69-228
- 3721 きずなガ世間ニつなぎとめる 73-222順
- 3722 存在ガ未練ニつなぎとめる 48-10
- 3723 解放ガ音楽(の中)ニひたらせる 73-290
- 3724 自覚ガ孤独ニ鞭を当てる 72-168
- 3725 かかわりガ絶望(の方)ニひっぱって行く 73-458
- 3726 山ガ(輪郭を)星空ニ刻む 72-224
- 3727 酔い心地ガ抑圧ニ手かげんを加える 55-365
- 3728 仮面ガ放火ニ背を向ける 73-296
- 3729 仮面ガ殺人ニ背を向ける 73-296
- 3730 手記ガおまえ(の内部)ニ描き出す 73-337
- 3731 音楽ガ魂ニ訴える (慣)72-260
- 3732 葉ガ頭ニ訴える (慣)36-101
- 3733 神秘ガ真実ニ廻を譲る 72-284
- 3734 考えガ憂鬱ニ導く 慣32-21
- 3735 会社ガ敗北ニ導く 慣40-273
- 3736 苦痛ガ心ニ(忘却を)強いる 72-288
- 3737 癖ガ知性ニ陰影をもたせる 46-342
- 3738 癖ガロマン性ニ陰影をもたせる 46-342
- 3739 癖ガオリジナリティニ陰影をもたせる

46-342

- 3740 …ことガ不快ニ落とし入れる (慣)28-462
- 3741 観念ガ油断ニ陥れる 46-343
- 3742 チャップ台ガ不幸ニおとし入れる 慣68-6順
- 3743 夢ガ心(の中)ニ灯びをもやす 64-243
- 〔名ガ名=他〕
- 3744 母性ガ成長ニ送り届ける 46-373順
- 3745 唇ガ忘却(の彼方)ニ押し流す 72-283
- 3746 唇ガ陶醉(の彼方)ニ押し流す 72-283
- 3747 出来事ガ立場ニ追いやる (慣)55-485
- 3748 飛翔感ガ天使の方ニ引きあげる

72-222順

- 3749 感じガ(忿怒の)情ニ駆り立てる (慣)46-332

〔名ガ名=他〕

- 3750 映画ガ興味ヲ繋ぎとめる (慣)73-298
- 3751 芝居ガ興味ヲ繋ぎとめる (慣)73-298
- 3752 ぼんやりガぼんやりさヲ發揮する 47-124
- 3753 やるせなさガ感情ヲ攪拌する 50-52受
- 3754 不安ガ気持ヲ固定する (慣)72-253
- 3755 心ガ感情ヲ瀝過する 69-162受
- 3756 陰影ガ人間性ヲ発散する 慣46-370
- 3757 衝撃ガ五感ヲ圧迫する 73-313
- 3758 存在ガ(人間)関係ヲ破壊する 慣73-300

受・順

- 3759 仮面ガしきたりヲ破壊する 慣73-296
- 3760 仮面ガ決心ヲ軽蔑する 73-335
- 3761 心持ガ死ヲ台点する ∴他動詞的 36-124否
- 3762 出来事ガ人生ヲ否定する 55-375
- 3763 日向ガ薔薇ヲ抱擁する 31-74順
- 3764 諦めガ心ヲ支配する 72-387
- 3765 事柄ガ気持ヲ占領する 62-363
- 3766 ものガ筆筭ヲ占領する (慣)33-9

370 3. 分類結果

- 3767 ことばが恨みヲ償却する 46-301名・順
 3768 気持が欲望ヲ刺激する 36-101
 3769 活字(の組合せ)カ想像力ヲ刺戟する 73-260
 3770 色彩が諧調ヲ吸収する 36-215
 3771 匂いカ青春ヲ包む 72-231受・順
 3772 悲哀カ赤味ヲ包む 價73-312受・順
 3773 感覚カ情欲ヲ押しつつむ 62-300順
 3774 親切カ心ヲ覆う 72-250
 3775 位置カ務めヲ荷なわせる (價)36-109順
 3776 国家カ死ヲかかえ込む 73-276
 3777 仮面カ言葉ヲはさみ込む 73-322
 3778 緊張カ感動ヲよびおこす 55-168
 3779 敬虔さが感動ヲよびおこす 55-168
 3780 着物が思い出呼びおこす (價)33-26
 3781 いたみガ不安ヲまきおこす (價)55-358順
 3782 仮面カ妄想ヲでっち上げる 73-280順
 3783 樹カ影ヲ落す 價72-209
 3784 センチメンタリズムカ君ヲ滅す 32-59
 3785 諦めカ性欲ヲ消す 72-383
 3786 薄明ガまどろみヲ消し去る 72-284
 3787 不安カ陶酔ヲ掻き消す 72-245
 3788 息カ考えヲ吹き消す 68-27受・順
 3789 才氣カ空気ヲ引き緊める 50-309
 3790 暴行カ嫉妬ヲ掻き立てる (價)73-280
 3791 柵カ心ヲ掻き立てる (價)73-306
 3792 態度カ嫉妬ヲ掻き立てる 價73-325
 3793 梢カ星ヲ動かす 72-226
 3794 泣き声カ心ヲゆさぶる 價55-221
 3795 音楽カ場内ヲふるわせる 73-223
 3796 新緑カ緑ヲそよがす 64-234
 3797 (ゴルフの)クラブガ杵子ヲ振りまわす 55-66受・順
 3798 皿カ腹ヲ立てる 31-121

- 3799 恐怖カ恐怖ヲ支える 73-324
 3800 他人カ私ヲ涵す 69-272
 3801 水カ影ヲ涵す 69-156
 3802 店屋カ明りヲ投げる 價36-24順
 3803 電燈カ光ヲ投げる 價49-71
 3804 光カ明りヲ投げる 72-262
 3805 目カことヲなげつける 55-456
 3806 眼なざしが匂うものヲ送る 50-265受
 3807 用箋カ視線ヲはじき飛ばす73-179受・順
 3808 歳月カ静寂ヲただよわす 55-475
 3809 人波カ顔ヲ押し流す (價)69-229受・順
 3810 行為カ半生ヲひきまわす 55-327受・順
 3811 記憶カ心ヲ貫く (價)72-235
 3812 旋律カ心(の中)ヲ貫く 73-314
 3813 思い出ガ心ヲ横切る 72-431
 3814 食器カ瞳ヲ追う 46-313
 3815 陶器皿カ瞳ヲ追う 46-313
 3816 ナフキンカ瞳ヲ追う 46-313
 3817 風カ軒燈ヲ追う 50-337受・順
 3818 一と言ガ仮面ヲ追いやる (價)73-319
 3819 理由カ思考ヲ追い詰める 72-301
 3820 ことカ可能性ヲ(一歩)押し進める (價)73-207
 3821 光線カ煙ヲ潑める (價)46-309
 3822 現実カ心ヲひきもどす 55-330
 3823 柄^がカ醜惡ヲひき出す 55-262
 3824 沈黙カ会話ヲ押し出す 73-242
 3825 仮面カ印象ヲほうり出す 73-277
 3826 丸の内カサラリーマンヲ流れ込ます 62-135順
 3827 笑顔カ安らかさヲ染み込ませる 62-105
 3828 鳩時計カ静かさヲこめる 49-14
 3829 わが家カ日常性ヲ吸い込む 73-331
 3830 皮膚カ思考力ヲ追い込む 46-325

- 3831 雑踏が思考ヲ吸い取る 73-315
- 3832 眼が肌ヲ吸いとる 62-82
- 3833 蚊帳が風ヲ漉す 69-160
- 3834 部屋が可能ヲひそます 55-405
- 3835 建物か影ヲ落す 價72-199
- 3836 電球が光ヲ落す 價72-354
- 3837 車道がスピードヲのせる 55-10
- 3838 無意味さが色ヲうかばす 68-41
- 3839 人形が微笑ヲうかべる 價72-335
- 3840 人形が嗤いヲうかべる 價72-343
- 3841 仮面が薄笑いヲ浮べる 73-283
- 3842 眼が表情ヲ浮べる 價72-275
- 3843 風^{ぼう}が心ヲ浮き上らす 37-317
- 3844 雨が(よれた)頭ヲほぐす 62-188
- 3845 糸が私と昼ヲつなぐ 69-208
- 3846 花火が五彩ヲ散らす 62-171
- 3847 プラットフォームが人影ヲ散らす
72-285
- 3848 木洩れ陽が(シャツの上に)斑らヲ散らす
69-263順
- 3849 心が寒さヲふりまく 73-222
- 3850 声^{こゑ}が汚れヲ撒き散らす 69-182
- 3851 拡声機が空世辞ヲ撒き散らす 價28-460
- 3852 風^{かぜ}が(風糸の)唸りヲ蒔き散らす 72-234
- 3853 豪雨が梅雨空ヲ切り放す 62-76
- 3854 霧が空ヲ閉じる (價)73-236
- 3855 悲しみが心ヲ鎖す 價72-172
- 3856 憂鬱が心ヲ閉す 32-41受
- 3857 媒立^{なまかぢ}が美と私ヲ結ぶ 69-155順
- 3858 姿が目ヲ吸いつける (價)49-42
- 3859 気持が心ヲうつ 價55-392
- 3860 苦しみが心ヲうつ 價72-403受
- 3861 仮面が感触ヲ叩く 73-270
- 3862 塊が心ヲ圧えつける 36-211
- 3863 反省が心ヲ突つつく 32-49
- 3864 ことが仮面ヲひく 73-306受・順
- 3865 衝動が心ヲひく 價73-300受
- 3866 しぐさが眼ヲひく 價64-243香
- 3867 エッフェル塔が影ヲ(葉・建物の上へ)曳く (價)46-366
- 3868 顔が心ヲ惹く 價72-426受
- 3869 いのちが愛感ヲ牽く 46-291
- 3870 動揺が表情ヲかすめる 73-322
- 3871 思い出が心ヲかすめる (價)72-386
- 3872 稲光が星空ヲかすめる (價)62-117
- 3873 一と言が(希望的)観測ヲ打ちこわす 73-333受・順
- 3874 壁がいたみヲおしつづす 55-277順
- 3875 水が光ヲ砕く (價)31-105
- 3876 しうちが空想ヲ打ち砕く (價)36-51
- 3877 ことが神経ヲ傷つける 價49-84
- 3878 …ことが心ヲ傷つける (價)55-93
- 3879 ことが自尊心ヲ傷つける (價)72-393
- 3880 …ことが平和ヲ破る 價73-248受
- 3881 騒しさがねむりヲやぶる 價55-243受
- 3882 線が空ヲきる (價)55-451
- 3883 月光が顔ヲ断ち切る 72-245
- 3884 興奮が体(の中核)ヲ引き裂く 62-365受・順
- 3885 苦悩が心ヲ引き裂く (價)72-192受
- 3886 疑問が心ヲ引き裂く 72-188
- 3887 岩が影ヲ刻む 72-213
- 3888 目が表情ヲ刻む (價)63-21
- 3889 雨が海面ヲ刺し貫ぬく 69-146
- 3890 仮面が日常ヲ掘り返す 73-324
- 3891 (神経の)鈍さが味覚ヲそぐ 價73-253
- 3892 異物感が味覚ヲそぐ 價73-253
- 3893 鈴が雨音ヲつんざく 69-260順
- 3894 ことが生命ヲ削る (價)64-228
- 3895 静けさが頭ヲ充たす 32-54
- 3896 気分が心ヲみたす 68-52受・順

372 3. 分類結果

- 3897 感情ガ心ヲ充たす 慣36-214順
- 3898 匂イガ意識ヲ充たす 72-296
- 3899 顔ガ悲シさヲたたえる (慣)55-71順
- 3900 背中ガ表情ヲ滲える 72-212
- 3901 女^{おんなめん}面ガ微笑ヲひろげる 73-227
- 3902 若葉ガ色彩ヲひろげる 55-137
- 3903 雑踏ガ思考ヲ拡散する 73-315
- 3904 火ガみどりヲふくらます 69-291
- 3905 …ことガ悦ビヲ味わわせる 慣40-268
- 3906 変らなさガ仮面ヲまごつかせる 73-322
- 3907 ようすガ胸ヲおびやかす 55-359
- 3908 匂イガ声ヲ脅やかす 69-229受
- 3909 思いガ心ヲふさぐ (慣)61-56受
- 3910 想像ガ無力感ヲ慰める 72-188
- 3911 美的なものガ眠リヲ貪る 慣69-264
- 3912 闇ガていさいヲとりあげる 55-217
- 3913 闇ガ羞恥ヲとりあげる 55-217
- 3914 闇ガ臆病ヲとりあげる 55-217
- 3915 生ガ美ヲ垣間見せる 69-206順
- 3916 散歩ガ気怠るさヲ見せる (慣)46-328
- 3917 ものガ作用ヲよぶ 49-44
- 3918 手紙ガ疑惑ヲ呼ぶ 慣62-79
- 3919 手紙ガ興味ヲ呼ぶ 慣62-79
- 3920 顔ガ孤独ヲ呼ぶ 73-222
- 3921 「形」ガ形ヲ名乗る 73-201
- 3922 報告ガ(勝利の)大きさをうたう 55-298
- 3923 あらしガ心ヲよむ 慣55-323
- 3924 空気ガ皮膚ヲよみがえらす (慣)62
-122
- 3925 船の跡ガ波紋ヲえがく 慣72-199
- 3926 地声ガ糖衣ヲ脱ぐ 50-257順
- 3927 店ガ悪ヲよそおう 73-268
- 3928 頭蓋骨ガ顔ヲよそおう 73-228順
- 3929 鳥の子餅ガ年月ヲ(むしゃむしゃ)食う
35-228順
- 3930 瞳ガ光ヲ宿す (慣)72-251
- 3931 掌ガ世界ヲ葬る 69-161順
- 3932 土産話ガ胸ヲおどらせる (慣)36-10
- 3933 問題ガ心ヲとらえる 慣55-55受
- 3934 技術ガ美ヲとらえる 慣55-453
- 3935 メロディガ心ヲとらえる 55-501受
- 3936 流れガかげヲ捉える 35-174
- 3937 眼ガ心ヲ捕える 72-194順
- 3938 素顔ガ優越感ヲ抱く 73-339
- 3939 考えガ心ヲつかむ 55-338
- 3940 仮面ガ機会ヲつかむ 慣73-272
- 3941 欲念ガ身内ヲ掻きむしる 28-457
- 3942 目ガことヲむしりとる 55-456
- 3943 精神ガ情氣ヲ扱き上げる 46-313
- 3944 後悔ガ心ヲ噛む 72-234
- 3945 闇ガ金閣ヲ呑む (慣)69-285受・順
- 3946 闇ガ勾欄ヲ呑む (慣)69-290受・順
- 3947 雲ガ月ヲ呑む 31-124
- 3948 雲ガ頭蓋骨ヲ呑む 31-124
- 3949 火ガ病院ヲ呑む (慣)35-181受
- 3950 雑沓ガふたりヲのみこむ 慣55-197受・順
- 3951 夕空ガ世界ヲ呑み込む 69-142
- 3952 淵ガ生涯ヲ呑み込む 69-287順
- 3953 地図ガ光ヲ吸う (慣)72-207
- 3954 本ガ眼ヲ吸う (慣)50-104受
- 3955 干し場ガ瞳ヲ吸う 36-101受
- 3956 リノリュームガ日光ヲ吸う (慣)46-351
- 3957 靨ガ月光ヲ吸う (慣)63-347
- 3958 顔ガ視線ヲ吸う 49-70
- 3959 肉ガ栄養ヲ吸う (慣)69-168
- 3960 空ガ混雑ヲ吸い込む 69-197受・順
- 3961 空ガ喧騒ヲ吸い込む 69-197受・順
- 3962 後悔ガ心ヲ重たくする (慣)72-298
- 3963 唇ガ情熱ヲ潜在させる 72-284順
- 3964 事情ガ誤解ヲまねく 慣55-199順

- 3965 努力が不自然さつまねく (償)55-261
- 3966 母性が佛ヲ迎える 46-373
- 3967 (山の)色が冬ヲむかえる (償)55-450
- 3968 花が蜜蝋ヲ迎え入れる 69-228順
- 3969 ことが憂鬱ヲ誘う 償32-10
- 3970 …ところが涙ヲさそう 償48-15
- 3971 気持が睡りヲさそう (償)55-182
- 3972 不安が酔心地ヲさそう (償)55-212
- 3973 目差しが睡気ヲさそう 償64-235
- 3974 話が涙ヲ誘う 償28-463受・否
- 3975 話が微笑ヲさそう 62-184
- 3976 感情が理性ヲ裏切る 73-256
- 3977 生理が感情ヲ裏切る 73-256
- 3978 恐怖が心ヲ襲う 72-424
- 3979 バスが寂寥ヲ護ってくれる (償)46-293
- 3980 病が平和ヲみちびき入れる (償)62-321
- 3981 薬が正義ヲ救う 68-82順
- 3982 薬が自由ヲ救う 68-82順
- 3983 意識が孤独感ヲ強いる 72-276
- 3984 光景が歎息ヲ唆す 53-10
- 3985 美が人の目ヲたぶらかす 69-142
- 3986 絶望が胸ヲさいなむ (償)72-191受
- 3987 声が耳ヲなぶる 50-86
- 3988 風が髪ヲなぶる 償55-95受
- 3989 風が枝ヲなぶる 73-242使・順
- 3990 曲線が感情ヲ持つ 31-94順
- 3991 死者たちが独立感ヲ持つ 76-349
- 3992 恐怖が加速度ヲもつ 32-36
- 3993 仮面が自信ヲ持つ 73-271
- 3994 石が思想ヲ持つ 46-352使・順
- 3995 木が思想ヲ持つ 46-352使・順
- 3996 臉が涙ヲ持つ 償36-59
- 3997 ことが心(の中)ヲ占める 72-246
- 3998 憧れが心(の中)ヲ占める 72-301順
- 3999 病気が心(の大部分)ヲ占める 55-360
- 4000 …ことが心ヲとる 償46-158受,195受
- 4001 話が気ヲ取る 償34-138受
- 4002 (他人の)顔が自分ヲ乗っ取る 73-249受
- 4003 ことが心ヲ奪う 償72-354受
- 4004 出来事が気ヲうばう 償55-17受
- 4005 酩酊が酩酊ヲ奪う 69-213
- 4006 苦痛が反省ヲ奪う 69-142
- 4007 防備が気ヲ奪う 償73-186受
- 4008 軍事が手足ヲ奪う 62-355受
- 4009 政治が手足ヲ奪う 62-355受
- 4010 薬品が労働力ヲ奪う 37-309
- 4011 竹やぶが目ヲうばう 償55-471受
- 4012 柿が目ヲうばう 償55-471受
- 4013 風が思考ヲ奪う 69-248
- 4014 ことが機会ヲ与える 償64-51
- 4015 出来事が確信ヲ与える 償64-50
- 4016 存在が責任ヲ与える 72-222順
- 4017 時間が(肉体に)鼓動ヲ与える 35-348
- 4018 待望が心ヲ与える 73-237
- 4019 言葉が不安ヲ与える (償)72-245順
- 4020 色が空想ヲ与える 72-356
- 4021 闇が勇氣ヲあたえる 55-217
- 4022 死が悦びヲ与える (償)72-298順
- 4023 病状が傷痕ヲ与える (償)72-168順
- 4024 大恥(の群)が皮膚ヲたがやす 73-347(3回)
- 4025 映画が退屈ヲ植えつける (償)63-12
- 4026 死が疑惑ヲ植えつける 52-150
- 4027 風がタ鬚ヲ運ぶ 償76-39
- 4028 いびきが実感ヲもたらす (償)60-86
- 4029 いびきが確信ヲもたらす (償)60-86
- 4030 筒っぽが空地ヲ縫う 72-217
- 4031 ラッパが下枝ヲぬう (償)64-228
- 4032 車が山腹ヲ縫う 償55-106
- 4033 街道が風景(の間)ヲ縫う (償)31-55

374 3. 分類結果

- 4034 焰カ苦闘(の中)ヲ縫う 48-11順
 4035 流れカパセリ(の間)ヲ縫う (償)35-318順
 4036 茎カ土(の表面)ヲ編む 31-67
 4037 仮面カ姿勢ヲ搦き混ぜる 73-271
 4038 業苦カ心ヲ煮る 50-89受
 4039 追憶カ心ヲ洗う 62-101
 4040 部屋カ思い出ヲかざる 償55-178
 4041 仮面カ姿勢ヲ練り合わせる 73-271
 4042 溜息カ心ヲ塗りつぶす 73-338
 4043 日ガシニヨナすりつける 74-82
 4044 音カ心ヲ撃つ 償50-392
 4045 僧服カ僧侶ヲつくる 73-222
 4046 制服カ兵士ヲつくる (償)73-222
 4047 あかりカ(夢の)世界ヲつくる 55-91
 4048 唇カ沈黙ヲつくる 72-284
 4049 経験カ年齢ヲつくりだす (償)55-311順
 4050 孤独カ(怪物の)心ヲつくり出す 73-222
 4051 花カ空ヲ染める 償62-177
 4052 夜光虫カ波ヲ染める 72-230
 4053 妖氣カ心ヲ染め上げる 52-164
 4054 煙カ灰ヲ降らす 償72-287
 4055 風カ枯葉ヲ降らす (償)69-200
 4056 顔カあおりヲ吹き入れる 50-87
 4057 身体カあおりヲ吹き入れる 50-87
 4058 声の強さカ妄念ヲ吹き散らす 69-182
 4059 詩人的素質カ人ヲ融かす 46-369
 4060 噂カ噂ヲ生む 償44-443
 4061 消費カ価値ヲ生む 償73-296
 4062 心構えカ直観ヲ育てる (償)73-335
 4063 死カ記憶ヲ殺す 72-233
 4064 転倒カ羞恥ヲ圧殺する 55-365
 4065 虚脱感カぼくヲ萎えしぼませる 73-250順
 4066 雨カ心身ヲ腐らせる 31-93受
 [名ヲ名カ他]

- 4067 足音ヲ足音が追う (償)55-36
 4068 感情ヲ時カ拭う 36-55
 4069 特徴ヲソフトカ殺す 償69-229
 [名カラ名ヲ他]
 4070 不安定カラ自分ヲ取り戻す 68-80
 4071 駅カラ人々ヲ吐き出す 償68-5受・順
 4072 映画館カラ客ヲ吐き出す 68-78受・順
 4073 罅カラ秘密ヲ読みとる (償)37-322
 [名ヲ名カラ他]
 4074 形ヲ記憶(のなか)カラ追い出す 73-277
 4075 色ヲ記憶(のなか)カラ追い出す 73-277
 4076 気位ヲいのちカラ汲み出す 46-368
 4077 純情ヲいのちカラ汲み出す 46-368
 4078 かなしきヲ一句カラ吸い上げる 64-68
 4079 対話ヲ沈黙カラさがす 73-242
 4080 光ヲ眼カラ射る (償)35-170
 [名デ名ヲ他]
 4081 (仕事)熱心(ぶり)デ傷ヲ埋め合わせる 73-211名
 4082 腹(の中)デ薄笑いヲうかべる 償52-150
 4083 肩デ風ヲ切る 償72-380
 4084 心(の奥底)デ影ヲひろげる 73-198
 4085 善意デこころヲ広げる 73-444
 4086 生活デ悪ヲ味わう 償69-170
 4087 行動デ悪ヲ味わう 償69-170
 4088 死デ敗北感ヲ秤る 73-331順
 [名ヲ名デ他]
 4089 不安ヲ胸(の中)デくりかえす 55-477受
 4090 帯ヲ人デ埋める 62-167受
 4091 男ごころヲ法律デしばりつける 償55-355
 4092 欲望ヲ感情デしばりつける 償55-77
 4093 妄想ヲ言葉デ堰きとめる 62-326
 4094 困難ヲ骨の髄デ味わう 61-53
 4095 イメージヲ孤独デ彩る 72-295

- 4096 否定的なものヲ仕事ヲ拭う 49-61
- 4097 (怪物の)心ヲ(怪物の)顔ヲつくる 73-222
- 4098 目ヲ愛情ヲ燃やす 49-23
- 〔名=名ヲ他〕
- 4099 胸(のおく)=情熱ヲかくす (償)55-495順
- 4100 雑鬧(の中)=自己ヲ溶けこます 49-69
- 4101 笑い=追従ヲこめる 償72-354順
- 4102 軍曹=(階級)観念ヲ叩き込む(償)28-454
- 4103 女色=憂鬱ヲ流し込む 40-267
- 4104 作文=場面ヲ織りこむ (償)72-394
- 4105 孤独(の中)=自分ヲ閉じこめる 72-290
- 4106 顔(一面)=笑いヲうかべる 償74-49
- 4107 頬=つくり笑いヲ浮かべる 償72-375
- 4108 唇=微笑ヲうかべる 償72-422(2回)
- 4109 唇(の周り)=嗤いヲ浮かべる 償72-348
- 4110 唇=つくり笑いヲうかべる 償72-390
- 4111 唇=微笑ヲうかべる 償72-405
- 4112 謙遜と隠匿のあいだ=物語ヲ綴る 償35-214
- 4113 分類法=考え方ヲ重ね合わせる (償)73-215
- 4114 未成熟=心ヲ傷める 償46-304
- 4115 きもの=思い出ヲぎざむ (償)55-74受
- 4116 仮面=特権ヲ与える (償)73-329受
- 4117 神経=波動ヲ与える 32-51
- 4118 触感=意識ヲ預ける 73-323
- 4119 言葉=耳ヲかす 償33-22
- 4120 花=夢ヲ託す 償55-25
- 4121 公子=よるこびヲうえつける 55-341
- 4122 公子=趣味ヲうえつける 55-341
- 4123 胸=軽蔑ヲうえつける 55-481
- 4124 愚かさ(の上)=夢ヲ築き上げる 31-76
- 4125 置物=旧交ヲあたためる 償49-10
- 4126 鳩時計=旧交ヲあたためる 償49-10
- 4127 卓上鈴=旧交ヲあたためる 償49-10

〔名ヲ名=他〕

- 4128 夜ヲ昼=翻訳する 69-179
- 4129 暗い感情ヲ明るい感情=翻訳する69-209
- 4130 月光ヲ日光=翻訳する 69-179
- 4131 影ヲ日向=翻訳する 69-179
- 4132 (苔の)湿りヲ(若葉の)そよぎ=翻訳する
69-179
- 4133 作り声ヲ唇=偽装する (償)46-310
- 4134 ことヲ心=つつむ (償)46-154, 46-192
- 4135 非難ヲ笑い=交ぜる 49-66
- 4136 理由ヲ意識と無意識(との隔々)=隠す
償72-297受
- 4137 不合理ヲ胸(の奥)=かくす 55-39受
- 4138 快感ヲ心=作りあげる (償)72-429
- 4139 微笑みヲ眼(の中)=しまい込む 35-332
- 4140 経験ヲ心(のどこか)=しまう 72-398
- 4141 思いヲ胸(のおく)=しまう (償)55-428
- 4142 一言ヲ心(の奥ふかく)=蔵^{しま}う 46-168受
- 4143 心ヲ出逢い=傾ける 償62-163
- 4144 目ヲ宙=おく (償)55-461
- 4145 眸ヲ動作(の上)=おく 55-177受
- 4146 沈黙ヲ悲しみ=ひたす 73-242順
- 4147 色ヲ唇=ただよわす 49-66
- 4148 本心ヲ心(の奥ふかく)=押しこむ (償)55-23
- 4149 (儒教)道徳ヲ頭=叩きこむ (償)50-107
受・順
- 4150 声ヲ暗闇=吸い込む (償)72-241受
- 4151 陸地ヲ夕闇(の中)=吸い込む 72-237受
- 4152 具体ヲ抽象(の中)=流し込む 62-364
- 4153 告白ヲ胸(の底)=たたみこむ (償)55-478受
- 4154 かの女ヲ流れ=織り込む 46-326受
- 4155 問題ヲ心(のおすみ)=おしこめる 55-55
- 4156 ことばヲ心(の奥)=封じこめる 55-173

376 3. 分類結果

- 4157 悲しみヲむすこニ注ぐ 46-319
 4158 嘆きヲむすこニ注ぐ 46-319(2回)
 4159 悩みヲむすこニ注ぐ 46-319
 4160 恥ヲむすこニ注ぐ 46-319
 4161 嗤いヲ口ニうかべる 價72-373
 4162 笑いヲ頬ニうかべる 價72-397
 4163 つくり笑いヲ顔(いつばい)ニ浮かべる
 價72-384
 4164 つくり笑いヲ頬ニうかべる 價72-410
 4165 作り笑いヲ唇ニうかべる 價72-418
 4166 微笑ヲ頬ニうかべる 價64-231
 4167 恍惚ヲ顔ニうかべる 68-79
 4168 現在ヲ言葉(の中)ニちりばめる 64-
 233受
 4169 将来ヲ言葉(の中)ニちりばめる 64-
 233受
 4170 感じヲ眸のおくニきざむ 55-426
 4171 印象ヲ記憶ニ刻む 72-300
 4172 表情ヲ顔(の表面)ニ刻む 73-252受
 4173 噂ヲ頭ニ刻む 74-269
 4174 夢ヲ心ニ描く 價64-230
 4175 囁きヲ心ニいだく 價64-240
 4176 危惧ヲ心ニいだく 價64-243
 4177 夢ヲ心ニいだく 價64-243
 4178 月ヲ雲(のなか)ニ呑む 31-125受
 4179 行列ヲ群衆(の間)ニ呑み込む 35-181受
 4180 人声ヲ空ニ吸う (價)69-143受
 4181 足音ヲ空ニ吸う (價)69-143受
 4182 心ヲ軽快ニ導く 32-25
 4183 自分ヲ仕事ニかり立てる (價)73-249
 4184 おのれヲ反撥ニかりたてる 55-114
 4185 一生ヲ研究ニ捧げる 價72-398
 4186 目ヲテレビニあずける (價)55-420
 4187 目ヲ洋酒棚ニあずける 價55-459
 4188 嗤いヲ頬ニ作る 72-409

〔名へ名ヲ他〕

- 4189 死のなかへ自分ヲ失う 68-77
 4190 思いつきへ心ヲねじ曲げる 62-153
 4191 決心へ気持ヲ駆り立てる 價64-73
 〔名ヲ名へ他〕
 4192 かの女ヲ人混み(の中)へ織り込む 46-
 325受・順
 4193 娘ヲ追想(のなか)へ織り込む 31-119受
 4194 心ヲ追憶へ導く 69-244受
 4195 大勇猛心ヲ心へ植え込む 31-77

名名名他

〔名ガ名カラ名ヲ他〕

- 4196 声ガ気分カラ憂愁ヲ押し流す 72-288
 4197 吸引力ガ乳首カラ乳汁ヲ誘い出す 48-
 17

〔名ガ名ヲ名ヲ他〕

- 4198 櫓ガ窓ヲ背空ヲ切り抜く 69-184
 4199 言葉ガ感触ヲ心ヲ撫でる 74-280

〔名カ名ヲ名ヲ他〕

- 4200 小径ガ踵ヲ粘度ヲ吸いこむ 46-354

〔名ガ名ニ名ヲ他〕

- 4201 虚無感ガ意識ニ影ヲ落す (價)72-219
 4202 偏見ガ民族ニ影ヲ落す 73-259
 4203 偏見ガ歴史ニ影ヲ落す 73-259
 4204 ことばガ胸ニものものしきヲ投げこ
 む 55-383
 4205 …ことガわびしきニ心ヲ閉ざす 價50-
 44
 4206 酔いガ節々ニ消耗ヲ告げる 35-456
 4207 名残りガ言葉(のはしはし)ニはずみヲ持
 つ 62-143
 4208 錯視ガ勇氣ニ鼓舞ヲ与える 63-343
 4209 唾ガ咽喉ニ疼痛ヲ与える 68-80
 4210 (結婚)生活ガよし子ニ習慣ヲ植えつけ

る 慣44-438

〔名ガ名ヲ名ニ他〕

4211 メロディーガ心ヲ絶望ニ追いやる (慣)

55-501順

4212 人形ガ微笑ヲ唇ニうかべる 慣72-347

4213 仮面ガ苦惱ヲ義分ニ変える 73-318

4214 素質ガリアリズムヲ神秘ニ高める 46-

369

4215 態度ガ仮面ヲ疑心暗鬼ニおとし入れ

る 73-322

4216 落葉松ガ枝ヲ風ニなぶらせる 73-242

〔名ガ名ヘ名ヲ他〕

4217 要求ガ意味ヘ気持ちヲ追加する 46-

332名

〔名ヘ名ガ名ヲ他〕

4218 空ヘ火花ガせん光ヲ突きさす 62-168

形容(動)詞・動詞

〔形(動)自〕

4219 苦々しく 反射する 41-124

4220 蒼黒く 鬱積する 49-19

4221 がむしゃらに 頼にさわる 32-52

4222 丹念に 揺れる 69-176

4223 反射的に ほとぼしる 49-88

4224 やる瀬なく ほとぼしる 55-304

4225 皴くちやに 疲れる 48-11

4226 空虚に 笑う (慣)48-13

4227 白く 笑う 46-349

4228 猛烈に 囁く 74-458

4229 世間を狭く 暮す 慣46-164

4230 清潔に いちやつく 41-134

4231 かさ(つ)かさにはしゃぐ 41-145

4232 悲しそうに (樹木が)きしむ 55-318

4233 (雪が)いそがしく 融ける 62-306

〔形(動)他〕

4234 滑らかに 話を交す 慣46-315

4235 冷たく 首をふる 慣72-103

4236 甘く 考える 慣73-239

副詞・動詞

〔副自〕

4237 依怙晶眞なく 焼失する 28-460

4238 感情的に (世界)地図ができる 46-308

4239 (雨が)けろりと やむ (慣)62-116

4240 じめじめと 椅子にかける 55-95

4241 (石油が)思慮なく 燃える 31-101

4242 もう一步 家庭(の中)にはいる 55-77

4243 冴え冴えと 笑う 50-79

4244 うだりながら 遊ぶ (慣)62-335

4245 根こそぎ 負ける 48-8

4246 (水が)柄になく 閃く 31-56

4247 思いきって 咲く 55-151

4248 吃り吃り 咲き出す 69-204

〔副他〕

4249 つややかに くねらせる 73-446

4250 むすこを通して 眺める 慣46-298

4251 鷲掴みに(して) 言う 35-365

4252 済し崩しに 責めたてる (慣)50-398

4253 一直線に 賭ける 62-366

4254 まっしぐらに 賭ける 62-366

名詞・形容(動)詞

名形(動)

〔名ガ形(動)〕

4255 精神ガばらばら 62-270

4256 表情ガ空白 62-297順, 370順

4257 微笑ガ危なげ 68-80順

378 3. 分類結果

- 4258 銀箔が瞬間的 31-56順
 4259 裁判が片ちんば 35-408順
 4260 味が家庭的 (償)62-137順
 4261 白さが神経質 (償)48-11順
 4262 トランペットが感情的 55-501順
 4263 軽気球が満足げ 40-259
 4264 漁村が怠惰 72-199
 4265 風が屈辱的 55-290順
 4266 皺が皮肉 46-349順
 4267 出来事が雄弁 55-53
 4268 膝が雄弁 50-80
 4269 梨・林檎が不停せ 35-250
 4270 光が幸福 46-296順
 4271 木が不幸 (償)31-65順
 4272 光が茶目 72-252順
 4273 海が支配的 69-248順
 4274 匂いが封建的 償55-170順
 4275 海が命令的 69-248順
 4276 青春が貧困 72-300
 4277 眼ざしが灰色っぽい 50-128順
 4278 頭が別 36-49
 4279 放火が混りつけなし 73-293順
 4280 沈黙がちぐはぐ 41-168順
 4281 照らすものが空虚 46-354名
 4282 膝が空虚 50-80
 4283 食欲が単調 55-193名
 4284 爆発が行儀(が)よい 55-325順
 4285 (怒態の)情が歯切れ(が)悪い 46-332順
 4286 笑いが危い 68-50順
 4287 犯罪が立派 償52-155順
 4288 くちべにが強い 35-421順
 4289 線がエネルギー (償)62-88順
 4290 貧乏かはげしい (償)40-264
 4291 感情が宙ぶらりん (償)49-76順
 4292 線が若い (償)76-227順
 4293 夢が若い 55-302順
 4294 春じたくが若い 50-334償
 4295 道路が若い 55-299順
 4296 木が若い 償52-119順
 4297 目が早い 償33-22
 4298 頭が古い 償46-334
 4299 皮膚と筋肉がうらはら 50-402
 4300 声が円い (償)49-11
 4301 人格が丸い (償)46-302名
 4302 音が円い (償)69-143名
 4303 心が平ら 償62-140(2回)
 4304 合槌が滑らか 償64-55順
 4305 海が肌理が粗い 69-246順
 4306 叫びが棘だらけ 73-188順
 4307 眼がまっすぐ (償)69-98順
 4308 声かなだらか (償)62-271順
 4309 空虚が弱やか 46-354順
 4310 つめたさが細長い 50-327順
 4311 認識が高い (償)37-319名
 4312 匂いが高い 31-118順
 4313 言葉が低い (償)62-178順
 4314 関係が深い 償33-13順
 4315 心が深い 償55-22名
 4316 直観が深い (償)73-334名
 4317 疲れがふかい (償)72-405順
 4318 疲労が深い 72-423順
 4319 友情が深い 償72-166順
 4320 沈黙が深い (償)50-400使, 72-173使, 187使
 4321 天井が深い (償)48-10順
 4322 女の色が深い (償)62-347順
 4323 顔だちが彫りがふかい 償72-352順
 4324 藤蔓が執念深い 31-75順
 4325 媚が執念ぶかい 50-270
 4326 不安が底知れない 償55-501順
 4327 心が奥ふかい 償46-168名, 72-221名, 270名

- 4328 魂が奥深い、72-266
- 4329 空白が根深い、73-337
- 4330 氷塊が根深い、73-238
- 4331 表情が遠い、73-199名
- 4332 話が遠い、慣73-206順
- 4333 甘味が遠い、69-279順
- 4334 (女)心がせまい、慣55-180順
- 4335 孤独がちっぼけ、72-293順, 294順
- 4336 心が小さい、(慣)55-75順
- 4337 気が小さい、慣52-125(2回), 52-127
- 4338 神経が小さい、(慣)55-29順
- 4339 矛盾が大きい、慣55-180
- 4340 声が大きい、慣52-126順, 146順
- 4341 精神が大きい、(慣)55-390順
- 4342 むせび泣きが細か、(慣)49-60順
- 4343 声が太い、慣40-268順, 64-234順
- 4344 喜びがうすい、(慣)48-8順
- 4345 笑いがうすい、72-343順, 370順, 373順, 395順, 397順, 428順
- 4346 旅費が薄い、(慣)46-308順
- 4347 光が水っぽい、76-350
- 4348 感情が厚ぼったい、76-376順
- 4349 熱情が分厚、49-32順
- 4350 肉声が厚い、48-16順
- 4351 孤独が厚い、63-24名
- 4352 静寂が厚い、63-24名
- 4353 生きることが重い、(慣)68-7名
- 4354 現実が重い、(慣)72-278名
- 4355 時間が重い、35-356順
- 4356 心が重い、慣50-11名(一の奥), 55-466名, 478名
- 4357 意識が重い、62-155
- 4358 気が重い、慣55-154
- 4359 気持が重い、慣55-22, 68-38順, 99順
- 4360 気分が重い、慣68-69順
- 4361 生活気分が重い、(慣)68-79順
- 4362 悲哀が重い、49-72順
- 4363 不安が重い、72-244名
- 4364 声が重い、(慣)76-349順
- 4365 情痴が重い、(慣)64-48名
- 4366 無意味が重い、68-46名
- 4367 視線が重い、69-267名
- 4368 言葉が重い、慣50-80
- 4369 生活が重い、68-7名, 14名, 14
- 4370 死が重い、68-14名
- 4371 謙讓さが重い、69-129名
- 4372 罰が重い、慣72-345順
- 4373 闇が重い、69-224順
- 4374 ひびきが重い、(慣)62-78順
- 4375 匂いが重い、31-118順
- 4376 空気が重い、慣72-416
- 4377 夜気が重い、62-138
- 4378 顔が重い、68-48順, 124順
- 4379 臉が重い、慣50-271
- 4380 口が重い、慣50-85
- 4381 しこりが重い、慣73-190順
- 4382 孤独が重い、72-166名
- 4383 事実が重たい、(慣)72-310名
- 4384 気分が重たい、慣50-79順
- 4385 眼ざしが重たい、(慣)50-7順
- 4386 視線が重たい、(慣)72-250順
- 4387 ひとり暮らしが重たい、49-88名
- 4388 心が軽い、慣46-170
- 4389 疲れが孤独、73-478順
- 4390 メニューが孤独、73-226順
- 4391 木が孤独、72-163
- 4392 人間どもが継ぎだらけ、35-366順
- 4393 職業安定所がつぎはぎだらけ、62-76名・順
- 4394 欲望が瘤だらけ、73-294順

380 3. 分類結果

- 4395 矛盾^カけたはずれ 55-393
- 4396 糸^カ感じやすい 55-345順
- 4397 (空の)明るみ^カ無表情 73-265
- 4398 海^カ無表情 73-353
- 4399 煙^カけだるげ 31-101
- 4400 嘲笑^カ眩しい 69-129
- 4401 心^カ痛い 慣72-415名
- 4402 急行列車^カ気ぜわしい 62-91
- 4403 黒^カ気ぜわしい 62-87
- 4404 生活^カ暑苦しい 74-60順
- 4405 世間^カ重苦しい (慣)34-158
- 4406 (梅雨)空^カ重苦しい 慣62-76順
- 4407 肌触り^カ寂しい 46-320順
- 4408 位置^カ悲しい 55-411順
- 4409 智慧^カ悲しい 55-114順
- 4410 音^カ悲しげ 62-262順
- 4411 顔^カ鬱陶しい (慣)68-84順
- 4412 (薬の)におい^カ陰気 74-52
- 4413 指^カ狂おしい 31-75順
- 4414 光り^カ沈痛 69-241順
- 4415 墓のなかのひと^カ肩身がせまい 慣55-346
- 4416 感情^カ…たい 55-366番
- 4417 白ちぢみ^カいいかげ 62-127順
- 4418 花^カ言いたげ 31-83
- 4419 建物^カ人待ち気 72-164
- 4420 火の気^カ恋しい 慣73-180
- 4421 光^カ親しげ (慣)68-26, 72-265
- 4422 臭い^カ親しげ 73-192
- 4423 幸福^カ可愛らしい 50-120順
- 4424 床^カ可哀そう 55-35順
- 4425 年齢^カ気のどく 55-420
- 4426 藤蔓^カ小面憎い 31-74
- 4427 枝^カ神経質 55-402
- 4428 光^カ知的 (慣)72-251順
- 4429 か^カがやき^カ知的 (慣)55-192順
- 4430 空気^カアカデミック (慣)46-302順
- 4431 金^カ利口 50-292順
- 4432 影^カ伶俐 46-317順
- 4433 微笑^カ確固 68-81順
- 4434 糸^カあいまい 55-345順
- 4435 匂い^カロマンチック 慣55-151順
- 4436 味^カロマンチック 慣46-340順
- 4437 レンズ^カ舌っ足らず 73-210順
- 4438 マツケムシ^カうるさそう 52-136
- 4439 交渉^カ安っぽい 64-58順
- 4440 ヒロイズム^カ安っぽい 72-179順
- 4441 侮蔑^カ輝やかしい 69-146順
- 4442 不人情^カハイカラ 62-362順
- 4443 本能^カ素早い 73-311
- 4444 線^カ敏捷 76-220順
- 4445 落着^カ食欲 46-366順
- 4446 仮面^カ食欲 73-271
- 4447 胃袋^カ食欲 73-301順
- 4448 希望^カ太々しい 49-51順
- 4449 肉体^カあつかましい 55-491名
- 4450 仮面^カ破廉恥 73-282
- 4451 寄生虫^カ破廉恥 73-314
- 4452 煙^カ無心 72-180
- 4453 光^カ生真面目 (慣)50-9順
- 4454 空気^カ末期的 73-227順
- 4455 静止^カ頑固 73-446順
- 4456 藤蔓^カ剛情 31-75順
- 4457 くわい^カ生意気 35-327, 328
- 4458 時計^カ陽気 (慣)40-265
- 4459 雨^カ冷静 69-146
- 4460 プラットフォーム^カ鷹揚 69-243
- 4461 弾丸(の列)^カがやさしい 62-118順
- 4462 仮面^カ大人しい 73-283
- 4463 仮面^カ意気揚々 73-319順
- 4464 仮面^カ自分勝手 73-258

- 4465 鉛筆ガやけくそ 32-8
 4466 爪ガ真摯 46-356順
 4467 蔦蔓ガたんねん 46-345
 4468 人生ガ勤勉 62-357(2回)
 4469 仮面ガ挑戦的 73-271
 4470 プラットフォームガ礼節正しい、69-
 243
 4471 人生ガ傍若無人 55-183
 4472 勾欄ガ謙虚 69-289
 4473 オーバーガ冷淡 50-279
 4474 色ガ人なつこい 62-83順
 4475 部屋ガよそよそしい、(慣)73-183
 4476 足うらガよそよそしい 76-375
 4477 皮膚ガよそよそしい 76-373
 4478 針ガ意地悪い 73-468順
 4479 空ガ意地悪い、36-106順
 4480 神経ガとげとげしい、(慣)55-180
 4481 部屋ガ無愛想 73-183
 4482 閻ガ豪奢 69-211順
 4483 心ガ貧しい、慣62-113名、72-271(2回)
 4484 頬ガ貧しい、(慣)50-100順
 4485 生き方ガ人工的 50-120順
 4486 感情ガ明るい、(慣)69-179順、69-209順
 4487 笑い声ガ明るい、慣72-407順
 4488 理性ガ明るい、(慣)64-53
 4489 永遠性ガ暗い、69-235順
 4490 世間ガ暗い、慣34-158
 4491 心ガ暗い、慣49-86、72-287、292
 4492 疲労ガ暗い、49-72順
 4493 気持ガ暗い、慣55-349順、62-155順、64-
 77、72-265
 4494 (生活)気分ガ暗い、(慣)68-79順
 4495 感情ガ暗い、(慣)69-162順、179順、209順
 4496 憎悪ガ暗い、76-361
 4497 呻き声ガ暗い、(慣)72-418順
 4438 匂いガ暗い、69-229順
 4499 顔ガ暗い、(慣)72-169順
 4500 雰囲気ガ薄暗い、64-67順
 4501 虚無感ガ仄暗い、72-219順
 4502 後味ガ鮮明 73-248順
 4503 戦慄ガたよりない 48-7順
 4504 心ガ透明、(慣)31-95順(2回)
 4505 解放感ガ透明 73-255順
 4506 感情ガ透明 69-262順
 4507 横顔ガ透明 73-350順
 4508 裏切りガ澄明 69-137
 4509 距離ガ白い、69-161順
 4510 眼つきガ白い、52-165順
 4511 鶏鳴ガ白い、69-181
 4512 心ガ蒼白 62-373順
 4513 心ガ黒い、55-26名
 4514 怒りガ黒い、72-372順
 4515 夏ガ黒い、73-340順
 4516 臭いガどす黒い、31-101順
 4517 心ガ赤い、55-26名
 4518 疲れガ蒼い、49-73順
 4519 年齢ガ醜い、37-311名
 4520 魂ガしずか、72-245名
 4521 悲哀ガ静か、49-78順、73-312順
 4522 話ガ抹香くさい、慣55-279
 4523 永遠性ガ微くさい、(慣)69-235順
 4524 見方ガ青くさい、(慣)55-387順
 4525 独断ガ血なまぐさい、69-194順
 4526 調子ガ甘い、(慣)72-366順
 4527 家庭ガ甘い、慣46-292順
 4528 夢ガ甘い、(慣)64-230順
 4529 気持ガ甘い、慣40-270順
 4530 悲哀ガ甘い、(慣)49-46順
 4531 声ガ甘い、慣72-354順、355順、358順、369順
 4532 期待ガ甘い、慣40-270順、73-304順

382 3. 分類結果

- 4533 空想が甘い、(償)64-51順
 4534 音楽が甘い、償72-345順
 4535 (晩春の色)が甘い、62-253順
 4536 旋律が甘い、72-314順
 4537 目が甘い、49-29順・否
 4538 センチが甘っちょろい、72-360順
 4539 声が甘ったるい、償72-414順
 4540 家庭讃歌が甘ったるい、(償)73-348順
 4541 飾りが甘ったるい、73-206順
 4542 気持が酸っぱい、40-272順
 4543 感情が甘酸っぱい、(償)49-20順
 4544 心が塩辛い、73-337
 4545 (夢を追う)ことがにがい、55-267
 4546 性格がにがい、61-60名
 4547 (悔恨の)情が苦い、償73-354順
 4548 声が苦い、72-303順
 4549 諦めが苦い、72-431順
 4550 思いが苦い、償73-248順
 4551 涙が苦い、(償)50-40順
 4552 相貌がにがい、61-60名
 4553 後悔が味苦い、72-224順
 4554 微笑が味苦い、72-302
 4555 光(の涙み)が甘苦い、46-345順
 4556 鳥の子餅が清い、35-228順
 4557 妄想が薄汚い、73-281順
 4558 調子が固い、償34-155順
 4559 風景が硬い、73-350順
 4560 朝が堅固、76-246順
 4561 警察が(ふんわりと)柔かい、50-361
 4562 親しみが柔らかい、41-130
 4563 感情がねばっこい、50104順
 4564 臭いが粘っこい、76-357順
 4565 気持が濃い、(償)46-358
 4566 不安が濃い、償72-186順、240
 4567 余韻がしめっぱい、64-228順
 4568 気分が湿っぱい、(償)50-79順
 4569 旋律が熱い、76-258順
 4570 ディテールが熱っぱい、74-50
 4571 沈黙が熱っぱい、72-301
 4572 心があたたかい、償55-256順
 4573 嫌悪が甘暖かい、46-348順
 4574 眼差があたたかい、償55-479順
 4575 微笑が温かい、(償)76-239順
 4576 声音が温かい、69-175
 4577 雪が暖かい、50-337
 4578 虚無が冷たい、46-352順
 4579 情が冷たい、(償)72-207
 4580 眼差しがつめたい、償64-237順、74-54
 順(2回)
 4581 笑いが冷たい、償50-104順
 4582 言葉がつめたい、74-280
 4583 電話が冷たい、55-295
 4584 眼が冷たい、償72-412順
 4585 目鼻立ちが冷たい、(償)72-206順
 4586 調子が冷やか、償33-24順
 4587 語気が冷やか、(償)73-320
 4588 知識が冷やか、(償)62-263順
 4589 懐が寒い、償34-144
 4590 自由が肌寒い、68-11
 4591 感情が血みどろ、55-96
 4592 理性が血みどろ、55-96
 4593 脱衣籠が腰高、(償)73-190順
 4594 顔が丈夫、68-66順
 4595 想像がたくましい、償73-205
 4596 緊張が新鮮、68-36順
 4597 気分が新鮮、償68-51順
 4598 知識が新鮮、(償)62-263順
 4599 思いが新鮮、(償)41-152
 4600 顔が新鮮、72-346順
 4601 心がみずみずしい、72-200

4602 夢ガみずみずしい、55-152順

4603 匂いガ青々しい、62-287順

〔名カラ形(動)〕

4604 ことカラ遠い、73-470

〔名ニ形(動)〕

4605 感情ニ不感性 (慣)46-320

4606 トリックニ不感性 46-320

4607 記憶ニ貧乏 74-434順

4608 運命ニ従順 52-148

〔名ヨリ形(動)〕

4609 他人ヨリ透明 73-296

名名形(動)

〔名ガ名ト形(動)〕

4610 火ガ火ト親しい、69-257

〔名ガ名ニ形(動)〕

4611 蚊帳(の形)ガ風ニ忠実 69-160

4612 響きガ耳ニ涼しい、72-217

〔名ガ名ヨリ形(動)〕

4613 (愛の)想いガ旋律ヨリ甘い、72-303順

副詞・形容(動)詞

〔副形(動)〕

4614 (気管支が)こっそり 悪い、74-436

名詞・副詞

〔名副〕

4615 生活ガポツカリ 72-383順

4616 火と火とガお互いに 69-257

4617 光ガふわりと 73-277

4618 心ガずたずた (慣)55-388

4619 金閣ガかるがると 69-155

4620 空ニぎっしりと 62-310

4621 仮面ガうるさそうに 73-272

4622 仮面ガものほしそうに 73-271

4623 光ガこれ見よがしに 73-236

4624 仮面ガ確信ありげに 73-271

4625 法律ガぐずぐず(言う) (慣)35-208

4626 若さガくつきり 62-103

4627 心ガ白々と 72-397

4628 仮面ガさすが、73-301順

名詞・名詞

〔名名〕

4629 金閣 自ら 69-206

4630 肉体性 「嘉門」 62-307

4631 霊性 「まつ子」 62-307

4632 彼ら 若木 52-120

〔名ガ名〕

4633 年月ガ(自分の)もの 55-324否

4634 男ガ生ぐさいもの 35-343

4635 結婚することガ溝をとびこえること

55-102

4636 ほだされることガ目をつぶること 55-

-212

4637 生きることガ革命 68-74

4638 仮面と入れ墨ガ血縁 73-310

4639 暗黒ガ下地 69-287

4640 眼の光ガ家の冬の気の根源 62-261

4641 眼ガ附帯条件 50-384

4642 歯ガ附帯条件 50-384

4643 金閣ガ虚無 69-224

4644 人生ガ断絶状態 55-448

4645 希望ガ哀調 49-42名・順

4646 泪ガ力 64-67

4647 みそっ歯ガ乱杭 慣50-293

4648 生きることガ明日 68-86

384 3. 分類結果

- 4649 心がま向い 55-383受・使
- 4650 君が地面 32-34
- 4651 猫が美の塊まり 69-218
- 4652 顔がかたまり 31-122
- 4653 卒業試験が団塊^{かたまり} 62-286
- 4654 就職難が団塊 62-286
- 4655 感情が一渦紋 46-323
- 4656 疑惑が渦 73-459
- 4657 楽しみが空隙 37-310
- 4658 叫びが束 73-188
- 4659 台所改造が第一歩 償55-277
- 4660 守富が袴子の一部 55-207
- 4661 闇が集まり 31-115
- 4662 煙がはかなさ 72-235
- 4663 虫が俺 31-70
- 4664 おかねが自分 68-60
- 4665 木が他人 52-120
- 4666 弟が(その)人 46-328
- 4667 海がお喋り者 73-353
- 4668 仮面が誘惑者 73-320
- 4669 仮面が破廉恥漢 73-280
- 4670 守富が神さま 55-126
- 4671 俺が神様 (償)62-323
- 4672 咲子が女神 (償)62-283
- 4673 旦那が仏様 62-336
- 4674 僕が亡霊 63-357
- 4675 怨恨が悪霊 (償)50-29
- 4676 少女が化物 50-26
- 4677 女が化物 (償)55-480
- 4678 醜怪さが一人前 73-212順
- 4679 犬が養子 31-66順
- 4680 仮面と緋帯が兄弟 73-333
- 4681 日常が相手 73-278
- 4682 瓦が相手 36-10順
- 4683 金がかたき 償55-283
- 4684 「はいね」が友 64-82
- 4685 テーストが恋人 46-294
- 4686 犬が(無辜の)民 31-90
- 4687 重吉が超人 (償)52-165
- 4688 意識が曲者 (償)72-204
- 4689 犯罪が花形 (償)73-299
- 4690 無能老朽が適役 34-154
- 4691 (その)男が世界 (償)55-194
- 4692 孤独が地獄 73-264
- 4693 夜が職場 55-31
- 4694 下界が刑務所 73-338
- 4695 舞鶴湾が(海の)予感(そのもの) 69-245
- 4696 闇が執行猶予 73-183
- 4697 旗が愛 41-142
- 4698 地面が天(のつもり) 32-34
- 4699 素顔が仮面の模倣 73-339順
- 4700 打撃が帳消し 償55-355
- 4701 顔が検定済み 73-224名・順
- 4702 古井戸が概念 55-8
- 4703 現在が欲望の具象化 72-297順
- 4704 レコードが道 73-199
- 4705 むすび方が商標 55-356
- 4706 不貞腐^{ふてくされ}が言葉 64-66
- 4707 舞鶴湾が海の総称 69-245
- 4708 おまえが記号 73-317
- 4709 大声が沈黙 73-242
- 4710 金閣が無言 69-139
- 4711 不満が愛の告白 55-157
- 4712 活動写真が教科書 37-309
- 4713 性質が詩 49-55
- 4714 私が陰画 69-162
- 4715 彼が陽画 69-162
- 4716 鶴川が陽画 69-179
- 4717 愛が仮面の剥がしっこ 73-345
- 4718 覆面がゲーム 73-234

- 4719 生活(すること)ガ革命 68-74
- 4720 生命力ガ贈り物 62-328
- 4721 結婚ガ職業 55-382
- 4722 本ガ定食料理 69-273
- 4723 生ガ特製 69-252名・順
- 4724 生ガ別誂え 69-252名・順
- 4725 蛭の巢ガ合金 73-213名・順
- 4726 蛭の巢ガ金属製 73-212, 213名・順
- 4727 顔ガコンクリート製 68-66
- 4728 気もちガやわ普請 50-351順
- 4729 目的ガ(注文の)品 73-293
- 4730 痴漢ガ一方交通 73-317名・順
- 4731 行為ガ剰余物 69-289
- 4732 有難味ガ遺物 73-340
- 4733 苦惱ガ売物 (償)73-250使
- 4734 正直ガ売物 償73-275使
- 4735 話ガ土産 償46-363
- 4736 自分ガ(ブリキの)切屑 53-8
- 4737 相手ガ片^{かけ} 36-10
- 4738 映像ガ軸 (償)73-277使
- 4739 子ガかすがい、 償46-193
- 4740 頭ガ(コロッポの)栓 53-5
- 4741 善意ガ電気毛布 (償)73-285
- 4742 入れ墨ガシャツ 73-309
- 4743 作家生活ガ楯 償49-92使
- 4744 道徳ガ楯 50-28
- 4745 女ガ装身具 76-20
- 4746 (この)ひとガカツオブシ 55-200
- 4747 状態ガ餌 69-148使
- 4748 花ガこんべとう 31-59順
- 4749 自由ガ薬 73-289
- 4750 胸(の中)ガ(鬼の)棲家 46-194
- 4751 邸ガ城 50-51
- 4752 彼ガ柵 73-306
- 4753 愛妾ガ垣根 50-57
- 4754 朝鮮ガ廊下 62-303使
- 4755 枝ガ軒 (償)31-60
- 4756 ことガ窓 49-37
- 4757 瞳ガ窗 (償)31-94順
- 4758 眼ガ皿 (償)62-119使
- 4759 年月ガ道具 55-489
- 4760 むすこガ道具 46-292
- 4761 家庭ガ道具 55-489
- 4762 妻ガ道具立て 46-335
- 4763 時間ガ壺 73-321
- 4764 喟嘆ガ活字 72-265
- 4765 泪ガ(呪縛する)罨 64-67
- 4766 子供ガ武器 49-8使
- 4767 わが身ガ玩具 76-33名・順
- 4768 人生苦ガ玩具 31-80名・順
- 4769 おまえガ(ガラス細工の)人形 73-319
- 4770 アルコールガ偽仮面 73-306
- 4771 素顔ガ仮面 73-338
- 4772 罐詰ガ勲章 35-192
- 4773 書生ガ記念碑 52-130
- 4774 独身ガかんばん (償)55-149使
- 4775 不具ガ(鼻先につきつけられる)鏡 69-189
- 4776 仮面ガ隠しカメラ 73-335
- 4777 彼ガ機械 31-55
- 4778 愛情(の深さ)ガ秤 50-92使
- 4779 顔ガ通路 73-198, 199, 346
- 4780 乳房(の実質)ガ闇 69-224
- 4781 感情ガ暗黒 69-179名順
- 4782 気分ガ灰色 (償)62-82順
- 4783 現実ガ灰色 (償)49-43順
- 4784 「わがそでの記」ガソプラノ 64-45
- 4785 人間ガ物質 35-441
- 4786 感情ガ膠質 46-323名・順
- 4787 汐見(さん)ガ(鑽きの)石 72-289
- 4788 相手ガ石塊^{いしころ} 36-10

386 3. 分類結果

- 4789 耕ガ粘土 55-306
 4790 曲ガ粘土(の塊) 73-187
 4791 ぼく(の中身)ガ(腐った)水 73-348
 4792 体臭ガあぶく 73-444
 4793 理窟ガ潮 76-226
 4794 霊ガ潮 31-54
 4795 気ガ下火 (償)31-101
 4796 おまえガ空 72-357順(2回)
 4797 キリストガ天 32-34
 4798 夫ガ天 50-19使
 4799 認識ガ(人間の)原野 69-264
 4800 嫉妬ガ急流 50-19
 4801 認識ガ(人間の)海 69-264
 4802 表情ガ伝達経路 73-199
 4803 国柄ガ背景 46-366使
 4804 清州ガ(一匹の)牡 55-105
 4805 部屋ガ(死んだ)細胞 76-238
 4806 君ガ白桔梗 35-321
 4807 われガ(野の)百合花 41-141
 4808 心ガせきちく (償)50-374
 4809 気ガもみじ (償)50-374
 4810 関係ガ押し花 73-322
 4811 着物ガ種 (償)33-36使
 4812 人間ガ動物 (償)46-359
 4813 自分ガ雄鶏 52-145
 4814 汚点ガ鷗 72-196
 4815 私ガ魚 73-442
 4816 金ガ蛆 35-363
 4817 私ガ蜂の目 69-228
 4818 りさ子ガかぶと虫 35-275
 4819 代議士(の一生)ガ驛 31-70
 4820 八ミリの(音)ガ驛(の声) 72-416
 4821 守富ガ肉体の延長 55-325
 4822 並木ガ裸 償35-318順, 62-269
 4823 心ガ裸か、 50-118名・順
 4824 愛ガまっばだか 32-14名・順
 4825 心ガ剥きだし 50-389名・順
 4826 金閣ガ素肌 69-172
 4827 自転車ガ足 (償)35-305
 4828 卷蔓ガ指 31-75順
 4829 仮面ガ育ち盛り 73-276名・順
 4830 他人知らずガ重症 73-348順
 4831 心持ガ病上り 36-97名・順
 4832 ドアガ皮膚病やみ 73-278名・順
 4833 不眠ガしこり 73-190
 4834 欲望ガ瘤 73-300
 [名カラノ名]
 4835 根カラノ勤め人 償52-125
 [名デ名]
 4836 嬉しさデーばいだ 償33-27
 4837 (感謝の)気持テイいっぱい 償73-345
 4838 笑いデー杯 償49-30
 4839 好奇心テイいっぱい 償46-346
 4840 音テイいっぱい (償)55-86
 [名ト名]
 4841 仮面ト血縁 73-310
 4842 心トまむかい 55-422
 4843 犬ト友だちづきあい 50-261
 [名ニ名]
 4844 恋愛ニ勇者 55-193
 [名ノ名]
 4845 羞恥心ノ正体 73-205
 4846 母親ノ位 46-315
 4847 仮面ノ靈験 73-315
 4848 裸木ノ骨組 (償)62-256
 4849 理想生活ノ構図 (償)46-335
 4850 気持ノ平衡 (償)64-53
 4851 色ノ諧調 36-215
 4852 心ノ張り 償46-348
 4853 気持ノ張り 償36-77, 73-309

- 4854 気持ノ結ぼれ (償)40-263
- 4855 芸ノ力 償50-362
- 4856 人がらノ力 償50-362
- 4857 沈黙ノ圧力 73-239
- 4858 仮面ノ生命力 73-258
- 4859 翹ノ乱舞 (償)31-108
- 4860 人生ノ道程 (償)72-166
- 4861 記憶ノ道順 73-347
- 4862 人生ノふみだし (償)55-157
- 4863 眼醒めノ第一歩 (償)37-313
- 4864 人生ノ門出 償55-179
- 4865 時間ノ流れ(が停滞する) 償73-255
- 4866 心ノ行き通い (償)52-160
- 4867 記憶ノ下積み(の底) 63-19
- 4868 ひやかし顔ノ持って行き場 償62-158
- 4869 心ノ位置 55-328
- 4870 気持ちノ位置(が上下する) 46-343
- 4871 人生ノ幕間 73-189
- 4872 緑ノ秋 31-128前
- 4873 銀ノ秋 31-128前
- 4874 のっぺらぼうノ(何)週間 73-235前
- 4875 薄笑い色ノ夜明け 73-347前
- 4876 永遠ノ夜の世界 73-223
- 4877 鳥の子餅ノ未来 35-228前
- 4878 恋愛ノ一年生 46-321
- 4879 人間(同志)ノ結び目 46-322
- 4880 心ノ果て (償)46-297
- 4881 三角関係ノ重心 73-327
- 4882 心ノ重心 (償)49-86
- 4883 感情ノ範囲 46-316
- 4884 愛情ノ領域 (償)55-58
- 4885 人生ノ特等席 55-283
- 4886 胃袋ノ手錠のあと(も生々しい) 73-301順
- 4887 精神ノ傷痕 (償)72-168(2回)
- 4888 人間関係ノ廢墟 73-300
- 4889 気持ノ方向 (償)49-74
- 4890 陶醉ノ彼方 72-283
- 4891 記憶ノ彼方 (償)63-19
- 4892 忘却ノ彼方 72-283
- 4893 声ノ行先 55-451
- 4894 会話ノ行きつく先 73-241
- 4895 心ノ芯 63-18
- 4896 体ノ芯 (償)72-358
- 4897 頭ノ芯 償72-225
- 4898 母性ノ中核 (償)46-373
- 4899 仮面ノ中枢 73-323
- 4900 気持ちノ頂上 (償)64-53
- 4901 雑鬧ノ頂上 32-10
- 4902 人情ノはずれ 46-320
- 4903 関係ノ切断面 62-263
- 4904 執着ノ切断面 62-263
- 4905 失望ノ裏 64-231
- 4906 言葉ノ裏 償72-423
- 4907 心ノ表面 (償)55-200
- 4908 思想ノ上つら 償31-122
- 4909 必要悪ノ前 73-283
- 4910 人生と私ノ間(に金閣が立ちあらわれる) 69
-227
- 4911 心ノ尖 62-363
- 4912 感情ノ鈍^は 36-72(2回)
- 4913 生命ノ末端 69-170
- 4914 夜ノ底 76-239
- 4915 僕ノ底 (償)72-252
- 4916 心ノ底 償55-429
- 4917 意識ノ底 償73-249
- 4918 胸ノ底 償55-125
- 4919 心ノ奥底 償62-365
- 4920 記憶ノどん底 (償)63-19
- 4921 丘ノ横腹 償31-96
- 4922 土手ノ横腹 償36-78

388 3. 分類結果

- 4923 苔ノ横腹 31-129
- 4924 仮面ノ鼻面 73-320
- 4925 感情ノ原形体 76-219
- 4926 魂ノ輪廓 73-199
- 4927 心ノ輪廓 73-199
- 4928 主題ノ輪廓 (償)69-287
- 4929 愛情ノ姿 46-297
- 4930 風ノ姿 31-81
- 4931 火ノ蒼ざめた姿 69-265
- 4932 雲ノ立姿 69-146
- 4933 雨ノ後姿 31-84
- 4934 抵抗ノ姿勢 償73-297
- 4935 火ノなよやかな姿態 69-266
- 4936 いたわりノ線(をふみこえる) 55-494
- 4937 矛盾ノかたまり 償55-183
- 4938 嘘ノかたまり 償73-210
- 4939 音響ノかたまり(がばらばらに引き離される) 35-180
- 4940 灯ノ粒 46-293
- 4941 胸(の奥)ノ波紋 55-123
- 4942 心ノささくれ 62-153
- 4943 感情ノ渦 (償)49-73
- 4944 心ノ襲 73-313
- 4945 迷路ノひだ 73-179
- 4946 精神ノ皺 55-87
- 4947 放心ノ皺 63-17
- 4948 怯えノ皺 63-17
- 4949 運命ノ岐路 償55-324, 429
- 4950 愛情ノ疏通口 (償)72-384
- 4951 嫉妬ノはげ口 (償)73-280順
- 4952 笑いノはげ口 73-322
- 4953 光ノ切口 73-249
- 4954 心ノ傷口 (償)46-298
- 4955 風ノ縞 76-229
- 4956 波ノ縞目 72-195
- 4957 弾力ノ渦卷 46-318
- 4958 眼鼻立ちノ切れ目 46-347
- 4959 大恥ノ群 73-347
- 4960 河面ノ一片 46-367
- 4961 野原ノ一片 46-355
- 4962 青空ノ薄片 69-250
- 4963 考えノ片鱗 償31-122
- 4964 反省ノかけら 62-359
- 4965 健忘性ノカケラ (償)63-19
- 4966 隊形ノ型枠(に流し込まれる) 73-225
- 4967 美ノ総量 69-250
- 4968 気持ノ分量 46-352
- 4969 仮面ノ近似値 73-288
- 4970 気分ノ振幅 73-186順
- 4971 一日ノ厚み 50-271 (2回)
- 4972 心ノ角度 55-33
- 4973 知識ノ角度 62-263
- 4974 美ノ目方 69-250
- 4975 現実ノ鮮度(が落ちる) 69-128順
- 4976 ニュースノ鮮度 (償)52-124
- 4977 幸福感ノ余韻(を聞く) 72-285
- 4978 生活ノ桁 (償)68-57
- 4979 淪落ノ第一歩 (償)64-67
- 4980 太陽時間ノページ 73-322前
- 4981 青春ノ(最後の)一頁 償72-300
- 4982 沈黙ノ頁 76-221前
- 4983 大恥ノ群 73-347
- 4984 微妙なものノ集団 46-291
- 4985 自分のなかノあなた 68-112
- 4986 自分のなかノ(もうひとりの)自分 55-497
- 4987 第一号ノ他人 73-237前
- 4988 一個ノ人間 償55-221前
- 4989 一個ノ性格破産者 償32-17前
- 4990 真実ノやつ 償73-312
- 4991 距離ノやつ 償73-308

- 4992 自我ノ奴 償72-308
- 4993 自尊心ノやつ 償73-295
- 4994 欲望ノやつ 償73-301
- 4995 しきたりノやつ 償73-297
- 4996 毛虫ノ奴 (償)52-136, 52-137
- 4997 親玉ノキリスト 32-35
- 4998 君ノ天使 62-284
- 4999 意志ノ幽霊 31-67
- 5000 原稿ノゆうれい 35-234
- 5001 女房可愛さノ亡霊 62-130
- 5002 観念ノ亡霊 64-72
- 5003 本能ノ悪魔 62-300
- 5004 一匹ノ男 (償)35-389前
- 5005 一個ノ女 (償)62-364前
- 5006 一匹ノ女 52-127前
- 5007 あの人のなかノ女(か目をさます) 55-430
- 5008 眼ノ敵 償68-29前
- 5009 年齢ノ奴隷 55-487
- 5010 内面世界ノ王者 69-128
- 5011 女房ノ天才 62-162 (2回)
- 5012 遅刻ノ名人 55-146
- 5013 波ノ先達 69-161
- 5014 相手の中ノ痴漢 73-316
- 5015 年齢(の)差ノとりこ 55-39
- 5016 情熱ノとりこ 償55-107
- 5017 欲求ノ虜 (償)69-233
- 5018 復讐ノとりこ (償)73-319
- 5019 ぼくノ迷子 73-244
- 5020 繻帯ノ中毒患者 73-234
- 5021 えくぼノ番人 35-235
- 5022 鉛ノ兵隊 35-315前, 316前
- 5023 反動ノ親分 (償)68-93
- 5024 魂ノ故郷 (償)55-498
- 5025 詩ノ領国 31-71
- 5026 コップノ世界 31-128
- 5027 不自由ノ世界 73-292
- 5028 精神ノ地獄 (償)50-90
- 5029 肉ノ無何有郷 62-325
- 5030 台詞ノ二番手(を繰り出す) 73-315
- 5031 蛭ノ軍勢 73-185
- 5032 病院ノ追手 62-352
- 5033 一片ノ反逆精神 (償)34-159前
- 5034 一滴ノ満足感 72-397前・順
- 5035 水母^{くらげ}ノ無力感 72-222前
- 5036 詩美ノ味覚 36-212
- 5037 空気ノ肌ざわり 33-24
- 5038 宙ノ夢 46-330
- 5039 解放感ノ酔い、73-290
- 5040 頭蓋骨(の裏)ノ酔い、73-308前
- 5041 原稿ノ邪気 35-234
- 5042 ひとつノ感情 69-162前
- 5043 一滴ノ悦び 72-397前・順
- 5044 一かけらノ愛情 (償)50-92前
- 5045 一雫ノ愛情 50-52前・順
- 5046 膝ノ表情 55-434
- 5047 ゼニゴケノ面構え 52-134
- 5048 私の中ノ(禁圧の)声 62-307
- 5049 内心ノ声 (償)69-235
- 5050 「わがそでの記」ノこえ 64-45
- 5051 天ノ声 償69-279
- 5052 立木ノ(悲しい)声 55-324
- 5053 一かけらノ自信 64-52前・順
- 5054 仮面ノ自信 73-319
- 5055 風ノ意志 69-212
- 5056 仮面ノ意図 73-349
- 5057 滑稽ノ罪 73-356
- 5058 一片ノ記憶 64-45前
- 5059 ひと握りノ想い出 28-462前・順
- 5060 胸一ぱいノ思い 償50-34
- 5061 ひときれノ考え 63-19前

390 3. 分類結果

- 5062 一片ノ関心 64-49前
 5063 仮面ノ庇理屈 73-289
 5064 精神ノ皺(にあかがたまる) 55-87
 5065 性ノ掟破り 73-304
 5066 戦争ノ手 63-22
 5067 誘惑ノ手 償62-83
 5068 孤独ノ処方箋 76-221
 5069 魂ノ錬金術 72-221
 5070 化粧嫌いの療法 73-340
 5071 金閣ノ流儀 69-227
 5072 心ノことば 55-121
 5073 酒場ノ商標 55-356
 5074 幸福ノ集成図(を組みたてる) 46-335
 5075 猫ノ戦闘合図 50-262
 5076 風ノ便り 償34-158前, 68-16前
 5077 沈黙ノ対話 73-323
 5078 運命ノ皮肉 (償)52-146
 5079 いのちノ潤色 (償)46-364
 5080 幸福(そのもの)ノ絵 42-136
 5081 錯覚(と街と)ノ二重写し 36-211
 5082 結婚ノ前奏曲 (償)35-327
 5083 内心ノ劇 69-234
 5084 一片ノ歴史 73-293前
 5085 第二ノ人生 償55-157
 5086 論理上ノ受難 73-181
 5087 自然ノ饗宴 (償)55-127
 5088 (人間と)石ノ鬼ごっこ 69-201
 5089 愛情ノひとり相撲 (償)50-19
 5090 運命ノ責務者 46-357
 5091 胃袋ノ復権 73-353
 5092 生命ノ復権 73-353
 5093 顔ノ版權 73-297
 5094 仮面ノ人格 73-271
 5095 性格ノしわざ 償55-95
 5096 時間ノしわざ 55-310
 5097 官能ノしわざ (償)55-495
 5098 酔いノしわざ (償)55-460
 5099 記憶ノしわざ (償)55-494
 5100 概念ノしわざ 55-8
 5101 血ノしわざ (償)55-326
 5102 仮面ノ手管 73-320
 5103 妥当性ノ仲間入り 46-338
 5104 人生ノ戦い 48-14
 5105 滑稽ノ形(を宣告する) 73-315
 5106 形態ノ縛め 69-289
 5107 孤独ノ免疫体 73-284
 5108 仮面ノ仕打ち 73-324
 5109 顔ノ相場 73-266
 5110 お気持ちノお裾分け (償)50-393
 5111 初恋ノ芽(を植えつける) (償)50-99
 5112 白骨ノ建築 69-137
 5113 啓蒙主義と合理主義ノ定食料理 69-273
 5114 恥ノ上塗り (償)73-350
 5115 嘘ノ上塗り(が剥げる) 償73-183
 5116 時間ノ凝固物 69-251
 5117 愛欲ノ産物 55-371
 5118 心ノ重荷 償46-161
 5119 偽善と偽悪ノアマルガム 73-306
 5120 未来ノ燈芯 69-170
 5121 タンスノこやし 償55-74
 5122 苦悩ノ輪 73-279
 5123 想像ノ環 64-79
 5124 自然ノ歯車 69-238
 5125 雨降りノ棒一本 63-20
 5126 義理人情ノしがらみ 償64-49
 5127 愛情ノ釘 50-92
 5128 道理ノ釘 50-92
 5129 友情と友情ノ楔目 72-166
 5130 清州ノおもり (償)55-425

- 5131 陶酔ノ絃 72-285
- 5132 体ノ紐 50-374
- 5133 顔ノ紐 50-374
- 5134 内臓ノ吊り紐(が切れる) 73-250
- 5135 生活ノ鎖(を引き摺り込んで来る) 48-14
- 5136 五感ノ網 73-243
- 5137 未練ノ糸(につなぐ) (償)48-10
- 5138 連想ノ糸(に繋がる) 72-172
- 5139 影ノ糸(が織り込まれる) 31-130前
- 5140 感興ノ糸目(を継ぐ) 46-321
- 5141 気持ノ結ばれ(を揉みほぐす) 償40-263
- 5142 生活ノ綾 償49-28, 29
- 5143 衿子ノ生地 (償)55-16
- 5144 心ノきもの 35-228
- 5145 譬喩ノ衣(を優雅に着こなす) 73-280
- 5146 満艦飾ノ下着 償50-372前
- 5147 石ノ帽子 36-127
- 5148 さじきノ帯 62-167(2回)
- 5149 アルコール液ノ帯 76-367
- 5150 心ノ羈絆 73-234
- 5151 衿子ノ付録 償55-212
- 5152 桜ノ傘 50-50
- 5153 理性ノ盾 36-104
- 5154 進学ノ餌 69-180
- 5155 魂ノ塗り薬 73-187
- 5156 力ノ棲家 69-288
- 5157 こおろぎノ家 31-61
- 5158 心(のなか)ノ二階(をあげる) 55-338
- 5159 (性の)禁止ノ柵 73-317(を打ち砕く), 317
(を越える), 319(の破れ目からその不貞を覗く),
322(に手をかける)
- 5160 気持ノ段々 64-58
- 5161 武蔵野市ノ表玄関 (償)55-12
- 5162 一家ノ支柱 償55-101
- 5163 心ノ支柱 (償)55-98
- 5164 虚無ノ壁 55-387
- 5165 無表情ノ壁 73-243前
- 5166 夢想ノ壁 72-223
- 5167 不可能ノ壁 (償)68-42
- 5168 孤独ノ壁 72-223
- 5169 芸術ノ鉄壁 46-356
- 5170 心ノ窗 償31-94
- 5171 魂ノ窓 73-255
- 5172 酒場女ノ舞台 55-356
- 5173 内界と外界との間ノ戸 69-128
- 5174 仮面ノ扉 73-346
- 5175 顔ノ扉(を開く) 73-200
- 5176 顔ノ格子 73-188
- 5177 遠慮ノ幕 46-318
- 5178 煙ノ幕 (償)63-23
- 5179 死ノ畳 (償)68-6前(2回), 77前
- 5180 若草ノ褥とじ(償)72-222
- 5181 人間ノ容器 73-184
- 5182 陶酔ノ揺り籠 76-29
- 5183 歓楽ノ揺り籠 76-29
- 5184 想像ノ絵具 36-211
- 5185 雪ノ絵絹 69-173
- 5186 孤独ノ刻印 73-264
- 5187 内界と外界との間, (結びつく)鍵 69-284
- 5188 生活ノ鍵 50-120
- 5189 眼ざましノ針 償40-264
- 5190 時計ノ針 償40-265
- 5191 仮面ノ畏 73-286
- 5192 自業自得ノかんな 62-84
- 5193 感情ノ楽器 72-245
- 5194 肉ノ仮面 73-255
- 5195 関心ノ的 償73-352
- 5196 義母ノ看板 (償)55-504
- 5197 生活ノ灯 (償)49-32前
- 5198 自問自答ノ合わせ鏡 73-319

392 3. 分類結果

- 5199 記憶ノフィルム 62-253
- 5200 皮膚ノ敵 73-347
- 5201 草ノトンネル (償)31-56
- 5202 魂ノ通路 73-199
- 5203 心ノ迷路 40-266
- 5204 人生ノ迷路 (償)72-191
- 5205 かなしみノ橋 35-360, 361
- 5206 滅亡ノ光り 69-206
- 5207 時ノ光り 69-287前
- 5208 意識ノ光 (償)73-268
- 5209 期待ノ光 73-337順・否
- 5210 胸の中ノ光 68-22
- 5211 真顔と微笑とのあいだノ輝き 73-245
- 5212 …者の内部ノ閃光 73-322
- 5213 未来ノ影 72-305
- 5214 笑いノ影 62-343
- 5215 失望ノ影 償46-327
- 5216 悔恨ノ影 73-331
- 5217 死ノ影 (償)68-12, 72-171, 231
- 5218 原稿ノまぼろし 35-234
- 5219 恐怖ノ幻影 68-17
- 5220 疲労ノかげ (償)62-91
- 5221 慣用句ノ陰(に身をさける) 73-186
- 5222 女ノ色 62-347
- 5223 疲労ノ色 (償)74-50
- 5224 不快ノ色 (償)73-231
- 5225 退屈ノ色 (償)68-75
- 5226 よろこびノ色 償55-503
- 5227 苦痛ノいろ 償64-66
- 5228 恐怖ノ色 償62-300
- 5229 気後れノ色 (償)73-231
- 5230 悲憤ノ色 (償)32-56
- 5231 軽蔑ノ色(にいろどられる) (償)73-340
- 5232 侮蔑ノ色 (償)73-248
- 5233 期待ノ色 (償)73-337順・否
- 5234 不信ノ色 (償)73-340
- 5235 皮肉ノ色 (償)73-194
- 5236 嘲りノ色 (償)68-74
- 5237 声ノ色合い 73-204順
- 5238 心理ノスペクトル (償)73-355
- 5239 心ノ音 55-97
- 5240 よろこびノ鈴の音 55-498
- 5241 苦痛ノひびき 76-239
- 5242 生活ノひびき (償)68-72
- 5243 勝利ノひびき (償)68-83
- 5244 相手ノ共鳴 償73-353
- 5245 沈黙ノざわめき 42-139
- 5246 雨ノ聲音 償31-84
- 5247 ひとかけらノ匂い 55-151前
- 5248 生ノ香氣(が)かぐわしい) 72-237
- 5249 かくれごとノ体臭 73-444
- 5250 親ノ味 (償)55-170
- 5251 あんまノ味 償55-89
- 5252 死ノ味 42-135
- 5253 心(の中)ノ(苦い)後味 72-267
- 5254 音楽ノ後味 (償)72-259
- 5255 出会いノ後味 (償)73-205
- 5256 切餅ノみかげ石 (償)50-257前
- 5257 声ノ灰汁(が)脱ける) 46-302
- 5258 生活ノ垢(を)洗いおとす) 61-83
- 5259 倫理ノ残滓 50-35
- 5260 自分ノ空気 49-51
- 5261 家庭ノ空気 償49-84
- 5262 沈黙ノ氷塊 73-238
- 5263 人ノ洪水 (償)35-182
- 5264 不安ノ洪水 73-341
- 5265 臨時ノ風 50-362
- 5266 桜ノ雲 (償)35-211
- 5267 花ノ雲 72-222
- 5268 酒ノ霧 (償)76-244

- 5269 小砂利ノ雨 (價)64-242
 5270 理性ノ晴れ間 64-53
 5271 気分ノ照り翳り (價)50-46
 5272 心ノあらし (價)55-325
 5273 激情ノ嵐 (價)55-156
 5274 世の中ノ浪風 (價)50-75
 5275 時代ノ波 (價)49-43
 5276 一枚ノ波 (價)63-352前
 5277 ひとノ波 價55-380, 63-27
 5278 社会ノ波 (價)49-93
 5279 感情ノ波(の起伏) 62-273
 5280 色テーブノ浪 (價)46-323
 5281 屋根ノ波 41-163, 62-357[浪]
 5282 シャクリあげノ波 55-223
 5283 国民大会ノ余波 (價)32-55
 5284 理智ノ結晶 69-250
 5285 破廉恥ノ結晶 73-293
 5286 欲望ノ火 (價)62-352
 5287 信仰ノ火(が消える) 72-274
 5288 囚われノ火 69-265
 5289 情熱ノ焰 (價)72-298
 5290 愛ノ焰 (價)72-266
 5291 (二〇〇〇万)人ノ鉦脈 76-265
 5292 破片ノ山 價76-221
 5293 雲ノ峰 價62-115
 5294 火ノ原 價63-28
 5295 人間ノ大河 35-188
 5296 斜光線ノ小川 76-266
 5297 破滅ノ淵 55-98
 5298 不幸ノ淵 50-34
 5299 発作ノ(暗い)ふち 73-470
 5300 快さノ泉 (價)69-273
 5301 理性ノ泉 72-298
 5302 愛欲ノ泥沼田 50-104
 5303 虚無ノ海 68-66, 67
 5304 時間ノ海 69-226
 5305 燈火ノ海 (價)46-293
 5306 火ノ海 價63-23(4回), 25, 26(2回)
 5307 排気ガスノ海 (價)73-353
 5308 記憶ノ森 (價)31-119
 5309 睫毛ノ森 72-244
 5310 人間ノ密林 73-222
 5311 皮膚(の下)ノ荒蕪地 76-224
 5312 鏡ノ沙漠 73-347
 5313 嫉妬ノ毒 73-301
 5314 金ノあざみ 62-177
 5315 銀ノあざみ 62-177
 5316 心ノ芽 62-101
 5317 愛ノ芽 50-31
 5318 恋ノ芽 (價)50-95
 5319 初恋ノ芽 (價)50-99
 5320 嫉妬ノ芽(をはぐくみ育てる) 73-280
 5321 信仰^{おほ}ノ嫩芽 50-92
 5322 感情ノ根 (價)46-300
 5323 不安ノ根 (價)73-444
 5324 悪ノ根 (價)62-344
 5325 建物ノ根 36-81
 5326 情熱ノ蔓 46-354(2回)
 5327 静脈ノ枝 73-249
 5328 欲望ノ枝葉 73-318
 5329 シャツノ花 69-130
 5330 かなしみノたね 價35-362
 5331 気がかりノ種 價73-201
 5332 心配ノ種 價72-351
 5333 迷いノ種 價36-75
 5334 悪ノ種 價72-395
 5335 笑いノ種 價40-263, 73-315
 5336 物笑いノ種 價52-123
 5337 懺悔ノ種 73-275
 5338 話ノ種 價33-20, 40-267, 52-123, 72-344

394 3. 分類結果

- 5339 噂ノ種 慣50-34, 73-205, 74-269(を撒き
ちらす)
- 5340 流行唄ノ種 慣33-20
- 5341 仮面ノ種 73-331
- 5342 癩ノ種 慣52-126
- 5343 頭痛ノたね 慣50-328
- 5344 死ノ種 73-348(をまく), 347(をまきちらす)
- 5345 親しみノ種子 69-149
- 5346 杏子ノ虫 35-325
- 5347 ケロイドノ蛭 73-184
- 5348 仮面ノ死骸 73-336
- 5349 品格ノ顔 35-357
- 5350 魂ノ顔 73-286
- 5351 徳ノ顔 35-357
- 5352 切株ノ顔 69-134
- 5353 富士山ノ顔 35-267
- 5354 書物ノ面^{つら} 46-351
- 5355 田舎ノ横顔 (慣)31-54
- 5356 一枚ノ素顔 73-33前・順
- 5357 日ノ眼 慣50-48
- 5358 良心ノ眼 (慣)72-395
- 5359 文学上ノ眼 慣35-273
- 5360 金閣ノ目 69-228(2回)
- 5361 氷ノ眼 35-426, 427(3回)
- 5362 葉ノ隙 46-323
- 5363 雲ノ口 31-124
- 5364 山ノ背中 35-332
- 5365 山ノ胸 35-332
- 5366 沈黙ノわき(を通りぬける) 73-239
- 5367 丘ノ脇腹 (慣)31-105
- 5368 椅子ノ腹 慣73-189
- 5369 手首ノ腹 慣73-197, 274
- 5370 指ノ腹 慣48-7, 55-492, 73-247
- 5371 親指ノ腹 慣73-320
- 5372 観念ノ臍^{はら} 慣73-181, 225
- 5373 言葉ノ腰(をおる) 慣33-22
- 5374 羽目板ノ腰 慣68-8
- 5375 仮面ノ尻 73-318
- 5376 口ノ尻 慣48-9
- 5377 群衆ノ尾 (慣)35-192
- 5378 上の部ノしっぽ (慣)50-393
- 5379 列ノ尻尾 慣41-160
- 5380 医学ノ手(が屈く) (慣)72-231否
- 5381 言葉(の裏)ノ触手 50-61
- 5382 風ノ足 28-465
- 5383 鋸山と勝代と警察署ノ三本足 50-362
- 5384 雨ノ脚 (慣)31-93
- 5385 灰皿ノ脚 慣73-190順
- 5386 山ノ膝 35-332(3回)
- 5387 死ノ翼 72-231
- 5388 空ノ膜 50-118
- 5389 不感症ノ膜 76-220
- 5390 枕の上ノ頭脳 36-90
- 5391 仮面ノ心臓 73-274
- 5392 心ノ皮膚 46-357
- 5393 本能ノ皮膚 46-355
- 5394 心ノ膚 (慣)74-276
- 5395 氷ノ肌 55-14
- 5396 自分ノ羽交い^は、^は 50-92
- 5397 白銀ノ頭蓋骨 31-124
- 5398 天地ノ髓 31-120
- 5399 想像ノ牙(を打ち込む) 73-318
- 5400 波ノ牙 72-241
- 5401 私ノ触角 36-212
- 5402 虚無ノ殻 46-354
- 5403 少女時分ノ殻 (慣)35-400
- 5404 ぼくノ殻(にひびが入る) 73-253
- 5405 人間ノ殻 63-18
- 5406 松子ノ脱殻 36-41, 52, 56
- 5407 親父ノぬけ殻 (慣)35-409

- 5408 嫉妬ノ毒 (價)73-302, 306
 5409 医者ノ卵 價72-401
 5410 死者ノ生命 72-233
 5411 水たまりノ生命 76-228
 5412 池ノ生命 (價)76-229
 5413 仮面ノ生い立ち 73-202
 5414 顔ノ生い立ち 73-214
 5415 二度目ノ死(を死ぬ) 72-233(2回)
 5416 地獄ノ呼吸 55-303
 5417 文章ノ呼吸づかい (價)35-305
 5418 怯えノ脈 46-312
 5419 生活ノ傷手 價46-300
 5420 心ノ傷 價55-166, 286(2回), 72-252
 5421 精神ノ傷 (價)73-195
 5422 心ノ病い 價72-362, 413
 5423 恥辱ノ蕁麻疹 73-347
 5424 抑圧ノ腫物 76-241
 5425 欲望ノ結節 73-290
 5426 嫉妬ノ自家中毒 73-338
 5427 無知ノ中毒症状 73-285
 5428 退屈ノ充血 48-16
 5429 欲望ノ瘤 73-295
 5430 囁きノ瘤 46-370

〔名へ名〕

- 5431 男性へ夢 價62-282
 5432 毛皮へ愛 62-273
 5433 官能へ橋 69-288

その他

〔連体修飾名〕

- 5434 いらいらする 嬉しさ 46-327
 5435 とってつけた 表情 價55-290
 5436 声に出さぬ 悲鳴 52-159
 5437 物言わぬ 団欒 31-101

〔名助〕

- 5438 時間 よ 73-321
 5439 金閣 よ 69-148
 5440 空 よ 72-357(2回), 431
 〔語構成要素どうし〕
 5441 十犬-十色 62-160
 5442 化粧-恐怖症 73-340
 5443 瞬き-盛り 46-325
 5444 心-底 價37-313(2回)
 5445 瀑-縞 33-26
 5446 スピリット-たち 31-115
 5447 着物-ども 33-7(2回), 8, 9, 10, 24, 30
 5448 仮面-ども 73-291
 5449 若木-ども 52-120
 5450 毛虫-ども 52-138
 5451 附属-人物 33-19
 5452 はにかみ-屋 價33-21, 27
 5453 澄まし-屋 (價)72-165(2回)
 5454 戦争-屋 72-281(2回)
 5455 機械-屋 價72-165, 168
 5456 おせっかい-屋 55-148
 5457 お月-さま 價46-194
 5458 通り-魔 價73-294(3回), 300
 5459 睡-魔 價73-302
 5460 放火-魔 價73-293, 294(3回), 300
 5461 色-魔 價40-265
 5462 芸術-餓鬼 46-356(2回), 357
 5463 石-女 價72-382
 5464 丸ビル-女史 62-157
 5465 蛤-夫婦 35-401
 5466 大平-皇后 55-175
 5467 隠者-王国 62-356
 5468 男性的-領土 46-361
 5469 亭主-兵營 35-462, 463
 5470 糞-度胸 價28-454

396 3. 分類結果

- 5471 泥-酔 價40-266
 5472 糞-おちつき 價33-39
 5473 塩辛-声 價69-245
 5474 死-語 價73-296
 5475 戦鬨用-絶叫 50-263
 5476 殺し-文句 價64-65
 5477 社会的-方程式 73-270
 5478 生活-函面 46-335
 5479 カストリ-雑誌 價72-193
 5480 喧嘩-商売 (價)35-411
 5481 手-管 價73-320
 5482 手-枕 價33-10
 5483 人-垣 價35-287, 73-226
 5484 手-びさし 價62-126
 5485 鼻-柱 價52-157
 5486 生-柱 價72-360
 5487 袖-屏風 價31-124
 5488 口-三味線 價46-175
 5489 口-車 價34-154
 5490 薄笑い-色 73-347
 5491 宗教-臭 (價)46-360
 5492 ブランコ-ケムシ 價52-134
 5493 割栗-石 價46-298
 5494 人-波 價62-365(の中に漬かる), 69-229
 5495 笑い-波 73-253
 5496 人形蒐集-熱 價46-364
 5497 一郎-熱 (價)46-355
 5498 幼-木 價52-120, 135
 5499 老-木 價52-119
 5500 親-木 價52-119
 5501 若-木 價52-120
 5502 猫-柳 價72-382
 5503 蛇-ゴケ 價52-134
 5504 火-花 價28-459
 5505 死-実 52-120
 5506 野次-馬 價73-293, 311
 5507 着たきり-雀 價52-131
 5508 瓜実-顔 價46-334
 5509 鉄-面皮 73-333
 5510 金壺-眼 價73-213
 5511 軽-口 價46-187
 5512 日-脚 74-45
 5513 螻-指 價50-46
 5514 観音-眉 62-254
 5515 山-肌 價46-171
 5516 みそっ-歯 價50-293
 5517 他人-アレルギー 73-348
 5518 阿弥陀-冠り 價46-330
 5519 猫-っかぶり (價)73-333
 5520 腹-立ち 價46-186
 5521 男-釣り (價)46-292
 5522 女-漁り 價40-265
 5523 血-走る 價72-216
 5524 聞き-流す 價46-320
 5525 咲き-迸る 46-301
 5526 山-積 價64-59, 73-208
 5527 笑い-くずれる 價64-244
 5528 燃え-狂う 價63-25(家々が), 26(工場が)
 5529 拾い-読み 價33-10, 11
 5530 胸-さわぎ 價46-196
 5531 縫い-咬み (價)35-236
 5532 ご馳走-ぜめ 價46-352
 5533 暴力団-狩 價40-266
 5534 ヤミ-肥り (價)64-52
 5535 仮面-殺し 73-335
 5536 口-軽る 價46-157
 5537 嫉妬-まみれ 73-347

3.3 文脈比喩

〔作り方〕

- 1) 文脈比喩と認定された比喩表現例から、比喩性の成立に直接関与している中核部を抽出する。
例： 初めいたわり合っていた彼らは、お互いの傷をむしり合う荒々しさにもかり立てられた。〔く〕⇒傷をむしり合う
- 2) 抽出された部分の型を、その構成要素（語句）の品詞性に基づいて分類する。
例： 鎖をふりほどく⇒名・動
- 3) 実現形を基本形に直すなど、最小限度の変形を行う。
例： 主役をつとめた⇒主役をつとめる
- 4) 格助詞や接続助詞などを規準に型を決める。
例： 堰せきをきって奔流する⇒名ヲ動テ動
- 5) 次の規準で配列する。
 - (1) 品詞やその組みあわせの五十音（名詞は「メ」、動詞は「ド」）順に並べる。
例： 形，形名，動，副動，名，名動
 - (2) 同品詞の内部は規準とした助詞などの五十音順に並べる。
例： 名ガ動，名カラ動，名ヲ動，名＝動
 - (3) 同型の内部は用例の五十音順とする。
例： 目をつぶる，芽を摘み取る，芽をつむ
- 6) 各用例の慣用性の度あいを、「慣」「慣）」および無じるしの3段階で表示する。
例： 口を酸くする 慣
- 7) 各用例の出所を「巻名－ページ」の順に列挙する。
例： 獣けだものになる 55-391, 72-297
- 8) 「比喩索引」による検索の便を図って、通し番号をつける。
例： 1 明るい 2 熱い …… 950土台 ……

〔読み方〕

- 1) 各見だしは、文脈比喩の中核部の構成要素の品詞性と助詞（格助詞と接続助詞）などによって、各型を表示したものである。
例： 〔形〕〔名ガ動〕〔名＝名ヲ動〕
- 2) 冒頭の数字は、文脈比喩例の通し番号で、文脈比喩の分類結果におけるその用例の位置を示す。したがって、「比喩索引」を引いてその用例を探しだす際の用例番号の役を果たす。

- 3) 次が文脈比喩の中核部を多少の変形を加えて整理した言語形式である。()内はその用例の意味の理解を助ける最小限度の補足部分で、索引には取りあげない。
- 例：(幾重もの) 篩ふるいの目をくぐらせる
- 4) 次の「慣」印は慣用的であることを、「(慣)」印は半慣用的であることを示し、無じるしは慣用化されていないことを表す。
- 例：神経を麻痺させる(慣)
- 5) 次の数字はその用例の出所を明示したもので、「-」の前が資料とした「日本の文学」中の巻数を、「-」の後がその該当ページを示す。
- 例：波浪を沿びる 49-87 (49巻の87ページ)

〔使い方〕

- 1) 文脈比喩の全貌(文脈比喩にはどんな型のどういう例がどの作品に現れるか ナド)を概観する。
- 2) 文脈比喩にはどんな型(名詞と動詞とのどういうつながりか ナド)があるかを調べる。
- 3) 文脈比喩の各型にはどんな用例があるかを調べる。
- 4) 各用例の出現状況を調べる。

例1：「身」が〔名ヲ動〕の型で現れた慣用的な文脈比喩例にはどんなものがあるか？
品詞の五十音順を利用して、名詞・動詞の部分を見つけ、次に、格助詞などの五十音順を利用して〔名ヲ動〕の型の箇所を探します。そして、その同型の用例が全体の五十音順に配列されていることを利用して、「ミヲ……」で始まるあたりを見ると、時に「実を」などをはさみながらも、「身を……」の用例がだいたいまとまって得られる。そのうち、「慣」印のついた用例を見ていくと、「身を――入れる、かためる、(かわす)、切られる、殺す、捧げる、引き離す、翻えす、焼く、ゆるす、よじる、寄せる、わななかせる」といった例が採集されたことが、それぞれの出所とともにつかめる。

例2：「豚に真珠」と同型の用例にはほかにどんなものがあるか？

これは〔名=名〕の型なので、品詞の五十音順で名詞と名詞との部分を見つけ、次に格助詞などの五十音順で〔名=名〕の型の箇所を探しあてると、そこに、「豚に真珠」の例はないが、「鬼まじに金棒」「玉たまに環たま」「猫ねこに小判せうばん」「寝耳ねみみに水」といった例が採集されたことが、それぞれの出所とともにわかる。

例3：「肉」およびそれを含む文脈比喩例はどんな作品に出るか？

これは型に制限がないので、「比喩索引」で調べたほうが早い。五十音順に「ニク」を見ていくと、用例番号が列挙されているので、その番号を利用して文脈比喩の分類結果から各該当箇所を引きだす。そして、各箇所の数字に4.1「調査資料一覧」を援用すれば、「肉の味」「肉の塊」は阿部知二の『冬の宿』、「肉を食っても飽き足りない」は円地文子の『女坂』に出る、といったぐあいに、7種の用例のそれぞれの出所が明らかになる。

例4：「身とふたと食っ付く」という文脈比喩例はどういう意味で使われているか？

各用例の意味（どうずれているか）記述はないが、それぞれの出所が明示されているので、それを利用して原文に直接当たって調べることができる。手順としては、〔名^ッ動〕の型を引きだして、その内部の五十音順配列を使って「ミトフタ……」の箇所を探すか、あるいは、「比喩索引」でその用例番号を調べて（「身」でも「ふた」でも「食っ付く」でもいいが、「身」はよく使われるので多数の用例番号が列挙されており、その中から求める例を選びだすのがめんどうだから、あまり用例の多くない要素、すなわち、この場あいには「食っ付く」で引くのが能率的）、その番号によって文脈比喩の分類結果の該当箇所を探すかして、「身とふたと食っ付く」の例を見いだす。すると、そこに「35-401」とあるので、「日本の文学」の35巻（室生犀星）の401ページ（『杏っ子』）を開けて実際の文章に当たってみると、そのあたりの文脈から、互いの長所も欠点も知りつくした幼友達どうしが結婚した場あい、うまくいけば、ハマグリの身とふたとがびたつと合うように、あらゆる面でしっくりいく夫婦ができあがるわけだが、そういったびたつと呼吸の合ったカップルの状態を、“^{ハマグリ}蛤夫婦”と言った思考過程を通して写しだしたらしいという見当をつけることができる。

も く じ

〔形〕	1～ 30	〔動 ^テ モ動 ^テ モ〕	465～ 467
〔形 ^ヲ 形 ^ヲ 動〕	31～ 32	〔動 ^ナ ガ ^ラ 動〕	468～ 469
〔形動〕	33	〔動 ^ハ 動〕	470
〔形名〕	34～ 60	〔動 ^テ 動 ^ト 動 ^ト 動 ^ト 〕	471
〔形名 ^ガ 動〕	61～ 62	〔動 ^テ 動 ^ノ ハ名〕	472
〔形名 ^ニ 動〕	63～ 67	〔動 ^テ 副動〕	473
〔形名 ^ッ 動〕	68～ 80	〔動名〕	474～ 489
〔形名 ^ノ 名〕	81	〔動 ^ナ ガ ^ラ ノ名〕	490
〔形名 ^ガ 名 ^ヲ 動〕	82	〔動名 ^ガ 形〕	491～ 492
〔形名 ^ニ 名 ^ガ 動〕	83	〔動名 ^ガ 動〕	493～ 496
〔形名 ^ノ 名 ^ヲ 動〕	84	〔動名 ^カ ラ動〕	497
〔形名 ^ガ 名 ^ノ 名 ^ニ 動〕	85	〔動名 ^ニ 動〕	498
〔形名 ^ノ 名 ^ニ 名 ^ガ 動〕	86	〔動名 ^マ テ動〕	499
〔形名 ^ヘ 動〕	87～ 88	〔動名 ^ヲ 動〕	500～ 501
〔動〕	89～ 459	〔動名 ^ヲ 動名〕	502
〔動 ^ス 動 ^ス 〕	460	〔動名 ^カ ラ動名 ^ニ 動〕	503
〔動 ^タ リ動 ^タ リ〕	461	〔動名 ^ガ 名〕	504
〔動 ^テ 動〕	462～ 464	〔動名 ^ノ 名〕	505

400 3. 分類結果

〔動名=名カ形〕	506	〔名=動テモ〕	1558
〔動名ガ名ヲ動〕	507	〔名へ動〕	1559~1563
〔動名=名ヲ動〕	508	〔名ヲテ動〕	1564
〔動名ノ名=動〕	509~ 510	〔名ヲ動〕	1565~1976
〔動名ノ名へ動〕	511	〔名ヲ動テ〕	1977
〔動名ヲ名テ動名ヲ動〕	512	〔名ガ動テ動〕	1978~1981
〔副〕	513~ 520	〔名ガ動ノヲ動〕	1982
〔副形〕	521	〔名ガ動ヨウニ動〕	1983
〔副動〕	522~ 529	〔名ニ動テ動〕	1984~1988
〔副動副動ト動ナガラ動〕	530	〔名ヲ動テ動〕	1989~1997
〔副動名〕	531~ 534	〔名ヲ動ハ動〕	1998
〔副動名テ動〕	535	〔名ヲ動テ動名〕	1999
〔副動ハ名=動〕	536	〔名ト動テ動名ガ動名〕	2000
〔副動名ガ名ノ名〕	537	〔名ヲ動テ動名=動名〕	2001
〔副副動〕	538	〔名テ動名〕	2002~2004
〔副名〕	539~ 540	〔名=動名〕	2005~2006
〔副名ガ動〕	541~ 542	〔名ヲ動名〕	2007~2014
〔副名=動〕	543~ 544	〔名ヲ動テ名〕	2015
〔副名ヲ動〕	545	〔名ガ動名ガ動〕	2016
〔副名ノ名〕	546	〔名=動名=動〕	2017
〔名〕	547~1176	〔名ノ動名=動〕	2018
〔名カラ〕	1177~1178	〔名ヲ動名ヲ動〕	2019~2022
〔名ガ形〕	1179~1206	〔名ヲ動テ名へ動〕	2023
〔名ガ形動〕	1207	〔名ヲ動テ名ヲ動〕	2024~2026
〔名ノ形名〕	1208	〔名ヲ動ハ名ガ動〕	2027
〔名ヲ形動〕	1209~1212	〔名ヲ動ハ名ダケ動〕	2028
〔名ノ形名〕	1213~1216	〔名ヲ動テ名=動動〕	2029
〔名ガ形名へ動〕	1217	〔名ヲ動ナガラ名=動名ヲ動〕	2030
〔名カラ形名ガ動〕	1218	〔名ガ動名=名ヲ動〕	2031
〔名ガ動〕	1219~1353	〔名=動名ガ名=動〕	2032
〔名カラ動〕	1354~1367	〔名ヲ動テ名=名ヲ動〕	2033
〔名テ動〕	1368~1383	〔名ヲ動ハ名ノ名ヲ動〕	2034
〔名テモ動〕	1384	〔名=動名ガ名ノ名=名動名〕	2035
〔名ト動〕	1385~1386	〔名ガ副形〕	2036
〔名=動〕	1387~1557	〔名ガ副形形動〕	2037

〔名ガ副形動〕	2038	〔名ノ名マデ動〕	2312
〔名ガ副動〕	2039~2040	〔名ノ名ヲ動〕	2313~2356
〔名デ副動〕	2041	〔名ヘ名ヲ動〕	2357~2358
〔名ヲ副動〕	2042	〔名ヲ名カラ動〕	2359
〔名ガ副名〕	2043	〔名ヲ名ニ動〕	2360~2366
〔名ガ名〕	2044~2047	〔名ニ名ヲ動テ動〕	2367
〔名カラ名〕	2048	〔名ヤ名ヲ動ニ動〕	2368
〔名カラ名マデ〕	2049~2050	〔名ガ名デ動タラ動名ガ名ト動テ動〕	2369
〔名カラノ名〕	2051		
〔名ニ名〕	2052~2055	〔名ノ名ヲ動副動〕	2370
〔名ノ名〕	2056~2196	〔名ノ名ガ動名〕	2371~2372
〔名ノ名カラ〕	2197	〔名ヲ名ニ動名〕	2373
〔名ノ名デ〕	2198	〔名ノ名ニ動名ガ形〕	2374
〔名ヘノ名〕	2199	〔名ガ名ガ動タリ名ガ動〕	2375
〔名ヨリ名〕	2200	〔名ガ名ニ動テ名ニ動〕	2376
〔名ガ名ガ形〕	2201~2204	〔名ノ名ガ動ナラ名ヲ動〕	2377
〔名ノ名ガ形〕	2205~2208	〔名ノ名ニ動ナガラ名ヲ動〕	2378
〔名ノ名ガ形テ形〕	2209	〔名ノ名ヲ動名ノ名〕	2379
〔名ノ名ガ形動〕	2210~2211	〔名ヲ名ニ動ハ名デ名ガ動〕	2380
〔名ノ名ヲ形動〕	2212	〔名ガ名デ動ガ名ニ名ト名ガ動〕	2381
〔名ノ名ノ形名〕	2213	〔名ノ名ヲ副動〕	2382
〔名ノ名ニ形名ガ動〕	2214	〔名ヲ名デ副動〕	2383
〔名ガ名ガ動〕	2215~2218	〔名ノ名ガ副名ヲ動〕	2384
〔名ガ名カラ動〕	2219	〔名ノ名デ副名ヲ動〕	2385
〔名ガ名ト動〕	2220~2221	〔名名ノ名〕	2386
〔名ガ名ニ動〕	2222~2231	〔名ガ名ノ名〕	2387
〔名ガ名ヲ動〕	2232~2237	〔名ト名ノ名〕	2388~2389
〔名カラ名ヘ動〕	2238	〔名ノ名ガ名〕	2390~2391
〔名デ名ヲ動〕	2239~2240	〔名ノ名デ名〕	2392
〔名ニ名ガ動〕	2241~2244	〔名ノ名ノ名〕	2393~2396
〔名ニ名ヲ動〕	2245~2255	〔名ヨリ名ガ名〕	2397
〔名ノ名ガ動〕	2256~2268	〔名デ名ノ名ヲ動〕	2398
〔名ノ名デ動〕	2269~2272	〔名デ名ヲ名ニ動〕	2399
〔名ノ名ニ動〕	2273~2309	〔名ノ名ガ名ニ動〕	2400~2403
〔名ノ名ヘ動〕	2310~2311	〔名ノ名ガ名ヲ動〕	2404

402 3. 分類結果

〔名ノ名ヲ名=動〕	2405
〔名ノ名ヲ名ヲ動〕	2406
〔名ノ名=名ガ動〕	2407~2409
〔名ノ名=名ヲ動〕	2410
〔名ノ名=名ヲ動〕	2411~2416
〔名ノ名ノ名ヲ動〕	2417
〔名ヲ名ノ名=動〕	2418
〔名ヲ名ノ名へ動〕	2419
〔名ガ名ノ名=動ヲ動〕	2420
〔名ガ名ノ名ヲ動ヲ動〕	2421
〔名ノ名ガ名ヲ動ヲ動〕	2422
〔名ノ名ヲ名ヲ副名=動〕	2423

〔形〕

- 1 明るい 價62-159
- 2 熱い (價)46-365
- 3 あつらえ向き 價32-23
- 4 甘い 價28-454, 46-339, 72-350, 73-242
- 5 痛い 價55-334, 355 68-78
- 6 うっとりしい (價)52-125
- 7 大きい (價)55-239
- 8 おかしい 價52-160
- 9 重い 價72-358
- 10 重たい 價36-8
- 11 堅い 價40-268
- 12 軽い 價40-272
- 13 綺麗 價64-71
- 14 くすぐったい 價36-215, 55-73, 161, 448, 72-173
- 15 暗い (價)64-66
- 16 四角い 價50-275
- 17 湿っぽい 價28-461
- 18 白い 50-275
- 19 捨鉢 價64-71
- 20 近い 價28-455

〔名=名名=名〕	2424
〔名ナヲ名名ナヲ名ヲ形〕	2425
〔名ガ名ノ名ノ名ヲ動〕	2426
〔名ト名ノ名ノ名ヲ動〕	2427
〔名ノ名ノ名=名ガ動〕	2428
〔名ノ名=名ノ名ヲ動ヲ動〕	2429
〔名ノ名ノ名ノ名ノ名〕	2430
〔連〕	2431
〔連名=動〕	2432
〔連名ヲ動〕	2433
〔連名ノ名〕	2434

- 21 遠い (價)55-239
- 22 なまぐさい 價55-267, 450
- 23 温ぬくとい 46-162
- 24 ねんごろ 價52-123
- 25 バタ臭い 價55-188
- 26 眩しい 價68-21
- 27 無味無臭 價73-308
- 28 眼ざとい 價40-265
- 29 やかましい 價52-149
- 30 脂あぶらっこい 價62-265

〔形ヲ形ヲ動〕

- 31 酔いも甘いも嘔み分ける 價46-188
- 32 酔いも甘いも心得る 72-170

〔形 動〕

- 33 小さくなる 價72-353

〔形 名〕

- 34 青い焰 55-177
- 35 (妊孕可能の)赤い通達 50-313
- 36 赤いもの (價)50-370
- 37 温かいもの 62-113
- 38 甘い味わい 36-13
- 39 甘い跡味 (價)50-374

- 40 甘い餌 (價)72-423
- 41 いい鴨 價62-322
- 42 いい耳 50-323
- 43 薄い皮膚 73-342
- 44 うすい物 35-228
- 45 薄暗い下り坂 50-379
- 46 美しい廃墟 76-251
- 47 大きなつら 價35-233
- 48 堅い障壁 62-300
- 49 かたい蕾 (價)50-24
- 50 さわやかな秋風 55-338, 339
- 51 白い妹 73-354
- 52 白い稿 50-337
- 53 白い鳥 73-354
- 54 小さな唯物論者 68-101
- 55 とおいひと 55-492
- 56 濃密な灰色 73-319
- 57 深い溝 73-278
- 58 厄介千万な物質 35-408
- 59 弱い尻 價50-281, 351
- 60 理不尽な奴 52-148, 150, 151
〔形名が動〕
- 61 明るく灯がうつる 62-175
- 62 白い蝶が舞いこむ 35-267
〔形名=動〕
- 63 曖昧な場所に置かれる 36-127
- 64 新しいページにたどりつく 73-235
- 65 暗い海にひきずりこまれる 72-387
- 66 正しい方角に乗り換える 73-347
- 67 長いものに巻かれる 價62-155
〔形名が動〕
- 68 青い焰をあげる 55-177
- 69 明るい道をひらく 50-35
- 70 あぶない道もあるく (價)55-354
- 71 痛いところを刺す 37-320(2回)
- 72 いたいところを突く 價55-162
- 73 痛くもない腹をさぐられる 價73-316
- 74 憂き目を見る 價64-53
- 75 極^{きま}った道を歩く 72-229
- 76 鋭い眼を光らす (價)50-324
- 77 無い袖は振れぬ 價44-143
- 78 生ぐさい奴をくわえる 35-344
- 79 苦い塩を嘗^なめる 50-65
- 80 明瞭な線をもつ 55-212
〔形名ノ名〕
- 81 溫和しい野獣の行列 35-336
〔形名が名が動〕
- 82 理不尽な奴が小指を動かす 52-147
〔形名=名が動〕
- 83 かゆいところに手がとどく 價55-85, 360
〔形名ノ名が動〕
- 84 厚い心臓の皮を持つ 62-269
〔形名が名ノ名=動〕
- 85 めぼしい男が眼の前にぶらさがる
50-374
〔形名ノ名=名が動〕
- 86 おだやかな水面の下に渦がまく 55-302
〔形名へ動〕
- 87 人間くさい世界へつれもどす 55-450
- 88 低い流れへ就く (價)50-403
〔動〕
- 89 仰ぐ 價64-64
- 90 垢抜ける 價46-174
- 91 開けて通す 34-153
- 92 拳げられる 價40-266(2回)
- 93 漁る 46-328
- 94 味わう 價55-198, 62-162
- 95 あたためる 價73-291
- 96 あたる 價34-129
- 97 油染^みみる 48-13

404 3. 分類結果

- 98 操^{あやつ}る 價73-320
- 99 洗いあげる 49-88
- 100 洗われる 價72-212
- 101 歩いて行く (價)72-229
- 102 歩き廻る (價)72-192
- 103 歩く 價34-159, 49-51
- 104 言う 價35-363
- 105 行き当る (價)46-320
- 106 息巻く 價73-293
- 107 生きる (價)55-402, 72-233
- 108 弄^{いじ}る (價)64-64
- 109 傷^{いた}む 46-357
- 110 射止める (價)73-348
- 111 浮び出る 價73-223
- 112 浮かぶ 價68-5, 72-335, 73-291
- 113 浮き上る 價55-74, 63-355
- 114 浮彫する 價69-158
- 115 浮く 價46-155
- 116 動かす 價68-64
- 117 動く 價64-59
- 118 うずくまる (價)69-287
- 119 うずもれる 價64-229
- 120 撃ち倒される (價)73-186(2回)
- 121 打ち破る (價)64-73
- 122 撃つ (價)64-75
- 123 訴える 價35-428, 46-354
- 124 うなづく 價52-127
- 125 うろつく 價64-48
- 126 生まれかわる 價55-170(2回), 73-233
- 127 生まれでる (價)63-26
- 128 生れる 價55-113
- 129 生む 價62-140
- 130 裏切る 價55-364
- 131 売り出す 價73-272
- 132 描き出す (價)40-271, 48-8, 64-5¹
- 133 描く 價55-301, 64-243
- 134 演じる (價)55-348, 430
- 135 演ずる (價)74-49
- 136 追いかえず 價62-152
- 137 追いこまれる 價73-272
- 138 追い出す 價34-157
- 139 追いたてる (價)46-174
- 140 追いつめられる 價73-188, 196, 198, 219(2回), 226, 243
- 141 追いつめる 價55-325, 328, 329(2回), 332(2回), 376
- 142 追いやる 價33-20
- 143 犯す 價52-154(3回)
- 144 おさえ込む (價)73-346
- 145 押される 價36-26, 72-389
- 146 押しかける 價40-272
- 147 押し切る 價40-261, 52-124
- 148 おしこむ 55-170
- 149 押し流される 63-25
- 150 押し流す 價50-34, 72-378
- 151 押し除ける 價46-201, 313
- 152 押しやられる 68-8
- 153 押す 34-144, 159, 46-298, 369
- 154 落ちる 價28-465, 64-58(陥ちる)
- 155 追つつく 價37-320
- 156 追っばらう 價40-273
- 157 おっぼり出す 價34-129
- 158 落す 價28-465
- 159 おぼれる 價73-313
- 160 追われる 價34-158, 49-81
- 161 游^{あそ}がす 價46-302
- 162 泳ぎ抜く (價)35-202
- 163 折り重なる (價)46-370
- 164 折れ合う 價73-336

- 165 折れる 慣40-259, 64-50, 81, 236
- 166 買う 慣28-457
- 167 擁^{かか}え込む (慣)28-462
- 168 抱え取る 46-309
- 169 輝く 慣73-240
- 170 かきこむ 慣64-232
- 171 嗅ぎつける 慣40-264
- 172 掻き廻す 慣35-286
- 173 掻きむしる 49-90
- 174 馳け廻る 慣40-260
- 175 囲う 慣33-18, 46-181
- 176 霞む 慣28-454
- 177 嫁^{かたづ}く 慣28-462, 463, 52-129
- 178 片づける 慣34-158
- 179 塊^{かたまり}る 慣40-267
- 180 かつぐ 慣34-157(2回), 55-458
- 181 冠^{かぶ}さる 37-320
- 182 からみ合う 慣52-138
- 183 絡む 慣64-49
- 184 借りたおす 慣33-13
- 185 駆り立てる 慣64-53, 59
- 186 乾く 62-101
- 187 監禁する (慣)34-126
- 188 関係する 慣40-266
- 189 かんべんする (慣)35-299
- 190 消える 慣28-466, 46-203, 55-160, 483,
489, 62-170, 68-47, 83, 72-350, 384
- 191 聞こえる 慣33-7
- 192 傷つく 慣50-77, 64-65, 72-401, 73-239
- 193 傷つけられる 慣55-166, 72-192
- 194 傷つける 慣49-84, 55-288, 325, 64-66,
72-192, 73-192, 231, 302, 337(2回)
- 195 脚色する 慣55-280
- 196 去勢される (慣)55-163, 175, 204, 302
- 197 切り込む (慣)35-406, 49-33
- 198 切り捨てる 慣52-131
- 199 切り出す 慣33-22, 73-182, 231
- 200 切り取られる (慣)73-338
- 201 喰い入る 慣46-296
- 202 喰いしばる 慣28-465
- 203 くさる 慣49-92
- 204 くずす 55-494
- 205 くすぶる 慣33-14
- 206 燻^くむ (慣)46-335
- 207 崩れ去る 慣52-159
- 208 崩れる (慣)62-140
- 209 食ってかかる 慣64-59
- 210 ぐらつく 慣34-133
- 211 食わす 慣46-151
- 212 食われる 慣76-241
- 213 蹴飛ばす (慣)64-74
- 214 煙る (慣)46-367, 69-286
- 215 けり倒す 55-503
- 216 こしらえる 慣33-15(2回)
- 217 拒む (慣)76-361
- 218 凝りかたまる (慣)50-31
- 219 ころがす 62-81
- 220 ころがり込む 慣52-126, 55-142
- 221 殺す (慣)46-198, 52-150, 76-247
- 222 咲きこぼれる 慣46-192
- 223 裂ける 慣69-175
- 224 支える 慣64-228
- 225 捧げる (慣)46-366
- 226 さまよい歩く 73-300
- 227 触る 慣46-158
- 228 沈む (慣)36-33, 63-355, 64-52
- 229 疾駆する 73-223
- 230 死に絶える 72-297
- 231 死ぬ (慣)55-172, 453(2回), 489, 69-212
- 232 縛られる 慣55-186, 73-199, 217

406 3. 分類結果

- 233 縛りつけられる 63-18
 234 しぼりつける 價55-77
 235 縛る (價)37-311(2回)
 236 しぼむ 55-385
 237 絞る (價)40-272
 238 霜枯れる 50-386
 239 しゃぶる 76-363
 240 襲撃する 價40-274
 241 出血する 76-258
 242 勝負する (價)62-80
 243 触知する (價)69-247
 244 白ける 價64-59, 72-424
 245 白茶ける 46-324
 246 知る 價40-270
 247 滲透する (價)34-156
 248 吸い込まれる (價)62-177, 76-7
 249 捨てる 價33-8(2回), 11, 13(2回), 17, 25(2回), 37-320, 46-168, 178, 194(2回), 317(2回), 64-68
 250 すべり込む (價)55-290, 68-86
 251 滑る 價46-296, 63-24, 69-132(二る), 72-237
 252 澄ます 價34-123
 253 ずり落ちる 64-66
 254 すりよる 價46-151
 255 背負い込む 價48-12
 256 接する 價28-454
 257 せっぱ詰まる 價28-462
 258 占領する 價33-9
 259 疎開する 55-286
 260 そぎ落される 61-56
 261 削ぎ下る 46-327
 262 卒業する 價73-339
 263 染めだす 31-59
 264 そらす 價34-152
 265 倒れる 價52-129(2回), 151, 72-350
 266 だきこむ 價72-423
 267 たくり出す 34-154
 268 たずねまわる 73-187
 269 たそがれる (價)35-391
 270 聞う 價68-116(2回), 73-325
 271 叩き上げる 價52-132, 159
 272 たたきこむ 價33-14
 273 叩き出す 價73-317
 274 叩きつける 價55-318, 332
 275 叩き潰す 價35-158
 276 たたみかける 價46-152
 277 立ちあがらす (價)55-502
 278 立ちあがる (價)55-73, 481
 279 立ち入る 價34-121, 55-177, 64-55
 280 立ちほだかる (價)55-183, 64-61, 73-335
 281 脱線する 價72-222
 282 たどりつく 價64-228
 283 食べてゆく 價64-236
 284 ちぎられる (價)55-318
 285 乳線ちちくる 價46-157
 286 窒息する (價)32-58, 76-255, 359
 287 ちらつく 價46-297
 288 鏝ちりばめる 價31-69
 289 つかまえる 價62-133
 290 掴つかむ 價72-424
 291 つきこむ 價64-233
 292 突き進む (價)46-320, 64-48
 293 突きだす 價46-152
 294 突きつける 價34-123
 295 突き抜く (價)46-317
 296 つきのける 50-95
 297 つきまとう (價)76-227
 298 つくりなおす 價55-503

- 299 つっ込む 慣62-84
 300 つっぱしる (慣)52-163
 301 つっぱなす (慣)55-326
 302 突っぱねる 慣34-126
 303 つながる 慣52-124
 304 つなぎ合わす (慣)34-148
 305 つぶされる 慣34-124
 306 つぶれる 慣52-133, 145
 307 躓く (慣)72-273(3回), 275
 308 手掛ける 慣34-139
 309 溺死する 76-360
 310 出てくる 慣62-143
 311 手放す 慣28-457, 33-8, 52-123(手離す)
 312 出る 慣28-460, 64-228
 313 通す (慣)40-268
 314 通りすぎる 72-412(2回)
 315 尖る^{とが} 49-34
 316 融ける 慣69-287
 317 屠殺される 72-293
 318 飛び込む 慣33-31, 73-287
 319 飛び出す 慣40-263 64-62, 78
 320 とびつく 慣55-86(2回)
 321 飛ぶ 慣33-10, 55-389 73-324
 322 とらえる 55-55, 293
 323 捉まえる^{とら} 慣64-66, 78
 324 取り組む 慣35-371
 325 流される 49-93(2回), 52-166, 62-330
 326 流れ込む (慣)37-309
 327 流れる (慣)62-175(2回), 64-49, 73-255,
 76-251
 328 投げ込む (慣)62-263, 64-242
 329 投げ出す 慣73-181
 330 投げ飛ばす (慣)35-371(2回)
 331 馴染む 慣46-151
 332 なだれ落ちる 62-306
 333 なだれこむ 慣55-494, 503
 334 撫でる 31-89
 335 浪立つ 62-178
 336 管^なめる 慣46-319, 72-381
 337 鳴る 61-61
 338 煮える 50-126
 339 苦りきる 慣40-272
 340 煮られる (慣)50-25
 341 縫う 41-127
 342 ぬぎすてる 慣40-261
 343 脱け出す 慣52-151, 64-244, 246
 344 脱け出る (慣)52-151
 345 願い下げる 慣73-272
 346 ねばつく 慣49-86
 347 練り上げる 慣62-338
 348 寝る (慣)50-324
 349 燃焼する (慣)72-175
 350 のける 慣46-154
 351 のぞく 55-497
 352 伸びる 慣72-424
 353 登りつめる (慣)35-374
 354 呑み込む 慣46-318, 69-226, 72-351, 73-
 182, 228, 352(飲み込む)
 355 乗り出す 慣62-162, 64-64
 356 這い出す (慣)73-288
 357 這い出る 76-363
 358 はいりこむ (慣)55-74
 359 吐き出す (慣)35-170
 360 吐き付ける (慣)35-168
 361 吐く 慣33-25, 35-464
 362 爆発する 慣62-298
 363 化ける (慣)35-179
 364 はさまれる 慣46-158
 365 挟む 慣28-453
 366 弾^{はじ}き返す 50-88

408 3. 分類結果

- 367 端折る はしよ 價64-70
- 368 走る 價33-7, 52-132, 72-277
- 369 パスする 價55-257
- 370 醗酵する 76-252
- 371 鼻白む 價73-320
- 372 はねかえす 價62-152
- 373 はね散る 46-357
- 374 はね廻る 價52-128
- 375 歯向う (價)55-410
- 376 貼りつく (價)52-151, 69-270, 73-197
- 377 破裂する 價34-129
- 378 反射する 41-124
- 379 干上る 74-82
- 380 引き込まれる (價)46-182, 193
- 381 引き込む 價62-175
- 382 引き退る 價64-52(2回), 66
- 383 ひきさかれる 價55-290, 332
- 384 引き裂く (價)48-11
- 385 引きずられる (價)55-254, 72-376
- 386 引きちぎる (價)48-17
- 387 引き廻す (價)35-251
- 388 ひきもどす 55-200
- 389 引き寄せられる (價)68-110
- 390 浸す 49-43
- 391 引っ掛かる 價34-146, 52-125
- 392 引っ掛ける 價37-321
- 393 引っ込む 價40-274, 52-119, 62-175
- 394 引っ捕える 價35-441
- 395 引っ張られる 價68-29
- 396 引っ張り廻す 價34-144
- 397 引っ張る 價40-274
- 398 響く 價28-461
- 399 破裂れる ひびわ 50-129
- 400 氷解する 價28-459
- 401 吹きかえす 50-111
- 402 ふっかける 價40-271
- 403 ぶつかる (價)36-55
- 404 踏み切る (價)55-155, 73-209, 347
- 405 振り切る (價)52-141
- 406 ふるい落す 價73-302
- 407 触れる 價46-309, 52-134, 73-214, 304
- 408 へばりつく 價46-336
- 409 望見する 34-128
- 410 葬り去る 價68-127, 73-196
- 411 ほうり込む (價)48-8
- 412 乾し殺す (價)48-13
- 413 骨おる 價33-20, 40-274
- 414 掘り起す (價)76-226
- 415 彫りこむ 35-235
- 416 埋没する (價)73-341
- 417 舞う 價46-168
- 418 曲がる 55-285
- 419 捲きあがる 價40-260
- 420 招き入れる 73-325
- 421 磨滅する (價)69-169
- 422 丸め込む 價52-132(2回), 72-351
- 423 廻す 價28-453
- 424 結び合う (價)46-353
- 425 結びつける 價46-353, 52-139, 55-199,
477, 64-50, 72-384
- 426 目覚める (價)73-180, 254
- 427 盲う 55-450(盲いたげしき)
- 428 燃え立たす 34-154
- 429 燃える 價34-159, 50-384, 69-170
- 430 もぎとられる 價52-129
- 431 持ち上げる 價64-65
- 432 持ちかける 價40-270
- 433 持ち出す 價34-122, 64-61(2回), 73-212
- 434 洩らす 價64-80
- 435 洩れる 價34-127, 37-317, 40-263

- 436 焼きつけられる (慣)62-301
 437 扼殺する 76-251
 438 やってくる 52-127
 439 やにさがる 慣73-320
 440 破れる 慣64-65(2回)
 441 やられる 慣52-131, 132
 442 ゆすぶる (慣)55-468, 503
 443 夢見る 慣73-348
 444 揺り動かす 68-8
 445 揺れる 慣73-347
 446 蘇る 慣62-79, 343
 447 読みとる 慣62-105
 448 よりかかる 慣52-146
 449 寄る 73-196
 450 鎧よろいう (慣)50-57, 125
 451 よろめく (慣)55-335
 452 料理する 35-343
 453 旅行する 76-240
 454 沸き立つ 62-352
 455 渡り合ふ 慣34-133
 456 笑いこずれる 慣64-239
 457 割り切る 慣28-462
 458 わりきれる (慣)55-391
 459 割り込む 慣34-130
 [動×動×]
 460 当らず触さわらず 慣64-55
 [動タリ動タリ]
 461 踏んだり蹴こったり 慣52-145, 55-154, 415
 [動テ動]
 462 嚙かんで吐く 35-464
 463 蹴こ飛ばして馳かけっくら(を)する
 35-407
 464 もって来い 慣28-456, 50-346, 72-355
 [動テモ動テモ]
 465 打っても叩たたいても 46-322

- 466 ふまれても蹴こられても 55-375
 467 やせても枯かわれても 慣62-323
 [動ナガラ動]
 468 生きながら埋葬する 73-248
 469 くすぐられながら崩れる 73-447
 [動×動]
 470 打てば響く 慣50-292
 [動テ動ト動テ動ト]
 471 焼やいて食おうと煮ゆて食おうと 慣50-39
 [動テ動ノハ名]
 472 睨にらんでへたばるのは芝居ばかり 50-403
 [動テ副動]
 473 通り越してさっさと行くいく 73-325
 [動名]
 474 失われた顔 73-239
 475 おかれる席 55-81
 476 ざらつく刺激 50-392
 477 助かる道 慣50-373
 478 繫つなぐ糸 72-299
 479 潰れるハアト 32-38
 480 逃れる道 46-193
 481 光るもの 35-173, 46-199
 482 放射する力 76-241
 483 まいたたね 慣55-414, 415
 484 まよえる羊 慣35-411, 437, 439 (2回)
 485 見えない壁 (慣)73-330
 486 もえあがる炎 (慣)55-448
 487 燃えるかたまり 72-297
 488 ゆれつづける胸 62-105
 489 渡る距離 55-330
 [動ナガラノ名]
 490 生きながらの埋葬 73-303
 [動名ノ形]
 491 取りつく島がない 慣72-274

410 3. 分類結果

492 ふりあげる武器がない 55-409

〔動名ガ動〕

493 欠如した音階がある 50-263

494 咲くべき花が咲く 55-212

495 泣く子も黙る 償50-21

496 燃えるものが尽きる 50-369

〔動名カラ動〕

497 絡まるものから脱ける 50-345

〔動名ニ動〕

498 間違ったバスに乗り込む 73-347

〔動名マデ動〕

499 墮ちる所まで墮ちる 72-425

〔動名ヲ動〕

500 切り刻んだあとを嗅ぎ出す 48-14

501 引き摺り出すものを掴まえる 35-284

〔動名ヲ動名〕

502 転がる帽子を追いかける努力 72-168

〔動名カラ動名ニ動〕

503 見える世界から見えない世界にはいって行く 72-226

〔動名ガ名〕

504 知らないうちが花 償55-296

〔動名ノ名〕

505 閉じ込められていた袋のほころび 73-226

〔動名ニ名ガ形〕

506 行くさきに光が明るい 50-379

〔動名ガ名ヲ動〕

507 こわれた楽器が騒音をたてやすい 73-238

〔動名ニ名ヲ動〕

508 倒れる拍子に杖を掴む 50-390

〔動名ノ名ニ動〕

509 生まれない時の状態に戻る 52-166

510 めぐまれた星の下もとに生まれる 償55-54

〔動名ノ名ニ動〕

511 ひろげている手の中へ入る 69-130

〔動名ヲ名マデ動名ヲ動〕

512 割れたコップを両手で支え形を保ってやっている 73-245

〔副〕

513 洗いざらい 償64-65

514 うろろうろ 償34-154

515 得たりと 償64-68

516 じめじめ (償)55-502

517 筋書きどおり 償73-276

518 だろだろ 55-177

519 ぶよぶよ 73-347

520 べとべと (償)50-392

〔副形〕

521 楽々とたくましい 50-368

〔副動〕

522 奥ふかくしほ蔵う 46-168

523 きゅっと捻る 50-397

524 ごつんとぶつかる 52-162

525 四六時中見据えられる 52-156

526 ずたずたにえぐられる 50-397

527 どさっとぶちまけられる 50-386

528 深く捕えられる 72-172

529 まっしぐらむに行く 46-328

〔副動 副動ト動ナガラ動〕

530 今倒れるか今倒れるかと思いつながら歩く 72-260

〔副動名〕

531 こちんと突き当るもの 49-15

532 ちかちか光るもの 35-230

533 ぽっかりとあいた空虚 (償)55-101

534 自ら発する光り 69-287

〔副動名マデ動〕

535 きちんとした線でたてきる 50-391

- 〔副 動+名=動〕
- 536 一歩あやまれば深淵におちこむ (慣)
55-259
- 〔副 動+名ノ名〕
- 537 一度倒された草花は以前の草花では
ない 55-103
- 〔副 副 動〕
- 538 一歩も二歩もひきさがる 55-260
- 〔副 名〕
- 539 あと一と息 慣73-189
- 540 一歩手前 慣73-307
- 〔副 名ガ動〕
- 541 そうは間屋がおろさない 慣73-236
- 542 ピンと鍵がかかる 49-29
- 〔副 名=動〕
- 543 一歩先に進む 慣73-197
- 544 一歩他人に近づく 73-339
- 〔副 名ヲ動〕
- 545 一枚上をゆく 慣50-10
- 〔副 名ノ名〕
- 546 もう一人のほく 慣73-220
- 〔名〕
- 547 相手 73-253(4回)
- 548 相乗り 34-144
- 549 相棒 慣33-31, 73-231
- 550 赤 慣64-242(2回)
- 551 あかつき 68-123
- 552 悪夢 慣73-342
- 553 挙げ句 慣34-122
- 554 明け暮れ 慣34-158
- 555 肢^{あし} 69-266
- 556 味 慣55-72, 73-234
- 557 足がかり 慣62-79
- 558 足枷^{あしかぎ} 慣73-282, 338
- 559 足がため 慣72-351

- 560 足だまり (慣)55-185
- 561 足手まとい 慣55-68, 362, 73-299
- 562 足踏み 慣73-339
- 563 足もと 慣46-177
- 564 頭 慣62-118
- 565 あと味 慣62-109
- 566 あなた 69-148(4回)
- 567 甘味 (慣)46-312
- 568 網 (慣)76-22, 248(ぬけ道のない), 250
- 569 操り人形 (慣)50-362
- 570 歩み 慣72-192
- 571 嵐 (慣)55-103
- 572 あれ 慣33-11(2回)
- 573 アンテナ (慣)34-155
- 574 生きもの (慣)50-80
- 575 意志 31-67
- 576 いたみ 慣55-277
- 577 一段落 慣64-55
- 578 一夜漬け 慣50-327
- 579 銀杏がえし 慣33-21
- 580 一寸逃れ 慣34-135
- 581 一寸法師 (慣)31-96
- 582 一党 (慣)34-133
- 583 井戸端会議 慣28-466
- 584 糸へん 慣50-322
- 585 いぬちきしょう 慣73-457
- 586 いぬちくしょう 慣73-458
- 587 命 (慣)35-269
- 588 祈り (慣)55-309
- 589 色町 慣46-154, 162(花街), 168, 176
- 590 陰画 73-190
- 591 隠者 慣73-264
- 592 ヴェール 慣76-18
- 593 浮彫り 慣73-228
- 594 薄皮だち 50-382

412 3. 分類結果

- 595 渦 (價)68-79, 73-316(2回), 349
- 596 渦巻 價62-366
- 597 うすもの 價35-228
- 598 腕 價37-310, 52-135
- 599 鶺鴒呑み 價73-253
- 600 姨捨山 價35-462
- 601 馬乗り 價37-321, 323
- 602 海山^{うみやま} 價46-202
- 603 裏づけ 價73-295
- 604 裏腹 價52-153
- 605 うるおい 價55-422
- 606 鱗 52-134
- 607 謔言^{うわごと} 價46-300
- 608 営業妨害 (價)52-153
- 609 餌 (價)73-239
- 610 枝道^{えだみち} 價33-26
- 611 恵比寿さま (價)46-153, 173
- 612 エピロオグ 31-55
- 613 獲物 價46-296, 73-351
- 614 演技 價55-23(2回), 131, 172, 246, 248, 249
(2回), 294, 400, 478
- 615 演算 73-270
- 616 追い討ち 價73-281, 349
- 617 おいてきぼり 價55-100
- 618 追剥^{おいはぎ} 64-245(2回), 246
- 619 大芝居 價73-278
- 620 オーバー 50-281
- 621 お蚕ぐるみ 價50-74
- 622 お門違い 34-147
- 623 掟破り (價)73-324
- 624 置土産 價50-404
- 625 お稽古 55-485
- 626 起し手 50-272
- 627 押し 價73-314
- 628 おじいちゃん組 62-86(2回)
- 629 押しっこ 49-29
- 630 お尻 價34-143
- 631 雄 (價)50-65
- 632 おすそ分け 價55-105
- 633 お墨附 (價)34-155
- 634 お膳立て 價34-154, 55-284, 73-190,
271
- 635 お大名暮し 價50-7
- 636 お多福 價33-39
- 637 落ち目 價64-53
- 638 オットセイ 72-203
- 639 おてんと様 價52-165
- 640 おとし穴 價76-371
- 641 鬼 64-58
- 642 尾ひれ 價62-114
- 643 お坊っちゃん 價64-67(2回)
- 644 おまえ 73-272
- 645 お祭りさわぎ 價69-134
- 646 おめでた 價52-144
- 647 重石^{おもし} (價)49-8
- 648 重さ (價)73-186
- 649 表方 價40-272, 274
- 650 お山 55-360
- 651 女出入り 價34-129
- 652 開花 (價)76-255
- 653 廻転 49-28
- 654 快刀乱麻 價55-271
- 655 怪物 (價)55-163
- 656 替玉 價28-454
- 657 顔なし 73-259
- 658 抱え 價46-151
- 659 案山子 (價)36-126
- 660 鏡 69-189, 73-347
- 661 鍵 價73-275, 282
- 662 餓鬼ども 35-462

- 663 鉤の手 價33-18, 19
- 664 額縁 31-94(3回), 33-15
- 665 革命 (價)55-18
- 666 額面どおり 價55-151
- 667 賭 價73-337
- 668 影 價55-80, 324, 62-140, 64-231, 240.(駱)
- 669 馳けっくら 35-411
- 670 籠 69-181
- 671 風見鶏 (價)73-299
- 672 貸し借り 價73-337
- 673 かじとり (價)73-464
- 674 家族 (價)31-101
- 675 肩替り 價55-190, 73-237
- 676 荷ぎ屋 52-120
- 677 金離れ 價64-67
- 678 かぶと虫 35-277(2回)
- 679 壁 價72-221
- 680 南瓜 (價)35-175
- 681 藪口 34-146
- 682 仮面 73-287
- 683 仮面劇 73-180, 189, 281, 329, 345
- 684 仮面舞踏会 73-287
- 685 体 價64-55, 66
- 686 狩 40-266
- 687 借り 價62-155
- 688 借物 價55-48
- 689 彼 52-136(3回), 137(3回), 73-336(2回)
- 690 彼ら 52-119(6回), 120(3回), 134(2回), 135(3回), 137, 138
- 691 川 (價)75-253(2回)
- 692 変り種 價55-85
- 693 玩具 (價)76-41
- 694 雁首 (價)37-320
- 695 監獄生活 48-8
- 696 監獄島 73-286
- 697 看護婦 55-369(2回)
- 698 肝心 價73-236
- 699 巖石 35-465
- 700 看板 價72-392
- 701 桔梗ご殿 35-223
- 702 喜劇 價64-49
- 703 生地 價55-502
- 704 鬼子母神 50-281(2回), 294(2回), 324(3回), 336(2回), 347, 348, 351, 353, 354, 355(3回), 356(2回), 360, 364, 368, 386, 387(2回), 388(2回), 395(3回), 397, 402(2回)
- 705 疑心暗鬼 價73-322
- 706 傷 價50-49, 117, 55-166(2回), 286, 62-101, 73-458
- 707 傷口 價76-243
- 708 絆 價50-21, 55-452
- 709 気違い、 價41-171
- 710 狐 36-87
- 711 木戸御免 價73-329
- 712 起伏 (價)64-53
- 713 義民 (價)31-91
- 714 脚色 價55-314
- 715 客席 55-452
- 716 休戦協定 73-283
- 717 牛太郎 價40-262, 264(2回)
- 718 教誨師 62-271
- 719 狂喜 價33-15
- 720 共同防衛 價62-266
- 721 共犯者 (價)55-420
- 722 清元審判係 50-392
- 723 距離 (價)55-75, 323, 73-199, 274
- 724 金 價62-163
- 725 禁断症状 73-332
- 726 緊縛 55-308
- 727 空気 價50-309, 55-125, 139, 62-151
- 728 釘跡 價73-306

414 3. 分類結果

- 729 釘づけ 價55-428, 73-314, 346
730 くささ 55-326(2回)
731 くずれ 價46-151
732 口 價34-157
733 口火 價63-361
734 く of 字 價50-300
735 雲 35-211
736 雲行き 價34-126, 139, 148
737 黒白 價55-329
738 黒ん坊 64-52(2回), 64
739 訓練 價62-127
740 計算 價55-168, 499, 73-182, 259
741 計算違い 價73-318
742 芸当 35-364
743 芸なし猿 50-391
744 ゲーム 73-471
745 けだもの 價55-486(2回), 68-117, 73-457
458, 464
746 月旦 價34-131
747 血路^{けつみ} 價55-294
748 外道^{げどう} (價)46-199
749 解熱剤 73-189
750 家来 35-362
751 見物 55-475, 478
752 こいつ (價)52-120
753 こいつら 52-134
754 恋人 (價)46-294
755 恋物語 (價)46-292
756 行為 (價)73-334
757 講演口調 價46-322
758 航海 69-137
759 攻撃 (價)73-186
760 豪傑 價52-124
761 交渉 價40-266
762 荒蕪地^{こうぶち} 價76-251
- 763 鉱物 53-10(2回)
764 呼吸 價55-493, 73-352
765 故郷 69-288
766 刻印 (價)73-252
767 極楽 價46-300
768 小手調べ 價73-227
769 こども 價35-392, 55-480
770 御破算 價52-134, 62-84, 73-296
771 瘤^{こぶ} 73-295, 74-45
772 こぶし 價64-229
773 ゴミ 35-417
774 懲らしめ 35-251
775 柵 55-420, 73-306, 331
776 桜 價40-265, 267
777 匙加減 價50-342
778 差引き勘定 價73-331
779 さなだ虫 35-392
780 砂漠 72-356
781 猿 46-364
782 産 價64-48
783 三角関係 價73-335, 338
784 残渣^{ざんざ} 76-264
785 三者 73-335
786 三十八度線 價62-148
787 蚕食 價46-306
788 参謀長 50-280
789 参謀本部 72-207
790 潮時 價73-307
791 塩野 28-464
792 死刑執行人 73-325
793 地獄 價50-35, 69-161
794 詩人 76-221
795 姿勢 價73-235
796 自然児 55-310
797 下地 價46-364

- 798 舌舐めずり 37-314
- 799 下火 價73-297
- 800 七十五日 價28-466
- 801 支柱 (價)55-101
- 802 失地回復 (價)52-135
- 803 死身 價28-462
- 804 芝居 價50-308, 55-478, 73-278, 333, 356
- 805 芝居上手 (價)55-134
- 806 支配人 50-76(2回)
- 807 しべりあ行き 35-335
- 808 資本投下 (價)41-144
- 809 しめっぽさ (價)73-180
- 810 秋波 價73-321
- 811 珠数つなぎ 價35-181
- 812 守銭奴 價73-289
- 813 呪縛 (價)73-467
- 814 首班 34-156
- 815 咒文 じゆもん 63-17
- 816 主役 價73-313
- 817 しゅん外れ 62-160
- 818 (水の中の)城館 76-229
- 819 将棋倒し 價76-41
- 820 定石 價62-90
- 821 小施律 76-247
- 822 冗談 (じゃアない) 64-67
- 823 昇天 價55-219
- 824 焦点 價62-78
- 825 衝突 價64-59
- 826 障壁 價62-301
- 827 城壁 36-215
- 828 初潮 價73-285
- 829 尻切れ 價34-152
- 830 尻切れ草履 價48-14
- 831 尻込み 價46-172, 73-314
- 832 城 36-215, 55-341
- 833 新鋭 34-154
- 834 深淵 價55-364(2回)
- 835 真空地帯 (價)76-250
- 836 人種 價46-325(2回)
- 837 浸蝕 76-219
- 838 新政権 (價)34-156
- 839 心底 價34-138
- 840 信託預金 50-295
- 841 振幅 55-427
- 842 図 價50-321, 55-221, 340
- 843 図案 46-367
- 844 筋書 價55-297
- 845 裾 價69-193
- 846 捨鉢 價73-219
- 847 素通り 價64-45
- 848 滑り (價)63-24(2回)
- 849 図星 價64-60
- 850 西太后 さいたいごう 50-87
- 851 正比例 價64-49
- 852 生命 (價)55-195, 76-228, 229
- 853 生命線 價40-272
- 854 生理 (價)72-386
- 855 背負投げ 價40-267
- 856 席 (價)55-110, 119
- 857 背のび 價55-150(3回)
- 858 瀬踏み 價64-64
- 859 台辞 せりふ 價64-71
- 860 線 價55-143, 207
- 861 施回 73-206
- 862 選手 50-401
- 863 戦術 價55-218
- 864 先祖がえり 價52-120
- 865 膳立て 價46-171
- 866 施律 76-258
- 867 そいつ 64-75

416 3. 分類結果

- 868 造作 價55-238
- 869 臓物 35-179
- 870 塑型 76-248
- 871 底 價62-161
- 872 底抜け 價34-138, 37-313
- 873 そっちのけ 價28-461, 34-154, 73-258
- 874 雀斑^{そばかす} 40-260
- 875 貸借対照表 76-18, 236
- 876 隊商 (價)31-69
- 877 大将 價34-153, 154
- 878 胎動 76-241
- 879 大の字 價62-331, 72-214
- 880 代表選手 (價)73-294(2回)
- 881 大暴走 價52-163
- 882 大名縞 31-95
- 883 ダイヤ 50-277, 279(2回), 280, 281(2回)
- 884 ダイヤモンド 50-278
- 885 高飛車 價55-221
- 886 (手あぶり程度の)焚火 73-239
- 887 だし 價46-337
- 888 戦い 價40-273
- 889 脱出口 76-265
- 890 脱皮 (價)76-241
- 891 立綺 31-96
- 892 棚上げ 價64-52, 73-297
- 893 ダニ 73-268
- 894 種 價33-12
- 895 盥まわし 價50-328
- 896 断層 價55-487
- 897 断面図 (價)62-270, 306
- 898 治外法権 55-229
- 899 力綱 (價)28-463
- 900 畜生 價52-126, 135, 136
- 901 地点 74-273
- 902 茶番劇 (價)73-344
- 903 中枢 價62-365
- 904 宙吊り (價)73-296
- 905 中労委 55-417
- 906 調教 76-222
- 907 帳消し 價73-237
- 908 治療法 (價)55-135
- 909 通路 62-303(2回), 73-196, 199, 227, 237, 245, 266, 283
- 910 使い道 價37-308(4回)
- 911 つぎほ 價62-103
- 912 附味^{つけあじ} 50-369
- 913 筒切り 價34-139
- 914 筒抜け 價52-122
- 915 綱渡り (價)50-346
- 916 鑄^{つば}ぜり合い 價73-282
- 917 燕 價28-459
- 918 蹟^{つまぎ}き 價73-263, 479
- 919 つるべ打ち 價62-171
- 920 つんぼ 50-381
- 921 手 價37-311, 69-266(炎の手), 73-231, 279
(仮面の)手(をふり)はらう, 324
- 922 手当て 價35-211(2回)
- 923 泥酔 (半象徴的) 價73-288
- 924 手入れ 價33-21(2回)
- 925 敵 73-213
- 926 手つかず 價73-212
- 927 手前 價52-125
- 928 手元 價28-453
- 929 出戻り 價72-383
- 930 手分け 價28-458
- 931 電気 (價)46-319
- 932 電気じかけ 50-362
- 933 天国 價33-20
- 934 てんてこ舞い 價46-168
- 935 道具建て 價64-48

- 936 峠 價73-214
 937 道化 價50-275, 73-235
 938 動物 55-57
 939 動物ごっこ 35-340
 940 童話作家 76-221
 941 毒 價46-293
 942 毒牙 價32-31
 943 毒口 價50-39
 944 独走 73-202
 945 特等席 55-283
 946 特筆大書 價73-290
 947 とげ 價62-155, 76-235
 948 溶けあい、 50-392
 949 床屋 價35-226
 950 土台 (價)73-207, 213, 218
 951 股さま 價46-193
 952 飛火 (價)40-275
 953 灯 ともしび 價62-101
 954 鳥かけ 31-62
 955 砦 72-273
 956 鳥の子餅 35-228
 957 鳥肌 價73-347
 958 奴隸根性 價68-81(2回)
 959 泥 55-347(2回)
 960 泥人形 63-17
 961 泥沼 價40-270
 962 鷲鷹 とんたか (價)50-294
 963 どん詰まり 價46-178, 76-363
 964 内容物 52-135, 136, 137
 965 流れ (價)63-25(3回), 73-225, 255
 966 泣き寝入り 價37-310
 967 生臭坊主 價52-153
 968 波 價62-353
 969 涙金 價40-273, 64-236
 970 鳴神 價50-273
 971 荷 (價)50-93
 972 におい 價52-164, 62-111
 973 肉 價69-265
 974 二の舞い 價55-149
 975 にわかめくら 價55-217
 976 人形 (價)50-305
 977 抜打ち 價35-285
 978 抜け駆け 價73-328
 979 ぬけがら 價64-72(5回)
 980 沼 76-258
 981 濡れ鼠 價46-173
 982 根 價33-21, 37-312, 50-93, 114
 983 猫背 價40-267, 271, 52-148
 984 熱 價46-364
 985 根間い葉間い 價46-303
 986 狙い撃ち 價73-348
 987 鋸山 50-309(3回), 310, 313(4回), 315(2回),
 317(2回), 323(2回), 328, 335, 349, 351(2回),
 352, 353(2回), 356, 358, 362, 373, 375(3回), 376-
 (2回), 384(2回), 385(2回)
 988 生抜き はえ 價28-453
 989 歯ぎりしり 價73-333
 990 はぎ目 50-343
 991 爆弾 36-215
 992 化け物 (價)35-343, 55-15, 380(2回), 73-
 -188
 993 箱入り 價74-459
 994 箱詰め 35-334
 995 運び 價33-15
 996 破産 價76-245
 997 馬耳東風 價46-320
 998 はづみ 價73-349
 999 裸 (價)33-33, 35-318, 55-491
 1000 旗頭 價55-253
 1001 畑 價64-59

418 3. 分類結果

- 1002 旗標 ^{はたじろし} 價34-156
- 1003 発議 33-17
- 1004 発展家 價62-130
- 1005 花 價33-20, 62-81
- 1006 花形 價73-299
- 1007 歯抜き 35-182
- 1008 適役 ^{はまりやく} (價)34-154
- 1009 羽目 價34-156
- 1010 早まわり 62-166
- 1011 早道 價73-184
- 1012 腹 價46-176, 62-152, 64-55, 60(2回), 62, 74(肚)
- 1013 バランス 價46-339
- 1014 馬力 價64-73
- 1015 反射 37-311
- 1016 灯 ^ひ 62-83
- 1017 日蔭もの 價50-81
- 1018 悲喜劇 (價)73-311
- 1019 悲劇 (價)37-310, 64-49
- 1020 庇 (價)50-94
- 1021 膝下 ^{もと} 價69-127
- 1022 飛車 62-163
- 1023 比重 價55-307, 73-186
- 1024 一ト足 50-264
- 1025 一と足違い、 價52-132
- 1026 人当り 價40-272
- 1027 一と押し 價73-316
- 1028 一人相撲 價62-124
- 1029 ひとり舞台 (價)55-154(2回)
- 1030 ひね餓鬼 35-170
- 1031 響 價50-258, 68-16
- 1032 百なり爺さん 34-158
- 1033 病氣 價52-123, 55-507
- 1034 氷山 76-245
- 1035 ひょうし抜け 價73-227
- 1036 病状 55-507
- 1037 豹変 價28-455
- 1038 表面 價64-49
- 1039 ひらき 價73-217
- 1040 蛭 ^{ひる} 73-236, 307
- 1041 貧乏籤 ^{くじ} 價28-463, 73-272
- 1042 貧乏揺すり 價64-69
- 1043 不意討ち 價73-347
- 1044 風馬牛 價52-127
- 1045 夫婦 55-223
- 1046 フェアライ 31-98(2回), 104
- 1047 フェアライ・ランド 31-98(3回), 100, 105, 130
- 1048 孵化作用 62-161(3回)
- 1049 不完全燃焼 價73-354
- 1050 武器 (價)35-410, 55-327, 76-236
- 1051 副作用 價73-233
- 1052 不俱戴天 ^{ふぐないてん} 價34-158
- 1053 武装 73-465
- 1054 武装解除 73-331
- 1055 舞台 (價)55-54, 55, 248, 275, 284, 290, 307
- 1056 舞台装置 (價)55-452
- 1057 淵 價62-320
- 1058 符牒 (價)72-348
- 1059 仏頂面 價33-39
- 1060 仏面鬼魂 價73-331
- 1061 筆使い、 價52-130
- 1062 太っ腹 價55-187, 62-139
- 1063 俘虜 (價)76-22
- 1064 篩 ^{ふるい} 價73-302, 303
- 1065 古井戸 73-285
- 1066 プロロオグ 價31-55
- 1067 分身 35-461
- 1068 屁 (でもない) (價)28-462

- 1069 癖 73-339
 1070 兵營 35-463
 1071 平行線 慣55-321, 73-214
 1072 閉口もの 慣52-134
 1073 兵隊 35-462
 1074 隔て 慣34-155
 1075 別人種 (慣)55-204
 1076 ヘッドライト 慣46-328
 1077 尻っぴり腰 慣73-287
 1078 変色 69-128
 1079 片鱗 慣52-134
 1080 法 慣37-308, 73-269
 1081 防疫班 73-297
 1082 防禦陣 ぎょ 73-185
 1083 暴君 (慣)31-91, 55-223
 1084 (水の中の) 牧場 76-229
 1085 穂先 63-18
 1086 ほしげごころ 仏心 慣62-158
 1087 骨つぎ 35-200
 1088 骨抜き (慣)35-168(2回)
 1089 頬杖 慣28-458
 1090 ほらみな 洞穴 73-188, 285
 1091 本体 慣62-160
 1092 本番 慣55-122
 1093 埋葬状態 73-275
 1094 幕 (慣)46-320(3回), 50-41
 1095 幕切れ 慣73-180
 1096 まじない封じ 73-268
 1097 ます 枡 50-361(3回)
 1098 マツカレハ 慣52-136
 1099 真っ裸か (慣)32-14
 1100 丸腰 慣72-375
 1101 丸呑み込み 慣46-297
 1102 廻り道 慣73-218(2回), 246
 1103 満身創痍 そうい 慣52-163
 1104 未消化 (慣)55-169
 1105 水 50-345(2回)
 1106 水びたし 73-180
 1107 未征服 49-36
 1108 溝 慣52-146
 1109 道 慣48-8(2回), 62-138, 69-180, 73-356, 76-239
 1110 三日天下 慣34-157
 1111 見張り 46-358
 1112 無傷 (慣)73-335
 1113 虫 35-325(4回)
 1114 蒸しかえし 慣50-328
 1115 むな 胸糞 慣34-151
 1116 むそ 胸騒ぎ 慣46-158
 1117 胸 慣69-266
 1118 謀叛 (慣)55-139
 1119 眼 慣50-373, 64-60
 1120 迷路 (慣)73-181
 1121 めかけ 妾根性 (慣)33-18
 1122 目さき 慣37-312
 1123 眼醒め (慣)37-313
 1124 目ざわり 慣34-154
 1125 雌 (慣)50-65(2回)
 1126 目貫き 慣28-454
 1127 もうもく 盲目 慣46-357
 1128 めくしやう 目陡 慣34-154
 1129 もつれ 慣52-122
 1130 模様 慣52-133
 1131 模様かえ 慣46-294
 1132 紋切型 慣64-55, 73-280(2回一形)
 1133 役 55-478
 1134 役者 (慣)55-128
 1135 約束 37-313
 1136 役不足 慣55-283
 1137 薬味 (慣)73-298

420 3. 分類結果

- 1138 焼けぼっくい 50-323, 373
 1139 矢先 慣73-181
 1140 奴 慣52-120, 135, 136(2回), 137, 138,
 148, 73-181, 283
 1141 山 (慣)72-369, 75-253
 1142 闇 慣52-148
 1143 誘惑 慣73-285
 1144 歪み 慣36-111
 1145 癒着^い 73-253
 1146 夢 慣40-271, 46-162, 182, 363, 55-98,
 64-236, 72-356, 73-212
 1147 陽画 73-190
 1148 容器 73-348
 1149 横なぐり 慣35-295
 1150 予算 50-362
 1151 よどみ 慣73-240
 1152 嫁入道具 慣46-178, 179
 1153 嫁取り 46-184
 1154 鎧 31-69
 1155 弱腰 慣73-299
 1156 落差 慣74-281(2回)
 1157 乱杭^{らんぐい} 慣50-293
 1158 リズム 31-94
 1159 利廻り 50-295
 1160 領土 46-361
 1161 (水の中の) 猟林 76-229
 1162 旅券 76-240
 1163 埧塙^{もつば} 慣50-25
 1164 レンズ 62-173
 1165 連袂辞職^{べい} (慣)34-153
 1166 廊下 62-303
 1167 籠城 (慣)40-274
 1168 牢屋 35-213
 1169 環^わ 49-53
 1170 岐れ道 (慣)69-140

- 1171 脇役 (慣)55-135
 1172 杵 (慣)73-341
 1173 鷲掴み 慣35-350, 48-8, 72-367
 1174 忘れもの 55-391
 1175 渡り 慣34-156
 1176 罨 慣69-180(2回), 73-285, 315, 76-18
 [名カラ]
 1177 片っぱしから 慣52-135
 1178 真正面から (慣)52-125
 [名ガ形]
 1179 足が遠い、72-270
 1180 顔がない 慣34-138, 73-224, 226, 330
 (2回), 332
 1181 影が薄い、慣73-299, 333
 1182 風あたりが^いつよい、慣55-354
 1183 傷が深い、慣73-312
 1184 旗色鮮明 慣33-33
 1185 空気が重たい (慣)72-259
 1186 雲行きが怪しい、慣34-129
 1187 けぶりがない (慣)50-402
 1188 腰が重い、(慣)72-275
 1189 始末が悪い、慣52-137
 1190 尻が軽い、(慣)50-264
 1191 背筋が寒い、(慣)46-177
 1192 背中が寒い、(慣)46-157
 1193 底があさい、慣55-78
 1194 つかみどころがない、慣73-214
 1195 名がない、慣33-33
 1196 荷が大きい、55-147
 1197 寝覚がよい、慣64-75
 1198 腹が汚ない、慣35-177
 1199 風景が透明だ 73-277
 1200 虫がよい、慣33-23, 46-152, 336, 52-
 162, 64-67, 73-272, 289
 1201 胸がいたい、(慣)55-267

- 1202 胸が苦しい (慣)55-217
- 1203 胸(の中)が騒がしい (慣)46-185
- 1204 芽がない 46-323
- 1205 余白がない 46-319
- 1206 罫がない 64-71
〔名カ形 動〕
- 1207 四辺あたりが明るくなる 35-380
〔名ノ形 名〕
- 1208 ていのよい預り賃 (慣)62-113
〔名ツ形 動〕
- 1209 空気をあまくする 35-355
- 1210 口を酸すっぱくする 慣72-295
- 1211 眼を空虚にする 46-314
- 1212 眼を丸くする 慣72-183
〔名ノ形 名〕
- 1213 宛名のない手紙 73-230
- 1214 気前のよい払いっぷり 73-182
- 1215 見物のない演技 55-172
- 1216 出来の悪い入歯 73-283
〔名カ形 名へ動〕
- 1217 風がおもいがけないところへ吹く
50-362
〔名カツ形 名カ動〕
- 1218 体の中から重いものが脱け出す
74-80
〔名カ動〕
- 1219 明りがさす 35-343
- 1220 明るみかとどく 73-265
- 1221 悪魔がいたずらする 62-300
- 1222 悪霊りょうがいる (慣)31-109
- 1223 味が違ちがう (慣)62-158
- 1224 脚あしがなえる 慣64-244
- 1225 頭あたまが上らない 慣52-127, 55-175
- 1226 頭あたまがさがる 慣72-385
- 1227 あたりがかがやく 69-158
- 1228 嵐あらしがすむ 55-222
- 1229 あらしが近づちかづく 55-466
- 1230 言い分がある 慣73-327
- 1231 息の根がとまる 慣55-136
- 1232 傷手いたでが癒いよされる (慣)46-300
- 1233 傷手いたでが抉きり出される 46-300
- 1234 一段落いちだんらくつく 慣52-129
- 1235 一歩出いっぽる (慣)73-341
- 1236 糸いとが切れる 72-219
- 1237 ウダツが上らぬ 慣52-125
- 1238 お里おらが知れる 慣73-294
- 1239 お嬢さんが抜ぬけない (慣)46-368
- 1240 お大師さまがご照覧しょうらんだ 46-201
- 1241 外界がいがいが熱あつする 69-238
- 1242 外界がいがいが冷ひやえる 69-238
- 1243 顔かほが潰つぶれる 慣35-371(一が丸潰れ)
- 1244 鍵かぎが錆さびびつく 69-128
- 1245 影かげがうずれる 慣55-37
- 1246 かげが消けされる 55-54
- 1247 仮面かめんが戻る 73-346
- 1248 柄えいがきまる (慣)50-370
- 1249 身体からだが痺しびれる 46-296
- 1250 陥穽かんせいが掘ほられる 64-244
- 1251 傷きずがつく 慣55-487
- 1252 傷口きずぐちがふさがる (慣)52-129
- 1253 きっさきがにぶる 慣55-328
- 1254 軌道きどうが敷敷かれる 50-75
- 1255 距離きょりがちぢまる (慣)55-321
- 1256 釘くわいが利きく 慣50-406
- 1257 草くさが燃もえる (慣)72-309
- 1258 鎖くわがのびる 73-292
- 1259 薬くすりがきく 慣37-321
- 1260 口くちがまがる 慣35-230
- 1261 毛穴けうげんがひらく 73-306
- 1262 けだものがしのびこむ 55-485

422 3. 分類結果

- 1263 溝渠^{こうきよ}が穿^{うが}たれる 50-32
- 1264 呼吸^{こそ}がとまる (慣)55-95
- 1265 固型物・粘液^{ねんじやく}が排泄^{はいせ}される 76-360
- 1266 腰^{こし}がきまる (慣)34-155
- 1267 小舟^{こぶね}がひっくりかえる 73-464
- 1268 糞^{ふん}の目^めが出る 73-337
- 1269 座敷^{ざしき}が潰^{つぶ}れる 慣50-290
- 1270 敷石^{しきいし}が脱^{だつ}ける 50-380
- 1271 尻尾^{しつぽ}が出る 68-40
- 1272 呪縛^{じゆばく}が解^とける 73-274
- 1273 主役^{しゆやく}が演^{えん}じる 64-52
- 1274 焦点^{しゆてん}が合^あう (慣)50-68
- 1275 商品^{しやうひん}価値^{かち}が下落^{げたつ}する 55-142
- 1276 障壁^{しやうへき}が破^{やぶ}れる (慣)62-300
- 1277 尻^{しつぽ}が割^われる 慣34-138
- 1278 心臓^{しんざう}が萎縮^{ゐしゆく}する 32-35, 42, 57
- 1279 心臓^{しんざう}がつぶれる 32-38
- 1280 筋^{すぢ}がとおる 慣73-273
- 1281 生命^{せいめい}が生まれか^かける 62-287
- 1282 世界^{せかい}が瓦解^{わかい}する (慣)69-165
- 1283 相場^{さうぢやう}がきまる 慣73-354
- 1284 底^{そこ}が見^みえない (慣)37-321
- 1285 素地^{すぢ}が出る (慣)49-88
- 1286 たが^{たが}があがる (慣)35-404
- 1287 たが^{たが}が弛^{ゆる}む 慣35-366
- 1288 脱衣^{だつい}が重^{おも}ねられる 69-272
- 1289 他人^{たにん}がささやく 55-80
- 1290 段^{だん}がつく 36-95
- 1291 血^ちが逆流^{ぎやくりゅう}をはじめる 55-382
- 1292 血^ちが繫^{つな}がる 慣46-301
- 1293 調子^{てうし}が合^あう 慣34-124
- 1294 辻褄^{つじつみ}が合^あう 慣41-174
- 1295 つながりが切^きれる 慣52-148
- 1296 手^てがとどかない 慣55-97, 157, 200
- 1297 手^てがとどく 慣33-15
- 1298 手^てがのびる 慣62-83
- 1299 手^てがまわる 慣73-194, 218
- 1300 天井^{てんじやう}が墜落^{たいらく}する 72-190
- 1301 天井^{てんじやう}が落^お下^{くだ}する 72-190
- 1302 毒^{どく}が相殺^{さうころ}する 73-219
- 1303 棘^{げき}がまじる (慣)73-216
- 1304 二生^{にせい}もか^かかる 46-319
- 1305 抜き^{ぬき}さしならぬ 慣46-183
- 1306 ぬくもり^{ぬくもり}が伝^{つた}わる 48-11
- 1307 狙^{すめ}いが外^あれる 慣73-340
- 1308 咽喉^{のど}がつぶれる 慣40-268
- 1309 乗り換^{のりか}えがきかない 73-348
- 1310 箸^{しゆし}が動^{うご}く (慣)37-310
- 1311 橋^{はし}が懸^かけられる (慣)69-155
- 1312 はなが咲^さく 慣55-402
- 1313 花^{はな}も咲^さかない (慣)49-41
- 1314 火^ひがつく 慣73-479
- 1315 火^ひが燃^もえる 50-26
- 1316 ひげ^{ひげ}が生^はえる 35-406
- 1317 罅^{ひび}が入^いる (慣)50-49
- 1318 悲鳴^{ひめい}が聞^きえる 73-346
- 1319 紐^{ひも}が緩^{ゆる}む 50-374
- 1320 蛭^{ひる}が(しきりに)うごめきはじめる
73-241
- 1321 蛭^{ひる}が巢^{くう}くう 73-185, 275
- 1322 フィルム^{ふいるむ}が切^きれる 73-248
- 1323 舞台^{ぶたい}がひっくりかえる 64-63
- 1324 褌^{ふんどし}がひるがえる 72-199
- 1325 兵隊^{へいたい}が宿^{しゆく}下が^がりする 35-462
- 1326 へど^{へど}が出る (慣)68-49
- 1327 (仮面^{かめん}だけが残^{のこ}って) ぼくは消滅^{しょうめつ}する
73-356
- 1328 骨^{ほね}が折^おれる 慣34-130, 73-211
- 1329 本体^{ほんたい}が磨^こき出^だされる 62-160
- 1330 魔^まがさす 慣34-156, 40-264, 46-155

- 1331 幕が下りる 價50-49
 1332 身が縮む 價49-93
 1333 道が途切れる (價)36-39
 1334 道がひらける 價55-501
 1335 身とふたと食っ付く 35-401
 1336 身の毛がよだつ 價64-53
 1337 虫ずがはしる 價55-383
 1338 胸が萎縮する 32-38
 1339 胸が締めつけられる 價72-310
 1340 胸がはずむ 價72-199
 1341 胸が塞がる (價)72-286
 1342 胸がふるえる 價33-17
 1343 胸さわぐ 價46-166, 167
 1344 命脈が尽きる 價62-356
 1345 目があく 價55-467
 1346 目がくらむ 價55-116
 1347 芽が出る (價)36-75
 1348 目がとどく 價55-68
 1349 焼けぼっくいが燃えつづく 50-376
 1350 雪が融け去る 73-278
 1351 余波が襲う (價)32-55
 1352 烙印がおしつけられる (價)73-252
 1353 埒があかない 價34-124, 125, 64-62

〔名カラ動〕

- 1354 頭からおさえつける (價)62-287
 1355 頭から去る 價37-310
 1356 檻かごから出る 55-388
 1357 檻からとびだす 55-393
 1358 北から考える 41-166
 1359 下界から脱走する 73-338
 1360 尻から襲いかかる 41-177
 1361 席から立ちあがる 55-464, 481
 1362 席からひきずりおろす(價)55-503(2回)
 1363 地点から深入りする 73-182
 1364 跳躍台からおりる 55-389

- 1365 妻の座から立ちあがる 55-337
 1366 天から降る 價55-295
 1367 背後から支える 價68-25

〔名ヲ動〕

- 1368 足で歩く (價)73-218
 1369 足で書く (價)55-105, 195
 1370 足で蹴る 35-435
 1371 石で打つ 55-412
 1372 お砂でまぶす 50-377
 1373 壁でさえぎられる (價)73-182
 1374 仮面で応対する 72-207
 1375 記憶で生きる 55-418
 1376 急行で過ぎる 價50-334
 1377 すはだで触れる (價)62-101
 1378 手探りでさぐっていく (價)73-214
 1379 手でいじくりまわす 55-484
 1380 (男の) 手でつくりなおされる
 55-469
 1381 ひと筋なわではいかない 價55-349
 1382 指一本でなす 40-273
 1383 裸身のまま引き出される 49-87

〔名デモ動〕

- 1384 てこでも動かぬ 價52-134

〔名ト動〕

- 1385 十重二十重としぼられる 55-267
 1386 幽霊といっしょにいる 55-503

〔名ニ動〕

- 1387 頭に映る (價)36-95
 1388 頭に往来する (價)36-126
 1389 あたまにおく 價64-53
 1390 あたまにくる (價)64-48
 1391 頭に沁みこむ (價)36-118
 1392 頭に滲む (價)36-87, 107
 1393 頭に引っかかる 價36-55, 55-504
 1394 鋳型いそがたにはめる (價)55-339

424 3. 分類結果

- 1395 板につく 價68-92
- 1396 位置にすわる (價)55-243
- 1397 薄皮一枚に支えられる 73-293
- 1398 裏側に沈澱する 74-276
- 1399 枝道にはいる 價33-7, 10(枝路)
- 1400 枝路に深入りする (價)33-16
- 1401 沖合に漕ぎ出す 73-264
- 1402 おとなになる 價35-392
- 1403 及び腰になる 價73-294
- 1404 女に捨てられる 價33-8
- 1405 灰燼に帰す 價73-293
- 1406 顔にいい 35-185
- 1407 顔にせまる 55-237
- 1408 掛勘定にする 46-323
- 1409 笠に着る 價50-105
- 1410 風になる 69-189
- 1411 型にはめる 價73-199
- 1412 渦中にある 價46-356
- 1413 渦中に流浪する 46-335
- 1414 金にあかす 64-67
- 1415 壁に囲まれる (價)50-120
- 1416 壁にぶつかる 價55-387
- 1417 体に染みる 62-174
- 1418 体に接する 64-55
- 1419 身体をぶつつけ合う (價)49-60
- 1420 殻にはめこむ 55-261
- 1421 感覚に麻痺する 55-162
- 1422 眼中におく 價37-309
- 1423 官途に就く 價34-123
- 1424 傷痕を管める 72-277(2回)
- 1425 絆に曳かれる 36-123
- 1426 軌道に乗る 價52-145
- 1427 恐慌におとしれる 73-232
- 1428 空気にとけこむ 價55-418
- 1429 くすりにする 價55-192
- 1430 口にのぼる 價46-177
- 1431 首になる 價34-123
- 1432 獣けだものになる 55-391, 72-297
- 1433 欠席裁判にかけられる 價55-350
- 1434 けぶり出不ない 50-330
- 1435 煙けむりにまく 價72-360
- 1436 仔犬にかえる 55-18
- 1437 攻勢に出る 價64-66
- 1438 拷問にかける 價69-181
- 1439 子供になる 價35-392
- 1440 先に行く 價73-274
- 1441 砂塵に帰す (價)69-228
- 1442 雑役婦になり下がる 35-461
- 1443 歯牙しやがにかける 價46-306
- 1444 地獄にささいこむ 55-303
- 1445 舌にのせる (價)73-269
- 1446 尻尾しつぽに尾うく 35-374
- 1447 終着駅にいそぐ (價)55-296
- 1448 終着駅に達する (價)55-296
- 1449 処刑地しよがいに到着する 35-335
- 1450 人後に落ちない 價34-158
- 1451 陣地にひきこむ (價)55-456
- 1452 水泡に帰す 價73-317
- 1453 筋書にのる 價55-297
- 1454 席にかける 55-120
- 1455 席にすえる 價55-81
- 1456 席に坐る 價55-81, 114
- 1457 背中に逃げかくれる 46-168
- 1458 責道具につかう 價50-401
- 1459 双肩に負う 價36-52
- 1460 そこだけに生きる 55-498
- 1461 組上そじょうにおく (價)55-485
- 1462 助け船に(すぐさま) 乗り移る (價)
73-204
- 1463 血に飢える 72-281

- 1464 血まみれになる 55-201
 1465 宙に迷う 慣49-91
 1466 跳躍台に立つ 55-389
 1467 机に凭る (慣)64-64
 1468 綱に絶る 48-10
 1469 氷柱つららに閉ざされる 73-338
 1470 手塩にかける 慣46-174
 1471 手に入れる 慣73-207, 219
 1472 手につく 慣33-14
 1473 手による 慣64-65
 1474 峠にかかると 慣72-365
 1475 道化に付き合あわされる 73-355
 1476 堂に入る 慣73-311
 1477 同列に置く 慣46-292
 1478 同列になる 慣55-383
 1479 どこかに行き隔たる 36-116
 1480 どこにでもころがっている 慣74-441
 1481 トラックにはねとばされる 55-447
 1482 波に流される 49-93
 1483 波に乗る (慣)34-144, 62-365
 1484 肉にあふれる 76-246
 1485 二重にじゅうになる 49-73
 1486 人形になる (慣)72-366
 1487 根にもつ 慣52-148
 1488 野におく (慣)55-482
 1489 灰色に塗りこめる 49-93
 1490 破壊作業に荷担する 73-322
 1491 白鳥になれる 73-356
 1492 裸かにされる 69-153
 1493 はだかになる 慣55-331
 1494 白骨に変わる 69-144
 1495 鼻につく 慣72-348
 1496 羽目におちいる 慣73-283
 1497 腹におさめる 慣55-190
 1498 腹に据えかねる 慣34-152
 1499 腹に抱く (慣)48-8
 1500 はりつけになる 55-299
 1501 破廉恥罪に連座する 73-354
 1502 反撃に出る 慣73-188
 1503 日蔭に育つ 慣46-167
 1504 蛭にくい荒される 73-219
 1505 蛭に悩まされる 73-234
 1506 深みに追い込む 慣73-251
 1507 舞台にでる 55-200
 1508 二つに割れる (慣)34-155
 1509 ふたりきりになる 55-125
 1510 淵ふちにたたきこむ (慣)55-98
 1511 腑はらに落ちない 慣62-80
 1512 腑はらに落ちぬ 慣34-129
 1513 不発におわる 慣55-173
 1514 ふり出しにもどる 慣55-101
 1515 飾ふるいにかけられる 慣73-217
 1516 飾ふるいにかける 慣73-295, 302
 1517 別人になる 慣36-116
 1518 骨ばかりに瘦せる 50-294
 1519 骨身ほみにからみつく (慣)63-16
 1520 本舞台に出る 55-23
 1521 まえに立ちふさがる 55-448
 1522 真黒になる 慣64-237
 1523 水に流す 慣34-158, 62-150
 1524 道連れにする 慣73-221
 1525 道に躓つまずく (慣)46-356
 1526 道にはずれる 慣46-172
 1527 耳みみに落ちる (慣)72-210
 1528 耳みみに入る 慣34-127
 1529 向う側にさかのぼる 73-348
 1530 向うむきにはなれる 55-183
 1531 胸むねにおしかぶさる 55-298
 1532 胸むねにしまる 慣62-134
 1533 胸むねにだきしめる 慣55-327

426 3. 分類結果

- 1534 胸にたまる 價55-201
 1535 盲らになる 69-161
 1536 目にあう 價73-266
 1537 眼にある 41-137
 1538 目に映る 價55-122, 194
 1539 眼に来る 50-353
 1540 眼につく 價37-310
 1541 眼に残る 價46-355
 1542 眼に^は旬い寄る 35-178
 1543 眼に入る 價72-367, 74-70
 1544 目に触れる 價34-148
 1545 目に見える 價28-466
 1546 盲目になる 55-498
 1547 ものに触れる (價)68-75
 1548 矢面に立つ 價55-244
 1549 郵便物に化ける 73-284
 1550 横道にそれる 價33-14
 1551 陸地に泳いで戻る 73-332
 1552 両手にあまる (價)55-92
 1553 路頭に迷う 價40-275
 1554 棒にはめる 價55-170
 1555 罌^{おな}に落ちる (價)73-286
 1556 罌にかけられる 價73-179
 1557 罌にひっかかる 價76-371
 【名=動テモ】
 1558 薬にしたくても 價73-216
 【名へ動】
 1559 頭へ来る 價52-160
 1560 穴へ落ちこむ 37-308
 1561 下界へ帰る 62-178
 1562 手もとへ飛び込む (價)64-63
 1563 わき道へそれる 價62-151
 【名マデ動】
 1564 どん詰まりまで来る 價46-178
 【名ッ動】

- 1565 合い槌を打つ 價64-55
 1566 垢を排泄する 46-359
 1567 朝飯をかきこむ 價64-229
 1568 足跡を歩く 72-192
 1569 足並みをそろえる 價73-316
 1570 足並みを乱す 價62-83
 1571 足を洗う 價62-84
 1572 足を入れる (價)41-111, 55-397
 1573 足をとめる 價73-227
 1574 足を奪られる 價35-187
 1575 足をはこぶ 價55-30
 1576 足を踏みこたえる 50-120
 1577 足を踏み外す (價)73-205
 1578 足を踏めぬ 46-197
 1579 汗・垢・膿を出す 46-358
 1580 汗・あぶらをしぼる 35-202
 1581 汗水たらす 價37-310
 1582 頭をかかえる 價72-403
 1583 頭をかすめる 價40-267
 1584 頭を下げる 價36-61, 37-313
 1585 跡をたどる 價73-325
 1586 穴を埋める 價52-141
 1587 油を売る 價72-253
 1588 油を^{しぼ}られる 價72-197
 1589 油をそそぐ 價55-223
 1590 網をたぐる 價73-231
 1591 泡をくう 價73-240
 1592 家中を震動させる 62-258
 1593 家をあける 價40-265
 1594 鋳型を破壊する 76-224
 1595 息をつく 價72-354
 1596 いけにえを支払う (價)35-354
 1597 泉を汲み取る 72-216
 1598 一目置く 價46-362, 55-85(一を)
 1599 一郎熱を緩和する 46-355

- 1600 一線をひく (價)55-441
- 1601 一線をふみこえる (價)55-212, 461
- 1602 一杯くわす 價35-178
- 1603 一発くらう 價55-398
- 1604 命をかける 價62-82
- 1605 いろどりを添える 價73-352
- 1606 色を売る 價50-104
- 1607 威をかりる (價)35-408
- 1608 引導をわたす 價55-410, 413
- 1609 うごきがとれない 價55-296
- 1610 潮をひく (價)76-234
- 1611 うしろ指を差される 價52-159
- 1612 渦をかきたてる 55-503
- 1613 枝をゆする 73-269
- 1614 獲物を仕止める (價)73-323
- 1615 追い討ちをかける 價55-411
- 1616 大手をひろげる 價69-130
- 1617 男を取りもどす 價49-56
- 1618 尾ひれをつける 價55-289
- 1619 お前を取り戻す 73-317
- 1620 重荷を負う 價72-271
- 1621 重荷を背負う 價62-140
- 1622 尾を引く 價52-151
- 1623 女を演じる 73-326, 327
- 1624 女をこしらえる 價40-265
- 1625 女を殺す 36-25
- 1626 女を知る 價40-267, 268
- 1627 女を振り捨てる (價)64-79
- 1628 顔をあわす (價)64-235(2回)
- 1629 顔をあわせる 價64-234(2回)
- 1630 顔を失う 73-198, 255, 259, 265, 275, 280, 285, 286
- 1631 顔を隙見する 35-205
- 1632 顔をそむける 價55-486, 73-324
- 1633 顔を失くす 73-200, 224, 341
- 1634 顔を丸出しにする 46-304
- 1635 顔をみせる 價72-343
- 1636 顔を持ち合わせていない 73-230
- 1637 垣をされる 55-56
- 1638 垣を隔てる (價)46-318
- 1639 核を抱く 76-241
- 1640 かげをもつ (價)55-18
- 1641 舵がとれない 價55-294
- 1642 河岸を変える 73-204
- 1643 梶をとる 價50-63
- 1644 固唾をのむ 價73-322
- 1645 塊を作る 46-370
- 1646 肩をならべる 價73-300
- 1647 喝采を送る 價73-322
- 1648 活字をひろう (價)73-259
- 1649 金をまわす 62-81
- 1650 壁がとりはらわれる 55-277
- 1651 神を殺す 72-273
- 1652 仮面をかなぐり捨てる 73-299
- 1653 仮面をかぶる 73-345
- 1654 仮面をつくる 62-330
- 1655 殻をやぶる 價55-261
- 1656 関係を絶つ (價)73-188
- 1657 機械をいじる 價73-329
- 1658 聞き耳を立てる 價40-271
- 1659 生地を出す 價62-181
- 1660 生地をとりもどす 55-249
- 1661 生地をむき出す (價)28-455
- 1662 傷口を洗う 價46-298
- 1663 傷口をつつく (價)72-217
- 1664 傷をうける 價55-291, 447, 487
- 1665 傷を負う (價)50-77
- 1666 傷をむしり合う 49-93
- 1667 軌道をそれる (價)49-58
- 1668 肝をつぶす 價73-197

428 3. 分類結果

- 1669 氣を廻す 價34-156
- 1670 急所を射る (價)55-314, 328
- 1671 急所を突く 價72-428
- 1672 曲線を描く 價48-15
- 1673 距離をちぢめる (價)55-442
- 1674 金銭を振り撒く 37-311
- 1675 空間を支配する 41-172(3回)
- 1676 空虚をうずめる (價)55-401
- 1677 釘を打つ 價50-355
- 1678 鎖をつくる 73-224, 237
- 1679 鎖をふりほどく 73-278
- 1680 薬を利かす 46-316
- 1681 くそっくらえ 價73-307
- 1682 くだを巻く 價73-288
- 1683 口きる 價34-152(一を), 46-173
- 1684 口濡らす (價)46-164, 166
- 1685 ^{くちばし} 嘴を突っ込む 價72-203
- 1686 嘴をはさむ 價72-352
- 1687 唇を噛みしめる 價72-382
- 1688 唇をかむ 價55-100
- 1689 口を汙らす 價34-129
- 1690 口を出す 價34-129, 62-109, 72-368
- 1691 口をぬぐう 價73-284
- 1692 口をはさむ 價52-142
- 1693 口をひらく (價)64-52
- 1694 口を封ずる 價73-298
- 1695 口をふさぐ 價55-111
- 1696 口を割る 價64-78
- 1697 首を傾げる 價73-209, 306(2回), 355
- 1698 首をつっ込む 價52-128(2回)
- 1699 首むふる 價72-403
- 1700 首を寄せあう 價73-329
- 1701 車をすてる 價55-155, 192, 287
- 1702 血路をみいだす 價55-97
- 1703 血路をもとめる (價)55-103
- 1704 絃を高鳴らす 72-277
- 1705 絃をひびかせる 72-245
- 1706 香箱をつくる (價)50-42
- 1707 降伏条件をたずさえる 73-338
- 1708 鉦脈を掘り荒す 76-265
- 1709 小枝をくりひろげる 73-215
- 1710 声を合わせる 價52-161
- 1711 心を入れ更える 價72-362
- 1712 腰を上げる 價73-219
- 1713 腰をおる 價33-22
- 1714 御託をならべる 價73-349
- 1715 子供をかかえる 價52-126
- 1716 ごはんをたべる 價50-393
- 1717 コロップを抜く 53-7
- 1718 最後通牒をつきつけられる (價)73-219
- 1719 最後通牒を突きつける (價)73-283
- 1720 采配^{さいはい}を振る 價34-153
- 1721 ^{さかずき} 盃をほす 價55-289
- 1722 柵を打ち壊す 73-326
- 1723 柵を越える (價)73-308
- 1724 (柵に手もふれず、するりと)柵を通り抜ける 73-326, 333(一を壊さずに)
- 1725 柵を乗り越える 73-346
- 1726 柵を破る 73-317
- 1727 匙^{さじ}を投げる 價68-60, 72-348, 73-239
- 1728 酸を浴びる 76-251
- 1729 敷居を跨ぐ 價28-466, 34-135(闊)
- 1730 舌をはがす 價62-102
- 1731 舌を捲く 價35-179
- 1732 尻尾を出す 價73-346
- 1733 尻尾をつかむ 價69-230
- 1734 尻尾をまく 價73-281
- 1735 死水^{しすい}をとる 價40-264
- 1736 篠つく 價46-192, 198

- 1737 芝居をつづける (慣)73-345
- 1738 自分をみつめる 64-228
- 1739 車窓をかすめる 慣62-87
- 1740 収支決算をつける 46-323
- 1741 終止符がうたれる 慣55-312
- 1742 終止符をうつ 慣55-324, 73-281, 324
- 1743 出世街道を歩く 慣55-54
- 1744 主役をつとめる 55-135
- 1745 焦点を掴む (慣)49-25
- 1746 女性を演じる 73-326
- 1747 女性を知る 慣33-13
- 1748 処方箋をまちがえる 55-390
- 1749 白旗をかかげる 慣73-338
- 1750 城を開放させる 55-268
- 1751 神経を麻痺させる (慣)49-92
- 1752 信号をおぼえる 55-444
- 1753 心臓を突き刺す 64-69
- 1754 姿を消す 慣52-138
- 1755 捨石をうつ 慣55-352
- 1756 図を描く 48-20
- 1757 生命を与える 慣52-119
- 1758 精を出す 慣33-14
- 1759 世界を創り変える 慣72-226
- 1760 石炭殻を被る 36-7
- 1761 席を固持する 55-387
- 1762 席をじゃまする 55-74
- 1763 堰をとりのぞく (慣)55-503
- 1764 背筋を凍りつかせる 73-466
- 1765 絶縁状をつきつける (慣)73-355
- 1766 背を伸ばす 50-300
- 1767 全身を貫く 72-194
- 1768 先手を打つ 慣64-52
- 1769 占領区域をひろげる 73-185
- 1770 粟を食む (慣)34-132
- 1771 底を浚う 50-287
- 1772 底をつく 慣73-210
- 1773 底を割る 慣49-84, 64-70
- 1774 袖ひく 慣28-453
- 1775 大金を投げ出す 慣40-271
- 1776 大論陣をはりめぐらす 慣73-298
- 1777 戦いを挑む 慣62-354
- 1778 手綱を引き締める 慣46-316
- 1779 他人を取り戻す 73-317
- 1780 卵をかえす 62-161
- 1781 魂を発見する (慣)72-221
- 1782 玉の井を歩く 72-254
- 1783 溜息をつく 慣52-135
- 1784 杖を引く 慣46-202
- 1785 致命傷を与える (慣)73-348
- 1786 調子を合わせ 慣55-324
- 1787 帳簿尻をあわせる 55-130
- 1788 血をながす (慣)55-201
- 1789 地を踏む (慣)46-300
- 1790 血をわけ 慣46-152
- 1791 通路を回復する 73-319
- 1792 通路を遮断する 73-286
- 1793 通路を開く 73-325
- 1794 通路をふさぎっぱなしにする 73-196
- 1795 土を踏む (慣)64-45
- 1796 爪を磨く (慣)46-356
- 1797 手足を奪われる 慣62-355
- 1798 手足をもぎとられる 慣73-195
- 1799 手足をもぎとる (慣)55-504
- 1800 手が出せない 慣34-122
- 1801 手ぐすねをひく 慣73-320
- 1802 轍を踏む 慣34-159
- 1803 手のうらをかえす 慣55-255, 448, 476.
- 1804 手を入れる 慣33-7, 73-181
- 1805 手をうつ 慣62-162

430 3. 分類結果

- 1806 手を貸す 價46-168, 73-211, 270, 295
- 1807 手を加える 價73-213
- 1808 手をこまねく 價73-208
- 1809 手を出す 價34-128, 52-119, 55-177(2回), 68-88
- 1810 手を携^{たづな}える 價64-55
- 1811 手をつける 價73-283
- 1812 手を取りあう 價55-142
- 1813 手を握る 價72-376, 423
- 1814 手をはなれる 價33-33
- 1815 手をひく(價)73-271(2回)
- 1816 手をふれる 價68-60
- 1817 手を汚す 價69-239
- 1818 点数をかせぐ 價73-273
- 1819 答案をつつく(價)41-127
- 1820 度胆^{どぢも}を抜く 價64-73
- 1821 毒を受ける 69-155
- 1822 止めを刺す 價69-221
- 1823 溝板^{どがいた}を踏みしめる 64-68
- 1824 泥をはかす 價55-347
- 1825 泥をはく 價55-349
- 1826 戸をあけっぱなす 69-128
- 1827 何食わぬ 價46-195, 73-272
- 1828 涙をのむ 價64-246
- 1829 縄尻^{なわじり}をとる 50-38
- 1830 新床^{にいどこ}を持つ(價)72-298
- 1831 肉体を握る 64-72
- 1832 二の足をふむ 價55-149(2回), 393
- 1833 濡れ衣^{ぬれぎぬ}を著せる 價34-151
- 1834 寝首をかかれる 價55-179
- 1835 熱をあげる 價55-194
- 1836 熱を入れる 價73-192
- 1837 狙い^{ねらい}を定める 價73-196
- 1838 根を下ろす 價46-300
- 1839 喉をしめる(價)55-325
- 1840 のみの入れようがない 55-203
- 1841 烽火^{のろし}を揚げる 46-357
- 1842 「はいね」を抱^{いだ}く 64-63
- 1843 肺をふくらます 72-199
- 1844 鉄を入れる 價52-128
- 1845 場所をみつける 55-48
- 1846 はずみをつける 價73-259
- 1847 八方を走り回る(價)64-59
- 1848 漢^{はな}もひっかけない 價50-317
- 1849 鼻をあかす 價72-390
- 1850 鼻を打つ 價33-9
- 1851 花を咲かせる 價55-212
- 1852 鼻をひくつかせる(價)73-271
- 1853 鼻をへし折る 價55-387
- 1854 腹を肥やす 價32-30
- 1855 腹を曝^{さら}け出す 64-62
- 1856 バリケードを築く 73-297
- 1857 針を含む(價)36-61
- 1858 波浪を浴びる 49-87
- 1859 歯を喰いしぼる 價46-294, 73-323, 339
- 1860 歯をむく(價)50-28
- 1861 半畳を入れる 價72-223
- 1862 半面をたたきつぶす 46-359
- 1863 光りを放つ 價69-210
- 1864 光りを求める(價)50-90
- 1865 膝をならべる(價)46-186
- 1866 膝を乗り出す 價52-124, 64-60
- 1867 額をぶつける 46-321
- 1868 一泡を吹かす(價)35-177
- 1869 一皮剥く 價62-307
- 1870 一皮むけば 價72-400, 404
- 1871 一役買う 價34-156
- 1872 独り相撲をとる 價73-212
- 1873 一人二役を演じる 價55-154
- 1874 人を殺す(價)62-95

- 1875 罅ひびを入れる (慣)50-117
- 1876 百も承知する 37-314
- 1877 火を点つける 慣37-324(2回)
- 1878 貧乏くじをひく 慣55-412
- 1879 深みを覗く (慣)73-186
- 1880 武器が用意される 55-501
- 1881 服を着替える 73-329
- 1882 夫人を取り戻す 46-349
- 1883 懐中ふとごろを暖める 慣32-41
- 1884 篩ふるいの目を潜り抜ける 73-303
- 1885 ブレーキをかける (慣)73-272
- 1886 平行線をあるく 55-183
- 1887 平行線をやぶる 55-183
- 1888 別の人間がつくりだされる 55-137
- 1889 弁当を使う 慣52-123
- 1890 方向を失う 慣62-163
- 1891 防壁を築く (慣)76-248
- 1892 頬を染める 慣62-153
- 1893 ほこ先を向ける 慣55-190
- 1894 星を見る 72-229
- 1895 臍はらをかためる 慣73-181
- 1896 臍はらをかむ 慣55-256
- 1897 歩調を合わせる 慣73-319
- 1898 骨身をけずる 慣55-271
- 1899 骨を見失う 73-228
- 1900 焔ほのお あらを煽る 慣34-154
- 1901 濛ぼろをめぐらす (慣)55-314
- 1902 ぼろを出す 慣37-322, 55-507
- 1903 ぼろを見せる (慣)37-322
- 1904 幕切れを飾る 慣73-280
- 1905 幕間を埋める 73-189
- 1906 まくらをならべる 慣55-332
- 1907 幕を閉じる 慣73-287
- 1908 髓まつゆを燃え立たす 69-153
- 1909 的まとを射る (慣)73-216
- 1910 水をあびせかける (慣)55-401
- 1911 水を打ぶっかける (慣)49-29, 47
- 1912 溝みぞをとびこえる 55-127(2回)
- 1913 道筋を通る 36-8
- 1914 道歩く 慣34-159, 46-369(路), 72-235
- 1915 道を行く (慣)72-310(2回)
- 1916 路みちを拓く (慣)72-360
- 1917 耳持みみつ (慣)50-350
- 1918 耳を傾ける 慣73-179, 251
- 1919 耳をすます 慣73-286
- 1920 身を入れる 慣34-156
- 1921 身をかためる 慣55-149
- 1922 身をかかわす (慣)55-383
- 1923 身を切られる 慣73-335
- 1924 身を殺す 慣64-68
- 1925 身を捧げる 慣64-67
- 1926 身を引き離す 慣69-128
- 1927 身を翻えず 64-62
- 1928 実を結ぶ 慣34-156
- 1929 身を焼く 慣50-19
- 1930 身をゆるす 慣64-58(2回)
- 1931 身をよじる 慣73-321
- 1932 身を寄せる 慣28-460
- 1933 身をわななかせる 慣73-302
- 1934 虫を起す (慣)52-125(2回)
- 1935 無駄骨を折る 慣73-338
- 1936 胸なで下す 慣46-199
- 1937 胸をうたれる 慣55-121, 68-55
- 1938 胸をうつ 慣46-363
- 1939 胸をかきむしる 慣72-388
- 1940 胸を刺す (慣)49-73(2回)
- 1941 胸をしめつけられる 慣55-348
- 1942 胸をしめつける 慣55-397
- 1943 むねをつかむ 41-157
- 1944 胸を突かれる 62-155

432 3. 分類結果

- 1945 胸をなでおろす 慣73-192, 223
 1946 胸をふさぐ (慣)64-81
 1947 目がはなせない 慣55-69
 1948 飯をたべる 慣62-118
 1949 目にとまる 慣73-179
 1950 目ひく 慣28-453
 1951 眼もあてられない 慣62-162
 1952 眼を落す 慣72-265, 74-45
 1953 眼を刺す (慣)50-313, 62-306, 73-447
 1954 目をつぶる 慣34-133, 55-416, 73-353
 1955 芽を摘み取る 慣76-17
 1956 芽をつむ 慣55-344
 1957 目を腫^{つむ}る 46-317
 1958 目をとおす 慣73-239
 1959 目をとめる 慣33-21
 1960 目を盗む 慣72-168(眼を偷む), 73-271
 1961 眼を放す 慣37-312
 1962 眼を光らす 慣37-309
 1963 目をやる 慣33-21, 22, 40-276(眼)
 1964 ものをつかむ 慣68-75
 1965 破れをととのえる 35-409
 1966 指をくわえる 慣55-312
 1967 夢を見る 慣72-253, 257(4回), 260, 295
 1968 予防線をはる 慣55-401
 1969 撚^よりをもどす 慣46-153, 157, 196, 64-52, 73-225
 1970 領域を犯す (慣)55-374
 1971 旅券を発行する 76-240
 1972 ルビコン河を渡る 64-68
 1973 瑠璃をのべる 31-126
 1974 レールを走る 50-75
 1975 藪^{おら}をも掴む 慣50-323
 1976 輪をかける 慣55-172

〔名ヲ動テ〕

- 1977 人目を盗んで 慣73-211

〔名ガ動テ動〕

- 1978 花卉がひらいて見る 50-309
 1979 頸が締って吊さがる 50-331
 1980 心臓がみだれてうつ 55-289
 1981 蛭どもがむず痒^かがって身もだえをす
 る 73-287

〔名ガ動ノヲ動〕

- 1982 さなだ虫が下りてくるのを待つ 35-392

〔名ガ動ヨツモ動〕

- 1983 姿勢がくずれないように支える 76-252

〔名ニ動テ動〕

- 1984 壁^{むか}に對^{むか}っておこる 50-377
 1985 死臭に包まれて生きる 72-231
 1986 下敷きになって圧しつぶされる 50-92
 1987 二つに裂けてひろがっている 73-324
 1988 みじんこにされてすくむ 50-257

〔名ヲ動テ動〕

- 1989 後砂^{あとすな}を蹴^けって飛び出す 35-178
 1990 一日を割って使う 33-11
 1991 お面を借りてかぶる 73-241
 1992 胸襟を開いて歩み寄る (慣)72-172
 1993 堰^{せき}をきって奔流する (慣)55-24
 1994 肉を食っても飽き足りない 50-48
 1995 虫をかかえて躡^{かつか}歩する 35-330
 1996 目かくしをして走らせる (慣)62-139
 1997 夢を見て暮す 慣72-311

〔名ヲ動ハ動〕

- 1998 丸太かドラム罐を投げてもらわなけれ
 ば溺れる 73-332

〔名ヲ動テ動名〕

- 1999 うなりをあげて廻転しつづけていた
 三角形 73-334

〔名ト動テ動名カ動名〕

2000 獲物だと思って持ち帰ったものが
(じつは) 食えない餌にすぎない
73-207

〔名ヲ動テ動名=動名〕

2001 勘定をはらわらないで居のこっている
客に対するやり方 74-34

〔名デ動名〕

2002 鎖でつながれている犠牲者 73-245
2003 船中にて申すまじき事 (償)34-129
2004 緑色で描かれた単色画 31-95

〔名=動名〕

2005 悪魔につき従う天使 62-373
2006 手にとれない花 (償)55-25

〔名ヲ動名〕

2007 朝を感じる気持 48-13
2008 頭を圧してくるもの 62-116
2009 いのちをつなぐ道中 35-179
2010 毛を^ほ搔られるにわとり 74-272
2011 身を憩わせる場所 49-34
2012 矢をつがえた姿勢 73-245
2013 ユメを見ている顔つき 74-53
2014 鎧を着込んだ意気込み 73-355

〔名ヲ動テ名〕

2015 口をぬぐって頬かむり (償)73-280

〔名カ動名カ動〕

2016 制動のきかないはずみがつく 73-206

〔名=動名=動〕

2017 蔭になり日向になり (償)50-114

〔名ノ動名=動〕

2018 手のとどかないところに飛び去る
73-281

〔名ヲ動名ヲ動〕

2019 糸を攻め穴を狙う 76-245
2020 手をかえ品をかえ (償)73-185

2021 根ほり葉ほり (償)73-203

2022 リハーサルをやらずに本番をやる
(償)55-122

〔名ヲ動テ名へ動〕

2023 地獄をぬけて空へ飛びたつ 50-76

〔名ヲ動テ名ヲ動〕

2024 足をあげて席をけり倒す 55-503

2025 席をみつめて腰をすえる 55-481

2026 庇^{ひさし}を貸して母屋を取られる (償)73-272

〔名ヲ動バ名カ動〕

2027 糸を引けば手足が動く 50-85

〔名ヲ動バ名ダケ動〕

2028 片腕を征服すれば片腕ぶんだけ裏切
られる 73-320

〔名ヲ動テ名=動動〕

2029 足もとを見て道に迷わないようにす
る 73-229

〔名ヲ動ナガラ名=動名ヲ動〕

2030 人ごろしを行いながら血にまみれた
手をぬぐう 55-95

〔名カ動名=名ヲ動〕

2031 岸が見えているうちに^{かじ}舵を切りかえ
す 73-264

〔名=動名カ名=動〕

2032 手にふれるものが灰になる 69-227

〔名ヲ動テ名=名ヲ動〕

2033 爪を磨いて鉄壁に穴を穿つ 46-356

〔名ヲ動バ名ノ名ヲ動〕

2034 両腕を征服してやれば両腕ぶんの仕
返しをされる 73-320

〔名=動名カ名ノ名=名動名〕

2035 演壇に上った男が聴衆のざわめきに
思考が停頓しはじめる困惑 74-44

〔名ヲ副形〕

2036 目盛が一ト桁高い 50-263

434 3. 分類結果

〔名ガ副形形動〕

2037 扉が無限にとおく小さくなる 74-23

〔名ガ副形動〕

2038 廊下が無限にながく延びて行く 74-22

〔名ガ副動〕

2039 すべてがぐるぐる旋回する 32-52

2040 世界が恍然と輝く 50-42

〔名デ副動〕

2041 荒縄でぐるぐる巻く 35-441

〔名ヲ副動〕

2042 虫を一疋持つ 35-330

〔名ガ副名〕

2043 役者が一枚上 償55-175

〔名ガ名〕

2044 瓜二つ 償73-289

2045 仮面が千枚張り 73-331

2046 全身瘤だらけ 73-291

2047 胸はいっぱい 償55-433

〔名カラ名〕

2048 藪から棒 償72-286

〔名カラ名マデ〕

2049 一から十まで 償52-161

2050 小学校から大学級まで 62-119

〔名カラノ名〕

2051 親からの貰いもの 償50-326

〔名=名〕

2052 鬼に金棒 償55-257

2053 玉に環 償40-266

2054 猫に小判 償68-94

2055 寝耳に水 償46-177

〔名ノ名〕

2056 秋の扇 50-74

2057 朝夕の口すぎ (償)46-202

2058 (二本の)足だけの存在 73-225

2059 あとの祭 償46-181, 186, 191

2060 穴の中 37-308

2061 あの方の訓練 62-122

2062 雨ふりの着物 41-124

2063 池の主 償76-240

2064 石の帽子 36-127

2065 イソップの蛙 償76-220

2066 一滴の雫 (償)48-10

2067 一疋の動物 35-388

2068 犬畜生の姿 (償)46-163

2069 岩屋の囚人たち 53-10

2070 牛の眼 35-266

2071 牛の眼ん玉 35-266

2072 黄金のしずく 73-353

2073 お化粧の仕直し 35-463

2074 鬼の棲家 (償)46-194

2075 おまえの柵 73-307

2076 女の家来 35-362

2077 女の兵隊 35-462, 470

2078 銅殺しの奉公人 50-74

2079 怪物の集団 73-341

2080 怪物の息子 55-163

2081 顔の喪失 73-198, 285

2082 餓鬼道の生活 償35-462

2083 かぎの手 償55-5

2084 風の吹きまわし 償62-162

2085 壁の外側 72-221

2086 がらすの玉 35-356

2087 躰の粘膜 76-366

2088 空っぽの容器 73-228

2089 監獄の一室 73-285

2090 観察の角度 (償)46-315

2091 義母の席 (償)55-315

2092 棘皮動物の仲間入り 73-347

2093 亀裂の網目 73-228

- 2094 禁止の柵 73-316, 331, 322(2回), 329, 354
- 2095 禁止の破壊 73-349, 354
- 2096 くの子の二ツ重ね (慣)50-299
- 2097 栗色の唇 73-324
- 2098 黒眼鏡の赤ん坊 73-270
- 2099 甲羅の厚さ 73-244
- 2100 五彩の花々 62-177
- 2101 コロップの栓 53-7, 8
- 2102 コンクリート製の鎧 73-288
- 2103 最後の一線 (慣)64-72
- 2104 最後のそれ (慣)64-72
- 2105 時間の作用 62-338
- 2106 指呼の間 慣64-50
- 2107 死の鞭 (慣)68-46
- 2108 磁場の歪み 73-315(2回)
- 2109 自分の精神分析医 73-295
- 2110 自分の扉 73-346
- 2111 縞瑪瑙の切断面 31-95
- 2112 しみだらけの地図 73-347
- 2113 射程の窓 35-347
- 2114 照明のうごき方 64-51
- 2115 処女の匂い 35-351
- 2116 神仏の思召し 慣46-198
- 2117 素顔の門衛 73-271
- 2118 好きずきの虫 35-330
- 2119 聖壇の業火 76-40
- 2120 世界の花 46-366
- 2121 関の山 慣73-341
- 2122 千里のへだたり 55-446
- 2123 象牙の塔 慣31-80
- 2124 想像のひと 55-306
- 2125 旅の空 慣55-456
- 2126 断末塵の叫喚 50-48
- 2127 血の騒ぎ (慣)50-29
- 2128 長蛇の列 慣55-450
- 2129 通行止めの世界 76-264
- 2130 通路の回復 73-317
- 2131 通路の復旧作業 73-287
- 2132 土の匂い (慣)76-251
- 2133 妻の席 (慣)55-314
- 2134 停止の状態 55-289
- 2135 敵の包囲 73-284
- 2136 関の声 慣46-323
- 2137 独演の脱出物語 28-461
- 2138 毒・死の臭い 73-348
- 2139 どぶのみじんこ 50-257
- 2140 虎の威 慣35-408
- 2141 梨の碟 52-134, 73-287
- 2142 肉体の取引場 64-67
- 2143 肉の味 (慣)62-325
- 2144 肉の塊 62-284, 291
- 2145 二個の直線 36-21
- 2146 人形の着物 33-33(2回)
- 2147 寝言の続き 46-187
- 2148 猫の瞳 46-345
- 2149 ねずみの子 35-164, 180, 195
- 2150 閨房の飾り 76-23
- 2151 ハアトの痛み 慣32-42
- 2152 廃墟の臭い 73-179
- 2153 バカのひげちゃん 35-442
- 2154 バトンの受けわたし 50-379
- 2155 鼻の先 慣64-79
- 2156 腹の底 慣34-157, 52-127
- 2157 晴れの舞台 慣55-176
- 2158 挽回のポイント 76-23
- 2159 日蔭の身 慣50-69
- 2160 光の塊り 62-306
- 2161 引かれ者の小唄 慣73-287, 340
- 2162 悲劇の主人公 慣49-83
- 2163 火の車 慣72-175

436 3. 分類結果

- 2164 蛭のうらみ 73-291, 334
 2165 蛭の塊り 73-184
 2166 蛭の障害 73-227
 2167 蛭の侵蝕 73-185
 2168 蛭の巢 73-184, 211, 212, 228, 235, 239,
 246, 248, 254, 255(2回), 257(3回), 261, 264,
 300, 310(2回), 317, 320, 324, 339, 347
 2169 フェアライランドの王 31-98
 2170 復讐の女神 62-373
 2171 覆面の怪人 73-185
 2172 古疵のうずき (慣)52-163
 2173 平気の平佐 慣28-466
 2174 帽子の廂^{ひまし} 36-213
 2175 焔の音 55-498
 2176 堀川夜討の静^{ようち しずか} 50-55
 2177 捕虜收容所の生活 74-14
 2178 マイナスの部分 慣46-340
 2179 街の女 慣68-25
 2180 水の泡 慣37-310, 73-185
 2181 身の入れ方 慣64-62
 2182 虫の居所 慣34-138
 2183 虫の知らせ 慣46-166, 181, 191
 2184 胸の中 慣46-163, 194, 64-54, 69
 2185 胸のすみ 慣55-200
 2186 名妓^{めいぎ}の座敷 50-313
 2187 目のかたき 慣52-120, 153, 73-346(一敵)
 2188 元の杓あみ 慣68-84, 73-338(一木阿弥)
 2189 藻・泥の匂い 76-237
 2190 闇の女 (慣)68-56
 2191 闇の妖気 52-164
 2192 夢の出来事 55-107
 2193 妖精の横顔 73-351
 2194 夜の川 62-175, 176, 182
 2195 夜の世界 55-69
 2196 綿の列 72-357(2回), 431

[名ノ名カラ]

2197 はらの底から 慣55-157

[名ノ名デ]

2198 硝煙のなかで 73-266

[名ヘノ名]

2199 内部への闖入者 72-298

[名ヨリ名]

2200 顔よりも胃袋 73-352

[名ガ名ガ形]

2201 味もそっけもない 慣55-204

2202 暮も正月もない 慣55-15

2203 花も実もない (慣)55-391

2204 元も子もない 慣73-202

[名ノ名ガ形]

2205 足の踏み入れ場もない 慣46-168

2206 このアンテナは感度が鈍い 52-124

2207 血のめぐりのいい 慣62-98

2208 身のおきどころがない 慣46-158

[名ノ名ガ形ヲ形]

2209 暗の洞窟はふかくて底知れない、55-
501

[名ノ名ガ形 動]

2210 腹の上まで赧^{かか}くなる 35-163

2211 眼のさきが暗くなる (慣)46-167

[名ノ名ヲ形 動]

2212 最後の二頁を美しく飾る 72-300

[名ノ名ノ形 名]

2213 有機体の構成の血肉的な要素 62-263

[名ノ名=形 名ガ動]

2214 胸のなかにあたたかいものが流れこ
む 55-49

[名ガ名ガ動]

2215 手も足も出ない 慣28-454, 50-316

2216 天井も壁も傾く 72-189

2217 花も実もある 慣46-164

- 2218 矢も楯もたまらぬ 價46-202
〔名_カ名_カ動〕
- 2219 一切が足音からはじまる 68-101
〔名_カ名_ト動〕
- 2220 彼女が金銭登録器といっしょに買い
とられる 76-248
- 2221 展望が沙漠と化す 69-227
〔名_カ名₌動〕
- 2222 鬼がまわりにいる 36-105
- 2223 仮面劇が幕になる 73-179
- 2224 体が宙に浮く 價73-255
- 2225 紅雲谷に満つ (價)55-450
- 2226 さなだ虫が肉にくい入る 35-392
- 2227 手が後ろにまわる 價62-98
- 2228 売店が足もとに沈む 55-219
- 2229 光が胸にひらめく 68-17
- 2230 胸が光にふるえる 68-87
- 2231 盲蛇ものに怖じず 價50-394
〔名_カ名_ヲ動〕
- 2232 外界が繭目をなす 69-238
- 2233 外界が斑らをなす 69-238
- 2234 貝が蓋を閉じる 76-226
- 2235 壁が厚みを増す 72-190
- 2236 子供が(大人の)生活を真似る
62-140
- 2237 鼠が猫を噛む (價)50-397
〔名_カ名_へ動〕
- 2238 隠れ家から法廷へ早替りする 73-179
〔名_ヲ名_ヲ動〕
- 2239 血で血を争う 價55-254
- 2240 舞台上で役を演じる 55-507
〔名₌名_カ動〕
- 2241 仮面に肉がつく 55-392
- 2242 城壁に穴があく 76-237
- 2243 腹に一物ある 價37-320

- 2244 表情に距離がある 55-24
〔名₌名_ヲ動〕
- 2245 (窓一つない)石牢いしろうに(生きながら)自分
を埋葬する 73-327
- 2246 腕によりをかける 價55-224
- 2247 おすそわけに尾をふる 55-105
- 2248 顔おもてに袂たもとをあてる (價)46-179
- 2249 顔に唾を吐く 35-452
- 2250 体に大釘をうちこむ 73-245
- 2251 口角泡を飛ばす 價34-137
- 2252 航行中に舵を執る 46-356
- 2253 自分に唾をはく 56-101
- 2254 骨身に痛みを覚える 46-371
- 2255 眉に唾をつける 價50-390
〔名_ノ名_カ動〕
- 2256 赤字の欄が埋まる 76-18
- 2257 おっぱいの匂いがする 72-211
- 2258 風のうなりがきこえる 55-132
- 2259 肩の荷が下りる 價46-191, 62-154
- 2260 キュピドンの翼が飛び去る 72-248
- 2261 舌の根もかわかぬ 價73-289
- 2262 死の翼が羽ばたく 72-231
- 2263 皺の中までが洗い込まれる (價)69-
143
- 2264 地下の水がながれる 55-477
- 2265 手持ちの札ふだが切れる (價)76-244
- 2266 どこの人かわからない (價)35-174
- 2267 化けの皮がはげる 價52-166
- 2268 星の位置がさだまる 62-116
〔名_ノ名_ヲ動〕
- 2269 渦のなかで立ちすくむ 55-296
- 2270 観念の世界で生きる 64-65
- 2271 人間の重さで押しつぶされる 31-55
- 2272 母の位置でながめる 55-267
〔名_ノ名₌動〕

438 3. 分類結果

- 2273 頭の子とおしだす 55-359
 2274 一匹の牡に豹変する 55-329
 2275 茨の中にいる 50-40
 2276 お膳の前につれてゆく 35-343
 2277 檻の中におさまる 55-388
 2278 顔の上に跨がる 35-347
 2279 顔の向う側にたどり着く 73-255
 2280 殻の中にとじこもる 償55-27
 2281 起伏の谷間に陥ち込む 64-53
 2282 柵の内側にいる 73-346
 2283 地獄の人間になる 55-303
 2284 自分の城にひきあげる (償)55-314
 2285 象牙の塔にこもる 償55-64, 72
 2286 外の風に当る 償50-74
 2287 外の暗黒くろきにいる 72-273
 2288 玉の輿こしにのる 償55-36, 225
 2289 蕾うぶの中に手折られる (償)50-93
 2290 妻の座にすわる 償55-293
 2291 妻の席せきにいる (償)55-464
 2292 妻の席せきにすわる (償)55-127, 147, 381
 2293 妻の席せきにつく 55-447
 2294 鉄の蓋におさえつけられる 64-241
 2295 流れの外にただよい出る 73-255
 2296 腹の足しになる 償50-315
 2297 光りの下につれだす 55-328
 2298 被告の立場に立つ 55-130
 2299 袋の中に(嚴重に)閉じ込められる
 73-226
 2300 舞台の中央に立つ 55-479
 2301 不毛の野に立つ 50-34
 2302 篩の目にかかる 73-303
 2303 別の女性につくりなおされる 55-249
 2304 僕ぼくの中うちにいる 72-250
 2305 未知の女としてうつる 55-293
 2306 胸の中にある 償46-174

- 2307 胸のなかに沈む 64-81
 2308 眼の中に飛び込む 償72-218
 2309 夢の中に彷徨する 49-73
 [名ノ名ヘ動]
 2310 正の方向へ脱出する 73-228
 2311 胸のなかへはいる (償)31-58
 [名ノ名マデ動]
 2312 らくの日までつとめあげる 55-249
 [名ノ名ヲ動]
 2313 頭あたまの方向を反らす 36-12
 2314 新手あらたの兵をくり出す 73-185
 2315 息の根をとめる 償73-327
 2316 嘘の料理を食う 35-343
 2317 ううにの棘とげを植える 73-347
 2318 襟えりの毛虫けむしをはらい落す 73-243
 2319 男おとこの汚れよごれを撒き散らす 69-182
 2320 帯おびの端はしを受け取る 48-10
 2321 女おんなの尻しりを追い回す 償68-71
 2322 女おんなの道みちをあるく 55-324
 2323 仮面劇かめんげきの主役しゅやくを演じる 73-339
 2324 仮面かめんの中うちを通り抜ける 73-327
 2325 殻からのまわりを廻る 41-159
 2326 期待きたいの眼まなこを向ける 償46-356
 2327 禁止きんしの柵さくも打ち破る 73-354
 2328 警察けいさつの空気くわいを吸いこむ 50-362
 2329 コロップころっぷの栓せんをつめる 53-7
 2330 自分おのれ自身の柵さくも踏みくだく 73-306
 2331 自分おのれの尻尾しりびし・耳みみ・足首あしむすぶを探しまわる
 73-288
 2332 自分おのれの城しろをまもる (償)55-268
 2333 出世街道しゅっしやうかいだうの短距離たんきりをあるく 55-344
 2334 薪水しんすいの労らうを執とる 償34-150
 2335 外そとの空気くわいが吸すえる 62-113
 2336 外そとの空気くわいを吸すう 62-164
 2337 (性せいに関する)立入り禁止たていりきんしの札しるしを蹴

- 倒す 73-304
- 2338 波の上を足掻きまわる 73-333
- 2339 人形の着物をぬぐ 33-33
- 2340 脳の中を行き来する 40-271
- 2341 白昼の光を当てる 73-336
- 2342 腹の底を叩く 35-179
- 2343 腫物^{はれもの}のかさぶたをつける 76-241
- 2344 一つ籠^{かまど}の飯食う 價46-167
- 2345 陽の目を見る 價46-354
- 2346 負の方向を目指す 73-228
- 2347 (幾重もの) 篩^{ふるい}の目をくぐらせる
73-304
- 2348 兵營の日曜日を走り出る 35-462
- 2349 包装紙のデザインを変更する 73-256
- 2350 胸の厚さをはかる 55-88
- 2351 胸の中を見通す (價)46-183
- 2352 物の表面を見る 72-226
- 2353 夢の名残りを透^おう (價)46-373
- 2354 旅券の通用範囲を拡張する 73-289
- 2355 ろうそくの火を見守る 48-11
- 2356 わが家のまえをかすめる 73-277
〔名へ名ヲ動〕
- 2357 首へ縄をつける 價52-126
- 2358 太陽へ顔を向ける 69-133
〔名ヲ名カラ動〕
- 2359 武者を戦場から引き上げさす 46-294
〔名ヲ名=動〕
- 2360 ことばを視覚に感じる 50-377
- 2361 時計を修繕にやる (十五日すぎるとこわ
れる) (價)62-109
- 2362 背中を二つに折る (價)72-219
- 2363 濡れ雑巾をからだにおしつけられる
73-444
- 2364 光を胸に感じる 68-80
- 2365 名妓・座敷をかたなしにする 50-313
- 2366 轆轤^{らくろ}をとどろに廻す 69-140
〔名=名ヲ動テ動〕
- 2367 壁面に跡をのこして消え去る 62-257
〔名ヤ名ヲ動=動〕
- 2368 雨やあられをふりかかるとまかせせる
55-505
〔名ガ名ヲ動タラ動 名ガ名ト動テ動〕
- 2369 通路が崖崩れで塞がれたら通りかか
った人も廃屋と思って通り過ぎる 73-
196
〔名ノ名ヲ動 副 動〕
- 2370 全身の水分をしぼりとられからから
に乾^ひ上る 73-325
〔名ノ名ガ動 名〕
- 2371 舌の根が乾かぬ間 價46-173
- 2372 舌の根の乾かぬうち 價64-73
〔名ヲ名=動 名〕
- 2373 顔を中心にした円運動 73-206
〔名ノ名=動 名ガ形〕
- 2374 時の一本松にとまった鳥は清^{すがすが}々しい
50-345
〔名ガ名ガ動タリ名ガ動〕
- 2375 柵が虫がくっけいたり釘が抜けてい
る 73-306
〔名ガ名=動テ名=動〕
- 2376 敵が電波に化けて細胞に滲透する
73-284
〔名ノ名ガ動ナラ名ヲ動〕
- 2377 歯の治療ができないのなら痛み止め
を飲む 73-189
〔名ノ名=動ナガラ名ヲ動〕
- 2378 たからの山にはいりながら手をつけ
ない 價55-218
〔名ノ名ヲ動 名ノ名〕
- 2379 偽の光をさえぎる偽の闇 73-306

440 3. 分類結果

- [名ヲ名=動バ名デ名カ動]
- 2380 要素をパレットに用意すれば混合で
中間色が表現できる 73-252
- [名ガ名デ動ガ名ニ名ト名カ動]
- 2381 荒蕪地がアスファルトで固められて
いるが遠い暗がりに草と水がある 76-
226
- [名ノ名ヲ副 動]
- 2382 曠野の上を茫々と歩く 63-17
- [名ヲ名テ副 動]
- 2383 みずからを荒縄でがんじがらめに縛
り上げる 73-323
- [名ノ名カ副 名ヲ動]
- 2384 無数の敵がびったりと身をよせる
73-284
- [名ノ名テ副 名ヲ動]
- 2385 胸の中でほっと溜息をつく 償73-330
- [名 名ノ名]
- 2386 戦場生き残りの古つわもの 50-374
- [名ガ名ノ名]
- 2387 お茶は井戸のなか 68-42
- [名ト名ノ名]
- 2388 素顔と仮面の距離 73-308
- 2389 手紙と宛名の関係 73-230
- [名ノ名カ名]
- 2390 ねずみの子はねずみ 35-190
- 2391 眼の奥が明けっぱなし 50-271
- [名ノ名テ名]
- 2392 他人の軒で雨宿り 償73-208
- [名ノ名ノ名]
- 2393 ぜいたくの餅の皮 55-381
- 2394 時の流れのよどみ 73-255
- 2395 破壊の神の腕 63-17
- 2396 ^{はんによ}班女が^{お母}閨の恨みごと (償)50-74
- [名ヨリ名カ名]

- 2397 約束手形よりも現金が値打ち 73-210
- [名デ名ノ名ヲ動]
- 2398 自分で自分の墓穴を掘る 償73-356
- [名デ名ヲ名=動]
- 2399 破片で手を血みどろにする 69-197
- [名ノ名カ名=動]
- 2400 頭の半面が風物に向く 36-48
- 2401 釘の音が胸にひびく 62-84
- 2402 ねずみの子が大ねずみになる 35-205
- 2403 喉のしこりが(ごくりと)胃(の中)に
落ち込む 73-249
- [名ノ名カ名ヲ動]
- 2404 金の矢が空を貫く 72-284
- [名ノ名テ名=動]
- 2405 皮膚の上っつらだけで女に接する。
55-285
- [名ノ名テ名ヲ動]
- 2406 青空の下で光を浴びる 50-75
- [名ノ名=名ガ動]
- 2407 ^{まなび}蛹の変身にだって準備はある 73-244
- 2408 秤の目盛に変化があらわれる 73-186
- 2409 光のなかに住いが見える 50-379
- [名ノ名=名テ動]
- 2410 無明の長夜に金泥で築く 69-288
- [名ノ名=名ヲ動]
- 2411 顔の中にあなをあける 35-383
- 2412 仮面の陰に身をひそめる 73-288
- 2413 軀の周りに膜を持つ 76-361
- 2414 禁止の柵に手をふれる 73-307
- 2415 肉体のかげに身をくらす 52-159
- 2416 幕のほころびに継ぎでも当てる 73-
180
- [名ノ名ノ名ヲ動]
- 2417 死の影の谷を歩く 72-231
- [名ヲ名ノ名=動]

2418 不発弾を胸の奥にいただく 55-173

〔名ヲ名ノ名ヘ動〕

2419 螺旋棒^{らせんぼう}を眼の中へ刺し込む 36-213

〔名ガ名ノ名ニ動テ動〕

2420 狸が人間の岸辺にむかって泳ぐ 35-179

〔名ガ名ノ名ヲ動テ動〕

2421 見物人が俳優のお面を借りてかぶっている 73-241

〔名ノ名ガ名ヲ動テ動〕

2422 魔性のものが縄を解いて暴れる 62-161

〔名ノ名ヤ名ヲ副 名ニ動〕

2423 擬装の虫くいや釘跡を大っぴらに看板にしている 73-306

〔名ニ名 名ニ名〕

2424 海千年山千年 33-27

〔名ナラ名 名ナラ名テ形〕

2425 赤なら赤黒なら黒でよい 55-26

〔名ガ名ノ名ノ名ヲ動〕

2426 風が琴の絃の隙を吹き過ぎる 69-236

〔名ト名ノ名ノ名ヲ動〕

2427 馬と女の体の値打を見る 62-368

〔名ノ名ノ名ニ名ガ動〕

2428 呼吸の弁の蝶^{ちようつがい} 番にがたが来る 73-256

〔名ノ名ニ名ノ名ヲ動テ動〕

2429 禁止の柵に破れめの絵を描いて遊ぶ 73-307

〔名ノ名ノ名ノ名ノ名〕

2430 偽の微笑^{なごい}の下の偽の顔^{かほ} 73-306

〔連〕

2431 浮いた 償50-18

〔連 名ニ動〕

2432 わがものにする 償64-62

〔連 名ヲ動〕

2433 わが道をいく 償73-196

〔連 名ノ名〕

2434 同じ穴のむじな 償73-281, 287

4. 表

4.1 調査資料一覧

〔読み方〕

- 1) 配列順は、テキストに用いた中央公論社版『日本の文学』に従ったが、執筆・公表時期の順序にはほぼ対応するはずである。
- 2) 「巻」の欄は、その作品が収録されている『日本の文学』中の巻数を示す。
- 3) 「pp.」とあるのは、調査箇所をページで示したものであるが、ここでは各作品の全編を調べているので、それは、結局、その作品の収載箇所をも示している。
- 4) 「ページ数」とあるのは、その調査範囲をページで表したものである。なお、この全集にはさし絵がついているが、その欄のページ数はそのさし絵部分を除いた実質で示してある。また、ページの途中で、章が替わったり作品が終わったりして、空白部分ができる場あいがあるが、それでも1ページに数え、その作品が何ページにわたっているかを示したものである。
- 5) 「略号」とあるのは、引用文の出典を示したり、ある形式の比喩の出現状況を示したりする場あいに、作品名を簡略に示す必要があるので、各作品名を記号化したものである。ほとんどは、作品名の最初の1字をとったが、同一文字で始まる作品が2編以上ある場あいは、次のように区別した。

{ お目出たき人	→目	{ 海と毒薬	→毒
{ おはん	→お	{ 海辺の光景	→海
{ 風立ちぬ	→立	{ 死の棘	→棘
{ 風ふたたび	→風	{ 死者の奢り	→死

例： 42 117-177 61 風立ちぬ 立 堀辰雄

堀辰雄の『風立ちぬ』は、第「42」巻の「117」ページから「177」ページまでに、「61」ページにわたって収録されており、引用などにおいて簡略に示す場あいは、単に「立」として表す、という意味である。

調査資料一覧

巻	pp. -	ページ数	作 品 名	略 号	作 者 名
4	388-427	40	高 野 聖	高	泉 鏡 花
7	5-781	777	夜 明 け 前	夜	島 崎 藤 村
10	206-346	141	縮 函	縮	徳 田 秋 声
11	13-63	51	何 処 へ	何	正 宗 白 鳥
14	170-525	356	明 暗	明	夏 目 漱 石
19	150-224	75	溼 東 綺 譚	溼	永 井 荷 風
20	19-58	40	お目出たき人	目	武者小路実篤
28	57-144	88	春 泥	春	久保田万太郎
28	453-466	14	美 事 な 醜 聞	美	里 見 淳
31	54-132	79	田 園 の 憂 鬱	田	佐 藤 春 夫
32	7-61	55	神 経 病 時 代	神	広 津 和 郎
33	7-39	33	葎 の 中	葎	宇 野 浩 二
34	122-159	38	実 説 艸 平 記	実	内 田 百 閒
35	158-470	313	杏 っ 子	杏	室 生 犀 星
36	7-137	131	無 限 抱 擁	無	滝 井 孝 作
36	211-215	5	檸 檬	檸	梶 井 基 次 郎
37	308-327	20	機 械	機	横 光 利 一
40	259-276	18	日本三文オペラ	日	武 田 麟 太 郎
41	107-182	76	歌 の わ か れ	歌	中 野 重 治
42	117-177	61	風 立 ち ぬ	立	堀 辰 雄
44	438-446	9	ひ と り 暮 し	ひ	網 野 菊
46	151-203	53	お は ん	お	宇 野 千 代
46	291-373	83	母 子 叙 情	母	岡 本 か の 子
48	7-21	15	施 療 室 に て	施	平 林 た い 子
49	5-93	89	く れ な い	く	佐 多 稲 子
50	5-129	125	女 坂	女	円 地 文 子
50	257-406	159	流 れ る	流	幸 田 文
52	119-167	48	ま ぼ ろ し の 記	ま	尾 崎 一 雄
53	5-11	7	山 椒 魚	山	井 伏 鱒 二
55	5-521	517	顔	顔	丹 羽 文 雄
61	51-85	35	碑	碑	中 山 義 秀

444 4. 表

巻	pp. -	ページ数	作 品 名	略 号	作 者 名
62	76 - 188	113	風ふたたび	風	永井龍男
62	253 - 374	122	冬の宿	冬	阿部知二
63	7 - 28	22	白痴	白	坂口安吾
63	343 - 367	25	花筐	花	壇一雄
64	45 - 82	38	ハイネの月	ハ	井上友一郎
64	228 - 246	19	絵本	絵	田宮虎彦
68	5 - 127	123	永遠なる序章	永	椎名麟三
69	127 - 293	167	金閣寺	金	三島由紀夫
72	163 - 315	153	草の花	草	福永武彦
72	335 - 431	97	海と毒薬	毒	遠藤周作
73	179 - 356	178	他人の顔	他	安部公房
73	441 - 485	45	死の棘	棘	島尾敏雄
74	7 - 82	76	海辺の光景	海	安岡章太郎
74	269 - 283	15	娼婦の部屋	娼	吉行淳之介
74	432 - 460	29	遠来の客たち	遠	曾野綾子
75	224 - 262	39	静物	静	庄野潤三
76	5 - 42	38	太陽の季節	太	石原慎太郎
76	217 - 266	50	裸の王様	裸	開高健
76	349 - 376	28	死者の奢り	死	大江健三郎

4.2 比喩指標要素一覧

〔作り方〕

- 1) 比喩指標要素を品詞その他の文法的性質によってDFJKMRSの7類に分け、アルファベット順に配列する。
 - (1) Dは動詞, Fは副詞, Jは助詞, Kは形容詞, Mは名詞, Rは連体詞, Sは接尾辞からとった略号である。それぞれ厳密な品詞分類ではなく, そういう品詞によって代表される性格や機能を比喩の成立において果たしていると思われる語句をまとめたものなので, 品詞名を表に出すことを避けたわけである。したがって, 動詞類・副詞類……とはせずに, D類・F類……と呼ぶことにする。
 - (2) 語連続や語の組みあわさった型などの所属は, それと意味の類似した比喩指標要素(⇒で表示), それに準ずる比喩指標要素(≒で表示), および, それと機能の類似した比喩指標要素(∞で表示)を想定し, その所属を規準にして判断する。

例: D₅ 眼に映る ⇒ 見える

D₁₂ 一派通じる, 比較される ⇒ 共通する

F₂ 言ってみれば ≒ いわば

F₄ どう見ても, 文字通り ⇒ まったく

F₈ どことなく ⇒ どこか

F₁₂ 露一つ ⇒ 寸分

J₁ というより, に比べて ⇒ より

のほうが ∞ より

J₂ かなにか ≒ でも

J₅ というものは ≒ は

K₁ 瓜二つ, 似たり寄ったり ≒ 同じ

K₂ 違いがない, 変わらない ⇒ 同様

K₁₁ ではないか, にほかならない ⇒ だ

R₄ 一種の, 第二の ∞ ある

S₈ …よろしく ≒ …気どり

S₉ …という名の ⇒ …という

- (3) いわゆる助動詞を形容(動)詞なみに扱ったのは, 「AはBみたいだ」「AはBのようだ」あるいは「AはBだ」などは, 「AはBと選ぶところがない」「AはB同様だ」そして「AはBと同じだ」「AはBと等しい」「AはBに近い」などと連続的にとらえられるので, 比喩を成り立たせる上での働きに共通した性格があると考えたからである。

- (4) R₅の「小…」はいわゆる接頭辞相当だが、例えば、「小ナポレオン」〔母〕は、「第二のナポレオン」などと同様の働きをすると考え、このような連体的な造語成分をR類に納め、S類は接尾的なものに限る。
- 2) 各類がどのような性格を共通して持つかを示すために、その類の中心をなす品詞を説明的に添える。
- 例： F 副詞類
K 形容(動)詞・助動詞類
- 3) 各類の中を意味・機能によって種に分ける。
- 例： D⇒D₁～D₁₇ M⇒M₁～M₈
- 4) 各種についての具体的なイメージが得やすいように、その種の代表的な比喩指標要素を掲げる。
- 例： D₅ 感ジラレル F₄ マサニ J₁ ホド K₂ 同様 M₃ 感ジ・気持チ
R₄ 一種ノ S₇ …ソックリ
- 5) その種に属する比喩指標要素に共通する性格に最小限の説明を加える。
- 例： D₂ AヲBニ・ト～, AトBトヲ～
F₄ AハBヲ〔近似強調〕
F₁₈ ～コノ場合ハソレニ当タル〔前置キ〕
J₃ 〔並列強調〕
K₁₁ 〔指定段階〕
M₂ AハBノ～ニ見エル〔外見・関係〕
R₂ 〔差否定〕
S₈ 〔副詞化〕
- 6) 各種に属する比喩指標要素をその形式・意味・性質などの似ているものがグループをなすように配列し、番号をつける。
- 例： F₈ 1 なにか 2 なにかしら 3 なにやら 4 なんだか 5 どこか
6 どこやら 7 どこぞ 8 どころなく

〔読み方〕

- 1) アルファベットは、各比喩指標要素が属する類を表す。
- 例： F=F類 M=M類
- 2) アルファベットの後の表示は、その類の性格を代表する品詞名である。
- 例： J 助詞類 K 形容(動)詞・助動詞類
- 3) アルファベットに添えられた数字は、その類のうちのどの種であることを示す。
- 例： D₁₁=D類11種 S₈=S類8種
- 4) 種記号の次に掲げられたカタカナ表記の語(群)は、その種に属する代表的な比喩指標

要素である。

例： D₆ 気ガスル M₁ 近イ・同ジ

- 5) 各種の代表要素の下の欄は、その種の共通性格の最小限の説明である。

例： F₁₆ Cデ言エバ

～AはB=当タル〔転界〕

(F類16種としてまとめられた比喩指標要素「なら」「で言えば」「たとえ」とは、AをBにたとえる際に、「～AはBに当たる」という形式をとれば、「～」の位置に現れ、対象の世界を転ずる働きを受け持つ、という共通点をそなえている、という意味を表す。)

- 6) 次の数字は、その比喩指標要素のその種における号数を表す。

例： 3 みたい=K類9種3号(この表以外ではK₉₋₃と略記)

〔使い方〕

- 1) 比喩指標要素はどのような類に分かれるかを一覧する。

例： D 動詞類 F 副詞類 M 名詞類 ナド

- 2) 各種はどのような種に分かれるかを一覧する。

例： F類には「マルデ」グループ、「イワバ」グループ、「ホトンド」グループ、「マサニ」グループ、…「ツマリ」グループ、「ナンダカ」グループ……の19種が見られる。

- 3) 各種の共通性格を概観する。

例： D類11種は「Aカラ・デBヨ～」の比喩表現文型の「～」の位置に立ちうる点で共通し、F類12種は「変わらない」「違いがない」などの否定の度あいを限定する点で共通し、M類3種は感覚や心理に関する名詞である点で共通する。

- 4) 各種にはどのような比喩指標要素が含まれるかを一覧する。

例： K₉の〔比況・推定〕には「よう」「ごとし」「みたい」「らしい」が、S₈の〔副詞化〕には「…そのまま」「…さながら」「…よろしく」が、それぞれ掲げられている。

- 5) 「比喩索引」を併用して、ある比喩指標要素と共通の性格を持つ比喩指標要素にはどんなものがあるかを調べる。

例： 「まるで…でも…ように」という形の比喩表現に使われる「でも」に相当する比喩指標要素としては、ほかにどんなものがあるかを知らうとすれば、まず、「比喩索引」で五十音順を利用して「でも」を引きだす。すると、そこに「J₂₋₁」とあるので、今度はこの「比喩指標要素一覧」のアルファベット順からJ類を探して、その第2種を見ると、J₂の代表要素として「デモ」が掲げられ、その共通性格として〔ボカシ〕の役をする点を取りあげられており、その下に、「1 でも 2 など 3 かなにか 4 かな(ん)ぞ」と、そこに属する比喩指標要素が並んでいる。したがって、問題の「でも」はその種の代表的な比喩指標要素であり、ほかに「など」「かなにか」「かなぞ」

「かなんぞ」がそれと類似の機能を果たした用例が見いだされている、ということがわかる。

比喩指標要素一覧

D 動詞類	D₄ ナル	3 心地がする	3 想像する
D₁ 感ジル・タトエル	AガBニ・ト～	D₇ 感ジサセル	4 連想する
AヲBニ・ト～	1 なる	AガBヲ～	D₁₂ 似ル
1 感じる	2 化す	1 感じさせる	AガBニ・ト～
2 思う	3 変わる	2 思わせる	AトBトガ～
3 考える	D₅ 感ジラレル	3 思い出させる	1 似る
4 心得る	AガBニ・ト～	4 思い起こさせる	2 相似る
5 受け取る	AガBダト～	5 思い浮かべさせる	3 似通う
6 錯覚する	1 感じられる	6 想像させる	4 通じる
7 紛う	2 覚える	7 空想させる	5 一派通じる
8 見る	3 思える	8 連想させる	6 共通する
9 眺める	4 思われる	9 髣髴させる	7 比較される
10 見立てる	5 考えられる	10 錯覚させる	D₁₃ 相当スル・類スル
11 見せかける	6 とれる	11 象徴する	AガBニ～
12 たとえる	7 疑われる	D₈ 見イダス	1 当たる
13 なぞらえる	8 錯覚される	A=Bヲ～	2 当てはまる
14 諷諭する	9 見える	1 見いだす	3 相当する
15 扱う	10 見られる	D₉ 思イ合ワサレル	4 類する
16 する	11 見なされる	A=Bガ～	5 よくある
D₂ 比較スル	12 眺められる	1 思い合わされる	6 ままある
AヲBニ・ト～	13 眼に映る	2 髣髴(と)する	D₁₄ 劣ル
AトBトヲ～	14 映る	D₁₀ 想像サレル	AガBヨリ・ニ～
1 比する	15 聞こえる	AカラBガ～	1 劣る
2 比較する	16 響く	1 想像される	D₁₅ 違ウ
D₃ 呼ブ	17 印象づけられる	D₁₁ 連想スル	AハBトハ～
AヲBト～	18 扱われる	Aカラ・デBヲ～	1 違う
1 言う	D₆ 気ガスル	1 思い出す	D₁₆ 成ス
2 言い直す	AガBノ(ヨウナ)・トイウ～	2 思い浮かべる	AガBヲ～
3 呼ぶ	1 気がする		AヲBト～
4 形容する	2 心持がする		

1 成す
D ₁₇ 做ウ
AガB～テ
1 ならう
D ₁₈ 例ニスル
Bヲ～テAヲ感ジサセル
1 例にする
F 副詞類
F ₁ マルデ
～AハBノヨウダ
1 まるで
2 さながら
3 あたかも
4 ちょうど
5 いかにも
6 さも
F ₂ イワバ
～AハBダ
1 いわば
2 言えば
3 言ってみれば
4 言ってみるなら
5 言うたら
6 例をとれば
7 たとえば
8 たとえて言えば
9 たとえて言うのと
10 たとえて言うなら
11 たとえて言うが
F ₃ ホトンド
Aハ～Bダ〔類似度〕
1 そっくり

2 もはや
3 ほとんど
4 ほぼ
5 まず
6 まあ
7 むしろ
8 半分
9 なかば
10 ただ
11 せいぜい
12 いささか
F ₄ マサニ
AハBダ〔近似強調〕
1 まさに
2 まったく
3 実に
4 ほんとうに
5 ほんなこと
6 それこそ
7 どう見ても
8 文字通り
F ₅ ツクツク
AハBダト～思ウ
1 つくづく
F ₆ 今ニモ
～…ツク
1 今にも
2 あわや
F ₇ ツマリ
〔結論〕
1 つまり
2 結局

3 要するに
4 いずれ
F ₈ ナンダカ
〔不確定〕
1 なにか
2 なにかしら
3 なにやら
4 なんだか
5 どこか
6 どこやら
7 どこぞ
8 どころなく
F ₉ 仮ニ
〔仮定〕
1 仮に
2 もし
F ₁₀ コレデハ
～マルデAハB
1 これでは
2 それでは
3 それじゃ
4 あれじゃ
F ₁₁ マサカ
Aハ～Bデハアルマイ
1 まさか
2 なにも
F ₁₂ 大シテ
〔否定程度〕
1 大して
2 あんまり
3 どれだけでも
4 露一つ
5 寸分

F ₁₃ 薬ニシタクモ
～ナイ
1 薬にしたくも
F ₁₄ Aヲ見ルト
～Bヲ思イ出ス〔誘発〕
1 を見ると
2 を見たら
F ₁₅ Cカラ見レバ
〔視点〕
1 から見れば
F ₁₆ Cデ言エバ
～AハBニ当タル〔転写〕
1 なら
2 で言えば
3 にたとえると
F ₁₇ Bガヨク…ヨウニ
〔類例〕
1 がよく…ように
2 に見るように
3 にあるように
4 に時々あるように
F ₁₈ Bトイウコトガアル
～コノ場合ハソレニ当タル〔前提性〕
1 ということがある
2 と言うでしょう
3 と言うじゃありませんか
4 ということがあるでしょう
5 という諺があるでしょう
6 という…があるが

7	ということもあるわけだし	AがB~ナル[結果]	3	同じ	2	負けない	
8	のたとえ通り	1 に	4	そっくりだ	3	ひけをとらない	
<hr/>		2 と	5	瓜二つ	4	及ばない	
F ₁₉	Bデハアルマイシ 〔否定前置き〕	J ₅ トイウモノハ A~〔取りタテ〕	6	似たり寄ったり	K ₈	比デナイ AハBノ~	
1	ではあるまいし	1 というものは	K ₂	同様	1	比でない	
2	ではないが	J ₆ ノ AハC~B	AハBト~ AトBトハ~	1	同様	K ₉	ヨウ 〔比況推定〕
<hr/>		1 の	2	同列	3	よう	
J	助詞類	J ₇ AデアレBデアレ 〔同類視〕	3	同程度	2	ごとし	
J ₁	ホド 〔比較〕	1 …であれ…であれ	4	一つ	3	みたい	
1	ほど	2 …と…は	5	一般	4	らしい	
2	くらい	J ₈ CがDナラAハB 〔比例〕	6	違いがない	K ₁₀	ソウ 〔予想〕	
3	ばかり	1 …が…なら…は…	7	変わりがない	1	そう	
4	より	2 …なら…が…では…	8	違わない	2	かねない	
5	というより	3 …を…とすれば…は…	9	変わらない	K ₁₁	デアル 〔指定段階〕	
6	に比べて	4 …を…と呼ぶなら…は…	10	異ならない	1	である	
7	のほうが	5 …を…とすれば…は…にたとえてもいい	11	選ぶところが無い	2	さ	
<hr/>		6 …は…だが…も…	K ₃	同然	3	ではないか	
J ₂	デモ 〔ボカシ〕	7 …がかえって…でありむしろ…は…である	AハBト~	1	同然	4	と言っている
1	でも	K	AハBト・ノ~	K ₄	同類	5	というところだ
2	など	K ₁ 形容(動)詞・助動詞類	1	同類	6	といったところだ	
3	かなにか	K ₁ 近い・同じ	K ₅	ソノ通り	7	というものだ	
4	かな(ん)ぞ	AハB=ト~ AトBトハ~	Bハ…Aキ	1	その通り	8	にはかならない
<hr/>		1 近い	2	そうだ	3	というよりほかはない	
J ₃	サエ 〔並列強調〕	2 等しい	3	そんなもの	4	にすぎない	
1	も	K ₆	K ₆	ワカラナイ	5	なんでも…と…ばまちがいない	
2	もまた	AカBカ~	1	わからない	K ₁₂	デハナイ 〔否定〕	
3	だって	1 わからない	K ₇	フサワシイ			
4	さえ	AハB=ト~ AトBトハ~	BハA=~	1	ふさわしい		
5	すら	1 近い					
6	まで	2 等しい					
J ₄	ニ						

1 ではない	15 姿勢	2 一種	4 第二の
2 ではあるまい	16 形	M ₆ 類似	R ₅ 小…
K ₁₃ Bハヨカッタ	17 かっこう	AハBニ・ト～スル AトBトノ～	[接頭辞]
[評価]	18 顔	1 類似	1 小…
1 はよかった	19 顔つき	2 相似	~~~~~
2 とはよくも名付けた	20 おもかげ	M ₇ タトエ	S 接尾辞類
~~~~~	21 色	BハAノ～	S ₁ …バリ
M 名詞類	22 形式	1 比喩	B～ノA
M ₁ モノ・コト	23 図	2 たとえ	1 …もの
AハBトイウ・ノヨウナ～	M ₃ 感シ・気持チ	M ₈ 錯覚	2 …色
1 やつ	人ハAガBデアル～ [感覚・心理]	AヲBト～スル	3 …式
2 もの	1 感	1 錯覚	4 …なり
3 代物	2 感じ	~~~~~	5 …状
4 こと	3 感触	R 連体詞・接頭辞類	6 …状態
5 まね	4 気	R ₁ ヘタナ	7 …様
6 わけ	5 気持ち	～…ヨリ[以上]	8 …性
~~~~~	6 気分	1 ヘタナ	9 …役
M ₂ ヨウス・グアイ・形	7 心持ち	2 どんな	10 …ふう
AハBノ～ニ見エル [外見・関係]	8 心地	~~~~~	11 …づら
1 ようす	9 心	R ₂ 大シタ	12 …はだ
2 気配	10 思い	AハBト～進イガナイ [差否定]	13 …ばり
3 ありさま	11 感慨	1 大した	14 …なみ
4 おもむぎ	12 つもり	2 なんの	15 …格
5 風情	13 印象	~~~~~	16 …級
6 ふう	M ₄ 代ワリ・役目	R ₃ イワユル	17 …大
7 態	AハBノ～ヲスル	[限定]	18 …程度
8 状態	1 役目	1 いわゆる	19 …以上
9 観	2 役割	2 ほんの	20 …型
10 概	3 模型	3 ほんとの	21 …形
11 ぐあい	4 代わり	~~~~~	22 …気分
12 あんぱい	M ₅ タグイ	R ₄ 一種ノ	~~~~~
13 調子	AハBノ～ニ属スル	[同類]	S ₂ …的
14 口調	1 たぐい	1 一種の	B～ナA
		2 ある種の	1 …的
		3 一つの	~~~~~
			S ₃ …化

AガBへスル	1 …めく	1 …そっくり	1 …たる
1 …化	2 …びる	2 …同様	2 …という
S ₄ …紛イ	3 …じみる	3 …同然	3 …という名の
〔動詞転成〕	4 …なす		4 …として
1 …気どり	S ₆ …ボイ	S ₈ …サナガラ	S ₁₀ …ソノモノ
2 …紛い	〔形容詞化〕	〔副詞化〕	〔イコール強調〕
3 …扱い	1 …ぼい	1 …そのまま	1 …そのもの
4 …代わり	2 …くさい	2 …さながら	
S ₅ …ジミル	S ₇ ソックリ	S ₉ …タル	S ₁₁ …ヒトツ
〔動詞化〕	〔形容動詞化〕	〔同格〕	〔否定強調〕
			1 …ひとつ

4.3 出現状況

4.31 指標要素個別

〔作り方〕

- 1) 各比喩指標要素を「比喩指標要素一覧」の配列順に取りあげる。
例： 感じる， 思う， 考える ……
- 2) 取りあげられた各比喩指標要素に，その性格・位置を示す記号・番号を添える。
例： F₁₋₃あたかも K₉₋₃みたい
- 3) その比喩指標要素の用いられた比喩指標を指標比喩の分類結果の配列順に従って列挙する。
例： だって だって・相当する だって・あんまり・変わらない だって・その通り だって・そうだ だって・よう だって・同じ・こと
- 4) 列挙された各比喩指標に，その性格・位置を示す記号・番号を添える。
例： F₁₋₁J₃₋₁～ まるで・も・同様 J₃₋₁～ も・同様 ～ 同様 ～D₅₋₄ 同様・思われる
- 5) 列挙された各比喩指標の出現状況を表示する。
例： 半分・よう 2-9 半分・よう・気持ち(1-1は無表示)
- 6) 各比喩指標要素の出現状況を，その含まれる各比喩指標の出現状況を総合して，表示する。
例： 半分 3-10 まさに 4-8 まったく9-15

〔読み方〕

- 1) 最初の記号(アルファベット)・番号(枝番つき小番号)は，そこで取りあげた比喩指標要素の性格・位置の表示である。
例： D₅₋₄ 思われる (D類5種4号の比喩指標要素「思われる」)
- 2) ゴシック体の字はそこで問題にしている比喩指標要素である。
li>
- 3) 次の数字は，その比喩指標の出現状況(作品数-用例数)を示す。
例： あたかも 22-80 (比喩指標要素「あたかも」は50編の調査作品中22作品に延べ80例現れた)
- 4) 取りあげられた比喩指標要素ごとに列挙されている記号・番号は，その比喩指標要素の現れた比喩指標の性格・位置の表示である。
例： 当たる ～ D₁₁₋₃F₃₋₄～ F₁₋₄K₁₋₃～ J₃₋₁～
(1) 「～」印は，そこで問題にしている比喩指標要素の記号を際だたせるための代を表

示である。

例： ～ ～K₉₋₃ D₅₋₉～ F₃₋₁₁～M₁₋₄

(2) 「～」だけの場あいは、その比喩指標要素が単独で用いられてその比喩指標をなすことを表す。

(3) 同一表示でも、その箇所によって、それぞれ別の比喩指標をさすことになる。

例： 「F₁₋₁～」は、D₇₋₈の箇所では「F₁₋₁D₇₋₈」すなわち「まるで・連想させる」をさし、K₉₋₃の箇所では「F₁₋₁K₉₋₃」すなわち「まるで・みたい」をさす。

5) 次が、その比喩指標要素を含む比喩指標（下線部がその比喩指標要素）で、直前の記号表示がさす具体的な言語形式を掲げたものである。

例： F₈₋₃～ なにやら・思える

6) 次の数字は、その比喩指標の出現状況である。

例： F₁₋₁～K₉₋₁ まるで・でも・よう 16-43

〔使い方〕

1) ある比喩指標要素がどのぐらい現れたかを調べる。

例： 「まるで」は、比喩指標要素として、何作品に何例現れたか？

「比喩索引」の五十音順を利用して、「まるで」を引き、それが「F₁₋₁」であることを調べた上で、この「比喩指標要素個別出現状況」から、そのアルファベット順と番号順によって「F₁₋₁」の「まるで」を探しあてると、そこに「32-374」と出ているので、32作品にわたって、延べ374例採集されたことがわかる。

2) ある比喩指標要素がどんな比喩指標として現れたかを調べる。

例： 比喩指標要素の「くらい」はどんな比喩指標を構成しているか？

「比喩索引」によって「くらい」がJ₁₋₂であることを調べ、それによってこの「比喩指標要素個別出現状況」を引き、「くらい」の箇所を探しあてると、次のような情報が得られる。

DJ 思われる、疑われる、似る——くらい

DJM 言う——くらい——もの

FDJ まるで・受けとる——くらい

FJ まるで、ほとんど——くらい

FJM せいぜい——くらい——こと、気もち

FKJ ほとんど・等しい——くらい

J くらい

JKJ も・及ばない——くらい

KJ 同じ——くらい

RJM ほんの——くらい——気持ち

SDJ …という・気がする——くらい

- 3) ある比喩指標要素がどんな比喩指標によく現れるかを調べる。

例：「みたい」という比喩指標要素を含む比喩指標のうち、よく使われるのはどんなものか？

「比喩索引」によって「みたい」が K_{9-3} であることを調べ、それを利用してこの「比喩指標要素個別出現状況」から「みたい」の箇所を引きだすと、次のような比喩指標が多用されていることがわかる。

みたい (単独)	33-147
まるで・みたい	12- 24
みたい・もの	12- 22

- 4) ある比喩指標要素がどんな実現形でよく現れるかを調べる。

例：比喩指標要素「気がする」を含む実現形のうち、よく使われるのはどんなものか？

「比喩索引」を引いて「気がする」が D_{6-1} であることを調べ、それを利用して、この「比喩指標要素個別出現状況」から「気がする」の箇所を探しだすと、それを含む比喩指標が列挙してあるので、その出現状況に注意しながら、ある程度出現幅(作品数)・頻度(用例数)の大きい指標を重点的に見ていき、それぞれの候補指標を3.1の指標比喩の分類結果で調べると、その指標の実現形別の出現状況が示されているので、そこから候補を抜きだして互いに比較すると、次のような結果が導かれるはずである。

ような気がした	16-53
ような気がして	8-13
気がした	7-12

- 5) ある種や類のうちで、よく使われる比喩指標要素を調べる。

例：J類3種の比喩指標要素のうち、最もよく使われるのはどれか？ また、J類全体をとおしては、どんな比喩指標要素がよく使われるか？

この「比喩指標要素個別出現状況」は、「比喩指標要素一覧」の配列順に整理されているので、各種や各類の比喩指標要素が一括してとらえられる。そこで、 J_2 の部を開けて、そこにある「も」から「まで」までのそれぞれの出現状況を比べると、「も」が27-108でその種のトップを占めることがわかる。また、同様に、J類全体に目を通すと、上位は次のようになることがわかる。

1位	J_{2-1}	でも	33-238
2位	J_{1-1}	ほど	37-190
3位	J_{3-1}	も	27-107
4位	J_{6-1}	の	20- 49
5位	J_{1-2}	くらい	18- 40
6位	J_{1-3}	ばかり	12- 39

- D₁₋₁ 感じる 13-26
 ～ 感じる 3-4
 F₁₋₆J₂₋₁K₉₋₁～ さも・でも・よう・感じる
 J₂₋₃K₉₋₁～ かなにか・よう・感じる
 K₉₋₁～ よう・感じる 7-15
 K₉₋₁J₃₋₄～ よう・さえ・感じる
 K₉₋₂～ ごとし・感じる 1-3
 R₄₋₁K₉₋₁M₁₋₂J₃₋₄～ 一種の・よう・もの・
 さえ・感じる
- D₁₋₂ 思う 21-40
 ～ 思う 7-12
 ～J₁₋₁ 思う・ほど 3-3
 ～J₁₋₁K₉₋₁D₅₋₉ 思う・ほど・よう・見える
 ～K₉₋₁ 思う・よう 1-2
 F₁₋₁J₂₋₁K₉₋₁～ まるで・でも・よう・思う
 F₁₋₁K₉₋₁～ まるで・よう・思う
 F₁₋₁K₁₃₋₂～J₁₋₁ まるで・…とはよくも
 名付けた・思う・ほど
 F₁₋₅K₉₋₁～ いかにも・よう・思う
 F₂₋₇～ たとえば・思う
 F₈₋₁K₉₋₁～ なにか・よう・思う
 F₈₋₃K₉₋₁～ なにやら・よう・思う
 J₂₋₁K₉₋₁～ でも・よう・思う
 J₂₋₃K₉₋₁～ かなにか・よう・思う
 J₃₋₆～ まで・思う
 J₅₋₁F₅₋₁～ というものは・つくづく・思う
 K₉₋₁～ よう・思う 7-10
 K₉₋₁J₃₋₄～ よう・さえ・思う
- D₁₋₃ 考える 2-3
 ～ 考える
 K₉₋₁～ よう・考える
 S₁₋₁₄～ …なみ・考える
- D₁₋₄ 心得る 1-1
 K₉₋₁～ よう・心得る
- D₁₋₅ 受け取る 2-3
 ～ 受け取る
 F₁₋₁～ まるで・受けとる
 F₁₋₁～J₁₋₂ まるで・受けとる・くらい
- D₁₋₆ 錯覚する 1-2
 K₉₋₁～ よう・錯覚する 1-2
- D₁₋₇ 紛う 1-1
 ～J₁₋₁ 紛う・ほど
- D₁₋₈ 見る 9-14
 ～ 見る 2-4
 ～K₉₋₁ 見る・よう 3-3
 ～K₉₋₁D₆₋₁ 見る・よう・気がする
 ～K₉₋₁M₁₋₂ 見る・よう・もの
 F₁₋₁～K₉₋₁ まるで・見る・よう
 J₃₋₁～K₉₋₁ も・見る・よう
 K₉₋₁～ よう・見る 3-3
- D₁₋₉ 眺める 1-3
 F₁₋₃K₉₋₂～ あたかも・ごとし・眺める
 K₉₋₁～ よう・眺める 1-2
- D₁₋₁₀ 見立てる 1-1
 ～ 見立てる
- D₁₋₁₁ 見せかける 1-1
 F₁₋₃K₉₋₁～ あたかも・よう・見せかける
- D₁₋₁₂ たとえる 5-14
 ～ たとえる 5-11
 ～K₉₋₁ たとえる・よう
 F₉₋₁～J₂₋₁D₃₋₁ 仮に・たとえる・でも・言う
 J₃₋₁～ も・たとえる
- D₁₋₁₃ なぞらえる 2-2
 ～ なぞらえる
 J₃₋₆～ まで・なぞらえる
- D₁₋₁₄ 諷諭する 1-1
 ～ 諷諭する
- D₁₋₁₅ 扱う 2-2
 J₂₋₄K₉₋₁～ かな(ん)ぞ・よう・扱う
 S₁₋₁₄～ …なみ・扱う

D₁₋₁₆ する 3-7～ する 3-6F₁₋₁～J₂₋₁S₉₋₂K₉₋₁ まるで・する・でも
…という・ようD₂₋₁ 比する 1-1～J₁₋₁ 比する・ほどD₂₋₂ 比較する 1-1～ 比較するD₃₋₁ 言う 13-20～J₁₋₁ 言う・ほど 2-2～J₁₋₂M₁₋₂ 言う・くらい・もの～K₉₋₁D₆₋₁ 言う・よう・気がするF₉₋₁D₁₋₁₂J₂₋₁～ 仮に・たとえる・でも
・言うF₂₋₂～ 言えば・言うF₃₋₇～K₇₋₁K₉₋₁M₁₋₃ むしろ・言う・ふ
さわしい・よう・代物F₃₋₃J₃₋₁～ ほとんど・も・言うJ₃₋₁～ も・言う 3-9J₂₋₁～J₁₋₁ でも・言う・ほどJ₃₋₁～J₁₋₁ も・言う・ほどJ₁₋₅F₃₋₇～ というより・むしろ・言うD₃₋₂ 言い直す 1-1～ 言い直すD₃₋₃ 呼ぶ 2-2J₃₋₁～ も・呼ぶR₄₋₁～ 一種の・呼ぶD₃₋₄ 形容する 2-4～ 形容する～J₁₋₁ 形容する・ほど～K₁₁₋₄ 形容する・と言っていいF₂₋₁～ いわば・形容するD₄₋₁ なる 11-44～ なる 9-42～K₁₀₋₂ なる・かねないJ₂₋₁～ でも・なるD₄₋₂ 化す 6-7～ 化す 5-6S₁₀₋₁～ …そのもの・化すD₄₋₃ 変わる 2-2～ 変わる 2-2D₅₋₁ 感じられる 16-36～ 感じられる 3-4～K₉₋₁ 感じられる・ようF₁₄₋₁～ を見ると・感じられるF₁₋₁K₉₋₁～ まるで・よう・感じられる
2-2F₁₋₄K₉₋₁～ ちょうど・よう・感じられるJ₁₋₁～ ほど・感じられるJ₁₋₅～ というより・感じられるK₉₋₁～ よう・感じられる 10-21K₉₋₂～ ごとし・感じられるK₁₀₋₁～ そう・感じられるK₉₋₁J₃₋₁～ よう・も・感じられる 2-2D₅₋₂ 覚える 1-1K₉₋₁～ よう・覚えるD₅₋₃ 思える 15-20D₁₂₋₁K₉₋₁～ 似る・よう・思えるF₈₋₃～ なにやら・思えるJ₃₋₁～ も・思えるJ₁₋₅K₉₋₁～ というより・よう・思えるK₁₀₋₁～J₁₋₁ そう・思える・ほどK₉₋₁～ よう・思える 9-10K₉₋₃～ みたい・思えるK₁₀₋₁～ そう・思える 1-2K₉₋₁J₃₋₄～ よう・さえ・思える 2-2D₅₋₄ 思われる 25-91～ 思われる 3-5～J₁₋₁ 思われる・ほど 4-4～J₁₋₂ 思われる・くらい

F₁₋₁~J₁₋₁ まるで・思われる・ほど
 F₁₋₁J₃₋₄~ ちょうど・さえ・思われる
 F₁₋₁K₉₋₁~ まるで・よう・思われる
 F₂₋₁K₉₋₁~ いわば・よう・思われる
 F₈₋₃K₉₋₁~ なにやら・よう・思われる
 F₄₋₆K₁₁₋₃~J₁₋₁ それこそ・ではないか
 ・思われる・ほど
 F₆₋₁K₁₀₋₁~ 今にも・そう・思われる
 J₂₋₁~K₉₋₁ でも・思われる・よう 1-2
 J₃₋₁~ も・思われる 2-2
 J₂₋₂K₉₋₁~ など・よう・思われる
 J₂₋₃K₉₋₁~ かなにか・よう・思われる
 K₂₋₁~ 同様・思われる
 K₉₋₁~ よう・思われる 18-60
 K₁₀₋₁~ そう・思われる
 K₉₋₁J₃₋₁~ よう・も・思われる 2-3
 K₉₋₁J₃₋₄~ よう・さえ・思われる
 K₉₋₁J₃₋₅~ よう・すら・思われる
 S₈₋₂K₉₋₁~ …さながら・よう・思われる
 D₅₋₅ 考えられる 2-2
 ~ 考えられる
 F₁₋₁K₉₋₁~ まるで・よう・考えられる
 D₅₋₆ とれる 1-1
 K₉₋₁~ よう・とれる
 D₅₋₇ 疑われる 4-4
 ~J₁₋₁ 疑われる・ほど 2-2
 ~J₁₋₂ 疑われる・くらい
 F₄₋₄~ ほんとうに・疑われる
 D₅₋₈ 錯覚される 3-4
 J₂₋₁K₉₋₁~ でも・よう・錯覚される
 K₉₋₁~ よう・錯覚される 1-2
 K₉₋₁J₃₋₁~ よう・も・錯覚される
 D₅₋₉ 見える 31-157
 D₁₋₂J₁₋₁K₉₋₁~ 思う・ほど・よう・見える
 ~ 見える 9-11

D₁₂₋₃~ 似通う・見える
 D₁₃₋₄~ 類する・見える
 ~J₁₋₁ 見える・ほど
 ~K₉₋₁D₆₋₁ 見える・よう・気がする
 F₁₋₁~ まるで・見える 2-2
 F₄₋₇~ どう見ても・見える
 F₄₋₂F₁₋₁K₉₋₁~ まったく・まるで・よう・
 見える
 F₁₋₁J₂₋₁K₉₋₁~ まるで・でも・よう・見える
 F₄₋₄J₂₋₁K₉₋₁~ ほんとうに・でも・よう・
 見える
 F₁₋₁K₉₋₁~ まるで・よう・見える 4-4
 F₁₋₃K₉₋₁~ あたかも・よう・見える 3-5
 F₂₋₁K₉₋₁~ いわば・よう・見える
 F₈₋₁K₉₋₁~ なにか・よう・見える 2-2
 F₈₋₃K₉₋₁~ なにやら・よう・見える
 F₁₋₁K₉₋₁J₃₋₄~ まるで・よう・さえ・見える
 F₁₋₁K₉₋₃~ まるで・みたい・見える
 F₈₋₃K₉₋₄~ どこか・らしい・見える
 J₃₋₁~ も・見える 2-3
 J₂₋₁K₉₋₁~ でも・よう・見える
 K₉₋₁~ よう・見える 25-92
 K₉₋₃~ みたい・見える 2-2
 K₁₀₋₁~ そう・見える 4-4
 K₁₀₋₁J₁₋₁~ そう・見える・ほど
 K₉₋₁J₃₋₁~ よう・も・見える 5-7
 K₉₋₁J₃₋₄~ よう・さえ・見える 2-2
 K₉₋₂J₃₋₁~ ごとし・も・見える
 M₃₋₂~ 感じ・見える
 S₅₋₃~ …じみる・見える 2-3
 S₁₀₋₁~ …そのもの・見える
 S₉₋₂M₂₋₆~ …という・ふう・見える
 D₅₋₁₀ 見られる 1-1
 K₉₋₁~ よう・見られる
 D₅₋₁₁ 見なされる 1-1

F₁₋₃K₉₋₁～ あたかも・よう・見なされる
 D₅₋₁₂ 眺められる 2-3
 K₉₋₁～ よう・眺められる 2-3
 D₅₋₁₃ 眼に映る 3-3
 K₉₋₁～ よう・眼に映る 3-3
 D₅₋₁₄ 映る 1-1
 K₉₋₁～ よう・映る
 D₅₋₁₅ 聞こえる 2-2
 K₉₋₁～ よう・聞こえる 2-2
 D₅₋₁₆ 響く 1-1
 ～ 響く
 D₅₋₁₇ 印象づけられる 1-1
 S₉₋₄～ …として・印象づけられる
 D₅₋₁₈ 扱われる 1-1
 K₉₋₁～ よう・扱われる
 D₆₋₁ 気がする 36-219
 ～ 気がする 12-20
 D₁₋₃K₉₋₁～ 見る・よう・気がする
 D₃₋₁K₉₋₁～ 言う・よう・気がする
 D₅₋₉K₉₋₁～ 見える・よう・気がする
 D₁₋₃K₉₋₁J₃₋₄～見る・よう・さえ・気がする
 F₈₋₁J₂₋₁K₉₋₁～ なにか・でも・よう・気がする
 ～ する
 F₁₋₁K₉₋₁～ まるで・よう・気がする 3-4
 F₁₋₃K₉₋₁～ あたかも・よう・気がする
 F₃₋₃K₉₋₁～ ほとんど・よう・気がする
 F₄₋₂K₉₋₁～ まったく・よう・気がする
 F₆₋₁K₉₋₁～ 今にも・よう・気がする
 F₆₋₁K₁₀₋₁～ 今にも・そう・気がする
 F₈₋₃K₉₋₁～ なにやら・よう・気がする
 2-2
 F₈₋₁K₉₋₁～ なんだか・よう・気がする
 8-12
 F₁₋₃S₈₋₂K₉₋₁～ あたかも・…・さながら
 ・よう・気がする

J₂₋₁～ でも・気がする
 J₂₋₁K₉₋₁～ でも・よう・気がする 2-2
 K₉₋₁～ よう・気がする 31-156
 K₉₋₃～ みたい・気がする 3-3
 K₉₋₁J₃₋₁～ よう・も・気がする 4-4
 K₉₋₁J₃₋₄～ よう・さえ・気がする
 K₄₋₁K₉₋₁J₃₋₄～ 同類・よう・さえ・気がする
 ～ する
 S₉₋₂～ …という・気がする
 S₉₋₂～J₁₋₂ …という・気がする・くらい
 D₆₋₂ 心持がする 1-1
 F₁₋₃D₁₂₋₁K₉₋₁～ あたかも・似る・よう・
 ～ 心持がする
 D₆₋₃ 心地がする 2-2
 ～ 心地がする
 K₉₋₁～ よう・心地がする
 D₇₋₁ 感じさせる 3-3
 ～ 感じさせる 2-2
 K₉₋₁～ よう・感じさせる
 D₇₋₂ 思わせる 14-36
 ～ 思わせる 12-25
 ～ J₁₋₁ 思わせる・ほど
 ～K₉₋₁ 思わせる・よう 2-5
 F₁₋₂～ さながら・思わせる
 F₃₋₃～ ほとんど・思わせる
 F₈₋₁～ なにか・思わせる 2-2
 F₈₋₈～ どことなく・思わせる
 D₇₋₃ 思い出させる 2-3
 ～ 思い出させる 1-2
 ～K₉₋₁ 思い出させる・よう
 D₇₋₄ 思い起こさせる 3-3
 ～ 思い起こさせる 3-3
 D₇₋₅ 思い浮かべさせる 1-1
 ～ 思い浮かべさせる
 D₇₋₆ 想像させる 1-1

- ～ 想像させる
 D7-7 空想させる 1-1
 ～ 空想させる
 D7-8 連想させる 7-10
 ～ 連想させる 5-7
 ～K9-1 連想させる・よう
 F1-1～ まるで・連想させる 2-2
 D7-9 髣髴させる 1-1
 ～ 髣髴させる
 D7-10 錯覚させる 1-1
 K9-1～ よう・錯覚させる
 D7-11 象徴する 1-1
 ～ 象徴する
 D8-1 見いだす 1-1
 ～ 見いだす
 D9-1 思い合わされる 1-1
 ～ 思い合わされる
 D9-2 髣髴とする 1-2
 ～ 髣髴とする 1-2
 D10-1 想像される 1-1
 ～ 想像される
 D11-1 思い出す 9-12
 ～ 思い出す 9-10
 F14-2～ を見たら・思い出す
 M7-2～ たとえ・思い出す
 D11-2 思い浮かべる 2-2
 ～ 思い浮かべる
 ～R4-1M6-2 思い浮かべる・一種の・相似
 D11-3 想像する 3-5
 ～ 想像する 3-4
 ～F3-4D13-1 想像する・ほぼ・当たる
 D11-4 連想する 3-3
 ～ 連想する 3-3
 D12-1 似る 23-102
 ～ 似る 21-75

- ～ J1-2 似る・くらい
 ～K9-1D3-3 似る・よう・思える
 ～K9-1M3-2 似る・よう・感じ
 F1-1～ まるで・似る
 F1-3～ あたかも・似る 3-3
 F2-11～ たとえに言うが・似る
 F2-7J3-1～ たとえ・も・似る
 F3-3～ ほとんど・似る 2-3
 F8-3～ どこか・似る 2-3
 F8-8～ どことなく・似る
 J3-1～ も・似る 6-10
 R4-1～ 一種の・似る
 D12-2 相似る 1-1
 F1-3～ あたかも・相似る
 D12-3 似通う 2-4
 ～ 似通う 2-3
 ～D5-9 似通う・見える
 D12-4 通じる 2-3
 ～ 通じる 2-2
 F2-6～ 例をとれば・通じる
 D12-5 一脈通じる 1-2
 ～ 一脈通じる 1-2
 D12-6 共通する 1-1
 ～ 共通する
 D12-7 比較される 1-1
 ～ 比較される
 D13-1 当たる 6-7
 ～ 当たる 2-2
 D11-3F3-4～ 想像する・ほぼ・当たる
 F1-4K1-3～ ちょうど・同じ・当たる
 J3-1～ も・当たる 3-3
 D13-2 当てはまる 1-1
 F18-6～ …という…があるが・当てはまる
 D13-3 相当する 2-2
 ～ 相当する

J₃₋₃～ だって・相当する
 D₁₃₋₄ 類する 2-2
 ～D₅₋₉ 類する・見える
 ～K₉₋₁ 類する・よう
 D₁₃₋₅ よくある 2-3
 ～ よくある 1-2
 F₁₆₋₁ ～なら・よくある
 D₁₃₋₆ ままある 1-1
 S₁₋₁₀D₁₃₋₆ …ふう・ままある
 D₁₄₋₁ 劣る 1-1
 J₃₋₁～ も・劣る
 D₁₅₋₁ 違う 1-1
 ～ 違う
 D₁₆₋₁ 成す 4-5
 ～ 成す 4-5
 D₁₇₋₁ ならう 1-1
 ～ ならう
 D₁₈₋₁ 例にする 1-1
 ～ 例にする
 F₁₋₁ まるで 32-383
 ～ まるで 13-18
 ～D₁₋₅ まるで・受けとる
 ～D₅₋₉ まるで・見える 2-2
 ～D₇₋₈ まるで・連想させる 2-2
 ～D₁₂₋₁ まるで・似る
 ～D₁₋₅J₁₋₂ まるで・受けとる・くらい
 ～D₅₋₄J₁₋₁ まるで・思われる・ほど
 ～D₁₋₁₆J₂₋₁S₉₋₂K₉₋₁ まるで・する・で
 も…という・よう
 ～D₁₋₈K₉₋₁ まるで・見る・よう
 F₁₀₋₃～ それじゃ・まるで
 ～J₂₋₁K₉₋₁ まるで・まるで・でも・よう
 F₁₀₋₁～J₃₋₁K₃₋₁ これでは・まるで・も
 ・同然
 ～F₈₋₁K₉₋₁ まるで・なにか・よう

F₁₀₋₄～K₉₋₃ あれじゃ・まるで・みたい
 F₁₀₋₂～K₁₁₋₃ それでは・まるで・では
 ないか
 F₄₋₂～K₉₋₁D₅₋₉ まったく・まるで・よ
 う・見える
 F₁₀₋₁～K₉₋₁M₁₋₂ これでは・まるで・よ
 う・もの
 ～J₁₋₁ まるで・ほど 1-3
 ～J₁₋₂ まるで・くらい
 ～J₁₋₃ まるで・ばかり
 ～J₂₋₁ まるで・でも
 ～J₂₋₁K₉₋₁ まるで・でも・よう 16-44
 ～J₂₋₁K₉₋₃ まるで・でも・みたい 2-3
 ～J₂₋₃K₉₋₁ まるで・かなにか・よう
 ～J₃₋₁K₁₋₃ まるで・も・同じ
 ～J₃₋₁K₂₋₁ まるで・も・同様
 ～J₂₋₁K₉₋₁D₁₋₁ まるで・でも・よう・
 感じる
 ～J₂₋₁K₉₋₁D₁₋₂ まるで・でも・よう・思う
 ～J₂₋₁K₉₋₁D₅₋₉ まるで・でも・よう・見
 える
 ～J₂₋₁K₉₋₁M₂₋₁ まるで・でも・よう・よう
 す
 ～J₂₋₁M₃₋₁₂ まるで・でも・つもり
 ～J₂₋₁S₉₋₂K₉₋₁ まるで・でも…という
 ・よう
 ～K₁₋₃ まるで・同じ
 ～K₁₋₄ まるで・そっくりだ 2-2
 ～K₂₋₁₀ まるで・異ならない
 ～K₉₋₁ まるで・よう 28-207
 ～K₉₋₃ まるで・みたい 12-24
 ～K₁₁₋₁₀ まるで・にすぎない
 ～K₉₋₁D₁₋₂ まるで・よう・思う
 ～K₁₃₋₂D₁₋₂J₁₋₁ まるで・…とはよく名
 付けた・思う・ほど
 ～K₉₋₁D₅₋₁ まるで・よう・感じられる

2-2

- ~K₉₋₁D₅₋₄ まるで・よう・思われる
 ~K₉₋₁D₅₋₅ まるで・よう・考えられる
 ~K₉₋₁D₅₋₉ まるで・よう・見える 4-4
 ~K₉₋₃D₅₋₉ まるで・みたい・見える
 ~K₉₋₁D₆₋₁ まるで・よう・気がする 3-4
 ~K₉₋₁J₃₋₄D₅₋₉ まるで・よう・さえ・
 見える

- ~K₁₋₃K₉₋₁ まるで・同じ・よう
 ~K₉₋₁M₁₋₂ まるで・よう・もの 5-11
 ~K₉₋₁M₂₋₁₁ まるで・よう・ぐあい

2-2

- ~K₉₋₁M₃₋₂ まるで・よう・感じ 4-4
 ~K₉₋₁M₃₋₃ まるで・よう・感触
 ~K₉₋₁M₃₋₅ まるで・よう・気持ち

2-2

- ~K₉₋₁M₃₋₁₀ まるで・よう・思い
 ~K₉₋₁R₄₋₁M₃₋₁ まるで・よう・一種の・
 感

- ~M₂₋₁₁ まるで・ぐあい 1-2
 ~M₂₋₁₆ まるで・形
 ~M₃₋₂ まるで・感じ
 ~M₃₋₁₂ まるで・つもり
 ~S₁₋₁₆ まるで・…級
 ~S₄₋₃ まるで・…扱い
 ~S₈₋₂ まるで・…さながら 2-2
 ~S₈₋₃ まるで・…よろしく

F₁₋₂ さながら 4-7

- ~ さながら 2-2
 ~D₇₋₂ さながら・思わせる
 ~K₉₋₁ さながら・よう
 ~K₉₋₂ さながら・ごとし
 ~K₉₋₁M₃₋₁₀ さながら・よう・思い
 ~S₉₋₂K₉₋₁ さながら・…という・よう

F₁₋₂ あたかも 22-80~D₁₂₋₁ あたかも・似る 3-3~D₁₂₋₂ あたかも・相似る~D₁₂₋₁K₉₋₁D₅₋₂ あたかも・似る・よう
・心持がする~J₁₋₁ あたかも・ほど~J₂₋₁K₉₋₁ あたかも・でも・よう 4-10~J₂₋₃K₉₋₁ あたかも・かなにか・よう~J₃₋₁K₁₋₂ あたかも・も・等しい~J₂₋₁M₂₋₁ あたかも・でも・ようす~K₉₋₁ あたかも・よう 12-45~K₉₋₂ あたかも・ごとし~K₉₋₁D₁₋₁₁ あたかも・よう・見せかけ
る~K₉₋₁D₅₋₉ あたかも・よう・見える
3-5~K₉₋₁D₅₋₁₁ あたかも・よう・見なされる~K₉₋₁D₆₋₁ あたかも・よう・気がする~K₉₋₂D₁₋₉ あたかも・ごとし・眺める~K₉₋₁M₂₋₁₁ あたかも・よう・ぐあい

2-2

~M₂₋₆ あたかも・ふう~S₈₋₂K₉₋₁D₆₋₁ あたかも・…さながら・
よう・気がする~S₉₋₂M₂₋₆ あたかも・…という・ふう

1-2

F₁₋₄ ちょうど 17-42~ ちょうど~D₁₂₋₁ ちょうど・似る~J₁₋₁ ちょうど・ほど~J₃₋₄D₅₋₄ ちょうど・さえ・思われる~K₂₋₃ ちょうど・同程度~K₂₋₅ ちょうど・一般~K₉₋₁ ちょうど・よう 12-29~K₉₋₁D₅₋₁ ちょうど・よう・感じられ
る~K₁₋₃D₁₃₋₁ ちょうど・同じ・当たる

- ~K₁₋₃K₉₋₁ ちょうど・同じ・よう 2-2
 ~K₉₋₁M₁₋₂ ちょうど・よう・もの
 ~K₉₋₁M₂₋₁₇ ちょうど・よう・かっこう
 ~K₉₋₁M₃₋₅ ちょうど・よう・気持ち
 F₁₋₅ いかにも 3-5
 ~J₁₋₃ いかにも・ばかり
 ~K₉₋₁ いかにも・よう
 ~K₉₋₁D₁₋₂ いかにも・よう・思う
 ~M₂₋₄ いかにも・おもむき 2-2
 F₁₋₆ さも 3-4
 ~J₂₋₁K₉₋₁ さも・でも・よう
 ~K₉₋₁ さも・よう 2-3
 F₂₋₁ いわば 14-28
 ~ いわば 9-14
 ~D₃₋₄ いわば・形容する
 ~K₉₋₁ いわば・よう 2-3
 ~K₉₋₁D₅₋₄ いわば・よう・思われる
 ~K₉₋₁D₅₋₉ いわば・よう・見える
 ~K₉₋₁M₁₋₂ いわば・よう・もの 3-3
 ~M₅₋₂ いわば・一種
 ~R₄₋₁K₉₋₃M₁₋₂ いわば・一種の・みた
 い・もの
 ~S₉₋₂ いわば・…という
 ~S₉₋₂K₉₋₁ いわば・…という・よう
 J₁₋₅~S₉₋₂K₉₋₁ というより・いわば・…
 という・よう
 F₂₋₂ 言えば 3-4
 ~D₃₋₁ 言えば・言う
 ~K₉₋₃ 言えば・みたい
 ~K₉₋₁M₁₋₂ 言えば・よう・もの
 ~K₉₋₃M₁₋₂ 言えば・みたい・もの
 F₂₋₃ 言ってみれば 2-2
 ~ 言ってみれば 2-2
 F₂₋₄ 言ってみるなら 1-1
 ~M₄₋₄ 言ってみるなら・代わり

- F₂₋₅ 言うたら 1-1
 ~K₂₋₄ 言うたら・一つ
 F₂₋₆ 例をとれば 1-1
 ~D₁₂₋₄ 例をとれば・通じる
 F₂₋₇ たとえば 6-10
 ~D₁₋₂ たとえば・思う
 ~J₃₋₁D₁₂₋₁ たとえば・も・似る
 ~J₂₋₁K₉₋₁M₃₋₇ たとえば・でも・よう
 ・心持ち
 ~K₉₋₁ たとえば・よう 5-6
 ~K₁₋₃M₁₋₄ たとえば・同じ・こと
 F₂₋₈ たとえて言えば 1-1
 ~K₉₋₁ たとえて言えば・よう
 F₂₋₉ たとえて言うと 1-1
 ~K₁₋₁ たとえて言うと・近い
 F₂₋₁₀ たとえて言うなら 1-1
 ~ たとえて言うなら
 F₂₋₁₁ たとえに言うが 1-1
 ~D₁₂₋₁ たとえに言うが・似る
 F₃₋₁ そっくり 1-1
 ~K₁₋₃ そっくり・同じ
 F₃₋₂ もはや 1-1
 ~K₁₁₋₁ もはや・である
 F₃₋₃ ほとんど 11-28
 ~ ほとんど 2-2
 ~D₇₋₂ ほとんど・思わせる
 ~D₁₂₋₁ ほとんど・似る 2-3
 ~J₁₋₂ ほとんど・くらい 2-2
 ~J₃₋₁D₉₋₁ ほとんど・も・言う
 ~K₁₋₁ ほとんど・近い
 ~K₂₋₇ ほとんど・変わりがない
 ~K₂₋₁₀ ほとんど・異ならない
 ~K₉₋₁ ほとんど・よう 8-11
 ~K₉₋₃ ほとんど・みたい
 ~K₁₁₋₄ ほとんど・と書いていい

- ~K₉₋₁D₆₋₁ ほとんど:よう・気がする
 ~K₁₋₂J₁₋₂ ほとんど・等しい・くらい
 ~K₁₋₁K₉₋₁M₁₋₂ ほとんど・近い・よう・もの
 F₃₋₄ ほぼ 1-1
 D₁₁₋₃~D₁₃₋₁ 想像する・ほぼ・当たる
 F₃₋₅ まず 1-1
 ~K₁₋₆ まず・似たりよったり
 F₃₋₆ まあ 3-3
 ~K₉₋₁M₁₋₂ まあ・よう・もの
 ~S₇₋₃ まあ・…同然
 ~S₉₋₂M₂₋₁₆ まあ・…という・形
 F₃₋₇ むしろ 4-5
 ~D₃₋₁K₇₋₁K₉₋₁M₁₋₃ むしろ・言う・ふ
 さわしい・よう・代物
 J₁₋₅~ というより・むしろ 2-2
 J₁₋₅~D₃₋₁ というより・むしろ・言う
 J₁₋₅~K₁₋₁ というより・むしろ・近い
 F₃₋₈ 半分 3-10
 ~K₉₋₁ 半分・よう 2-9
 ~K₉₋₁M₃₋₅ 半分・よう・気持ち
 F₃₋₉ なかば 2-2
 ~K₉₋₁ なかば・よう 2-2
 F₃₋₁₀ ただ 1-1
 ~K₉₋₁ ただ・よう
 F₃₋₁₁ せいぜい 1-2
 ~J₁₋₂M₁₋₄ せいぜい・くらい・こと
 ~J₁₋₂M₃₋₅ せいぜい・くらい・気持ち
 F₃₋₁₂ いささか 1-1
 ~S₉₋₂M₂₋₄ いささか・…という・おも
 むぎ
 F₄₋₁ まさに 4-8
 ~ まさに
 ~K₉₋₁ まさに・よう 3-4
 ~K₉₋₁M₁₋₂ まさに・よう・もの 1-2
 ~M₂₋₁₀ まさに・概
 F₄₋₂ まったく 9-15
 ~ まったく 2-2
 ~F₁₋₁K₉₋₁D₅₋₉ まったく・まるで・よ
 う・見える
 ~J₅₋₁ まったく・というものは
 ~K₁₋₃ まったく・同じ
 ~K₁₋₅ まったく・瓜二つ
 ~K₉₋₁ まったく・よう 3-5
 ~K₉₋₁D₆₋₁ まったく・よう・気がする
 ~K₁₋₃M₁₋₄ まったく・同じ・こと
 ~M₃₋₅ まったく・気持ち
 ~M₃₋₁₃ まったく・印象
 F₄₋₃ 実に 2-3
 ~ 実に 2-3
 F₄₋₄ ほんとうに 4-6
 ~ ほんとうに 1-2
 ~D₅₋₇ ほんとうに・疑われる
 ~J₂₋₁K₉₋₁D₅₋₉ ほんとうに・でも・よ
 う・見える
 ~K₁₋₄ ほんとうに・そっくりだ
 ~K₉₋₁ ほんとうに・よう
 F₄₋₅ ほんなこと 1-1
 ~K₉₋₁ ほんなこと・よう
 F₄₋₆ それこそ 5-5
 ~J₁₋₁ それこそ・ほど
 ~J₃₋₁K₁₋₂ それこそ・も・等しい
 ~K₉₋₁ それこそ・よう
 ~K₉₋₃ それこそ・みたい
 ~K₁₁₋₃D₅₋₄J₁₋₁ それこそ・ではないか・
 思われる・ほど
 F₄₋₇ どう見ても 1-1
 ~D₅₋₉ どう見ても・見える
 F₄₋₈ 文字通り 1-1
 ~K₉₋₁ 文字通り・よう

F₅₋₁ つくづく 1-1

J₅₋₁~D₁₋₂ というものは・つくづく・

思う

F₆₋₁ 今にも 8-12

~K₉₋₁ 今にも・よう

~K₁₀₋₁ 今にも・そう 4-7

~K₉₋₁D₆₋₁ 今にも・よう・気がする

~K₁₀₋₁D₅₋₄ 今にも・そう・思われる

~K₁₀₋₁D₆₋₁ 今にも・そう・気がする

~K₁₀₋₁M₃₋₂ 今にも・そう・感じ

F₆₋₂ あわや 1-1

~K₁₀₋₁ あわや・そう

F₇₋₁ つまり 6-6

~ つまり 4-4

~K₉₋₃M₁₋₂ つまり・みたい・もの

~S₉₋₂M₁₋₆ つまり・…という・わけ

F₇₋₂ 結局 1-2

~K₁₁₋₁₀ 結局・にすぎない

~R₄₋₁ 結局・一種の

F₇₋₃ 要するに 3-3

~ 要するに 2-2

~K₉₋₁M₁₋₂ 要するに・よう・もの

F₇₋₄ いずれ 1-1

~K₉₋₁ いずれ・よう

F₈₋₁ なにか 18-37

~D₇₋₂ なにか・思わせる 2-2

~J₂₋₁K₉₋₁ なにか・でも・よう 7-13

~J₂₋₁K₁₀₋₁ なにか・でも・そう

~K₉₋₁ なにか・よう 6-6

~K₉₋₃ なにか・みたい

~K₉₋₁D₁₋₂ なにか・よう・思う

~K₉₋₁D₅₋₉ なにか・よう・見える 2-2

F₁₋₁~K₉₋₁ まるで・なにか・よう

~J₂₋₁K₉₋₁D₆₋₁ なにか・でも・よう・気
がする

~K₉₋₁D₆₋₁ なにか・よう・気がする

~K₉₋₁M₃₋₅ なにか・よう・気持ち 2-2

~K₉₋₁M₁₋₂ なにか・よう・もの 3-3

~M₃₋₂ なにか・感じ

~M₃₋₅ なにか・気持ち

J₁₋₅~J₂₋₁K₉₋₁ というより・なにか・で
も・よう

F₆₋₂ なにかしら 1-1

~K₉₋₁ なにかしら・よう

F₆₋₃ なにやら 3-15

~D₅₋₃ なにやら・思える

~J₂₋₁K₉₋₁ なにやら・でも・よう 1-2

~K₉₋₁D₁₋₂ なにやら・よう・思う

~K₉₋₁D₅₋₉ なにやら・よう・見える

~K₉₋₁D₆₋₁ なにやら・よう・気がする
2-2

~K₉₋₁D₅₋₄ なにやら・よう・思われる

~K₉₋₁M₃₋₄ なにやら・よう・気 1-2

~K₉₋₁M₃₋₇ なにやら・よう・心持ち

2-5

F₆₋₄ なんだか 15-25

~J₁₋₁ なんだか・ほど

~J₂₋₁K₉₋₁ なんだか・でも・よう 2-2

~K₉₋₁ なんだか・よう 6-7

~K₉₋₃ なんだか・みたい 3-3

~K₉₋₁D₆₋₁ なんだか・よう・気がする
8-12

F₈₋₅ どこか 5-7

~D₁₂₋₁ どこか・似る 2-3

~K₉₋₁ どこか・よう

~K₉₋₃ どこか・みたい

~K₉₋₁D₅₋₉ どこか・らしい・見える

~M₃₋₂ どこか・感じ

F₈₋₆ どこやら 1-1

~K₉₋₁D₅₋₄ どこやら・よう・思われる

- F₈₋₇ どこぞ 1-1
 ~J₂₋₁K₉₋₁ どこぞ・でも・よう
- F₈₋₈ どことなく 2-2
 ~D₇₋₂ どことなく・思わせる
 ~D₁₂₋₁ どことなく・似る
- F₉₋₁ 仮に 1-1
 D₁₋₁₂J₂₋₁D₃₋₁ 仮に・たとえる・でも
 ・言う
- F₉₋₂ もし 1-1
 ~J₈₋₁K₁₁₋₃ もし・…が…なら…は・で
 はないか
- F₁₀₋₁ これでは 1-2
 ~F₁₋₁J₃₋₁K₉₋₁ これでは・まるで・も・
 同然
 ~F₁₋₁K₉₋₁M₁₋₂ これでは・まるで・よ
 う・もの
- F₁₀₋₂ それでは 1-1
 ~F₁₋₁K₁₁₋₃ それでは・まるで・ではな
 いか
- F₁₀₋₃ それじゃ 1-1
 ~F₁₋₁ それじゃ・まるで
- F₁₀₋₄ あれじゃ 1-1
 ~F₁₋₁K₉₋₃ あれじゃ・まるで・みたい
- F₁₁₋₁ まさか 1-1
 ~K₁₂₋₂ まさか・ではあるまい
- F₁₁₋₂ なにも 1-1
 ~J₂₋₁K₁₂₋₁ なにも・でも・ではない
- F₁₂₋₁ 大して 1-1
 ~K₂₋₆ 大して・違いがない
- F₁₂₋₂ あんまり 1-1
 J₃₋₃~K₂₋₉ だって・あんまり・変わら
 ない
- F₁₂₋₃ どれだけでも 1-1
 ~K₂₋₇ どれだけでも・変わりが
 ない
- F₁₂₋₄ 露一つ 1-1
 ~K₂₋₈ 露一つ・違わない
- F₁₂₋₅ 寸分 1-1
 ~K₂₋₈ 寸分・違わない
- F₁₃₋₁ 薬にたくも 1-1
 ~ 薬にたくも
- F₁₄₋₁ を見ると 1-1
 ~D₅₋₁ を見ると・感じられる
- F₁₄₋₂ を見たら 1-1
 ~D₁₁₋₁ を見たら・思い出す
- F₁₅₋₁ から見れば 1-1
 ~ から見れば
- F₁₆₋₁ なら 1-1
 ~D₁₃₋₅ なら・よくある
- F₁₆₋₂ で言えば 3-3
 ~ で言えば 3-3
- F₁₆₋₃ にたとえると 1-1
 ~ にたとえ
- F₁₇₋₁ がよく…ように 1-1
 ~ がよく…ように
- F₁₇₋₂ に見るように 1-1
 ~ に見るように
- F₁₇₋₃ にあるように 1-1
 ~ にあるように
- F₁₇₋₄ 時々あるように 1-1
 ~ 時々あるように
- F₁₈₋₁ ということがある 1-1
 ~ ということがある
- F₁₈₋₂ と言うでしょう 1-1
 ~ と言うでしょう
- F₁₈₋₃ と言うじゃありませんか 1-1
 ~ と言うじゃありませんか
- F₁₈₋₄ ということがあるでしょう 1-1
 ~ ということがあるでしょう
- F₁₈₋₅ という諺があるでしょう 1-1
 ~ という諺があるでしょう

F₁₈₋₆ …という…があるが 1-1
 ~D₁₃₋₂ …という…があるが・当てはまる
 F₁₈₋₇ ということもあるわけだし 1-1
 ~ ということもあるわけだし
 F₁₈₋₈ のたとえ通り 1-1
 ~ のたとえ通り
 F₁₉₋₁ ではあるまいし 7-7
 ~ ではあるまいし
 F₁₉₋₂ ではないが 2-3
 ~ ではないが 2-3
 J₁₋₁ ほど 37-190
 D₁₋₂ ~ 思う・ほど 3-3
 D₁₋₇ ~ 紛う・ほど
 D₂₋₁ ~ 比する・ほど
 D₃₋₁ ~ 言う・ほど 2-2
 D₃₋₄ ~ 形容する・ほど
 D₅₋₄ ~ 思われる・ほど 4-4
 D₅₋₇ ~ 疑われる・ほど 2-2
 D₅₋₉ ~ 見える・ほど
 D₇₋₂ ~ 思わせる・ほど
 D₁₋₂~K₉₋₁D₅₋₉ 思う・ほど・よう・見
 える
 F₁₋₁D₅₋₄ ~ まるで・思われる・ほど
 F₁₋₁ ~ まるで・ほど 1-3
 F₁₋₃ ~ あたかも・ほど
 F₁₋₄ ~ ちょうど・ほど
 F₄₋₆ ~ それこそ・ほど
 F₈₋₄ ~ なんだか・ほど
 F₁₋₁K₁₃₋₂D₁₋₂ ~ まるで・…とはよくも
 名付けた・思う・ほど
 F₄₋₆K₁₁₋₃D₅₋₄ ~ それこそ・ではないか
 ・思われる・ほど
 ~ ほど 34-139
 ~D₅₋₁ ほど・感じられる
 J₂₋₁D₃₋₁ ~ でも・言う・ほど

J₃₋₁D₃₋₁ ~ も・言う・ほど
 J₃₋₁ ~ も・ほど 2-2
 J₃₋₁K₇₋₃ ~ も・ひけをとらない・ほど
 ~M₃₋₂ ほど・感じ
 ~M₃₋₅ ほど・気持ち
 ~M₃₋₁₀ ほど・思い
 K₁₀₋₁D₅₋₃ ~ そう・思える・ほど
 K₁₀₋₁D₅₋₉ ~ そう・見える・ほど
 K₁₋₃ ~ 同じ・ほど 2-3
 K₆₋₁ ~ わからない・ほど
 K₇₋₂ ~ 負けない・ほど
 K₁₀₋₁ ~ そう・ほど 2-2
 K₁₁₋₄ ~ 言っている・ほど
 M₃₋₁₀ ~ 思い・ほど
 R₃₋₂ ~ ほんの・ほど
 S₅₋₃ ~ …じみる・ほど
 S₉₋₂ ~ …という・ほど
 S₂₋₁M₃₋₂ ~ …的・感じ・ほど
 J₁₋₂ くらい 18-40
 D₅₋₄ ~ 思われる・くらい
 D₅₋₇ ~ 疑われる・くらい
 D₁₂₋₁ ~ 似る・くらい
 D₃₋₁ ~ M₁₋₂ 言う・くらい・もの
 F₁₋₁D₁₋₅ ~ まるで・受けとる・くらい
 F₁₋₁ ~ まるで・くらい
 F₃₋₃ ~ ほとんど・くらい 2-2
 F₃₋₁₁~M₁₋₄ せいぜい・くらい・こと
 F₃₋₁₁~M₃₋₅ せいぜい・くらい・気持ち
 F₃₋₃K₁₋₂ ~ ほとんど・等しい・くらい
 ~ くらい 12-24
 J₃₋₁K₇₋₄ ~ も・及ばない・くらい
 K₁₋₃ ~ 同じ・くらい 2-2
 R₃₋₂~M₃₋₂ ほんの・くらい・気持ち
 S₉₋₂D₆₋₁ ~ …という・気がする・くらい
 J₁₋₃ ばかり 12-39

F₁₋₁~ まるで・ばかり
 F₁₋₅~ いかにも・ばかり
 ~ ばかり 12-27
 J₃₋₁~ も・ばかり 2-9
 ~M₃₋₁₀ ばかり・思い
 J₁₋₄ より 15-22
 ~ より 13-20
 ~K₉₋₁ より・よう
 R₁₋₁~ へたな・より
 J₁₋₅ というより 9-10
 ~ というより
 ~D₅₋₁ というより・感じられる
 ~F₃₋₇ というより・むしろ 2-2
 ~F₃₋₇D₃₋₁ というより・むしろ・言う
 ~F₈₋₁J₂₋₁K₉₋₁ というより・なにか・で
 も・よう
 ~F₃₋₇K₁₋₁ というより・むしろ・近い
 ~F₂₋₁S₉₋₂K₉₋₁ というより・いわば・…
という・よう
 ~K₉₋₁D₅₋₃ というより・よう・思える
 ~S₉₋₂M₃₋₂ というより・…という・感じ
 J₁₋₆ に比べて 1-1
 ~J₁₋₇ に比べて・のほうが
 J₁₋₇ のほうが 1-1
 J₁₋₆~ に比べて・のほうが
 J₂₋₁ でも 33-238
 F₉₋₁D₁₋₁₂~D₉₋₁ 仮に・たとえる・でも
言う
 F₁₋₁D₁₋₁₆~S₉₋₂K₉₋₁ まるで・する・で
も・…という・よう
 F₁₋₁F₁₋₁~K₉₋₁ まるで・まるで・でも
 ・よう
 F₁₋₁~ まるで・でも
 F₁₋₁~K₉₋₁ まるで・でも・よう 16-44

F₁₋₁~K₉₋₃ まるで・でも・みたい 2-3
 F₁₋₃~K₉₋₁ あたかも・でも・よう
 4-10
 F₁₋₆~K₉₋₁ さも・でも・よう
 F₈₋₁~K₉₋₁ なにか・でも・よう 7-13
 F₈₋₁~K₁₀₋₁ なにか・でも・そう
 F₈₋₃~K₉₋₁ なにやら・でも・よう 1-2
 F₈₋₄~K₉₋₁ なんだか・でも・よう 2-2
 F₈₋₇~K₉₋₁ どこぞ・でも・よう
 F₁₁₋₂~K₁₂₋₁ なにも・でも・ではない
 F₁₋₁~K₉₋₁D₁₋₂ まるで・でも・よう・
思う
 F₁₋₁~K₉₋₁D₅₋₉ まるで・でも・よう・
見える
 F₁₋₁~K₉₋₁D₁₋₁ さも・でも・よう・感
じる
 F₄₋₄~K₉₋₁D₅₋₉ ほんとうに・でも・よ
う・見える
 F₈₋₁~K₉₋₁D₆₋₁ なにか・でも・よう・
気がする
 F₁₋₁~K₉₋₁M₂₋₁ まるで・でも・よう・
ようす
 F₂₋₇~K₉₋₁M₃₋₇ たとえば・でも・よう
心持ち
 F₁₋₁~M₃₋₁₂ まるで・でも・つもり
 F₁₋₃~M₂₋₁ あたかも・でも・ようす
 F₁₋₁~S₉₋₂K₉₋₁ まるで・でも・…とい
う・よう
 ~ でも 5-9
 ~D₄₋₁ でも・なる
 ~D₆₋₁ でも・気がする
 ~D₃₋₁J₁₋₁ でも・言う・ほど
 ~D₅₋₄K₉₋₁ でも・思われる・よう 1-2
 J₁₋₅F₈₋₁~K₉₋₁ というより・なにか・
でも・よう

~K₉₋₁ でも・よう 30-104
 ~K₉₋₂ でも・ごとし
 ~K₉₋₃ でも・みたい
 ~K₁₀₋₁ でも・そう 4-6
 ~K₁₀₋₂ でも・かねない
 ~K₉₋₁D₁₋₂ でも・よう・思う
 ~K₉₋₁D₅₋₈ でも・よう・錯覚される
 ~K₉₋₁D₅₋₉ でも・よう・見える
 ~K₉₋₁D₆₋₁ でも・よう・気がする 2-2
 ~K₉₋₁M₃₋₅ でも・よう・気持ち 3-3
 ~K₉₋₁M₃₋₆ でも・よう・気分
 ~M₃₋₄ でも・気
 ~M₃₋₁₀ でも・思い
 ~S₉₋₂ でも・…という
 ~S₉₋₂K₉₋₁ でも・…という・よう 3-4
 ~S₉₋₂K₉₋₁M₁₋₂ でも・…という・よう
 ・もの
 R₁₋₂~K₉₋₁ どんな・でも・よう
 J₂₋₂ など 2-3
 ~ など
 ~K₈₋₁ など・比でない
 ~K₉₋₁D₅₋₄ など・よう・思われる
 J₂₋₃ かなにか 5-11
 F₁₋₁~K₉₋₁ まるで・かなにか・よう
 F₁₋₃~K₉₋₁ あたかも・かなにか・よう
 ~K₉₋₁ かなにか・よう 4-7
 ~K₉₋₁D₁₋₁ かなにか・よう・感じる
 ~K₉₋₁D₅₋₄ かなにか・よう・思われる
 J₂₋₄ かな(ん)ぞ 5-6
 ~K₉₋₁ かな(ん)ぞ・よう 4-5
 ~K₉₋₁D₁₋₁₅ かな(ん)ぞ・よう・扱う
 J₃₋₁ も 27-107
 F₁₀₋₁F₁₋₁~K₃₋₁ これでは・まるで・も
 ・同然
 F₂₋₇~D₁₂₋₁ たとえば・も・似る

F₃₋₃~D₃₋₁ ほとんど・も・言う
 F₁₋₁~K₁₋₃ まるで・も・同じ
 F₁₋₁~K₂₋₁ まるで・も・同様
 F₁₋₃~K₁₋₂ あたかも・も・等しい
 F₄₋₆~K₁₋₂ それこそ・も・等しい
 ~ も
 ~D₁₋₁₂ も・たとえる
 ~D₃₋₁ も・言う 3-9
 ~D₃₋₃ も・呼ぶ
 ~D₅₋₃ も・思える
 ~D₅₋₄ も・思われる 2-2
 ~D₅₋₉ も・見える 2-3
 ~D₁₂₋₁ も・似る 6-10
 ~D₁₃₋₁ も・当たる 3-3
 ~D₁₄₋₁ も・劣る
 ~D₃₋₁J₁₋₁ も・言う・ほど
 ~D₁₋₈K₉₋₁ も・見る・よう
 ~J₁₋₁ も・ほど 2-2
 ~J₁₋₃ も・ばかり 2-9
 ~K₁₋₂ も・等しい 2-4
 ~K₂₋₁ も・同様 2-2
 ~K₂₋₄ も・一つ
 ~K₃₋₁ も・同然 3-4
 ~K₉₋₁ も・よう 3-5
 ~K₁₀₋₁ も・そう
 ~K₁₀₋₂ も・かねない
 ~K₇₋₃J₁₋₁ も・ひけをとらない・ほど
 ~K₇₋₄J₁₋₂ も・及ばない・くらい
 ~K₁₋₃M₁₋₄ も・同じ・こと 2-2
 ~K₉₋₁M₃₋₇ も・よう・心持ち
 ~M₃₋₁₀ も・思い
 ~S₈₋₃ も・…よろしく
 K₉₋₁~ よう・も 6-9
 K₉₋₁~D₁₋₂ よう・も・思う
 K₉₋₁~D₅₋₁ よう・も・感じられる 2-2

470 4. 表

$K_{9-1} \sim D_{5-4}$ よう・も・思われる 1-2
 $K_{9-1} \sim D_{5-8}$ よう・も・錯覚される
 $K_{9-1} \sim D_{5-9}$ よう・も・見える 5-7
 $K_{9-1} \sim D_{6-1}$ よう・も・気がする 4-4
 $K_{9-2} \sim D_{5-9}$ ごとし・も・見える
 $K_{9-1} \sim K_{9-1} \sim$ よう・も・よう・も
 $K_{9-1} \sim M_{2-1} \sim$ よう・も・ようす・も
 $K_{9-1} K_{9-1} K_{9-1} \sim$ よう・よう・よう・も
 J_{3-2} もまた 2-2
 $\sim K_{9-2}$ もまた・ごとし 2-2
 J_{3-3} だって 7-10
 \sim だって 4-4
 $\sim D_{13-3}$ だって・相当する
 $\sim F_{12-2} K_{2-9}$ だって・あんまり・変わ
 ない
 $\sim K_{5-1}$ だって・その通り
 $\sim K_{5-2}$ だって・そうだ
 $\sim K_{9-1}$ だって・よう
 $\sim K_{1-3} M_{1-4}$ だって・同じ・こと
 J_{3-4} さえ 8-15
 $D_{1-8} K_{9-1} \sim D_{6-1}$ 見る・よう・さえ・気
 がする
 $F_{1-4} \sim D_{5-4}$ ちょうど・さえ・思われる
 $F_{1-1} K_{9-1} \sim D_{5-9}$ まるで・よう・さえ・
 見える
 $K_{9-1} \sim$ よう・さえ 1-2
 $K_{9-1} \sim D_{1-1}$ よう・さえ・感じる
 $K_{9-1} \sim D_{1-2}$ よう・さえ・思う
 $K_{9-1} \sim D_{5-3}$ よう・さえ・思える 2-2
 $K_{9-1} \sim D_{5-4}$ よう・さえ・思われる
 $K_{9-1} \sim D_{5-9}$ よう・さえ・見える 2-2
 $K_{9-1} \sim D_{6-1}$ よう・さえ・気がする
 $K_{4-1} K_{9-1} \sim D_{6-1}$ 同類・よう・さえ・気
 がする
 $R_{4-1} K_{9-1} M_{1-2} \sim D_{1-1}$ 一種の・よう・も

 の・さえ・感じる
 J_{3-5} すら 2-2
 \sim すら
 $K_{9-1} \sim D_{3-4}$ よう・すら・思われる
 J_{3-6} まで 3-3
 $\sim D_{1-2}$ まで・思う
 $\sim D_{1-13}$ まで・なぞらえる
 $\sim K_{10-1}$ まで・そう
 J_{4-1} に 1-1
 \sim に
 J_{4-2} と 1-1
 \sim と
 J_{5-1} というものは 1-2
 $F_{4-2} \sim$ まったく・というものは
 $\sim F_{5-1} D_{1-2}$ というものは・つくづく・
 思う
 J_{6-1} の 20-49
 \sim の 20-49
 J_{7-1} …であれ…であれ 1-1
 \sim …であれ…であれ
 J_{7-2} …と…は 2-2
 \sim …と…は 2-2
 J_{8-1} …が…なら…は… 3-3
 \sim …が…なら…は… 2-2
 $F_{9-2} \sim K_{11-3}$ もし・…が…なら…は…
 ではないか
 J_{8-2} …なら…が…では… 1-1
 \sim …なら…が…では…
 J_{8-3} …を…とすれば…は 2-2
 \sim …を…とすれば…は 2-2
 J_{8-4} …を…と呼ぶなら…は… 1-1
 \sim …を…と呼ぶなら…は…
 J_{8-5} …を…とすれば…は…にたとえてい
 い 1-1
 \sim …を…とすれば…は…にたとえていい

J₆₋₆ …は…だが…も… 1-1
 ~ …は…だが…も…
 J₆₋₇ …がかえって…であり
 むしろ…は…である 1-1
 ~ …がかえって…でありむしろ…は…
 である
 K₁₋₁ 近い 5-10
 F₂₋₉~ たとえて言うと・近い
 F₃₋₃~ ほとんど・近い
 F₃₋₃~K₉₋₁M₁₋₂ ほとんど・近い・よう
 ・もの
 J₁₋₅F₃₋₇~ というより・むしろ・近い
 ~ 近い 4-6
 K₁₋₂ 等しい 8-20
 F₁₋₃J₃₋₁~ あたかも・も・等しい
 F₄₋₆J₃₋₁~ それこそ・も・等しい
 F₃₋₃~J₁₋₂ ほとんど・等しい・くらい
 J₃₋₁~ も・等しい 2-4
 ~ 等しい 6-13
 K₁₋₃ 同じ 25-62
 F₁₋₁J₃₋₁~ まるで・も・同じ
 F₁₋₁~ まるで・同じ
 F₃₋₁~そっくり・同じ
 F₄₋₂~まったく・同じ
 F₁₋₄~D₁₃₋₁ ちょうど・同じ・当たる
 F₁₋₄~K₉₋₁ ちょうど・同じ・よう 2-2
 F₂₋₇~M₁₋₄ たとえば・同じ・こと
 F₄₋₂~M₁₋₄ まったく・同じ・こと
 J₃₋₁~M₁₋₄ も・同じ・こと 2-2
 J₃₋₃~M₁₋₄ だって・同じ・こと
 ~同じ 14-19
 ~J₁₋₁ 同じ・ほど 2-3
 ~J₁₋₂ 同じ・くらい 2-2
 ~K₉₋₁ 同じ・よう 8-11
 ~K₉₋₁M₁₋₂ 同じ・よう・もの

~M₁₋₂ 同じ・もの
 ~M₁₋₄ 同じ・こと 3-10
 ~M₂₋₁₁ 同じ・ぐあい
 ~M₃₋₅ 同じ・気持ち
 ~M₄₋₁ 同じ・役目
 K₁₋₄ そっくりだ 4-6
 F₁₋₁~ まるで・そっくりだ 2-2
 F₁₋₄~ ほんとうに・そっくりだ
 ~ そっくりだ 3-3
 K₁₋₅ 瓜二つ 1-1
 F₄₋₂~ まったく・瓜二つ
 K₁₋₆ 似たりよったり 1-1
 F₃₋₅~ まず・似たりよったり
 K₂₋₁ 同様 5-7
 F₁₋₁J₃₋₁~ まるで・も・同様
 J₃₋₁~ も・同様 2-2
 ~ 同様 2-3
 ~D₅₋₄ 同様・思われる
 K₂₋₂ 同列 1-1
 ~ 同列
 K₂₋₃ 同程度 1-1
 F₁₋₄~ ちょうど・同程度
 K₂₋₄ 一つ 2-3
 F₂₋₅~ 言うたら・一つ
 J₃₋₁~ も・一つ
 ~ 一つ
 K₂₋₅ 一般 1-2
 F₁₋₄~ ちょうど・一般
 ~ 一般
 K₂₋₆ 違いがない 1-1
 F₁₂₋₁~ 大して・違いがない
 K₂₋₇ 変わりがない 3-4
 F₃₋₃~ ほとんど・変わりがない
 F₁₂₋₃~ どれだけも・変わりがない
 R₂₋₁~ 大した・変わりがない

472 4. 表

R₂₋₂～ なんの・変わりがない
 K₂₋₈ 違わない 2-2
 F₁₂₋₄～ 露一つ・違わない
 F₁₂₋₅～ 寸分・違わない
 K₂₋₉ 変わらない 2-2
 J₃₋₃F₁₂₋₂～ だって・あんまり・変わらない
 ～ 変わらない
 K₂₋₁₀ 異なる 2-2
 F₁₋₁～ まるで・異ならない
 F₃₋₃～ ほとんど・異ならない
 K₂₋₁₁ 選ぶところがない 1-1
 ～ 選ぶところがない
 K₃₋₁ 同然 4-7
 F₁₀₋₁F₁₋₁J₃₋₁～ これでは・まるで・も
 ・同然
 J₃₋₁～ も・同然 3-4
 ～ 同然 2-2
 K₄₋₁ 同類 1-1
 ～K₉₋₁J₃₋₄D₆₋₁ 同類・よう・さえ・気が
 する
 K₅₋₁ その通り 1-1
 J₃₋₃～ だって・その通り
 K₅₋₂ そうだ 1-1
 J₃₋₃～ だって・そうだ
 K₅₋₃ そんなもの 1-2
 K₉₋₁～ よう・そんなもの 1-2
 K₆₋₁ わからない 2-5
 ～ わからない 1-4
 ～J₁₋₁ わからない・ほど
 K₇₋₁ ふさわしい 1-1
 F₃₋₇D₃₋₁～K₉₋₁M₁₋₃ むしろ・言う・ふ
さわしい・よう・代物
 K₇₋₂ 負けない 1-1
 ～J₁₋₁ 負けない・ほど

K₇₋₃ ひけをとらない 1-1
 J₃₋₁～J₁₋₁ も・ひけをとらない・ほど
 K₇₋₄ 及ばない 3-3
 J₃₋₁～J₁₋₂ も・及ばない・くらい
 ～ 及ばない 2-2
 K₈₋₁ 比でない 1-1
 J₂₋₂～ など・比でない
 K₉₋₁ よう 50-5448
 D₁₋₂J₁₋₁～D₅₋₉ 思う・ほど・よう・見
 える
 D₁₋₂～ 思う・よう 1-2
 D₁₋₈～ 見る・よう 3-3
 D₁₋₁₂～ たとえる・よう
 D₅₋₁～ 感じられる・よう
 D₇₋₂～ 思わせる・よう 2-5
 D₇₋₃～ 思い出させる・よう
 D₇₋₈～ 連想させる・よう
 D₁₃₋₄～ 類する・よう
 D₁₋₈～J₃₋₄D₆₋₁ 見る・よう・さえ・気
 がする
 D₁₋₈～D₆₋₁ 見る・よう・気がする
 D₃₋₁～D₆₋₁ 言う・よう・気がする
 D₅₋₉～D₆₋₁ 見える・よう・気がする
 D₁₂₋₁～D₅₋₃ 似る・よう・思える
 D₁₋₈～M₁₋₂ 見る・よう・もの
 D₁₂₋₁～M₃₋₂ 似る・よう・感じ
 F₁₋₁D₁₋₁₆J₂₋₁S₉₋₂～ まるで・する・で
 も・…という・よう
 F₁₋₁D₁₋₈～ まるで・見る・よう
 F₁₋₃D₁₂₋₁～D₆₋₂ あたかも・似る・よう
 ・心持がする
 F₃₋₇D₃₋₁K₇₋₁～M₁₋₃ むしろ・言う・ふ
 さわしい・よう・代物
 F₁₋₁F₁₋₁J₂₋₁～ まるで・まるで・でも・
よう

F₁₋₁F₈₋₁～ まるで・なにか・よう
 F₄₋₂F₁₋₁～D₅₋₉ まったく・まるで・よ
う・見える
 F₁₀₋₁F₁₋₁～M₁₋₂ これでは・まるで・よ
う・もの
 F₁₋₁J₂₋₁～ まるで・でも・よう 16-44
 F₁₋₁J₂₋₃～ まるで・かなにか・よう
 F₁₋₃J₂₋₃～ あたかも・かなにか・よう
 F₁₋₃J₂₋₁～ あたかも・でも・よう 4-10
 F₁₋₆J₂₋₁～ さも・でも・よう
 F₈₋₁J₂₋₁～ なにか・でも・よう 7-13
 F₈₋₃J₂₋₁～ なにやら・でも・よう 1-2
 F₈₋₄J₂₋₁～ なんだか・でも・よう 2-2
 F₈₋₇J₂₋₁～ どこぞ・でも・よう
 F₁₋₁J₂₋₁～D₁₋₂ まるで・でも・よう・思う
 F₁₋₁J₂₋₁～D₅₋₉ まるで・でも・よう・見
える
 F₁₋₆J₂₋₁～D₁₋₁ さも・でも・よう・感じる
 F₄₋₄J₂₋₁～D₅₋₉ ほんとうに・でも・よう
・見える
 F₈₋₁J₂₋₁～D₆₋₁ なにか・でも・よう・気
がする
 F₁₋₁J₂₋₁～M₂₋₁ まるで・でも・よう・よ
うす
 F₂₋₇J₂₋₁～M₃₋₇ たとえば・でも・よう・
心持ち
 F₁₋₁J₂₋₁S₉₋₂～ まるで・でも・…という
・よう
 F₁₋₁～ まるで・よう 28-207
 F₁₋₂～ さながら・よう
 F₁₋₃～ あたかも・よう 12-45
 F₁₋₄～ ちょうど・よう 12-29
 F₁₋₅～ いかにも・よう
 F₁₋₆～ さも・よう 2-3
 F₂₋₁～ いわば・よう 2-3

F₂₋₇～ たとえば・よう 5-6
 F₂₋₈～ たとえて言えば・よう
 F₃₋₃～ ほとんど・よう 8-11
 F₃₋₈～ 半分・よう 2-9
 F₃₋₉～ なかば・よう 2-2
 F₃₋₁₀～ なただ・よう
 F₄₋₁～ まさに・よう 3-4
 F₄₋₂～ まったく・よう 3-5
 F₄₋₄～ ほんとうに・よう
 F₄₋₅～ ほんなこと・よう
 F₄₋₆～ それこそ・よう
 F₄₋₈～ 文字通り・よう
 F₆₋₁～ 今にも・よう
 F₇₋₄～ いずれ・よう
 F₈₋₁～ なにか・よう 6-6
 F₈₋₂～ なにかしら・よう
 F₈₋₄～ なんだか・よう 6-7
 F₈₋₅～ どこか・よう
 F₁₋₁～D₁₋₂ まるで・よう・思う
 F₁₋₁～D₅₋₁ まるで・よう・感じられる
2-2
 F₁₋₁～D₅₋₄ まるで・よう・思われる
 F₁₋₁～D₅₋₅ まるで・よう・考えられる
 F₁₋₁～D₅₋₉ まるで・よう・見える 4-4
 F₁₋₁～D₆₋₁ まるで・よう・気がする
3-4
 F₁₋₃～D₁₋₁₁ あたかも・よう・見せかけ
る
 F₁₋₃～D₅₋₉ あたかも・よう・見える
3-5
 F₁₋₃～D₅₋₁₁ あたかも・よう・見なされ
る
 F₁₋₃～D₆₋₁ あたかも・よう・気がする
 F₁₋₄～D₅₋₁ ちょうど・よう・感じられ
る

F ₁₋₅ ~D ₁₋₂	いかにも・ <u>よう</u> ・思う	F ₂₋₁ ~M ₁₋₂	いわば・ <u>よう</u> ・もの 3-3
F ₂₋₁ ~D ₅₋₄	いわば・ <u>よう</u> ・思われる	F ₂₋₂ ~M ₁₋₂	言えば・ <u>よう</u> ・もの
F ₂₋₁ ~D ₅₋₉	いわば・ <u>よう</u> ・見える	F ₃₋₆ ~M ₁₋₂	まあ・ <u>よう</u> ・もの
F ₃₋₃ ~D ₆₋₁	ほとんど・ <u>よう</u> ・気がする	F ₃₋₈ ~M ₃₋₅	半分・ <u>よう</u> ・気持ち
F ₄₋₂ ~D ₆₋₁	まったく・ <u>よう</u> ・気がする	F ₄₋₁ ~M ₁₋₂	まさに・ <u>よう</u> ・もの 1-2
F ₆₋₁ ~D ₆₋₁	今にも・ <u>よう</u> ・気がする	F ₇₋₃ ~M ₁₋₂	要するに・ <u>よう</u> ・もの
F ₈₋₁ ~D ₁₋₂	なにか・ <u>よう</u> ・思う	F ₈₋₁ ~M ₁₋₂	なにか・ <u>よう</u> ・もの 3-3
F ₈₋₁ ~D ₅₋₉	なにか・ <u>よう</u> ・見える 2-2	F ₈₋₁ ~M ₃₋₅	なにか・ <u>よう</u> ・気持ち 2-2
F ₈₋₁ ~D ₆₋₁	なにか・ <u>よう</u> ・気がする	F ₈₋₃ ~M ₃₋₄	なにやら・ <u>よう</u> ・気 1-2
F ₈₋₃ ~D ₁₋₂	なにやら・ <u>よう</u> ・思う	F ₈₋₃ ~M ₃₋₇	なにやら・ <u>よう</u> ・心持ち 2-5
F ₈₋₃ ~D ₅₋₄	なにやら・ <u>よう</u> ・思われる	F ₁₋₁ ~R ₄₋₁ M ₃₋₁	まるで・ <u>よう</u> ・一種の ・感
F ₈₋₃ ~D ₅₋₉	なにやら・ <u>よう</u> ・見える	F ₁₋₂ S ₉₋₂ ~	さながら・…という・ <u>よう</u>
F ₈₋₃ ~D ₆₋₁	なにやら・ <u>よう</u> ・気がする 2-2	F ₂₋₁ S ₉₋₂ ~	いわば・…という・ <u>よう</u>
F ₈₋₄ ~D ₆₋₁	なんだか・ <u>よう</u> ・気がする 8-12	F ₁₋₃ S ₈₋₂ ~D ₆₋₁	あたかも・…さながら・ <u>よう</u> ・気がする
F ₈₋₆ ~D ₅₋₄	どこやら・ <u>よう</u> ・思われる	J ₂₋₁ D ₅₋₄ ~	でも・思われる・ <u>よう</u> 1-2
F ₁₋₁ ~J ₃₋₄ D ₅₋₉	まるで・ <u>よう</u> ・さえ・見 える	J ₃₋₁ D ₁₋₈ ~	も・見る・ <u>よう</u>
F ₁₋₁ K ₁₋₃ ~	まるで・同じ・ <u>よう</u>	J ₁₋₅ F ₈₋₁ J ₂₋₁ ~	というより・なにか・で も・ <u>よう</u>
F ₁₋₄ K ₁₋₃ ~	ちょうど・同じ・ <u>よう</u> 2-2	J ₁₋₅ F ₂₋₁ S ₉₋₂ ~	というより・いわば・… という
F ₃₋₃ K ₁₋₁ ~M ₁₋₂	ほとんど・近い・ <u>よう</u> ・もの	J ₁₋₄ ~	より・ <u>よう</u>
F ₁₋₁ ~M ₁₋₂	まるで・ <u>よう</u> ・もの 5-11	J ₂₋₁ ~	でも・ <u>よう</u> 30-104
F ₁₋₁ ~M ₂₋₁₁	まるで・ <u>よう</u> ・ぐあい 2-2	J ₂₋₃ ~	かなにか・ <u>よう</u> 4-7
F ₁₋₁ ~M ₃₋₂	まるで・ <u>よう</u> ・感じ 4-4	J ₂₋₄ ~	かな(ん)ぞ・ <u>よう</u> 4-5
F ₁₋₁ ~M ₃₋₃	まるで・ <u>よう</u> ・感触	J ₃₋₁ ~	も・ <u>よう</u> 3-5
F ₁₋₁ ~M ₃₋₅	まるで・ <u>よう</u> ・気持ち 2-2	J ₃₋₃ ~	だって・ <u>よう</u>
F ₁₋₁ ~M ₃₋₁₀	まるで・ <u>よう</u> ・思い	J ₁₋₅ ~D ₅₋₃	というより・ <u>よう</u> ・思える
F ₁₋₂ ~M ₃₋₁₀	さながら・ <u>よう</u> ・思い	J ₂₋₁ ~D ₁₋₂	でも・ <u>よう</u> ・思う
F ₁₋₃ ~M ₂₋₁₁	あたかも・ <u>よう</u> ・ぐあい 2-2	J ₂₋₁ ~D ₅₋₈	でも・ <u>よう</u> ・錯覚される
F ₁₋₄ ~M ₁₋₂	ちょうど・ <u>よう</u> ・もの	J ₂₋₁ ~D ₅₋₉	でも・ <u>よう</u> ・見える
F ₁₋₄ ~M ₂₋₁₇	ちょうど・ <u>よう</u> ・かつこう	J ₂₋₁ ~D ₆₋₁	でも・ <u>よう</u> ・気がする 2-2
F ₁₋₄ ~M ₃₋₅	ちょうど・ <u>よう</u> ・気持ち	J ₂₋₂ ~D ₅₋₄	など・ <u>よう</u> ・思われる

J₂₋₃~D₁₋₁ かなにか・よう・感じる
 J₂₋₃~D₁₋₂ かなにか・よう・思う
 J₂₋₃~D₅₋₄ かなにか・よう・思われる
 J₂₋₄~D₁₋₁₅ かな(ん)ぞ・よう・扱う
 J₂₋₁~M₃₋₅ でも・よう・気持ち 3-3
 J₂₋₁~M₃₋₆ でも・よう・気分
 J₃₋₁~M₃₋₇ も・よう・気持ち
 J₂₋₁S₃₋₂~ でも・…という・よう 3-4
 J₂₋₁S₃₋₂~M₁₋₂ でも・…という・よう・
 もの
 ~ よう 50-3875
 ~D₁₋₁ よう・感じる 7-15
 ~D₁₋₂ よう・思う 7-10
 ~D₁₋₃ よう・考える 2-2
 ~D₁₋₄ よう・心得る
 ~D₁₋₆ よう・錯覚する 1-2
 ~D₁₋₈ よう・見る 3-3
 ~D₁₋₉ よう・眺める 1-2
 ~D₅₋₁ よう・感じられる 10-21
 ~D₅₋₂ よう・覚える
 ~D₅₋₃ よう・思える 9-10
 ~D₅₋₄ よう・思われる 18-61
 ~D₅₋₆ よう・とれる
 ~D₅₋₈ よう・錯覚される 1-2
 ~D₅₋₉ よう・見える 25-92
 ~D₅₋₁₀ よう・見られる
 ~D₅₋₁₂ よう・眺められる 2-3
 ~D₅₋₁₃ よう・眼に映る 3-3
 ~D₅₋₁₄ よう・映る
 ~D₅₋₁₅ よう・聞こえる 2-2
 ~D₅₋₁₈ よう・扱われる
 ~D₆₋₁ よう・気がする 31-156
 ~D₆₋₃ よう・心地がする
 ~D₇₋₁ よう・感じさせる
 ~D₇₋₁₀ よう・錯覚させる

~J₃₋₁ よう・も 6-9
 ~J₃₋₄ よう・さえ 1-2
 ~J₃₋₁D₁₋₂ よう・も・思う
 ~J₃₋₁D₅₋₁ よう・も・感じられる 2-2
 ~J₃₋₁D₅₋₄ よう・も・思われる 1-2
 ~J₃₋₁D₅₋₈ よう・も・錯覚される
 ~J₃₋₁D₅₋₉ よう・も・見える 5-7
 ~J₃₋₁D₆₋₁ よう・も・気がする 4-4
 ~J₃₋₄D₁₋₁ よう・さえ・感じる
 ~J₃₋₄D₁₋₂ よう・さえ・思う
 ~J₃₋₄D₅₋₃ よう・さえ・思える 2-2
 ~J₃₋₄D₅₋₄ よう・さえ・思われる
 ~J₃₋₄D₅₋₉ よう・さえ・見える 2-2
 ~J₃₋₄D₆₋₁ よう・さえ・気がする
 ~J₃₋₅D₅₋₄ よう・すら・思われる
 ~J₃₋₁~J₃₋₁ よう・も・よう・も
 ~J₃₋₁M₂₋₁J₃₋₁ よう・も・ようす・も
 K₁₋₃~ 同じ・よう 8-11
 ~K₅₋₃ よう・そんなもの 1-2
 K₄₋₁~J₃₋₄D₆₋₁ 同類・よう・さえ・気
 がする
 ~~~ よう・よう・よう  
 ~~~J<sub>3-1</sub> よう・よう・よう・も  
 K₁₋₃~M₁₋₂ 同じ・よう・もの
 K₁₋₃~M₁₋₄ 同じ・よう・こと
 ~M₁₋₂ よう・もの 33-148
 ~M₁₋₄ よう・こと 6-10
 ~M₁₋₅ よう・まね 2-3
 ~M₂₋₂ よう・気配
 ~M₂₋₄ よう・おもむき 3-3
 ~M₂₋₅ よう・風情
 ~M₂₋₆ よう・ふう 3-3
 ~M₂₋₈ よう・状態 2-3
 ~M₂₋₉ よう・観
 ~M₂₋₁₁ よう・ぐあい 2-2

~M₂₋₁₂ よう・あんばい
 ~M₂₋₁₃ よう・調子 5-7
 ~M₂₋₁₄ よう・口調
 ~M₂₋₁₆ よう・形 9-12
 ~M₂₋₁₇ よう・かっこう 3-3
 ~M₃₋₂ よう・感じ 16-41
 ~M₃₋₃ よう・感触
 ~M₃₋₄ よう・気 8-16
 ~M₃₋₅ よう・気持ち 20-56
 ~M₃₋₆ よう・気分 5-9
 ~M₃₋₇ よう・心持ち 8-21
 ~M₃₋₈ よう・心地 2-2
 ~M₃₋₉ よう・心 3-7
 ~M₃₋₁₀ よう・思い 10-13
 ~M₃₋₁₂ よう・つもり
 ~M₃₋₁₃ よう・印象 2-2
 ~M₄₋₁ よう・役目
 ~M₈₋₁ よう・錯覚 6-8
 R₃₋₁~ いわゆる・よう
 R₃₋₃~ ほんの・よう
 R₄₋₁~ 一種の・よう 4-5
 R₁₋₂J₂₋₁~ どんな・でも・よう
 R₄₋₁~M₁₋₂ 一種の・よう・もの
 R₄₋₁~M₁₋₂J₃₋₄D₁₋₁ 一種の・よう・もの・さえ・感じる
 S₁₋₅~ …状・よう
 S₉₋₂~ …という・よう 4-6
 S₁₀₋₁~ …そのもの・よう
 S₈₋₂~D₅₋₄ …さながら・よう・思われる
 S₉₋₂~M₁₋₂… という・よう・もの
 S₉₋₂~M₂₋₄ …という・よう・おもむき
 S₉₋₂~M₂₋₁₁ …という・よう・ぐあい
 2-2
 S₉₋₂~M₂₋₁₇ …という・よう・かっこう

S₉₋₂~M₂₋₂₃ …という・よう・図
 S₉₋₂~M₃₋₂ …という・よう・感じ 3-3
 K₉₋₂ ごとし 18-96
 F₁₋₂~ さながら・ごとし
 F₁₋₃~ あたかも・ごとし
 F₁₋₃~D₁₋₉ あたかも・ごとし・眺める
 J₂₋₁~ でも・ごとし
 J₃₋₂~ もまた・ごとし 2-2
 ~ごとし 17-82
 ~D₁₋₁ ごとし・感じる 1-3
 ~D₅₋₁ ごとし・感じられる
 ~J₃₋₁D₅₋₉ ごとし・も・見える
 ~M₁₋₂ ごとし・もの 3-3
 K₉₋₃ みたい 35-224
 F₁₀₋₄F₁₋₁~ あれじゃ・まるで・みたい
 F₁₋₁J₂₋₁~ まるで・でも・みたい 2-3
 F₁₋₁~ まるで・みたい 12-24
 F₂₋₂~ 言えば・みたい
 F₃₋₃~ ほとんど・みたい
 F₄₋₆~ それこそ・みたい
 F₈₋₁~ なにか・みたい
 F₈₋₄~ なんだか・みたい 3-3
 F₈₋₅~ どこか・みたい
 F₁₋₁~D₅₋₉ まるで・みたい・見える
 F₂₋₂~M₁₋₂ 言えば・みたい・もの
 F₇₋₁~M₁₋₂ つまり・みたい・もの
 F₂₋₁R₄₋₁~M₁₋₂ いわば・一種の・みたい・もの
 J₂₋₁~ でも・みたい
 ~ みたい 33-147
 ~D₅₋₃ みたい・思える
 ~D₅₋₉ みたい・見える 2-2
 ~D₆₋₁ みたい・気がする 3-3
 ~M₁₋₂ みたい・もの 12-22
 ~M₁₋₄ みたい・こと 2-2

~M₁₋₅ みたい・まね
 ~M₂₋₆ みたい・ふう
 ~M₃₋₅ みたい・気持ち 2-3
 R₄₋₁~ 一種の・みたい
 K₉₋₄ らしい 2-2
 F₈₋₅~D₅₋₉ どこか・らしい・見える
 ~M₁₋₂ らしい・もの
 K₁₀₋₁ そう 16-71
 F₈₋₁J₂₋₁~ なにか・でも・そう
 F₆₋₁~ 今にも・そう 4-7
 F₆₋₂~ あわや・そう
 F₆₋₁~D₅₋₄ 今にも・そう・思われる
 F₆₋₁~D₆₋₁ 今にも・そう・気がする
 F₆₋₁~M₃₋₂ 今にも・そう・感じ
 J₂₋₁~ でも・そう 4-6
 J₃₋₁~ も・そう
 J₃₋₆~ まで・そう
 ~ そう 18-38
 ~D₅₋₁ そう・感じられる
 ~D₅₋₃ そう・思える 1-2
 ~D₅₋₄ そう・思われる
 ~D₅₋₉ そう・見える 4-4
 ~D₅₋₃J₁₋₁ そう・思える・ほど
 ~D₅₋₉J₁₋₁ そう・見える・ほど
 ~J₁₋₁ そう・ほど 2-2
 ~M₃₋₂ そう・感じ
 K₁₀₋₂ かねない 3-5
 D₄₋₁~ なる・かねない
 J₂₋₁~ でも・かねない
 J₃₋₁~ も・かねない
 ~ かねない 1-2
 K₁₁₋₁ である 1-1
 F₃₋₂~ もはや・である
 K₁₁₋₂ さ 1-1
 ~ さ

K₁₁₋₃ ではないか 3-3
 F₁₀₋₂F₁₋₁~ それでは・まるで・ではな
いか
 F₉₋₂J₈₋₁~ もし・…が…なら…は…
 ・ではないか
 F₄₋₆~D₅₋₄J₁₋₁ それこそ・ではないか・
 思われる・ほど
 K₁₁₋₄ と言っている 2-3
 D₃₋₄~ 形容する・と言っている
 F₃₋₃~ ほとんど・と言っている
 ~J₁₋₁ と言っている・ほど
 K₁₁₋₅ いうところだ 2-2
 ~ いうところだ 2-2
 K₁₁₋₆ いったところだ 1-1
 ~ いったところだ
 K₁₁₋₇ いうものだ 1-1
 ~ いうものだ
 K₁₁₋₈ にほかならない 1-1
 ~ にほかならない
 K₁₁₋₉ いうよりほかはない 1-1
 ~ いうよりほかはない
 K₁₁₋₁₀ にすぎない 8-12
 F₁₋₁~ まるで・にすぎない
 F₇₋₂~ 結局・にすぎない
 ~ にすぎない 8-10
 K₁₁₋₁₁ なんでも…と…ばまちがない
 1-1
 ~ なんでも…と…ばまちがない
 K₁₂₋₁ ではない 2-2
 F₁₁₋₂J₂₋₁~ なにも・でも・ではない
 ~ ではない
 K₁₂₋₂ ではあるまい 1-1
 F₁₁₋₁~ まさか・ではあるまい
 K₁₃₋₁ …はよかった 2-2
 ~ …はよかった 2-2

K₁₃₋₂ …とはよくも名付けた 1-1

F₁₋₁~D₁₋₂J₁₋₁ まるで…とはよくも名付けた・思う・ほど

M₁₋₁ やつ 4-4

~ やつ 2-2 (奴 2-2)

S₉₋₂~ …という・やつ 2-2

M₁₋₂ もの 37-210

D₃₋₁J₁₋₂~ 言う・くらい・もの

D₁₋₃K₉₋₁~ 見る・よう・もの

F₁₀₋₁F₁₋₁K₉₋₁~ これでは・まるで・よう・もの

F₁₋₁K₉₋₁~ まるで・よう・もの 5-11

F₁₋₄K₉₋₁~ ちょうど・よう・もの

F₂₋₁K₉₋₁~ いわば・よう・もの 3-3

F₂₋₂K₉₋₁~ 言えば・よう・もの

F₂₋₂K₉₋₃~ 言えば・みたい・もの

F₃₋₃K₉₋₁~ まあ・よう・もの

F₄₋₁K₉₋₁~ まさに・よう・もの 1-2

F₇₋₁K₉₋₃~ つまり・みたい・もの

F₇₋₃K₉₋₁~ 要するに・よう・もの

F₈₋₁K₉₋₁~ なにか・よう・もの 3-3

F₃₋₃K₁₋₁K₉₋₁~ ほとんど・近い・よう・もの

F₂₋₁R₄₋₁K₉₋₃~ いわば・一種の・みたい・もの

J₂₋₁S₉₋₂K₉₋₁~ でも・…という・よう・もの

K₁₋₃~ 同じ・もの

K₉₋₁~ よう・もの 33-148

K₉₋₂~ ごとし・もの 3-3

K₉₋₃~ みたい・もの 12-22

K₉₋₄~ らしい・もの

K₁₋₃K₉₋₁~ 同じ・よう・もの

R₄₋₁K₉₋₁~ 一種の・よう・もの

R₄₋₁K₉₋₁~J₃₋₄D₁₋₁ 一種の・よう・もの

・さえ・感じる

S₉₋₂K₉₋₁~ …という・よう・もの

M₁₋₃ 代物 1-1

F₃₋₇D₃₋₁K₇₋₁K₉₋₁~ むしろ・言う・ふさ
わしい・よう・代物

M₁₋₄ こと 9-29

F₃₋₁₁J₁₋₂~ せいぜい・くらい・こと

F₂₋₇K₁₋₃~ たとえば・同じ・こと

F₄₋₂K₁₋₃~ まったく・同じ・こと

J₃₋₁K₁₋₃~ も・同じ・こと 2-2

J₃₋₃K₁₋₃~ だって・同じ・こと

K₁₋₃K₉₋₁~ 同じ・よう・こと

K₁₋₃~ 同じ・こと 3-10

K₉₋₁~ よう・こと 6-10

K₉₋₃~ みたい・こと 2-2

M₁₋₅ まね 2-4

K₉₋₁~ よう・まね 2-3

K₉₋₃~ みたい・まね

M₁₋₆ わけ 1-1

F₇₋₁S₉₋₂~ つまり・…という・わけ

M₂₋₁ ようす 2-2

F₁₋₁J₂₋₁K₉₋₁~ まるで・でも・よう・
ようす

F₁₋₃J₂₋₁~ あたかも・でも・ようす

M₂₋₂ 気配 1-1

K₉₋₁~ よう・気配

M₂₋₃ ありさま 1-1

~ ありさま

M₂₋₄ おもむき 7-8

F₁₋₅~ いかにも・おもむき 2-2

F₃₋₁₂S₉₋₂~ いささか・…という・おもむき

K₉₋₁~ よう・おもむき 3-3

~ おもむき

S₉₋₂K₉₋₁~ …という・よう・おもむき

M₂₋₅ 風情 2-3K₉₋₁~ よう・風情S₉₋₂~ …という・風情 1-2M₂₋₆ ふう 12-22F₁₋₃~ あたかも・ふうF₁₋₃S₉₋₂~ あたかも・…という・ふう
1-2K₉₋₁~ よう・ふう 3-3K₉₋₃~ みたい・ふうS₉₋₂~ …という・ふう 9-15M₂₋₇ ^い態 1-1~ 態M₂₋₈ 状態 2-3K₉₋₁~ よう・状態 2-3M₂₋₉ 観 1-1K₉₋₁~ よう・観M₂₋₁₀ 概 1-1F₄₋₁~ まさに・概M₂₋₁₁ ぐあい 8-14F₁₋₁K₉₋₁~ まるで・よう・ぐあい 2-2F₁₋₃K₉₋₁~ あたかも・よう・ぐあい 2-2F₁₋₁~ まるで・ぐあい 1-2K₁₋₃~ 同じ・ぐあいK₉₋₁~ よう・ぐあい 2-2~ ぐあいS₉₋₂K₉₋₁~ …という・よう・ぐあい 2-2S₉₋₂~ …という・ぐあい 2-2M₂₋₁₂ あんばい 1-2K₉₋₁~ よう・あんばい~ あんばいM₂₋₁₃ 調子 6-8K₉₋₁~ よう・調子 5-7S₉₋₂~ …という・調子M₂₋₁₄ 口調 1-1K₉₋₁~ よう・口調M₂₋₁₅ 姿勢 1-1~ 姿勢M₂₋₁₆ 形 18-33F₁₋₁~ まるで・形F₃₋₆S₉₋₂~ まあ…という・形K₉₋₁~ よう・形 9-12~ 形 12-18S₉₋₂~ …という・形M₂₋₁₇ かつこう 6-6F₁₋₄K₉₋₁~ ちょうど・よう・かつこうK₉₋₁~ よう・かつこう 3-3S₉₋₂K₉₋₁~ …という・よう・かつこうS₉₋₂~ …という・かつこうM₂₋₁₈ 顔 1-1S₉₋₂~ …という・顔M₂₋₁₉ 顔つき 1-1S₉₋₂~ …という・顔つきM₂₋₂₀ おもかげ 1-1~ おもかげM₂₋₂₁ 色 3-8~ 色 3-8M₂₋₂₂ 形式 1-1~ 形式M₂₋₂₃ 図 1-1S₉₋₂K₉₋₁~ …という・よう・図M₃₋₁ 感 2-2F₁₋₁K₉₋₁R₄₋₁~ まるで・よう・一種の感~ 感M₃₋₂ 感じ 25-92D₁₂₋₁K₉₋₁~ 似る・よう・感じF₁₋₁K₉₋₁~ まるで・よう・感じ 4-4F₆₋₁K₁₀₋₁~ 今にも・そう・感じF₁₋₁~ まるで・感じF₈₋₁~ なにか・感じF₈₋₅~ どこか・感じ

- J₁₋₁〜 ほど・感じ
 J₁₋₅S₉₋₂〜 というより…という・感じ
 K₉₋₁〜 よう・感じ 16-41
 K₁₀₋₁〜 そう・感じ
 ~ 感じ 14-28
 ~D₅₋₉ 感じ・見える
 S₉₋₂K₉₋₁〜 …という・よう・感じ 3-3
 S₂₋₁〜 …的・感じ
 S₉₋₂〜 …という・感じ 4-5
 S₂₋₁〜J₁₋₁ …的・感じ・ほど
 M₃₋₃ 感触 2-2
 F₁₋₁K₉₋₁〜 まるで・よう・感触
 K₉₋₁〜 よう・感触
 M₃₋₄ 気 11-22
 F₈₋₃K₉₋₁〜 なにやら・よう・気 1-2
 J₂₋₁〜 でも・気
 K₉₋₁〜 よう・気 8-16
 ~ 気 3-3
 M₃₋₅ 気持ち 25-89
 F₃₋₁₁J₁₋₂〜 せいぜい・くらい・気持ち
 F₁₋₁K₉₋₁〜 まるで・よう・気持ち 2-2
 F₁₋₄K₉₋₁〜 ちょうど・よう・気持ち
 F₃₋₈K₉₋₁〜 半分・よう・気持ち
 F₈₋₁K₉₋₁〜 なにか・よう・気持ち 2-2
 F₄₋₂〜 まったく・気持ち
 F₈₋₁〜 なにか・気持ち
 J₂₋₁K₉₋₁〜 でも・よう・気持ち 3-3
 J₁₋₁〜 ほど・気持ち
 K₁₋₃〜 同じ・気持ち
 K₉₋₁〜 よう・気持ち 20-56
 K₉₋₃〜 みたい・気持ち 2-3
 ~ 気持ち 7-14
 R₃₋₂J₁₋₂〜 ほんの・くらい・気持ち
 S₉₋₂〜 …という・気持ち

- M₃₋₆ 気分 5-10
 J₂₋₁K₉₋₁〜 でも・よう・気分
 K₉₋₁〜 よう・気分 5-9
 M₃₋₇ 心持ち 9-29
 F₂₋₇J₂₋₁K₉₋₁〜 たとえば・でも・よう・心持ち
 F₈₋₃K₉₋₁〜 なにやら・よう・心持ち 2-5
 J₃₋₁K₉₋₁〜 も・よう・心持ち
 K₉₋₁〜 よう・心持ち 8-21
 ~ 心持ち
 M₃₋₈ 心地 3-4
 K₉₋₁〜 よう・心地 2-2
 ~ 心地 2-2
 M₃₋₉ 心 3-7
 K₉₋₁〜 よう・心 3-7
 M₃₋₁₀ 思い 20-60
 F₁₋₁K₉₋₁〜 まるで・よう・思い
 F₁₋₂K₉₋₁〜 さながら・よう・思い
 J₁₋₁〜 ほど・思い
 J₁₋₃〜 ばかり・思い
 J₂₋₁〜 でも・思い
 J₃₋₁〜 も・思い
 K₉₋₁〜 よう・思い 10-13
 ~ 思い 14-39
 ~J₁₋₁ 思い・ほど
 S₉₋₂〜 …という・思い
 M₃₋₁₁ 感慨 1-1
 ~ 感慨
 M₃₋₁₂ つもり 4-6
 F₁₋₁J₂₋₁〜 まるで・でも・つもり
 F₁₋₁〜 まるで・つもり
 K₉₋₁〜 よう・つもり
 ~ つもり 3-3
 M₃₋₁₃ 印象 4-4
 F₄₋₂〜 まったく・印象

K₉₋₁～ よう・印象 2-2
 ～ 印象
 M₄₋₁ 役目 5-5
 K₁₋₃～ 同じ・役目
 K₉₋₁～ よう・役目
 ～ 役目 3-3
 M₄₋₂ 役割 1-1
 ～ 役割
 M₄₋₃ 模型 1-1
 ～ 模型
 M₄₋₄ 代わり 4-4
 F₂₋₄～ 言ってみるなら・代わり
 ～ 代わり 3-3
 M₅₋₁ たぐい 1-1
 ～ たぐい
 M₅₋₂ 一種 1-1
 F₂₋₁～ いわば・一種
 M₆₋₁ 類似 1-1
 ～ 類似
 M₆₋₂ 相似 1-1
 D₁₁₋₂R₄₋₁～ 思い浮かべる・一種の・相似
 M₇₋₁ 比喩 1-1
 ～ 比喩
 M₇₋₂ たとえ 2-2
 ～ たとえ
 ～D₁₁₋₁ たとえ・思い出す
 M₈₋₁ 錯覚 6-8
 K₉₋₁～ よう・錯覚 6-8
 R₁₋₁ へたな 1-1
 ～J₁₋₄ へたな・より
 R₁₋₂ どんな 1-1
 ～J₂₋₁K₉₋₁ どんな・でも・よう
 R₂₋₁ 大した 1-1
 ～K₂₋₇ 大した・変わらない
 R₂₋₂ なんの 1-1

～K₂₋₇ なんの・変わらない
 R₃₋₁ いわゆる 5-5
 ～ いわゆる 4-4
 ～K₉₋₁ いわゆる・よう
 R₃₋₂ ほんの 3-3
 ～J₁₋₁ ほんの・ほど
 ～J₁₋₂M₃₋₅ ほんの・くらい・気持ち
 ～K₉₋₁ ほんの・よう
 R₃₋₃ ほんとの 1-1
 ～ ほんとの
 R₄₋₁ 一種の 14-33
 D₁₁₋₂～M₆₋₂ 思い浮かべる・一種の・相
 似
 F₁₋₁K₉₋₁～M₃₋₁ まるで・よう・一種の
 ・感
 F₇₋₂～ 結局・一種の
 F₂₋₁～K₉₋₁M₁₋₂ いわば・一種の・みた
 い・もの
 ～ 一種の 8-13
 ～D₃₋₃ 一種の・呼ぶ
 ～D₁₂₋₁ 一種の・似る
 ～K₉₋₁ 一種の・よう 4-5
 ～K₉₋₃ 一種の・みたい
 ～K₉₋₁M₁₋₂ 一種の・よう・もの
 ～K₉₋₁M₁₋₂J₃₋₄D₁₋₁ 一種の・よう・もの
 ・さえ・感じる
 ～S₁₋₆ 一種の・…状態
 ～S₁₋₈ 一種の・…性
 ～S₂₋₁ 一種の・…的 2-3
 ～S₉₋₄ 一種の・…として
 R₄₋₂ ある種の 1-1
 ～ ある種の
 R₄₋₃ 一つの 1-1
 ～ 一つの
 R₄₋₄ 第二の 1-1

～ 第二の
 R₅₋₁ 小… 1-2
 ～ 小…
 ～S₁₋₃ 小……式
 S₁₋₁ …もの 2-2
 ～ …もの 2-2
 S₁₋₂ …色 9-31
 ～ …色 9-31
 S₁₋₃ …式 3-3
 R₅₋₁～ 小……式
 ～ …式 2-2
 S₁₋₄ …なり 2-2
 ～ …なり 2-2
 S₁₋₅ …状 2-3
 ～ …状 2-2
 ～K₉₋₁ …状・よう
 S₁₋₆ …状態 4-7
 R₄₋₁～ 一種の……状態
 ～ …状態 4-6
 S₁₋₇ …様 1-1
 ～ …様
 S₁₋₈ …性 2-5
 R₄₋₁～ 一種の……性
 ～ …性 2-3
 ～S₅₋₃ …性……じみる
 S₁₋₉ …役 3-6
 ～ …役 3-6
 S₁₋₁₀ …ふう 12-23
 ～ …ふう 12-22
 ～D₁₃₋₆ …ふう・ままある
 S₁₋₁₁ …づら 3-4
 ～ …づら 3-4
 S₁₋₁₂ …はだ 1-1
 ～ …はだ
 S₁₋₁₃ …ばり 1-1

～ …ばり
 S₁₋₁₄ …なみ 1-4
 ～D₁₋₃ …なみ・考える
 ～D₁₋₁₅ …なみ・扱う
 ～ …なみ
 ～S₄₋₃ …なみ…扱い
 S₁₋₁₅ …格 1-2
 ～ …格 1-2
 S₁₋₁₆ …級 1-1
 F₁₋₁～ まるで……級
 S₁₋₁₇ …大 1-1
 ～ …大
 S₁₋₁₈ …程度 2-6
 ～ …程度 2-6
 S₁₋₁₉ …以上 3-3
 ～ …以上 3-3
 S₁₋₂₀ …型 7-16
 ～ …型 7-16
 S₁₋₂₁ …形 1-4
 ～ …形 1-4
 S₁₋₂₂ …気分 1-1
 ～ …気分
 S₂₋₁ …的 18-95
 R₄₋₁～ 一種の……的 2-3
 ～ …的 18-90
 ～M₃₋₂ …的・感じ
 ～M₃₋₂J₁₋₁ …的・感じ・ほど
 S₃₋₁ …化 3-4
 ～ …化 3-4
 S₄₋₁ …気どり 1-1
 ～ …気どり
 S₄₋₂ …紛い 2-2
 ～ …紛い 2-2
 S₄₋₃ …扱い 5-12
 F₁₋₁～ まるで……扱い

~ …扱い 4-10
 S₁₋₁₄ ~ …なみ・…扱い
 S₄₋₄ …代わり 3-3
 ~ …代わり 3-3
 S₅₋₁ …めく 8-11
 ~ …めく 8-11
 S₅₋₂ …びる 1-1
 ~ …びる
 S₅₋₃ …じみる 16-49
 ~ …じみる 16-44
 ~D₅₋₉ …じみる・見える 2-3
 ~J₁₋₁ …じみる・ほど
 S₁₋₈ ~ …性・…じみる
 S₅₋₄ …なす 2-2
 ~ …なす 2-2
 S₆₋₁ …ほい 10-16
 ~ …ほい 10-16
 S₆₋₂ …くさい 1-1
 ~ …くさい
 S₇₋₁ …そっくり 8-9
 ~ …そっくり 8-9
 S₇₋₂ …同様 6-8
 ~ …同様 6-8
 S₇₋₃ …同然 6-6
 F₃₋₆ ~ まあ・…同然
 ~ …同然 5-5
 S₈₋₁ …そのまま 3-3
 ~ …そのまま 3-3
 S₈₋₂ …さながら 4-7
 F₁₋₁ ~ まるで・…さながら 2-2
 F₁₋₃ ~K₉₋₁D₆₋₁ あたかも・…さながら
 ・よう・気がする
 ~ …さながら 2-3
 ~K₉₋₁D₅₋₄ …さながら・よう・思われる
 S₃₋₃ …よろしく 2-3

F₁₋₁ ~ まるで・…よろしく
 J₃₋₁ ~ も・…よろしく
 ~ …よろしく
 S₉₋₁ …たる 1-1
 ~ …たる
 S₉₋₂ …という 26-123
 F₁₋₁D₁₋₁₆J₂₋₁~K₉₋₁ まるで・する・で
も・…という・よう
 F₁₋₁J₂₋₁~K₉₋₁ まるで・でも・…という
 ・よう
 F₂₋₁ ~ いわば・…という
 F₁₋₂~K₉₋₁ さながら・…という・よう
 F₂₋₁~K₉₋₁ いわば・…という・よう
 F₁₋₃~M₂₋₆ あたかも・…という・ふう
 1-2
 F₃₋₁₂~M₂₋₄ いささか・…という・おも
むき
 F₇₋₁~M₁₋₆ つまり・…という・わけ
 F₃₋₆~M₂₋₁₆ まあ・…という・形
 J₁₋₅F₂₋₁~K₉₋₁ というより・いわば・…
という・よう
 J₂₋₁ ~ でも・…という
 J₂₋₁~K₉₋₁ でも・…という・よう 3-4
 J₂₋₁~K₉₋₁M₁₋₂ でも・…という・よう
 ・もの
 J₁₋₅~M₃₋₂ というより・…という・感
じ
 ~ …という 8-53
 ~D₆₋₁ …という・気がする
 ~D₆₋₁J₁₋₂ …という・気がする・くらい
 ~J₁₋₁ …という・ほど
 ~K₉₋₁ …という・よう 4-6
 ~K₉₋₁M₁₋₂ …という・よう・もの
 ~K₉₋₁M₂₋₄ …という・よう・おもむき
 ~K₉₋₁M₂₋₁₁ …という・よう・ぐあい

2-2

~K₉₋₁M₂₋₁₇ …という・よう・かっこう~K₉₋₁M₂₋₂₃ …という・よう・図~K₉₋₁M₃₋₂ …という・よう・感じ 3-3~M₁₋₁ …という・やつ 2-2~M₂₋₅ …という・風情 1-2~M₂₋₆ …という・ふう 9-15~M₂₋₁₁ …という・ぐあい 2-2~M₂₋₁₃ …という・調子~M₂₋₁₆ …という・形~M₂₋₁₇ …という・かっこう~M₂₋₁₈ …という・顔~M₂₋₁₉ …という・顔つき~M₃₋₂ …という・感じ 4-5~M₃₋₅ …という・気持ち~M₃₋₁₀ …という・思い~M₂₋₆D₅₋₉ …という・ふう・見えるS₉₋₃ …という名の 1-1~ …という名のS₉₋₄ …として 7-11R₄₋₁~ 一種の…として~ …として 6-9~D₅₋₁₇ …として・印象づけられるS₁₀₋₁ …そのもの 11-15~ …そのもの 10-12~D₄₋₂ …そのもの・化す~D₅₋₉ …そのもの・見える~K₉₋₁ …そのもの・ようS₁₁₋₁ …ひとつ 1-2~ …ひとつ 1-2

4.32 指標要素種別

〔作り方〕

- 1) 比喩指標要素を種レベル (D₃, F₃, K₃ ナド) でまとめ、「比喩指標要素一覧」の配列順に取りあげる。
例: D₁, D₂, D₃ …… F₁, F₂ …… J₁, J₂ ……
- 2) 種ごとに代表的な比喩指標要素 (「比喩指標要素一覧」中にカタカナ表記で掲げたもの) を添える。
例: D₁ 感ジル・タトエル
- 3) その種の比喩指標要素の用いられた比喩指標を3.1の指標比喩の分類結果の配列順に従って列挙する。
例: つまり いずれ・よう 結局・にすぎない つまり・みたい・もの 要するに・よう・もの 結局・一種の つまり・…という・わけ
- 4) 列挙された各比喩指標に、その性格・位置を示す記号・番号を種レベルで添える。
例: F₂～ いわば・一種 ～ たぐい ～D₃ 感じ・見える
- 5) 列挙された各比喩指標の出現状況を表示する。
例: 一種の・…的2-3 …的・感じ(無表示は1-1) …的・感じ・ほど(同前)
- 6) 各種の比喩指標要素の出現状況を、その含まれる各比喩指標の出現状況を総合して表示する。
例: D₃ 感ジラレル 39-328 S₃ ジミル 21-63

〔読み方〕

- 1) 最初の小番号つきアルファベットは、そこで取りあげた種の性格・位置の表示である。
例: F₂ (F類2種) M₃ (M類3種)
- 2) 次のカタカナ表記は、その種の代表的な比喩指標要素である。
例: K₁ 近イ・同ジ S₄ …紛イ
- 3) 次の数字はその種の出現状況(作品数-用例数)を示す。
例: D₁ 感ジル・タトエル 32-124 (「感じる」や「たとえる」で代表されるD類1種の比喩指標要素は32作品にわたって124例現れた)
- 4) 取りあげられた種ごとに列挙されている小番号つきアルファベットは、その種の比喩指標要素の現れた比喩指標の性格・位置の表示である。
例: F₁₀ ～F₁ ～F₁J₃K₂ ～F₁K₃ ～F₁K₁₁ ～F₁K₃M₁
(1) 「～」印は、そこで問題にしている種の代用表示である。
例: ～ ～F₃D₁₃ D₃～M₁
(2) 「～」だけの場あいは、その種の比喩指標要素が単独で用いられてその比喩指標を

成すことを表す。

- (3) 同一表示でも、その箇所によって、それぞれ別の比喩指標をさすことになる。

例：「 $\sim M_3$ 」は、 F_8 の部では $F_8 M_3$ すなわち「なにか・感じ」「なにか・気持ち」「どこか・感じ」をさし、 K_9 の部では $K_9 M_3$ すなわち「よう・気」「よう・気分」「みたい・気持ち」などをさす。

- (4) 次が、その種の比喩指標要素を含む比喩指標（下線部がその種の比喩指標要素）で、直前の記号表示がさす具体的な言語形式を掲げたものである。

例： $F_1 S_9 \sim$ あたかも・…という・ふう

- (5) 次の数字は、その比喩指標の出現状況である。

例： $F_3 \sim$ ほとんど・よう 8-11

〔使い方〕

- 1) ある種の比喩指標要素がどのぐらい現れたかを調べる。

例： F 類 8種の比喩指標要素は何作品に何例現れたか？

アルファベット順-番号順に配列されていることを利用し、 F_8 の部を引くと、「27-88」とあるので、「ナンダカ」で代表されるこの種の比喩指標要素は、27作品にわたって、延べ88例採集されたことがわかる。

- 2) ある比喩指標要素の属する種がどのぐらい現れたかを調べる。

例： 「連想させる」のグループは何作品に何例現れたか？

「比喩索引」で「連想させる」を引くと「 D_{7-8} 」とあるので、この「比喩指標要素種別出現状況」の D 類7種の部を見ると、「 D_7 感シサセル 19-61」とあるので、「連想させる」の属する種が全体として19作品にわたって61例採集されたことがわかる。

- 3) ある種の比喩指標要素がどんな比喩指標に現れたかを調べる。

例： F 類7種の比喩指標要素はどんな比喩指標要素とどう結びついて現れるか？

アルファベット順の配列を利用して F 類の部を開き、番号順を利用して F_7 の箇所を見つけて、そこに列挙されている比喩指標を調べると、次のような情報が得られる。

「つまり」「要するに」が単独で使われたほか、「いずれ・よう」「結局・にすぎない」「つまり・みたい・もの」「要するに・よう・もの」「結局・一種の」「つまり・…という・わけ」という組みあわせで出現した。

- 4) ある種の比喩指標要素がどんな比喩指標によく現れるかを調べる。

例： J 類2種の比喩指標要素を含む比喩指標のうち、よく使われるのはどんなものか？

アルファベット順-番号順に「 J_2 」の箇所を引きだし、そこに列挙されている比喩指標の出現状況を比べると、次のような情報が得られる。

「 $\sim K_9$ 」でも・よう 30-104」と「 $F_1 \sim K_9$ 」まるで・でも・よう 16-44」とが圧倒的に多く、ほかには、「 $F_8 \sim K_9$ 」の「なにか・でも・よう 7-13」と「あたかも・でも

・よう 4-10」や、単独の「でも 5-9」, 「 $\sim K_9$ 」の「かなにか・よう 4-7」と「かな(ん)ぞ・よう 4-5」, 「 $\sim K_{10}$ 」の「でも・そう 4-6」などが目だつ。

5) ある種の比喩指標要素がどんな実現形でよく現れるかを調べる。

例: M類1種の比喩指標要素はどんな実現形で現れることが多いか?

アルファベット順-番号順に M_1 の箇所を引きだして、そこに列挙されている各比喩指標の出現状況を調べ、そのうち多用される指標について、指標比喩の分類結果でその実現形ごとの内わけを見ると、次の情報が得られる。

「ようなもの 29-141」が際だつて多く、ほかに、「みたいなもの 7-14」「まるで・ようなもの 5-11」「と同じこと 3-9」「ようなこと 5-8」などが目につく。

6) ある類の比喩指標要素のうち、どの種の比喩指標要素がよく使われるかを調べる。

例: S類のうち、出現幅ではどの種が、出現度ではどの種が、それぞれ上位を占めるか?

アルファベット順でS類の部を開き、各種の出現状況を比べると、次のような情報が得られる。

作品数・用例数ともに、「…タル」で代表される〔同格〕の S_9 (27-136) が最高で、次が「…バリ」で代表される S_1 (24-127) となり、第3位と第4位は、作品数では「…ジミル」で代表される S_3 (21-63), 「…的」の S_2 (18-95) の順になり、用例数ではその逆の順位になる。

D₁ 感₁ジル・タトエル 32-124

～ 感じる 3-4

思う 7-12

考える

受け取る

見る 2-4

見立てる

たとえる 5-11

なぞらえる

諷喩する

する 3-6

～J₁ 思う・ほど 3-3

紛う・ほど

～J₁K₉D₅ 思う・ほど・よう・見える

～K₉ 思う・よう 1-2

見る・よう 3-3

たとえる・よう

～K₉D₅ 見る・よう・気がする

～K₉J₃D₅ 見る・よう・さえ・気がする

～K₉M₁ 見る・よう・もの

F₂～ たとえば・思う

F₁～ まるで・受けとる

F₁～J₁ まるで・受けとる・くらい

F₉～J₂D₃ 仮に・たとえる・でも・言う

F₁～J₂S₉K₉ まるで・する・でも・…と

いう・よう

F₁～K₉ まるで・見る・よう

F₁J₂K₉～ さも・でも・よう・感じる

F₁J₂K₉～ まるで・でも・よう・思う

F₁K₉～ まるで・よう・思う

いかにも・よう・思う

あたかも・ごとし・眺める

あたかも・よう・見せかける
 F₈K₉～ なにか・よう・思う
 なにやら・よう・思う
 F₁K₁₃～J₉ まるで…とはよくも名付けた
 ・思う・ほど
 J₃～ まで・思う
 も・たとえる
 まで・なぞらえる
 J₃～K₉ も・見る・よう
 J₈F₉～ というものは・つくづく・思う
 J₂K₉～ かなにか・よう・感じる
 でも・よう・思う
 かなにか・よう・思う
 かな(ん)ぞ・よう・扱う
 K₉～ よう・感じる 7-15
 ごとし・感じる 1-3
 よう・思う 7-10
 よう・考える 2-2
 よう・心得る
 よう・錯覚する 1-2
 よう・見る 3-3
 よう・眺める 1-2
 K₉J₃～ よう・さえ・感じる
 よう・も・思う
 よう・さえ・思う
 R₄K₉M₁J₃～ 一種の・よう・もの・さえ
 ・感じる
 S₁～ …なみ・考える
 …なみ・扱う
 D₂ 比較スル 1-2
 ～ 比較する
 ～J₁ 比する・ほど
 D₃ 呼ブ 15-27
 ～ 言い直す
 形容する

～J₁ 言う・ほど 2-2
 形容する・ほど
 ～J₁M₁ 言う・くらい・もの
 ～K₁₁ 形容する・と言っていい
 ～K₉D₆ 言う・よう・気がする
 F₂～ 言えば・言う
 いわば・形容する
 F₉D₁J₂～ 仮に・たとえる・でも・言う
 F₃～K₇K₉M₁ むしろ・言う・ふさわし
 い・よう・代物
 F₃J₃～ ほとんど・も・言う
 J₃～ も・言う 3-9
 も・呼ぶ
 J₂～J₁ でも・言う・ほど
 J₃～J₁ も・言う・ほど
 J₁F₉～ というより・むしろ・言う
 R₄～ 一種の・呼ぶ
 D₄ ナル 14-53
 ～ なる 9-42
 化す 5-6
 変わる 2-2
 ～K₁₀ なる・かねない
 J₂～ でも・なる
 S₁₀～ …そのもの・化す
 D₅ 感ジラレル 39-328
 ～ 感じられる 3-4
 思われる 3-5
 考えられる
 見える 9-11
 響く
 D₁₂～ 似通う・見える
 D₁₃～ 類する・見える
 ～J₁ 思われる・ほど 4-4
 思われる・くらい
 疑われる・ほど 2-2

疑われる・くらい
 見える・ほど
 D₁J₁K₉～ 思う・ほど・よう・見える
 ～K₉ 感じられる・よう
 ～K₉D₆ 見える・よう・気がする
 D₁2K₉～ 似る・よう・思える
 F₁～ まるで・見える 2-2
 F₄～ ほんとうに・疑われる
 どう見ても・見える
 F₈～ なにやら・思える
 F₁₄～ を見ると・感じられる
 F₁～J₁ まるで・思われる・ほど
 F₄F₁K₉～ まったく・まるで・よう・見
える
 F₁J₃～ ちょうど・さえ・思われる
 F₁J₂K₉～ まるで・でも・よう・見える
 F₄J₂K₉～ ほんとうに・でも・よう・見
える
 F₁K₉～ まるで・よう・感じられる 2-2
 ちょうど・よう・感じられる
 まるで・よう・思われる
 まるで・よう・考えられる
 まるで・よう・見える 4-4
 まるで・みたい・見える
 あたかも・よう・見える 3-5
 あたかも・よう・見なされる
 F₂K₉～ いわば・よう・思われる
 いわば・よう・見える
 F₆K₁₀～ 今にも・そう・思われる
 F₈K₉～ なにやら・よう・思われる
 どこやら・よう・思われる
 なにか・よう・見える 2-2
 なにやら・よう・見える
 どこか・らしい・見える
 F₄K₁₁～J₁ それこそ・ではないか・思わ

れる・ほど
 F₁K₉J₃～ まるで・よう・さえ・見える
 J₁～ ほど・感じられる
 というより・感じられる
 J₃～ も・思える
 も・思われる 2-2
 も・見える 2-3
 J₂～K₉ でも・思われる・よう 1-2
 J₁K₉～ というより・よう・思える
 J₂K₉～ など・よう・思われる
 かなにか・よう・思われる
 でも・よう・錯覚される
 でも・よう・見える
 K₂～ 同様・思われる
 K₉～ よう・感じられる 10-21
 ごとし・感じられる
 よう・覚える
 よう・思える 9-10
 みたい・思える
 よう・思われる 18-61
 よう・とれる
 よう・錯覚される 1-2
 よう・見える 25-92
 みたい・見える 2-2
 よう・見られる
 よう・眺められる 2-3
 よう・眼に映る 3-3
 よう・映る
 よう・聞こえる 2-2
 よう・扱われる
 K₁₀～ そう・感じられる
 そう・思える 1-2
 そう・思われる
 そう・見える 4-4
 K₁₀～J₁ そう・思える・ほど

そう・見える・ほど
 K₉J₃〜 よう・も・感じられる 2-2
 よう・さえ・思える 2-2
 よう・すら・思われる
 よう・も・錯覚される
 よう・も・見える 5-7
 よう・さえ・見える 2-2
 ごとし・も・見える
 M₃〜 感じ・見える
 S₉〜 …じみる・見える 2-3
 S₉〜 …として・印象づけられる
 S₁₀〜 …そのもの・見える
 S₉K₉〜 …さながら・よう・思われる
 S₉M₂〜 …という・ふう・見える
 D₆ 気ガスル 38-223
 ~ 気がする 12-20
心地がする
 D₁K₉〜 見る・よう・気がする
 D₃K₉〜 言う・よう・気がする
 D₉K₉〜 見える・よう・気がする
 D₁K₉J₃〜 見る・よう・さえ・気がする
 F₁D₁₂K₉〜 あたかも・似る・よう・心
持がする
 F₀J₂K₉〜 なにか・でも・よう・気がす
る
 F₁K₉〜 まるで・よう・気がする 3-4
 あたかも・よう・気がする
 F₃K₉〜 ほとんど・よう・気がする
 F₄K₉〜 まったく・よう・気がする
 F₆K₉〜 今にも・よう・気がする
 F₆K₁₀〜 今にも・そう・気がする
 F₀K₉〜 なにか・よう・気がする
 なにやら・よう・気がする 2-2
 なんだか・よう・気がする 8-12
 F₁S₉K₉〜 あたかも・…さながら・よう

・気がする
 J₂〜 でも・気がする
 J₂K₉〜 でも・よう・気がする 2-2
 K₉〜 よう・気がする 31-156
 みたい・気がする 3-3
 よう・心地がする
 K₉J₃〜 よう・も・気がする 4-4
 よう・さえ・気がする
 K₄K₉J₃〜 同類・よう・さえ・気がする
 S₉〜 …という・気がする
 S₉〜 J₁ …という・気がする・くらい
 D₇ 感ジサセル 19-61
 ~ 感じさせる 2-2
思わせる 12-25
思い出させる 1-2
思い起こさせる 3-3
思い浮かべさせる
想像させる
空想させる
連想させる 5-7
髣髴させる
象徴する
 ~ J₁ 思わせる・ほど
 ~ K₉ 思わせる・よう 2-5
思い出させる・よう
連想させる・よう
 F₁〜 さながら・思わせる
 まるで・連想させる 2-2
 F₃〜 ほとんど・思わせる
 F₉〜 なにか・思わせる 2-2
 どことなく・思わせる
 K₉〜 よう・感じさせる
 よう・錯覚させる
 D₈ 見イダス 1-1
 ~ 見いだす

D₉ 思イ合ワサレル 2-3

～ 思い合わされる
髣髴とする 1-2

D₁₀ 想像サレル 1-1

～ 想像される

D₁₁ 連想スル 12-22

～ 思い出す 9-10

思い浮かべる

想像する 3-4

連想する 3-3

～F₃D₁₃ 想像する・ほぼ・当たる

～R₄M₆ 思い浮かべる・一種の・相似

F₁₄～ を見たら・思い出す

M₇～ たとえ・思い出す

D₁₂ 似ル 26-116

～ 似る 21-75

似通う 2-3

通じる 2-2

一派通じる 1-2

共通する

比較される

～D₈ 似通う・見える

～J₁ 似る・くらい

～K₉D₅ 似る・よう・思える

～K₉M₃ 似る・よう・感じ

F₁～ まるで・似る

あたかも・似る 3-3

ちょうど・似る

あたかも・相似る

F₂～ たとえに言うが・似る

例をとれば・通じる

F₃～ ほとんど・似る 2-3

F₆～ どこか・似る 2-3

どことなく・似る

F₁～K₅D₆ あたかも・似る・よう・心持

がする

F₂J₅～ たとえば・も・似る

J₃～ も・似る 7-10

R₄～ 一種の・似る

D₁₃ 相当スル・類スル 10-16

～ 当たる 2-2

相当する

よくある 1-2

～D₅ 類する・見える

D₁₁F₃～ 想像する・ほぼ・当たる

～K₉ 類する・よう

F₁₆～ なら・よくある

F₁₈～ …という…があるが・当てはまる

F₁K₁～ ちょうど・同じ・当たる

J₃～ も・当たる 3-3

だって・相当する

S₁～ …ふう・ままある

D₁₄ 劣ル 1-1

J₃～ も・劣る

D₁₅ 違ウ 1-1

～ 違う

D₁₆ 成ス 4-5

～ 成す 4-5

D₁₇ 做ウ 1-1

～ ならう

D₁₈ 例ニスル 1-1

～ 例にする

F₁ マルデ 38-520

～ まるで 13-18

さながら 2-2

ちょうど

～D₁ まるで・受けとる

～D₅ まるで・見える 2-2

～D₇ まるで・連想させる 2-2

さながら・思わせる

~D₁₂ まるで・似る
 あたかも・似る 3-3
 あたかも・相似る
 ちょうど・似る
 ~D₁J₁ まるで・受けとる・くらい
 ~D₅J₁ まるで・思われる・ほど
 ~D₁J₂S₉K₉ まるで・する・でも・…と
 いう・よう
 ~D₁K₉ まるで・見る・よう
 ~D₁₂K₉D₆ あたかも・似る・よう・心
 持がする
 F₁₀~ それじゃ・まるで
 ~J₃K₉ まるで・まるで・でも・よう
 F₁₀~J₃K₃ これでは・まるで・も・同然
 ~F₈K₉ まるで・なにか・よう
 F₁₀~K₉ あれじゃ・まるで・みたい
 F₁₀~K₁₁ それでは・まるで・ではない
 か
 F₄~K₉D₅ まったく・まるで・よう・見
 える
 F₁₀~K₉M₁ これでは・まるで・よう・
 もの
 ~J₁ まるで・ほど 1-3
 まるで・くらい
 まるで・ばかり
 あたかも・ほど
 ちょうど・ほど
 いかにも・ばかり
 ~J₂ まるで・でも
 ~J₃D₅ ちょうど・さえ・思われる
 ~J₁K₉ まるで・でも・よう 16-44
 まるで・でも・みたい 2-3
 まるで・かなにか・よう
 あたかも・でも・よう 4-10
 あたかも・かなにか・よう

さも・でも・よう
 ~J₃K₁ まるで・も・同じ
 あたかも・も・等しい
 まるで・も・同様
 ~J₂K₉D₁ まるで・でも・よう・思う
 さも・でも・よう・感じる
 ~J₂K₉D₅ まるで・でも・よう・見える
 ~J₂K₉M₂ まるで・でも・よう・ようす
 ~J₂M₂ あたかも・でも・ようす
 ~J₂M₃ まるで・でも・つもり
 ~J₂S₉K₉ まるで・でも・…という・よ
 う
 ~K₁ まるで・同じ
 まるで・そっくりだ 2-2
 ~K₂ まるで・異なるない
 ちょうど・同程度
 ちょうど・一般
 ~K₉ まるで・よう 28-207
 まるで・みたい 12-24
 さながら・よう
 さながら・ごとし
 あたかも・よう 12-45
 あたかも・ごとし
 ちょうど・よう 12-29
 いかにも・よう
 さも・よう 2-3
 ~K₁₁ まるで・にすぎない
 ~K₁D₁₃ ちょうど・同じ・当たる
 ~K₉D₁ まるで・よう・思う
 あたかも・ごとし・眺める
 あたかも・よう・見せかける
 いかにも・よう・思う
 ~K₉D₅ まるで・よう・感じられる 2-2
 まるで・よう・思われる
 まるで・よう・考えられる

まるで・よう・見える 4-4
まるで・みたい・見える
あたかも・よう・見える 3-5
あたかも・よう・見なされる
ちょうど・よう・感じられる
 ～K₉D₆ まるで・よう・気がする 3-4
あたかも・よう・気がする
 ～K₁₃D₁J₁ まるで・…とはよくも名付け
 た・思う・ほど
 ～K₉J₅D₅ まるで・よう・さえ・見える
 ～K₁K₉ まるで・同じ・よう
ちょうど・同じ・よう 2-2
 ～K₉M₁ まるで・よう・もの 5-11
ちょうど・よう・もの
 ～K₉M₂ まるで・よう・ぐあい 2-2
あたかも・よう・ぐあい 2-2
ちょうど・よう・かっこう
 ～K₉M₃ まるで・よう・感じ 4-4
まるで・よう・感触
まるで・よう・気持ち 2-2
まるで・よう・思い
さながら・よう・思い
ちょうど・よう・気持ち
 ～K₉R₄M₃ まるで・よう・一種の・感
 ～M₂ まるで・ぐあい 1-2
まるで・形
あたかも・ふうに
いかにも・おもむき 2-2
 ～M₃ まるで・感じ
まるで・つもり
 ～S₁ まるで・…級
 ～S₄ まるで・…扱
 ～S₈ まるで・…さながら 2-2
まるで・…よろしく
 ～S₉K₉ さながら・…という・よう

～S₈K₉D₆ あたかも・…さながら・よう
 ・気がする
 ～S₉M₂ あたかも・…という・ふう 1-2
 F₂ イワバ 21-51
 ～ いわば 9-14
言ってみれば 2-2
たとえて言うなら
 ～D₁ たとえば・思う
 ～D₃ いわば・形容する
言えば・言う
 ～D₁₂ 例をとれば・通じる
たとえに言うが・似る
 ～J₃D₁₂ たとえば・も・似る
 ～J₂K₉M₃ たとえば・でも・よう・心持
 ち
 ～K₁ たとえて言うと・近い
 ～K₂ 言うたら・一つ
 ～K₉ いわば・よう 2-3
言えば・みたい
たとえば・よう 5-6
たとえて言えば・よう
 ～K₉D₅ いわば・よう・思われる
いわば・よう・見える
 ～K₁M₁ たとえば・同じ・こと
 ～K₉M₁ いわば・よう・もの 3-8
言えば・よう・もの
言えば・みたい・もの
 ～M₄ 言ってみるなら・代わり
 ～M₅ いわば・一種
 ～R₄K₉M₁ いわば・一種の・みたい・
 もの
 ～S₉ いわば・…という
 ～S₉K₉ いわば・…という・よう
 J₁～S₃K₉ というより・いわば・…とい
 う・よう

F₃ ホトンド 16-56

- ～ ほとんど 2-2
 D₁₁～D₁₃ 想像する・ほぼ・当たる
 ～D₇ ほとんど・思わせる
 ～D₁₂ ほとんど・似る 2-3
 ～D₃K₇K₉M₁ むしろ・言う・ふさわし
 い・よう・代物
 ～J₁ ほとんど・くらい 2-2
 ～J₃D₃ ほとんど・も・言う
 ～J₁M₁ せいぜい・くらい・こと
 ～J₁M₃ せいぜい・くらい・気持ち
 ～K₁ そっくり・同じ
 ほとんど・近い
 まず・似たり・よったり
 ～K₂ ほとんど・変わらない
 ほとんど・異なる・ない
 ～K₉ ほとんど・よう 8-11
 ほとんど・みたい
 半分・よう 2-9
 なかば・よう 2-2
 ただ・よう
 ～K₁₁ もはや・である
 ほとんど・と・言・って・いい
 ～K₉D₆ ほとんど・よう・気がする
 ～K₁J₁ ほとんど・等しい・くらい
 ～K₁K₉M₁ ほとんど・近い・よう・もの
 ～K₉M₁ まあ・よう・もの
 ～K₉M₃ 半分・よう・気持ち
 ～S₇ まあ・…・同然
 ～S₉M₂ まあ・…・という・形
 いささか・…・という・おもむき
 J₁～ という・より・むしろ 2-2
 J₁～D₃ という・より・むしろ・言う
 J₁～K₁ という・より・むしろ・近い

F₄ マサニ 16-40

- ～ まさに
 まったく 2-2
 実に 2-3
 ほんとうに 1-2
 ～D₃ ほんとうに・疑われる
 どう・見ても・見える
 ～F₁K₉D₅ まったく・まるで・よう・見
 える
 ～J₁ それこそ・ほど
 ～J₅ まったく・という・ものは
 ～J₃K₁ それこそ・も・等しい
 ～J₂K₉D₅ ほんとうに・でも・よう・見
 える
 ～K₁ まったく・同じ
 まったく・瓜二つ
 ほんとうに・そっくり・だ
 ～K₉ まさに・よう 3-4
 まったく・よう 3-5
 ほんとうに・よう
 ほんなこと・よう
 それこそ・よう
 それこそ・みたい
 文字通り・よう
 ～K₉D₆ まったく・よう・気がする
 ～K₁₁D₅J₁ それこそ・ではないか・思わ
 れる・ほど
 ～K₁M₁ まったく・同じ・こと
 ～K₉M₁ まさに・よう・もの 1-2
 ～M₂ まさに・概
 ～M₃ まったく・気持ち
 まったく・印象

F₅ ツクツク 1-1

J₅～D₁ という・ものは・つくづく・思う

F₆ 今ニモ 8-13

～K₉ 今にも・よう

- ~K₁₀ 今にも・そう 4-7
 あわや・そう
 ~K₉D₆ 今にも・よう・気がする
 ~K₁₀D₅ 今にも・そう・思われる
 ~K₁₀D₆ 今にも・そう・気がする
 ~K₁₀M₃ 今にも・そう・感じ
 F₇ ツマリ 7-12
 ~ つまり 4-4
 要するに 2-2
 ~K₉ いずれ・よう
 ~K₁₁ 結局・にすぎない
 ~K₉M₁ つまり・みたい・もの
 要するに・よう・もの
 ~R₄ 結局・一種の
 ~S₉M₁ つまり・…という・わけ
 F₈ ナンダカ 27-88
 ~D₅ なにやら・思える
 ~D₇ なにか・思わせる 2-2
 どことなく・思わせる
 ~D₁₂ どこか・似る 2-3
 どことなく・似る
 ~J₁ なんだか・ほど
 ~J₂K₉ なにか・でも・よう 7-13
 なにやら・でも・よう 1-2
 なんだか・でも・よう 2-2
 どこぞ・でも・よう
 ~J₂K₁₀ なにか・でも・そう
 ~J₂K₉D₆ なにか・でも・よう・気がする
 る
 ~K₉ なにか・よう 6-6
 なにか・みたい
 なにかしら・よう
 なんだか・よう 6-7
 なんだか・みたい 3-3
 どこか・よう

- どこか・みたい
 ~K₉D₁ なにか・よう・思う
 なにやら・よう・思う
 ~K₉D₃ なにか・よう・見える 2-2
 なにやら・よう・思われる
 なにやら・よう・見える
 どこか・らしい・見える
 どこやら・よう・思われる
 ~K₉D₆ なにか・よう・気がする
 なにやら・よう・気がする 2-2
 なんだか・よう・気がする 8-12
 ~K₉M₁ なにか・よう・もの 3-3
 ~K₉M₃ なにか・よう・気持ち 2-2
 なにやら・よう・気 1-2
 なにやら・よう・心持ち 2-5
 ~M₃ なにか・感じ
 なにか・気持ち
 どこか・感じ
 J₁~J₂K₉ というより・なにか・でも・
 よう
 F₉ 仮= 2-2
 ~D₁J₂D₃ 仮に・たとえる・でも・言う
 ~J₈K₁₁ もし・…が…なら…は…では
 ないか
 F₁₀ コレデハ 4-5
 ~F₁ それじゃ・まるで
 ~F₁J₂K₃ これでは・まるで・も・同然
 ~F₁K₉ あれじゃ・まるで・みたい
 ~F₁K₁₁ それでは・まるで・ではないか
 ~F₁K₉M₁ これでは・まるで・よう・も
 の
 F₁₁ マサカ 2-2
 ~J₂K₁₂ なにも・でも・ではない
 ~K₁₂ まさか・ではあるまい
 F₁₂ 大シテ 5-5

- ~K₂ 大して・違いがない
どれだけでも・変わりがない
露一つ・違わない
寸分・違わない
 J₃~K₂ だって・あんまり・変わらない
 F₁₃ 薬ニシタクモ 1-1
 ~ 薬にしたくも
 F₁₄ Aヲ見ルト 2-2
 ~D₅ を見ると・感じられる
 ~D₁₁ を見たら・思い出す
 F₁₅ Cカラ見レバ 1-1
 ~ から見れば
 F₁₆ Cデ言エバ 5-5
 ~ で言えば 3-3
にたとえると
 ~D₁₃ なら・によくある
 F₁₇ Bガヨク…ヨウニ 4-4
 ~ がよく…ように
に見るように
にあるように
時々あるように
 F₁₈ Bトイウコトガアル 4-8
 ~ ということがある
と言うでしょう
と言うじゃありませんか
ということがあるでしょう
という諺があるでしょう
ということもあるわけだし
のたとえ通り
 ~D₁₃ …ということがあるが・当てはまる
 F₁₉ Bデハアルマイシ 9-10
 ~ ではあるまいし 7-7
ではないが 2-3
 J₁ ホド 45-301
 D₁~ 思う・ほど 3-3

- 紛う・ほど
 D₂~ 比する・ほど
 D₃~ 言う・ほど 2-2
形容する・ほど
 D₅~ 思われる・ほど 4-4
疑われる・ほど 2-2
見える・ほど
思われる・くらい
疑われる・くらい
 D₇~ 思わせる・ほど
 D₁₂~ 似る・くらい
 D₁~K₉D₅ 思う・ほど・よう・見える
 D₃~M₁ 言う・くらい・もの
 F₁~ まるで・ほど 1-3
あたかも・ほど
ちょうど・ほど
まるで・くらい
まるで・ばかり
いかにも・ばかり
 F₃~ ほとんど・くらい 2-2
 F₄~ それこそ・ほど
 F₈~ なんだか・ほど
 F₁D₁~ まるで・受けとる・くらい
 F₁D₅~ まるで・思われる・ほど
 F₃~M₁ せいぜい・くらい・こと
 F₃~M₃ せいぜい・くらい・気持ち
 F₁K₁₃D₁~ まるで・…とはよくも名付け
た・思う・ほど
 F₄K₁₁D₅~ それこそ・ではないか・思わ
れる・ほど
 F₃K₁~ ほとんど・等しい・くらい
 ~ ほど 34-139
くらい 12-24
ばかり 12-27
より 13-20

というより
 ~D₅ ほど・感じられる
 というより・感じられる
 J₂D₃~ でも・言う・ほど
 J₃D₃~ も・言う・ほど
 ~F₃ というより・むしろ 2-2
 ~F₃D₃ というより・むしろ・言う
 ~F₃J₂K₉ というより・なにか・でも・
 よう
 ~F₃K₁ というより・むしろ・近い
 ~F₂S₉K₉ というより・いわば・…とい
 う・よう
 ~~ に比べて・のほうが
 J₃~ も・ほど 2-2
 も・ばかり 2-9
 ~K₉ より・よう
 J₃K₉~ も・ひけをとらない・ほど
 も・及ばない・くらい
 ~M₃ ほど・感じ
 ほど・気持ち
 ほど・思い
 ばかり・思い
 ~S₉M₃ というより・…という・感じ
 K₁~ 同じ・ほど 2-3
 同じ・くらい 2-2
 K₆~ わからない・ほど
 K₇~ 負けない・ほど
 K₁₀~ そう・ほど 2-2
 K₁₁~ と言っていい・ほど
 K₁₀D₅~ そう・思える・ほど
 そう・見える・ほど
 M₃~ 思い・ほど
 R₁~ へたな・より
 R₃~ ほんの・ほど
 R₃~M₃ ほんの・くらい・気持ち

S₉D₆~ …という・気がする・くらい
 S₉~ …じみる・ほど
 S₉~ …という・ほど
 S₂M₃~ …的・感じ・ほど
 J₂ デモ 34-259
 F₉D₁~D₃ 仮に・たとえる・でも・言う
 F₁D₁~S₉K₉ まるで・する・でも・…と
 いう・よう
 F₁F₁~K₉ まるで・まるで・でも・よう
 F₁~ まるで・でも
 F₁~K₉ まるで・でも・よう 16-44
 まるで・でも・みたい 2-3
 まるで・かなにか・よう
 あたたかも・でも・よう 4-10
 あたたかも・かなにか・よう
 さも・でも・よう
 F₉~K₉ なにか・でも・よう 7-13
 なにやら・でも・よう 1-2
 なんだか・でも・よう 2-2
 どこぞ・でも・よう
 F₉~K₁₀ なにか・でも・そう
 F₁₁~K₁₂ なにも・でも・ではない
 F₁~K₉D₁ まるで・でも・よう・思う
 さも・でも・よう・感じる
 F₁~K₉D₅ まるで・でも・よう・見える
 F₄~K₉D₅ ほんとうに・でも・よう・見
 える
 F₉~K₉D₆ なにか・でも・よう・気がする
 る
 F₁~K₉M₂ まるで・でも・よう・ようす
 F₂~K₉M₃ たとえば・でも・よう・心持
 ち
 F₁~M₂ あたかも・でも・ようす
 F₁~M₃ まるで・でも・つもり
 F₁~S₉K₉ まるで・でも・…という・よ

う
 ～ でも 5-9
など
 ～D₄ でも・なる
 ～D₆ でも・気がする
 ～D₃J₁ でも・言う・ほど
 ～D₃K₉ でも・思われる・よう 1-2
 J₁F₃～K₉ というより・なにか・でも・
 よう
 ～K₉ など・比でない
 ～K₉ でも・よう 30-104
でも・ごとし
でも・みたい
かなにか・よう 4-7
かな(ん)ぞ・よう 4-5
 ～K₁₀ でも・そう 4-6
でも・かねない
 ～K₉D₁ でも・よう・思う
かなにか・よう・感じる
かなにか・よう・思う
かな(ん)ぞ・よう・扱う
 ～K₉D₃ でも・よう・錯覚される
でも・よう・見える
など・よう・思われる
かなにか・よう・思われる
 ～K₉D₆ でも・よう・気がする 2-2
 ～K₉M₃ でも・よう・気持ち 3-3
でも・よう・気分
 ～M₃ でも・気
でも・思い
 ～S₉ でも・…という
 ～S₉K₉ でも・…という・よう 3-4
 ～S₉K₉M₁ でも・…という・よう・もの
 R₁～K₉ どんな・でも・よう
 J₃ サエ 30-140

D₁K₉～D₆ 見る・よう・さえ・気がする
 F₁₀F₁～K₃ これでは・まるで・も・同然
 F₁～D₅ ちょうど・さえ・思われる
 F₂～D₁₂ たとえば・も・似る
 F₃～D₃ ほとんど・も・言う
 F₁～K₁ まるで・も・同じ
 あたかも・も・等しい
 F₁～K₂ まるで・も・同様
 F₄～K₁ それこそ・も・等しい
 F₁K₉～D₃ まるで・よう・さえ・見える
 ～ も
だって 4-4
すら
 ～D₁ も・たとえる
まで・思う
まで・なぞらえる
 ～D₃ も・言う 3-9
も・呼ぶ
 ～D₃ も・思える
も・思われる 2-2
も・見える 2-3
 ～D₁₂ も・似る 6-10
 ～D₁₃ も・当たる 3-3
だって・相当する
 ～D₁₄ も・劣る
 ～D₃J₁ も・言う・ほど
 ～D₁K₉ も・見る・よう
 ～F₁₂K₂ だって・あんまり・変わらない
 ～J₁ も・ほど 2-2
も・ばかり 2-9
 ～K₁ も・等しい 2-4
 ～K₂ も・同様 2-2
も・一つ
 ～K₃ も・同然 3-4
 ～K₅ だって・その通り

だって・そうだ
 ~K₉ も・よう 3-5
 もまた・ごとし 2-2
 だって・よう
 ~K₁₀ も・そう
 も・かねない
 まで・そう
 ~K₉D₅ というより・よう・思える
 ~K₇J₁ も・ひけをとらない・ほど
 も・及ばない・くらい
 ~K₁M₁ も・同じ・こと 2-2
 だって・同じ・こと
 ~K₉M₃ も・よう・心持ち
 ~M₃ も・思い
 ~S₈ も・…よろしく
 K₉~ よう・も 6-9
 よう・さえ 1-2
 K₉~D₁ よう・も・思う
 よう・さえ・感じる
 よう・さえ・思う
 K₉~D₅ よう・も・感じられる 2-2
 よう・も・思われる 1-2
 よう・も・錯覚される
 よう・も・見える 5-7
 ごとし・も・見える
 よう・さえ・思える 2-2
 よう・さえ・思われる
 よう・さえ・見える 2-2
 よう・すら・思われる
 K₉~D₆ よう・も・気がする 4-4
 よう・さえ・気がする
 K₉~K₉~ よう・も・よう・も
 K₉~M₂~ よう・も・ようす・も
 K₄K₉~D₆ 同類・よう・さえ・気がする
 K₉K₉K₉~ よう・よう・よう・も

R₄K₉M₁~D₁ 一種の・よう・もの・さえ
 ・感じる
 J₄ = 2-2
 ~ に
 と
 J₅ トイウモノハ 1-2
 F₄~ まったく・というものは
 ~F₅D₁ というものは・つくづく・思う
 J₆ ノ 20-49
 ~ の 20-49
 J₇ AデアレBデアレ 3-3
 ~ …であれ…であれ
 …と…は 2-2
 J₈ CガDナラAハB 5-9
 ~ …が…なら…は… 2-2
 …なら…が…では…
 …を…とすれば…は 2-2
 …を…と呼ぶなら…は…
 …を…とすれば…は…にたとえてい
 い
 …は…だが…も…
 …がかえって…でありむしろ…は…
 である
 K₁ 近イ・同ジ 29-99
 F₁J₃~ あたかも・も・等しい
 まるで・も・同じ
 F₄J₃~ それこそ・も・等しい
 F₁~ まるで・同じ
 まるで・そっくりだ 2-2
 F₂~ たとえて言うると・近い
 F₃~ ほとんど・近い
 そっくり・同じ
 F₄~ まったく・同じ
 ほんとうに・そっくりだ
 まったく・瓜二つ

- $F_1 \sim D_{13}$ ちょうど・同じ・当たる
 $F_3 \sim J_1$ ほとんど・等しい・くらい
 $F_1 \sim K_9$ まるで・同じ・よう
 ちょうど・同じ・よう 2-2
 $F_3 \sim K_9 M_1$ ほとんど・近い・よう・もの
 $F_2 \sim M_1$ たとえば・同じ・こと
 $F_4 \sim M_1$ まったく・同じ・こと
 $J_1 F_3 \sim$ というより・むしろ・近い
 $J_3 \sim$ も・等しい 2-4
 $J_3 \sim M_1$ も・同じ・こと 2-2
 $J_3 \sim M_1$ だって・同じ・こと
 \sim 近い 4-6
等しい 6-13
同じ 14-19
そっくりだ 3-3
 $\sim J_1$ 同じ・ほど 2-3
同じ・くらい 2-2
 $\sim K_9$ 同じ・よう 8-11
 $\sim M_1$ 同じ・もの
同じ・こと 3-10
 $\sim M_2$ 同じ・ぐあい
 $\sim M_3$ 同じ・気持ち
 $\sim M_4$ 同じ・役目
 K_2 同様 15-26
 $F_1 J_3 \sim$ まるで・も・同様
 $F_1 \sim$ ちょうど・同程度
 ちょうど・一般
 まるで・異なる
 $F_2 \sim$ 言うたら・一つ
 $F_3 \sim$ ほとんど・変わらない
ほとんど・異なる
 $F_{12} \sim$ 大して・違いがない
 どれだけも・変わらない
露一つ・違わない
 寸分・違わない
- $J_3 F_{12} \sim$ だって・あんまり・変わらない
 $J_3 \sim$ も・同様 2-2
 も・一つ
 \sim 同様 2-3
同列
一つ
一般
変わらない
選ぶところがない
 $\sim D_3$ 同様・思われる
 $R_2 \sim$ 大した・変わらない
 なんの・変わらない
 K_3 同然 4-7
 $F_{10} F_1 J_3 \sim$ これでは・まるで・も・同然
 $J_3 \sim$ も・同然 3-4
 \sim 同然 2-2
 K_4 同類 1-1
 $\sim K_9 J_3 D_6$ 同類・よう・さえ・気がする
 K_5 ソノ通り 3-4
 $J_3 \sim$ だって・その通り
だって・そうだ
 $K_9 \sim$ よう・そんなもの 1-2
 K_6 ワカラナイ 2-5
 \sim わからない 1-4
 $\sim J_1$ わからない・ほど
 K_7 フサワソイ 6-6
 $F_3 D_3 \sim K_9 M_1$ むしろ・言う・ふざかしい
 よう・代物
 $J_3 \sim J_1$ も・ひけをとらない・ほど
 も・及ばない・くらい
 \sim 及ばない 2-2
 $\sim J_1$ 負けない・ほど
 K_8 比デナイ 1-1
 $J_2 \sim$ など・比でない
 K_9 ヨウ 50-5772

D₁J₁~D₅ 思う・ほど・よう・見える
 D₁~ 思う・よう 1-2
 見る・よう 3-3
 たとえる・よう
 D₅~ 感じられる・よう
 D₇~ 思わせる・よう 2-5
 思い出させる・よう
 連想させる・よう
 D₁₃~ 類する・よう
 D₁~D₆ 見る・よう・気がする
 D₃~D₆ 言う・よう・気がする
 D₅~D₆ 見える・よう・気がする
 D₁₂~D₅ 似る・よう・思える
 D₁~J₃D₆ 見る・よう・さえ・気がする
 D₁~M₁ 見る・よう・もの
 D₁₂~M₃ 似る・よう・感じ
 F₁D₁J₂S₉~ まるで・する・でも・…と
 いう・よう
 F₁D₁~ まるで・見る・よう
 F₁D₁₂~D₆ あたかも・似る・よう・心持
 がする
 F₃D₃K₇~M₁ むしろ・言う・ふさわしい
 ・よう・代物
 F₁F₁J₂~ まるで・まるで・でも・よう
 F₁F₈~ まるで・なにか・よう
 F₁₀F₁~ あれじゃ・まるで・みたい
 F₄F₁~D₅ まったく・まるで・よう・見
 える
 F₁₀F₁~M₁ これでは・まるで・よう・
 もの
 F₁J₂~ まるで・でも・よう 16-44
 まるで・かなにか・よう
 あたかも・でも・よう 4-10
 あたかも・かなにか・よう
 さも・でも・よう

 まるで・でも・みたい 2-3
 F₈J₂~ なにか・でも・よう 7-13
 なにやら・でも・よう 1-2
 なんだか・でも・よう 2-2
 どこぞ・でも・よう
 F₁J₂~D₁ まるで・でも・よう・思う
 さも・でも・よう・感じる
 F₁J₂~D₅ まるで・でも・よう・見える
 F₄J₂~D₅ ほんとうに・でも・よう・見
 える
 F₈J₂~D₆ なにか・でも・よう・気がす
 る
 F₁J₂~M₂ まるで・でも・よう・様子
 F₂J₂~M₃ たとえば・でも・よう・心持
 ち
 F₁J₂S₉~ まるで・でも・…という・よう
 F₁~ まるで・よう 28-207
 さながら・よう
 あたかも・よう 12-45
 ちょうど・よう 12-29
 いかにも・よう
 さも・よう 2-3
 さながら・ごとし
 あたかも・ごとし
 まるで・みたい 12-24
 F₂~ いわば・よう 2-3
 たとえば・よう 5-6
 たとえて言えば・よう
 言えば・みたい
 F₃~ ほとんど・よう 8-11
 半分・よう 2-9
 なかば・よう 2-2
 ただ・よう
 ほとんど・みたい
 F₄~ まさに・よう 3-4

- まったく・よう 3-5
 ほんとうに・よう
 ほんなこと・よう
 それこそ・よう
 文字通り・よう
 それこそ・みたい
 F₆~ 今にも・よう
 F₇~ いずれ・よう
 F₈~ なにか・よう 6-6
 なにかしら・よう
 なんだか・よう 6-7
 どこか・よう
 なにか・みたい
 なんだか・みたい 3-3
 どこか・みたい
 F₁~D₁ まるで・よう・思う
 あたかも・よう・見せかける
 いかにも・よう・思う
 あたかも・ごとし・眺める
 F₁~D₅ まるで・よう・感じられる 2-2
 まるで・よう・思われる
 まるで・よう・考えられる
 まるで・よう・見える 4-4
 あたかも・よう・見える 3-5
 あたかも・よう・見なされる
 ちょうど・よう・感じられる
 まるで・みたい・見える
 F₁~D₆ まるで・よう・気がする 3-4
 あたかも・よう・気がする
 F₂~D₅ いわば・よう・思われる
 いわば・よう・見える
 F₃~D₆ ほとんど・よう・気がする
 F₄~D₆ まったく・よう・気がする
 F₆~D₆ 今にも・よう・気がする
 F₈~D₁ なにか・よう・思う
 なにやら・よう・思う
 F₆~D₅ なにか・よう・見える 2-2
 なにやら・よう・思われる
 なにやら・よう・見える
 どこやら・よう・思われる
 どこか・らしい・見える
 F₈~D₆ なにか・よう・気がする
 なにやら・よう・気がする 2-2
 なんだか・よう・気がする 8-12
 F₁~J₅D₅ まるで・よう・さえ 見える
 F₁~M₁ まるで・よう・もの 5-11
 ちょうど・よう・もの
 F₁~M₂ まるで・よう・ぐあい 2-2
 あたかも・よう・ぐあい 2-2
 ちょうど・よう・かっこう
 F₁~M₃ まるで・よう・感じ 4-4
 まるで・よう・感触
 まるで・よう・気持ち 2-2
 まるで・よう・思い
 さながら・よう・思い
 ちょうど・よう・気持ち
 F₂~M₁ いわば・よう・もの 3-3
 言えば・よう・もの
 言えば・みたい・もの
 F₃~M₁ まあ・よう・もの
 F₃~M₃ 半分・よう・気持ち
 F₄~M₁ まさに・よう・もの 1-2
 F₇~M₁ 要するに・よう・もの
 つまり・みたい・もの
 F₈~M₁ なにか・よう・もの 3-3
 F₈~M₃ なにか・よう・気持ち 2-2
 なにやら・よう・気 1-2
 なにやら・よう・心持ち 2-5
 F₁K₁~ まるで・同じ・よう
 ちょうど・同じ・よう 2-2

F₁K₁~M₁ ほとんど・近い・よう・もの

F₁~R₁M₃ まるで・よう・一種の・感

F₂R₄~M₁ いわば・一種の・みたい・もの

F₁S₉~ さながら・…という・よう

F₂S₉~ いわば・…という・よう

F₁S₈~D₆ あたかも・…さながら・よう
・気がする

J₂D₅~ でも・思われる・よう 1-2

J₃D₁~ も・見る・よう

J₁F₈J₂~ というより・なにか・でも・よう

J₁F₂S₉~ というより・いわば・…とい
う・よう

J₁~ より・よう

J₂~ でも・よう 30-104

かなにか・よう 4-7

かな(ん)ぞ・よう 4-5

でも・ごとし

でも・みたい

J₃~ も・よう 3-5

だって・よう

もまた・ごとし 2-2

J₁~D₅ というより・よう・思える

J₂~D₁ でも・よう・思う

かなにか・よう・感じる

かなにか・よう・思う

かな(ん)ぞ・よう・扱う

J₂~D₅ でも・よう・錯覚される

でも・よう・見える

など・よう・思われる

かなにか・よう・思われる

J₂~D₆ でも・よう・気がする 2-2

J₂~M₃ でも・よう・気持ち 3-3

でも・よう・気分

も・よう・心持ち

J₂S₉~ でも・…という・よう 3-4

J₂S₉~M₁ でも・…という・よう・もの
~ よう 50-3875

ごとし 17-82

みたい 33-147

~D₁ よう・感じる 7-15

よう・思う 7-10

よう・考える 2-2

よう・心得る

よう・錯覚する 1-2

よう・見る 3-3

よう・眺める 1-2

ごとし・感じる 1-3

~D₅ よう・感じられる 10-21

よう・覚える

よう・思える 9-10

よう・思われる 18-61

よう・とれる

よう・錯覚される 1-2

よう・見える 25-92

よう・見られる

よう・眺められる 2-3

よう・眼に映る 3-3

よう・映る

よう・聞こえる 2-2

よう・扱われる

ごとし・感じられる

みたい・思える

みたい・見える 2-2

~D₆ よう・気がする 31-156

よう・心地がする

みたい・気がする 3-3

~D₇ よう・感じさせる

よう・錯覚させる

~J₃ よう・も 6-9

よう・さえ 1-2

~J₃D₁ よう・も・思う

よう・さえ・感じる

よう・さえ・思う

~J₃D₅ よう・も・感じられる 2-2

よう・も・思われる 1-2

よう・も・錯覚される

よう・も・見える 5-7

よう・さえ・思える 2-2

よう・さえ・思われる

よう・さえ・見える 2-2

よう・すら・思われる

ごとし・も・見える

~J₃D₆ よう・も・気がする 4-4

よう・さえ・気がする

~J₃~J₃ よう・も・よう・も

~J₃M₂J₃ よう・も・ようす・も

K₁~ 同じ・よう 8-11

~K₅ よう・そんなもの 1-2

K₄~J₃D₆ 同類・よう・さえ・気がする

~ ~ ~ よう・よう・よう

~ ~ ~ J₃ よう・よう・よう・も

K₁~M₁ 同じ・よう・もの

同じ・よう・こと

~M₁ よう・もの 33-148

よう・こと 6-10

よう・まね・ 2-3

ごとし・もの 3-3

みたい・もの 12-22

みたい・こと 2-2

みたい・まね

らしい・もの

~M₂ よう・気配

よう・おもむき 3-3

よう・風情

よう・ふう 3-3

よう・状態 2-3

よう・観

よう・ぐあい 2-2

よう・あんばい

よう・調子 5-7

よう・口調

よう・形 9-12

よう・かっこう 3-3

みたい・ふう

~M₃ よう・感じ 16-41

よう・感触

よう・気 8-16

よう・気持ち 20-56

よう・気分 5-9

よう・心持ち 8-21

よう・心地 2-2

よう・心 3-7

よう・思い 10-13

よう・つもり

よう・印象 2-2

みたい・気持ち 2-3

~M₄ よう・役目

~M₈ よう・錯覚 6-8

R₁J₂~ どんな・でも・よう

R₃~ いわゆる・よう

ほんの・よう

R₄~ 一種の・よう 4-5

一種の・みたい

R₄~M₁ 一種の・よう・もの

R₄~M₁J₃D₁ 一種の・よう・もの・さえ

・感じる

S₁~ …状・よう

S₉~ …という・よう 4-6

S₁₀～ …そのもの・よう
 S₈～D₅ …さながら・よう・思われる
 S₉～M₁ …という・よう・もの
 S₉～M₂ …という・よう・おもむき
 …という・よう・ぐあい2-2
 …という・よう・かつこう
 …という・よう・図
 S₉～M₃ …という・よう・感じ3-3
K₁₀ ソウ 27-76
 D₄～ なる・かねない
 F₈J₂～ なにか・でも・そう
 F₆～ 今にも そう4-7
 あわや・そう
 F₆～D₅ 今にも・そう・思われる
 F₆～D₆ 今にも そう・気がする
 F₆～M₃ 今にも・そう・感じ
 J₂～ ても・そう4-6
 でも・かねない
 J₃～ も・そう
 まで・そう
 も・かねない
 ～ そう18-38
 かねない1-2
 ～D₅ そう・感じられる
 そう・思える1-2
 そう・思われる
 そう・見える4-4
 ～D₅J₁ そう・思える・ほど
 そう・見える・ほど
 ～J₁ そう・ほど2-2
 ～M₃ そう・感じ
K₁₁ デアル 13-27
 D₃～ 形容する・と言っている
 F₁₀F₁～ それでは・まるで・ではないか
 F₉J₆～ もし…が…なら…は…では

ないか
 F₁～ まるで・にすぎない
 F₃～ もはや・である
 ほとんど・と言っている
 F₇～ 結局・にすぎない
 F₄～D₅J₁ それこそ・ではないか・思わ
 れる・ほど
 ～ さ
 というところだ2-2
 といったところだ
 というものだ
 にはかならない
 というよりほかはない
 にすぎない8-10
 なんでも…を…と…ばまちがいない
 ～J₁ と言っている・ほど
K₁₂ デハナイ 3-3
 F₁₁J₂～ なにも・でも・ではない
 F₁₁～ まさか・ではあるまい
 ～ ではない
K₁₃ Bハヨクッタ 3-3
 F₁～D₁J₁ まるで・…とはよくも名付け
 た・思う・ほど
 ～ …はよかった2-2
M₁ モノ・コト 37-249
 D₂J₁～ 言う・くらい・もの
 D₁K₉～ 見る・よう・もの
 F₃D₃K₇K₉～ むしろ・言う・ふさわしい
 ・よう・代物
 F₁₀F₁K₉～ これでは・まるで・よう・も
 の
 F₃J₁～ せいぜい・くらい・こと
 F₃K₁K₉～ ほとんど・近い・よう・もの
 F₁K₉～ まるで・よう・もの5-11
 ちょうど・よう・もの

- F₂K₉~ いわば・よう・もの 3-3
 言えば・よう・もの
 言えば・みたい・もの
 F₂K₁~ たとえば・同じ・こと
 F₃K₉~ まあ・よう・もの
 F₄K₁~ まったく・同じ・こと
 F₄K₉~ まさに・よう・もの 1-2
 F₇K₉~ 要するに・よう・もの
 つまり・みたい・もの
 F₈K₉~ なにか・よう・もの 3-3
 F₂R₄K₉~ いわば・一種の・みたい・もの
 F₇S₉~ つまり・…という・わけ
 J₃K₁~ も・同じ・こと 2-2
 だって・同じ・こと
 J₂S₉K₉~ でも・…という・よう・もの
 K₁K₉~ 同じ・よう・もの
 同じ・よう・こと
 K₁~ 同じ・もの
 同じ・こと 3-10
 K₉~ よう・もの 33-148
 ごとし・もの 3-3
 みたい・もの 12-22
 らしい・もの
 よう・こと 6-10
 みたい・こと 2-2
 よう・まね 2-3
 みたい・まね
 ~ やつ 2-2
 R₄K₉~ 一種の・よう・もの
 R₄K₉~J₃D₁ 一種の・よう・もの・さえ
 ・感じる
 S₉K₉~ …という・よう・もの
 S₉~ …という・やつ 2-2
 M₂ ヨウス・グアイ・形 30-123

- F₁J₂K₉~ まるで・でも・よう・ようす
 F₁J₂~ あたかも・でも・ようす
 F₁K₉~ まるで・よう・ぐあい 2-2
 あたかも・よう・ぐあい 2-2
 ちょうど・よう・かつこう
 F₁~ いかにも・おもむき 2-2
 あたかも・ふう
 まるで・ぐあい 1-2
 まるで・形
 F₄~ まさに・概
 F₁S₉~ あたかも・…という・ふう 1-2
 F₃S₉~ いささか・…という・おもむき
 まあ・…という・形
 K₉J₉~J₃ よう・も・ようす・も
 K₁~ 同じ・ぐあい
 K₉~ よう・気配
 よう・おもむき 3-3
 よう・風情
 よう・ふう 3-3
 みたい・ふう
 よう・状態 2-3
 よう・観
 よう・ぐあい 2-2
 よう・あんばい
 よう・調子 5-7
 よう・口調
 よう・形 9-12
 よう・かつこう 3-3
 ~ ありさま
おもむき
態
ぐあい
あんばい
姿勢
形 12-18

おもかげ

色 3-8

形式

- S₉K₉~ …という・よう・おもむき
 …という・よう・ぐあい 2-2
 …という・よう・かつこう
 …という・よう・図
- S₉~ …という・風情 1-2
 …という・ふう 9-15
 …という・ぐあい 2-2
 …という・調子
 …という・形
 …という・かつこう
 …という・顔
 …という・顔つき
- S₉~D₉ …という・ふう・見える
- M₃ 感_シ・気持ち 38-326
- D₁₂K₉~ 似る・よう・感じ
- F₁J₂~ まるで・でも・つもり
- F₂J₂K₉~ たとえば・でも・よう・心持ち
ち
- F₃J₁~ せいぜい・くらい・気持ち
- F₁K₉~ まるで・よう・感じ 4-4
 まるで・よう・感触
 まるで・よう・気持ち 2-2
 ちょうど・よう・気持ち
 まるで・よう・思い
 さながら・よう・思い
- F₃K₉~ 半分・よう・気持ち
- F₆K₁₀~ 今にも・そう・感じ
- F₉K₉~ なにやら・よう・気 1-2
 なにか・よう・気持ち 2-2
 なにやら・よう・心持ち 2-5
- F₁K₉R₄~ まるで・よう・一種の・感
- F₁~ まるで・感じ

まるで・つもりF₄~ まったく・気持ちまったく・印象F₈~ なにか・感じどこか・感じなにか・気持ちJ₂K₉~ でも・よう・気持ち 3-3でも・よう・気分J₃K₉~ も・よう・心持ちJ₁~ ほど・感じほど・気持ちほど・思いばかり・思いJ₂~ でも・気でも・思いJ₃~ も・思いJ₁S₉~ というより・…という・感じK₁~ 同じ・気持ちK₉~ よう・感じ 15-41よう・感触よう・気 8-16よう・気持ち 20-56みたい・気持ち 2-3よう・気分 5-9よう・心持ち 8-21よう・心地 2-2よう・心 3-7よう・思い 10-13よう・つもりよう・印象 2-2K₁₀~ そう・感じ~ 感感じ 14-28気 3-3気持ち 7-14

- 心持ち
心地 2-2
思い 14-39
感慨
つもり 3-3
印象
 ~J₁ 思い・ほど
 R₁J₁~ ほんの・くらい・気持ち
 S₁K₉~ …という・よう・感じ 3-3
 S₂~ …的・感じ
 S₉~ …という・感じ 4-5
 …という・気持ち
 …という・思い
 S₂~J₁ …的・感じ・ほど
 M₁ 代ワリ・役目 10-11
 F₂~ 言ってみるなら・代わり
 K₁~ 同じ・役目
 K₉~ よう・役目
 ~ 役目 3-3
 役割
 模型
 代わり 3-3
 M₅ タグイ 3-3
 F₂~ いわば・一種
 ~ たぐい
 ~D₅ 感じ・見える
 M₆ 類似 2-2
 D₁₁R₁~ 思い浮かべる・一種の・相似
 ~ 類似
 M₇ タトエ 3-3
 ~ 比喩
 たとえ
 ~D₁₁ たとえ・思い出す
 M₈ 錯覚 6-8
 K₉~ よう・錯覚 6-8

- R₁ ヘタナ 2-2
 ~J₁ へたな・より
 ~J₂K₉ どんな・でも・よう
 R₂ 大シタ 2-2
 ~K₂ 大した 変わりがない
 なんの・変わりがない
 R₃ イワユル 9-9
 ~ いわゆる 4-4
 ほんとの
 ~J₁ ほんの・ほど
 ~J₁M₃ ほんの・くらい・気持ち
 ~K₉ いわゆる・よう
 ほんの・よう
 R₄ 一種ノ 15-36
 D₁₁~M₆ 思い浮かべる・一種の・相似
 F₁K₉~M₃ まるで・よう・一種の・感
 F₂~ 結局・一種の
 F₂~K₉M₁ いわば・一種の・みたい・も
 の
 ~ 一種の 8-13
 ある種の
 一つの
 第二の
 ~D₃ 一種の・呼ぶ
 ~D₁₂ 一種の・似る
 ~K₉ 一種の・よう 4-5
 一種の・みたい
 ~K₉M₁ 一種の・よう・もの
 ~K₉M₁J₃D₁ 一種の・よう・もの・さえ
 ・感じる
 ~S₁ 一種の・…状態
 一種の・…性
 ~S₂ 一種の・…的 2-3
 ~S₉ 一種の・…として
 R₅ 小… 1-2

～ 小…
 ～S₁ 小……式
 S₁ ……バリ 24-127
 F₁～ まるで…級
 R₄～ 一種の…状態
 一種の…性
 R₅～ 小……式
 ～ もの 2-2
 色 9-31
 …式 2-2
 …なり 2-2
 …状 2-2
 …状態 4-6
 …様
 …性 2-3
 …役 3-6
 …ふう 12-22
 …づら 3-4
 …はだ
 …ぼり
 …なみ
 …格 1-2
 …大
 …程度 2-6
 …以上 3-3
 …型 7-16
 …形 1-4
 …気分
 ～D₁ …なみ・考える
 …なみ・扱う
 ～D₁₃ …ふう・ままある
 ～K₉ …状・よう
 ～S₄ …なみ・…扱い
 ～S₅ …性・…じみる
 S₂ …的 18-95

R₄～ 一種の…的 2-3
 ～ …的 18-90
 ～M₃ …的・感じ
 ～M₃J₁ …的・感じ・ほど
 S₃ …化 3-4
 ～ …化 3-4
 S₄ …紛イ 9-18
 F₁～ まるで…扱い
 ～ …気どり
 …紛い 2-2
 …扱い 4-10
 …代わり 3-3
 S₁～ …なみ・…扱い
 S₅ …ジミル 21-63
 ～ …めく 8-11
 …びる
 …じみる 16-44
 …なす 2-2
 ～D₅ …じみる・見える 2-3
 ～J₁ …じみる・ほど
 S₁～ …性・…じみる
 S₆ …ポイ 10-17
 ～ …ぼい 10-16
 …くさい
 S₇ …ソックリ 16-23
 F₃～ まあ…同然
 ～ …そっくり 8-9
 …同様 6-8
 …同然 5-5
 S₈ …サナガラ 8-13
 F₁～ まるで…さながら 2-2
 まるで…よろしく
 F₁～K₉D₆ あたかも…さながら・よう
 ・気がする
 J₃～ も…よろしく

~ …そのまま 3-3
 …さながら 2-3
 …よろしく
 ~K₉D₅ …さながら・よう・思われる
 S₉ …タル 27-136
 F₁D₁J₂~K₉ まるで・する・でも・…と
 いう・よう
 F₁J₂~K₉ まるで・でも・…という・よ
 う
 F₂~ いわば・…という
 F₁~K₉ さながら・…という・よう
 F₂~K₉ いわば・…という・よう
 F₁~M₂ あたかも・…という・ふう1-2
 F₃~M₂ いささか・…という・おもむき
 まあ・…という・形
 F₇~M₁ つまり・…という・わけ
 J₁F₂~K₉ というより・いわば・…とい
 う・よう
 J₂~ でも・…という
 J₂~K₉ でも・…という・よう3-4
 J₂~K₉M₁ でも・…という・よう・もの
 J₁~M₃ というより・…という・感じ
 R₄~ 一種の・…として
 ~ …たる
 …という 8-53
 …という名
 …として 6-9
 ~D₅ …として・印象づけられる
 ~D₆ …という・気がする

~D₆J₁ …という・気がする・くらい
 ~J₁ …という・ほど
 ~K₉ …という・よう 4-6
 ~K₉M₁ …という・よう・もの
 ~K₉M₂ …という・よう・おもむき
 …という・よう・ぐあい 2-2
 …という・よう・かっこう
 …という・よう・図
 ~K₉M₃ …という・よう・感じ 3-3
 ~M₁ …という・やつ 2-2
 ~M₂ …という・風情 1-2
 …という・ふう 9-15
 …という・ぐあい 2-2
 …という・調子
 …という・形
 …という・かっこう
 …という・顔
 …という・顔つき
 ~M₃ …という・感じ 4-5
 …という・気持ち
 …という・思い
 ~M₂D₅ …という・ふう・見える
 S₁₀ …ツノモノ 11-15
 ~ …そのもの 10-12
 ~D₄ …そのもの・化す
 ~D₅ …そのもの・見える
 ~K₉ …そのもの・よう
 S₁₁ …ヒトツ 1-2
 ~ …ひとつ 1-2

4.33 指標要素類別

〔作り方〕

- 1) 比喩指標要素を類レベル (D, F, K ナド) でまとめ, 「比喩指標要素一覧」の配列順に取りあげる。
- 2) その類の比喩指標要素が用いられた比喩指標を類レベル (FKD, KM ナド) で表示し, 指標比喩の分類結果の配列順に従って列挙する。
- 3) 列挙された各比喩指標類に属する比喩指標種 (F₁K₁D₁₃, F₁K₉D₁ ナド) を指標比喩の分類結果の配列順に列挙する。
- 4) 列挙された各比喩指標種に属する個々の比喩指標を, 指標比喩の分類結果の配列順に列挙する。
- 5) 各比喩指標の出現状況を表示する。
- 6) 各比喩指標の出現状況を総合して, 各比喩指標類の出現状況として表示する。

例: FKD 23-56 JK 33-151

- 7) 各類の比喩指標要素の出現状況を, そこに列挙された各比喩指標類の出現状況を総合して, 表示する。

例: F 41-821

〔読み方〕

- 1) 最初のアルファベットは, そこで取りあげた類の性格 (Dは動詞類, Mは名詞類ナド) の表示である。
- 2) 次の数字は, その類の比喩指標要素の総合的な出現状況を示す。
例: D 49-966
- 3) 取りあげられた類ごとに列挙されているアルファベットは, その類の比喩指標要素の現れた比喩指標類の表示である。
(1) 「～」印は, そこで問題にしている類の代用表示である。
(2) 「～」だけの場あいは, その類の比喩指標要素が単独で用いられてその比喩指標類を成すことを表す。
- 4) 次の数字は, その比喩指標類の出現状況である。
例: ～ 40-302 ～K 8-17
- 5) 各比喩指標類に列挙されている小番号つきのアルファベット (F₁K₉D₁, F₈K₉D₁ ナド) は, その比喩指標類に属する比喩指標種の表示である。
- 6) 次に列挙されているのは, その比喩指標種に属する個々の比喩指標とその出現状況である。

〔使 い 方〕

1) ある類の比喩指標要素がどのぐらい現れたかを調べる。

例： F類の比喩指標要素は何作品に何例現れたか？

アルファベット順にF類の部を見つけると、その冒頭に「F 41-821」とあるので、副詞的な比喩指標要素であるF類は、41作品にわたって、延べ821例採集されたことがわかる。

2) ある比喩指標要素の属する類がどのぐらい現れたかを調べる。

例： 「ほんの」の類の比喩指標要素は何作品に何例現れたか？

「比喩索引」で「ほんの」を引くとR₁₋₂とあるので、この「比喩指標要素類別出現状況」のRの部を見ると、23作品にわたって51例採集されたことがわかる。

3) ある類の比喩指標要素がどんな比喩指標類によく現れるかを調べる。

例： M類の比喩指標要素はどんな比喩指標類に現れることが多いか？

アルファベット順を利用してM類の部を引きだし、そこに列挙されている比喩指標類の出現状況を対比すると、次のような情報が得られる。

KM類（よう-もの・こと・形・感じ・気持ち・思い ナド）が43-425で圧倒的に多く、M単独の類が31-141でこれに次ぎ、ほかに、FKM（まるで-よう-もの・感じ ナド）の20-53や、SM（…という-ふう・感じ ナド）の15-34などが目だつ。

4) ある類の比喩指標要素がどんな実現形でよく現れるかを調べる。

例： S類の比喩指標要素は、単独で現れた場あいを除くと、どんな実現形で多用されるか？

アルファベット順でS類の部を引きだして、「～」（S単独）以外の箇所の比喩指標の出現状況を調べ、そのうち多用される指標について、指標比喩の分類結果でその実現形ごとの内わけを対比すると、「…という風」の6-8が最高で、あとは「…といった感じ」「…というように」「…とでもいうように」「…じみて見える」がいずれも2-3でそれに続く程度で、このS類の比喩指標要素は他と組みあわさって比喩指標を成す例が一般に少ないことがわかる。

D 49-966

～ 40-302

D₁ 感じる 3-4

思う 7-12

考える

受け取る

見る 2-4

見立てる

たとえる 5-11

なぞらえる

諷喩する

する 3-6

D₂ 比較する

D₃ 言い直す

形容する

D₄ なる 9-42

- 化す 5-6
 変わる 2-2
 D₅ 感じられる 3-4
 思われる 3-5
 考えられる
 見える 9-11
 響く
 D₆ 気がする 12-20
 心地がする
 D₇ 感じさせる 2-2
 思わせる 12-25
 思い出させる 1-2
 思い起こさせる 3-3
 思い浮かべさせる
 想像させる
 空想させる
 連想させる 5-7
 髣髴させる
 象徴する
 D₈ 見いだす
 D₉ 思い合わされる
 髣髴とする 1-2
 D₁₀ 想像される
 D₁₁ 思い出す 9-10
 思い浮かべる
 想像する 3-4
 連想する 3-3
 D₁₂ 似る 21-75
 似通う 2-3
 通じる 2-2
 一脈通じる 1-2
 共通する
 比較される
 D₁₃ 当たる 2-2
 相当する

- よくある 1-2
 D₁₅ 違う
 D₁₆ 成す 4-5
 D₁₇ ならう
 D₁₈ 例にする
 ～～ 1-2
 D₁₂D₅ 似通う・見える
 D₁₃D₅ 類する・見える
 ～F～ 1-1
 D₁₁F₃D₁₃ 想像する・ほぼ・当たる
 ～J 16-19
 D₁J₁ 思う・ほど 3-3
 紛う・ほど
 D₂J₁ 比する・ほど
 D₃J₁ 言う・ほど 2-2
 形容する・ほど
 D₅J₁ 思われる・ほど 4-4
 思われる・くらい
 疑われる・ほど 2-2
 疑われる・くらい
 見える・ほど
 D₇J₁ 思わせる・ほど
 D₁₂J₁ 似る・くらい
 ～JK～ 1-1
 D₁J₁K₉D₅ 思う・ほど・よう・見える
 ～JM 1-1
 D₃J₁M₁ 言う・くらい・もの
 ～K 8-17
 D₁K₉ 思う・よう 1-2
 見る・よう 3-3
 たとえる・よう
 D₃K₁₁ 形容する・と言っていい
 D₄K₁₀ なる・かねない
 D₅K₉ 感じられる・よう
 D₇K₉ 思わせる・よう 2-5

思い出させる・よう
連想させる・よう
 D₁₃K₉ 類する・よう
 ~K~ 4-4
 D₁K₉D₆ 見る・よう・気がする
 D₃K₉D₆ 言う・よう・気がする
 D₅K₉D₆ 見える・よう・気がする
 D₁₂K₉D₅ 似る・よう・思える
 ~KJ~ 1-1
 D₁K₉J₃D₆ 見る・よう・さえ・気がする
 ~KM 2-2
 D₁K₉M₁ 見る・よう・もの
 D₁₂K₉M₃ 似る・よう・感じ
 ~RM 1-1
 D₁₁R₄M₆ 思い浮かべる・一種の・相似
 F~ 20-35
 F₂D₁ たとえば・思う
 F₁D₁ まるで・受けとる
 F₂D₃ 言えば・言う
 いわば・形容する
 F₁₄D₅ を見ると・感じられる
 F₈D₅ なにやら・思える
 F₄D₅ ほんとうに・疑われる
 F₁D₅ まるで・見える 2-2
 F₄D₅ どう見ても・見える
 F₁D₇ さながら・思わせる
 F₃D₇ ほとんど・思わせる
 F₈D₇ なにか・思わせる 2-2
 ごとくなく・思わせる
 F₁D₇ まるで・連想させる 2-2
 F₁₄D₁₁ を見たら・思い出す
 F₁D₁₂ まるで・似る
 あたかも・似る 3-3

ちょうど・似る
 F₂D₁₂ たとえに言うが・似る
 F₃D₁₂ ほとんど・似る 2-3
 F₈D₁₂ どこか・似る 2-3
 ごとくなく・似る
 F₁D₁₂ あたかも・相似る
 F₂D₁₂ 例をとれば・通じる
 F₁₈D₁₃ …という…があるが・当ては
まる
 F₁₆D₁₃ なら・よくある
 F~J 2-2
 F₁D₁J₁ まるで・受けとる・くらい
 F₁D₆J₁ まるで・思われる・ほど
 F~J~ 1-1
 F₉D₁J₂D₃ 仮に・たとえる・でも・言
う
 F~JSK 1-1
 F₁D₁J₂S₃K₉ まるで・する・でも・…
 という・よう
 F~K 1-1
 F₁D₁K₉ まるで・見る・よう
 F~K~ 1-1
 F₁D₁₂K₉D₆ あたかも・似る・よう・心
持がする
 F~KKM 1-1
 F₃D₃K₇K₉M₁ むしろ・言う・ふさわし
 い・よう・代物
 FFK~ 1-1
 F₄F₁K₉D₅ まったく・まるで・よう・見
える
 FJ~ 2-3
 F₃J₃D₃ ほとんど・も・言う
 F₁J₃D₆ ちょうど・さえ・思われる
 F₂J₃D₁₂ たとえば・も・似る
 FJK~ 5-5

F₁J₂K₉D₁ さも・でも・よう・感じる
 F₁J₂K₉D₁ まるで・でも・よう・思う
 F₁J₂K₉D₅ まるで・でも・よう・見える
 F₄J₂K₉D₅ ほんとうに・でも・よう・見える
 F₈J₂K₉D₆ なにか・でも・よう・気がする
 FK~ 23-56
 F₁K₉D₁ まるで・よう・思う
 いかにも・よう・思う
 あたかも・ごとし・眺める
 あたかも・よう・見せかける
 F₆K₉D₁ なにか・よう・思う
 なにやら・よう・思う
 F₁K₉D₅ まるで・よう・感じられる
 2-2
 ちょうど・よう・感じられる
 まるで・よう・思われる
 まるで・よう・考えられる
 まるで・よう・見える 4-4
 まるで・みたい・見える
 あたかも・よう・見える 3-5
 あたかも・よう・見なされる
 F₂K₉D₅ いわば・よう・思われる
 いわば・よう・見える
 F₆K₁₀D₅ 今にも・そう・思われる
 F₈K₉D₅ なにやら・よう・思われる
 どこやら・よう・思われる
 なにか・よう・見える 2-2
 なにやら・よう・見える
 どこか・らしい・見える
 F₁K₉D₆ まるで・よう・気がする 3-4
 あたかも・よう・気がする
 F₃K₉D₆ ほとんど・よう・気がする

F₄K₉D₆ まったく・よう・気がする
 F₆K₉D₆ 今にも・よう・気がする
 F₆K₁₀D₆ 今にも・そう・気がする
 F₈K₉D₆ なにか・よう・気がする
 なにやら・よう・気がする 2-2
 なんだか・よう・気がする 8-12
 F₁K₁D₁₃ ちょうど・同じ・当たる
 FK~J 2-2
 F₁K₁₃D₁J₁ まるで・…とはよくも名付
 けた・思う・ほど
 F₄K₁₁D₅J₁ それこそ・ではないか・思
われる・ほど
 FKJ~ 1-1
 F₁K₉J₃D₅ まるで・よう・さえ・見え
る
 FSK~ 1-1
 F₁S₈K₉D₆ あたかも・…さながら・よ
 う・気がする
 J~ 15-38
 J₃D₁ まで・思う
 も・たとえる
 まで・なぞらえる
 J₃D₂ も・言う 3-9
 も・呼ぶ
 J₂D₄ でも・なる
 J₁D₅ ほど・感じられる
 というより・感じられる
 J₃D₅ も・思える
 も・思われる 2-2
 も・見える 2-3
 J₂D₆ でも・気がする
 J₃D₁₂ も・似る 6-10
 J₃D₁₃ も・当たる 3-3
 だって・相当する
 J₃D も・劣る

J~J 2-2

J₂D₃J₁ でも・言う・ほどJ₃D₃J₁ も・言う・ほど

J~K 1-3

J₃D₁K₉ も・見る・ようJ₂D₃K₉ でも・思われる・よう 1-2

JF~ 2-2

J₃F₃D₁ というものは・つくづく・思
うJ₁F₃D₃ というより・むしろ・言う

JK~ 10-11

J₂K₉D₁ かなにか・よう・感じるでも・よう・思うかなにか・よう・思うかな(ん)ぞ・よう・扱うJ₁K₉D₃ というより・よう・思えるJ₂K₉D₃ など・よう・思われるかなにか・よう・思われるでも・よう・錯覚されるでも・よう・見えるJ₂K₉D₆ でも・よう・気がする 2-2

K~ 42-412

K₉D₁ よう・感じる 7-15ごとし・感じる 1-3よう・思う 7-10よう・考える 2-2よう・心得るよう・錯覚する 1-2よう・見る 3-3よう・眺める 1-2K₂D₃ 同様・思われるK₉D₃ よう・感じられる 10-21ごとし・感じられるよう・覚えるよう・思える 9-10みたい・思えるよう・思われる 18-61よう・とれるよう・錯覚される 1-2よう・見える 25-92みたい・見える 2-2よう・見られるよう・眺められる 2-3よう・眼に映る 3-3よう・映るよう・聞こえる 2-2よう・扱われるK₁₀D₃ そう・感じられるそう・思える 1-2そう・思われるそう・見える 4-4K₉D₆ よう・気がする 31-156みたい・気がする 3-3よう・心地がするK₉D₇ よう・感じさせるよう・錯覚させる

K~J 2-2

K₁₀D₃J₁ そう・思える・ほどそう・見える・ほど

KJ~ 16-27

K₉J₃D₁ よう・さえ・感じるよう・も・思うよう・さえ・思うK₉J₃D₃ よう・も・感じられる 2-2よう・さえ・思える 2-2よう・も・思われる 2-2よう・さえ・思われるよう・すら・思われるよう・も・錯覚されるよう・も・見える 5-7

ごとし・も・見える
 よう・さえ・見える 2-2
 K₉J₃D₆ よう・も・気がする 4-4
 よう・さえ・気がする
 KKJ~ 1-1
 K₄K₉J₃D₆ 同類・よう・さえ・気がする
る
 M~ 2-2
 M₃~ 感じ・見える
 M₇~ たとえ・思い出す
 R~ 2-2
 R₄D₃ 一種の・呼ぶ
 R₄D₁₂ 一種の・似る
 RKMJ~ 1-1
 R₄K₉M₁J₃D₁ 一種の・よう・もの・さ
 え・感じる
 S~ 6-10
 S₁D₁ …なみ・考える
 …なみ・扱う
 S₁₀D₄ …そのもの・化す
 S₅D₅ …じみる・見える 2-3
 S₁₀D₅ …そのもの・見える
 S₉D₅ …として・印象づけられる
 S₉D₆ …という・気がする
 S₁D₁₃ …ふう・ままある
 S~J 1-1
 S₉D₉J₁ …という・気がする・くらい
 SK~ 1-1
 S₈K₉D₅ …さながら・よう・思われる
 SM~ 1-1
 S₉M₂D₅ …という・ふう・見える
 F 41-821
 D~D 1-1
 D₁₁F₃D₁₃ 想像する・ほぼ・当たる

~ 30-81
 F₁ まるで 13-18
さながら 2-2
ちょうど
 F₂ いわば 9-14
言ってみれば 2-2
たとえて言うなら
 F₃ ほとんど 2-2
 F₄ まさに
まったく 2-2
実に 2-3
ほんとうに 1-2
 F₇ つまり 4-4
要するに 2-2
 F₁₃ 薬にたくも
 F₁₅ から見れば
 F₁₆ で言えば 3-3
にたとえると
 F₁₇ がよく…ように
に見るように
にあるように
時々あるように
 F₁₈ ということがある
と言うでしょう
と言うじゃありませんか
ということがあるでしょう
という諺があるでしょう
ということもあるわけだし
のたとえの通り
 F₁₉ ではあるまいし 7-7
ではないが 2-3
 ~D 20-35
 F₁D₁ まるで・受けとる
 F₁D₅ まるで・見える 2-2
 F₁D₇ まるで・連想させる 2-2

- さながら・思わせる
 F₁D₁₂ まるで・似る
 あたかも・似る 3-3
 あたかも・相似る
 ちょうど・似る
 F₂D₁ たとえば・思う
 F₂D₃ いわば・形容する
 言えば・言う
 F₂D₁₂ 例をとれば・通じる
 たとえに言うが・似る
 F₃D₇ ほとんど・思わせる
 F₃D₁₂ ほとんど・似る 2-3
 F₄D₃ ほんとうに・疑われる
 どう見ても・見える
 F₆D₃ なにやら・思える
 F₆D₇ なにか・思わせる 2-2
 どことなく・思わせる
 F₆D₁₂ どこか・似る 2-3
 どことなく・似る
 F₁₄D₃ を見ると・感じられる
 F₁₄D₁₁ 見たら・思い出す
 F₁₆D₁₃ なら・よくある
 F₁₈D₁₃ …という…があるが・当ては
 まる
 ~DJ 2-2
 F₁D₁J₁ まるで・受けとる・くらい
 F₁D₃J₁ まるで・思われる・ほど
 ~DJD 1-1
 F₂D₁J₂D₃ 仮に・たとえる・でも・言
 う
 ~DJSK 1-1
 F₁D₁J₂S₂K₉ まるで・する・でも・…
 という・よう
 ~DK 1-1
 F₁D₁K₉ まるで・見る・よう

- ~DKD 1-1
 F₁D₁₂K₆D₆ あたかも・似る・よう・
 心持がする
 ~DKKM 1-1
 F₃D₃K₇K₉M₁ むしろ・言う・ふさわ
 しい・よう・代物
 ~ 1-1
 F₁₀F₁ それじゃ・まるで
 ~JK 2-2
 F₁F₁J₂K₉ まるで・まるで・でも・よ
 う
 F₁₀F₁J₃K₉ これでは・まるで・も・同
 然
 ~K 3-3
 F₁F₆K₉ まるで・なにか・よう
 F₁₀F₁K₉ あれじゃ・まるで・みたい
 F₁₀F₁K₁₁ それでは・まるで・ではな
 いか
 ~KD 1-1
 F₄F₁K₉D₃ まったく・まるで・よう・
 見える
 ~KM 1-1
 F₁₀F₁K₉M₁ これでは・まるで・よう・
 もの
 ~J 9-14
 F₁J₁ まるで・ほど 1-3
 まるで・くらい
 まるで・ばかり
 あたかも・ほど
 ちょうど・ほど
 いかにも・ばかり
 F₁J₂ まるで・でも
 F₃J₁ ほとんど・くらい 2-2
 F₄J₁ それこそ・ほど
 F₄J₃ まったく・というものは

- F₈J₁ なんだか・ほど
 ~JD 2-3
 F₁J₃D₅ ちょうど・さえ・思われる
 F₂J₃D₁₂ たとえば・も・似る
 F₃J₃D₃ ほとんど・も・言う
 ~JK 21-85
 F₁J₂K₉ まるで・でも・よう 16-44
まるで・かなにか・よう
まるで・でも・みたい 2-3
あたかも・でも・よう 4-10
あたかも・かなにか・よう
さも・でも・よう
 F₁J₃K₁ まるで・も・同じ
あたかも・も・等しい
 F₁J₃K₂ まるで・も・同様
 F₄J₄K₁ それこそ・も・等しい
 F₈J₂K₉ なにか・でも・よう 7-13
なにやら・でも・よう 1-2
なんだか・でも・よう 2-2
どこぞ・でも・よう
 F₈J₂K₁₀ なにか・でも・そう
 F₉J₃K₁₁ もし・…が…なら…は・では
 ないか
 F₁₁J₂K₁₂ なにも・でも・ではない
 ~JKD 5-5
 F₁J₂K₉D₁ まるで・でも・よう・思う
さも・でも・よう・感じる
 F₁J₃K₉D₅ まるで・でも・よう・見える
 F₄J₂K₉D₅ ほんとうに・でも・よう・
 見える
 F₈J₃K₉D₆ なにか・でも・よう・気が
 する
 ~JKM 2-2
 F₁J₂K₉M₂ まるで・でも・よう・よう

- す
 F₂J₂K₉M₃ たとえば・でも・よう・心
 持ち
 ~JM 3-4
 F₁J₂M₂ あたかも・でも・ようす
 F₁J₂M₃ まるで・でも・つもり
 F₃J₁M₁ せいぜい・くらい・こと
 F₃J₁M₃ せいぜい・くらい・気持ち
 ~JSK 1-1
 F₁J₂S₃K₉ まるで・でも・…という・
 よう
 ~K 36-416
 F₁K₁ まるで・同じ
まるで・そっくりだ 2-2
 F₁K₂ まるで・異なるない
ちょうど・同程度
ちょうど・一般
 F₁K₉ まるで・よう 28-207
まるで・みたい 12-24
さながら・よう
さながら・ごとし
あたかも・よう 12-45
あたかも・ごとし
ちょうど・よう 12-29
いかにも・よう
さも・よう 2-3
 F₁K₁₁ まるで・にすぎない
 F₂K₁ たとえて言う・と・近い
 F₂K₂ 言う・たら・一つ
 F₂K₉ いわば・よう 2-3
言えば・みたい
たとえば・よう 5-6
たとえて言えば・よう
 F₃K₁ そっくり・同じ
ほとんど・近い

まず・似たりよったり
 F₃K₂ ほとんど・変わらない
 ほとんど・異ならない
 F₃K₉ ほとんど・よう 8-11
 ほとんど・みたい
 半分・よう 2-9
 なかば・よう 2-2
 ただ・よう
 F₃K₁₁ もはや・である
 ほとんど・と言っていい
 F₄K₁ まったく・同じ
 まったく・瓜二つ
 ほんとうに・そっくりだ
 F₄K₉ まさに・よう 3-4
 まったく・よう 3-5
 ほんとうに・よう
 ほんなこと・よう
 それこそ・よう
 それこそ・みたい
 文字通り・よう
 F₆K₉ 今にも・よう
 F₆K₁₀ 今にも・そう 4-7
 あわや・そう
 F₇K₉ いずれ・よう
 F₇K₁₁ 結局・にすぎない
 F₈K₉ なにか・よう 6-6
 なにか・みたい
 なにかしら・よう
 なんだか・よう 6-7
 なんだか・みたい 3-3
 どこか・よう
 どこか・みたい
 F₁₁K₁₂ まさか・ではあるまい
 F₁₂K₂ 大して・違いがない
 どれだけも・変わらない

露一つ・違わない

寸分・違わない

~KD 23-56

F₁K₁D₁₃ ちょうど・同じ・当たる
 F₁K₉D₁ まるで・よう・思う
 あたかも・よう・見せかける
 あたかも・ごとし・眺める
 いかにも・よう・思う
 F₁K₉D₅ まるで・よう・感じられる
 2-2
 まるで・よう・思われる
 まるで・よう・考えられる
 まるで・よう・見える 4-4
 まるで・みたい・見える
 あたかも・よう・見える 3-5
 あたかも・よう・見なされる
 ちょうど・よう・感じられる
 F₁K₉D₆ まるで・よう・気がする 3-4
 あたかも・よう・気がする
 F₂K₉D₅ いわば・よう・思われる
 いわば・よう・見える
 F₃K₉D₆ ほとんど・よう・気がする
 F₄K₉D₆ まったく・よう・気がする
 F₆K₉D₆ 今にも・よう・気がする
 F₆K₁₀D₅ 今にも・そう・思われる
 F₆K₁₀D₆ 今にも・そう・気がする
 F₈K₉D₁ なにか・よう・思う
 なにやら・よう・思う
 F₈K₉D₅ なにか・よう・見える 2-2
 なにやら・よう・思われる
 なにやら・よう・見える
 どこか・らしい・見える
 どこやら・よう・思われる
 F₈K₉D₆ なにか・よう・気がする
 なにやら・よう・気がする 2-2

なんだか・よう・気がする 8-12
 ~KDJ 2-2
 F₁K₁₃D₁J₁ まるで・…とはよくも名付
 けた・思う・ほど
 F₄K₁₁D₅J₁ それこそ・ではないか・思
 われる・ほど
 ~KJ 1-1
 F₃K₁J₁ ほとんど・等しい・くらい
 ~KJD 1-1
 F₁K₉J₃D₅ まるで・よう・さえ・見え
 る
 ~KK 3-3
 F₁K₁K₉ まるで・同じ・よう
ちょうど・同じ・よう 2-2
 ~KKM 1-1
 F₃K₁K₉M₁ ほとんど・近い・よう・
 もの
 ~KM 20-53
 F₁K₉M₁ まるで・よう・もの 5-11
ちょうど・よう・もの
 F₁K₉M₂ まるで・よう・ぐあい 2-2
あたかも・よう・ぐあい 2-2
ちょうど・よう・かつこう
 F₁K₉M₃ まるで・よう・感じ 4-4
まるで・よう・感触
まるで・よう・気持ち 2-2
まるで・よう・思い
さながら・よう・思い
ちょうど・よう・気持ち
 F₂K₁M₁ たとえば・同じ・こと
 F₂K₉M₁ いわば・よう・もの 3-3
言えば・みたい・もの
言えば・よう・もの
 F₃K₉M₁ まあ・よう・もの
 F₃K₉M₃ 半分・よう・気持ち

F₄K₁M₁ まったく・同じ・こと
 F₄K₉M₁ まさに・よう・もの 1-2
 F₆K₁₀M₃ 今にも・そう・感じ
 F₇K₉M₁ つまり・みたい・もの
要するに・よう・もの
 F₈K₉M₁ なにか・よう・もの 3-3
 F₈K₉M₃ なにか・よう・気持ち 2-2
なにやら・よう・気 1-2
なにやら・よう・心持ち 2-5
 ~KRM 1-1
 F₁K₉R₄M₃ まるで・よう・一種の・感
 ~M 11-16
 F₁M₂ まるで・ぐあい 1-2
まるで・形
あたかも・ふう
いかにも・おもむき 2-2
 F₁M₃ まるで・感じ
まるで・つもり
 F₂M₄ 言ってみるなら・代わり
 F₂M₅ いわば・一種
 F₄M₂ まさに・概
 F₄M₃ まったく・気持ち
まったく・印象
 F₆M₃ なにか・感じ
なにか・気持ち
どこか・感じ
 ~R 1-1
 F₇R₄ 結局・一種の
 ~RKM 1-1
 F₂R₄K₉M₁ いわば・一種の・みたい・
 もの
 ~S 5-7
 F₁S₁ まるで・…級
 F₁S₄ まるで・…扱
 F₁S₉ まるで・…さながら 2-2

まるで・…よろしく
 F₂S₉ いわば・…という
 F₃S₇ まあ・…同然
 ~SK 2-2
 F₁S₉K₉ さながら・…という・よう
 F₂S₉K₉ いわば・…という・よう
 ~SKD 1-1
 F₁S₉K₉D₉ あたかも・…さながら・よ
 う・気がする
 ~SM 4-5
 F₁S₉M₂ あたかも・…という・ふう
 1-2
 F₃S₉M₂ まあ・…という・形
いささか・…という・おもむき
 F₇S₉M₁ つまり・…という・わけ
 J~ 2-2
 J₁F₃ というより・むしろ 2-2
 J~D 2-2
 J₁F₃D₃ というより・むしろ・言う
 J₅F₉D₁ というものは・つくづく・思う
 J~JK 1-1
 J₁F₃J₂K₉ というより・なにか・でも・
 よう
 J~K 2-2
 J₁F₃K₁ というより・むしろ・近い
 J₃F₁₂K₂ だって・あんまり・変わらな
 い
 J~SK 1-1
 J₁F₂S₉K₉ というより・いわば・…と
 いう・よう
 J 47-750
 D~ 16-19
 D₁J₁ 思う・ほど 3-3
 紛う・ほど

D₂J₁ 比する・ほど
 D₃J₁ 言う・ほど 2-2
 形容する・ほど
 D₅J₁ 思われる・ほど 4-4
 疑われる・ほど 2-2
 見える・ほど
 思われる・くらい
 疑われる・くらい
 D₇J₁ 思わせる・ほど
 D₁₂J₁ 似る・くらい
 D~KD 1-1
 D₁J₂K₉D₉ 思う・ほど・よう・見える
 D~M 1-1
 D₃J₁M₁ 言う・くらい・もの
 DK~D 1-1
 D₁K₉J₃D₉ 見る・よう・さえ・気がす
 る
 FD~ 2-2
 F₁D₁J₁ まるで・受けとる・くらい
 F₁D₅J₁ まるで・思われる・ほど
 FD~D 1-1
 F₉D₁J₂D₂ 仮に・たとえる・でも・言
 う
 FD~SK 1-1
 F₁D₁J₂S₉K₉ まるで・する・でも・…
 という・よう
 FF~K 2-2
 F₁F₁J₂K₉ まるで・まるで・でも・よ
 う
 F₁₀F₁J₃K₉ これでは・まるで・も・同
 然
 F~ 9-14
 F₁J₁ まるで・ほど 1-3
 あたかも・ほど
 ちょうど・ほど

- まるで・くらい
 まるで・ばかり
 いかにも・ばかり
 F₃J₁ ほとんど・くらい 2-2
 F₄J₁ それこそ・ほど
 F₈J₁ なんだか・ほど
 F₁J₂ まるで・でも
 F₄J₅ まったく・というものは
 F~D 2-3
 F₁J₃D₅ ちょうど・さえ・思われる
 F₂J₃D₁₂ たとえば・も・似る
 F₃J₃D₃ ほとんど・も・言う
 F~K 21-85
 F₁J₂K₉ まるで・でも・よう 16-44
 まるで・でも・みたい 2-3
 あたかも・でも・よう 4-10
 さも・でも・よう
 まるで・かなにか・よう
 あたかも・かなにか・よう
 F₈J₂K₉ なにか・でも・よう 7-13
 なにやら・でも・よう 1-2
 なんだか・でも・よう 2-2
 どこぞ・でも・よう
 F₈J₂K₁₀ なにか・でも・そう
 F₁₁J₂K₁₂ なにも・でも・ではない
 F₁J₃K₁ まるで・も・同じ
 あたかも・も・等しい
 F₁J₃K₂ まるで・も・同様
 F₄J₃K₁ それこそ・も・等しい
 F₉J₆K₁₁ もし・…が…なら…は…・で
 はないか
 F~KD 5-5
 F₁J₂K₉D₁ まるで・でも・よう・思う
 さも・でも・よう・感じる
 F₁J₂K₉D₅ まるで・でも・よう・見え

- る
 F₄J₂K₉D₅ ほんとうに・でも・よう・
 見える
 F₈J₂K₉D₅ なにか・でも・よう・気が
 する
 F~KM 2-2
 F₁J₂K₉M₂ まるで・でも・よう・よう
 す
 F₄J₂K₉M₃ たとえば・でも・よう・心
 持ち
 F~M 3-4
 F₃J₁M₁ せいぜい・くらい・こと
 F₃J₁M₃ せいぜい・くらい・気持ち
 F₁J₂M₂ あたかも・でも・ようす
 F₁J₂M₃ まるで・でも・つもり
 F~SK 1-1
 F₁J₂S₉K₉ まるで・でも・…という・
 よう
 FKD~ 2-2
 F₁K₁₃D₁J₁ まるで・…とはよくも名付
 けた・思う・ほど
 F₄K₁₁D₅J₁ それこそ・ではないか・思
 われる・ほど
 FK~ 1-1
 F₃K₁J₁ ほとんど・等しい・くらい
 F~D 1-1
 F₁K₉J₃D₅ まるで・よう・さえ・見え
 る
 ~D 15-38
 J₁D₅ ほど・感じられる
というより・感じられる
 J₂D₄ でも・なる
 J₂D₆ でも・気がする
 J₃D₁ も・たとえる
まで・思う

まで・なぞらえる
 J₃D₃ も・言う 3-9
も・呼ぶ
 J₃D₅ も・思える
も・思われる 2-2
も・見える 2-3
 J₃D₁₂ も・似る 6-10
 J₃D₁₃ も・当たる 3-3
だって・相当する
 J₃D₁₄ も・劣る
 ~DJ 2-2
 J₂D₃J₁ でも・言う・ほど
 J₃D₃J₁ も・言う・ほど
 ~DK 1-3
 J₂D₅K₉ でも・思われる・よう 1-2
 J₃D₁K₉ も・見る・よう
 ~F 2-2
 J₁F₃ というより・むしろ 2-2
 ~FD 2-2
 J₁F₃D₃ というより・むしろ・言う
 J₃F₅D₁ というものは・つくづく・思
 う
 ~F~K 1-1
 J₁F₃J₂K₉ というより・なにか・でも・
 よう
 ~FK 2-2
 J₁F₃K₁ というより・むしろ・近い
 J₃F₁₂K₂ だって・あんまり・変わらな
 い
 ~FSK 1-1
 J₁F₂S₃K₉ というより・いわば・…と
 いう・よう
 ~ 41-290
 J₁ ほど 34-139
くらい 12-24

ばかり 12-27
より 13-20
というより
 J₂ でも 5-9
など
 J₃ も
だって 4-4
すら
 J₄ に
と
 J₆ の 20-49
 J₇ …であれ…であれ
…と…は 2-2
 J₈ …が…なら…は… 2-2
…なら…が…では…
…を…とすれば…は… 2-2
…を…と呼ぶなら…は…
…を…とすれば…は…にたとえて
いい
…は…だが…も…
…がかえって…でありむしろ…は
…である
 ~ 5-12
 J₁J₁ に比べて・のほうが
 J₃J₁ も・ほど 2-2
も・ばかり 2-9
 ~K 33-151
 J₁K₉ より・よう
 J₂K₈ など・比でない
 J₂K₉ でも・よう 30-104
でも・ごとし
でも・みたい
かなにか・よう 4-7
かな(ん)ぞ・よう 4-5
 J₂K₁₀ でも・そう 4-6

でも・かねない
 J₃K₁ も・等しい 2-4
 J₃K₂ も・同様 2-2
も・一つ
 J₃K₃ も・同然 3-4
 J₃K₅ だって・その通り
だって・そうだ
 J₃K₉ も・よう 3-5
もまた・ごとし 2-2
だって・よう
 J₃K₁₀ も・そう
も・かねない
まで・そう
 ~KD 10-11
 J₁K₉D₅ というより・よう・思える
 J₂K₉D₁ でも・よう・思う
かなにか・よう・感じる
かなにか・よう・思う
かな(ん)ぞ・よう・扱う
 J₂K₉D₅ でも・よう・錯覚される
でも・よう・見える
など・よう・思われる
かなにか・よう・思われる
 J₂K₉D₆ でも・よう・気がする 2-2
 ~K~ 2-2
 J₃K₇J₁ も・ひけをとらない・ほど
も・及ばない・くらい
 ~KM 7-8
 J₂K₉M₃ でも・よう・気持ち 3-3
でも・よう・気分
 J₃K₁M₁ も・同じ・こと 2-2
だって・同じ・こと
 J₃K₉M₃ も・よう・心持ち
 ~M 5-7
 J₁M₃ ほど・感じ

ほど・気持ち
ほど・思い
ばかり・思い
 J₂M₃ でも・気
でも・思い
 J₃M₃ も・思い
 ~S 2-2
 J₂S₉ でも・…という
 J₃S₈ も・…よろしく
 ~SK 3-4
 J₂S₉K₉ でも・…という・よう 3-4
 ~SKM 1-1
 J₂S₉K₉M₁ でも・…という・よう・も
 の
 ~SM 1-1
 J₁S₉M₃ というより・…という・感じ
 KD~ 2-2
 K₁₀D₅J₁ そう・思える・ほど
 そう・見える・ほど
 K~ 12-21
 K₁J₁ 同じ・ほど 2-3
 同じ・くらい 2-2
 K₆J₁ わからない・ほど
 K₇J₁ 負けない・ほど
 K₁₀J₁ そう・ほど 2-2
 K₁₁J₁ と言っている・ほど
 K₉J₃ よう・も 6-9
 よう・さえ 1-2
 K~D 16-27
 K₉J₃D₁ よう・も・思う
 よう・さえ・感じる
 よう・さえ・思う
 K₉J₃D₅ よう・も・感じられる 2-2
 よう・も・思われる 1-2
 よう・も・錯覚される

よう・も・見える 5-7
 ごとし・も・見える
 よう・さえ・思える 2-2
 よう・さえ・思われる
 よう・さえ・見える 2-2
 よう・すら・思われる
 K₉J₃D₆ よう・も・気がする 4-4
 よう・さえ・気がする
 K~K~ 1-1
 K₉J₃K₉J₃ よう・も・よう・も
 K~M~ 1-1
 K₉J₃M₂J₃ よう・も・ようす・も
 KKK~ 1-1
 K₉K₉K₉J₃ よう・よう・よう・も
 KK~D 1-1
 K₄K₉J₃D₆ 同類・よう・さえ・気がする
 M~ 1-1
 M₃J₁ 思い・ほど
 R~ 2-2
 R₁J₁ へたな・より
 R₄J₁ ほんの・ほど
 R~K 1-1
 R₁J₂K₉ どんな・でも・よう
 R~M 1-1
 R₃J₁M₃ ほんの・くらい・気持ち
 RKM~D 1-1
 R₄K₉M₁J₃D₁ 一種の・よう・もの・さ
え・感じる
 SD~ 1-1
 S₉D₆J₁ …という・気がする・くらい
 S~ 2-2
 S₅J₁ …じみる・ほど
 S₉J₁ …という・ほど
 SM~ 1-1

S₂M₃J₁ …的・感じ・ほど

K 50-6011

D~ 8-17

D₁K₉ 思う・よう 1-2

見る・よう 3-3

たとえる・よう

D₅K₉ 感じられる・よう

D₇K₉ 思わせる・よう 2-5

思い出させる・よう

連想させる・よう

D₁₃K₉ 類する・よう

D₄K₁₀ なる・かねない

D₈K₁₁ 形容する・と言っていい

DJ~D 1-1

D₁J₁K₉D₅ 思う・ほど・よう・見える

D~D 4-4

D₁K₉D₆ 見る・よう・気がする

D₃K₉D₆ 言う・よう・気がする

D₅K₉D₆ 見える・よう・気がする

D₁₂K₉D₅ 似る・よう・思える

D~JD 1-1

D₁K₉J₃D₆ 見る・よう・さえ・気がする

D~M 2-2

D₁K₉M₁ 見る・よう・もの

D₁₂K₉M₃ 似る・よう・感じ

FDJS~ 1-1

F₁D₁J₂S₉K₉ まるで・する・でも…

という・よう

FD~ 1-1

F₁D₁K₉ まるで・見る・よう

FD~D 1-1

F₁D₁₂K₉D₆ あたかも・似る・よう・心
持がする

FD~M 1-1

F₃D₃K₇K₉M₁ むしろ・言う・ふさわし
い・よう・代物

FFJ~ 2-2

F₁₀F₁J₃K₃ これでは・まるで・も・同然

F₁F₁J₂K₃ まるで・まるで・でも・よう

FF~ 3-3

F₁F₆K₉ まるで・なにか・よう

F₁₀F₁K₉ あれじゃ・まるで・みたい

F₁₀F₁K₁₁ それでは・まるで・ではな
いか

FF~D 1-1

F₄F₁K₉D₅ まったく・まるで・よう・
見える

FF~M 1-1

F₁₀F₁K₉M₁ これでは・まるで・よう・
もの

FJ~ 21-85

F₁J₃K₁ まるで・も・同じ
あたかも・も・等しい

F₄J₃K₁ それこそ・も・等しい

F₁J₃K₂ まるで・も・同様

F₁J₂K₉ まるで・でも・よう 16-44

まるで・かなにか・よう

あたかも・でも・よう 4-10

あたかも・かなにか・よう

さも・でも・よう

まるで・でも・みたい 2-3

F₈J₂K₉ なにか・でも・よう 7-13

なにやら・でも・よう 1-2

なんだか・でも・よう 2-2

どこぞ・でも・よう

F₈J₂K₁₀ なにか・でも・そう

F₉J₈K₁₁ もし・…が…なら…は…・で
はないか

F₁₁J₂K₁₂ なにも・でも・ではない

FJ~D 5-5

F₁J₂K₉D₁ まるで・でも・よう・思う
さも・でも・よう・感じる

F₁J₂K₉D₃ まるで・でも・よう・見え
る

F₄J₂K₉D₅ ほんとうに・でも・よう・
見える

F₈J₂K₉D₈ なにか・でも・よう・気がす
る

FJ~M 2-2

F₁J₂K₉M₂ まるで・でも・よう・よう
す

F₂J₂K₉M₃ たとえば・でも・よう・心
持ち

FJS~ 1-1

F₁J₂S₉K₉ まるで・でも・…という・
よう

F~ 36-416

F₁K₁ まるで・同じ
まるで・そっくりだ 2-2

F₂K₁ たとえて言うと・近い

F₃K₁ ほとんど・近い

そっくり・同じ

まず・似たりよったり

F₄K₁ まったく・同じ

ほんとうに・そっくりだ

まったく・瓜二つ

F₁K₂ ちょうど・同程度

ちょうど・一般

まるで・異なる

F₂K₂ 言うたら・一つ

F₃K₂ ほとんど・変わらない

ほとんど・異ならない
 F₁₂K₂ 大して・違いがない
 どれだけでも・変わりがない
 露一つ・違わない
 寸分・違わない
 F₁K₉ まるで・よう 28-207
 さながら・よう
 あたかも・よう 12-45
 ちょうど・よう 12-29
 いかにも・よう
 さも・よう 2-3
 さながら・ごとし
 あたかも・ごとし
 まるで・みたい 12-24
 F₂K₉ いわば・よう 2-3
 たとえば・よう 5-6
 たとえて言えば・よう
 言えば・みたい
 F₃K₉ ほとんど・よう 8-11
 半分・よう 2-9
 なかば・よう 2-2
 ただ・よう
 ほとんど・みたい
 F₄K₉ まさに・よう 3-4
 まったく・よう 3-5
 ほんとうに・よう
 ほんなこと・よう
 それこそ・よう
 それこそ・みたい
 文字通り・よう
 F₆K₉ 今にも・よう
 F₇K₉ いずれ・よう
 F₈K₉ なにか・よう 6-6
 なにかしら・よう
 なんだか・よう 6-7

どこか・よう
 なにか・みたい
 なんだか・みたい 3-3
 どこか・みたい
 F₆K₁₀ 今にも・そう 4-7
 あわや・そう
 F₁K₁₁ まるで・にすぎない
 F₃K₁₁ もはや・である
 ほとんど・と書いていい
 F₇K₁₁ 結局・にすぎない
 F₁₁K₁₂ まさか・ではあるまい
 F~D 23-56
 F₁K₁D₁₃ ちょうど・同じ・当たる
 F₁K₉D₁ まるで・よう・思う
 あたかも・よう・見せかける
 いかにも・よう・思う
 あたかも・ごとし・眺める
 F₁K₉D₅ まるで・よう・感じられる
 2-2
 まるで・よう・思われる
 まるで・よう・考えられる
 まるで・よう・見える 4-4
 あたかも・よう・見える 3-5
 あたかも・よう・見なされる
 ちょうど・よう・感じられる
 まるで・みたい・見える
 F₁K₉D₆ まるで・よう・気がする 3-4
 あたかも・よう・気がする
 F₂K₉D₅ いわば・よう・思われる
 いわば・よう・見える
 F₃K₉D₆ ほとんど・よう・気がする
 F₄K₉D₆ まったく・よう・気がする
 F₆K₉D₆ 今にも・よう・気がする
 F₈K₉D₁ なにか・よう・思う
 なにやら・よう・思う

- F₈K₉D₅ なにか・よう・見える 2-2
 なにやら・よう・思われる
 なにやら・よう・見える
 どこやら・よう・思われる
 どこか・らしい・見える
 F₈K₉D₆ なにか・よう・気がする
 なにやら・よう・気がする 2-2
 なんだか・よう・気がする 8-12
 F₆K₁₀D₅ 今にも・そう・思われる
 F₆K₁₀D₆ 今にも・そう・気がする
 F~DJ 2-2
 F₄K₁₁D₅J₁ それこそ・ではないか・思
 われる・ほど
 F₁K₁₃D₁J₁ まるで・…とはよくも名付
けた・思う・ほど
 F~J 1-1
 F₃K₁J₁ ほとんど・等しい・くらい
 F~JD 1-1
 F₁K₉J₃D₅ まるで・よう・さえ・見え
 る
 F~~ 3-3
 F₁K₁K₉ まるで・同じ・よう
 ちょうど・同じ・よう 2-2
 F~~M 1-1
 F₃K₁K₉M₁ ほとんど・近い・よう・も
 の
 F~M 20-53
 F₂K₁M₁ たとえば・同じ・こと
 F₄K₁M₁ まったく・同じ・こと
 F₁K₉M₁ まるで・よう・もの 5-11
 ちょうど・よう・もの
 F₁K₉M₂ まるで・よう・ぐあい 2-2
 あたかも・よう・ぐあい 2-2
 ちょうど・よう・かっこう
 F₁K₉M₃ まるで・よう・感じ 4-4
 まるで・よう・感触
 まるで・よう・気持ち 2-2
 まるで・よう・思い
 さながら・よう・思い
 ちょうど・よう・気持ち
 F₂K₉M₁ いわば・よう・もの 3-3
 言えば・よう・もの
 言えば・みたい・もの
 F₃K₉M₁ まあ・よう・もの
 半分・よう・気持ち
 F₄K₉M₁ まさに・よう・もの 1-2
 F₇K₉M₁ 要するに・よう・もの
 つまり・みたい・もの
 F₈K₉M₁ なにか・よう・もの 3-3
 F₈K₉M₃ なにか・よう・気持ち 2-2
 なにやら・よう・気 1-2
 なにやら・よう・心持ち 2-5
 F₆K₁₀M₃ 今にも・そう・感じ
 F~RM 1-1
 F₁K₉R₄M₃ まるで・よう・一種の・感
 FR~M 1-1
 F₂R₄K₉M₁ いわば・一種の・みたい・
 もの
 FS~ 2-2
 F₁S₃K₉ さながら・…という・よう
 F₂S₃K₉ いわば・…という・よう
 FS~D 1-1
 F₁S₃K₉D₆ あたかも・…さながら・よ
う・気がする
 JD~ 1-3
 J₂D₃K₉ でも・思われる・よう 1-2
 J₃D₁K₉ も・見る・よう
 JFJ~ 1-1
 J₁F₈J₂K₉ というより・なにか・でも・
よう

JF~ 2-2

J₁F₃K₁ というより・むしろ・近いJ₁F₁₂K₂ だって・あんまり・変わらない
い

JFS~ 1-1

J₁F₂S₉K₆ というより・いわば・…と
いう・よう

J~ 33-151

J₃K₁ も・等しい 2-4J₃K₂ も・同様 2-2
も・一つJ₃K₃ も・同然 3-4J₃K₅ だって・その通り
だって・そうだJ₂K₆ など・比でないJ₁K₉ より・ようJ₂K₉ でも・よう 30-104かなにか・よう 4-7かな(ん)ぞ・よう 4-5でも・ごとしでも・みたいJ₃K₉ も・よう 3-5だって・ようもまた・ごとし 2-2J₂K₁₀ でも・そう 4-6でも・かねないJ₃K₁₀ も・そうまで・そうも・かねない

J~D 10-11

J₁K₉D₅ というより・よう・思えるJ₂K₉D₁ でも・よう・思うかなにか・よう・感じるかなにか・よう・思うかな(ん)ぞ・よう・扱うJ₂K₉D₅ でも・よう・錯覚されるでも・よう・見えるなど・よう・思われるかなにか・よう・思われるJ₂K₉D₆ でも・よう・気がする 2-2

J~J 2-2

J₃K₇J₁ も・ひけをとらない・ほども・及ばない・くらい

J~M 7-8

J₃K₁M₁ も・同じ・こと 2-2だって・同じ・ことJ₂K₉M₃ でも・よう・気持ち 3-3でも・よう・気分J₃K₉M₃ も・よう・心持ち

JS~ 3-4

J₂S₉K₉ でも・…という・よう 3-4

JS~M 1-1

J₂S₉K₉M₁ でも・…という・よう・も
の

~ 50-4222

K₁ 近い 4-6等しい 6-13同じ 14-19そっくりだ 3-3K₂ 同様 2-3同列一つ一般変わらない選ぶところがないK₃ 同然 2-2K₆ わからない 1-4K₇ 及ばない 2-2K₉ よう 50-3875ごとし 17-82

みたい 33-147
 K₁₀ そう 18-38
かねない 1-2
 K₁₁ さ
というところだ 2-2
といったところだ
というものだ
にほかならない
というよりほかはない
にすぎない 8-10
なんでも…を…と…ばまちがいな
い
 K₁₂ ではない
 K₁₃ …はよかった 2-2
 ~D 43-412
 K₂D₅ 同様・思われる
 K₉D₁ よう・感じる 7-15
よう・思う 7-10
よう・考える 2-2
よう・心得る
よう・錯覚する 1-2
よう・見る 3-3
よう・眺める 1-2
ごとし・感じる 1-3
 K₆D₅ よう・感じられる 10-21
よう・覚える
よう・思える 9-10
よう・思われる 18-61
よう・とれる
よう・錯覚される 1-2
よう・見える 25-92
よう・見られる
よう・眺められる 2-3
よう・眼に映る 3-3
よう・映る

よう・聞こえる 2-2
よう・扱われる
ごとし・感じられる
みたい・思える
みたい・見える 2-2
 K₉D₆ よう・気がする 31-156
よう・心地がする
みたい・気がする 3-3
 K₉D₇ よう・感じさせる
よう・錯覚させる
 K₁₀D₅ そう・感じられる
そう・思える 1-2
そう・思われる
そう・見える 4-4
 ~DJ 2-2
 K₁₀D₅J₁ そう・思える・ほど
そう・見える・ほど
 ~J 12-21
 K₁J₁ 同じ・ほど 2-3
同じ・くらい 2-2
 K₆J₁ わからない・ほど
 K₇J₁ 負けない・ほど
 K₉J₅ よう・も 6-9
よう・さえ 1-2
 K₁₀J₁ そう・ほど 2-2
 K₁₁J₁ と書いていい・ほど
 ~JD 16-27
 K₉J₅D₁ よう・も・思う
よう・さえ・感じる
よう・さえ・思う
 K₉J₅D₅ よう・も・感じられる 2-2
よう・も・思われる 1-2
よう・も・錯覚される
よう・も・見える 5-7
よう・さえ・思える 2-2

よう・さえ・思われる
よう・さえ・見える 2-2
よう・すら・思われる
ごとし・も・見える
 K₉J₃D₆ よう・も・気がする 4-4
よう・さえ・気がする
 ~J~J 1-1
 K₉J₃K₉J₃ よう・も・よう・も
 ~JMJ 1-1
 K₉J₃M₂J₃ よう・も・ようす・も
 ~ 9-13
 K₁K₉ 同じ・よう 8-11
 K₉K₅ よう・そんなもの 1-2
 ~~JD 1-1
 K₁K₉J₃D₆ 同類・よう・さえ・気がする
 る
 ~~~ 1-1  
 K<sub>9</sub>K<sub>9</sub>K<sub>9</sub> よう・よう・よう  
 ~~~J 1-1  
 K₉K₉K₉J₃ よう・よう・よう・も
 ~~M 2-2
 K₉K₉M₁ 同じ・よう・もの
同じ・よう・こと
 ~M 43-425
 K₁M₁ 同じ・こと 3-10
同じ・もの
 K₁M₂ 同じ・ぐあい
 K₁M₃ 同じ・気持ち
 K₁M₄ 同じ・役員
 K₉M₁ よう・もの 33-148
よう・こと 6-10
よう・まね 2-3
ごとし・もの 3-3
みたい・もの 12-22
みたい・こと 2-2

みたい・まね
らしい・もの
 K₉M₂ よう・気配
よう・おもむき 3-3
よう・風情
よう・ふう 3-3
よう・状態 2-3
よう・観
よう・ぐあい 2-2
よう・あんばい
よう・調子 5-7
よう・口調
よう・形 9-12
よう・かっこう 3-3
みたい・ふう
 K₉M₃ よう・感じ 16-41
よう・感触
よう・気 8-16
よう・気持ち 20-56
よう・気分 5-9
よう・心持ち 8-21
よう・心地 2-2
よう・心 3-7
よう・思い 10-13
よう・つもり
よう・印象 2-2
みたい・気持ち 2-3
 K₉M₄ よう・役員
 K₉M₅ よう・錯覚 6-8
 K₁₀M₃ そう・感じ
 RJ~ 1-1
 R₁J₂K₉ どんな・でも・よう
 R~ 7-10
 R₂K₂ 大した・変わらない
 なんの・変わらない

R_3K_9 いわゆる・よう
 ほんの・よう
 R_4K_9 一種の・よう 4-5
 一種の・みたい
 $R \sim M$ 1-1
 $R_4K_9M_1$ 一種の・よう・もの
 $R \sim MJD$ 1-1
 $R_4K_9M_1J_3D_1$ 一種の・よう・もの・さ
 え・感じる
 $S \sim$ 5-8
 S_1K_9 …状・よう
 S_9K_9 …という・よう 4-6
 $S_{10}K_9$ …そのもの・よう
 $S \sim D$ 1-1
 $S_9K_9D_5$ …さながら・よう・思われる
 $S \sim M$ 9-9
 $S_9K_9M_1$ …という・よう・もの
 $S_9K_9M_2$ …という・よう・おもむき
 …という・よう・ぐあい 2-2
 …という・よう・かっこう
 …という・よう・図
 $S_9K_9M_3$ …という・よう・感じ 3-3

 M 48-726
 $DJ \sim$ 1-1
 $D_3J_1M_1$ 言う・くらい・もの
 $DK \sim$ 2-2
 $D_1K_9M_1$ 見る・よう・もの
 $D_{12}K_9M_3$ 似る・よう・感じ
 $DR \sim$ 1-1
 $D_{11}R_4M_6$ 思い浮かべる・一種の・相
 似
 $FDKK \sim$ 1-1
 $F_3D_3K_7K_9M_1$ むしろ・言う・ふさわ
 しい・よう・代物

$FFK \sim$ 1-1
 $F_{10}F_1K_9M_1$ これでは・まるで・よう・
もの
 $FJK \sim$ 2-2
 $F_{12}K_9M_2$ まるで・でも・よう・よう
す
 $F_2J_2K_9M_3$ たとえば・でも・よう・心
 持ち
 $FJ \sim$ 3-4
 $F_3J_1M_1$ せいぜい・くらい・こと
 $F_{12}J_2M_2$ あたかも・でも・ようす
 $F_{12}J_2M_3$ まるで・でも・つもり
 $F_2J_1M_3$ せいぜい・くらい・気持ち
 $FKK \sim$ 1-1
 $F_3K_1K_9M_1$ ほとんど・近い・よう・
もの
 $FK \sim$ 20-53
 $F_1K_9M_1$ まるで・よう・もの 5-11
 ちょうど・よう・もの
 $F_2K_1M_1$ たとえば・同じ・こと
 $F_2K_9M_1$ いわば・よう・もの 3-3
 言えば・よう・もの
 言えば・みたい・もの
 $F_3K_9M_1$ まあ・よう・もの
 $F_4K_1M_1$ まったく・同じ・こと
 $F_4K_9M_1$ まさに・よう・もの 1-2
 $F_7K_9M_1$ 要するに・よう・もの
 つまり・みたい・もの
 $F_8K_9M_1$ なにか・よう・もの 3-3
 $F_{11}K_9M_2$ まるで・よう・ぐあい 2-2
 あたかも・よう・ぐあい 2-2
 ちょうど・よう・かっこう
 $F_{11}K_9M_3$ まるで・よう・感じ 4-4
 まるで・よう・感触
 まるで・よう・気持ち 2-2

ちょうど・よう・気持ち
 まるで・よう・思い
 さながら・よう・思い
 F₃K₉M₃ 半分・よう・気持ち
 F₆K₁₀M₃ 今にも・そう・感じ
 F₉K₉M₃ なにか・よう・気持ち 2-2
 なにやら・よう・気 1-2
 なにやら・よう・心持ち 2-5
 FKR~ 1-1
 F₁K₉R₄M₃ まるで・よう・一種の・感
 F~ 11-16
 F₁M₂ まるで・ぐあい 1-2
 まるで・形
 あたかも・ふう
 いかにも・おもむき 2-2
 F₄M₂ まさに・概
 F₁M₃ まるで・感じ
 まるで・つもり
 F₄M₃ まったく・気持ち
 まったく・印象
 F₈M₃ なにか・感じ
 どこか・感じ
 なにか・気持ち
 F₂M₄ 言ってみるなら・代わり
 F₂M₅ いわば・一種
 FRK~ 1-1
 F₂R₄K₉M₁ いわば・一種の・みたい・もの
 FS~ 4-5
 F₇S₉M₁ つまり・…という・わけ
 F₁S₉M₂ あたかも・…という・ふう
 1-2
 F₃S₉M₂ まあ・…という・形
 いささか・…という・おもむき
 JK~ 7-8

J₂K₁M₁ も・同じ・こと 2-2
 だって・同じ・こと
 J₂K₉M₃ でも・よう・気持ち 3-3
 でも・よう・気分
 も・よう・心持ち
 J~ 5-7
 J₁M₃ ほど・感じ
 ほど・気持ち
 ほど・思い
 ばかり・思い
 J₂M₃ でも・気
 でも・思い
 J₃M₃ も・思い
 JSK~ 1-1
 J₂S₉K₉M₁ でも・…という・よう・も
の
 JS~ 1-1
 J₁S₉M₃ というより・…という・感じ
 KJ~ J 1-1
 K₉J₃M₂J₃ よう・も・ようす・も
 KK~ 2-2
 K₁K₉M₁ 同じ・よう・もの
 同じ・よう・こと
 K~ 43-425
 K₁M₁ 同じ・もの
 同じ・こと 3-10
 K₉M₁ よう・もの 33-148
 ごとし・もの 3-3
 みたい・もの 12-22
 らしい・もの
 よう・こと 6-10
 みたい・こと 2-2
 よう・まね 2-3
 みたい・まね
 K₁M₂ 同じ・ぐあい

| | | |
|--------------------------------|----------------------|---|
| K ₉ M ₂ | よう・ <u>気配</u> | <u>ぐあい</u> |
| | よう・ <u>おもむき</u> 3-3 | <u>あんばい</u> |
| | よう・ <u>風情</u> | <u>姿勢</u> |
| | よう・ <u>ふう</u> 3-3 | <u>形</u> 12-18 |
| | みたい・ <u>ふう</u> | <u>おもかげ</u> |
| | よう・ <u>状態</u> 2-3 | <u>色</u> 3-8 |
| | よう・ <u>鯉</u> | <u>形式</u> |
| | よう・ <u>ぐあい</u> 2-2 | M ₃ <u>感</u> |
| | よう・ <u>あんばい</u> | <u>感じ</u> 14-28 |
| | よう・ <u>調子</u> 5-7 | <u>気</u> 3-3 |
| | よう・ <u>口調</u> | <u>気持ち</u> 7-14 |
| | よう・ <u>形</u> 9-12 | <u>心持ち</u> |
| | よう・ <u>かっこう</u> 3-3 | <u>心地</u> 2-2 |
| K ₁ M ₃ | 同じ・ <u>気持ち</u> | <u>思い</u> 14-39 |
| K ₉ M ₃ | よう・ <u>感じ</u> 16-41 | <u>感慨</u> |
| | よう・ <u>感蝕</u> | <u>つもり</u> 3-3 |
| | よう・ <u>気</u> 8-16 | <u>印象</u> |
| | よう・ <u>気持ち</u> 20-56 | M ₄ <u>役目</u> 3-3 |
| | みたい・ <u>気持ち</u> 2-3 | <u>役割</u> |
| | よう・ <u>気分</u> 5-9 | <u>模型</u> |
| | よう・ <u>心持ち</u> 8-21 | <u>代わり</u> 3-3 |
| | よう・ <u>心地</u> 2-2 | M ₅ <u>たぐい</u> |
| | よう・ <u>心</u> 3-7 | M ₆ <u>類似</u> |
| | よう・ <u>思い</u> 10-13 | M ₇ <u>比喩</u> |
| | よう・ <u>つもり</u> | <u>たとえ</u> |
| | よう・ <u>印象</u> 2-2 | ~D 2-2 |
| K ₁₀ M ₃ | そう・ <u>感じ</u> | M ₃ D ₅ <u>感じ</u> ・ <u>見える</u> |
| K ₁ M ₄ | 同じ・ <u>役目</u> | M ₇ D ₁₁ <u>たとえ</u> ・ <u>思い出す</u> |
| K ₉ M ₄ | よう・ <u>役目</u> | ~J 1-1 |
| K ₉ M ₈ | よう・ <u>錯覚</u> 6-8 | M ₃ J ₁ <u>思い</u> ・ <u>ほど</u> |
| ~ 31-141 | | RJ~ 1-1 |
| M ₁ | <u>やつ</u> 2-2 | R ₃ J ₁ M ₃ <u>ほんの</u> ・ <u>くらい</u> ・ <u>気持ち</u> |
| M ₂ | <u>ありさま</u> | RK~ 1-1 |
| | <u>おもむき</u> | R ₄ K ₉ M ₁ <u>一種の</u> ・ <u>よう</u> ・ <u>もの</u> |
| | <u>熊</u> | RK~JD 1-1 |

- $R_4K_9M_1J_3D_1$ 一種の・よう・もの・さ
 え・感じる
 SK \sim 9-9
 $S_9K_9M_1$ …という・よう・もの
 $S_9K_9M_2$ …という・よう・おもむき
 …という・よう・ぐあい 2-2
 …という・よう・かっこう
 …という・よう・図
 $S_9K_9M_3$ …という・よう・感じ 3-3
 S \sim 15-34
 S_9M_1 …という・やつ 2-2
 S_9M_2 …という・風情 1-2
 …という・ふう 9-15
 …という・ぐあい 2-2
 …という・調子
 …という・形
 …という・かっこう
 …という・顔
 …という・顔つき
 S_2M_3 …的・感じ
 S_9M_3 …という・感じ 4-5
 …という・気持ち
 …という・思い
 S \sim D 1-1
 $S_9M_2D_3$ …という・ふう・見える
 S \sim J 1-1
 $S_2M_3J_1$ …的・感じ・ほど
 R 23-51
 D \sim M 1 \sim 1
 $D_{11}R_4M_6$ 思い浮かべる・一種の・相
 似
 FK \sim M 1-1
 $F_1K_9R_4M_3$ まるで・よう・一種の・感
 F \sim 1-1
 F_7R_4 結局・一種の
 F \sim KM 1-1
 $F_2R_4K_9M_1$ いわば・一種の・みたい・
 もの
 \sim 11-22
 R_3 いわゆる 4-4
ほんとの
 R_4 一種の 8-13
ある種の
一つの
第二の
 R_5 小…
 \sim D 2-2
 R_4D_3 一種の・呼ぶ
 R_4D_{12} 一種の・似る
 \sim J 2-2
 R_1J_1 へたな・より
 R_3J_1 ほんの・ほど
 \sim JK 1-1
 $R_{12}K_9$ どんな・でも・よう
 \sim JM 1-1
 $R_3J_1M_3$ ほんの・くらい・気持ち
 \sim K 7-10
 R_2K_2 大した・変わりがない
なんの・変わりがない
 R_3K_9 いわゆる・よう
ほんの・よう
 R_4K_9 一種の・よう 4-5
一種の・みたい
 \sim KM 1-1
 $R_4K_9M_1$ 一種の・よう・もの
 \sim KMJD 1-1
 $R_4K_9M_1J_3D_1$ 一種の・よう・もの・さ
 え・感じる
 \sim S 3-7

- R₄S₁ 一種の…状態
一種の…性
- R₄S₂ 一種の…的2-3
- R₄S₉ 一種の…として
- R₅S₁ 小……式
- S 42-511
- FDJ~K 1-1
 F₁D₁J₂S₉K₉ まるで…する…でも…
という…よう
- FJ~K 1-1
 F₁J₂S₉K₉ まるで…でも……という…
 よう
- F~ 5-7
- F₁S₁ まるで…級
- F₁S₄ まるで…扱い
- F₂S₇ まあ…同然
- F₁S₈ まるで……しながら2-2
 まるで……よろしく
- F₂S₉ いわば……という
- F~K 2-2
- F₁S₉K₉ …ながら……という…よう
- F₂S₉K₉ いわば……という…よう
- F~KD 1-1
 F₁S₈K₉D₆ あたかも……しながら…よ
 う…気がする
- F~M 4-5
- F₁S₉M₂ あたかも……という…ふう
 1-2
- F₃S₉M₂ まあ……という…形
 いささか……という…おもむき
- F₂S₉M₁ つまり……という…わけ
- JF~K 1-1
 J₁F₂S₉K₉ …という……とい
いう…よう
- J~ 2-2
- J₃S₈ も……よろしく
- J₂S₉ でも……という
- J~K 3-4
- J₂S₉K₉ でも……という…よう3-4
- J~KM 1-1
- J₂S₉K₉M₁ でも……という…よう…も
 の
- J~M 1-1
- J₁S₉M₃ …というより……という…感
 じ
- ~ 38-409
- S₁ …もの2-2
…色9-31
…式2-2
…なり2-2
…状2-2
…状態4-6
…様
…性2-3
…役3-6
…ふう12-22
…づら3-4
…はだ
…ばり
…なみ
…格1-2
…大
…程度2-6
…以上3-3
…型7-16
…形^{タイ}1-4
…気分
- S₂ …的18-90
- S₃ …化3-4

- S₄ …気どり
 …紛い 2-2
 …扱い 4-10
 …代わり 3-3
 S₅ …めく 8-11
 …びる
 …じみる 16-44
 …なす 2-2
 S₆ …ぼい 10-16
 …くさい
 S₇ …そっくり 8-9
 …同様 6-8
 …同然 5-5
 S₈ …そのまま 3-3
 …さながら 2-3
 …よろしく
 S₉ …たる
 …という 8-53
 …という名
 …として 6-9
 S₁₀ …そのもの 10-12
 S₁₁ …ひとつ 1-2
 ~D 6-10
 S₁D₁ …なみ・考える
 …なみ・扱う
 S₁D₁₃ …ふう・ままある
 S₅D₅ …じみる・見える 2-3
 S₉D₆ …という・気がする
 S₉D₅ …として・印象づけられる
 S₁₀D₄ …そのもの・化す
 S₁₀D₅ …そのもの・見える
 ~DJ 1-1
 S₉D₆J₁ …という・気がする・くらい
 ~J 2-2
 S₅J₁ …じみる・ほど
 S₉J₁ …という・ほど
 ~K 5-8
 S₁K₉ …状・よう
 S₉K₉ …という・よう 4-6
 S₁₀K₉ …そのもの・よう
 ~KD 1-1
 S₈K₉D₃ …さながら・よう・思われる
 ~KM 9-9
 S₉K₉M₁ …という・よう・もの
 S₉K₉M₂ …という・よう・おもむき
 …という・よう・ぐあい 2-2
 …という・よう・かっこう
 …という・よう・図
 S₉K₉M₃ …という・よう・感じ 3-3
 ~M 15-34
 S₉M₁ …という・やつ 2-2
 S₉M₂ …という・風情 1-2
 …という・ふう 9-15
 …という・ぐあい 2-2
 …という・調子
 …という・形
 …という・かっこう
 …という・顔
 …という・顔つき
 S₂M₃ …的・感じ
 S₉M₃ …という・感じ 4-5
 …という・気持ち
 …という・思い
 ~MD 1-1
 S₉M₂D₅ …という・ふう・見える
 ~MJ 1-1
 S₂M₃J₁ …的・感じ・ほど
 R~ 3-7
 R₄S₁ 一種の…状態
 一種の…性

R₃S₁ 小……式

R₄S₂ 一種の……的 2-3

R₄S₉ 一種の……として

～～ 2-2

S₁S₄ …なみ・…扱い

S₁S₅ …性・…じみる

4.4 出現度・出現幅

4.41 比喩指標要素

4.411 個別上位

| 出現度
順位 | 出現幅
順位 | 比喩指標要素 | 作品数 | 用例数 | | | | | |
|-----------|-----------|--------|-----|------|----|----|-------|----|----|
| 1 | 1 | よう | 50 | 5448 | 17 | 16 | あたかも | 22 | 80 |
| 2 | 7 | まるで | 32 | 383 | 18 | 26 | そう | 16 | 71 |
| 3 | 6 | でも | 33 | 238 | 19 | 11 | 同じ | 25 | 62 |
| 4 | 5 | みたい | 35 | 224 | 20 | 18 | 思い | 20 | 60 |
| 5 | 4 | 気がする | 36 | 219 | 21 | 18 | の | 20 | 49 |
| 6 | 2 | もの | 37 | 210 | 21 | 26 | …じみる | 16 | 49 |
| 7 | 2 | ほど | 37 | 190 | 23 | 39 | なる | 11 | 44 |
| 8 | 8 | 見える | 31 | 157 | 24 | 25 | ちょうど | 17 | 42 |
| 9 | 10 | …という | 26 | 123 | 25 | 17 | 思う | 21 | 40 |
| 10 | 9 | も | 27 | 107 | 25 | 20 | くらい | 18 | 40 |
| 11 | 15 | 似る | 23 | 102 | 27 | 37 | ばかり | 12 | 39 |
| 12 | 20 | ごとし | 18 | 96 | 28 | 20 | なにか | 18 | 37 |
| 13 | 20 | …的 | 18 | 95 | 29 | 26 | 感じられる | 16 | 36 |
| 14 | 11 | 感じ | 25 | 92 | 29 | 32 | 思わせる | 14 | 36 |
| 15 | 11 | 思われる | 25 | 91 | 31 | 20 | 形 | 18 | 33 |
| 16 | 11 | 気持ち | 25 | 89 | 31 | 32 | 一種の | 14 | 33 |

<度数30以上>

4.412 種別上位

| 出現度
順位 | 出現幅
順位 | 種 | 代表要素 | 作品数 | 用例数 | | | | | | |
|-----------|-----------|----------------|--------|-----|------|----|----|----------------|---------------|----|-----|
| 1 | 1 | K ₉ | ヨウ | 50 | 5772 | 8 | 4 | D ₆ | 気ガスル | 38 | 223 |
| 2 | 4 | F ₁ | マルデ | 38 | 520 | 9 | 10 | J ₃ | サエ | 30 | 140 |
| 3 | 3 | D ₅ | 感シラレル | 39 | 328 | 10 | 13 | S ₉ | …タル | 27 | 136 |
| 4 | 4 | M ₃ | 感シ・気持ち | 38 | 327 | 11 | 17 | S ₁ | …バリ | 24 | 127 |
| 5 | 2 | J ₁ | ホド | 45 | 301 | 12 | 9 | D ₁ | 感ジル・タ
トエル | 32 | 124 |
| 6 | 8 | J ₂ | デモ | 34 | 259 | 13 | 10 | M ₂ | ヨウス・グ
アイ・形 | 30 | 123 |
| 7 | 7 | M ₁ | モノ・コト | 37 | 249 | | | | | | |

| | | | | | | | | | | | |
|----|----|-----------------|-------|----|-----|----|----|----------------|-------|----|----|
| 14 | 16 | D ₁₂ | 似ル | 26 | 116 | 20 | 21 | D ₇ | 感ジサセル | 19 | 61 |
| 15 | 12 | K ₁ | 近イ・同ジ | 29 | 99 | 21 | 23 | F ₃ | ホトンド | 16 | 56 |
| 16 | 22 | S ₂ | …的 | 18 | 95 | 22 | 24 | D ₄ | ナル | 14 | 53 |
| 17 | 13 | F ₈ | ナンダカ | 27 | 88 | 23 | 18 | F ₂ | イワバ | 21 | 51 |
| 18 | 13 | K ₁₀ | ソウ | 27 | 76 | 24 | 20 | J ₆ | ノ | 20 | 49 |
| 19 | 18 | S ₅ | …ジミル | 21 | 63 | | | | | | |

〈度数49以上〉

4.413 類別順位

| 出現度
順位 | 出現幅
順位 | 類 | 作品数 | 用例数 | | | | | |
|-----------|-----------|---|-----|------|---|---|---|----|-----|
| 1 | 1 | K | 50 | 6011 | 4 | 4 | J | 47 | 750 |
| 2 | 2 | D | 49 | 966 | 5 | 3 | M | 48 | 726 |
| 3 | 6 | F | 41 | 821 | 6 | 5 | S | 42 | 511 |
| | | | | | 7 | 7 | R | 23 | 51 |

4.42 比喩指標基本形

4.421 個別上位

| 出現度
順位 | 出現幅
順位 | 比喩指標 | 作品数 | 用例数 | | | | | |
|-----------|-----------|---------|-----|------|----|----|----------|----|----|
| 1 | 1 | よう | 50 | 3877 | 17 | 16 | まるで・でも・ | | |
| 2 | 7 | まるで・よう | 28 | 207 | | | よう | 16 | 44 |
| 3 | 5 | よう・気がする | 31 | 156 | 17 | 16 | …じみる | 16 | 44 |
| 4 | 3 | よう・もの | 33 | 148 | 19 | 36 | なる | 9 | 42 |
| 5 | 3 | みたい | 33 | 147 | 20 | 16 | よう・感じ | 16 | 41 |
| 6 | 2 | ほど | 34 | 139 | 21 | 19 | 思い | 14 | 39 |
| 7 | 6 | でも・よう | 30 | 104 | 22 | 12 | そう | 18 | 38 |
| 8 | 8 | よう・見える | 25 | 92 | 23 | 36 | …色 | 9 | 31 |
| 9 | 12 | …的 | 18 | 90 | 24 | 24 | ちょうど・よう | 12 | 29 |
| 10 | 15 | ごとし | 17 | 82 | 25 | 19 | 感じ | 14 | 28 |
| 11 | 9 | 似る | 21 | 75 | 26 | 24 | ばかり | 12 | 27 |
| 12 | 12 | よう・思われる | 18 | 61 | 27 | 24 | 思わせる | 12 | 25 |
| 13 | 10 | よう・気持ち | 20 | 56 | 28 | 24 | まるで・みたい | 12 | 24 |
| 14 | 39 | …という | 8 | 53 | 28 | 24 | くらい | 12 | 24 |
| 15 | 10 | の | 20 | 49 | 30 | 24 | みたい・もの | 12 | 22 |
| 16 | 24 | あたかも・よう | 12 | 45 | 30 | 24 | …ふう | 12 | 22 |
| | | | | | 32 | 34 | よう・感じられる | 10 | 21 |

542 4. 表

| | | | | | | | | | |
|----|----|--------|----|----|----|----|---------|----|----|
| 32 | 39 | よう・心持ち | 8 | 21 | 39 | 34 | …ばい | 10 | 16 |
| 34 | 22 | より | 13 | 20 | 39 | 39 | よう・気 | 8 | 16 |
| 34 | 24 | 気がする | 12 | 20 | 39 | 42 | …型 | 7 | 16 |
| 36 | 19 | 同じ | 14 | 19 | 42 | 36 | …という・ふう | 9 | 15 |
| 37 | 22 | まるで | 13 | 18 | 42 | 42 | よう・感じる | 7 | 15 |
| 37 | 24 | 形 | 12 | 18 | | | | | |

〈度数15以上における順位〉

4.422 種別上位

| 出現度
順位 | 出現
順位 | 比
率 | 類
種 | 例 | 作品数 | 用例数 | | | | | | |
|-----------|----------|--|--------|-------------------------|-----|------|----|----|-------------------------------|--------------------------|----|----|
| 1 | 1 | K ₉ | | よう, みたい | 50 | 4106 | | | | | | |
| 2 | 6 | F ₁ K ₉ | | まるで・よう,
まるで・みた
い | 32 | 312 | | | | | | |
| 3 | 2 | J ₁ | | ほど, くらい | 41 | 211 | | | | | | |
| 4 | 3 | K ₉ D ₅ | | よう・思われ
る, よう・見
える | 35 | 203 | | | | | | |
| 5 | 3 | K ₉ M ₁ | | よう・もの | 35 | 190 | | | | | | |
| 6 | 5 | K ₉ M ₃ | | よう・感じ | 33 | 172 | | | | | | |
| 7 | 7 | K ₉ D ₆ | | よう・気がす
る | 31 | 160 | | | | | | |
| 8 | 7 | J ₂ K ₉ | | でも・よう | 31 | 118 | | | | | | |
| 9 | 10 | S ₁ | | …ふう, …色 | 24 | 117 | | | | | | |
| 10 | 9 | M ₃ | | 気持ち, 思い | 25 | 93 | | | | | | |
| 11 | 16 | S ₂ | | …的 | 18 | 90 | | | | | | |
| 12 | 11 | D ₁₂ | | 似る | 22 | 84 | | | | | | |
| 13 | 31 | S ₉ | | …という | 10 | 64 | | | | | | |
| 14 | 16 | F ₁ J ₂ K ₉ | | まるで・でも
・よう | 18 | 60 | | | | | | |
| 15 | 12 | S ₅ | | …じみる | 21 | 58 | | | | | | |
| 16 | 29 | D ₄ | | なる | 12 | 50 | | | | | | |
| 17 | 13 | J ₆ | | の | 20 | 49 | | | | | | |
| | | | | | | | 18 | 20 | D ₇ | 思わせる, 連
想させる | 16 | 44 |
| | | | | | | | 19 | 14 | D ₁ | 思う | 19 | 42 |
| | | | | | | | 20 | 16 | K ₁ | 同じ, 近い | 18 | 41 |
| | | | | | | | 21 | 16 | K ₁₀ | そう | 18 | 40 |
| | | | | | | | 22 | 14 | K ₉ M ₂ | よう・感じ,
よう・形 | 19 | 39 |
| | | | | | | | 23 | 25 | K ₉ D ₁ | よう・感じる,
よう・思う | 14 | 38 |
| | | | | | | | 24 | 20 | M ₂ | 形 | 16 | 34 |
| | | | | | | | 25 | 27 | S ₉ M ₂ | …という・ふ
う, …という・
感じ | 13 | 24 |
| | | | | | | | 25 | 30 | F ₃ K ₉ | 半分・よう | 11 | 24 |
| | | | | | | | 27 | 20 | S ₇ | …そっくり,
…同様 | 16 | 22 |
| | | | | | | | 27 | 25 | D ₃ | 見える, 思わ
れる | 14 | 22 |
| | | | | | | | 29 | 23 | F ₁ | まるで | 15 | 21 |
| | | | | | | | 29 | 27 | D ₆ | 気がする | 13 | 21 |
| | | | | | | | 31 | 23 | F ₈ K ₉ | なにか・よう,
なんだか・よ
う | 15 | 20 |

〈度数20以上における順位〉

4.423 類別上位

| 出現度
順位 | 出現幅
順位 | 比喩
指標類 | 例 | 作品数 | 用例数 | | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|------------------------|-----|------|----|----|-----|----------------|----|----|
| 1 | 1 | K | よう、みたい、
同じ | 50 | 4222 | 13 | 13 | FKM | まるで・よう・
もの | 20 | 53 |
| 2 | 2 | KM | よう・気持ち、
みたい・もの | 43 | 425 | 14 | 17 | JD | も・似る | 15 | 38 |
| 3 | 7 | FK | まるで・よう、
まるで・みた
い | 36 | 416 | 15 | 13 | FD | まるで・思わ
れる | 20 | 35 |
| 4 | 2 | KD | よう・思われ
る、よう・見
える | 43 | 412 | 16 | 17 | SM | …という・風 | 15 | 34 |
| 5 | 6 | S | …という、…
的 | 38 | 409 | 17 | 15 | KJD | よう・も・感
じられる | 16 | 27 |
| 6 | 5 | D | 気がする、似
る | 40 | 302 | 18 | 20 | R | 一種の | 11 | 22 |
| 7 | 4 | J | でも、ほどの | 41 | 290 | 19 | 19 | KJ | よう・も | 12 | 21 |
| 8 | 8 | JK | でも・よう、
なにか・よう | 33 | 151 | 20 | 15 | DJ | 思われる・ほ
ど | 16 | 19 |
| 9 | 9 | M | 思い、感じ、形 | 31 | 141 | 21 | 20 | FM | いかにも・お
もむき | 11 | 17 |
| 10 | 12 | FJK | まるで・でも・
よう | 21 | 85 | 21 | 25 | DK | 思わせる・よ
う | 8 | 17 |
| 11 | 10 | F | まるで、いわ
ば | 30 | 81 | 23 | 23 | FJ | まるで・ほど | 9 | 14 |
| 12 | 11 | FKD | まるで・よう・
思われる | 23 | 56 | 24 | 23 | KK | 同じ・よう | 9 | 13 |
| | | | | | | 25 | 22 | JKD | でも・よう・
気がする | 10 | 11 |
| | | | | | | 26 | 26 | RK | 一種の・よう | 7 | 10 |
| | | | | | | 26 | 27 | SD | …じみる・見
える | 6 | 10 |

<度数10以上における順位>

4.43 比喩指標実現形

| 出現度
順位 | 出現幅
順位 | 比喩指標実現形 | 作品数 | 用例数 | | | | | |
|-----------|-----------|---------|-----|------|---|----|---------|----|-----|
| 1 | 1 | ように | 48 | 2191 | 5 | 27 | ようであった | 12 | 107 |
| 2 | 2 | ような | 46 | 1266 | 6 | 7 | まるで・ように | 20 | 104 |
| 3 | 4 | ようなもの | 29 | 141 | 7 | 33 | ようである | 6 | 96 |
| 4 | 3 | ほど | 34 | 139 | 8 | 9 | …的 | 18 | 90 |
| | | | | | 9 | 5 | でも・ように | 26 | 61 |

544 4. 表

| | | | | | | | | | |
|----|----|---------|----|----|----|----|---------------------|----|----|
| 10 | 13 | ような気がする | 16 | 57 | 24 | 13 | ようにみえた | 16 | 30 |
| 11 | 13 | ような気がした | 16 | 53 | 25 | 21 | …じみた | 13 | 28 |
| 12 | 6 | まるで・ような | 22 | 50 | 26 | 21 | 感じ | 13 | 27 |
| 13 | 7 | の | 20 | 49 | 27 | 18 | ようだ | 14 | 26 |
| 14 | 33 | …という | 6 | 48 | 27 | 27 | まるで・でも・よ
うに | 12 | 26 |
| 15 | 11 | ような気持 | 17 | 46 | | | | | |
| 16 | 13 | ような感じ | 16 | 40 | 29 | 21 | ようだった | 13 | 24 |
| 16 | 21 | ようで | 13 | 40 | 30 | 21 | ように見える | 13 | 22 |
| 18 | 9 | みたいに | 18 | 39 | 30 | 27 | ように思われた | 12 | 22 |
| 18 | 13 | みたいな | 16 | 39 | 30 | 27 | 風 <small>ふう</small> | 12 | 22 |
| 20 | 18 | 思い | 14 | 35 | 33 | 33 | ごとき | 6 | 21 |
| 20 | 21 | かのように | 13 | 35 | 34 | 18 | そうな | 14 | 20 |
| 22 | 11 | に似た | 17 | 33 | 34 | 32 | ちょうど・ように | 7 | 20 |
| 23 | 31 | …色 | 9 | 31 | | | | | |

〈度数20以上における順位〉

索 引

5. 索引

5.1 総合索引解説

「比喩索引」というのは、指標比喩関係の「比喩指標要素索引」「比喩指標基本形索引」「比喩指標実現形索引」と「結合比喩索引」と「文脈比喩索引」という5種類の索引を、便宜上、一括して、全体を五十音順に配列した総合索引である。したがって、その利用法も、そこに総合されたそれぞれの索引によって多様である。

5.11 指標比喩

5.111 比喩指標要素

〔作り方〕

- 1) 各比喩指標要素を五十音順に配列する。
 - (1) かな表記にした場あいの文字の五十音順とする。
例： 長音表記の「う」→ウ 助詞の「は」→ハ
 - (2) 音便形がふつうのものは、本来の字音にもどさず、そのままの形で扱う。
例： 錯覚→サッカク
 - (3) 「…」の有無で分かれる要素の場あいは、「…」のつかないほうを前に置く。
例： 同然， …同然
 - (4) 「言うたら」は「イウタラ」，「紛う」は「マゴウ」として扱う。
- 2) 各比喩指標要素に、「比喩指標要素一覧」中の位置を示す記号番号をつける。
例： つまり F₇₋₁， みたい K₉₋₃

〔読み方〕

- 1) アルファベットは、その比喩指標要素の属する類を表す。
例： 言ってみれば→F類 同列→K類
- 2) アルファベットについての最初の数字は、その比喩指標要素の属する種を表す。
例： も→J類3種 …ばり→S類1種
- 3) アルファベットについての数字の枝番は、その比喩指標要素の号数を表す。
例： なにか→F類8種1号

〔使い方〕

- 1) ある比喩指標要素の「比喩指標要素一覧」における位置づけを知る。

例：「変わりがない」を引くと「K₂₋₇」とあるので、「比喩指標要素一覧」から、まずアルファベット順を利用して「K」の部を探し、そのうちの「K₂」の7番目を見ると、目ざす「変わりがない」という比喩指標要素が見つかる。そして、それがK類2種7号として、「同列」「違いがない」「変わらない」などとともに〈同様〉として一括されていることがわかる。

- 2) ある比喩指標要素の用法を調べるに際し、その記号・番号を知る。

例：「マネキン人形とそっくり同じ」〔他〕の「そっくり」の比喩としての用法の出現状況を知りたいとする。単独用法だけなら、この「比喩索引」で用例番号を調べ、指標比喩の分類結果のその番号の箇所当たればいいが、その全用例を調べるためには、「指標要素個別の出現状況」を利用することになる。ところが、その4.3の「出現状況」はすべて「比喩指標要素一覧」の配列順になっているので、その前に、調べようとする比喩指標要素の記号・番号を知る必要がある。そこで、まず、この「比喩索引」を引くと、目ざす「ソックリ」の箇所に、「そっくり F₃₋₁ …そっくり S₇₋₁ そっくりだ K₁₋₄」と、似たような3項が並んでいる。このうち、「…そっくり」はS類だから、「マネキン人形そっくりの」のように、裸の名詞に直接つく、いわば接辞的な用法の場合であり、また、「そっくりだ」はK類なので、「マネキン人形とそっくりな」といった、いわゆる形容動詞的な用法の場合であるが、問題の例の「そっくり」は「同じ」の程度を規定していると考えられるので、最初のF₃₋₁を選びだし、それをもとに、「指標要素個別の出現状況」の該当箇所を見つけ、その情報を利用して、指標比喩の分類結果におけるそれぞれの欄を調べるわけである。

5.112 比喩指標基本形

〔作り方〕

- 1) 各比喩指標基本形を五十音順に配列する。

- (1) 比喩指標の構成要素別ではなく、その指標全体を単位とした五十音順とする。
- (2) 同じ指標要素で始まる比喩指標が連続して現れるとは限らない。

例：「思い・ほど」は「思い」の次ではなく、「思い合わされる」～「思い出す」をはさんで現れる。

- 2) 各比喩指標基本形に、その実現形の用例番号を一括して添える。結合比喩・文脈比喩と区別するため、番号の前に「指」と表示する。

例：まるで・よう 指345～359

〔読み方〕

- 1) 「・」印は、比喩指標を構成している指標要素間の切れめを表す。
- 2) 「指」印に導かれる数字は、その比喩指標の実現形の用例番号で、指標比喩の分類結

果中の該当箇所を検索する手がかりとなる。

〔使い方〕

- 1) ある比喩指標がどんな指標要素から成っているかを調べる。

例：「たとえていうと…近い」を引くと、「たとえていうと・近い」と切れているので、「たとえていうと」全体で1要素として扱われていること、また、その用例番号から、その部分が副詞なみに位置づけられていることがわかる。

- 2) ある比喩指標がどんな比喩指標とともに、指標比喩の分類結果のどこに位置づけられているかを調べる。

例：「ちょうど・同程度」という比喩指標と同グループを成す比喩指標には、ほかにどんなものがあるかを調べようとすれば、まず、この「比喩索引」を引いて、「ちょうど・同程度」の用例番号を調べ、それをもとに3.1の指標比喩の分類結果中の該当箇所を探りあてると、それが $F_{1-}K_{2-3}$ の位置にあり、「まるで・異なるない」および「ちょうど・一般」と最小レベルでのグループを成していることがわかる。

5.113 比喩指標実現形

〔作り方〕

- 1) 各比喩指標の各実現形を五十音順に配列する。

(1) 同形の場合、 \cdot で切れているものは、連続しているものより後に置く。

例： ような気がした、 ような気が \cdot した

(2) 表記だけが違う場合、カタカナ・ひらがな・漢字の順とする。

例： ようなおもい、 ような思い

- 2) 各実現形に用例番号を添え、頭に「指標比喩」の意で「指」と表示する。

例： ように \cdot 感じられた 指861

〔読み方〕

- 1) 「 \cdot 」印は、その間に他の語が入ることを示す。

例： ように \cdot 思われた (cf. ように思われた)

- 2) 「…」印は、傾向環境中の省略部を示す。

例： だか…だかわからない

- 3) 「指」印に導かれる数字は、その実現形の用例番号で、指標比喩の分類結果中の該当箇所を検索する手がかりとなる。

〔使い方〕

- 1) 比喩指標のある実現形がどんな指標要素を含んでいるかを調べる。

例：「にひとしい」と「にもひとしい」とをこの「比喩索引」で引き、そこに示されている用例番号から、3.1 の指標比喩の分類結果中のそれぞれの該当箇所を見ると、前者は K_{1-2} 、後者は $J_{3-1}K_{1-2}$ として扱われているので、「に」は傾向環境だが「も」は指標要素で、両者は別の比喩指標と見られていることがわかる。

- 2) ある実現形がどういう比喩指標の用例であるかを調べる。

例：「ような観を呈している」を索引で引いて、その用例番号をもとに指標比喩の分類結果を見ると、 $K_{9-1}M_{2-9}$ の箇所にあるので、動詞「呈する」は傾向環境として扱われ、比喩指標としてはKM類の用例と見られていることがわかる。

- 3) ある実現形が他のどんな実現形とともに、指標比喩の分類結果のどこに位置づけられているかを調べる。

例：「…といったように」を索引で引いて、その用例番号をもとに指標比喩の分類結果の該当箇所当たると、「…といったように」「…といったような」などとともに $S_{9-2}K_{9-1}$ という比喩指標の実現形であることを、それぞれの実例や出現状況とともに知ることができる。

5.12 結合比喩

〔作り方〕

- 1) 各結合比喩例に含まれる自立語を対象とする。

(1) 文意の理解を助けるために、あるいは、すでに成立した比喩性をさらに高める働きがあるとして、() 内に補った部分は、特に重要な働きをしている場あいを除き、索引では取りあげない。

(2) 単位は通常の国語辞典の見だしに立つ程度の大きさとするが、索引利用の実際を考慮し、必ずしも単位の統一にはこだわらず、なるべく自然な形で処理し、不要な部分を切りすてるなど、適宜、必要な操作を加える。

- 2) 各項を五十音順に配列する。

- 3) 各項に、その現れた比喩的結合例を、用例番号を列挙して示す。指標比喩・文脈比喩と区別するため、番号の前に「結」と表示する。

〔読み方〕

- 1) 各見だしは、結合比喩の要素またはその一部である。

2) 見だしごとに添えられた数字は、その見だしが結合比喩として現れた用例の、結合比喩の分類結果中の配列番号である。

〔使い方〕

- 1) あることばが何種類の結合比喩例として現れたかを調べる。

例：「顔」について調べようとするなら、この「比喩索引」で「カオ」を引きだすと、そこに用例番号が列挙してあるので、「結」の部分の数えれば、その「顔」が他の何かの要素と比喩的に結びついた用例の種類の数わかる。

- 2) あることばがどんなことばと比喩的な結合をなすかを調べる。

例：「貼り付く」がどういう要素を比喩的結合の相手にとるかを調べるには、索引で用例番号を調べて、3.2の結合比喩の分類結果のその番号の用例を見ると、「痛ましさ」「気分」「陽」「永遠」がその「貼り付く」の主語の位置に現れたことなどがわかる。

- 3) あることばがある働きをした結合比喩例を調べる。

例：「芽」が名詞との関係で結合比喩を成す例にはどんなものがあるかを調べるには、まず、結合比喩の分類結果の「もくじ」で〔名名〕の部が何番から何番までを占めるかをあらかじめ調べた上で、索引で「芽」の用例番号を調べ、その範囲内の番号の用例にそれぞれ当たれば、「心ノ」「愛ノ」「恋・初恋ノ」「嫉妬ノ」といった名詞のノ格を受ける例が採集されたことがわかる。

- 4) あることばの結合比喩としての用例がどんな作品に現れたかを調べる。

例：「仮面」について調べるには、索引で用例番号を調べて、結合比喩の分類結果の各該当例に当たってみると、出所が「73-179~356」の範囲に偏っていることに気づく。そこで、4.1の「調査資料一覧」で73巻の179ページから356ページまでがどの作品であるかを調べると、安部公房の『他人の顔』であることがわかる。

- 5) ある前要素を一括してとらえる。

例：「一片」という名詞がどんな名詞と結びつくかを調べるとする。「ノ一片」の形で現れた例は、後要素が整理規準の一つとなっている関係上、まとめて出てくるが、「一片ノ」として前要素に用いられた例は、それに続く名詞の種類に応じて散在するので、やはり、この索引を引く。そして、その用例番号を頼りに、結合比喩の分類結果の各該当例に当たってみると、後要素としては、「河面ノ」「野原ノ」を受け、前要素としては、「記憶」「関心」「反逆精神」にかかっていく例が採集されたことなどを知ることができる。

5.13 文脈比喩

〔作り方〕

- 1) 各文脈比喩例に含まれる自立語を対象とする。
 - (1) ()内は索引の対象から外す。
 - (2) 単位は通常の国語辞典の見だし程度とする。
 - (3) 索引として不要な部分は省略する。
 - (4) 必要に応じ、基本形に変換する。
- 2) 各項を五十音順に配列する。

- 3) 各項に、その現れた文脈比喩例を、用例番号を列挙して示す。指標比喩・結合比喩と区別するため、番号の前に「文」と表示する。

〔読み方〕

- 1) 各見だしは、文脈比喩と認定された用例中の一要素である。
 2) 見だしごとに添えられた数字は、その見だしが文脈比喩の分類結果中に現れた用例の配列番号である。

〔使い方〕

- 1) あることばが何種類の文脈比喩例として現れたかを調べる。
 例：「足」について調べるために「比喩索引」を引くと、「足・脚」という見だしのもとに用例番号が列挙されており、そのうち「文」の部分の数を数えると、「脚」を含めて18種類の文脈比喩例が採集されていることがわかる。
- 2) あることばがどんな文脈比喩例に現れたかを調べる。
 例：「手」を含む文脈比喩例を調べようとするなら、まず、索引で「手」の用例番号を調べ、そのうち「文」の部分の番号を手がかりに3.3の文脈比喩の分類結果のそれぞれの該当箇所当たると、「かゆいところに手がとどく」「ひろげている手の中へ入る」「手がまわる」「手が出せない」「手のうらをかえす」「手を汚す」など、多くは慣用的な句であるが、ともかく37種の用例が、それぞれの出所とともに得られる。
- 3) あることばがある働きをした文脈比喩例を調べる。
 例：「腹」がニ格に立った形式の文脈比喩例にどんなものがあるかを知らうとすれば、まず、文脈比喩の分類結果の「もくじ」によって、〔名=動〕〔名が名=動〕など、名詞のニ格を含む部分の用例番号の範囲を調べた上で、索引によって「腹」の用例番号を調べ、「文」の部でその範囲に入る用例番号を選びだして、その箇所当たると、「腹におさめる」「腹に据えかねる」「腹に一物ある」という慣用句がその該当例として得られるにすぎないことがわかる。
- 4) あることばを含む文脈比喩例がどんな作品に現れたかを調べる。
 例：「傷」を索引で引いて、文脈比喩関係の用例番号を調べ、文脈比喩の分類結果の各該当箇所当たってみると、単独用法のほか、「傷が深い 73-312」「傷がつく 55-487」「傷をうける 55-291, 447, 487」「傷を負う 55-77」「傷をむしり合う 49-93」それに「玉に瑕 40-266」という例が採集されたことがわかる。そこで4.1の「調査資料一覧」を援用すれば、丹羽文雄の『顔』に用例が多いこと、「傷が深い」は安部公房の『他人の顔』、「傷をむしり合う」は佐多稲子の『くれない』からの採集例であることなどがわかる。また、それぞれが文脈的にどんな臨時の意味を担っているかを知りたいければ、巻名・ページが明示されているので、実際の文章にもどって考えることができる。

5.2 比喩索引

— ア —

- 愛 結1169~70, 1211, 1384,
 1415, 1546, 1571, 1823, 2637,
 2717, 3132, 4697, 4711, 4717,
 4824, 5290, 5317, 5432
 愛感 結2464, 3869
 哀願 結1954
 愛嬌 結1635, 2924
 愛妾 結4753
 愛情 結4, 323, 364, 439, 1140,
 1425, 1507, 1679, 1681, 1748,
 1908, 2381, 3133, 4098, 4778,
 4884, 4929, 4950, 5044~5,
 5089, 5127
 愛する 結3345~7
 愛想 結3142, 3576
 愛憎 結9
 間 結1488, 1611, 1812, 1826,
 2756, 2765, 3378, 3617, 4112,
 4910, 5173, 5187, 5211
 哀調 結4645
 相槌 結4304 文1565
 相手 結4681~2, 4737, 5014,
 5244 文547
 哀悼 結2296
 相似る D₁₂₋₂
 相乗り 文548
 愛撫 結1853
 相棒 文549
 曖昧 結4434 文63
 愛欲 結21, 2857, 5117, 5302
 哀憐 結3043
 合・会・逢う 結673, 1483,
 1549~52, 1736 文1274,
 1293~4, 1536
 喘ぐ 結1035~7
 青青しい 結4603
 青・蒼い 結4518 文34, 68
 仰ぐ 文89
 青ぐさい 結4524
 蒼黒い 結4220
 蒼さ 結585
 蒼ざめる 結1669, 4931
 青空 結1632, 4198 文2406
 煽り 結4056~7
 煽る 文1900
 赤 文550, 2425
 垢 結5258 文1566, 1579
 赤い 結4517 文35~6, 2210
 足掻く 文2338
 赤字 文2256
 明かす 文1849
 飽かす 文1414
 暁 文551
 アカデミック 結4430
 垢抜ける 文90
 赤味 結3772
 明・灯り 結230, 344, 523, 559,
 891, 1016, 1719, 3802, 3804,
 4047 文1219
 上がる 結603 文1225, 1237,
 1286, 2035
 明るい 結4129, 4486~8 文1,
 61, 69, 506, 1207
 明るさ 結558, 2186, 2547
 明るみ 結2268, 4397 文1220
 赤ん坊 結1981 文2098
 秋 結1087, 4872~3 文2056
 飽き飽き 結876
 秋風 結3113 文50
 飽き足りる 文1994
 空地 結4030
 諦め 結148, 1709, 3764, 3785,
 4549
 呆れる 結898~9
 明・空・開く 結239 文533,
 1345, 1353, 2242
 灰汁 結5257
 悪 結1076, 1482, 1590, 2023,
 3927, 4086~7, 5334
 悪意 結1392, 1911
 悪疾 結29
 悪臭 結1652
 悪たれ 結1173
 悪徳 結1105
 あくどさ 結3506
 灰汁抜け 結1255
 あくび 結2396
 悪魔 結983, 5003 文1221, 2005
 悪夢 文552
 悪霊 結4675 文1222
 挙げ句 文553
 明け暮れ 文554
 明けっ放し 文2391
 開け放す 文1826
 開・空ける 結2068~9, 2196,
 2701, 2743, 3169 文91, 1593,
 2411
 上・揚・挙げる 結1712, 1835,
 1841, 2024 文68, 92
 顎 結3012
 憧れ 結1844, 3998
 憧れる 結912
 朝 結4560 文2007
 浅い 文1193
 嘲り 結3211, 5236
 嘲る 結2587
 朝日 結1906
 アザミ 結5314~5
 朝飯 文1567
 あざやか 結2206
 朝夕 文2057
 漁る 文93
 足・脚 結16, 69, 849, 2194,
 2240, 2717, 2788, 3570, 3615
 ~6, 4827, 5382, 5384~5
 文555, 1179, 1224, 1368~70,
 2024, 2058, 2205, 2215
 味 結175, 1218, 1386~7, 1397,
 2425, 4260, 4436, 5250~3
 文556, 1223, 2143, 2201
 足跡 文1568
 足裏 結4476
 足音 結216, 224, 611, 991,
 1966, 2506, 3505, 4067, 4181,
 5246 文2219
 足掛かり 文557
 足枷 文558
 足固め 文559
 足首 文2331
 足溜り 文560

- 足手まとい 文561
 足止め 結3420
 足並み 文1569〜70
 味苦い 結4553〜4
 足踏み 結90 文562
 足元 文563, 2029, 2228
 味わい 結1399 文38
 味わう 結3326〜40, 4086〜7,
 4094 文94
 味わわせる 結3905
 明日 結1044
 預かり賃 文1208
 預ける 結4118, 4186〜7
 アスファルト 文2381
 汗 結160, 2009, 2158, 2399
 文1579〜80
 汗ばむ 結144
 汗水 文1581
 焦り立つ 結909
 焦る 結908
 遊ばせる 結3516
 遊び 結1006
 遊ぶ 結4244 文2429
 与える 結2601〜2, 3584〜5,
 4014〜23, 4116〜7, 4208〜9
 文1757, 1585
 あたかも F₁₋₃
 あたかも・相似る 指241
 あたかも・か何かのようである
 指307
 あたかも・かなにか・よう
 指307
 あたかも・かのように 指368
 あだかも・かのように 指369
 あだかも・かのように見える
 指474
 あたかも・かのようにも見えた
 指475
 あたかも・ごとく 指379
 あたかも・ごとくに眺めた
 指463
 あたかも・ごとし 指379
 あたかも・ごとし・眺める
 指463
 あたかも…さながらのよう
 な気がしながら 指576
 あたかも…さながら・よう
 ・気がする 指576
 あたかも・でも・かのように
- 指303
 あたかも・でも・かのように
 指304
 あたかも・でも・御様子 指334
 あたかも・でも・よう
 指303〜6
 あたかも・でも・ようす 指334
 あたかも・でも・ような 指305
 あたかも・でも・ように 指306
 あたかも・と相似ている 指241
 あたかも…という・ふう
 指577〜8
 あたかも…というふうに
 指577
 あだかも…というふうに
 指578
 あたかも・に似た 指238
 あたかも・に似て 指239
 あたかも・に似ていた 指240
 あたかも・に似ていたような
 心持がした 指270
 あたかも・にもひとしい 指310
 あたかも・似る 指238〜40
 あたかも・似る・よう・心持が
 する 指270
 あたかも・ふう 指554
 あたかも・ふうに 指554
 あたかも・ほど 指283
 あたかも・も・等しい 指310
 あたかも・よう 指368〜78
)指370
 あたかも・よう・気がする
 指484
 あたかも・よう・ぐあい
 指522〜3
 あたかも・ようだ 指371
 あたかも・ようで 指372
 あたかも・ようであった 指373
 あたかも・ような 指374
 あたかも・ような気がする
 指484
 あたかも・ような工合 指522
 あたかも・ような具合 指523
 あたかも・ように 指375
 あたかも・ように。 指376
 あだかも・ように 指377
 あだかも・ように。 指378
 あたかも・ように見えた 指476
 あたかも・ように見える 指477
- あたかも・ように見せかけな
 がら 指462
 あたかも・ように見なさる
 指478
 あたかも・よう・見える
 指474〜7
 あたかも・よう・見せかける
 指462
 あたかも・よう・見なされる
 指478
 暖・温かい 結4572, 4574〜7
 文37, 2214
 暖かさ 結948, 1081
 暖まる 結1172
 暖・温める 結3681〜2, 4125〜
 7 文95, 1883
 頭 結5, 447, 690, 901, 1094,
 1160, 1282, 1306, 1405, 1506,
 1545, 1565, 1657〜9, 1700〜
 1, 1704, 1742, 1789, 1813,
 1821, 1828, 1839, 1922, 1971
 ~4, 2056, 2116, 2118, 2155,
 2245, 2262, 2295, 2354, 2605,
 2681, 2736, 2765, 2805, 3732,
 3844, 3895, 4149, 4173, 4278,
 4298, 4740, 4897 文564, 1225
 ~6, 1354〜5, 1387〜93, 1559,
 1582〜4, 2008, 2273, 2313,
 2400
 熱海 結240
 新しい 文64
 新しいさ 結1791
 あたり 文1207, 1227
 あたりちらす 結1533
 当たる D₁₃₋₁ 指141 文96, 460,
 2286
 あちら 結817
 厚い 結4350〜2 文84
 熱い 結4569 文2
 …あつかい 指1178
 …扱い S₄₋₃ 指1178〜9
)指1179
 扱う D₁₋₁₅
 あつかましい 結4449
 扱われる D₅₋₁₈
 暑苦しい 結4404
 厚さ 文2099, 2350
 暑さ 結3705
 圧搾 結2825

- 庄殺 結3696, 4064
 庄する 結2114 文2008
 庄倒 結1832
 庄迫 結1831, 3757
 厚ぼったい 結4348
 集まり 結4661
 厚み 結1889, 4971 文2235
 あつらえ向き 文3
 圧力 結151, 4857
 宛名 文1213, 2389
 アデノイド 結2429
 当てはまる D₁₂₋₂
 当てる 結2106, 2748, 3724
 文1951, 2248, 2341, 2416
 あと 文539
 後 結3189 文2059
 跡 結1601, 2624, 3925, 4886
 文500, 1585, 2367
 後味 結3068, 4502, 5253~5
 文39, 565
 後砂 文1989
 穴 結50, 262 文1560, 1586,
 2019, 2033, 2060, 2242, 2411,
 2434
 あなた 結78, 1583, 3261, 4985
 文566
 あの方 文2061
 暴れまわる 結1309
 暴れる 文2422
 浴びせかける 文1910
 浴びせる 結2899~901
 浴びる 結2898 文1728, 1858,
 2406
 あぶく 結4792
 危い 結4286 文70
 危げ 結4257
 油・脂 結2158 文1580, 1587
 ~9
 油染みる 文97
 溢れ出る 結532~3
 溢れる 結810~4, 1522~4,
 1637, 1727~8, 1790~6 文1484
 雨足 結2102
 甘暖かい 結4573
 甘い 結4236, 4526~37, 4613
 文4, 31~2, 38~40, 1209
 甘えかける 結913
 雨音 結3893
 甘酸っぱい 結4543
- 甘ったるい 結4539~41
 甘っちょろい 結4538
 甘苦い 結4555
 甘味 結518, 4333
 甘やかす 結3350
 雨宿り 文2392
 余る 文1552
 アマルガム 結5119
 網 結5136 文568, 1590
 阿弥陀冠り 結5518
 網目 文2093
 編む 結4036
 雨 結2101, 2179, 3213, 3844,
 3889, 4066, 4459, 4933, 5246,
 5269, 5384 文2368
 雨降り 結5125
 綾 結5142
 怪しい 文1186
 あやす 結3540
 操り人形 文569
 操る 文98
 過つ 文536
 謝る 結2689
 歩み 文570
 歩み寄る 結719 文1992
 歩む 結1030
 荒荒しさ 結2727
 粗い 結4305
 洗いあげる 文99
 洗いきよめる 結3624
 洗い込む 文2263
 洗いざらい 文513
 洗い去る 結3625
 洗い出す 結3626~7
 洗い流す 結2793
 洗う 結2609~12, 3622~3,
 4039 文100, 1571, 1662
 嵐 結72, 110, 928, 1041, 1569,
 1835, 1957, 1960, 3923, 5272
 ~3 文571, 1228~9
 争い 結1666
 争う 結2461 文2239
 新手 文2214
 荒縄 文2041, 2383
 あらゆる 結2153, 2296
 霞 文2368
 表・現す 結1920~2, 2296
 現れる 結183~4 文2408
 有り余る 結805
- 有難さ 結1067
 有難味 結4732
 ありさま M₂₋₃ 指1084
 有様 指1084
 有る 結168~76, 1374~99 文
 493, 1230, 1412, 1537, 2217,
 2243~4, 2306, 2381, 2407
 或 結1982
 歩きぶり 結35
 歩き廻る 結452~4, 1607 文
 102
 歩く 結1028~9, 1621~4 文
 70, 75, 101, 103, 530, 1368,
 1568, 1743, 1782, 1886, 1914,
 2322, 2333, 2382, 2417
 アルコール 結3014, 4770
 アルコール液 結5149
 アルコールびたし 結3014
 ある種の R₄₋₂ 指1124
 あれ 文572
 荒れ狂う 結1132
 あれじゃ F₁₀₋₄
 あれじゃ・まるで・みたい
 指276
 あれじゃまるで・みたい
 指276
 荒れる 結1131
 泡 文1591, 2180, 2251
 合わす 文1628, 1786
 合わせ鏡 結519⁸
 合わせる 結2062, 2698~700
 文1629, 1710, 1787, 1897
 あわや F₆₋₂
 あわや・そう 指438
 あわや・そうな 指438
 哀れさ 結2334
 哀れみ 結568
 案 結3089
 暗黒 結499, 3579, 4639, 4781
 アンテナ 文573, 2206
 案内 結839
 あんばい M₂₋₁₂ 指1088
 按摩 結5251
 あんまり F₁₂₋₂

胃 結893, 968, 2239 文2403
 威 結734 文1607, 2140
 意 結2296

言いかける 結1730
 言い方 結326, 1294
 言い聞かす 結2769
 言いくるめる 結3539
 言いたげ 結4417~8
 言いつける 結2781
 言い直す D₃₋₂ 指39
 言い分 結244 文1230
 言い訳 結952, 1358
 言う D₃₋₁ 結2290~4, 2678
 ~9, 4251 文104
 言う・くらい・もの 指171
 言うたら F₂₋₅
 言うたら・一つ 指390
 言うたら・と一つ 指390
 言う・ほど 指159~60
 言う・よう・気がする 指187
 家 結1408, 2709, 2817, 3156,
 3295, 3479, 4640, 5157 文1593
 家中 文1592
 家並み 結1746
 言えば F₂₋₂
 言えば・言う 指245
 言えば・というべきもの 指245
 言えば・みたい 指393
 言えば・みたいなもの 指536
 言えば・みたい・もの 指536
 いえば・ようなもの 指535
 言えば・よう・もの 指535
 威嚇 結3705
 医学 結5380
 生かす 結2649
 鋤型 文1394, 1594
 いかにも F₁₋₅
 いかにも・おもむき 指555
 いかにも・ばかり 指285
 いかにも・よう 指385
 いかにも・よう・思う 指464
 いかにも・ような 指385
 いかにも・ように思う 指464
 いかにも・んばかり 指285
 怒り 結106, 868, 914, 2002,
 2124, 2508, 4514
 礎 結736
 息 結583, 2645, 3097, 3693,
 3788 文1595
 意気 結1574
 行き当たる 結1497, 1713
 文105

生き生き 結1261~2
 生き甲斐 結194
 生き方 結1438, 4485
 行き通い 結4866
 行・往き来 結1813 文2340
 意気込み 文2014
 行き先 結4893
 息する 結1287
 息絶える 結1226
 行きたがる 結1006
 呼吸づかい 結465, 3381, 5417
 息づく 結132, 1310, 1546
 行きつく先 結4894
 生き続ける 結1191, 1646
 慣り 結207
 生きながらえる 結1194
 生き残り 文2386
 息の根 結1963 文1231, 2315
 生柱 結5486
 行き隔たる 文1479
 息巻く 文106
 行き戻る 結1611
 生き物 文574
 意気揚揚 結4463
 生きる 結820, 1179~90, 1192
 ~3, 1317~8, 1578~80, 1626
 ~7, 1752, 1803, 4353, 4637,
 4648 文107, 468, 490, 1375,
 1460, 1985, 2270
 行く 結524~7 文101, 473,
 503, 506, 529, 545, 1381,
 1440, 1915, 2433
 池 結5412 文2063
 生捕る 結3441
 生けにえ 文1596
 生花 結1867
 意見 結1663
 憩う 文2011
 いささか F₃₋₁₂
 いささか・…という・おも
 むき 指580
 いささか・…といった趣 指580
 いざなう 結2450
 石 結966, 1189, 2806, 3994,
 4787, 5088, 5147, 文1372,
 2064
 意志 結192, 282, 535, 1738,
 2529, 2592, 3430, 3573, 4999,
 5055 文575

意地 結1942
 意識 結95, 337, 1272, 1339,
 1822, 1827, 2048, 2312, 3898,
 3983, 4118, 4136, 4201, 4357,
 4688, 4917, 5208
 弄りまわす 文1379
 石塊 結4788
 苛めつける 結2584
 苛める 結3543~4
 医者 結5409
 菱縮 文1278, 1338
 …以上 S₁₋₉ 指1169
 …以上の 指1169
 弄る 文108, 1657
 石牢 文2245
 意地悪い 結4478~9
 椅子 結4240, 5368
 泉 結1643, 5300~1
 いずれ F₇₋₄
 いずれ・よう 指439
 いずれ・ようなもの 指439
 異性 結3652
 以前 文537
 忙しい 結4233
 急ぐ 文1447
 イソップ 文2065
 板 文1395
 痛い 結4401 文5, 71~3, 1201
 抱・懐く 結3442~57, 3938,
 4175~7 文1639, 1842, 2418
 いたずら 結84~5 文1221
 痛・傷手 結2202, 3288, 5419
 痛みしき 結701, 2741
 痛み 結338, 490, 2108, 2409,
 2469, 3331, 3781, 3874 文
 576, 2151, 2254
 痛み止め 文2377
 痛・傷む 結856~7 文109
 傷める 結4114
 勞わり 結4936
 勞わる 結2583
 一 文2049
 位置 結3775, 4408, 4869~70
 文1396, 2268, 2272
 一円札 結935
 一段落 文577, 1234
 一度 文537
 一日 結3584, 3650, 4971 文
 1990

- 一人前 結4678
 一年生 結4878
 一部 結4660
 一頁 結4981
 一枚 結5276, 5356 文545,
 1397, 2043
 一脈通じる D₁₂₋₅ 指137~8
 一目 文1598
 一物 文2243
 一夜 結1196
 いちゃつく 結4230
 一夜漬け 文578
 銀杏返し 文579
 一郎熱 結5497
 一家 結5162
 一句 結4078
 慈しむ 結3348
 一個 結4988~9, 5005
 一行 結557
 一切 文2219
 一室 文2089
 一種 M₅₋₂
 一種特別の・ように 指1138
 一種の R₄₋₁ 指1123
 一種の…状態 指1144
 一種の…性 指1145
 一種の…的 指1146
 一種の…として 指1147
 一種の・と呼んでもよかった 指1128
 一種の・に似たようなもの 指1129
 一種の・似る 指1129
 一種の・みたい 指1141
 一種の・みたいじゃないか 指1141
 一種の・よう 指1138~40
 一種の・ような 指1139
 一種の・ようなもの 指1142
 一種の・ようなものさえ・感 指1143
 じた 指1143
 一種の・ように 指1140
 一種の・よう・もの 指1142
 一種の・よう・もの・さえ・ 指1143
 感じる 指1143
 一種の・呼ぶ 指1128
 一瞬間 結170
 一緒 文1386, 2220
 一生 結3255, 4185
- 一身 結2791
 一寸逃れ 文580
 一寸法師 文581
 一線 文1600~1, 2103
 一直線 結4253
 一手 結3524
 一滴 結5034, 5043 文2066
 一擲 結2955
 言ってみるなら F₂₋₄
 言ってみるなら・代わり 指558
 言ってみれば F₂₋₃ 指199~
 200 指199
 言ってみれば 指200
 一党 文582
 一杯 結4836~40 文1602, 2047
 一発 文1603
 一般 K₂₋₅ 指742
 一匹・疋 結5004, 5006 文
 2042, 2067, 2274
 一片 結4960~1, 5033, 5058,
 5062, 5084
 一步 結1265, 1454 文536, 538,
 540, 543~4, 1235
 一方交通 結4730
 一本 結2648, 5125
 一本松 文2374
 逸話 結2690
 偽り 結1063, 2921, 3038
 文2379, 2430
 偽る 結2263
 凍 結2079
 糸 結2720, 3845, 4396, 4434,
 5137~9 文478, 1236, 2019,
 2027
 意図 結3396~7, 5056
 井戸 文2387
 居所 結1949 文2182
 井戸端会議 文583
 糸へん 文584
 挑む 文1777
 糸目 結5140
 射止める 文110
 田舎 結1658, 5355
 稲妻 結1774
 稲光 結3872
 犬 結4679, 4686, 4843 文1436
 射抜く 結2620
 八畜生 文585~6, 2068
 居残る 文2001
- 命 結2591, 3175, 3416, 3558,
 3869, 4076~7, 5079 文587,
 1604, 2009
 胃の附 結1873
 祈り 文588
 茨 文2275
 威張り返る 結935
 威張る 結934
 いびき 結1796, 1956, 2761,
 4028~9
 息吹く 結1038
 胃袋 結980, 4447, 4886, 5091
 文2200
 遺物 結4732
 今 文530
 忌忌しさ 結3589
 縛め 結5106
 縛める 結2576~7
 今にも F₂₋₁
 今にも・かのように 指432
 いまにも・そう 指433
 今にも・そう 指433~7
 今にも・そう・思われる 指490
 今にも・そう・感じ 指541
 今にも・そう・気がする 指491
 いまにも・そうな 指434
 今にも・そうな 指435
 今にも・そうな感じ 指541
 いまにも・そうな気がする 指491
 いまにも・そうに 指436
 今にも・そうに 指437
 いまにも・そうに思われる 指490
 今にも・よう 指432
 今にも・よう・気がする 指489
 今にも・ような気がします 指489
 意味 結1648, 2800, 3194, 3499,
 4217
 イメージ 結4095
 妹 文51
 癒す 結2653 文1232
 いらいら 結5434
 苛立たしさ 結1257
 苛立ち 結869, 2476
 入る 文1476
 居る 結177~9, 1400~4 文
 1222, 1386, 2222, 2275, 2282,

2287, 2291, 2304, 2421
 射る 結2618～9, 2692, 4080
 文1670, 1909
 入れ更える 文1711
 入れ方 文2181
 入れ墨 結4638, 4742
 入歯 文1216
 入れる 結2729～30, 3099, 3715
 文1471, 1572, 1804, 1836,
 1840, 1844, 1861, 1875, 1920
 いろ 指1093
 色 M₂₋₂₁ 指1093 結259, 668,
 747, 1911, 2278, 2883, 3308,
 3838, 3967, 4020, 4075, 4147,
 4322, 4474, 4535, 4851 文1606
 …色 S₁₋₂ 指1151
 色合い 結5237
 色づく 結1084～5
 色づけ 結2800
 色テープ 結5280
 彩・色どり 結2758 文1605
 彩る 結4095
 色町 文589
 岩 結680, 2364, 3887
 言わせる 結2766
 いわば F₂₋₁ 指197～8 指197
 言わば 指198
 いわば・一種 指559
 いわば・一種の・みたいなも
 の 指567
 いわば・一種の・みたい・も
 の 指567
 いわば・形容する 指244
 いわば・…という 指572
 いわば・…という・よう 指575
 いわば・…という・ような 指575
 いわば・…という・ようなもの 指534
 いわば・…と形容するよりほか
 はない 指244
 いわば・の一種 指559
 いわば・よう 指391～2
 いわば・よう・思われる 指485
 言わば・ような 指391
 いわば・ようなもの 指534
 いわば・ように 指392
 いわば・ようにしか思われな
 かった 指485
 いわば・ように見えた 指486
 いわば・よう・見える 指486
 いわば・よう・もの 指534

岩屋 文2069
 いわゆる R₃₋₁ 指1121
 いわゆる・よう 指1137
 いわゆる・ような 指1136
 陰影 結657, 1395, 1914, 2712,
 3737～39, 3756
 陰画 結4714 文590
 陰気 結4412
 隠者 文591
 隠者王国 結5467
 印象 M₃₋₁₃ 指1108 結1331,
 1599, 1649, 2845, 3048, 3180,
 3825, 4171
 印象づけられる D₅₋₁₇
 引導 文1608
 隠匿 結4112
 因縁 結3546
 インフルエンザ 結715

— ウ —

浮いた 文2431
 上 結1208, 2715, 5390 文545,
 2043, 2210, 2278, 2338, 2382
 植え込む 結4195
 植えつける 結2792, 3598～
 600, 4025～6, 4121～3, 4210
 植える 文2317
 飢える 結1237～8 文1463
 ヴェール 文592 →ペール
 魚 結2022, 4815
 うかがう 結2256～7
 浮かし出す 結1928
 浮かす 結3148, 3719
 穿つ 結2756 文1263, 2033
 浮かばす 結3838
 浮かび上がる 結658～9, 1476,
 1784
 浮かび出る 結656～7 文111
 浮・泛かぶ 結647～55, 1473
 ～5, 1699～705, 1707～8,
 1783 文112
 浮かべる 結3140～7, 3839～
 42, 4082, 4106～11, 4161～7,
 4212
 雨気 結624
 浮き上がらす 結3843
 浮き上がる 結660～2, 1706
 文113
 浮き出る 結1405

浮き彫り 文114, 593
 震き目 文74
 浮く 結645～6, 1292 文115,
 2224
 受け入・容れる 結2456, 3594
 受け取る D₁₋₅ 指17 結2605,
 3591 文2320
 受け流す 結2010, 2460
 受ける 結2746, 3590 文1664,
 1821
 受け渡し 文2154
 動かす 結1952～4, 3793 文82,
 116
 動き 結1856～7, 1963 文1609
 動き方 文2114
 動き出す 結260
 動く 結254～9 文117, 1310,
 1384, 2027
 うごめく 結262～4 文1320
 牛 文2070～1
 姐 結4816
 潮 結4793～4 文1610
 失・喪う 結2928～30, 4189
 文474, 1630, 1890
 後ろ 文2227
 後ろ姿 結2462, 4933
 後ろめたさ 結1430, 2848
 後ろ指 文1611
 渦 結334, 2155, 2614, 3110,
 4656, 4943 文86, 595, 1612,
 2269
 薄い 結4344～6 文43～4, 1181
 薄皮 文1397
 薄皮だち 文594
 疹き 結339 文2172
 薄汚い 結4557
 疼く 結858～60
 踏る 結1024～6 文118
 薄暗い 結4500 文45
 渦巻き 結3163, 4957 文596
 渦巻く 結440～7
 埋める 結1985～6, 2666～7,
 2724, 3006～13, 3712 文1676
 薄もの 文597
 埋もれる 結1417 文119
 薄汚れる 結1091～3
 薄れる 結843～4 文1245
 薄笑い 結773, 1142, 2926,
 3146, 3841, 4082

- 薄笑い色 結4875, 5490
 嘘 結1106, 1244, 2330, 2915, 3050, 3098, 4938, 5115 文2316
 歌 結619, 2288
 歌う 結2287~9
 疑い 結474
 疑われる D₅₋₇
 疑われる・くらい 指166
 疑われる・ほど 指164~5
 うだつ 文1237
 うだる 結4244
 内・中 文504, 2031, 2289, 2372
 打ち明ける 結2311
 打ち合わせる 結2688
 打ち克つ 結1555~8
 内側 結1290 文2282
 打ち砕く 結3250~3, 3876
 打ち消す 結2262
 打ち込む 結3102 文2250
 打ち壊・毀す 結3236~8, 3873
 打・撃ち倒す 結1978 文120
 打ちのめす 結2146~8, 2673
 打ち払う 結3526
 打ち破る 結787 文121, 2327
 打・撃・搏つ 結1134, 2088~2100, 2621, 3203, 3859~60 4044 文122, 465, 470, 1371, 1565, 1677, 1741~2, 1755, 1768, 1805, 1850, 1937~8, 1980
 美しい 結1061 文46, 2212
 美しさ 結632
 映し出す 結2629
 移す 結3032~3
 鬱積 結4220
 訴える 結2454, 3731~2 文123
 鬱陶しい 結4411 文6
 鬱陶しさ 結2734, 3717
 鬱憤 結108
 映る D₅₋₁₁, 結1078~80, 1745 文61, 1387, 1538, 2305
 腕 結290, 2065, 2247 文598, 2246, 2395
 うとましき 結488
 促す 結2571~2, 2809
 うなずく 文124
 うなだれる 結1014
 唸り 結3852 文1999, 2258
 唸る 結927~8, 2939
 ウニ 文2317
 うぬぼれ 結3294
 敵 結5200
 うねりまわる 結763
 鶴呑み 文599
 奪う 結2596, 3561~4, 4003 ~13 文1797
 姨捨山 文600
 馬^{うまづめ} 文2427
 石女 結5463
 馬乗り 文601
 埋まる 文2256
 生まれかける 文1281
 生まれ変わる 文126
 生まれ出る 文127
 生まれる 結1176~8, 1279, 1633, 1640, 1750~1 文128, 509~10
 海 結575, 839, 1178, 1919, 2182, 2365, 3646, 3717, 4273, 4275, 4305, 4398, 4667, 4707, 4801, 5303~7 文65, 2424
 膿 文1579
 海山 文602
 生む 結3683, 4060~1 文129
 有無 結1772
 埋め合わせる 結4081
 呻き声 結643, 794, 2048, 2051, 4497
 呻く 結930, 1301
 ウメケムシ 結1345
 埋める 結4090 文1586, 1905
 埋もれる 結314~5
 裏 結4905~6
 裏返す 結3228~9
 裏書き 結1856~58
 裏側 文1398
 裏切り 結4508
 裏切る 結2451~2, 3523, 3976 ~7 文130, 2028
 裏づけ 文603
 裏腹 結4299 文604
 恨・怨み 結1575, 3011, 3582, 3767 文2164
 恨みごと 文2396
 恨む 結2224
 瓜 文2044
 瓜実顔 結5508
 売り出す 文131
 瓜二つ K₁₋₅
 売物 結4733
 売り渡す 結3580
 売る 結3577~9 文1587, 1606
 潤い 文605
 うるさがる 結2231
 うるさそう 結4438, 4621
 うるむ 結1113
 憂い 文74
 嬉しさ 結195, 1636, 2891, 4836, 5434
 熟れる 結1212
 うろろう 文514
 鱗 文606
 鱗雲 結242
 うろたえる 結746, 910
 うろつき廻る 結987, 1308
 うろつく 結986, 988, 1620
 諺言 結1201 文607
 噂 結3683, 4060, 4173, 5339
 うわざる 結862
 上背 結2518
 上っつら 文2405
 上つら 結4908
 上塗り 結5114~5
 運 結1470
 運転 結2817
 運動 結12
 運命 結85, 227, 461, 1361, 1369, 1762, 2261, 2658, 3165, 3519, 3608, 4608, 4949, 5078, 5090
 — 工 —
 絵・画 結919, 1393, 2288, 5080 文2429
 永遠 結704, 1125, 1504, 1985, 2302, 4876
 永遠性 結4489, 4523
 映画 結3750, 4025
 映画館 結4072
 影響 結2275
 営業妨害 文608
 映像 結4738
 詠嘆 結4764
 栄養 結3959
 笑顔 結1635, 3640, 3827
 描き出す 結2325~6, 3404, 3730 文132

描く 結2315~24, 2681~2,
 2771, 3400~3, 3925 文133,
 1672, 1756, 2004, 2429
 駅 結520, 4071
 絵絹 結5185
 えくぼ 結5021
 挟り出す 文1233
 挟る 結3283 文526
 依怙鼠眞 結4237
 餌 結4747 文40, 609, 2000
 会釈 結76
 枝 結2042, 2192~3, 2310,
 2323, 3989, 4216, 4427, 4755,
 5327 文1613
 枝葉 結5328
 枝道 文610, 1399~400
 得たり 文515
 越権行為 結2488
 エッフェル塔 結2194, 3867
 エネルギー 結2012
 エネルギッシュ 結4289
 絵の具 結5184
 恵比寿 文611
 エピローグ 文612
 絵本 結31
 獲物 文613, 1614, 2000
 選び取る 結3364
 選ぶ 結2251
 選ぶところがない K₂₋₁₁
 襟・衿 結1231, 1735, 3067
 文2318
 衿子〈人名〉 結2745, 2962,
 3797, 4660, 5143, 5151
 円運動 文2373
 演技 結1285, 2842 文614, 1215
 怨恨 結4675
 演算 結615
 演じる 結2432, 3517~8 文134
 ~5, 1273, 1623, 1746, 1873,
 2240, 2323
 遠心力 結2172
 演壇 文2035
 延長 結4821
 沿道 結895
 煙突 結2043, 2051
 鉛筆 結343, 4465
 遠慮 結70, 5177

2247
 追い討ち 文616, 1615
 追い掃す 文136
 追い駆ける 結2029~30, 3071
 文502
 追い越す 結3073
 追い込む 結3716, 3830 文137,
 1506
 追い出す 結3098, 4074~5
 文138
 生い立ち 結5413~4
 追い立てる 結2067, 3075 文
 139
 追いつく 結1439
 追い詰める 結2031~2, 3072,
 3819 文140~1
 置いてきぼり 結3419 文617
 追い剥ぎ 文618
 追い払う 結3074
 追いまくる 結2028
 追い回す 文2321
 追いやる 結3747, 3818, 4211
 文142
 老いる 結1205
 王 文2169
 追・透う 結2023~7, 2668~9,
 3063~70, 3814~7, 4067 文
 160, 2353
 負う 文1459, 1620, 1665
 扇 文2056
 黄金 文2072
 王者 結5011
 応酬 結1721
 黄熟感 結742
 応じる 結971
 応対 文1374
 横着 結1395, 3306
 嘔吐感 結2466
 懊惱 結1901
 往復 結1812, 1826
 鷹揚 結4460
 往来 結1657~9 文1388
 覆いかぶさる 結148~9, 1672
 覆いかむさる 結1371
 覆・蔽い包む 結2708, 2895
 覆・蔽う 結1901~4, 2894,
 3774
 大きい 結4339 文7, 47, 1196
 大きさ 結3922

大釘 文2250
 大声 結548, 4709
 大芝居 文619
 大っぴら 文2423
 大手 文1616
 オーバー 結4473 文620
 大恥 結455, 2251, 4024, 4959,
 4984
 大平〈人名〉皇后 結5466
 丘 結848, 1730, 2332, 4921,
 5367
 お蚕ぐるみ 文621
 おかしい 文8
 おかしさ 結599, 3484
 おかす 結2488 文143, 1970
 お門違い 文622
 おかね〈人名〉 結4664
 小川 結5296
 沖合 文1401
 置き換える 結2969
 掟破り 結2167, 2804, 5065
 文623
 置き所 文2208
 置き土産 文624
 置物 結4125
 起きる 結291
 置き忘れる 結3356
 奥 結1291, 2753, 3391, 4170,
 4941 文2391, 2418
 置く 結1979, 2998~3001,
 3711, 4144~5 文63, 475, 1389,
 1422, 1461, 1477, 1488, 1598
 屋外 結71
 奥さん 結1266
 奥底 結4919
 臆病 結3914
 奥深い 結4327~8 文522
 送り込む 結3113
 送り届ける 結3744
 贈り物 結4720
 送・贈る 結1994, 3041~4,
 3586, 3806 文1647
 遅れる 結847
 起こし手 文626
 起こす 結1932~3, 2990~1
 文1934
 行う 結2431 文2030
 起こる 結1290, 1408
 怒る 結902~5, 3342 文1984

押え込む 結2807 文144
 押・圧えつける 結3862 文
 1354, 2294
 抑・圧える 結2115~6, 3214
 ~6
 納・収まる 結582 文2277
 納める 文1497
 押し 文627
 押し合う 結2112
 おじいちゃん組 文628
 押し売り 結2862~3
 教える 結2495~8
 押し返す 結3089
 押し隠す 結2920
 押し掛ける 文146
 押しかぶさる 文1531
 お辞儀 結1812, 1826
 押し切る 文147
 怖気^{おそ} 結1962
 押し込む 結3103, 4148 文148
 押しこめる 結4155
 押し殺す 結3698
 押し沈める 3149~50
 押・押し進める 結3820
 押し倒す 結1977
 押し出す 結3097, 3824 文2273
 押しつける 結2117~9, 3217
 文1352, 2363
 押しっこ 文629
 押し包む 結3773
 押しつぶす 結2160~2, 3874
 押し流す 結3745~6, 3809,
 4196 文149~50
 押し除ける 文151
 押し花 結4810
 押しひしめく 結243
 押し広げる 結3314
 惜しむ 結2228
 押し戻す 結2038, 3088
 押し揉む 結2359
 お喋り 結74
 お喋り者 結4667
 押しやる 結2033 文152
 お嬢さん 文1239
 押し寄せる 結720~5
 怖じる 文2231
 雄・牡 結4804 文631
 押・圧す 結2108~11, 2113 文
 145, 153

お裾分け 結5110 文632, 2247
 お墨付き 文633
 お歳暮 結82
 おせっかい屋 結5456
 お膳立て 結2418 文634, 865
 襲いかかる 結1051~6 文1360
 襲う 結2462~87, 3978 文1351
 おぞましさ 結1411
 懼れ 結3445
 恐ろしさ 結466, 2710
 お大師さま 文1240
 お多福 文636
 穏やか 文86
 陥る 結1466~8 文1496
 落・陥ち込む 結630~1, 1462
 ~5, 1591 文536, 1560, 2281,
 2403
 落ち着き 結1935, 2036, 2928,
 3336, 4445
 墜ちつくす 結628
 落ち着ける 結3343
 落ち目 文637
 落ちる 結616~27, 1460~1
 文154, 499, 1450, 1511~2,
 1527, 1555
 お月さま 結5457
 落っこちる 結629
 追っつく 文155
 追手 結5032
 夫 結2932, 3291, 4798
 オットセイ 文638
 おっばい 文2257
 追っ払う 文156
 おっぼり出す 文157
 汚点 結4814
 おてんと様 文639
 音 結18, 88, 402, 573, 588,
 802, 854, 1119, 1373, 1435,
 1883, 1895, 1902, 1969~70,
 2030, 2096, 2177, 2204, 2309,
 2491, 2556, 2578, 4044, 4302,
 4410, 4840, 5239 文2175, 2401
 汚漬 結2633
 男 結1227, 1578, 2851, 2870,
 2946, 2997, 3496, 4634, 4691,
 5004 文85, 1617, 2035, 2319
 男心 結4091
 男釣り 結5521
 男らしい 結125

落とし穴 文640
 陥・落とし入れる 結3740~2,
 4215 文1427
 落とす 結1936~8, 3124~8,
 3783, 3835~6, 4201~3 文
 158, 1952
 訪れる 結1043~5
 大人 文1402
 大人しい 結4462 文81
 大人らしさ 結2958
 躍らす 結3425
 躍らせる 結3932
 劣る D₁₋₁
 踊・躍る 結989~94
 驚かす 結2206
 驚き 結2132, 2914
 驚く 結895
 同じ K₁₋₃ 文2434
 同じ・くらい 指961
 同じ・こと 指1010
 同じ・ほど 指960
 同じもの 指1009
 同じ・もの 指1009
 同じ・役目 指1014
 同じ・よう 指1000~1
 同じ・よう・こと 指1008
 同じ・よう・もの 指1007
 鬼 文641, 2052, 2074, 2222
 鬼ごっこ 結5088
 おののき 結2072, 2539
 おのれ 結1533, 2970, 4184
 帯 結1407, 2050, 4090, 5148
 ~9 文2320
 怯え 結504, 3522, 4948, 5418
 脅える 結1532
 怯・脅かす 結2216~8, 3907
 ~8
 帯びる 結1911~2
 尾ひれ 文642, 1618
 覚える D₂₋₂ 結2240 文1752,
 2254
 思し召し 文2116
 溺れる 結1585 文159
 お前 結2867, 3730, 4708, 4769,
 4796 文644, 1619, 2075
 お祭り騒ぎ 文645
 おめでた 文646
 おもい 指1103
 思・想い M₃₋₁₀ 指1103~5

>指 1104 結826, 1467, 1479,
 1670, 1749, 1768, 1947, 1963,
 2001, 2033, 2110, 2147, 2343,
 2353, 2411, 2578, 3035, 3112,
 3136, 3337, 3610, 3909, 4141,
 4550, 4599, 4613, 5060
 重い 結4353~82 文9, 1188,
 1218
 思い合わせられる D_{9-1} 指99
 思い浮かべさせる D_{7-5} 指90
 思い浮かべる D_{11-2} 指111
 思い浮かべる・一種の・相似
 指193
 思い起こさせる D_{7-4} 指87~9
 思いがけない 文1217
 思い切る 結4247
 思い出させる D_{7-3} 指85~6
 思い出させる・よう 指183
 思い出す D_{11-1} 指103~10 結
 2245
 思いつき 結4190
 思い続ける 結2762
 思・憶い出 結213, 662, 697,
 1717, 2175, 2354, 2550, 3780,
 3813, 3871, 4040, 4115, 5059
 思い・ほど 指1120
 思う D_{1-2} 指5~15 文530,
 2000, 2369
 思う・ほど 指156
 思う・ほど・よう・見える
 指170
 思う・よう 指172
 思える D_{9-3}
 俯・面影 M_{2-20} 指1092 結
 177, 2074, 3188, 3966, 4666
 重苦しい 結4405~6
 重さ 結152, 2115, 2189 文648,
 2271
 重石 文647
 重たい 結3962, 4383~7 文10,
 1185
 玩具 結4767~8
 表方 文649
 表玄関 結5161
 重荷 結5118 文1621~2
 思ひ 指1105
 重味 結550, 2188, 3685
 おもむき M_{2-4} 指1085
 母屋 文2026

お守り 結5130
 思わせる D_{7-2} 指78~84
 思わせる・ほど 指168
 思わせる・よう 指180~2
 思われる D_{9-4} 指59~62
 思われる・くらい 指163
 思われる・ほど 指162
 親 結5250 文2051
 親木 結5500
 親父 結5407
 親玉 結4997
 親分 結5023
 親指 結5371
 泳・游がす 結3426~7 文161
 泳ぎ抜く 文162
 泳ぐ 結1005 文1551, 2420
 及ばない K_{7-4} 指749~50
 及び腰 文1403
 檻 文1356~7, 2277
 折り重なる 文163
 織り込む 結3112, 4104, 4154,
 4192~3
 オリジナリティ 結3739
 織りまぜる 結3621
 下・降りる 結641~4 文1331,
 1364, 1982, 2259
 居る 結180~1
 折る 文1713, 1935, 2362
 織る 結2607
 俺 結1302, 4663, 4671
 折れ合う 結1048 文164
 折れ目 結2798
 折れる 結758~9 文165, 1328
 愚かさ 結4124
 卸・下ろす 結2737, 3718 文
 541, 1838
 終わる 文1513
 音階 文493
 音楽 結205, 394, 2329, 3109,
 3723, 3731, 3795, 4534, 5254
 恩義 結1586
 音響 結4939
 音声 結35, 2327
 温度 結2060
 雄鶏 結4813
 女 結188, 911, 1072, 1236,
 2830, 2869, 2947, 3357, 3655,
 4322, 4677, 4745, 5005~7,
 5222 文1404, 1623~7, 2076

~7, 2179, 2190, 2305, 2321
 ~2, 2405, 2427
 女漁り 結5522
 女心 結3107
 女出入り 文651
 女面 結3901

— 力 —

…化 S_{3-1} 指1175
 我 結1631, 1717~8
 蛾 結998, 2227
 ガーゼ 結1926
 貝 文2234
 害 結2601
 概 M_{2-10}
 開花 文652
 外界 結5173, 5187 文1241~2,
 2232~3
 快感 結1765, 4138
 懷疑 結572
 外気 結2437
 解決 結493, 1845, 2828
 外光 結1656
 飼い殺し 文2078
 悔恨 結1107, 2604, 5216
 会社 結3735
 快笑 結807
 怪人 文2171
 灰燼 文1405
 回想 結1713
 海藻 結1840
 諧調 結3770, 4851
 回転 文653, 1999
 街道 結4033
 快刀乱麻 文654
 買い取る 文2220
 概念 結1932, 1975, 2995, 4702,
 5100
 回・恢復 結898, 2815 文1791,
 2130
 怪物 文655, 2079~80
 開放 文1750
 解放 結2849, 3723
 解放感 結1058, 3383, 4505,
 5039
 垣間見せる 結3915
 垣間見る 結3382
 海面 結840, 3889
 会話 結1282, 1464, 2032, 2419,

- 2696, 2847, 3085, 3824, 4894
 買う 結3581~3 文166, 1871
 返す 結3596 文1803
 孵す 文1780
 替え玉 文656
 帰らす 結3713
 蛙 文2065
 返・帰る 結250, 528~9 文
 1436, 1561
 変える 結1948~9, 4213
 顔 M_{2-18} 結288, 300, 369, 407,
 576, 670, 711, 819, 910, 1230,
 1264, 1327, 1397, 1432, 1452,
 1610, 1646, 1720, 1735, 1770,
 1784, 1795, 1910, 1920, 1923,
 1925~6, 1969, 1993, 2052,
 2180, 2191, 2274, 2330, 2386,
 2390, 2393, 2698~9, 2723,
 2737, 2768, 2787, 2811, 2813,
 2853, 2968, 3002, 3151, 3260,
 3375, 3553, 3718, 3809, 3868,
 3883, 3899, 3920, 3928, 3958,
 4002, 4056, 4097, 4106, 4163,
 4167, 4172, 4378, 4411, 4499,
 4594, 4600, 4652, 4701, 4727,
 4779, 5093, 5109, 5133, 5175
 文474, 1180, 1243, 1406~7,
 1628~36, 2081, 2200, 2248
 ~9, 2278~9, 2358, 2373, 2411
 顔色 結1685, 1798
 顔立ち 結2922, 4323
 顔つき M_{2-19} 文2013
 顔なし 文657
 が思いあわされて 指99
 香 結675, 1055, 1202
 薫る 結1107
 瓦解 文1282
 抱え 文658
 擁え込む 結3776 文167
 …がかえって…であり, むし
 ろ…は…である J_{a-7} 指612
 抱え取る 文168
 掲げる 文1749
 案山子 文659
 踵 結4200
 …か…かと思われる 指60
 か…かとも思われる 指625
 鏡 結4775, 5312 文660
 輝かしい 結4441
 輝かす 結2628
 輝き 結4429, 5211
 輝き出す 結1638
 輝く 結1069~70, 1564, 1648
 文169, 1227, 2040
 掛・係・懸かる 結1553 文542,
 1304, 1474, 2302
 かかわり 結3725
 柿 結4012
 垣 文1637~8
 鍵 結2676, 3324, 5187~8 文
 542, 661, 1244
 餓鬼 文662
 掻き落とす 結2931
 掻き消える 結225
 掻き消す 結2938~9, 3787
 掻き込む 文170, 1567
 嗅ぎ出す 結3512~3 文500
 掻き立てる 結2962~7, 3790
 ~2 文1612
 嗅ぎつける 結3373 文171
 餓鬼道 文2082
 垣根 結4753
 鉤の手 文663, 2083
 掻きのぼる 結1033, 1798
 掻き廻す 結2013 文172
 掻き乱す 結2958
 掻き捲る 結3478~80, 3941
 文173, 1939
 掻き分ける 結3166
 …格 S_{1-15} 指1165
 核 文1639
 書く 結2314, 2770 文1369
 掻く 結3477 文1824
 覚悟 結458, 3307
 拡散 結3903
 隠しカメラ 結4776
 隠し持つ 結2921
 確信 結1576, 4015, 4029
 確信ありげ 結4624
 隠す 結1929~31, 2711, 2918
 ~9, 4099, 4136~7
 拡声機 結3851
 拡張 文2354
 角度 結4972~3 文2090
 格闘 結1324~5
 獲得 結2851
 攪拌 結3753
 額縁 文664
 革命 結4637, 4719 文665
 額面どおり 文666
 隠れごと 結5249
 隠れ家 文2238
 隠れる 結187~9, 1674~5
 賭け 結3613 文667
 片 結4737
 影・陰・翳 結228, 426, 435,
 527, 621~2, 762, 812, 1568,
 1683, 1698, 1799, 1848, 1894,
 1921, 2391, 2632, 3058, 3102,
 3126, 3390, 3651, 3783, 3801,
 3835, 3867, 3887, 3936, 4084,
 4131, 4201~3, 4432, 5139,
 5213~7, 5220~1 文668,
 1181, 1245~6, 1640, 2017,
 2412, 2415, 2417
 掛勘定 文1408
 崖崩れ 文2369
 陰口 結3195
 駈・駆け出す 結1590
 馳けっくら 文463, 669
 駆け上る 結1032
 影法師 結990
 馳け廻る 結1819 文174
 駆けめぐる 結450~1
 かけら 結4964~5
 掛・懸ける 結1982~3, 2721
 ~3, 3004, 3366~7, 4240 文
 1311, 1433, 1438, 1443, 1454,
 1470, 1515~6, 1556, 1604,
 1615, 1885, 1976, 2246
 賭ける 結4253~4
 翔ける 結1031
 翳る 結1122
 蜻蛉 結28
 過去 結1180, 1594, 1831, 2203,
 3082, 3272, 3317, 3548
 籠 文670
 囲う 文175
 囲む 結1905 文1415
 がごとき 指787
 がごとく 指788
 笠 文1409
 傘 結5152
 かさかさ 結4231
 重なり合う 結684~6
 重なる 結1712

- 重ね合わせる 結3183, 4113
 重ねる 結3181〜2 文1288
 かさぶた 結438 文2343
 風見鶏 文671
 飾り 結4541 文2150
 飾りたてる 結2690
 飾る 結2614, 2796, 3638〜40, 4040 文1904, 2212
 河岸^{かし} 文1642
 梶・舵 文1641, 1643, 2031, 2252
 貸し借り 文672
 傾げる 結1976 文1697
 賢さ 結1065
 過失 結1837
 舵取り 文673
 化す D₄₋₂ 指49〜53 文2221
 貸す 結4119 文1806, 2026
 かすがい 結4739
 カストリ雑誌 結5479
 霞 結1903
 霞む 文176
 かすめる 結746〜7, 1787〜8, 2138, 2597〜9, 3870〜2 文1583, 1739, 2356
 颯 結404, 505, 791, 926, 1222, 1800, 1817, 1917, 1961, 1992, 1994, 2026, 2057, 2103, 2178, 2322, 2326, 2426, 2586, 2616, 2635, 2644, 2858, 3206, 3707, 3817, 3833, 3988〜89, 4013, 4027, 4055, 4083, 4216, 4611, 4930, 4955, 5055, 5076, 5265, 5382 文1217, 1410, 2084, 2258, 2286, 2426
 風当たり 文1182
 稼ぐ 結2683, 3407 文1818
 仮説 結2779
 が想像される 指102
 家族 結3636 文674
 加速度 結3992
 肩 結890, 1287, 1539, 2037, 4083 文1646, 2259
 …形 指1170
 …型 S₁₋₂₀ 指1170〜1 結2824 文1411
 がた 結483 文2428
 固・堅・硬い 結4558 文11, 48〜9
 片意地 結418
 片腕 文2028
 片おろし 結397
 肩替わり 結249 文675
 仇^{かたき} 結4683 文2187
 頑なさ 結2774
 固唾 文1644
 かたち 指1090
 形 M₂₋₁₆ 指1090〜1 指1091 結2276, 3158, 3921, 4074, 5105 文512
 片ちんば 結4259
 嫁・片づく 結252 文177
 片づけ物 結3066
 片づける 結2975 文178
 片っぱし 文1177
 形なし 文2365
 固・塊まり 結3862, 4651〜4, 4937〜9 文487, 1645, 2144, 2160, 2165
 塊る 結1108 文179
 肩身 結4415
 傾く 結1412, 1680 文2216
 傾ける 結2718, 4143 文1918
 固める 結3661〜4 文1895, 1921, 2381
 語りかける 結1594〜5, 1644
 語る 結2300〜4
 型枠 結4966
 荷担 文1490
 価値 結4061
 勝ち 結2510
 勝ち誇る 結1302
 渦中 文1412〜3
 勝つ 結1311, 1737
 活 結2730
 かつおぶし 結4746
 楽器 結5193 文507
 荷ぎ屋 文676
 荷ぐ 文180
 確固 結4433
 かつこう M₂₋₁₇
 喝采 文1647
 合算 結2829
 活字 結3769, 4764 文1648
 滑走 結28
 かつて…ように今またその形を変えたもの 指751
 合点 結1282, 3762
 活勁写真 結4712
 濶歩 文1995
 勝代〈人名〉 結5383
 家庭 結769, 1597, 2948, 3464, 4242, 4527, 4761, 5261
 家庭讃歌 結4540
 家庭的 結4260
 角 結1382
 かとおもう 指5
 かと思うほど 指156
 かと思うほど・ように見えました 指170
 かと思うような 指172
 かと思った 指6
 かと思っていた 指7
 かと思わるる 指61
 かと思われる 指62
 かと思われるほど 指162
 門出 結4864
 かと見えた 指64
 かと見えるほど 指167
 かとも思えた 指624
 かとも思われた 指626
 かなぐり捨てる 結2956 文1652
 悲しい 結4232, 4408〜9
 悲しげ 結4410
 悲しさ 結2307, 2405, 3422, 3899, 4078
 悲しみ 結1093, 1380, 1424, 1481, 2093, 2356, 2374, 2413, 2435, 2523, 2584, 3150, 3235, 3259, 3304, 3524, 3530, 3855, 4146, 4157, 5205, 5330
 かな(ん)ぞ J₂₋₄
 かなぞのように 指669
 かな(ん)ぞ・よう 指669〜72
 かな(ん)ぞ・よう・扱う 指697
 彼方 結4890〜2
 金壺眼 結5510
 奏でる 結2327〜8
 かなどのように思われてくる 指700
 かなにか J₂₋₃
 か何かのように 指667
 かなにかのように思いながら 指696
 か何かのように思われて 指701
 か何かのように・感じて 指695

- かなにか・よう 指666〜8
 かなにか・よう・思う 指696
 かなにか・よう・思われる 指701
 かなにか・よう・感じる 指695
 か何か・ような 指668
 金棒 文2052
 …が…なら…は…J_{s-1} 指605〜6
 …が…なら…は…だ 指605
 …が…なら…は…であった 指606
 かなんぞのような 指670
 かなんぞのように 指671
 か何ぞのように 指672
 かなんぞのように扱う 指697
 が…に比較される 指140
 金 結1219, 1262〜3, 1415, 2025, 3071, 3073, 3148, 4683, 4816 文1414, 1649
 かねない K₁₀₋₂ 指815
 金離れ 文677
 可能 結3834
 可能性 結412, 972, 1562, 1734, 3090, 3367, 3820
 かのごとき 指789
 かのごとくにも見えた 指992
 彼女 結3645, 4154, 4192 文2220
 かのよう。 指752
 かのようだ 指753
 かのようだった 指754
 かのようで 指755
 かのようであった 指756
 かのようである 指757
 かのようでもある 指964
 かのような 指758
 かのような・気持 指1058
 かのような錯覚 指1080
 かのような調子 指1043
 かのように 指759
 (名詞)かのように 指760
 かのように・思って 指838
 かのように思われた 指870
 かのように聞える 指919
 かのように見える 指892
 徴 結501
 徴くさい 結4523
 家風 結896
 被・冠さる 結145〜7 文181
- かぶせる 結2896〜7
 かぶと虫 結4818 文678
 かぶる 文1653, 1760, 1991, 2421
 壁 結718, 733, 756, 1775, 2244, 2267, 2366, 2553, 2589, 3874, 5164〜8 文485, 679, 1373, 1415〜6, 1650, 1984, 2085, 2216, 2235
 花卉 文1978
 南瓜 文680
 構え 結1099
 藁口 文681
 籠^{かまど} 文2344
 我慢 結1838〜9
 神 結2945 文1651, 2395
 髪 結3706, 3988
 咬み合う 結2365
 噛み殺す 結3697
 神様 結3560, 4670〜1
 噛み締める 結3487〜9 文1687
 咬みつく 結1039
 噛みつぶす 結3246
 噛みにじる 結2686
 噛み分ける 結3362 文31
 噛・咬む 結2362〜4, 3484〜6, 3945 文462, 1688, 1896, 2237
 かむさる 結1370
 がむしやら 結4221
 仮面 結19, 64, 66〜7, 73〜4, 86〜7, 92〜3, 124, 127, 299, 454, 537, 689, 861, 897, 908, 916〜7, 931, 938, 945, 959, 1042, 1048, 1171, 1187, 1217, 1322, 1409, 1499, 1628, 1654, 1838, 1846〜7, 1861, 1872, 1876, 1884, 1935, 1944, 1946, 1967, 1993, 2010, 2039, 2073, 2081, 2167, 2170, 2228, 2232, 2259, 2264, 2281, 2360, 2389, 2432, 2449, 2451, 2460, 2493, 2507, 2582, 2587, 2647, 2700, 2767, 2777〜8, 2782, 2818, 3529, 3538, 3718, 3728〜9, 3759〜60, 3777, 3782, 3818, 3825, 3841, 3861, 3864, 3890, 3906, 3940, 3993, 4037, 4041, 4116, 4213, 4215, 4446, 4450, 4462〜4, 4469, 4621〜2, 4624, 4628, 4638, 4668〜9, 4680, 4699, 4717, 4770〜1, 4776, 4829, 4841, 4847, 4858, 4899, 4924, 5054, 5056, 5063, 5094, 5102, 5108, 5174, 5191, 5194, 5341, 5348, 5375, 5391, 5413, 5448 文682, 1247, 1374, 1653, 2045, 2241, 2324, 2388, 2412
 画面 結1913
 仮面劇 文683, 2223, 2323
 仮面殺し 結5535
 仮面舞踏会 文684
 鴨 文41
 鷗 結4814
 渦紋 結4655
 嘉門(人名) 結4630
 蚊帳 結3833, 4611
 痒い 結326 文83
 か…のような 指761
 がよくそうするように 指216
 がよく…ように F₁₇₋₁ 指216
 通わす 結2015, 3077
 殻 結1909, 3103, 5402〜5 文1420, 1655, 2280, 2325
 柄 結3823, 4246 文1248
 からから 文2370
 ガラス 文2086
 空世辞 結3164, 3851
 体・軀・軀 結544, 771, 813, 961, 1291, 1458, 1644, 1653, 1794, 1807, 2045, 2084, 2119, 2149, 2154, 2229, 2279, 2283, 2298, 2654, 2689, 2696, 2747, 3116, 3350, 3614, 3884, 4896, 5132 文685, 1218, 1249, 1417, 2087, 2224, 2250, 2363, 2413, 2427
 空っぽ 文2088
 落葉松 結4216
 絡まりつく 結1785
 絡まる 文497
 空まわり 結14
 絡み合う 結2065 文182
 絡みつく 結705〜9 文1519
 から見れば F₁₅₋₁ 指212
 絡む 結163 文183
 から…を思い出した 指103
 狩り 文686

- 借り 文687
 借り倒す 文184
 駆り立てる 結2727, 2804, 3750, 4183~4, 4191 文185
 刈りとる 結3601
 仮に F₂₋₁
 かりに・警えて見たら・とで
 も言うべきもの 指267
 仮に・たとえる・でも・言う
 指267
 借り物 文688
 狩人 結2493
 借りる 結3595 文1607, 1991, 2421
 駆る 結1999~2006
 軽い 結4388 文12, 1190
 軽々と 結4619
 軽口 結5511
 彼 結10, 48, 1286, 1581, 1732, 1808, 4715, 4752, 4777 文689
 枯枝 結232
 枯葉 結4055
 彼ら 結4632 文690
 枯れる 結1236 文467
 可憐 結1209
 川・河 結836, 885, 2112, 3354 文691, 2194
 皮 文84, 2267, 2393
 可哀そう 結4424
 可愛らしい 結4423
 渴き 結1241
 乾き上がる 結1117
 乾く 結1114~6, 1118~9, 1239 ~40 文186, 2261, 2371~2
 交わす 結4234
 驟す 文1922
 河面 結4960
 瓦 結4682
 変わらない K₂₋₃ 指743
 変わらなさ 結3906
 代わり M₄₋₄ 指1112~3 結2388, 2399
 …代わり S₄₋₄ 指1180
 変わりが無い K₁₋₇
 変わり種 文692
 変わる D₁₋₃ 指54~5 文1494
 棺 結670
 間 文2106
 感 M₂₋₁ 指1095
- 観 M₂₋₉
 感慨 M₃₋₁₁ 指1106 結197, 805, 1660, 2433
 考え 結313, 329, 650, 1704, 1715, 1742, 2213, 2276, 2530, 2599, 2765, 3036, 3274, 3436, 3734, 3788, 3939, 4963, 5061
 考え方 結834, 1412, 3159, 4113
 考える D₁₋₃ 指16 結3701, 4236 文1358
 感覚 結280, 569, 798, 1074, 1214, 1755, 1972, 2348, 2565, 2580, 2905, 3773 文1421
 寒気 結551
 欣喜 結62, 800, 1523, 1728, 1748, 1955, 2091, 2187
 眼球 結1313
 環境 結3481
 感興 結5140
 監禁 文187
 玩具 文693
 雁首 文694
 関係 結981, 1824, 2832, 3758, 4314, 4810, 4903 文188, 1656, 2389
 頑固 結4455
 監獄 文2089
 監獄島 文696
 監獄生活 文695
 看護婦 文697
 観察 文2090
 感じ M₃₋₃ 指1096~7 >指1096 結298, 415, 432, 1637, 1754, 1791~2, 1825, 1952, 1978, 2123, 3448, 3749, 4170
 がんじがらめ 文2383
 感じさせる D₇₋₁ 指77
 感じた 指1
 感じに見えた 指1118
 感じ・見える 指1118
 感謝 結1781
 感じやすい 結4396
 感受性 結3687
 感傷 結633, 1386
 感情 結24, 105, 189, 270, 361, 389, 441, 471, 539, 582, 600, 693, 748, 759, 786, 841, 867, 971, 1079, 1133, 1158, 1215, 1353, 1378, 1391, 1422, 1434,
- 1611, 1668, 1696, 1732, 1737, 1747, 1782, 1832, 1899, 1940, 1990, 2011, 2038, 2056, 2109, 2116, 2249, 2571, 2597, 2685, 2705, 2749, 2757, 2825, 2838 ~9, 2869, 2977, 2985, 2999, 3158, 3196, 3215, 3334, 3360, 3370, 3386, 3498, 3660, 3753, 3755, 3897, 3976~7, 3990, 4068, 4092, 4129, 4291, 4348, 4416, 4486, 4495, 4506, 4543, 4563, 4591, 4605, 4655, 4781, 4786, 4883, 4912, 4925, 4943, 5042, 5193, 5279, 5322
 勘定 文2001
 感情的 結4238, 4262
 感触 M₃₋₃ 結1805, 3861, 4199
 感じられた 指56
 感じられていた 指57
 感じられる D₅₋₁ 指56~8 >指58
 感じられる・よう 指179
 感じられるように 指179
 感じる D₁₋₁ 指1~4 結2202, 2759~61, 3321~4 文2007, 2360, 2364
 感心 結933
 肝心 文698
 関心 結3454, 5062, 5197
 感ずる 結2203
 喚声 結1198
 陥穽 結2626 文1250
 巖石 文699
 感染 結135~8, 1364~7
 観測 結3873
 眼中 文1422
 罐詰め 結4772
 眼底 結851
 官途 文1423
 感度 文2206
 感動 結513, 3778~9
 かんな 結5192
 観念 結787, 974, 1561, 1962, 2031, 2577, 3459, 3741, 4102, 5002, 5372 文2270
 官能 結3325, 5097, 5433
 観音眉 結5514
 寒波 結2392
 看板 結2719, 4774, 5196 文700, 2423

寒風 結436
勘弁 文189
願望 結2199
陥没 結1661
慣用句 結5221
欲楽 結5183
関連 結3270
緩和 文1599

— キ —

木・樹 結81, 741, 845, 1849,
1949, 2169, 2192~3, 2278,
2333, 2560, 2583, 3783, 3995,
4271, 4296, 4391, 4665
気 M₃₋₄ 指1098 結229~30,
251, 260, 512, 664, 761, 844,
1130, 1234, 1243, 1276, 2622,
2981, 3219, 3222, 3557, 3563,
4001, 4004, 4007, 4337, 4358,
4795, 4809 文1669
偽悪 結5119
消え失せる 結217
消える 結214~6 文2367
消える 結221~4 文190
記憶 結617, 881, 1086, 1088,
1200, 1268, 1295, 1383, 1402,
1600, 1646, 1710, 1827, 1900,
2019, 2549, 2568, 2650, 2752,
2846, 2994, 3184, 3197, 3348,
3371, 3642, 3811, 4063, 4074
~5, 4171, 4607, 4867, 4891,
4920, 5058, 5099, 5199, 5308
文1375
気後れ 結5229
気温 結413
飢餓 結26
機会 結320, 508, 1496, 3076,
3431, 3469, 3547, 3940, 4014
機械 結2273, 4777 文1657
機械屋 結5455
着替える 文1881
気がかり 結5331
気がした 指71
気がし出した 指72
気がして 指73
利かす 文1680
気がする D₆₋₁ 指71~5 指74
気がね 結1357
気構え 結3254

聞き取る 結3393
聞き流す 結5524
効きはじめ 結507
聞き耳 結2987 文1658
桔梗 結4806
桔梗御殿 文701
菊 結2445
利く 結229~30 文1256,
1259, 1309, 2016
聞・聴く 結898~9, 2281~3,
2680, 3391~2
危機 結4176
気位 結4076
喜劇 文702
危険 結727
記号 結4708
技巧 結587
聞こえる D₅₋₁₅ 文191, 1318,
2258
ごちなさ 結1793
着込む 文2014
萌す 結1763~4, 1811
刻み込む 結2751~3
刻みつける 結2754
刻む 結2750, 3280~1, 3726,
3887~8, 4115, 4170~3
岸 文2031
生地 結5143 文703, 1659~61
岸辺 結2773 文2420
きしむ 結4232
鬼子母神 文704
汽車 結835, 2277
技術 結3934
規準 結1488
気性 結340
旗色 文1184
疑心暗鬼 結4215 文705
傷 結2141, 2220, 2746, 4081,
5420~1 文706, 1183, 1251,
1664~6, 2053
傷痕 文1424
築きあげる 結3607, 4124
築く 結3604~6 文1856, 1891,
2410
傷口 結4954 文707, 1252,
1662~3
傷つく 結782~3 文192
傷つける 結2163~5, 3255~8,
3877~9 文193~4

絆 結774, 3721 文708, 1425
帰する 文1405, 1441, 1452
犠牲者 文2002
寄生虫 結4451
季節 結510, 1030
着せる 結3409
気ぜわしい 結4402~3
偽善 結3289, 5119
擬・偽装 結2837, 4133 文2423
偽足 結2191
北 文1358
期待 結443, 1684, 3245, 4532,
5209, 5233 文2326
擬態 結3408
鍛える 結3603
着たきり雀 結5507
汚い 文1198
気遣い 文709
吉祥寺 結83
きちんと 文535
吃音 結1378, 2144
きっかけ 結3432, 3470
切っ先 文1253
ぎっしり 結4620
狐 文710
規定量 結463
軌道 文1254, 1426, 1667
危篤 結1013
木戸御免 文711
…気どり S₄₋₁ 指1176
…気取り 指1176
気取る 結940
記念碑 結4773
気の毒 結4425
牙 結2182, 5399~400
暈絆 結5150
機敏さ 結696
起伏 文712, 2281
気分 M₃₋₆ 結318, 416, 525,
702, 799, 811, 855, 1275,
1478, 1751, 2474, 2775, 2808,
3234, 3333, 3688, 3896, 4196,
4384, 4494, 4568, 4597, 4782,
4970, 5271
…気分 S₁₋₂₂ 指1173
養母 結5196 文2091
希望 結25, 201, 571, 1117,
1148, 1199, 3452, 4448, 4645
気前 文1214

- 生真面目 結4453
 気拙さ 結52
 決まる 文75, 1248, 1266, 1283
 君 結3784, 4650, 4806, 4998
 公子(人名) 結4121~2
 義民 文713
 気むずかしい 結2393
 肌理 結4305
 決める 結2261
 肝 文1668
 気もする 指75
 気持 指1099
 気持ち M₃₋₂ 指1099~100)指
 1100 結79, 90, 104, 145, 198,
 217, 234, 256, 267, 367, 604,
 645, 651, 677, 721, 739, 758,
 777, 862, 949, 1336, 1376~7,
 1477, 1675, 1695, 1758, 2000,
 2128, 2131, 2339, 2350, 2379,
 2512, 2521, 2566, 2649, 2714,
 2798, 2852, 2880, 2920, 3032,
 3153, 3223~4, 3276, 3332,
 3405, 3433, 3507, 3540, 3638,
 3754, 3765, 3768, 3859, 3971,
 4191, 4217, 4359, 4493, 4529,
 4542, 4565, 4728, 4837, 4850,
 4853~4, 4870, 4889, 4900,
 4968, 5110, 5141, 5160 文2007
 着物 結1235, 1415, 1928,
 2331~2, 2850, 3346, 3780,
 4116, 4811, 5144, 5447 文
 2062, 2146, 2339
 疑問 結204, 649, 714, 3886
 客 結4072 文2001
 虐殺 結2884
 脚色 文195, 714
 客席 文715
 逆流 文1291
 逆境 結2738
 キャプフェ 結175
 キャンパス 結3404
 …級 S₁₋₁₆
 吸引力 結4197
 窮屈 結951, 1744
 旧交 結4125~7
 旧好 結3682
 急行列車 結4402
 吸収 結1830, 2885, 3770
 急所 結3398
- 休戦 結2039
 休戦協定 文716
 休息 結61, 1398
 牛太郎 文717
 急流 結4800
 給料 結3207
 きゅっと 文523
 キュピドン 文2260
 清い 結4556
 行 結3378
 饗宴 結5087
 教養師 文718
 教科書 結4712
 叫喚 文2126
 狂気 結964
 狂喜 文719
 行儀 結4284
 狂気じみる 結60
 胸襟 文1992
 杏子(人名) 結5346
 凝固 結111
 恐慌 文1427
 凝固物 結5116
 共産主義 結2861
 凶事 結716
 凝視 結1494, 1852
 凝縮 結820~1
 強制 結1343
 競争意識 結2963
 怯懦 結3242
 兄弟 結4680
 鏡台 結3494
 共通する D₁₂₋₆ 指139
 共同防衛 文720
 強・脅迫観念 結209, 2344,
 2480
 共犯者 文721
 恐怖 結390, 699, 827, 1147,
 1373, 1612, 2017, 2092, 2161,
 2340, 2475, 2522, 2938, 3630,
 3799, 3978, 3992, 5225, 5228
 狂暴 結1132
 興味 結202, 3453, 3750~1,
 3919
 共鳴 結95, 1323, 1662~3, 5244
 教養 結166
 強烈 結1769
 行列 結4179 文81
 曲 結4790
- 曲線 結3990 文1672
 棘皮動物 文2092
 御す 結3528
 去勢 文196
 虚勢 結776, 2875
 拒絶 結1483
 漁船 結294
 漁村 結883, 4264
 巨大 結3614
 虚脱感 結4065
 挙動 結3226
 虚無 結822, 1587, 1638, 1909,
 2127, 2516, 2820, 2868, 3487,
 4578, 4643, 5164, 5303, 5402
 虚無感 結4201, 4501
 清元審判係 文722
 去来 結1660
 距離 結843, 1377, 1379, 2942,
 3482, 4509, 4991 文489, 723,
 1255, 1673, 2244, 2388
 ギラギラ 結1257
 気染 結1809
 切り出す 結2170
 きらめき 結1991
 きらめく 結1071~2, 1076
 ギラリ 結1256
 霧 結737, 3854, 5268
 切り上げる 結3309
 切り落とす 結3273
 切り返す 文2031
 切り株 結5352
 切り刻む 文500
 切り屑 結4736
 切り口 結594, 4953
 切り込む 文197
 切り虐む 結3545
 切り裂く 結3277~8
 切り捨てる 結3310~1 文198
 キリスト 結4797, 4997
 切・戮り出す 結2171, 3602
 切・斬りつける 結791
 切り詰める 結3312
 切り取る 文200
 義理人情 結5126
 切り抜く 結4198
 切り放す 結3167, 3853
 切り捲くる 結3269
 切り餅 結5256
 切る 結2169, 3267~8, 3882,

4083 文1683, 1923, 1993
 着る 結277, 1020, 2331~2
 文1409, 1833
 綺麗 文13
 亀裂 結549 文2093
 切れ目 結4958
 切れる 結789~90 文1236,
 1295, 1322, 2265
 岐路 結4949
 疑惑 結210, 1182, 1204, 1788,
 2071, 3600, 3918, 4026, 4656
 金 結5314, 4431 文724, 2404
 銀 結4873, 5315
 金閣 結11, 77, 94, 181, 185,
 247, 261, 421, 489, 736, 886,
 932, 1027, 1034, 1102, 1814,
 1841, 1855, 1859, 1890, 2198,
 2258, 2263, 2311, 2375, 2456,
 2458, 2490, 2505, 3945, 4619,
 4629, 4643, 4710, 4826, 5071,
 5360, 5439
 金額 結53
 禁止 結5159
 近似値 結4969
 金錢 文1674
 金錢登録器 文2220
 金屬製 結4726
 禁断症状 文725
 緊張 結8, 103, 433, 1096, 2064,
 3152, 3266, 3778, 4596
 金泥 文2410
 筋肉 結4299
 緊縛 文726
 金箔 結2083
 銀箔 結4258
 緊迫感 結233
 勤勉 結4468

— ク —

ぐあい M₂₋₁₁ 指1087
 工合 指1087 結1773
 悔い 結2671, 3709
 喰い荒らす 文1504
 喰い入る 結549~51, 1450
 文201, 1406, 2226
 食い込む 結548
 喰い縛る 文202, 1859
 食いつくす 結2932
 食・喰う 結3413~6, 3929 文

471, 1591, 1827, 1994, 2000,
 2316, 2344, 2375
 空間 文1675
 空気 結8, 159, 669, 877, 1108,
 1110, 1220~1, 1245, 1253,
 1399, 1789, 2297, 2694, 2729,
 3154, 3477, 3715, 3789, 3924,
 4376, 4430, 4454, 5037, 5260~
 1 文727, 1185, 1209, 1428,
 2328, 2335~6
 空気拳銃 結1869
 空虚 結2540, 4226, 4281~2,
 4309 文533, 1211, 1676
 空虚感 結1259, 3009
 空隙 結976, 4657
 偶然 結1436, 1996, 2600
 空想 結409, 1080, 1824, 2602,
 3252, 3338, 3621, 3876, 4020,
 4533
 空想させる D₇₋₇ 指92
 空白 結4256, 4329
 茎 結437, 4036
 釘 結5127~8 文1256, 1677,
 2375, 2401
 釘跡 文728, 2423
 釘づけ 文729
 潜り抜ける 結672, 1615~7
 文1884
 潜る 結1612~4 文2347
 草 結1581, 5201 文1257, 2381
 …くさい S₆₋₂ 指1195
 …臭い 指1195
 臭さ 結414 文730
 草花 文537
 楔目 結5129
 草屋根 結936
 腐らせる 結4066
 鎖 結2744, 5135 文1258, 1678
 ~9, 2002
 腐る 結1242~5 文203
 苦笑 結1547, 3147
 具象化 結4703
 くずおれる 結761
 くずくず 結4625
 くずぐったい 文14
 くすぐる 文469
 崩す 結3254 文204
 くすぶる 文205
 くすむ 文206

葉 結1870, 3981~2, 4749
 文1259, 1429, 1558, 1680
 葉にしたくも F₁₃₋₁ 指211
 崩れ 文731
 崩れ去る 文207
 崩れる 結775~81 文208, 469,
 1983
 癖 結2212, 3737~9
 曲者 結4688
 糞 文1681
 糞落ち着き 結5472
 糞度胸 結5470
 管 文1682
 具体 結4152
 砕く 結3875
 砕ける 結774
 くたびれ 結1033
 くたびれる 結878~9
 下り坂 文45
 口 結427, 784, 1857, 1910,
 2068~9, 2073, 2196, 2790,
 2892, 3104, 3179, 3268, 3368,
 3532, 4161, 4380, 5363, 5376
 文732, 1210, 1260, 1430, 1683
 ~4, 1689~96, 2015
 愚痴 結1387, 3130
 口軽 結5536
 口車 結5489
 口籠る 結959
 口三味線 結5488
 口過ぎ 文2057
 嘴 文1686
 口火 文733
 唇 結1193, 1703, 1777, 1783,
 2168, 2294, 3306~7, 3745~6,
 3963, 4048, 4108~11, 4133,
 4147, 4165, 4212 文1687~8,
 2097
 口笛 結395
 口紅 結345, 461, 2630, 4288
 口調 M₂₋₁₄ 結3119
 靴 結2068, 2622, 2766
 苦痛 結913, 3736, 4006, 5227,
 5241
 靴音 結999, 3715
 屈曲 結43
 くつきり 結4626
 屈辱 結1724
 屈辱的 結4265

屈折 結41~2
 食っつき合う 結698
 食っ付く 結697 文1335
 食ってかかる 文209
 苦闘 結4034
 国柄 結4803
 くねらせる 結2149~50, 4249
 苦惱 結316, 695, 2885, 3010, 3049, 3271, 3491, 3885, 4213, 4733, 5122
 くの字 文734, 2096
 首・頸 結2142, 4235 文1431, 1697~700, 1979, 2357
 隈どり 結2315
 汲み出す 結4076~7
 汲み取る 結3361 文1597
 雲 結243, 358, 757, 1007, 1143, 1157, 2494, 2558, 3947~8, 4178, 4932, 5266~7, 5293, 5363 文735
 蜘蛛 結1247
 雲行き 文736, 1186
 曇る 結1123~4
 苦悶 結258, 700, 1022, 1936
 口惜しさ 結750, 2406
 くらい J₁₋₂ 指583~6> 指583
 位 指584 結4846
 暗い 結4129, 4489~99 文1565, 2211
 ぐらい 指585
 食らいつく 結980
 食らう 結3419~21 文1603, 1681
 暗がり 結1485, 2741 文2381
 暗黒 文2287
 水母 結5035
 暮し 結1396
 暮す 結1333, 4229 文1997
 ぐらつく 文210
 クラブ 結3797
 比べる D₂₋₁
 眩ます 結2280, 3390 文2415
 眩む 文1346
 暗闇 結637, 2282, 4150
 ぐらみ 指586
 栗色 文2097
 繰り返し 結1661
 繰り返す 結1951, 2663~4, 2716, 2976, 4089

繰り言 結795
 繰り出す 文2314
 繰り広げる 結3315 文1709
 来る 結482~504, 1689 文1390, 1539, 1559, 1564, 2428
 狂う 結227
 狂おしい 結4413
 ぐるぐる 文2039, 2041
 苦しい 文1202
 苦しさ 結3313
 苦しみ 結363, 2651, 3353, 3490, 3860
 苦しめる 結2207~15
 車 結3544, 4032 文1701
 暮 文2202
 くれる 結2603~4
 黒 結2308, 4403 文2425
 黒い 結4513~5
 苦勞 結2917, 3492
 黒白 文737
 黒ずむ 結1089
 黒眼鏡 文2098
 黒ん坊 文738
 クワイ 結903, 934, 4457
 加える 結3727 文78, 1807, 1966
 食わす 結3418 文211~2, 1602
 食わせる 結3417
 軍事 結4008
 群集・衆 結379, 679, 788, 4179, 5377
 勲章 結4772
 軍勢 結5031
 軍曹 結4102
 君臨 結1664~7
 訓練 文739, 2061
 — ケ —
 毛 文2010
 毛穴 結1037, 2040 文1261
 …形 S₁₋₂₁ 指1172
 芸 結4855
 経緯 結123, 1785
 軽快 結4182
 形骸 結1028
 警戒色 結2886
 計画 結1967, 3521, 3611
 軽気球 結4263
 経験 結164, 4140

敬虔 結3779
 稽古 文625
 警告 結517, 1966, 1997
 警察 結4561 文2328
 警察署 結5383
 計算 結1737 文740
 計算違い 文741
 形式 M₂₋₂₂ 指1094
 芸術 結1640, 2791, 2907, 3473, 5169
 芸術餓鬼 結5462
 形態 結1225, 2576, 5106
 警笛 結909
 芸当 文742
 芸なし糞 文743
 軽蔑 結2827, 3760, 4123, 5231
 刑務所 結4694
 鶏鳴 結4511
 啓蒙主義 結5113
 形容する D₃₋₄ 指40
 形容する・と言つていい 指177
 形容する・ほど 指161
 計量 結2830~1
 煙燻 結352, 2346
 ゲーム 結4718 文744
 外科 結2972
 下界 結4694 文1359, 1561
 汚す 結3658
 毛皮 結5432
 劇 結5083
 激情 結1053, 3716, 5273
 激怒 結65, 1998, 2352
 激動 結1881
 劇薬 結801
 けしかける 結3538
 景色 結405, 562, 1551, 1694
 消し去る 結2937, 3786
 化粧 結1760 文2072
 化粧恐怖症 結5442
 化粧嫌い 結5070
 化身 結59, 1355
 消す 結1939, 2934~6, 3062, 3785 文1245, 1754
 削り出す 結3297
 削る 結2183, 3296, 3894 文1898
 桁 結4978
 下駄 結311
 蹴倒す 文2337

蹴立てる 結2355
 柎外れ 結4395
 蹴 文745, 1262, 1432
 気怠げ 結4399
 気怠さ 結3916
 決意 結111, 268, 2214, 3663
 血縁 結4638, 4841
 結果 結1009
 血管 結804
 結局 F₇₋₂
 結局・一種の 指566
 結局・にすぎない 指440
 けっきょくは一種の 指566
 けっきょくは・にすぎない 指440
 月光 結3883, 3957, 4130
 結婚 結1319, 1428, 2595, 4635
 4721, 5082
 欠如 文493
 結晶 結5284〜5
 決心 結833, 1692, 3456, 3662,
 3665, 3760, 4191
 欠席裁判 文1433
 結節 結5425
 月旦 文746
 蹴っ飛ばす 結3463
 血肉的 文2213
 深癖 結1315, 2080, 2633, 3241
 深癖感 結2520
 訣別 結1322
 欠乏 結578, 1723
 血路 文747, 1702〜3
 外道 文748
 蹴飛ばす 結3464〜5 文213,
 463
 解熱剤 文749
 気配 M₂₋₂ 55, 331, 376, 3322
 けぶり 文1187, 1434
 煙 文1435
 煙がる 結2230
 毛虫 結904, 1334, 4996, 5450
 煙たがる 結3351
 煙 結2043, 2285, 2321, 3821,
 4054, 4399, 4452, 4662, 5178
 煙る 文214
 擲 結2446
 家来 文750, 2076
 下落 文1275
 蹴り倒す 文215, 2024

蹴る 文461, 466, 1370, 1989
 ケロイド 結5347
 けろり 結4239
 絃 結1314, 2636〜7, 5131
 文1704〜5, 2426
 權威 結1510
 幻影 結498, 1536, 3403, 5219
 嫌悪 結2478, 3210, 3449, 4573
 喧嘩商売 結5480
 玄関 結113
 研究 結1980, 4185
 謙虚 結4472
 現金 文2397
 現金払い 結2860
 原形体 結4925
 堅固 結2695, 4560
 健康 結814, 1933, 3297
 原稿 結139, 783, 907, 2503,
 5000, 5041, 5218
 現在 結1712, 4168, 4703
 見参 結1359
 現実 結293, 719, 1608, 1829,
 1989, 2434, 2697, 2770, 3714,
 3822, 4354, 4783, 4975
 謙讓 結4371
 権勢欲 結760
 喧騒 結3961
 幻想 結2481, 3455
 謙遜 結4112
 建築 結276, 2243, 5112
 幻聴 結2034
 検定済み 結4701
 軒燈 結3817
 見物 文751, 1215
 見物人 文2421
 健忘性 結4965
 幻滅 結3326
 原野 結4799

— □ —

子 結4739 文495, 2149, 2205,
 2390, 2402
 濃い 結4565〜6
 恋 結1064, 1529, 1924, 2383,
 5318
 恋しい 結4420
 恋しがる 結3359
 恋しさ 結206
 恋い慕う 結2226〜7

恋する 結3358
 こいつ 文752
 こいつら 文753
 恋人 結4685 文754
 恋物語 文755
 耕(人名) 結1934, 3351, 4789
 業 結155, 2014
 行為 結101, 1070, 1697, 2436,
 2531, 2834, 3810, 4731 文756,
 好意 結3551
 豪雨 結2821, 3853
 紅雲 文2225
 講演口調 文757
 高音 結1940
 業火 文2119
 後悔 結1121, 1840, 2363, 2479,
 2585, 3944, 3962, 4553
 航海 文758
 口角 文2251
 香氣 結5248
 抗議 結2919
 剛毅 結2100
 好奇心 結203, 257, 2006, 3114,
 3680, 4839
 溝渠 結2756 文1263
 交響 結78
 合金 結4725
 業苦 結4038
 光景 結1431, 3984
 攻撃 結2843 文759
 豪傑 文760
 傲語 結75
 航行中 文2252
 孝行 結2862
 広告 結2606
 恍惚 結4167
 恍惚感 結1420, 2593
 交錯 結9
 格子 結5176
 小路 結978〜9, 1687〜8
 膠質 結4786
 口実 結1772〜3
 豪華 結4482
 交渉 結1468, 4439 文761
 強情 結1944
 剛情 結4456
 行進 結1587〜8
 構図 結4849
 洪水 結1932, 5263〜4

攻勢 文1437
 柳成 結2812 文2213
 光線 結1988, 2171, 3821
 恍然 文2040
 小唄 文2161
 柳築 結2868
 行動 結92, 4087
 香箱 文1706
 幸福 結214, 496, 1564, 3301
 幸福感 結532, 2195, 4977
 降伏条件 文1707
 荒蕪地 結5311 文762, 2381
 鉞物 文763
 興・昂奮 結3515, 3884
 頭 結2061
 鉞脈 結5291 文1708
 拷問 結2662 文1438
 曠野 文2382
 甲羅 結846 文2099
 勾欄 結892, 2041, 3946, 4472
 合理主義 結5113
 交流 結1649
 声 結14, 218, 225, 360, 368, 417, 553, 564, 666, 674, 743, 852, 965, 1046, 1049, 1083, 1113, 1116, 1123, 1153, 1197, 1239, 1382, 1679, 1702, 1741, 1792, 1818, 1820, 1893, 2018, 2049, 2055, 2256, 2829, 3124, 3200, 3320, 3345, 3493, 3674, 3697, 3713~4, 3850, 3908, 3987, 4058, 4150, 4196, 4300, 4308, 4340, 4343, 4364, 4497, 4531, 4539, 4548, 4893, 5048 ~52, 5237, 5257 文1710, 2136
 小枝 文1709
 声に出さぬ 結5436
 越・超える 結462~5 文1723
 氷 結5361, 5395
 凍りつく 結1142~3 文1764
 凍り果てる 結1140
 凍る 結1141
 コオロギ 結5157
 誤解 結3088, 3964
 コカコラ 結1005
 木枯し 結967, 1031
 五感 結3757, 5136
 語気 結1089, 4587
 扱き上げる 結3943

漕ぎ出す 文1401
 漕ぎつける 結2726
 こきまぜる 結2915
 呼吸 結129~31, 5416 文764, 1264, 2428
 故郷 結354, 5024 文765
 刻印 結5186 文766
 国道 結379, 816
 告白 結3111, 4153, 4711
 国民大会 結5283
 極楽 文767
 苔 結1582
 固型物 文1265
 焦げる 結1157
 こごえる 結1144
 心地 M_{3-a} 指1102
 心地がした 指76
 心地がする D₆₋₃ 指76
 小言 結2864, 2900
 心 M₁₋₉ 結20, 36, 40, 41, 43, 98, 153, 172, 196, 208, 255, 263, 269, 272, 275, 301~2, 321, 422, 479, 529, 614, 661, 663, 682~3, 738, 775, 782, 856, 859, 865, 875, 963, 1010, 1014, 1021, 1114, 1129, 1134, 1138, 1144, 1168, 1172, 1203, 1205, 1210, 1228, 1285, 1298, 1301, 1303, 1307~8, 1314, 1330, 1358, 1370~1, 1374~5, 1440, 1443~4, 1473, 1491, 1500, 1512, 1525~6, 1537, 1541, 1563, 1566, 1642, 1669~75, 1677~8, 1680, 1682, 1684, 1686, 1689, 1692, 1695, 1697, 1699, 1702, 1705~8, 1714~5, 1720, 1726~7, 1729, 1733~4, 1751, 1756, 1758, 1761, 1765, 1771, 1786~8, 1797, 1806, 1810, 1819, 1825, 2008, 2047, 2186, 2255, 2291, 2306, 2317, 2455, 2461, 2634, 2655, 2663, 2665, 2668, 2678, 2686, 2691, 2706, 2712, 2716, 2746, 2750 ~1, 2754, 2759, 2763, 2771~2, 2797, 2806~7, 2874, 2925, 2959~60, 2971, 3004, 3054, 3072, 3077, 3086, 3091, 3171, 3177, 3203, 3214, 3218, 3250,

3257, 3275, 3284, 3316, 3318, 3344, 3372, 3374, 3385, 3389 ~91 3395, 3404, 3434, 3461, 3471, 3475~6, 3528, 3531, 3537, 3539, 3562, 3622, 3629, 3654, 3658~9, 3673, 3736, 3743, 3755, 3764, 3774, 3791, 3794, 3811~3, 3822, 3843, 3849, 3855~6, 3859~60 3862 ~3, 3865, 3868, 3871, 3878, 3885~6, 3896~7, 3909, 3923, 3933, 3935, 3937, 3939, 3944, 3962, 3978, 3997~4000, 4003, 4018, 4038~9, 4042, 4044, 4050, 4053, 4084~5, 4097, 4114, 4134, 4138, 4140, 4142 ~3, 4148, 4155~6, 4174~7, 4182, 4190, 4194~5, 4199, 4205, 4211, 4303, 4315, 4327, 4334, 4336, 4356, 4388, 4401, 4483, 4491, 4504, 4512~3, 4517, 4544, 4601, 4618, 4627, 4649, 4823, 4825, 4842, 4852, 4866, 4869, 4880, 4882, 4895, 4907, 4911, 4916, 4919, 4927, 4942, 4944, 4954, 4972, 5072, 5118, 5144, 5150, 5158, 5163, 5170, 5203, 5239, 5253, 5272, 5316, 5392, 5394, 5420, 5422 文1711
 心得る D_{1-a} 文32
 心構え 結2927, 3605, 4062
 心せきちく 結4808
 心遣い 結226
 心づくし 結1514
 心細さ 結969
 試み 結1463
 心持 指1101 結15, 37, 593, 1164, 1459, 1659, 3053, 3251, 3761, 4831
 心持ち M₃₋₇ 指1101
 心持がする D₆₋₂
 快さ 結693, 3328, 5300
 五彩 結3846 文2100
 腰 結5373~4 文1188, 1266, 1712~3, 2025
 固持 文1761
 こじ明ける 結2070
 腰高 結4593

- 渡し取る 結3121
 こしらえる 結2694, 3655
 文216, 1624
 小鍔 結335
 渡す 結3833
 梢 結1957, 2369, 3793
 戸籍 結3637
 応える 結969〜70, 1542
 御託 文1714
 樹立ち 結1937
 木霊 結982, 2483
 御馳走攻め 結5532
 固着 結38〜9
 ごちゃまかす 結2579
 コチン 文531
 国家 結3776
 小突きまわす 結2126
 滑稽 結5057, 5105
 こっそり 結4614
 コップ 結993, 2619, 5026
 文512
 小面僧い 結4426
 ゴツン 文524
 固定 結2880, 3754
 固定観念 結2077
 小手調べ 文768
 古典 結1580
 こと M₁₋₄ 結591, 694, 1032,
 1087, 1515, 1699, 1710, 1886,
 1995, 2046, 2121, 2146, 2163,
 2184, 2300, 2370, 2402, 2495,
 2504, 2562〜3, 2623, 3056,
 3239, 3423, 3458, 3463, 3709,
 3740, 3805, 3820, 3864, 3877
 〜80, 3894, 3905, 3942, 3969,
 3997, 4000, 4003, 4014, 4134,
 4205, 4353, 4545, 4604, 4635
 〜7, 4756 文2003
 琴 文2426
 鼓動 結4017
 事柄 結3765
 ごとき 指790
 ごときもの 指1023
 孤独 結126, 1151, 1323, 1335,
 1356, 1629, 2060, 2165, 2748,
 2799, 3001, 3013, 3024, 3192,
 3488, 3554, 3603, 3641, 3695,
 3724, 3920, 4050, 4095, 4105,
 4335, 4351, 4382, 4389〜91,
 4692, 5068, 5107, 5168, 5186
 ごとく 指791
 如く 指792
 如ク 指793
 孤独感 結720, 2336, 2347,
 2467, 3983
 ごとく感じ 指853
 ごとく感じた 指854
 ごとく感じられた 指922
 ごとく感ずる 指855
 ごとくに 指794
 ごとし K₂₋₂ 指787〜96 指795
 如 指796
 ごとし・感じられる 指922
 ごとし・感じる 指853〜5
 ごとし・も・見える 指992
 ごとし・もの 指1023
 異なるない K₂₋₁₀
 ことになり 指41
 ことになる 指42
 ことにほかならない 指820
 言葉 結49, 310, 372, 423, 460,
 495, 533, 546, 595, 610, 630,
 656, 659, 726, 728, 838, 853,
 874, 970, 1097, 1100, 1149,
 1183, 1388〜90, 1406, 1579,
 1630, 1673, 1756, 1762, 1821,
 1863, 1865, 1875, 1915, 2086,
 2094, 2143〜4, 2284, 2292,
 2298, 2345, 2575, 2663〜4,
 2742, 2763, 2841, 2913, 2982,
 3015, 3022, 3025, 3030, 3065,
 3095, 3101, 3208, 3212, 3221,
 3269, 3437, 3592, 3668, 3700,
 3767, 3777, 4019, 4093, 4119,
 4156, 4168〜9, 4199, 4204,
 4207, 4313, 4582, 4706, 4906,
 5072, 5373, 5381 文2360
 子供 結1290, 1596, 4766
 文769, 1439, 1715, 2236
 粉雪 結1760
 捏ねあげる 結2691
 木の葉 結1854
 好み 結191, 2720
 御破産 結2832 文770
 拒む 文217
 小判 文2054
 御飯 文1716
 媚び 結1524, 1918, 2442, 4325
 こびり付く 結711, 1786
 媚びる 結1061
 鼓舞 結1874〜5, 4208
 瘤 結4834, 5429〜30
 文771, 2046
 拳 文772
 瘤だらけ 結4394
 小舟 文1267
 こぼす 結3130
 こぼれ出る 結1636
 こぼれる 結633〜4, 1635
 細か 結4342
 ごまかし 結3051
 鼓膜 結2097
 挟く 文1808
 困る 結901
 ごみ 結773
 込み上げる 結863〜4, 1797
 小径 結4200
 込める 結3828, 4101
 ごめんなさいね 結1
 籠る 結600〜1 文2285
 木洩れ陽 結3848
 肥やし 結5121
 肥やす 文1854
 小指 文82
 懲らしめ 文774
 凝らす 結2638
 凝り固まる 結1315 文218
 凝りつく 結699〜700
 これでは F₁₀₋₁
 これでは・まるで・も・同然
 指274
 これではまるで・も同然 指274
 これではまるで・ようなもの
 指279
 これでは・まるで・よう・も
 の 指279
 これ見よがしに 結4623
 転がす 文219
 転がり込む 文220
 転がり出す 結304
 転がる 結303, 1772〜3 文502,
 1480
 ごろごろ 結1251
 殺し文句 結5476
 殺す 結2651〜2, 3685〜95,
 4063, 4069 文221, 1625, 1651,
 1874, 1924

コロップ 文1717, 2101, 2329
 衣 結5145
 怖い 結1971
 壊・毀す 結2159, 3232～5
 声音 結3230, 4576
 壊れ物 結1376
 壊れる 結768～71 文507
 根気 結2785
 コンクリート製 結4727 文2102
 根源 結4640
 混合 文2380
 混雑 結3960
 痕跡 結3074, 3632
 困難 結4094
 コンパス 結2717
 コンプレックス 結3228
 こんべとう 結4748
 混乱 結2372
 困惑 文2035

— サ —

サ 指816
 さ K₁₁₋₂ 指816
 座 結2955 文1365, 2290
 再確認 結1842
 才気 結3789
 歳月 結3808
 最後 文2103～4, 2212
 罪業 結2909
 罪業感 結3192, 3246
 最後通牒 文1718～9
 財産 結1447
 催促 結1873, 2848
 さいなむ 結2585, 3986
 才能 結365
 賽の目 文1268
 采配 文1720
 裁判 結4859
 財布 結1229, 2513
 細胞 結4805 文2376
 サイレン 結925, 2134
 さえ J₃₋₄
 遮る 結2139～41, 3221
 文1373, 2370
 沓え沓え 結1729, 4243
 囁り 結2190
 囁る 結923
 探し回る 文2331
 探す 結4079

盃 文1721
 さかなで 結3476
 逆振じ 結3417
 廻る 結1441 文1529
 酒場 結5073
 酒場女 結5172
 逆らう 結1174, 1527
 下がる 文1226
 先・尖 結3214, 4911 文506,
 543, 1440, 2155, 2211
 咲子(人名) 結4672
 咲きこぼれる 文222
 咲き出す 結4248
 先立つ 結470
 咲き誇る 結1209
 咲き逆る 結5525
 咲く 結1584, 4247 文494, 1312
 ～3, 1851
 割く 結3279
 柵 結2140, 3790, 4752, 5159
 文775, 1722～6, 2075, 2094,
 2282, 2327, 2330, 2375, 2414,
 2429
 錯視 結4208
 作文 結4104
 桜 結5152, 5266 文776
 探る 結3370～1 文73, 1378
 酒 結3005, 5268
 叫び 結212, 749, 793, 1251,
 1874, 2047, 2050, 3231, 4306,
 4658
 叫びかける 結1535
 叫ぶ 結964～8, 1306～7, 1541
 裂ける 文223, 1987
 避ける 結2491
 下げる 結1981, 2060, 2719,
 2736, 3003 文1584
 支える 結1980, 3799 文224,
 512, 1367, 1397, 1983
 ささくれ 結4942
 ささくれたつ 結855
 捧げる 結2791, 3587, 4185
 文225, 1925
 囁き 結803, 1651, 4175, 5430
 囁く 結960～2, 4228 文1289
 匙 文1727
 匙加減 文777
 棧敷 結5148
 座敷 結646 文1269, 2186, 2365

刺し込む 結581 文2419
 差し出す 結2041～2
 刺し貫く 結3889
 刺し徹す 結2177
 差し延べる 結2192
 差し引き勘定 文778
 砂塵 結2057 文1442
 差・刺・射す 結1566, 2175～
 6, 2178～81, 2755 文71, 1219,
 1330, 1611, 1822, 1940, 1953
 さす 結2423, 2561
 さすが 結4628
 さする 結2137
 させる 結2400～21, 2424～30,
 2562～70
 誘いかける 結1046～7
 誘い込む 結2443～4, 2808
 文1444
 誘い出す 結3522, 4197
 誘う 結2440～2, 2445～6, 2775
 ～6, 3969～75
 定まる 文2268
 定める 文1837
 雑役婦 文1442
 錯覚 M_{a-1} 結2349, 3700, 5081
 錯覚させる D₇₋₁₀
 錯覚される D_{5-a}
 錯覚する D_{1-a}
 作家生活 結4743
 殺気 結1802
 さっさと 文473
 殺人 結2758, 3729
 雑草 結955
 雑踏・沓・圃 結377, 612, 763,
 1469, 3831, 3903, 3950, 4100,
 4901
 雑用 結76, 2897
 里 文1238
 さながら F₁₋₂ 指195
 …さながら S_{a-2} 指1200
 さながら・思わせる 指236
 さながら・ごとき 指367
 さながら・ごとし 指367
 さながら・…という・よう 指574
 さながら・…というような 指574
 さながら・よう 指366
 さながら・よう・思い 指531

さながら・よう・思われる
 指1230
 さながら・ような 指366
 さながら・ような思い 指531
 …さながら・ように思われた
 指1230
 さながら・を思わせる 指236
 蛹 文2407
 さなだ虫 文779, 1982, 2226
 捌き 結1255
 砂・沙漠 結5312
 裁く 結3376
 寂しい 結4407
 寂・淋しさ 結584, 592, 1131,
 1555, 1591, 2463
 錆びつく 文1244
 錆びる 結1153
 覚まさせる 結2204
 さまよい歩く 文226
 さまよい出る 結1686
 さまよう 結1608~9, 1779
 寒い 結4589 文1191~2
 寒さ 結608, 3849
 寒白い 結1381
 醒・褪める 結976~9, 1086
 さも F1-6
 さも・かのように 指386
 さも・でも・よう 指308
 さも・でも・よう・感じる
 指328
 さも・でも・ような 指308
 さも・でも・ように感じた
 指328
 さも・よう 指386~7
 さも・ように 指387
 左右 結1836~7
 作用 結3394, 3917 文2105
 皿 結536, 992, 3798, 4758
 搜う 結2600
 浚う 文1771
 曝け出す 文1855
 曝・晒す 結2710, 2794, 3628,
 3679
 ざらつく 文476
 サラリーマン 結556, 3826
 去る 結518~9 文1355
 猿 文781
 騒がしい 文1203
 騒がしき 結3881

騒ぎ 文2127
 騒ぐ 結1010~3 文1343
 ざわめき 結1912, 1927, 5245
 文2035
 爽やか 文50
 触る 結1716~8, 4221 文227,
 460
 産 文782
 酸 文1728
 三角関係 結1249, 4881 文783
 三角形 文1999
 懺悔 結5337
 残渣 文784
 讃辞 結2904
 残滓 結5259
 三者 文785
 三十八度線 文786
 蚕食 文787
 山積 結52, 5526
 山腹 結4032
 産物 結5117
 散歩 結3916
 参謀長 文788
 参謀本部 文789
 三本足 結5383
 山門 結754
 — シ —
 死 結56, 138, 176, 179, 253,
 502, 755, 950, 1045, 1333,
 1348, 1354, 1552, 1588, 1627,
 1653, 1823, 1878, 2063, 2237,
 2260, 2272, 2427~8, 2438~9,
 2703, 2916, 3044, 3364, 3440,
 3520, 3699, 3761, 3776, 4022,
 4026, 4063, 4088, 4189, 4370,
 5179, 5217, 5252, 5344, 5387,
 5415 文2107
 詩 結1707, 3489, 4713, 5025
 恋愛 結1934
 仕上がり 結1851
 仕上げる 結2922
 倅せ 結1077
 思案 結1502, 1813
 シーズン 結1267
 強いて・を形容すれば・とい
 ってもよかった 指177
 強いる 結2512~4, 3736, 3983
 仕打ち 結3876, 5108
 試運転 結2818

塩 文79
 塩辛い 結4544
 塩辛声 結5473
 潮時 文790
 塩野(人名) 文791
 汐見(人名) 結4787
 歯牙 文1443
 自我 結1951, 4992
 死骸 結5348
 仕返し 文2034
 視覚 文2360
 自覚 結1207, 2384, 2416, 2459,
 3724
 四角い 文16
 自家中毒 結5426
 死活 結2492
 屍 結1192
 しがみつく 結1510
 しからしめる 結2422
 しがらみ 結5126
 叱りつける 結3536~7
 叱る 結3535
 時間 結17, 285, 381, 478, 528,
 567, 821, 947, 1439, 1441~2,
 1603, 1615, 1693, 1712, 1905,
 2088, 2158, 3075, 3169, 3244,
 3279~80, 3321, 3414, 3561,
 3594, 4017, 4355, 4763, 4865,
 5096, 5116, 5304, 5438 文2105
 …式 S1-3 指1152
 指揮 結1868
 時期 結509, 3424
 敷居 文1729
 敷石 文1270
 色彩 結477, 1830, 1941, 3160,
 3770, 3902
 しきたり 結3759, 4995
 色調 結3559
 色魔 結5461
 自虐 結1372
 敷く 文1254
 軸 結4738
 しぐさ 結3866
 死刑執行人 文792
 刺戟・激 結1886, 3768~9
 文476
 繁らす 結2648
 繁らせる 結2647
 事件 結254, 598, 1713, 3099

- 次元 結1543
 指呼 文2106
 死語 結5474
 自己 結2882, 4100
 志向 結2789
 思考 結540, 3819, 3831, 3903, 4013 文2035
 嗜好 結1273, 3248
 自業自得 結5192
 思考力 結3830
 地声 結3926
 地獄 結4692, 5028, 5416 文793, 1444, 2023, 2283
 自己嫌悪 結1250
 仕事 結744, 766, 801, 1417, 2573, 3167, 3569, 4096, 4183
 しこり 結4381, 4833 文2403
 四肢 結1757
 死実 結5505
 事実 結182, 2197, 2715, 2736, 2894, 2937, 3168, 4385
 死者 結957, 960, 2065, 2084, 2118, 2407, 2731, 3991, 5410
 死臭^ち 文1985
 四十面 結1981
 事情 結2833, 3964
 詩人 文794
 自身 結2707, 3312
 自信 結271, 778, 2877, 3429, 3993, 5053~4
 詩人的素質 結4059
 死す 結1220
 静か 結4520~1 文2176
 静かさ 結1769, 2443, 3263, 3828
 雫 文2066, 2072
 静けさ 結3895
 沈む 結663~71, 1477~82, 1709 文228, 2228, 2307
 沈・鎮める 結2740~1, 3659~60, 3720
 姿勢 M_{2-1s} 指1089 結4037, 4041, 4934 文795, 1983, 2012
 時節 結1549
 視線 結158, 986, 1156, 1166, 1691, 2020, 2024, 2231, 2551, 2684, 2711, 2760, 3019, 3125, 3137, 3439, 3807, 3958, 4367, 4386
 自然 結23, 1188, 1808, 1907, 5087, 5124
 自然児 文796
 思想 結1605, 1662, 2728, 3526, 3994~5, 4908
 自尊心 結3879, 4993
 下 結1171, 2683, 3114, 5311 文86, 2297, 2406, 2430
 舌 結2040, 3055 文1445, 1730~1, 2261, 2371~2
 姿態 結751, 4935
 死体 結128, 1191, 2085, 2119, 2542
 事態 結506, 1279, 1352, 1518
 時代 結1078, 1429, 2998, 5275
 慕う 結2225
 下枝 結3620, 4031
 従う 結1368~9, 1738
 したがる 結916
 下着 結5146
 下地 結4639 文797
 親しい 結4610
 下敷き 文1986
 親しげ 結4421~2
 親しみ 結3450, 4562, 5345
 滴り落ちる 結636
 滴る 結635
 舌っ足らず 結4437
 下積み 結4867
 仕立て上げる 結2608
 舌薺めずり 結91 文798
 下火 結4795 文799
 七十五日 文800
 支柱 結5162~3 文801
 自嘲 結667, 1798, 2174
 実感 結1098, 3062, 3174, 4028
 湿気 結675, 1056
 疾・叱咄 結1998 文229
 膜 結1631
 十犬十色 結5441
 執行猶予 結4696
 嫉視 結2382
 実質 結3625
 実情 結3497
 疾走 結88
 実体 結3626
 失地回復 文802
 嫉妬 結450, 1054, 1887, 2280, 2362, 2526, 3790, 3792, 4806, 4951, 5313, 5320, 5408, 5426
 嫉妬心 結1039
 嫉妬まみれ 結5537
 実^{F₁} 指206
 疾病 結2615
 尻尾 結5378~9 文1271, 1446, 1732~4, 2331
 失望 結514, 2342, 4905, 5215
 質問 結3176
 失礼 結1879
 自転車 結4827
 自動車 結410
 袴^{はかま} 結5180
 仕止める 文1614
 品 結4729 文2020
 仕直し 文2073
 羨びる 結1227~30
 品物 結2423
 死に絶える 結218~9, 1225 文230
 死に身 文803
 死に水 文1735
 死ぬ 結1213~9, 1221~4 文231
 篠突く 文1736
 忍び込む 結568 文1262
 磁場 文2108
 支配 結1865~7, 3764 文1675
 芝居 結3751 文472, 804, 1737
 芝居上手 文805
 支配的 結4273
 支配人 文806
 支払う 結3576 文1596
 縛り上げる 文2383
 縛りつける 結2086, 4091~2 文233~4
 縛る 結2076~80, 3708 文232, 235, 1385
 地盤 結2761
 詩美 結5036
 痺れ 結603, 2170
 痺れる 文1249
 自分結44, 193, 1271, 1321, 1532, 1534, 1554, 1602, 2769, 2781, 2890, 3023, 3031, 3083, 3103, 3116, 3220, 3357, 3535~6, 3541, 3543, 3598, 3604, 3609, 3679, 4002, 4070, 4105, 4183, 4189, 4664, 4736, 4813, 4985

~6, 5260, 5396 文1738, 2109
 ~10, 2245, 2253, 2284, 2331~
 2, 2398
 自分勝手 結4464
 自分自身 結3052 文2330
 シベリア行き 文807
 思慕 結1977
 萎む 結1233~5 文236
 絞り出す 結3231, 3483
 絞り取る 文2370
 絞る 結2158, 3230 文237,
 1580, 1588
 資本投下 文808
 島 文491
 稿 結336, 4955 文52
 しまい込む 結4139
 蔵う 結2973, 4140~2 文522,
 1532
 始末 文1189
 篇目 結4956 文2232
 稿瑠璃 文2111
 閉まる 結1491
 締まる 文1979
 しみ 結4043
 浸み入る 結588~90
 染み込ませる 結3827
 染・沁み込む 結577~80
 文1391
 …じみた 指1184
 …染みた 指1185
 …じみたほど 指1222
 しみだらけ 文2112
 …じみて 指1186
 …じみていた 指1187
 …染みていた 指1188
 …じみていて 指1189
 …じみている 指1190
 …じみて見える 指1216
 沁み通る 結592~4, 1810
 沁み残る 結591, 1459
 沁み拡がる 結1695
 浸・染みる 結584~7, 1809
 文1417
 …じみる S₁ 指1184~91
 指1191
 …じみる・ほど 指1222
 …じみる・見える 指1216
 しみ渡る 結595~7
 締め上げる 結2157

氏名 結3634
 じめじめ 結4240 文516
 閉め出し 結3413
 閉め出す 結2045, 3096
 締めつける 結1946~7, 2960
 湿っぽい 結4567~8 文17
 湿っぽいさ 文809
 湿り 結4132
 占める 結2592~3, 3997~9
 締める 文1839
 地面 結2290, 4650, 4698
 霜枯れる 文238
 自問自答 結5198
 視野 結3170
 邪悪 結51, 1991
 じゃありませんが 指229
 じゃあるまいし 指227
 じゃあるめえし 指228
 社会 結1450, 5278
 社会的方程式 結5477
 邪気 結2013, 5041
 癩 結1716, 4221, 5342
 しゃくりあげ 結5282
 斜光線 結5296
 写象 結2502
 写真 結2269
 車窓 文1739
 車体 結1976, 2059, 2150
 遮断 結1835 文1792
 シャツ 結4742, 5329
 射程 文2113
 車道 結3837
 じゃねえや 指826
 しゃぶる 文239
 しゃべる 結956
 邪魔 結1833~4 文1762
 砂利 結5269
 十 文2049
 自由 結1206, 1948, 2855~6,
 2865, 2871, 3000, 3262, 3382,
 3580, 3694, 3982, 4590, 4749
 醜悪 結3823
 融怪さ 結4678
 収獲 結2866
 習慣 結1513, 3229, 4210
 重吉(人名) 結4687
 宗教 結1340, 1498, 3238
 宗教臭 結1939, 5491
 宗教心 結1212

襲撃 文240
 充血 結5428
 自由詩 結1276
 収支決算 文1740
 終止符 文1741~2
 執着 結2527, 4904
 收拾 結2875
 従順 結2482, 4608
 重症 結4830
 就職難 結2105, 4654
 囚人 文2069
 重心 結4881~2
 修正 結2814
 集成図 結5074
 修繕 文2361
 集団 結4984 文2079
 羞恥 結341, 2203, 3293, 3696,
 3913, 4064
 羞恥心 結1682, 4845
 終着駅 文1447~8
 充電 結2876~7
 執念深い 結4324~5
 秋波 文810
 充滿 結55~8, 3702~4
 重量感 結2197
 手記 結3730
 主義 結3501
 主人公 文2162
 数珠つなぎ 文811
 守銭奴 文812
 主題 結4928
 主張 結1709, 1745, 1847~50
 述懐 結3509
 出血 文241
 出世街道 文1743, 2333
 受難 結5086
 呪縛 文813, 1272
 首班 文814
 主婦 結3710
 手法 結3104, 3415, 3500
 趣味 結2241, 4122
 樹木 結1325, 2627
 咒文 文815
 主役 文816, 1273, 1744, 2323
 瞬間 結3327
 瞬間的 結4258
 純情 結4077
 潤色 結5079
 蠢動 結13

- 句外れ 文817
 準備 文2407
 背負い込む 結2911 文255
 小… R_{s-1} 指1127
 …状 S_{1-s} 指1154
 情 結1175, 3749, 4285, 4547, 4579
 情意 結3689
 確煙 文2198
 生涯 結3256, 3952
 障害 文2166
 正月 文2202
 小学校 文2050
 商館 結2036
 城館 文818
 情感 結810
 常軌 結2078
 将棋倒し 文819
 償却 結3767
 乘客 結464
 憧憬 結2525
 情景 結2730
 衝撃 結2602, 2784, 3757
 乗降客 結388
 傷痕 結4023, 4887
 情事 結97, 707
 小…・…式 指1148
 正直 結4734
 常識 結3701
 焼失 結4237
 少女 結4676
 少女時分 結5403
 少女らしさ 結1790
 定石 文820
 小説 結188, 911, 1623, 1626
 小旋律 文821
 焦躁 結2005, 3379
 消息 結141
 正体 結4845
 状態 M_{1-s} 結3711, 4747 文509, 2134
 …状態 S_{1-s} 指1155
 妾宅 結229
 冗談 結3046 文822
 承知 結1843 文1876
 情痴 結1747, 4365
 情緒 結825, 1750
 小腸 結566
 象徴する D_{7-11} 指97
- 昇天 文823
 焦点 文824, 1274, 1745
 衝動 結745, 1052, 1413, 1999, 2470, 2964, 3037, 3061, 3865
 衝突 文825
 場内 結3795
 情熱 結112, 1882, 2881, 3698, 3963, 4099, 5016, 5289, 5326
 上の部 結5378
 商売 結3186
 蒸発 結117~8
 上半身 結282
 消費 結2856, 4061
 商標 結4705, 5073
 商品価値 文1275
 勝負 文242
 丈夫 結4594
 障壁 結3190 文48, 826, 1276
 城壁 文827, 2242
 錠前 結2723
 静脈 結1394, 5327
 照明 文2114
 消滅 結7 文1327
 消耗 結4206
 …状・よう 指1224
 …状・ようだった 指1224
 情欲 結3199, 3773
 剰余物 結4731
 将来 結3400, 4169
 照覧 文1240
 勝利 結5243
 職業 結3635, 4721
 職業安定所 結4393
 触手 結5381
 食傷 結1356
 触知 文243
 職場 結4693
 食欲 結638, 2824, 4283
 処刑地 文1449
 所在なさ 結2210
 処女 文2115
 書生 結4773
 女性 文1746~7, 2303
 女性像 結1649
 初潮 文828
 触角 結5401
 触感 結3678, 4118
 食器 結3814
 処方箋 結5068 文1748
- 書物 結5354
 処理 結27
 白ける 文244
 白白と 結1259, 4627
 知らせ 文2183
 知らせる 結2297
 白茶ける 文245
 白っばくれる 結938
 白旗 文1749
 調べ 結1355
 尻 結1950, 5375~6 文59, 630, 1190, 1277, 1360, 2321
 尻切れ 文829
 尻切れ草履 文830
 尻込み 文831
 退く 結475~6
 斥ける 結3078
 思慮 結4241
 知る 結2246~8, 2675, 3357 文246, 504, 1626, 1747
 汁 結552
 印 結2745, 3281
 知れる 文1238
 試練 結1341
 城 結4751 文832, 1750, 2284, 2332
 白い 結4227, 4509~11 文18, 51~3, 62
 四六時中 文525
 白さ 結581, 658, 4261
 白縮み 結4417
 しろと臭さ 結1809
 代物 M_{1-s}
 鼓 結1511, 4073, 4266, 4946~8, 5064 文2263
 黈くちゃ 結4225
 仕業 結5095~101
 芯 結1438, 4895~7
 ジン 結2533
 親愛 結3217
 新鋭 文833
 深淵 文536, 834
 人格 結4301, 5094
 進学 結5154
 親近感 結3446
 真空地帯 文835
 神経 結238, 351, 794, 985, 3299, 3666, 3877, 4117, 4338, 4480 文1751

神經質 結4261, 4427
 人後 文1450
 信仰 結780, 3472, 5287, 5321
 進行 結30
 親交 結3681
 信号 結2654 文1752
 人工的 結4485
 真摯 結4466
 眞実 結1177, 1179, 1310, 1752,
 1803, 3733, 4990
 信者 結3513
 人種 文836
 心中 結1320
 心情 結3378
 浸・侵蝕 文837, 2167
 心身 結4066
 浸水 結33
 薪水 文2334
 人生 結30, 96, 847, 1398, 1446,
 1505, 1589, 1609, 1624, 1731,
 2218, 2626, 2657, 2713, 2809,
 2835, 3185, 3339, 3438, 3517,
 3542, 3552, 3585, 3762, 4468,
 4471, 4644, 4862, 4864, 4871,
 4885, 4910, 5085, 5104, 5204
 人生苦 結4768
 新政権 文838
 神聖視 結1342
 親切 結3774
 新鮮 結4596~600
 真相 結1497, 3468
 心臓 結495, 1036, 5391 文84,
 1278~9, 1753, 1980
 心底 結5444 文839
 身体 結781, 1532, 1637, 2685,
 3059, 3614, 4057
 信託預金 文840
 陣地 文1451
 心痛 結3117
 シンと 結1396
 心頭 結1660
 滲透 結29
 神道 結3108
 震動 文1592
 ジンナラ 結248
 侵入 結31~2
 心配 結2003, 5332
 神秘 結3733, 4214
 振幅 結1400, 4970 文841

神仏 文2116
 蕪麻彦 結5423
 尋問 結2148
 信用 結2823, 3550
 信頼 結871, 2414, 3485, 3587
 心理 結70, 3093, 5238
 侵略 結1864
 新緑 結3796

— ス —

す 結2543~60, 2790, 3963
 巢 結1247, 2661, 4725~6
 文2168
 図 M₂₋₂₂ 文842, 1756
 図案 文843
 酔い 文31~2
 髓 結1887, 3480, 5398
 吸い上げる 結2058, 4078
 吸い込む 結3106, 3504~5,
 3829, 3960~1, 4150~1, 4200
 文248, 2328
 水準 結1604
 吸いつける 結2082, 3858
 吸い取る 結3120, 3831~2
 水分 文2370
 水泡 文1452
 匪虜 結5459
 水面 結1213, 1817 文86
 吸い寄せる 結2773, 3503
 水路 結1488
 吸う 結2369, 3953~9, 4180~
 1 文2335~6
 趨勢 結2403
 据えかねる 文1498
 据える 結2997 文1455, 2025
 須賀<人名> 結3684
 頭蓋骨 結1433, 3644, 3928,
 3948, 5040, 5397
 素顔 結1347, 1558, 1628, 3938,
 4699, 4771, 5356 文2117, 2388
 清滑しい 文2374
 姿 結1598, 1694, 1786, 1921,
 1939, 1987, 2089, 2326, 2934,
 3504, 3858, 4929~31 文1754,
 2068
 縫りつく 結712
 縫る 結1562 文1468
 隙 文2426
 好き好き 文2118

透き通る 結1081~3
 空き腹 結1099
 隙見 文1631
 過ぎる 結466~8, 1827 文1376
 掬い去る 結1984
 救う 結2504~6, 3981~2
 巢食う 結983, 1732~3 文1321
 嫌む 文1988
 スケッチブック 結1593
 筋 結1437 文1280
 筋書き 文517, 844, 1453
 素姓 結3623
 鈴 結3893, 5240
 涼しい 結4612
 進む 結473~4 文543
 嘸り泣き 結3704
 嘸り泣く 結922
 裾 文845
 スタート 結2169
 ずたずた 結4618 文526
 頭痛 結5343
 酸っぱい 結4542 文1210
 捨て石 文1755
 捨て鉢 文19, 846
 捨・棄てる 結2944~54 文249,
 1404, 1701
 素通り 文847
 ストリップ 結3139
 砂 文1372
 素直 結374
 頭脳 結5390
 素肌 結4826 文1377
 素早い 結4443
 スピード 結3837
 スピリット 結5446
 スプリング 結2388
 スペクトル 結5238
 すべて 文2039
 さらす 文1689
 滑り 結2665 文848
 滑り込む 結552, 1451~2, 1691
 文250
 滑り出す 結428
 滑り出る 結429~30
 滑る 結422~7, 1604~6, 1817
 文251
 図星 文849
 ズボン 結878, 1538
 住まい 結1736 文2409

- 澄まし屋 結5453
 澄ます 結3666 文252, 1919
 済ませる 結3667
 隅・角 結2675 文2185
 棲み家 結4750, 5156 文2074
 住む 結981～2, 1543～5
 済む 文1228
 すら J₃₋₅ 指599
 ずり落ちる 結1277 文253
 擦り替える 結2968
 擦りつけ合う 結2084
 擦りつける 結2085
 擦り減らす 結2184, 3298～9
 摺・磨り減る 結796～8
 擦り寄る 文254
 スリル 結3335
 する D₁₋₁₀ 指34～7 結1860,
 2370～99, 3514～5, 3555 文
 535, 1209～12, 1408, 1429,
 1492, 1524, 1558, 1634, 1637,
 1988, 1996, 2029, 2034, 2257,
 2365, 2373, 2399, 2423, 2432
 鋭い 文76
 擦れ合い 結740, 1690
 擦れ合う 結748
 坐・据る 結295～7, 1023, 1735
 文1396, 1456, 2290, 2292
 寸分 F₂₋₅
 寸分・違わない 指459
 — 七 —
 背 結468 文1766
 正 文2310
 生 結731, 1648, 3915, 4723～4,
 5248
 精 結1274 文1758
 性 結2812, 3225, 5065
 …性 S₁₋₈ 指1157
 税 結1531
 成果 結1828
 性格 結1152, 4546, 5095
 性格破産者 結4989
 生活 結122, 396, 425, 639, 973,
 1208, 1240, 1448, 1607, 1647,
 2028, 2420, 2842, 2986, 3309,
 3606～7, 3710, 4086, 4210,
 4369, 4404, 4719, 4978, 5135,
 5142, 5188, 5197, 5242, 5258,
 5419 文2082, 2177, 2236
 生活気分 結4361
 生活図面 結5478
 正義 結2906, 3981
 正義感 結2, 3008
 正義派 結312
 清潔 結4230
 星座 結636
 静止 結4455
 政治 結4009
 性質 結2016, 2208, 4713
 誠実 結2831
 …性じみて 指1264
 …性…性…性 指1264
 静寂 結420, 2487, 2725, 3315,
 3808, 4352
 清州〈人名〉 結1454, 4804, 5130
 成熟 結80
 青春 結448, 1621, 2933, 3081,
 3533, 3670, 3771, 4276, 4981
 精神 結59, 459, 887, 1073, 1091
 1181, 1261, 1293, 1363, 2202,
 2205, 2764, 2878, 3205, 3300,
 3435, 3943, 4255, 4341, 4887,
 4946, 5028, 5064, 5421
 精神分析医 文2109
 制する 結2510～1
 せいぜい F₂₋₁₁
 せいぜい・くらい・気持ち 指337
 せいぜい・くらい・こと 指336
 せいぜい・くらいのこと 指336
 盛装 結81
 清掃 結2872
 勢揃い 結35
 西太后 文850
 贅沢 結2930 文2393
 聖壇 文2119
 成長 結126～8, 3744
 制動 文2016
 正比例 文851
 政府 結2693
 制服 結4046
 征服 文2028, 2034
 生命 結211, 325, 709, 1577,
 1638, 2859, 2984, 3087, 3894,
 4913, 5092, 5410～2 文852,
 1281, 1757
 生命線 文853
 生命力 結1721, 4720, 4858
 性欲 結3785
 性欲観 結2499
 生理 結939, 2452, 2498, 2581,
 3283, 3977 文854
 精力 結1927, 3120
 勞力 結3661
 整列 結50
 背負い・投げ 結3418 文855
 背負う 結1909, 2910 文1621
 世界 結431, 1146, 1242, 1274,
 1419, 1759, 2638, 2722, 2731
 ～2, 2828, 2872, 2961, 3232,
 3428, 3931, 3951, 4047, 4691,
 4876, 5026～7 文87, 503,
 1282, 1759, 2040, 2120, 2129,
 2195, 2270
 せがむ 結2455
 席 文475, 856, 1361～2, 1454
 ～6, 1761～2, 2024～5, 2091,
 2133, 2291～3
 関 文2121
 咳・嗽 結2358～9
 堰 文1763, 1993
 せき立てる 結2199～201
 石炭殻 文1760
 堰き止める 結4093
 責任 結2896, 4016
 責任感 結3041
 寂寞感 結2468, 3047
 責務者 結5090
 寂寥 結1688, 3631, 3979
 寂寥感 結2337
 世間 結3721, 4229, 4405, 4490
 世間話 結1584
 世情 結2371
 背筋 文1191, 1764
 せせらぎ 結2509
 絶縁状 文1765
 接近 結2142
 切実 結1761
 接触 結37
 接する 結694, 1507 文256,
 1418, 2405
 切斷 結2821
 切断面 結4903～4 文2111
 説得 結445, 1642
 切羽詰まる 文257
 雪片 結1226
 絶望 結1338, 1613, 2162, 2217,

2528, 3655, 3711, 3725, 3986,
4211
節約 結2865
背中 結2760, 3900, 5364
文1192, 1457, 2362
ゼニゴケ 結32, 5047
背伸び 結894 文857
潮踏み 文858
狭い 結4229, 4334, 4415
迫る 結727〜33, 1512, 1721
文1407
罎 結4819〜20
せめぎ合ひ 結1050, 1655
責めたてる 結4252
責め道具 文1458
攻める 文2019
台詞・辞 結3209, 3511, 5030
文859
せる 結2516〜42
零歳 結3349
世話 結1154, 1870
線 結100, 333, 383, 1233, 1928,
2129, 2321, 2625, 2849, 3549,
3882, 4289, 4292, 4444, 4936
文80, 535, 860
栓 結4740 文2101, 2329
膳 文2276
善意 結4085, 4741
千円札 結1394
旋回 文861, 2039
宣言 結2706
前言 結2996
閃光 結4218, 5212
閃災 結1736
潜在 結3963
選手 文862
戦術 文863
戦場 文2359, 2386
全身 結130, 2680, 2687, 3525
文1767, 2046, 2370
前身 結953
戦争 結830, 1517, 2235, 5066
前奏曲 結5082
戦争屋 結5454
先祖返り 文864
先達 結5013
センチ 結4538
センチメンタリズム 結3784
船中 文2003

先手 文1768
鮮度 結616, 4975〜6
戦闘合図 結5075
戦闘用絶叫 結5475
先入観 結1617, 2076
千年 文2424
専念 結73
全貌 結1102
千枚張り 文2045
鮮明 結4502 文1184
千里 文2122
旋律 結1633, 1775, 3812, 4536,
4569, 4613 文866
戦慄 結330, 353, 468, 609,
1678, 1728, 2021, 2098, 4503
占領 結1883, 2852〜3, 3765〜6
文258
占領区域 文1769
—— ソ ——
そいつ 文867
そう K₁₀₋₁ 指812〜4
文541
像 結804, 2009, 2074, 2149,
2628, 3523
相違 結3006
憎悪 結665, 1379, 1651, 1801,
4496
そう・思える 指952〜3
そう・思える・ほど 指958
そう・思われる 指954
騒音 結724, 3166 文507
爽快 結3633
そう・感じ 指1082
そう・感じられる 指951
造形 結2820
象牙の塔 文2123, 2285
双肩 文1459
雑言 結3508
操作 結2874 文868
造作 文868
相殺 文1302
相似 M₆₋₂
喪失 文2081
総称 結4707
裝飾 結2873
装身具 結4745
奏する 結2329
想像 結467, 1705, 3314, 3910,

4595, 5123, 5184, 5399 文2124
想像させる D₇₋₆ 指91
想像される D₁₀₋₁ 指102
想像する D₁₁₋₃ 指112〜5
想像する・ほぼ・当たる 指155
想像力 結1548, 2854, 3769
そうだ K₅₋₂ 指812
争奪欲 結2415
相談 結1471
総動員 結2845〜7
相当する D₁₃₋₃ 指142
そうな 指813
そうな感じ 指1082
そうなほど 指973
そうに 指814
そうに思える 指952
そうにおもえるほど 指958
そうに思われた 指954
そうに・感じられた 指951
そうに見えてきた 指955
そうにみえる 指956
そうに見える 指957
そうに見えるほど 指959
そうにも思えた 指953
想念 結2641
相場 結5109 文1283
蒼白 結4512
僧服 結4045
草平(人名) 結1763
相貌 結4552
そう・ほど 指973
そう・見える 指955〜7
そう・見える・ほど 指959
臍物 文869
僧侶 結4045
総量 結4967
添える 結2758 文1605
疎開 文259
削ぎ落とす 文260
削ぎ下る 文261
削ぐ 結3892
粟 文1770
足跡 結2713
塑型 文870
そこ 結170 文1460
底 結1384, 1732, 1815, 2655,
3374, 4914〜8 文871, 1193,
1284, 1771〜3, 2156, 2197,
2342

底知れない 結4326 文2209
 損う 結3259
 底流れ 結411
 底抜け 文872
 底光り 結1068
 素地 文1285
 素質 結4214
 俎上 文1461
 素知らぬ 結2390
 注ぐ 結3131~8, 4157~60
 文1589
 唆す 結3529, 3984
 そそる 結2578
 育ち盛り 結4829
 育つ 結1203~4 文1503
 育てる 結2650, 4062
 卒業 結2838 文262
 卒業試験 結2104, 4653
 そっくり F₃₋₁
 …そっくり S₇₋₁ 指1196
 そっくり・同じ 指400
 そっくり同じ 指400
 そっくりだ K₁₋₄ 指737
 そっけない 文2201
 そっちのけ 文873
 袖 文77, 1774
 袖屏風 結5487
 外 結1264 文2273, 2286~7,
 2295, 2335~6
 外側 文2085
 その通り K₅₋₁
 …そのまま S₈₋₁ 指1199
 …そのもの S₁₀₋₁ 指1210~1
 >指1210
 …その物 指1211
 …そのもの・化す 指1219
 …そのものに化していた
 指1219
 …そのものに見えた 指1220
 …そのもの・見える 指1220
 …そのもの・よう 指1229
 …そのもの・ような 指1229
 …^{そはかす}雀班 文874
 …^{そはた}疎つ 結301
 祖父 結796
 ソフト 結4069
 ソプラノ 結4784
 染まる 結1087~8, 1567, 1746
 染む 結1568

背ける 文1632
 染め上げる 結4053
 ぞめき 結589, 2819
 染め出す 文263
 染める 結2630~1, 4051
 文1892
 染め分ける 結2632, 3657
 戦がす 結3796
 戦ぎ 結4132
 戦ぐ 結278
 空 結149, 306~8, 574, 1155,
 1639, 1722, 1774, 1904, 1918,
 2795, 3172, 3656, 3854, 3882,
 3960~1, 4051, 4180~1, 4218,
 4406, 4479, 4620, 4796, 5388,
 5440 文2023, 2125, 2404
 空恐ろしさ 指1815
 反らす 文264, 2313
 反らせる 結1993
 それ 文2104
 それこそ F₄₋₆
 それこそ・ではないか・思わ
 れる・ほど 指511
 それこそ・ではないかと思わ
 れるほど 指511
 それこそ・にもひとしい 指312
 それこそ・ほど 指288
 それこそ・みたい 指430
 それこそ・みたいに 指430
 それこそ・も・等しい 指312
 それこそ・よう 指429
 それこそ・ように 指429
 それじゃ F₁₀₋₃
 それじゃ・まるで 指272
 それじゃまるで 指272
 それでは F₁₀₋₂
 それでは・まるで・ではない
 か 指277
 それではまるで・ではないか
 指277
 逸れる 結320, 850 文1550, 1563
 揃える 文1569
 そわそわ 結1254
 損 結831
 存在 結1194, 3310, 3722, 3758,
 4016 文2058
 そんな 結1553
 そんなもの K₅₋₃ 結1553

— タ —

…たい 結4416
 …大 S₁₋₁₇ 指1166
 体当たり 結1317
 第一号 結4987
 第一歩 結4659, 4863, 4979
 体温 結1898, 2113
 大河 結5295
 大学級 文2050
 代議士 結4819
 大金 文1775
 退屈 結1733, 4025, 5225, 5428
 隊形 結4966
 対決 結1326~7
 体験 結1661
 太鼓 結640
 大した R₂₋₁
 大した・変わらない 指1134
 大して F₁₂₋₁
 大して・違いがない 指456
 貸借対照表 文875
 体臭 結4792, 5249
 対照 結2082
 大将 文877
 隊商 文876
 対する 文2001
 怠惰 結2579, 4264
 大地 結1038
 態度 結429, 779, 1690, 1716,
 3362, 3792, 4215
 対等 結3123
 胎動 結2122 文878
 台所改造 結4659
 第二 結5085
 第二の R₄₋₄ 指1126
 大任 結2787
 大の字 文879
 頰頬 文2430
 代表選手 文880
 待望 結4018
 大暴走 文881
 大名暮し 文635
 大名稿 文882
 対面 結94
 ダイヤ(モンド) 結1868, 2299
 文883~4
 大勇猛心 結4195
 太陽 文2358

- | | | | | | |
|----------------------|------------------------|------------------------------|------------------------|---------------|-------------------------|
| 太陽時間 | 結4980 | 蓄える | 結3573~5 | 崇る | 結894 |
| 平ら | 結4303 | 打撃 | 結4700 | 達 | 結5446 |
| 大理石 | 結144 | 竹藪 | 結4011 | 立ち上がる | 結292 文277~8, |
| 対立 | 結5 | 凧 | 結3852 | 1361, 1365 | |
| 大論陣 | 文1776 | 足し | 文2296 | 立ち現れる | 結185 |
| 対話 | 結77, 4079, 5077 | 出し | 文887 | 立ち入り禁止 | 文2337 |
| 堪え兼ねる | 結933 | 打診 | 結2833 | 立ち入る | 文279 |
| 耐える | 結932 | 出す | 結1923~7, 2040, 2654, | 立ち住生 | 結19 |
| 倒す | 文537 | 2917 文1579, 1659, 1690, | | 立ち木 | 結1018, 5052 |
| 弱やか | 結2708, 4309 | 1732, 1758, 1800, 1809, 1902 | | 絶・断ち切る | 結3270~1, 3883 |
| 手折る | 文2289 | 助かる | 文477 | 立ち姿 | 結4932 |
| 倒れかかる | 結302 | 助け船 | 文1462 | 立ち嫌む | 結845 文2269 |
| 倒れる | 文265, 508, 530 | 携える | 文1707, 1810 | 立ち続ける | 結253 |
| 籬 <small>が</small> | 文1286~7 | 尋ね回る | 文268 | 立ち昇る | 結612~3 |
| 高い | 結4311~2 文2036 | 訊ねる | 結2313, 2677 | 立場 | 結660, 1410, 2368, 3672, |
| 互いに | 結4616 | たそがれる | 文269 | 3747 文2298 | |
| 鷹夫(人名) | 結1681 | ただ | F ₃₋₁₀ | 立ちはだかる | 結756~7 文280 |
| だか...だか...だか判らない | 指746 | 溢れる | 結3303~8, 3899~900 | 立ち塞がる | 結754~5 文1521 |
| だか...だかわからない | 指747 | 戦い | 結2492, 5104 文888, 1777 | 立ち迷う | 結942 |
| だか...だか判らない | 指748 | 戦・闘う | 結1336~49, 1653~4 | 立つ | 結287~90 文1466, 1548, |
| 高鳴らす | 文1704 | 2720 | | 2298, 2300~1 | |
| 高鳴る | 結1096 | 叩き上げる | 文271 | 絶つ | 文1656 |
| 高飛車 | 文885 | 叩き斬る | 結3274 | 脱衣 | 文1288 |
| たかぶり | 結673, 2545 | 叩き込む | 結4102, 4149 文272, | 脱衣籠 | 結4593 |
| 高める | 結4214 | 1510 | | 脱出 | 結2264 文2310 |
| 耕す | 結4024 | 叩き壊す | 結3239~42 | 脱出口 | 文889 |
| 宝 | 文2378 | 叩き出す | 文273 | 脱出物語 | 文2137 |
| 高笑い | 結3220 | 叩きつける | 結2107, 3210~3 | 達する | 結323~5 文1448 |
| 惰気 | 結3943 | 文274 | | 脱走 | 文1359 |
| 抱きかかえる | 結3461 | 叩き潰す | 結3244~5 文275, | だって | J ₃₋₃ 指598 |
| 抱き込む | 結3105 文266 | 1862 | | だって・あんまり・変わらな | |
| 瀑瀉 <small>たぎ</small> | 結5445 | 叩きのめす | 結2671, 3709 | い | 指648 |
| 抱き締める | 結2912, 3458~60 | 叩き破る | 結3266 | だって・同じ・こと | 指710 |
| 文1533 | | 叩く | 結2101~2, 3861 文465, | だって・同じこと | 指710 |
| 焚火 | 文886 | 2342 | | だってそうじゃないですか | |
| 妥協 | 結1680 | 正しい | 結4470 文66 | 指684 | |
| たぎり立つ | 結1174~5, 1801~2 | 佇む | 結1410 | だって・そうだ | 指684 |
| 抱く | 文1499 | 畳まり込む | 結767 | だって・相当する | 指686 |
| たぐい | M ₂₋₁ 指1114 | 畳 | 結5179 | だって・その通り | 指683 |
| 類 | 指1114 | 畳み掛ける | 文276 | だって・だってあんまり・と | |
| 卓上鈴 | 結4127 | 畳み込む | 結3111, 4153 | 変らない | 指648 |
| 託す | 結4120 | 畳む | 結3227 | だって・よう | 指689 |
| 遅しい | 結373, 4595 文521 | 漂い出す | 結421 | だって・ようなもの | 指689 |
| 企み | 結1706, 2417 | 漂い出る | 文2295 | 手綱 | 結2715 文1778 |
| たくり出す | 文267 | 漂う | 結412~20, 1436, 1775~7 | 脱皮 | 文890 |
| 手練り寄す | 結3196 | 1816 | | 楯・盾 | 結4743~4, 5153 |
| 手練り寄せる | 結3197 | ただ・よう | 指415 | 文2218 | |
| 手練る | 結3481~2 文1590 | 漂わす | 結3808, 4147 | 立て切る | 文535 |
| | | 爛れる | 結1249~50 | 立てこめる | 結602 |

たて稿 文891
 建て直す 結2970~2
 建物 結1025, 2035, 3835, 4419, 5325
 たてやすい 文507
 立てる 結1966~70, 2717, 2985~9, 3798 文1658
 妥当性 結5103
 たとえ M₇₋₂ 指1117
 譬え 指1117
 たとえ・思い出す 指1119
 譬えて 指22
 たとえて言う F₂₋₉
 たとえて言う・近い 指389
 たとえて言う・に近い 指389
 たとえて言うなら F₂₋₁₀ 指201
 たとえて言えば F₂₋₈
 たとえて言えば・よう 指399
 たとえて言えば・ようなもの 指399
 たとえに言う F₂₋₁₁
 たとえに言うが・似る 指247
 譬えにもよくいうが・に似ている 指247
 たとえば F₂₋₇
 たとえば・同じ・こと 指533
 たとえば・思う 指243
 たとえば・でも・よう・心持ち 指333
 譬え・でも・ような心持 指333
 譬え・と同じことだ 指533
 たとえば・と思った 指243
 譬え・にも似ていた 指292
 たとえば・も・似る 指292
 たとえば・よう 指394~8
 たとえば・ような 指394
 たとえば・ようなもの 指395
 たとえば・ように 指397
 譬え・ように 指398
 たとえる D₁₋₁₂ 指22~31
 たとえる・よう 指176
 たとえを・思い出す 指1119
 譬へば・やうなもの 指396
 辿り着く 結1429~33, 1828 文64, 282, 2279
 辿る 結461, 1598~601 文1585
 棚 結3122
 棚上げ 文892
 谷 文2225, 2417

ダニ 文893
 谷間 文2281
 他人 結33, 1082, 2185, 2721, 3800, 4609, 4665, 4987 文544, 1289, 1779, 2392
 他人アレギー 結5517
 他人知らず 結4830
 狸 文2420
 種(子) 結4811, 5330~45 文483, 894
 愉しき 結3444
 楽しみ 結1423, 4657
 束 結4658
 煙草 結1877
 旅 結84 文2125
 足袋 結1029
 たぶらかす 結2580, 3985
 食べる 文283, 1716, 1948
 玉・球 結2129 文2053, 2086
 卵 結5409 文1780
 魂 結173~4, 524, 888, 912, 984, 1006, 1090, 1237, 1759, 1842, 2441, 3189, 3193, 3624, 3686, 3731, 4328, 4520, 4926, 5024, 5069, 5155, 5171, 5202, 5350 文1781
 騙す 結3541~2
 玉の井 文1782
 玉の輿 文2288
 堪らぬ 文2218
 黙り込む 結957
 溜まる 文1534
 黙る 文495
 民 結4686
 溜め息 結1280, 2672, 3702, 4042 文1783, 2385
 ためらい 結3369
 溜める 結3302
 保つ 結1940 文512
 袂 文1784, 2248
 便り 結5076
 頼りない 結4503
 頼りなさ 結2334
 頼る 結1561
 盥回し 文895
 垂らす 文1581
 …たる S₉₋₁ 指1202
 垂れ込める 結307, 637
 垂れ下がる 結308

垂れる 結306, 1414, 2061, 2720
 戯れる 結1007~8
 段 文1290
 弾丸 結4461
 短距離 文2333
 誕生 結124
 単色画 文2004
 箆箭 結3766, 5121
 男性 結5431
 男性的領土 結5468
 断絶状態 結4644
 断層 文896
 歎息 結3984
 男尊女卑 結580
 単調 結3264, 4283
 段取り 結2726
 旦那 結4673
 丹念 結4222, 4467
 断念 結628
 断末魔 文2126
 断面図 文897
 団欒 結5437
 弾力 結4957

— 子 —

地 文1789
 血 結264, 356, 1012, 1095, 1263, 1292, 2008, 2015, 2253, 2884, 2966, 5102 文1291~2, 1463, 1788, 1790, 2030, 2127, 2207, 2239
 地位 結1360
 小さい 結4336~8 文33, 54, 2037
 智恵 結4409
 千絵(人名) 結1309
 地下 文2264
 近い K₁₋₁ 指725~7 文20
 違いがない K₂₋₆
 治外法権 文898
 違う D₁₅₋₁ 指145 文1223
 知覚 結880, 943
 ちかちか 文532
 近づく 結726 文544, 1229
 力 結864, 1645, 2157, 2159, 2187, 2233, 2588, 3597, 4646, 4855~6, 5156 文482
 力綱 文899
 違わない K₂₋₈

痴漢 結4730, 5014
 契る 文284
 痴愚 結1945
 畜生 文900
 薔薇 結2823
 ちぐはぐ 結4280
 乳首 結4197
 遅刻 結5012
 血潮 結2967
 知識 結1501, 4588, 4598, 4973
 知悉 結1841
 恥辱 結5423
 地図 結2315, 3953, 4238文2112
 知性 結165, 3737
 父 結797
 乳色 結879
 乳繰る 文285
 縮まる 文1255
 縮む 結818~9 文1332
 縮める 文1673
 秩序 結1265
 窒息 結133, 1290 文286
 ちっぽけ 結4335
 知的 結4428~9
 地点 文901, 1363
 血なまぐさい 結4525
 血走る 結5523
 乳房 結11, 4780
 血まみれ 文1464
 血まめ 結2624
 血みどろ 結4591~2 文2399
 致命傷 文1785
 茶 文2387
 茶番劇 文902
 ちゃぶ台 結3742
 茶目 結4272
 宙 結941, 4144, 5038 文1465, 2224
 中央 文2300
 中介 結1860
 中核 結4898
 中間色 文2380
 忠実 結4611
 抽象 結1620, 4152
 中心 文2373
 中樞 結4899 文903
 中斷 結2816
 宙吊り 結3514 文904
 中毒患者 結5020

中毒症状 結5427
 宙ぶらりん 結4291
 注文 結2707
 中労委 文905
 蝶 結997, 1062 文62
 聴覚 結1011
 調教 文906
 帳消し 結4700 文907
 調子 M₂₋₁₃ 結1364, 4526, 4558, 4586 文1293, 1786
 調子取る 結2942
 聴衆 文2035
 嘲笑 結1118, 1270, 4400
 頂上 結2274, 3433, 4900~1
 超人 結4687
 朝鮮 結4754
 挑戦的 結4469
 長蛇 文2128
 頂戴 結2864
 蝶番 つがい, 文2428
 ちょうど F₁₋₄ 指196
 ちょうど・一般 指344
 ちょうど・同じ・当たる 指460
 ちょうど・同じ・にあたる 文288
 ちょうど・同じ・よう 指460
 ちょうど・かたさえ思われた 指515~6
 ちょうど・さえ・思われる 指291
 ちょうど・と一般 指344
 ちょうど・同程度 指343
 ちょうど・同じような 指515
 ちょうど・と同じように 指516
 ちょうど・に似た 指242
 ちょうど・似る 指242
 ちょうど・ほど 指284
 ちょうど・よう 指380~4
 ちょうど・よう・かつこう 指524
 ちょうど・よう・感じられる 指479
 ちょうど・よう・気持ち 指532
 ちょうど・ようだ 指380
 ちょうど・ようで 指381
 ちょうど・ようである 指382
 ちょうど・ような 指383
 ちょうど・ような恰好 指524

ちょうど・ような・気持 指532
 ちょうど・ようなもの 指519
 ちょうど・ように 指384
 ちょうど・ように感じられる 指479
 ちょうど・よう・もの 指519
 眺望 結2538
 帳簿尻 文1787
 澄明 結4508
 長夜 文2410
 跳躍台 文1364, 1466
 直視 結2836
 直線 文2145
 直面 結1352~4
 著書 結2136
 貯蔵 結2854~5
 直覚 結1711
 直感 結1689
 直観 結4062, 4316
 散らかる 結228
 散らす 結3846~8
 ちらつく 結1077, 1744 文287
 鍛める 結2742, 3168, 4168~69
 治療 文288
 治療 結2863 文2377
 治療法 文908
 散る 結678~81, 1486~7
 沈潜 結34
 沈滞 結1744
 沈痛 結4414
 沈澱 結119~20 文1398
 闖入 結563
 闖入者 文2199
 沈黙 結157, 235, 449, 516, 618, 723, 809, 1544, 1556, 1866, 2163, 3675, 3824, 4048, 4079, 4146, 4280, 4320, 4571, 4709, 4857, 4982, 5077, 5245, 5262
 追憶 結1084, 2598, 3621, 4039
 追加 結4217
 追従 結4101
 追想 結4193
 墜落 文1300
 痛感 結2826
 通勤者 結541
 通行止め 文2129
 通じる D₂₋₄ 指135~6

- 通達 文35
 通用範囲 文2354
 通路 結4779, 5202 文909, 1791
 ～4, 2130～1, 2369
 杖 結2307 文508
 使い道 文910
 使い果たす 結2933
 使う 結2622, 2797, 3650
 文1458, 1889, 1990
 聞え 結1812, 1826
 番える 文2012
 司る 結2492
 掴・捉まえる 結3428～30
 文289, 501
 つかまる 結1019
 掴みどころ 文1194
 掴む 結2356～7, 3468～73,
 3939～40 文290, 508, 1733,
 1745, 1943, 1964, 1975
 潰かる 結1427
 疲れ 結1807, 4317, 4389, 4518
 疲れる 結877, 3059, 4225
 月 結2898, 3495, 3947, 4178
 継ぎ 文2416
 付き合い 結1585
 付き合う 結1334
 突き上げる 結2122～5
 突き当たる 結1518～20
 つき合わせる 結2702 文1475
 突き入る 結1690
 突き落とす 結2738～9, 3129,
 3701
 月影 結620, 2613
 突き刺す 結792～4, 4218 文
 1753
 付き従う 文2005
 突き進む 文292
 付き添う 結1499
 突き出す 文293
 継ぎだらけ 結4392
 突きつける 結3191 文294,
 1718～9, 1765
 突き抜く 文295
 突き抜ける 結1820
 突きのける 文296
 月の光 結1472, 1779
 継ぎはぎだらけ 結4393
 月日 結382
 接ぎ穂 文911
 搦き混ぜる 結4037
 付き纏う 結692 文297
 衝き破る 結2168
 尽きる 文496, 1344
 付・附・就・着・憑く 結321
 ～2, 695～6, 974～5, 1508
 ～9, 1731 文88, 1234, 1251,
 1290, 1314, 1395, 1423, 1446,
 1472, 1495, 1540, 1783, 2016,
 2241, 2293, 2385
 突・衝く 結2120, 2330, 2672
 文72, 1595, 1671, 1736, 1772,
 1944
 机 文1467
 つくづく F₁₋₁
 蹲踞^{つづ}う 結1027
 つぐむ 結2073
 作り上げる 結1934, 2923, 3653,
 4138
 作り変える 文1759
 作り声 結4133
 作り出す 結3654, 4049～50
 文1888
 作り直す 文298, 1380, 2303
 作り笑い 結3144, 4107, 4110,
 4163～5
 作る 結2623～7, 2693, 2798～
 9, 3651～2, 4045～8, 4097,
 4188 文1645, 1654, 1678, 1706
 附け味 文912
 つけ込む 結1049
 付・就・着ける 結2333, 2744
 ～5, 2886, 3189, 3410 文1618,
 1740, 1811, 1846, 1877, 2255,
 2343, 2357, 2378
 告げる 結2307～10, 2767, 4206
 辻褄 文1294
 伝える 結2298
 薫^{かほ}蔓 結4467
 伝わる 結458～60 文1306
 土 結250, 2102, 4036 文1795,
 2132
 培わす 結3597
 土埃 結1002
 続き 文2147
 筒切り 文913
 つつく 文1663, 1819
 続ける 結1950 文1737
 突っ込む 文299, 1698
 突つつく 結3863
 筒っぽ 結4030
 筒抜け 文914
 突っ走る 文300
 突っ放す 結3052～3 文301
 突っ撥ねる 文302
 慎重しき 結2956
 包み込む 結1899～900, 2893
 包む 結1888～98, 2709, 2891,
 3771～2
 綴り合わせる 結3155
 綴る 結3180, 4112
 …って 指1203
 …っていうことがある 指220
 …ってことわざがあるでしょう
 指224
 …ってつくづく・だと思った
 指645
 務め 結3775
 務め上げる 文2312
 勤める 結4835
 務める 文1744
 綱 結2500 文1468
 繋がり 結2983 文1295
 繋がる 結1652 文303, 1292
 繋ぎ合わす 文304
 繋ぎ止める 結3174, 3721～2,
 3750～1
 繋ぐ 結2066, 3175, 3845 文478
 2002, 2009
 綱渡り 文915
 唾 結2774, 4209 文2249, 2253,
 2255
 珉 結2088, 5387 文2260, 2262
 鍔ざり合い 結2432 文916
 燕 文917
 潰す 結3243 文305, 1668
 磔 文2141
 咬き 結987, 2168, 3703
 咬く 結963, 1303～5, 1537～
 40, 1593
 つぶる 結4636 文1954
 潰れる 結772 文306, 479,
 1243, 1269, 1279, 1308
 壺 結4763
 …っほい 指1193
 …っほく 指1194
 蕾・蕾 結4923 文49, 2289
 妻 結2955, 4762 文1365, 2133,

2290~3
 爪先 結3707
 踵き 結2238 文918
 踵く 文307, 1525
 つまり F₇₋₁ 指208~9 指208
 つまり・…ってわけ 指581
 つまり・という・わけ 指581
 つまりは 指209
 つまり・みたいなもん 指542
 つまり・みたい・もの 指542
 詰まる 結749~53
 罪 結1104, 3281, 5057
 積み重ねる 結3184~7
 摘み取る 文1955
 摘む 結3474 文1956
 瞠る 文1957
 爪 結1968, 2615, 4466 文1796, 2033
 詰め込む 結3115
 冷たい 結4235, 4578~85
 冷たさ 結328, 428, 712, 1810, 4310
 詰める 結3114 文2329
 つもり M₃₋₁₂ 指1107
 積みもる 結687~8
 艶 結3706
 艶やか 結4249
 梅雨 結2107
 梅雨空 結3853
 露一つ F₁₂₋₄
 露一つ・違わない 指458
 強い 結1437, 4288 文1182
 強さ 結4058
 面 結5354 文47
 …づら S₁₋₁₁ 指1160~1> 指1160
 …面 指1161
 辛い 結190
 面構え 結5047
 貫く 結2016~21, 3811~2 文1767, 2404
 面の皮 結1357, 2719
 氷柱 文1469
 釣り上げる 結3123
 吊りさがる 文1979
 吊り紐 結5134
 蔓 結309, 5326
 鶴川<人名> 結4716
 釣瓶打ち 文919
 連れ出す 結2656, 3188 文2297

連れて行く 文2276
 連れ戻す 文87
 連れる 結2034
 つわもの 文2386
 つんざく 結2174, 3893
 龔 文920

— テ —

手 結239, 326, 359, 457, 941, 1633, 1738, 1743, 1803, 2042, 2066, 2075, 2081, 2246, 2514, 2688, 2954, 3427, 3555, 5066
 ~7, 5380 文83, 511, 921, 1296~9, 1379~80, 1471~3, 1800, 1804~17, 2006, 2018, 2020, 2030, 2032, 2215, 2227, 2378, 2399, 2414
 出会・逢い 結4143, 5255
 出会う 結689~91, 1329, 1492
 ~4
 手足 結2953, 4008~9 文1797
 ~9, 2027
 手当て 文922
 である K₁₁₋₁
 …であれ…であれ J₇₋₁ 指603
 てい、
 体 文1208
 態 M₂₋₇ 指1086
 てい、えば 指213
 で言えばF₁₆₋₂ 指213~4> 指214
 提供 結1884
 抵抗 結40, 1492, 3669, 4934
 体裁 結3912
 停止 結17 文2134
 亭主兵營 結5469
 定食料理 結4722, 5113
 泥酔 結5471 文923
 停滯 結18
 デイテル 結375, 698, 4570
 …ていど 指1167
 …程度 S₁₋₁₈ 指1167~8> 指1168
 停頓 文2035
 手入れ 文924
 テースト 結4685
 手掛ける 文308
 手加減 結3727
 拮 結3004
 手紙 結142, 2621, 2629, 3918~9 文1213, 2389
 テキ 結1484

敵 結5008 文925, 2135, 2376, 2384
 …的 S₂₋₁ 指1174
 出来 文1216
 敵意 結473, 1767, 1917
 …的・感じ 指1240
 …的・感じ・ほど 指1262
 出来事 結150, 1051, 1195, 3647, 3747, 3762, 4004, 4015, 4267 文2192
 溺死 文309
 …的な感じ 指1240
 出来る 結1288, 1407, 4238
 文2377
 適齡 結487
 手ぐすね 文1801
 手管 結5102, 5481
 手首 結5369
 挺 文1384
 デザイン 文2349
 手探り 文1378
 手塩 文1470
 でしかないような 指762
 手錠 結4886
 鉄 文2294
 轍 文1802
 手つかず 文926
 手伝う 結1057~60, 2507
 でっち上げる 結3782
 鉄壁 結5170 文2033
 鉄面皮 結5509
 出て来る 文310
 手に負える 結156~7
 手の内 結3440
 手の裏 文1803
 掌 結2015, 3931
 …ではあるまい K₁₂₋₂
 ではあるまいし F₁₉₋₁ 指227~8
 ではござりませぬが 指230
 ではござりませぬど 指231
 ではない K₁₁₋₁ 指826
 ではないか K₁₁₋₃
 ではないが F₁₉₋₂ 指229~31
 ではないかと疑われるほど 指164
 手放・離す 結3556 文311
 手庇 結5484
 手振り 結1858
 手前 文540, 927

手枕 結5482
 でも J₁₋₁ 指595
 でもあるかのようにだった 指656
 でもあるかのように見える 指699
 でも・言う・ほど 指638
 でも・思い 指717
 でも・思われる・よう 指640
 でも・かと思われような 指640
 でも・かねない 指677
 でも・かのようにで 指657
 でも・かのような 指658
 でも・かのようにに 指659
 でも・気 指716
 でも・気がして 指616
 でも・気がする 指616
 でも・ごとく 指664
 でも・ごとし 指664
 でも・そう 指673~6> 指673
 でも・そうで 指674
 でも・そんな 指675
 でも・それに 指676
 手持ち 文2265
 手元 結173 文928, 1562
 でも・...という 指719
 でも・...という・よう 指721~2
 でも・...という・よう・もの 指723
 出戻り 文929
 でも・なる 指615
 でも・みたい 指665
 でも・みたいに 指665
 でも・よう 指656~63
 でも・よう・思う 指694
 でも・よう・気がする 指707
 でも・よう・気分 指707
 でも・よう・気持ち 指705~6
 でも・よう・錯覚される 指698
 でも・ようで 指660
 でも・ようである 指661
 でも・ような 指662
 でも・ような気がする 指702
 でも・ような気分 指707
 でも・ような気持ち 指705
 でも・ような・気持ち 指706
 でも・ように 指663
 でも・ようにおもった 指694

でも・ように錯覚される 指698
 でも・よう・見える 指699
 寺 結884
 照らし出す 結2642, 3672
 照らす 結2641, 2801, 3670~1, 4281
 照り翳り 結5271
 出る 結186, 1263~4 文312, 1235, 1268, 1271, 1285, 1326, 1347, 1356, 1434, 1437, 1502, 1507, 1520, 2215
 テレビ 結295, 4186
 手分け 文930
 手渡す 結3037~8
 天 結4698, 4797~8, 5051 文1366
 点 結2301
 電気 結1656 文931
 電気仕掛け 文932
 電気メス 結347
 電気毛布 結4741
 電球 結3836
 天国 文933
 天才 結314, 5011
 天使 結3748, 4998 文2005
 電車 結1976, 2150, 2534, 2554
 天井 結1780, 3403, 4321 文1300~1, 2216
 天井板 結397
 点ず 結2802
 点数 文1818
 伝達経路 結4802
 天地 結3457, 5398
 てんてこ舞い 文934
 転倒 結20~2, 4064
 電燈 結3803
 電波 文2376
 転覆 結23
 展望 文2221
 電話 結4583

— ト —

と J₄₋₂ 指601
 戸 結5173 文1826
 ドア 結2701, 4183
 といいたいくらいのもの 指171
 と言いたいほど 指159
 と言いたいような気がする 指187

と云いたくなったほど 指160
 といいなおしてもよかった 指39
 ...という S₉₋₂ 指1203~7> 指1204
 ...という・思い 指1260
 ...という思い 指1260
 ...という...があるが F₁₈₋₆
 ...という...があるが・当てはまる 指264
 ...という...があるものだが この場合...にそれがあてはまる 指264
 ...という・顔 指1255
 ...という・顔つき 指1256
 ...という顔つき 指1256
 ...という・形 指1253
 ...という・かっこう 指1254
 ...という恰好 指1254
 ...という・感じ 指1257~8
 ...という感じ 指1257
 ...という・気がする 指1218
 ...という気がする 指1218
 ...という・気がする・くらい 指1221
 ...という気がするくらい 指1221
 ...という・気持ち 指1259
 ...という気持 指1259
 ...という・ぐあい 指1250~1
 ...という工合 指1250
 ...ということがある F₁₈₋₁ 指220
 ...ということがあるでしょう F₁₈₋₄ 指223
 ...ということもあるわけだし F₁₈₋₇ 指225
 ...という諺があるでしょう F₁₈₋₅ 指224
 ...というじゃありませんか F₁₈₋₃ 指222
 ...という・調子 指1252
 ...というでしょう 指221
 ...というでしょう F₁₈₋₂ 指221
 ...というところだ K₁₁₋₅ 指817
 ...という名の S₉₋₃ 指1208
 ...というふう 指1244~9
 ...という風 指1244
 ...というふうに 指1245
 ...という風に 指1246

...という風に見えた 指1261
 ...というふうに見える 指1261
 ...という・風情 指1242~3
 ...という風情 指1242
 ...というべき 指1205
 ...という・ほど 指1223
 というものだ K₁₁₋₇ 指819
 というものは J₃₋₁
 というものは・つくづく・思う 指645
 ...という・やつ 指1241
 ...という奴 指1241
 ...という・よう 指1225~8
 ...という・よう・おもむき 指1232
 ...という・よう・かっこう 指1235
 ...という・よう・感じ 指1237~9
 ...という・よう・ぐあい 指1233~4
 ...という・よう・図 指1236
 ...というような感じ 指1237
 ...というような工合 指1233
 ...というような具合 指1234
 ...というようなもの 指1231
 ...というように 指1225
 ...と言うように 指1226
 ...という・よう・もの 指1231
 というより J₁₋₅ 指594
 というより・いわば・...とい
 う・よう 指649
 というより・感じられる 指614
 というより・...という・感じ 指724
 というより・...という感じ 指724
 というより・なにか・でも・
 よう 指646
 というよりはいわば・という
 ような 指649
 と言うよりは・なにか・でも
 ・ような 指646
 というよりはむしろ・に近い 指647
 というよりは・ようにも思え
 た 指693
 というよりはほかはない K₁₁₋₉
 指821

と云うよりほかもない 指821
 というより・むしろ 指642~3
 と云うよりむしろ 指642
 というより・むしろ・言う 指644
 というより・むしろ・近い 指647
 というよりも 指594
 というよりも・としか・指じ
 られなかった 指614
 というよりもむしろ 指643
 というよりもむしろ・と云っ
 たほうがよかった 指644
 というより・よう・思える 指693
 問い返す 結2312
 問いかける 結2768
 と一脈通じた 指137
 と一脈通じるものがある 指138
 ...といった 指1206
 ...と謂った 指1207
 ...といった顔 指1255
 ...といったかたち 指1253
 ...といった感じ 指1258
 ...といった工合 指1251
 ...といった調子 指1252
 ...といったところ K₁₁₋₆ 指818
 ...といったところだ K₁₁₋₆ 指818
 ...といった風 指1247
 ...と云った風 指1248
 ...といったふうな 指1249
 ...といった風情 指1243
 ...といったほど 指1223
 ...といったような 指1227
 ...といったような趣き 指1232
 ...といったような恰好 指1235
 ...と言ったような感じ 指1238
 ...といった・ような感じ 指1239
 ...といったような図 指1236
 ...といったように 指1228
 ...と云っていい K₁₁₋₄
 ...と云っていい・ほど 指974
 ...といってもよいほど 指974
 ...と一般 指742
 塔 文2123, 2285
 堂 文1476
 答案 文1819
 糖衣 結3926

動員 結2844
 燈火 結399, 5305
 陶器皿 結3815
 同居 結79~80, 1283
 道具 結1186, 4759~61
 道具立て 結4762 文935
 洞窟 文2209
 峠 結462 文936, 1474, 2374
 道化 文937, 1475
 動作 結1799, 4145
 闘志 結2965
 同志 結3512
 同射 結2878
 登場 結3~4
 同情 結2067, 3131
 投じる 結3029
 動じる 結265
 燈芯 結5120
 陶酔 結1891, 3746, 3787, 4890,
 5131, 5182
 同棲 結2659
 同然 K₃₋₁ 指745
 ...同然 S₇₋₃ 指1198
 ...と疑われるくらい 指166
 ...と疑われるほど 指165
 到着 文1449
 道中 結1723~4 文2009
 疼痛 結4209
 童貞 結1982
 同程度 K₂₋₃
 道徳 結4149, 4744
 登攀 結2653
 動物 結4812 文938, 2067
 動物ごっこ 文939
 どうみても F₄₋₇
 どう見ても・かに見える 指252
 どう見ても・見える 指252
 透明 結4504~7, 4609 文1199
 同様 K₂₋₁ 指738~9
 ...同様 S₇₋₂ 指1197
 動揺 結15~6, 2783, 3870
 同様・思われる 指828
 冬来 結26, 2465, 2546
 道理 結5128
 同類 K₄₋₁
 同類・よう・さえ・気がする 指1004
 同類・ような気さえする 指1004

同列 K₂₋₁ 指740 文1477~8
 道路 結4295
 当惑 結183
 童話作家 文940
 十重二十重 文1385
 と選ぶところはない 指744
 遠い 結176, 4331~3, 4604
 文21, 55, 1179, 2037, 2381
 遠ざかる 結1295
 通す 結4250 文91, 313, 1958
 とおなじ 指733
 と同じ 指734
 とおなじ気持 指1013
 と同じく 指735
 と同じ工合 指1012
 と同じくらい 指961
 とおなじこと 指1010
 と同じこと 指1011
 と同じほど 指960
 と同じ役目 指1014
 と同じような 指1000
 とおなじようなこと 指1008
 と同じようなものがあつた 指1007
 と同じように 指1001
 と思う 指8
 と思った 指9
 と思つたり 指10
 と思われた 指59
 と思われるくらい 指163
 通り 結1818
 通りかかる 文2369
 通り越す 文473
 通り過ぎる 結328~30, 469,
 1821~2 文314, 2369
 通り抜ける 文1724, 2324
 通り魔 結5458
 通る 結1437~8, 1610 文1280,
 1913
 都会 結713, 2376
 と化さなくてはなるまい 指49
 と化した 指50
 と化して 指51
 溶かし流す 結3677~8
 融かす 結3675~6, 4059
 咎める 結2574
 尖らす 結3320
 尖る 結852~4 文315
 と変らない 指743

と感ずる 指2
 時 結286, 380, 484, 1845, 3376,
 3407, 4068, 5207 文509, 2394
 関 文2136
 怒気 結1919
 鴛色 結815
 研ぎ澄ます 結3642~4
 解き放す 結2063
 解き放つ 結3199
 解きほぐす 結2064, 3151~3
 度胆 文1820
 途切れる 文1333
 解く 結2676
 徳 結5351
 磨ぐ 結2615
 毒 結12, 1389, 2645, 5313, 5408
 文941, 1302, 1821, 2138
 独演 文2137
 毒牙 文942
 毒口 文943
 独身 結4774
 特製 結4723
 独走 結27 文944
 独断 結4525
 特徴 結4069
 特等席 結4885 文945
 特筆大書 文946
 独立 結3991
 とぐろ 結2749
 棘・刺 結1390, 1916, 2181,
 4306 文947, 1303, 2317
 溶・融け合う 結1152 文948
 時計 結2287, 2329, 4458, 5190
 文2361
 と形容した 指40
 と形容したいほど 指161
 溶け入る 結1150
 溶け込ます 結4100
 溶・融け込む 結569~76, 1456
 ~8, 1693~4, 1782, 1808
 文1428
 溶・融け去る 結1151 文1350
 とげとげしい 結4480
 溶・融ける 結1145~9, 1570,
 1656, 4233
 どこ 結172
 怒号 結109
 どこか F₈₋₅ 文1479
 どこか・感じ 指565

どこか・に似た 指257
 どこか・に似ていた 指258
 どこか・に似ていて 指259
 どこか・似る 指257~9
 どこか・の感じのする 指565
 どこか・みたい 指454
 どこか・みたいに 指454
 どこか・よう 指453
 どこか・ような 指453
 どこか・らしい・見える 指498
 どこか・らしく見える 指498
 F₈₋₇
 どこぞ・でも・よう 指323
 どこぞ・でも ような 指323
 どことなく F₈₋₈
 どことなく・思わせる 指256
 どことなく・に似ている 指260
 どことなく・似る 指260
 どことなく・を思わせる 指256
 床屋 文949
 どこやら F₈₋₆
 どこやら・よう・思われる 指499
 どこやら・よに思われた 指499
 ところ 結1396, 3409, 3733,
 3970 文71~2, 83, 499, 1217,
 2018
 閉・鎖す 結2071, 3170~3,
 3855~6, 4205 文1469
 屠殺 文317
 どさっと 文527
 とし 指34
 としかうけとれない 指17
 としか考えなく 指16
 としか考えられない 指63
 としか見えなかった 指65
 閉じ込める 結4106 文505, 2299
 閉じ籠もる 文2280
 …として S₂₋₁ 指1209
 …として印象づけられた 指1217
 …として・印象づけられる 指1217
 年の瀬 結705
 閉じる 結3854 文1907, 2234
 どす黒い 結4517
 とする 指35
 とす分ちがわず 指459
 とそっくりな 指737

- 土台 文950
と大した変りがあるものか 指1134
と大して違いのない 指456
とたとえた 指23
土地 結2969
特許 結3556
特権 結2952, 2980, 4116
とっちめる 結2575
取って付けた 結5435
突入 結1589
と露一つちがわぬ 指458
土手 結4922
とでも云いたいほど 指638
とでもいうような 指721
とでもいうようなもの 指723
とでもいうように 指722
とでもいった 指719
と同然 指745
と同様 指738
と同様に 指739
と同様に思われて 指828
と同列 指740
届く 結326~7 文83, 1220, 1296
~7, 1348, 2018
整・調える 結1941 文1965
とどまる 結286, 806
とどめ 結2755 文1822
とどめる 結2982
とどれだけでも変りがなかった 指457
轟き 文2366
となって 指43
となり 指44
と何の変りもなかった 指1135
と・似ていた 指119
と似ているように思えてくる 指189
殿様 文951
…と…は J₇₋₂ 指604
とばかり 指587
飛ばす 結3045 文2251
とは違う 指145
とは見ない 指18
とはよくも名付けた K₁₃₋₂
飛び移る 結1829
飛びかかる 結3438
飛び越える 結464, 4635 文1912
飛び込む 結553~5, 1453
飛び去る 結520~1 文2018~
2260
飛び出す 結1266, 1597 文319,
1357, 1989
飛び立つ 文2023
飛びつく 結1498 文320
と等しくなります 指728
と一つ 指741
飛び火 文952
扉 結1929, 2200, 5174~5
文2037, 2110
飛ぶ 結357~9, 1603 文321
どぶ 文2139
薄板 文1823
とぼける 結939
とほとんど変りがなかった 指403
とまごうほど 指157
とまず似たりよったり 指402
と全く同じ 指418
とまで思った 指618
戸惑う 結943~4
止・留まる 結285, 1771
文1231, 1264, 1949, 2374
と見た 指19
富む 結1063
止める 結1963~4, 2665 文
1573, 1959, 2315
友 結4684
ども 結4392, 5447~50
とも言いたいほど 指639
とも言うじゃありませんか 指222
ともいうべき 指620
とも言うべき 指621
とも言われよう 指622
灯・燈し火 結3743 文61, 953
友だち付き合い 結4843
とも見えた 指627
とも見るような 指641
とも呼ばるべき 指623
吃り 結2143, 2889, 3121
吃り吃り 結4248
吃る 結958
どやしつける 結2104~5
とよりしか響かなかった 指70
虎 文2140
捕・捉・囚える 結2334~54,
2684, 3431~40, 3933~7
文322, 528
トラック 文1481
捉まえる 文323
ドラム罐 文1998
囚われ 結5288
トランベット 結4262
鳥 結956 文53, 2374
取り合う 文1812
取り上げる 結2595, 3560, 3912
~4
鳥影 結1566 文954
取り囲む 結1907
取り交わす 結2696
取り組む 結1484 文324
虜 結5015~8
採り出す 結3092
取り付・憑く 結713~5 文491
トリック 結4606
罟 文955
取り留める 結2983~4
取り逃がす 結3076
取り残す 結2714
鳥の子餅 結547, 3929, 4556,
4877 文956
取り除く 文1763
鳥肌 文957
取り払う 文1650
取り引き場 文2142
取り巻く 結1908
取り持つ 結2449
取り戻す 結2035~7, 3081~5,
4070
努力 結944, 1111, 3965 文502
取・採・奪る 結2594, 2943,
3557~8, 4000~1 文1574,
1641, 1643, 1735, 1829, 1872
奴隷 結500⁹
奴隷根性 文958
どれだけでも F₁₂₋₃
どれだけでも・変りがない 指457
取れる D₅₋₆ 文1609
泥 文959, 1824~5, 2189
どろどろ 文518
泥人形 文960
泥沼 文961
泥沼田 結5302
泥餅 結2292

泥水稼業 結2740
 とろんと 結1258
 どん底 結4920
 驚^{とんたか} 文962
 どん詰まり 文963, 1564
 飛んで来る 結360
 どんな R₁₋₂
 どんな・でも・よう 指1132
 どんな・でも・ように 指1132
 トンネル 結5201
 問屋 文541
 貪欲 結4445~7

— ナ —

名 結3578 文1195
 ない 結193, 4237, 4241, 4246
 文77, 491~2, 1180, 1187, 1194
 ~5, 1204~6, 1213, 1215, 2202
 ~5, 2208
 内界 結5173, 5187
 内心 結2688, 5049, 5083
 内臓 結930, 5134
 ないばかりに 指588
 内部 結1286, 1596, 1643, 1820,
 3730, 5212 文2199
 ないまぜる 結3646
 内面 結1602
 内面世界 結5010
 内容物 文964
 萎え凋ませる 結4065
 萎え凋む 結1232
 萎える 結1231 文1224
 中 結1289, 1302, 1306, 1309,
 1311, 1435~6, 1440, 1448,
 1452~4, 1463, 1569, 1578,
 1580, 1603, 1648, 2681~2,
 2691, 3998, 4189, 4985~6,
 5007, 5014, 5048, 5210 文511,
 1218, 2060, 2198, 2263, 2269,
 2275, 2277, 2280, 2299, 2304,
 2308~9, 2324, 2340, 2387,
 2409, 2411
 長い 文67, 2038
 流し込む 結3109, 4103, 4152
 流し去る 結3057~8
 流す 結2008~9, 3056 文325,
 1482, 1523, 1788
 寐^な立ち 結3857
 なかば F₃₋₃

なかば・よう 指413~4
 なかば・ような 指413
 なかば・ように 指414
 仲間入り 結5103 文2092
 中身 結132, 542
 眺め 結2394, 2537
 眺め取る 結3559
 ながめられる 結3323
 眺められる D₅₋₁₂
 眺める D₁₋₉ 結2269~70, 2704,
 3384~6, 4250 文2272
 流れ 結1834, 3936, 4035, 4154,
 4865 文88, 965, 2295, 2394
 流れ落ちる 結408
 流れ込ます 結3826
 流れ込む 結556~62, 1328
 流れ去る 結409~10
 流れ出す 結542~4
 流れ出る 結541
 流れる 結373~407, 1435, 1686
 文327, 2264
 泣き声^{なぐさ} 結2125, 3525, 3794
 長刀 結2319
 泣き寝入り 文966
 泣く 結920~1, 1298 文495
 風ぐ 結1133
 慰める 結1351, 2222~3, 3344,
 3910
 なくす 結1935, 2927 文1633
 投げ合う 結3022
 投げうつ 結2957
 投げかける 結2903~4, 3030
 嘆き 結4158
 投げ込む 結2735, 2806, 4204
 文328
 投げ出す 結3031 文329, 1775
 投げつける 結1992, 3805
 投げ飛ばす 文330
 投げる 結3015~3021, 3802~4
 文1727, 1998
 和やか 結167
 名残り 結2228, 4207 文2353
 梨 結4269 文2141
 済し崩し 結4252
 馴染む 結914~5 文331
 成す D₁₆₋₁ 指146~50 結2301
 文1382, 2232~3
 …なす S₅₋₄ 指1192
 なすりつける 結4043

謎 結803, 2676
 なぞらえて 指32
 なぞらえる D₁₋₁₃ 指32
 なぞる 結3405
 宥めすかす 結2582
 宥める 結2581
 なだらか 結4308
 雪崩れ落ちる 文332
 雪崩れ込む 結102, 431 文333
 夏 結34, 486, 4515
 懐かしい 結863
 夏雲 結2265
 納豆 結526
 納得 結1844
 撫で下す 文1936, 1945
 撫でる 結2360~1, 3475, 4199
 文334
 など J₂₋₂ 指596
 などの比ではない 指655
 など・比でない 指655
 など・よう・思われる 指700
 何 結2400
 なにか F₆₋₁ 結2401, 2543
 なにか・思わせる 指254~5
 なにか・感じ 指563
 なにか・気持ち 指564
 何か・気持 指564
 なにかしら F₆₋₂
 なにかしら・よう 指446
 何かしら・ような 指446
 何か・でもあるような 指313
 何か・でもあるようだ 指314
 何か・でも・かのように 指315
 なにか・でも・そう 指324
 何か・でも・そうな 指324
 なにか・でも・よう 指313~8
 なにか・でも・よう・気がする 指331
 何か・でも・ような 指316
 何か・でも・ような気がした 指331
 なにか・でも・ように 指317
 何か・でも・ように 指318
 なにか・みたい 指445
 何かみたいに 指445
 なにか・よう 指441~4
 なにか・よう・思う 指492
 なにか・よう・気がする 指500
 なにか・よう・気持ち 指547

何か・ようだ 指441
 何か・ようで 指442
 何か・ような 指443
 何か・ような気がして 指500
 何か・ような気持 指547
 なにか・ようなもの 指544
 何か・ようなもの 指545
 何か・ような・もの 指546
 何か・ように 指444
 何か・ように思う 指492
 何か・ように見えた 指494
 何か・ようにも見えた 指495
 なにか・よう・見える 指494
 ~5
 なにか・よう・もの 指544~6
 何か・を思わせた 指254
 何か・を想わせる 指255
 何食わぬ 文1827
 なにも F₁₁₋₂
 なにもかも 結937
 なにも・でも・じゃなし 指326
 なにも・でも・ではない 指326
 なにやら F₈₋₃
 なにやら・思える 指253
 なにやら・かと思えた 指253
 なにやら・でも・よう 指319
 ~20
 なにやら・でも・ように 指319
 なにやら・でも・よな 指320
 なにやら・よう・思う 指493
 なにやら・よう・思われる 指496
 なにやら・よう・気 指548
 なにやら・よう・気がする 指501~2
 なにやら・よう・心持ち 指549~50
 何やら・ような気がして来る 指501
 なにやら・ような心持 指549
 なにやら・ように思われて 指496
 なにやら・ように見えます 指497
 なにやら・よう・見える 指497
 なにやら・よな気 指548
 何やら・よな心持 指550
 何やら・よに思いました 指493
 名乗る 結3921

ナフキン 結3816
 なぶらせる 結4216
 なぶる 結3987~9
 なま^{たま}生 結2917
 生意気 結4457
 生木 結929
 生臭い 結4634 文22, 78
 生臭坊主 文967
 生唾 結2701
 鉛 結5022
 …なみ S₁₋₁₄
 波・浪 結305, 676, 681, 813,
 1008, 1134, 2355, 2364, 2610~
 1, 3227, 3657, 4956, 5013, 5275
 ~82, 5400 文968, 1482~3,
 2338
 …なみ・…扱い 指1263
 …なみ・扱う 指1214
 浪風 結5274
 …なみ・考える 指1213
 並木 結4822
 涙 結1936, 1938, 2254, 2399,
 2612, 3080, 3970, 3974, 3996,
 4551, 4646, 4765 文1828
 涙金 文969
 波・浪立つ 結1135~9 文335
 …なみに 指1164
 …なみに扱う 指1214
 …なみに考えていた 指1213
 藪す 結3645
 滑らか 結4234, 4304
 懸・管める 結2366~7, 3490~
 2 文79, 336, 1424
 悩ます 結2219~21 文1505
 悩み 結2908, 4159
 悩む 結907
 なよやか 結4935
 なら F₁₆₋₁
 ならう D₁₇₋₁ 指151
 習う 結3354
 …なら…が…では J₈₋₂ 指607
 鳴らす 結2634~5, 2695
 なら・によくある 指263
 並ぶ 結741
 並べる 結2087, 3202 文1646,
 1714, 1865, 1906
 なら・よくある 指263
 …なり S₁₋₄ 指1153
 成り下がる 文1442

鳴り続ける 結1313
 鳴り響く 結1101~2
 鳴り渡る 結1097, 1314
 なる D₁₋₁ 指41~8 結1289文
 33, 1207, 1402~3, 1410, 1431
 ~2, 1439, 1464, 1478, 1485
 ~6, 1491, 1493, 1500, 1509,
 1517, 1522, 1535, 1546, 1981,
 2017, 2032, 2037, 2210~1,
 2223, 2283, 2296, 2402
 鳴る 結1094~5, 1312 文337
 なる・かねない 指178
 鳴神 文970
 縄 文2357, 2422
 縄尻 文1829
 何週間 結4874
 なんだか F₈₋₄
 なんだか・でも・よう 指321~2
 何だか・でも・ようで 指321
 何だか・でも・ような 指322
 なんだか・ほど 指290
 何だか・ほど 指290
 なんだか・みたい 指451~2
 なんだか・みたいだ 指451
 なんだか・みたいな 指452
 なんだか・よう 指447~50
 なんだか・よう・気がする 指503~9
 何だか・ようだ 指447
 何だか・ようで 指448
 何だか・ような 指449
 何だか・ような気がした 指503
 なんだか・ような気がして 指504
 何だか・ような気がしている 指505
 なんだか・ような気がします 指506
 何だか・ような気がする 指507
 何だか・ような気もした 指508
 何だか・ような気もします 指509
 何だか・ように 指450
 なんでも…と思えば間違い 指825
 ない 指1153
 なんでも…と…ばまちがない 指825
 い K₁₁₋₁₁

- 何日 結3057
何年間 結1616
なんの R₂₋₂
なんの・変わりが無い 指1135
- = —
- に J₁₋₁ 指600
荷 文 971, 1196, 2259
にあたる 指141
にあるような 指218
にあるように F₁₇₋₃ 指218
新床 文1830
煮えたぎる 結1171, 1749
煮える 文338
匂・臭い 結403, 692, 708, 942, 946, 1085, 1112, 1652, 1800, 1896, 2117, 2137~8, 2328, 3410, 3677, 3771, 3898, 3908, 4274, 4312, 4375, 4412, 4422, 4435, 4498, 4516, 4564, 4603, 5247 文972, 2115, 2132, 2138, 2152, 2189, 2257
匂・臭う 結1103~6, 3806
に同じ 指736
に・及ばず 指749
に・及ばない 結750
二階 結1491, 5158
苦い 結4545~52 文79
に化して 指52
に化していた 指53
苦しい 結4219
苦苦しさ 結3534
似通う D₁₂₋₃ 指132~4
似通う・見える 指153
にかよふものがある 指135
苦りきる 文339
に変わって 指54
に変わっている 指55
苦笑い 結480
に共通している 指139
握る 結3466~7 文1813, 1831
賑わす 結2606
肉 結115, 1047, 1063, 1530, 1770, 2151, 2397, 2454, 2827, 3959, 5029, 5194 文973, 1484, 1994, 2143~4, 2226, 2241
憎さ 結371
憎しみ 結1572, 2588, 3712
- 肉性 結2, 2895, 4350
肉声 結392
肉体 結143, 186, 193, 406, 922, 1318, 1393, 1634, 1754~5, 1878, 2163, 2198, 2497, 3298, 3390, 4449, 4821 文1831, 2142, 2415
肉体性 結4630
肉づけ 結2661
に比べて J₁₋₆
にくらべて・の方が 指650
に比べて・のほうが 指650
逃げ隠れる 文1457
逃げ出す 結535~7, 1271~3
逃げる 結471~2
二個 文2145
濁す 結3668
濁る 結1111
にし 指36
にしかすぎない 指822
にして 指37
西日・陽 結408, 1746, 2559
滲ませる 結3669
滲み 結2940
滲み込む 結1120
滲み出す 結539~40
滲み出る 結538
滲む 結1121, 1639, 1799~800 文1392
二重 文1485
二重写し 結5081
二生^{しょう} 文1304
蹴り寄る 結718
にすぎない K₁₁₋₁₀ 指822~4
>指823
に過ぎない 指824
に相当した 指142
に譬うべき 指24
に喩えた 指25
に・たとえた 指26
に譬えたい 指27
にたとえますと 指28
に譬えられている 指29
に譬えられる 指30
に譬える 指31
にたとえたと F₁₆₋₃ 指215
に譬えると 指215
似たり寄ったり K₁₋₆
に近い 指725
- に近く 指726
日常 結846, 1693, 3236, 3890, 4681
日常性 結3106, 3829
日夜 結3181
日曜日 文2348
に通ずる 指136
肉感 結1212
日光 結590, 1127, 2083, 3956, 4130
似ているような感じ 指192
にでもなって 指615
に時々あるように F₁₇₋₄ 指219
二度目 結5415
担う 結2908~9
になった 指45
になって 指46
にならって 指151
になり 指47
になりにかねない 指178
になる 指48
荷なわせる 結3775
に似 指120
に似かよい 指132
に似通ったもの 指133
に似かよっていた 指134
に似通って見えて 指153
に似た 指121
に似て 指122
に似ていた 指123
に・似ていた 指124
に似ていて 指125
に似ていないものでもない 指126
に似ている 指127
に似てきた 指128
に似て来やがった 指129
に似てくる 指130
二年間 結3285
二の足 文1832
二の舞い 文974
二倍 結3515
二番手 結5030
に比較すべきもの 指38
に比するほど 指158
にひとしい 指729
に等しい 指730
にひとしかった 指731
に等しかった 指732

ニヒリズム 結156, 1416
 鈍い 文2206
 鈍さ 結3891
 鈍る 文1253
 二歩 文538
 に髣髴していた 指100
 に髣髴として 指101
 にほかならない K₁₁₋₈ 指820
 に負けぬほど 指963
 にまでなぞらえて 指619
 に見えた 指66
 にみえてきた 指67
 に見えて来て 指68
 に見える 指69
 に見立て 指21
 に見るような 指217
 に見るように F₁₇₋₃ 指217
 にも当った 指633
 にもあたる 指634
 にも当る 指635
 にもおとる 指637
 にも譬えて 指617
 にも譬えてみたいような 指176
 にもなりかねない 指691
 にも似た 指629
 にも似たところがあって 指630
 にも似ていた 指631
 にも似ている 指632
 にもひけをとらないほど 指703
 にもひとしい 指678
 にも見える 指628
 にやり 結3553
 乳汁 結4197
 ニューズ 結4976
 女房 結5011
 女房可愛さ 結5001
 によくある 指143
 によく似た 指131
 女色 結4103
 睨み 結6
 腕む 文472
 似る D₁₂₋₁ 指119～131
 煮る 結4038 文340, 471
 に類した様な 指185
 に類して見えて 指154
 似る・くらい 指169
 似る・よう・思える 指189
 似る・よう・感じ 指192
 俄盲 文975

庭草 結1779
 鶏 文2010
 …に…を思った 指11
 …に…を見出す 指98
 …人 結5291
 人形 結250, 1852, 2693, 3839～
 40, 4212, 4769 文976, 1486,
 2146, 2339
 人形蒐集 結5496
 人間 結384, 440, 1643, 1829,
 2810, 2974, 4392, 4785, 4812,
 4879, 4988, 5088, 5181, 5295,
 5310 文1888, 2271, 2283, 2420
 人間関係 結169, 4888
 人間くさい 文87
 人間臭 結2035, 2666, 2941
 人間性 結1260, 3756
 人間的 結3290
 認識 結3249, 4311, 4799, 4801
 人情 結1414, 4902
 認ずる 結2493
 — 又 —
 縫い咬み 結5531
 縫い繋ぐ 結3156～7
 縫う 結3616～20, 4030～5
 抜き打ち 文977
 抜き差しならぬ 文1305
 脱ぎ去る 結2887～9
 脱ぎ捨てる 結2890 文342
 抜く 文1717, 1820
 脱ぐ 結3411, 3926 文2339
 拭い去る 結3632～7
 拭い取る 結3630～1
 拭う 結3629, 4068, 4096,
 文1691, 2015, 2030
 ぬくぬく 文23
 温い 文23
 温み 結2724
 ぬくもり 文1306
 脱け駆け 文978
 脱け殻 結5406～7 文979
 脱け出す 結1630 文343, 1218
 抜・脱け出る 結1270 文344
 抜・脱ける 結583, 1274～6
 文497, 1239, 1270, 2023, 2375
 主 文2063
 盗み 結3527
 盗み込む 結3571
 盗み出す 結3572

盗む 結3566～70 文1960, 1977
 …ぬばかり 指58
 沼 文980
 濡らす 結2639～40 文1684
 塗り薬 結5155
 塗り込める 結2616, 3648
 文1489
 塗りつぶす 結3649, 4042
 塗る 結2617, 3647
 濡れ衣 文1833
 濡れ雑巾 文2363
 濡れ風 文981
 濡れる 結1112, 1747

— ネ —

音 結5240
 根 結1943, 1945, 3710, 3718,
 4835, 5322～5 文982, 1487,
 1838, 2021
 値 結231
 寝息 結613
 値打ち 文2397, 2427
 姉さん 結2643
 ネオン 結129, 400, 1015
 願い 結79, 1685, 1787, 2976
 願い下げる 文345
 寝首 文1834
 猫 結1879, 4651, 5075 文2054,
 2148, 2237
 猫背 文983
 根こそぎ 結4245
 猫っかぶり 結5519
 猫柳 結5502
 寝覚 文1197
 振り伏せる 結1975, 2993～5
 捻じ曲げる 結2152, 3226, 4190
 鼠 文2149, 2237, 2390, 2402
 寝そべる 結294
 熱 文984, 1599, 1835～6
 熱気 結725, 1725
 熱情 結2130, 4349
 熱心 結4081
 熱する 文1241
 熱っぽい 結4570～1
 根間い・葉間い、 文985
 粘つく 結1110 文346
 粘っこい 結4563～4
 ねばねば 結1260
 粘りつく 結1109

根深い 結4329~30
 寝呆ける 結891
 寝巻き 結2325
 寝耳 文2055
 眠・睡気 結1527, 2338, 2471, 3973
 眠・睡り 結322, 1460, 1462, 1466, 2243, 2472, 2733, 3881, 3911, 3971
 眠・睡る 結880~2, 1643, 1950
 閨 文2150, 2396
 狙い 文1307, 1837
 狙い撃ち 文986
 狙う 結2273 文2019
 練り上げる 文347
 練り合わせる 結4041
 寝る 結1332, 1411 文348
 念 結615, 808, 1764, 1811
 粘液 文1265
 年月 結3063, 3929, 4633, 4759
 年功 結223, 1068
 懇ろ 文24
 燃焼 結121~2, 2882 文349
 粘土 結4789~90
 粘度 結4201
 粘膜 文2087
 年齢 結647, 1700, 1923, 1942, 2241, 3182, 4049, 4425, 4519, 5009
 年齢差 結5015

— / —

の J_{a-1} 指602
 野 文1488, 2301
 の印象 指1108
 脳 文2340
 濃淡 結315
 濃密 文56
 脳裡 結467, 1647
 能力 結1528
 逃れる 結1267~9, 1625 文480
 の代り 指1112
 の代りをつとめてくれる 指1113
 の感があった 指1095
 の感じ 指1097
 軒 結4755 文2392
 除け者 結2395
 除・退ける 結3034~6 文350

鋸山(地名) 結5383 文987
 残す 結2712~3, 2925~6 文2367
 残る 結212~3 文1541
 のさばる 結298~300
 のしかかる 結151~5, 1673
 乗せる 結3139, 3837 文1445
 覗く 結953~5, 3387~9 文351, 1879
 覗ける 結2274, 2765
 望み 結184
 のたとえ通り F_{1a-8} 指226
 の譬えどおり 指226
 乗っ取る 結4002
 のっぺらぼう 結4874
 咽喉 結4209 文1308, 1839, 2403
 咽喉元 結1645
 伸ばす 結2191 文1766
 野原 結4961
 伸・延びる 結816~7 文352, 1258, 1298, 2038
 延べる 文1973
 のほうが J₁₋₇
 のほうに近い 指727
 上って来る 結611
 上りかかる 文448
 昇・登り詰める 結615 文353
 昇・登る 結610, 1697 文1430
 昇^{のみ} 文1840
 呑・嚙み込む 結3497~500, 3950~2, 4179 文354
 飲・呑む 結3493~5, 3945~9, 4178 文1644, 1828, 2377
 のめり込む 結1413
 乗り移る 結318~9, 1682 文1462
 乗り換え 文1309
 乗り換える 文66
 乗り越える 結1823 文1725
 乗り込む 文498
 乗り出す 文355, 1866
 乗・載る 結638~40, 1469~72, 1698 文1426, 1453, 1483, 2288
 烽火^{のふし} 文1841

— 八 —

葉 結882, 962, 1223, 1937, 1986

2236, 2278, 3732, 5362 文2021
 歯 結3486, 4642 文1859~60, 2377
 ハート 文479, 2151
 羽織 結2226
 灰 結4054 文2032
 肺 文1843
 這い上がる 結607~9
 灰色 結4782~3 文56, 1489
 灰色っぽい 結4277
 廃屋 文2369
 ハイカラ 結4442
 排気ガス 結5307
 廃墟 結4888 文2152
 廃業 結2810
 背景 結4803
 背後 文1367
 灰皿 結5385
 排泄 文1265, 1566
 這い出す 結534 文356
 這い出る 文357
 売店 文2228
 「はいね」 結3443, 4684 文1842
 敗北 結1404, 3735
 敗北感 結1120, 3599, 4088
 這い回る 結455~7
 俳優 文2421
 偲い寄る 文1542
 入り込む 文358
 入る 結546~7, 1442~9, 4242 文503, 511, 1317, 1399, 1528, 1543, 2311, 2378
 這う 結432~8
 蝨 結606, 1853
 生え抜き 文988
 生える 結1581~3 文1316
 墓 結1283, 4415
 ばか 結1583 文2153
 破壊 結3758~9 文1594, 2095, 2395
 羽交い 結5396
 破壊作業 文1490
 剣がしっこ 結4717
 場敷 結3462
 はかなさ 結4662
 秤 結3366, 3375, 4778 文2408
 ばかり J₁₋₃ 指587~91> 指590
 ばかり・思い 指715
 測・秤る 結2264, 3365, 3374~

5. 4088 文2350

- 剥がれ落ちる 結795
 覇気 結3341
 吐きかける 結2774
 歯ざしり 文989
 吐き棄てる 結3510
 吐き出す 結2043～4, 3094～5, 3352, 4071～2 文359
 吐き散らす 結3511
 吐き付ける 文360
 剥ぎ取る 結3290～5
 はぎ目 文990
 歯切れ 結4285
 吐く 結3506～9 文361, 462, 1824～5, 2249, 2253
 掃く 結2613, 2795
 剥ぐ 結3287～8 文1869
 爆音 結2097
 白銀 結5397
 爆弾 文991
 白昼 文2341
 白鳥 文1491
 爆発 結104～10, 4284
 薄片 結4962
 薄明 結3786
 歯車 結5124
 化けの皮 文2267
 吐け・疏通口 結1374, 2508, 4950～2
 激しい 結4290
 化け物 結2305, 4676～7 文992
 はげる 文2267
 化ける 結247～8 文363, 1549, 2376
 箱入り 文993
 箱詰め 文994
 運び 文995
 運ぶ 結1064, 3609～16 文1575
 運んで行く 結3040
 挟まる 結1415 文364
 挟 結2029 文1844
 挟み込む 結3777
 挟む 結1910, 2913 文365, 1686, 1692
 破産 文996
 橋 結2721, 5205, 5433 文1311
 端 文2320
 箸 文1310
 恥 結4160, 5114
 弾き返す 結2803 文366
 弾き飛ばす 結3807
 弾く 結2007, 3707
 馬耳東風 文997
 始まる 文2219
 はしゃぐ 結1366, 4231
 場所 文63, 1845, 2011
 端折る 文367
 恥らい 結135
 走らす 文1996
 走り去る 結522～3
 走り過ぎる 結354～5
 走り出す 結356
 走り出る 文2348
 走り回る 文1847
 走る 結331～53, 1434, 1602, 1683, 1774
 バス 結2424, 2569, 3979 文498
 パス 文369
 恥ずかしがる 結911
 恥ずかしさ 結1573, 1819
 外す 結3319
 弾ませる 結3054～5
 弾み 結1057, 4207 文998, 1846, 2016
 弾む 結366～70, 1684 文1340, 1730
 はずれ 結4902
 外れる 結1265 文1307, 1526
 ハゼ 結2324
 パセリイ 結4035
 旗 結4697
 肌・膚 結3322, 3832, 5394～5
 …はだ S₁₋₁₂ 指1162
 …肌 指1162
 裸 結4822～3 文999, 1492～3
 旗頭 文1000
 …は…だが…も… J_{a-6} 指611
 はたき落とす 結2103
 はたく 結3207
 バタ臭い 文25
 畑 文1001
 肌寒い 結4590
 肌触り 結4407, 5037
 旗標 文1002
 二十歳 結2826
 …は…だと想像する 指112
 はためき 結642
 働かす 結3406
 働き 結2844
 蜂 結2225, 4817
 ハミリ 結4820
 破調 結1665
 罰 結3421, 4372
 発火 結1286
 発揮 結3752
 発議 文1003
 罰金 結3565
 発見 文1781
 初恋 結5111, 5319
 発光 結98～9, 1363
 発行 文1971
 醸酵 文370
 白骨 結5112 文1494
 発散 結3756
 発する 結1997 文534
 発展家 文1004
 バッハ 結46, 1145
 八方 文1847
 発露 結2
 果て 結4880
 波動 結4117
 鳩時計 結3828, 4126
 バトン 文2154
 花 結1190, 1489～90, 1584, 1941, 2044, 2266, 3968, 4051, 4120, 4418, 4748, 5267, 5329 文494, 504, 1005, 1312～3, 1851, 2006, 2120, 2203, 2217
 鼻 結265, 1023, 1296, 2138 文1495, 1849～50, 1852～3, 2155
 涙 文1848
 花形 結4689 文1006
 花咲かす 結3684
 話 結284, 424, 688, 789, 850, 1453, 1456, 1718, 2743, 2973, 3039, 3100, 3593, 3974～5, 4001 4234, 4332, 4522, 4735, 5338
 話しぶり 結2544
 鼻白む 結64 文371
 放す 文1947, 1961
 話す 結2299
 離す 結3198
 放つ 結1989～91, 3025～7
 鼻面 結4924
 鼻柱 結5485
 花火 文2100

花火 結3846, 4218
 花びら 結565, 1000
 離れ合う 結738
 離れる 結736~7, 1278, 1825
 文1530, 1814
 はにかみ 結3292
 はにかみ屋 結5452
 歯抜き 文1007
 翹ほね 結4859
 発条 結1383
 跳ね上がる 結604
 跳ね返す 文372
 跳・撥ね返る 結371~2, 1642
 跳ね散る 文373
 跳ね飛ばす 文1481
 撥ね除ける 結3050~1
 跳ね廻る 文374
 母 文2272
 母親 結4846
 羽はたく 結1034 文2262
 阻む 結2142~4
 破片 結5292 文2399
 蛤夫婦 結5465
 嵌まり込むはまり 結1681
 適役 結4690 文1008
 嵌まる 結312~3, 1416
 はみ出す 結531, 1631
 はみ出る 結815
 食む 文1770
 歯向かう 文375
 羽目 文1009, 1496
 羽目板 結5374
 嵌め込む 文1420
 破滅 結2918, 5297
 嵌める 文1394, 1411, 1554
 場面 結1804, 4104
 波紋 結3925, 4941
 早い 結4297
 早替わり 文2238
 林 結923
 早廻り 文1010
 早道 文1011
 流行唄はやううた 結5340
 …はよかった K₁₁₋₁ 指827
 原 結294
 腹 結289, 297, 1139, 1163, 1280,
 1297, 1305, 2793, 2988, 3798,
 4082, 5368~71 文73, 1012,
 1198, 1497~9, 1854~5, 2156,

2197, 2210, 2243, 2296, 2342
 薔薇 結63, 1246, 2230, 3763
 ほらい落とす 結2941 文2318
 払いっぶり 文1214
 払い除ける 結3047~9
 払う 文2001
 舞らす 結3673
 腹立ち 結54, 5520
 ばらばら 結4255
 ばら撒く 結3160~1
 孕む 結3699
 バランス 文1013
 針 結1915, 2711, 4478, 5189~90
 文1857
 張り 結2128, 2944, 4852~3
 …ばり S₁₋₁₃ 指1163
 …張り 指1163
 張り合う 結1650
 馬力 文1014
 バリケード 文1856
 貼り付く 結701~4 文376
 礙 結1289 文1500
 張り詰める 結233~6, 1769
 張り拡げる 結2194
 貼りめぐらす 文1776
 張・貼る 結231, 1942~5,
 2083, 3710 文1968
 春 結485, 1043, 2373
 春支度 結1636, 4294
 ハルトマン 結3003
 晴れ 文2157
 破裂 結44~5 文377
 バレット 文2380
 晴れ間 結5270
 腫れ物 結1392, 5424 文2343
 晴・曇れる 結1129~30
 破廉恥 結4450~1, 5285
 破廉恥漢 結4669
 破廉恥罪 文1501
 波浪 文1858
 範囲 結4883
 反映 結1668
 挽回 文2158
 反感 結870, 3581
 半眼 結3027
 反逆精神 結5033
 反響 文1502
 版権 結5093
 反抗 結1351

犯罪 結4287, 4689
 反射 結101, 2879, 4219 文378,
 1015
 反射的 結4223
 半畳 文1861
 繁昌 結97
 繁殖 結51
 反芻 結2839~41
 半生 結3810
 反省 結2219, 3564, 3863, 4006,
 4964
 反省作用 結2211
 反動 結2209, 5023
 班女 文2396
 番人 結5021
 反撥 結4184
 半分 F₃₋₈
 半分は・よくな 指412
 半分・よう 指409~12
 半分・よう・気持ち 指538
 半分・ようで 指409
 半分・よくな 指410
 半分・よくな気持 指538
 半分・ように 指411
 半面 文1862, 2400
 氾濫 結25

— ヒ —

日 結134, 273, 332, 476, 561,
 625, 703, 806, 1601, 1632,
 1639, 3243, 3676, 3679, 4043,
 5357 文2312
 火 結91, 900, 1508, 1931, 2075,
 2223, 2366, 2802, 3904, 3949,
 4610, 4616, 4931, 4935,
 5286~8, 5294, 5306 文1314
 ~5, 1877, 2355
 灯 結521, 1983, 3358, 4940,
 5197 文1016
 美 結180, 469, 482, 1071, 1101,
 1403, 1664~6, 1888, 2233,
 2489, 2515, 3303, 3708, 3857,
 3915, 3934, 3985, 4651, 4967,
 4974
 悲哀 結538, 2351, 2739, 3772,
 4362, 4521, 4530
 乾上がる 文379
 日脚 結5512
 ピアノ 結1324, 2095, 2772

- 冷え 結579
 冷える 文1242
 控える 結182, 2916
 比較される D_{12-7} 指140
 比較する D_{2-2} 指38
 日蔭 結1203 文1503, 2159
 日蔭者 文1017
 東 結3701
 僻み 結2950
 光らす 文1962
 光 結134, 186, 401, 481, 597, 634, 735, 994, 1126, 1254, 1521, 1632, 1698, 1833, 1990, 2106, 2320, 2488, 2496, 2572, 2609, 2620, 2631, 2639, 3282, 3359, 3803~4, 3836, 3875, 3930, 3953, 4080, 4270, 4272, 4347, 4414, 4421, 4428, 4453, 4555, 4617, 4623, 4640, 4953, 5206~10 文506, 534, 1863~4 2160, 2229~30, 2297, 2341, 2364, 2379, 2406, 2409
 光る 結1065~7, 1563 文76, 481, 532
 引かれ者 文2161
 引き上げる 結3748 文2284, 2359
 引き入れる 結2728
 引き受ける 結3524~5
 引き返す 結530
 悲喜劇 文1018
 引き込む 結2732~3 文380~1, 393, 1451
 引き退る 結477 文382, 538
 引き裂く 結2173, 3275~6, 3884~6 文383~4
 引き絞る 結2961
 引き締・緊める 結2715, 2959, 3789 文1778
 引きずり下ろす 文1362
 引きずり込む 結2046, 2734, 3717 文65
 引き摺り出す 結3060 文501
 引きずる 結2011, 3059 文385
 引き出す 結3090~1, 3823 文1383
 引き立てる 結2494, 2779, 3530
 引きちぎる 結2172 文386
 引き止める 結1965
 引き取る 結3592~3
 引き抜く 結3116
 引き剥がす 結3289
 引き離す 文1926
 引き廻す 結2012, 2014, 3810 文387
 引き戻す 結2757, 3086, 3714, 3822 文388
 引・惹き寄せる 結2128 文389
 引・弾・曳・惹・牽く 結2127, 2129~35, 2772, 3218~20, 3864~9 文1425, 1600, 1610, 1622, 1774, 1784, 1801, 1815, 1878, 1950, 2027
 ていごう
 魚籠 結464
 低い 結4313 文88
 ひくつかせる 文1852
 ひげ 結1583, 3575 文1316
 悲劇 結2699, 2702, 2910 文1019, 2162
 ひげちゃん 文2153
 引ける 結251
 ひけをとらない K_{7-1}
 微光 結635
 鼻腔 結2137
 飛行機 結3614
 被告 文2298
 膝 結2304, 4268, 4282, 5046, 5386 文1865~6
 庇・廂 文1020, 2026, 2174
 日射し 結889, 1128, 2535, 2555
 膝下 文1021
 ひしめく 結240~2, 1770
 飛車 文1022
 ひしやげる 結773
 比重 文1023
 避暑 結83
 卑小 結3204
 飛翔 結1629, 1759
 微笑 結342, 654, 1141, 1365, 1401, 1740, 1776~7, 1783~4, 1914, 2139, 2151, 2704, 2873, 2892, 3118, 3145, 3305, 3590, 3839, 3901, 3975, 4108, 4111, 4166, 4212, 4257, 4433, 4554, 4575, 5211 文2430
 飛翔感 結3748
 ヒステリイ 結45, 1508
 比する D_{2-1}
 比する・ほど 指158
 潜ます 結3834
 潜む 結190~2, 1406, 1676~7, 1762
 潜める 結2232 文2412
 襲 結566, 4944~5
 …びた 指1183
 額 文1867
 媚態 結3716
 浸・涵す 結1987~8, 2725, 3014, 3800~1, 4146 文390
 浸らせる 結3723
 浸り込む 結1423
 浸・涵る 結1418~22, 1424~6
 悲嘆 結1614, 2160
 引っ掛かる 結309~11 文391, 1393, 1557
 引っ掛ける 結3005 文392, 1848
 ひっくり返る 文1267, 1323
 日附 結2404
 引っ込める 結3100~1
 羊 文484
 ひっそり 結1630
 びったり 文2384
 引っ捕らえる 文394
 引っ張って行く 結3725
 引っ張り廻す 文396
 引っ張る 結2136 文395, 397
 必要 結732
 必要悪 結4909
 否定 結3762
 否定的 結4096
 美的 結3911
 比でない K_{8-1}
 人 結385, 4059, 4090, 4415, 4666, 4746, 5007, 5263, 5277 文55, 1874, 2124, 2266, 2369
 一足 文1024
 一足違い 文1025
 人当たり 文1026
 一泡 文1868
 一文 文539
 一押し 文1027
 人垣 結3618, 5483
 人影 結3847
 一かけら 結5044, 5053, 5247
 人柄 結4856
 一皮 文1869~70
 一切れ 結5061

一桁 文2036
 人声 結4180
 一言 結2596, 2673, 3818, 3873,
 4142
 人混み 結4192
 人殺し 文2030
 等しい K_{1-2} 指728～32
 一平 結5045
 一筋縄 文1381
 一つ K_{2-4} 指741 結5042
 …ひとつ S_{11-1} 指1212
 一つの R_{4-3} 指1125
 人通り 結378
 人なつこい 結4474
 人波 結3809, 5494
 一握り 結5059
 人の目 結3985
 人人 結386, 678, 3352, 3503,
 4071
 人待ち気 結4419
 一回り 結284
 瞳・眸 結61, 183, 246, 627,
 848, 918, 933, 1730, 1801～2,
 2181, 2753, 3026, 3070, 3343,
 3406, 3814～6, 3930, 3955,
 4145, 4170 4757, 文2148
 人目 文1977
 一役 文1871
 一人 結1312 文546, 1873
 一人歩き 結87
 一人暮らし 結4387
 一人相撲 結5089 文1028, 1872
 一人舞台 文1029
 日向 結3763 文2016
 非難 結1671, 2660, 2901, 3017,
 4135
 避難民 結102, 387
 皮肉 結1916, 4266, 5078, 5235
 ひね餓鬼 文1030
 捻る 文523
 火の車 文2163
 火の気 結4420
 火の粉 結1001, 2795
 陽の目 文2345
 火花 結1486～7, 5504
 日日 結2114, 3173
 罅・罅 結1444～7, 2729, 3715
 文1317, 1875
 響かせる 結2636～7 文1705

響き 結1912, 2120, 2879, 3702
 ～4, 4374, 4612, 5241～3
 文1031
 響く D_{5-16} 指70 結141～3,
 1098～100, 1670～1, 1761
 文398, 470, 2401
 饅裂れる 文399
 皮膚 結116, 131, 174, 1805,
 2398, 3830, 3924, 4024, 4299,
 4477, 5200, 5311, 5392～3
 文43, 2405
 皮膚病やみ 結4832
 悲憤 結5230
 美貌 結921
 秘密 結187, 1674, 2207, 3373,
 3387, 3399, 3442, 3466, 3566,
 3571～2, 3577, 4073
 微妙 結4984
 悲鳴 結2053～4, 2368, 2670,
 5436 文1318
 紐 結1184, 2797, 5132～3
 文1318
 ひやかし顔 結4868
 百 文1876
 飛躍 結24, 1628
 百なり爺さん 文1032
 冷ややか 結4586～8
 比・譬喩 M_{7-1} 指1116 結5145
 病院 結3949, 5032
 水解 文400
 氷塊 結4330, 5262
 病気 結22, 2594, 3441, 3999
 文1033
 病苦 結2221
 表現 結1854 文2380
 氷山 文1034
 拍子 文508
 拍子抜け 文1035
 表情 結133, 652, 770, 906,
 1115, 1519, 1644, 1766, 2244,
 2271, 3135, 3140, 3191, 3361,
 3639, 3842, 3870, 3888, 3900,
 4172, 4256, 4331, 4802, 5046,
 5435 文2244
 病状 結4023 文1036
 病人 結171
 源白 結2881
 豹変 文1037, 2274
 表面 結4907 文1038, 2352

ビラ 結995
 開き 文1039
 開く 結682, 1489～90 文69,
 1261, 1693, 1793, 1916, 1978,
 1992
 開ける 結972～3, 1488 文1334
 閃き 結752
 閃く 結1073～5, 1565, 1739～
 43, 4246 文2229
 干りつく 結1241
 びりびり 結1252～3
 昼 結3845, 4128
 蛭 結534, 2224, 2661, 4725～6,
 5031, 5347 文1040, 1320～1,
 1504～5, 1981, 2164～8
 …びる S_{5-2} 指1183
 翻す 結2996 文1927
 翻る 結305 文1324
 拾い読み 結5529
 拾う 文1648
 疲労 結491, 710, 866, 1687,
 2709, 4318, 4492, 5220, 5223
 広・拡がる 結822～31, 1525,
 1729 文1987
 広げる 結2193, 3313, 3901～
 2, 4084～5 文511, 1616, 1769
 広介(人名) 結1782
 品格 結5349
 貧困 結4276
 罨蹙 結765, 3583
 敏捷 結4444
 ビンと 文542
 貧乏 結2652, 4290, 4607
 貧乏籤 文1041, 1878
 貧乏播すり 文1042

— フ —

負 文2346
 腑 結623 文1511～2
 無愛想 結2567, 4481
 分厚 結4349
 不安 結222, 304, 601, 828,
 1252, 1337, 1701, 1973, 2004,
 2216, 2357, 2524, 2636, 2794,
 3754, 3781, 3787, 3972, 4019,
 4089, 4326, 4363, 4566, 5264,
 5323
 不安定 結266, 4070
 不意打・討ち 結1863 文1043

フィルム 結5199 文1322
 ふう M₂₋₆
 …ふう S₁₋₁₀ 指1159
 …風 指1159
 風景 結42, 563, 803, 1686,
 2395, 3069, 3240, 3278, 4033,
 4559 文1199
 封じ込める 結4156
 風習 結137
 封じる 結2072
 封ずる 文1694
 …風・にままある 指1215
 風波 結1408
 風馬牛 文1044
 夫婦 結2756 文1045
 風物 結1964 文2400
 風聞 結1953
 風手^{ぼう} 結3843
 …ふう・ままある 指1215
 飄諭した 指33
 飄諭する D₁₋₁₁ 指33
 フェアリー 文1046
 フェアリー・ランド 文1047,
 2169
 深い 結4314～23 文57, 528,
 1183, 2209
 不快 結722, 3740, 5224
 深入り 文1363, 1400
 孵化作用 文1048
 吹かす 文1868
 不可能 結1520, 5167
 深まる 結833～4
 深み 文1506, 1879
 俯瞰 結2835
 不感性 結4605～6, 5389
 不完全燃焼 結60 文1049
 武器 結4766 文492, 1050, 1880
 噴き上げる 結1696
 吹き入れる 結4056～7
 吹き下ろす 結2644
 吹き返す 結2645 文401
 吹きかける 結2902
 吹き消す 結2940, 3788
 吹き込む 結3107～8
 吹き過ぎる 文2426
 吹き散らす 結4058
 不吉 結607
 吹き飛ばす 結3046
 吹き飛ば 結361～5

吹きなぶる 結2586
 吹き抜ける 結1618
 吹きまくる 結1316, 3674
 吹き回し 文2084
 吹き回す 結2643
 吹く 結1040～1, 1569 文1217
 不具 結4775
 副業 結2421～2
 副作用 文1051
 復讐 結96, 1360～2, 5018
 文2170
 復讐心 結1050, 1655
 不俱戴天 文1052
 腹痛 結717
 含み笑い 結3143
 含む 結167, 1913～9, 2892
 文1857
 覆面 結1269, 1284, 4718 文2171
 脹らます 結2195, 3904 文1843
 脹らみ 結169
 脹らむ 結842
 膨れ上がる 結837～40
 膨れる 結835～6, 841, 906
 袋 文505, 2299
 不潔感 結3447
 不幸 結1745, 2448, 3601, 3742,
 4271, 5298
 不合理 結4137
 不在 結1040
 塞がる 文1252, 1341, 2369
 塞ぐ 結2145, 3909 文1695,
 1794, 1946
 ふざける 結1009
 ふさわしい K₇₋₁
 節 結2557
 不倅・仕合せ 結1426, 4269
 不思議 結1708, 2098
 富士山 結1922, 5353
 不自然 結3965
 藤蔓 結68, 75, 1880, 3545,
 4324, 4426, 4456
 節節 結4206
 節廻し 結623
 腐臭 結1989
 不自由 結5027
 腐蝕 結1887
 不信 結5234
 夫人 文1882
 伏す 結1722

風情 M₂₋₅
 防ぐ 結2658
 伏せる 結2992
 武装 文1053
 武装解除 文1054
 附属人物 結5451
 蓋 文1335, 2234, 2294
 札 文2265, 2337
 舞台 結3313, 5172 文1055,
 1323, 1507, 2157, 2240, 2300
 附帯条件 結4641～2
 舞台装置 文1056
 二つ 結2722 文1508, 1987,
 2044, 2362
 二つ重ね 文2096
 二役 文1873
 二人 結3950 文1509
 淵 結2196, 3952, 5297～9
 文1057, 1510
 ぶち込む 結2803
 繰取り 結1885
 繰取る 結1906, 3706
 ぶちまける 結3162 文527
 符牒 結2062 文1058
 ふっかける 文402
 ぶっかける 文1911
 ぶつかり合う 結745
 ぶつかる 結742～4, 1515～7
 文403, 524, 1416
 復旧作業 文2131
 吹っ切れる 結739
 ぶつけ合う 文1419
 ぶつける 文1867
 復権 結5091～2
 物質 結4785 文58
 仏頂面 文1059
 ぶっつける 結3208～9
 沸騰 結112～6
 仏面鬼魂 文1060
 不貞腐れ 結4706
 筆使^しい 文1061
 太^{よほど}太しい 結4448
 太い 結1437, 4343
 懐中 結3457, 4589
 太っ腹 文1062
 太股 結876, 2396
 太り出す 結1647
 太る 結832
 蒲団 結3347

船荷 結464
 不人情 結4442
 舟・船 結2054～5, 2355, 2390
 不発 文1513
 不発弾 文2418
 吹雪 結927, 3342
 部分 文2178
 不平 結2049, 3201
 侮蔑 結4441, 5232
 不満 結2380, 3060, 3162, 4711
 踏み入れ場 文2205
 踏み入れる 結2731
 踏み固める 結3665
 踏み切る 結1428 文404
 踏み砕く 文2330
 踏み越える 結1824 文1601
 踏みこたえる 文1576
 踏み込む 結1454～5
 踏み締める 文1823
 踏み出し 結4862
 踏みにじる 結3247～9
 踏み外す 文1577
 不眠 結687, 4833
 踏む 結3462 文461, 466, 1578, 1789, 1795, 1802, 1832
 不毛 文2301
 冬 結38, 3967
 冬の気 結4640
 ぶよぶよ 文519
 ぶら下がる 文85
 ぶら下げる 結3002
 降らす 結4054～5
 ブラットフォーム 結475, 3847, 4460, 4470
 ブランコ毛虫 結1346, 5492
 ぶり 結1950
 振り上げる 文492
 振り返る 結3318
 ぶりかかると 結150 文2368
 振り翳す 結2905～7
 振り切る 結3200 文405
 振り捨てる 文1627
 降り注ぐ 結1126～8, 1632
 振り出し 文1514
 振りほどく 文1679
 振り撒く 結3159, 3849 文1674
 振り回す 結2979～80, 3797
 振り戻す 結3080
 俘虜 文1063

振る 結4235 文77, 1699, 1720, 2247
 降る 結1125 文1366
 古い 結4298
 篩 結3367 文1064, 1515～6, 1884, 2302, 2347
 篩い落とす 文406
 古井戸 結4702 文1065
 篩い分ける 結3363
 揮・振う 結2233, 2978
 慄う 結1962
 震える 結273～7, 1291 文1342, 2230
 古疵 文2172
 ふるまう 結1042
 震わせる 結3795
 触れ合う 結693
 プレーキ 文1885
 プレス機 結2053
 触れる 結272, 1293～4, 1500～6, 1714～5, 2081 文407, 1377, 1544, 1547, 1816, 2032, 2414
 付録 結5151
 プロオグ 結1135 文1066
 ふわり 結4617
 雰囲気 結1567, 2111, 4500
 文学 結1319～20, 2812, 2822, 3460, 3465
 文学上 結5359
 粉碎 結2822
 紛失 結2811
 文章 結5417
 分身 文1067
 籠^{かご} 文1324
 憤怒 結107, 570
 忿懣 結3045
 文明 結1506, 2106
 分量 結4968
 分類法 結4113
 分裂 結36



平気 文2173
 平衡 結4850
 平行線 文1071, 1886～7
 閉口もの 文1072
 平左 文2173
 兵士 結4046
 兵隊 結5022 文1073, 1325, 2077
 平和 結215, 497, 596, 2957, 3258, 3880, 3980
 ページ 結4980, 4982 文64
 ベール 結1983 →ヴェール
 壁面 文2367
 ペコペコ 結1586
 へし折る 結760 文1853
 隔たり 文2122
 隔て 文1074
 隔てる 結2657
 へたな R₁₋₁
 へたな・より 指1130
 下手な・より 指1130
 へたばる 文472
 別 結4278 文1888, 2303
 別詠え 結4724
 別人 文1517
 別人種 文1075
 ヘッドライト 文1076
 屁っぶり腰 文1077
 へど 文1326
 べとべと 文520
 へばりつく 文408
 蛇苔 結5503
 部屋 結1216, 2541, 2590, 2990, 3834, 4040, 4475, 4481, 4805
 減らす 結3300
 卑下る 結936
 屁理屈 結3014, 5063
 経る 結846
 弁 結1248 文2428
 ベン 結2314
 変化 文2408
 勉強 結1277
 偏見 結162, 1654, 4202～3
 変更 文2349
 ベン字 結2433
 変色 結10 文1078
 変身 文2407
 弁舌 結2978
 弁当 文1889
 変貌 結11

片鱗 結4963 文1079

— 木 —

錠 結4912
 …ほい S₆₋₁ 指1193~4
 ポイント 文2158
 法 結1503 文1080
 方 結1291, 3220
 棒 結5125 文2048
 包囲 文2135
 防疫班 文1081
 鳳凰 結281, 1019, 1968
 放火 結3728, 4279
 崩壊 結46~7
 方角 文66
 放火魔 結5460
 忘却 結3745, 4892
 防禦陣 文1082
 暴君 文1083
 方言 結3646
 放言 結452
 冒険 結1449
 望見 文409
 封建的 結4274
 方向 結4889 文1890, 2310, 2313, 2346
 彷徨 結1350 文2309
 咆哮 結71~2
 暴行 結86, 249, 3790
 奉公人 文2078
 報告 結3922
 帽子 結5147 文502, 2064, 2174
 放射 文482
 傍若無人 結4471
 放心 結4947
 包装紙 文2349
 綳帶 結3176, 4680, 5020
 庖丁 結2183
 膨脹 結53~4
 法廷 文2238
 方程式 結3568
 放蕩 結3340
 放任 結2662
 茫漠性 結2601
 暴発 結103
 防備 結4007
 抱負 結3451
 豊富 結545
 髣髴させる D₇₋ 指96

髣髴(と)する D₉₋ 指100~1
 防壁 文1891
 方法 結2801, 3567
 茫茫 文2382
 葬り去る 文410
 葬る 結3423~4, 3931
 抱擁 結1859, 3763
 ほうり込む 結3104 文411
 ほうり出す 結3825
 法律 結4091, 4625
 抛り投げる 結3023~4
 暴力団狩り 結5533
 亡霊 結4674, 5001~2
 吼え猛る 結926
 吠える 結924~5
 頰 結626, 1161, 1487, 1490, 1683, 2151, 3323, 4107, 4162, 4164, 4166, 4188, 4484 文1892
 頰冠り 結82 文2015
 頰杖 文1089
 ホームドラマ 結2289
 捕獲 結2867
 灯影 結355, 767, 851, 1017
 ぼかす 結3656
 僕 結78, 542, 566, 924, 1232, 1629, 1816, 1820, 2432, 4065, 4674, 4791, 4915, 5019, 5404 文546, 1327, 2304
 牧場 文1084
 ほぐす 結3154, 3844
 牧草 結2060
 墓穴 文2398
 歩行 結1391
 鋒先 文1893
 誇・矜り 結2037, 2951
 埃 結605, 1003
 綻びせる 結3260
 綻び 文505, 2416
 綻ぶ 結784
 穂先 結2764 文1085
 星 結446, 3161, 3793 文510, 1894, 2268
 ほじくる 結3284
 乾し殺す 文412
 母子情 結1860
 星空 結3726, 3872
 干し場 結3955
 保証 結2239
 干す 文1721

母性 結65, 2943, 3744, 3966, 4898
 躰 結5372 文1895~6
 細長い 結4310
 ほだされる 結4636
 歩調 結2700 文1897
 ぼっかり 結4615 文533
 発作 結5299
 坊ちゃん 文643
 ほっと 文2385
 火照る 結1577
 ホテル中 結274
 ほど J₁₋₁ 指582
 ほど・思い 指714
 ほど・感じ 指712
 ほど・感じられた 指613
 ほど・感じられる 指613
 ほど・気持ち 指713
 仏心 文1086
 仏椽 結4673
 ほどの思い 指714
 ほどの感じ 指712
 ほどの気持ち 指713
 ほどぼろ 結439, 1778, 1818, 4223~4
 ほどぼり 結2361
 ほとんど F₃₋ 指202
 ほとんど・思わせる 指248
 ほとんど・変わりが無い 指403
 ほとんど・くらい 指287
 ほとんど・異なるない 指404
 ほとんど・近い 指401
 ほとんど・近い・よう・もの 指517
 ほとんど・と言っていい 指417
 ほとんど・と云ってよかった 指417
 ほとんど・とも言うべき 指293
 ほとんど・に異ならなかった 指404
 ほとんど・に近い 指401
 ほとんど・に近いようなもの 指517
 ほとんど・に似た 指249
 ほとんど・に似ていて 指250
 ほとんど・に等しいくらい 指512
 ほとんど・似る 指249~50
 ほとんど・等しい・くらい

ほとんど・みたい 指408
 ほとんど・みたいな 指408
 ほとんど・も・言う 指293
 ほとんど・よう 指405～7
 ほとんど・よう・気がする 指487
 ほとんど・ような 指405
 ほとんど・ような気がした 指487
 ほとんど・ように 指406
 殆ど・ように 指407
 ほとんど・を思わせた 指248
 骨 結322, 1887 文1328, 1518, 1899
 骨折る 文413
 骨組み 結4848
 骨接ぎ 文1087
 骨抜き 文1088
 骨の髄 結4094
 骨張る 結232
 骨身 文1519, 1898, 2254
 焔・炎 結292, 2027, 2152, 2173, 2252, 2286, 2367, 4034, 5289～90 文34, 68, 486, 1900, 2175
 仄暗い 結4501
 ぼほ F₃₋₄
 頬・微笑み 結492, 3591, 4139
 洞穴 結2069 文1090
 彫り 結4323
 凧 文1901
 掘り荒す 文1708
 掘り起こす 文414
 掘り返す 結3285, 3890
 堀川夜討ち 文2176
 彫り込む 結3282 文415
 掘り出す 結3093
 捕虜収容所 文2177
 掘る 文1250, 2021, 2398
 ぼろ 文1902～3
 減びる 結220
 減ぼす 結3784
 本 結3954, 4722
 ボンコ(猫の名) 結1359
 本質 結3627
 本心 結317, 3034, 3692, 4148
 本体 文1091, 1329
 ほんとうに F₄₋₄ 指207

ほんとうに・疑われる 指251
 本当に・かと疑われた 指251
 ほんとうに・そっくりだ 指420
 本当に・そっくりだ 指420
 ほんとうに・でも・ように見え
 る 指330
 ほんとうに・でも・よう・見え
 る 指330
 ほんとうに・よう 指427
 ほんとうに・ように 指427
 ほんとの 指207
 ほんとの R₃₋₂ 指1122
 ほんなこと F₄₋₅
 ほんなこと・よう 指428
 ほんなこと・ようだ 指428
 ほんの R₃₋₂
 本能 結902, 1634, 3105, 4443, 5003, 5393
 ほんの・くらい・気持ち 指1133
 ほんの・ほど 指1131
 ほんの・よう 指1137
 ほんの・ように 指1137
 本番 文1092, 2022
 本舞台 文1520
 ボンボン 結1691
 翻訳 結2705, 4128～32
 ぼんやり 結3752
 奔流 結123 文1993
 翻弄 結1881～2

— マ —

間 文2371
 魔 文1330
 まあ F₃₋₆
 まあ・…という・形 指579
 まあ・…という形 指579
 まあ・…同然 指573
 まあまあ 結2511
 まあ・ようなもの 指537
 まあ・よう・もの 指537
 舞い上がる 結605～6
 舞い落ちる 結999
 舞い下りる 結1000
 舞い狂う 結1001
 迷い子 結5019
 舞い込む 結564～5, 1692 文62
 埋葬 文468, 490, 2245
 埋葬状態 文1093

舞い立つ 結1002～3
 舞い疲れる 結1004
 舞鶴湾 結4695, 4707
 マイナス 文2178
 埋没 文416
 舞う 結995～8 文417
 前 結4909 文85, 1521, 2276, 2356
 前歯 結3484
 前物語 結1388
 まがい 指1177
 …紛い S₁₋₂ 指1177
 真顔 結5211
 委・任せる 結2515, 2783～8 文2368
 曲がる 結762 文418, 1260
 捲き上がる 文419
 捲き上げる 結2057, 3565
 巻き起こす 結3781
 巻き込む 結3110
 巻き締める 結2156
 撒・蒔き散らす 結3163～4, 3850～2 文2319
 巻き付ける 結3190
 巻き蔓 結4828
 紛れ込む 結567
 巻・捲く 結2154～5, 2749 文67, 86, 1435, 1731, 1734, 2041
 撒・蒔く 文483, 1682
 膜 結2166, 5388～9 文2413
 幕 結1414, 5177～8 文1094, 1331, 1907, 2223, 2416
 幕間 結4871 文1905
 幕切れ 文1095, 1904
 捲くし立てる 結2295
 枕 結5390 文1906
 負けない K₇₋₂
 負けない・ほど 指963
 負ける 結1559～60, 4245
 曲げる 結3222～3
 紛う D₁₋₇
 紛う・ほど 指157
 まごつかせる 結3906
 まごつく 結897
 誠 結2915
 まさか F₁₁₋₁
 まさか・ではあるまい 指455
 まさぐる 結2255
 まさに F₄₋₁ 指203

まさに・概 指560
 まさに・よう 指421～2
 まさに・ような 指421
 まさに・ようなもの 指540
 まさに・ように 指422
 まさに・よう・もの 指540
 交える 結2914
 まじない封じ 文1096
 真面目さ 結2430
 魔性しやう 文2422
 真正面 文1178
 混りっけなし 結4279
 交・混じる 結851, 1331, 1373
 文1303
 柀 結3099 文1097
 増す 結2185～9 文2235
 ます F₃₋₅
 貧しい 結4483～4
 貧しさ 結2888
 まず・似たり寄ったり 指402
 交ざる 結4135
 股 結2722
 跨がる 文2278
 跨ぐ 文1729
 瞬き盛り 結5443
 瞬く 結1016～7
 斑 結3848 文2233
 町・街 結120, 522, 1024, 1657,
 1920, 2377, 2564, 3157 文2179
 待ち受ける 結2439
 間違ひ 文498
 間違える 文1748
 待ち構える 結2237
 街並 結2087
 待ち伏せる 結2238
 待つ 結2234～6, 2434～8,
 2687, 3353 文1982
 松 結1722
 マツカレハ 文1098
 末期的 結4454
 真っ黒 文1522
 陡(毛) 結5309 文1908
 マツケムシ 結905, 4438
 松子(人名) 結4631, 5406
 抹香くさい 結4522
 まっしぐら 結4254 文529
 真っ直ぐ 結4307
 まったく F₄₋₂ 指204～5 指204
 全く 指20

まったく・印象 指562
 まったく・瓜二つ 指419
 まったく・同じ 指418
 まったく・同じ・こと 指539
 まったく・気持ち 指561
 全く・気持ち 指561
 まったく・って 指289
 まったく・というものは 指289
 まったく・と同じこと 指539
 全くまるで・ように見えるでは
 ないか 指278
 まったく・まるで・よう・見
 える 指278
 まったく・よう 指423～6
 まったく・よう・気がする
 指488
 まったく・ようであった 指423
 全く・ような 指424
 まったく・ような気がする
 指488
 まったく・ように 指425
 全く・ように 指426
 末端 結4913
 真っ裸 結4824 文1099
 祭り 文2059
 まつわり付く 結710
 まつわる 結161～2
 まで J₃₋₆
 まで・思う 指618
 まで・そう 指692
 まで・そうに 指692
 まで・なぞらえる 指619
 的 結5195 文1909
 窓・窗 結346, 1380, 2007,
 2743, 4198, 4756～7, 5170～1
 文2113
 纏い付く 結158～60
 纏める 結3158
 まどろみ 結3786
 まどろむ 結883～5
 目・眼差し 結184, 1075, 1516,
 3018, 3806, 3973, 4277, 4385,
 4574, 4580
 間抜け 結3518
 まね M₁₋₅
 招き入れる 文420
 招く 結3964～5
 真似る 文2236
 瞬はげく 結134

麻痺 結140, 503文1421, 1751
 眩しい 結4400文26
 眩しがる 結2229
 まぶす 文1372
 険 結2270, 3114, 3996, 4379,
 5362
 幻 結2510, 3402, 5218
 ままある D₁₃₋₆
 まみれる 結164～6, 1372
 文2030
 真向かい 結4649, 4842
 襲襲指 結5513
 磨滅 結48～9 文421
 守・護る 結2489～90, 3527,
 3979 文2332
 眉 結245, 1122, 2232 文2255
 迷い 結5333
 迷い出る 結946
 迷う 結941 文484, 1465, 1553,
 2029
 魔力 結1676, 2457
 丸・円い 結1108, 4300～2
 文1212
 丸腰 文1100
 丸太 文1998
 丸出し 文1634
 まるで F₁₋₁ 指194
 まるで・…扱ひ 指569
 まるで・受け取る 指232
 まるで・受け取る・くらい
 指265
 まるで・同じ 指339
 まるで・同じ・…よう 指514
 まるで・思われる・ほど 指266
 まるで・形 指553
 まるで・かと思われるほど
 指266
 まるで・かなにか・よう 指302
 まるで・か何か・ように 指302
 まるで・かのようにであった
 指345
 まるで・かのように 指346
 まるで・感じ 指556
 まるで・…級 指568
 まるで・ぐあい 指552
 まるで・工合 指552
 まるで・くらい 指281
 まるで・異ならない 指342
 まるで・…さながら 指570

まるで・する・でも…とい
 う・よう 指268
 まるで・そっくりだ 指340～1
 まるで・つもり 指557
 まるで・でも 指286
 まるで・でも・かのような
 指294
 まるで・でも・かのように
 指295
 まるで・でも・かのように見
 えた 指329
 まるで・でも・つもり 指335
 まるで・でも…という・よ
 う 指338
 まるで・でも・みたい 指301
 まるで・でも・みたいに 指301
 まるで・でも・よう 指294～
 300 >指296
 まるで・でも・よう・思う
 指327
 まるで・でも・ようじゃない
 か 指297
 まるで・でも・ようだった
 指298
 まるで・でも・ような 指299
 まるで・でも・ような様子
 指332
 まるで・でも・ように 指300
 まるで・でも・ようにおもう
 指327
 まるで・でも・よう・見える
 指329
 まるで・でも・よう・ようす
 指332
 まるで・と同じ 指339
 まるで・と同じような 指514
 まるで・としか受け取れないく
 らい 指265
 まるで・としか受け取れなかつ
 た 指232
 まるで・としか見えなかった
 指233
 まるで・とそっくり 指340
 まるで・とでもいうように
 指338
 まるで・とはよくも名付けた
 ・思う・ほど 指510
 まるで・とはよくも名付けた
 と思えるほど 指510

まるで・なにか・よう 指275
 まるで何か・ようだった 指275
 まるで・に異ならなかった
 指342
 まるで・にして・とでもい
 うように 指268
 まるで・にすぎない 指388
 まるで・にそっくり 指341
 まるで・に似ている 指237
 まるで・に見え 指234
 まるで・似る 指237
 まるで・の感じ 指556
 まるで・ばかり 指282
 まるで・ほど 指280
 まるで・まるで・でもあるかの
 ように 指273
 まるで・まるで・でも・よう
 指273
 まるで・見える 指233～4
 まるで・みたい 指360～5
 >指360
 まるで・みたいじゃねえか
 指361
 まるで・みたいだ 指362
 まるで・みたいですよ 指363
 まるで・みたいなの 指364
 まるで・みたいに 指365
 まるで・みたいに見えた 指473
 まるで・みたい・見える 指473
 まるで・見る・よう 指269
 まるで・も・同じ 指309
 まるで・も同じ 指309
 まるで・も・同様 指311
 まるで・も同様に 指311
 まるで・よう 指345～59
 まるで・よう・一種の・感
 指551
 まるで・よう・思い 指530
 まるで・よう・思う 指461
 まるで・よう・思われる 指467
 まるで・よう・考えられる
 指468
 まるで・よう・感じ 指525～6
 まるで・よう・感触 指527
 まるで・よう・感じられる
 指465～6
 まるで・よう・気がする
 指480～3
 まるで・よう・気持ち

指528～9
 まるで・よう・ぐあい
 指520～1
 まるで・よう・さえ・見える
 指513
 まるで・ようじゃないか 指347
 まるで・ようだ 指348
 まるで・ようだった 指349
 まるで・ようだろう 指350
 まるで・ようで 指351
 まるで・ようであった 指352
 まるで・ようであり 指353
 まるで・ようである 指354
 まるで・ようでした 指355
 まるで・ようです 指356
 まるで・ようではないか 指357
 まるで・ような 指358
 まるで・ような一種の・感
 指551
 まるで・ような・思い 指530
 まるで・ような感じ 指525
 まるで・ような・感じ 指526
 まるで・ような感触 指527
 まるで・ような気がした 指480
 まるで・ような気がしてきた
 指481
 まるで・ような気がする 指482
 まるで・ような気もする 指483
 まるで・ような気持 指528
 まるで・ような気持ち 指529
 まるで・ような工合 指520
 まるで・ような具合 指521
 まるで・ようなもの 指518
 まるで・ように 指359
 まるで・ようにおもっている
 指461
 まるで・ように思われた 指467
 まるで・ように考えられる
 指468
 まるで・ように感じられる
 指465
 まるで・ように感ぜられる
 指466
 まるで・ようにさえ見え
 てくる 指513
 まるで・ようにみえた 指469
 まるで・ように見えた 指470
 まるで・ように見えて来た
 指471

まるで・ように見える 指472
 まるで・よう・見える
 指469～72
 まるで・よう・もの 指518
 まるで・…よろしく 指571
 まるで・連想させる 指235
 まるで・を見るようだ 指269
 まるで・を連想させる 指235
 まるで・んばかり 指282
 丸の内 結3826
 丸呑み 結3496
 丸呑み込み 結3501～2 文1101
 丸ビル女史 結5464
 丸・円味 結1288, 3393
 丸め込む 文422
 マロニエ 結2408
 回す 結2981 文423, 1649,
 1669, 2366
 まわり 結2772 文2222, 2325,
 2413
 回り道 文1102
 回る 結282～3, 1409
 蔓延 結2778
 満艦飾 結5146
 満身創痍 文1103
 満足 結67～9, 2912, 3690
 満足感 結200, 2064, 5034
 満足げ 結4263

 — ミ —
 身 結695, 1931, 2153, 2515,
 2783～4, 2786, 2789, 2886,
 3029, 3127, 3253, 3410, 3426,
 3664, 3720 文1332, 1335, 1920
 ～27, 1929～33, 2011, 2159,
 2181, 2208, 2384, 2412, 2415
 実 結1385 文1928, 2203, 2217
 見いだす D_{a-1} 指98 結2764,
 3372 文1702
 見入る 結2271
 魅入る 結1062
 見失う 文1899
 身内 結1167, 1749, 1767, 3941
 見え透く 結952
 見える D_{s-} 指64～9 結947～
 51 文485, 503, 1284, 1545,
 2031, 2409
 見える・ほど 指167
 見える・よう・気がする 指188

みえるような気がした 指188
 見送る 結3521
 見下ろす 結2265
 見返す 結2267～8
 磨き出す 文1329
 味覚 結3892, 5036
 磨く 結3641 文1796, 2033
 御影石 結5256
 見方 結4524
 見くびる 結3349
 惨め 結1550
 未熟 結80
 未消化 文1104
 見知る 結3360
 身じろぎ 結261
 ミジンコ 文1988, 2139
 水 結348, 1035, 1511, 1606,
 2536, 3801, 3875, 4791 文1105
 1523, 1910～1, 2055, 2180,
 2264, 2381
 見据える 文525
 水嵩 結2185
 自ら 結4629 文534, 2383
 水溜まり 結5411
 水っぱい 結4347
 水浸し 文1106
 みずみずしい 結4601～2
 店 結3927
 未成熟 結4114
 未征服 文1107
 見せかける D₁₋₁₁
 店屋 結3802
 見せる 結2275～9, 3517, 3916
 文1635, 1903
 溝 結2327, 4635 文57, 1108,
 1912
 味噌っ歯 結4647, 5516
 みたいK_{a-} 指797～811> 指797
 みたい・思える 指923
 みたい・気がする 指946～8
 みたい・気持ち 指1077～8
 みたい・こと 指1030
 みたいじゃないの? 指798
 みたいだ 指799
 見たいだ 指800
 見たいだった 指801
 みたいで 指802
 みたいですよ 指803
 みたいな 指804

みたいな^{キイ}気がする 指946
 みたいな気がしている 指947
 みたいな気がする 指948
 みたいな気持 指1077
 みたいなこと 指1030
 みたいな真似 指1031
 みたいなもの 指1024
 みたいな物 指1025
 みたいなもん 指1026
 みたいに 指805
 みたいに思えて 指923
 みたいに見える 指924
 みたい・ふう 指1050
 みたい・まね 指1031
 みたい・見える 指924～5
 みたい・もの 指1024～9
 充たす 結2190, 2674, 3301, 3895
 ～8
 乱す 文1570
 見立てる D₁₋₁₀ 指21
 乱れる 結226 文1980
 みたようで 指806
 みたような 指807
 みたような気持 指1078
 みたような風 指1050
 みたようなもの 指1027
 見たようなもの 指1028
 みたようなものだ 指1029
 みたように 指808
 みたよな 指809
 みたよに 指810
 みたよに見えまして 指925
 道・路・途 結1509, 2240, 3467,
 4704 文69～70, 75, 477, 480,
 1109, 1333～4, 1525～6,
 1914～6, 2029, 2322
 未知 文2305
 満・充ち溢れる 結1725～6
 道筋 文1913
 道連れ 文1524
 導き入れる 結3980
 導く 結2499～502, 2780, 3531,
 3734～5, 4182, 4194
 満ちる 結799～804, 1521, 1723
 ～4
 満つ 文2225
 三日天下 文1110
 身^づ粧い 結1771
 見つけ出す 結2763

見つける 文1845, 2025
 密室 結220
 密度 結2189
 蜜蜂 結3720, 3968
 見詰め合う 結2703
 見詰める 文1738
 密林 結5310
 見通す 文2351
 認める 結2249~50
 緑 結278, 1650, 3474, 3796,
 3904, 4872
 緑色 結2866 文2004
 見直す 結3383
 漲る 結807~9
 見なされる D₅₋₁₁
 醜い 結4519
 醜さ 結648, 2431, 2886
 峠 結5293
 身の上 結3129
 見逃す 結2258~60
 身の皮 結3411
 身の毛 文1336
 実る 結1210~1
 見放す 結2573
 見張り 文1111
 見張る 結2272
 身震い 結1933
 身分 結2744
 見舞う 結2447~8
 見守る 文2355
 見回す 結2266
 耳 結291, 817, 2095, 2718,
 3667, 3987, 4119, 4612 文42,
 1527~8, 1917~9, 2331
 身もだえ 文1981
 脈 結5418
 土産 結4735
 土産話 結3932
 都 結2242, 2408
 宮下<人名> 結3366
 未来 結1595, 2803, 3377, 3388,
 4877, 5120, 5213
 見られる D₅₋₁₀
 魅力 結319, 975, 1731
 見る D₁₋₈ 指18~20 結3377~
 81 文74, 1894, 1967, 1978,
 1997, 2013, 2029, 2345, 2352,
 2427
 見る・よう 指173~5

見る・よう・気がする 指186
 見る・よう・さえ 気がする
 指190
 見る・よう・もの 指191
 未練 結3722, 5137
 民族 結4202
 — △ —
 無意識 結4136
 無意味 結2486, 3838, 4366
 無音 結3392
 向かう 結848~9, 1526 文1984,
 2420
 迎え入れる 結3968
 迎える 結3519~20, 3966~7
 向かって来る 結505
 向かって腹 結2989
 無何有郷 結5029
 向き合う 結1330
 無傷 文1112
 剥き出し 結4825
 剥き出す 文1661
 向く 結1619, 2182 文1860,
 2400
 剥く 結3286 文1870
 向け放つ 結3028
 向ける 結3316~7, 3728~9
 文1893, 2326, 2358
 無限 文2037~8
 向こう側 文1529, 2279
 向こう向き 文1530
 無言 結4710
 武蔵野 結3329, 5161
 貪る 結3911
 虫 結1843, 2257, 4663, 5346
 文1113, 1200, 1934, 1995,
 2042, 2118, 2182~3, 2375
 蒸し返し 文1114
 虫喰い 文2423
 虫ず 文1337
 ムジナ 文2434
 武者 文2359
 矛盾 結1664, 3122, 4339, 4395,
 4937
 捲り取る 結3942
 捲る 文1666, 2010
 むしろ F₃₋₇
 むしろ・言う・ふさわしい・
 よう・代物 指271

むしろ・と言ったほうがふさ
 わしいような代物 指 271
 無心 結4452
 無教 文2384
 むず痒い 文1981
 むず痒さ 結462
 息子 結1455, 1676, 1811, 4157
 ~60, 4250, 4760 文2080
 結び合う 文424
 結び方 結4705
 結び付く 結683, 1710~1
 結び付ける 結3176 文425
 結び目 結4879
 結ぶ 結2074~5, 3177~9,
 3857 文1928
 結ばれ 結4854, 5141
 娘 結252, 1663, 4193
 娘らしさ 結3355
 むせび泣き 結4342
 むせる 結1547
 夢想 結5166
 無駄 結303
 無駄骨 文1935
 無知 結5427
 鞭 結2447, 2683, 2748, 3724
 文2107
 鞭打つ 結3204~6
 無秩序 結1069
 無頓着 結3412
 胸糞 文1115
 胸苦しさ 結1137
 胸騒ぎ 結5530 文1116
 胸元 結2123
 胸 結114, 370, 631, 824~5,
 827~8, 969~70, 1041, 1100,
 1136, 1162, 1281, 1289, 1299~
 300, 1304, 1316, 1475, 1509,
 1540, 1542, 1569, 1618, 1641,
 1668, 1696, 1739~41, 1743,
 1750, 1752~3, 1757, 1764,
 1768, 1778, 1947, 2041, 2094,
 2120, 2195, 2362~3, 2660,
 2664, 2670, 2672, 2679, 2682,
 2735, 2762, 2792, 3425, 3458,
 3907, 3932, 3986, 4089, 4099,
 4123, 4137, 4141, 4153, 4204,
 4750, 4918, 4941, 5210, 5365
 文488, 1117, 1201~3, 1338~
 43, 1531~4, 1936~46, 2047,

2184~5, 2214, 2229~30, 2306
 ~7, 2311, 2350~1, 2364,
 2385, 2401, 2418
 胸一杯 結5060
 無能老朽 結4690
 無表情 結4397~8, 5165
 謀叛 文1118
 無味無臭 文27
 無明 文2410
 村 結3157
 無力 結1103
 無力感 結3708, 3910, 5035
 群れ 結1427, 4959, 4983

— メ —

目・眼・眸 結296, 327, 350,
 456, 530, 555, 671, 691, 1238,
 1329, 1474, 1476, 1486, 1489,
 1553, 1625, 1766, 1776, 1804,
 1850, 1856, 1871, 1938, 2139,
 2166, 2204, 2280, 2293, 2303,
 2313, 2574, 2628, 2669, 2675,
 2677, 2692, 2975, 2991~2,
 3021, 3028, 3033, 3128, 3138,
 3198, 3286, 3317, 3321, 3422,
 3516, 3588, 3595, 3628, 3805,
 3832, 3842, 3858, 3866, 3888,
 3937, 3942, 3954, 4011~2,
 4080, 4098, 4139, 4144, 4186
 ~7, 4297, 4307, 4537, 4584,
 4636, 4640~1, 4758, 4817,
 5008, 5357~61 文74, 76,
 85, 1119, 1211~2, 1345~6,
 1348, 1536~45, 1947, 1949
 ~54, 1957~63, 2070, 2187,
 2211, 2308, 2326, 2391, 2419
 芽 結1208, 1924, 2792, 5111,
 5316~20 文1204, 1347, 1955
 ~6
 名案 結655
 名妓 文2186, 2365
 名所旧蹟 結2440
 名人 結5012
 命ずる 結2782
 めいた 指1181
 明知 結2642
 酩酊 結3720, 4005
 めいている 指1182
 命脈 文1344

明滅 結100
 明瞭 文80
 命令的 結4275
 眼色 結3319
 迷路 結4945, 5203~4 文1120
 迷惑 結1982
 目隠し 文1996
 妾根性 文1121
 目がける 結2253~4, 3369
 目方 結4974
 眼鏡 結2058
 女神 結4672 文2170
 …めく S₂₋₁ 指1181~2
 目配せ 結3020
 恵まれる 文510
 芽ぐむ 結1207
 盲 文1535, 1546
 巡らす 文1901
 盲蛇 文2231
 巡り 文2207
 巡り合う 結1495~6
 巡る 結448~9
 目先 文1122
 目指す 結2252 文2346
 目嫌い 文28
 眼覚まし 結5189
 眼醒め 結4863 文1123
 目・眼覚める 結886~90 文426
 飯 文1948, 2344
 盲^めう 文427
 雌 文1125, 2274
 珍しさ 結470
 目・眼つき 結629, 672, 1739,
 2618, 4510
 滅亡 結5206
 眼に映る D₅₋₁₁
 メニュー 結4390
 眼に・ように映った 指916
 芽生え 結2764
 芽生える 結1206, 1758, 1806~7
 目鼻立ち 結4585, 4958
 めぼしい 文85
 目まい 結519, 2484
 目盛り 文2036, 2408
 メロディ 結3935, 4211
 面 結2052 文1991, 2421
 免疫体 結5107
 面くらう 結896
 眼ん玉 文2071

面目 結772

— モ —

も J₂₋₁ 指597
 藻 文2189
 も・当たる 指633~5
 も・言う 指620~2
 も・言う・ほど 指639
 もう 文546
 もう一步 結4242
 申し入れる 結2777
 申す 文2003
 妄想 結136, 832, 2755, 3782,
 4093, 4557
 妄念 結4058
 毛布 結2176
 網膜 結1719
 盲目 文1127
 網羅 結2824
 猛烈 結4228
 燃え上がる 結1167~9 文486
 燃え狂う 結5528
 燃え盛る 結1170
 燃え立つ 結740, 1165~6
 文428, 1908
 燃え続く 文1349
 萌え出る 結1208
 燃える 結1158~64, 1573~6,
 1645, 4241 文429, 487, 496,
 1257, 1315
 も・劣る 指637
 も・同じ・こと 指708~9
 もおなじこと 指708
 も同じこと 指709
 も・思い 指718
 も・思える 指624
 も・思われる 指625~6
 も・及ばない・くらい 指704
 もおよばないくらい 指704
 もが 結1020~2
 も・かねない 指691
 挽ぎ取る 結3261~2 文430,
 1798~9
 振ぎ外す 結2659
 木阿弥 文2188
 木村 結2145
 目眩 文1128
 目的 結1495, 4729
 木目 結2316

潜り込む 結566
 潜り抜ける 結1616
 潜る 結316~7
 目礼 結3042
 模型 指1111
 もし F₉₋₂
 もし・…が…なら…は…では
 ないか 指325
 もし・が・なら・は・ではな
 かるうか 指325
 文字通り F₄₋₈
 文字通り・よう 指431
 文字通り・ような 指431
 も・そう 指690
 も・そんな 指690
 抬げる 結1971~4
 持たせる 結3737~9
 も・たとえる 指617
 もたらず 結1995~6, 4028~9
 凭れ掛かる 結1514
 餅 結2331 文2393
 持ちあぐむ 結3341
 持ち上げる 結2056 文431
 持ち合わせる 文1636
 持ち帰る 文2000
 持ち掛ける 文432
 持ち込む 結2039
 持ち出す 文433
 持つ 結2197~8, 2588~91,
 3546~54, 3990~6, 4207
 文80, 84, 1487, 1640, 1830,
 1917, 2042, 2413
 黙過 結1855
 持って行き場 結4868
 持って行く 結3039
 持って来い 文464
 持って回る 結3061
 纏れ 文1129
 纏れ合う 結677, 1651
 纏れる 結674~6
 持て剩す 結3533~4
 元・下 文510, 2188, 2204
 資本 結790
 も・同然 指682
 も同然 指682
 も・同様 指679~80
 も同様 指679
 も同様な 指680
 もどかしさ 結684

戻す 結2697, 3079 文1969
 求める 結2239, 2453, 2508~9
 文1703, 1864
 戻る 結1440 文509, 1247, 1514,
 1551
 も・ないばかりに 指652
 も・似る 指629~32
 もの M₁₋₂ 結13, 125, 168, 190,
 193, 277, 373~4, 577, 607,
 746, 940, 964, 1020, 1061,
 1132, 1174, 1176, 1351, 1375,
 1381, 1553, 1641, 1669, 1672,
 1729, 1769, 1809, 2062, 2066,
 2153, 2222, 2290, 2294, 2296,
 2603, 3290, 3384, 3766, 3806,
 3911, 3917, 4096, 4281, 4633
 ~4, 4984, 5212 文36~7, 67,
 481, 496~7, 501, 531~2,
 1218, 1547, 1964, 2000, 2008,
 2032, 2214, 2231, 2352, 2422
 …もの S₁₋₁ 指1149~50>
 指1149
 …物 指1150
 物言・云い 結1256, 2796
 物言わぬ 結5437
 物思い 結1480
 物語 結1785, 2385, 3155, 3612,
 4112
 物乞い 結1548
 物腰 結1793
 物欲しそう 結4622
 物物しさ 結4204
 物笑い 結5336
 模倣 結4699
 も・ばかり 指652~3>指653
 もはや F₂
 もはや・である 指416
 最早・である 指416
 も・ひけをとらない 指703
 も・等しい 指678
 もひとつ 指681
 も・一つ 指681
 も・ほど 指651
 もまた J₂₋₂
 もまたかくのごときものなり 指687
 もまたかくのごとく 指688
 もまた・ごとし 指687~8
 揉み合う 結1018

も・見える 指627~8
 紅葉 結4809
 も・見る・よう 指641
 揉む 結2358, 2685
 揉め事 結411
 霏 結3957
 燃やす 結3680, 3743, 4098
 燃ゆ 結1748
 も・よう 指685~6
 模様 結2317~8 文1130
 模様替え 文1131
 も・よう・心持ち 指711
 も・ような 指685
 も・ような心持 指711
 も・ように 指686
 催す 結2433
 も・呼ぶ 指623
 も・…よろしく 指720
 もよろしく 指720
 貰い物 文2051
 洩らす 結2368, 3117~9
 森 結1885, 5308~9
 盛り上がる 結246
 盛り返す 結2924
 盛り零れる 結632
 守宮〈人名〉 結1328, 4660,
 4670, 4821
 洩る 文434
 洩れる 結598~9, 1485 文435
 脆さ 結2608
 門衛 文2117
 紋切り型 文1132
 文句 結554, 2552, 2674, 2899,
 3296
 文字 結792, 989
 問題 結309, 531, 1326, 1488,
 2698, 2836, 2840, 2902, 2911,
 3933, 4155
 問答 結1951
 — ヤ —
 矢 文2012, 2218, 2404
 矢面 文1548
 やかましい 文29
 夜気 結4377
 焼・灼き付く 結1719~20
 焼き付ける 文436
 焼き肉 結2532
 役 文1133, 2240

…役 Si-₃ 指1158
 焼く 結2646 文471, 1929
 扼殺 文437
 役者 文1134, 2043
 約束 結1362, 1861~2 文1135
 約束手形 文2397
 薬品 結4010
 役不足 文1136
 薬味 文1137
 役目 M₄₋₁ 指1109
 役割 M₄₋₂ 指1110
 ややくそ 結4465
 焼・灼け爛れる 結1155, 1571~2
 焼け付く 結1156
 焼けぼっくい 結1332 文1138, 1349
 焼ける 結1154
 矢先 文1139
 優しい 結4461
 優・柔しさ 結768, 1795, 2718, 3096, 3478
 野次馬 結5506
 邸 結4751
 飛う 結2503, 3532
 野獣 文81
 野心 結1925, 2802
 安太<人名> 結1435, 1662
 康太<人名> 結3094
 安っぽい 結4439
 休まる 結875
 安らか 結577
 安らかに 結3827
 瘦せる 文467, 1518
 やつ M₁₋₁ 指1083
 奴 指1083 結4990~6 文60, 78, 82, 1140
 厄介千万 文58
 やって来る 結506~17 文438
 宿下がり 文1325
 宿す 結3422, 3930
 宿る 結984~5, 1734
 柳 結2135
 脂下がる 結931 文439
 脂っこい 文30
 屋根 結465, 1026, 2087, 2101, 2107, 5281
 屋根瓦 結1760
 藪 文2048
 藪蚊 結988

破る 結2166, 3263~5, 3880~1 文1655, 1726, 1887
 破れ 文1965
 破れ目 文2429
 破れる 結785~6 文440, 1276
 山 結146, 178, 730, 737, 2365, 2393, 2561, 3726, 5292, 5364~5, 5386 文650, 1141, 2121, 2378, 2424
 病 結39, 3980, 5422
 疚しさ 結511, 858
 山肌 結5515
 闇 結236, 241, 1284, 1457, 1592, 1677, 1780, 1984, 2502, 3115, 3187, 3277, 3912~4, 3945~6, 4021, 4373, 4482, 4661, 4696, 4780 文1142, 2190~1, 2209, 2379
 病み上がり 結4831
 闇肥り 結5534
 止む 結4239
 病む 結1246
 麩める 結2974
 やや似たものがあるとすれば
 ・ぐらい 指169
 揶揄 結1880
 やら・やら・分らぬほど 指962
 やり方 文2001
 やる 結3588~9 文441, 1963, 2022, 2361
 遣る瀬ない 結4224
 遣る瀬なさ 結1418, 3719, 3753
 やわ普請 結4728
 柔らかい 結4561~2

— 二 —

唯物論 結1640
 唯物論者 文54
 夕明かり 結2692
 憂鬱 結58, 147, 602, 1258, 1465, 2215, 2485, 2570, 2780, 3734, 3856, 3969, 4103
 優越感 結3938
 勇氣 結4021, 4208
 有機体 文2213
 勇者 結4844
 憂愁 結4196
 友情 結391, 829, 1385, 1445, 2589, 3134, 4319, 5129

夕空 結3951
 優待 結2850
 誘導 結1869
 夕映え 結1862
 夕陽 結2646
 郵便物 文1549
 雄弁 結4267~8
 夕靄 結4027
 憂悶 結63
 夕焼け 結3705
 夕闇 結729, 4151
 幽霊 結4999~5000 文1386
 誘惑 結99, 1344, 1451, 1557, 1876~8, 2318, 2786, 5067 文1143
 誘惑者 結4668
 床 結1407, 4424
 愉快 結3084
 歪み 文1144, 2108
 歪む 結764
 歪める 結2151, 3224~5
 雪 結349, 472, 958, 996, 1159, 1897, 2617, 2640, 4577, 5185 文1350
 行く手 結2145
 揺さぶる 結1961, 3794
 揺すぶる 結1958~60, 2655 文442
 揺する 結2977 文1613
 譲る 結3733
 委ねる 結2789
 油断 結3741
 癒着 文1145
 輸入 結2861
 指 結1224, 1504~5, 1979, 2248, 2453, 4413, 4828, 5370 文1966
 指一本 文1382
 夢 結221, 785, 837, 842, 1350, 1421, 1608, 1816, 2444, 2473, 2548, 2815, 2923, 2949, 3064, 3178, 3233, 3237, 3247, 3287, 3311, 3401, 3719, 3743, 4120, 4124, 4174, 4177, 4293, 4528, 4602, 5038, 5431 文1146, 1967, 1997, 2013, 2192, 2309, 2353
 夢見る 結892~3, 2205 文443
 揺らぐ 結269
 百合 結4807

揺り上げる 結2059
 揺り動かす 結1955～6 文444
 揺り籠 結5182～3
 揺るがす 結1957
 許す 結2457～9, 2778 文1930
 弛む 結237～8 文1287, 1319
 揺れる 結266～8, 1679, 4222
 文445
 揺れ続ける 文488

— 三 —

よ 結5438～40
 夜明け 結4875
 良い 結4284 文41～2, 1197,
 1200, 1208, 1214, 2207, 2425
 酔い 結163, 1059, 1409, 2378,
 2410, 2876, 2931, 3483, 4206,
 5039～40, 5098
 酔い心地 結3727, 3972
 宵闇 結644
 余韻 結161, 2132, 2328, 4567,
 4977
 酔う 結861, 1528～30
 よう K_{s-1} 指751～86 指763
 …様 S_{i-1} 指1156
 よう・扱われる 指921
 よう・あんばい 指1042
 用意 結1851, 2834 文1880, 2380
 よう・印象 指1076
 よう・映る 指918
 よう・覚える 指865
 よう・思い 指1070～4
 よう・思う 指838～43
 よう・思える 指866～9
 よう・おもむき 指1034
 よう・思われる 指870～89
 陽画 結4715～6 文1147
 よう・形 指1046～8
 よう・かっこう 指1049
 よう・観 指1039
 よう・考える 指844～5
 よう・感じ 指1051～2
 よう・感じさせる 指949
 よう・感触 指1053
 よう・感じられる 指856～64
 よう・感じる 指829～37
 容器 結5181 文1148, 2088
 陽気 結1367, 4458
 妖気 結4053 文2191

よう・気 指1054～7
 よう・気がする 指926～44
 よう・聞こえる 指919～20
 よう・気分 指1064
 よう・気持ち 指1058～63
 要求 結1871～2, 3216, 4217
 よう・ぐあい 指1040～1
 よう・口調 指1045
 よう・気配 指1033
 用件 結3602
 陽光 結560
 よう・心地 指1068
 よう・心地がする 指945
 よう・心 指1069
 よう・心得る 指846
 よう・心持ち 指1065～7
 よう・こと 指1020～1
 よう・さえ 指971～2
 よう・さえ・思う 指977
 よう・さえ・思える 指986～7
 よう・さえ・思われる 指988
 よう・さえ・感じる 指976
 よう・さえ・気がする 指997
 よう・さえ・見える 指989～
 90
 よう・錯覚 指1080～1
 よう・錯覚させる 指950
 よう・錯覚される 指891
 よう・錯覚する 指847～8
 養子 結4679
 ようじゃ 指764
 洋酒棚 結4187
 よう・状態 指1038
 ようす M_{2-1}
 様子 結1790, 3907
 様子ぶる 結937
 よう・すら・思われる 指991
 要するに F_{7-3} 指210
 要するに・ようなもの 指543
 要するに・よう・もの 指543
 妖精 文2193
 用箋 結3807
 要素 結2517, 3109 文2213, 2380
 よう・そんなもの 指1002～3
 ようだ 指765
 ようだった 指766
 様だった 指767
 幼稚 結3384
 よう・調子 指1043～4

よう・つもり 指1075
 ようで 指768
 様で 指769
 ようであった 指770
 様であった 指771
 ようであり 指772
 ようであり・ようであり・よ
 うでもあった 指1006
 ようである 指773
 ようでござります 指774
 ようでさえあった 指971
 ようでさえある 指972
 ようでした 指775
 ようでしょう 指776
 ようです 指777
 ようではなかった 指778
 ようでもあった 指965
 (ようでもあれば)ようでもあ
 った 指966
 ようでもあり・様子でもあ
 った 指999
 ようでもあり・ようでもあ
 った 指998
 ようでもある 指967
 (ようでもあれば)ようでもあ
 る 指968
 ようでもあれば(ようでもあ
 った) 指969
 ようでもあれば(ようでもあ
 る) 指970
 よう・とれる 指890
 ような 指779
 様な 指780
 ようなあんばい 指1042
 ような印象 指1076
 ようなおもい 指1070
 ような思い 指1071
 ような想い 指1072
 ような・思い 指1073
 ような趣 指1034
 ようなかたち 指1046
 ような形 指1047
 ような・形 指1048
 ような恰好 指1049
 よう・眺められる 指913～5
 よう・眺める 指851～2
 ような感じ 指1051
 ような・感触 指1053
 ような観を呈している 指1039

| | | | | | |
|----------------|-------|-------------------------|-------|---------------------|------|
| ような気 | 指1054 | ようなつもり | 指1075 | ように・感じた | 指832 |
| ような気がいたします | 指926 | ようなところ | 指781 | ように感じて | 指833 |
| ような気がし | 指927 | ようなのだ | 指782 | ように感じました | 指834 |
| ような気がした | 指928 | ような風 | 指1036 | ように感じられた | 指856 |
| ような・気がした | 指930 | ような風情 | 指1035 | ように・感じられた | 指857 |
| ような気が・した | 指929 | ような真似 | 指1022 | ように感じられている | 指858 |
| ような気がでした | 指931 | ような・見えてきた | 指893 | ように感じられる | 指859 |
| ような気がして | 指932 | ようなもの | 指1015 | ように・感じられる | 指860 |
| ような気がしていた | 指933 | ような物 | 指1016 | ように感じる | 指835 |
| ような気がしている | 指934 | 様なもの | 指1017 | ように・感じる | 指836 |
| ような気がしてくる | 指935 | ようなもん | 指1018 | ように感ぜずにはいられなか
った | 指837 |
| ような気がしてなりません | 指936 | ような役目 | 指1079 | ように・感ぜられた | 指861 |
| ような気がしながら | 指937 | ように | 指783 | ように感ぜられつつある | 指862 |
| ような気がしました | 指938 | ようにあつかわれている | 指921 | ように感ぜられる | 指863 |
| ような気がします | 指939 | ようにあるいは・ようにあるい
は・ように | 指1005 | ように聞える | 指920 |
| ような気がする | 指940 | ように映る | 指918 | ように心得ている | 指846 |
| ような・気がする | 指941 | ように覚えた | 指865 | ようにさえ思う | 指977 |
| ような気さえした | 指997 | ように・想い | 指1074 | ようにさえ・思えた | 指986 |
| ような気になる | 指1055 | ように思いました | 指839 | ようにさえ思える | 指987 |
| ような気のした | 指942 | ように思います | 指840 | ようにさえ思われた | 指988 |
| ような気分 | 指1064 | ように思う | 指841 | ようにさえ感じる | 指976 |
| ような気もしていた | 指993 | ように・思え | 指866 | ようにさえ見えてくる | 指989 |
| ような気もして来る | 指994 | ように思えた | 指867 | ようにさえ見える | 指990 |
| ような気もしてならない | 指995 | ように思えてくる | 指868 | ように錯覚させる | 指950 |
| ような気もする | 指996 | ように思える | 指869 | ように錯覚された | 指891 |
| ような気もち | 指1059 | ようにおもった | 指842 | ように錯覚をした | 指847 |
| ような気持 | 指1060 | ように思っている | 指843 | ように錯覚をして | 指848 |
| ような気持ち | 指1061 | ようにおもわれ | 指871 | ようにしか思われなかった | 指884 |
| ような・気持 | 指1062 | ように思われ | 指872 | ようにしか感じられなかった | 指864 |
| ような・気持ち | 指1063 | ように思われた | 指873 | ようにしか見えなかった | 指894 |
| ような工合 | 指1040 | ように・思われた | 指874 | ようにすら思われる | 指991 |
| ような具合 | 指1041 | ようにおもわれて | 指875 | ように・眺めた | 指851 |
| ような口調 | 指1045 | ように思われて | 指876 | ように・眺められ | 指913 |
| ような気配 | 指1033 | ように思われていた | 指877 | ように眺められた | 指914 |
| ような心地 | 指1068 | ようにおもわれてくる | 指878 | ように・眺められる | 指915 |
| ような心地がしていた | 指945 | ように思われなくてもない | 指879 | ように眺める | 指852 |
| ような心 | 指1069 | ように思われまして | 指880 | ようには思われず | 指885 |
| ような心持 | 指1065 | ように思われます | 指881 | ようにみえ | 指895 |
| ような・心持 | 指1066 | ように思われる | 指882 | ように見え | 指896 |
| ようなこと | 指1020 | ように想われる | 指883 | ようにみえた | 指897 |
| 様な事 | 指1021 | ように考えた | 指844 | ように見えた | 指898 |
| ような錯覚 | 指1081 | ように考えている | 指845 | ように・みえた | 指899 |
| ような状態 | 指1038 | ように感じ | 指829 | ように・見えた | 指900 |
| ような・(ような)そんなもの | 指1003 | ように・感じ<名> | 指1052 | ように見えて | 指901 |
| (ような)・ようなそんなもの | 指1002 | ように・感じ<動> | 指830 | ようにみえていた | 指902 |
| ような調子 | 指1044 | ように感じさせた | 指949 | ように見えている | 指903 |
| | | ように感じた | 指831 | | |

- | | | | | | |
|----------------|------------------------|---------|--|--|--|
| ように見えてきた | 指904 | 夜霧 | 結1930 | よな <small>キイ</small> 気 <small>キイ</small> になった | 指1056 |
| ように見えて来た | 指905 | よぎる | 結1815 | よな気がしました | 指943 |
| ように見えてくる | 指906 | 抑圧 | 結3727, 5424 | よな <small>キイ</small> 気 <small>キイ</small> になった | 指1057 |
| ように見えます | 指907 | よくある | D _{13-s} 指142~4 | よな気 <small>キイ</small> の <small>キイ</small> しました | 指944 |
| ようにみえる | 指908 | 欲情 | 結7, 1060, 1165 | よな心持 | 指1067 |
| ように見える | 指909 | よく・にある | 指144 | よな風 <small>キイ</small> に | 指1037 |
| ように見える | 指910 | 欲念 | 結3941 | よなもん | 指1019 |
| ように見た | 指849 | 欲望 | 結154, 324, 451, 860, 873, 1368, 1560, 1667, 1763, 1836, 1974, 2070, 2188, 2341, 3514, 3691, 3768, 4092, 4394, 4703, 4834, 4994, 5286, 5328, 5425, 5429 | よに | 指786 |
| ように見る | 指850 | | | よに思われた | 指887 |
| ように・眼に映った | 指917 | | | よに思われまして | 指888 |
| ようにも思った | 指975 | | | よに・思われます | 指889 |
| ようにもおもわれた | 指886 | | | 世の中 | 結237, 1622, 5274 |
| ようにも思われた | 指979 | | | 余波 | 結5283 文1351 |
| ようにも感じられた | 指978 | 抑弱 | 結753 | 余白 | 文1205 |
| ようにも錯覚される | 指980 | 予言 | 結453 | 呼び起こす | 結3778~80 |
| ようにも取れた | 指890 | 横顔 | 結4507, 5355 文2193 | 呼び掛ける | 結1534, 1536, 1592 |
| ようにも見えた | 指981 | 横切る | 結2022, 3813 | 呼び覚ます | 結3325 |
| (ようにも)・ようにも見えた | 指982 | 汚す | 文1817 | 呼び戻す | 結3087 |
| ようにも・(ようにも)見えた | 指983 | 横たわる | 結293 | 呼ぶ D _{3-s} | 結2284~6, 3394, 3917~20 |
| ようにもみえたらう | 指984 | 横腹 | 結2277, 4921~3 | 子防線 | 文1968 |
| ようにも見えていた | 指985 | 横道 | 結850 文1550 | 蘇らす | 結3924 |
| ようにも見えなくはない | 指911 | 横殴り | 文1149 | 蘇・甦る | 結1195~202, 1753~7, 1804~5 文446 |
| ようにも見られた | 指912 | 汚れる | 結120, 3850 文2319 | | |
| よう・ふう | 指1036~7 | 汚れる | 結1090 | 夜店 | 結2519 |
| よう・風情 | 指1035 | 予算 | 文1150 | 読み違える | 結3397 |
| 糞分 | 結4213 | よし子<人名> | 結4210 | 読み取る | 結3398~9, 4073 文447 |
| 幼木 | 結5498 | 攀じ登る | 結614 | 読む | 結3395~6, 3923 |
| よう・まね | 指1022 | 攀じる | 結2153 文1931 | 嫁入り道具 | 文1152 |
| よう・見える | 指892~911 | よじれ合う | 結766 | 嫁取り | 文1153 |
| よう・見られる | 指912 | 寄せ合う | 結3193 文1700 | 余裕 | 結3092 |
| よう・見る | 指849~50 | 寄せ付ける | 結3194~5 | より J ₁₋₄ | 指592~3>指592 |
| よう・眼に映る | 指916~7 | 寄せて来る | 結717 | 縫・撚り | 結2697 文1969, 2246 |
| よう・も | 指964~70 | 寄せる | 結3192 文1932, 2384 | 凭り掛かる | 結1513 |
| よう・も・思う | 指975 | 予想 | 結444, 686 | 寄り添わず | 結2747 |
| よう・も・思われる | 指979 | 装い | 結2638 | 寄り付く | 結734~5 |
| よう・も・感じられる | 指978 | 装う | 結3412, 3927~8 | よりも | 指593 |
| よう・も・気がする | 指993~6 | 装う | 結4475~7 | より・よう | 指654 |
| よう・も・錯覚される | 指980 | 夜空 | 結954 | より・ように | 指654 |
| よう・もの | 指1015~9 | よだつ | 文1336 | 夜 | 結119, 641, 823, 1619, 1814, 2189, 2201, 3365, 4128, 4693, 4876, 4914 文2194~5 |
| よう・も・見える | 指981~5 | 欲求 | 結1050, 1655, 5017 | 寄る | 結1511 文449 |
| よう・も・ようす・も | 指999 | 寄って来る | 結716 | 凭る | 文1467 |
| よう・も・よう・も | 指998 | 酔っ払う | 結1531 | 縫れる | 結1789 |
| よう・役目 | 指1079 | 予定 | 結3265 | 鑑 | 文1154, 2014, 2102 |
| よう・よう・よう | 指1005 | よでござります | 指784 | 鑑戸 | 結2737 |
| よう・よう・よう・も | 指1006 | 淀み | 文1151, 2394 | 鑑う | 結3408 文450 |
| 夜風 | 結500, 2154, 3643 | 淀む | 結478~81, 1687~8, 1780 | | |
| 予感 | 結276, 1725, 1997, 4695 | 鍛める | 結3821 | | |
| | | よな | 指785 | | |
| | | 夜鳴き | 結139 | | |

喜・悦・歡び 結199, 362, 543,
1092, 1522, 1570, 1726, 1778,
1943, 2412, 3149, 3905, 4022,
4121, 4344, 5043, 5226, 5240

喜ぶ 結900
…よろしく S₃ 指1201
よろめく 結280~1 文451
弱い 文59
弱気 結586, 1349
弱腰 文1155
弱さ 結1559

— ラ —

ライター 結2843
ライト 結2607
烙印 文1352
落差 文1156
落胆 結824
楽の日 文2312
楽楽 文521
らしい K₃ 4
らしい・もの 指1032
らしいもの 指1032
裸身 文1383
螺旋棒 文2419
埒 文1206, 1353
落下 文1301
ラッパ 結398, 434, 2133, 4031
裸木 結4848
欄 文2256
乱杭 結4647 文1157
乱舞 結4859

— リ —

リアリズム 結4214
力む 結244~5
陸地 結4151 文1551
理屈 結1437, 2979, 3040, 4793
利・利口・巧 結4431~2
利口さ 結366
りさ子(人名) 結4818
リズム 文1158
理性 結287, 1124, 2250, 3976,
4488, 4592, 5153, 5270, 5301
理想 結3502, 3574
理想生活 結4849
理知・智 結1611, 5284
立派 結4287
リノリューム 結3956

リハーサル 文2022
理不尽 文60, 82
利回り 文1159
理由 結3819, 4136
流儀 結5071
領域 結4884 文1970
両腕 文2034
領国 結5025
良識 結765
良心 結140, 857, 5358
両手 文512, 1552
領土 結1864 文1160
療法 結5070
料理 結2869~71 文452, 2316
料理場 結1535
猟林 文1161
旅券 文1162, 1971, 2354
旅行 結1596 文453
旅費 結4346
輪禍 結1278
輪郭・廓 結3726, 4926~8
林檎 結4269
臨時 結5265
淪落 結4979
倫理 結3510, 5259

— ル —

類似 M₁ 指1115
類する D₁ 4
類する・見える 指154
類する・よう 指185
ルージュ 結1185
留守 結6
垣塙 文1163
ルビコン河 文1972
瑠璃 文1973
流浪 文1413

— レ —

霊 結4794
冷却 結2883
靈験 結4847
冷静 結4459
靈性 結4631
礼節 結4470
冷淡 結4473
例にして 指152
例にする D₁ 1 指152
例をとれば F₂ 6

例をとれば・通じる 指246
例をとれば・に通ずる 指246
レール 文1974
歴史 結3, 2386, 4203, 5084
レコード 結3107, 4704
列 結5379 文2128, 2196
列車 結357
恋愛 結2903, 4844, 4878
錬金術 結5069
連座 文1501
レンズ 結4437 文1164
連想 結494, 5138
連想させる D₇ 3 指93~5
連想させる・よう 指184
連想する D₁₁ 4 指116~8 指116
連帯感 結1796
連中 結117
連袂(辭職) 文1165
連絡 結1

— ロ —

艘 結3925, 4198
労 文2334
廊下 結4754 文1166, 2038
老朽無能 結3078
劳作 結1150
老杉 結1904
籠城 文1167
老人 結1582
ろうそく 文2355
労働 結1667, 3363
労働力 結4010
狼狽 結66, 515, 1493, 1958, 2477
浪費 結2857~9
老木 結5499
牢屋 文1168
濾過 結2819, 3755
轆轤 文2366
露地 結3619
路頭 文1553
ロマン性 結3738
ロマンチック 結4435~6
論ずる 結2305
論理 結977
論理上 結5086

— ワ —

輪・環 結5122~3 文1169, 1976
和音 結1066, 1822

若い 結4292~6
 和解 結1321
 若木 結4632, 5449, 5501
 若草 結5180
 若さ 結920, 1965, 2816, 3079, 3596, 4626
 「わがそでの記」 結4784, 5050
 頒ち合う 結3165
 若葉 結1650, 3902
 わがまま 結2656
 我が身 結3281, 4767
 我が道 文2433
 嫩芽 結5321
 我が物 文2432
 我が家 結1753, 3829 文2356
 わからない K₆₋₁ 指746~8
 わからない・ほど 指962
 わかる 結945 文2266
 別れ 結2387, 2767
 岐れ道 文1170
 別れる 結1335
 若若しさ 結3356
 脇 結3034~6, 5366
 湧き上がる 結208~11, 1641, 1767~8
 湧き起こる 結206~7
 湧き出す 結545, 1634, 1781
 湧き立つ 結1173 文454
 脇腹 結5367
 脇道 文1563
 脇役 文1171
 湧く 結194~205, 1678, 1765~6
 梓 文1172, 1554
 わけ M₁₋₆
 分ける 文1790
 驚掴み 結4251 文1173
 忘れ物 文1174
 忘れる 結2241~4, 3355
 綿 文2196
 話題 結3110
 私 結1311, 1781, 1806, 2388, 2814, 3648, 3800, 3845, 3857, 4714, 4815, 4817, 4910, 5048, 5401
 渡す 文1608
 渡り 文1175
 渡り合う 文455
 渡る 結1814 文489, 1972
 民 結4765, 5191 文1176, 1555

~7
 愕き 結2090
 愕く 結1247~8 文1933
 わびしさ 結4205
 喚き散らす 結1300
 喚く 結929, 1299
 薬 文1975
 笑・嗤い 結57, 442, 463, 653, 764, 872, 915, 1109, 1381, 1485, 1703, 1714, 1727, 1797, 1892, 1959, 2126, 2156, 2776, 2814, 2929, 2936, 2993, 3141, 3302, 3486, 3586, 3671, 3712, 3840, 4101, 4106, 4109, 4135, 4161~2, 4188, 4286, 4345, 4581, 4838, 4952, 5214, 5335
 笑いかける 結1554
 笑い方 結1711
 笑い崩れる 結5527 文456
 笑い声 結393, 464, 685, 4487
 笑いさざめく 結919
 笑い波 結5495
 笑う 結917~8, 1296~7, 4226
 ~7, 4243
 割り切る 文457~8
 割り切れない 結1176
 割り栗石 結5493
 割り込む 文459
 割る 結3368, 3650 文1696, 1773, 1990
 悪足掻き 結93, 2893
 悪い 結4285, 4614 文1189, 1216
 我 結3713, 4807
 割れる 結788 文512, 1277, 1508
 輪をかける 文1976

— ヲ —

を・思い浮べさせた 指90
 を思い浮べてみてもらいたい 指111
 を思い浮べれば、そこに一種の相似が汲み取られる 指193
 を・思い起させた 指89
 を思い起させる 指87
 を憶い起させる 指88
 を・思いださせた 指85
 を・思いださせる 指86
 を思いださせるような 指183
 をおもい出さないわけにはい

かなかった 指104
 を思いだした 指105
 を思い出した 指106
 を想い出した 指107
 を思い出しながら 指108
 を思い出しました 指109
 を思いだす 指110
 を思う 指12
 をおもった 指13
 を思った 指14
 を・思った 指15
 をおもわせた 指78
 を思わせた 指79
 を想わせた 指80
 を思わせて 指81
 をおもわせる 指82
 を思わせる 指83
 を想わせる 指84
 を思わせるほど 指168
 をおもわせるような 指180
 を思わせるような 指181
 を想わせるような 指182
 を感じさせる 指77
 を感じた 指3
 を感じて 指4
 を空想させ 指92
 を象徴する 指97
 を想像させる 指91
 を想像した 指113
 を想像していた 指114
 を想像してもらえばほぼ当っているかもしれない 指155
 を想像すると浮んで来る 指115
 …を…とすれば…は… J₆₋₃ 指608
 …を…とすれば…は…にたとえてもいい J₆₋₅ 指610
 …を…とすれば…は…にたとえてもいいくらいのものだ 指610
 …を…となし 指146
 …を…と見る 指20
 …を…と呼ぶなら…は… J₆₋₄ 指609
 …を…と呼ぶなら…は…である 指609
 をなした 指147
 を成した 指148
 をなして 指149

| | | | | | |
|---------------|-------------------|--------------|-------------------|-----------|------|
| をなす | 指150 | を見ると | F ₁₄₋₁ | を連想させる | 指95 |
| を・髣髴せしめた | 指96 | を見ると・感じられる | 指261 | を連想させるような | 指184 |
| を見たような | 指811 | を見るよう | 指173 | を連想して | 指117 |
| を・見たような気がした | 指186 | を見るようだった | 指174 | を聯想する | 指118 |
| を見たら | F ₁₄₋₂ | を見るような | 指175 | | |
| を見たら・思い出す | 指262 | を見るような気さえました | | — ン — | |
| …を見ていると・…が感じら | | | 指190 | んばかり | 指591 |
| れた | 指261 | をみるようなもの | 指191 | んばかりの思い | 指715 |
| を見てたら・を思いだした | | を連想させた | 指93 | | |
| | 指262 | を・連想させた | 指94 | | |

終章 比喩研究の展望

第1項 論及領域

序章では、比喩研究において残された問題のうち重要と思われる9点を指摘し、課題として立てたわけであるが、本書を構成している各部・編・章の論考が、それらの問題のどこをどう取りあげ、どの部分をカバーしているかについてふれることにより、その位置づけを試みておこう。

まず、第1部第1編の「比喩に関する基礎的考察」は、比喩表現のあらゆる分析の土台であり、その面の考察に踏みこむ前段階として共通の認識を得るための基本的な問題に関する考察である。第1章の「比喩の基本的性格」は、そのうちの特に基礎的な問題として、比喩という表現手段をとる際の目的、他の表現法と対比的に考えられる方法上の特色、ことばと意味と指示対象との関係でとらえた機構上の特色、比喩表現となりうる言語形式において実際に比喩が成立するためのコミュニケーション上の条件などについて扱ったものであり、序章に掲げた課題で言えば、主として第1項の「比喩の本質と限界」に関連し、その第5節の「比喩の条件」は第7項の「比喩の言語的条件」にもかかわる考察が含まれている。

第2章の「比喩法の種類」は、修辞学における比喩法の扱いにふれ、いわゆる修辞学書で比喩法の種類としてこれまでにあげられてきたいろいろな喩法のそれぞれを概説し、その類立てにおける問題点を指摘した後、言語側からの分類の一つの構想を示したもので、第3項に「比喩技法の再整理」として掲げた課題との関連が深い。

第3章の「比喩性の段階」は、主として語句を単位とし、語義との交渉や用法上の差に伴う比喩性の度あいの問題を取りあげて、その諸段階を例示したもので、第2項の課題である「比喩度」のうち「中間性」の部分に言及したことになる。

第2編の「比喩研究の諸問題」は、実用的文章と芸術的文章とから現実の言語作品例を取りあげ、二つの観点から分析を試みた実例である。第4章の「比喩的転換の諸相」は、キャッチフレーズを材料に使い、比喩表現に見られる転換の種々相を、カテゴリー・体・感覚・界・関係における移行としてとらえたものであり、第8項の課題「比喩思考の集大成」における一つの整理観点を示したことになる。

第5章の「比喩効果の分析」の第1節「文学における比喩考察の観点」は、序章の、残された問題の指摘、および、それに伴う課題設定に対する文学面における補足であり、特に第9項の「個別的考察」の部分を詳しく論じたものである。第2節「調査の意義と使用

率」はその第9項の考察におけるやや一般的な資料を提供したもので、第3節以下はイメージャリーを中心とした分析実践例を示したもので、いずれも課題第9項に關係した章である。

第3編の「比喩における思考と表現」は、いずれも、比喩を表す言語形式とそこに実現する比喩的対比との關係を考察したものである。第6章の「言語形式と比喩的対比」は、第1節の「言語形式から見た比喩關係」が言語形式側から、第2節の「比喩關係から見た言語形式」が比喩的対比事實の側から、それぞれ典型的な場あいを取りあげた基本的な考察であり、第7章の「比喩の成立と言語的条件」の第2節「言語形式・対比構造・比喩關係」は、その一般的な考察に当たるものであって、どちらも、序章であげた課題の第6項「言語形式と対比事實との關係」の、一面における部分的な基礎づけの役わりを果たすはずである。また、第7章の第1節「指標の多義性」は、課題の第7項「比喩の言語的条件」に対する一つの指摘であり、同章の第3節「比喩的思考から比喩表現へ」は、課題の第5項「各技法の言語形式」に関して、内省的方法による展開の構想を略述したものである。

そして、第2部の「比喩表現の分類」は、第1部の「比喩論」におけるこのような考察を踏まえ、その基礎の上に立って、比喩表現の言語的な観点からの分類を、実際の言語作品を材料として実施し、その分類試案の提出とそれによる分類結果の報告とを行ったものであって、序章に掲げた比喩研究の課題との関連で言えば、主としてその第3項の「比喩技法の再整理」を目ざした企画である。ただし、今回の報告は、外部形式・内部形式による分類に重点が置かれ、内容上の検討や転換の種類などの分析は表面的な操作にとどまった。したがって、ここに報告した形式面の分類を基礎資料として内容面の分析を行い、比喩表現の総合的な分類をなしとげる試みは、せいぜいその構想が、それも断片的に示されたにすぎず、今後の課題として残された。

以上のように、第1部の「比喩論」は、いずれも部分的ながら、比喩研究の課題の各方面に論及した総合的考察として、一応のまとまりを成すはずであり、第2部の「比喩表現の分類」は、そのうちの比喩技法の整理としての分類を実例調査をとおして推進した試行であると言える。個々の用例処理の不備を修正して、資料の正確さを追求する努力もむろん必要であるが、本書は全体として、あくまで、私見・試案の提示そのものを主眼としたことを明記しておきたい。

〔付記〕 理論の体系的整備にあたって、次に掲げる比喩關係の既発表論考を援用し、その内容を吸収した。大はばな補筆・修正・再編を経てもなお、それらに示された筆者の見解は本書における比喩表現論の展開とともに生きつづけ、その骨格の一部を形成しているものと思われる。

1969 川端文学における比喩表現<「言語生活」208

1969 直喩をあらわす言語形式と対比構造とに関する一考察<「表現研究」9

1971 CMとことば——キャッチフレーズの比喩的表現<「国文学」16-2

1971 比喩とはなにか<「言語生活」233

1971～5 現代語の文法の研究——文体と文法との関係く「国立国語研究所年報」21～25

第2項 研究の方向

比喩表現の分類について言えば、指標比喩は構文論の語彙＝文法的な面と、結合比喩は collocation という点で連語論や慣用句論と、文脈比喩はその慣用句を含む成句論や文学を中心にすえた表現論と、それぞれ密接なつながりを持ち、それらの分野の発達につれてその研究が深められ、確かさを増していこう。

また、比喩研究全般について言えば、主として3本の柱に支えられて進展することになろう。一つは言語学であり、一つは文学研究であり、一つは新しい修辞学としての表現論である。比喩表現の形式と意味との関係、すなわち、比喩表現そのものの研究は言語学の上記の分野の成果を吸収して成長しつづける期待が大きい。一方、比喩表現の使用の問題は、主として文学の文体論的研究を通して、その高度な表現技術の面が作品を特色づける言語的性格の中に位置づけられよう。また、そのような比喩法自体を、古く誇張法・対照法・漸層法・反復法・詠嘆法・設疑法・頓呼法・現写法・倒置法・省略法・婉曲法など呼ばれた各種の表現技法が、文章表現上のすべての言語的特徴を網羅するところまで拡大され、それらが言語的性格に起因するあらゆる表現効果上の質量との対応・連動を解明できる形で整備された時に、そこに正当に位置づけることも重要な課題であろう。それは、すなわち、新しい修辞学を旨とする広義の表現技法論、正確な意味での表現論の任務にはかならない。

そして、その表現論は、そっくり文体論の中に組みこまれ、その基礎部門の中心的位置を占めることになる。すなわち、文体論の方法を最も簡略に記すと、第1過程は対象とする言語作品の文体面での印象＝効果をとらえることであり、第2過程はその作品言語を分析して性格的な事実をつぎとめることであり、第3過程は個々の言語的性格の表現効果をおさえることであり、第4過程はそれを基礎に文体印象＝効果と作品の言語的特徴との照合を行うことであり、第5過程はその結果対応の得られた言語的特徴を文体的特徴として析出することであり、最終作業に当たる第6過程は、個々の文体形成要因に weight を加味して、その有機的な統合である対象言語作品の文体を構造的に記述することである、ということになるが、特に第1過程は文学研究に、第2過程は言語学に支えられる面が大きいし、第3過程は、それ自身も、文学研究と言語学、それに文章心理学に拠って立つ表現論そのものなのである。

比喩研究は、言語学内のテーマである一面と、文学の個別的研究において作家や作品により重要なテーマとなる一面とを持つと同時に、それらの成果の上に成立する比喩表現論は、文体論の内側にあってその実践過程を支える新しい表現論の主要な一翼を担うこととなるらう。

(1975. 6. 5)

〈付〉 比喩関係文献リスト

明治中期以後 1974 年までに日本国内で刊行された、比喩表現に関連の深い言及を含む日本語の文献を対象とし、1 年単位で、単行本、単行本所収論文、定期刊行物掲載論文ごとに、執筆者の姓名（同一人のはタイトル）の五十音順（執筆者が明記されていないもの、座談会、翻訳の場合あいは、各部の末尾）に配列した。

- 1889 高田早苗：『美辞学』（金港堂）前編 第十～十二章 修飾を論ず 第一～第三
- 1892 ー：『文章組織法』（富山房）上編 第三章 第四節 第一 明了正確を補ふもの
- 1893 坪内逍遙：美術論稿＜「早稲田文学」1～6, 9
- 1901 佐々政一：『修辞法』（大日本図書）言語の多少
- 1902 島村滝太郎：『新美辞学』（早稲田大学出版部）譬喩法，化成法
- 1903 松浦政泰編：『応用文章学』（博文館）第二篇 第二節 類似の修飾 第五節 雑種の修飾
- 1906 大和田建樹：『文章組立法』（博文館）譬喩
加藤咄堂：『演説・文章応用修辞学』（井湧堂）第三章 文辞の修飾
- 1910 五十嵐力：『新文章講話』（早稲田大学出版部）第二編 結体の原理に基づける詞姿ナド
- 1914 武島羽衣：大町桂月・久保天随：『文章法』（博文館）文章の美質
- 1917 佐々政一：『修辞法講話』（明治書院）後編 第五章 六（三）比喩論
- 1923 五十嵐力：『修辞学大要』（斯文書院）文飾篇
- 1928 芳賀矢一・杉谷代水：『作文講話及文範』（富山房）詞姿
- 1931 湯沢幸吉郎：擬声語の収集＜「国語教育」10
- 1933 鵜沢四丁：『俳諧修辞学』（宝文館）飾辞
波多野完治：国語文章論＜国語科学講座 9『国語表現学』（明治書院）後編 二 比喩
小林英夫：国語象徴音の研究＜「文学」1-8
- 1934 佐藤一英：詩歌修辞法＜『日本現代文章講座 指導篇』（厚生閣）
塚本哲三：散文修辞法＜同前
- 1935 城戸幡太郎：『国語表現学』（賢文館）第三章 第一節 体言と実体概念
波多野完治：『文章心理学—日本語の表現価値』（三省堂）比喩
安藤正次：疊音，疊語の一考察＜『藤岡博士功績記念言語学論文集』（岩波書店）
佐久間鼎：音声的描写による語構成＜同前
- 1936 波多野完治：『文章学—創作心理学序論』（文学社）第一章 一 文章における具体的と概念的
- 1937 吉武好孝：『文体論序説』（不老閣書房）形容辞とメタファーの問題，文学的比喩と

象徴

- 1938 山本忠雄：『文体論研究』（三省堂）文法的と文体的
- 1940 山本忠雄：『文体論』（賢文館）知情的表現
 阪倉篤義：比喩の枕詞一體言に「の」の添はりたるものについて＜「国語国文」12
- 1941 勝 承夫：『文章の技術』（教材社）文章の種類と表現法
 小林好日：『国語学の諸問題』（岩波書店）音義説と音声象徴
 波多野完治：『文章心理学の問題』（三省堂）第二部 一 文章の類型学
- 1942 大槻憲二：『国語の心理』（育英書院）譬喩と象徴
- 1943 小林英夫：『文体論の建設』（育英書院）第三章 三 C 語彙
 佐久間鼎：『日本語の言語理論的研究』（三省堂）音声の描写による語構成
- 1946 小林英夫：岡本かの子の象徴音について＜「人間」6月
- 1947 幸田露伴：『音幻論』（洗心書林）擬音
 乾 亮一：擬声語雑記＜『市河博士還暦祝賀論文集』第二輯（研究社）
- 1948 久米正雄：『文章の技巧』（大泉書店）第三編 第三章 比喩の技巧について
 小林英夫：『文体論の理論と実践』（八雲書店）Ⅱ オカモトカノコ論
 江湖山恒明：象徴表現の考察＜「国語と国文学」296
- 1949 波多野完治：『文章心理学』（新潮社）比喩
 石井康一：直喩・隠喩の文体論的考察＜「西南学院論叢」5
- 1950 服部嘉香：『文章の作り方』（雄鷄社）修辞法の概要
 石黒魯平：「擬態語」の名称を疑う＜「言語研究」16
 大久保忠利：現代文学と日本語の一断面—主として「細雪」の比喩について＜「国語と国文学」27-4
- 1951 井上義正：聖書の直喩と隠喩＜「神戸外大論叢」2-3
 小嶋孝三郎：擬声語の言語的性格1~5 <「説林」3-6~9, 11
 寿岳章子：言語の対象としての抄物の一意義—擬声語と翻訳＜「国語国文」20-4
 須藤増雄：擬語と普通語—特に普通語の擬語化について <「千葉大学教育学部研究紀要」第一編
 向井宗直：擬声語のいろいろ1・2 <「沃野」48, 50
- 1952 大久保忠利：『コトバの心理と技術』（春秋社）コトバと笑い
 : 比喩の心理—「細雪」の直喩について <「言語生活」9
 斎藤義七郎：日本語における擬声語擬態語の音韻論的考察 <「音声学会会報」79
- 1952~1960 高羽五郎：『譬喩尽』第一巻~第八巻
 ※松葉軒東井編「譬喩盡並=古語多敷」の翻刻
- 1953 大久保忠利：『生きたコトバ』（東洋経済新報社）<第二部 一 比喩の心理，二 オカシミの表現

- ：『コトバの魔術と思考』（春秋社）九 感化性の魔術
- 大山敏子：『シェイクスピアの心象研究』（篠崎書林）
- 陣内宜男：『文章表現の手帳』（播磨書房）Ⅲ 3 比喩の用いかた
- 波多野寛治：『文章心理学入門』（新潮社）擬声語の心理，薄田泣菫と直喩の文体
- 森本治吉：万葉表現の特殊修辭—不定形の序詞・比喩の研究<『金田一博士古稀記念言語・民俗論叢』（三省堂）
- 森田雅子：語音結合の型より見た擬音語・擬容語—その歴史的推移について<『国語と国文学』30-1
- 1954 御園生咲郎：『ことばの美学』（一橋書房）序論 3 擬声語と感覚，第二篇 7 象徴的命名法
- 内藤 濯：たとえのとり方<『ことばの研究室—日本語の特色』（日本放送協会）
- 波多野寛治：文章の要素と種類<文章講座Ⅱ『文章構成』（河出書房）
- 小嶋孝三郎：国語擬声語の原始形態<『論究日本文学』1
- 1955 江湖山恒明：『国語表現論—文芸作品の表現研究』（牧書店）体言
- 笹沢美明：『中学生のための新・文章教室』（宝文館）第三章 二 1 語句の修飾法
- 土井忠生・真下三郎：『国語表現法』（修文館）比喩
- 林 一夫・山本捨三：『記号・言語・文学』（文教書院）隠喩
- 上甲幹一：比喩と真実<日本放送協会編『言葉の魔術—ことばの研究室』（講談社）
- 竹松宏章：「譬え」「直喩」「換喩」「擬人法」<『国語学辞典』（東京堂）
- 西尾光雄：「比喩」<同前
- 青木幹男：子どもの文章（その四）—子どもの文章表現力—特に比喩について<『教育研究』2
- 瀬沼茂樹：レトリックの秘密<「知性」3
- 藤田五郎：比喩的表現の若干の観察<『東京外国語大学論集』4
- 古田嘉雄：象徴的表現—情と景<『武庫川学院女子大学紀要』2
- ：子供の漫画に現われた擬声語<『言語生活』50
- 1956 磯川治一：『直喩と英語の文体』（篠崎書林）
- 大山敏子：『英語修辭法』（篠崎書林）Personification, Metaphor, Simile
- 瀬沼茂樹：『文章作法』（河出書房）レトリックの秘密
- 小嶋孝三郎：一茶と写声語<『論究日本文学』5
- 寿岳章子：擬声語の変化<西京大学学術報告「人文」7
- 田桐大澄：音象徴について<『立教大学研究報告』1
- 松岡 武：文芸表現における語音象徴の問題<『山梨大学学芸学部研究報告』7
- 1957 清水春雄：『ホイットマンの心象研究』（篠崎書林）
- 白石大二：『教師のための文章表現の技術』（明治図書）ひゆと修辭

- 毛利可信：表現上の比喩について<「英文法研究」1-1
- 安本美典：比喩について<「解釈」3-9
- 山内潤三：擬音語・擬容語の表現理論的考察（前編）<「甲南国文」1
- 1958 大久保忠利：『コトバの切れ味とユーモア』（春秋社）比喩のオカシミ
- 波多野完治：『ことばと文章の心理学』（新潮社）第二編 第四章 文体の心理学
- スヴァルテングレン著 佐々木達訳：『強意的直喩の研究』（研究社）
- 大久保忠利：文芸作品とコトバの魔術<コトバの科学4『コトバと論理』（中山書店）
- 私市保彦：修辞と文体—芸術的文章<同5『コトバの美学』
- 古浦一郎：性格の記述—性格評語を中心に<同3『コトバの心理』
- 松岡 武：コトバと象徴<同前
- 秋山浩子：上代文学における比喩表現<「国文」（お茶の水女子大）10
- 菅野 宏：人麻呂の手法，その暗喩と擬人法<「福島大学学芸部論集」9-2
- 関 良一：イメジについて<「解釈と鑑賞」23-6
- 1959 佐久間鼎：『日本語の言語理論』（厚生閣）V 意味と音韻
- 佐藤 孝：『日本語文章表現学』（桜楓社）文章の修辞
- ギロー，ピエール著 佐藤信夫訳：『文体論—ことばのスタイル』（白水社）第一章
- 修辞学，第三章 記述の文体論すなわち表現の文体論
- 秋山正次：えせ玉かつま(3)—擬音・擬態語と生活語の芸術<「いづみ」34
- 池田義一郎：音声象徴<「人文」（京都大学教養部）6
- 小嶋孝三郎：一茶の写声語に関する考察<「論究日本文学」10
- 桜井光昭：今昔物語集の擬声語の用例<「学研究」（早稲田大）8
- 寿岳章子：抄物の擬声・擬態語彙<「国語国文学会誌」（京都府立大）1
- 武石彰夫：一茶に於ける擬態語・擬声語<「解釈」5-2
- 西尾光雄：源氏物語における修辞<「国文学」4-11
- 西村嘉太郎：音声描写表現についての—考察<「論集」（福島大）10-2
- 横井 博：古代歌謡の比喩<「文芸研究」31
- 1960 竹野長次：『文章の作り方』（愛隆堂）四 観念の連合，五 主な修辞
- 安本美典：『文章心理学の新領域』（創元社）比喩の分布型
- ライズイ，エルンスト著 鈴木孝夫訳：『意味と構造』（研究社）Ⅲ C 4 間接陰喩
- 大森節子：古今集における心情表現—主として譬喩表現の方法を通して<「女子大
- 国文」（京都女子大）19
- 金岡 孝：比喩について—その表現心理的構造と言語的性格<「清泉女子大学紀要」
- 7
- 寿岳章子：抄物の擬声・擬態語彙(2)—附虎明本狂言擬声擬態語彙<「国語国文学会
- 誌」（京都府立大）2

- 中島 楊：歌謡曲にみられる比喩について<同前
- 平山城児：比喩の問題<「日本文学」(立教大) 2
- 三上源四郎：Katherine Mansfield の作品に見られる比喩と象徴について<「英語英米文学」(中央大) 1
- 1961 大久保忠利：『文章の切れ味』(春秋社) 9 比喩の切れ味と魔術
- 佐藤 孝・松井定之：『教養文学文章の技巧—見かた・書きかた』(法政大学出版局) 第四部 (三) 1 比喩的修辭
- 外山滋比古：『修辭的残像』(垂水書房—1968 みすず書房) 修辭的残像覚え書, 表現の前後関係 — コンテキスト
- リチャーズ, I. A. 著 石橋幸太郎訳：『新修辭学原論』(南雲堂) 隠喩論, 隠喩
- 池田睦喜：隠喩論(一)<「福岡学芸大学紀要」10
- 加島祥造：詩的誇張喩について<「研究論集」(信州大教育学部) 12
- 小嶋孝三郎：一茶の写声語に関する考察(二)<「論究日本文学」14
- 1962 今井文男：『芸の領域』(龍二山房) 第2部 現代俳句における象徴の系譜
- 田中清太郎：『よい文章を書くために』(みすず書房) 比喩のおもしろさ
- 鍋島能弘：『文体美学—批評の一方法として』(篠崎書林) 心象・形象および比喩
- 渡辺三男：『日本語の表記と文章表現』(東出版) 第三節 (二) (B) 比喩の技巧
- 宇佐美寛：認識における概念と比喩の論理<「東京教育大教育学部紀要」8
- 岡戸伴助：枕草子の表現について—その比喩表現について<「関東短大紀要」7
- 小嶋孝三郎：現代短歌におけるオノマトペ—その象徴的用法を中心に<「国語と国文学」7
- 寿岳章子：抄物における擬声語の使用率<「計量国語学」22
- 白石大二：たとえ尽くし—「とら(虎)」の巻, いろいろの顔<「芸能」4-4, 11
- 鈴木 博：抄物における擬声擬態の副詞—付 京都府立図書館所蔵の史記抄について<「研究紀要」(京都西京高校) 9
- 園田秀幸：英語の擬音<「英語教育」11-5
- 福沢周亮：言葉の表現効果について—語音象徴と情緒値に関する実験的研究<「読書科学」6-1-2
- 1963 魚返善雄：『言語と文体』(紀伊国屋書店) 表情語, 対偶, 対比
- 鈴木棠三編：『擬人名辭典』(東京堂)
- 池田睦喜：隠喩論(二)<「福岡学芸大紀要」12
- 小嶋孝三郎：現代詩とオノマトペ<「立命館文学」220
- ：現代詩におけるオノマトペの象徴化<「国語と国文学」40-8
- ：現代詩におけるオノマトペの象徴化補説<「論究日本文学」21
- ：現代短歌におけるオノマトペ補説<同20

：「楯山節考」「東北の神武たち」におけるオノマトペ<「立命館文学」

211

杉野 正：隠喩について<「美学」52

1964 入谷敏男：『言語心理学』（誠信書房）第四章 2 音象徴 3 視覚象徴 4 暗喩

外山滋比古：『近代読者論』（みすず書房）イメジ雑考，虚虚実実

山口 正：『万葉修辞の研究』（武蔵野書院）第四章 三 比喩

池田 勇：擬声語—清少納言・枕草子の世界<「解釈と鑑賞」29-13

池田陸喜：牧歌論—隠喩論(≡)<「福岡学芸大紀要」14

上杉万里子：Macbeth の暗喩<「Metropolitan」（都立大）9

小嶋孝三郎：現代詩とオノマトペ（承前）<「立命館文学」221

中川 郁：万葉集東歌に於ける譬喩<「中央大学国文」7

安本美典：文章心理学の建設(1)，(2)<「計量国語学」30，31

頼 惟勤：漢語のオノマトペア<「言語生活」151

1965 荒井 栄：『文章と文体—国語教育の基礎』（学芸図書）第四章 文章の表現性—
学的文章

入谷敏男：『ことばの心理学』（中央公論社）象徴の世界，ことばの魔術

波多野完治：『文章心理学（新稿）』（大日本図書）第二編 文章の性格心理学

安本美典：『文章心理学入門』（誠信書房）文章特性の調査

：『文章心理学の手びき』（川島書店）直喩について，声喩について

吉本隆明：『言語にとって美とは何か』第1巻(勁草書房) 韻律・選択・転換・喩

石垣幸雄：擬声語・擬態語の語構成と語形変化<「言語生活」171

上村幸雄：音声の表象性について<同前

請川利夫：比喩表現にみられる高村光太郎詩の彫刻家的発想について<「東洋研究」

10

宇野義方：能狂言の擬音をめぐって—「鐘の音」を中心に<「近代語研究」9

小嶋孝三郎：詩人とオノマトペ<「言語生活」171

：宮沢賢治のオノマトペ試論(上)，(下)<「立命館文学」236，237

：三好達治「横笛」余滴—オノマトペの恣意性について<同 242

小林英夫：擬音語と擬容語<「言語生活」171

斎藤義七郎：現代作家の比喩句<同 170

坂井洲二：古今集の擬人法<「文体論研究」6

鈴木雅子：むかしの擬声語・擬態語<「言語生活」171

橋 豊：比喩小考<「弘前大学人文社会」35-5

都竹通年雄：方言の擬声語・擬態語<「言語生活」171

仁田祥男：『聖家族』における「…やうだ」の考察—学内発表会要旨<「国語教育研

究」(広島大教育学部) 10

安本美典:文章心理学の建設(3) (4) <「計量国語学」32, 33

山口雄輔:大鏡の直喩をめぐって—今昔物語との比較を中心に <「日本文学論究」24
:詩からひろった擬声語・擬態語 <「言語生活」171

<座談会> 神津友好・田波靖男・中原勲・吉沢典男:現代に生きる擬声語・擬態語
<同前

1966 大久保忠利:『言語の機能と文学のコトバ』(明治図書) 太宰治への文体論的接近

寿岳章子:『レトリック—日本人の表現』(共文社) 擬声・擬態語

瀬古 確:『万葉集に於ける表現の研究—特に用語・用字・歌詞・歌体を中心とし
て』(風間書房) 第一章 部立別の考察, 第六章 修辞の考察

橘 豊:『文章体の研究』(角川書店) 第四章 第四節 補論 二 比喩小考

波多野完治:『文章診断学』(至文堂) 比喩, 声喩

:『文章心理学の理論』(大日本図書) 文章の心理とレトリック, 比喩

増淵恒吉:国語教育と文体 <日本文体論協会編『文体論入門』(三省堂)

竹内金治郎:譬喩と対句—防人歌の修辞を中心に <「語文」(日大) 24

藤村幸三:古事記歌謡における譬喩歌について <「滋賀大國文」3

三浦精子:賢治の擬声語・擬態語 <「言語生活」174

1967 池上嘉彦:『英詩の文法—語学的文体論』(研究社) 意味論に関する問題—Appearance
・Reality の表現

樺島忠夫:『文章工学—表現の科学』(三省堂) 表現の技法

川崎寿彦:『分析批評入門』(至文堂) イメージャリー

桑門俊成:『国語文体論の方法』(明治書院) 第二章 文体論の系譜—修辞学への反
省

萩原井泉水:象徴語トユウコトニツイテ <「カナノヒカリ」539

川田順造:メタファ以前 <「ことばの宇宙」2-11

小嶋孝三郎:「金閣寺」におけるオノマトベ <「立命館文学」261

小林健祐:ゲーテの「庶出の娘」の文体—象徴語分析の試み(1) (2) (3) <「文体論研
究」10, 11, 12

関守鷹夫:貫之の修辞—土佐日記と古今集 <「愛媛国文研究」17

谷川健一:おもろびとのメタファ <「ことばの宇宙」2-11

東野芳明:メタファの構造—ボッシュの場合 <同前

前島年子:時代を通して見た擬声語・擬態語 <「日本文学」(東京女子大) 3

マツサカタダノリ:象徴語ノ性格ト機能 <「カナノヒカリ」536

真鍋次郎:比喩か序詞か (研究発表要旨) <「国語学」71

水之浦律子:触感における「さらさら」の表現について <「東洋大短大論集国語篇」

3

- 湊 吉正：比喩について—文体論的立場からの一考察<「言語学論叢」8
 : 文体論の一方法について—夏目漱石「明暗」における「外的連合喩」の
 考察を一つの実践例として<「千葉大教育学部研究紀要」16
- 室 勝：意味論における三本の柱—文脈・隱喩・虚構<「人文論集」(早稲田大)4
- 安本美典：直喩と暗喩—比喩の心理学<「ことばの宇宙」2-11
- 柳田征司：狂言に見える直喩<「国文学研究会報」29
- 山本 昂：イメージについて<「表現研究」5
- 1968 市川 孝：『文章表現法』(明治書院, 改訂版: 1972) Ⅱ 表現技法
 樺島忠夫：『表現の解剖—統文章工学』(三省堂) Ⅱ 4 小説と現代生活
 志津田藤四郎：『国語学原論』(秀英出版) 第二章 第三節 表現と修辞
 白石大二編：『文章辞典』(帝國地方行政学会) 第四
 芳賀 純・安本美典：『ことば・文章—効果的なコミュニケーション』(大日本図書)
 比喩の使用度
 市村和子：宇治拾遺物語の擬音語・擬容語<「国文」(お茶の水女子大) 29
 大久保忠利：現代日本共通語“音マネ語”論—擬声語と擬態語<「ことばの宇宙」3
 -10
 門田 明：語義の比喩的発展と定型比喩表現—日・英表現の比較<「鹿児島県立短大
 紀要」2
 角田敏郎：比喩と心象—小説『万延元年のフットボール』を例として<「語学文学」
 (北海道教育大)
 橋本芳一郎：夏目漱石と比喩法<「東京学芸大学紀要」19-2
 水沢謙一：昔話における擬態語<「ことばの宇宙」3-10
 安本美典：現代文学にみる擬態語—表現を新鮮にしました類型化するもの<同前
 —：擬態語調査から<同前
- 1969 門倉 訣ほか：『文章の教室』(東邦出版) 詩の技法について
 興水 実：『表現学序説—作文教育の改造』(明治図書) 第六章 新レトリックの方
 向
 塩田良平：『文章の作り方』(明治書院) 修辞法について
 白石大二編：『国語慣用句辞典』(東京堂)
 平井昌夫：『文章表現法』(至文堂) 修辞法
 ボルノー, O.F. 著 森田孝訳：『言語と教育』(川島書店) 第二部 Ⅳ 二 c 比喩
 阿刀田 高：会話とユーモア(1), (2)—笑いの種類と心理, 比喩の使い方<「日本語」
 9-5, 6
 飯島俊彦：日英語における擬声語と擬態語の比較(1)<「大分大学経済論集」20-4

- ：日英語における擬声語と擬態語の比較(2) <「大分大学経済論集」21-1・2
- 井上敏夫：児童詩に見る比喩 <「言語生活」208
- 白石大二：広報紙とひゆ(5) ひゆを表現の上で生かそう <「広報」184
- 橋 豊：川柳の比喩—比喩の時代性 <「文法」2-2
- ：日本語の比喩 <「言語生活」208
- 外山滋比古：比喩の伝達論 <同前
- 中村 明：川端文学における比喩表現 <同前
- ：直喩をあらわす言語形式と対比関係とに関する一考察 <「表現研究」9
- 橋本仲美：比喩の表現論的性格と文体論への応用(1), (2) <「国文学」14-11, 12
- 松井利彦：直喩からどういふ像が結ばれるか <調査報告> <「言語生活」208
- 松永玉吉：「擬人法」の構成について(2) <「日本語」9-2
- <座談会> グロータス, W. A.・佐藤信夫・仁戸田六三郎・真山恵介：東西・物のたとえ <「言語生活」208
- 1970 村松定孝：『文章表現法』(東京堂) 比喩・逆説・警句
- 森岡健二ほか：『小学校における文章構成法』(光文書院) 比喩・ことわざ・慣用語の指導, 擬声語や擬態語の指導
- 秋本守英：勢語における譬喩と象徴—九段の場合 <「京都工芸繊維大学工芸学部研究報告」18(人文)
- 稲岡耕二：修辞の研究—万葉集 <「国文学」15-9
- 請川利夫：詩教材の研究—比喩表現を中心に <「解釈」16-5
- 川崎寿彦：イメージリ <「国文学」15-9
- 高阪 薫：啄木短歌の比喩的表現について <「神戸山手女子短大紀要」13
- 小嶋孝三郎：オノマトベ研究序説 <「立命館文学」303
- ：オノマトベの象徴的用法 <同 305
- 玉村文郎：ニャンコからコンモリまで—擬声語と擬態語のはなし(1)~(3) <「研修」108~110
- 都竹通年雄：擬態語あれこれ <「放送文化」25-10
- 徳永和子：色彩語で表現される比喩の研究—語感的立場から <「立教大日本文学」24
- 中野 洋：オノマトベのイメージ <「言語生活」229
- 中村 明：現代語の文法の研究—文体と文法との関係 <「国立国語研究所年報」21
- 山口仲美：今昔物語集の文体について(1), (2) 一直喩表現の分析から <「国語と国文学」47-11, 12
- 吉岡泰夫：万葉歌の表現構造分析—アンビギュイティとイメージリーを中心として <「中央大國文」13

- 吉沢典男：マンガに見る擬音語・擬態語<「放送文化」25-11
- 1971 池田義一郎：『表現と伝達のための言語学概説』（篠崎書林）第Ⅲ章（3）隠喩
 大久保忠利：『コトバの魔術と切れ味』（三省堂）第三章 「比喩」の切れ味と魔術
 奥山益朗：『文章作法』（東京堂）第二章 4 さまざまな表現技術
 守屋隆司・堀野八郎編：『言語の構造』（三一書房）第一部 第三章 七 形象
 大久保忠利：コトバの魔術⇄精神のズルサとナマケ（三 「感化的魔術」の実例と
 分析）<「言語生活」233
 尾形良範：擬声語と音象徴についての一考察<「山形大紀要（教育科学）」5-2
 倉田恵介：隠喩の原理とことばの創造性<「論集」（札幌商大・札幌短大）7
 小嶋孝三郎：オノマトペ序説<「立命館文学」318
 佐々木 峻：大蔵流狂言虎寛本の擬声擬態語（研究発表要旨）<「国語学」85
 杉浦広治：Joseph Conradの比喩表現—Heart of Darknessの場合<「表現研究」14
 中村 明：CMとことば—キャッチフレーズの比喩的表現<「国文学」16-2増刊
 :比喩とはなにか<「言語生活」233
 宮川喜代江：英訳における比喩表現—「真夏の死」(三島由紀夫・作)の場合<「短大論
 叢」(関東学院女子短大)43
 山口 正：万葉集のレトリックについて<「解釈」17-1
 山口仲美：平安時代の象徴詞 性格とその変遷過程<「共立女子大短大部(文科)紀
 要」14
 山田良治：擬声・擬声語・擬声的表現(1)<「教養諸学研究」(早稲田大)36
 脇阪 豊：メタファー論のために<「エネルギー」3
- 1972 小嶋孝三郎：『現代文学とオノマトペ』（桜楓社）
 白石大二編：『日本語発想辞典』（東京堂）
 ウルマン， スティーブン著 須沼吉太郎・平田 純訳：『語とその用法』(文化評論)
 記号と象徴
 カッシーラー， E著 生松敬三ほか訳：『象徴形式の哲学』(竹内書店)第1巻 第2章
 II 模倣的，類比的，象徴的表現
 スペンサー， ハーバート著 荒牧鉄雄訳：『文体の原理』(大学書林) POSTSCRIPT,
 付録<修辭法>
 ハフ， グレイアム著 四宮満訳：『文体と文体論』(松柏社) 四 文体研究者—エン
 プソン
 フォス， マーティン著 赤祖父哲二ほか訳：『シンボルとメタファー』(せりか書房)
 速水博司：修辭法<『国語表現法』(笠間書院)
 秋本守英：表現の深さの成立<「表現研究」15
 天野絃一：「ペーオウルフ」における二つの比喩表現<同16

- 石崎 等：徳田秋声のオノマトベク「文芸と批評」3-10
- 北住敏夫：虚子俳句のレトリック<「文芸研究」(東北大) 71
- 小松代融一：擬容語の性格について—昔話の擬容語研究のための手掛りとして
 <「岩手医大教養部研究年報」
- 佐々木 峻：大蔵流狂言資料における擬声擬態語彙について<「広島大学教育学部
 紀要第1部」20
- 篠原 実：深さの表現機構<「表現研究」16
- 中村 明：表現の深さはどのように受けとられているか<同前
- 西出郁代：研究ノート(2)「ようだ」による表現<「日本語・日本文化」3
- 波多野完治：レトリックの個体発生—文体研究における病績学と児童心理学<「文
 学」40-9
- 保坂宗重：芥川龍之介のライトモチーフ技法<「解釈」18-10
- 堀井令以知：表現の深さと三つのレベル<「表現研究」15
- 水野義明：日朝擬声語対照表<「明治大学教養論集」(日本文学) 75
- 宮川喜代江：英訳における比喩表現—「午後の曳航」(三島由紀夫)の場合<「短大
 論叢」46
- 柳田征司：抄物に見える擬声擬態の副詞<「愛媛大教育学部紀要 第2部 人文社会
 科学」4-1
- 山口仲美：今昔物語集の象徴詞—表現論的考察<「王朝」5
 : 中古象徴詞の語音構造<国語学会研究発表会発表要旨><「国語学」90
- 1973 山田良治：擬声・擬声語・擬声的表現(2)<「教養語学研究」38・39
- 浅野 信：『日本文法文体論』(桜楓社)第二章(六)Ⅺ 比況の助動詞のつくる文体
 上の文
- 池田睦喜：『文体論序説』(松柏社)Ⅱ 隠喩論(その1), Ⅲ 隠喩論(その2)Ⅳ 牧歌
 論, Ⅴ 小説の文体
- 板坂 元：『考える技術・書く技術』(講談社)Ⅵ 4 文章のリズム
- 西田直敏・良子：『現代日本語』(白帝社)第三部 第五章 一 比喩
- 鈴木雅子：擬声語・擬態語一覽<品詞別日本文法講座10『品詞論の周辺』(明治書院)
- 波多野完治：『現代レトリック』(大日本図書)エピローグ 発生的レトリック
 メックス, イレーヌ：太宰治とオーディベルティにおけるいくつかの比喩の用法—
 日仏両語におけるシンタクスとセマンテックスの関係についての考察<『日本文
 化研究論集』(日本ベンクラブ)
- ：比喩 ことばのイメージ—連想<『日本語教育の実際研究』(海外技術者研修
 協会)
- 木村東吉：『徴』の構造—擬声語の語彙の研究を通して<「国文学攷」61

- 芝原宏治：メタファと発想論理<「英語青年」119-5
- 下迫早苗：話しことば中の擬音語・擬態語についての考察<「国語学の世界」3
- 中村 明：現代語の文法の研究—文体と文法との関係<「国立国語研究所年報」24
：文芸への文体論的アプローチ<「言語」2-5
- 速水博司：修辞学史研究ノート(三)<「鷹」(都立三鷹高校図書館)12
- 山口仲美：統中古象徴詞の語音構造—擬音・長音・促音に関する問題をふくむ語例
を中心に<「共立女子大短大部文科紀要」16
- 1974 天沼 寧：『擬音語・擬態語辞典』(東京堂)
- 大久保忠利：『日本文法と文章表現』(東京堂)第一部 一 一二 比喩の文法
- 千葉万平：『和英俗語慣用句辞典』(成学館)
- 長谷川潔：『日本語と英語—その発想と表現』(サイマル出版)
- スタンレー, ハイマン著 岡本靖正訳：『エンブソンの方法』(大修館) 一 曖昧の
七つの型
- 竹内正夫：The Heart of the Matter の構成, 手法及び文体について<『言語と文
体』(大阪教育図書)
- 田島 宏：文体論・詩学・記号学・修辞学<同前
- 横山徳爾：Shadow-Line 経験の心象風景—Conrad: 'Falk' の世界<同前
- 川本崇雄：日本語の象徴語の語源<「奈良教育大紀要」(人文社会) 23-1
- 佐々木達：修辞論・文体論そのほか<「英語青年」119-11
- 芝原宏治：帛納・演繹・発想2 <「福井大学教育学部紀要人文科学(外国語・外国文
学編)」24
- 高木一彦：慣用句研究のために<「教育国語」38
- 武田政市：隠喩的思考「序説」<「研究紀要」(東京実践国語の会) 3
- 辰宮 栄：修辞学と文体論<「福井大学教育学部紀要人文科学(外国語・外国文学
編)」24
- 塚原鉄雄：近代詩人のオノマトペ<「言語生活」273
- 中村 明：現代語の文法の研究—文体と文法との関係<「国立国語研究所年報」25
- 根来 司：枕草子の文体—「見立て」と「をかし」<「国語と国文学」51-4
- 原口 裕：「みたやうだ」から「みたいた」へ<「静岡女大研究紀要」(国文研究)7
- 宮地 裕：「成句」の分類<「語文」(大阪大学)32
- 安本美典：現代文章の因子分析法による研究(2)<「言語の科学」5
- 山田良治：擬声・擬声語・擬声的表現(3)<「教養語学研究」43・44・45

国立国語研究所報告 57

比喻表現の理論と分類

定価 6000円

昭和52年2月5日 印刷

昭和52年2月15日 発行

著者 国立国語研究所

発行者 株式会社秀英出版

代表者 山本春男

印刷者 株式会社太洋社

代表者 林健次

発行所 株式会社 秀英出版

[162] 東京都新宿区納戸町40
振替東京2-119739・電話(260)5281

UDC 809.56-561:895.6-08

NDC 816.2

3081-31560-3042

国立国語研究所刊行書一覽

国立国語研究所報告

| | | | |
|----|---|-------|------|
| 1 | 八 丈 島 の 言 語 調 査 | 秀英出版刊 | 品切れ |
| 2 | 言 語 生 活 の 実 態
——白河市および付近の農村における—— | " | " |
| 3 | 現 代 語 の 助 詞・助 動 詞
——用 法 と 実 例—— | " | 700円 |
| 4 | 婦 人 雑 誌 の 用 語
——現代語の語彙調査—— | " | 500円 |
| 5 | 地 域 社 会 の 言 語 生 活
——鶴岡における実態調査—— | " | 品切れ |
| 6 | 少 年 と 新 聞
——小学生・中学生の新聞への接近と理解—— | " | 180円 |
| 7 | 入 門 期 の 言 語 能 力 | " | 品切れ |
| 8 | 談 話 語 の 実 態 | " | " |
| 9 | 読 み の 実 験 的 研 究
——音読にあらわれた読みあやまりの分析—— | " | " |
| 10 | 低 学 年 の 読 み 書 き 能 力 | " | " |
| 11 | 敬 語 と 敬 語 意 識 | " | " |
| 12 | 総 合 雑 誌 の 用 語 (前編)
——現代語の語彙調査—— | " | " |
| 13 | 総 合 雑 誌 の 用 語 (後編)
——現代語の語彙調査—— | " | " |
| 14 | 小 学 校 中 学 年 の 読 み 書 き 能 力 | " | 400円 |
| 15 | 明 治 初 期 の 新 聞 の 用 語 | " | 品切れ |
| 16 | 日 本 方 言 の 記 述 的 研 究 | 明治書院刊 | " |
| 17 | 高 学 年 の 読 み 書 き 能 力 | 秀英出版刊 | " |
| 18 | 話 し こ と ば の 文 型 (1)
——対話資料における研究—— | " | " |
| 19 | 総 合 雑 誌 の 用 字 | " | " |
| 20 | 同 音 語 の 研 究 | " | " |
| 21 | 現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (1)
——総記および語彙表—— | " | " |
| 22 | 現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (2)
——漢 字 表—— | " | " |
| 23 | 話 し こ と ば の 文 型 (2)
——独話資料による研究—— | " | " |

| | | | |
|------|---|---------|---------|
| 24 | 横組の字形に関する研究 | 秀英出版刊 | 品切れ |
| 25 | 現代雑誌九十種の用語用字(3)
——分析—— | " | " |
| 26 | 小学生の言語能力の発達 | 明治図書刊 | 2,100円 |
| 27 | 共通語化の過程
——北海道における親子三代のことば—— | 秀英出版刊 | 品切れ |
| 28 | 類義語の研究 | " | " |
| 29 | 戦後の国民各層の文字生活 | " | 400円 |
| 30-1 | 日本語地図(1) | 大蔵省印刷局刊 | 品切れ |
| 30-2 | 日本語地図(2) | " | " |
| 30-3 | 日本語地図(3) | " | " |
| 30-4 | 日本語地図(4) | " | 8,000円 |
| 30-5 | 日本語地図(5) | " | 9,000円 |
| 30-6 | 日本語地図(6) | " | 10,000円 |
| 31 | 電子計算機による国語研究 | 秀英出版刊 | 450円 |
| 32 | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1)
——親族語彙と社会構造—— | " | 品切れ |
| 33 | 家庭における子どものコミュニケーション意識 | " | 350円 |
| 34 | 電子計算機による国語研究(Ⅱ)
——新聞の用語用字調査の処理組織—— | " | 品切れ |
| 35 | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2)
——マキ・マケと親族呼称—— | " | 450円 |
| 36 | 中学生の漢字習得に関する研究 | " | 5,000円 |
| 37 | 電子計算機による新聞の語彙調査 | " | 1,300円 |
| 38 | 電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅱ) | " | 2,800円 |
| 39 | 電子計算機による国語研究(Ⅲ) | " | 700円 |
| 40 | 送りがな意識の調査 | " | 1,500円 |
| 41 | 待遇表現の実態
——松江24時間調査から—— | " | 900円 |
| 42 | 電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅲ) | " | 1,200円 |
| 43 | 動詞の意味・用法の記述的研究 | " | 5,000円 |
| 44 | 形容詞の意味・用法の記述的研究 | " | 3,000円 |
| 45 | 幼児の読み書き能力 | 東京書籍刊 | 4,500円 |
| 46 | 電子計算機による国語研究(Ⅳ) | 秀英出版刊 | 700円 |
| 47 | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3)
——性向語彙と価値観—— | " | 700円 |
| 48 | 電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅳ) | " | 3,000円 |
| 49 | 電子計算機による国語研究(Ⅴ) | " | 900円 |

| | | | |
|----|-------------------------------|-------|--------|
| 50 | 幼児の文構造の発達
—3歳～6歳児の場合— | 秀英出版刊 | 品切れ |
| 51 | 電子計算機による国語研究(Ⅵ) | 〃 | 1,000円 |
| 52 | 地域社会の言語生活
—静岡における20年前との比較— | 〃 | 1,800円 |
| 53 | 言語使用の変遷(Ⅰ)
—福島県北部地域の面接調査— | 〃 | 2,500円 |
| 54 | 電子計算機による国語研究(Ⅶ) | 〃 | 1,000円 |
| 55 | 幼児語の形態論的な分析
—動詞・形容詞・述語名詞— | 〃 | 1,300円 |
| 56 | 現代新聞の漢字 | 〃 | 3,000円 |
| 57 | 比喩表現の理論と分類 | 〃 | 6,000円 |

国立国語研究所資料集

| | | | |
|---|---------------------|---------|--------|
| 1 | 国語関係刊行書目(昭和17～24年) | 秀英出版刊 | 45円 |
| 2 | 語彙調査
—現代新聞用語の一例— | 〃 | 品切れ |
| 3 | 送り仮名法資料集 | 〃 | 〃 |
| 4 | 明治以降国語学関係刊行書目 | 〃 | 〃 |
| 5 | 沖繩語辞典 | 大蔵省印刷局刊 | 〃 |
| 6 | 分類語彙表 | 秀英出版刊 | 1,600円 |
| 7 | 動詞・形容詞問題語用例集 | 〃 | 1,700円 |
| 8 | 現代新聞の漢字調査(中間報告) | 〃 | 500円 |
| 9 | 牛店
雑誌 安愚楽鍋用語索引 | 〃 | 1,500円 |

国立国語研究所論集

| | | | |
|---|-----------|-------|--------|
| 1 | ことばの研究 | 秀英出版刊 | 品切れ |
| 2 | ことばの研究第2集 | 〃 | 750円 |
| 3 | ことばの研究第3集 | 〃 | 品切れ |
| 4 | ことばの研究第4集 | 〃 | 1,300円 |
| 5 | ことばの研究第5集 | 〃 | 1,300円 |

国立国語研究所年報（秀英出版刊）

| | | | |
|-------------|------|-------------|------|
| 1 昭和 24 年度 | 品切れ | 15 昭和 38 年度 | 250円 |
| 2 昭和 25 年度 | " | 16 昭和 39 年度 | 品切れ |
| 3 昭和 26 年度 | 160円 | 17 昭和 40 年度 | 250円 |
| 4 昭和 27 年度 | 160円 | 18 昭和 41 年度 | 300円 |
| 5 昭和 28 年度 | 品切れ | 19 昭和 42 年度 | 300円 |
| 6 昭和 29 年度 | 200円 | 20 昭和 43 年度 | 品切れ |
| 7 昭和 30 年度 | 品切れ | 21 昭和 44 年度 | " |
| 8 昭和 31 年度 | " | 22 昭和 45 年度 | 400円 |
| 9 昭和 32 年度 | " | 23 昭和 46 年度 | 450円 |
| 10 昭和 33 年度 | " | 24 昭和 47 年度 | 450円 |
| 11 昭和 34 年度 | " | 25 昭和 48 年度 | 品切れ |
| 12 昭和 35 年度 | 350円 | 26 昭和 49 年度 | 600円 |
| 13 昭和 36 年度 | 160円 | 27 昭和 50 年度 | 700円 |
| 14 昭和 37 年度 | 220円 | | |

国語年鑑（秀英出版刊）

| | | | |
|----------|--------|----------|--------|
| 昭和 29 年版 | 品切れ | 和昭 41 年版 | 1,100円 |
| 昭和 30 年版 | " | 昭昭 42 年版 | 1,100円 |
| 昭和 31 年版 | " | 昭和 43 年版 | 品切れ |
| 昭和 32 年版 | " | 昭昭 44 年版 | 1,500円 |
| 昭和 33 年版 | " | 昭和 45 年版 | 1,500円 |
| 昭和 34 年版 | " | 昭和 46 年版 | 2,000円 |
| 昭和 35 年版 | " | 昭和 47 年版 | 2,200円 |
| 昭和 36 年版 | 800円 | 昭和 48 年版 | 2,700円 |
| 昭和 37 年版 | 品切れ | 昭和 49 年版 | 3,800円 |
| 昭和 38 年版 | " | 昭和 50 年版 | 3,800円 |
| 昭和 39 年版 | 980円 | 昭和 51 年版 | 4,000円 |
| 昭和 40 年版 | 1,100円 | | |

高 校 生 と 新 聞

国立国語研究所 共編 秀英出版刊 280円
日本新聞協会

青年とマス・コミュニケーション

日本新聞協会 共著 金沢書店刊 品切れ
国立国語研究所